
ある双子兄弟の異常な日常 第三部

葉月香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある双子兄弟の異常な日常 第三部

【Nコード】

N4072A

【作者名】

葉月香

【あらすじ】

双子の兄弟クリスターとレイフは、4年前に一度だけ犯した過ちの記憶を封印し、ごく普通の高校生活を送っていた。フットボールチームのエースとして活躍する彼らの願いは、このままずっと2人で同じ夢を追いたいというものだったが、同時にいつまでも一緒にいられるはずがないという予感も感じていた。互いに共存して
いる双子の成長物語です。

第1章 終わりの始まり (1) (前書き)

この作品には同性愛や兄弟相姦など、禁忌に触れるテーマが含まれていますので、駄目な方はご注意ください。

第1章 終わりの始まり(1)

「SET:HUT!」

ビリビリと全身を走る心地よい緊張感。

溜め込んだエネルギーは、攻撃開始の合図と共に一気に爆発した。

待ちに待ったフットボールの開幕戦、敵は強固な重量級ディフェンス陣で知られ、州大会決勝まで行ったこともある強豪ヒル高校。ここ2年で実力をつけてきたうちのチームとは何かと因縁のある、嫌な奴らだ。

「レイフ!」

この作戦アサインメントの相棒トムを守る格好で、オレは、敵チームのディフェンス・ラインの間に僅かにあいた「穴」に突っ込んだ。

いきなり真ん中から抜いてくるとは思ってたのか、浮き足立った連中が2人ばかり吹っ飛んだが、それでもオレは止まらずに猛烈なランをかける。

観客席からわっと歓声上がる。

(このオレをとめられるものなら、とめてみやがれっ)

オレが陸上競技の100m、200m走で州チャンピオンに輝いたのは2年前の話で、体がでかくなった分タイムは落ちたが、充分超高校生クラスのスピードに今では生半可なディフェンスでは当た

り負けしないパワーが備わっている。

ボール・キャリアーのトムをつぶそうと突進してくる連中をなぎ倒しながら、ついにぶつかったのが、ヒル校フットボールチームのエース、大型ラインバッカーのニック、通称マウンテンゴリラ。

（こいつには負けたくない）

いつ見ても大型類人猿を思い出させる、そいつの口が嫌な笑いに歪んだのに、オレの頭の中で何かが切れた。

スピードでこいつを翻弄することは、オレにとっては難しくない。だが、そうしたくはなかった。

こいつには今でも忘れられない恨みがある。高校1年目ですぐにレギュラー入りしたオレ達兄弟の初試合、反則スレスレのプレーでわざとクリスターに怪我をさせやがった。

ゲームに怪我は付き物だとクリスターはクールに笑っていたけれど、オレには納得できなかった。

『今度はお前もつぶしてやるよ、兄貴のように』

結局オレ達は初戦敗退し、悄然と肩を落とすオレにニックはこんな捨て台詞を残しやがったのだ。

その後も、練習試合などで対戦する度に、ゲーム以外の所でもオレの神経を逆なでしやる。

挑発に乗ればそれこそ相手の思う壺だとあくまで冷静なクリスタ

ーと違って、確かにオレは頭に血が上りやすい。逆上したまま突っかっていった奴に潰されたことも1年ボーズの時は何度もある。

しかし、去年、1年目の苦い経験から少しは学んだ次のシーズンでは、オレは持ち前のスピードと磨きをかけたテクニクを駆使して、タックルをしかけるニックに触らせもしなかった。オレ達アーバン校は強豪ヒル高校を破り、州大会準決勝まで行った。

だが、まだ、このゴリラに完全に勝ったわけじゃない。一度はぎやふんと言わせてやらないと気がすまない。だからー。

（今度は、力でおまえを撃砕してやるよ）

もともと大柄だったオレだが、高校に上がった後もしつこく背は伸び続け、今じゃ190cmをゆうに越えている。スピードが命のランニングバックとしては立派過ぎるくらいだ。このゴリラのニックだって、普通に立って見下ろせるし、パワーも互角のはずだ。

今は別にオレがボールを持ってるわけじゃないし、それに詰まる所、これも作戦の一部だ。

（勝負！）

オレは体をぐっとたわめると全力でニックに向かって突っ込んでいった。

「うおおおっ」

上体を傾け、ニックの懐深くに肩から飛び込む。さすがに壁のよきな圧力が返ってきたが、構わず力でねじ込み、一気に押し上げた。

「どけええっ」

ゴリラの巨体が足元から揺らいだと思った、次の瞬間には横ざまに転倒した。

「ざまあみやがれっ…おわっ?！」

快哉を叫ぶまもなく、オレはニックに足を払われ、奴の上に転倒した。もしかしたら、これもわざとだろうか。

(痛っ)

ドサクサ紛れに、ニックの奴、オレに肘鉄を食らわせやがった。胸に鋭い衝撃を覚え、オレは一瞬息が止まるかと思った。

「ボール・キャリヤーをとめろっ」

ニックがオレをフィールドにねじ伏せるようにして起き上がりながら、叫ぶ。

(トム?!)

一瞬、オレはひやっとした。あいつは、足は速いがそれほどパワーはない。もし、ヒル校のパワーディフェンスにはつかまったらー。

だが、そんな不安は杞憂に過ぎないということは、すぐに分かった。

小柄なトムはしっかりボールをキープしながら敵味方が押し合う

只中を駆けていく。そして、その後ろにいつの間にかぴたりとついていた、アーバン校『ブラック・ナイツ』の黒いユニフォーム、背番号1。

「クリスタール！」

そう、全ては予め立てていた作戦通り――
アサインメント

なだれこんでくる敵ディフェンスの波が届く前に、トムは、ぴたりと横に追いついた僕にボールを渡した。

トムに氣を取られていたディフェンスは瞬時に対応できなかった。

そして、僕は一気にディフェンス陣を振り切り、広々としたフィールドをまっすぐにエンドゾーン目指して駆け出す。

「追いかけるっ」

もう、遅い。

この状況では、僕のスピードに、彼らの足では追いつけない。

フットボールの勝敗の大勢は、試合の前に既に決まっていると言
う者もいる。相手チームの能力を分析して綿密な戦略を立て、また
状況に応じて戦術を組み直す。『フィールドのチェス』とも称され
るほど、これは高度に知的なゲームなのだ。

頭脳プレイという観点からも、僕は、初めから彼らに負ける気な
どしなかった。

第4クォーター。残り試合時間はもうほとんどない。34対14
と点差がこれだけある今、このままボールをキープするだけで、勝
利は確実だが、僕は、ゲームをする以上最後まで手は抜かない主義
だ。

ゴールまで約30ヤード、僕は一気に駆けぬけた。

「タッチ・ダウン！」

試合を見守る観客達が一斉に立ち上がり、歓声が怒涛のようにフ
ィールドに響き渡る。

そして、試合終了を告げるホイッスルが鳴った。

（フィリップス・アーバン高校、ブラック・ナイツ、エースQBク
リスター・オルソンが最後の追加点をあげ、40対14の大差勝ち
！）

途端に、ふっと張り詰めた神経が緩んだ。

ボールを手にしたまま、僕はしばしエンド・ゾーンに佇み、周囲

を茫洋と眺めた。

割れんばかりの拍手も低い潮騒のようなざわめきも、どこか他人事のように現実感がない。

「今年のブラック・ナイツは強いぞ」

「この分だと州大会優勝も夢じゃないかもな」

そんな声の聞こえた観客席を、僕は肩越しに冷たく振り返った。

夢なものか。

「やったあぁっ。か・ん・ペ・きな勝利っ。完勝じゃんっ」

遙か後ろの方で聞きなれた、妙にハイ・テンションの大声が上がるのに、僕は軽い眩暈を覚えた。

「どうだ、見たか、オレ達の実力を！ 何が優勝候補だ。もう、これからはお前らなんかに大きな顔はさせないからなっ。おまえらなんか、ただ重いだけのマグロだ。マグロは潔く海に帰りやがれっ」

それは一体どういう意味なのかと、素直に疑問を覚える。

先程までニツクと一緒に沈没していたはずのレイフは、まだ暴れたりないといった様子で、ヒル校の連中の周囲を飛び跳ねながら相手を盛んにからかっている。

体の小さな小中学生が同じことをやったら、可愛くも、微笑みを誘いもしたかもしれないが、あの体格でやられると―かなり痛い。

しかも、僕とそっくり同じ姿をしているときは、まさに悪夢だ。

責任上、『あれ』をとめなければと感じた僕は、フィールド上で見事なバック転まで決めて観客達をどよめかせ、テンションが上がる一方の弟の方へ歩きだそうとした。

僕の怒りにも気づかず、レイフはまだ敗者を挑発するのをやめない。ついには、すごすごとサイドラインの向こうへ去っていくようにするヒル校連中を見送りながら、腰に手をつき大笑いまでした。

「正義は勝つ。ざまあみろっ、わはははっ！」

調子に乗りすぎだ。馬鹿。

もう限界だと感じた僕は、ボールを右手に持ちかえるや素早く狙いを定め、投げた。

僕の投じたボールは、背中をのけぞらせて大笑いしていたレイフの頭に見事にあたって、はねかえった。

「すげっ、この距離からよく当てたな。てか、大丈夫か、レイフの奴」

僕の傍まで駆け寄ってきたチームメイトがびっくりして言った。

「手加減はしているよ。軽い球だ」

レイフはふらふらとよろめいたかと思うと、数瞬の間意識が遠のいたのかぼうつと立ち尽くした。

「いてーっ、何すんだよっ」

転瞬、レイフはきつとなって体を反転させると、ゆったりと歩いていく僕に向かって中指を突き立てる仕草をした。

「このクソ兄貴っ。投手が人の頭狙って球投げんなよっ。馬鹿になったら、どうしてくれるんだっ」

昂ぶる気持ちの矛先を僕に向けながら、レイフは頭をガードしていたヘルメットを外し、それを僕に投げつけたいかのように振り回した。だが、その顔は明るく笑っている。

大きななりをして、はしゃぎまくる子供のようだとまたしても溜息をつきたくなったが、そんな弟が今度はなぜか可愛く見えた。

「それ以上馬鹿にはならん。安心しろ」

僕は今シーズンの初戦に勝利をおさめて沸き立っているチームメイト達の間をまっすぐ弟に向かって歩いていった。

「ひっでえな」

不貞腐れたように唇を尖らせるレイフの前で足を止め、僕は思い出したようにヘルメットを取り、汗に濡れた頭を振った。

熱を持った頬に吹き付ける風が心地いい。フィールドのざわめきも、さっきよりも、ずっと身近に聞こえる。

全てが現実らしくなってきた。

「何、ぼんやりしてんだよっ、クリスター」

いきなり顔を覗き込む弟に僕ははっと息を吸い込んだ。

「レイフ」

「ん？」

「試合中に闘争心を燃やすのは構わないが、ゲームが終わったつまらないわだかまりは全て忘れろ」

「んん、だってさあ。諸々の因縁を別にしても、いちいち、腹が立つ奴なんだから仕方ないじゃん。ほんとほんとは、タコ殴りにしてやりたくらいだけど、兄貴に叱られるといけないしー、あれだけで許してやったんだぜ。別にいいじゃん、勝ったんだから」

「僕が言いたいのは、彼らに限らず、敵の挑発にいちいち乗るなどいうことだ。いつも言ってるだろう？ もっと自分をコントロールしろ」

「ああ、もうっ、今だけはお説教は勘弁してくれよっ」

レイフは面倒くさそうに頭をかきむしると、一転じゃれかかるように僕の首に腕を巻きつけてきた。

レイフの汗のにおい。まだ燃焼したりないかのような体から伝わる、熱ー。

じわじわと、勝利というリアルが僕の胸にも広がっていった。

「なあなあ、クリスターだって、ほんとには嬉しいくせに。待ちに待ったシーズン到来だぜ。クールぶってないで、素直に笑えよ」

ぐいぐい首をしめつける馬鹿力に僕はちよつと顔をしかめ、レイフをたしなめる言葉を更に言いかけた。だが、目の前で屈託なく笑っている彼の顔を眺めていると、何だか気をそがれて、結局別なことを言った。

「僕だって、もちろん嬉しいよ」

こんなにも晴れ晴れとしたレイフの顔を見るのは久しぶりのような気がした。それほどにフットボールのシーズンを待ち焦がれていたのだろう。

無邪気で素直で闊達な本来の弟^{レイフ}が戻ってきたようで、嬉しくて、気がつくと僕も微笑んでいた。

「ああ、やっぱり、オレ、好きだなあ。陸上も柔道も好きだけど、やっぱり、フットボールが一番いいや。それで勝てたりなんかしたら、もう最高。こんなに気持ちのいいことってない」

レイフは汗を手でぬぐいながら、ふと空を振り仰いだ。

雲ひとつない秋の空は眩しいほどにどこまでも晴れ渡っている。

「：今年は、どこまで行けるかなあ」

目を凝らして、遠い何かを追いかけるかのように無心に見つめる、レイフの瞳に空の青が映っている。

「おまえは、どこまで行きたいんだ？」

「もちろん」

何の銜いもなく、レイフは応えた。

「どうせなら、一番てっぺんに立ってみたいよ。きっと、すごく気持ちいいから」

僕は頷いた。

「そうだね」

レイフをまねて、僕も涼やかな秋の空を見上げる。

「頂上まで勝ち登ってやろう。僕と一緒に」

レイフの瞳に映るのと同じ空の青に目を凝らしながら、僕は込み上げてくる喜びに身震いしそうな体を抑えるのに密かに苦労していた。

僕達が17才の秋―。

今年もレイフと同じ目標を追えるという喜びを味わいながらも、
一方で僕は、いつまでこうしてられるはずがないという予感をひ
しひしと感じ取っていた。

第1章 終わりの始まり(2)

湯気に霞んだシャワー室は勝利の余韻を引きずっているチームメイトの陽気な声で騒がしい。

「いててっ」

熱いシャワーを頭から浴びながら、レイフは胸に覚えた鈍い痛み
に顔をしかめた。

試合が終わって、しばらくの間忘れていた。ニックに肘鉄を食ら
った箇所だ。

(ああ、やっぱり赤くなってやがる)

指先で押さえながら、まさか骨にひびなど入っていないかとレイ
フはさすがに少し不安になった。

シーズン始まって早々負傷して試合に出られないなどと、しゃれ
にならない。丈夫だけが取り柄の体だから、大した傷ではないと思
うけれど――。

レイフが降り注ぐシャワーの中でじっと考え込んでいた、その時
だ。

「レイフ」

「うひゃ？」

すぐ後ろから低い声で名前を呼ばれて、レイフはびくっと飛び上がり、とっさに後ろを振り返った。

「て、何だ、クリスターかよ。コーチのところに寄ってたんじゃなかったのかよ」

「それは、もう終わった」

クリスターの鋭い視線が自分の胸に注がれているのに、レイフは一瞬ひるんだ。

「痛むのか？」

「え？」

「さっき、ニックとぶつかった時、彼の肘を食らっただろう？ 見せてみる」

レイフは目をぱちぱちさせた。

「あのぶつかりあいの只中で、よくそこまで見ていたな。おまえ、目ざとすぎっ」

クリスターはふっと笑って、身を屈め、レイフの胸の赤くなった部分に指で触れた。

「これは痛む？ …それじゃあ、ここは？」

レイフに確認を取りながら気遣いに満ちた指先で触れてくる、クリスターの頭を見下ろしながら、レイフはますます落ち着かない気

分になってきた。

「…たぶん打ち身だけで、骨は大丈夫だと思うけどー明日になって
もまだ痛みが続くようなら病院で診てもらおう」

「う、うん…」

出しっぱなしのシャワーの音を背中に聞きながら、その音がばく
ばくいつている心臓の鼓動を打ち消してくれることをレイフは必死
で祈っていた。

兄の裸体とこんなに近くで向き合うことは久しぶりだったろうか。
鏡の前に立っているかのように、そっくり同じ体。今唯一違うのは、
レイフの胸には赤い小さなうっ血した箇所があるということだけだ。

（噛み付いてやろうか、そこ）

傷1つないクリスターの胸をじっと見ながら、レイフはふと妙に
凶暴な気分が駆られた。

赤く、血がにじむくらいに歯をたててやろうか。クリスターの胸
にもレイフと同じ印がつくほどー。

「おおい、双子ーっ」

湯気の中でクリスターと向き合ったままぼうつとしていたレイフ
は、その呼びかけに我に返った。

「何、2人で見つめ合ってたんだよ。っーか、目の毒っ」

親友トム・バーマンがにやにや笑いながらこちらを見ているのに、レイフはちよつと居たたまれない気持ちでした。

「レイフがさっきの試合で傷を負ったらしいんだ」

「え、マジかよ」

さつと顔色を変えるトムに、クリスターは鷹揚に頷き返す。

「一応コーチにも報告はしたけれどね。それで、これからの試合に影響が出ることはないと思うよ」

クリスターは軽くレイフの肩を叩くと、心配顔のトムの方へ歩いていった。

その後ろ姿に、レイフの目はついつい行ってしまった。

自分と同じ見慣れた体と言ってしまえば、それまでだ。しかし、『自分』の後ろ姿をこうやって客観的に眺められるのは、双子にのみできることではないか。

（オレが言うのもなんだけど…兄貴の奴、いい体してるよなあ）

すらりと高い背に、長い手足。強肩でならずクォーター・バックだけあって肩や上腕の筋肉は隆としたものだ。それから、その広い肩幅のせいでむしろほっそりして見える腰だとか、引き締まった形のいい尻だとか―。

（変態！）

レイフはいきなり壁の方に向き直り、堅いタイルに額をがんとぶつけた。

近くでシャワーを浴びていた仲間がうろんそんな目を向けてきたが、笑ってごまかし、レイフはシャワーのノブをいっぱいひねった。

シャワーの音以外もう何も聞こえない。シャワー室の片隅でたぶんトムと話しているだろうクリスターの声も自分の心臓の鼓動も、この音が打ち消してくれる。

むきになったように頭を洗いながら、レイフは強く念じた。

（流れちまえ、ブラコン）

たちこめる蒸気の向こうに、ゆらりと、遠い記憶が陽炎のように揺らめいたが、レイフは見ない振りをした。

それからしばらく熱いシャワーをがんがん浴びまくって、誰もいなくなった頃やっと、すっかりのぼせたレイフはふらふらになりながらシャワールームから出て行った。

「ああーっ、腹減った、腹減ったーっ」

クラブハウスから出た頃には、既に日は暮れかけていた。

「もうカフェテリアは閉まってるし、寮で食っていけと言いたいとこだけど、食堂が開く時間にはまだ早いぜ」

大げさにお腹を押さえてふらふらしてみせるレイフを、横に並んで歩いていたトムが見上げながら言った。

「ピザでもマックでも何でもいいから、食いに行こう。今なら、オレ、店一軒食いつぶせそう」

「近くにオープンしたばかりのピザ屋があったから、帰りに寄ってみようか。車の中に割引クーポンがあったと思うよ」と提案したのは、クリスターだ。

「あは、何それ。クーポンなんか取っておいたのかよ。クリスターって、母さんみたいなことするんだな」

「おまえをレストランなんかで野放しにして好き勝手に食べさせたら、僕のアルバイト料なんてあつという間になくなってしまふよ」

「おまえも来いよ、トム。今日はオレ達大活躍だったし、ご褒美に兄貴がおごってくれるってさ」

「当たり前のように言うんだな」

「だって、クリスターはチームのキャプテンじゃん」

レイフは悪戯っぽく片目をつむった。無然とした面持ちのクリスターを横目に見ながら、小柄なトムの肩を抱いて耳打ちをする。

「それにさ、こいつ、高校生のくせにすごく稼いでるんだぜ。親父の知り合い通じて色んな会社のコンピューター・プログラムの書き換えや修正とかして、下手なプロ雇うよりも安くつくし仕事も速いしって、重宝されてんの」

「へえっ。それじゃ、遠慮なくたからせてもらおうかなー。行こう行こうピザ屋」

はあっと溜息をつくクリスターの後ろを、少々バランスが悪いながらも肩を組んでピザコールしながらレイフとトムが続く。

やがて学校の敷地から出、静かになった校舎の横の道を少し離れた駐車場に向かって3人は歩いていった。

駐車場が見えてきた、その時だ。道路脇に止まっていた一台の車がクラクションを鳴らした。

「何だよ、あの車」

レイフが不審そうに立ち止まってそちらを見ると、その白い車のドアが開き、1人の若い女が降りてきた。

レイフの顔から笑みが消えた。

「クリスター」

にっこり笑って手を振る、茶色のストレートの髪を長くのばした知的な感じの美人に、レイフも見覚えがあった。一度家の前で会ったことがある。

「ジェシカ：来てたのか」

クリスターの声には微かな戸惑いを感じられた。

「講義が終わってからここに来たの。試合開始には間に合わなかったけれど、充分楽しめたわ」

クリスターは気まずそうにちらっとレイフの方を見、それから車の傍に立って待ち受ける様子の女に素早く歩み寄った。

「試合、よかったわよ。大活躍だったじゃない、赤毛ののっぽさん」
ややハスキーな落ち着いた声は、いつかレイフが電話で聞いた時と同じように感じがよかった。

「なあ：誰？」

突然現れた美女に興味津々のトムにわき腹を肘でつつかれて、レイフははっと我に返った。

「うん…」

レイフは一瞬口ごもった。

「兄貴が付き合っている人。ハーバードの学生だってさ。ほら、クリスターの奴、今あそこで心理学のクラスを取ってるから―そこで

知り合っただ」

「大学生か：やっぱうちの学校の子とは雰囲気違うよなあ。カッコいい大人の女の人って感じ」

トムは羨ましそうに溜息をついた。

クリスターはこちらに背を向けているため、その顔は見えない。

レイフは、クリスターの向こうに覗くジェシカの美しい顔――さらさらした長い髪を指先でいらいながらクリスターを見上げる、そのあまやかな眼差し、綺麗な唇が笑みこぼれる様にじっと見入っていた。

（何か：チクチクしやがる：心臓：）

この場に立っているのも落ち着かなくて、じりじりしながらレイフが待っていると、クリスターはやっとこちらに戻ってきた。しかし――。

「レイフ、悪いけど、先に家に戻ってくれ。今夜は少し帰りが遅くなるかもしれないけれど、心配しないでって、母さんに：」

レイフはむっつり黙り込んで、地面に視線を落とした。

「すねるなよ、子供みたいに。ほら、車のキー」

「ば、馬鹿、すねてなんかいねえよっ」

むきになったように言い返し、クリスターが取り出したキーをレ

イフは腹立たしげに掴み取った。

「それじゃ」

クリスターはまだ何か言いたげなレイフの肩を軽く叩き、呆気にとられているトムに向かって頷くとくるときびすを返した。そのまま、既に車に乗り込んでいるジェシカのもとに彼は戻っていった。

「お兄さんを借りるわね」

ジェシカが運転席の窓から親しげに手を振るのに、レイフもぎこちなく手を振り返した。

そうして、2人を乗せた車は走り去った。

（ちえっ）

トムと一緒に道端に取り残されたレイフは、しばしその場にたたずんで、兄が恋人と一緒に消えていった方向をひたすら目で追っていた。

クリスターには恋人がいる。レイフにはいない。クリスターにとって恋人が弟よりも大事とまでは、レイフも思っていない。しかし今は、置いてけぼりを食ったことが切なくて――。

「レイフ」

突然後ろから頭をはたかれて、レイフは軽く前によろめいた。

「い、痛いじゃないか、トム」

叩かれた後頭部をさすりながら、レイフは恨めしげな顔で親友を振り返った。

「そんな捨てられた子犬みたいな目で兄貴を見送るのやめろよなー。見ている方が恥ずかしくなる」

「う」

レイフは赤くなって俯いた。

「まあ、羨ましいって気持ちは分かるけどな。クリスターってのもてまくりなのに、おまえ、その点では明らかに負けてるし」

「悪かったな」

レイフはむっとしてトムを睨みつけた。

「ていうか、がんばれよ、弟。おまえだって、その気になったらガールフレンドの1人や2人、余裕でできるはずだぜ」

「そう簡単に言うなよ。だって、仕方ねえじゃないかっ。ライバルは、あの『帝王』クリスターだぜ。同じ顔しているってことが返ってハンデなんだよ。外見が同じなら、2人のうちより優秀でカッコよくて目立つ方に女の子は皆流れちゃう。大体、オレ、女の子のことなんて分からないし…兄貴みたいにうまく接することもできない、そういうの苦手だから…」

トムは嘆かわしげに溜息をついた。

「お前の場合、その妙な思い込みをなおさなきゃな。俺に言わせりゃ、おまえだって、充分すごいのに。運動神経抜群の天才じゃないか。お世辞抜きで将来はプロにだってなれるぜ。もっと自信持てよ、レイフ、おまえに敵う高校生なんて、いるものか」

初めはからかい半分の軽い調子だったトムが次第に真剣になってくるのに、何だか追い詰められそうな気がして、レイフはなおも訴えようとする彼をわざと遮った。

「でも、クリスターにだけは絶対敵わない」

他人の言葉など一切受け付けないような固い声で断言するレイフに、トムは口をつぐんだ。

励まそうとしてくれるトムには悪いが、これは単なる思い込みではないとレイフは信じている。そう、クリスターに勝つことなど初めからあきらめている。

「何で、そう思うんだよ」

レイフは怒らせていた肩を落とした。すまなそうに、トムを振り返った。

レイフをまっすぐに見つめるトムの顔には、もどかしさだけでなく真摯な気遣いがうかんでいた。

足の速さを評価されレイフと同じスポーツ枠で入学を許可されたトムとは、レイフは馬が合った。フットボール・チームのトライアウト（入部テスト）でも、トムはレイフとたまたま一緒だった。当時絶好調だったレイフは、40ヤード走4・3秒とプロ顔負けのタ

イムを叩き出し周囲の度肝を抜いた。その俊足ぶりに、あれ以来トムは惚れ込んでくれているそうだ。だから、時々レイフが自分の実力を過小評価するような発言をすると腹が立つらしい。

「悪い…大声出して」

レイフはううんと唸りながら小指で耳をほじった。

「うまく言えねえけど…クリスターとオレとじゃ、『本気』になった時の肝の据わり具合が違うんだよ。オレには絶対できないことが兄貴にはできちゃうんだ。あいつの本気を思い知ったら、あいつに勝とうなんて気持ちはなくしちまう」

いつの間にか周囲はすっかり暗くなっていた。

レイフは闇の彼方を、微かな怯えをはらんだ目でじっと透かし見た。

「クリスターの本気って…どういう意味なんだよ？」

トムが追求してくるのに、レイフはちょっと首を傾けて困ったように頭をかいた。

「まあ…知らねえに越したことはないな」

それから、頭上を振り仰いで、大きく息を吸った。

「なあ、レイフ」

なおもトムが言いかけた時、レイフの腹の虫がなった。

途端に、緊張感が緩んだ。

「ああ…クリスタ―は行っちゃったし…ひもじいから余計に切なくなる…」

お腹をおさえてがっくりとうなだれるレイフに、トムは慌てて声を張り上げた。

「そ、そうだ、ピザ食いに行くんじゃないのかよ。クリスタ―ぬきでもいいじゃん、早く行こう。あんまり遅くなるときっと店も混んでくるぜ」

「付き合ってくれるのか？」

「もちろんっ。俺達、友達だろ」

落ち込んでいる様子のレイフを訳が分からないなりに慰めようとしているトムをレイフはがしっと抱きしめた。レイフはじゃれているつもりでも、小柄なトムにとっては破壊力のあるタックルだ。一瞬彼は白目をむきかけたが、レイフは気がつかない。

「ありがとうな、トム。ただしスポンサーがいなくなったから、ピザ代割り勘だかな」

「え…ええーっ」

その言葉に我に返ったトムを問答無用で駐車場に引きずっていきながら、レイフはふと後ろを振り返った。

クリスターは行ってしまった。

もう17歳にもなっているのだから、子供の時のようにクリスターといつも一緒にいるわけにはいかないと頭では承知しているはずだが、まだ現実を受け入れられない自分がいることをレイフは実感していた。

第1章 終わりの始まり（3）

フィリップス・アーバン高校は、四年制私立の進学校、所謂プレップ・スクールだ。生徒の半分以上はアメリカ全州から来ている寮生で、クリスターとレイフのようなデイ・スチューデントはむしろ少数派だ。東部で指折りの名門校として知られ、卒業生には政治家や実業家など各界で活躍するエリートも多い。

この学校をそもそも選んだのは、クリスターと母のヘレナだった。中学時代から学校始まって以来の秀才で通っていたクリスターは、学校の推薦状と成績表、後は簡単な面接で簡単に入ることができた。だが、レイフはそうはいかなかった。クリスターが進学を決めた中学最後の二年は、レイフもこれまでの人生でこれほど勉強したことはないと断言できるほど死ぬ気で勉強した。おかげで成績は推薦レベルに達し、後はスポーツができることを評価されて何とか兄と同じ学校に滑り込むことができた。

双子の家庭は父の経営する警備会社が順調で裕福な方だったが、それでも子供二人を私立にやるのは結構な負担ではなかったろうか。父親のラースはそうでもないが、母親のヘレナはもともとエリートだっただけに教育にも熱心な人だ。子供に物質的な贅沢はさせないが、教育にかかる費用だけはいつでも惜しまなかった。

そんな母親に外見だけでなく頭の中身までよく似たクリスターは、入学直後から英才クラスに入り、そこでもまたトップの成績を維持している。

一方のレイフと言えば、空気の抜けた風船だった。取り敢えず兄と同じ学校に入れたことで、勉強に対するやる気は燃え尽きてしまったのだ。もともと彼は、好きなスポーツさえできれば、後はどうでもいいという非常に分かりやすくも困った考えの生徒だった。

（ちっきしょーっ！）

放課後の校舎をレイフは猛スピードで突っ走っていた。

おしゃべりしながら廊下を歩いていた生徒達は、すごい勢いで走ってくる彼にはね飛ばされるのではないかととっさに凍りついたが、そこは敵のディフェンスをかわしながら走るのが専門のランニング・バック、誰ともぶつかることなくあざやかに抜いていった。

この日、生徒指導担当の副校長からの呼び出しを受けたせいで、レイフはフットボールの練習に少し遅れた。

昨日のアメリカ史のクラスでの態度が悪かったと、教師から報告があったらしい。

レイフは歴史にはあまり興味はないし、教師との相性もよくなかった。だから、ついつい、それが言葉や表情に出てしまう。退屈な授業でも我慢して聞く振りだけはし、口のきき方にももっと気を使えばいいだけのことだが、馬鹿正直なレイフにはそれができない。（つたく、面倒くせえ）

何より規律を愛する神経質なミス・リーは、レイフのぶっきらぼうな言動にいちいち過剰に反応してしまうようだ。

呼び出しを三度食らえば反省室行きだぞと副校長に釘を刺されたが、レイフは指導室を出ると彼の言ったことなどすぐに忘れた。

（ああ、全く、つまらないことで練習に遅れちゃったよー）

面白くないクラスや苦手な教師との付き合い方などどうでもいい。そんなことを言ったら真面目なクリスターにどつきまわされそうだが、レイフにとってはフットボールこそ学校生活における最優先事項だ。

三ヶ月ぼちしかない貴重なシーズンなのだから、フットボールのための時間は少しでも無駄にしたくない。

（クリスターも、もう練習始めてるかな。副校長に呼び出し食らったせいで遅れたなんて聞いたら、きつとまた長い説教から始まるんだろうな）

怒ったクリスターはこの世の何より恐ろしいが、兄と一緒に練習ができるかと思うとレイフの胸は弾んだ。

一緒に通学している二人だが学校内の行動は別々だ。優等生のク

リスターはレイフとは選択しているクラスも違うし、ランチタイムも微妙にずれている。週のうちの二日は大学まで講義を受けに行っているクリスターは校内で姿を見かけること自体少ない。せっかく同じ高校に進学したのに、これではあまり意味がなかったと後悔することたまにある。

それでも、この季節だけは違った。今でも双子達の間で共有できる数少ないものの一つが、フットボールなのだ。

校舎を飛び出し、そのままの勢いでグラウンド脇に体育館と並んであるクラブハウスに走りこもうとした時、入り口でいきなりレイフは呼び止められた。

「クリスター」

今でも双子の兄と間違えられることはしょっちゅうだったので、レイフは別に動じず、そちらを振り返った。

ブロンドの髪を後ろにまとめた少女がレイフを探るように見つめていた。短いチアのスカートから伸びた長い脚がちよっと眩しいくらいに綺麗で、レイフはつい見とれてしまった。

今年からレイフのチームのチアリーダーをやっている女の子だが、今まで言葉をかわしたことはなかったと思う。美人で、いい家のお情様らしいが、我が俣との評判も耳に挟んだことがあったが。

期待と緊張をはらんだ目でじっとこちらを窺っている少女に、レイフは向き直った。

「えっと、キャサリン・コナー…だったかな？ 生憎とクリスターじゃなくて、レイフの方だよ」

レイフが名乗った途端、それまでしおらしげにしていたキャサリンの顔つきが変わった。

「それじゃ、クリスターはどこにいるのよ？ さっきグラウンドを見に行ったけれど、練習にはまだ出てなかったわ」

言葉使いまでつんけんしたものとなっている。少女の豹変振りに呆れ返りながら、レイフは言い返した。

「オレだって、今ここに着いたとこなんだぜ。何だ、クリスターの

奴まだ来てないのかよ…そういうことなら、大方生徒会の方にも顔出してるんじゃないのかよ。ふん、兄貴の分刻みのスケジュールまで、オレが知るか」

「ふうん、そうなの？　練習中はいつもあんなにクリスターにべつたりのあんなのに」

てつきりクリスターだと思って声をかけたのに当てが外れて腹立たしいのだろう。キャサリンは腕を組んで、レイフを憎らしげに睨み付けた。

「せっかくクリスターが一人でいるところを見つけたと思ったのに、あんただったなんて、本当に残念っ」

「そっちが勝手に間違えただけだろ。オレに八つ当たりするなよ。」

第一、あんたが兄貴に何の用があるんだよ」

こんなふうにいちいち相手にせずすぐにこの場を立ち去るべきだとは思ったが、それができないのが、レイフの異性に対する気の弱さだった。

「そうね、あんたとクリスターを間違えるなんて、私の方こそどうかしていたんだわ。外見がそっくりだって、しよせんあんたなんかクリスターの『劣化コピー』じゃない」

レイフは目をぱちぱちさせた。

（劣化コピー？　うまいこと言うなあ）

一瞬レイフは、怒るよりもむしろ感心してしまった。

（い、いや、ちょっと待て。やっぱりひどいだろう、それは）

こめかみの辺りがぷちつと小さな音を立てたような気がした。

「れ、劣化コピーだあ？　失礼にも程があんだろ…大体おまえなあ…！」

遅れてこみ上げてきた怒りに任せてレイフが大声をあげようとした時、キャサリンが叫んだ。

「私、クリスターが好きなの！」

不意打ちを食らって、レイフは絶句した。

（うわ、いきなり直球できやがった）

好きな相手に告白だの何だのと、レイフが最も苦手とするシチュエーションだ。この場合は対象がクリスターなのだから、これ以上巻き込まれる前に、レイフには関係ない話と突き放せばよかったのだが、焦るあまり、そこまで考えが回らなかった。

クリスターに熱を上げている女子は大勢いて、チアの連中もチームの花形QBの彼女の座を狙って互いに火花を散らしているしいが、彼は同年代の少女はほとんど相手にしない。実際クリスターが付き合うのは、いつもジェシカのような落ち着いた年上の女性ばかりなのだ。

（どうしよう。はっきり言ってやるべきだろうか。あきらめろ、クリスターの理想は年上のインテリ女だ。あんたは確かに美人だけれど、おつむはちょっと足りない感じだし、第一あいつの好みに照らせばまだ若すぎるって）

だが、いくらキャサリンの高飛車な態度が鼻につくからといって、彼女なりに真剣な想いを全否定することは、やはりレイフにはできなかった。

「やめとけよ」

レイフはぼそりと言った。

「クリスターには今付き合ってる人がいるんだ」

さすがにキャサリンは一瞬ひるんだ顔をしたが、まだあきらめなかった。

「そんな噂、聞いたことないわよ」

「同じ学校の人じゃないよ」

先日の出来事を思い出して、レイフは少し落ち込んだ気分になった。

「それに、たぶんクリスターはこの先も同じガッコの子とは付き合わないと思う。追いかけるだけ損だよ。悪いこと言わないから、他を探せよ」

「何よ、それ」

キャサリンはまだレイフの言うことを疑っているようだ。さすが

に、この女しつこいなとレイフも閉口してきた。

その時、キャサリンははたと思いついたかのように言った。

「分かったわ、レイフ。あなた、クリスターに妬いてるのね？」

「は…はあっ？」

思わず、レイフはのけぞった。

「ど、どうして、そういう話になるんだ？」

本気で仰天してレイフは問い返した。

「おんなじ顔した双子なのに、クリスターは何をやっても一流で、あんたは二流以下。もちろん女の子達だって見る目あるから、少しくらい運動ができるからって、野蠻人のあんたより、クリスターに夢中よ。それが気に入らないんでしょう？」

レイフはふっと気が遠くなったような気がした。

よくもまあ、そんな理屈を引っ張り出してきたものだ。勘違いも甚だしい。

また、こめかみの辺りがぷちっといった。

（あ…もう駄目…もう限界かもしれない。神様、女の子に決して手は上げませんが、怒鳴るくらいはしてもいいですか？ でも、それで泣かれたりなんかしたら、もっとうざいし）

キャサリンのヒステリックな声は、キャンキャン鳴くスピッツ犬に似ている。アルバイト先の獣医のケージの中にいた、小さいくせにやたらとうるさかった犬を思い出しながら、レイフは必死で気持ちを落ち着けようと試みた。

レイフの沈黙をどう受け取ったのか、キャサリンは鬼の首を取ったかのような調子で更に続けた。

「それに、クリスターは同じ学校の子とは付き合わないなんて、あんたは言ったけれど、それは嘘でしょ。私、知ってるのよ、ハニー・ヘンダーソンのこと」

レイフは、はっと息を吸い込んだ。

「九年生の時、あんたが最初に好きになって…でも、ぐずぐずしているうちに結局クリスターに取られたんでしょ」

ハニー・ヘンダーソン。久しく聞かなかったその名前に、レイフの胸中は激しくざわめいた。

「クレイジーだって言われたくらいに風変わりな子で、最後は本当に頭がおかしくなっていて、学校をやめていったんだって聞いたわ。それがショックで、クリスターは彼女と別れた後誰とも付き合わなくなったんだって…。もちろん、あんたもショックだったでしょうけれどね、レイフ。好きな子をお兄さんに横取りされて、もしかして今でも恨んでいるんじゃないの？」

レイフはかあつと熱くなった頭を手で押さえた。こみ上げてくる怒りのために、がんがんと痛む。

レイフはぎりつと歯を食いしばった。

「何にも知らねえくせに、おまえなんかハニーのことを軽々しく話すんじゃない…！」

それまでキャサリンにむしろ圧倒されていたレイフが突然火を吹くように叫ぶのに、彼女はびくっと震え上がった。

そんな彼女に、レイフは指を突きつけるようにしながら迫った。

「いいか、二度とオレやクリスターの前でその名前を口にするな。」

「さもないと―」

先程までの弱気な態度とは打って変わってレイフが凄みのきいた目で睨みつけるのに、キャサリンはすっかり青ざめている。

「な、何よ…」

気の強い彼女は、それでも言い返そうとした。いや、もしかしたら大声で叫びだそうとしたのかもしれない。

一時はぐれかけて不良グループとつるんだこともあるため、今でも何をするか分からない乱暴者というイメージを抱かれているレイフだ。ここで騒がれ人を呼ばれたら、キャサリンに暴力を振るおうとしたと誤解されかねない。

一触即発の空気が漂った、その時、敵同士のようににらみ合う二人の上に、場違いなほど涼しげな声かけられた。

「あれ、レイフさん、こんな所で何をやってるんですか」

キャサリンはその声がした方をとっさに振り返り、レイフは眉根を寄せた。

「練習さぼるなんて、あなたらしくないですね」

体育館の陰からひょっこり姿を現したのは、栗色の髪の華奢な少年だ。

「さぼってなんか、いねーよ」

レイフは、悪戯を見咎められた子供のようなばつの悪そうな顔をした。

栗色の髪の少年は、キャサリンのことなど気にもとめずにすたすたとレイフの傍まで歩いてきた。

突然の闖入者の登場で、レイフの怒りは瞬く間に鎮火していった。

「それよか、兄貴は？」

レイフの質問を予め予想していたかのように、少年は滑らかに答えた。

「クリスターさんは、生徒会で決議した議題を持って副会長と一緒に校長室に行っています。チーム練習にはもう少し遅れそうだから僕には先に行ってくれて。これ、今日の練習メニューです。レイフさんに渡してくれて、クリスターさんから」

大事そうに胸に抱えていたノートを少年はレイフに差し出した。

クリスターが、その日の練習が終わる度に色々分析して書き込んでいるノートだ。

レイフは、神妙な面持ちでそれを受け取った。

（ちえっ）

レイフは少しがっかりしていた。せっかく急いで練習に来たというのに、肝心のクリスターは他の事で忙しくてここに来ない。こんなノート一つ、下級生に託しただけでー。

レイフは内心深い溜息をついたが、利発そうな青い瞳でじっと自分を観察している少年の手前、鬱屈した感情は胸の奥にしまいこんだ。

「兄貴も兄貴だけど…ダニエル、おまえまで生徒会とチームの主務

の掛け持ちかよ。よくやるよ、大変だろーに」

「ちっとも大変じゃないですよ。このくらい、クリスターさんに比べたら、全く大したことはないです」

今期からチームの雑務的なことを一手に引き受けている一年後輩のダニエル・フォスターは、レイフを見上げながらにつこりとどこか取り澄ました顔で笑った。

いかにも賢しげな表情は、『小クリスター』とでも呼びたくなるくらいだ。

「そんなことより、キャサリン・コナー、チアの君がレイフさん相手に何からんでいるのさ」

それまですっかり放置されていたキャサリンは、いきなりダニエルに予先を向けられて、明らかに動揺した。

ダニエルは手を背中で組んだ姿勢で、キャサリンに向き直った。

「ねえ、いいの？ 練習サボって選手に迫っていたなんて、他のメンバーにばれたら、君の立場悪くなるんじゃない？ まさかレイフさんを通じてクリスターさんに近づこうなんてしていた訳じゃないよね？ そんなぬけがけしようとしたら、きっとチアなんか続けられないよ。間違はなく、メンバー全員から吊るし上げだね。親とかに頼んでやっとの思いで入ったチアなのに、すぐにやめたくないよね。だったら、少しは気をつけようよ。もともと君、他のメンバーからは毛虫のごとく嫌われているんだから」

眉一つ動かさないクールな顔で、ダニエルは棘いっぱいの言葉をすらすらと述べた。しかも、ただの挑発ではなく確実に相手の弱みをついている。

「ち、違うわよ」

慌ててキャサリンが言い返すのに、ダニエルは満足そうに頷く。

「ああ、違うんだ、それはよかった。君にとっても、もちろんクリスターさんにとってもね」

レイフを相手にしていた時とは打って変わって、今度はキャサリンに旗色が悪いようだ。

頭の回転が速いだけに口も回ること回ること、キャサリンに反論の間も与えずに、ダニエルは一気に相手を追い詰めていった。

「それじゃあ、早く消えてよ。目障りだから、君」

ダニエルは、天使のようなとても形容したくなる完璧な笑顔を作って、キャサリンに対してとどめの一言を言い放った。なまじ品よく整った顔立ちだけに、その毒舌の殺傷力は物凄い。

（うわ、きつつー！）

脇で黙って聞いていたレイフでさえも、思わず、一歩引いた。

キャサリンは顔を真っ赤にし、わなわなと震えだしたかと思うと、さっと後ろを振り返って逃げ出した。

あれほどしつこかった彼女にしては、呆気ない退散の仕方だった。「全く：レイフさんって、フィールドではほとんど無敵なのに、それ以外の場ではほんとに不器用ですよね」

呆然とキャサリンを見送ったレイフは、ダニエルが嘆かわしげに溜息をつくのを見て、傍らを見下した。アイス・ブルーの瞳が恐れ気もなくレイフをまっすぐに睨み上げている。

「選手目当てで寄ってくる女の子の一人や二人、もっと簡単にあしらってくださいよ。可哀想だなんて同情して相手をしていたら、きりがないでしょう？ 練習の妨げにもなります」

ダニエルはレイフの腕を拳で軽く叩いた。

「今年こそ優勝目指す気なら、余計な雑念のものは排除すること。

あなたって気持ちが悪くプレイに影響するタイプなんだから、気をつけてください」

「す、すまん」

もっともなダニエルの意見にレイフは恐縮して頭をかいた。何と言っても、彼のおかげでレイフはキャサリンから解放されたのだから感謝して然るべきだろう。

ダニエルはレイフ相手に言いたいことを言ってすっきりしたのか、怒らせていた細い肩を下ろした。

ちらっと後ろを振り返ると、ダニエルは思い出したかのように付

け加えた。

「それから、まかり間違っても、あの馬鹿女をクリスターさんに近づけないでくださいよね。本当に身の程知らずで、頭にきます」

忌々しげに、ダニエルは舌打ちをした。

「あは：そこまで聞いてたのか」

先程の自分の激昂ぶりを思い出して、レイフは苦笑した。

とっくの昔に終わったことなのに、他人の口から聞かされただけであれほど取り乱すなど、本当にどうかしている。

「あんないい加減な噂をどこで聞いてきたのか知らないけれど、今更ハニー・ヘンダーソンのことまで持ち出すなんて：」

「いいよ、もう：」

その件はもう蒸し返されたくなくて、レイフは明るい調子で話題を変えた。

「それよりさ、おまえ、今年はチェスクラブの方はどうするんだよ。それも掛け持ちするのか？」

昨年、一年スキップして十四才で高校生となったダニエルはチェス・マニアで、アーバン校に入学してすぐに自らクラブを作った。そうして、かつてアマチュア・チェス界で名を馳せたクリスターが一学年上にいることを知るや、彼を訪ねていっていきなり挑戦状を叩きつけたのだ。クリスター自身は中学最後の年にジュニア選手権、全米選手権と立て続けに優秀したのを最後に、チェスはやめてしまったのだが、ダニエルはしつこく対戦を迫り、ついに根負けしたクリスターは受け入れた。

この出来事の顛末は新聞部が取材に来るほど学校内での話題となり、対局当日、会場となった教室前の廊下や中庭は見物人や野次馬で溢れ返った。

結果は、言わずもがなのクリスターの圧勝だった。

これでもうダニエルに付きまとわれなくなるだろうと胸を撫で下ろしたクリスターの当ては、しかし、外れた。

それまでチェスも勉強もそこそこできて自信家だったダニエルは、

自分を完膚なきまでに打ち負かした男にむしろ惚れ込んでしまったらしく、以前にも増してクリスターを追いかけるようになった。クリスターが生徒会に入るなら自分も立候補して書記になったし、もう一年スキップして彼と同じ学年になりたいと今また猛勉強しているそうだ。

それだけでは飽き足らず、全く興味のなかったフットボールにまで守備範囲を広げてしまう辺り、思春期ならではの勢いと思い込みは、ある意味怖い。

一生懸命背伸びしてクリスターに追いつこうとしているダニエルを見ていると、もううつとうしいのを通り越して、レイフはいつもはらはらさせられた。

クリスターに憧れるのはいい。だが、そこまで他人に入れ込んで、本来自分が好きだったことまで犠牲にしてしまうのはどうかと、これでも一応二才年上のレイフは心配してしまうのだ。しかし――。

「チェスですか？ ああ、それはやめました」

「え、本気でやめたのか？」

あっさり答えるダニエルに、レイフは拍子抜けしてしまった。

「生徒会書記とフットボール・チームの掛け持ちだけで、今は充分です。この上チェスまで続けようとしたら、きっとどれも中途半端になってしまいうでしょう。成績も落とすたくないし……。何もかもパーフェクトになんて、僕にはさすがにクリスターさんのまねはできませんから」

「ふうん：去年はあんなにチェスしよう、チェスしようって、クリスターにまつわりついてうるさかったのにな」

「一局交えてもらっただけで充分ですよ。全く敵うレベルじゃないって分かって：井の中の蛙だった僕にはいい経験でした。それでもちゃんと相手をしてもらえたんだから、満足です」

いいのか、本当にそれでいいのか？ 納得できないレイフは、思わず追及してしまった。

「でもさ、それで：何でフットボールなんだよ。しかも、選手じゃ

なくて態のいい雑用係じゃないか。そんなんで、楽しいのか？ おまえの体格で一軍選手なんてそりゃ無理かもしれないけど、もしどうしてもって言うのなら、せめてトライ・アウトくらい受けてみたらー」

「楽しいですよ」

きっぱりと答えるダニエルに、レイフは何と言えいいのか分からなくなった。

「クリスターさんが好きなことは僕も好きです。だから、フットボールも勉強して、ルールから複雑な作戦まで全て頭に叩き込んだんです。理論ばかりで実戦に出られないのは残念だけど、その分他でカバーして皆さんが上に行けるようしっかりサポートするつもりですから」

本当に、思春期って、怖い。欲しいもの以外は全く目に見えなくなつて、それが例え火の中にあつても、平気で手をつ込んで取ろうとする。

滑らかな頬を紅潮させて訴えるダニエルを、レイフは内心冷や冷やしながら見ていた。

そういうレイフもまだ思春期真っ只中だったが、たぶんダニエルとは違って、火傷をしたら熱くて痛いということはもう知っていたのだ。

「まあ…無理しない程度にがんばりな。そうそう、チームの連中にもし苛められたらさ、オレかクリスターんとこにすぐ飛んでくんだぞ。倍にしてやり返してやるから」

「そ、そんな迷惑かけられませんよっ」

言い返すダニエルの頭を捕まえると、レイフは子犬を可愛がるように撫で繰り返してやった。ダニエルは悲鳴をあげて逃げようとするが、口はともかく力ではレイフに敵わない。

「じゃ、お先」

洗われた犬のようににはあはあ息をつきながら、すっかり乱れた頭で呆然と立ち尽くすダニエルを置いて、レイフは先にクラブハウス

のドアを開いた。

（あーあ、何だか、練習に出る前にどっと疲れちゃったな）

キャサリンの告白にはすっかり振り回され、ハニー・ヘンダーソンの名前を聞けば激しく動揺し、それから、ダニエルの一途さにまた冷や冷やされられて――。

冷静に考えれば、全てクリスター絡みの話だ。

レイフの唇に、ふっとほろ苦い微笑が漂った。

（オレには関係ないって割り切ればいいのかな……ハニーは別だけど、あれも終わったことだし……。クリスターが誰を好きになろうが、どこで何をしようが、それはあいつの問題だ。でも、クリスターが絡んでくるとやっぱり気になって……つい係わり合いを持とうとしちゃう）

早足でずんずん奥に入っていくながら、逃げるようにロッカールームに入り込むと、レイフは小さく溜息をついた。

手に持っていたクリスターのノートに気がつき、レイフは忌々しげに唇を噛み締めた。

（クリスターの馬鹿、こんなものを人づてに渡したりしないで、自分でここに持って来ればいいじゃないか）

レイフにとっては待ちに待ったシーズンだというのに、クリスターはフットボールだけでは満足できないのか。生徒会とかその他諸々掛け持ちなどして、欲張りすぎる。

（分かったことだけどさあ……ちよつとがっかり……）

クリスターはレイフとは違う。別にフットボールがなくても、彼は他の才能を発揮して生きていける。レイフがいなくなったとしても、クリスターは実際あまり不自由しないのではないか。彼を愛し、求める人間は他に大勢いるから――。

クリスターの優先順位の中で自分が位置する場所は今どの辺りだろう。そんな心配をすること自体が幼稚なのだ。それも、分かっている。

クリスターがよく言うことだ。

おまえも少しは大人になれよ、レイフ。大人になれ。大人に――。
しかし――。

「どこで何してやがる、クソ兄貴っ」

何だか無性にイライラして、レイフはクリスターが使っているロッカーにそのノートを叩きつけた。

床に落ちているノートとロッカーを見比べた後、レイフはしょんぼりと頭を垂れた。目を閉じた。

「戻ってこい……ここに……」

呪文のように、ふっと呟いてみる。レイフは苦笑した。

(…ばっかみてえ!)

レイフは絡み付いてくる嫌なものを振り払うかのごとく頭を振ると自分のロッカーに行き、さっさと着替え始めた。

第1章 終わりの始まり（4）

「よし、いいぞっ。ブロックかわして、そのまま突っ込んでいけ！」
テレビは今、フットボールのカレッジ・リーグの中継の只中だ。

金曜は自分達の試合、土曜日曜はそれぞれカレッジ・リーグにNFL^{プロ}のテレビ観戦と、この季節、レイフは好きなフットボールにつま先から頭のとっぺんまでつかっている。

今夜は双子の両親は仕事で帰りが遅いため、二人で先に夕食をすませ、後はリビングに落ち着いてこうして一緒に試合を見ていた。

「よっしゃ、タッチダウン！」

テレビ相手でも熱中するといった歓声をあげたり手を振り上げたりと騒がしいレイフとは対照的に、クリスターはほとんど微動だにせず、画面の中で展開されるプレイを分析するかのように真剣に追っている。

今夜は結局応援しているチームが勝利し、レイフも大満足だった。

「ああ、よかったよな、クリスター」

「うん」

レイフは飲みかけのコーラを一気に飲み干して、試合終了直後の観客席やチームの様子を流しているテレビをうつとりと眺めた。

「昨日は、オレ達も試合で勝ったし、今年はなんかついてるって気がする」

「僕達是一直いるから勝ったんじゃない。実力だろう」

冷静にたしなめるクリスターをレイフはきょとんとして振り返る。

「あは。そうでした、キャプテン」

レイフは一瞬目をぐるっと回し、それから茶目っ気のある笑顔で片目をつむってみせた。

「去年は惜しかったけど、今年こそ一番上まで勝ち登れるさ。おまへと組めりゃ、この世に恐いものなんてない気がするよ」

レイフが調子づいてこんなことを言うのに、クリスターの厳しい

瞳がふと和らいだ。

「僕も：そう思っているよ。レイフ、おまえと僕がチームを引っ張るんだ」

「んー、いや、リーダーはやっぱおまえだろ。オレ、そんな責任負うような柄じゃないし。クリスターは最高の司令塔だって、コーチも言ってたじゃん」

「フランク・コーチは、レイフの破壊力のある走りも攻撃の要としてちゃんと評価してくれているよ」

「ほんと？ あの鬼コーチ、いつもはあんま誉めてくれないけど、今でもオレに期待してくれてるんなら嬉しいや」

二年前、フットボール・チームに入った当初、二人のうちより注目されたのは四十ヤード走で高校最速の記録を出したレイフだった。実際その身体能力は、兄のクリスターでさえ凌いでいた。高校一年目で一軍レギュラー入りが即決されるほど、将来のエースとして期待を集めたレイフだったが、その後はなぜかあまり伸びず、気がつけばまたクリスターに追い抜かれていた。

だが、それもいつもの定位置に戻っただけで、別に悔しいとはレイフは思わなかった。

ずっとクリスターの一步後ろにいたレイフなのに、あの一時期だけ彼を追い抜いて、いきなり皆の視線を一身に集めてしまった。嬉しくないわけではなかったが、いつも見ていた背中が前にないことに、妙に落ち着かなかったものだ。

そう、あれは、たぶんまぐれだったのだ。クリスターが前にいて、その背中をレイフが追いかけている。この位置関係にある方がずっと楽で、何より安心できる。

そんなことを思い出してぼうつとしていたレイフだったが、取りともめなく流れていきそうな心を現在に引き戻すと、自分の様子をじっと窺っている兄に再び顔を向けた。

「そーいやーさ、クリスターにも一度聞いておきたかったんだけど、いいのかよ、ダニエルの奴」

この間から気になっていたことを、レイフはクリスターに切り出した。

「あいつさ、フットボール・チームのためにチェスまでやめたんだと。もちろん、クリスターは聞いてるよな」

「ああ…」

クリスターはちょっと微妙な顔になって、さり気なくレイフから視線を逸らした。

「はつきり言って、クリスターの責任だぜ。あいつがいきなりフットボールなんて言い出したの、絶対おまえの影響だもん」

「そうだね。でも、そうすると決めたのは彼の意味だよ。ダニエルはね、三ヶ月の夏休みの間にフットボールの理論だけは誰にも負けないほどに覚えこみ、ちゃんとトレーナーもやれるようジムでアルバイトしながらスポーツ医学まで勉強した。それだけでなく、今年僕らのライバルとなりそうなチームのデータを分析してまとめあげたものを手土産にフランクス・コーチに直談判に行ったんだ」

「うわ、そこまでやったか」

「選手になることは無理だけれど、ブレインとしてアシストさせてほしいと…初めはしぶっていたコーチも、ついには根負けして、僕に任せると言った。だから僕は、自分の能力でチームに貢献できると思うならやってみればいい、ただし、チームの空気を乱したり、皆の足手まといになるようならすぐにやめてもらおうとダニエルに言い渡した」

「厳しいね」

「当たり前だろ。誰でも自分の言葉と行動には責任を持つべきだ。大体フットボールなんてやったこともないダニエルが、僕とコーチを口説き落としていきなり主務になっても、皆に受け入れてもらうには一苦労しなくてはならないと思うよ」

「そこなだけどさ、オレが心配しているの。なあ、やっぱ、一応トライアウトくらい受けさせてみたら、あいつ？ うまくいったら、たとえ二軍でも選手として入れるかもしれないじゃん」

「それは：無理だな」

「なんで決め付けるんだよ」

言い切るクリスターに反発を覚えて、思わずレイフは食い下がった。

そんなレイフをクリスターはちらりと見やった。一瞬躊躇うかのようには沈黙し、それから口を開いた。

「ダニエルは脚が不自由なんだよ。小さい頃に車の事故にあったんだって。普通に生活する分には支障はないし、リハビリの成果で今では歩き方も自然になってよくよく見ていないと分からないけれどね。ただ速く走ったり跳んだりといった動作や、ましてやスポーツなんて：」

レイフは虚をつかれて、しばし絶句した。

「そ：そうなのか。知らなかったよ、オレ」

そんな話、レイフは初めて聞いた。ダニエルとはもう知り合って一年にもなるし、一緒に遊びに行ったことも何度かあるが、彼はそんな素振りは一度も見せなかった。

まあ、ダニエルにとっては、レイフなどあくまでクリスターの『おまけ』程度の存在なのだから、そんな個人的なことをいちいち打ち明けはしないだろうか。

「彼はプライドが高い上に負けず嫌いなんだよ。自分にハンデがあるなんて他人に知られて同情されるのが我慢できないんだ。子供の頃は運動ができないってよく苛められたらしい。でも、だからこそ、他の面で努力して周囲を見返してやろうとしてきた」

「そっか：結構苦勞してたんだな、あいつ」

レイフはしんみりと呟いた。

「あの年で初めから何かをあきらめなくてはならないなんて、僕らには想像できない辛さだろうね。ただダニエルは、そのせいで卑屈になるのではなく、自分にできることを見つけ出し他人の倍の努力してそれを伸ばした。そんな強さがある彼なら、今度のことも何とかうまくやれるんじゃないか。少なくとも夢を掴む機会は彼にも平

等に与えられるべきだと僕は思うんだ」

「う、うん…」

クリスターはダニエルに対しても他と変わらずクールな態度だが、実は結構気にかけている。一年前のチェス対決からして、そうだった。

（きつついともあるけど、あんなに可愛い子に夢中で慕ってもらえたら、そりゃ、クリスターだって悪い気しないだろうし、情だつて移るんだろうな）

ダニエルのクリスターを追う眼差しの真剣さを思い出して、レイフは胸の中が何やらもやもやとしてきた。

「他人に知られるのが我慢できないって…そんな深い話でも、あいつ、兄貴には打ち明けてんだ」

うっかり漏らした言葉が我ながらひがんでるように聞こえて、レイフは焦った。

「い、いや、その…だってさあ、ダニエルの奴、おまえをちよっと崇拜しすぎかなあって…。おまえが好きなことは自分も好きだなんて、きらきらした目で臆面もなく言っちゃうんだぜ。オレ、もう恥ずかしくって、どうしようって思っちゃったよ、はははっ」

「…僕のが好きなんだって、彼」

「は…」

下級生にやきもちを焼いてしまったやましさを笑ってごまかそうとしたレイフだが、クリスターがぼつりと漏らした一言にぐっと喉を詰まらせた。

しばし、気まずい沈黙が流れた。

「そ、それって…つまり…?」

レイフは激しい動揺をごまかすよう、小指の先で頬を引っかいた。「…うん…そういうこと」

クリスターはじつと黙り込んで膝の上で広げた手の平を意味もなく睨んでいる。そんな兄を、レイフは緊張のあまりときどきしなから見守った。

（うわ、もしかしたらって、そんな気は少ししてたけど、マジかよー）

恋愛経験皆無に等しい自分の直感など当てにならない、どうせ勘違いに決まっているとレイフはひたすら念じてきたのだが、どうやら大当たりだったようだ。

「ど、どうする気なんだよっ」

つい強い詰問調になって、レイフは兄を追及した。

「どうもしないよ」

クリスターはふっと溜息をついた。

「ダニエルの気持ちに応えるつもりはない」

「そ、そうなんだ。まあ：それでいいんじゃない：ほっときゃ、熱もいつか冷めるだろうし：」

レイフは密かに胸を撫で下ろしながら適当な返事をしたが、後が続かない。クリスターはそれ以上何も言わないし、テレビから流れる音声がなければ、耐え切れないほど気詰まりな雰囲気だったろう。『へえ、すげえな、クリスターって男子にまでもてじゃんっ』とか、『何かおかしなフェロモン出してんじゃないの』とか、馬鹿を言っつて、この場を適当に紛らわそうかとレイフは一瞬思った。しかし、この問題に下手に触れるとまずい方向に流れていってしまいうそで、怖くて、結局兄と同じように黙り込むしかなかった。

「：オレ、喉、渴いた。ジュース取ってくる」

「じゃあ、僕の分も頼むよ」

半ば逃げるようにキッチンへ向かいながら、レイフはもどかしさに歯噛みするような気分を味わっていた。

クリスターに対して本当に言いたいことも言えず、聞きたいことも聞けないなんてー。

（昔は、こんなじゃなかったのにな。どんな悩みも打ち明けられる相棒相手に遠慮することなんてなかった）

後にしたり빙그를ちらっと振り返り、レイフは溜息をついた。以前は存在しなかった見えない壁が、クリスターとレイフの間に、

今はある。

（分かってるさ、何もかも元通りになんてできるはずがない。いくらなかったことにして忘れようとしても、やっちまった事実を完全には消せない）

四年前に一度だけ、二人が犯した過ちは、決して蘇らせてはならない記憶として封印された。

初めは兄にどう接したらいいのか分からずこちなかったレイフだが、クリスターの方は見事に『何も変わっていない』ふりを演じ通した。かなり無理をしていたのだろうと今なら分かるが、クリスターよりずっと単純なレイフは兄に普通に話しかけられていると次第にそれを信じるようになり、いつの間にか二人はもとの鞘に納まっていた。

だが、それは、きつと錯覚に過ぎない。

こんなやり切れなさを覚えるたびに実感する。

むしかえしてはならない過去を想起させる言葉や態度は、暗黙にうちに、二人は慎重に避けてきた。

何だかそれが、越えてはならない見えない壁を築いて、その陰からお互いの本当の気持ちを探り合っているような、打ち解けられない雰囲気を作り出している。

（クリスターの気持ち分からない。ものすごく知りたいのに、あいつの心をこじ開けちゃうのが怖くて、できない）

キッチンの明かりをつけ、冷蔵庫の中を物色しながらも、レイフの想いは双子の兄に向けられていた。

クリスターは、あれ以来変わった。

何かに憑かれたように、スポーツだけでなく、勉強や他の分野にも手を広げ打ち込むようになった。もともと才能があったのだろう、特にチェスではめきめき力をつけ、異例の速さで頭角を現した彼は気の早いマスコミに天才少年などと騒がれるようになった。高校に進学してすぐに受けたSAT（大学入学資格試験）の数学ではパーフェクト・スコアを取り、高校に在籍しながらMITのコンピュー

ターのコースまで取ってしまう。興味のあることには何でも挑戦して自分の能力の限界を試しているかのような兄を、相変わらず運動一辺倒なレイフはぼかんと眺めているばかりだった。

クリスターに比べれば、レイフの世界はすごく狭いし、幼い。付き合っている人間の数もレベルも違う。クリスターが接する広い世界、そこで出会う人々、その中で一体レイフはどの位置にいるのだろうか。

（僕は、レイフが一番大切だから―父さんや母さんよりもだよ。僕がおまえを誰よりも愛しているってことを、覚えていてくれ）

あの時レイフを抱きしめながら真剣に囁いた少年は、今のクリスターとは別人のようだ。

クリスターは、もうレイフなど必要としていない。一時はレイフも本気でそう信じかけた。進学した学校に馴染めずにいた時期と重なったため、精神的に不安定となったレイフは親にも教師にも反抗し、危うくドロップアウトしかかった。

今思えば、あれは、片割れを見失い途方に暮れた心が発した悲鳴だったのだろう。

クリスターはどうしたか。レイフのSOSにちゃんと気づいて戻ってきた。それどころか―。

（ああ、そうさ、本当はオレだって分かってる。今でも―クリスターを本気にさせられるのは、オレだけだ）

ふと思いついて、レイフは屈折した優越感に、ほんの少し駆られた。

（ダニエルじゃ、たぶん無理なんだよ。あの素敵なジェシカさんだって駄目だ。ましてや、キャサリンみたいな何にも分かってない馬鹿な女なんて、クリスターはきつと鼻にも引っ掛けない）

それから、ふと自虐的な気分になって、ひとりごちた。

（オレがからめば、話は別だろうけどな。ハニーの時だって…オレが彼女に気のある素振りなんて見せなきゃ、クリスターは絶対つきあったりしなかったはずだから―）

ちくんと、錆びた釘を打ち込まれたかのように、心臓が痛んだ。
(あーあ、キャサリンと言いつつ合ったせいかな、ここんところ、やたらとハニーのこと思い出しちゃう)

その時、背中に視線を感じて、レイフはキッチンの扉を振り返った。ひやりとした。

クリスターがそこに立っていた。

「どうした、まるで幽霊でも見たような顔をして」

レイフははっと息を吸い込んだ。

「ジュースを取りに行くだけで、一体何分かかっているんだ、おまえは」

「ああ、うん…」

レイフは口ごもった。取り出したジュースをテーブルに置いたまま、ついぼんやりしてしまったようだ。

「ごめん、何だか腹が減ったから、食べれるものないかなあって探してて…」

ももごとレイフが言い訳している隙に、クリスターはキッチンに入ってくると、勝手知ったるもので、戸棚を開いてクッキーの箱やスナック菓子を取り出した。

「どこに何があるか、場所くらい覚えてたろうだ」

「クリスター、また母さんみたいなこと言ってる」

レイフは上目遣いに兄を見ながら口をすぼめた。

てきばきとトレイの上にジュースのボトルや菓子の袋を並べる兄をレイフはじっと窺っていた。

「僕に何か言いたいことがあるのか？」

「えっ…いや、その…」

クリスターがいきなり問いかけてくるのに、レイフは焦った。

先程まで頭の中でぐるぐると回っていた、口に出すのをはばかりるような屈折した想いをぶちまけられるほど、さすがにレイフはもう素直ではない。

「キ…キャサリン・コナーって知ってる…?」

勘のいい兄の追及の矛先をかわそうと、レイフは、思いつくままに彼女の名前を口にした。

クリスターは意外そうな顔でレイフを振り返った。

（私、クリスターが好きなの！）

レイフが辟易するほどの押しの強さで迫ってきた金髪の少女を思い起こしながら、結局彼女はとうしたかったのだろうと考えた。たぶん、レイフを手がかりに、クリスターに近づきたかったのだ。

「なあ？」

何も言わずにじっと自分を見据えているクリスターの視線に、レイフは次第に落ち着かなくなってきた。

「チアのか？」

レイフはこくんと頷いた。クリスターには心の裏側に隠した秘密まで全て見透かされそうな気がして、レイフは体の脇で握り締めていた手の内がじつとりと汗ばんでくるのを感じていた。

「知っているよ。あの『ブロンド』だろ」

クリスターは唇の端をほんの少し吊り上げて微笑んだ。

その微妙な表情と言葉のアクセントの置き方に、レイフはぞっとした。

（うわ、ダニエルの毒舌なんざ、こいつに比べたらまだ可愛いもんだっ）

クリスターはダニエルのようにあからさまに他人を馬鹿呼ばわりなどしない。微かに表される軽蔑や嫌悪は面と向かっていてもほとんど察しのいい人間でないと気づかないくらいだ。だが、腹の中では、冷酷なまでに他人の愚かさを見下している。

（ああ、知っているよ、あの馬鹿なブロンドだろう。選手を追い掛け回すために親に頼み込んで強引にチアになった恥知らずな女だ。おまえ、あんな女に引っかけたって、振り回されたのかい。まともに相手にするから、そうなるんだよ。全く、情けないな！）

今のクリスターのリアクションをレイフが意識すると、こんなところだろう。

（はっ、オレがキャサリンだったら、絶対泣いてるね。普通に振られた方がはるかにマシだぜ、この大魔王）

自分まで遠まわしに責められているような圧迫感を覚えて、レイフはへこみそうになる気持ちを奮い立たせようと、ドキドキいつてる心臓の辺りをそっと押さえた。

それにしても、ダニエルに対するような気遣いや優しさを時には見せるかと思えば、この情け容赦のない冷酷さだ。我が兄ながら、二重人格ではないだろうかと疑いたくなる。

「レイフ」

「な、何だよ」

腕を組んでじっと自分を凝視していたクリスターがおもむろに口を開くのに、レイフは反射的に身構えた。

「心理学的に分析するとね、レイフの気の弱さ、苦手だと思う他人について押し切られてしまうのは、心の底に実はその相手に対する好意が存在するからなんだよ」

「は、はい？」

クリスターの瞳が悪戯っぽく光るのに、レイフは、もしかしたらキャサリンなどという苛めかからかいの種をクリスターにうつかり提供した自分は、自ら墓穴を掘ったのかなという気がしてきた。

「だからね、この場合、おまえはキャサリンのことを少しいいなど思ったんだ。彼女に何て言われたか知らないけれど、気になる女の子に振り回されるのが実はちょっと気持ちよかったりなんかしたんだろ？」

「あ、ありえないっ、そんなことあるもんかつ。そ、そりゃ、黙ってりゃ可愛い子だと思っただし、胸とか脚とか綺麗だなあって一瞬見とれたかもしれないけど…」

「ふうん」

心なしかクリスターの目が冷たくなった。

「レイフって、あんなのがタイプだったんだ。それとも、本能に忠実なだけなのか」

「ど、どういう意味なんだよ」

「キャサリンが気になるなら、試しにつきあってみたらどうなんだい？」

「冗談、きついぜ」

「レイフが嫌なら、僕がつきあってみようか」

レイフの頭は、今度こそ真っ白になった。

「なななな、何で、そうなるんだよーっ！」

「どうせキャサリンは僕と付き合いたいと言ってきて、おまえは巻き込まただけだろう。それなら、僕が彼女をどうしようが、おまえは関係ないと思うけれど」

レイフの動転振りをからかうかのごとく、クリスターは片方の眉を軽くはね上げた。

「そ、そりゃ、その通りだけど：いや、待て、どうしておまえ、キャサリンが自分目当てでオレに絡んできたって分かるんだよ」

「ああ、やっぱり、そうだったんだ。おまえが言いにくそうにしていたから、ちょっとカマをかけてみたただけだったんだからね」

ものすごく冷静に言われて、レイフは返す言葉が見つからなかった。

「つ、付き合うって：まさか本気じゃないよな？ 大体キャサリンはクリスターの好きなタイプじゃ全然ないだろうっ」

「うん、そうだけど、たまには全く好みとは違うタイプ相手に冒険してみてもいいかなって気もする。ジェシカの教養溢れる話しぶりに、最近少し飽きてきたところだったから」

「だからっ！」

レイフは本気であった。弟をからかうにしても、性質が悪すぎる。

「おまえ、付き合ってる人がいるのに他の子に手を出すなんて：そういう二股って反則だぞっ。ジェシカさんにも悪いし、そんないい加減な気持ちで付き合わされるキャサリンだって可哀想じゃないかっ。オレ、そういうの、大嫌いだからなっ」

「黙れ。童貞」

「う」

「可哀想だなんて、それこそレイフの思い違いだよ。いつまでもそんな無邪気なこと言ってるから、キャサリンみたいな女にすぐにつけこまれるんだよ」

果敢にも兄に食ってかかったレイフだが、軽くなされてしまった。平然とジュースのボトルをあけて飲み始めるクリスターを睨みつけ、ぐっと握り締めた拳のやり場に困りながら、レイフはわなわなと震えていた。

「心配しないでいいよ、僕は二股なんてかけたりしない。ジェシカとは別れたから、先週…」

「えっ」

突然の告白に、レイフは目を瞬いた。

脳裏にジェシカの柔らかな声が蘇る。

（お兄さんを借りるわね）

綺麗な人だった。家の前や学校で、何度か会ったこともあった。

彼女と出かけるクリスターをなす術もなく見送りながら、一人取り残されたレイフは寂しくて―。

「わ、別れたって…マジかよ」

「うん」

どこか鋭利な刃物を思わせる、隙なく整ったクリスター横顔をレイフは戸惑いながら見つめた。

「なんでさ…だって、すごくいい人だったじゃないか…」

レイフはあえぐように囁いた。

「そうだね」

「オレ、全然気がつかなかった…。先週って彼女と映画見に行った時…？ クリスターって、いつもと様子が変わらなかったし、何も言わないし…」

レイフは黙り込んだ。クリスターの後ろにある食器棚のガラス戸に自分の顔が暗く映っている。それが、何だか嫌な笑いをうかべて

いるように見えて、たまらくなってレイフは顔を背けた。

いい人だったのにと言いながら、クリスターが恋人と別れたことを喜んでいる自分がいる。

「…なあ、大丈夫なのかよ、クリスターは…？」

レイフの気遣わしげな言葉に、クリスターはちよつと首を傾げて考え込んだ。

「ああ：やっぱりまだ少し：胸が痛むかな。でも、僕は大丈夫だよ」
レイフは何か言いたげに震わせた唇をぎゅっと噛み締めた。

「だからね、ちよつと気晴らしもしたい」

クリスターは、複雑な感情に瞳を揺らしているレイフに顔を向けて、穏やかに笑った。

レイフはじつと黙っていた。そう持ってこられると、レイフにはとめようがなかった。

「そんな不満そうな顔をするなよ、レイフ：僕がキャサリンに手を出すのがそんなに嫌？ それとも、逆なのかな…？」

クリスターは意味ありげに呟いたかと思うと、レイフの肩を掴んで引き寄せた。

クリスターの顔がすぐ傍まで迫ってくるのに、レイフは思わず息をとめた。

「ああ、そうだ、こうしよう」

クリスターははたと思いついたかのように頷いた。

「キャサリンに頼んで、彼女の友達をおまえに紹介してもらうんだ。何も僕一人で楽しもうなんて思わないよ。ね、一緒にデートするなら、おまえも不満はないだろう？」

「ええっ？」

レイフを捕まえたクリスターの腕に力がこもった。

「おまえが気に入るような子を探してもらおうよ。会ってみて、本当にいい子だったら―そのままものにしてしまえ」

瞬間、低い声で囁くクリスターの琥珀色の瞳の奥に暗い燐火が揺らめいたような気がした。

縫いとめられたかのように、レイフは身動きも、瞬き一つするこ
ともできなかった。

クリスターはそれきり口を閉ざし、レイフの顔をつくづく眺め
た。そして――

「がんばれよ」

呆然としているレイフの頭を軽く小突くと、クリスターは身を離
した

「何だか、今更テレビを見る気分じゃなくなったし、僕はもう二階
に上がるよ。読みかけの本があったから」

そう言い残すと、クリスターはキッチンから出て行った。

レイフはその場に凍りついたように立ち尽くしたまま、兄の背中
を凝然と見送った。クリスターが行ってしまっただけで、後、レイ
フはようやくフリーズ状態から解放された。

停止していた頭がのろろと動き出す。

（え？）

さっきクリスターは何と言いつたのか。

一緒にデート？ いい子だったら、ものにしてみえ？

（ええええええええええ？）

うっかりキャサリンの名前を持ち出したことが、一体どうしてそ
んな話に発展してしまったのか。兄に女の子をあてがってもらいな
どと、レイフはこれっぽっちも望んでいない。むしろ、やめて欲し
い。

一瞬クリスターを追いかけて行って、彼をとめようかとレイフは
本気で考えた。しかし、そんなことをすると一体今度はクリスター
に何と言われるか。きっとまた、この万年童貞の意気地なしとか、
体ばかりでかくなっておつむの中身は小学生のままだとか、鬼か悪
魔のように苛め抜かれるに決まっている。

（い、言わなきゃよかった……！）

自分が掘った墓穴はマリアナ海溝よりも深い――。レイフは途方に
暮れて、しばらくその場に立ち尽くしていた。

第1章 終わりの始まり(5)

「どうして、あの女がクリスターさんと一緒にいるんですかっ!」
フットボールの練習に出るなり血相を変えたダニエルにレイフが詰め寄られたのは、あれから僅か三日後のことだ。

怒り心頭のダニエルに手を引っ張られてレイフがクラブハウスの前までに引きずられていくと、なるほど、先にグラウンドで練習を始めていたクリスターの傍に例のキャサリンがいる。クリスターは自分のものという態度で馴れ馴れしげに話しかけている、その様子は、ダニエルでなくとも癪に障るものに違いない。

しかし、レイフはむしろクリスターの行動力の方に呆氣に取られていた。

(すげ、手え、早過ぎっ)

ああいうまねは、やはりレイフにはできない。

「あれ程あの馬鹿女をクリスターさんには近づけないでくださいって言ったのに!」

普段は割とクールなのに今は頭から湯気が出そうなほど怒っているダニエルの非難を半ば聞き流しながら、レイフは考え込んだ。

(キャサリンと付き合うって…初めは単なる思い付きか冗談かと思っただけれど、本気だったんだ。それじゃあ、やっぱ、オレにも誰か紹介してもらおうつもりなのかな…ううん…一緒にデートとかすのかな)

今でもあまり気は進まなかったが、こうなったらそろそろ自分も腹をくくらなきゃならないかなと、レイフは神妙な顔になった。

「どうして、よりによってキャサリンなんです。全然つりあわないのに」

まだ文句を言っているダニエルをレイフはちらっと見下ろし、軽くたしなめた。

「仕方ないだろ、クリスターが決めたことなんだぜ」

クリスターが決めたと言うとダニエルは黙り込むしかなかったようだ。さっと頬を赤らめてじっとグラウンドの方を睨みつけている、その目は気のせいかな少し涙ぐんでいるようだ。

（ああ、こっちも可哀想だよなー）

ダニエルのクリスターに対する気持ちを今は知っているだけに、レイフは痛々しいの半分、これであきらめて欲しいと願うの半分の複雑な気分だ。

「あ」

ふいに、ダニエルが何やら嬉しそうな声をあげた。

再びレイフがグラウンドを見やると、クリスターはキャサリンに練習の邪魔になるから出ていけと言っているらしい。キャサリンは不満そうな顔をしたが、クリスターが素っ気無く背中を向けるのに、ついにあきらめたように離れていった。

当然だ。クリスターは、例え恋人にでも、むやみやたらとべたべたされたり、ましてや何かに集中したい時にそれを妨げられたりすることを嫌う。クリスターは誰にも独占されない。誰にも心の中にまで踏み込ませない。そんな彼のやり方を理解することは、普通の女性には難しいのではないか。クリスターが今まで付き合った人は多いが、どの相手とも長続きしなかったのは、彼のそんな冷淡さに起因しているのかもしれない。

すぐすごと去っていくキャサリンを、レイフはそれ見たことかというような皮肉な思いで見送ってしまった。女の子相手に、これはちょっと意地悪だろうか。

だが今は、キャサリンがクリスターにかまってもらおうとしても無理だ。現在のクリスターの関心はフットボールにあって、恋にはない。

「レイフ」

気がつけば、クリスターがこちらに体を向けていた。

「何をしている。早く来い、おまえがいないと練習もやりにくい」
顎をしゃくって自分を誘うクリスターに、レイフはふっと笑った。

レイフにとって何が幸せかというと、こうしてクリスターに必要なとされる瞬間だ。フットボールと一緒にやっている時だけは、他の誰もいない自分だけがクリスターと対等の場所に立っていられる。

レイフは照れくさそうに鼻の頭を引っかくと、辛抱強く待ち受ける構えのクリスターに向かって声を張り上げた。

「ああ、悪っ。今、そっち行くから」

傍らのダニエルが投げかけてくる視線にこもる微かな羨望を味わいながら、レイフは兄のもとへ悠然と歩いていった。

（クリスターがキャサリンなんかと付き合う気になったのは、オレのせいだと思うのは、やっぱうぬぼれだよなあ）

今回は、ハニーの時のような複雑な事情があるわけではない。たぶん本当にクリスター自身も気分転換がしたかったのだろう。だが、一緒にデートというアイディアは、やはり今までともに女の子と付き合った試しのないレイフのためのものに違いない

レイフは相変わらず異性に対しては本当に不器用だった。

無論、関心がないわけではない。人並みに彼女くらい欲しい。もっとあからさまに言ってしまうと、女の子相手に初体験がしてみたい。

レイフだって十七才のエネルギーの有り余っている高校生なのだ。女の子とやりたいのかやりたくないのかと問われれば、ものすごい勢いでやりたい方に諸手を上げてしまうくらい、そっちにも興味深々だ。

（けど、そこまで兄貴のお膳立てでっていうのも、何だか抵抗があるよなあ。どうせオレはクリスターと違ってもてたためしなんかないけど、そんな同情されたかないや。大体兄貴の監視下でのデートや初体験なんて…どうよ…？）

そんな不満や不安を心の底に抱えながらも、レイフは結局クリス

ターの用意した据え膳をいただくことになりつつあった。

「ねえっ、急におとなしくなったのね、レイフ」

目の前のテレビの画面をぼんやりと眺めながら考えに沈みこんでいたレイフは、つまらなそうな声がいきなりかけられるのに、夢から覚めたように瞬きをした。

「あ、ごめん。ちよっと考え事してて…」

「ふうん。一体何考えてたのよ？」

テレビの前のゆったりとしたソファに一緒に座っていたミナ・ハミルトンは、従姉妹のキャサリンにどこか似た気の強そうな目を意地悪そうに細めて、レイフを覗き込んだ。

「た、大したことじゃないよ」

レイフは焦って、ミナからちよっと身を引いた。緊張を隠そうとテーブルからジュースのボトルを取り上げて飲む振りをした。

視線をさっと周囲に巡らせる。天井が高く、木材を多用した山小屋風のリビング。壁際には広い炉床を備えた本物の暖炉である。親の目を盗んだ、ガキどもの秘密のパーティーに使うにはもったいないような場所だ。

キャサリンの一家がスキーのシーズンによく訪れる山荘なのだろうだ。

この週末、レイフはクリスターに引っ張られるがまま女の子達を連れて郊外へドライブに出かけ、夜はここに泊まることになった。かねてから約束のダブルデートというわけだ。

キャサリンが親にどんな言い訳をしたのか知らない。大嘘つきのクリスターはフットボール・チームの仲間と泊りがけで作戦会議とか何とかもってもらい理由を父親に対して平然と言っていた。

「兄貴達、遅いよなあ、何やってんだろ」

レイフはそわそわと落ち着きなく長い脚を組み替えて、扉の方へ視線を投げかけた。

観戦していたフットボールのテレビ中継が終わったので、何か映画でも見ようとキャサリンと一緒に適当なビデオを探しに二階の部

屋に上がったクリスターだが、まだ帰ってこない。

「いいじゃない、放っておきなさいよ」

ミナがさばさばした口調で言うのを、レイフは不思議そうに振り返る。今回、レイフに紹介するためにキャサリンが声をかけた少女だ。キャサリンの従姉妹だけあって、顔立ちもよく似ている。キャサリンのような明るいブロンドではないが濃茶色の肩までの長さの髪は艶々して綺麗だ。

「キャサリンはあんたのお兄さんに夢中。二人きりになれるチャンスを今日はずっと窺っていたんだから：邪魔しちゃ駄目だよ、弟君」意味ありげに片目をつむってみせるミナに、レイフはきょとんと瞬きした。

「うわ、ほんとに鈍くて子供だね、あんた」

同じ年の女の子にあきれたような声を上げられて、レイフはむっとした。それから、いきなり、ミナのほめかしたことの意味が分かった。

「あ…」

「そういうこと。こら、駄目だよ、二人はそっとしておいてあげなきゃ」

とっさにソファから腰を上げかけるレイフをミナは大人びた態度でたしなめた。

「今うっかり二階に上がっていったら、気まずい思いをするだけだよ」

レイフは激しい焦燥感に一瞬駆られたものの、すぐにがっくりと肩を落として、再びソファに座りこんだ。

「やだな、何ショック受けてんのよ」

「ショックなんか受けてねーよ」

言い返すレイフの声は、しかし、弱々しい。

泊りがけでデートと聞いた段階で、こういう展開も覚悟していたはずだが、いざとなると戸惑う自分がレイフは情けなかった。

（ていうか、クリスターが誰かとやってる現場のすぐ近くにいるっ

て状況が：何だか落ちつかねえ……。どうせ、ジェシカさんとか今まで付き合ってた人達ともしっかりしてたんだろうけど、それはオレの知らない場所でのことだから、実感なんかなかったし……)

レイフはよほど思いつめた顔をしていたのだろう、ミナが氣遣わしげな声をかけてきた。

「ねえ、レイフ、本当に大丈夫？」

「何が、大丈夫、だよ？」

「うーん、違うのかな。あんまりがっかりしているから、もしかして、あんた、キャサリンに気があったのかなって心配したんだけど」

「そんなんじゃないよ」

「なら、よかった」

にこっとレイフに向かって笑いかけるミナは可愛かった。キャサリンに似ているが、あれほど女くさが鼻につかないし、性格もあつさりしているので、レイフにとっては打ち解けやすいタイプではある。

「あたし、キャサリンから男の子を紹介するって聞かされた時は、きつとまたあの娘に利用されるんじゃないかなって思ったよ。あたしを口実にして、自分の意中の相手と楽しむつもりなんだって。まあ、丁度退屈だったし、別にそれでもいいかって話に乗ったんだけどね」

ミナはレイフの手からテレビのリモコンを取り上げて、適当にチャンネルを変えながら、屈託なく言った。

「前に似たようなデートをした時は最悪で、あたし、途中でタクシィ呼んで逃げちゃったわ。キャサリンは自分のお目当ての男の子とべたべたすることしか考えないし、また、紹介された奴がとりあえずやることしか頭のないような馬鹿でさあ」

「ふ、ふうん：そりや大変だったよな」

自分も似たり寄ったりかもと後ろめたさに内心びくびくしながら、レイフは適当な相槌を打った。

「だから、あんた達双子を見た時は、キャサリンにしては随分上等

な男の子を捕まえてきたのねってびっくりした。はっきり言って、クリスターなんか、彼女にはもったいなさ過ぎると思ったよ」

レイフはとっさに深々と頷きそうになったが、それは失礼かと思ひ直した。

「そう思うんだったら、いっそ、あんたがキャサリンからクリスターを取ってやってもよかったんじゃないか。オレと一緒にいても、どうせつまんねーだろ」

またしても二階にいる二人を意識して、レイフはついこんなことを漏らしてしまった。

「あら」

ミナは意外そうに瞬きをした。

「へえ、レイフって、クリスターのことをすごく意識してるんだ。双子って、そういうものなの？」

ミナは興味津々レイフを追求しようとしたが、途中で気を変えたようだ。ふいに真顔になって、こんなことを言った。

「あのね、クリスターは確かに物凄く素敵だと思うわよ。顔もスタイルも抜群だし、すごく頭がいいんでしょね、とにかく話がうまいし、よく気がつくし、女の子に対するマナーも完璧よ。大体、まだ高校生なのにあんなに人を引きつけるオーラが出てる男の子って、見たことない」

「ほめちぎりじゃないか」

「でもね、あたしの正直な感想だけど、何だか完璧過ぎてとっつきにくいよ、彼。キャサリンはもう完全に舞い上がっているから気がつかないでしょうけれど…ねえ、クリスターは一体どうして彼女と付き合う気になったのかしら」

この娘、従姉妹と違って賢いなど、レイフは少しぎくりとした。

「クリスターは恋人と別れたばかりだから…誰かに慰めてもらいたい気持ちとか、あったんじゃないの…？」

「そうかなあ…あたしだったら、そんな時はしばらく一人でいたいと思うけど」

ミナはジュースを飲みながら、少し考え込んだ。それから、改めてレイフを振り返った。

「だからね、話をもとに戻すと、あたしは、レイフ、紹介されたのがあんたでよかったなあって思ってるのよ」

「えっ」

レイフの心臓が胸の奥で小さく飛び上がった。

「クリスターが相手だったら、たぶん、あたし、ここまで来てなかったんじゃないかな？」

ミナは悪戯っぽく笑って、軽く小首を傾げた。すると、ほっそりした綺麗な首が薄手のセーターの襟から覗いて、レイフはどきりとした。

「キャサリンは馬鹿よ。付き合ってみたら、あんたの方が絶対優しくて温かくて、クリスターよりもずっと好きになれるのに……うん、何変な顔してるのよ？」

「いや、そんなこと女の子から言われたの、たぶん初めてだから」

「あは、カリスマ兄貴のおかげで、随分割食ってたんだね」

ミナは動揺するレイフの肩に手をかけると、いきなり身を乗り出して、彼の唇に軽くキスをした。

不意打ちかよ。レイフは目を剥いた。

「ね、レイフ、あんたのこと好きになってもいいかな？」

ミナはソファの上に膝をついた格好で、レイフの顔に両手を当てて覗き込むようにしながら囁きかけてきた。

「オ、オレ……」

さすがにキャサリンの従姉妹だけあって、いざとなれば男の子に對しても積極的だ。レイフはごくりと喉を鳴らした。

「今まで付き合った男の子なんかめじゃないくらい、すごくゴージャスだよ、あんた」

ミナが腕を巻きつけてくるのにどう応えたらいいのか分からず、レイフは固まったままだった。

(うわっ、うわあっ、どうしようっ)

葛藤しているうちに、レイフはまたミナに唇を奪われた。

「兄貴にばかりおいしい思いをさせることなんかないよ、レイフ。あたし達はあたし達で楽しくやろう」

レイフは目を閉じた。またしても、クリスターが今キャサリン相手にどうしているのか、すぐく気になってきた。

クリスターも、こんなふうにキャサリンから迫られたのだろうか。それとも、クリスターから誘ったのだろうか。女の子からキスされたくらいでは、クリスターは動じまい。スカートから伸びたキャサリンの脚や白い胸元は綺麗だった。あの肌には、もう触ったのだろうか――。

「きゃっ」

レイフに軽々と持ち上げられ、そのまま広いソファに押さえつけられたミナは小さな悲鳴を発した。

（あいつは、女の子とどんなふうにするんだろう……？）

何だか頭の中があっとなってしまつて、レイフはほとんど衝動的にミナの体を抱きすくめ、何か問いかけようとする唇を口で塞ぎ、不器用な手を激しく上下する胸の上に置いてみた。馴染みのない柔らかな感触が返ってくるのにびっくりして手を引っ込めかけるが、その手をミナが押さえる。

「大丈夫、だよ」

レイフにこの手の経験のないことなどとっくに見抜いているのだろうが、ミナは別に気にした様子もなくレイフの髪に指を滑らせながら微笑んだ。

「焦らないで、いいから」

確かミナはレイフと同じ年のはずだが、今は何でも知っている大人のように感じられた。

少しだけ余裕を取り戻したレイフは、軽く頷くと、今度は大柄な自分の下でミナが苦しくないように気を配りながら、慎重に愛撫とかキスとか繰り返してみた。

何となく、ミナ相手なら、このままうまくやれそうな気がした。

思っていたよりもずっといい娘を紹介してもらえたと思う。可愛いし、明るいし、男の子とも経験済みで、レイフを引っ張れる積極性がある。初めての相手としては打ってつけた。

（そうだ、深く考えずに取り合えず経験しちまえばいい。そうすりゃ、クリスターに対する引け目も少しはなくなるかな…。別に不安に思うことなんかないんだ。確かに女の子とやるのは初めてだけど…人の肌に触れたり、触れられたりする感覚は知ってる、色々しているうちに自分がどんなふうになっていくのかも―）

そこまで考えて、レイフはざくりとした。

自分のものと違うもの、浅く速くなった二つの呼吸が絡み合った、あの時―。レイフが必死になってしがみつき自らを押し付けながら、狂ったように探った肌の感触はこれとは随分異なっていた。

とっさに、レイフは首に絡み付こうとする細い腕を振りほどいて、ミナの上から退いた。

「何よ…？」

ミナはいぶかしげにレイフを見上げた。

「ごめん」

レイフは息を乱しながら、しばし愕然とミナを見つめ、混乱した頭をかきむしった。

「ほんとに、ごめん、オレ…やっぱ駄目みたい」

ミナは溜息をついて、ソファから身を起こし、服や髪の乱れを直した。

「分かった。いいよ、無理しなくても。…他に好きな子、いるんだね？」

「う…」

それはそれで答えに窮する質問だったが、ミナがそれで納得するならと、レイフはためらいがちに頷いた。

「ずっとオレの片思いなんだけど…忘れなきゃならない相手なんだけど、まだあきらめられねえみたい…最悪だな…」

「仕方ないよ。レイフはまっすぐに自分の気持ちに正直だから、き

つと本当に好きな人とでない、こういうことはできないんだよ」
だとすれば、本当に最悪だ。

レイフはしばし所在なげにその場に立ち尽くした後、ぼつりと呟くように言った。

「オレ、外でちょっと頭冷やしてくるよ」

じわじわとこみ上げてくる自己嫌悪と自己憐憫を味わいながら、レイフは一人コテージの外に出て、手入れをされずに放置された芝の上をぼんやりと歩き回った。

十月も後半に差し掛かかり、また近くにスキー場もあるからにはこの辺りの標高は高いのだろう、日が暮れてからの冷え込みは激しい。吐く息は微かに白くなるくらいだったが、そのくらいの寒さが、今のレイフには丁度よかった。

コテージの周囲をぐるりと回りながら、レイフの目は二階に並ぶ部屋の窓を慎重に探していた。

（もしかしたら、あの部屋かな：クリスターがいるのは：？）

確信はなかったが、クリスターがキャサリンと一緒にいるかもしれないとあたりをつけた窓の下でレイフは足を止めた。

（ここで大声あげてやったら、あいつら、びっくりするかな？）

そんな嫌がらせを想像してみたが、あまりにも馬鹿馬鹿しいのでやめた。

（レイフ・オルソン。十七才。彼女いない暦十七年、か）

レイフはふっとシニカルに笑った。

（空しい）

しょんぼりと肩を落とし、窓に背を向けると、レイフは丁度傍にあった大きな樫の木に近づき、その下にぺたんと座りこんだ。

（ほんとに、オレ、一体何やってんだろ）

せっかくミナといい雰囲気になれたのに、結局何もできなかった。（いい娘だと思ったのに：どうして駄目だったんだろう？）

心の中で呟くと、答えを求めるかのごとく、レイフは途方に暮れた眼差しを目の前の窓の方へ投げかけた。

クリスターとキャサリンは今あそこにいるのだろうか。クリスターならきつと、レイフと違って最後までうまくやれたはずだ。

（クリスターは：キャサリンのあの盛り上がった胸をもみしだいたり、あのすらりと長い脚や：人目に触れないようなところまで触ったりしたのかな）

もしも願いが叶うならーとレイフは想像する。

（あの部屋に忍び込んで二人が一緒にいるところを覗き見できたら、いいのに。別に何もしやしないよ。ただそつと傍まで歩み寄って、クリスターがどんなふうにするのか見てみたい。邪魔しないようにじつと黙っているから：あの時にあいつがあげる声を聞いてみたい）

レイフは堪えきれずに吐息をついた。火を吹くように熱い。

（くっそー、ミナと中途半端なところでやめたせいかな、まだもやもやとおかしな気分が続いているぞ：）

レイフは目を伏せた。瞼が微かに痙攣する。

（うう、何か、すぐくやばくなってきた：どうしよう：）

固く閉ざした瞼の裏に、レイフはついつい、クリスターに組み敷かれているキャサリンを思い描いた。

（どうしてキャサリンと兄貴のセックスなんか考えて欲情してやがんの、オレ：おかしいな、もしかして本当にクリスターが言ったように、実は彼女に気があったとか：？ それともー）

うつすらと目を開け、レイフは苦笑する。

もしかしたら、後ろめたく思いながらもつい見てしまう熱夢の中で想い焦がれるのは、絡みあう二つの体のうちの別な方だろうか。柔らかでとらえどころのない女の体ではなく、触れれば押し返してくるみっしりとしなやかな筋肉の感触、レイフと同じほど強靱で、爆発的な力を秘めた、あの体だとしたらー。

（この病人！）

レイフはぐんと頭を反らせて、後ろにあった樹の幹に後頭部を思い切り打ち付けた。

目から星が散るほど強烈な痛さだったが、不埒な自分には当然の報いだと思った。

自己嫌悪のあまり泣きそうな気分になりながら、レイフが抱え込んだ膝の上に顔を伏せようとした時、彼の耳は土を踏む柔らかな足音を捕らえた。

反射的に、レイフは顔を上げた。

「こんな所で何をしているんだい？」

建物の角の辺りで足を止め、首を僅かに傾げるようにしてレイフに穏やかに尋ねる、背の高い影―。

「クリスターこそ」

自分の声は無様に震えていないか。たぶん、大丈夫だ。

「喉が渴いたから下のキッチンに下りてきて…リビングの前を通りかかった時にちよつと中を覗いてみたらおまえがいなかったから、探しに来た」

レイフが黙っていると、クリスターは建物の陰の中から現れ、こちらに近づいてきた。そのままレイフが座り込んでいる場所までやってきて、樹の幹に背中をもたせ掛けると、手に持っていたボトルに口をつけた。

「何、飲んでんの？」

「ただのレモネード」

「ビールとか、飲みたいな」

「未成年だろ」

「クリスターって、変なところで固いのな。女に関してはやりたい放題なのにさ。淫行はOKだけど飲酒は駄目って、どういうことよ？」

レイフは不満そうに唇を尖らせた。

「ミナとは…うまくいかなかったのか？」

レイフは顔を赤らめ、うつむいた。

「うん…」

もしかして追及されるだろうかとレイフは身を固くしたが、クリスターは少し考えこんだ後、意外にあっさりと言った。

「気にするな。たぶん、彼女とはあわなかったただけだろう。そのうち、誰か、おまえの気に入る子が見つかるさ」

レイフはおずおずと顔を上げて兄の様子を窺った。

ひんやりと冷たげな横顔からは、行為の名残は感じられない。

「その…キャサリンは…？」

クリスターは窓の方に顎をしゃくった。

「ぐっすり眠っているよ」

レイフはクリスターが示した窓に目を移した。

「ね、レイフ、気づいていた？ キャサリンの体毛って、もともとはミナと同じ濃茶色なんだよ。他の子達のように脱色して金髪にしていたんだね…本物のブロンドって、やっぱり少ないんだ。たぶん百人に一人くらいじゃないのかな」

診断を下す医者のような口調で、クリスターがさらりと言った。

ぼんやりと聞き流しそうになったレイフだが、途中で何かが引っかかって、眉間に深いしわを寄せた。

キャサリンの体毛が濃茶色って、そんなこと、どうやってあなた、確かめたの？

ようやく静まりかけた心臓が再びばくばくいだすのを聞いているレイフの頭の中では、一気に噴出した色んな想像やら妄想やらがものすごい勢いで駆け巡っていた。

「ミナが駄目だったなら、レイフ、こうしてみようか」

問題発言をぶちかましながらか、あくまでクリスターは平然と落ち着き払っていた。

「僕の代わりに、今度はおまえがああの部屋に行けよ」

レイフは戸惑いに揺れる瞳でキャサリンがいる部屋の窓を見上げ、問いかけるかのように兄を振り返った。

「僕のふりをして、彼女のベッドにもぐりこんで、そっと体に触ってみたらいい。そのうち彼女が気づいたら、きつと、またさせてくれるだろうと思うよ。服なんか脱いでしまったら、彼女に僕らの区別がつくものか。ああ、もちろんレイフは余計なことは何も言わず

にいた方がいいけれどね」

「ク、クリスター」

レイフは思わず上ずった声で兄を呼ぶ。その上から覆い被せるように、クリスターが強い口調で言った。

「そう、僕がやった女をおまえがやるんだ」

「なっ」

レイフは絶句した。

まるで自分がつい先程思い描いたみだらな願望を見透かされたかのように、瞬間、レイフの心臓は凍りついた。

（そう、クリスターが挿れていたところに、今度はおまえのを挿れちまえよ）

ガツンと殴られたような衝撃を覚えて、レイフはぐらぐらと揺れる頭を押さえた。束の間しんと冷えたと思われた体は火がついたように熱くて、熱くて―もう、どうしたらいいのか、分からない。

「冗談：きついで」

やっとの思いで、レイフは囁く。喉がからからになっていた。

ああとかううとか唸りながら、レイフは両手で頭をばりばりかきむしった。

「気が乗らないなら、いいよ」

クリスターの淡々とした声に、レイフはまた顔を上げる。

これほど弟を混乱させておきながら、拍子抜けするくらいにあっさりと言を撤回するなんて、本当にクリスターは何を考えているのだろう。

「：オレも喉乾いたっ」

レイフの物欲しげな顔にちらっと目を落とすと、クリスターは飲みかけのレモネードを差し出した。レイフはそれをひったくり、半分ほど一気に飲んだ。

「やるよ、それ」

恨めしそうに睨みつけているレイフを眺め、クリスターはうつすらと微笑んだ。

「まだそこにいるつもりか？ 風邪をひくぞ」

「オレの勝手だろ」

「なら、好きにすればいいよ」

薄情なほど素っ気無い態度で離れていくクリスターを、レイフは何か言いたげな目で追った。

「なあっ」

レイフが思い切って呼び止めると、クリスターは足を止めた。

レイフは、とっさに口ごもった。

「キャサリンのこと…大事にしてやれよ」

レイフの囁きにクリスターは一応耳を傾けていたが、結局何も答えず、振り返りもせず、再び歩き出した。

その広い背中が建物の陰に消えていくのを食い入るように見つめた後、レイフは肩で大きく息をついた。

ぎゅっと握り締めていたボトルに、レイフは気がついた。もう一口、飲んでみる。

クリスターから取り上げたレモネードは、切ないくらいに甘い。

まだかっかと火照っている頬にボトルを押し付けそつと目を閉じると、レイフは半ばほつとしたような半ばがっかりしたような気分で、ぽつりと呟いた。

「冷てーや…」

第2章 ミスター・パーフェクト(1)

十一月。フィリップス・アーバン高校フットボール・チーム『ブラック・ナイツ』は順調に試合に勝ち続けていた。もともとは進学校で、スポーツにはあまり強くないとされていたアーバン高校だが、ここ数年はスポーツ活動の強化に力を入れるようになっていた。昨年これまでに一度も出場したことのない州大会に出て、いきなり準決勝まで進んだ『ブラック・ナイツ』にかけられる期待は、今年は一層大きい。

特に注目もされず、訳が分からないまま勝ち進んでしまった昨年とは、選手の覚える期待感も、またプレッシャーも段違いだろう。(それでも、次の試合に勝てば地区代表か：)

勝ちを進める毎に騒がしくなってくる外野をわずらわしく思いながらも無視して、クリスタールはいつも冷静に状況に対応している。およそ熱狂とは程遠いクールな性格であり、チームの司令塔が浮き足立つ周囲に流されては他のメンバーを動揺させることになるからという計算もあった。

(何も大騒ぎするようなことじゃない、州プレーオフへの出場権を手にしたくらいで：。今年は一番上まで勝ちを獲りにいくチームならー)

実際勝利に慣れていないということが、自分達にとって一番のネックだとクリスタールは思う。皆が優勝を意識し始めた時からが、辛いだろう。昨年もそれで負けたようなものだ。

『うちのチームの要は、おまえとレイフを中心としたオフエンスだからな。攻撃的な作戦で、点を取りまくって、勝ちに行く。できれば、もう少しレイフにはこのこという時に気持ちの面での踏ん張りを示して欲しいが：おまえと違ってあいつはプレッシャーに弱いのか、時々妙に消極的になることがあるからな。ノリに乗ってる時はいいんだが、プレイに波がありすぎる。去年も準決勝戦に出た途端、固

くなって、本来のプレイができなかっただろう。今年こそは一戦ずつ実力出し切った試合をしろと、そこそこ、弟によく言い聞かせておけ』

先程の試合が終わった後、フランク・コーチから聞かされた言葉を思い出して、クリスターは口惜しげに唇を噛み締めた。

（今日の試合、勝ったはいいいけれど……レイフの奴め、手を抜いたな……！）

コーチと話し込んでいたために少し遅れてクリスターがロッカー・ルームに入った時には、レイフの姿はそこになかった。

試合終了直後クリスターと目が合った瞬間嫌な予感を覚えて、兄に捕まる前にどこかに逃走したのかもしれない。

（どうせ帰る時は車で一緒に帰るしかないんだし、逃げても同じなのね。まあ、いいさ、レイフ、家に帰ったら今夜はじっくり説教だぞ）

レイフ自身は手を抜いたという自覚はないのかもしれない。しかし、コーチが指摘するように、彼には、肝心な時に力を出し切れないうということがままあった。

（今年は一番上に立ってみたいと言ったのは、おまえのくせに……）

ことスポーツに関しては、レイフにはクリスターを上回る才能と実力がある。あれだけ恵まれた身体能を持つレイフが本気になって努力さえすれば、どんな望みも叶えられるだろう。だが、彼には、面倒なことや辛いことを避けたがるしようなもない性向があった。てっぺんに立てば気持ちいいだろうとその瞬間の夢は見ても、そこに至るまでに何をどうしなければならぬのかを考えない。

（レイフの馬鹿……本当ならおまえがエースになってもおかしくないのに……そう、いつまでも二番に甘んじることなどないんだ）

ロッカー・ルームにまだ残っていたチーム・メイトは、勝ち試合だったというのになぜか仏頂面で怒りのオーラを発しているクリスターに、声をかけようとしたがかけられず、ずんずん奥に入っていく彼を黙って見送っている。

自分のロッカーの前に着くと、クリスターは黙々とユニフォームやその下の鎧のような防具を外していった。そうするうちに次第に『戦闘モード』だった気持ちが切り替わっていく。

装備を解いてしまって、クリスターはほっと息をついた。体はまだ戦いの余韻を残して熱く火照っているが、心は既に冷めている。

ロッカーの前の細いベンチに置かれていたまっさらなタオルを取り上げて、ダニエルかなと自分を追いかけてチームに入った少年の顔をクリスターが思い浮かべた時、彼がいる場所の裏側のロッカー辺りから、今考えていた本人が誰かと言いたう声が聞こえてきた。

クリスターは眉を潜め、その声ができる方へ向かった。

ずらりと並んだロッカーの角の辺りで足を止め、クリスターが様子を窺うと、ラインをやっている大柄な選手の一人にダニエルが絡まれている。今までも時々彼をからかったり、苛めまではいかなかったが、軽く小突いたりすることのあった奴だ。

一瞬クリスターは間に入ってやめさせようと口を開きかけたが、気を変えた。

華奢で小柄なダニエルは、マッチョ信仰でもありそんな大柄なスポーツ選手達からすると苛めやからかいの対象になりやすい。しかし、それを承知で進んでチームに入ってきたダニエルなのだから、このくらい自分で切り抜けてもらわなくては困る。

そう突き放して考えたものの、いざとなれば助けに行くつもりでクリスターは眺めていた。しかし、すぐに、その必要はなさそうだと分かった。

実際、ダニエルは自分よりも頭二つ分くらい上背のある大男相手に毅然としたもので、揶揄されてもひるまずに軽く受け流し、堂々と渡り合っている。最後は、その選手の方が楽しそうな笑い声を上げて、ダニエルの肩を親しげに軽く叩いた。どうやら絡まれていると思ったのはクリスターの勘違いで、スキンシップのようなものだったらしい。

クリスターの唇にふと微笑がうかんだ。

「あ、クリスターさん？」

こちらを振り返ってクリスターの存在に気づいたダニエルが、びっくりしたような声を上げたかと思うと、慌てて駆け寄ってきた。

「ああ」

クリスターは自分のロッカーの方へ戻りかけた足を途中で止めた。

「見てたんですか？」

小声で囁くダニエルにクリスターは軽く頷いた。

「とめに入るべきだろうかと思っただが――」

クリスターが言いかけた言葉の先を、ダニエルが利発そうな目を輝かせて続けた。

「分かっています。あれくらい、ぼく一人の力で切り抜けないといけませんよね。下手にクリスターさんに頼ると特別扱いだとか変なふうに受け取られて、余計にチームの中で孤立することになってしまいます」

ダニエルのように察しのいい相手と話すのは楽だなど、クリスターは密かに思った。これが、キャサリンのような頭の回転がゆっくりな相手だと、こちらの考えを分かってもらえるまでいちいち細かいところまで説明しなければならぬので、次第に会話自体が面倒になってしまう。

「：ぼくは、何かおかしいことを言いましたか？」

クリスターが薄く微笑むのに、ダニエルは怪訝そうに問い返した。「いや：ここまでよくもったなと感心したんだよ。最初の頃は、皆に無視されたり邪魔者扱いされたりで、泣きそうになっていたこともあったのに、今ではちゃんとチームの一員として馴染んで：よくがんばったな」

クリスターには珍しい優しい言葉に、ダニエルははっと息を吸い込んだ。

「えっ：そ、そんな：誉めてもらうほどのことじゃないです：」

しどろもどろになるダニエルの色白の顔が、見る見るうちにウサギの耳のようなピンク色に染まっていく。さっきまでは普通に打ち

解けていたのに急に緊張したりして、一体どうしたのだろうとクリスターが不思議がっていると、ダニエルはクリスターを見上げる瞳を揺らせ、恥ずかしそうに顔を背けた。

（ああ…なるほどね）

どうやら、クリスターが上半身裸なのがまずかったらしい。優しい言葉をかけられたのと相まって、急にひどく意識してしまったのだろう。

クリスターはちょっと首を傾げると何となく落ちつかない腕をさすった。

（しかし―いちいち僕が何か言ったりしたりする度に、こんな反応をされては困るな。女の子を扱うより、ある意味気を使う…）

ダニエルには、告白された時点で、彼の気持ちには応えられないとはつきり告げている。それでも構わないから傍にいたいと訴えるダニエルをはねつけることもできたはずだが、クリスターはそうはしなかった。

素っ気無なくされるほど余計にむきになるダニエルの性格は、一年前のチェス対決の時からクリスターはよく知っている。今までどおり適当な距離を保って接するのが一番いいだろうという判断だ。

ダニエルの存在が全く気にならないといえば、しかし、嘘になる。小賢しくて生意気で、気になる相手に自分を認めてもらおうとつい無茶をしてしまう、彼を見ていると、クリスターは何となく中学生の時の自分を思い出した。結局、一生懸命な姿が痛々しくて、放っておけないということか。

だからこそ、クリスターはダニエルには手を出さない。彼には多分に憧れや尊敬を恋愛感情と混同している節がある。一時の感情にまかせておかしいことになって、思春期の熱が冷めた時に後悔させるのは可哀想だ。

（可哀想だなんて僕が思うのもおかしい話だが…今まで付き合った人相手に、そんな気遣いをしたことなど、たぶんなかった。キャサリンみたいのに、来るものは拒まず、簡単に関係を持って…結局長続

きせずに終わって…)

付き合い始めて僅かひと月で早くも別れる機会を窺っている、現在の『恋人』を思い出して、クリスターは密かに溜息をつく。初めから薄々分かっていたことだが、キャサリンとはどうしてもあわない。やることをやってしまってもう飽きたというのは、いくらなんでも薄情過ぎるだろうか。ひと月弱での破局とは、最短記録を達成しそうだ。

「あの…」

クリスターの憂鬱そうな顔色をどう読み取ったのだろうか、ダニエルが落ち着きを取り戻した声で話しかけてきた。

「クリスターさん、言ってもいいですか…？ キャサリンのことなんでしょう…」

クリスターは眉をひそめた。他人の迷惑などお構いなしにクラブハウスや練習中のグラウンドまで押しかけてくるキャサリンとは、ダニエルは頻繁に衝突していたのだ。

「彼女が、また何か迷惑でもかけたのか？」

「いえ、そんなことじゃないです。実は、彼女が、テニス部のエースと付き合い始めたって噂を聞いて…」

クリスターは一瞬虚を突かれ、それから用心深く聞き返した。

「でも、それは…ただの噂なんだね？」

「いいえ、噂だけを根拠にクリスターさんにこんな不愉快な話を聞かせるわけにはいかないから、ちゃんと調べたんです。放課後キャサリンをこっそりつけていって、テニス部の奴と一緒にいる現場を捕まえて白状させました」

「ふうん」

そこまでやったかと、クリスターはキャサリンの裏切りよりもダニエルの行動の方に気を引かれていた。

「あの女、許せません。クリスターさんと付き合っているくせに、別の男となんて、軽すぎる」

自分のことのように憤慨しているダニエルを面白そうに見下ろし

ながら、クリスターは、しかし、自分の胸には何の怒りも失望も湧き上がってはこないことに苦笑していた。

「たぶん、僕の態度がキャサリンにとっては冷たすぎたんだろう。僕は、今はどうしてもフットボールが恋より優先だし、一緒にいても次の試合のことを考えてしまう。恋人の関心を常に自分に引き付けておきたいキャサリンとは、そのせいでもめたこともあったよ。それがあって、ここしばらく会ってなかったんだけど、その間に、自分をもっとかまってくれそうな相手を見つけたわけだ」

正直言って、クリスターは肩の荷が下りたような気がしていた。これで余計な雑念のもとを排除できるというのは我ながら勝手すぎるが、本音なのだから仕方ない。

「すみません、クリスターさんに嫌な思いをさせてしまっただ」
「君が謝ることじゃないよ、ダニエル。むしろ、感謝したいくらいだ」

クリスターがもらった本音を理解するには、ダニエルはまだ純真すぎたかもしれない。

「え？」

「いや…」

当惑するダニエルの頭に手を置いて、クリスターはしばらく考え込んだ。それから、大きな目を見開いてじっと自分の言葉を待っている彼に、ゆっくりと言い聞かせた。

「ダニエル、僕を氣遣ってくれる君の気持ちは嬉しいよ。ただ、僕のためだからといって誰かを尾行するとか…そういう真似はもうやめてくれ。分かるだろう、そういう探偵か警察紛いの行為は、僕は『あれ』きりやめたんだから」

クリスターがほめかしたことに、ダニエルは神妙な顔で聞き入り、こくんと素直に頷いた。

クリスターは少しほっとした。

「ありがとう、ダニエル」

また少しダニエルの頬が赤らんだが、今度は收拾がつかなくなる

前にクリスタはさつと身を翻して、歩き出した。

背中を向けたまま、クリスタはダニエルに軽く手を振った。

「今度はもう少し考えて、付き合う相手を選ぶよ。正直、キャサリンのような女はもうこりごりだ」

どんな相手でもどうせ本気にはなれないだろうけれどと、クリスタは半ばあきらめたように、胸のうちに呟いていた。

（誰でもいい：熱烈な恋は無理でも、一緒にいたいと自然と思えるような相手が見つければ―初めは好きでなくても傍にいれば愛着がわいて、そのうちそれが愛情に変わるかもしれない。：全く、自分で考えて白けるくらい、そんなふうには他人を求める僕など想像もつかないな。演技なら、別だけれどね。つまり、僕の中にはもともとそんな感情はないということだろうか。外面だけは完璧に取り繕っているから周りにはちやほやするけれど：誰のことも愛せないなんて、案外僕は、人間としては欠陥品なのかもしれないな）

キャサリンに対する自分の冷たさに嫌気が差していたのだろうか、クリスタは何となくささくれ立った気分ですんなことを考えてみた。

自分のロッカーの前に戻ってきたクリスタは、ちらつと隣のロッカーを見やった。

（レイフ：）

きつかったクリスタの表情がふと緩んだ。

今も昔と変わらず手にかかる弟は、今、一体どこで何をしているのか。好きな遊びにばかりに熱中する子供のように、責任や面倒なことはみんなクリスタに押し付けて、自分にお鉢が回ってくると逃げてしまう―。

だが、そんないい加減な弟をうまく操縦して、その気にさせるのがクリスタは昔から上手だったのだ。

（僕が率先して何かをしようとすれば、おまえも負けじと追いかけてくる。途中で飽きて投げ出したことでも、僕がやめないでいると、しばらく後には戻ってきて一緒にしたがる。だから今年も、僕が何

がなんでも優勝するという姿勢を見せれば、俄然その気になるはずだ。仕様のない奴め、根っここのところが幼児期から成長していないんだから)

レイフが隠れそうな場所も大体把握している。もう少し時間を置いて、レイフがそろそろ戻りたい気分になった頃、ゆっくり探しに行こうとクリスターは思った。

その時レイフにかける言葉や、それに対する彼の反応を頭の中でシミュレーションしているうちに、いつの間にかクリスターは機嫌を直していた。

シャワーを浴びて帰り支度を整え、きっかり三十分後、そろそろ潮時だろうとクラブハウスを出て逃走中の弟を探しに出かけた時には、クリスターの頭の中からキャサリンの存在など綺麗にぬぐい去られていたのだ。

第2章 ミスター・パーフェクト(2)

「…今年もここまでやってくれるとは、私も非常に君達のことを誇りに思っているよ」

クリスターは、上機嫌で話し続ける校長の顔から視線を外し、彼の背後にある本棚の中に収められた分厚い本のフランス語のタイトルを読みながら、改めてその趣味の偏向ぶりを確認した。それから、部屋の右手にあるキャピネットの上にこれ見よがしに並べられた数々のトロフィーやメダルを眺めた。名の通った弁論大会や科学コンテスト、優秀な生徒が集まる私立校らしい文化系の名誉の記録だ。どうやら校長は、今年はまた別の種類の勲章がここに飾られることを熱望しているらしい。

「これもフランクス・コーチの手腕と君達の努力の賜物だろう。昨年に引き続き地区代表として州プレーオフに進めるとは夢のようだが、それで満足せず、是非今年こそは優勝を目指して欲しい。ここ数年、我が校はスポーツでも上位に食い込めるようにと莫大な投資もしてきた。まさか、その成果がこれ程早く出るとは思ってたが…君のような優秀な生徒が集まってくれたおかげだね、クリスター・オルソン君」

校長の猫なで声で名前を呼ばれると背中あたりにがむずむずしたが、クリスターはそんな不快感は全く見せず、優等生的態度で返した。

「フットボールはチームスポーツですから、一人や二人の選手の才能でどうなるものではないと思います。この学校に入って気づいたのは、設備やその他の面でのサポートがとても充実していることでした。とても公立校では望めないような、スポーツ選手には最高の環境ですね。その中で選手一人一人が力をつけていった結果が去年の試合に現われたのではないでしょうか」

クリスターは、隣に立っているがっしりした体格の男の方へ視線

を移した。

「僕としては、フランク・コーチからプロレベルの作戦や戦術を教えてもらえたことが、すごくプラスになったと思っています」

クリスターが微笑むのに、もとプロでカレッジの名門チームのコーチ等を経てきたセオドア・フランクは、こちらに話を振るなどでもいうかのごとく軽く眉を上げた。

「まあ、子供達を教える側としても、学校の全面的なバックアップがあるのはありがたいですな。何しろフットボールは資金のかかるスポーツですから。このようにプロでもよだれが出そうな設備を整えてくれる上、いい選手を本気で集めてくれる学校は、少なくとも北東部では、めったにありませんよ。これで結果を出さなければ、サギみたいなものでしょう。私から一つだけ注文をつけるとすれば、頼むからあまり騒ぎ立てないでくれということでしょうか。まだ十七、十八の少年達を大人の思惑で振りまわさないでいただきたい」

プロ時代から、早く結果を出せとうるさいオーナー相手の場数を多く踏んでいるせいか、フランクは堂々たる態度で、優勝の確約を欲しがっている校長に軽く釘を刺した。

コーチのこんな所は尊敬に値すると、クリスターは思う。だが、自分までまとめて子供扱いはして欲しくないなど、本格的なフットボールの戦術を授けてくれた恩師であっても、微かな反発を覚えた。

「いや、むしろ子供達に余計なプレッシャーを与えるつもりなどないよ、私は……ただ、まあ、激励というか、君達のような生徒こそ、学校の誇りだと伝えたくてね」

助けを求めるようにこちらに話しかけてくれる校長に、クリスターは微笑みながら頷いた。

「はい、分かっています」

しかし、腹の底では、この俗物め、こんなくだらない長話を聞かせるためにコーチや自分に貴重な練習時間を削らせてここまで呼び出したのかと軽蔑しきっていた。

優勝するつもりかと問われれば、迷わずそうだと答えてやる。だ

が、それは、この見栄っ張りな校長に、州大会優勝のトロフィーをくれてやるためではない。

「クリスター、君のことは…担任やカウンセラーからも聞いているよ」

クリスターの一見穏やかそうな態度に気を許したのだろう、校長は親しげに話を続けた。

「スポーツができるだけでなく、生徒会活動でもリーダーシップを発揮し、その忙しい生活の中でも成績は常にトップを維持しているそうだね。英才クラスの秀才達も、あまりにも完璧なクリスターには遠く及ばない…天は二物を与えないという話は嘘だったのかなと君を見ていると思うよ」

またもや背中がむずがゆくなるのを覚えたが、クリスターはポーカーフェイスの裏に感情を隠し続けた。

「カウンセラーは君に上の学年にスキップすることを勧めたそうだな。今でもまだ大学の入学願書は受け付けているし、君ならば、どんな名門大学からも引く手あまただろう。どうして、そうしないんだい？」

クリスターは少し顔をしかめた。この手の質問は苦手だ。

「そうですね…スキップや大学進学を考えたこともありますが…ただ、僕自身は別に急ぐ必要はない気もするんです。正直言って、将来どの分野に進むのかまだ決められなくて…。フットボールはカレッジでも続けたい気はします…弟と一緒に…でも—」

フランクス・コーチの視線がちらつと自分に向けられるのに、クリスターは黙り込んだ。

微かな焦燥感を覚えた、その時、クリスターは母親のヘレナの顔を思い出した。この問題については、以前彼女とも話し合ったことがあった。

「…僕の母は、スキップを重ねて十五才でMITに入学したんです。その母が言うには、自分の能力を活かせる場所を早い時期に見つけられた喜びはあったけれど、その代わりに同じ年頃の子達が普通の

学校生活で経験するはずの貴重な体験をもしかしたらふいにしてしまったのではないだろうか、後から残念に思ったそうです」

次第にもとの歯切れのよさを取り戻しながら、クリスターはぽかんと自分を眺めている校長を正面から見据えた。

「それを聞いたせいもあるのかもしれませんが、僕はやはり今の時期でしかないことを色々試したいんです。生徒会やフットボールもそうですし、他にもまだやりたいことがあります。それらを通じて、次第に自分の方向性が見えてくるのではないか、自分が本当にしたいことが分かってくるのではないかと期待しているんです」

クリスターは校長の自慢のトロフィーやメダルの上にもう一度さっと視線を投げかけた。それらの賞の幾つかは、クリスターも狙っているものだ。

クリスターの口元に挑戦的な笑みが閃いた。

「フットボールのシーズンが終わったら、次の目標を目指します。来年はウエスティングハウス科学コンテストに応募するつもりなので、年明けからはその準備に追われることになりそうです」

未来のノーベル賞科学者を発掘するバロメーターになると言われるコンテストの名前を挙げるクリスターを見上げる校長の眼差しには、賞賛を通り越して、この怪物はどこまでやる気かというような不安が漂い始めている。それもまた、クリスターは気に入らなかった。

（僕が手当たり次第に何に挑戦しようが、僕の勝手だろう。うまくいったら、あなたの部屋を飾る賞がまた一つ増えるわけだし、そんな奇妙なものを見るような目で見ないで欲しいな）

クリスターの苛立ちはピークに達していた。

この見栄坊のインテリ気取りの校長を椅子に縛り付けて、以前から聞いてみたかったのだが、フランス系ですらないアメリカ人のあなたが自分の子供達にフランス名をつけたのはどういう訳かと、白状するまで急に電流を流してやるといふ想像をしながら、クリスターはあくまで礼儀正しく付け加えた。

「つまり、高校生活は僕にとって猶予期間のようなものです。自分の将来をじっくり考えて、決めるための。だから、独創的なカリキュラムで生徒一人一人の才能を伸ばそうとしてくれる、この学校は僕にとっても好都合の、とても居心地がいい場所なんです」

クリスターの誉め言葉に、結構単純な校長は気をよくしたようだ。

「ふむ：なるほどね、進路を決めかねている生徒は大勢いるが、つまり君の場合、才能がありすぎて将来何をするのか選びかねているというわけだね。贅沢すぎる悩みだよ」

クリスターの答えをそう解釈して納得したらしい校長は、いきなりはたとまって、両手を軽く打った。

「おお、そう言えば、以前君と同じようなことを言った生徒がいたな。あの子も、君と同じほど優秀だったのに、将来何をしたいかという話になると黙り込んで：先に進みたいとは思わない、今の状態が自分には心地いいからと――だが、待てよ、あの少年は確か一年前――」

そこまで言って、自分が口へのぼらせた人物が正確にはどういう存在であったのかを思い出したらしい、校長は唐突に口をつぐんだ。

校長の迂闊さに、クリスターは一瞬天を仰ぎたい気持ちに駆られた。だが、下らない話をだらだらと聞かされるよりは、ずっといい。

実際クリスターは、ここに至ってやっと退屈なばかりだった校長が興味を引かれる話題を口にしたなと思っていた。

「ああ、それは彼のことですね」

居心地悪げに身じろぎをする校長は、できればこの話には即終止符を打ちたいのだろうが、クリスターはわざと続けた。

「ジェームズ・ブラックでしょう？」

瞬間、その名前が悪い運を運んでくる忌み詞であるかのように、校長は顔を強張らせた。

「あ：ああ、彼を知っているのかい？」

クリスターは猫のように目を細め、さらりと言った。

「ええ、少しだけ。英才クラスで一時期同じクラスを取っていたこ

とがあつたんです。特に親しかった訳ではないのですが……その後、彼が問題を起こして退学になったと聞いた時は驚いたものです」

傍らのフランス・コーチが軽く咳払いをした。ジェームズ・ブラックの名前は、彼にとっても禁句なのだろう。

クリスターも、それ以上追求するつもりはなかった。

「さあ、我々はそろそろ失礼させてもらいます、校長」

何となく気まずい空気が漂う中、フランス・コーチが言うのに、校長ははっとした顔をし、それからろのろと頷いた。彼はそれ以上クリスターを引きとめようとはしなかった。

「おまえは、なかなか鼻につく奴だな、クリスター」

「そうですね、僕もそう思います」

校長室を出たところで、クリスターはフランス・コーチに早速たしなめられた。

「でも、フランス・コーチだって、忙しいのに呼び出されて、あんな長話につき合わされて、辟易していたでしょう？」

「俺はどうしても我慢ならなくなったら、がつんと言ってやるさ。」

だが、おまえは、あのたまらん校長に対しても、表面上は礼儀正しく優等生的態度を取り続けた……内心はかなりイラついていただろうにな。全く、いつも取り澄ました顔ばかりしていないで、もう少し普通の十七才らしくできないものか。そんなふうに溜め込んでいると、いつか大爆発するぞ」

「適当に発散しているから、大丈夫です」

あつさり答えるクリスターにコーチはやれやれというように嘆息した。

「なあ、クリスター、さっき校長にも聞かれたことだが――おまえには、本当に将来の夢というものはないのか？　レイフと一緒に大学に進んでフットボールを続けたいというようなことを漏らしたが、それにも確信がない様子だったな。レイフの奴は、おまえと二人で将来はプロに行くんだと無邪気に吹聴しているが、おまえ自身はどう思っているんだ？」

クリスターは表情を覗き込もうとするコーチの目を慎重にかわしながら、彼と一緒にクラブハウスに向かって歩いていった。

「プロになんて：僕には分かりません。父親を見て知っていますからー好きだけではやっていけない世界であることも、様々なリスクを負うこともね。そこまで自分がフットボールを愛しているのか、突き詰めていくと自信がなくなってきました」

「ふむ」

校長に対するよりは幾分素直になって答えながら、クリスターは、果たしてこれは贅沢な悩みなのだろうかと考え込んでいた。

『何でもできる』クリスターは、では、その有り余る才能とやらを活かして将来何をしたいのかと問われれば、いつも途方に暮れて立ち尽くすしかなかった。

全てのことを器用にこなせるが、のめりこむほどに好きなものは何もない。一時チェスに打ち込んだのは自分の力を単に試したかったからだ。だが、頂上まで一気に上り詰め、今度は周りがプロになるのかと騒ぎ始めた頃には、これも違うという結論に達してしまった。結局クリスターにとって、チェスはそこまで大切なものではなかったのだ。

「単純な問いかけだぞ、クリスター、何も深く考えることなどないんだ。おまえは何を一番にやりたいんだ？ 何をしている時が一番楽しい？」

コーチにずばりと突っ込まれて、クリスターはあいまいに微笑んだ。

「だから、そういう特別なものが、僕の中には存在しないんです」
誰に聞かれても、クリスターにはそうとしか答えられない。実に情けない気分だった。

コーチはまだ納得し切れていないのか、次の質問を考えているようだ。クリスターは微かな焦燥感を覚え、唇を軽く噛み締めた。

「ただ、欲しいものなら：僕にもありますよ」

追い詰められたように、クリスターは言った。

「ほう？」

「でも、それは：絶対に望んではならないものなんです」

どこか寂しげにぼつりと漏らしたクリスターの横顔を、フランクス・コーチはじっと見つめている。

馬鹿なことを言ったなど、クリスターは密かに後悔した。

しばらく無言のまま歩き続け、校舎を出、クラブハウスが見えてきた辺りで、コーチはおもむろに口を開いた。

「なあ、クリスター……」

その時、クラブハウスに隣接するグラウンドの方角から、よく通る馬鹿に大きな声が降ってきた。

「ああっ、クリスターとコーチじゃん。遅っ。オレ達には遅れるなっっていうもうるさいくせに、2人してどこで油を売ってたんだよっ」
そちらを見て確認するまでもない、レイフだ。

フェンスの向こうでぶんぶん手を振っていたかと思うと、待ちきれずに金網に足を引っ掛けて軽々と飛び越え、着地するやこちらに向いて全速力で駆け出すレイフを、クリスターとコーチは呆氣に取られて眺めていた。

さすがは陸上の高校記録保持者、何か言い返そうと考えを巡らせる間に、もう目の前まで来ている。

「なあなあ、何の話してたの？」

尻尾を振ってまつわりついてくる懐っこいレトリバー犬のように、長い腕を伸ばして抱きつこうとするレイフをわずらわしげに押し返しながら、クリスターは困ったような、まんざらでもないような顔で言い返した。

「フェンスを飛び越えるのは危ないからやめろって：何回言ったら覚えるんだ、おまえは」

「言ったっけ？」

「言ったよ、このトリ頭」

悪びれもせず無邪気に笑っているレイフの頭を捕まえて、クリスターは拳をぐりぐり押し付けてやった。レイフが痛い痛い可悲鳴を

あげる。

「校長室に呼ばれて、激励されたんだよ。もしも大会に優勝したら、ご褒美に、レギュラー全員、ニースの別荘に連れて行ってくれるってさ」

「へえっ、すげえ…て、ニースって、どこだっけ？」

「フランスの有名な保養地だよ」

ピンとこなかったらしい、レイフは目をぐるっと回した。

「ふうん…あ、そういや、フランス人ってカエル食うんだってなあ」
恐ろしそうに首をすくめるレイフに、クリスターは軽く吹き出した。

「中国人もね。それより、フランスと聞いて、どうしてそんな発想しかできないんだよっ」

クリスターが逃げ回るレイフの脇腹をつついてやろうとすると、レイフはよりにもよってフランクス・コーチの背中に回りこんで、彼を盾にする。

身の丈百九十センチを越える高校生男子二人のじゃれあいに巻き込まれかけたコーチは顔を引きつらせ、ついには、おまえらしい加減にしろと雷を落とした。

「…大体おまえはな、いつも落ち着きがなさ過ぎるんだ。体格なら立派な大人だし、十七才にもなっているんだから、もう少し考えた行動を…えい、俺はさっきクリスターにはこれと正反対の説教をしたな。全く、おまえ達二人は足して二で割れば丁度いいんじゃないか？」

コーチの説教を聞きながらしょんぼりと頭を垂れて歩いていく弟を、少し離れた後ろからクリスターはじっと見守っていた。

（僕が欲しいもの。けれど、決して望んではならないもの―そして、どんなことをしても守りたい、唯一の絶対的な存在は…）

弟の背中に向けられた琥珀色の瞳の奥底に一瞬浮かんだ激しい感情を、クリスターは伏せた瞼の裏に封じ込めた。

（何を驚いた顔をしているんだ。僕がこんなまねをするのが意外か。僕を挑発したのは君じゃないか。僕の大切なものに手を出そうとした。）

だが、君の本当の狙いは僕なんだろう？

だからこそ、ここまで来てやった。

今更怖気づいたわけじゃないだろうな、僕にここまでさせておいて――。

さあ、ゲームを始めようか。君が勝つか僕が勝つか、命がけのゲームをしよう。そして、もしも僕が勝ったら――その時は弟を返してもらうよ、J・B）

食事が終わるとコーヒーマグカップを持ってリビングに移動し、しばらくテレビを見ながらくつろいで家族団欒するのが、オルソンの家の習慣だ。

レイフは、今日受けた進路指導のカウンセラーとの面接のことを、リース相手に熱心に話しこんでいる。

この二人、性格がそっくりなので、話があうのだ。

「そんでさ、オレ、将来はプロのフットボール選手になるって言っただよ。そのために、まずカレッジ・リーグの有名校に入りたいんだけどって：そしたら、オレならスポーツ推薦が取れるかもしれないけど、どうせ大学に行くのなら、他にも何か身につけることをまず考えろって。プロになれるかどうかなんて今から分らないんだからって」

レイフの言うことは小学生の時から変わっていないかと、テレビを見る振りをしながら、クリスターは思っていた。

「俺は、おまえならプロにだってなれると思うぞ。怪我にだけ気を

つけるならな。大学は、おまえの好きな所に進むといい。推薦が取れるなら、それに越したことはないが、なあに父さんが協力してやるとも」

自分の見果てなかった夢を息子達に託しているラーズは、頼もしげに胸を叩いて、受け合った。ビールを飲みすぎて、気が大きくなっているせいもあるだろう。

その手にコーヒーマグのマグではなくウイスキーのグラスが握られているのに、クリスターはちょっと眉を顰めた。この頃でっぴりと太ってきたラーズは血圧も高く、医者からは酒量を減らすよう言われているが、一向に聞き入れる気配はない。

（自分で自分を律せないなんてね、父さん：あなたは人はいいいけれど、所詮それだけだね）

何となく二人の会話に混じりたくないクリスターは、ちらっと母の方を見やった。

形のいい唇に微かな笑みをうかべてレイフとラーズを眺めているヘレナは、夫と違って全く老け込んでいない。副社長としてラーズの会社を取り仕切るようになり外に出る機会が増えた今は、一層若々しく美しくなったような気さえする。

どうしてヘレナがラーズと結婚する気になったのか、クリスターは時々疑問に思っていた。

「なあ、クリスター」

突然レイフが話を振ってくるのに、クリスターは幾分戸惑いながらそちらに顔を向けた。

「おまえ、どこの大学がいいと思う？　フットボールの盛んな学校って色々あるけどさあ…」

「ああ、うん…」

クリスターは口ごもった。

「おまえもオレと一緒にやるんだよな、カレッジ・リーグ？」

レイフは逃がすまいというようにまっすぐにクリスターの目を見据えながら、追求する。

「レイフ、僕達はまだ十一年生なんだよ。進路を決めるのなんて、一年先のことじゃないか。そりゃ、気の早い奴は大学の下見に行ったりしているけれどどこに行くのか、じっくり考えて、決めればいい。少なくとも僕は今すぐには決められないよ」

「ちえっ、逃げやがって、ずるいなっ。クリスターは欲張りすぎるんだよ。選択肢を多くしすぎて、自分で自分がどうしたいのか、訳が分からなくなってんだ。オレなんか、ずっとフットボール一筋なのにさ」

その場限りの言い逃れのようなクリスターの返事に、レイフは不平をもらしながら、クリスターの脚をつま先で軽く蹴ってきた。

「レイフ、僕だって―」

おまえとずっと一緒にいたい―言いかけて、クリスターは口をつぐむ。

「ごめん、僕はまだ色々迷っているんだ」

「迷うことなんか、ないだろ」

駄々っ子のような口調で言うレイフの瞳には、しかし、本気の色がある。

（オレから離れていくなよ、クリスター。子供の頃からの約束じゃないか、一緒にプロになろうって）

そんなレイフの顔から目を離すことができず、クリスターは気持ちがぐらぐらと揺れ動き、弟が求める方へ傾きそうになるのを覚えた。すると―。

「：レイフ、あまりクリスターを困らせるものじゃないの。それに、あなたはまず今もう少しちゃんと勉強して、卒業に必要な単位を取れるようにしなくてはね」

柔らかな口調でレイフをたしなめたのは、ヘレナだ。レイフはぎやふんと叫んで、ソファの背もたれに倒れこんだ。

「それは言わないでくれよ、母さんっ。ううう、シーズン終わったら、そっちもがんばるからさ」

クリスターは密かに胸を撫で下ろしながら、助け舟を出したくれ

た母に向かって感謝の眼差しを送った。

（そう、僕だってレイフの言うように二人でこの先もフットボールを続けたい気持ちは確かにある）

レイフと一緒にずっと同じ一つの夢を追えたら、クリスターはきっと幸せだろう。だが、いつまでも互いに依存しあう関係にとどまっただけではないとも思う。自分の足だけで立って生きていけるようにならなくては、一人前の人間とは言えない。そう思うから、ずっと、クリスターは努力してきたのだ。

他に夢中になって打ちこめるものを探した。多くの女性と付き合いってきたのも、本気で愛せる人がそのうち現れるのではないかと少しは期待したからだ。

今のところ無駄な努力ばかりで、クリスターの胸には諦めにも似た空虚さが広がるばかりだったが、レイフのためにも、やめるわけにはいかなかった。

レイフはこの頃クリスターが冷たくなったと思っていたかもしれないが、そうではない。いい加減兄離れした方がいいと思うから、クリスターはわざと突き放すのだ。

（おまえだって…大学に行ってフットボールを続けたいなら、僕を意識せず、自分に一番あった所を自分で決めればいい。僕は、おまえが何と言おうが、きっとそうするよ。恋人だって、見つける。だから、レイフ、おまえも…誰か他の人を好きになって、その人をまづ大事にすることを考えるんだ。そうやって少しずつ、お互いから離れていこう…）

考えていくうちに、クリスターは次第に胸苦しさを覚え始め、感情をセーブしようと膝に置いた手をぎゅっと握り締めた。

結局、そんな考えをレイフに言い聞かせることなど、クリスターはこれまで一度もできないでいたのだ。

（片割れから離れたくない、離れられないのは―僕の方だ）

クリスターは手の内のマグカップの中のコーヒーを覗き込んだまま、思わず唇が震えそうになるのを歯を食いしばって堪えた。

(苦しい…)

クリスターにとって、自分をコントロールしようとすることはほとんど癖になっていた。だが、レイフが関わってくるとどうにも気持ち揺らいで、うまくいかない。

気分を変えようと、クリスターが何気なくテレビを見やると、ラーズがこのところはまっているミステリーもののドラマのクライマックスだった。

緊迫した音楽が流れる中、主人公が銃を自分のこめかみに当てて引き金を引く。幸い弾は出ない。そうして、同じ銃を敵役の男に手渡す。男は震える手で銃を自分の頭に当て―。

クリスターは我知らず息を飲んだ。

(ロシアン・ルーレットか)

嚴重に封印した扉の内側で殺したはずの怪物が息を吹き返して起き上がる、そんな気配に脅かされて、クリスターはすっと目を細めた。

生々しい既視感に捕らわれながら、クリスターはラーズの部屋に保管されている拳銃を思い出した。

あれは、まだあそこに置かれているのだろうか。もう何年も昔、物取りか変質者が家に進入しようとしたことがあって、物騒だからとラーズが購入したものだ。幸い、一度も彼がそれを使うことはなかった。もしかしたら、存在すらもう忘れているかもしれない。

だが、クリスターは、それがどこにあるかは無論、どうやって使うのかも知っている。

忘れもしない、一年前のあの夜、クリスターはラーズの部屋から密かにあの銃を持ち出した。

(今でも覚えている、あれを手を持った時の重みだとか、グリップを握り締めた感触：堅い銃口を頭に押し付けて引き金を引く瞬間の肌がビリビリするような緊張感も―)

危険な気配を孕んだ追憶に捕まりそうになったクリスターを、レイフの動転した声が今に引き戻した。

「こんな番組、つまらねえっ」

突然テレビのチャンネルを変えられて、ラーズが怒った声をあげた。

「こら、何するんだ、レイフ。せっかくいいところだったのに」

無言のままテレビから顔を背けているレイフからリモコンを取り上げると、ラーズはぶつぶつ言いながらもそのチャンネルに戻した。クリスターがじっと押し黙って見守っていると、レイフが固い表情のままこちら振り返った。どうやら、このドラマの一場面からレイフもクリスターと同じ記憶を蘇らせたらしい。

クリスターは不安そうに瞳を揺らしているレイフに向かって、ふっと笑いかけた。

（馬鹿だね、何を怖がっているんだ。終わったことをいつまでも引きずるなよ）

レイフの頬が僅かに紅潮する。

（ああ、分かっている。でも、おまえにとっては終わったことでも、オレは忘れられない。もしも、おまえがあれで命を落としていたら、オレは一生自分を許せなかったろう。いいか、たとえオレのためでも、もう二度とあんなまねすんなよ）

視線を絡ませながら、クリスターとレイフは自分達だけに分かる秘密の言葉をかわし合った。

（もちろん、あんなことはもう二度としないよ）

レイフを安心させるために頷き返すと、クリスターは何食わぬ顔で再びテレビの画面に視線を戻した。

（あんなこと、か…）

レイフがクリスターをなじるのも無理はない。

銃などと物騒なものまで持ち出して。本当に命を捨てるつもりだった訳ではないが、失敗すれば死んでいた可能性もないわけではない。

例えどんな理由があっても、普通はあそこまでやらないだろう。だが、クリスターにはやれてしまった。

（それに、運悪くあれで死んでいたとしても、僕は別に後悔しなかっただろうな。その程度の運しか持てないなら、この先もどうせ大した人生は送れないだろう：レイフのことだけは気になるけどー）
生きること自体にあまり執着がないのだろうか、クリスターは冷静に自己分析を試みる。

今の状況に取り立てて不満があるわけでもないし、壁にぶつかっている訳でも、挫折したわけでもない。順調すぎるくらいの高校生活を送っているながら、そんなものは別にいつ失っても構わないような気がする。いっそ、その方がすっきりするかもしれない。我ながらあまりまっとうな精神状態ではないなど、これも他人事のように突き放した気分で眺めるのみだ。

（何が、『あまりにも完璧なクリスター』だ。僕よりも劣ると、あの浅薄な校長が評した連中の方がずっと健全でまともな中身を持っているに違いない。全く、現実とのギャップに吐き気がしそうなほどだ）

今日校長室で聞かされた話を思い起こしながら、クリスターは胸の奥で苦々しく吐き捨てた。

（何も知らない連中は、外面だけの僕を見て、完璧だとか、才能がありすぎて困っているだなんて勝手なことをほざくけれど、実際僕の心は空っぽで、世のため人のため、あるいは自分のためでさえも、何かを生み出すそうとする意思などない……。欲しいものならあるよ、でも、二度と手に入れたはならないとあきらめたから：行き場のない想いをもてあまししながら、おもしろくもない日々を、自分を殺しながらただ生きているんだ）

ふいに激しい苛立ちがこみ上げ、無性に全てを破壊し尽くしたいような衝動を覚えたが、クリスターは、いつものように、実に見事に抑制した。

クリスターはおもむろにソファから立ち上がると、大学で受けている心理学のレポートを書きたいから自分の部屋に戻ると言って、リビングを出て行った。

レイフは一瞬クリスターを追いかけてもっと追求したような顔をしたが、ラーズが話しかけるのに気を引かれ、結局ついてこなかった。

クリスターはリビングのドアを閉じたところで、しばし佇んだ。ちらと後ろを振り返った。

（でもーこんな僕にも、どんなことをしても守りたいものはある）
一年前に巻き込まれたあの事件を通じて、クリスターは、どんな悪意にも勝る、己の凄まじい執念を自覚した。

（僕がしたことは今でもレイフを不安がらせている。確かに、僕は少しやりすぎたのかもしれない、でも、何も間違ったことはしていないよ。レイフは、あんなふうに気に病まなくていいんだ。僕は当然のことをしたまでで、後悔など微塵も感じてはいない、それどころかー）

クリスターはリビングの扉を凝然と眺めた。父親と話しているらしい、レイフの声が聞こえてくる。

物思いに暗く沈んだ表情を和らげると、クリスターはふいつと視線を逸らして、歩き出した。

（レイフ、おまえを手に入れようとは、僕はもう考えない。ただ、おまえの幸福と安全を守るために僕は存在していると…心の中で思うくらいは、構わないだろう？）

そう自分に言い聞かせなければ、今のクリスターにとって、日々を生きることはいかに空しいからー。

第2章 ミスター・パーフェクト(3)

その日の授業が終わって、クリスターが教室から出て行くと、廊下で1人のひよろりと背の高い生徒が彼を待ちかまえていた。

「よっ、待ってたぜ、ミスター・パーフェクト」

クリスターは不機嫌そうに唇を歪めた。

「そんなふざけた呼び方をするなら、僕は君の取材なんか二度と受け付けないよ、アイザック」

「何だよ、相変わらず愛想がないな」

銀縁の眼鏡を指で押し上げながら素早く近づいてくる少年を、クリスターは苦笑混じりに見守っていた。

新聞部の部長アイザック・ストーンは、愛嬌がありながら抜け目のない黒い目を輝かせて、クリスターの肩を軽く叩く。

「呼び方なんか、おまえの好きなようにいくらでも変えてやるさ。」

とにかく取材だけはさせてもらうからな、そういう約束だろう?」

「フットボール・チームについて正確なところを書きたいなら、フランク・コーチの取材だけで充分だと思うけれどね」

「いいや、真実なだけじゃ、欲張りな読者は満足しないのさ。やっぱり紙面に輝きを持たせるヒーローがいなきゃ、寂しいだろ。おまえのインタビューと写真の一枚も載せりゃ、うけが違うんだよな。」

ジャーナリスト志望としては、大衆が何を求めているか常に計算しつつ取材をする必要があるのさ」

「ジャーナリストというよりも、君のその考え方では芸能記者とかパパラッチとか、むしろそっち系統のような気がするんだけれど」

調子のいいアイザックの答えに首を傾げながらも、クリスターは彼に引っ張られるがまま新聞部の部室までやってきた。

「今日はおまえをインタビューするからって、他の部員はわざわざ追い出したんだぜ。他人が大勢いる所では、おまえはなかなか本音を話さないからな」

誰もいないことを確認するかのように部室の外を窺った後、アイザックはドアを閉じて、クリスターが待ち受けているテーブルに戻ってきた。

「懐かしいだろ、この部屋も。一年前は、おまえはここにしょっちゅう入り浸って、まるで自分の司令室のように使っていたものな。あの頃は、まだ卒業前だったコリンやミシエルがいて…後は俺とおまえ、それから、あの可愛いダニエルもいたっけな」

「ああ」

「ダニエルの奴は、相変わらずおまえにべったりのようだな。おまえが新聞部に顔を出さなくなって以来、あいつもここに寄り付こうとはしない。冒険を共にした仲間にしちゃ、ちよいと薄情じゃないか？」

インスタントのコーヒーのカップをクリスターに勧めながら、アイザックは軽くなじるような口調で言った。

「あの事件を通じてのみ、僕達は仲間だったんだよ。これが終わったら何食わぬ顔をして普通の学生生活に戻ろう、そのためにもお互い距離を置くようにしようと、ここで皆が最後に集まった時に約束したはずだ」

「ダニエルは、いいのかよ」

「彼は、あの事件が起こる前から僕と親しかったからね。一緒にいても、別に不自然じゃないだろう？」

アイザックは頭をかいて何やら考え込んだかと思うと、ふいにクリスターの方に身を乗り出してきて、こっそり秘密を打ち明けるような低い声で囁きかけた。

「正直言うとき、あの事件の真相を記事にできなかったことが、俺は今でも心残りなんだよ。結局部長のコリンがやめようって決めたのに不承不承俺も従った訳だけど―事実を知りながら黙っているのはジャーナリスト魂に反するとか、腰抜けみたいで嫌だとか」

「おや、何を言うんだよ。勇敢な新聞部のすっぱぬいたスクープが、

あの頃事件をちゃんと調べることになり、及び腰だった学校を動かしたんじゃないか。充分に立派だったよ、君達は」

クリスターが片目をつむって揶揄するように言うのに、アイザックは肩をすくめた。

「ふん、あんなの真相のごく上っ面だけじゃないか。本当はもっと根っこの深い事件だったんだ。決して単なる不良グループが起こした暴行や恐喝事件じゃない：将来有望な学生が集まるエリート校だから、汚点となるような問題は隠したいって校長らの姿勢も気に食わないしさ」

「アイザック、そのことは今更蒸し返すなよ。もし、どうしてもあれについて書きたいなら：そうだな、もっと月日が経ってから、あくまでフィクションとして脚色して本でも書いたらどうだ」

「だから：俺は小説家じゃなくて真実を究明するジャーナリスト希望だっつうの。ううん、確かに今事実を書くのはまずいとは分かってるよ。俺達も危うく警察の世話になりそうな危ない橋を渡ったからね…。今考えたら、よくあんなことやっただって、我ながら感心するよ。あの頃の自分の勇気を誉めてやりたいくらいさ。でも、俺達が立ち上がってなきゃ、今でも『奴』はこの学校にいて、何の罪もない連中が苦しめられていたかもしれないんだ。なあ、考えてみたら、俺達ってヒーローだよな」

「ヒーローなら尚更余計なこととは何も言わずに、黙っているべきだよ」

「ああ、そうかい。生憎俺はおまえほど潔くはなくなっただ。ふん、おまえは本当に大した役者だよ、クリスター。そんな穏やかな顔をしてさ、恐くて誰も手を出せなかった奴に挑んで、追い詰めて：本当にここから叩き出しちゃった。おまえがいなきゃ、俺達は何もできなかった。奴が諸悪の根源だったことは薄々知っていても、どうすれば追い出せるかなんて分からなかったし、自分らにそれができるなんて夢にも思わなかった」

「僕だって、一人じゃ、何もできなかったさ」

「そうかなあ：俺達は所詮雑魚みたいなもので、結局あれはおまえとJ・Bの一騎打ちだったような気がするけどな」

アイザックが口にした、ある人物の呼び名にクリスターは眉をひそめ、声を低めて忠告した。

「アイザック：学校内で彼の名前をうかつに口に出さない方がいい。終わったと言っても、まだ1年しか経っていないんだ。J・Bはいなくなっても、かつて彼の配下となっていた連中はまだ学校に残っている。頭がなくなったからおとなしくしているだけだよ。それに、彼の被害者になった生徒ならもっと大勢いるだろう：これ以上傷つきたくなくて、名乗り出ていない子達はきっと多いと思うよ。真実を知らせたいと思うのは君の勝手だが、それによって傷つく者達がいることを忘れるな。ジャーナリストの責任だろう」

すると、アイザックは神妙な顔になって、しばし黙り込んだ。

「被害者か：そういや、クリスター、おまえが付き合ってたハニー・ヘンダーソンも確か：奴のせいで――」

「ああ」

クリスターは、探るようなアイザックの視線をさり気なくかわして、頷いた。

「すまないな、おまえって、あまりそういう自分の事情って話さないから、うっかり忘れてしまう。その：確か彼女って、精神的に参ってしまって、学校やめたんだよな。今どうしているか、分かっているのか？」

「病院に入ってちゃんとした治療を受けるという知らせは、ハニーが実家に戻ってすぐに彼女の親からもらったよ。けれど、それきり連絡は途絶えてしまったから、今頃どうしているかは知らない。これ以上立ち入ることは、僕にもできないからね」

「そうか：」

何となく気詰まりな沈黙が部室に流れた。

クリスターは改めて、部屋の中をぐるりと見渡した。本棚の中に収められたファイルや雑誌の数々。乱雑な机の上のコンピューター

やレコーダーにカメラ。あの頃とあまり変わっていないようだ。ここで、クリスターを含めた五人の学生が放課後集まって、秘密の作戦を進めていた。その内の二人は卒業し、残りの者達は、何もなかったふりをして平和な学校生活に戻っている。

だが、単純に昔のことと懐かしむには、まだ記憶は生々しく、思ひ出す度、今でも反射的に緊張が背筋に走った。

(J・B：ジェームズ・ブラックか：)

テーブルの上に置いた手を、クリスターは無意識のうちに握り締めた。

「なあ、クリスター、おまえが俺に用心しろ、慎重に行動しろなんて言うのはさ：もしかして、今でも警戒しているのかよ、奴のこと：？」

クリスターは我に返ったように瞬きをした。

「ああ、そうかもしれないね」

「どうしてさ、だって、奴はもう退学になったんだ。二度と戻ってこないだろう」

「学校には戻れないだろうけれど、自由の身にはいつかなるだろう。別に殺人のような重犯罪を犯したわけではないし、何と言っても未成年なんだからね。矯正施設に入っても、せいぜい1年か2年くらいで保護観察という形で出てくると思うよ」

「まさか、奴が復讐しにくるって恐れてるのかよ、クリスター？

そりゃ、恨んではいるだろうけど、出所してすぐにまた問題を起こしたらどうなるかくらい、頭のいい奴なら分かるだろう。そこまでしやしないよ」

「僕も君のように楽観したいところだけれどね。だが：そうだね、たぶん僕は：彼に対して、やりすぎたんだと思うよ。最初に僕を挑発して本気にさせたのは彼だったが、その挑発に乗って、遊びの範疇ではすまされないゲームを繰り広げたのは僕だ。普通の悪党なら怯んで、僕に関わるのは二度とごめんだと思い知るところだが、生憎彼は『普通』じゃない。僕は彼に勝つことは勝ったが：あれで本

当に終わらせることができたのか、正直言って不安が残る。何だか、今でも彼が続きをしたがつているような気がしてならないんだ。そう、僕には、何となく彼の心の動きが分かるんだよ。あの頃は、彼を打ち負かすため、まずその心を理解し、行動の裏の裏を読み、先手先手を打とうとするようなことばかりしていたからね」

「取り越し苦労じゃないのか、クリスター。まあ、おまえがどうしても気になるっていうなら、奴が入所している施設にあたって、今どうしているのかくらい調べてやるけど？」

アイザックの親切な提案に、クリスターは気を引かれた。だが、彼のことから、ただの親切心からではなさそうだ。

「そうだな：もし、調べられるようであれば、頼むよ、ジャーナリスト君」

幾分用心深くなりながら、クリスターは頼んだ。

「ああ、任せておけて。その代わり、フットボール・チームのエース、クリスターは、俺の取材に全面的協力してくれよ。だってさ、来週ははや準々決勝で、このままの勢いだと本当に決勝まで行けてしまいそうな気配じゃないか。もし決勝戦にまで進めたら、俺もベンチに入れてくれよな、栄光の瞬間をばっちり記録にとってやるぜ」

抜かりなく、すぐさま交換条件を出してくるアイザックに、クリスターは片方の眉を跳ね上げ、やれやれというように肩をすくめた。

「そのよく回る口を閉じて試合の間おとなしくしていると約束できるなら、コーチに話を通してやるよ。それよりも――僕にインタビュ―するつもりなら、そろそろ始めたらどうだい？　僕はこの後生徒会にも顔を出さなくてはならないし、早くしないと時間切れになるよ？」

クリスターの意地悪な言葉に、アイザックは幾分焦ったように椅子に座りなおし、レコーダーのチェックをした。

「ああ、そうだ、まずは写真も一枚撮らせてくれよ」

写真嫌いのクリスターが顔をしかめるのにもお構いなしに、アイザックはポラロイドカメラを構えた。

「ほら、写すぜ。さわやかに笑ってくれよな」

言うが早いがもうシャッターを切り、更に立て続けに何枚か写真を撮る。

「ううん、何だか表情が固いなー。緊張しているのかよ」

「僕の承諾も得ずにいきなり写したくせに、勝手なことを言うんだな」

「ううん、俺はカメラマンとしても結構自信あるんだけれどな。おまえにいい表情をさせて写真を撮るのは、至難の業だよ」

クリスターは幾分むっとしてアイザックの手から写真を引ったくり、眺めてみた。

「：確かにね。我ながら仮面みたいに取り澄ました冷たい顔をしているな」

ちらっと見ただけで、もうこれ以上見たくないような気分になって、クリスターはその写真を机の上に投げるようにしてアイザックに返した。

時々、おかしいな夢を見ることがある。

温かくぬめった暗闇に弟と一緒に包まれて、ゆらゆらと漂いながら眠っている。

そのうち僕達の体は溶かされて、血も肉も混じりあったどろどろの塊となり果てていくんだ。

ぞっとするけれど、同時に、奇妙な安息がそこにある。

そんなふうには初めからやり直すことができたらいと僕は呟いてみる。

そう、今度こそ、二人で一つの完全な人間として生まれ変わったらー。

「クリスター、クリスター…」

軽く肩を揺さぶられて、クリスターは薄っすらと目を開けた。広げた本の上に突っ伏していた頭を傾けると、自分を覗き込む弟の顔が目の前にあった。

「やあ…」

まだ半分夢見心地でクリスターが微笑むと、レイフもつられたように笑った。

「何、レイフ？」

レイフの手が頭に置かれ髪の中に指が差し込まれる感触に、クリスターは気持ちよさそうにまた目を閉じる。

「へへ、今頃クリスターはどうしているのかなって部屋を覗いてみたら、机の上に突っ伏して爆睡しているだもん。こんなに気の緩んだ様子のクリスターは珍しいやって、見物に来たの。いや、あんまりできすぎて化け物みたいだって言われるうちの兄貴もまだ人間だったんだって、ちょっと安心したっていうか和んだっていうか」

クリスターは眉間にしわを寄せると、手探りで捕まえたレイフの頭を机の上に押さえつけてやった。

「いてっ、何すんだよ、離せよっ」

クリスターは逃れようとするレイフの肩に腕を巻きつけて自分の方に引き寄せながら、クスクス笑った。

「何だかまたおかしな夢を見ていたような気がするんだ」

「どんな？」

「はつきりと覚えているわけじゃないけど、あれはたぶん僕らが生まれる前にいた場所じゃないかな…」

「分かんないよ、クリスター」

「ただの夢の話さ、僕にだってはつきりと分かるものか。ああ、そうだ、確か前にコーチにも言われたことあったよね、僕達は足して二で割れば丁度いいって。その通りだなんて思うよ。…だからね、もう一度母さんの中に戻してもらって、偏ったところがないように

綺麗に分けてから生まれなおすんだ。二人とも今よりずっとバランスの取れた人間になれるよ。そうしたら、きつと―」

クリスターは続く言葉を口の中に飲み込んだ。

こんなふうに分かたれた自分の半分を恋しがって苦しい思いをすることもないのかもしれないね。

「ううん、オレは、今のままでいいよ」

レイフと言えば、結局クリスターの腕に捕まえられたまま、逃げるどころか、自分からもクリスターの背中に腕を回してじっとしている。

放っておいたら、レイフのことだから、こうしてクリスターにもたれかかったまま、いつの間にか寝付いてしまうかもしれない。

クリスターにしても、このまま何も言わず弟とじっと寄り添いあっていたいという誘惑は大きかったが、やはりそれはまずかろうし、何より姿勢が辛い。

クリスターはようやくレイフを解放してやって机の上から身を起こすと、あくびをかみ殺しながら、壁の時計を眺めやった。夜中の一時を回っている。

「ああ、もうこんな時間か…」

クリスターが読んでいた分厚い専門書をぱらぱらめくって首を傾げているレイフを、彼は振り返った。

パジャマ姿で、寝癖のついた髪がピンとはねていて、いつも注意するのにもたスリッパもはかないで裸足のままぺたぺた歩いてきて、相変わらず突っ込みどころは満載だったが、クリスターは今は見ない振りをしてやった。

「それで、おまえがこんな時間に僕の様子を窺いに来たのは、一体どういう訳なんだい？」

眠気を振り払って、いつもの平静さを装いながらクリスターは問いかけた。

「うん：何だか目が冴えちゃって眠れなくて：まだ気持ちが昂ぶってるみたいなんだ。だから、もしクリスターが起きてたら、ちよっ

と話したいなって思ったんだよ。今日の試合のこと―」

レイフは一瞬頬を赤らめてうっとりとしたかと思うと、クリスタ―をちよつと不満そうに睨みつけた。

「あれだけの熱戦のすぐ後だっていうのに、クリスタ―って、普段とやること変わらないのな。何があっても平常心を保ってさあ、おまえを見ると、今日勝ったくらいで大騒ぎしちゃいけないのかなあって気がしてくるよ」

「大騒ぎなんか、まだすることないだろ。次の試合こそ僕達が本当に目指しているものだよ」

「だってさ、準決勝戦だったんだぜ。それに、オレ達は勝ったんだぜ。去年できなかったことができたんだ。躍り上がりたいくらい、嬉しいよ」

「去年の雪辱を晴らただけだよ」

あくまで冷静に返すクリスタ―にレイフはもどかしてならないと、というような顔で反論しかけるが、結局あきらめたように肩を落とした。

「つまんね、近頃のクリスタ―って、何を言っても乗ってこないんだ」

レイフは足元に視線を落としてぶつぶつ文句を言ったかと思うと、溜息をついた。

「なあ、来週は本当に決勝戦なんだよなあ」

「ああ」

「何だか、ピンとこねえや。州大会に行けて、もしそこで一番てっぺんまで登れたら最高だろうなって思ったけれど、まさか本当にここまで来れるなんて…好きなことをただ夢中でやってただけなんだけどなあ。気がついたら、また周りが大騒ぎしているし、新聞やテレビの取材みたいなのも来るようになったし…次勝ったら本当に優勝なんだって分かってきて、何だか落ち着かないっていうか…」

「ここここに至って実感がわいてくると、段々緊張してきたんだろう？」

「う…ん…。そうだなあ、やっぱりプレッシャー感じてるのかな、オレ。勝ちたいけど、本当に勝てるんだろうかって、不安になってきて―」

「レイフ」

心細げに唇を噛み締めるレイフの手をクリスターは掴んだ。

「僕達は必ず勝つ。周囲が何を言おうが、流されるな。自分を信じるんだよ、レイフ、おまえにはそれだけの力がある」

レイフはクリスターに手を取られたまま微かに目を見開いて兄を見つめ返し、それから、ふっと視線を逸らした。

「実力かあ…将来は絶対プロだなんて豪語しておいてなんだけど、オレはまだ自分の力にそこまでの確信なんて持てないよ。フットボールは楽しいし、勝つのは好きだし、でも、優勝なんて…ここまできたら、オレ個人だけでなくチーム全体に対する責任もかかってくる。去年みたいに肝心な場面でミスしたらとか考え出すと、すごく怖い―」

去年負けたのは自分の責任だったと軽いトラウマになっているのだろうか、気弱に呟くレイフをじっと観察しながら、クリスターは口を開いた。

「…目を閉じてごらん」

「え？」

レイフはきょとんとするが、クリスターが促すようにゆっくりと頷くのに、素直に従い瞼を伏せた。

「今までの試合の中で我ながら最高だと思ったプレイを思い出してごらん。細部まではっきりと頭の中に描きこむんだ」

「う、うん…」

「その時、どんな気分だった？」

「そりゃ、気持ちよかったよ。相手のブロックを腕突っ張って押しのけ、吹っ飛ばしてさあ、もうすっきりしたさ。スピードで振り切ったら誰もオレには追いつけない…そのまんま一気にタッチダウンした瞬間なんか、もう最高だなっ。わーって歓声が降ってきて、嬉

しそうに駆け寄ってくるチームの連中に頭小突き回されて、ものすごく嬉しくて、胸の中が熱くなって：」

「来週の試合でも、おまえは同じほどいいプレイができる。観客席から押し寄せてくる怒濤のような歓声の中、素晴らしいプレイをしている自分を想像するんだ。そして、勝った瞬間を」

「ああ、きつとすごく：いい気分だろうな」

レイフの顔に満足そうな微笑が浮かんでくるのをクリスターは目を細めるようにして眺めていた。

「これから来週の決勝戦まで絶えずそんなイメージを描くようにしろ。なるべくリアルに、感情もまじえてね。そうすれば、実際の試合でも、この感情を味わいたいという欲求が生まれてくる。一流のスポーツ選手というものは、そうやって、試合に向けて自分を一番いい状態に高めていくことができるんだ」

レイフはぱちつと音をたてそうな勢いで目を開けた。

「緊張するのは悪いことじゃない。むしろ何の緊張もなく試合に臨むよりは、楽しめるくらいの緊張はあった方がきつといいプレイができるよ。勝つイメージを常に持っていれば、試合が迫ってくる緊張感さえも次第に好きになってくる」

レイフはしばしまじまじとクリスターを眺めたかと思うと、にっと笑った。

「やっぱ、クリスターって、オレをその気にさせるのがうまいや」
うんうんと頷きながらイメージイメージと自分に向かって言い聞かせていたかと思うと、レイフはいきなりクリスターの手を強く握り返してきた。

「な、クリスターもやっぱり同じようなイメージトレーニングしてるのかよ？」

「まあね」

「やっぱり、決勝戦で勝って最高の気分を味わうんだって自分に言い聞かせてんの？」

「ああ」

クリスターはふと遠い眼差しになった。

「せっかく、ここまで登ってこられたんだ。どうせなら頂点に立ちたい。いや、絶対に立ってやる。おまえと一緒にその瞬間を味わえたら：僕はきつと今まで生きてきた中で最高の気分を味わえるだろう」

我知らず唇が笑みにほころびる。

「よかった、クリスターもオレとおんなじように思ってるんだ。何だか、いつもおまえがあんまり冷静だから、実はそれほどフットボールに執着ないんじゃないか、チェスみたいにあっさりとやめられる程度のものでしかないんじゃないかって、オレ、疑ってた」

レイフはほっとしたように囁く。

「一緒に勝とうな」

はにかんだように笑うレイフと手を取り合っていると、クリスターは急に胸が詰まってきて、我にもあらず黙り込んでしまった。

レイフは無防備に信じきった目をして、いつまでもクリスターの手を離そうとしない。

部屋の中は暖かく、柔らかな影に満ちていて、聞こえる物音といえば、二人がたてる穏やかな息遣いだけだ。

この一時、クリスターは、子供時代に引き戻されたかのように、レイフをとて身近に感じた。同じ部屋を共有していた頃、彼らは時々どちらかのベッドの中に一緒にめぐりこんで、そのまま寝付いてしまうまで熱心に話しこむことがあった。

「レイフ：」

あの頃への懐かしさと慕わしさに胸がいっぱいになって、クリスターはつい、いつになく優しい声で弟に呼びかけた。

「うん？」

レイフは頭を片方に傾けながら、屈託なく笑い返す。

弟へ向かう気持ちに流れられるがまま、クリスターは唇を開きかけたが、ふいに我に返った。

今にも引き寄せせんばかりに弟の手に指を食い込ませていた自分の

手を見下ろし、クリスターは苦笑した。

（駄目だ。これ以上の親密さは、今の僕達にとって危険すぎる）

クリスターはたしなめるように軽く片方の眉を上げてみせながら、手を離すよう、レイフを無言で促した。

「ああ」

レイフは指摘されて初めて気がついたらしい、一瞬照れくさそうな顔をしたものの、何となく名残惜しげにクリスターの指に指先を絡め、それからやっと手を引っ込めた。

「ぎこちない沈黙が、二人の間に広がっていく。」

「もう自分の部屋に帰って、寝ろよ。僕もそうする」

「うん…」

レイフはまだ少しクリスターから離れがたそうな素振りをしたが、クリスターは気づかない振りをした。

「明日、練習が終わったら、午後からでもちよつとボストンまで足を伸ばしてスタジアムの下見に行こうか。その方が次の決勝戦をイメージしやすいだろう」

「ん、そうだな」

レイフは決勝戦と聞いて顔を引き締め、クリスターに頷き返した。

「じゃ、お休み、クリスター」

「ああ」

弟が部屋を出て行くのをクリスターは椅子に座ったままじっと見送った。

扉が閉ざされるとクリスターは椅子の背に背中をもたせ掛け、ほっと息をついた。

「決勝戦、か」

思い出したように、長い間レイフに触れていた手を上げ、もう片方の手で包み込むようにしながら目の前に持ってきた。

レイフのぬくもりや匂いがまだそこに残っているような気がする。
（一緒に勝とうな）

信頼に満ちたレイフの呼びかけは、クリスターのしんと冷えた胸

の内に火をともし。いつだって彼の存在だけがクリスタ―を突き動かす、本気にさせる。

（ああ、きつとすぐく…いい気分だろうな）

目を閉じると繰り返し描きこまれた鮮明なイメージが瞼の裏に広がり、クリスタ―を奮い立たせる。

（レイフ、最高の瞬間をおまえと一緒に味わえるなら―僕はどんなことでもする）

レイフの体温を覚えている指先にクリスタ―はそつと唇を押し当てた。

（だから、必ず―）

まるで祈りでも捧げるような姿勢でじつとしているうちに、クリスタ―は先程見ていた夢をぼんやりと思い出し、何かしら腑に落ちたような気分になった。

のめりこむほどに好きなものなど何もないはずのクリスタ―だが、フットボールにはまだ愛着がある。ゲーム自体よりむしろ、それが自分に与えてくれる貴重な時間を愛している。

レイフと自分の間に共通点などもうほとんどないことをクリスタ―は既に自覚していた。

だが、それでも、同じフィールドに立ちゴールラインのある同じ方向をひたむきに睨みつけている一時だけは、クリスタ―はレイフと一つになることができたのだ。

第2章 ミスター・パーフェクト(4)

アーバン校に入学してすぐに受けたフットボール・チームのトライアウトで、僕は四十ヤード走で自己最高のタイムを出した。トライアウトに向けて練習してきた成果だと自分では満足していたのだが、その僕よりもレイフは速く走った。

まだ十五才で、いきなりプロ級のタイム、四・三秒を叩き出したレイフに周囲の注目はいっせいに集まり、それなりの好記録を出したものの僕の存在は弟の陰に霞んだ。

身体能力では僕よりレイフの方が少し上かもしれないということはそれ以前から分かっていたことだが、まざまざと見せつけられたのは、あの時が初めてだった。

もしかしたら僕達の差は思っていた以上に大きなものなのかもしれない――興奮した大勢に取り囲まれ未来のエースだともてはやされて戸惑い顔のレイフを眺めながら、僕は悟った。

レイフと互角であるためには、僕は努力しなければならなかった。一方、面倒くさいことの大嫌いなレイフは、練習らしい練習などせず、走ることも跳ぶことも遊び半分に嬉々としてこなしながら、とんでもない記録を出す。

そんなレイフがいつか本気になったらと想像すると、僕は激しい焦りに駆られた。弟が皆から賞賛されているのに、それを素直に喜んであげられない自分を恥じた。

結局、僕は恐かったのだ。

それ以来、僕は考えを少し改めることにした。スピードやパワーでレイフとまともに張り合おうとすることはやめて、他の部分を伸ばしてカバーすることにした。クォーターバックにポジション変えを希望したのも、それが理由だったが、実際、器用な戦略家の僕には合っていたと思う。

今では、エースとしてチームを引っ張る立場にある僕をレイフが

少し後ろから追いかけている。

不思議なのは、周囲の期待をあれ程集めたレイフが、一年目に好記録を出したきりあまり伸びないでいることだ。

それでも充分エース級の選手ではあるけれど、本来の実力がどれほどのものか分かる僕から見るともどかしくてならないくらい、レイフは長いスランプから脱せないでいる。

レイフ、おまえはいつ目が覚める？

そうして、僕は僕で覚悟しておかなくてはならない。いつかレイフが自分の本当の力に気づいたら、きっともう僕など必要としなくなる。彼は一人で何でもできるし、どこにだって好きな所へ行けるのだ。

レイフのためにはそれこそ望むところだ。そうなるよう僕も仕向けている。

けれど、頭で割り切ろうとしても感情がついていかず、こんなことを自分に向かって問いかけながら僕はいつも途方に暮れてしまうのだ。

レイフがいなくなった、その時、僕は一体どうすればいいのだろう……？

（そう、必ず勝つと心に誓っていた。この瞬間を夢見てきた）

頭の中が真っ白に焼け付いて、クリスターはしばし何も考えられなかった。

タッチダウンを叫ぶ審判の声は確かに聞こえた。そのすぐ後に鳴ったホイッスルも――。

試合は終了したのか。

初めは劣勢だったブラックナイツが後半戦で追い上げ、残り時間僅か二十秒で五点差にまで迫った最後の攻撃。一つタッチダウンを取れば逆転勝利という勝つか負けるかぎりぎりの状況だった。

この試合で最初から徹底的にマークされていたレイフにボールを渡すべきかどうか判断に迷うところだったが、もう後がないという状況まで追い詰められれば、コーチの判断もクリスターのそれと重なった。レイフの破壊力のある走りに命運を託した最後の勝負だったのだ。

そして今、ゴールラインを僅かに超えた辺りで、敵のタックルを食らいながらもしっかりとボールをキープしたレイフが倒れこんでいる。

クリスターは肩で息をしながら頭を巡らせ、スコアボードを振り返った。

二十三対二十四。ブラックナイツが逆転している。

（勝ったのか？）

怒涛のような歓声が押し寄せてくる中、クリスターは白昼夢を見ているような心地で意識を漂わせていた。

「クリスター！」

消耗しきって足元をふらつかせながら近づいてきたトムがクリスターの腕を叩いて、呼びかけた。

「勝った…おい、ちゃんと起きてるか、ほら、見ろよっ、スコアボード。俺達、勝ったんだぜ」

ベンチから駆け寄ってきた連中と一緒にあって、抱き合い、肩を叩きあって勝利を喜んでいるチーム・メイトを見渡しながら、クリスターはのろのろと頷いた。

「そうか…」

ゴールラインの方をもう一度見やると、最後のタッチダウンを見事に決めたレイフは、そこに座り込んだまま、放心したように空を仰いでいる。

あっちはあっちでまだ現実に戻ってこられないようだ。

「僕達が優勝した」

噛み締めるように呟いて、クリスターは傍らのトムを振り返り泣き笑いのような顔になっている彼の頭を軽く小突いてやると、ベン

チの前に立っているコーチの方へゆつくりと歩き出した。

フランク・コーチはこの瞬間を待ち構えて群がってきた新聞や雑誌の記者達やマイクを向けてくるテレビのインタビュアーに囲まれて、身動きが取れないようだ。

恩師に感謝の言葉を送りたいのだが今は無理かと思いつながら、ヘルメットをはずし流れる汗をぬぐいつつ歩いていくと、数人の取材記者がクリスターに気がついてマイク片手に抜け目なく近寄ってきた。

「キャプテンのクリスター・オルソン君、見事な逆転優勝でしたね」「今の気持ちはどうですか？」

用心深くじっと黙り込んでいるクリスターの言葉を取材陣は興味津々の表情で待ち受けている。大の大人が高校生を取り囲んでちやほやと持ち上げて、明日の紙面のためとはいえご苦労なことだ。ずっと頭の芯が冷めてくるのを覚えながら、クリスターはやはりこちらに向けられているテレビ局のカメラにちらっと目を向けた。

クリスターはカメラ嫌いだし、プロでもない自分がゲーム以外の所で人の関心を引くのも何だか性に合わない。

「プレッシャー知らずの司令塔と言われてきましたが、全く、高校生とは思えない精神力ですね。今日の試合でも、前半の苦しい状況を乗り切れたのは、エースであるあなたが動じず、正確なプレイを続けたからでしょう。どうして、いつもそんなに冷静でいられるんですか？」

「今大会のMVPはクリスター君が取るのではないかと予想されますよ」

クリスターは一瞬助けを求めるようにコーチに視線を送ったが、おまえなら一人であしらえるだろうというかのごとく、彼は軽く片目を瞑ってみせるだけだった。

「さて、11年生で、チームが州チャンピオンにまで登り詰めた今、来年の目標はもちろん二度目の優勝ですよね？」

「ええ」

今勝ったばかりだというのに早速来季の話かと一瞬不快感が増し、クリスタールは思わず顔をしかめそうになった。

「ミスター・パーフェクト！」

聞き覚えのある甲高い声がするのになを振り向くと、新聞部のアイザックがプロの記者達に混じってちゃっかりクリスタールにカメラを向けながらVサインを送っていた。

「なあに、そんなしかめっ面をしてるんだよ、クリスタール。優勝チームのキャプテンらしく、もっと素直に喜べよ。ここまで来て感情を出し惜しみすることはないだろう、おまえが目指した最高の瞬間なのにな」

「別に出し惜しみなんかしてないよ」

クリスタールは苦笑しつつ、アイザックに頷き返した。

それから、腹を括って取材陣の方に向き直り、こんな盛り上がった状況で大人達が自分に最も言わせたいだろう台詞を考えて、口を上らせようとした。

その時――

「クリスタール、クリスタール！」

勝利の気分にすっかり酔いしれ興奮しきったレイフが、トムと一緒に転がるように駆け寄ってきた。取材陣に阻まれて途中でそれ以上兄に近づくことはできなくなったが、レイフは人垣の向こうから飛び上がるようにして喜びを表現しながらクリスタールに訴えかけた。「すっげえや、オレ達ほんとに優勝したんだぜ！」

レイフの発した素直な叫びがクリスタールの胸の奥深いところを突いた。

「レイフ……」

くしゃっと顔を歪めるレイフに目を奪われたまま、クリスタールはあえぐように息をした。

「最高の気分だぜ、なあ……おまえも、そう思うだろうっ」

もちろんクリスタールも同じようも感じていたはずだ。出し惜しみしていたわけでもないが、ただ、自分を抑制することがほとんど癖

となっていた彼にとって、レイフのように素直に感情を出すことは難しかったのだ。

クリスターはレイフの方に顔を向けたまま、のろのろと上げた手を胸に置いた。

レイフの目にじわじわと涙が浮かんでくるのを認めながら、クリスターは試合が終わって一端落ち着いた心臓の鼓動が急に早くなってくるのを感じていた。まるで、レイフの見えない手がクリスターの胸の内側にすりと入ってきて、心を覆う固い鎧を引き剥がし、むき出しの彼を掴んで大きく揺さぶったかのようだった。

(…どんなことでもする)

クリスターの頭の中がかあっと熱くなった。

(いつかおまえが本当の実力を出せるようになったら、僕にはとても敵わないかもしれない。それでも構わない、こんな最高の瞬間をおまえと共に掴み取るためなら、この先僕はどんな努力も厭わないし、どんな犠牲も払う)

この瞬間、クリスターは溢れ出した激しい感情を抑えることができなくなった。

(レイフ、おまえがいつか…愛する人を見つけて、その人と一緒にするために僕から離れていったとしても、別にいいんだ。おまえにはおまえの人生があって当然だから、それを邪魔しようとは思わないよ。しかし、それでも、僕はおまえにとって最高の存在であり続けたい、おまえに必要とされたい…共に同じ夢を追うパートナーとして、おまえに隣に立つのは…この僕だ)

クリスターはふいに馴染みのない感触を覚えて目元を押さえた。戸惑いながら離れた手を見下ろすと、指先が温かく濡れている。

いつの間にか、クリスターは泣いていたらしい。レイフが感情を隠しめせずに無防備に泣くものだから、こちらにまで伝染したのだろうか。

何があっても動じない冷静沈着なエースと謳われたクリスターが流した涙に、一瞬、彼を取り囲む人々も虚を突かれたように絶句し

た。

「すみません…」

恥ずかしくなって、クリスターは手の甲でごしごしと目元をぬぐったが、彼の意思に反してはらはらとこぼれる涙はなかなか止まらない。

奥深いところからせりあがってくる衝動を抑えかねているクリスターに向かって、取材スタッフの誰かが唐突にこんな質問を投げかけてきた。

「あ…クリスター君、将来は、やはりプロになるつもりなんですか？」

クリスターは息を吸い込んだ。

声のした方に顔を向けたが、誰が言ったのか分からず、クリスターはもう一度弟を振り返った。

今の問いかけはレイフの耳にも届いたのだろう、真剣な目で食い入るようにクリスターを見ながら、彼の答えを待ち受けている。

（一緒にプロになろうな、約束だろ？）

（ごめん、レイフ、僕はまだ色々迷っているんだ）

クリスターはぎゅっと手を握り締めた。唇が震えた。

「もちろん…」

一時の感情に任せるな。後悔するぞ。

いや、これこそ心の底からの願いだ。嘘偽りのない本心だ。

束の間、二つの声がクリスターの中で激しく相克した。

そして―。

「高校を卒業した後は、カレッジ・リーグに進んで、それからプロになるつもりです。弟と一緒に、この先もずっとフットボールを続けたいんです」

言った途端、胸のつかえが下りて、随分気持ちが軽くなったような気がした。ずっと定まらない気持ちを捨ててきた、自分の行き先を決められずに迷っていたクリスターだったが、何も深く考えずに自分の気持ちに正直になるだけでこんなに楽になれるのなら、

もっと早くにそうすればよかったのかもしれない。

「クリスター！」

クリスターの宣言を聞いたレイフはしばしぽかんと立ち尽くしたかと思うと、我慢できなくなったかのようクリスターの周りにいる大人達を強引にかき分け、ぶつかるときに抱きついてきた。

クリスターの言葉によほど感動したのか、レイフは彼にしがみついて子供のようにおいおい泣き出した。それを、肩を叩いてなだめながら、クリスターは確かに自分のものとして実感できた喜びを味わっていた。

「いい加減に泣き止めよ、レイフ、恥ずかしいだろ。ほら、おまえが泣くものだから、他の仲間にも移って…見ろよ、うちのラインの連中なんか、必死で涙をこらえているものだから、何だかものすごい形相になってるぞ」

「そんなこと言って、クリスターだってさ…」

お互いの顔を手でぬぐってやりながら、クリスターとレイフは照れくさそうに笑いあった。

二人は肩を抱き合ったまま、一向に熱気の去らないフィールドをゆったりと見渡した。

「なあ、クリスターは今、どんな気持ち？」

「そうだね」

クリスターは頭上を振り仰ぎ、空から降ってくるような歓声にうつとりと目を細めながら微笑んだ。

「最高に幸せだよ」

レイフと共に目指し、越えていく、一つ一つの頂にクリスターの幸福がある。

結局、全てをあきらめて、自分を殺しながらただ日々を重ねてゆくには、十七才のクリスターは若過ぎ、才能にも恵まれていたのだ。（そうだ、こうして一つの頂上に上り詰めたように、次はもっと高い頂を征服してやる。プロにだって何だってなってみせるとも、レイフ、おまえが僕にそれを望むなら―）

これは、紛れもなく、クリスターにとって人生で最高の瞬間だった。

勝利の栄光に包まれ、一つの夢を叶えた達成感に満たされながら、この先も同じ幸福をレイフと共に味わいたいとクリスターは願った。振り返れば輝くような笑顔の仲間達、惜しみなく投げかけられる祝福の言葉や拍手―この一時、未来は希望の光に溢れていると、クリスターは確かに信じる事ができたのだ。

第2章 ミスター・パーフェクト(5)

「えっと、どっちがどっちだったかな……？」

冬休み直前に学校で開かれるクリスマス舞踏会にパートナーとして連れてきた九年生の双子の姉妹、テレサとルイーザ相手に、レイフは困惑しきりの様子だ。

「私はテレサよ」

「私がルイーザ」

まだあどけなさの残るそっくり同じ顔で笑いかけられても、区別などつきそうもない。

クリスターにだって、彼女らを見分ける自信などなかった。せめてドレスの色くらい変えてくれれば親切というものだが、彼女らは何でもおそろいにこだわりたいらしい。

「よお、クリスター、メリー・クリスマス」

振り返ると、正装したアイザックがパートナーの腕を取って、クリスターに近づいてきた。

「メリー・クリスマス、アイザック」

アイザックは愛嬌のある笑顔でクリスターの腕を叩いたかと思うと、レイフと一緒にいる双子姉妹を眺めやった。

「どうだ、俺の紹介した相手、おまえらにぴったりだろう？」

「まあ……ぴったりと言うのは、ある意味正しいのかもしれないけれど……。あの子達、わざと同じ格好や仕草をして他人を混乱させるのが好きなんだ。僕達も子供の頃は入れ替わって悪戯したり他人の驚く反応を見て面白がったりしたけれど、まさか同じことを他人からやられるとは夢にも思っていなかったな」

珍しくも戸惑いを隠せないクリスターに、アイザックはしてやったりというようににやりと笑った。

「ああ、そうだ、おまえにもこれを渡しておこうと思って、持ってきたんだ」

思い出したかのように手を叩くと、意味ありげな視線を投げかけながらスーツのポケットに手をつ突っ込むアイザックに、クリスタはふと嫌な予感を覚えた。

「ほら、この写真、よく撮れてるだろ？」

写真？　ますます胸騒ぎを覚えてアイザックが取り出した一枚の写真をクリスタは乱暴に引っ手繰った。

「おい：！」

クリスタはさっと赤面した。

「いつの間に、こんな写真を――」

言いかけて、絶句する。

クリスタが焦るのも無理のないことだった。アイザックがクリスタに渡したのは、先日の決勝戦で優勝を決めた際、感情を昂ぶらせた彼が不覚にも公衆の面前で涙を流した、まさにその瞬間のショットだったのだ。

あの場面は、まさか映っていないだろうと思っていたのに地元テレビ局の放送では短い時間ながらしつかり流されてしまっただけで、後から知ったクリスタは一生の不覚だったと顔から火が出る思いをしたのだ。学校に行ったら行ったで、顔も名前も知らない生徒から「思わずもらい泣きしそうになった」と声をかけられ、しばらく本気で登校拒否をしたくなった。

二度と見たくもない、その瞬間が写真となってここにある。

「な、いい表情で撮れてるだろ？　他の写真もたくさん撮ったけど、これが最高の写りだと思うんだ。鉄面皮のクリスタが流した感動の涙って、すごく皆にも好評でさ」

「皆？」

動揺のあまり瞳を揺らしながら問い返すクリスタにアイザックは悪びれもせずに言った。

「ほら、ベンチに入れてもらったおかげで決勝戦の写真はたくさん取れたけれど、全部を紙面に使うわけにはいかないから、どうしようって思ってたんだよ。そしたら、いい写真があったら焼き増しし

てくれて要望が結構あってさあ。そんな中で一番人気だったのが、この写真だったわけ。いや、全部で百枚近く売れたんじゃないかな」
「う…売った…のか…」

クリスタは軽い眩暈を覚えて、額を押さえた。

「アイザック、僕は君にこんな勝手をさせるために、わざわざコーチに話を通してベンチに入れてやったわけじゃないぞ。真面目に取材をするって、約束だったじゃないか」

「取材は真面目にしたよ。俺の記事、ちゃんと読んでくれただろう？ これは、まあ、その副産物だな。このまま陽の目を見ないで捨てるのはもったいないし、せっかく欲しいって連中がいるんだから、良心価格で分けてやって部費の足しにしようって思ったんだよ。新しいカメラとか丁度欲しかったし」

「信じられない…：売るおまえもだが、買う奴も買う奴だ。こんなものを欲しがる連中の気が知れないよ」

「ううん、やっぱり女の子が欲しがるんだよな、アイドルのノリでさ。普段クールにしてる分、おまえにこんな意外な一面があったんだってギャップのすごさにめろめろになったんだよ。でも、中には男もいたよ。そうそう、あのダニエルも恥ずかしそうにしながら何枚か買っていったな」

「う」

一瞬本当に目の前が暗くなって、クリスタはアイザックの肩に手を置き、ぐらぐらする体を支えた。

「こ、この…僕の肖像権を承諾も得ずに勝手に侵害するなんて、もう、これは犯罪だぞ…！」

「大げさなこと言うなよ。しゃれの分らない奴だなあ」

君にとってはただのしゃれかもしれないが、僕にとっては一生の恥だ―言いかけた時、二人の言い争いに気づいたレイフが何事かと寄ってきて、クリスタの手から写真を取り上げた。

「あ、これ、あん時の写真じゃん」

顔を強張らせてクリスタが見守っていると、レイフは写真と兄

をしげしげと見比べ、にこつと笑った。

「うん、いい表情で撮れてるよ。クリスターっていつもはあまり写真写りよくないけど、これはすごく自然な感じで撮れていて、実物と同じくらいハンサムだよ」

クリスターはぐつと言葉に詰まって、言い返せなくなった。

「これ、オレがもらうよ。別にいいだろう？」

よくはないぞ、レイフ。よくはないがー。

クリスターの返事も聞かずに写真を奪い取ったまま、レイフは彼を待っている女の子達の所に戻っていった。

「何、何、私達にも見せて」

「まあ、クリスターって、意外と泣き虫なのねえ」

「そうそう、案外可愛いところあるんだぜ、うちの兄貴」

ピチピチとさえずる小鳥のような女の子達と写真をネタに盛り上がるレイフを思わずとめようとするかのごとくそちらに手を伸ばしかけたものの、クリスターは結局あきらめて、肩を落とした。

「まあ、そんなに落ち込みなさんな、あんな写真一枚で話題になるくらいの人気者なんだってことさ」

クリスターはじろりとアイザックを睨みつけた。

「ちなみに二番人気はレイフとのツーショットだったな。ほら、二人で嬉しそうに抱き合ってただろ。あれもすごくいい表情で、また雰囲気さあ…見たいか？」

「見たくない」

半ば本気で殺意を覚えながらクリスターが右手で拳を作ってみせると、聡いアイザックはすぐに口を閉じ、クリスターの腕が届く範囲から素早く身を引いた。クリスターはフットボールのシーズンオフにはボクシング部にも所属していて、そのパンチの破壊力には定評がある。

クリスターが襲い掛かってくるなら脱兎のごとく逃げ出す構えのアイザックをしばし睨んだ後、クリスターは溜息をついて拳を下ろした。

「：そんなことよりさ、クリスター、真面目な話があるから、ちょっと顔貸せよ」

それまでのふざけた態度から、一転、真剣な顔になるアイザックに、クリスターは眉をひそめた。

アイザックが持ちだしそうな真面目な話というと、クリスターにも心当たりがあった。

「J・Bの件か？」

声を低めて囁くと、アイザックは無言で頷く。

アイザックはパートナーの女の子に断ると、クリスターと一緒に会場となったホールから出、人気のない中庭の片隅まで歩いて行った。

「ほら、こいつが今奴が収監されている矯正施設の住所と電話番号」
素っ気無く差し出されたメモをクリスターは黙って受け取る。

「ここんところ、土日の休みを利用してわざわざ遠出して調べてやったんだぜ、感謝しろよな」

片目を瞑ってそう前置きすると、アイザックは調査結果を淡々と報告してくれた。

「ジェームズ・ブラックは現在ここに収容されて、矯正プログラムを受けている。施設内では模範囚で、行動にもほとんど制限はないそうさ。それどころか奴と身近に接している職員の中には、何も悪いことはしていないのに間違いでここに送られてしまったというJ・Bの言い分を信じ込み奴の肩を持つ者までいるそうさ。ふん、他人の心理を操るのは、相変わらずお手のものなんだな」

「仕方がないよ、よほどの観察眼がない限り、何も知らない他人が彼の本性をそう簡単に見抜けるとは思えない。それより、彼がいつ出てくるとか、そういうことまでは分からなかったのか？」

「俺が話を聞いたのは、せいぜい施設の一般職員だったからな。そこまで具体的な話は分からなかったよ。ただ、模範囚というからは、順調にプログラムをこなして近いうちに出所ということになっても、不思議じゃないな」

「そうか」

クリスターはうつむいて、しばし考えを巡らせた。

J・Bが自由を得れば、果たしてどんな行動に出るだろう。クリスターとの因縁は過去のこととして忘れまともに社会復帰を目指してくれればいいのだが、昔のままの彼ならばそうはしまい。そして、誰がどのように矯正しようとしてもJ・Bの本質を変えることなど不可能だとクリスターは思っていた。

この世に純粋な悪意が存在するとすれば、それこそ彼、ジェームズ・ブラックなのだ。

「おまえは随分奴を気にしているようだがな、クリスター、今はいくら考えてもどうしようもないぜ」

励ますようにアイザックが腕を叩くのに、クリスターは顔を上げた。

「報告は報告として受け取って、今はホールに戻ってせっかくのパティーを楽しめよ。俺もそろそろ戻るわ。いつまでも待たせたらパートナーが怒っちまう」

もとの軽い調子を取り戻してクリスターにウィンクを投げかけると、アイザックは先にホールへと引き返していった。

「そうだな…」

クリスターはしばしその場にとどまったものの、やはりアイザックと同じようにホールに残してきた弟達のもとへ戻っていった。

「おや、あの子達はどこに行ったんだい？」

クリスターが戻るとパートナーの双子姉妹はどこかに姿を消している、レイフだけが飲み物を片手にステージで演奏をしているバンドの方をぼんやりと眺めていた。

「クリスター、ずるいぞ。オレ一人にあの子達のお守りを押し付けて、いつの間にか姿を消してさ。結構大変だったんだからな」

レイフは不機嫌そうにクリスターを睨みつけてくる。

「そうなのかい。話は随分弾んでいたように見えたけれどね」

写真の件での恨みをこめてクリスターが軽く揶揄すると、レイフ

は膨れ面をした。

「ていうか、あの子達、完全に自分だけの世界を作ってて、入り込めない雰囲気なんだよ。髪型も服も一緒。話す時もさあ、『ねえ、レイフって、初めはちよつと怖いと思ったけれど』と片割れが言ったかと思うと『話す面白いわねえ、それに可愛いわねえ』ってもう片方が続けるんだ。おんなじ台詞を二人で分け合うなよっての。オレ達だってそこまでしたことねえよな」

「そうだねえ」

「二人同時に相手にしていると、ほんとにどっちがどちか分からなくなつて、名前何度も呼び間違えて、その度に怒られてさ。だからさ、オレ、クリスターが帰ってくるまでの辛抱だつて、こんな提案したんだよ。もともとオレのパートナーのテレサにはオレをちゃんと『レイフ』と呼んでもらつて、ルイーザの方には『クリスター』って呼びかけてくれつて」

クリスターは目をまるくした。

「へえ：それじゃ、おまえは、そっくりな双子の女の子達にそれぞれ自分の名前と僕の名前で呼んでもらうことで区別しようとした訳かい？　しかし、それはまた：ふうん：どんな気分だった？」

「うん：おかげで間違いは少なくなつたけれど、何だか、すげ、妙な気持ちだった：」

レイフはちよつと顔をしかめて、頬の辺りを指先で引っかいた。

「何だか半分自分で半分クリスターになつたような気がして：おかしいことに、ちよつとドキドキしたよ」

薄っすらと顔を赤らめるレイフに、クリスターは何と言えいいのか分からなくなつて、軽く咳払いをした。

「それで、彼女らはどこに消えたんだい？」

さり気なく話を逸らしながら、クリスターもなぜだか少しドキドキしていた。

「ちよつと隣の小ホールに行つて友達探してくるつて。オレはクリスターを待つからつてここに残つたんだ」

「おやおや、振られたのかい」

「しゃーないさ、彼女らはお互いが関心の中心なんだから。たぶん、ドレスと同じようにパートナーもお揃いにしたかったから、オレ達と一緒に来ることにしたんだろ」

「ドレスと同格というのは、男としては辛いね。あそこまで何もかも一緒にこだわることはないと思うけれど：まあ、彼女らはまだ幼いんだろう。ねえ、僕らなんか髪型こそ一緒だけれど、選ぶ服や着こなしも違う：見分けがつかないほどそっくりとはもう言えないのにね」

クリスターが言うのに、レイフは少し不満そうな顔をしたが、否定はしなかった。

ホールの中は着飾った大勢の生徒達で込み合って、その熱気で暑いほどだ。ふいに、照明が暗く落とされ、ムードのあるダンス音楽が流れ出した。そこかしこでカップルが踊り始めるのにクリスターは外に出ようとレイフを誘った。

ホールを出てすぐにある階段前の広いスペースで、ひっそりとした中庭を見下ろしながら、クリスターは隣に立つレイフに話しかけた。

「彼女らと踊ってやったのかい？」

「一応、交代で踊ってやろうとしたんだけどさ。やっぱ、オレ、ダンスって苦手だわ。何度も相手の足踏みつけて悲鳴をあげさせて、ついには愛想つかされちゃったよ」

情けないレイフの答えに、クリスターは眉を寄せた。

「苦手だと思い込むから、駄目なんだよ。運動神経は抜群なんだから、パートナーに合わせて適当に動くことくらいできるだろ？」

「スポーツとダンスは別だよ」

レイフは本気で反論した。

「大体オレが恥かいたの、クリスターのせいだからな。兄貴がいないから、あの子達を退屈させちゃ駄目だって、無理して、苦手なダンスなんかしてさ」

クリスターは腕を組んで、しげしげとレイフを眺めた。

「ちよっと手、貸してみろよ」

「え？」

ホールの方から流れてくるスローな曲に耳を傾けながら、クリスターはレイフの手を取った。

「ちよ、ちよっと」

「ほら、基本のステップだよ」

クリスターが引き寄せるとレイフは戸惑いながらもついてきて、ごく簡単なダンスのステップを曲に合わせて難なくこなした。

「なんだ、ちゃんとできるじゃないか。それじゃ、これは…？　そうそう、うまいよ、レイフ」

しばらく、そうして二人で寄り添い合って、ゆったりと流れる音楽に身を任せていたが、やがて、レイフが堪えきれなくなったように小さく吹き出した。

「やべえよ、これ。パートナーに振られて寂しい兄弟二人でダンスしてるって、何か寒くね？」

「ああ、確かにね」

クリスターもつられたように笑い、弟から身を引いた。

「後で、双子達を探しに行こう。気が向いたらもう一度ダンスに誘ってもいいし、どのみち、責任を持って帰りはちゃんと家まで送ってあげないといけないからね」

「うん」

クリスターはレイフと向き合ったまま、しばし、黙り込んだ。

「あのね、レイフ…」

一瞬ためらった後、クリスターは口を開いた。

「まだ早い気はするけれど、大学のこと、そろそろ具体的に考えてもいいかなって思うんだ。幾つかの候補くらい立てておいても悪くない。おまえにも希望はあるだろうけれど、僕も幾つか興味のある学校がある。休みの間に2人で色々調べて相談して、年明けにでもちよっと見学に行ってもいいかなって…おまえはどう思う？」

おずおずとこんな提案をするクリスターに、レイフは目を真ん丸く見開いたかと思うと嬉しそうに破顔した。

「もちろんっ、大賛成さ！」

レイフは腕を大きく開いて、クリスターに思い切り抱きついてきた。誰彼構わずじゃれつくのが好きなレイフだが、こんなものに体ごとぶつかると来られると、普通の男子なら吹っ飛びそうなど勢いのあるタックルになってしまう。

これは来るなど密かに身構えていたクリスターは、とっさに足を踏ん張り、自分よりも少しだけ大きくてパワーもある弟を受け止めた。

「苦しいよ、レイフ」

「だって、やっとクリスターがその気になってくれたんだもの、オレ、すっごく嬉しい！」

あくまでストレートに感情を表すレイフにクリスターもつい気持ちが引つ張られ、胸の中がじわじわと熱くなってくるのを覚えた。何だか、これではまた決勝戦が終わった時の二の舞になりそうだ。

「僕も：レイフ、僕の方こそー」

レイフや他の仲間達と共に優勝を勝ち取った、あの時の感動が鮮やかに蘇ってきて、こみ上げてくる圧倒的な思いに、クリスターは絶句してしまった。

（あの時、僕は最高に幸せだった。あんなに気持ちのいい瞬間を味わえるのなら、生きていることもまんざら捨てたものじゃない：うん、それどころか素晴らしい。そうして、僕は分かったんだ、レイフ：おまえのいない人生なんて僕には意味がない。それぞれが独立した大人になって別々の道を歩いていくことが最善なんだと信じてきたけれど：無理に離れようとしなくても幸せになれるのなら、僕はやっぱりおまえと一緒にいたい。だから、もし、おまえが：おまえもそう望んでくれるのなら：同じ夢を二人で追いたい。この先もずっとフットボールを続けて、プロになる：おまえならきっと一流の選手になれるだろう、僕は今よりもっと努力しなくてはならな

いだろう…だから僕も、これからはフットボールに専念するよ。今までは色んなことを手広くやって選択肢を多くすることで、僕は何でもできるから一人でも大丈夫なんだとおまえや自分自身さえもごまかそうとしてきたけれど、もうやめる。だって、僕が本当の望みは、レイフ、おまえなんだから…おまえと一緒に幸せになりたいよ…」

器用なはずのクリスターだが、この時ばかりは喉の奥の熱い塊が邪魔をしてレイフに言いたいことも言えず、苦しいほどの弟の抱擁に黙って応えることしかできなかった。

「…いい加減、離れろよ、レイフ。もし誰かに見られたら、変に思われるよ」

やっと思いで、クリスターはそうとだけ囁いた。

もう少し気持ちが落ち着いたら、レイフにちゃんと自分の本当の想いを伝えようとクリスターは考えた。レイフと同じくらい正直に、素直になって…。

「ああ、何だか夢みてえ」

レイフはクリスターからしぶしぶ身を離すと、まだ感情を発散したりないのか頭上に拳を突き出して一声叫び、身を反らしながら晴れ渡った夜空を見上げた。

「今年は見事に大会優勝したし、クリスターはオレと一緒に将来はプロになるって約束してくれたし、もう何も言うことないよ、最高のクリスマスだよ。ああ、でも…」

うっとうしと紅潮していたレイフの顔がほんの少し寂しげに翳った。「フットボールのシーズンはもう終わっちゃったんだよな。また来年まで待たないと駄目なんだ…ああ、この盛り上がった気持ちのままでずっと続けられたらいいのに…」

「来年の九月までの八ヶ月くらい、すぐに過ぎるよ。それまでは陸上や他のスポーツで体を鍛えればいい。柔道だって、やっぱり好きなんだろう？　僕も、来季までに今年以上の体を作りたいからね。年明けから再スタートするくらいの気持ちでいるよ」

「お、やる気満々じゃん。さすがは今大会のMVP男、頼もしいね」
はしゃいだ声をあげて、レイフはまたクリスターの首に腕を巻きつけてきた。

「MVPか：僕は、自分がそこまで活躍したとは思っていないんだけれど」

まだじゃれつきたりないレイフを片手で押し返して引き剥がしながら、クリスターは呟いた。

「クリスターって、理想が高すぎるんだよな。でも、おまえはマジですげえよ。どんな混戦状態でも即座に対応して的確な指示を出しながら複雑な戦術をこなし、尚且つ、パスも抜群だろ。足も速いしパワーもあるし、どこからも攻略しようがない無敵のQBじゃん。それに、チームの皆からもすごく信頼されている。他人にも厳しいけれど自分にはもつと厳しいから、高い要求を突きつけられても、それに応えようと皆必死になってがんばってくれるんだ」

クリスターはくすぐったそうに顔を歪めながら、レイフの背中を叩いた。

「今年は僕がMVPを取ったけれど、次はおまえが取れよ。そのくらの意気込みで来季は臨むんだ」

「ええっ、そりゃ無理だよ」

クリスターは結構本気で言ったつもりだったのだが、レイフは冗談だと思ったらしい。

「どうして無理だなんて決め付けるんだ？ その気になって努力さえすれば、おまえの実力ならー」

クリスターが言い募ろうとすると、レイフは慌てて両手を振った。
「オレの力なんて、大したことないよ。クリスターとは違うもの、オレ」

クリスターは眉を寄せ、一瞬言葉を切った。

「違うだなんて、どうしてー？」

当惑しながらクリスターが問いかけると、レイフは賞賛のこもったうっとりとした目でじっと兄を見つめた。

「どうしてもこうしてもないよ、オレの兄貴は最高だもん。オレとは初めから出来が違うんだ。おんなじ遺伝子持っても、全然違う……」

「レイフ……?」

レイフの瞳に浮かぶ憧憬と崇拝を見ながら、クリスターは胸の奥で言いようのない不安がさざ波立つのを覚えた。

「オレは子供の頃からいつも、置いていかれまいとクリスターの背中を必死になって追いかけてきたんだ。そうすると、オレなんかでも一応それなりに力がついて、たまには他人から注目も浴びたりなんかして……何ていうか、おまえについていたら間違いないやつて単純に信じていられんの。今年もさ、そうやって、おまえに引っ張られるがままついていたら本当に優勝できたし……」

「レイフ、僕の力だけで優勝できたわけじゃない。それに、おまえだって……最後にチームの命運を託されたのはおまえだったじゃないか。そして、ちゃんと皆の期待に応えた……おまえ自身の力で……」

「そうかもしれないけど、でも、クリスターには敵わないよ」

何の躊躇いもなくあっさり応える弟に、クリスターは愕然となった。

「何、馬鹿なことを言ってるんだ。ちゃんと現実を見て、評価しろよ。おまえが1年目に出したタイム1つ取っても、僕には決して追いつけない。だから、僕は……」

「あれは、ただのまぐれだったんだよ。実際、あれきりオレのタイムはむしろ落ちたし……大体スポーツって総合的な能力で判断するものだろ、どっちがすごいか一目瞭然じゃん。そんなおまえと張り合う気なんて、オレにゃ、全然ないよ」

クリスターはまた絶句してしまった。

(分らない……どうして、こんな……?)

レイフがこんな諦めたような言葉を口にするなどと、クリスターには信じられなかった。確かに甘いところもあるけれど、もともと負けず嫌いで、ことスポーツに関しては簡単に他人に敗北を認める

ようなことはなかったはずだ。そもそも、生まれながらの天才のレイフが、クリスターに対して自信を喪失する理由などないのだ。

「おまえもオレと一緒にプロになる」

レイフが幸せをかみしめるように呟くのを、クリスターは呆然と見守っていた。

「よかった、オレ、これで安心できる。オレ1人でプロになってやっていける自信なんて持てないけど、おまえがいれば、オレはきつと強くなれる。おまえについて行きさえすれば、道に迷うことなんてないんだ」

クリスターの心臓を冷たい手が驚づかみしたような気がした。

「レイフ…」

もしかしたらー。

信頼に満ちた笑みを投げかけてくるレイフに素直に応えることなど、クリスターにはもうできなかった。

（もしかしたら、僕は大きな間違いを犯していたのだろうか？）

これまで、レイフはただのスランプでいつかは自然にそれを抜けるに違いないとクリスターは思っていた。

実力を出し切れないのは、本人の甘ったれた性格からくる怠慢や気の弱さのせいだと思ったから、クリスターはレイフに厳しいくらの態度で接し、手本を示すつもりで率先して練習にも励んだ。

しかし、本当は、レイフはスランプなどではないのかもしれない。力を出そうとしても出せない真の原因は、他にあるのかもしれない。

（クリスターには、何をやっても敵わないよ）

クリスターは小さく身震いした。

（まさか、そんなことー信じたくないけれど、でもー）

何でもできるクリスターには敵わない。レイフは、一体いつから自分にそう言い聞かせてきたのだろう。

それはいつしか強烈な暗示となり、レイフを見えない鎖で縛り付けるようにして、その可能性を奪ってしまったのではないか。

（僕のせい…なのか？ レイフ、僕が傍にいるから、おまえはずっ

と目が覚めないのか：？)

クリスターの手は体の脇にだらりと垂らされたまま、いつの間にか、その指の関節が白くなるほど強さで握り締められていた。

レイフと一緒にいたい、二人で幸せになりたい。同じ夢を追うパートナーとして、この先もずっと共に歩いていけたら――。

束の間掴んだかと思われた未来への希望、明るい光に満ちた世界が、クリスターからまた遠のいていった。

僕は完璧などではない。

おまえなしでは、ほら、僕は一人でも立って歩くこともできないんだよ。

それでも、僕は完璧であろうとしてきた。

おまえにとって最高の存在でありたかった。

たとえいつか離れることになろうとも、おまえが僕以外の誰かを選ぼうとも、必ず僕を必要とせずにはいられなくなるほど、忘れることなど不可能なほど、おまえにとって唯一の絶対的な存在になったかった。

ああ、でも、もしかしたら――そんな努力などしてはならなかったのだろうか。

「クリスター、クリスマス・カードがたくさん届いているわよ」

冬休みに入って数日が経った、ある日、クリスターが外出から帰ってくると、母のヘレナがキッチンから顔を覗かせ、そう声をかけた。

「あら、どうしたの、クリスター、あまり顔色がよくないわね」

たぶんそれはここしばらくひどい不眠症に悩まされているせいだ

ろうと思いながら、クリスターはヘレナにっこり笑い返した。

「うん、もしかしたら風邪をひいたのかもしれないね。後で、菓を飲むよ」

クリスターは勘の鋭い母の視線を慎重に避けながら、リビングに入っていくと、テーブルの上に積まれていたカードの中から自分の宛てのものをより分けた。

「母さん、アリスからもカードが来ているよ」

「あら、そうなの」

カードを確かめながらキッチンのヘレナへいつもと変わらぬ調子で声をかける、クリスターの指がふと止まった。

クリスターに宛てたカードの中に、差出人の名前がないものが一通あった。

単に書き忘れただけかと思ったが、消印の地名を見て、クリスターは小さく息を飲んだ。

（まさか…）

クリスターはカードの束を掴み、その一枚だけは別にして持つと、二階の自分の部屋へ急いで上がっていった。

自室の扉を背中を閉じ、クリスターは改めて差出人不明のカードを見下ろした。

（消印に記された町の名前は、確かにアイザックが教えてくれたあの住所と同じだ）

クリスターはひとまずコートや他のカードをベッドの上に置いてから、そのカードの封を切った。

封筒の中からはどこにでもある平凡なクリスマス・カードが出てきたが、それを開いた時中から落ちてきたものにクリスターは眉をひそめた。

床に落ちたそれを見た一瞬は、さてはアイザックの仕掛けた性質の悪い悪戯かとクリスターは疑った。例の決勝戦で涙を流したクリスターの一瞬の無防備な表情を写した写真だったからだ。

しかし、それを拾い上げて裏返した時、クリスターの表情は再び

厳しく引き締まった。

『完璧なものほど壊しがいがある』

写真の裏には、少しの乱れもない綺麗な筆跡でそう書き記されていた。

クリスターはしばし息をするのも忘れ、凍りついたようにその短い言葉を凝視した。

かつて、同じ台詞をクリスターに向かって語りかけた少年がいた。忘れようとしても忘れられない柔らかな声が頭の中で響き渡り、クリスターの肌をぞっと粟立たせた。毒を含んだ言葉を吐き出しながらも、その唇はとても整っていて、そこから覗いた真っ白な歯は綺麗だった――。

クリスターは、ようやく自分が呼吸する生き物であることを思い出したかのように、ゆっくりと肩で息をした。

（この世に純粋な悪意は存在する。そして、悪意というものは、常に分かりやすく人の目に見えるものとして表されるとは限らない）

ここ数日捕らわれた煩悶も吹き飛ぶほどの緊張感にクリスターはすっと目を細めながら、冷たい笑みに唇を歪めた。

先程開いたカードをもう一度確かめてみるが、そこには印刷されたお決まりのクリスマスのメッセージがあるだけで、何も書かれていない。

クリスターは再び写真を目の前に持ってきて、ためつすがめつ調べてみた。

やはりアイザックが写し勝手にばらまいたあの写真の内の一枚のようだ。後で念のためにレイフに渡した写真と比べてみようとは思うが、おそらく間違いないだろう。

もともとアーバン校の生徒であり、かつての仲間達もまだ学校には残っている、彼にとってこれを手に入れることなど別に難しくはない。

問題はそんなことではなく、わざわざクリスターにこれを送りつけた彼の意図だ。

そして、クリスターには彼の考えることくらい大方察しがついていた。

（つまり、ゲームはまだ終わっていないということだ）

近いうちに帰ってきて今度こそクリスターを攻略してやるという意思表示なのだろう。

これも、クリスターの予想の範囲内のことであったので、別に驚くにはあたらない。それどころか――。

（：おもしろい、やってみるがいいさ）

少し前まではできれば余計な争いは避けたかったのだが、今はひどく好戦的な気分でクリスターは思った。

（あの時と同じスリルを味わえるのなら、僕にとっても望むところだ。君が何を企み仕掛けてこようが、僕はその先を読んで退けてやる。学校から追い出され施設送りになったくらいでは懲りないなら、今度はもっと：ひどい目にあわせてやるよ）

常日頃接する普通の人間達が相手では、同世代の若者でも大人達でも、大抵考えや行動が読めてしまつて、クリスターにはどこか物足りなかった。周りにあわせるだけのぬるい環境に浸っていると次第に内側から自分が疲弊していくのが分かる。そんなつまらない日常も、攻略しがたい敵が現れれば刺激に満ちたものに変わるだろう。そして、今のクリスターは切実にそれを求めていた。再び抱え込むことになった懊悩を忘れさせてくれる何か、そうして、今にも噴出しそうなほどにたぎっているこの激情の矛先となってくれる何かを。

（もう二度と、あんなまねすんなよ）

ふいに、レイフのとがめるような不安げな顔を思い出され、クリスターの胸はちくんと痛んだ。

（悪いけれど、レイフ、おまえとの約束は破らなければならないよ。うだ。仕方がないさ、僕があれきり最後にしたくても、向こうが仕

掛けてくるんだから)

クリスターは写真とカードを再び封筒の中に戻し、万が一にも目に触れないよう本棚の一冊の本の間に隠しておいた。

(このことは、レイフには黙っておかなくてはならない。知れば、またあいつを動揺させることになるだろう。それに、今回のこれはあくまで僕自身の問題だ。何より僕は、もう二度とレイフを彼に関わらせたくはない)

クリスターは窓の方に歩いていくと夜の帳の下りた外の風景を目を細めるようにして眺めた。

窓の外には、ちらちらと粉雪が舞っている。

(一人でも大丈夫、僕は必ず彼に勝ってやる)

暗い窓ガラスにぼんやりと映るクリスターの顔は、ここしばらく生気のなかったそれとは一変して生き生きして見えた。

ぞくぞくするような高揚感を覚えている胸に手を置き、クリスターは思わず苦笑した。

ある意味、最高のクリスマス・プレゼントだ。

(どうやら僕には、何の得にもならないのに、あえて危険を冒したがる下らない性向があるようだ。恵まれた才能とやらも、こんな馬鹿げたことにつきこんで浪費するだけなら意味ないな。けれど、それも僕にとって生きるための動機付けとなるなら…そう悪いことじゃない)

窓の向こうに広がる冷たい闇の彼方を鋭く睨みつけながら、クリスターは挑みかけるような口調で囁いた。

「来るか：J・B」

第3章唯一の絶対（1）

「よしよし、いい子にしてくれよ、子猫ちゃん」

にっこりと満面の笑みをうかべながら、手に防護用の手袋を着用したレイフは、診察台の上に引っ張り出されて毛を逆立てている白い猫に向かって、文字通りの猫なで声で囁いた。

レイフのアルバイト先の動物病院である。9年生の夏休みに社会奉仕のボランティアとして働きにきたレイフをフットボール好きの院長が気に入って、そのまま雇ってくれたのだ。

「さて、傷口の消毒をするからね。しっかりこの子を押さえておいてくれよ、レイフ」

野良猫と喧嘩をして顔面に負傷した猫をレイフに押さえさせ、獣医のケンは注射器を使って傷口の消毒を試みる。

傷をいじられるのが痛いのか、見知らぬ人間に押さえつけられて嫌なことをされるのがストレスなのか、猫のたてる鳴き声は次第に不穏な唸り声に変わっていった。

「ああ、ああ、女の子が、そんな恐い声をあげたら駄目でちゅよー？」

体躯の大きなレイフが、小さな猫の機嫌を取るかのような優しい声を出しているのがおかしいらしく、助手の若い女の子達はこちらを見ながらくすくす笑っている。

「ちよっとお、腰が引けてるんじゃないの、レイフ」

「動物は敏感だから、恐がってることを悟られたら、逆に強気に出られるわよ」

からかい半分の黄色い声援を背中に受けて、レイフは思わず顔を赤らめた。

「そんなこと言われたって…」

完全に犬派のレイフは、どうにも猫の扱いが苦手なのだが、仕事なのだから嫌とは言えない。

「あ」

女の子達が言うように、レイフの弱気に気づいたのか、猫はいきなり激しく暴れ始めた。とっさに怯んだレイフが手を緩めてしまった隙に逃げ出した猫は、彼の腕に飛びつき、肩から頭に一気に駆け上って軽々と床にジャンプした。

「いっ：ぎゃあああっ！」

鋭い爪でざくざくと、腕やら顔に跡をつけられたレイフの絶叫が診察室にこだまする。その後は、診察室を逃げ回る白い猫を職員総出で追い回す大捕り物になった。

「：傷はまめに消毒するんだよ。僕も見習い時代はよくやられたが、猫の爪の傷は深いからね、長いことじくじく痛むんだ」

何とか猫を捕まえた後、同じ診察室で手当てを受けたレイフに、帰り際、雇い主のケンが心配そうに声をかける。

「すまないことをしたね。ハンサムな顔が台無しだ」

「あー、これくらい大丈夫っすよ。オレ、もともと傷の治りもすごく早いし」

レイフがドアを開くと、湿った風と共に細かな雨の粒が吹き付けてきた。

「ああ、ついに降り出してきたな」

鈍色に曇った空を見上げ、ポーチに佇んだまま、レイフは呟く。

「家まで車で送ろうか？」

レイフは後ろを振り返って愛嬌のある笑顔で応えた。

「このくらいの雨なら、平気っす。それに、ほら、ただでさえクラブのない春休み中、まめに動かないと体がなまっちまう。家までジョギングしながら帰りますから」

「おやおや、早くも次のフットボールのシーズンを目指しているって訳かい？」

「へへっ、だって、オレ、それしか能がないから」

はにかむような笑みを残して、スポーツジャケットのフードを引き上げると、レイフは軽いフットワークで小雨の中へ駆け出した。季節は3月の下旬。雨の降る今日のような日はまだまだ寒い、走ることの好きなレイフは全く気にならない。

むしろ、吹き荒れる風や嵐の中に飛び出していくと、レイフは胸が沸き立つような高揚感を覚えるのだ。

「春の雨かぁ」

しかし、この時は、しっとりと優しい雨に濡れながら、レイフはふいに柄にもなく感傷的な気分に駆られた。

丈の高い街路樹の並ぶ歩道でふと立ち止まって、手を顔の前にかざすようにしながら、レイフは天を仰いだ。薄く開いた唇から、溜めていた吐息が押し出される。

顔にかかる細かい雨の粒に目を細めながら、レイフは懐かしくもほろ苦い記憶を蘇らせていた。

（ああ、そういや、ハニーと一番最初に出会った時も、こんなふうな雨が降っていたんだよねあ）

口の中で低く呟く、レイフの眉が悲しげに寄せられる。

ハニー・ヘンダーソン。彼女と出会ったのは、レイフが9年生の春、三学期が始まったばかりの頃だった。

あの日もー。

雨の中を、レイフは1人、走っていた。フットボールのシーズンオフ、レイフは陸上部のエースとして出る大会の賞を総なめにする活躍ぶりだった。生憎の天気でクラブ練習はなくなったが、何となくじっとしていられなかった彼は、学校の周囲をぐるりとジョギングすることにしたのだ。

新校舎と旧校舎、学生寮や図書館、体育館、立派なホールまであ

るアーバン校の敷地は広い。入学したばかりの頃は、別の棟にある教室まで移動するにもレイフは何度か迷子になりかけた。

こんもりと木々が茂る公園のような広々とした敷地を軽快な身のこなしで走っていたレイフは、ふいに、視界の片隅に揺らめく影を捕らえた。

怪訝に思っ足を止め、何かが動いたような気がした方向を窺うと、歩道から外れた芝生の上、木々の間をふらふらと迷い歩いている女の子がいた。随分長い間雨に打たれていたのだろう、長い髪も白っぽいスカートもぐっしり濡れている。

（何、やってんだろ？）

それほど激しい雨ではないが、あんなになるまで打たれ続けたらさぞかし寒いだろう。病氣らしい病氣一つしたことのない丈夫なレイフは平気だが、普通は風邪をひく。

レイフはしばし立ち尽くしたまま、覚束なげな足取りであてどもなく歩いていく少女を眺めていたが、やがて意を決し、そちらへと方向転換した。見知らぬ女の子に自分から声をかけるなど、おくてのレイフはしたことはないが、何となく彼女をこのままにしておけなかったのだ。

「よお」

瞬く間に追いついたレイフがぶっきらぼうな声をかけると、少女は足を止めた。しばしばんやりと佇んでいたが、ゆっくりとレイフを振り返る。

雨に濡れた顔は案の定冷え切って青ざめていたが、レイフが思わず息を飲んだほど綺麗だった。癖のない長いアッシュブロンド。濡れたブラウスとスカートがまつわりついた華奢な体。陽炎のように捕らえどころがなくて、降りしきる雨の中に今にも溶け込んで消えてしまいそうなのはかなさだ。

「あんたさ、何やってんだよ？　びしょ濡れじゃねえか」

異性相手となるとつい緊張してしまうレイフの呼びかけは、彼女を威嚇しているように響いたかもしれない。しかし、少女は何の反

応も示さず、茫洋と焦点の定まらない瞳でレイフの方を見るともしに見ている。

「おい…？」

レイフにも、少女の様子がただ事でないことが分かってきた。

「何かあったのか…大丈夫かよ？」

レイフは眉をひそめると、ゆっくりと彼女に近づいていった。

「オレは、レイフ・オルソン。体でかいけどさ、これでもまだフレッシュマン（9年生）なんだぜ」

彼女を安心させようと人懐っこい笑みをうかべながらレイフが呼びかけると、全くの無症状だった紫の瞳に微かな光が灯った。

「わたし…私はハニー…」

夢から覚めたように瞬きをすると、レイフの心配そうな顔を見上げてハニーは薄く笑った。何かしら苦いものを感じさせる微笑にレイフは戸惑うが、その途端、ハニーは糸の切れた人形のように崩れ落ちた。

とっさに伸ばした腕でレイフが支えなければ、ハニーはぬかるんだ地面に倒れこんでいただろう。

「お、おいっ？」

レイフは動転しながら気を失ったハニーに呼びかけたが、何の反応もない。もしかしたら病気ではないのだろうかと焦ったレイフは、ぐったりしたハニーを抱きかかえて、近くにあった女子寮まで運んだ。

寮に入ってすぐの所にある談話室もかねたホールで、レイフが大声で助けを求めて叫ぶと、すぐに近くにいた寮生達は何事かと駆け寄ってきた。

「ハニー・ヘンダーソン」

レイフの腕におとなしく抱かれて目を閉じている少女を見ると、彼女らは一瞬驚いたもののすぐに落ち着いて、互いに目配せしあい、その内の誰かが寮の管理人を呼びに行った。

どうやら、ハニーは寮生だったらしい。とっさにここに運び込ん

で、正解だったわけだ。

「ああ、またハニーなのね。今度は何をしたの？」

「この雨の中をふらふらと歩いていたんですって」

ひそひそと囁きかわす少女達の様子から察するに、どうやら、この娘が同じような騒ぎを起こしたのは初めてではないようだった。

「あの背の高い赤毛の男の子が連れてきたんですって…」

「誰？ ハニーのボーイフレンド？」

「私、知ってるわよ。フットボール部で活躍してた双子の1人でしょ」

誰かが部屋から持ってきたバスタオルに包まれて、ぐったりとホールのソファに寝かされているハニーがどうにも気になって、レイフはすぐには立ち去りがたかった。しかし、ちらちらと自分の方を見ながら囁き交わしている他の女の子達の視線が気になって、ハニーの様子を確かめにいくことはできなかった。

「なあ：一体、あの子、どうしたんだよ」

その場にやってきた寮長らしいしっかりした上級生をレイフが捕まえて追求すると、素っ気無い答えが返ってきた。

「気にしなくてもいいのよ。ハニーの奇行は珍しくないの。情緒不安定で、時々今日みたいな騒ぎを起こすものだから、皆も慣れてしまったわ」

「慣れてって…」

慣れていいようなことじゃないだろうと一瞬言い返しかけたが、寮長の顔にかぶ複雑な表情に、レイフはぐっと黙り込んだ。

「普段は、ハニーもこんなじゃないのよ。授業にはちゃんと出ているし：話しかけてもいたって普通よ。ただ時々、自分がコントロールできなくなるみたいなの。でも、きっと大丈夫よ、カウンセラーにもちゃんとかかっているし…」

半ば自分に言い聞かせるような寮長の言葉に、レイフはやはり釈然としないものを覚えた。そんな彼に、傍で2人の話を漏れ聞いていた女の子が声をかける。

「たぶん、そうやって、他人の気を引きたいだけなのよ。あんたみたいは何も知らない親切な男の子なんて、いいカモみたいなものだから、気をつけなさいよ。ハニーって、あんなにおとなしげな綺麗な顔しているけど、実際ね…」

意地悪な口調でレイフに忠告めかした女の子は、寮長に睨まれて黙り込んだ。

「ごめんなさいね、うちの寮生のために迷惑かけちゃって」

「いや…」

そうこうするうちにハニーは気がついたようだ。寮生に肩を支えられながら上体を起こし、ここがどこなのか確認するように辺りを見渡している。その煙るような紫色の瞳が、レイフの上でふと止まった。

レイフは心臓が軽く跳ね上がるのを意識した。ハニーはレイフのことを、自分を助けた人間だと認識しただろうか。雨の中で短い言葉を交わしたことを覚えているだろうか。白い小さな顔にうかぶ空虚な表情からは何も分からなかった。

「それはそうと、ハニーが雨の中を1人でふらふら歩いていたなんて話、あまり言いふらしたりしないでね」

傍らの寮長に話しかけられて、レイフは慌ててそちらに注意を戻した。

「しねえよ」

レイフが黙っていても、きっと噂好きの女の子達が想像をたくましくして尾ひれをつけた話を広めそうな気はするけれど―。

やがて寮の管理人がやってくると、ハニーは体を支えられながら建物の奥へと歩いていった。じっと見送るレイフの方を、彼女は再び見ようとはしなかった。

「何だか、訳ありみたいだな、あの子」

「ああ…そうね…」

寮長は口ごもった。

「可哀想だとは思いうけれど、でも…彼女とはあまり関わりあいたく

ないのよ、皆。あなたもね、ハニーに変な好奇心なんて持たない方がいいわよ。今日のことも、早く忘れなさいね」

そう話を打ち切って、彼女はまだ納得し切れていないレイフの肩を軽く叩いて帰るよう促すと、ハニーを追いかけるように寮の奥へ消えていった。

レイフは後ろ髪を引かれながら寮から出て行ったが、あれからハニーがどうなったか、なぜあんなおかしい行動を取ったのか、どうして寮の女の子達が彼女を腫れ物のように扱うのか、気になって仕方なかった。

それからのレイフは、学校の中でも、ハニーの姿が見えないか常に目で探すようになり、生徒達の会話の中で彼女の名前が聞こえないか注意するようになった。

レイフはもともと自分の関心のあること以外は、片方の耳から入ってもう片方の耳から抜けていってしまうタイプで、噂やゴシップなどには疎かった。だから、それまで気づかなかったのだが、ハニー・ヘンダーソンという女生徒は学年が違っても名前だけは知っている者が多いちょっとした有名人のようだった。いや、問題児と呼んだ方がいいのかもしれない。

ハニーはレイフの一学年上。英才クラスに入っていたほど優秀な生徒だったのだが、ここ半年ばかり、急に成績が落ち、度々問題行動を繰り返していた。もともとは明るく朗らかな性格で友人も多かったが、急に人が変わったようになって、あまり柄のよくない連中と付き合うようになったという。

レイフにとっても少し意外だったのだが、家柄のいい優秀な生徒ばかりが集まるアーバン高校にも所謂不良グループがあるらしい。この頃のハニーが付き合うのは専らそういう連中なのだという。夜中に寮を抜け出しているかがわしいパーティーに行っているとか、悪い恋人がいるらしいとか、ハニー自身が淫乱でグループの男の誰とでも寝る女なのとか、どこまで本当か分からないが、そんな噂がまことしやかに囁かれていた。

だが、どうしてハニーがいきなり変わってしまったのか、本当の事情は誰も知らなかった。かつては親しかった友人達も、今のハニーとは距離を置いている。

レイフはずっと彼女のことを気になっていたが、その理由は自分でもよく分からなかった。最初に見た、今にも消えてなくなってしまうような危うげなハニーの姿に、奇妙なほど心乱されていた。自分と全く種類の違う人間に単に惹かれただけかもしれないし、もしかしたら、レイフ自身も少し情緒不安定になっていたからかもしれない。

入学してそろそろ1年になる学校に、レイフはいまだに馴染めず、それどころかどこにも居場所がないような疎外感を覚え始めていた。フットボールに夢中になっている時は気づかなかったのだが、それを離れると、むしろレイフは自分がここでは浮いていることに気づかざるを得なかったのだ。だからこそ、同じように学校から遊離しているハニーに引き付けられていったのかも知れない。

だが、それは一方的にレイフが彼女に対して覚えた淡い感情に過ぎなかった。恋とすら呼べなかったかもしれない。ただ気がつけばハニーのことをぼうつと考え、時々教室移動の最中に彼女の姿を見かけたり校舎の一角で擦れ違ったりする度に、密かに胸をときめかせていた。

レイフは黙って見つめるばかりで、決して声をかけなかった。ハニーは彼に気づく素振りすら見せなかった。

きっと、こんな他愛もない恋情は長く続かないだろう、じきに忘れ、彼女の姿を探し求めることもなくなるだろうとレイフは漠然と思っていた。

しかし、意外な展開がレイフを待ち受けていた。

突然、ハニーの方からレイフに近づいてきたのだ。学校生活に気詰まりなものを覚えて鬱屈としていたレイフに彼女は優しい声をかけ、一緒に気晴らしをしようと誘った。ハニーはレイフとの出会いを覚えていたし、彼が自分を意識していることも知っていた。しか

し、それまでレイフなど全く視界にも入っていないかのように無視していたハニーが、いきなり態度を変えたことには、いささか不自然さがあった。

懶惰な猫。二度目に言葉を交わした時のハニーの印象はそんなものだった。頭の中で勝手に膨らませていた清楚で儂げなイメージとは違って少し失望したが、レイフは彼女の誘いを何故か断れなかった。レイフに執拗に囁きかける彼女の声にもった不安そうな響きや、瞳に宿った切迫した光のせいかもしれないかった。

嫌な予感は覚えたが、結局レイフは彼女と付き合い始めた。そして、じきに自分の勘が正しかったことを最悪の形で思い知らされた。可哀想なハニーを悪く思うことは、今でもレイフはできないが、彼女がレイフを誘惑したのは好意からではない。それは、別の人物が仕掛けた罠だった。

ジェームズ・ブラック。当時学校内に巣くっていた不良グループを操り、大人の犯罪者顔負けの様々な逸脱行為にゲーム感覚で手を染めていた少年だ。

いつからあの怪物がレイフに目をつけていたのか知らないが、ハニーという餌を使って、彼はまんまとレイフを自分の手中に捕らえこんだのだ。

ぴしゃんと、レイフの足下で水溜りの水が跳ねた。

レイフは夢から覚めたような顔をして、足を止めた。いつの間にか、もう家の前まで来ていた。

前庭の芝生を横切り、家の脇の駐車場をひよいと覗き込むが、そこにクリスターの車はない。

「なんだ、兄貴の奴、まだ帰ってないのか」

思わず口をついて出た呟きが、我ながら落胆しているように聞こえて、レイフは恥ずかしくなっとうつむいた。

クリスターは今日も朝から出かけている。大学の研究室にこもって、担当の教授の指導のもと、何とかという科学コンテストに向けての研究をするためだ。一時は興味をなくした様子だったのに、結局、クリスターはコンテストに応募した。

（俺と一緒に将来はプロに進みたいから、これからはフットボールに専念するなんて言ったくせに…）

恨み言など言いたくないレイフだが、この頃のクリスターの態度を見ていると、ともすれば口をついて出そうになる。

（嘘つきめ）

大会で優勝した高揚感もまだ冷めやらなかったクリスマスのパーティーで、クリスターは確かに約束してくれた。一時の感情や気まぐれで動くような兄ではないから、ようやく決心してくれたのだとレイフは素直に彼の言葉を信じた。

これからは全てが変わるだろう。日々、クリスターと同じ夢を語り合い、共に計画を立てて、それに向かって後はひたすら邁進していく。もう将来について迷うことも漠然とした不安にかられることもない。この先もずっと、2人は一緒に生きていくのだ。

しかし、実際は何一つ以前と変わらなかった。クリスターは相変わらず生徒会や勉強や、レイフの知らない付き合いで忙しく、フットボールのシーズンが終わってからはずっと擦れ違っただけだ。大学の下見は、約束どおり2人で行った。だが、その時もクリスターにはあまり熱意が感じられず、どこの学校にしようかと煮詰めることもなく結論は先送り状態だ。

（オレは、フットボールに夢中になっている頃も、いずれシーズンは終わるんだと考えるといつも憂鬱になった。だってさ、シーズン以外のクリスターはまるで他人みたいに遠くて、フットボールと一緒にオレの存在も忘れちゃったみたいに見えるから…でも今年は違うんだって、すぐく期待してたのにさ）

一度は確かに掴んだはずの半身の心がまた遠のいてしまったことに、レイフは激しく失望している。

ふと、クリスタが家に戻ってきたら、一体約束はどうなったんだと胸倉を掴んで詰め寄ってやろうかと思った。だが、そんなこと、たぶんレイフはしないだろう。

（クリスタの本音を聞くのはやっぱり怖いよ…もしも、あいつがオレとの約束を反故にして、やっぱりオレから離れていくつもりだなんて知ったら…もう、どうしたらいいか分からない…あいつを失うなんて、絶対に嫌だ。なあ、クリスタ、教えてくれよ。オレはどうすればいい…？ おまえが言うとおりに何でもするから、ひざまずくから…オレを1人にしないでくれ）

レイフは鍵を開けてまだ誰も帰っていない家の中に入り、薄暗い玄関にぼんやり立ち尽くした。

（オレは、自分でも滑稽なくらいクリスタに執着している。でも、きつと…クリスタだって、同じはずなんだ。あいつはオレと違って感情をうまく隠し通せるから、時々オレでさえ騙されそうになるけれど…そうだ、大丈夫、あいつはオレから離れていきやしない、そんなこと、できるものか。クリスタが本気になるのは、オレに對してだけだ。あいつがハニーをオレから取り上げたのも…いや、あれは仕方のなかったことなんだから、恨んだりなんかしてねえよ―そう、それからJ・Bと対決したのも、みんなオレのためだった。いつだって、あいつは、オレのためにしか動かない）

ここまで思いつめて我に返ったレイフは、強烈な自己嫌悪に駆られ、苦々しげに頭を振った。

（ああ、すっげえ思い上がり…いや、こんなことを自分に言い聞かせなきゃならないほど、結局オレは自分に自信が持てないってことなんだろうな。クリスタの考えることが分からなくなったくらいで不安になったりさあ…いつまでもガキみたいにあいつにしがみつこうとする。いい加減大人になればよ、レイフ…あいつの言う通りさ。こんな駄目な弟を持って、クリスタも苦労するよな。ほんとに、オレ、あいつにずっと迷惑かけっぱなしだもんな…高校に上がってからは特にさあ。ぐれかけておかしな連中とつきあった挙句、フツ

トボール・チームまで辞めさせられそうになったり：ハニーのことでもさ、あいつに余計な重荷を背負わせちゃった…）

またしても蘇ってきた重苦しい後悔の念に、レイフは我知らず拳をきつく握り締めた。

（オレのせいで、クリスターにあんな危ない橋を渡らせちゃった）

ハニーとの出会いや関わりあい方には、懐かしく甘い記憶よりも悔いの方が多く残る。だが、レイフが一番後悔しているのは、彼女と出会ったことそのものよりも、自分が招いたトラブルにクリスターを巻き込んでしまったこと―彼をJ・Bと闘わせてしまったことだ。

（オレが馬鹿だったから、あんな奴につけこまれる隙を作ったから、クリスターまで…オレがしっかりしていれば何も起こらなかった。弱みを捕まれてゆすられたからって、J・Bの言いなりになることはなかった。ハニーが好きなら好きで、男らしく行動して、クリスターの手助けなんかはねつけて、自分の手で彼女をJ・Bから救い出せばよかったんだ。おかげで、オレは、クリスターに大きな借りができちゃった…いや、借りを作ったなんてあいつは考えてないだろうな。きつと、当然のことをしただけだって思ってる。でも、オレには、クリスターのために、あの時あいつがしたのと同じことができるかなんて分からない…大切な人のために命をかけるって、口で言うほど容易くないんだ。あいつは、オレより先に証明しちゃった…そのことで、オレは、ああ、こいつには敵わないって思っちゃった。いざって時に、オレはどこまで、あいつのために体をはれるだろう…あいつの本気を見せ付けられると、自信なんかなくしちゃう。たぶん、オレは…このままじゃ、一生かかったって、クリスターには勝てない）

その時、濡れた路面を走ってくる車の音が外に聞こえ、それが家の駐車場に入ってくるのが分かった。レイフの顔は一瞬輝いたが、すぐにまた翳った。

（クリスター…）

レイフは玄関の扉を凝然と眺めながら、このままここで兄を出迎え、大声をあげて驚かせてやろうかと子供じみた悪戯を思った。レイフが普段どおりに接すれば、クリスターもいつもと同じ反応を返してくれるだろう。しかし、抱え込んだ煩悶の深さから、何となく兄と顔をあわせづらく、結局レイフはそのまま逃げるように二階へ上がっていった。

こんなふうには避けたりして、最近クリスターとの間に流れる気詰まりな雰囲気有助長するだけだが、顔を突き合わせ言葉を交わしながらも相手と心を通わすことができず寂しい思いをするのなら、会わない方がいい。

（こんなの全くオレ達らしくない。昔は、言葉なんかなくたって、いつだって、お互いの気持ちは通じ合っていた）

クリスターと心も体も擦れ違うことが多くなかったこの頃、レイフは、兄と向き合う態度にも気持ちにも、自信をなくしかけている。（駄目だ、このままでいい訳がない。何とかしなくちゃならない…それは、オレも分かっているんだけどー）

2人の間にある見えない絆を、単純に信じていられた子供時代とは違う。2人とも、もうじき18才になる。大人として自立しなければならぬ年だ。

しかし、幼い頃、確かに彼らのものだった2人だけの小さな樂園への憧憬はいまだに強い。互いに補完しあい、一緒にいさえすれば他に必要なものなど何一つ思い浮かばないほど満たされることができる、それは、まるで閉ざされた円環のような完璧な関係だ。

だが、どれほど完璧なように思われても、全く変わらない関係などない。レイフもクリスターもどんどん成長していき、それぞれ考え方も感じ方も、取り巻く環境も変わっていく。変化を頑なに拒み続けるならば、そんな関係はもう壊れるしかない。

（オレ達は変わらなきゃならない。でも、どう変わればいいんだろう…一体どんなふうになれば、うまくいくのか）

レイフは何かしら追い詰められたような気分になってきた。

こういうことを真剣に考え出すと、胸の奥底に封じ込んだ記憶が蘇りそうになって、レイフを混乱させる。クリスターとレイフがずっと直視することを避け続けてきた、あの一度だけの過ちを、今更2人の間で蒸し返すことなどできない。

分かっている。2人とも、あそこには戻ってはならない。

（結局勇気を出して変えてみようとしても、それがいい方に転ぶか悪い方に転ぶか分かんねえから、踏ん切りがつかないんだよな）

一線を越えてしまった後も何一つ変わらない振りをして、ただの兄弟として今まで接してきた。それでうまく回ってきた。危うい均衡の上に成り立ったこの平穏な関係を、あえて変えてしまうことで、果たして何が起こるのか――。

（恐い）

自分の部屋に逃げ込んだレイフが扉に背中を押し付けるようにして立ったまま、悶々と悩み続けていると、家に戻ってきたクリスターが2階に上がってくる気配がした。

レイフがじっと耳を澄ましていると、足音はレイフの部屋の前でとまった。

声をかけてくるかと思ったが、結局、クリスターは何も言わず、そのままレイフの部屋の前を通り過ぎ、自分の部屋に入っていた。緊張が途切れ、レイフは肩で大きく息をついた。それから、顔をしかめた。

「何で、クリスター相手にオレが緊張なんかする必要があるんだよ……！」

何もかもがもどかしく、無性にいらついて、レイフは思わず激しく吐き捨てていた。

第3章唯一の絶対（2）

僕の中には、誰も知らない、たぎるような熱があって、それはともすればうまく取り繕った表面を突き破り噴出しそうになる。

制御しきれない、この過剰なものを、僕は一体いつから抱え込んだのか。

激情を解き放ってはならない。身を任してはならない。僕を統御するのは、僕自身だ。

だが、時として――どんな意思の力も及ばぬほどに僕の中に封じ込まれた狂熱は手強く、抑えても抑えてもなお噴きあがり、僕を圧する。

「この本なんか、心理学の入門としてはお勧めだよ……これもいいな……。担当はブラン先生だったね？ それなら、たぶん資料に使われるのはこの辺りだろうな、著者を気に入っているようなんだ」

書架のかなり高い所にある本のタイトルを吟味しながら、クリスターは何冊かピックアップしたものを抜き取って、傍らのダニエルに手渡していく。新学期が始まって、以前クリスターが選択していたのと同じ心理学の授業を受けることにしたダニエルのため、この日クラブが終わった後、学校の図書館に立ち寄って、役に立ちそうな本を探してやっているのだ。

じっとその様子を眺めていたダニエルは、ふいに思い立ったかのように背伸びをして手を上げてみたが、やはり目当ての棚までは届かない。

「：背、高いって、いいですね」

「うん？」

クリスターが軽く首を傾げて問い返すと、ダニエルはうかつなことを漏らしたというように慌てて口を押さえた。

「な、何でもないです。ただ、ちょっと羨ましいなって思っただけで：僕はクラスメートと比べてもあまり体格には恵まれてないですから」

「まだ十五才で、体のできあがってない君は、心配しなくても背くらいもう少し伸びると思うよ」

「そうかなあ…」

別にスポーツをやっているわけでもないし、僕くらいの身長が欲しいわけじゃないだろうとクリスターは一瞬言いかけたが、これもダニエルのいつもの同化願望なのだろうかと思いついて、やめた。

ダニエルがクリスターに向けてくる好意は相変わらずひたむきで、二才違いの友人としてクラブの仲間としてのスタンスをずっと保ち続けているクリスターを時に落ち着かなくさせる。

憧れの対象を持ち、それに少しでも近づきたいという願望を持つのは思春期にはよくあることだ。賢いダニエルは決して自分の気持ちをクリスターに押し付けることないので、その点感情的な女の子との付き合いよりはるかに楽だが、その綺麗に澄んだ瞳にはどれほど理想化された自分が映っているのかと考えるとクリスターは複雑な気分になった。

偶像崇拜は恋とは違う。ダニエルの幼い擬似恋愛に応えるつもりは、やはりクリスターにはなかった。

「レイフさんにも、そう言えば、同じようなことは言われましたね。励ましてくれるのはいいんだけど、あの人、子犬でも扱うみたい僕に僕の頭をがしがし撫でるんですね。あの癖、何とかしてほしいうって思うんですけれど…」

「レイフに言っておくよ」

「レイフさんは、今日は…?」

「さあ。陸上部の練習はもう終わったろうから、先に帰ったんじゃないかな」

クリスターはこつこつ溜めたアルバイト料で最近新しい車を買ったので、今まで二人で使っていた車はレイフに譲った。フットボー

ルのシーズンが終われば別々に行動することが多い二人には、確かにその方が何かと便利ではある。

「レイフさんはどうして：クリスターさんと同じボクシング部に入らなかったんでしょうね。あの人、格闘技も好きそうなのに」

「今学期は他の部に入ろうかとは言っていたけれど、何しろ陸上の記録保持者だからね、コーチ連中がなかなか手放してくれなかったんだろうと思うよ。それに、格闘技なら、今でも柔道の道場に通っているし：」

「クリスターさんもちょっと前まで習ってたんですよね、柔道。レイフさんとどっちが強いんですか？」

「レイフ。あれでも一応有段者だ」

「そうなんですか？」

「：そのはずなんだけれどね。レイフは、僕が相手だと手を抜くというか、怯むみたいなんだ。実力は僕よりあるはずなのに、気持ちの部分で初めから負けを決めている：無意識のうちに自分にブロックをかけて、力をセーブしてしまうんだ。僕は中学卒業と同時に柔道をやめたんだけど、振り返って考えればそれでよかったんだと思うよ。僕がいなくなってから、レイフは実際どんどん力をつけていったし」

そう言いながら、クリスターは密かに苦笑いしていた。もう少し注意を払っていれば、もっと早くに気づけたはずだ。柔道だけでなくフットボールでも同じこと。レイフの才能を伸ばすためには、クリスターの存在はむしろ邪魔になっている。

（もしもあのままずっと気づかなければ：僕は何の迷いもためらいもなく、レイフとの約束を果たすことに専念していたんだろうな）

クリスターの脳裏を去年のフットボールの決勝戦やクリスマス・パーティーでの記憶がかすめていった。同じ夢を追いながら、この先も一緒に生きていこう―勇気を出してやっとレイフに伝えることができた。その言葉に対するレイフの無邪気な喜びよう、輝くような笑顔、体にしっかりと回された腕の苦しいほどの感触―既に遠い

昔のこのようなだが、箱にしまわれた大切な宝物のようなきらきらとした輝きをクリスターの胸の中で放っている。

思い出はしかし潮が引くようにクリスターから遠のき、レイフの代わりに、今この図書館の中で傍らに立っているダニエルの澄んだ声が聞こえてきた。

「レイフさんはクリスターさんのことが好きすぎて、戦えと言われても、手も足も出せないんでしょうね。そう言えば、ボクシングの試合があっても、めったに見に来ませんよね」

クリスターはまだ少し現実に馴染めずにいたが、そんな気振りも見せず、ダニエルに答えた。

「レイフいわく、僕が出る試合は心臓に悪いそうだよ。僕が他人に殴りかかれるのをおとなしく椅子に坐って観戦なんかできない、リングの上に乱入したくて尻がもじもじするんだって」

「あはは、何ですか、それ」

冗談めかして言うと、ダニエルにはうけたようだが、クリスターは内心暗鬱たる気分だった。

レイフは、将来プロ・フットボールの選手になるという夢を持っている。幸い、潜在的な能力は充分に備えている彼のことだ。本気になって邁進すれば、夢は現実に変えられるだろう。だが、今のような弱気な姿勢では、厳しいプロの世界でやっていけるはずがない。（あいつは、僕が傍にいる限り、いつまでも僕に頼ろうとする。ああ、それでも、僕にレイフを引っ張って頂点まで上り詰めることができるほどの力が本当にあれば、このまま2人で行ける所まで行ってみてもよかったのかもしれない。でも、実際には、そうじゃない。本気で頂上を目指したいなら、レイフは僕ばかり見てはいけないんだ）

レイフと一緒にプロを目指すというクリスターの夢は、水をすくうように指の間からこぼれ去っていた。

クリスターは一瞬、傍らで自分の様子を窺っているダニエルの存在も忘れ、手にした本の表紙に視線を落としながら重い溜息をつい

た。

「クリスターさん、今日は無理を言ってすみせん。生徒会の後はボクシング部の練習もあって、疲れてるでしょうに、僕のために…」
「どこことなく憂鬱そうなクリスターの態度を疲労のためと理解したのか、ダニエルはすまなそうに詫びた。

「いや、別に疲れてなんかいないよ。ボクシングは、僕にとって、余剰のエネルギーを発散させるためのものだから」

クリスターが優しく微笑みながら振り返ると、ダニエルは眩しいものを見るかのように目を細め、薄っすらと顔を赤くした。

「そういうところはやっぱりレイフさんに似ているんですね。エネルギーがありあまって、じっとなんかしていられないって、しょっちゅう言ってますものね、レイフさんって」

ダニエルの指摘にクリスターは苦笑した。

「あそこまで落ち着きがないことはないと思うけれどね。でも、確かに何日も動かずにいるのは僕にとっても苦痛かな。スポーツ以外に何もすることがないわけではない、むしろ、考えることはたくさんあって、いつでも頭の中は沸騰しそうなほどなのに、それだけでは昇華しきれないものがある。体の中にこもった熱をそのまま放っておくと、どんどん溜まっていつて爆発しそうになるんだ。レイフはずっとスポーツ一筋でとにかく動いていれば満足できるけれど、ぼくの場合はそうはいかない。頭も体も絶えず使っていないと、何だか気持ち悪くてね」

ふともらしたクリスターの言葉にダニエルはじつと耳を傾けていたが、やがて、思い切ったように口を開いた。

「それにしあって、クリスターさんは少しがんばりすぎるような気がしますよ。単純にスポーツ馬鹿で、体を動かすことに夢中になっている間に限って、常識外れな天井知らずの力を発揮するレイフさんとも違う。興味を覚えたことには何でも手当たり次第に挑戦して、しかも全力を注ぐ…別にあなたにとっては無理なことじゃないのかもしれませんが、何だか…あえて余裕を削って自分を追い込んで

いるように見える時があります」

クリスターは僅かに目を見開いて、ダニエルの一途そうな顔をつくづくと見下ろした。

「…そうなのかい？」

ダニエルは躊躇いがちに続けた。

「前から：少し気にはなっていたことなんですけど：どうして、そんなに忙しくする必要があるのになって。どんなに勤勉で努力家の人でも、普通なら、たまには何もする気にならなくなってぐったりしたり、手を抜いたり、息切れする前に立ち止まって休んだりするものだと思います。でも、あなたは、いつも百パーセントの力を出し切ろうとしているみたいで：このまま走り続けて本当に大丈夫なんだろうかって、時々心配になるんです」

さすがに好きだと言う相手のことはよく観察しているなど、クリスターはダニエルの鋭さに少し感心した。思っていたほど恋に目がくらんで盲目になっていくわけでもなさそうだ。それとも、自分の方に本当に余裕がなくなってきた、ともすれば他人に隙を見せてしまうということだろうか。

心当たりがないわけではない。この頃のクリスターは以前にも増して、立ち止まって無為な時間を持つことに不安を覚えている。だから、ついつい自分に無理を強いてしまう。

「余裕ができれば、つい余計なことを考えてしまうからね」

「え？」

ダニエルの気遣わしげな顔から視線を逸らし、クリスターは書架に並んだ本の背表紙に指を滑らせながら考えに沈んだ。

（ダニエルに指摘されるまでもなく、本当は僕にも分かっている。これが、他人に対してなら、僕もダニエルと同じ忠告をしただろう。少しは休まないと、おまえ自身がそのうち壊れてしまうと：ぎりぎりに引き絞られた弦は切れやすい、当たり前のことだ。けれど、今の僕は、自分の中にあそびの部分など欲しくないんだ。隙間なくきちぎちぎにつめこんで、頭脳も肉体も限界近くまで自分を追い込んで

：そうすれば、さすがに心身ともにくたくたに疲れきって、夜になっても、ぐっすりと眠れるからね。夢も見ないほどの深い眠りの中でなら、僕も安心して休むことができる」

実のところ、クリスターの体調はあまりよくない。去年の暮れ辺りから始まった不眠症に今でも度々悩まされている。もともと体力はあつて徹夜が数日続いたくらいでは平気なクリスターなのだが、さすがに限度はあるし、それによって集中力が途切れたり思考が停滞したりするのは、やはり困る。

「クリスターさん、あの…」

背後からかけられた、か細い声にクリスターは我に返った。

「ああ、すまない、ダニエル：つい、ぼんやりしてしまって…」

これ以上ダニエルに心配させるのも心苦しいので、クリスターは散漫なものになっていきそうな思考力をかき集め、何事もなかったかのような笑顔を作った。

「僕は、大丈夫だから。心配しなくてもいいんだよ、ダニエル」

半ば自分に言い聞かせるように、クリスターは言った。

ダニエルは何か言いたげに震える小さな唇を噛み締めた。

クリスターも黙りこんだ。

向き合ったままの二人の間に、しばし、ぎこちない沈黙が流れた。

「よお：書架の間の狭い通路を二人で塞いで、何やってんだよ、おまえら？」

揶揄するような声がかけられるのに、クリスターは視線を横に流した。

小脇に数冊の本を抱え込んで、にやにやと笑いながら通路の端に立っているのは新聞部のアイザックだ。

「どこかで聞いたような声がするからここを覗いてみたら、おまえらがやけに親密な雰囲気で見詰め合ってるんだものな。ちよつと焦ったぜ」

「頼むから、おかしい記事にはしないでくれよ、ジャーナリスト君」
クリスターはほっとしたような気分で、眼鏡のブリッジを指先で

押し上げながらこちらに近づいてくる友人に話しかけた。

「だから、俺はゴシップなんか書かないの。どうせなら、おまえの次のボクシングの試合の記事を書きたいな。そうだ、今のこと黙っていてやる代わりに俺のインタビューに応えろよ」

「本場にちゃっかりしているな。大体、今のことって、何なんだよ」
馴れ馴れしげに肩を抱いてくるアイザックの腹に、クリスターは軽く拳を打ちこんでやった。アイザックは大げさにうめいて、おろおろしているダニエルの上に倒れ掛かる。

「おっ、久しぶりだな、ダニエル。相変わらずクリスターにべったりくっついて、まるでこいつのマネージャーか何かみたいだよな。ボクシング部でも一緒なんだって？」

「せめて、トレーナーとかセコンドくらい言ってください」

ダニエルは怒ったように頬を膨らませながら、頭を撫でようとするアイザックの手を邪険に払いのけた。

「以前に比べて少しは性格がまろくなったかと思ったら、クリスター以外の奴には、やっぱりきついんだよな」

アイザックは苦笑しながらダニエルから離れ、このやり取りを面白そうに腕を組んで眺めていたクリスターに向き直った。

「さてと」

アイザックは意味ありげに片目を瞑ってみせた。

「実は、おまえに話すことがあるんだよ、クリスター。本当なら新学期が始まってすぐにおまえを捕まえたかったんだが、なかなか機会がなくなっただけ。ここで出会えて、丁度よかった」

クリスターはすっと目を細めた。アイザックがわざわざ自分を捕まえて伝えたがる話と言え、J・Bの件しか思いつかない。何か新しい情報を掴んだのだろうか。

「それは…ダニエルにも聞かせていいようなことか？」

「そうだなあ」

アイザックは迷うように、ちらっとダニエルの顔を見た。

「いや、たぶん、耳に入れておいた方がいいだろう。こいつも、例

の事件の当事者の1人ではあるんだからな」

「そうか」

クリスターはまだ少しダニエルを巻き込むことに躊躇いを覚えたが、彼が意思的な瞳を輝かせて深々と頷くのに、心を決めた。

「それじゃあ、寮のカフェテリアに行きましようか。この時間ならあまり混んではないと思います」

ダニエルの提案に従って、三人は場所を移動することにした。アイザックの言葉とそれに対するクリスターの受け答えから、ダニエルは早くもどういう内容の話になるのかピンときたらしい。余計な質問をしようとはしなかった。

夜の九時まで使える寮のカフェテリア。談笑している他の寮生達からなるべく遠い場所にある隅のテーブルに落ち着くや、アイザックは切り出した。

「ずばり話の核心から入らせてもらうぜ。ジェームズ・ブラックが、矯正施設から出所した」

ダニエルが思わず息を吸い込む音を聞きながら、クリスターは冷静に問い返した。

「いつ？」

「一月の頭だったそうだな。今は保護観察中の身で、定められた現住所から動くこともできないが、その期間が問題なく過ぎれば、完全に自由の身になる。復学にも就職にも、法的な制限はない」

堪えきれなくなったかのように、ダニエルが口を挟んだ。

「保護観察ってどのくらいの期間なんですか？」

「確か、基本は半年だったと思うが、担当の監察官の承認があれば短縮されることもある」

「J・Bは、在学中は、確か家を借りて一人暮らしをしながら学校に通っているという話を聞いたような気がするけれど…」

「ああ、今戻っているのは親元だろうよ。さすがに出所したばかりじゃ、一人暮らしをするまでの自由は得られないさ」

「彼の実家って…？」

ずっと黙り込んで考えを巡らせているクリスターに、アイザックは話を振ってきた。

「実家：っていうと、やっぱ、あそこになんのかな？ 確か父親はまだ健在だったよな、俺達が奴について色々調べまわってた頃は？」
「ああ」

クリスターはアイザックに向けて軽く頷くと、心配そうなダニエルに視線を移した。

「J・Bは、ベルモント市の郊外にある古い街の出身でね、地元では名家として知られる一族なんだそうさ」

「そこに行けや、誰もが知ってる大きなお屋敷があるんだよ。アメリカの格差社会の現実を目の当たりにするような豪邸さ。奴が戻るとすれば、たぶん、あそこだろうな」

「近いじゃないですか、ここからでも」

ダニエルは寒気を覚えたかのように細い肩を抱いて、小さく身震いした。

「おやおや、ダニエル君はJ・Bが恐いのかな」

アイザックがからかうと、ダニエルは勝気そうな眉を吊り上げて言い返した。

「別に恐がっているわけじゃないですよ。ただ：今まで忘れかけていたものを色々思い出して、ちょっとぞっとしたんです」

「アイザック」

クリスターに唐突に呼びかけられて、アイザックは怪訝そうに顔を上げた。

「春休み中に、君はこういうことを色々調べあげていたのかい？」

J・Bのいた施設に出向いたりして？」

「ああ」

「僕は：確かに去年一度、君に彼の動向を調べてくれるよう頼んだけれど、今度は別に何も言っていなかった。それなのに、わざわざ調査を続けたのかい？」

アイザックは面食らったような顔をした。

「何だよ、おまえが知りたがるだろうと思って、気を利かせて調べてきてやったのに、何が気に入らないんだよ」

「気に入るとか入らないとかの問題じゃない。アイザック、まさかと思うけれど、出所した後のJ・Bに接触するなんて馬鹿な真似はしなかっただろうね？ 分かっているだろうが、彼は危険だ…安易に近づいて、気がつけば彼の術中にはまっていたという話を、僕らはJ・Bの被害者達から散々聞かされたはずだ」

「へえ」

アイザックはぱちぱちと瞬きしたかと思うと、くすぐったそうに頬の辺りを引っかいた。

「おまえ、俺のこと、心配してくれてるのかよ。ちょっと意外だな。レイフ以外の人間なんか、おまえにとって価値はないのかと思ってた」

「そういう棘のある言い方はよせよ」

クリスターは溜息をついた。

「僕にとっては、君やダニエル、かつて行動を共にしたコリンやミシェルも大切な仲間だよ。共にJ・Bと戦った戦友と言ってもいい。あの時は幸い誰も傷つかずにすんだ。平和な日常生活に戻っている今、僕はこの上、君達のうち誰一人として危険にさらしたくはない」

「おまえはやっぱりJ・Bが俺達に復讐してくるって信じているんだな」

「復讐というのは少し違うかもしれない。それに、彼がターゲットにしてくるのは、たぶん僕だけだ」

「どうして、そう思うんだ？」

「去年のクリスマスにJ・Bからカードをもらったんだよ。ごく簡単なメッセージが走り書きされていたんだけど、意図することは分かった。あれは僕への挑戦状だったんだ。彼にとって、ゲームはまだ終わっていない。僕を攻略して打ち負かすために、彼は必ずもう一度現れる」

そう語るクリスターの口元にうかんだほのかな喜悦にアイザック

は眉をひそめた。

「えらく楽しそうに話すんだな。それって、かなりやばい状況だと思うぜ？ 大体、奴からカードが来ていたなんて大事な話、今まで俺達には黙っていたのかよ」

「言っただろう、僕は、君達を巻き込みたくないと思っている。あの時は：僕と君らの間には利害の一致があった。J・Bの犯罪行為の証拠を掴んで学校から追い出したいという君らと共闘することのためらいはなかった。だが、今回は：僕と彼との個人的な争いになる。もしも僕に関わらないことで君らに累が及ぶことを避けられるのなら、その方がいいのかもしれない」

「クリスター、おまえって、意外と甘いことを考えるんだよな」

アイザックは皮肉っぽく言いながら、クリスターの胸に指を突きつけるような仕草をした。

「今更、俺達を巻き込むも巻き込まないもないだろう。あの時もそうだったように、今でも俺達は立派な当事者だ。俺は、何もおまえのためだけに、J・Bのその後の状況なんか調べたわけじゃない。自分にも関わりのあることだから、気になったんだ。あいつが閉じ込められていた牢獄から出てきて、おまえにもう一度挑みかけるつもりだっていうなら、どうしたって関係のない顔なんかできるものか。大体、あのJ・Bが俺達を見逃してくれるはずがないぜ。例えば主なターゲットがおまえであって、残りは雑魚に過ぎなくてもさ。あいつを追い詰めるのに一役買った人間はことごとく狙われるだろう。だからさ、俺は、今回もおまえについて、協力してやる。俺の情報収集能力は高く評価してくれてるんだったよな？ だったら遠慮なく使ってくれればいいんだぜ、そうすることで俺も自分を守れるわけだから」

「アイザック：」

クリスターはしばし逡巡したが、癖のあるにやにや笑いを浮かべながらも、真剣な目で自分を睨みつけているアイザックに、ついに根負けしたように頷き返した。

「分かったよ。君がそこまで言うなら、今回も助けてもらうよ」

「それじゃ僕も仲間に入れてもらいます」

決然とした声で二人の話に割って入ってくるダニエルに、クリスターはすぐに応えることができなかった。

クリスターにとつて、ダニエルはまだほんの子供のようなものだ。一度ならず二度までもJ・Bなどに関わらせるのは、やはり忍びない。ましてや、ダニエルの動機は、憧れのクリスターに認められたいとか、彼のために働きたいとかという幼い恋心からきている。基本的に頭のいい子だが、実際何をするか予想もつかない時があり、扱いにくい。

「やめときな、足手まといだよ」

クリスターが口を開く前に、アイザックがダニエルの方に身を乗り出し、にべもなく言った。

「おまえみたいなか弱い坊やの出る幕じゃないぜ。俺がこの話をおまえの耳に入れた方がいいと思ったのは、あの事件に関わった者として用心深く行動するよう促すためだ。J・Bが本気で復讐のために舞い戻ってくるつもりなら、尚更おまえは奴の目に付かないようにするべきだ」

「アイザック、あなたの言うことは矛盾していますよ。さっきは、クリスターさんに対して、自分は今でも立派な当事者なんだから、協力させてくれなんて言ったくせに。僕だって同じです。自分だけはJ・Bに見逃してもらえるなんて希望的観測はしません。それに、前の時はコリンやミシエルという頼もしい仲間がいたけれど、今、彼らは近くにいない。二人だけで、一体何ができるって言うんです？ J・Bだって、きっと……一人だけで行動することはない、かつての仲間をかき集めて、使おうとするでしょう。退学処分になった連中はともかく、何食わぬ顔をして学校生活を続けている奴らもいる……皆が皆、J・Bの強力な呪縛から解かれてるなんて思わない方がいい。彼らの動きを見張るためにも、この際、協力者は多いに越したことはないんじゃないですか」

「う…む…それはまあ一理あるけどさ…」

ダニエルの論客ぶりに、アイザックもとっさに言い返す言葉が見つからず、口をつぐんだ。そうして、急に気になったかのように周りのテーブルをさっと見渡す。確かに、学校内という身近な場所にJ・Bと通じている人間がいるという考えは、ぞっとしない。

クリスマスに送られてきたカードを思い起こしながら、案外J・B自身は遠くにあっても、彼が密かに伸ばしていた触手は既に身近な所にまで達しているのかもしれないという思いを、クリスターは噛み締めていた。

「クリスターさん」

ダニエルの強い調子の声に促されたクリスターは、一瞬危なげなものを見るかのような思いで彼に氣遣わしげな目を向けた後、言った。

「決して無茶はしないと約束できるかい？」

ダニエルの目の周りがさっと紅潮した。

「は、はいっ」

その様子にまた少し不安をかきたてられたが、クリスターはそれ以上ダニエルを制止することはあきらめた。

（この子は、僕に完全に拒否されたら、自分一人で勝手に行動してしまうだろう。そのくらいなら、僕の目の届く所に常に置いて、先走ったまねはしないよう気を配ってあげた方がいい）

一緒に行動する機会が多いせい、クリスマスはダニエルに次第に情が移ってきていた。意識的にレイフを避けるようになり、かと言って、気晴らしに女の子と付き合うのも面倒になってきたこの頃、黙っていてもこちらの気持ちを察してくれるダニエルというのは楽しい。

「それじゃ、取り合えず三人で組むとして…コリンとミシエルはどうする？」

どうやらアイザックもダニエルを爪弾きにするのはあきらめたらしい。

「彼らは二人とも、今はエール大学だったかな」

「ああ、一緒に部屋を借りて大学に通っているって話だぜ」

「卒業後もずっと付き合っているんだ」

そう言いながら、クリスターは、初めて彼らと知り合いになった頃は、ミシエルと付き合っていたのはアイザックだったことを思い出した。しかし、J・Bの事件が片付いてしばらくした頃、ミシエルはアイザックと別れてコリンを選んだのだ。クリスターは事件の後は新聞部の連中とは距離を置いていたので、詳しい事情は知らない。アイザックが、自分の親友と付き合いだしたかつての恋人をどう思っているのかも。

「彼らとは：今でも連絡を取りあっているのか？」

「そうしょっちゅうって訳じゃないけれど、たまにコリンから電話がかかってくることはあるよ」

「そうか」

クリスターは首を傾げてしばし考え込んだ。

「二人にも、J・Bの出所については知らせた方がいいだろうな。」

コリンなら、警告さえ与えておけば、自分達の身辺くらい守れるだろう」

「なら、俺から連絡しておくよ」

アイザックはさりとて言うのと、両膝を軽く手で打ち叩いて、おもむろに椅子から立ち上がった。

「それじゃ、俺はもう行くぜ。新聞部の部室には時々顔を出せよ、クリスター。ボクシングの試合のインタビューとか口実にして、定期的に相談できるだろう？」

「君にとっては一石二鳥だな」

アイザックの抜け目のなさに呆れながらも、クリスターは笑って返した。今回は一人で戦うことを覚悟していたクリスターだが、やはり頼もしい仲間が傍にいいことだと思っていた。

「次の試合、がんばれよ」

軽くクリスターの肩を叩いて先にカフェテリアを出て行くアイザ

ツクの背中を見送った後、彼は難しい顔でじつと何事か考え込んでいるダニエルを振り返った。

「ダニエル」

クリスターが呼びかけると、ダニエルは細い肩をびくつと震わせた。

「そんなふうに構えなくても大丈夫だよ。まさか保護観察中のJ・B本人がいきなりここに乗り込んでくることはないだろうし、君は今までと変わらない学校生活を送ればいいんだ。僕も、何もわざわざ彼を訪ねていくような無意味なことはいらない。しばらくは相手の出方を窺うつもりだ。もちろん身の回りに何かおかしい動きはないか、注意を払っていた方がいいけどね」

「はい…」

胸の奥でさざなみ立つ不安をクリスターに見透かされたと思ったのだろうか、ダニエルは恥じ入るように目を伏せた。

だが、J・Bを少なからず知る人間ならば、彼と対峙することを恐れるのは当たり前だ。ダニエルの怯えは、なんら恥ずべきものではない。

（むしろ、おかしいのは僕の方だ。あのクリスマスのカードを受け取った時も、そうだった。アイザックからJ・Bがやっと自由の身になったという知らせを聞いて、僕は今すぐ高揚している…喜んでいえると言っていないくらいだ）

クリスターは椅子から身を起こし、しゅんとうなだれているダニエルの頭を軽く小突いてやった。

「そろそろカフェテリアも閉まる時間だよ。君も部屋に戻って、明日の授業の予習でもした方がいい。明日の放課後、ボクシング部の部室でまた会おう」

クリスターが親しげな声をかけると、ダニエルは素直に頷いて、にっこりと笑い返してきた。

ふと、やはりダニエルを巻き込んではないのではという迷いがクリスターの頭を掠めた。

ダニエルと別れ、駐車場に止めてあった愛車に乗り込んで、クリスターは一人、すっかり夜も更けた道を家に向かった。

何となくつけてみたラジオからはズンズンと腹に響くドラムの音が攻撃的なロックが流れていた。普段はあまり聞かない類の曲が、今は水がしみこむようにずっとクリスターの胸に入ってくる。

（J・B、君は今、何を考えている……？ 僕の近況については、あんな写真を手に入れて送りつけてきたくらいだ、ある程度把握しているんだろうな。僕を攻略する方法は考え付いたのかい？ 君にとつて、僕はさぞ壊しがいいのある玩具なんだろうさ。だが、そう簡単に僕は壊れないし、油断すると、また君が僕に喰われることになるよ。僕は今とても……危ない気分でいるから――）

無性に凶暴な気持ちに駆られて、クリスターは車のアクセルを踏み込んだ。一瞬シートに体ごと押しつけられる、ひやりとした感覚がむしろ心地いい。

（制御できない、この過剰なものを、僕は君との対決で相殺できるだろう）

クリスターの中には、いつの間にか、破壊衝動という名の荒々しい獣が住み着いていたようだ。張り詰めて薄くなった皮膜を、その鋭い爪で破り裂いて、今にも飛び出してくそうな予感がする。それを周囲に向けるわけにはいかないから、今まで懸命に封じ込んできた。

だが、食い殺してもかまわない敵が現れたのなら、話は別だ。

（早く僕の前に現れろ、J・B）

半ば懇願するような気持ちで、クリスターは熱っぽく呼びかける。自分を追い詰めうる相手、互角に戦えるかもしれない敵手を思う時に覚えるこの熱は、憎しみというよりも恋情により近いのかも知れない――。

第3章唯一の絶対(3)

放課後の陸上部の練習時間。ストレッチで体をほぐした後、部員達は1人ずつ順番にタイムを計測していた。

「よし、次はレイフ」

コーチに呼ばれてスタートラインにレイフが立った瞬間、周りの空気が少し変わった。

レイフが陸上競技でのピークにあったのは州大会で優勝した15才の時だが、今でも彼がタイムを計るとなると人々の注目を集める。

今度こそという熱い期待や単なる好奇心の入り混じった視線が、レイフはうっとおしくて仕方がないのだが、無視するしかない。どうせ走り終わってみれば、失望と落胆、そして無関心に彼らが戻っていくのもいつものことだ。

(どうせ他人のために走ってるわけじゃないし)

地区大会が近い今、校長から檄を飛ばされたコーチの指導にも熱が入るが、レイフはむしろ冷めていた。

この時も、100mのラインを走り抜けレイフが後ろを振り返ると、やはり難しい顔をしたコーチと目が合った。

(あちゃ、やっぱ駄目だったか)

ごまかすようにレイフがへらっと笑うと、コーチにそっぽを向か

れた。ちょっと傷つく。

（無理言うなよ、コーチ。こっちは、体格もウエイトも1年目とは随分変わってるんだぜ？ 最盛期と同じ記録なんて、そうそう出せるかってんだ。ああ、オレの一番のライバルはかつての自分って訳か：こういうが一番厄介なんだよなあ）

グラウンド脇の木の下のベンチでスポーツドリンクを飲みながらレイフが一休みしていると、先程タイムを計測してくれたトムが近づいてきた。

「ううん、いまいちおまえのタイム伸びねえんだよな」

ストップウォッチを睨みつけながら、トムは自分のことのように残念そうに言う。

「そうか」

あまり気のないレイフの返事に、トムは歯痒そうな顔をした。

「それだけかよ」

「うん？」

「いくらスランプって言ったってさあ…もっとこう必死になって努力するとか、思うような走りができないってことに悔しがってみるとかさ、色々あんだろ」

「別に手え、抜いてるわけじゃないんだぜ、トム。しゃーないさ、これが今のオレの実力なんだから」

困ったように頭をかくレイフをトムはもどかしげにしばらく眺めていたが、やがて深い溜息をついて、彼の隣に座り込んだ。

「何て言うか、昔のおまえって、もっと生き生きとして迫力のある走りをしてたような気がするよ。おまえを初めて見たのはフットボール・チームのトライアウトだったけれどさあ。子供みたいなきらした目をして、走るのが好きでたまらないってふうに嬉々として駆けていた…あれでプロも顔負けのとんでもない記録を出したんだものな。あんなふうに無心に走れたら、今でも同じくらいのスピードを出せるんじゃないのか？」

「走ることは…今でも好きだよ」

ふと遠い目になって、レイフはぽつりと呟いた。

「あの頃みたいに、頭の中が真っ白になるくらい、完全燃焼できて実感できるくらいの走りをしたい。そうできたら気持ちいいだろうなって今でも思うけど…」

揺らめいた火の影がレイフの胸を微かに焦がしたが、燃え上がるかと思えばそれはすぐに鎮まってしまふ。

「なんで、オレ、駄目なんだろう」

ベンチに坐ったまま、レイフは後ろに手をつき上体を反らせながら空を仰いだ。頭上を覆う若々しい梢の間から降ってくる明るい日差しに目を細める。

「…ごめん」

レイフが頭を傾けると、すまなそうにうなだれているトムが見えた。

「余計なプレッシャーかけちゃったみたいだな。スランプになって一番辛いのはおまえなのに……つい追い詰めるようなこと言っちゃった」

自分のせいでレイフを落ち込ませたとトムは後悔しているらしい。レイフは慌てて坐りなおすとトムの肩を軽く揺さぶりながら、親しみのこもった口調で訴えた。

「違う違うって。別にオレ、へこんでないから。実際、ちっとくらい人から説教されたり、しっかりしろって尻を蹴飛ばされたりした方がいいんだろうぜ。オレみたいな、いい加減で、怠け癖のあるタイプはさあ」

レイフに揺さぶられながら、トムは堪えきれなくなったように笑い出し、彼の腕を叩いてじゃれつくのをやめさせた。

「教育係のクリスターが傍にいた方が練習に身が入るってか？」

「教育係って、なんだよ？」

「なら、調教師」

「ひでえや」

冗談めかして笑い合っているうちに、2人の間の空気も和やかなものになってきた。

「クリスターといえはさ、この間の試合、すごかったらしいよな。勝った相手、もと大会チャンピオンだったって？　ほんとに、あいつには感心するよ。ミスター・パーフェクトとはよく言ったものさ。クリスターに弱点なんか、あんのかねえ」

「：KOできずに判定でやっと勝てたんだって、クリスターは不満そうだったけどな」

トムは呆れたように口を半開きにした。

「相変わらず完璧主義って言うか、男前過ぎて腹が立つくらいだよな、おまえの兄貴」

「うん…」

レイフは胸の中にもやもやとわだかまる複雑な思いをもてあましながら、ドリンクのストローの先を噛んだ。

「何、浮かない顔してるんだよ、このブラコン。ボクシングに兄貴を取られたからって、そんな寂しそうな顔するなよ。心配しなくても、フットボールの季節になりゃ、ちゃんとクリスターは戻ってくるよ」

3年近くレイフと付き合っているだけあって、トムには、この時期レイフが抱える鬱屈とした気分の根っこがどこにあるのか分かっているようだ。

「ちえっ…」

レイフは思わず顔を赤らめて、黙り込んだ。

（フットボールのシーズンになりや、クリスタは戻ってくる。そうだな…うん、きっとそうだ）

レイフは再び頭をもたげそうになった不安を押さえつけるために自分にそう言い聞かせ、グラウンドで走っている陸上部の仲間を眺めやった。大会を目指して、それぞれが自分のペース合わせ真剣に練習をしているというのに、レイフは課せられたメニューをまだ全然こなせていない。

そろそろあそこに戻った方がいいだろうが、何故かまだ気分が乗らず、レイフは物思いに沈んでいた。

走りながらレイフがともすれば思い出すのは、フットボール・チームのトライアウトで思いがけず自己最高のタイムを出し、それが超高校生クラスのものとして周囲を沸かせた時の記憶だ。

（別にオレ、記録なんか、出そうとしたわけじゃない。ただ走ることが好きで好きで、夢中で走ったら、あんなことになっちゃったただけだ。目立ちたいわけでも、他人からちやほやされたいわけでもなかった…大体、それまではオレなんかにも目もくれなかったくせに、いきなり手の平を返す連中なんか信用ならない。そんな奴らに認められても嬉かしねえ…そりゃ初めのうちはちっとは気持ちよかったけどさ…）

レイフの中で、喉の奥に引っかかった小さな骨のよういつまでも気になっていることがある。

あの時、自分の周りを興奮した様子で取り囲む大人達の向こうに

1人佇んでレイフを眺めていたクリスター―どこか寂しげで悲しそうな兄の姿を見た瞬間、レイフは何故か、してはならないことをしてしまったような、後ろめたさに駆られたのだ。

（オレはあの瞬間クリスターを追い抜いちまった…そのことで、あいつに対してすまねえって思っちゃった。そう言う、思いうがりのみたいに聞こえるけどさ。…たぶんオレは、オレ達の位置関係を崩したくなかったんだ。あいつが常に前を歩いていて、その後ろをオレが追いかけている…それがずっと昔から続いてきた、一番安心できるありようだから―）

あの時覚えた戸惑いと違和感は、この所レイフが抱えている悩みにもどこか通じている。これから先クリスターとどうやって付き合っていくべきか、どう変われば、大切な相棒を失わずにすむのか―。

（何だかオレは、あの時からずっと身動きが取れねえような気分なんだよ、クリスター―）

擦れ違いを重ねながらも、レイフの心は常に自分の半身を追いつづけているのだった。

第3章唯一の絶対（4）

それから間もなく―4月も半ばを過ぎた日曜の朝のことだ。

「おっ、兄貴が寝坊すんの珍しいじゃん」

前日、夜遅くまで遊んでいたせいで起き出すのも遅かったレイフが、パジャマ姿のままキッチンに下りていくと、ぼうっとした顔で1人テーブルに坐ってコーヒーを飲んでいるクリスターを見つけた。

「おはよう」

レイフがキッチンに入ってくるとクリスターは一応目を上げて声をかけてくれたが、またすぐに自分の中に閉じこもってしまふ。

「また夜更かししてたんだろ、兄貴。寝たりないって顔してるぜ？」

「うん：確かにちょっと寝不足かな」

あくびをかみ殺すクリスターを眺めながら、レイフはコーヒー・メーカーに残っていたコーヒーを自分のマグカップに注いだ。

いつも忙しいクリスターは休日でも早起きして出かけることが多い。こんなふうには2人でゆっくりと日曜の朝を過ごすことなど久しぶりだ。しかし、クリスターは何やら他のことに気を取られているらしく、レイフは少し気に入らなかった。

「なあ、クリスター」

レイフはコーヒを一口すすり、マグカップの中をじっと見ながら考え込んだ後、ぽつりと呟いた。

「オレってさ…もしかしてEDじゃないのかなあ」

飲みかけていたコーヒを軽く吹きそうになったクリスターは、咳き込みながらテーブルの上にあったティシュの箱を引き寄せる。

「い、いきなり何を言い出すんだ、おまえは！」

17才のやりたい盛りの高校生が勃起不全だなどと確かに恐ろしく。

クールなクリスターを動揺させてやったことは嬉しいが、それに深刻な気持ちで、レイフは続けた。

「うーん、どうしてこんなに女の子と付き合うのが苦手なんだろうって、オレだってたまには悩むこともあるわけ」

溜息をつくレイフにクリスターは眉をひそめ、自分の前の椅子に坐るよう無言で促した。

「目、覚めただろ？」

いそいそと着席するレイフにクリスターは渋面で言い返した。

「おかげで眠気なんか吹き飛んだよ。さわやかな休日の朝にふさわしい話題とは思わないけどー何かあったのかい？」

「実はさあ、オレ、昨夜遊びに出かけてたんだよ。映画見たり、メ

シ食ったり、その後ちょっと白状すると女の子と一緒にでさ、トム
の彼女の友達なんだ。その子が踊りたいって言うからクラブとか連
れて行ったりして―」

「要するに、デートだったんだ」

「うん…」

レイフは耳がかあっと熱くなるのを意識した。

クリスターには内緒のことだった。いつまでもガールフレンドの
できない不器用なレイフを見かねて、トムが女の子を紹介してくれ
た。今までこの手の話があっても面倒だからと断っていたレイフだ
が、今回は何となく気持ちが動いて、会ってみることにした。実際
なかなかいい子だったので、何回かデートを重ねていたのだが、昨
日で呆気なく破局となった。

「ほんと、昨日まではうまくいったんだぜ。オレも、今度こそ筆
下ろし…いや、彼女くらい作るぞって気合入ってたし」

その問題のデートも、流れは決して悪くなかったのだ。予定より
も遅くなって家まで車で送った時、ちょっといい雰囲気になって別
れ際にキスをした。レイフはそれで帰ろうとしたのだが、彼女がい
きなり家に寄っていかないと誘ってきた。親は旅行でいないとか。
何たる幸運と、つい魔が差して、ほいほいついていった。いや、別
にやましい気持ちがあったわけではない。コーヒーだけ頂いて帰る
つもりがまたちょっといい雰囲気になってしまい、気がつけば、彼
女の部屋に上がりこんでいた―。

「それで？」

クリスターがやけに冷静なのは、既にレイフの話のオチを見切っているからだろう。

「今度こそいけるかもって思ったんだけどさ、結局ミナの時とおんなじ。いざとなると気持ちが挫けて、体の方も萎えちまった。その後は気まづくなったっていうか白けたっていうか：結局振られちゃったわけ」

クリスターがいきなり席を立ち上がったのに、レイフは一瞬何を言われるかと身構えたが、彼は無言のまま戸棚を開いてコーヒー豆の入った缶を取り出し、新しいコーヒーを作り出した。

続く数分間、レイフもクリスターも一言もしゃべらず、コーヒー・メーカーのたてる音だけがキッチンに流れた。

庭に面したガラス戸から差し込んでくる透き通った朝の光の中、この手の話を打ち明けるには時間も場所も適切ではなかったかとレイフが後悔し始めた頃――

「：トラウマだったりしてね」

出来立ての薫り高いコーヒーを自分とレイフのマグカップに注ぎながら、クリスターがおもむろに口を開いた。

「ね、レイフ：アリス・ゴールドバーグって覚えてるかい？」

「アリスって：あのアリスかよ？」

意外な名前を持ち出されて、レイフは目をぐるっと回した。小学

生最後の夏に湖のキャンプ場で出会ったアリスのことなら、確かに覚えている。あれ以来レイフはアリスとは会っていないが、彼女の両親と双子の両親は今でも親交が続いていて、何年か前に一度家に遊びに来たこともあった。それに、確かクリスターは今でもアリスと時々手紙やカードのやり取りをしているはずだ。

「僕とアリスは仲がよかったけれど、おまえはよく苛められてた」

「ちえっ、嫌なこと思い出させるなよ。ああ、確かにその通りさ。ほんとひどい女だったぜ、アリスは」

「でも、おまえは、本当は彼女のことが好きだったんだよね？」

「ば、馬鹿言うな！」

薄っすらと笑うクリスターを睨みつけながら、レイフはふいに、あの時クリスターはアリス相手に初体験をすませたのだということを思い出した。まだあまりにもねんねだったレイフが、何も知らずに1人で寝ているうちに。

何だかクリスターとまともに対峙していることが辛くなってきて、レイフは怒ったように頬を膨らませてそっぽを向いた。

「おまえの女性恐怖症の根っこを探っていくと、もしかしたら幼少期に初恋の相手から苛められたことが原因じゃないかと、ふと思ったりしたんだけれどね」

「くだらねー。大体、オレ、別に女が怖いわけじゃねえし」

クリスターから顔を背けたまま、レイフはイライラと尖った声で

言い返すが、男子にタックルをかけるのは得意でも女子には手も足も出せない今の有様では、我ながら説得力がなかった。

そんなレイフの様子をしばらく見守った後、クリスターは言った。

「…会ってみるかい？」

いぶかしげに振り返るレイフに、クリスターは意味ありげな顔で頷き返した。途端に、レイフの首筋辺りの皮膚がちりちりとそそけだつた。

「実は昨日、アリスから電話をもらったんだ。休暇でニューヨークを訪れているんだって。今週ボストンにも足を伸ばすから会わないかって誘われて、それなら、せっかくだから土日を利用して案内すると僕は答えた。おまえのことも懐かしそうに話していたし、一緒に来れば、きっと喜ぶと思うよ」

「は、はあっ?!」

「別に予定はないだろう？」

「そりゃ、確かに暇だけど…」

「それじゃ、決まりだ」

どうしてそういう展開になるのかとレイフが戸惑っているうちに、クリスターは勝手に話を進めていく。

「幼少時のトラウマを克服する1つの方法は、トラウマの原因と向き合って、自分はもう大丈夫だと認識することなんだよ」

「ちょ、ちょっと：勝手に決め付けんなよ：」

「冗談だよ、今のは。でも、アリスは確かにおまえにも会いたがっていたし、僕も、どうせなら3人一緒の方が楽しく過ごせそうなのがするんだ」

レイフは言い返そうとして、出掛かった言葉を飲み込んだ。

アリスとは別に会いたくないが、クリスターを彼女と2人きりにしてしまうのも、何となく癪に障った。子供じみたやきもちだろうか。そう言えば、アリスと過ごした短い夏の日々、自分を置き去りにして楽しんでる2人に、レイフはずっと不満を訴えていた。今更、あの時のような道化役を演じるつもりは、もちろんない。しかし――。

「分かったよ。どうせ、できかけた彼女にも振られて暇な身だし、退屈しのぎにつきあってやるよ、畜生」

不機嫌な大型犬のように低く唸っているレイフに、クリスターはふと柔らかな笑みを投げかけてきた。

「おまえと一緒に出かけるのも、そう言えば久しぶりだね」

「う、うん」

実に久しぶりにクリスターのこんな親しげな声を聞いたような気がして、レイフは胸がきゅんとなるのを感じながら、大きく見開いた目で兄を見返した。

「楽しみにしているよ」

軽く首を傾げながら、クリスターはごくくつろいだ風情でレイフに微笑みかけている。こうしていると、彼との間に溝が広がりつつあるなどと単なる勘違いではなかったかという気がしてくる。

どうしよう。何だか泣きそうー。レイフがつい感極まって言葉も出せずにいるうちに、クリスターはテーブルから立ち上がった。

「休みの日だからって、いつまでもパジャマのままでうろうろするなよ。それから、せめてスリッパくらい履いてこい」

寝癖のついたレイフの髪の一房を軽く引っ張りながら優しくたしなめると、クリスターはキッチンから出て行った。

「ちえー、相変わらず母さんみたいに細かいんだよなっ」

クリスターに触られた頭を撫で付けながら文句を言うレイフの顔は、しかし、幸せそうに緩んでいた。

「へへっ、次の休みに兄貴と一緒に出かけんの、オレも楽しみだぞーっ」

たちまち天にも舞い上がりそうな気分になったレイフは、拳を突き上げながら、そんな雄叫びをあげた。クリスターが傍にいたら恥ずかしくなって思わず止めただろう、目も当てられないほどの喜びようだ。

レイフが、次の休日はクリスターと2人きりで過ごすわけではなくアリスも一緒なのだということを思い出すまで、少しばかり時間

が
か
か
り
そ
う
だ
っ
た
。

第3章唯一の絶対(5)

中学に上がる直前の夏に出会ったアリス・ゴールドバークのことを全部細かい所まで覚えているわけじゃない。

ただ夏の日差しの中できらきらと輝いてたアリスの金色の髪や長い睫毛、日に焼けたすらりとした手足とか気の強そうな草色の瞳に、綺麗だなと見蕩れていた覚えはある。

クリスターの言うとおり、あれがオレの初恋だったとしたら、オレってかなり可哀想だよなあ。

クリスターには優しいのにオレには冷たいアリスのやることなすことに、オレはいちいち振り回され、傷ついてた。

彼女に言われたことを全て覚えてるわけじゃない。

ただ1つだけ、今でも何故か忘れられない言葉がある。

あの女、オレの顔を面白そうにしげしげと見ながら、こんなことを言いやがったんだ。

『クリスターと同じ髪、同じ瞳、同じ唇…何もかもがびっくりするくらいにそっくりね。でも、違うわ』

「ひゃーっ。デイズニールンドみたい」

約束の時間、待ち合わせ場所にと指定されたボストン市街の中心バックベイにある瀟洒なホテルの中に足を踏み入れるなり、レイフは大げさな感嘆の言葉を吐き出した。

擦れ違った身なりのいいホテル客がこちらをちらりと見やつてくすくす笑ったのに、レイフは慌てて口を押さえたがもう遅い。

「…おまえが言わんとしたのは、こんな高級そうなホテルに入るのは、昔家族でデイズニールンドに行った時に泊まったホテル以来だってことだね。でも、ここも大手チェーンホテルだけれど、格はずっと上だよ」

レイフが外したことを言うのにも慣れているクリスターはさらりとフォローすると、先にホテルの奥へと入っていく。その後ろを、レイフはきよろきよろと興味深そうに周囲を眺め回しながらついていった。

ホテルの格などと言われてもピンとこないレイフだが、まかり間

違ってもバックパッカーの若者などは泊まれそうにないハイクラスのホテルだということは分かる。温かみのあるブラウンが基調の一階フロアーは、柔らかな照明もそこかしこにある調度品もうまく調和して全体に上品で落ち着いた雰囲気醸し出していた。

（アリスって、こんな贅沢な場所に泊まれるのかよ。そういや、あいつの親、今はどっかの大会社の重役だっけ）

今日と明日の日程を考慮して、アリスは兄弟のために今夜はここに部屋を取ってくれたのだが、高校生にはもったいないだろうと普通に怯みそうになる。

「レイフ！」

フロントデスクの前にあった、すごく大きなフラワーアレンジメントの傍に突っ立って、見たこともない珍しい花が本物かどうか確かめようと手を伸ばしかけていたレイフは、クリスターが呼ぶのに慌てて振り返った。

「あ、ごめん、ごめん」

腕を組んで待ち受けているクリスターのもとに、レイフはぼつが悪そうに頭をかきながら近づいていた。

「全く、大きななりをして、子供みたいに落ち着きがないんだからな。物珍しいのは分かるけれど、少しは隠せよ」

頭ごなしに叱れたレイフは唇を尖らせる。

「だってさあ…」

レイフが言い返そうとしたその時、クリスターの陰になっていたソファの辺りから楽しげな女の笑い声がaggった。

「外見は大人っぽくなったのに、レイフの方は、中身はあまり変わってないのかしら？」

きまり悪げに背後を見やるクリスターの視線を追ったレイフは、思わず目を見張った。

「久しぶりね」

背もたれの高い椅子にすらりと長い脚を組んで坐っていた女は、レイフの顔をまっすぐに見つめながら立ち上がった。

レイフはとっさに何も応えられなかった。馬鹿なことに、彼は、今この瞬間まで、6年前に出会ったアリス、日に焼けた伸びやかな手足やティーシャツの膨らんだ胸が眩しかった澁刺とした17才の少女がここに現れるのだとばかり思い込んでいたのだ。

「ア、アリス…ほんとに…？」

上ずった声で問いかけるレイフを傍らのクリスターが怪訝そうに振り返る。しかし、レイフはそちらにはほとんど注意を向けず、目の前に立つ颯爽とした若い女の顔にぽかんと見入っていた。

「あら、私、そんなに変わったかしら？」

「う、うん」

変わったなどというものではない。化けたとレイフは思った。小悪魔めいた17才の女の子は、いまや洗練された都会の雰囲気漂わせた大人の女だ。飾り気のないカジュアルなスタイルでも、学校

の女の子達とは比べ物にならない華やぎと匂い立つような美しさがある。

金髪のショートカットの頭を軽く傾げながらアリスが微笑むと、淡い色のルージュのひかれた唇から真っ白な歯が覗いた。記憶にある歯列矯正具はもちろんもうつけていない。

「そう言うあなた達だって、すごく変わったわよ。予め写真をもらっていたなかったら、きつと分からなかったでしょうね。昔は、ヘレナおばさんにそっくりな顔をした綺麗な男の子だったけれど」

アリスはどこか悪戯っぽく輝く緑の瞳でレイフとクリスターを交互に眺めると、満足そうに言った。

「2人とも、いい男に育ったじゃない」

何事もきっちりしているクリスターは、遊びに関しても前もってリサーチして計画を立てるのが好きだ。この日のために色々考えてきたのだろう、ホテルのカフェで互いの近況についてしばらく話し込んだ後、外に出ると、早速ガイド役としてそつなく行動し始めた。

「兄貴ってば、ほんと準備がいいのな。こんな地図とかパンフレットまで手に入れてさあ」

「そんなのうちの学校のオフィスに頼めばすぐにももらえるんだよ」

配られた冊子類をしげしげと眺めながら感心したように言うレイフに、クリスターは素っ気なく応えた。計画性とは縁も所縁もないレイフは、案内役としてはあまり役に立たない。

気持ちよく晴れた土曜日の朝は少し肌寒いくらいだったが、日差しは明るく、これから日中にかけて気温も上がってきそうだった。観光にはもってこいの一日になりそうだ。

こうしてボストン1日観光に連れ立って出かけた3人は、主にフリーダムトレイルと呼ばれる有名な史跡を結ぶルートに沿って街を歩くことにした。狭く入り組んだダウンタウンの石畳の道は迷いやすが、万一道を逸れても、その辺りをぶらぶら歩いているうちにトレイルの目印である歩道に引かれた赤い線が見つかるので安心だ。

歴史にも詳しいクリスターは、時々休憩がてら足を止めたり、史跡を見学したりしながら、アメリカに渡ってきた初期の移民たちが築いた古い街であり独立戦争の舞台ともなったボストンにまつわる逸話を話してくれた。付け焼刃のガイドにしては、極めて優秀だ。歴史の授業で聞き覚えのある話もあったが、さすがにレイフはそこまで細かいことまで覚えていない。

「クリスター、あなた、そこまで詳しい説明ができるなら、いつそ夏休みに観光ガイドのアルバイトでもすればいいんじゃない？」

「それはごめんだな。大体、観光客なんて自分の関心を追うばかりで、人の話をろくに聞いていないことが多いし、そんな連中を引率するなんて疲れるよ」

にぎやかなクインシーマーケットをそぞろ歩きしながら、すっかり打ち解けた雰囲気で言葉を交わしているクリスターとアリスの後ろを、レイフは少し遅れて歩いていた。

（ちえつ）

つまらなそうに唇を尖らせて、前に行く2人を恨めしげな―それとも羨ましの目でレイフは眺める。

（何だかさあ、結局、昔と同じようなことになっていきそうな気配じゃん）

大学生や社会人のガールフレンドや恋人相手の場数を踏んでいるクリスターは、年上の女の相手がうまい。今もアリスを飽きさせない話ができているし、何かと気がきくし、さり気ないエスコートの仕方もスマートだ。対してレイフにできることといえば、せいぜいアリスが衝動買いたったものを持ってやるか、写真を撮ってやるか、道端のジューススタンドに飲み物を買いにいってやる程度だ。

（つまんね。オレ、何のためにここにいるんだろ。こんなことなら、兄貴の誘いに乗って、のこのこついてくるんじゃないかった）

前を並んで歩く2人は、通り過ぎていく他人の目から見てもきつと似合いのカップルに見えるだろう。それでは、その彼らの後ろを不満げな顔をしてついていく自分は一体何者なのか。

アリスがはしゃいだ笑い声をあげたのに、レイフがはっとなって顔を上げると、道端でパフォーマンズをしている大道芸人の前で足を止めて楽しげに笑いあっている2人の姿が見えた。

レイフは彼らから少し離れた歩道にじっと立ち尽くした。無性に2人の間に割り込んでやりたくなったが、いかにも子供じみていると思ったし、そんな意気地もなかった。

なすすべもなく見守っているうちに胸の奥がちりちりと焼けるように痛んできて、たまらなくなつて、レイフは思わず2人から顔を背けた。

（もしかして、アリスがオレを相手にしないでクリスターにばかり夢中になってるからって、ひがんでんのか？ あーあ、これじゃあ、6年前の繰り返しだよ。オレって、つくづく成長してないのな、情けねえや）

次第につのってくる苦しさを払いのけようとするかのごとくレイフは頭を振りたてるが、一向に気分は晴れなかった。

（違う）

レイフは唇を噛んだ。

（ひがんでるんじゃない。きっと妬いてるんだ、オレ。でもさあ…嫉妬って、クリスターとアリス、一体どっちに対してなんだろう…？）

悶々と悩みだしたものの、あまり複雑なことを考えるのは苦手なレイフは次第に訳が分からなくなつてきて、低く唸りながらイライラと頭をかきむしった。

「レイフ！」

いきなり名前を呼ばれ、はっと息を吸い込みながらレイフがこちらを振り返ると、アリスがにっこりと微笑みながら近づいてきた。途端にレイフの体に緊張が走る。

「ね、この先しばらく行った所に眺めのいい公園があるんですってね。私、少し歩き疲れたし、そこでしばらく休みましょうよ」

アリスの笑顔を眩しいものを見るかのような思いで見下ろしながら、レイフは不器用に頷いた。

「う、うん」

アリスはレイフが手に下げている幾つかの土産物の袋をちらっと見た後、すまなそうに言った。

「荷物持ってくれて、ありがとうね、レイフ。これ以上余分なものは買わないようにするわ」

「べ、別に…これくらいどうってことねえよ」

我ながらどうかしているとレイフは思った。気まぐれなアリスが急に自分に注意を向けて感謝のこもった目で親しげに話しかけてきたくらいで、こんなにも嬉しくなってしまうなんて―。

「あ、でも、1つくらい私も持とうか」

「いいから、いいから」

不機嫌でつまらなそうな顔からたちまち満面の笑顔になって、レイフは頼もしげに請け合った。

「それじゃ、行きましょう」

するりと傍らをすり抜けていくアリスをぼうっと見送った後、小さな咳払いを聞いてレイフが後ろに目を向けると、何か言いたげな顔をしたクリスターが立っていた。

おまえは、また女の手の上でいいように踊らされて―と半ば呆れ、半ば憐れんでいるようだ。

「な、何だよ」

レイフがつい反抗的な気分になって睨みつけると、クリスターは一瞬驚いたような顔をして、ずっと視線を逸らした。

「いや：何でもない。行こうか」

素っ気無い態度で歩き出すクリスターをレイフはとっさに見送りがけたが、慌ててその後を追うと、ついむきになって早足で追いついた。そこでふと気がとがめたものの、結局兄を振り切るようにして、彼は先に行くアリスの姿を探した。

（オレだって、もう何も知らない11才のガキじゃねえんだから）

確かに、これはある種のトラウマなのかもしれない。

子供の頃のレイフとクリスターは、いつも同じものを好きになって、同じように欲しかった。いつも2人で1つのものを手に入れて、仲良く分け合っていた。

けれど、アリスだけは、そうはできなかった。アリスはクリスタ
ーを選び、レイフは1人置き去りにされた。

それが世の中では当たり前のことなのだと思います。知らされたのは、
あの時が最初だったか。

（ああ、そうさ。オレとクリスターは違う。だから、どうしようも
ないことだって時にはある。それくらい、もう分かっただろ）

たとえば姿かたちがどんなにそっくりでも全てを共有してきた間柄
だと言っても、クリスターとレイフは、同じ1人の女の恋人や伴侶
になることはできない。

あの短いひと夏、レイフの知らない所でクリスターはアリス相手
に初体験をした。レイフがそのことを知ったのは、随分後になって
からだだったが、双子の相棒に先を越されてしまったとすぐく悔しが
ったものだ。その記憶は兄に対する引け目となって、レイフの胸に
ずっと残っている。

そして今も、久しぶりに会ってみれば少女から艶やかな女性へと
変貌を遂げていたアリスに、レイフは圧倒されたが、彼と違って既
に精神的に大人になっていたクリスターは平気な態度で接していた。
そんなクリスターをアリスも惚れ惚れとしたような目で見ている。
たぶん彼女は、クリスターを男として気に入ったのだ。

（だからって、オレの目の前で、あの時みたいな勝手はもうさせる
ものか）

胸の奥にふつふつとたぎるものを覚えながら、レイフは密かに吐
き捨てた。

（11才の頃のオレが本当にアリスを好きだったかなんて今更分からないけれど…ただオレは、昔と同じ惨めな役回りにはなりたくない。別にクリスターと張り合おうってつもりじゃないんだ…いや、そうなのか…？ 自分でもうまく説明できない気分なんだけれど、またしてもあの2人に弾き出されるのは嫌だ。これ以上、クリスターに遠く差をつけられるのも…）

焦燥感にも似た、これは単なる嫉妬だろうか。いや、そんなさもしいものではない。

（えい、くそっ。オレは、アリスが好きなのか？ それとも…クリスターが好きになったものには、今でも同じように惹かれてしまうんだろうか…全く、性懲りのねえ）

クリスターに対抗意識など燃やしている今の自分がレイフは不思議だったが、本気で兄に敵うのかと突き詰めれば全く自信などなかった。いつだって、こと異性に関しては、クリスターはレイフより一枚も二枚もうわてなのだ。

女性に対するアプローチの仕方もあるからないレイフは、この場合もアリスの気を引くために使えばしりのような地道なサービスに徹するしかなかった。そんなレイフの態度を見ていれば、クリスターだけでなく当のアリスにも、彼の気持ちなど手に取るほどによく分かっただろう。

やはりレイフはクリスターとは違う。初心で純情で、世慣れた大人の女性から見ればひとたまりもないような『男の子』でしかなかったのだ。

だから、一休みするために立ち寄った公園で、いきなり状況が一変したことは、レイフをむしろ戸惑わせた。

ボストン港を見下せる眺めのいいその公園は、都会の喧騒の中を歩き回って疲れた体を休ませるには絶好の場所だった。

喉が渴いたとアリスが言うので、レイフが近くのジューススタンドで飲み物とスナックを買って戻った時のことだ。

（あれ…？）

燦々と照る陽光に輝く海を正面に眺められるベンチに、アリスはクリスターと一緒に坐っている。

レイフがしばらくそこを離れている間に何かあったのだろうか、先程まであれほど親しげに打ち解けた様子で会話を楽しんでいた2人が今はどこか余所余所しい。クリスターは黙って膝の上に広げた地図の上に視線を落としているし、アリスはぼんやりと海の方に視線を投げかけている。ほとんど恋人同士のように寄り添いあっていた2人の距離も微妙に広がって、そこにもう1人くらい坐れそうな空間があいていた。

「あら、レイフ」

3人分のジュースを持ってベンチの後ろの方で所在なげに立ち尽くしていたレイフに気がついたアリスが、手を振りながら呼びかけた。

「そんな所で何してるの？ 早くここにいらっしやいよ」

ふいに親密さを増したアリスの声音に胸をときめかせながら、レイフはそろそろと近づいて、彼女とクリスターの間に遠慮がちに腰を落ち着けた。

「ジュース、ありがとう。とても喉が渴いていたのよ」

「う、うん」

屈託なく笑いかけてくるアリスにおずおずと頷き返しながらも、レイフは隣に黙り込んだまま坐っているクリスターが気になって、ちらちらと様子を窺っていた。クリスターはレイフの無言の合図にも気づいていないのか、地図やガイドブックに目を通してながらこの後の計画を考えている様子だ。

「ねえ、レイフ」

「え、何？」

レイフが慌てて振り返ると、アリスが下からじっと彼の顔を覗き込んでいた。

「さっきクリスターからも少し聞いたんだけど、去年のフットボールの大会は凄かったんですね。私は今はワシントン暮らしだし、こっちの高校の大会のことまで詳しくは分からなかったんだけど、あなた達ががんばってるらしいってことは知ってたわ。さすがに優勝するとは思ってなかったけど…そう言えば、子供の時からあなたは将来はフットボールの選手になるんだって言ってたわね。夢に向かってまっすぐに突き進んでるんだ。いいわね、そういうひたむきさ」

「そ、そうかな。オレは単純だから、好きなこと以外は目に入らなくて、夢中でやってるうちにここまで来てたって感じだよ」

この日レイフがアリスとまともな会話できたのは、これが初めてではないだろうか。

「何だか羨ましいわね。私、そこまで好きになれたものって、今も学生時代もなかったような気がするもの」

本当にどうしたというのだろう。てっきりアリスはレイフのことはクリスターのおまけ程度にしか認識していないのだとばかり思っていた。しかし、今のアリスは、クリスターからレイフに関心を持しているようだ。

単なる気まぐれかもしれないが、今回も2人から仲間はずれにされそうな予感がしていただけに、アリスが少しは自分のことも意識してくれたのだとレイフはたちまち有頂天になってしまった。

たまたま話題が得意分野のフットボールだったこともあって、レイフは急に生き生きとして話し出した。そんな彼の言葉にアリスは熱心に耳を傾け、時には笑い転げたり、感心したような溜息を漏らしたりしてくれた。あんまりコアな話をするとう普通は女の子を退屈させるものだが、アリスは、少なくとも表面上はレイフの話を面白がってくれているようだ。こういうのを聞き上手というのだろうか。

アリスと打ち解けられたことが嬉しくて、レイフは彼女とクリスターの間に漂う微かな緊張感をほらんだ空気には気がつかなかった。

公園で休んでいる間2人の会話にはほとんど加わらなかったクリスターに、アリスが時折意地悪そうな笑みを含んだ眼差しを投げか

けていることにも、その後街歩きを再開すると彼女が今度はレイフにぴったりとつくように歩き出したことにも不自然さを覚えなかった。

夕方になって一端ホテルに戻った3人は、今度は服を着替えて、双子の母ヘレナが予約を取ってくれた高層ビルの上にある眺望が自慢のレストランに出かけたのだが、その時もいつの間にかレイフがアリスをエスコートする立場になっていた。

並んで歩く2人の一歩後ろをクリスタは歩いていたが、そんな兄を気遣おうにも、レイフはアリスの相手をするのに必死で、そこまでの余裕はなかった。

飾り気のないカジュアルな格好をした昼間のアリスも澁刺として魅力的だったが、ディナーのためにドレスアップすると、たちまちセクシーな大人の女性に変身した。そんな彼女に、レイフはもう目もあてられないほど夢中になっていた。

3人でテーブルを囲んでの食事の間――さすがに、この時ばかりはクリスタも黙り込んでおらず、それなりに会話に加わったのだが、こんな席では口下手なレイフをフォローするために饒舌ぶりを発揮する彼がいつになく控えめだった。そして、レイフはとうとうアリスばかり見ていた。彼女の悪戯っぽくくるめく緑の瞳を捉えようと必死に追いかけて、時々うかべる謎めいた表情の意味を知りたがり、ほっそりとした指先の何気ない仕草に漂う色気にときどきしていた。

そこまで熱心にアリスを見ていたにもかかわらず、ふとした折に彼女がクリスタに向ける挑発するような視線や、言葉の端々に表された揶揄には、ほとんど注意を払わなかった。たぶん、自分に対

して送られてくる彼女の言葉や表情を読み解くだけで、レイフは手一杯だったのだ。

そうして、裏に緊迫したものを秘めながらも、1日の予定を滞りなく終え、3人はタクシーでレストランからホテルに戻っていった。

「うっわーい！」

ホテルの部屋に戻るや、レイフはジャケットをソファに放り投げ、奥に2つ並んでいるダブルサイズのベッドの片方にダイビングをした。

「やると思った…」

ふかふかした大きな枕を膝の上に乗せ、尻をもぞもぞ動かしてクッションの具合を確かめているレイフに苦笑混じりの目を向けながら、クリスターはクローゼットの中に脱いだジャケットを吊るした。

「…バスルームは大理石張りだよ」

「え、どれどれ」

クリスターの言葉にベッドから飛び降りてバスルームを覗きに

ったり、テラコッタの色調で統一された一昔前の邸宅風の上品な部屋の中を珍しそうに歩き回ったり、カーテンを開いて眺めのよさに感心したり、とにかく今夜のレイフはいつも以上に落ち着きがない。

アリスに優しくされて、すっかり有頂天になっているのだ。どうしてこれほど分かりやすいのだろうと、我が弟ながら呆れてしまつて、クリスターはもうたしなめる気にもなれなかった。

「先にシャワーを浴びたらどうだい？」

クリスターが声をかけると、テレビの前のソファに坐ってリモコンを手にぼんやりしていたレイフは夢から覚めたような顔で振り向いた。

「ああ…うん…」

言葉を濁すレイフに、クリスターはふと眉を潜めた。

「オレは後でいいよ。兄貴、先に使えよ」

「じゃあ、そうするよ」

レイフはテレビの画面に視線を向けたが、クリスターが腕を組んでじっと見ていると、落ちつかかなげに肩や腕を触ったり撫でたりした。

（全く…分かりやすい奴）

勘のいいクリスターはレイフが何か隠し事をしていることをすぐに見抜いたが、気づかぬ振りをして、先にバスルームを使うことに

した。

（大方、アリスに別れ際何か言われたんだろう。彼女に会ってみるかいと僕が誘った時には気が乗らない様子だったのに、今はそんなこと忘れ果てているみたいだな）

案の定、シャワーを浴び終わってクリスターがバスルームから出ると、部屋にレイフの姿はなかった。テレビをつけっ放しにして忽然と消えてしまった弟に、しかし、クリスターは驚かなかった。

「やっぱりね」

素肌にバスローブをまとったまま、クリスターはレイフがいたソファにどざりと腰を下ろし、額に落ちかかる濡れた髪をわずらわしげにかき上げた。

こういう展開も想定内のことだ。レイフがアリスに惹かれるかもしれないということも、アリスがレイフを誘惑するかもしれないということも、クリスターは予想していた。

だから、動揺など、しない。しかしー。

「少しは僕の読みを裏切ってくれてもいいのに、あの馬鹿……」

溜息混じりに呟いて、クリスターはテーブルの上のリモコンを取り上げ、神経を逆なでするような耳障りなテレビの音声を遮断した。

第3章唯一の絶対(6)

『私、二階のバーにしばらくいるつもりよ。よかったら、後であなたもいらっしゃいな』

ホテルのロビーで、フロントへキーをもらいにいったクリスターを待っている間、アリスはレイフにこんな耳打ちをした。

行くとも行かないとも、その時レイフは答えられなかったのだが、部屋に戻って考えこんでいるうちについてに我慢しきれなくなった。

クリスターを誘って一緒に行くという選択もあったが、それでは今までと同じ流れになってしまいそうだ。兄を出し抜くのは多少気がとがめたが、レイフは更にもう一步アリスとの距離を縮めたかったのだ。

静かで落ち着いた雰囲気のあるバーに、レイフは期待と不安を胸に入っていた。

未成年だとばれたらつまみ出されるだろうかと、そのない身のこなしで飲み物を運んでいる品のいいボーイと目が合った瞬間は緊張のあまり固くなったレイフだが、マホガニーのバーカウンターからこちらに向かって軽く手を振るアリスを見つけると、ほっと肩の力を抜いた。

「ほんとに来てくれたんだ」

「うん」

アリスの隣に身を落ち着けると、レイフはカウンターの中にいたバーテンダーにオレンジジュースを頼んだ。

「クリスターは？」

「シャワーを浴びてるよ」

「もしかして彼には内緒で来たの？ あなたにしては、大胆じゃない」

頬杖をつきながら悪戯っぽく微笑むアリスにレイフは顔を赤くして、動揺をごまかすよう、ジュースのストローに口をつけた。

「オレだって…たまには、クリスターのいない所で自分の好きなようにやりたいよ。子供じゃあるまいし、兄貴と一緒にでなきゃ何もできないなんてことはないんだ」

アリスを意識してうそぶくようにレイフは言うが、内心後ろめたさも覚えていた。

「ふうん」

アリスは猫のように目を細めながら、レイフをじっと観察している。

「でも、クリスターは昔も今もあなただけよ」

ぎくりとしてレイフが振り向くとアリスは素知らぬ顔でカクテルグラスを口に運んだ。

「ね、レイフ」

「な、何だよ」

「あなたのことを聞かせてよ」

「へ？」

レイフが間の抜けた顔で聞き返すと、アリスは堪えきれなくなつたかのように吹き出して、ひとしきり笑い転げた。

「今日はね、初めは私にどう接したらいいか分からなくて固くなっていたあなただけれど、最後の方は打ち解けてよくしゃべっていたわよね。でも…気づいてなかった？ あなたのする話って、クリスターと一緒にこうしたとか、クリスターの考えではとか、とにかくクリスターは凄いいんだとか、結局みんな彼につながっていつてしまふのね。ブラザー・コンプレックスもここまでくると大したものだわ」

「う…」

かあつと瞬時に頭の中が茹で上がってしまったレイフが返す言葉もなく見守っているうちに、アリスは緑の宝石のような色のカクテルを飲みながら物思いに沈んだ。

「クリスターはもっとひどいけど」

アリスが溜息混じりにふと漏らした言葉の意味をレイフは問い返

そうとしたが、その時いきなり彼女が振り返った。

「レイフ、あなたは今、付き合ってる女の子はいるの？」

「え…いや、オレは…」

いきなり痛い所を追求されて、レイフは頭をかきながらしどろもどろに答えた。

「苦手なんだよ…女の子の相手とかするの。男の友達やクラブの仲間と一緒にいる方が楽しいし落ち着くっていうか…。大体、オレ、女の子には受けが悪くて、全然もてないし。周りにいる女の子って、皆クリスターの方ばかりは向いてるから」

「あら。あなたの学校の女の子達って見る目ないのねえ」

アリスはちよつと意外そうに眉を上げて言い、それから、ふと思いついたかのように付け加えた。

「でなければ、あなたが鈍感すぎるのかも」

アリスが何をほのめかしているのか分からず、レイフは当惑顔をするばかりだ。

レイフが黙っているの、アリスはカウンターの奥にいたバーテンダーに手を上げ、新しいカクテルを注文した。

レイフはオレンジジュースをごくごくと飲みながら、考え込んだ。（鈍感って言われりゃ、確かにそうだけど…だって女の子の考えることなんか、オレには見当もつかない。どんなふうに感じているのか、どうして欲しいのか、ちゃんと言葉にして言ってくれないと通じないよ。今もそうだし…あの時も…）

バーテンダーが鮮やかな手つきでシェイカーを振りカクテルグラスの中に注ぐ一連の動作を、アリスはほっそりとした指先で髪に触れながら眺めている。レイフにはもう関心を失ったかのように、振り向きもしない。

「オレ…」

このまま放置されることに耐え切れなくなって、レイフはついに口を開いた。

「以前、ちよつとだけ女の子と付き合ったことはあったんだよ。一

つ上の学年にいたハニーって子だった」

アリスは頬杖をついたまま、ちらりとレイフを見やった。

「どんな子？」

「うん：綺麗な子だったよ。線が細くて、はかなげっていうのかな、アリスとは全然違うタイプだったよ」

「あら。何よ」

ヒールのつま先で軽く足をつつかれ、レイフは首をすくめておっかなびっくりアリスの機嫌を窺った。

「それは第一印象で：実際付き合いだすとオレが思い描いていたイメージとは色々違ってたんだけれど：」

「それは当たり前でしょうよ。男の勝手なイメージどおりの女なんていないわよ」

「ていうか、訳ありだったんだよ、彼女。そもそもオレに近づいてきたのも、別にオレと付き合いたかったからじゃなくて、別ののっぴきならない事情があったからでさあ」

アリスは怪訝そうに眉をひそめた。

「どういうことよ、それ」

「いや：」

レイフは口ごもった。

「はつきり言いなさいよ」

「一言で言えない、込み入った話なんだよ：！」

アリスは椅子を軽く回転させて、レイフの方に体を向けた。

「いいわよ。最後までちゃんと聞いてあげるから、この際打ち明けてみなさいよ」

まっすぐに自分の目を見つめるアリスの緑の瞳を、レイフは迷いながら見返した。

こんな話、何の関わりもない他人に気安く打ち明けられるようなものではない。今まで、たとえ親友のトムにさえ、ちゃんと話したことはなかった。

しかし、ためらいながらも、やがてぼつりぼつりと彼が語りだし

たのは、自分の中でずっとわだかまっていたものを誰かに聞いてもらいたいという気持ちがあったからかもしれない。

「あれから、もう二年になんのかな。オレがハニーと出会って、しばらくして付き合いだした…当時、うちの学校にはたちの悪い不良グループがいてさあ」

「あなたの学校って、有名なエリート校よね？ まあ、中には少しくらいはめを外したがるやんちゃな学生だっているでしょうけれど、基本的に育ちのいい恵まれた家庭の子供達でしょう？ 他の学校の荒れ方とは比較にならないと思うわ」

「うん。オレもそう思ってた。だから、あいつらの噂は時々聞いてたけれど、全く気にもとめてなかったんだ。自分が巻き込まれて初めて、どんなにヤバイ連中かって分かった…いや、アリスの言うとおり、皆、多少ぐれてももとは育ちのいい高校生だよ。あいつらだけじゃ何人集まっても大それたことなんてできるはずがない。実際、本当に危ないのは、そいつらのボスだけだったんだ」

レイフは急に喉の渴きを覚えて、グラスに残っていたジュースを一気に飲んだ。

（これで君も僕らの仲間だね、レイフ。もう逃げようとしても逃げられない…分かるだろ？）

記憶の奥底に封じ込んでいた怪物が耳元でそう囁く。

レイフは強烈な寒気に襲われ、思わず身震いした。

「ジェームズ・ブラック：J・Bって通称で奴は呼ばれていた」

心を静めようと深呼吸をし、レイフは再び語りだした。

「オレの一学年上で、ハニーと同じ英才クラスの生徒だった。家はアメリカ有数の資産家で、ヨーロッパのどこかの王族だか貴族だかの末裔だって噂の名門。奴自身も学校始まって以来の秀才で通るほど優秀で、生徒は無論、教師からも一目置かれていた」

「うん？ 不良グループのボスって話じゃなかったの？」

「表と裏の顔を使い分けていたんだよ。『英才クラスのジェームズ』なら、オレも、九年生の時から知ってた。直接付き合いがあったわ

けじゃないけど、奴は…クリスターと親しかったみたいだから」

「クリスターの友達だったの？」

「そこまで深い付き合いがあったのかは知らないけど、ただ…話は合ったらしいな。クリスターも英才クラスだから、たまに上の学年と一緒に授業もあったりして…ディベートのクラスだけでは物足りないって、放課後もカフェテリアで粘って何時間もジェームズと討論したりさ。楽しかったらしいぜ、クリスターは…だって、あいつとまともに議論できる奴なんて、同じくらいの年の学生の中にはいないからさ」

「そのジェームズ君は、理屈屋のクリスターと頭のレベルが同じだったのね」

「もし学年が一緒だったら、クリスターと奴とで首席争いになってただろうさ。ジェームズも、クリスターがスキップしてくれればって思ってたみたいだぜ。あいつは退屈してたんだよ。周りを見渡しても、考えや行動が読めてしまう、ひとたまりもないような低レベルの連中ばかりで、つまらない日常に飽き飽きしていたんだ。たぶん、奴にとってクリスターは、初めて出会った対等に付き合える他人だったんだと思う」

言いながら、レイフは実に嫌な気分になっていた。

あの怪物とクリスターが近いとか、対等に付き合える他人とか、本当は認めたくなどない。

「それで、あなたのもとガールフレンドのハニーとは、どう話がつながっていきのかしら？」

幾分焦れたようなアリスの声が促すのに我に返ったレイフは、慌てて話を続けた。

「ええと…実は、ハニーは…ジェームズの—J・Bの恋人だったんだ」

「何ですって？　つまり、ハニーはJ・Bと付き合っているくせに、あなたにも気がある振りをしたってこと？　あなた、二股をかけたんだ？」

レイフはしゅんと項垂れた。

「そう言われると身も蓋もないけど、そういうことになんのかな。ただ、ハニーは悪くないんだよ。悪いのは、彼女を支配して思い通りに操ってたJ・Bなんだ」

半ば自分に言い聞かせるように訴えるレイフをアリスはどこか呆れたような目で見ていた。

「ハニーはJ・Bに騙されて、いいように利用されていたんだ。まさか奴があんな悪党だと知らずに好きになって、付き合い始めて…挙句の果て、本当にひどい目に合わされたんだ」

レイフはこみ上げてきた怒りを封じ込めようと、カウンターの上に置いた手をぐっと握り締めた。

「J・Bと付き合いだしてしばらくした頃、奴に誘われていったパーティーで…ハニーは何人もの男達に集団で暴行されたんだ。そして、そう仕向けたのは、彼女の恋人のJ・Bだった」

「…本当の話なの？」

怪しい雲行きの話に、アリスが声を低めて囁いた。

「ああ」

「学校は何の対処もしなかったの？」

「ハニーは奴らを訴えなかった。それに、そんなひどいことをされてからも、J・Bと付き合い続けたから…それじゃあ結局合意のことだったんだって、彼女も奴らの仲間として見られるようになったんだ。それに、実際レイフがあったって証拠も証言もなかったし…いつだって何をやってたってJ・Bは絶対に尻尾を掴ませない。それに、学校の理事をやってて、多額の寄付をしていた奴の親の手前よほどのことがない限り、学校も奴に下手な手出しはできない雰囲気だったんだ。そう、不良グループのボスは、あの秀才のジェームズ同一人物だって、生徒も教師も、知ってる奴は知っていた。けれど、大っぴらに言い立てることはできなかった…たまにいたことはいたんだよ、ジェームズを退学にするべきだって校長に掛け合う教師や被害にあったって訴える生徒も…その後ひどいリンチにあった

り、訳の分からないトラブルに巻き込まれて学校を辞める羽目になったりして：そうになると、下手に波風立てない方がいいって暗黙の了解ができあがっちゃった。だから、皆、どうしても奴を話題にしたい時は声を潜めてJ・Bって呼んでたんだ」

「そんな大した悪党がいるなんて、にわかには信じられない話だね。だって、いくら頭がよくたってまだ十代の少年でしょう？

たった一人の学生に子供ばかりか大人までも牛耳られていたなんて：」

「それは、J・B本人に会ってみないと実感できないと思うよ。オレもいまだにあいつのことはよく分からない：ただ、どこか普通じゃないって強烈な違和感をいつも感じてた。そう、あいつは本物の怪物なんだって、クリスターは言ってたな」

アリスはまだ少し疑わしげだが、レイフがあまり深刻な顔をしてるので、何と言えぱいいのか分からないようだった。

「J・Bに関わった奴は皆、人が変わったようにおかしくなっちゃう。特にJ・Bの取り巻き連中なんか、もろにあいつの影響受けてさ、他人を傷つけるのも平気になっちゃってた。別に金に困ってるわけでも、親や学校に反抗したいわけでもない、ただ楽しいから、そうしてたんだ。オレはあいつらの悪事を全て知ってるわけじゃないけど：よく使う手が、これはという相手をターゲットに決めると、その人間のことを徹底的に調べて弱みを掴むか、罠を仕掛けて、脅しのネタになりそうな既成事実ってやつを強引に作っちゃうんだ。ハニーもさ、大勢の男にレイプされたってシヨックからJ・Bの言いなりになってたんだ。逃げようとする度に脅されて、どんどん深みにはまっていったって、ついには逆らうことをあきらめちゃった」

「胸の悪くなるような酷い奴ね」

「ああ」

レイフは複雑な気分を駆られてしばし黙り込んだ。

「ハニーはさ、J・Bに命じられて、オレに近づいたんだ。彼女の様子を見て、何だかおかしいなってオレも思ったんだけど、放っ

ておくこともできなくてさ。それに、オレはオレで、あの頃、学校が面白くなって、フラストレーションが溜まってたから、ハニーを通じて知り合ったちよつと悪そうな連中とすぐにつるむようになっちまった」

「あらあら：何よ、危ない不良グループと知ってて、そんな連中と付き合ったの？」

「その頃は、まだオレも、そいつらがどんな奴らか、よく分かってなかったんだよ。オレと同じように学校生活に不満があつて、とにかく無性に何もかもに逆らいたくてイライラしてるだけの奴らかと思った。噂のJ・Bは、初めの頃は姿も見せなかったし：でも、段々、あいつらに違和感を覚えだした。何もしていない生徒を捕まえて平気で暴力振るったり、強請ったり：そのやり方がさ、あんまりあくどくて、ちよつとぐれた高校生ってレベルじゃないんだ。後で知った話だけれど、奴らの一部は本当に街の犯罪組織みたいな連中とも付き合いがあつたらしくて：」

「大丈夫だったの、あなた：そんな物騒な人達と関わりを持ってしまつて：？」

「いや。オレは気がついたら、ずっぽりあいつらの手の内に捕まえられて、逃げられなくなっちゃった。あいつら、ハニーを使ってオレを罠にかけたんだ。しまったと思った時には、遅かった：オレはあいつらに弱みをつかまれちゃったし、それにハニーって人質もいたから、抜けるに抜けられなくなった。オレが本気で逆らったらハニーが酷い目にあわされる：それが恐かったんだ」

「ハニーを連れて一緒にグループを抜ければよかったじゃない。あなたなら、女の子の一人くらい守ってあげられるでしょう？ 誰か信頼できる大人に相談して、保護してもらって：」

「ハニーは嫌がったんだ：オレと一緒に来るの：」

「何ですって？ どうしてよ、無理やり、そいつらの仲間になせられてたんでしょ、彼女？」

アリスの顔を黙然と眺めた後、レイフは重い溜息をついた。

「女の考えることって、オレにゃ、分からねえ：ハニーはさ、自分を痛めつけた張本人のJ・Bのことが、あんなになってもまだ好きだったんだ」

「え？」

「全く、信じられなかったよ。J・Bに騙されてるんだ、このままここにいてもハニーが駄目になっていくだけだって、オレがどんなに訴えても彼女は耳を貸さなかった。もしもオレが力づくで彼女をJ・Bから引き離そうとしたら、自分は何をするか分からないって、自殺をほのめかすことまでした。オレは混乱して、途方に暮れて、ハニーを助けようと伸ばした手で彼女を浚うことも、その手を引く込めて自分だけ立ち去ることもできなくなった。結局、俺にできたことは、ハニーが男達から酷い目に合わされないように彼女の傍にいて見守ってやることくらいだった」

「そこまで行くと：そのハニーって子の精神状態は、セラピーにかかって治療を受けなければならぬ類のものだったんじゃないかしら」

「ああ：クリスタは、何て言ってたかな、ストックホルム症候群って奴に近い心理状態だったんじゃないかって言ってた。精神的に長い間監禁されたような異常な状態の中で、一応自分を恋人として扱ってくれるJ・Bに好意を覚えて依存してしまったんだって：」

「そのクリスタは：あなたが、そんな窮地に陥って、黙って見ていたわけはないわよね」

レイフははっと顔を強張らせ、アリスの追及の眼差しからとっさに顔を背けた。心拍数が急に上がってくるのを意識した。

「うん：その通りさ、あいつは、オレを助けるためにJ・Bと対決したんだ」

レイフは心もとなげに上げた手で顎の辺りをそっと撫でた。微かに指先が震えていた。

「オレがハニーのためにグループから抜けるのをあきらめた頃、やっとJ・B本人がオレの前に現れた。オレは心底驚いたね、だって、

そいつは兄貴と仲良くやってた優等生のジェームズだったんだから……どういふことだ、どうしてクリスターの弟のオレをこんな目に合わせるかって聞いても、奴は少し困ったようなあいまいな笑顔で首を傾げるばかりでさ……クリスターなら分かるだろうけれど、俺には理解できないって言いやがったんだ。そうして、オレに、とんでもない難題を押し付けやがった」

「何を言われたの？」

「その頃丁度十年生の一学期が始まって、オレは……フットボール・チームの主力選手だった。ぐれて反抗しまくっても、やっぱり好きなフットボールだけは続けてたんだ。そのオレに、J・Bの奴、八百長試合を持ちかけやがった。その頃うちのチームはほとんどん力をつけていて、大会関係者からも密かに注目されてたんだけど、それが悪い連中の中で賭博の対象になってたんだよ」

「それって……もしかして違法じゃ……」

「プロじゃなくってもさ、そりゃやっぱりまずいだろ……。大体、真剣勝負の世界でどんなに脅されたって嘘のプレーなんかできないって、オレは断ったんだ。だけど――」

レイフは悔しげに唇を噛み締めた。

「たぶん、J・Bの脅しが頭の片隅にあったからだろうな、オレは、大事な試合で、普段はしないようなミスをしちまったんだ。あれは絶対故意じゃなかった。けれど、J・Bは、オレはわざとミスをして勝てるはずの試合を負け試合にしたんだって言って、オレを揺さぶったんだ。言いがかりだとオレは反論したけれど、オレのプレーがいつもと違っていたことは確かで、もしもあれは八百長だったんだとコーチに話したら、オレはきっとチームを辞めさせられるだろうって」

「なんてこと……」

「オレは追い詰められたよ。J・Bは今度こそきつと、オレに本当の八百長試合を強要するだろう……そんな汚いゲームに手を染めたら、オレは、もう……スポーツ選手としてはおしまいだ」

あの時の不安と恐怖が蘇って、レイフの心をひしがせていた。

「オレが、どうしようもなくなって、助けてくれて心の中で悲鳴をあげた時、クリスターは動いたよ。当時のオレは、あいつにまで反抗してたから、自分の抱えた問題を素直に打ち明けることもできないでいたんだけど：グループの集まりに嫌々顔を出して、ひどい気分で夜遅くに家に帰った時、あいつに捕まった。まあ、そのパーティーでは怪しげなクスリとかマリワナとかやってる奴はいたんだけど、オレは絶対それらにだけは手を出さなかった。ドラッグなんかやっちゃまうと、後はもう転がり落ちていきそうな気がしたから―オレは、駄目になるつもりはなかったんだ。でも、そういう怪しい場所にいたってことは、体についた臭いで分かったんだろうな。クリスターの奴、顔色を変えて、オレを無理やり地下室に引きずっていったんだ」

ドラッグをやったのか―凄みを含んだ声でそう尋ねてきたクリスターは、本当に恐かった。

違うと訴える間もあらばこそ、クリスターの容赦のない鉄拳が飛んできてレイフは殴り倒された。

あそこまで切れたクリスターを見たことなど、レイフもちょっと記憶にないくらいだった。

散々殴られたレイフが血反吐を吐いて、ついには泣きながら許しを乞うまで、彼は折檻をやめてくれなかった。

その後、レイフはそれまでの経緯を洗いざらい白状させられた。ハニーのことや、彼女を通じて不良グループに関わるようになり、それがJ・Bの罠だったことも、フットボール賭博に引き込まれかけていることも。

「それで、クリスターはどうしたの？」

「あいつはさ、ちょっと考え込んだ後、分かったと言ったよ。後は僕が何とかするから、安心しろって」

レイフは気持ちを落ち着けようと大きく息をついた。

「それからしばらく経った頃：J・B達のアジトにあいつは単身乗

り込んできたんだ。親父の銃を持ってさ」

「まさか」

「オレも信じられなかったよ。拳銃持って正面から殴りこみなんて、あいつが絶対しそうにない無謀なことだから：後から話を聞いたなら、そんな意表をついた行動もあいつの計算のうちだったらしいけど」

レイフはこみ上げてきた緊張感に耐え切れなくなって目を閉じた。すると、瞼の裏に、あの緊迫した状況のイメージが浮かび上がる。

（誤解をしないでくれ、ジェームズ、僕は君のために犯罪者になる気はない。だが、必要ならば、そうするだろう。いいかい、これは僕と君との勝負だ：命がけのね。僕の弟も、君の手下も関係ない、二人だけで決着をつけよう）

あの場面にレイフは遭遇したが、鬼気迫る迫力でJ・Bに挑みかけるクリスターをとめることはできなかった。J・Bでさえ、クリスターに圧倒されのみ込まれていた。

確かに、クリスターの行動の異常さは計算高いJ・Bを混乱させ、その判断を一瞬狂わせたのだ。

「ロシアン・ルーレットって知ってるよな？」

「拳銃に一発だけ弾丸をこめて、自分のこめかみに当てて引き金を引くって、命がけのゲームよね」

「クリスターは、それでJ・Bに勝負を挑んだんだ。交互に引き金を引いて、恐怖に耐えられなくなって先にゲームから下りた奴の負け。それとも、本当に弾で頭をぶち抜くか」

「嘘でしょう：そんなこと：？」

アリスは冗談として笑い飛ばそうとしたらしいが、薄っすらと額に汗を浮かべながらとつとつと語るレイフの様子に、とっさに黙りこんだ。

「クリスターがそんな危険な賭けをするなんて―でも、ロシアン・ルーレットなんて無茶苦茶な勝負に、そのJ・Bまで乗ったっていうの、それこそ馬鹿な話よ」

「冷静に考えればそうなんだけど：あの場の雰囲気自体がちょっと

おかしなものになってたんだよ。そこにいた奴ら、酒やらドラッグやらでハイになってたし、クリスターに煽られるがまま異様に盛り上がりだしてさ…あの熱気にJ・Bの奴もつい流されちゃったのかな…？ 何にせよ、あいつは、自分の手下連中の前でクリスターと一騎打ちをしようと云っちゃったんだ」

だが、それはクリスターの仕掛けた罠に飛び込むようなものだった。J・B自身も、すぐにしまったと思ったはずだ。

「最初にクリスターが引き金を引いて、次にJ・Bが、そして、またクリスターが…しかし、結局J・Bは拳銃を二度も自分のこめかみにあてることはできなかった。勝負は呆気なくついたよ。周りで見守っていた連中から不満の溜息やブーイングがあがるくらいに」

固唾を呑んでレイフの話に耳を傾けていたアリスは、ほっと肩で息をついた。

「よかった…昔の話だと知っていても、聞いていてはらはらしたわ。クリスターって、本当に、怒ったら何をしでかすか分からない人だったのね」

そんなアリスをちらっと見やり、レイフも少し緊張がほぐれたのか口元をほころばせた。

「心臓に悪い話だろ。オレなんか、現場にいて目撃したわけだから、あいつらの勝負がつくまで生きた心地がしなかったぜ。でもさ、実は、この話には種明かしがあつてさ」

不思議そうに見返すアリスの顔を覗き込みながら、レイフはこっそり秘密を打ち明けるような調子で続けた。

「クリスターは勝算のない賭けはしないんだ。ロシアン・ルールってなんて派手なパフォーマンスも、J・Bを引っ掛けるための罠だった。あいつさ、初めから銃に仕掛けをして、自分の思うところで弾が出るようにしてたんだよ」

「そんなこと、できるものなの？」

「あいつさ、以前、学校の社会奉仕の時間で障害者施設の介護のボランティアをやってて、そこでもとベトナム帰還兵っていう触れ込

みの変わり者の男と親しくなったらいいんだ。その男は戦場での生々しい体験談をたくさんクリスターに聞かせただけだ……その中に、ロシアン・ルーレットを使いたいかさま賭博の話があった。その話を覚えていたクリスターは、J・Bのもとに乗り込むにあたって、男からその方法を伝授してもらったんだ」

「何よ。それじゃあ、命がけの勝負って、クリスターの芝居だったわけ？」

「うん……ただ、百パーセントうまくいく確信はなかったらしいけど……その辺り、オレも頭に来て追求したら、八割方成功する自信ならあったって言うわけ。でもさ、それってさ、二割の確立で命落としてたってことじゃねえか……分かってて、あんなことしちゃうクリスターがやっぱりオレには信じられなかったよ。それもさ、オレのためにだぜ？　オレは……そんなこと、少しも望んでなかった……自分のせいで、下手したらあいつが死んでたかもしれないなんて、考えるだけで震えがきそうになるのに……あいつは勝手に決めて、行動しちまった。オレはどうなんだろう、いざって時にあいつと同じことをあいつのためにやれるのか……？」

「レイフ……」

途中から自問自答めいた低い呟きとなった告白を無意識に垂れ流していたレイフは、アリスの気遣わしげな呼びかけに、我に返った。「あ、ごめんごめん、ついぼうつとしちまった。ええと、どこまで話したっけ……ああ、そうだ、J・Bがクリスターとの勝負の後どうなったかだけだ……」

兄に対する引け目やわだかまりをつい漏らしてしまったことをごまかすように、レイフは強引に話を元に戻した。

「その一件があってから、J・Bはすっかりおとなしくなっちゃったよ。オレからは完全に手を引いたのか、あいつの手下がオレの回りをうろちよろすることもなくなった。それからしばらくしてさ、なぜか、あいつがやってきた悪事が色々表に出てきたんだ。新聞部の連中が、うちの学校の幾つかのスポーツ・チームで不正行為が行

われていたって記事を書いたことがきっかけだった。例の不良グループが関与していた証拠を持って校長らに訴えてさ：スポーツ重視の路線でやってた校長はことを重くみて調査させて―関係者は処分された。フットボール・チームでも、賭博に関わっていた選手やトレーナーが数人辞めさせられたぜ。オレは、危うく難を逃れことになるわけさ。それから、今までJ・Bが恐くて黙っていた被害者達も声をあげ始めた。おまけに、不良グループの中からも裏切る奴が出てきてさ、J・Bを追い詰めるのに一役買ったわけ。クリスタ―との一騎打ちで不様な負け方したせいで、あいつ、仲間の信頼失っちゃったんだな。ついには尻尾を掴まれて退学処分、逮捕されて、矯正施設に送り込まれちゃった」

「ふうん：一筋縄ではいかない悪党も、最後は呆気ないものだったのね。クリスタ―との勝負に負けてから、すっかりツキにも見放されたんじゃない？」

単にJ・Bの悪運が尽きたというだけの話じゃない、クリスタ―がそう仕向けたんだと、レイフは言いかけたが、自分でも思うところに確たる自信があったわけでもなく、結局黙り込んだ。

（クリスタ―は何も言わないし、オレが追求してもうまくかわして、認めようとはしなかったけれど：やっぱ、あいつの仕業じゃないだろうか。J・Bを追い詰めて、ついには学校から追い出した：J・Bとの対決の後もずっと、クリスタ―は様子がおかしかった。オレには秘密で、陰で何かやばいことをやってやがったんだ）

レイフがそんな疑いを兄に対して抱くのは、最後に自分達の前に姿を現したJ・Bが残した捨て台詞のせいだ。

（やってくれたね、クリスタ―：でも、このままではすまさないよ。僕達のゲームはまだ終わらない：終わらせるものか）

既に自ら関わった犯罪行為の証拠が見つかり警察に追われていたJ・Bに向けたクリスタ―の目は涼しげで、彼との確執の気振りも感じられなかったが、クリスタ―が一見付け入る隙もないほど冷静であればあるほど、実は胸のうちはふつふつとたぎっているものな

のだ。

いつも完璧に自分をコントロールしているクリスターの内面を見抜ける人間はめったにいないが、レイフには直感的に分かることが多い。クリスターの気持ちが昂ぶれば、多かれ少なかれレイフにも伝わる。

しかし、レイフに分かるのはそこまでで、クリスターの複雑な思考を手取るように読み解けるわけではなかった。

（なまじ中途半端に分かつちまうから、余計に気になるんだよな。

全く、双子って、得なのか損なのか…）

またしても話の途中で別のことに気を取られ、レイフは長いこと黙り込んでしまったようだ。しばらく忘れ去られた状態のアリスが、少々不機嫌そうに口を開いた。

「それで、そもそもの発端になった、ハニーって子はどうなったの？」

虚を突かれたレイフはまじまじとアリスを見返すと、やっと何を聞かれたか分かったというように、ああと呟いた。

「J・Bとクリスターの最初の対決の後、ハニーはさ、クリスターと付き合い始めたんだ」

「え…えっ…？」

「クリスターはさ、あの時、とにかくハニーをJ・Bから引き離す必要があると思ったんだな。本当はオレがそうすべきだったんだけど、できなかったから」

「あなたが好きだった子を彼は奪ったの？」

「形としちゃ、そうなるけどさ…でも、仕方ないよ。オレには、ハニーを救うことはできなかったんだから」

自分に言い聞かせるように呟くレイフは、そうとは気づかぬままに、まるで苦いものを無理やり飲み下そうとしているよう顔をしていた。そんなレイフを見つめるアリスの目がずっと細められる。

「クリスターは、きつと、あなたのためにそうしたのね。別にハニーのことが好きだったわけじゃないでしょう？」

「そこまで：オレが、知るかよ。どうしてハニーをオレから取り上げたか、クリスターを締め上げて追求するなんて惨めな真似はさすがにできなかったし：どう考えたって、オレよりクリスターの方がハニーのためになってた。オレは、ほんとに役立たずで、ハニーを助けたかと思ひながら、結局傍で見ていることしかできなかった。クリスターはJ・Bから強引に引き離れた後もちゃんと彼女を守っていたし、彼女の抱えた精神的な問題にもうまく対処していた。実際クリスターと付き合いだして、ハニーは随分落ち着いたんだ。ただ色々辛い思い出のある学校に留まることはできなかったのか、結局親のもとに帰っちまった。でも、それでよかったんだよ」

「ふうん：」

アリスはレイフの言葉には共感できなかったらしく、気のない素振りです空になったカクテルグラスの縁に指を滑らせながら言った。

「クリスターは、きつと厄介払いができたと思っただんじやないかしら」

「どういう意味だよ？」

「だって、あなたの心をかき乱し、散々振り回した、情緒不安定の女の子を遠くにやってしまえたわけじやない」

「そんな言い方ないだろ。クリスターはハニーに対してちゃんと責任を持った行動を取っていたぜ。彼女を好きだと言ひながら何もできなかったオレより、ずっと誠実だった」

「クリスターがハニーに冷静に対処できたのは、あなたと違って彼女の何を何とも思っでなかったからよ。ハニーはあなたには、無理やりJ・Bから引き離されたら自殺するって脅して、だから、あなたは身動きが取れなかった。でも、クリスターは、ハニーの言葉には惑わされなかった。どうせ口先だけだと見抜いていたんでしょうけれど、極端な話、彼女が本当に自殺したとしても、クリスターにとっては大した痛手ではなかったのよ。クリスターのしたことは確かに立派だけれど、ちょっと釈然としないわね。ある意味冷酷よ：私がそのハニーと同じ立場だったら、ふざけないでって彼をひっ

ばたいてやったでしょうね。好きでもないくせに私と付き合って、それが何よりも大切な可愛い弟のためだなんて、失礼しちゃうわ」

「アリス……！」

「あら、私は、ただ思うところを正直に言ってあげただけよ。あなただってクリスターのやり方に納得できないものを色々抱えているくせに、彼は正しいって自分に言い聞かせて……うん、それだけならまだしも、自分は駄目だ駄目だって劣等感をつのらせるのはやめなさいよ。見ていて、イライラするわ」

「う……」

レイフは赤くなったり青くなったりしながら何か反論しようと口をぱくぱくさせるが、ここまですばずば言われては切り返しようがなかった。

「だって……仕方ねえじゃないか……！ オレは、クリスターとは違うんだから、あいつのように何もかも鮮やかにさばけたらって思うけれど……あいつに、敵うことなんかできないから——」

「あなたがクリスターと違うのは、当たり前じゃない。でも、だからって、敵わないと決め付けるのはどうかしら」

レイフは当惑のあまり瞳を揺らせながら、問いかけるようにアリスを見返した。

「クリスターと自分を引き比べるのはよしなさいよ、レイフ。クリスターは確かにすごい子だけど、あなたの不器用な優しさも私は嫌いじゃないわよ。もう少し自分を認めてあげなさいな。そうすれば、あなただって、きっとクリスターに負けなくらい素敵になれるから」

「ア、アリス」

ついさっきはレイフのことを散々けなしていたくせに、今度は手のひらを返したような優しい態度で励ますような言葉をかけてくる、アリスの真意が全く読めずに、レイフはますます混乱するばかりだった。

結局傍に来たバーテンダーを捕まえて、もう一杯ジュースを注文

することで、レイフはその場を取り繕った。

（クリスターと自分を引き比べるな、か）

ジュースを飲みながら、レイフは、彼なりにアリスに言われたことを一生懸命考えていた。比較するなど言われても、一緒に生まれた、この世で最も自分に近い相棒を意識しないでいることなど、無理だ。

（でも：オレはクリスターとは違う：。だから、クリスターのやり方や考えにはついていけないって思うことだって確かにあるよ。そんな時、オレは：とても不安で落ち着かないような気分になる：あいつとの差や違いってものから目を背けたくなる：）

アリスが言いたいのは、レイフにもちゃんと個性があるのだから、それを認識しろということなのだろう。

クリスターにできてレイフにはできないことはたくさんある。しかし、レイフが得意とすることでなら、クリスターを追い抜くことも可能なのだ。

ふっと、レイフの脳裏を、フットボール・チームのトライアウトでクリスターをしのぐ足の速さを証明した時の記憶が蘇った。

言いようなない息苦しさを覚えて、レイフはすぐに頭の中にかんだ考えを打ち消した。

追い詰められたような気分でレイフはバーの中に視線をさ迷わせた。壁の時計に自然と目が行った。

「あつ、やべ、もうこんな時間になってら」

クリスターの目を盗んでほんの少しだけバーに顔を出すつもりが、随分長い時間アリスと話しこんでしまったようだ。

焦りを覚えながら席を立ち上がるレイフをアリスがうろんそうに見上げる。

「どうしたの？」

「あ、いや。クリスターには内緒でここに来たからさ、あんまり遅くなるとあいつが心配するっていうか、勝手な行動するなって説教されるかなって」

アリスは白々と冷たい目になって、幾分軽蔑したような声で言った。

「あら、結局、クリスターが気になるのね。私の誘いに乗って自分一人でここに来るあたり、あなたもまだ見込みはあると思ったけれど：駄目ね」

ふっと顔を背けて、心底がっかりしたというように溜息をつくアリスに、レイフはむっとした。

「駄目って、どういう意味だよ？」

アリスは応えず、レイフから視線を逸らしたまま席を立った。

「おいっ」

傍らをすり抜けるようにしてバーのエントランスに向かうアリスを、レイフはむきになったように追いかけた。

「アリス！」

バーを出た所にあるエレベーターの前でアリスは足を止めて、レイフに向き直った。

「大きな声を出さないでよ」

「アリスがあんな気になることを言うからじゃないか。その意味も教えてくれないで、さっさと出て行くななんて卑怯だぞ」

「そんなことも分からないところが子供なのよ、あなたは」

あからさまに子ども扱いされたレイフはさすがにかっとなって、アリスを睨みつけた。

「いいわよ、教えてあげる。あなたがそうやって、弟としてクリスターに守られる立場に甘んじている限り、あなたは絶対彼に並ぶことも、彼を追い越すこともできやしないわ。でも、それがあなたの望むことなのね：少しは期待したのに、がっかりだわ」

「何だと…？」

レイフの声が物騒な響きをはらんで低くなったが、アリスは怯まず、ふいに真摯な目になって彼に問いかけてきた。

「ねえ、レイフ、一体いつまでクリスターに甘えて、寄りかかっているつもり…？ J・Bとの決着を、あなたは自分の代わりにクリ

スターにつけさせてしまった…この先、また何かある度に、クリスターを盾にしようって言うの？ クリスターも大変ね、こんなに大きく育った弟を一人で支えて、引っ張って行かなくてはならないなんて」

「違う！」

思わず、アリスの言葉を遮るようにレイフは叫んでいた。

「オレは、クリスターの重荷になりたいわけじゃない。オレは、ただ―」

額に汗を浮かべながら苦しげに訴えるレイフを、アリスは容赦なく追及した。

「ただ、何よ」

レイフは口ごもり、アリスから目を逸らした。

「あなたは、本当に、十一歳の頃からあまり成長していないのね。そう言えば、あの時も…クリスターは、早く自分に追いついてもらいたいのにあなたは追いついてくれない、あなたはまだあまりにも子供だからって、こぼしていたわ」

レイフは小さく息を吸い込み、問い返したいかのようにアリスを振り返った。

「ねえ、レイフ、私に言われたことを違うって否定したいなら、クリスターに追いついてみたいなら―どう、今から私の部屋に来る？」

「えっ…え…？」

挑みかけるような調子でアリスが言ったことの意味を理解した途端、レイフは耳まで真っ赤になった。

「ア、アリス」

上ずった声でアリスの名を呼んだものの、後が続かない。じっと固まったまま立ち尽くしているレイフをアリスはしばし眺め、ふつと苦笑した。

「いいのよ。気にしないで、レイフ」

アリスはレイフから興味をなくしたようにすぐに身を引いて、エレベーターのボタンを押した。

エレベーターが到着するまでの短い時間、アリスはレイフを見ようとしなかった。そんな彼女の白い横顔をレイフは食い入るように睨み付けていた。

「それじゃ、おやすみなさい」

レイフは黙って、アリスがエレベーターに乗り込むのを見送った。ドアが静かに閉じた途端、レイフは肩を大きく上下させて息をついた。

（あなたがそうやって、弟としてクリスターに守られる立場に甘んじている限り、あなたは絶対彼に並ぶことも、彼を追い越すこともできないわ）

レイフは、体の脇に垂らした手をぐっと握り締めた。

（オレは、あいつに守られたいわけじゃない。オレのためにあいつに危ないまねをさせるのも、何かを犠牲にさせるのも、もう嫌だ。このままのオレでいいわけがないことくらい、分かってる）

レイフは目の前で点滅するエレベーターの光を狂おしげに見つめた。

アリス。クリスターが最初に経験した女性。

（できれば、おまえも誘いたかったんだけど、おまえってばまだ全然ねんねだったから：あきらめたんだよ）

アリスとの体験を認めたクリスターの言葉をレイフは覚えている。もしも――六年前のあの夜に戻れたら、もう一度やりなおせたら、レイフはきつとクリスターと一緒に彼女のもとに行っていただろう。好きなものは何もかも二人で共有してきたように、彼女のこと、クリスターと同じように愛しただろう。

（あの頃に戻るなんてできやしない。けれど――）
心許なげに揺れ動いていたレイフの顔が、ふいに厳しく引き締まった。

頭を巡らせ非常階段のサインを見つけると、レイフは素早くそちらに体を向け、身を低く屈めて、フットボールの試合でハットコールを待ち受ける時の構えを取った。

(SET)

とくんとくん…心臓の鼓動が早くなる。緊張感と共に体中に力がみなぎる、レイフが慣れ親しんだ心地よい感覚が戻ってくる。

(HUT、HUT…)

常に一步前を歩いているクリスターの背中が、レイフの脳裏にふっと過ぎった。

レイフは足をぐっと踏みしめ、全身をたわめるようにして力を溜めた。

(オレは、おまえに追いつきたいんだよ、クリスター)
とくん。

(HUT!)

転瞬、レイフは弾丸のようなスタートダッシュを切った。

爆発的な勢いで駆け出すレイフにたまたま鉢合わせした気の毒なホテル客がひいっと叫んで壁際に逃げる。

その脇をレイフはものすごい勢いで走り抜け、非常用のドアを押して階段に飛び出すと、更に加速しつつアリスの部屋がある階目指して一気に駆け上がった。

何も考えず、突き上げる衝動のまま無我夢中でレイフは駆けつけた。頭の中が真っ白になっていくほどに、鬱屈としていた胸はすっきりと晴れわたっていく。

それほどアリス自身が欲しいのかどうか、彼女を本当に愛しているのかというと、レイフには確信が持てなかった。

ただ、あの時、クリスターだけが手に入れてレイフは手に入れ損ねた何かを、熱望していたのだ。

(クリスター、おまえが抱いた女だからこそ、たぶんオレは欲しいと思うんだ)

目当ての階にたどり着くとレイフは体当たりするようにドアを開けて、廊下に飛び出した。

すると、うまい具合にエレベーターから降りて自分の部屋へゆっくりと歩いていくアリスの後ろ姿を廊下の向こうに見つけた。

「アリス！」

ほとんど怒っているかのようなレイフの怒鳴り声を聞いたアリスの背中がびくっと震えた。とっさに振り返った白い顔が信じられないものを見たかのごとく引きつる。

「レ、レイフ、あなた、どうして――？」

皆まで言う間も与えず、レイフは瞬時に間合いを詰めると伸ばした腕でアリスの肩を掴んで強引に抱き寄せた。気の強いアリスが、瞬間、怯えたように身をすくめ、小さな悲鳴をあげる。

アリスにはずっと頭が上がりなかつたので、うっかり忘れそうになったが、子供の頃は自分よりも背の高かつた彼女が今は随分小さく華奢に感じられるほどに、レイフは逞しい男に成長していたのだ。「なめんなよ、これでも陸上の高校記録保持者だぜ。本気を出せば、こんなものさ……って、まさか本当に追いつけるなんて思ってたんだけど」

アリスが苦しそうに息をついたので体に回した腕の力を緩めながら、レイフは呆然と自分を見上げる彼女に向けて茶目っ気のあるウインクをした。

「心臓が止まるかと思ったわ……ほんとにもうっ、なんて子……！」

レイフの人懐っこい笑顔にほっと肩の力を抜いて溜息をついたかと思うと、アリスは憎たらしそうに彼を睨み上げた。しかし、その草色の瞳にはむしろ、これまでになかったほどの親密さが込められている。

「へえ、アリスでも普通の可愛い女の子みたいに、そんなふうになびくったりしたり恐がったりするんだ」

「何よ」

へらりと笑うレイフにアリスは一瞬柳眉を逆立てるが、すぐに表情をやわらげて、どこかあまやかな声で囁いた。

「馬鹿」

アリスのほっそりとした体がそっとレイフの胸に寄りかかってくる。急に女らしくなってしまった彼女に、レイフは内心激しく動揺

したが、今更後には引けなかった。

「ね、レイフ」

「うん？」

これから一体何をどうしたらいのか、密かに冷や汗をかきながら悩んでいたレイフは、アリスが小さく呼びかけるのに素直に身を屈めた。すると、彼女の手が伸びてきて彼の頬に触れ、次いで柔らかな唇が彼の口を覆った。

ぷちん。レイフの頭の中で何かが切れたような気がした。

（そうだ、どうせ分らないことをあれこれ深く考えるよりも、感じるままにさっさと行動しちまえ。その方が、きっとオレらしい）
その後、レイフはアリスに手を取られるがままに黙ってついていき、彼女の部屋のドアをくぐった。

次にこのドアを出て行く時は、もう何も分らない子供ではないのだと、熱くなった頭の片隅で思いながら――。

なあ、教えてくれよ。

あの時、あいつがどんなふうにあんたに触れたのか、どんな顔を
して、どんな言葉で囁いたのか。

今度はオレが触れる、キスをする、意味をなさないうわごとのよ
うな言葉を囁く…。

オレはこの女が好きなのか。それとも、やはり――この熱夢の中で
想い焦がれるのは、柔らかで馴染みのない女の体ではなく、オレが
よく知っている、別の体なのか。

ああ、本当は、俺だって分かっているんだ。

けれど、認めちまうと、オレとあいつが必死になって忘れようと
続けたあの過ちを蘇らせることになる。

ただの兄弟ごっこなんてさ、空しい嘘で塗り固めでも守ろうとし
てきた穏やかな日常をぶち壊すことになる。きっと、オレ達を信じ、

愛してくれている、大切な人達を傷つけることになってしまう。

だから、せめてー。

クリスター、おまえを受け入れた、この温かくぬめった暗がりの中に埋もれることで、おまえと一つになりたい…。

第3章唯一の絶対（7）

（クリスターと同じ顔、同じ体、同じ声：でも、違うのね）

レイフは夢と現実の狭間をゆったりと漂いながら、優しく髪をすいていたかと思えば頬をつつき、胸を優しく撫でている、滑らかな指先の感触に、心地よさげに微笑んでいた。

まだこのまどろみの中から出て行きたくなくて、目を閉じたまま、手探りで見つけた温かい体を引き寄せて、いい匂いのする柔らかな胸に顔を埋める。

アリスの温もりがとても慕わしく、愛しくて、このまま抱きしめていたいとレイフは思っていた。

何が何だか分からないままにことがなってしまったような気もするが、アリスが自分に与えてくれたものに、心から感謝したい気分だ。

（すげえ気持ちいいや）

何事か囁きかけてくるアリスの優しい声をぼんやりと聞きながら、レイフは穏やかな満足感の中で、ふっと思った。

（よかった、オレも、ちゃんと女とできるんだ。こんなに気持ちのいいことを一生知らずに送っちゃったら、そりゃ、男としちゃ、あんまりだもんな。今まで何人かの女の子とやろうとしてはうまくいなくて、その度に落ち込んだけれど：ああ、何かほっとした。それに、やっぱり：アリスが相手でよかったなって思うよ）

また少しうつらうつらし始めたレイフは、先程アリスを抱きながら忘我のうちに呟いたことを思い返した。

（ああ、この女とするのはすごく気持ちよかったけれど：もしも、ここに兄さんがいてくれたら、もっとずっといいだろうに：）

自分が意識せずに漏らしたこの意味を咀嚼できるほど、レイフはまだ覚醒してはおらず、胸の奥の扉を開けてゆっくりと溢れ出してきた、物狂おしいほどに熱くみだらな夢に半分浸っていた。

（今度はおまえがこの女を抱けよ。そうさ、オレが挿れてた所におまえのを挿れちまえ）

固く閉ざしたままのレイフの臉が微かに痙攣する。

「クリスター…」

熱っぽい吐息と共に呟いた途端、顔を優しく撫でていた指が、いきなりレイフの頬を思いっきりつねって引っ張った。

「いってえっ！」

悲鳴と共に飛び起きたレイフは、力いっぱいねられてじんじりする頬を手で押さえながら、傍らに気だるげに寝そべっている女をきつとなって見下ろした。

「何すんだよ、ひ、ひどいじゃないかつ」

涙目になって抗議の声をあげるレイフをアリスは不機嫌そうに睨みつけた。

「ひどいのは、あなたの方じゃない。私と一緒にいる時に、どうして寝言でクリスターの名前を呼ぶわけよ。全く、興醒めもいいところ」

アリスの言葉に、レイフは虚を突かれた。

「え、オレ、兄貴を呼んだの？」

「他の女の子と間違えて…というのなら、まだ分かるけれど、こんな時までお兄さんのことを意識するなんて、信じられない」

今はしっかり目が覚めていたが、自分が寝言で言ったことまで覚えていなくて、レイフは戸惑うばかりだ。

「マジ：かよ」

だとすれば、アリスが怒るのも当然だ。ただでさえ、こちらは何分初めてのことで要領を得ず色々失礼や粗相をやらかしたというのに―しかし、クリスターを呼んだというのは…？

（そういや、何か、おかしい夢を見たような気がするけど…）

じっと記憶を手繰り寄せていくにつれ、あやふやな断片であったものがもとの姿を取り戻してき、レイフは次第に汗をかき始めた。

（うわあっ、駄目駄目、ありえねえっ！）

いきなりレイフは両手で頭を抱え込み、もんどりうつて、シートの上に倒れこんだ。

恥ずかしさのあまり体は火がついたように熱くほてり、ばくばくいつている心臓は今にも破れてしまいそうだ。

ともすれば頭の中にゆらりとうかびあがつて形を作ろうとする怪しい幻を、レイフは必死で脇に押しやった。

そんなレイフを、アリスは可哀想なものを見るかのような哀れみのこもった目で眺めている。

「全く、クリスターもクリスターだけど、あなたも彼の弟だけはあるわね」

溜息混じりにアリスが呟くのに、レイフは半分掛布の中に隠れ込もうとしかけていた頭を上げた。

「アリス？」

するとアリスは、またあの意味深長な、からかうような笑みをレイフに投げかけながら囁いた。

「ね、レイフ、今だから教えてあげるけど：クリスターがね、六年前に私とこういうことをした時、あの子は初め、弟と一緒にじゃないと嫌だと言い張ったのよ。あなたと二人で私に触りたかったのね。さすがに私も、どうして彼がそんなことを言い出したのか分からないくて戸惑ったわ」

「そ、そう…」

そういう経緯があったということはクリスターから聞いていたのでレイフも知っていたが、頼むから今は思い出させないで欲しいと思った。

「ねえ、レイフ、何なら今からでも、クリスターの部屋に電話をかけて彼を誘ってみましようか？」

恥ずかしさを通り越して、もはやショックのあまり呆然自失となっていたレイフは、アリスがこんな突拍子もないことを言いだすのに、とっさにその意味を測りかねた。

「えっ？」

きょとんと瞬きをするレイフに、アリスは揶揄するような口調で付け加えた。

「クリスターはもう私には興味はないらしいけれど…あなたが私と一緒にいると聞いたら、きっと気を変えて、ここにやってくると思うわよ」

レイフは、石と化したかのように固まった。

「ほら、かけてみなさいよ」

アリスは果たして本気か、それとも冗談でか、枕元にあった電話の受話器を取り上げると、声も出せずにいるレイフの鼻先に突きつけた。

「え…えええっ…?!」

瞬間、レイフは受話器を払いのけ、ベッドから慌てて跳ね起きた。(ク、クリスターをここに誘うだって? ここであいつと一緒に…アリスを…なんて…うわあ、ちょっと待てよ!)

まるで自分が夢の中で思い描いた不道德な願望を見透かされたように気がして、レイフはアリスから大きく後ずさりした。

「ばばば馬鹿なこと、言うな…おわっ?」

叫んだ途端、ベッドの端につこうとした手を滑らせ、バランスを失ったレイフは後ろざまにベッドの上から転がり落ちた。

「きゃあっ、レイフ?!」

動転したアリスの声が聞こえたが、そこでレイフの意識はしばらく途切れる。

あんまり激しく動揺したせいか、拔群の反射神経も働かず、柔道教室で散々習った受身の基本も忘れて、レイフは床にしたたかに頭をぶつけ、そのまま伸びてしまったのだ。

気がつくと、レイフは心配そうな顔をしたアリスに介抱されていて、おかげで、冗談にしても性質の悪いアリスの提案は忘れ去られた。

レイフはほっと胸を撫で下ろしながら、再びアリスの隣に身を落ち着けたのだが、その後は、すっかり目が冴えてしまって、二度と

穏やかな気持ちで眠りにつくことはできなくなってしまった。

アリスがたてる安らかな規則正しい寝息を聞きながら、窓にかかった分厚いカーテンの隙間からやがて淡い朝の光が漏れ出す頃まで、そのままレイフは二人、まんじりともせず、深い物思いに浸っていたのだった。

「おはよう、クリスター」

「ああ、おはよう、アリス」

何事もなかったようにクリスターとにこやかに挨拶を交わしながら朝食の席に着くアリスを、レイフは信じられないものを見るかのような目で見守りながら、テーブルの傍で所在なげに立ち尽くしていた。

「レイフ、おまえもそんな所に突っ立ってないで、早く坐れよ」

クリスターが笑いを含んだ目で頷くの、レイフは躊躇いながらも素直に従って彼の隣に腰を下ろす。

「今日もいい天気でよかったわ。ね、どこへ出かける予定だったかしら」

「うん：ボストン郊外をドライブしながら、幾つかの観光スポットを回ろうかと思っているよ。魔女伝説で有名なセイラムとか…」

今日一日の計画について、クリスターとアリスは早速相談し始めるが、レイフはそこに混ざる気分にはなれなかった。

新緑の美しい公園を眺められる、明るく開放的なカフェレストラン。

ゆったりと朝食を楽しんでいる他のホテル客やきびきびと働く給仕の動きをぼんやりと眺めながら、レイフは密かにあくびを噛み殺す。

（ねむ…）

結局、夕べはあれからろくに眠れなかった。

勢いでアリスと寝てしまったことは後悔していないが、それに触発されたように胸の奥の封印を破り溢れ出した仄暗い想いに、レイフは今でも戸惑っていた。

「もし時間があつたら、この辺りにも足を伸ばしてもいいな…アリスは何か希望はある？」

「ううん、私は景色がいい所をドライブできたら、それでいいわ」
レイフがテーブルの上のコーヒークップを見下ろすと、視界の端に、ガイドブックをめくっているクリスターのしなやかな手が見えた。

それが妙に気になって仕方がなく、レイフはつついその動きを追っていた。しかし、やがて自分の行動がおかしく思われてきて、レイフはうろたえつつ視線を逸らした。

（何じろじろ見てんだよ、兄貴の手なんか）

すぐ隣に坐っていつもと何一つ変わらぬ態度で自分やアリスに接しているクリスターを、レイフは今ひどく意識していた。

本来なら、昨夜のアリスとの体験も含めて、クリスターに話したことや話すべきことはたくさんある。

しかし―。

（やっべえな…クリスターにどう話しかけたらいいのか、わかんなくなっちゃったみたい）

おまけに、レイフを素通りしてアリスに囁かれる、穏やかで低く、張りのある兄の声の響きにすら、ぞくぞくと何やら背中の中を辺りがむずがゆいような、今までにないおかしな感じ方をしてしまうのだ。

（何だよ、夕べのあれの後遺症か？ にしたって、一緒に過ごしたアリスよりもクリスターの方が気になるなんて、しゃれにならねえぜ）

やべえやべえと胸のうちに連発しながらレイフがじっと押し黙っている、テーブルの下でクリスターの足が動いて、つま先でレイフの足を軽くつついた。

レイフは一瞬椅子から飛び上がりそうになった。

「な、何だよ」

うろたえながら振り返るレイフを捕らえたクリスターの琥珀色の瞳は、あくまで涼しげだった。

「おまえこそ、さっきから、何、ぼうっとしているんだよ」

アリスが注文を取りにきた給仕と話している隙に、クリスターはレイフの腕を掴んで引き寄せた。

「それで―首尾はどうだったんだい？」

耳元で密やかに尋ねてくる兄に、レイフは一瞬息が止まりそうになったが、何とか気を取り直して応えることができた。

「う、うん：思ったより、うまくできたよ」

「よかったじゃないか」

いつになく固くなっているレイフの気持ちをほぐそうとしているのか、クリスターの態度も声も親しみのこもった打ちとけたものだ。

そんな兄の顔を見返しながら、レイフはふと神妙な気分になって考え込んだ後、ぽつりと言った。

「色々ごめんよ、兄貴：気、悪くした？」

クリスターは、レイフがこんなことを言うのが意外であるかのように瞬きしたかと思うと、ふっと笑った。

「馬鹿だな、僕に遠慮なんかすることないんだよ」

今度はクリスターが肘でわき腹を軽くつつくのに、レイフもやっと、まだ少しぎこちないながらも微笑み返すことができた。

「あらあら、兄弟で何か秘密のお話かしら？」

アリスがこちらを振りむいて揶揄するような言葉を投げってくるのに、クリスターはレイフの肩を軽く叩いて、すぐに身を引いた。

（大丈夫よ、クリスターはあなたのすることなんて何もかもお見通しでしょうし、あなたに居心地の悪い思いをさせやしないわ）

ここに来る前にアリスが言ったとおり、クリスターは別に取り立てて昨夜のレイフの勝手な行動を嗜めることはなかった。それどころか、認め、喜んでいるような態度を取っている―これも、レイフ

を氣遣つてのことなのだろう。

いつもなら、二人の間に波風が立ったとしても、こんなふうに兄が譲歩してくれば、レイフもそれに素直に乗って、兄弟の仲は元通りになるのが常なのだ。

しかし、まだレイフの方はクリスターと打ち解けられないでいた。(ううん、こういうことをいつか経験しても、きっとクリスターになら平気な顔で話せそうだって思っていたんだけど、現実になると違うのな)

それに、アリスが相手ならクリスターも認めてくれるだろうとは、レイフも漠然と思っていた。

自分の知らない他の女をレイフが選ぶよりかは、たぶん、クリスターも受け入れやすい。詰まるところ、クリスターが先に経験したことを、やっとレイフも通過したというだけの話なのだ。

これで二人の距離が縮まって、引け目や遠慮がなくなった分、お互い心安くなれるだろうと期待していたのに――。

(いや、違うだろ、オレは、昨夜アリスの所に行ったことが後ろめたいわけじゃない。問題は、そんなことじゃなくて――)

考えを巡らせるうちに、レイフは、次第に体が熱くなり、握り締めた手の内がじつとりと汗ばむのを覚え、それをクリスターには気づかれまいと顔を背けた。

クリスターが戸惑い、問いかけるような視線を向けてくるのを感じたが、レイフは頑なにそれを無視した。

せっかくクリスターが打ち解けようとしてくれているのに、その気持ちがないがしろにするようなものだが、他にどうすればいいのか分からなかった。

(こんなやましい気持ちを抱えながら、クリスターの目をまともに見返したり、うっかり口を開いたりすることなんてできやしねえよ……くそ、いまましい心臓の音がうるせえ)

今は、何をどう話しても、表面を取り繕うとするあまりに、きつとすごく不自然な言葉にしかならないだろう。勘のいいクリスター

ならば、レイフが抱いたよしまな感情にすぐに気づいてしまいそうだ。隠しとおせる自信などない。

（そう、昨夜の経験を素直にクリスターと分かち合えない気分なのは、オレがアリスを抱いている時に、あんな不埒なことを考えたからだ。クリスターと一緒にいてもらいたい：一つになりたい：兄さん：）

レイフは慄いたように固く目を閉じ、昨夜アリスを抱きながら垣間見た、あの怪しい熱夢を懸命に忘れよう、忘れなければと念じ続けていた。

（だってさ）

執拗に当てられているクリスターの視線が、まるで肌にちりちりと焼け付くようだ。

（同じ過ちを二度繰り返すことはできないだろ。あの頃は二人とも子供だったからなんて言い訳も、今度はきかなくなる。だから――）

ともすれば堰を切ってあふれそうになる激しいものを封じようとするかのように、テーブルの端に置いた手を、レイフはきつく握り締めていた。

一見穏やかながらも内に不穏な気配の漂った朝から始まった二日目も、計画通り滞りなく進み、やがて終わった。

翌日ワシントンへ発つアリスとは、兄弟は、ホテルのロビーで別れた。

レイフはアリスとまだ離れがたかった。

この二日で、レイフはかつてアリスに苛められたことなど綺麗さっぱり忘れて、すっかり彼女になつてしまっていた。もともとレイフは一度自分の味方だと信用した相手については、些細な欠点など目に映らなくなり、丸ごと肯定してしまう。

できることなら、アリスには傍にいてほしい、もっと色んな話を

聞いてもらいたい。どんなにきつい口調で叱られても、彼女の言うことなら、素直に耳を傾けられそうだ。

ロマンチックな恋愛感情とは、どうも違うようだが、レイフは彼女のことが好きだった。

実際には、レイフはアリスのことなどほとんど知らないと言ってもよいほどだったのだが。

だから、別れ際、女性に対してはぐずでのろまな彼にしては珍しくも積極的に、アリスを引き止めて、必ず連絡を取り合おうという約束を取り付けたのだ。

「オレ、アリスのこと絶対忘れないからさ……いつかきつと……今度はオレの方から会いに行くから、アリスもオレのこと覚えていてくれよ」

濡れた子犬のような目をして、不器用にたどたどしく告げるレイフに、アリスは一瞬困ったような微妙であいまいな表情をうかべた。「そうね、そういうこともあるでしょうね」

レイフのひたすらまっすぐな想いに、彼女は流されることなく、あくまで大人びた落ち着いた態度で返した。

「私は、あなたのことは好きよ、レイフ。少なくとも、昔クリスターが好きだったのと同じくらいに、今はあなたが可愛いわ。でも、女の愛の形は様々で、常に一つだけとは限らないのよ」

きよんとするレイフの頬に、アリスは軽く伸び上がるようにしてキスをし、そっと離れた。

（何だよ、女の愛って？）

レイフはさっぱり意味の分からない謎賭けをされたような気分だったが、彼の追及をさらりとかわすようにして彼女は去っていった。異性の味を知ったとは言っても、アリスの言葉の裏に隠された意味を理解するには、レイフはまだまだ経験の足りない未熟な男に過ぎなかったのだ。

実際、レイフがクリスターを通じて真実を知ったのは、アリスと別れて半月近くも経ってからだった。

アリスからそのうち連絡があるのではないかと毎日落ち着かないレイフをついに見かねたのだろう、彼が空の郵便受けを覗き込んで溜息をついているところに、複雑な顔をしたクリスターが近づいてきたのだ。

「結婚？」

一瞬、何を言われたのか、レイフはすぐには飲みこめなかった。

「そうだよ、アリスは来月結婚することになっているんだ。おまえには話していなかったけれどね。この間の休暇は、彼女にとって、独身最後の日々を思い切り羽を伸ばして満喫するためのものだったんだと思うよ」

ぽかんとした顔で立ち尽くす弟を、クリスターは気遣わしげな目でじっと見守っている。

「嘘だろ？」

できることなら冗談にしてしまいたくて、レイフはぎこちなく笑おうとするが、クリスターが真顔のまま頷くのにはたちまち顔を強張らせた。

（アリスが…結婚する…）

真っ白になった頭の片隅で、レイフはぼんやりと思った。

（そっか、あいつ、他に好きな男がいたんだ。ふうん…それなのに、オレとあんなことしたんだ）

アリスのあまやかな微笑みや一緒に過ごした親密な時間を思い出しながら、レイフは急速に体中の力が抜けていくのを覚えた。

（オレを散々けなして叱りつけた、アリスのきつい言葉もさ、結局オレのためを思ってくれてのことだったんだって、いい感じで今じゃ思い出していたのにさ。そんな裏があったなんてことも知らず、彼女がオレを選んでくれたんだって、嬉しくて…ああ、オレってばつかだなあ）

これ以上まっすぐに立っていられなくて、危なげによるめくレイフの体をクリスターが素早く腕を伸ばして支える。

「レイフ…」

クリスターの心配そうな呼びかけを耳元に聞いた瞬間、悲しいやら腹が立つやら情けないやら、もう訳の分からない激しい感情がこみ上げてきて、レイフは自分を支える兄にしがみついたまま不覚にも泣き出してしまった。

ついそこの歩道を歩く人もちらほらいる、よく晴れた昼下がり、家の前で、背も高ければ何かと目立つ双子がひしと抱き合って、おまけに何があったのか片方はこの世の終わりのように泣いているという傍から見れば異様な光景だったにも関わらず、クリスターはレイフの背中をあやすように叩きながら、彼が落ち着くまで辛抱強く待っていた。

（何だよ、アリスがオレを好きだと言ってくれたから、素直に信じたのに、またいつか会える日を楽しみにしてたのに、こんな形で裏切るなんて、あんまりじゃないか。最後まで思わせぶりの言葉でオレを煙に巻いてさ、女の愛がどうかなんて、オレに分かるかよ。好きの意味なんか、一つしかねえよ。ひどいじゃないか、ちくしょーっ！）

アリスの結婚はずっと前から決まっていたことなのだから、初めからレイフとのあれは百パーセント火遊びのつもりだったのだ。そんなことも知らずに有頂天になっていた自分が、いっそ憎い。

別にアリスのことが命がけで好きだったわけではないが、一時でも好意を覚えた相手との大切な思い出をただの遊びと割り切れるほど、レイフはまだすれてはいない。

（好きな奴がいるのに、他の男とも平気で楽しめるなんて：そんなのありかよ：し、信じられねえ）

今まで散々女の子には振られてきたレイフだが、さすがにこの手の裏切りは初めてで、どう受け止め、消化したらいいかも全く分からない。もう少し落ちついてくれば色々考える余地は出てき、アリスに対してもまた別の理解ができてくるのだろうが、今は頭の中がぐちゃぐちゃになってしまっただけで、クリスターに寄りかかったままさめざめと泣くことしかできなかった。

（アリスの馬鹿、結婚でも何でも勝手にしちまえばいいんだっ）

レイフが、このどん底気分から浮上するには、少しばかり時間がかかりそうだった。

クリスターは低い音をたてているコーヒー・メーカーをじっと眺めながら、物思いに沈んでいた。

レイフは二階の自分の部屋に閉じこもっている。

（あんなにレイフがショックを受けるのなら、アリスの結婚のことを先に話して、あいつに釘を刺しておくべきだったろうか。だとすれば、僕の判断ミスか…レイフがアリスに夢中になっているのが分かっていてとめなかった。もしかしたら、レイフにとってはいい機会になるかもしれないと思ったんだ）

あの夜、アリスの部屋へ行ったレイフが果たして最後までちゃんとできるのか、もしかしたら途中で怖気づいて自分の所に戻ってくるとではないか、クリスターは気が気でなくて、真夜中を過ぎる頃までじっと起きて待っていた。

朝になっても結局レイフは帰らず、どうやらうまくいったのだと分かった時、クリスターはほっとしたような寂しいような複雑な気分に分けられた。

（レイフはずっと、僕が先に女性を経験して自分がまだだということにコンプレックスを持っていたから…何度もそのチャンスはあったのに、どうしてもうまくいなくて、もしかしたら、これも僕の責任なのかと本気で心配になりかけた。まさか僕との行為がトラウマになって、とか…さすがに、それはなかったか）

ふっと苦笑した後、クリスターは憂悶に沈んだ目を上げて、二階にいる弟がどうしているか窺おうとするかのように天井を仰いだ。

（それに、レイフの相手がアリスならば許せると、僕も確かに思った…他の女に渡すよりかは、僕が知っている体をあいつも同じよう

に抱けばいい。たとえ僕がそこにいなくても、あの女を通じて、一緒に寝るのと大差ないと：我ながら病的だな）

しかし、いつも女性には引っ込み思案なレイフがアリスに限ってあれほど執着したのも、もしかしたらクリスターと同じ理由からではないだろうか。

自分が本気で女性を愛せるのか、クリスターはこの頃は全く自信をなくしていたが、レイフが好きなものなら同じように愛せそうな気は今でもする。

（結局、僕は、レイフがアリスと結ばれるよう仕向けたようなものか：アリスは、最初は僕に興味のある素振りをしたけれど、僕は婚約者のいる女性には惹かれなないとわざとつれなくした。あの時から、アリスはきつと、僕に振られた腹いせにレイフにちょっかいを出すだろうと読んでいたんだ）

大方はクリスターの予想の範囲内で展開していったが、一つだけ違ったのは、アリスと一晚過ごした後のレイフの反応だった。

レイフなら、自分の体験をクリスターに屈託なく打ち明けて、喜びを共有したがると踏んだのだが、意外なことに彼はそうはしなかった。初めは恥ずかしがっているか後ろめたさを覚えているだけかと思ったが、クリスターが何度かつついてそれとなく促しても、レイフはますます頑なになるばかりで、決して、あの夜どう過ごしたのか教えてはくれなかった。

（いや：それも当たり前のことかな）

好きなものは何もかもを共有していた子供時代はどうに過ぎ、今ではレイフとの共通点もフットボール以外にはほとんどないという現実もクリスターはとくに理解しているつもりだった。だから、こんな時にどう振る舞えばいいかも、ちゃんと分かっている。

（レイフが黙っていたいなら、それでもいいさ：あいつもやつと自我に目覚めて、兄離れへの一步を踏み出したということなんだろう。弟の自立を望む僕としては、喜んでやるべきだ。そう、思ったよりも早くなりそうだというだけのことで：何もうろたえるような話じ

やない)

胸の奥の心臓がきりりと痛んだが、クリスターは気づかない振りをして、用意したマグカップの中にできたてのコーヒーを注ぎ、二階へと持って上がっていった。

「レイフ、入るよ?」

一応ノックをして呼びかけたものの返事がないので、クリスターはドアを静かに開いて、弟の部屋に足を踏み入れた。

ベッドの方を窺うと、案の定、レイフはそこにうつ伏せになってぐったりとしている。

乱雑に散らかった机の上にマグカップを置いて、クリスターは弟の傍にそっと近づいた。

「レイフ」

レイフの神経を逆なでしないよう、クリスターはごく低い穏やかな声で囁きかけた。

「レイフ…?」

二度目のクリスターの呼びかけにレイフの肩がぴくりと震えた。

「放っておいてくれ…オレは今、この地球上で一番惨めな生き物なんだから」

「何を言ってるんだよ…」

魂の抜けたような力のない声だったが、言葉が出るようになっただけましかと思いが、クリスターはベッドの端に腰を下ろした。クリスターが黙っていると、やがてレイフは我慢できなくなったかのようにぼつりと漏らした。

「不様だと思っただろ」

「いや」

クリスターは手を伸ばして、くしゃくしゃになったレイフの髪を撫で付けようとしたが、その時、レイフが低く掠れた声で囁いたのにその手を止めた。

「兄貴は、初めから知ってたんだよな、アリスのこと」

「うん…ごめん…予めちゃんと話しておけばよかったと後悔するよ」

レイフはじつと押し黙った。

「そんなに辛かった？」

優しい声で囁きかけながら、クリスターは、胸の奥の焼けるような痛みを次第につのらせていた。

レイフの考えることを感じることに、クリスターはいつだって手に取るようによく分かるつもりだったが、そのことに急に自信が持てなくなってきた。

だが、それも自然な流れなのだ。レイフがやっとクリスターの手から離れて飛び立とうとしているなら、あえて阻止しようとしてはならない。

それでも――不安に駆られたような呼びかけを、クリスターは抑えることができなかった。

「レイフ……」

「う……るさいなっ、ほっとけよ！」

電流が走ったかのように発作的に身を震わせ、頭を抱え込みながら怒鳴るレイフに、クリスターは一瞬言葉をなくした。突然、理不尽なまでの激しい苛立ちがこみ上げてきて、唇を噛み締めた。

「いてっ、何すんだよ！」

クリスターにいきなり腕をねじり上げられるようにして、ベッドから乱暴に引きずり起こされたレイフは、痛みに顔をしかめながらとっさに身をもぎ離れた。

威嚇するかのように自分を睨みつけてくる弟に一層怒りをかきたてられたクリスターは、冷然と言い放った。

「いつまでも被害者面をするのはよせよ。おまえにアリスの不実を責める資格なんかあるものか。おまえだって、別に彼女を愛していたわけじゃないくせに」

レイフの頬にさっと血の色が上るのを認め、これ以上は言ってはならないと思いながらも、クリスターはどうしても止められなくなっていた。

「子供の頃からおまえはいつだって、僕のことを欲しがった。彼女

もその延長のようなものだったんだろう？」

レイフの顔に、まるでクリスターに殴られでもしたかのような衝撃が走った。

それを見たクリスターは、いつになく残酷な衝動に駆られ、決してこれだけは口にすまいと自らを戒めてきた言葉をレイフに叩きつけてしまった。

「言えよ」

「え？」

「僕が抱いた女を、おまえはそれと意識して抱いた。さあ、アリスとどんなふうに行ったのか、どんなふうに感じたのか、僕に言ってみろよ、レイフ！」

「クリスター！」

レイフの顔に恐怖にも似た動揺が走る。唇から発せられた上ずった声はほとんど悲鳴のようだ。張り裂けんばかりに見開かれた双眸が、それ以上は言うなと必死に訴えていた。

（レイフ…フ…）

瞬間、神経が焼ききれそうなほど熱くなった頭がしんと冷えるのをクリスターは覚えた。

決してそのことに触れてはならない―二人の間で自然に出来上がっていた暗黙の了解を、クリスターはつい破ってしまった。

「レイフ」

クリスターは唇を微かに震わせ、あえぐように息をした。

ここまで激昂したクリスターを見たことは、レイフにとって久しくなかったことだろう。兄に追い詰められてことも、ショックだったろう。途方に暮れた顔は今にも泣き出しそうだ。

クリスターは喉の奥からせりあがってくる熱い塊を何とか飲み込み、いつの間にかレイフの腕を指が食い込むほど強く掴みしめていた手を離した。

「すまない…」

これ以上まともにレイフを見ていられなくなって、クリスターは

顔を背けた。

「う…」

しばし凍りついていたレイフは、何事か低く呟いたかと思うと、ベッドから飛び降り、立ち尽くすクリスターを残して部屋から飛び出していった。

レイフの足音が階段を駆けおり、そのまま玄関から外へ出ていくのを確認した後、クリスターは怒らせていた肩を落とした。

「言っではいけないと分かっていたのに…」

鬱憤を胸に溜め込んでいるのをついに堪えかねて、吐き出してしまったが、それならそれで少しはすっきりすればいいのに、ざらついた後悔の念と空しさが残るばかりだ。

「レイフ…」

クリスターはレイフのベッドに座り込み、力なく項垂れた。

（レイフが僕から離れて一人前の男としてちゃんとやっていけるよう、励ますつもりが…いざ、レイフの心が遠のいていくのを目の当たりにすると、耐えられなくなるなんて、僕も存外諦めが悪いな）

ふと、クリスターは、レイフがアリスと一緒にいるのを意識しながらまんじりともせずにごろごした夜を思い出した。

（もしも…あの夜アリスが、レイフだけでなく僕も部屋に誘っていたら、僕はきつと彼らのもとに行っていたんだろうな）

クリスターの唇に切なげな微笑が薄っすらと漂った。

（婚約者がいるんだろうとアリスの誘惑を拒んだ僕だけけど…でも、今なら、心から彼女を欲しいと思うよ。レイフ、おまえが抱いた女だから…）

ふいに今の自分の有様がすごく滑稽に思われて、クリスターは肩を揺らせて笑い出した。

「最悪だ」

乾いた笑いが収まると、クリスターは、さながら自分を覆い隠してしまいたいかのように両腕で頭を抱え込んだ。

（レイフの将来に影を落としているのは、傍にいてどうして

も強い影響を及ぼしてしまう僕自身だ。僕の呪縛から離れば、レイフはきつと生き生きとして、本来の力や才能を存分に発揮できるようになる。そう、あいつが大切なら、僕は身を引くべきなんだ……そのために今後どう行動したらいいかも分かっている……分かっているはずが、一方で僕は……何かある度に確かめずにはいられなくなる……今でも、あいつは僕のものだ――)

常に自分を律しようとしてきたクリスターだが、それももう限界にきているのかもしれない。一向におさまることのない過剰な感情に圧迫され続けた心も体も悲鳴をあげている。

(レイフ、今でも、欲しいのはおまえだけなのだ――いつそこれまでに二人で守ってきた何もかもを台無しにしてしまうのを承知で、ぶちまけてしまいたい……)

身のうちでつのはけ口を求めてたぎっている狂熱に、自分自身までも焼かれ崩されていくのを、クリスターはほとんどなす術もなくじっと意識しているのだった。

第3章唯一の絶対（8）（前書き）

この話には性的表現が含まれていますので、ご注意ください。

第3章唯一の絶対（8）

それは、フィリップス・アーバン高校ボクシング部も参加した、アマチュアボクシング大会でのことだった。

試合前から、クリスターのコンディションは心身ともにあまりよくなかったのは確かだ。前日にレイフと言い争ってしまったことを引きずって、昨夜はほとんど眠れていない上、試合に対する集中力も欠いていた。

完璧主義者のクリスターだ。自分の状態を冷静に見極めることができれば、決してこんな日にリングに上がったりしなかっただろう。

しかし、大丈夫だと自分に言い聞かせながら試合に臨んだのは、身の内に溜め込んだ破壊衝動をどうにかして発散しないことには自分の神経が焼き切れてしまいそうだと危機感からだ。そして、おそらくは己が能力に対する過信――。

クリスターが出た、ライトヘビー級第三試合。対戦相手はまだほとんど試合経験のない体ばかり大きな9年生で、誰もがクリスターの敵ではないと考えていた。

実際、試合開始のゴングが鳴った瞬間から、クリスターも、これはKO勝ちできるなど相手を簡単に見切ってしまった。プロも羨むほどの動体視力を誇る彼の目には、相手選手の動きはひどく隙だらけの緩慢なものにしか見えなかったのだ。

（どうせなら、今日は、もっと手応えのある相手と戦いたかったけれど。初っ端から第一ラウンドKO勝ちじゃ、いくらなんでもつま

らないし、かと言って、こんな不慣れな子相手に悪戯に試合を引き伸ばすのも…やれやれ…)

クリスターがつい溜息を漏らしてしまったのを、どうやら相手は見咎めたらしい、初めは逃げ腰なくらい用心深かったのが、いきなり積極的の前に出てきクリスターを威嚇するかのようなジャブを繰り返した。

(ふうん。僕に挑発されたと思って、頭にきたか)

それらを軽いフットワークでかわしながらも、クリスターにはやはりあまり闘争心は沸いてこなかった。

「クリスターさん！」

声のした方にちらっと目を向けると、コーチやセコンドと一緒にリングの外に立って心配そうに彼の試合を見守っているダニエルの華奢な姿が見えた。

ボクシング部でも、トレーナーとしてクリスターの健康管理にはとりわけ気を使っているダニエルは、今日の試合に彼が出ることを最後まで思いとどまらせようとしていた。

(心配性だな、ダニエル)

クリスターの口元に薄い笑みが過ぎった。次の瞬間、マットを力強く蹴った彼は、次のパンチを繰り出そうとしていた相手の懐深く入り込み、強烈なボディブローを打ち込んでいた。

わっというような歓声が周囲から上がる中、腹を抱えてうずくま

る相手を冷めた目で見やると、クリスタールは後ろに下がった。

レフリーが数えるカウントダウンをぼんやりと聞きながら、クリスタールは、何とか立ち上がろうともがいている相手選手から視線を外してざわめく観客達を眺め回した。

（今日は結構見物人が多いな）

アーバン高校の生徒達が集まる一角には今日もしっかりカメラを携えて一番いい席に納まっているアイザックを初め、生徒や教師、選手の父兄など知った顔がいくつも並んでいる。しかし、そこにレイフの姿はなかった。一応今日の試合のことは知らせていたのだが、もともと彼はクリスタールのボクシングの試合はあまり見たがらないし、それに、昨日の今日ではさすがに応援に来ることはないだろう。

（僕も：レイフとどんな顔をして会ったらいいか分からない。いつものようにうまく取り繕うこともできず、昨日からずっと、2人きりで顔を突き合わせることがないよう、あいつを避け続けた）

胸の奥に鉛の塊でもあるかのような重苦しさを感じながら、友人達が陣取る席の更に後ろ、ホールの出口の前の辺りの席にまで何気なく視線を向けた時、クリスタールははっとなった。

（え？）

思わず目を瞬き、今見たものを再度確認しようとした、その時、試合再開の合図がなされ、クリスタールの意識は無理矢理リングに引き戻された。

一度ダウン寸前まで追い詰められたことによって返って吹っ切れ

たらしい、相手選手はそれまでとは打って変わって積極的な攻撃に出てきた。

クリスターはそれらをうまくかわしつつ一撃必殺の隙を窺っていたが、一方で、今しがた観客席の奥に見つけた人物が気になって仕方なかった。

（まさか…まさか―）

敵と睨みあいながらリングの上を円を描くように移動しつつ、クリスターはまたしても、あの気になる一角に目をやった。

そして、今度ははっきりと、クリスターは見た。

興奮状態にある観客席の後ろの方に、1人、いやに落ち着いた風情で佇んでいる金髪の若者がいたのだ。

リングからはかなりの距離があつたにもかかわらず、クリスターの炯眼は、若者がこちらを見ながら満足そうに頷くのを、その唇が笑みの形につりあがり、そこから真っ白な綺麗な歯が覗くのを捉えた。

やっと、君に会えた―。

まるでクリスターに伝えようとするかのように動いた唇は、そう呟いていた。

この唐突な邂逅に、クリスターは自分でも意外なほどのショックを受けていたようだ。今が試合の最中だということも一瞬忘れ、金縛りにあったかのように、彼は全ての動きを止めた。

「ク、クリスターさん！」

ダニエルの悲鳴にクリスターが我に返った時には遅かった。

「うっ?!」

クリスターの注意力が削がれた、その一瞬の隙を捉えた相手のパンチが彼の顔を目掛けて飛んできた。

クリスターはとっさに避けようとしたが完全には避けきれず、渾身の力を込めた一発はクリスターの目の上を掠めるようにヒットした。

(よくも…!)

自分よりも格下と舐めてかかっていた相手から食らったパンチに、もともと負けず嫌いのクリスターは殺氣立った。

もう二度と油断などするものか。瞬時にファイティングポーズを取ったクリスターは、勢いづいて更にパンチを繰り出そうとする相手に対して激しい反撃に出た。相手の試合経験が浅かろうが、今度は一切容赦しなかった。

それまでは専らのらりくらりと攻撃をかわすばかりであり戦闘意欲は見せなかったクリスターがいきなり豹変し、素早い動きと破壊力のあるパンチで一氣に攻めかかってくるのに相手は動揺したようだ。

観客席からは、待っていましたとばかりの歓声と拍手が上がる。

反射的に急所を防護しようとする敵の動きよりも早く、間合いを詰めたクリスターは、強烈な右フック、左フックを相手の胴に続けざまに見舞っていた。よろめきながら後退する相手をクリスターは瞬く間に追い詰め、必殺のストレートパンチを繰り出そうとした。

しかし、そこで惜しくも第一ラウンド終了のゴングが鳴った。

「くそっ！」

珍しくも苛立ちを顔に吐き捨てたクリスターは、リングサイドに戻った時にやっと自分が出血していることに気がついた。

先程受けたパンチで瞼の上を切ったらしい。コーチが止血処置を施してくれたが、結局これ以上の試合の続行は無理と判断され、クリスターは不本意ながらも途中で棄権することになった。

リングを降りて会場に待機していた医者に診てもらった時にはほとんど血は止まっていたように思うが、念のために病院に行くよう指示をされ、他の選手の試合を見ることもなくクリスターは先に会場を立ち去った。

その後、クリスターは近くの外科に車で行った。幸い傷口を縫う必要はなく、化膿どめの薬をもらっただけで、すぐに帰ることができたのだが――。

「大した怪我でなくって、よかったです。結構血が出ていたように見えたから、とても心配したんですよ、僕は」

付き添いとしてついてきたダニエルは、随分と落ち込んでいるク

リスターを氣遣ってかずとおとなしくしていたのだが、病院を出て車に乗り込んだ頃には安心したらしく、屈託なく話しかけてきた。

「頭部に受けた傷は深くなくても出血が多く見えるんだよ。何も大騒ぎをするようなことじゃなかったんだ。試合だって、続けようと思えば、僕にはできた」

クリスターの方はまだ気持ちがおさまらず、いつもは可愛がっているダニエルに対する応えもつい尖ったものになってしまった。

「クリスターさん：でも、コーチの判断は正しかったと思います。今日のあなたは、いつもと様子が違っていましたから：平静に振る舞おうとしていたけれど、リングに上がる前から何か他のことにずっと気を取られていたでしょう？ それに、顔色も悪かったし、動きもあなた本来の俊敏さには欠けていました」

クリスターは思わず、助手席に小さく納まってこちらに真摯な顔を向けているダニエルをまじまじと見返してしまった。

「君も目聡いね、ダニエル」

ふっと苦笑して、クリスターはハンドルにかけた腕の上に顔を伏せ、深い溜息をついた。

「ああ、分かっているよ。勝てるはずの相手に遅れをとってしまったのは、僕自身の不注意と過信のせいだ。君の指摘したとおり、僕の今日のコンディションは最悪で、本当は試合になど出るべきではなかったんだ。無理を押して対戦して、結果があれば弁明の余地もないな。自己管理を怠った上、試合に臨む姿勢からして間違えていた：実力があるとかないとかいう問題以前の初歩的なミスだ」

「クリスターさん、そこまで自分を責めなくても…あなたは別に負けたわけじゃないですよ」

「あんな不完全で不細工な試合をするくらいなら、いつそ相手にKOされていた方がましだ…！」

悔しさを押さえかねてハンドルに拳を叩きつけるクリスターにダニエルは息を飲んだ。

「すまない…」

クリスターはダニエルにまでつい当たってしまった自分を恥じて、しばし黙り込んだ。

「今日の僕はどうかしている。結果はどうあれ終わった試合のことなどさっさと忘れればいいんだ。だのに一向に気持ちちが静まらなくて…いつもはこんなことないのに、変だな…」

シートにもたれかかり、クリスターはしばしの車の外に視線をさ迷わせた。今日は夕方まで会場にいるつもりだったのが、途中で抜け出したから、まだ昼過ぎだ。

（中途半端に時間ができてしまったな…どうしようか…）

まずはダニエルを寮まで送り届けて、それから家に戻って休むのが妥当だろうが、クリスターはあまりそうしたくはなかった。家に戻れば、レイフと顔を合わせてしまうかもしれない。昨日のこともあって気まずいのもあるが、何より、こんな情けない顔をレイフには見せたくなかった。

（どこでもいいから1人になりたい：今は、他人の視線を気にして自分を取り繕うのも億劫だ。それに：そう、早く頭を冷やして考えなければならぬこともある）

クリスターの脳裏に、試合の最中、観客席に見つけた青年の姿が浮かび上がった。

クリスターが、その人物をそれと認めたのは一瞬のことで、その後試合相手のパンチを受けて負傷したり、逆上して攻撃に出たりで、しばらく目を離れた隙に彼は煙と化して消えたかのように会場から忽然といなくなってしまっていた。

錯覚ということはないだろう。クリスターは目には自信がある。それに、他の人間ならいざ知らず、彼を見誤るとは思えなかった。

（それとも、彼の幻を見るほど僕の状態が追い詰められているかだな：何だか、それもありえないことではない気がしてきた）

ふと、隣にいるダニエルを意識し、彼に話すべきだろうかとかクリスターは迷った。

（いや、今打ち明けても、悪戯にこの子を怯えさせるだけだろう。明日にでも、アイザックには話してもいい：彼のいた席からは少し距離があったようだけれど、もしかしたら、それらしい人物を見かけたかもしれない）

クリスターは鉛が詰まっているかのように芯の重い頭を強いて働かせながら、おもむろに車のエンジンをかけた。

「さて、寮まで送るよ、ダニエル」

なるべくいつもどおり自然に振る舞おうとしていたが、うまくできているかも今のクリスターには自信が持てなかった。

「クリスターさん」

「うん？」

「レイフさんと…何かあったんですか？」

ハンドルを握るクリスターの手が微かに震えた。

「どうして…そう思うんだい？」

助手席の少年の様子を、クリスターは横目で素早く窺った。ダニエルは行儀よくそこに座って、フロントガラスの前の風景にさり気なく目を当てているが、神経を集中してクリスターの反応を探っているのが感じられた。

「あなたがそこまで自分を見失う理由を、僕は他に思いつかないからです」

クリスターは努めて冷静さを装いながら、少年の言葉を鼻先で軽く笑い飛ばした。

「…考えすぎだよ」

クリスターが、ラジオをつけることで、それ以上の追求をさり気なく、しかし、断固として拒否すると、ダニエルは素直に口を閉ざ

したが、本当は言いたいことを一杯抱え込んでいる様子だった。クリスターの傍にいて、彼が心身共に次第に参ってきていることにも逸早く気づいていただけに、その小さな胸は心配で張り裂けそうになっているに違いない。

（だからと言って、ダニエルに話すわけにはいかないし、他人に打ち明けてどうなるものでもない。これは、僕の問題だ：僕とレイフの：他の人間を関わらせたくない。ましてや僕に純粋な好意を持ってくれている、この子を巻き込むわけにはいかない）

学校に着くまでの間、車内には何となく気まずい沈黙が漂った。ラジオから流れる明るいポップソングが空々しく響くくらいだ。普段のクリスターなら、こんな時には相手の緊張をほぐそうとしてあえて話を振ったり、何かフォローするような言葉を重ねたりするものだが、今はそんな気遣いができる余裕もなかった。胸のうちに今にも爆発しそうなほど荒れ狂っている激しく、熱く、狂暴な感情を抑えるので精一杯だったのだ。

その後、学校の駐車場でクリスターはダニエルとは別れたのだが、そのまま帰路につくことはせず、クラブハウスに足を向けた。

「…忘れたものがあるから、ちょっと取りに行くだけだよ。ここまで来たついでだからね」

誰もいないだろう休日の部室に立ち寄ろうとするクリスターにダニエルは怪訝そうな顔をしたが、深く追求してはこなかった。

本当は別に用事などあったわけではない。自分の不調など認めたがらない意地っ張りのクリスターにも、ダニエルにまで苛立ちをぶつけてしまった今の精神状態でこれ以上他人と顔をあわせるのはま

ずいと思うくらいの危機感はあった。

（さすがに無理を重ねすぎたかな…たかがボクシングの試合くらいで切れやすくなるほど、神経が過敏になっているのか）

合鍵を使って人気のないクラブハウスに入り、2階のボクシング部の部室で、一緒に持ってきたグローブやシューズなどの荷物をロッカーに放り込むと、クリスターはほっと息をついた。

（静かだ）

平日は人の声や物音が絶えない場所だけに、静寂がひしひしと四方から押し寄せてくるかのように感じられた。

クリスターはふと不安に駆られたように周囲を眺め回し、苦笑しながら頭を振ると、部屋の隅のテーブルの所にある椅子に腰を下ろした。

「疲れた…な…」

乾いた声でぼんやりと呟いた、その一方で、この程度のことです音を吐くなど叱咤する自分がいる。

（この性分を何とかしないといけないかな。僕にも限界はあるのだと素直に認めて、たまには力を抜かないと…レイフのいい加減さを少しは見習うべきか…ふふ、あいつには、僕が感じるようなストレスはきつくないんだろうな）

少しは休まないと壊れてしまうぞ。他人に対してならば、クリスターもそう忠告しただろう。だが、下手に余裕ができると、つい考

えなくてもいいことまで考えてしまいそうで、嫌だった。だから、常に全力で走り続けた。

（せめて、僅かの時間でもぐっすりと眠れたら、頭も体も随分すっきりして楽になれるだろうに）

肉体は疲労困憊しているのに、頭だけは冴えて眠れない夜は今でも多い。

クリスターはテーブルの上に顔を伏せてしばらくの間目を瞑ってみたが、じっとしていることに次第に我慢ができなくなってきて、いきなり椅子から起き上がった。

（熱い…）

閉め切っているとはいえそれほど気温は高くないはずだが、体内に妙に熱がこもって、無性に息が詰まる。クリスターは何かに追いたてられるようにシャワールームへ向かった。

みし。みし…。クリスターの胸の奥で何かが不穏な音をたてていた。

それから30分ほど、クリスターは冷たいシャワーを頭から浴び続けた。胸に取り付いたもの狂おしさは晴れず、次第に物騒な熱を増すばかりで、冷たい水に打たれば少しは紛れるかと思ったのだが、それも無茶な話だった。

すっかり冷え切った体でシャワールームを出て部屋に戻ったクリスターは、上半身はまだ裸のままタオルを肩にかけてぼんやりしていた。

ふと思い出したように目の上の傷跡に触れてみる。気が立っているせいか、痛みはあまり感じない。

（なんて不様な…!）

一度は締め出すことに成功した苦い記憶がまたしても胸の奥底から湧き上がってきて、クリスターは自分に対する凄まじい怒りに身を震わせ、歯を食いしばった。

（レイフとの間にあんな諍いがあつたくらいで、自分を見失うくらいに取り乱したか。冷静な状況判断ができず、試合を不本意な結果に終わらせた…そんな最悪の自分を衆人環視の中でさらしてしまうなんて、我ながら信じられない。しかも、あいつが来ていた…隙だらけの僕の有様を見て、きっと呆れ返っていただろう）

抑えようもなく噴きあがってくる激情に、こめかみの辺りがずきずきと痛む。クリスターは、押しつぶしてしまいたいかのように両手で頭を掴んだ。

（?…）

その時、彼の体に異変が起こった。

（何だ…？ 息が…妙に苦しい…）

クリスターは震える手でせわしなく上下する胸を押さえた。

「あ…」

不安に突き上げられるように椅子から立ち上がり、テーブルの端に手をついて、乱れた息を整えようと試みるが、浅く早くなった呼吸は一向にもとに戻る気配はない。

はっ、はっと息を吸い込む口の辺りや指先はしびれ、頭も朦朧とかすみ、ちゃんと立っていることも覚束なくなってきた。

しまいにはほとんど息ができなくなってきて、どうして突然こんなことになったのか訳の分からぬまま、クリスターはよりによって今、こんな人気のない場所に1人きりでいることに恐怖すら覚えた。

「う……うっ……」

クリスターが額に汗をうかべ、胸を掴み閉めたまま、机の上に突っ伏すようにしてあえいでいると、部屋の扉がいきなり開かれた。霞む意識の中で、クリスターは、誰かが喫驚した声をあげるのを聞いた。

「クリスターさん！」

ダニエルだと分かったが、クリスターには応えることもできない。

「ど、どうしたんですかっ?！」

駆け寄ってきたものの、何かの発作を起こしたように小刻みに体を震わせ息を荒くしているクリスターを前に、ダニエルもどうしたらいいか分からぬように立ち尽くした。

それでも、ダニエルが呆然となったのはわずかの時間だった。彼は、かろうじて捕まっている机から今にも崩れ落ちそうなクリスタ

ーの大きな体を支えるようにして起き上がらせると、傍にあった椅子に坐らせた。

椅子に身を落ち着けたものの苦しさはおさまらず、クリスターが何とか息を整えようと苦闘を続ける間、ダニエルはロッカーの傍にある棚の辺りでがたがたと音をさせながら何かを探していた。

「ダニ…エル…？」

少年の軽い足音が再び戻ってきたかと思うと、優しい手がクリスターの肩にあてられ、何かが彼の口元にそっと当てられる。どこにでもありそうな、小さな紙の袋だ。

「これを口に当てて、吐いた息を吸い込むことを繰り返してください。ぴったりと押し付けることはありません…このくらい離して丁度いい」

そう説明された時点で、クリスターにもやつと思ひ当たった。

「大丈夫ですよ。ただの過呼吸の発作だと思います。気持ちを落ち着けて、僕が言った通りにすれば、すぐに治りますよ」

クリスターがその言葉に従って辛抱強く呼吸を続ける間、ダニエルは彼の背中を励ますようにさすっていた。

「一旦は寮に戻ったんですけど、あなたのことが心配で様子を見て来て正解でした。まさかこんなことになっているなんて」

程なくして、ダニエルが言ったとおり、クリスターの呼吸は穏やかなものになり、一時はこのまま死ぬのではないかと疑ったほど彼

を苦しめた発作は影も形もなく消えてしまった。

「初めて過呼吸の発作を起こした人はびっくりしますけれど、絶対死んだり後遺症を残したりすることはありませんから…ほら、もう大丈夫ですよ？」

すっかり虚脱しているクリスターの顔を下から覗き込んで、ダニエルはにこりと笑った。

「たぶんストレスのせいだと思います。僕も…昔は、一時情緒不安定な時期があって、何度か発作を起こしたことがあったので、ピンときたんです」

「…君と一緒にしないでくれ」

虚ろな目を何もない空間にあてながら、感情を欠いた声でぽつりと呟くクリスターに、ダニエルは一瞬顔を強張らせた。

クリスターはゆるゆると頭を振った。

「いや…これも僕の自惚れだな。無理は承知していたが、まだ大丈夫だと自分に言い聞かせてきた。もう随分と長い間、僕の頭と心はばらばらになっていて、このままではまずいと薄々感じてはいたんだ。それをごまかすために酷使した体が、ここに至って、ついに悲鳴をあげたか」

自嘲的な述懐を漏らすクリスターを見守りながら、ダニエルは辛そうに唇を噛み締めた。それから、ふと怪訝な顔をした。先程まではあの混乱の最中で特に意識しなかったが、クリスターの髪や体が冷たく濡れていることに気がついたようだ。

「クリスターさん：どうしたんですか、これ：髪がびっしより濡れて：冷たい：体もこんなに冷え切って、一体何をしていたんです？」

初めは遠慮がちだったのが、改めて触ったみたクリスターの体が芯から冷え切っていることが分かると、ダニエルは声を高くして追求した。

「シャワーを浴びていただけだよ。じっとしていると何だか息が詰まりそうだったから：水でも浴びれば少しは気分がすっきりするかなと思ったんだ」

クリスターは煩そうに眉根を寄せた。

「すっきりするって：待ってくださいよ、そんなことで、こんなに体が冷えきるまで、冷たいシャワーの中に突っ立っていたっていうんですか。ただでさえ体調はよくないのに、そんな無茶をしたら本当に体を壊してしまいますよ」

「別に真冬じゃないんだし、このくらいでおかしくなってしまうようなやわな体はしてないよ」

「それが過信なんですよ」

クリスターがじろりと睨むと、興奮してつい厳しい口調になっていたダニエルは射すくめられたように黙り込んだ。

「君が危ぶんでいるのはきっと、いつもは決してしそうにない馬鹿を今日に限って繰り返している僕の状態の方なんだろうね。その点については、僕も反論はできない。ああ、自分でも、よく分か

っているとも」

顔に張り付いた濡れた髪をいらだたしげにかきあげながら、クリスターは情けなさや悔しさに歯噛みしそうな気分で吐き捨てた。

（僕は一体いつの間に、こんなに脆くなっていたのか…）

天井を仰いで大きく息をつくとき、クリスターはすぐ傍に心配そうに立ち尽くしているダニエルを振り返った。

「迷惑をかけてすまなかった。君のおかげで発作はおさまったし、少しは気分も楽になった。僕はもう大丈夫だから、ダニエル、君は帰っていいよ」

すると、ダニエルは何とも口惜しそうな顔をした。その聡明な青い瞳が少しも揺るがずひたむきに自分を見ていることに、クリスターは訳もない不安を覚えた。なぜか無性に、この少年を早く自分から遠ざけたくなった。

「僕は大丈夫だから…あなたはいつも言いますよね。あなたの周りにいる人達は、あなたを、すごく強くてほとんど弱点なんかない人だと思ってる。皆、多かれ少なかれあなたに頼っている。もともとプライドが高い上に、周りがそんなだから、あなたは余計に弱音など吐けなくなってしまったんですね」

ダニエルの悲しそうな囁きに、クリスターは胸の底にくすぶっていた怒りの火が再びかきたてられるのを覚えた。このままではまずいと彼の中の冷静な部分が警告を発するほどに、今のクリスターは容易に激するようになっていた。

「今のあなたの一体どこが大丈夫なんですか。そんなに隙だらけで、張り詰めた糸みたいに切れやすくなっていて、それなのにまだ無理をしようとして……そんなあなた、痛々しくて見ていられません！」

「ダニエル……！」

まるで火を吐くかのように、自分の声が剣呑な響きを帯びていることに、クリスターは密かにうろたえた。

「君の同情など僕は必要としないし、ましてや干渉などして欲しくない。頼むから、それ以上余計なことは言わず、ここからすぐに出て行ってくれ」

クリスターが全ての訴えを拒むかのようにダニエルから顔を背けたのは、これ以上彼の話を聞いていると、自分は何をしでかすか分からないと危惧したからだ。

みし。みし……。胸に封じこまれた狂暴な獣は静まるかと思えば、またすぐに表層近くにまで迫ってきて、今にも薄くなった皮膜を突き破って飛び出してきそうな気がする。

「クリスターさん……僕は――」

冷たく拒まれても尚も懸命にクリスターに訴えかけようとするダニエルのか細い声は、語尾が震えたかと思うと、ふいに途切れた。

じっと押し黙ったまま立ち尽くしているダニエルの目がまだ自分を追っていることを意識しながらも、クリスターは心を閉ざして、その存在をひたすら無視しようとした。そうすれば、ついにはダニエルもあきらめて、ここから出ていってくれるだろうと願っていた。

緊張感を秘めた沈黙がしばし流れた。そして――。

「どうしても：駄目ですか？」

それまでとは少し違った調子の低い声――ずっと堪え続けてきた思いをどうしても表さずにはいられなくなったというような、決意を込めた声でダニエルは囁きかけてきた。

「ダニエル？」

怪訝に思っただけでクリスターが振り返ると、ダニエルの小柄な体がぶつかるように抱きついてきた。

突然のこととてとっさに反応ができずにいたクリスターだが、ダニエルの震える唇が口元に押し付けられた瞬間、我に返った。荒々しく立ち上がりながら、彼はダニエルの体を乱暴に引き離した。

「何のつもりだ？」

こんな弱々しい、片手で簡単に取りひしげそうな少年に不意を突かれたことも腹立たしかったが、それまで保っていた2人の間の距離をダニエルがいきなり縮めて積極的に触れてきたことに、クリスターは明らかに動揺していた。

「クリスターさん：僕は、あなたが好きだと以前打ち明けました。今でも、その気持ちは変わってません」

クリスターにつかまれた肩が痛いのか、顔をしかめ、泣きそうな目で訴えかけるダニエルを、クリスターは氷のような酷薄な目で睨

みつけている。

「君の気持ちには応えられないと、僕ははっきり言ったはずだ」

取りしくしまもなく言い捨てて、クリスターはダニエルの肩にかけていた手を下ろし、彼から一定の距離を取ろうとするかのように後ろに少し下がった。そんなクリスターをダニエルの切なげな声が追いかける。

「そんなこと…分かってます。僕はあなたに振り向いてもらえるなんて期待は…初めから持ってません。だって…」

ダニエルは、クリスターの指が食い込んでいた肩に手を置いたまま、全てをあきらめたような寂しげな目をして、うつむいた。

「あなたは、いつだって…レイフさんしか見てないじゃないですか」

クリスターは用心深く目を細めた。賢く勘のいい子だと承知しながら、傍にすることを許してきたが、それは間違いだったかもしれない。初めて、クリスターはダニエルに対して警戒心を覚えた。

「あなたが今まで付き合ってきた恋人やガールフレンド…中には、この人ならあなたともお似合いだなんて思えるほど素敵な女の人もいたけれど、でも、彼女達のことを、あなたがレイフさんより大事だと思えたことは一度もなかったんじゃないですか？ あなたが、初めから遊びだと割り切って楽しんでいたとは言いません。むしろあなたは強いて色んな人と付き合って、少しでも好きになろうと努力していたような気がします」

あまりにも深く、クリスターの内面に踏み込んできたダニエルの

言葉。

クリスターは懸命に冷静さを装おうとしていたが、ここまで鋭く追及されては、完璧に取り繕うのは不可能だった。

「何が言いたい？」

食い縛った歯の隙間から押し出すように、クリスターは問い返した。

本当はまともに相手などせずに、とにかくダニエルを遠ざけた方がいいと分かっているくせに、なぜ、そうしない？

「もしかしたらと期待していたけれど、実際、あなたには他の人など愛せなかった…そういうことなんでしょう…？」

黙れと念じながら、一方で、ダニエルの言うことについて耳を傾けてしまう。痛むと分かっている、じくじくした傷口に爪を立てたくなるような自虐的な心情だ。

みしみしみし…。周りにあるもの全て粉々に壊しつくしたいような破壊衝動はますます高まってきて、ああ、もう抑えるのも限界だとクリスターは絶望的に思った。

そんなクリスターの耳にダニエルの声はとどまることなく流れ込んでくる。

「あなたが愛しているのは…片時も傍から離したくないほど執着し、いなければ自分が保てなくなるほどに依存しているのは、レイフさるだけなんです。他の誰にも…ましてや僕なんかにあなたの半身の

身代わりがつとまるわけがない：それでも――」

ダニエルは思いつめた目を上げ、呆然となっているクリスターに近づいてくると、彼の胸にそっと頭をもたせかけた。

「お願いです：あなたの『唯一の絶対』になれやしないことは分かっています。ただ、あなたが苦しい時、悲鳴をあげたいのにそうできない時、泣きたい時：あなたの傍にいて少しでも心を楽にしてあげられるような、そんな存在にくらい僕はなれませんか：？」

「ダニエル：」

クリスターは自分の胸に押し当てられているダニエルの栗色の頭を途方に暮れたように見下ろした。そうするうちに、激しいものが急に身の内深くから突き上げてきて、クリスターは衝動的にダニエルを抱きすくめた。

ダニエルは一瞬怯えたように身を固くしたが、すぐに、クリスターの苦しいほどの抱擁に応えるように彼の体に腕を回し、必死にしがみついてきた。

「クリスターさん：」

クリスターを求めて伸び上がろうとするダニエルをそのまま引き寄せ、クリスターは奪うような強引なキスをした。

ダニエルをこういう行為の対象と考えたことはなかったつもりだが、唇を重ね、息をつく間もないほど激しくむさぼっているうちに、荒れ狂う熱のはけ口を求めているクリスターの体は驚くほどの早さで興奮してきた。

おずおずと背中を撫で始めるダニエルの手の感触。クリスターの腕の中にすっぽりおさまった、折れそうなほど華奢な体はまさぐるうちに次第に熱を帯びてきて、それがまたクリスターを煽る。

このままでは本当に歯止めがきかなくなるぞと痺れたような頭の片隅で思った瞬間、クリスターは口の中で小さく悪態をつく、有無を言わずダニエルを引き離れた。

「ダニエル：駄目だ：これ以上は―」

ひとまず理性は戻ったが、簡単に発情してしまった体の方はまだ暴走を続けようとしている。ともすればダニエルをもう一度引き戻し、彼が泣こうが喚こうが最後まで食いつくしたくなかったが、クリスターはそんな衝動を無理やり押さえ込んだ。

「すまなかった」

息を弾ませながら問いかけるような目を向けるダニエルをそっと押し返すと、クリスターは背中を向けて、自分の着替えや荷物が入っているロッカーの方へ歩いていった。

「クリスターさん！」

ダニエルの鋭い声がクリスターの足をその場に縫いとめた。

「待って：待ってください。そんなふうに誰にも心を開かないまま、1人で、これから一体どうするつもりなんです？」

ダニエルはほとんど泣き声になっていた。

「レイフさんといつまでも一緒にいることなんかできませんよ…だって、あの人は気質から何からあなたとはあまりに違うもの…もしかしたら、どちらかが我慢すれば同じ大学にくらい行けるかもしれない。でも、その先は…？　いくら弟が可愛いからって、まさかレイフさんのために自分の将来を潰すようなまねまではしないでしょ？　レイフさんだって、そうです。いい加減目を覚ましてください。いくら双子でも、いつかは離れて、別の道に行くことになるんですよ」

鋭いナイフを胸に突きたてられたような痛みに、クリスターは一瞬また息ができなくなった。いつもの彼ならば他人の言葉くらいで傷つくことはないのだが、今は鉄壁の意志力もそれを支えるプライドも崩れ落ち、むき出しになった心はあまりにも弱くなっていた。

聡明すぎるのも考えものだ、クリスターは皮肉に呟いた。いや、本当に賢ければ、超えてはならない一線というものをわきまえ、分かっているにも胸に秘めておくべきことは黙っているはずだ。

「ダニエル」

クリスターの低く抑えた呼びかけに、ダニエルは何かしら不安を覚えて口をつぐんだ。

「そんなこと…君に言われるまでもなく、僕はよく分かっている…分かっているから―」

クリスターは抑えようもなく震えだす拳を体の脇で握り締めた。

「クリスター…さん？」

本能的に危険を察知したのか、ダニエルは自分の体を心細げに抱きしめた。

「だから、僕を1人にして出て行ってくれとあれほど頼んだのに：ああ、でももう手遅れか」

自嘲的に呟くと、クリスターは振り返った。その端正な顔にうかぶ悲哀と絶望、それを打ち消すがためのようなぎらついた欲望に、ダニエルは思わずすくみあがった。

「あっ」

ダニエルは怯えた目をしてとっさに逃げようとするが、そんな彼をクリスターは素早く捕まえ、猫の子でも扱うように軽々と抱き上げた。

「ク、クリスターさん、何を…」

ダニエルの喫驚した声には耳を傾けず、クリスターは後ろのテールの上に彼の体を無造作に投げ出した。

「僕が好きなんだって…？」

怯えた顔をするダニエルを、クリスターはひどく嗜虐的な気分で見下ろす。心のどこかでやめろと叫ぶもう一人の自分が叫ぶのを聞いたが、傷つき血を流して荒れ狂う獣と化した今の自分をとどめることはもはやできず、次の瞬間、クリスターはダニエルに襲い掛かっていた。

行為の間―ダニエルはずっと泣いていた。

クリスターが好きだから傍にいたい、彼の役に立ちたいと一途に訴えていた、可愛いダニエル……。そんな彼にクリスターが今しているこのことは一体何なのか。恋などではない。上辺の優しさで包み隠すことすら放棄した、剥き出しの感情をただ叩きつけているだけだ。

気持ちではもうとつくに己の行為に嫌気が差していて、やめられるものならやめたかったが、猛り狂ったまま暴走を続ける体が裏切る。

か細い悲痛な悲鳴があがった時、ダニエルばかりではない、これによって、自分もまた余計に傷つくのだと、クリスターは知った。

心を守りきれずに傷つけられた時、人は思ってもみなかったほどの激しい反撃に出るものだ。

ダニエルをほとんど犯すように自分のものにしてしまった今、僕は無性に中学時代に束の間関係を結んだアイヴァースのことを思い出す。

子供じみた好奇心からアイヴアースの古傷を開いてしまった僕を彼は力づくで無理矢理奪った。更にその後、今度は、僕の最も触れられたくない心の秘密を暴き出してしまったアイヴアースを、僕は罠にかけて陥れた挙句学校から追い出した。

あのアイヴアースとのお互いの心の秘密を探りあうようなゲーム感覚の関係では、そんな殺伐とした関わりあいには終始してしまったのも無理はなかったかもしれない。

だが、確かに可愛いと思い、大切にしてきたつもりなのにダニエルに僕自身があんなひどいことをするなんて、夢にも思ってみなかった…。

夕方遅くになって、クリスターはやっと家に戻った。

「ただいま」

リビングの方からテレビの音声は聞こえていたので誰かいるのだろうと声をかけたが、返事がないので、そのまま重い足取りで2階に上がっていく。

レイフの部屋の前に差し掛かった時、クリスターはふと足を止めた。人がいる気配はないので、たぶんレイフはどこかに出かけているのだろう。

閉ざされたドアをクリスターはしばし凝然と眺めた後、手を伸ばして、ほんの少しだけ開いてみた。中に入ろうとしかけたが、どうしてそうしたいのか分からず、クリスターはドアの隙間から覗いた弟の部屋から目を背けた。

（何をやっている…）

苦笑して頭を振ると、クリスターは開きかけたドアを再び閉じて自分の部屋へ歩いていった。

物思いに沈んだまま自室のドアを開いて中に入った瞬間、クリスターは何かつまずいたように立ち止まった。

「おお、クリスター、今帰ったのか」

呆然としているクリスターが見る前で、彼の机の前に立って、そこに置いてあった心理学の本をばらばらとめくっていたラーズが振り返った。

「何してるんだよ…父さん…」

「おまえ、こんな難しい本をいつも読んどるのか。何が書いているのか、俺にはさっぱり分からんよ。おまえは、つくづく母さんに似たんだなあ」

のんびりとした父親の応えにかつとなったクリスターは素早く彼

に近づくと、その手から自分の本を取り上げた。

「勝手に僕の部屋に入ったり、僕のものに無断で触ったりして欲しくないな！」

クリスターの剣幕にラースは驚いたように目を見開く。

「そんなに怒らなくてもいいじゃないか…別に悪気があった訳じゃない、ただちょっと覗いてみただだろうが…うん…？」

クリスターと間近で向き合って、ラースは彼が左目の上に傷を負っていることに気づいたようだ。

「それ、今日の試合でやられたのか？」

傷のことなどほとんど忘れかけていたクリスターはラースの指摘に怯みながら、手で傷を覆い隠した。

「医者にはちゃんと診てもらったのか？　ちょっと見せてみろ」

ラースの心配そうな問いかけにまで反発し、クリスターは顔を背けた。

「病院には行った。大した傷じゃないから、構わないでくれ」

ラースの手をじゃけんに振りほどいて踵を返すとクリスターは苛立たしげにドアを開いた。

「出ていってくれ」

固い声で告げるクリスターをラーズは戸惑いながら眺めていたが、やがて、あきらめたように肩を落とした。

「分かったよ」

しょんぼりと項垂れたラーズが出て行った後、クリスターは素早くドアを閉じ、心底くたびれたというようにドアの固い木の表面に額を押し当てて目を閉じた。

（あんなふうに怒鳴ったりして…）

ふいに罪悪感がこみ上げてきて、クリスターはドアを開いて廊下の方を窺った。

すると、ゆっくりと階段の方へ歩いていくラーズの後ろ姿が見えた。

年を取って体重が増えてきたせいか、若い頃痛めた脚をラーズは引きずるように歩くことがあった。特に仕事の疲れが溜まってくると辛いらしい。

クリスターが幼かった頃は、父親ほど強くたくましい存在はいないと無邪気に信じていたものだが――。

「父さ…」

クリスターは、一瞬呼びかけるのをためらった。しかし、その時、ダニエルの泣き顔が脳裏にうかんだ。感情を揺さぶられるがまま、クリスターは口を開いて叫んだ。

「父さん、ごめん…！」

足を止めて怪訝そうに振り返るラースにクリスターは思わず駆け寄った。幼い頃の面影もないほどすっかり大人びた息子がいきなり子供の顔に戻って、今にも泣きそうに声を震わせながら、とつとつと訴え出すのをラースは驚いたように見守っている。

「ごめん、あんな些細なことで腹を立てたりして…実は、今日の試合で僕は散々な結果になって、むしろくしゃしていたんだ。いや、その前から色々あって追い詰められていたんだけど…まだ僕はやれるって無理をしすぎた。でも、そんな無理もやせ我慢もするべきじゃなかったんだ。今日の僕は本当にひどくて…試合でも、その他のことでも…僕を心配してくれた、あの子にまでひどいことをして傷つけた…僕は―」

顔をくしゃっと歪めたかと思うと喉に何か詰まったかのように言葉を途切れさせるクリスターの肩をラースはなだめるように叩いた。

「クリスター、クリス…いいんだよ、もう分かったから」

クリスターの悩みの根幹をこの単純明快な父親が理解できることはたぶん一生ないだろう。だが、どうせ分かってもらえないのだからと心を閉ざし、真摯な気遣いや愛情をはねつけた挙句、自分を愛してくれる人達を身勝手にも傷つけることなどあってはならない。そう思うくらいには、クリスターもまた彼らを愛している。

「いや、おまえがこの頃深い悩み事を抱えているようだと言わんと母さんが言うんで、俺も心配になってな。…おまえはぎりぎりまで追い詰められない限り、決して他人を頼らず、自分だけで解決しようとする…けれど、どこまでが自分の限界か見定めることが今はできてない

んじゃないかって、母さんは言うんだ」

一瞬、自分によく似て勘が鋭く、しかし、分かっているにもかかわらず、あの母親はどこまで気づいているのだろうか。たとえクリスターは不安に駆られた。たぶん今の状態では、ヘレナ相手にここまで率直に話すことは、逆に恐くてできないだろう。

「ああ…その通りだと思うよ…父さんや母さんにまで心配かけて、ごめん」

「水臭いこと言うなよ。でも…その悩みってのは、俺達では力にならないようなことなのか…？」

「うん…いや、どうすればいいかはもう分かっているんだ。ただ気持ちの整理がつかないというだけだから…そうだね、いい加減あきらめなきゃならないのにあきらめきれない、恋の悩みみたいなものだから…」

「もしかして、この間結婚したっていう、あの娘のことじゃないだろうな？」

「アリスのこと？ うーん、全く関係がないわけじゃないけれど、違うよ。でも、これ以上は聞かないで」

「そうか…おまえがそう言うならあえて深くは追求せんが―」

「ありがとう、父さん、でも―」

僕はもう大丈夫だから―口から自然に出掛かった言葉をクリスターは飲み込んだ

「どうした？」

「ううん、やっぱり、ちょっと辛いかな…って、少しだけ弱音を吐きたくなっただ」

クリスターがぼつりと呟くのにラーズは優しく目を細め、笑った。

「ああ、弱音でも愚痴でも溜め込むくらいなら、正直に吐き出してしまえ。その方がよほど気分が楽になって、立ち直りやすい…俺やレイフみたいにな」

夏の明るい陽だまりのように屈託のない。ラーズはレイフそっくりな笑い方をする。それを見ながら、クリスターはまた少し泣きたい気分になった。

「そう努めてみるよ…少なくとももうやせ我慢はしない。自分だけが強くて正しいなんて驕りも捨てて、もう少し他人に対して素直になれるように—そうだね、レイフみたいに…」

クリスターはぼんやりと呟きながら、レイフの部屋に顔を向けた。

「レイフは…どこに…？」

「おお、そう言えば、あいつ、昼前くらいにおかしな大騒ぎをしてな…いきなり顔が痛いって言い出したかと思えば、クリスターに何かあったんだって血相変えて家から飛び出して行ったよ。たぶん、ボクシングの試合会場におまえを探しにいったんだと思うが、会えなかったようだな。まあ、そのうち帰ってくるだろう」

「そう…」

クリスターは目の上の傷を確かめるように指先で触れた。こんな
どうでもいいようなことばかり通じ合っても仕方ないのに――。

「何なら、レイフにおまえの悩みを打ち明けてみるよ。俺達にはで
きないような深い話でも、あいつにならできるだろう？」

「…そうだね」

クリスターが曖昧に頷くのひとまず安心したのだろう、ラーズ
は彼の肩を励ますよう叩いた。

「後は、おまえが八つ当たりをして傷つけてしまったという友達に
もちろんと謝って仲直りすることだな。心配するな、今のうちに心
を開いて率直な話ができれば、きっと分かってくれると思うぞ」

「うん」

クリスターは心ここにあらずの態で父親に返しながら、自分が酷
く傷つけ、泣かせてしまった少年を思った。

「そうするつもりだよ…僕は、どうやってもあの子に償わなければ
ならない」

胸に深く刻み込むように、クリスターは呟く。

（ダニエル…）

後悔の念が心臓をわしづかみにして、クリスターをダニエルのも

とに引き寄せようとしていた。

第3章唯一の絶対(9)

『ああ、クリスターなら、試合中に怪我を負って、途中で棄権したんだ。医者の所に寄ってから家に帰るってかれこれ一時間くらい前に会場から出て行ったよ。どこの病院かって？ それは分からないな、でも、大した傷じゃないから心配するなよ。治療を受けたら家に帰ってくるだろうさ』

クリスターの身に起こった異変を感じ取り、レイフが駆けつけたボクシングの試合会場。

探し回って見たが兄の姿は見つからず、代わりに見覚えのあるボクシング部の生徒を捕まえて、クリスターの行方を尋ねたのだが――
「何だよ、入れ替わりに帰っちまったのかよ。せっかく心配してやってきたのにさ」

結局肝心のクリスターには出会えず、行き先も分からなければどうしようもないので、レイフはまたすぐに会場ホールから出、駐車場に向かった。

後にしたホールからは興奮した人のざわめきや歓声が途絶えることなく聞こえてくるが、レイフは興味を覚えなかった。

(クリスター)

昨日のあの一件から何となく冷戦状態に陥ってしまっているクリスターが、レイフは恋しかった。今の勢いのままここで会えたなら、どさくさに紛れてクリスターに謝って、強引に仲直りしてしまおうともくろんでいたのに。

(昨日のクリスターはいつもと様子が違ってた…あんなに感情をむき出しにして兄貴が怒るなんて…でも、ああ、クリスターをああさせたのはオレなんだろうな。オレがアリスと寝たことをあいつ、やっぱりに気にしてたんだ…アリスが結婚するって聞かされたオレはショックであいつにもちよつと八つ当たりしちゃった。でも、オレはアリスのことであいつと仲たがいななんてしたかない。大体、彼女と

のあれはもう終わったことなんだ。そりや、びっくりしたし悲しかったけど、でもいつまでも引きずっちゃいないよ。オレが今気になるのはクリスターのことだけだよ。どこかおかしかった、あいつ…オレと言いつつ合ったことで、自分を責めちゃいないだろうか…クリスターって悩みだすと案外長いこと引きずるからな)

ホールに沿ってぼんやりと歩いてたレイフは、ふいに、誰かに見られているような気がしてホールの非常出口の辺りを振り返った。入り口の向こうの影の中にずっと溶け込むように消えていく人の姿。淡く輝く金色の髪が残像がレイフの網膜に焼きついて―。

転瞬、レイフはほとんど脊髄反射のような勢いで、その非常口目掛けて突進していた。

「待ちやがれっ！」

レイフが飛び込むと入り口付近でたむろとしていた学生達がぎょっとした顔を向けてくる。それには構わず、レイフは確かに見たと思った、そいつを見つけようとずんずん奥へと入り込んでいった。少し行くと昇降口に差し掛かった。一気に階段を駆け上ろうとしたレイフは、そこで鉢合わせした男子生徒に危うくぶつかりそうになった。

「うおっと、危ねえっ」

レイフはとっさに階段の手すりを掴んで急ブレーキをかけたので、何とか衝突は免れた。

「すまねえな、ちよっと急いでて…」

謝るのもそこそこに再び『あいつ』を探しに行こうとするレイフを、そのぶつかりかけた生徒が呼び止めた。

「何だよ、レイフじゃないか」

レイフは目をぱちくりさせながら、改めて相手に向き直った。

「あ…確か新聞部の…」

そこにいたのは、クリスターとも付き合いのある新聞部の部長だった。確か名前は―。

「アイザック・ストーンだよ。いい加減、自分の兄貴と付き合いの

ある人間の顔と名前くらい覚えろよ。全く、自分に関係のない人間には、おまえもとことん無関心だよな」

皮肉っぽい口調でずばずばと言いくい事を言ってくるアイザックに、レイフはぐうつと唸った。

（苦手だ、こいつ）

腕を組みながら、眼鏡の下の抜け目なく光る黒い瞳で見返してくるアイザックを前に、レイフは居心地悪そうに身じろぎをする。

クリスターが好んで付き合う、いかにも才気煥発で、口がたつ、良くも悪くも癖のあるタイプだ。

「あ、そうだ、アイザック、今ここに……」

はたとなって、レイフはアイザックに自分が追いかけてきた相手のことを尋ねようとして、口ごもった。

「何だよ？」

「その……ちらっと見えたただだから確信はないんだけど、ホールの非常口の前を通りかかった時に誰かに見られているような気がして振り返ったら、そこに――」

「誰がいたんだよ？」

レイフは大きく息を吸い込んだ。

「だから、あいつ……J・Bだよっ！」

押搦するようなにやにや笑いを浮かべていたアイザックの顔が途端に引き締まった。

「ジェームズ・ブラックが……ここにいただって？」

「ああ、それで、とっつかまえてやろうとここまで追いかけてきたんだけど、取り逃がししまった。アイザック、おまえは奴を見かけなかったのか？」

アイザックはいぶかるように首を捻りながら答えた。

「いや。俺は二階の観客席から降りてきたところだけど、奴がいたなんて気づかなかった。誰もこっちに向かって逃げてきた様子はなかった……おまえの足からそんなに簡単に逃げ切れるとも思えないし、おそらく、それは見間違いないのか？」

「見間違い：」

アイザックに冷静にそう言われると、レイフも急に自信がなくなってきた。見たと言っても、視界の端に見覚えのある明るい色の髪を捉えたような気がするというだけなのだ。

それでも、レイフの直感の方は依然として敵の存在を訴えていて、彼を落ち着かなくさせていた。

（いや、奴がここにいるはずないか：どっかの施設にぶち込まれたはずなんだから。でも――）

レイフが眉根に深い皺を寄せながら考えこんでいる隙に、アイザックは観客席のざわめきが聞こえてくる階段の上の方に素早い一瞥を投げかけ、そして、改めてレイフを振り返った。

「J・Bを見かけたって話はさておき：今日はクリスターの試合を見に来たのか？ 珍しいな、おまえが応援に来るなんて」

「えっ：ああ、いや、そういうわけじゃないけど：」

「あいつが怪我をしたってことは聞いたのかよ？」

レイフが反射的に手を上げて左目の上辺りに持っていくのに、アイザックは怪訝そうな顔をし、それからたと思い当たったように手を打った。

「あ、まさかと思うけど：クリスターが傷を負ったってことが直感的に分かって、ここに来たとか？」

レイフが答え難そうにしていると、アイザックは心底感心したというように頷いた。

「へえ、驚いたな。以前クリスターがそんなようなことを漏らしていたけど、ほんとに感じるんだ？」

好奇心を前面に押し出して鋭く追及してくるアイザックに、何と答えればいいのか分からず困ってしまったレイフは、口をへの字に曲げて睨みつけた。

「そんなこと、おまえにゃ、関係ねえだろ。そんなことより、アイザック、兄貴が行った病院知らないか？」

するとアイザックはからかうような口調で聞き返してきた。

「それこそ、おまえの直感だか嗅覚だかで兄貴の居場所も突き止められないのかよ？」

「あのさ、オレ、犬じゃねえよ」

レイフは大きな溜息をつくと、もうこれ以上アイザックと話すのは疲れるとばかりに離れる口実を探した。

しかし、レイフがそうするより先にアイザックが逃がすまいとするように彼の肩を掴む。

「まあ、せっかくここまで来たんだから、兄貴と会えなかったからってすぐに帰らず、ちょっと付き合えよ。ジュース、おごるからさ」
「いらねえよ。大体おまえ、新聞部なら、試合の取材しなきゃなんねえんだろ」

「それは他の部員に任せたよ。クリスターが帰っちゃまって、他の選手もさっぱりだし、見てても、もうあんまり面白くなさそうだったからな。代わりと言っちゃ何だが、おまえ、相手しろよ。どうせ暇だろ？」

暇とは何だ。レイフは言い返しかけたが、特に他の予定もなかったのは確かで、結局アイザックに引っぱられるがまま売店で飲み物を買って、外に出ると、ホールに面して広がる、花壇や噴水のある広場の隅っこのベンチに腰を下ろした。

（あーあ、面倒な奴に捕まっちゃったな）

まさか記事に書かれるということはあるまいが、取材記者のような歯切れのいい口ぶりで、だんまりを決め込もうとするレイフをつついて面白そうなネタを穿り出そうとしているかのようなアイザックを相手に、レイフは落ち着かない気分を味わっていた。

それでも、今日の試合中クリスターの様子がおかしかったとか、レイフが見ていない兄の話をされると、つい気を引かれてしまう。

レイフとクリスターに共通の友人というのは、そういえば、ほんどいない。

だから、自分がいない所でクリスターがどんな付き合いをしているのか、友人達とどんな話をし、何をして一緒に過ごしているのか、

レイフはいつも想像するばかりだ。

苦手意識が先行して敬遠していたアイザックだが、レイフは次第にその話に引き込まれていった。

アイザックがクリスターについて語れば、それはレイフが見ていない兄の別な横顔なのだ。

（そういや、こいつとクリスターは、一時はすごく仲がよかったふうなのに、いきなり、ぱたりと付き合いがなくなったんだよな。俺には黙って新聞部の部室に放課後入り浸ってたのが、いつの間に行かなくなって…喧嘩でもして友達づきあいやめたのになって思ってた。それが、最近になって、またクリスターの傍にこいつの姿をよく見かける）

レイフは、改めて、アイザックをじっくりと観察した。

まあ整っている方だろう、知的でシャープな面差し。痩せぎすなくらい細身の体だが、軟弱な感じはしないのは、皮肉っぽくも響く力のある声のインパクトが強いからだ。

（眼鏡のせいかもしれないけど、何だか、ちょっとあいつに雰囲気 が似てないかな…思い出したくもない中学時代のカウンセラー、腐れ外道のアイヴアースに…うわあ、クリスターは好きなタイプかもしれないけど、オレとは相性あいそうもねえわ）

思わずしかめ面して呟いた瞬間、アイザックがレイフの足を軽く蹴った、

「何、人の顔を穴が開くほどじろじろと見てんだよ。気持ち悪いぜ」「うっ」

怯むレイフを馬鹿にしたような目で眺めやると、アイザックは手に持ったコーラのボトルに口をつけた。

「兄貴に比べると物足りないなあ、おまえ。言われたら、黙ってないでちつとは言い返せよ。こっちの質問に答えるのも要領を得ないし、まあ、クリスターのように打てば響くような答えが返ってくるなんて、俺も期待してないけどさ」

「オレは、頭で考えてしゃべるより、体が先に動いちまう方なの。」

大体、べらべらと口ばかり回る奴って、なんか信用ならねえ」

むつつりと答えるレイフにアイザックは面白そうに片方の眉を跳ね上げた。

「お、少しは言うんだ。でもさ、頭が切れて弁がたつて言うなら、おまえの兄貴こそ、その際たるものじゃないか。その理屈で言うとおまえはクリスターを信用できないってことになるぜ？」

「ま、まさかっ。クリスターは別だ：あいつはオレの大切な兄貴で、かけがえのない相棒で、ええと――」

むきになって否定しかかるレイフに、アイザックは堪えきれなくなっただけのように吹き出した。

「あはははっ、本当に馬鹿正直って言うか素直だな、おまえっ。すげっ、可愛いっつか、面白えっ！」

足をじたばたさせながら笑い転げるアイザックをレイフはしばしばかんと眺めた後、猛烈に怒り出した。

「てめえっ、人を引っ掛けやがって：おい、その悪魔みたいに回る口、いい加減に閉じないと、拳骨叩き込むぞっ」

「ぷぷっ：分かった、黙るから、暴力はやめろよ。おまえみたいな化け物と体力勝負はしたかないからな」

口をまだひくつかせながらアイザックは涙のにじんだ目もとを手でぬぐった。

「全く、おまえみたいな嫌味な奴と好き好んで付き合うクリスターの気が知れないぜ」

レイフはまだ腹の虫がおさまらずにぶつぶつ言うのと、アイザックにおごってもらったコーラを一気に飲み干した。

（まあ、クリスターの友達の好みって変わってるけど：あのJ・Bとも最初は友達付きあいしてたくらいなものな。もちろん、あんな悪党だっことを知らなかったからだろうけど）

レイフは先程J・Bの影を認めたと思ったホールの方をふと眺めやった。

「なあ、アイザック」

「うん？」

「オレさ、クリスターとJ・Bのことですと気になってたことがあるんだけれど…」

「何だよ？」

自分にあてられたアイザックの眼差しに込められた温度がずっと下がったのには気づかず、レイフは続けた。

「もしかしたら、おまえは知ってるのかな。クリスターはJ・Bと敵対してたんだ、オレが原因で…」

アイザックは軽く首を傾けて、レイフの何かしら思いつめたような顔をしばらく眺めた後、ゆっくりと口を開いた。

「ああ、その辺りの事情なら、よく分かってるよ。クリスターがおまえをJ・Bの手から取り戻すために奴の所に殴りこみに行ったってくだりもな。実を言うと、俺も、あの時カメラを持って近くにいたの。J・Bとその危ない仲間達をつるし上げるネタを手に入れるためにさ」

「えっ？ それって…マジかよ…？」

「うん、俺がクリスターと知り合ったのはあの一件の直前だったんだ。新聞部の部屋に、前の部長のコリンがクリスターを連れてきた。当時：J・Bが学校内で好き勝手し放題をしていた時、あいつらの暴挙をこれ以上黙って見ていることはできないって空気が新聞部にはあったんだ。コリンがまた正義感のある奴でさ。そこに、可愛い弟がJ・Bに引っかけかかって困っていたクリスターが相談を持ちかけた：形としては、そんな感じだな。でも、クリスターは、実際にはもっと積極的に、J・Bを追い詰める駒として俺達を使うつもりだったんだ」

小さな棘のようなものを、一瞬アイザックの口調に感じたレイフだが、それよりも彼の話の内容に気を取られていた。

「クリスターの奴、オレの知らない所でそんなことまで…いや、あいつらしいって言えばそうだけど。何の考えもなくいきなりJ・Bに真っ向から戦いを挑むことなんて確かにしないだろうさ。でも、

それなら――」

レイフは急に激しい不安に駆られて、傍らでじっと自分の様子を窺っているアイザックに激しく詰め寄った。

「なあ、クリスターの奴、一体何をやってたんだ？ J・Bとの一騎打ちの後もさ、あいつはずっと奴と戦い続けてたんだろ？ それで、ついには奴を学校から追い出して、施設送りにした：あれほど用心深くて頭の切れるJ・Bにしては、あまりにも最後が呆気なさ過ぎて、裏に何かあるんじゃないかって疑ってたんだ。おまえも、J・Bを追い詰めるのに一役買ったのか？」

「さあ、どうだかねえ」

「アイザック！」

「終わったことを今更蒸し返すなよ、レイフ。おまえに話した方がいいことなら、クリスターは自分の口から言ってると思うぜ」

「終わったこと……」

そうすんなりと納得することはできなくて、レイフはアイザックに追求の眼差しを向けるが、彼はそれを軽く振り払うかのごとく肩をすくめた。

「あきらめな、クリスターがおまえには関わらせたくなくて秘密にしていたこと、たとえ知っていたとしても、俺はおまえに教えてなんかやるものか」

アイザックの声にあからさまに込められた敵意に、レイフは反射的に気色ばんだ。

「てめえ、おい、オレに喧嘩売ってるのか？」

とっさにアイザックの胸倉を掴んで凄みたくなったが、そんな反応を嘲笑うかのように皮肉な冷笑をうかべているアイザックを見て頭が冷え、レイフは上げかけた手を下ろした。

「別にいいじゃねえか、レイフ：何があろうと、おまえがクリスターの中で占める位置は絶対に揺るがないんだからさ。少しくらい、あいつが、おまえとは別の世界を他の人間達と共有したって、構わないだろ？」

これまでの弁舌鋭い切れ者といった印象から一変、何かしら暗いものを感じさせる声で呟くアイザックに、レイフは戸惑った。

「おまえだってさ、クリスターに知られたくない秘密の一つや二つあるだろうが？」

「ない」

レイフが迷わず即答すると、アイザックは少し鼻白んだ顔をした。(クリスターに打ち明けられないことなんてオレにあるものか：いや、待てよ、アリスとのあれだけは、未だに話せてないけどーああ、これって秘密を作っちゃったってことになるのか：だとすれば、初めてだよな、クリスターが知らないオレなんてさ)

レイフは、ついクリスターの方に流れていきそうになった心を引き戻すと、アイザックと再び対峙した。

「アイザック、含みがあるような言い方がいい加減にやめろよ。言いたいことがあるなら、はっきり言いやがれ。オレの何がそんなに気に入らないんだ？」

「おまえの存在そのものが気に食わないと言ったら、どうするんだよ、レイフ」

「な、なんで：そんな：？」

訳も変わらず傷ついて、レイフが途方に暮れた顔を見ると、アイザックも言い過ぎたと思ったのか、すまなそうにうつむいた。

「ああ、悪かった。おまえを責めたところでどうにもならないってことくらい、俺にも分かってんだ。だから、余計に：」

アイザックはレイフから視線を逸らし、目の前の噴水の傍を通り過ぎていく学生達の方をぼんやりと眺めやる素振りをしながら、ごく低い、感情を抑えた声で言った。

「クリスターはさ：ただ、おまえのためだけに、今まで誰も手出しのできなかったJ・Bと本気でやりあったんだ。あの一騎打ちの時は、文字通り命だったかかってた：何でそこまでするのかって、奴と知り合って間もなかった俺は理解に苦しんだものだよ。今だって、ちっとも分からない：そこまでする価値が、おまえの一体どこにあ

るのか」

またしてもアイザックの言葉の棘が胸をちくちくと刺してくるのを覚えて、レイフは眉根に深い皺を刻んだ。だが、自らの言葉を噛み締めるように語っているアイザックの話を途中で遮ろうとは思わなかった。

「それでも、俺は、あいつのやることなすこと全てに魅せられた。俺はもともと一匹狼のタイプでさ、誰かの下で動くんなんて性にあわなくて、親友のコリンとも新聞部の運営とかで意見が合わなければよく衝突してた。それが、クリスターが現われて、J・Bと一緒に戦おうって話になると、俺はすぐにあいつの言うことに従うようになった。あいつさ、J・Bを追い詰めるためなら手段を選ばなかったから、えげつないこともしたし、ばれたらこっちの手が後ろに回りそうな危ない橋も渡ったけれど、俺は率先してクリスターの指示に従った。生まれながらのリーダーとかカリスマって、いるんだよなあ。自分の信条曲げててもあいつのためなら恥だとは思わない、それくらいに一時は入れ込んだ。すごく気分が良かったんだ、打倒J・Bって大義名分掲げて、あいつの指揮の下、他の仲間達とも一致団結して動くのはさ。まあ、正義は我にありって、コリンほどじゃないけど、ちょっとは陶醉もしてたんだろうな。でもさ…肝心のクリスターは別に正義のためにそうしてたわけじゃなかったんだ」
悔しそうに唇を噛み締めるアイザックに、レイフは何だか居たたまれない気分になってきた。

「ごめん」

たまりかねてぽつりとレイフが漏らすと、アイザックは驚いたように振り返った。彼がここにいるのを思い出したような顔をして、アイザックは苦笑した。

「馬鹿、おまえに謝ってもらっても、それこそ筋違いってものさ」「うん。でも」

まだ何か訴えようとするレイフを、手を軽く振って黙らせると、アイザックはまたしみじみと語りだした。

「クリスターにさ、『ミスター・パーフェクト』なんてあだ名をつけたのは俺なんだ。あいつは、そんな大仰な呼び方はやめてくれないで嫌がったけど、今じゃ、他の連中もよく使うようになった。だって、クリスターなら、そう呼ばれてもふさわしいだろ？ まあ、少なくとも外面だけ見ている分には申し分はないさ：ただ深く関わって色々気づかされてくると、がっかりもすることもあるわけ。まあ、クリスターも人間だから、弱みや欠点くらいあっても当然だけど、あいつの場合は極端すぎるんだ。全く情けねえよな、神様から愛されたような、人がうらやむもの全てを備えた男がさ、不肖の弟一人にかかずらって、自分の将来はおろか命までも危うくしてしまう。なあ、レイフ」

「ああ」

「おまえさ、頼むから、あいつから手を引いてくれねえか」

妙に素直な気分になってアイザックの言うことに耳を傾けていたレイフは、思わず息を止めた。

「おまえから解放されて自由になれば、あいつはどこにだって行って、何だって好きなことをできる。あの有り余る才能を生かす場所を見つけてさ、もっともっと伸びて、将来すげえ大物になるぜ、きっと」

レイフは何か言い返そうとして、出掛かった言葉を飲み込む。否定しきれだけのものを彼は持たない。

優秀すぎる兄を誰よりも身近で見ながら、同じような可能性を、レイフがこれまで全く考えたことがなかったわけではなかったのだ。「でもさ、そう願う一方で、残念ながら、そりゃ無理だわとも思うわけ。あいつが、おまえを愛している限り」

アイザックは深々とうなだれて、重い溜息をついた。

「ほんと、残念」

レイフは瞳を揺らせて、そんなアイザックを見守る。

クリスターから手を引けなどと理不尽なことを言われても、なぜか子供じみた独占欲を発揮して相手に食って掛かる気にはなれず、

胸のうちでひっそりと、自分に向かって問いかけていた。

（オレがクリスターから手を引けば、あいつは自由になる…その方がきつと幸せになれる？）

レイフの心臓が圧迫されたかのように痛んだ。

クリスターから取り残されてしまいそうで不安に駆られ、置いていかないでほしいと叫びそうになったことは、これまでに何度もあった。少し前まではその可能性を考えるのも嫌だったが、いつの間にか直視できるようになったくらい、レイフの心も変わってきたようだ。

（いや、そんなはずねえよ…離れた方がいいとか、お互いのためだとか、今までだって当たり前のように周りから聞かされてきたけれど、勝手に決め付けるなよ。大体、切り離されたら痛いし辛いって分かっているものを、そうしなきゃならないって自分に強いるのも、どうよ。俺は、そんな無理はしたかねえ。そりゃ、別の世界や友達をそれぞれ持って違う楽しみだって見つけれたら、それはそれでいいことだよ。オレは、クリスターが知らない楽しいことを見つけたら、それをあいつにも分けてやりたいって思うよ。それにさ、二人一緒なら、あの…去年の大会で優勝した時みたいに、気持ちよさも喜びも倍の倍になるんだよ。オレはクリスターに幸せでいてもらいたいし、オレ自身も幸せになりたい…どちらが欠けても駄目なんだ）

そこまで考えたレイフの胸にふつと微かな影が差した。

（なのに、クリスターは、オレの気持ちを確かめもせず、いつも自分で勝手に決めて行動しちゃう…オレのためだと言いながら、オレには隠して、全部一人で背負い込んで…でも、それは間違ってる）

レイフは膝の上に乗せた手をぎゅっと握り締めると、あまりに長い彼の沈黙にいぶかしげな顔をしているアイザックに向かって、はつきりとした口調で言った。

「オレは、クリスターの足を引っ張ろうなんて思ったことは一度もねえよ。ただ、あいつと同じ夢を一緒に追って生きたいと思ってる

ただだよ：一人では不可能なことでも、二人でなら叶えられる気がする。お互いに足りない部分を補い合ってさ：って、そう言い切るには、オレの方がまだまだ力不足なんだけど。でも、力が足りないなら、どんな努力をしてでも手に入れるから：あいつに支えられるだけじゃなくて、あいつのこともちゃんと支えられるような人間になりたいんだ」

レイフがこんなことを言ったのが意外であったのか、アイザックは瞠目した。

「ふうん。クリスターが聞いたら、泣いて喜びそうな台詞だよな。いっつも自分にしがみついていた甘ったれの弟がやっと少しは成長してくれたのかって。でも、そうしたら、余計にあいつの足は止まる。やっぱり、俺には判断がつかないよ、おまえがあいつの傍にいたことが吉なのか凶なのか。結局先のことは分からないってことか：あいつのために、おまえに今できることがあるとすれば：そうだな、あいつの心に寄り添って、ここはという時にはちゃんと支えて守ってやれよ。あいつさ、崇拝者は多いけど、本当に心を開ける友達っていないんだぜ。おまけに、実は敵も多い」

「そうなのか？」

「一人で何でもできすぎて、他人は必要ないって顔してるから、それに反発覚える奴もいるんだよ。あいつをヒーロー扱いして騒いでいる馬鹿は気楽でいいものさ。なまじ半端に頭がよくって自分に自信があったりする奴がやばいんだな。実際あいつの傍にいと、自分との差をつくづく思い知らされて、落ち込むからさ。その気持ち昇華しようと思ったら、ダニエルみたいにあいつを崇め奉るくらいなものさ。でなけりゃ、嫉妬に押しつぶされちまう」

「でもさ、アイザック、おまえは兄貴の友達じゃないか」

レイフが発した素直な言葉に、アイザックは何かしらはっとしたようだ。照れているのか、単に自信がないのか、したたかな彼らしくもなく口ごもって、レイフのまっすぐな眼差しから顔を背けた。

「ああ、うん：そうだな：そうありたいけど、どうなんだろう。ク

リスターは俺をそんなふうに思ってくれているのかな。だって、友達ってのは、対等な人間関係だろ。あいつと俺はそうじゃないから、さ」

どこことなく寂しげにも響く、アイザックの声を、レイフは不思議に思いながら聞いていた。

「あのさ、アイザック、対等とか何とかごちゃごちゃと面倒なこと考えるなよ。理屈ばっか言ってるんで、クリスターが好きなら好きでいいじゃねえか。あいつは友達が少ないって心配するくらいなら、おまえが友達って呼んでやれよ。何が問題なんだか、分かんねえよ」
アイザックは怯んだようにレイフを見返した後、もとの皮肉っぽさを取り戻して言い返した。

「生憎、俺はおまえのように単純明快じゃなくってさ」

「何だよ、人を馬鹿呼ばわりする気かよ」

レイフが膨れっ面をすると、アイザックは少し笑った。

「ああ、でも：おまえのその突き抜けたような単純さが、むしろクリスターには薬になりそうだな。俺みたいな奴が十人がかりで説得するよりも、きつとおまえの何気ない一言の方があいつには効くんだ。畜生、やっぱ、おまえには敵わないよ、レイフ。おまえ以外でクリスターとほぼ対等に渡り合えるのは、それこそあのJ・Bくらいなものだろうしさ」

肩の力を抜いてアイザックに笑いかけていたレイフだが、アイザックが最後にもらした名前に、たちまち眉を吊り上げた。

「じょっ：冗談じゃないぜ。なんで、そこでJ・Bが出てくるんだよ」

束の間二人の間には和んだ空気が流れかけていたのに、アイザックの漏らした一言で、また雲行きが怪しくなってきたようだ。

「何、むきになってんだよ。俺は別に間違ったことは言っていないぜ。おまえだって、クリスターがJ・Bと親しく友達づきあいしてたことは知ってるはずだろ。あいつら、もともとうまが合ったんだ」

「それは、J・Bの正体が分かるまでの話だろ。他の連中を欺いて

たように、クリスターだって騙したんだ」

「ふん、おつむのすつきりしたおまえならともかく、クリスターがそう簡単に騙されるかよ」

「な、何を！」

皮肉屋のアイザックはレイフが本気で腹を立てているのを見て取ると、余計に煽りたくなったようだ。

「いい加減にしろよ、アイザック、冗談にしても、たちが悪いぜ」

「冗談にしたけりゃ、それでもいいさ。まあ、おまえにとっては、面白くないことだろうが、クリスターとJ・Bの思考回路って、実際よく似てるんだぜ。同じコインの表と裏のようなものさ。互いに憎みあうのも、自分と同種の相手だと思うからだ」

決め付けるように言われて、レイフはますますむきになって反論する。クリスターがJ・Bと友達付き合いしていた事実はある、彼らが近いとか、似ているという話は聞きたくない。むしろ、認めたくない。

「何が同種なものか：クリスターはJ・Bとは違う。ゲーム感覚で他人を操ったり、傷つけたり、命を玩具にして遊んだり：そんなひどいことはしない」

だが、あの夜、命を道具にしたゲームをJ・Bに仕掛けたのは、クリスターではなかったか―そんな考えが、いきなりレイフの頭に閃いた。

（君が勝つか僕が勝つか、命がけのゲームをしよう）

他人には決して口出しさせないというような態度でJ・Bに挑みかけるクリスターをとめることは、レイフにもできなかった。

あんな常軌を逸した挑戦に普通の人間なら応えないだろう。だが、J・Bは乗った。

そして、それからあの二人は、レイフの知らない場所で、食うか食われるかの戦いをずっと繰り広げていたのだ。だからこそJ・Bは、捕まる寸前にありながらクリスターの前にわざわざ現れて、あんな不吉な捨て台詞を残していた。

（このままではすまさないよ。僕達のゲームはまだ終わらない…終わらせるものか）

ゲームはまだ終わっていない。

背筋を冷たい手で撫で下ろされたような悪寒を覚えて、レイフは軽く身震いした。

先程そのホールでJ・Bらしき人影を見かけた記憶も相まって、何だか本当に、記憶の奥底に封じ込めたあの怪物が蘇って、クリスターをどこか遠くにさらっていきそうな気がして、レイフは一層激しく反発せずにはいられなくなった。

「違う、全然、似てねえよ」

額にじつとりと汗をかきながら、レイフは食い縛った歯の間から押し出すようにして言った。

「おまえが兄貴の何を見て、そう言うのか知らねえけど、それは間違いだ。ああ、そうだとも、オレはクリスターのことなら何だってよく分かる…おまえよりもずっと…あいつに一番近い所にいるのはオレなんだからな」

我ながら子供っぽい戯言を言っているなと思ったが、レイフは、とにかくアイザックの主張を退けたかったのだ。

だが、アイザックはレイフの言葉を額面どおり受け取ってしまったようだ。いぶかしげにレイフを見ていた黒い瞳に暗い火が灯った。

「おまえは傲慢だよ、レイフ」

レイフに言い返す声は根深い憤りをにじませていた。

「せっかくおまえを見直しかけていたのに…ああ、俺の誤解だったのかなと思ったのに、結局はそれかよ。その幼稚な独占欲…虫唾が走るぜ」

もう少し冷静であれば、聡明なアイザックには、憎まれ口を叩かなければならないほどレイフが動揺していることが分かったかもしれない。だが、よほどレイフの言ったことが癪に障ったのか、彼ら

しくもないほどかっとなっていた。

「クリスターと同じ血と肉と遺伝子：ああ、くそ、やっぱり許せそうにない」

アイザックは忌々しげにレイフを睨みつけた。

「それだけのものを持つて一緒に生まれてきたってだけで、何の努力も払わず、当然の権利のようにあいつを縛り付ける。おまえの存在って、一体、何なんだ？」

まるでアイザックに殴りかかられたかのようにレイフの頬が強張った。

「おまえなんか、初めからいなきや、よかったんだ。そうすりゃ、あいつを惑わすものはこの世に何もない。瑕一つない、完璧な人間になれたろうさ。そうさ、おまえなんか、いなくなってしまうばい！」

拳をぐつと握り締め、歯を食いしばって獰猛な肉食獣のようにレイフが唸った、その時、聞き覚えのある、親しみのこもった声が聞こえてきた。

「おーい、レイフじゃないのか？」

夢から醒めたように瞬きをして、レイフが声のした方向に顔を向けると、駐車場の方から友人達と一緒にこっちに歩いてくるトムの姿が見えた。

「トム」

親友が笑いながら手を振るのにつられたように、レイフも手を上げる。

「な、ほら、やっぱりレイフの方だったろ」

後ろにいる他の少年達に自慢そうに言ったかと思うと、屈託のない顔で駆け寄ってくる親友をレイフはまじまじと見ていた。

「おまえもクリスターの試合を見に来てたのか。何だ、それなら声かけてくれたらよかったのに」

「う、うん」

レイフはまだ少しぎこちない笑顔を、何も知らない友人に向けた。

「残念だったな、クリスターなら、軽い怪我を負って途中で棄権しちゃったよ」

冷めた口調で言うアイザックをトムは胡乱そうに眺めやる。

「あれ、新聞部のアイザックだ」

単独インタビューか？ と、そつと耳打ちをしてくるトムに、レイフは苦笑いしながら首を横に振った。

トムの登場のおかげで一触即発の雰囲気がいつの間にか雲散霧消してしまったことに、レイフは密かに胸を撫で下ろしていた。

クリスターの友達相手に本気で喧嘩などしたくない。

「さて、俺はもう行くわ」

アイザックも毒気抜かれたらしく、それ以上はレイフに突っかかりうともせずにおとなしくベンチから立ち上がった。

レイフは一瞬黙ってアイザックを見送りかけたが、素っ気無く背中を向ける彼に躊躇いがちに一言声をかけた。

「：コーラ、おごってくれて、ありがと」

「ん」

ひらひらと手を振って、そのまま振り返りもせずホールの方に戻っていくアイザックの後ろ姿を、レイフは複雑な気持ちで見送った。

結局彼のレイフに対する感情は硬化したまま、最後まで打ち解けることも理解しあうこともできなかった。

別に残念なわけではないが、どうも後味が悪い。それに――。

「何、眉間に皺を寄せてんだよ、レイフ？」

アイザックのいたベンチにひょいと腰掛け、トムは無邪気に問うてくる。

「なあ、トム：おまえ、オレの友達だよな：：？」

「へ？」

「オレのこと：好き：？」

ぐっと、何かが喉に詰まったような顔して、トムは目を白黒させた。

「な、何言ってるんだよ…って、そんな潤んだ目で人を見るのはやめろよ。友達なのかって、そんなの当たり前だろ、いちいち聞くなよ、変な奴だなっ」

レイフは何だかほっとして微笑むと、小柄な友人を捕まえ、親愛の情を一杯込めてぎゅうっと抱きしめ、ついでに頬ずりまでしてやった。

「ああ、癒されるっ」

「ひいっ。馬鹿、離せよっ」

ぎゃあぎゃあと喚くトムにじやれついて、一緒に来ていた彼の連れからは明らかに引かれ遠巻きにされながら、レイフはアイザックのことを考えていた。

（あんなにクリスターが好きなくせに、友達じゃないなんて言っさ…天邪鬼の理窟屋め）

ふいに、訳もない胸騒ぎを覚えて、レイフはアイザックが戻っていったホールを眺めやった。

あそこで、一瞬とはいえ確かにJ・Bを見かけたと思った。今更だが、本当にただの錯覚だったのだろうか。

（アイザックにあっさり否定されて、つい信じ込んじゃったけれど、オレのこういう動物的な勘はめったに外れないんだよな。でも、あいつは確かに誰も見なかったと言ったし…）

水に落とした一滴のインクのように、黒い不吉な予感がレイフの胸にゆっくりと広がっていった

第3章唯一の絶対（10）

クリスターが、ダニエルとようやく話す機会を得たのは、あの日から3日後のことだった。クリスターとの行為の後、もともと虚弱な彼は熱を出して、ボクシング部は無論授業も欠席していたのだ。

久しぶりに登校し、この日最後の授業が終わって出てきた教室の前。待ち受けていたクリスターを見た瞬間、ダニエルは微かな慄きに青い瞳を揺らせたが、彼が誘うのにはおとなしくついてきた。

人気のない校舎の裏側まで行くとクリスターはようやく足を止め、それまでずっと口を閉ざし視線もあわそうとしなかったダニエルに向き直った。

「僕が恐いかい？」

クリスターがいきなり問いかけると、ダニエルは反射的に身震いをし、それを恥じるかのように目を伏せた。

「はい…少し…」

不安そうに自分の体を抱きしめるダニエルに、それも無理はないかと、哀しい気分でクリスターはひとりごつ。

「じゃあ、僕のことはもう嫌いになった？」

瞬間、ダニエルは弾かれたように顔を上げた。

「い…いいえ…！ あなたを嫌うなんて、そんなことはないです」

この日初めてクリスターの顔をまともに見た途端、人形のように青ざめて表情にも乏しかったダニエルの顔が変わった。そうして、頬を紅潮させ、ずっと堪えつづけてきた感情が堰を切って溢れ出したかのように、本来の彼らしいはつきりとした声で訴え始めた。

「僕がいけなかったんです。今にも爆発してしまいそうなくらい、神経の張り詰めたあなたに……あんなひどい言い方をしたから……あなたのことをずっと傍で見えてきて、一緒にいない時でもいつもあなたのことばかり考えて、おかげで少しはあなたの気持ちを汲み取れるようになったと思っていたのに、いざとなると、自分の感情に負けて言うてはいけないことまで言ってしまうました。あなたがあんまり辛そうに見えたから、どうしても放っておけなくて……僕の力であなただの役に立ちたい、あなたを支えたいなんて、おこがましくも思ってしまった。でも、僕では、やっぱり役不足だったんです」

言っているうちに気持ちが高ぶってきたらしく、嗚咽を噛み殺そうとするかのごとく唇を引き結び、手の甲で目元をこすりだすダニエルにクリスターは優しい声で語りかけた。

「ダニエル、ダニエル……どうして君が僕に謝る？　僕が傷つけてしまった相手からそんなふうに氣遣われるくらいなら、どんなにか激しい言葉で罵られた方がいっそ楽だよ」

まだ目元をこするのをやめないダニエルの手をクリスターが捕まえると、彼は涙を見られるのが嫌なのか強情に顔を背けた。

「それに、君の言ったことはほとんど正しかったんだから……ただ、僕の方に素直に受け入れるだけの余裕がなかった。あんまり凶星を指されて、君を攻撃してしまうほど逆上してしまった。あそこまで

自分が精神的に追い詰められていたなんて、あの時まで分からなかったよ。だからと言って、嫌がる君にあんなことをした弁解にはならないけれどね」

クリスターは一瞬躊躇った後、胸の下にあるダニエルの頭に手を伸ばし、つやつやした綺麗な栗色の髪を気遣わしげに撫で付けた。

「すまなかった」

クリスターがそのままダニエルの頭を引き寄せると、彼は怯えた子猫のように身を固くした。

「クリスターさん……？」

戸惑いを含んだ声でダニエルが尋ねるのへ、クリスターはかき口説くように言った。

「この際白状するとね、ダニエル、君が見抜いたように僕はもう……心身ともに限界にきている。過呼吸なんて起こしたのは、あれが初めてだったけれど、この先また何かあって追い詰められる度に同じ発作を繰り返すのではないかと思うと不安だよ。僕は身の周りで起こるあらゆることを掌握してコントロールしないことには気がすまない。おまけに自分に常に百パーセントを求める完璧主義者だ。その辺りを改善しないと、僕はきっと駄目になる。今度のことで、つくづく思い知ったよ」

これまでクリスターをそう駆り立ててきたのは、一向に薄れる気配もない弟に対する執着心への恐れだった。しかし、それが転じて、他の大切な人達を傷つけかねない破壊衝動にまで至ってしまった今、この内なる怪物との折り合いのつけ方も変えるしかない。

胸に溜め込んで苦しがるくらいなら正直に吐き出してしまえというラースの助言は単純だがクリスターにとっては正鵠を射たものだった。自分の意外な脆さにほとほと嫌気が差して、楽観的で物事に深くこだわらない父親やレイフに少しは倣いたかったのかもしれない。

「常に全力を出す必要などない、僕の場合は少しくらい手を抜いて丁度いいんだ。つい自分の力を過信して、何事もやりすぎる僕だから、ストッパーになってくれるような、誰か信頼できる相手が欲しい……」

ふと、クリスターの脳裏を弟の面影が掠めた。

他の誰かなど求めずとも、クリスターに最も近いはずのレイフならば、安心して自分を託せるのではないか。レイフのことだから、クリスターが弱い姿をさらせば、何としても自分で保護しようとするだろう。だが、一度すがりついてしまえば、もう二度と弟を手放せなくなる。これから伸びるだろうレイフの可能性を潰してしまうことも厭わず、自分の未来などもっとどうでもよくなるほど、依存しきってしまうだろう。

昔、偶然読んだことのある本の中に描かれていた、自分の半身と抱きあい、1つになったまま、生きるために必要なこと全てを放棄して死んでいった人達。今更ながら、あれは自分達に与えられた警告なのだと思い知れ。

追い詰められたような気分で、クリスターはダニエルに言った。

「ダニエル、僕を助けてくれないか？」

助けてくれ。（レイフ）

「君はぼくを理解してくれている。たぶん君の前でなら、僕は、本音を隠したり感情を抑えたりして、無理をしなくてもすむような気がする。少なくともそう思える相手が…今の僕には必要だから…」

おまえが必要なんだ。（レイフ）おまえなしでは、僕は生きられない。ふいに胸が詰まって、クリスターは続く言葉を失い、黙り込んだ。

聡いダニエルはクリスターの言葉にじっと耳を傾け、しばし考えを巡らせると、確かめるようにこう囁いた。

「クリスターさん…あなたがそう言うべき相手は僕ではなく、たぶんレイフさんじゃないんですか？」

本当に他人の気持ちに敏感な子だとクリスターは半ば感心し半ば呆れながら思う。こんなふうに出遣ってばかりでは、さぞや神経がくたびれるだろう。

「レイフは…駄目なんだ。あいつは僕の痛みを感覚として捉えることはできるけれど、それが何なのか、結局分かってはくれないんだ」

ぽつりと呟いたクリスターの声は寂しげに響いた。

腕の中でダニエルが小さく身じろぎをしたが、きつと途方に暮れたようなものになっている自分の顔を見られたくなくて、クリスターは一層きつく彼を抱きしめた。

「だから、これ以上、僕はあいつに求めてはならない。期待してはいけない。そんなことをしてもレイフの重荷になるだけで、僕もあいつも、いつまでたっても幸せにはなれないから」

「クリスターさん：いつまでもレイフさんと一緒にはいられはしないと、僕は確かに言っただけで、でも、それをそのまま受け取らなくても：」

「君が言ったことは正しいんだよ、ダニエル」

クリスターが覆い被せるように言葉を続けるのに、ダニエルは口をつぐんだ。

「僕もずっと前から分かっていた。ただそう認めるのが辛くて、気づかない振りをして、結論を先送りになっていた。でも、もう、これ以上は続けられない」

クリスターは息を吸い込んだ。

「僕は、レイフと同じ大学には進まない。フットボールも、たぶん、今年で最後にする」

「ク、クリスターさん？」

「少し前から考えていたんだ：以前世話になったハーバードの教授が僕を気に入って、卒業後の進路について、いつでも相談にのって言ってくれている。フットボールは好きだけれど、僕の情熱も実力も、プロになれるほどのものじゃないから：そろそろ潮時なんだよ。いい加減僕も将来のしっかりとしたビジョンを持たないとね」

「レイフさんに、そのことは話したんですか？」

「いや：まだだよ。あいつの顔を見て話すと、また気持ちが揺れ動いて、流されてしまいそうな気がするから：僕の手を取りたがるはあいつを振りほどけるのか、いざとなると自信が持てない。確かに、僕にとっては、なかなか勇気のいる決断だね」

「あなたは、本当に、そうしたいんですか？」

「ああ」

自分に言い聞かせるように、クリスターは呟いた。

「たぶん、今がその時なんだと思うよ。近頃レイフはやつと自立心が出てきて、放っておいても僕の手から離れていきそうな気配だし、それに、僕も：この身動きの取れない状態から脱して、そろそろ前に進みたいんだ」

クリスターがやっと腕を緩めると、ダニエルはほっと息をつきながら身を離れた。

「ダニエル、君は僕のが好きだと言ってくれたけれど、もしその気持ちが今でも揺るがないなら、僕の傍にいてくれないか？」

「クリスターさん」

躊躇うダニエルの手をすくい上げるようにして、クリスターはか細い手首に唇を押し当てた。長袖のシャツの下に隠していたが、クリスターがつけた指の跡が今でも残っている。

「あんな酷いことは二度としないから」

すまなさがこみあげてきて、クリスターが思わず声を震わせると、ダニエルは慌てて彼から手を引っ込め、強い口調で訴えた。

「ま、待ってください、クリスターさん、あなたの罪悪感につけこんでまで、あなたに愛してもらおうとは思いません：そんなつもりで僕は、あなたにあんなことを言ったわけじゃない」

「そうじゃないよ、ダニエル：君に償いたいという気持ちも確かにあったけれど：今はむしろ、僕の方が君の好意につけこもうとしているのかもしれないな。君は、僕に似た所があって、人の心を見透かして行動を先に先に読もうとするあまり、自分の気持ちは後回しにしてしまう。だから、あえて言うけれど、そうすることで君が傷ついてしまいそうなら拒んでくれ。僕は君を大事にするつもりだけれど、必ず幸せにしてみせるとは約束できない：僕の心はまだあいつにつながれたままだから…」

クリスターが自嘲的に微笑むのに、ダニエルは大きな目を潤ませたが、泣くまいとするかのように歯を食いしばった。そんな彼の頬にクリスターは手を添え、そっと身を屈めてキスをする。

ダニエルは逃げなかった。

「ずるい」

代わりに、ぽつりと、恨み言めいたことを言った。

「そんなふうに言われたら、僕はあなたを拒めなくなる：あなたこそ、僕の性格を見抜いて、何をどう言えば僕があなたを受け入れる

か、ちゃんと計算しているでしょう？」

「ダニエル」

クリスターが困ったように見下ろすと、ダニエルは涙のかわりにこぼすような淡い微笑をうかべた。

「それでも、僕は…あなたが好きです。そんなにも苦しんでいるあなたを目の当たりにしながら、必要だと言われただけで、嬉しくて、つい有頂天になってしまいくらい…ごめんなさい、あなたが好きなんです」

ダニエルは気持ちの昂ぶりを抑えきれずに身を震わせると、クリスターの胸に飛び込んできた。

何も言わずにしがみついてくるダニエルの細い体に腕を回しながら、クリスターはぼんやりと周囲に視線をさ迷わせた。

よく晴れた昼下がり。初夏の眩しい光がひっそりとした校舎の裏手のこの一角にも差し込んでくる。

校舎の向こうにあるグラウンドの方からはクラブ活動のために残っている生徒達の声が聞こえてくる。

陸上部がいつも使っているのは、あのグラウンドだったろうか。耳を澄ませてみても、あの馬鹿によく響く声は聞こえない。（レイフ）そう言えば、ここ数日、まともな会話も交わしていない。（レイフ）どこにいるのだろうか。お日様のような、あの屈託のない笑顔もしばらく見ていない。（僕…）

腕の中のダニエルが何かを敏感に感じ取ったかのように身じろぎするの、クリスターははっと我に返り、自分の性懲りのなさを恥じた。

（子供の頃から、いつも傍にるのが当然であるかのように思ってきた。今でも、離れていると落ち着かなくて、おまえがどこで何をしているかつい思いを巡らせてしまう：こんな癖も、早くなくしてしまおう。レイフ、僕はもう、おまえを追わない）

気がつく、ダニエルが伏せていた顔を上げて心配そうにクリスターを見ていた。クリスターはよほど暗い顔をしていたのだろうか。後ろめたさに、思わず、囁く。

「ごめんよ、ダニエル」

ごめん。（レイフ）

胸に広がっていく心許なさを打ち消そうと、クリスターは、はからずも手に入れることになった『恋人』を抱く腕に力を込めたのだった。

第3章唯一の絶対（11）

ボクシングの試合のあった日曜日、レイフが会場ホールまでクリスターを探しに行ったものの擦れ違いに終わった後―そこで偶然出会ったトム達にしばらく付き合って家に戻ると、既にクリスターは帰っていたが、散々だったという試合の結果がこたえたのか、部屋に閉じこもっていた。レイフは様子を見に行こうとしたのだが、今はそっとしておいてやれとラースに釘を刺され、さすがに強引に押しかけていくこともできず、どさくさに紛れてクリスターと仲直りをしてしまえという勢いとタイミングを失ってしまった。

フットボールのシーズンオフのこの時期、生活のサイクルが違いうレイフとクリスターは、家の中でも外でも、意外と、2人きりでじっくり話し合うことのできる機会というものは少ない。両親が家にいる時には彼らを意識して、うまくこちらのしたい話に引っ張り込めないし、夜中に、たぶんまだ起きていて小難しい本を読んでいるだろう兄の部屋のドアを叩けるほど、まだ気安い雰囲気には戻っていない。

それに、これは半分被害妄想かもしれないが、あの日以来クリスターはレイフを避けているような気がする。

謝る機会を窺いながらもうまくいかず、焦れたレイフは、登校前の家のガレージで、自分の車にささと乗り込もうとするクリスターを捕まえて、謝った。慌しい朝の時間にするのではなかったかもしれないが、とにかく、クリスターに一言言わずにはおれなかったのだ。

気分的にも切羽詰っていたので、自分の気持ちをうまく言い表せ

た自信もなかったが、クリスターはレイフがたどたどしく詫びるのをじっと聞いた後、彼が拍子抜けするくらいにあっさりした態度で応えた。

『そんな些細なことを、いちいち気にするなよ。僕は別に怒っていないし、おまえも忘れたらいい』

レイフよりも、あの時クリスターが見せた怒りの方がずっと根が深そうだったにも関わらず、そう素っ気無く言っただけで、もう話は終わったとばかりに先に車に乗って家を出て行く兄は、本当に全てを忘れ去ったかのようにだった。

クリスターが別に拘っていないのなら、それでよしとすべきかもしれないが、レイフは釈然としなかった。

クリスターの反応の手ごたえが、どこかレイフには不自然で、これまでになく余所余所しいものに感じられたからだ。

（やっぱり、もっと、ちゃんとクリスターと話したいな。あいつと向き合って、あいつが思っていることをゆっくり聞いたら、この妙にぎこちない雰囲気も変わるんじゃないか）

そうして迎えた休日の土曜の朝。寝起きの格好のまま、レイフが1階のキッチンに下りていくと、珍しくも休みのこの時間にまだ家にいたクリスターとラーズが和んだ様子で一緒にコーヒーを飲んでいるのを見つけた。

（あれ、どういう風の吹き回しだろ。兄貴が親父とこんなふうによく話しこんでる場面って、あんまり見ないよなあ）

クリスターは、ラーズに対しては邪険な態度を取ることが多く、レイフが見ていて時々ちょっと薄情過ぎないかと思うこともあるくらいなのだが、そう言えば、ここしばらくこの2人やけに打ち解けた雰囲気にある。

特にラーズは、完全に親離れしてしまった息子に寂しい思いをしていたものだから、クリスターと親密に話せるのが嬉しいのだろう、傍目からでも分かるほどの無邪気な喜びようだ。

それを眺めながら、レイフはちよっぴり、いいな、親父の奴と羨んでしまった。

しかし、今朝のクリスターの様子を眺める限り、ごくくつろいでいて、別に深刻な悩みを抱えて悶々としているふうでも、神経が張り詰めている様子でもなく、レイフをほっとさせた。

（何だか、いつもの余裕を取り戻してきたみたいだな、兄貴の奴。表情もちよっと前に比べたら随分柔らかくなってるし…）

レイフがそんなことを考えながらキッチンの入り口で立ち尽くしている、やがてラーズが彼の存在に気がついた。

「レイフ、そんなところで何をやってる？」

「あ。おはよう、父さん…クリスター…」

レイフが兄の反応を窺いながらキッチンに入っていくと、クリスターは顔を上げ、まっすぐに彼を見返しながら、何一つ以前と変わっていないかのように穏やかに微笑んだ。

「おはよう、レイフ」

レイフの心臓がきゅんとなった。

（ああ、オレの勘違いだったのかな。クリスターの態度が何だか他人めいて、オレから急に遠くなってしまったようだと感じたのは…）

レイフがテーブルに近づくと、ラースが立ち上がった。

「さて、俺はそろそろ出かけるよ」

「あ、今日仕事なんだ？」

「ああ、オフィスにちょっと立ち寄って、それからボストンのスタジアムの警備に行つとる連中の応援にな」

ラースに促されるまま、レイフは彼が腰を下ろしていた椅子に坐る。

「ああ、そうだ。ついこの間、うちのオフィスに、おまえ達と同じくらいの年の子がビジネスインタンとして入ってきてな。これから夏休みにかけて、働くことになったんだが、これがまたすごい子なんだ」

「ふうん」

クリスターのことばかり気になっているレイフは、ちょっと煩そうな顔をしながら適当な生返事をする。

「父さんってば、その話、さっき僕にしたばかりじゃないか」

クリスターがレイフの手をつついて、囁きかけた。

「僕に感じが似ているんだって。すごく優秀だとあんまり褒めちぎるものだから、それじゃあ、僕とその子と一体どっちができるって言うのさって聞いたんだよ」

「そりゃ、兄貴だろ」

「でもな。おまえが前に修正してくれた、あの厄介なプログラム、またおかしくなって困っていたら、その子が直してくれたんだ。うちで働く体力自慢の連中は、コンピューターというと、からきし駄目だからなあ。たまたま母さんもいなかったし、これはお手上げだってなった時に、そのジェイコブが見せてくれて寄ってきて：やらせてみたら、ちょちょいと直してくれたんだ」

クリスターはふと眉をひそめた。

「素人に下手に触らせないほうがいいよ。また時間のある時に、オフィスに行って、バグのチェックをしてあげるからさ」

「おお、そうか。それは助かるな。オフィスの奴らも、おまえが顔を見せたら、きつと喜ぶぞ」

ラースの警備会社の社員達は、もとフットボール選手という経歴の者がほとんどだ。もともと、そういう連中を集めて何かしたいと彼が始めた会社なのだ。だから、子供の頃からフットボールが大好きで、プロになることも実際夢ではないくらい優秀な選手に成長している双子達に向けられる、彼らの眼差しは温かく、また眩しいものを見るかのような羨望が込められている。

「それじゃ、オレも一緒に遊びに行くよ。皆に言っというて」

レイフが懐っこく付け足すと、ラースは相好を崩して、大きな手でレイフの頭をガシガシ撫で練り回し、すっかり満足した様子でキツチンから出て行った。

「親父の奴、近頃機嫌いいよなあ」

ラースの荒っぽいスキンシップにくらくらしながら、レイフが余計に乱れてしまった髪を撫で付けて直していると、クリスターが彼のためにコーヒーを入れて持ってきてくれた。

「あれって、きっとクリスターが原因だぜ？　なあ、急にどうしたんだよ、兄貴って、あんまり親父とは折り合いよくなかったのにさ」

「別に仲が悪かったわけじゃないよ。僕に、父さんの話をちゃんと聞いてあげられる気持ちのゆとりがなかったただけで…」

「ふうん」

レイフは不思議そうに首を傾げて、ゆったりとくつろいだ風情でコーヒーを飲んでいるクリスターを眺めた。

「でも、よかった」

「何が？」

「だって、クリスターも、何だか機嫌よさそうじゃん。オレ、おまえが、また煮詰まってるんじゃないかって、心配してたんだ。だっ

て、オレ達が言い争ったのって、まだ1週間前だし、おまえって落ち込むと長いだろ？」

「もう1週間前だよ。大体、あの時の僕はおかしかったんだ…後で考えると、どうしてあのくらいのことであんなに腹を立てたんだろうって自分でも不思議に思ったくらいだよ」

「そ、そうなんだ」

レイフはふと神妙な顔になって、兄の真意を探ろうとしたが、いっなくなさばさばしているクリスターには、あの時閃かせた怒りの片鱗も残っていない。

（僕が抱いた女を、おまえはそれと意識して抱いた。さあ、アリスとどんなふうに行ったのか、どんなふうに感じたのか、僕に言ってみろよ、レイフ！）

レイフが追求するべきかどうか迷っていると、クリスターが先に問うてきた。

「僕のことよりも、おまえの方こそ、もう大丈夫なのかい？」

「えっ？」

「アリスのことでは、すごくショックを受けていただろ？ 彼女とおまえを引き合わせたのも、結婚のことを黙っていたのも僕の責任だから、そっちこそ、気になるよ」

「え、ああ…アリスね。うん、もう大丈夫だよ」

クリスタ―は目を瞬いた。

「立ち直り、早過ぎないかい？」

「そりゃ、知らされた時は、もう女なんか信じられないってくらいの大ショックだったけど、そんなの、一晩大泣きして涙で枕を濡らしたら、もう充分だろ」

「…泣いたんだ」

「あ、ううっ。だ、大体、オレって、振られ慣れしてるし。それに…後から考えてみたらさ、アリスがあの時色々言ってくれたのは、やっぱりオレのためを思ってくれてのことだったんだって、感じられるようになったんだ。その…彼女と経験したこともさ、オレにはきつと必要だった。そう思ったから、アリスはオレを誘ったんだろうって…ううん、これは、ちょっと好意的に考えすぎかな。でも、だからさ、オレは別にアリスのことを恨んじやいねえし、いつかまた会えたらいいなってくらいには思ってる。あ、おかしな期待はしてないけどさ。その時には、今よりうんという男になって、逃した魚は大きいぞってアリスに思わせてやれ、なんてね」

少しも卑屈な所のない態度で言い切って、明るくからりと笑うレイフを、クリスタ―は何かしら信じられないものを見るかのような目で見ている。

「参ったな」と、しみじみと彼は呟いた。

「気を回していた自分が馬鹿らしく思えるくらいだよ。僕も、おまえくらいあっさりとか割り切ることができたらいいんだろうけど、どうも無理そうだ」

「オレだって、悩みを引きずることくらいあるよ」

レイフはふいに真顔になって、テーブルの上に置かれていたクリスターの手を掴んだ。指先からクリスターの微かな震えが伝わって、じんと彼の胸を熱くした。

「アリスの件でさ、クリスターとぎくしゃくした雰囲気になっちゃまって、それがすごく嫌だった。クリスターとケンカしたことが今までなかったわけじゃないけど、いつもと何かが違うってくらい、あれ以来、何だか兄さんが遠くてさ。おまえからオレに伝わってくるものが言葉や目で見えるもの以外にもあったはずなのに、捉えられなくなったような気がして、とても落ち着かない気分でさ」

レイフは、クリスターの存在を確かめようにするかのように、目の前に持ってきた彼の手を触ったり撫でたりした。クリスターの手の質感や重み、滑らかな肌が含んだ熱や湿り気…。

「おい」

ついに黙っていられなくなったのか、クリスターがたしなめるような声を発したが、それも無視して、レイフは彼の手に頬を摺り寄せた。

「な、肩も触らしてよ」

思いつくまま、レイフは椅子をがたんと言わせて立ち上がり、テーブルを回って、動揺のあまり瞳を揺らしているクリスターの肩に腕を巻き付けた。

この感じも変わっていない。実際よりも着痩せして見えるクリスタルのきれいに発達した筋肉の手触り。まともにパンチを食らったら、レイフでも一撃で伸びてしまうだろう。

「あ、兄さん、今朝、髪洗ったろー？」

シトラスとミントの爽やかな香りに鼻をくくんさせながらレイフがクリスタルの耳元で暢気に囁くと、手の下に感じられる彼の腕や肩が慄いたように緊張した。

「離せよ、苦しいじゃないか」

「いいじゃんか。ケチるなよ」

クリスタルが渋い顔をして、しつこく擦り寄ろうとするレイフの体を押し返していると、外出のため身支度を整えたラースがまたキツチンに顔を覗かせた。

「何をやっとするんだ、おまえら？」

少し怯んだ様子を見せる父親に、さすがのレイフもぼつが悪くなつて、慌ててクリスタルの肩から手を離れた。何だか急に恥ずかしくなってきた。悪戯を見咎められた子供のような気分で、所在なげに立ち尽くしてしまう。

「ちょっとふざけて、じゃれてただけだよ」

クリスタルがすかさずフォローを入れると、ラースはふんと鼻を鳴らした。

「仲がいいのは結構だが、そんな大げさすぎるスキンシップは控えめにしろよ。小さな子供じゃないんだし、他人が見たら、あの兄弟は親密すぎて変だと思うぞ」

ラーズが何気なく言った一言が、何故か胸に鋭く突き刺さって、レイフは思わず息を止めた。

（ああ、そっか…父さん、今、オレらのこと、どこか変だと思ったんだ）

ラーズはそれ以上追求することなく出かけていったが、キッチンに取り残された双子の間にはどこことなく気まずい沈黙が漂った。

クリスターはラーズが出て行ったキッチンのドアを眺めながら、じっと考え込んでいる。

（あ、駄目。せっかくクリスターと仲直りできそうなのに、また離れちまいそう）

レイフが心細げな目で兄の頭を見下ろしていると、ふいに、体の脇に垂らしていた彼の手にクリスターが指先で触れた。

「馬鹿、おまえの悪ふざけが過ぎたからだぞ」

レイフを見上げ、大丈夫だよというように微笑むクリスターに、レイフは安堵のあまり少し泣きそうになった。

大丈夫。クリスターはレイフの存在を拒否しているわけではない。ならば、もっと―。

「な、なあ、クリスター、もし今日何も予定がないなら、一緒にどこか出かけないか？」

自分の席に戻ったレイフは、思いつくままにクリスターを誘った。何だか今朝のレイフは、妙に兄が恋しい気分になっている。先程も無性にクリスターに触りたくなったし、今でもまだ離れがたい。

クリスターがレイフと同じように感じているかは分からない。こういう感覚は2人の間で伝わる人が多いのだが、今はそれがなくて、だから、余計に確かめたくなる。

この恋しさは、たぶん不安の裏返しなのだ。

(こういう流れなら、よほどのことがない限りクリスターはオレの誘いを断らないはずなんだけど：)

クリスターの答えを、期待と不安なまぜの気分で、レイフは息を詰めて待ち受けた。しかし――。

「ダニエルと映画を見に行こうって話になっているんだ」

「ダニエルと？」

少し困ったような表情をするクリスターに、レイフは戸惑いながらも、もう一押ししてみた。

「ふうん、それなら、オレも連れて行ってくれよ。映画観るなら、2人でも3人でも一緒だろ」

「別にいいけど。でも、映画の後でちょっと、ダニエルに数学の課

題で教えてほしい所があるって言われてて、見てやらないといけないんだ。おまえ、付き合えるかい？」

別にはっきり来るなど言われたわけではないが、レイフにはピンときた。

（オレに来て欲しくないんだ）

言いような寂しさがこみ上げてきたが、のけ者にするなど食い下がつてクリスターを困らせるのも嫌だったので、レイフはあっさり引き下がった。

「ううん、それなら、いいや。休みの日まで、数学の話なんか聞きたくないし」

「また次の機会に、一緒に行こう」

レイフが落胆したことは分かるのだろう、慰めるように付け足すクリスターに、レイフは健気らしく笑いかけた。

「うん。ダニエルによろしくな」

約束の時間が迫っているのだろう、そのまま席を立ってキッチンから出て行くクリスターを、レイフは名残惜しいような、引き止めたような気分で見送った。

（何だかやっぱり余所余所しいんだよな。別に、あのことに拘ってるわけではない：むしろ頭の中からきれいに排除しちゃって、溜め込んでいた悩みも全て克服したようなすっきりした顔してるけど：どこか不自然というか、そう、オレの知っているクリスターじゃな

い)

レイフは、ふいにいわく言いがたい悪寒を覚えて、身震いした。これまでとは、どこか違うクリスマス。今までのように通じ合うことができなくなった、レイフの知らないクリスマス。

(待てよ、一体、どこが変わったっていうんだろう…？　だって、クリスマスは別にオレを拒否しているわけじゃない。未だに腹に据えかねていることがある様子でも、ほとほと愛想がつきたって感じでもない…オレをちゃんと愛してはいる…オレが言うのも変な話だけど、そのことには自信がある)

それなのに、レイフのより深い本能の部分が、違う違うと騒ぎ立てているのだ。あいつがいなくなる。遠くに行ってしまう。早く、早く何とかしろ！

(さっきもさ、何だかつき物が落ちたように穏やかさを取り戻したクリスマスーを見て、オレは確かにほっとしたけれど…同時にやっぱり違和感や不安も覚えたんだ。俺に向けられてくる、あいつの優しさや気遣いには嘘はなかった…でも、何か肝心なものが欠けている。何だか調子が狂うんだよな、あんなありがちな態度でこられると…まるでさあ、普通に弟を愛して可愛がっている兄貴みたいなさあ…あれ…？)

呟いた途端、レイフの胸に小波がたった。

ごく普通の兄弟のように？

(あ！)

レイフの体よりも、心よりも深いところから、何かが叫んでいる。オレの半分が、切り離されて、行ってしまう。取り戻せ取り戻せ取り戻せー。

（考えすぎなんかじゃない、あいつ、やっぱり…オレから離れていくつもりなんだ）

レイフが慄然として思った、その時、ガレージの方から車のエンジンがかけられる音が聞こえてきた。

レイフは弾かれたようになって立ち上がった。そのまま慌ててキッチンから玄関に向かい、ドアにぶつかると同時に外に飛び出す。

「クリスター…！」

焦燥感に駆られてレイフが叫んだ先に、クリスターの車が家の敷地から道路へと出て行くのが見えた。

レイフはそれに向かって狂おしげに手を伸ばし、一瞬追いかけてようとしかけたが、自分の足でもさすがにもう無理だと悟って、立ち止まる。

「なんで…？ まさか、本気じゃあ、ないよな？」

思わず、問いかけるかのように呟いたみたものの、応えてくれる相手はいない。

クリスターは行ってしまった。

第3章唯一の絶対（12）

クリスターはオレのことをただの可愛い弟として愛そうと決めたらしい。

でも、そんなの、やっぱり違うだろう。

努力ならしてきたはずさ、これまでだって。

それでも、オレ達が『普通の兄弟』であつたためしなんて、これまで一度もなかったんだ。

（ふふっ…双子って、一体どこまで同じにできているのかしらね…？）

甘く掠れた声が耳朶に柔らかく触れ、滑らかな指先が愛しげに胸をなぞる感触に、レイフはまどろみつつ微かに身を震わせる。

（これだけクリスターとそっくりなんですもの。女の抱き方や…感じるどころも、似ているのかしらね？）

この悪戯っぽい声の響きは、何だか懐かしい。この優しい愛撫にも覚えがある。

（アリス…？）

思い至った途端、ああ、夢だなとレイフはやけに冷静に悟った。ふられた女の夢を見るなんて、すっかり忘れたつもりでいたのに、意外とまだ未練が残っていたのだろうか？

目を覚まそうとすればそうできそうだったが、押し付けられた肌の温かさや快感を引き出そうとあれこれ駆使される手管は実際気持ちよくて、レイフはそのままとろとろしながら、夢の女の抱擁に身を任せていた。

そうするうちに、一端浮上しかかったレイフの意識は夢の淵に再

び引きずり込まれていく。

そう言えば、この女とするのはすごくよかったんだ。あの夜の再現にこうして浸っていると、夢だと分かっていても次第に体が熱くなってくる。

レイフの都合のいい願望も入っているのか、彼の裸の体に寄り添うこの相手は、心なしか記憶にあるより積極的に、大胆で、欲しいと思うとおりの刺激をくれる。

レイフの体の芯についた欲望の火は瞬く間に燃え広がり、じりじりと全身を焼いて、彼をわななかせた。

喉を鳴らせ、薄く開いた口から熱い吐息を押し出し、ついに堪えきれなくなったレイフは傍らにいた女を抱き寄せ、体の下に巻き込んだ。

くすくすと夢の女が笑うのに、レイフはあの夜自分が密かに思ったのと同じことを囁きかけた。

（アリス、あんたとするのは最高だよ。でもさ、もし、ここに…あいつと一緒にいてくれたら、もっとずっといいのに―）

自分がつい漏らした言葉に、レイフはぞくりと身震いした。

（それなら、彼も誘ってみましょうよ）

どこか嘲るような声が答えた瞬間、誰かがレイフの手首を掴んだ。女のものではない力強い手の感触に、レイフはぎよっとなって、目を開けた。

（これは夢だ）

呆然となって、レイフは自分に言い聞かせる。

いつの間にか、レイフと抱き合っていたはずのアリスは影も形もなくなっていて、代わりに、彼の手首を捕まえたままゆらりと起き上がったのは―。

（ク、クリスター？）

上ずった声でレイフが叫ぶのに、クリスターは目を細めるようにして笑った。

おまえの考えていることなどお見通しだと言わんばかりに、クリ

スターはレイフの手をゆつくりとシーツの上に押さえ込むと、そのまま彼の上に覆いかぶさってきた。

焦ったレイフはとっさにクリスターの胸に手を突いて押し返すが、どうにも力が出ない。

あろうことか、クリスターもレイフと同じように裸で、既にすさまじく昂ぶっていることが一目で分かるほど、鏡に映したように何もかもレイフにそっくりな体の中心の部分はきつくそり立っている。

それを見ていると、自分でもどうしようもなく興奮してきて、レイフは激しく打ちのめされた。

クリスターばかりではない、彼のものもいつの間にか頭を高々ともたげて、欲しい欲しいとあさましくも先端を濡らしている。

こんなことはあってはならないのに、体が正直に反応してしまう。こいつとつながりたい。一つになりたい。

再び、クリスターがレイフにのしかかってきた。

せわしなく上下するレイフの胸に胸が重なり、空気を求めて喘ぐ口を口が覆い、熱を持って痛いほどに怒張したそこが擦れあう。

打ち寄せてくる快感の波になす術もなく流されそうになったレイフは、溺れる人が手がかりを求めるよう、とっさにクリスターの肩にすがりついた。

何だかもうたまらなくなつて、レイフはクリスターの首に腕を巻きつけ、もつととねだるように自らを押し付けなくなったが、かろうじて残っていた理性が訴える。

（だ、駄目だ）

思わずクリスターを引き寄せかけた、その手で逆に彼の肩を押し返し、レイフは逃げるように身をのけぞらせた。

濡れた音をたてて、互いを貪りあっていた唇が離れたが、それをもたクリスターが執拗に追ってくる。

必死で逃げようとするレイフをクリスターはやすやすと捕まえて、身動きを封じた。

さあ、どうすると笑うクリスターの顔を映し出したレイフの琥珀色の瞳が、追い詰められたように、揺れた。

どうする？ おまえは一体どうしたいんだ？

クリスターの無言の問いかけはレイフをますます混乱させる。

（どうする…どうするって…）

兄にしっかりと組み敷かれたまま、レイフは切迫した声で叫んだ。
「ク、クリスター！」

どすん。

ベッドから転落して床にしたたかに頭をぶつけた衝撃で、レイフは一気に目を覚ました。

（ああ…夢かよ）

しばし転がり落ちたそのままの格好で逆さになった自分の部屋を眺め回して、やっと現実を認識すると、レイフは床から這い上がった。

床に座り込んでじんじんと痛む頭と首筋をさすりながら、ベッドに背中をもたせ掛け、レイフは溜息をついた。

生々しい夢の名残を体はまだ覚えていて、胸の鼓動は速くなったままおさまらず、ひどく汗をかいていた。おまけに―。

レイフは実に情けない気分であらうと自分の下腹部の方に目を投げかける。

確認しなくても分かることだが、まあ、怖いもの見たさという奴だ。

（マジ勃ってら。はは…）

パジャマのズボンの前を押し上げているそれを、レイフは困ったような顔で、しばらく凝視した。

淫夢は去ったというのに、腹の奥を炙られるような感覚はいっか

な消えてくれない。

それどころか、ますますひどくなる。払いのけようとしても、まだあのみだらな夢はレイフを逃そうとはせず、執拗にからみついてくる。

あのありえないほどのリアルさ。まるで本当に体を重ねたかのようになまざまざと思い出せる。

汗に濡れたクリスターの肌の感触、切迫した荒い息遣い、今にも爆発しそうなほど張り詰めた性器が自分のものに押し付けられた時には、背骨を伝わって走り抜けた痺れに全身がひしぐかと思った。

（最悪）

レイフは小刻みに震える手を握りこんだ

（じんじんと痛くて熱くて堪らねえ。もう泣きそう）

情けないやら腹が立つやら、頭を垂れてひとしきり悪態をついた後、ついに観念したレイフはパジャマを下着ごと一気に引き下ろし、溜め込んだ熱を吐き出させるべく、屹立した性器に手を伸ばした。

そうして、しばらく経った後――

レイフはぼうっとした顔でクリスターの部屋の前に立っていた。

ひとまず体は落ち着いたのだが、ベッドに戻って寝なおそうとしても、妙に目が冴えてしまって眠れずに、次第にまた落ち着かなくなってきた。そこで、ふとクリスターの顔を見なくなったのだ。

しかし、さすがに夜中の二時を回っているのは、宵っ張りのクリスターももう起きてはいないようだ。

（何だ、残念。兄貴が起きていたらなって思ったのに）

起きていたら――どうしようと思ったのだろうか。

（さあ。分かんないや。でもさ、とにかくクリスターの顔が見たくて、声が聞きたくて仕方ない。あ、もしかしたら、普段どおりのあいつの顔を見たら、あんなろくでもない夢なんか、やっぱり嘘っぱちだと忘れられそうだからかな。ううん、違うな。ただ、オレは……確かめたいんだ、そう……）

思い出そうとすると、レイフの心臓は縮み上がった。かっとな頬も

熱くなる。

目が覚める直前、『クリスター！』と自分が叫んだのは覚えてい
る。あの後、何と続けようとしたのだろうか。

『やめろ』と言おうとしたのか、それともー。

クリスターは眠っているのにすぐには立ち去りがたくて、レイフ
は目の前で固く閉ざされたドアを凝然と睨みつけていた。

レイフは躊躇いがちにドアノブに手を伸ばした。用心深く見える
クリスターだが、自室のドアに鍵をかける習慣はない。音もさせず
に忍び込んで、熟睡しているクリスターの寝顔を盗み見してやろう
か。

そんな悪戯を思い、レイフはドアノブを掴んだ。

（ただ見るだけ…他には何もしねえから）

言い訳をしながらドアノブをそっと回そうとした、その時、レイ
フの部屋の向こうにある両親の寝室のドアが開いて、ラースがのっ
そりと出てきた。

眠そうにあくびをしながら頭をかいた彼は、クリスターの部屋の
前に立ち尽くしているレイフに怪訝そうな目を向けた。

「うん？ どうした、レイフ、こんな時間に何をしている？」

廊下の照明は暗く落としているので、今ラースにはレイフの表情
をはっきり見ることはできないのは幸いだった。

こちらにまっすぐに近づいてくるラースを認めた途端、レイフは
火がついたように真っ赤になって、動転した声で叫んだ。

「ち、違う、何でもないっ。ト、トイレ…トイレ、ただのトイレー
っ！！」

熟睡している家人を全員叩き起こすような大声で絶叫したかと思
うと、たじろぐ父親を突き飛ばすようにして、レイフは一階にある
バスルームに向かって階段を駆け下りていった。

（ああああっ、何やってんだよ、オレっ！）

その後しばらくトイレに立てこもったレイフは、自分の怪しい行
動を思い出しては、恥ずかしさに一人身悶えしていた。

何事かとラースはさぞかし肝を潰したことだろう。あんな場面に
出てくるなんて、間が悪いことこの上ない。

いや、彼にはむしろ感謝すべきだろうか。おかげで、クリスター
におかしなまねをせずにすんだわけだから――。

（確かめたいなんて言い訳して、クリスターの部屋に忍び込もうな
んて、全くおかしな行動だよな。ああ、マジですごくやばいことを
しかけてたんだ、オレ……）

危ない所だったと冷や汗をかきながら、一方で、レイフはまだ考
えるのをやめられなかった。

夢から覚める直前、レイフはクリスターに何を訴えようとしてい
たのか。

やめろと叫んで彼をとめたかったのか、それとも、こう懇願しよ
うとしたのだろうか。

（なあ、続けてくれよ、オレのクリスター……）

そんな一波乱があった次の日の放課後。陸上部の練習に出たレイ
フは、グラウンドの端のベンチに腰を下ろしてタイムを計る順番待
ちしながら、あくびを噛み殺していた。

（眠い）

夕べは、あれからほとんど眠れなかった。いつもはベッドに入る
なりすぐに眠り込んで、そのまま朝まで起きないレイフなのだが、
さすがに、あんな夢を見てしまった後では健康的に眠ることなど無
理だったか。

「どうしたんだよ、レイフ、珍しくも疲れた顔してるじゃん？」

先にタイムを計測し終えたトムが、息を弾ませながら近づいてき
た。

「んー、ただの寝不足。眠れなかったんだよ、夕べ」

心ここにあらずの様子で応えるレイフの隣にすんと座り込んで、トムは軽く伸びをした。

「なんで？」

レイフは膝の上に軽く頬杖をついて目の前を駆けていく他の陸上部員達を眺めながら、気の抜けた調子で答えた。

「まあ、何ていうか、一種の欲求不満だろうなあ」

「は？」

怪訝な顔をして、トムが振り返る。

「い、いや……」

レイフはとっさに手で口をふさいで、トムの疑わしげな視線をかわすよう、グラウンドの外の方に顔を向けた。

（やばい、やばい……おや……？）

何気なく後ろのフェンスを見やったレイフは、ふと眉を顰めた。

グラウンドのすぐ外側にある道路から仕切るフェンスの向こうに異様に大きな体格の男が立っていたからだ。

193センチあるレイフよりもまだずっと上背はありそうだし、横幅は比較にならないほどに逞しく、隆々と盛り上がった腕や肩の筋肉のつき方を見るともしやステロイドでも使っているのではないかと疑いたくなるほどだ。ふと足を止めて陸上部の練習に見入っていたのだろうか。しかし、レイフが彼の存在に気づいたのを見て取るや、すぐにその場から離れていく様子が何だか気になった。

レイフは手を上げて、首筋の辺りを撫でた。頭よりも早く本能が危険を察知したらしい、皮膚がそそけだっている。

（うちの生徒だよなあ……どこかで見た顔のような気もするけど、誰だったっけ？）

人の顔を覚えることが苦手なレイフが首を捻っていると、隣に坐っているトムが驚いたような声をあげた。

「あ、あいつ……前にフットボール・チームにいたフレイじゃないか？」

「えっ？」

「覚えてないのかよ、一学年上で俺らと同じようにスポーツ推薦で入ってきた奴でさ、ラインやってた。まあ、俺達が入学する前は結構活躍したらしいけれど、二年目からはあんまり練習にも試合にも出なくなってる、俺達と一緒にプレイしたことは少なかったと思うけど」

「あ、そうだったかな。ふうん、どっかで見た覚えはあったんだけど」

トムはレイフの記憶力の悪さにちょっと呆れ顔をした後、顔をそっと近づけて、低い声で囁いた。

「ほら、J・Bが影で糸を引いてたっていう、例の賭博事件がらみで退部になった奴だよ。しばらく姿を見てなかったから、てっきり学校もやめたんだと思ってたけど、まだいやがったんだ」

「J・Bの」

レイフははっと息を吸い込んで、あの生徒が去っていった方角へ鋭い視線を走らせた。

（ああ、そう言えば：フットボール・チームでの印象はあまりないけれど、J・Bの取り巻き連中の中にあいつの姿を見たことはあったな。そうそう、思い出した、あのデカブツ、まるでJ・Bのボディ・ガードみたいにあいつの後ろに控えて、じいっと周りに威嚇するような目を向けてたっけ）

レイフがあの子と直接言葉を交わす機会はなかった。

誰もほとんど声を聞いたことがないほど寡黙な男で、ドラッグを持ち込んだ怪しげなパーティーや女を連れ込んだ乱交といった逸脱行為には加わらず、その点、やりたい放題だったJ・Bの他の手下どもとは一線を画していた。ハニーが受けたような暴行にも確か関わってなかったはずだ。だから、退学処分までには至らなかったのだろう。

ただ彼には、J・Bをほとんど崇拜していたような感があった。警察に追われていたJ・Bを一時匿っていたとも言われている。たぶん他の取り巻き連中の誰よりも、あの悪党に忠実だったのだ。

(J・Bがとっつかまった後、あいつ、どうしてたんだろ。そういや、ほんとに今まで姿を見かけた覚えがない。あれだけの大男だから、いれば目だってすぐに分かりそうなものだし：もしかしたら、ほとぼりが冷めるまで休学でもしてやがったのかな。それなら納得がいくか。実際、オレ、フレイの野郎のことなんかほとんど忘れかけていた)

すると、あの男を見た瞬間に覚えた危険信号のおおもとは、奴の背後にちらつくJ・Bの影だったわけだ。

しかし、それならばそれで、余計に気になってくる。

(何か、嫌あな感じがするよな。そういや、J・Bの姿を見かけたと思ったのもついこの間のボクシングの試合会場でのことだった。あの時は、どうやらオレの見間違いだっただってことで納得したんだけど：今更だけど、すごく気になってきたぞ)

たまたま以前J・Bと関わりのあった人間の姿を見かけただけと言ってしまうば、それまでだ。同じ学校の生徒なのだから、別にさほど不自然ではない。

それを、あの時の錯覚とわざわざ結びつけて考えることはない。しかし！。

(やっぱり、あの時、アイザックに言われただけで素直に納得しないで、自分で探して確かめりゃよかったんだ。それで見つからなきゃ、オレの勘違いだったんだって納得できただろ。だから、今度は、自分の直感に従ってみるよ)

レイフがいきなりすつくと立ち上がるのをトムはいぶかしげに見上げた。

「どうしたんだよ、レイフ？」

「うん。ちよつと急用ができたから、オレ、今日はこれで練習あがるわ。コーチに言つというて」

「えっ？　って、おまえ、まだタイムも計測してないじゃないか。大会は一週間後なんだぜ。少しは気合入れろよな」

「明日は今日の倍がんばるから、見逃せよ。それじゃあな」

まだ何か言いたげなトムに向かって片目を瞑ってみせると、レイフは口うるさいコーチの目を避けて素早くグラウンドを後にした。
（そうだ、クリスターに相談してみよう…オレの嫌な予感を、あいつなら、きつとうまく説明できる。それに、もしかしたら、J・Bが今どうしているか、何か知ってるかもしれない。アイザックによると、オレには秘密にして、あいつはJ・Bのことをよく調べてみたいだからな。オレは、J・Bが退学になって施設にぶちこまれることになって、それで万事解決したって安心しちゃったけど、考えたら、いつかは出て来るんだ。ひょっとしたら、もう戻ってきていて、オレが見たのは、本物のJ・Bだったって可能性もあるんだ）

どうして、その可能性に今まで思い至らなかったのだろうと自分のうかつさに舌打ちをしながら、レイフは足を速めた。

自由になったJ・Bが、いつか再びここに舞い戻って、クリスターに復讐する。あの二人の因縁の深さを考えれば、起こりそうなことだ。

（いや、復讐と言うのは違うかな…途中で終わっちゃったゲームの続きを、J・Bはクリスターとしたがっている…そうやってクリスターともう一度つながりたがっている、そんな気がする。あの二人は似ているんだって、アイザックは言いやがった…オレはそんなこと認めないと思い切り否定したけれど、本当は認めたくなかったんだ。クリスターは自分の身内や仲間には優しく穏やかに接するけれど、敵に対してはひどく酷薄で情け容赦のない一面も持っている。それに、あんな命を粗末にするようなゲームを自分からしかけたりしてさ…だからJ・Bの同類なんだとは言わないけど、クリスターのやったことが、結果として、あの怪物をあいつに固く結び付けちゃったような気がしてならねえ）

レイフはふと自嘲的な笑いに唇を歪めた。

（できれば、J・Bのことなんざ、きれいさっぱり忘れちまいたかったんだけどさ。クリスターには二度と近づけないよう、絶対出て

これない場所に閉じ込めて、安心したかった。ああ、だからオレ、J・Bが出てくる可能性自体、これまで深く考えようとしなかったのかな）

こんな心情を、あのアイザックにあたりにうつかり漏らしたら、それもまた幼稚な独占欲だと糾弾されるだろうか。

（半分は、その通りかもな。だってオレは、やっぱり、あいつにとって唯一の片割れでいたいから：同じ世界をあいっと共有したいから：クリスターが他の誰かの手を取ってオレの知らないどこか遠くへ行っちゃうなんてことになったら、オレは―）

早くクリスターを捕まえようと焦る頭の一方でそんな取りとめのないことを考えながら、クラブハウスに駆け込んでさっさと着替えを済ませると、レイフは再び外に出た。

ボクシング部が使っているジムにいるかと思って最初に訪ねてみたが、生憎そこにクリスターの姿はなかった。ならば生徒会の方かと思って校舎に足を向けたが、それも確信はなかった。

クリスターの居場所を絶対に突き止められる自信など今のレイフにはない。何故なのか理由も分からず、クリスターの心はずっと遠いままだ。

（これで、クリスターはもう学校にはいなくて、何とか科学コンテストの準備のためって大学の研究室に行ったりしたら、どうしようもないわな。ほんと、近頃のオレ達って、すれ違いが多いんだよな）

心の中でぼやきながら、レイフは、音楽室や工作室、幾つかの文科系のクラブが使っている部室がある校舎に足を踏み入れ、生徒会室のある4階へと上がっていった。

吹奏楽部の練習だろう、近くから、あまり上手とはいえないフルートの音が聞こえてくる。

四階のフロアーはがらんとしていて、人気はなく、これは当てが外れたかなとレイフは思ったが、生徒会室を覗くくらいはしてみようと廊下の突き当たりにあるその部屋に向かって歩いていった。

（やっぱり誰もいないって感じだよな）

固く閉ざされたドアの前で立ち止まり、レイフは困ったように頭をかいた。

（こうなったら、家で兄貴が帰ってくるのを待つしかないか……。でも、あいつ、研究室に一端こもったら、そのまま明け方まで帰らないこともあるしな。しゃーない、迷惑がられるかもしれないけど、大学まで押しかけてやろうか）

レイフが心を決めてくるりと踵を返しかけた、その時、生徒会室の奥から微かな物音が聞こえた。

レイフはいぶかしげに振り返った。

（誰かいるのか？）

もしかしたらクリスターがーレイフは慌ててドアに取り付き、大声で呼ばわろうとするが、そこでふと気を変えて、聞き耳を立てて中の様子を窺った。

確かに、ごく低い人の話し声が聞こえる。何を言っているかは分からないが、どうやら兄の声だとは認識できた。

（誰と話してるんだろ？）

レイフはノックをしようと上げかけた手を下ろし、しばし迷うように目の前のドアを凝視した。

そして、ドアノブに手をかけ、なるべく音をさせないよう慎重に回すと、ゆっくりとドアを押し開けた。

どうしてこんなことをしたのか、自分でもよく分からなかったが、一種の勘が働いたのかもしれないかった。

部屋の灯りはついていなかったが、夕方というにはまだ明るすぎる午後の日差しが、庭に面した窓から差し込んでいた。

整然と並んだ椅子にテーブル。ホワイトボードには会議で検討された議題が消されずに残っている。

レイフの視線はそれらをほとんど素通りして、部屋の奥、そこだけカーテンが引かれているせいでやや薄暗くなっている、テーブルに吸い寄せられた。

二つの人影が、そこでひっそりと寄り添いあっていた。

テーブルの端に腰掛けている小柄な少年とその前に立つ背の高い男―彼が低い声で囁くのに、少年はおとなしく頷きながらじっと耳を傾けている。その頬に手をかけた男がふいに身を屈めて、少年の何か言いたげな唇にキスをした。優しくついばむように触れたかと思うと、彼は少年の体をかき抱くようにして、深く唇を重ねた。すると少年の手がおずおずと上げられて、男の広い背中にしがみつく。はっと息を吸い込む音がして、か細い声が切なげに呼びかけるのがレイフの耳に届いた。

「クリスターさん」

レイフは、いきなり重心を失ったかのようによろめき、とっさに捕まろうとしたドアに体をぶち当てた。

瞬間、部屋の空気が凍りつくのが、レイフにも分かった。

レイフの頬がかつと熱くなる。

転瞬、レイフは生徒会室から逃げ出していた。そのまま後ろを振り返りもせずに、階段を駆け下り、校舎の外に飛び出していく。

（何…？ 何だ、今の…？）

頭は今日撃してしまったものを拒否しようとしていたが、網膜にはっきり焼き付いた残像は離れてくれない。

クリスターがダニエルと抱き合って、キスしていた。

（どうして…あの二人、いつの間にそんなことになってたんだよ…嘘だ、信じられねえ）

一気に体中の血が上って、今にも血管が破れそうなくらいに頭がずきずきと痛み、まともにものを考えることもできない。

怒りか悲しみか分からない激しい感情が突き上げてきて喉をぐいぐい押している。叫びだしたくなるのを必死で飲み下して、レイフは早足でひたすら歩き続けた。

体育館の裏手に差し掛かった時、レイフの背中に切迫した呼び声 that 突き刺さった。

「レイフ！」

クリスターだ。レイフを追いかけてきたのだ。

兄の声を聞いた瞬間、レイフは反射的に身を震わせて立ち止まったが、またすぐに歩き出した。後ろを確かめもしなかった。

「レイフ、待てよ！」

駆け寄ってきたクリスターがレイフの肩を掴んだ、その時、レイフの中で何かが弾け飛んだ。

「触るなっ！」

火を吹くように叫んで、レイフはクリスターの手を払いのけざま、彼を除しく睨みつけた。

レイフはきつと凄まじい表情をしていたのだろう、クリスターの顔がさつと青ざめ、頬が引きつった。

獰猛な獣めいた低い唸り声が自分の喉から漏れるのを聞きながら、レイフはともすればクリスターにつかみかかりそうになる衝動を懸命に堪えていた。

クリスターは唇を震わせ、何か言おうとした。おそらくレイフをなだめるための言葉を考えていたのだろうが、やがて、諦めたように首を振った。

「レイフ」

一転、ひどく冷静な態度になって、クリスターは話しかけてきた。「僕がダニエルと何をしようと、僕の自由だろう。どうして、おまえがそこまで腹を立てるんだ？ 大体、僕が今まで女の子と付き合いっていた時は一言も文句など言わなかったくせに」

「何だと？」

レイフは噛み締めた歯の間から押し出すように囁いた。

「クリスターは…ダニエルに手を出す気はないって、言ってたじゃないか…？」

「ああ、そう言った記憶は確かにあるけれど、人の気持ちが変わるものさ。僕が、あの子を可愛いと思って恋人にしたところで不思議じゃないだろ」

「嘘言うな。おまえは、本気でダニエルを愛している訳じゃない」

クリスターの目に一瞬暗く剣呑なものが過ぎった。

「まるで僕の気持ちを全て分かっているかのように言うんだね、レイフ。でも、そんなの、おまえの思い込みだよ」

突き放すように言うクリスターに、レイフは愕然となった。

「おまえが何と言おうと、僕はあの子を大切に思っている。それに、今の僕には必要な人なんだ。彼は僕を分かってくれていて…そう、一緒にいて、ほっとできるから…」

レイフの視線を避けるように横を向いてそんなことを呟くクリスターを、レイフは信じられないような思いで見ていた。

「クリスター…」

クリスターは肩で一つ息をつくとき、レイフから身を引いた。

「僕は、おまえが何をしようが、もう口出ししないことにしたんだ。だから、おまえも僕に構うな」

低く押し殺した声で言い捨てて、クリスターはいきなり踵を返した。レイフを追いかけてここまで来たのに、また去っていくとする。

遠くなっていく兄の後ろ姿、その頑なに閉ざされた背中を、レイフはその場に凍りついたまま見送りかけた。

「あ…」

レイフは恐怖に駆られたように身震いした。

（行ってしまう。切り離されて行ってしまう、オレの半分）

クリスターに拒絶された衝撃のあまり麻痺していた心を切り裂くようにして、激しい痛みがレイフの胸に走った。

「行くな…」

そう自覚するよりも先に、レイフの唇は勝手に動いて、掠れた声で離れていこうとする半身に向かって呼びかけていた。

「行くな…行くな、行くな…クリスター…!」

レイフは突き上げてくる衝動のまま地面を蹴って、遠ざかりつつあったクリスターに向かって突進した。

クリスターが振り返るよりも先に、レイフはぶつかるとして、

彼を背後から抱きすくめた。

クリスターがはっと息を吸い込んだ。

さしものクリスターもとっさにかわすこともできず、羽交い絞めにされた不安定な姿勢のまま、レイフの荒っぽい抱擁に捕らえこまれていた。

「駄目だ、クリスター……」

クリスターの耳元で、ごく低い震える声でレイフは囁きかける。
行かないでくれと懇願しようとしたのか、離れて生きることなど
どうせ不可能なのだということを分からせたかったのか―レイフは
クリスターの体にぴったりと自分の体を沿わせるようにして、じつ
と抱きしめていた。

まるで、そうしていれば、彼と一つに溶け合って、心も体も二人
で分かち合い、お互いの全てを分かりあうことができるかという
かのごとく。

錯覚などとは言いたくない。

服を通して、密着した肌の感触が、その下を流れる血の熱さが
分かる。

とくん、とくん。

クリスターの心臓の鼓動が微弱な電流のようにレイフの体に伝わ
る。同じリズムを刻んでいる。規則正しく。

とくん、とくん……

こんなに近くにあるのに、こんなにも等しくできているのに、ど
うして、一つになっただけなのだろうか。

「クリスター……？」

腕の中で、クリスターが大きく胸を上下させたのに、レイフは彼
の肩口に顔を押し当てていた顔を上げた。

クリスターが何かを探るように狂おしげに頭を巡らせるのを、レ
イフも追いながら、胸のうちに呟いた。

（ああ、どこか……どこかに今、こいつと二人きりになれる場所があ
った……）

急に意識したひどい渴きに苛まれながら、切迫した気分でレイフが視線をさ迷わせると、体育館の裏にある、あまり使われることのない用具置き場が目にとまった。

クリスターの目も同じ所にあてられているのを感じながら、レイフはすすり泣くように囁いた。

「クリスター」

瞬間、レイフの呼びかけによって我に返った、クリスターの体が大きく震えた。

「レイフ…レイフ、離せ…！」

追い詰められたように叫ぶクリスターに、レイフは瞠目した。

「離してくれ、頼むから―」

固く握り締められたクリスターの手が微かに震えている。

「兄さん」

逃がすまいとクリスターの体に回されていたレイフの腕から急速に力が抜けていく。それを荒々しく振りほどいて、クリスターはレイフから身をもぎ離れた。

クリスターがひどく消耗したかのように項垂れ、肩を上下させるのを、レイフは呆然と見守った。

一時確かにつながったと思ったのに、また断ち切られてしまった心を追いたがって、レイフの手が上がる。しかし、それが届く前に、クリスターは歩き出した。

もはや一言も発さず、レイフから逃げるように足早に遠ざかっていくクリスター。

レイフが子供の頃からずっと追いかけてきた、自信と力に溢れたぴんと伸びた背や広い肩は、今はひどく頼りなげで、急に影が薄くなくなってしまったようだ。

ふいに熱いものが頬にこぼれかかるのに、レイフは慌てて目元を押さえた。

（あは…情けねえな、オレ、泣いてやがんの）

ぎゅっと目を瞑って、涙を振り払うように頭を激しく振りたてる

と、レイフはクリスターが去って行った校舎の方角を睨みつけた。
シヨックではあったけれど、クリスターがダニエルを恋人にした
ことそのものが腹立たしいわけでは、たぶんないのだ。クリスター
が、レイフから逃げる口実にするために、他の誰かの手を取ったこ
とが許せないのだ。

（畜生、そうまでしてオレから離れようとするのかよ、クリスター。
いや、そんなこと、できるものか）

おまえがオレなしで（オレがおまえなしで）生きられるものか。
だからー。

（ダニエルと恋愛ごっこをしたけりゃ、すりゃあいー：おまえが、
それで楽になれるって言うならさ。でも、オレは、おまえを必ず取
り戻す：絶対あきらめるもんか：）

ちらつと横目で、先程目に付いた用具置き場を見やる。

もしも、あのまま何も考えずひたすら勢いに任せてなるようにな
ってしまったら、レイフとクリスターはどうなっていたのだろう。

まだおさまらない気持ちの昂ぶりをもてあましながら、レイフは
空を仰いで、鼻をすすった。

（オレの：クリスター：）

結局起こらなかった『もしも』にふと思いを馳せ、レイフは一人、
安堵とも失望とも取れぬ深い吐息を漏らすのだった。

ラース・オルソンが経営する警備会社は、ボストンの中心街から
やや離れた場所にある、オフィスビルの中にある。

インターンを希望して受けた面接でラースに気に入られて即採用
となり、つい数日前から働くようになった彼のデスクの周りには、
古株の社員達三人が集まって、仕事のノウハウを説明していた。

しかし、飲み込みの早い新人に教えることはもうあまりなく、実

際、専ら体力自慢の社員らの苦手なコンピューターを使つてのデスクワークとなると、ほとんど彼に任せてもよいくらいになっていた。だから、それぞれが外の仕事に出て行く前の朝の一時、こうしてコーヒーを片手に集まっているのも、むしろ他愛のないおしゃべりをするためのものようだった。

「：それじゃ、皆さんはもともとオルソンさんのチームメイトとかフットボール関係の知り合いの方々なんですね」

彼が素直な好奇心を育ちのよさそうな整った顔にあらわにして問いかけるのに、自分の子供のような年のこの青年を可愛がっている古株の社員達は機嫌よく応えてやっている。

「まあ、プロとしてそこそこ活躍したのはラースくらいなものだけれどな。俺らはせいぜい二軍どまりだったり、大学リーグでは活躍してもプロとしては通用せずに、仕事を探していた所をラースに拾われたりでさ」

三人の中のリーダー格、ラースの親友でもあるブライアンが言う
と、一応経理部長の肩書きもあるジョエルが頷く。

「ラースもな、事故さえなかったら、すごい名選手になれたらうに
：」

「でも、一度挫折しても、そこから立ち上がってこんな会社を興して成功させるなんて、すごくタフな人ですね」

すると、副社長のヘレナに密かに憧れているらしい独身男のヴァンが補足する。

「ああ、もちろんラースもがんばったんだが、彼の成功には奥さんの助けが大きかったんだろうなあ。ラースの人柄に惹かれて人が集まって、仕事に関してはヘレナさんが辣腕を振るって、ここまで順調に成長してきたんだよ、うちの会社は」

その時、オフィスのドアが開いて、一人のすらりと背の高い女性が颯爽と入ってきた。男達の視線は一斉にそちらに向けられた。

「おはよう、ブライアン、ジョエル、ヴァン」

ややハスキーな落ち着いた声質をした女は、確かに男性の目を釘

付けにしてしまうほど豪華で美しかった。ナチュラルなメイクに長い髪は後ろに簡単にまとめてあるだけだったが、目尻がつりあがった大きなアーモンド形の双眸にくっきりとした眉、綺麗に通った鼻筋にふっくらとした唇、180センチ近い長身もあって、とにかく目立つ。シンプルな黒のパンツ・スーツ姿が返って豊かな胸や長い脚といった抜群のスタイルのよさを強調しているが、きびきびとした物腰と芯に強いものを秘めた知性的な瞳のせいで、余計な女臭さは抑えられている。

「おはようございます、ヘレナさん」

彼女が微笑みかけると、無骨で硬派っぽい男達がさりげなく身なりを正そうとするのがはたから見えておかしい。

紅い髪の女は、男達に囲まれるようにして坐っている若者に気がつき、何か言おうとしたが、その時、奥の社長室から顔を覗かせたラースに呼ばれたので、先にそちらに足を向けた。

「まいったな、そっくりだ…」

一瞬自分を注視した冷たく冴えかえった琥珀色の瞳を思い出して、彼が感じいったように呟くと、隣に立っていたヴァンが賛同を求めるように彼のおさまりの悪い金色の頭をつついた。

「な、迫力の美女だろう？」

「そうですね。見つめられて、ちょっとドキッしました」

「お、おまえさんくらいの子でも、そう思うか」

「でも、随分お若いですよ、あの人…」

「まだ学生だった時にラースと結婚したとは聞いたけれどな。確かに、あんな大きな息子が二人もいるとは、信じられんくらいさ」

「息子…」

彼がひっそりと呟いた、その時、奥の部屋のドアが開いて再びヘレナが姿を現した。今度は、まっすぐにこちらに向かってやってくる。

「ごめんなさい、挨拶が遅れたわね」

「いいえ。はじめまして、ミセス・オルソン」

彼は落ち着いた態度で椅子から立ち上がり、ヘレナをまっすぐに見返した。

「あなたのことは、ラースから聞いているわ。彼はあなたをとても気に入っている様子よ。これから三ヶ月の間よろしくね、ジェイコブ：」

呼びかけて、ヘレナはふと首を傾げた。

「あら、すると、ジェイコブがこのオフィスに二人いることになるわね」

もう一人、ここに同じ名前の社員がいることを思い出してヘレナがもらすのに、新人のジェイコブの方は、心得ているとばかりにこやかに頷きかけた。

「紛らわしいですから、僕の方はいつも友人達が使うニックネームで呼んでくださいって、皆さんにはお話しているんですよ」

「あら、では何と呼べばいいのかしら？」

すると、彼は僅かに首を傾げるようにして柔らかく微笑んだ。整った唇の間から、真っ白な綺麗な歯が覗く。

「どうか僕のことはJ・Bと呼んでください、ミセス・オルソン」

あどけないほどに無邪気な顔の中で、そこだけが不思議なほどに光の差さない深淵めいた昏い藍色の瞳が、瞬きもせず、ヘレナの美しい顔を―それに似た面差しの別の誰かを、じっと見ていた

第4章黒い羊（1）

『怪物と闘う者は、その過程で自分自身が怪物になることがないよう、気をつけねばならない。深遠を覗きこむ時、その深遠もこちらを見つめているのだ』

フリー

ドリヒ・ニーチェ

僕が彼ージェームズ・ブラックと最初に出会ったのは、アーバン校に入学した最初の年、僕達双子がフットボール・チームの有望選手として注目され始めた頃だった。

あれは他校のチームを我が校に招いての練習試合でのことだ。レイフはレギュラーとしてフル出場したが、僕は前回の試合での負傷が尾を引いて、残念ながら出られなかった。

仕方なく観客席に坐って、試合を遠くからただ眺めていた僕に、彼が声をかけてきたのだ。

「ね、今、試合に出ている、あの俊足のランニング・バック、君の弟なんだったね？」

チームへの声援でうるさいほどの観客席の只中であって、その涼しげな声はかき消されることもなく、僕の耳にずっと入ってきた。

斜め後ろの席を振り返ると、明るい金色の髪をした少年が軽く首

を傾げるようにして僕に微笑みかけていた。

天から舞い降りてきたかのような無邪気な笑顔。

「あ、いきなりぶつしけだったかな」

柔らかで心地よい響きの声に、僕は冷たく返した。

「別に」

僕は目の前で展開されている試合の方に再び注意を戻した。この日は、一緒に観戦しようと誘ってくれた友人達の誘いもあえて断ったほど、僕は1人でいたい気分だった。僕がフットボール・チームの一員だと気づいて好奇心を覚えたらしい、こんな見ず知らずの他人の相手などごめんだった。

「君は、今日の試合には出ないの？」

僕の鬱屈とした心情とは程遠いのどかな声がしつこく背中に投げかけられる。グラウンドを縦横無尽に駆け回っている、もう1人の自分の姿を目で追いながら、僕はほとんど投げやりに応えた。

「この間の試合で足首をちょっと傷めたんだ。僕はもう大丈夫々々と思うんだけど、コーチが大事を取って今日は休めと言ったんだから、仕方ないだろう」

「ふうん。それで、そんなつまらなそうな顔で観戦してるんだ」

僕は眉間に皺を寄せ、もう一度後ろを振り返った。突き上げてきた反抗心が僕の重い口をまた開かせた。

「別につまらなくはないよ。弟が出ている」

すると彼は、今まさにボールをキャッチし、押し寄せてくる攻撃を振り切って物凄い勢いで敵の陣営の奥へと突っ込んでいくレイフの方に軽く顎をしゃくりながら、揶揄するような口調で囁いた。

「片割れ君と一緒にあそこにいたかったのによって顔をしているよ」

およそ悪意などとは縁遠そうな無邪気な顔で言う彼を、僕は用心深く見据えた。

どこの誰とも知れない他人に簡単に気持ちを見透かされたことは、僕にとっては軽いショックだったが、おかげで胸に垂れ込めていた憂鬱さが少し紛れた。

そう、この頃の僕は鬱屈として、触れれば切れそうなほど、無性に苛立っていた。

志望していた高校にレイフと一緒に入学し、成績はそれまでの所トップ、フットボール・チームにもすぐにレギュラー入りできた。一見して順風満帆な生活を送っていた僕だが、内心は決して穏やかでも満ち足りてもいなかった。

大人びた顔をしていても、まだ15才の僕は、本当に欲しいもの―弟を諦める境地には到底達していなかった。レイフから離れて自立の道を探すべきだと自分に言い聞かせながら、同時にまだ弟と一緒に進む道も模索していた。

フットボールは、そのための重要な手がかりだったのだ。

実戦における僕らの力の差はほとんどないとそれまで思われてきたのだが、実はそうではないということを、この年、レイフは入学直後に受けたフットボール・チームのトライアウトで証明した。そのことで、僕は密かな焦りを覚えていた。いつもレイフの一步前を当然のように歩いてきた僕だったのに、ことフットボールに関しては弟に取り残されてしまうかもしれない。

弟の手前、平気な顔をしていたが、こんな怪我などして、指をくわえて試合を眺めているだけの僕は、内心歯噛みする思いだったのだ。

こんな所で、おまえは一体何をしている？ もっともっと努力して、自分を磨き、強くならなければ、レイフとの差はますます開くばかりだ。立ち止ままっている暇などないはずなのに、弟のもののほど頑強にはできていないらしいこの体は、容易に僕を裏切る。

「自分がプレイヤーになってこそゲームは面白い。それをただ見ているだけでは物足りないし、つまらないよね？」

生暖かい午後の日差しの中、じっと観戦していることに次第に飽きてきたのか、あくびを噛み殺しながら茫洋と呟く彼に、僕は黙り込むしかなかった。

「ああ、その通りだよ」

ささくれた気分で、ついに認めた。

周囲であがったわあっという歓声に押されるように僕はグラウンドを見下ろした。僕らのチームがタッチダウンを決めて観客席にい

た生徒達は盛り上がっていたが、僕の気持ちは逆に冷めていった。

グラウンドを仲間達と共に生き生きと駆け回る弟も、今は遠い。確かに、死ぬほど退屈だ。

レイフと一緒にあって無我夢中にプレイしている時はこの世にフットボールほど楽しいものはないと感じられるのに、いざ、その高揚から自分だけ切り離されてしまうと、急に魅力を失って見え、フットボールに対する自分の情熱自体に疑問を覚えずにはいられなくなる。

純粋にフットボールを愛しているレイフとは、僕は根本的に違う。そもそも、レイフぬきにして、僕がただ純粋に愛し、夢中になれるものなどこの世にあるのだろうか。もしかしたら、レイフが傍にいないければ、僕は何を見ても何をしても感動せず、喜びも満足も見出せず、生きることには飽き飽きしてしまうのではないだろうか。

弟と一緒に漂っていた仄暗く温かい羊水の記憶から出て行こうと決めた、13才のあの時からずっと重ねてきた努力を全て否定しかねない考えに、僕が思わず身震いした、その時―後ろから伸びてきた手が僕の肩にさり気なく置かれた。

「気持ちには分かるよ」

分かるはずなどないものを、あたかも僕の胸に澱のようにたまっている憤懣を掬い上げるかのごとく、優しい声が僕の耳元で響いた。

「僕もずっと…このつまらない世界に飽き飽きしていたから」

この上もなく穏やかな、完璧な調和を感じさせる声の中に一瞬混

じった不協和音を感じ取って、僕はうなじの辺りがちりちりするのを感じた。

「近頃君ら双子の噂をよく聞くものだから、どんな子達なんだろうって、気になっていたんだ。天才だとか怪物だとか、期待と不安、賞賛と反発の入り混じった視線をその年で早くも集めている。今の所、あの弟君の方がスポーツ選手としては注目株のようだね。でも、焦ることはないよ。君の中には、他の平凡な人間達の中にはない凄まじい火が滾っている。無理も不可能も覆して、来年の今頃には君がフットボール・チームのエースになっていると思うよ、クリスタ・オルソン。君のような子がこの学校に入学してくれてよかった。これからしばらくは、フットボールその他、君の活躍を眺めていれば、僕も退屈しないで済みそうだ」

僕が彼を振り返ったのはこれで三度目だったが、今初めて見るかのような気持ちだった。

「そう言う君は、一体誰なんだ？」

やっと僕が自分の名を尋ねたのが心底嬉しいというように彼が唇をほころばすと、綺麗に整った真っ白な歯が覗いた。

照れくさそうに前髪をいらいながら、彼は十年来の親友にでもするような親愛の情のこもった口調で告げた。

「僕は、10年生のジェームズ・ブラック。ありふれた名前だけど、できれば覚えていて欲しいな。何となく、君とは仲良くなれそうな気がするんだ」

僕は警戒心を張り巡らせながら、ジェームズのあどけないほどに

明るい表情の裏に隠された真意を読み取ろうと試みた。

ジェームズは、偶然を装って僕に声をかけてきたが、それは違う。最初から僕に狙いを定めて近づいたのだ。僕は気がつかなかったが、どこかで僕を見かけ、少しは注意して観察したことがなければ、あたかも見て取ったかのように僕の心理を分析し、あんなふうに自信ありげに未来の予言めいたことを言いはしないだろう。それとも、ただのはったりだろうか。だが、それならば、何のため？ 少なくとも僕の気を引くことには成功したようだが、そうまでして何故僕に関わろうとする？

人畜無害な外見をしたジェームズ。いかにも育ちのよさそうな、おっとりとした品のよい物腰、柔らかな口調。親しげな態度を取っても礼儀正しさは崩さず、高い知性を感じさせる涼しげな目は笑うと少し目じりが下がるために見る人に親しみを覚えさせるはずだ。

それなのに、何かがとても不自然で、彼とじっと見詰め合っているだけで、僕の中で発せられている警告音は次第に高まっていく。

ジェームズは、他の人間とは何かが根本的に異なっている。本能的に反発せずにはいられない危険が、彼の中には潜んでいるような気がした。

僕がいつまでも頑なさを崩さずに押し黙っていたからか、ジェームズの顔がふっと曇った。

「ごめんね、いきなり見知らぬ人間から馴れ馴れしく声をかけられて、不愉快な思いをさせてしまったのかな」

すまなそうにわびると、ジェームズはおもむろに席から立ち上が

った。

「たぶん君は、今日は誰とも話したくない気分でいたのにね」

ジェームズは握手を求めるように手を差し出したが、僕がそれを取ろうとはしなかったので残念そうに顔をしかめた。

「それじゃ、また近いうちに：今度は、君の機嫌がいい時を見計らって声をかけてみるよ。それなら、君も少しは僕に心を開いて、ちゃんと話してくれるかな」

まだ試合はやっと中盤に差し掛かった頃だったが、ジェームズはそちらにはもともとあまり関心がなかったのか、何の心残りもなさげにさっと後ろを向いて、そのまま立ち去っていった。

彼が遠のいていくにつれ、僕の中で鳴り響いていた警告音は次第に収まっていった。

ジェームズの金色の頭が人波の向こうに見えなくなった頃、やっと僕は、ずっと拭いきれなかった違和感の正体に思い至った。

ジェームズの瞳だ。態度や口調ではちゃんと表されていた感情の起伏が、そこには全く反映されていなかった。

ほとんど瞬きもせずに僕にずっとあてられていた暗い藍色の瞳に、何だか底のない井戸を覗き込んでいるような不安をかきたてられていたのだ。それは、彼の明るい髪の色や温和な表情や物腰とは全く異なった印象を放っていた。

全ての光を飲み込む暗黒―それが、僕がこの最初の出会いから覚

えたジェームズの心証だった。ただの一会でそこまで他人を判断するのは禁物だ、誰かに話せば僕の考えすぎだと笑い飛ばされそうだが、第一印象というものは案外正鵠を射ていることが多いのだ。

さて、ともかく、こうして僕達は出会った。

僕にとっては全く喜ばしい巡り合わせではなかったが、ジェームズは、それを長い間待ち望んでいたのかもしれない。

つまらない世界に飽き飽きしていたのだと共感を求めるように囁いた彼は、望むことすら許されない想いに胸を焼き、自分を抑えつけないがら過ごす日々には鬱屈としていた僕の中に、果たして何を見つけたのか――あまり考えたくもないことだ。

その最初の邂逅から、僕はジェームズの姿が近くに見えないかいつも探すようになった。進んで彼と近づきになりたいわけではなかったが、あんなふうに思わせぶりの接触をされては意識せずにいるのも無理な話だった。それに、得体の知れないジェームズという少年の正体を突き止めたという好奇心も働いていたのだろう。

ジェームズは、僕の予想に反して、すぐにまた自分から僕に近づいてくることはなかったが、大勢の生徒達で込み合うカフェテリアや僕がよく利用する図書館で、彼の姿を見かけることなら時々あった。向こうの方でも僕に気がついて、何度か挨拶代わりの短い言葉を交わしたこともあった。

そうしながら、僕は周りの友人や知り合いにさり気なく、ジェームズについて尋ねまわった。思いの他ジェームズを知っている人間は多く、また好意的な見方をしている者がほとんどだった。

それらの意見をまとめると、ジェームズ・ブラックは決して自分から目立つ行動をして他人の注目を集めようとするタイプではなかったが、自然と周りに人が集まり、気づけばその中心にいるような、磁力めいた不思議な魅力がある人物のようだった。

穏やかで優しい人柄だと口をそろえて言う友人達には、僕が感じ取ったような違和感をジェームズに覚えている節は全くと言っていいほどなかった。そう感じたのは、どうやら僕だけのようなのだ。やはり僕の勘違いかと思い始めた矢先、僕は、そのジェームズと同じクラスを受けることになった。

僕が所属している英才クラスでは、上の学年とも合同でクラスが持たれることがある。一学年上の英才クラスにいたジェームズとは、ディベートのクラスで一緒になった。

アーバン高校は名門校で、その中でも選りすぐりの生徒を集めた英才クラスの連中は、そこにいる僕が言うのもなんだが、エリート意識が強い。自分は優秀だという自負もプライドも持っている。英才クラスでは、そんな秀才達が、個々の能力を一層伸ばし、それぞれが目指す分野で将来指導者的な立場に立てるよう、実践的な訓練を含めた授業をする。生徒の希望や自主性に重きが置かれているため、特に定められた授業計画はほとんどなく、そのディベートのクラスでも教師はオブザーバー役でしかなかった。

9年生と10年生が一緒になった、そのクラスは全部で10人。ジェームズの他に、後にレイフや僕自身に深く絡んでくるハニー・ヘンダーソンもいたが、それはまた別の話だ。

僕にとって、そのクラスはジェームズを詳しく観察するためのいい機会になった。

自意識の高い生徒ばかりが集まったクラスの中であって、リーダー・シップを発揮するには並みの器量では難しい。それでも、新しいクラスが落ち着く頃には、ジェームズを中心とした人の輪ができあがっていた。押し出しが強いわけでは全くないのに、ジェームズが口を開くと、それまで自分の主張に夢中になっていた者もなぜかおとなしく黙って、素直に彼の言葉に耳を傾け、最後には従った。人身掌握術に長けた政治家やカリスマ的な宗教指導者が支持者や信者に対して発揮する魔力のようなものを、僕はジェームズがクラスをまとめあげる様子を見ながら、ふと思い出していたものだ。

ジェームズが、能力は高くともまだ十代半ばの揺れやすい心を抱えた少年少女達の中にあって一目置かれたのは、おそらく彼がその年齢では考えられないほど全てにおいて超越して見えたからだろう。

少なくとも、彼ほど物に動じず、他人にかき乱されることもなく、いつでも、どんな状況にあっても、自らを確固として保ち続けることとの人間は、僕も見ることがなかった。クラスメート達が、そんな彼に素直に尊敬の念を覚え魅せられたのも、ある程度ならば、やむを得なかったと言えるだろう。

ジェームズは、ディベートにおいての進行役もつとめていたが、誰かが自分の意見を無理に通そうとごり押ししても、やんわりとした態度で退け続け、決して折れなかった。一方で人の話をよく聞き、それに理解や共感を示すことも忘れない彼は、どんな反応をすれば人が自分に心を開くのか熟知しているようだった。経験を積んだ優秀なカウンセラーもかくやという程にだ。

「ジェームズといると不思議なことに、他の人には黙っていた悩みでもつい打ち明けてしまうの。彼なら分かってくれると思うのかし

ら、心を覆っていた殻を外してもいいような気になるのね」

そう語ったのは、当時はまだ情緒不安定でもなんでもなかったハニーだが、僕はその言葉に共感できなかった。

僕は、ジェームズとの最初の出会いで抱いた警戒心を忘れてはいなかった。あれ以来、ジェームズが僕に直接怪しげなことを言ったりしたりしたことはなかったが、彼に対する疑念を払拭するだけの材料もなかった。

何よりも、いつの間にかクラスにいる僕以外の者全てがジェームズを無条件に信頼するようになっていたのが、妙に気持ち悪かったのだ。

実際、僕の目の前で、クラスの様子は回を重ねるごとにどんどんおかしくなっていくた。

たとえば、クラスが始まったばかりの頃は、やたらと場を仕切りがり、討論が高じて他のクラスメートと言い争いになることも多かったやんちゃな生徒もいつの間にかしつけの行き届いた子犬のようにおとなしくなって、ジェームズの言うことに嬉々として従っていたというような具合にだ。彼だけでなく、他の生徒達も似たようなものだった。皆一様にジェームズに心酔し、彼は正しい、とにかく彼の言うことに従えば間違いのないのだと思い込んでいた。

クラス全体がジェームズの都合のいいように変わっていったが、誰もそれに気がついていなかった。オブザーバーの教師でさえも、クラスから見る見るうちに活気がなくなっていく現実が分かっておらず、あまつさえ実にまとまりのいいクラスだと皆を誉める始末だ。

未来の指導者になるべく教育を受けている若者達が、自分の意思をなくし、他人に唯々諾々と従っている現状が正しいことか？

もしかしたら、ジェームズは一種のマインドコントロールを皆に仕掛けていたのかもしれないが、こんな短期間で、別に特殊な状況下にあるわけでもなく、知的水準も高い生徒達が、かくも簡単に操られてしまうものか、僕にも確信は持てなかった。

もう1つの疑問は、そもそも他人を自分の思い通りに動かせる精神状態に持っていく、ジェームズの真意は何なのかということだった。

いまやただの馬鹿のようになってしまったクラスメートを案じるほど親切でも彼らに関心があったわけでもない僕は、取りあえずジェームズの好きにさせることにした。薄情なようだが、彼の目的を突き止めることの方が先決だった。

クラスメート達とは距離を置いて付き合っていた僕は、クラスの中ではういていた。おかげで数人の上級生から非協力的だと非難されたり嫌味を言われたりしたが、だからと言って僕に正面から喧嘩を吹っかけるほど度胸のある奴もなく、僕は自由な一匹狼の状況を有効活用させてもらった。時々、ジェームズならば彼らを集団で僕に敵対させることができるのではないかと不安にかられたが、それが現実になることはなかった。彼の力でもそこまで人を操ることできなかったのだろうか。それとも、あえてしなかったのか。

僕がジェームズの術中に引っかからなかったのは、別に僕の力によるのではない。ジェームズが僕にだけは分かるような秘密のメッセージを送ってきたからだ。最初の出会いからして、彼はあえて不審な言動を取り、僕の関心を自分に引き付けた。

そんなジェームズの行動を観察するうちに、僕にもやがて彼のやりたいことが分かってきた。ジェームズは僕を、彼の仕組んだ一種のゲームのようなものに誘っていたのだ。それがどんな類のものなのか確かめたい気持ちもあったが、彼の誘いに乗るなという直感の方が強く働いた。だから、彼が僕の目の前で、自分の手の内をあえて見せるような形でクラスを支配していても、それを黙認し続けたのだ。

だが、ジェームズの挑発を受け流すのは、時として難しかった。

例えばある日、彼はクラスでこんな提案をした。

「今日のディベートのテーマは死刑制度について。人が人を裁き殺すことが許されるのか、皆で討論しないか」

ジェームズが明るい春の日差しのような眼差しを皆に投げかけながら言うと、彼の坐る椅子の周りを取り囲んでいたクラスメート達は、さながら神の声を聞いたかのように迷わず賛同した。

この頃になると、クラスは僕にとって退屈なばかりではなく、そこで時間を過ごすこと自体が耐え難いものになっていた。皆仲がよく、満足で幸せそうな顔をしていたが、討論自体はさして盛り上がりえず、まとめ役のジェームズが導くままに先の見える形ばかりの話し合いをするだけだ。

今にも腐り落ちそうな甘ったるく怠惰な空気がクラス中に蔓延していた。そこに浸っていると自分の感覚まで次第に鈍磨していきそうで、僕をぞっとさせた。

「クリスター、君はどう思う？」

まるでクラスの中で孤立しがちな僕を気遣うかのように、ジェームズが話を振ってきた。すると、皆の視線が一斉に僕に集まった。僕があからさまに反対しようものなら、それを寄ってたかつて封じ込めそうな気配だ。

僕がすぐには応えず、担当の教師の方をちらりと見やると、信じられないことに、彼は窓の傍の椅子に坐ってうたた寝をしていた。このクラスの受け持ちになったばかりの頃は、澁刺として仕事熱心な人だったのだが、こちらも見事に変わっていた。

腐ったリンゴは全てを駄目にすると言うが、ジェームズがいたために、このクラスはどうしようもない所まで腐敗した。

瞬間噴出しそうになった感情を抑えかね、僕がジェームズを睨み付けると、彼の深沈とした昏い瞳の表面に仄かな火が揺れた。

「別に構わないよ」

気のない声で応える僕に、やる気のない奴は出て行ってもいいんだぞと誰かが非難がましい声を投げつけた。実際、僕の胸中は煮えくり返っていたのだが。

僕に何をさせたいのか知らないが、一度だけジェームズの誘いに乗ってやろう、こいつと勝負してやろうとその瞬間思った。

ジェームズは、僕らを二組に分けた。テーマは死刑制度の是非について。一方は擁護派に他方は反対派の立場に立って、相手に自分の主張を納得させるべくとことん議論を戦わせる。ジェームズは反

対派のグループに僕は擁護派のグループに入った。

そして、僕達は初めて真っ向から対決した。

ジェームズの議論の進め方は、それまでじっくり観察していたので把握できていた。初めから筋書きの決まっている茶番劇に合わせるのが嫌で、あまり積極的に討論に参加したことなかった僕だが、今度ばかりは彼の思い通りに話を進めさせるものと本気を出した。

それまでは、僕はどちらかと言うと寡黙なイメージで見られていたのだろう。いきなり人が変わったように積極的に討論に参加し、相手グループの意見に鋭く反論しはじめる僕に、クラスメートは呆気にとられたようだが、僕は頓着しなかった。ジェームズに牙を抜かれて飼いならされた連中など、仲間としても初めから当てにしていなかったし、また敵に値するとも思わなかった。

僕の攻略すべき敵はただ1人、ジェームズだけだったのだ。

ジェームズと僕を中心に、議論は白熱した。生半可な攻撃では論破できないような主張を組み立てて激しく論戦を演じる僕らに触発されたのか、他の連中もなかなか熱心に主張を始め、だらしくも眠り込んでいた教師は何事かと目を覚ました。

たっぷり40分間あったクラスの間、僕はほとんどジェームズしか見ていなかった。神経を集中させて彼の言葉を聞き、その理論を素早く読み解いてはすぐに反論にかかる。そうしながら相手の次の一手を予想し、頭の中で更に次の戦術を立てる。その繰り返しだ。ジェームズも僕の思考を読んで先手を打とうとしているのが分かるだけに、一層緊張感があった。

何だか、僕が中学時代に熱中したチェスの大会での張り詰めた空気を髣髴とさせるものがあつた。フルスピードで思考する頭の中は沸騰し、全ての感覚が切れそうなほど鋭く研ぎ澄まされていく。

いつの間にか、僕とジェームズの討論は、初めに与えられた死刑制度の是非というテーマからは次第に外れ、人が人を殺す行為そのものの是非にとすり替わっていった。自然と横道に反れていったかのようなだが、僕にはジェームズが自分のやりたいテーマへと僕を誘導していったのが分かった。それでも、僕は流れにあえて逆らおうとはしなかった。この際、ジェームズの真意を突き止めるいい機会だと思つたのだ。

宗教的なタブーの話から果てはハンムラビ法典の時代の法体制まで飛んでしまった僕達2人の議論に入れるものはそのうちいなくなり、皆、僕らを遠巻きにして不安そうに決着が着くのを見守つていた。

だが、僕にとって、もはや討論の決着などさして重要ではなくなつていた。与えられた時間内では、到底僕とジェームズの論戦は終わりそうもなかったのだ。ならば討論の最中に相手がぼろりと漏らした本音が聞かれればいい。

感情的になつた人間は本性をさらけ出しやすい。ジェームズにもそれを期待したのだが、その点について、僕の当ては外れた。

僕は、ジェームズの気持ちを揺さぶろうと相当プレッシャーをかけたつもりだったのだが、彼は、これが自己抑制の賜物だとしたら感心するしかないほどの穏やかな態度を終始保ち続け、感情の揺れなどほとんど示さなかつたのだ。

僕が口先だけでいかにジェームズを挑発し追い詰めようとしても、彼の心の深淵には届かないと悟った時、どうやら、この勝負に負けたのは僕の方だという苦い事実を飲み込むしかなかった。

やがて、ジェームズとの果てしない議論は、クラスの終了のべルと共に打ち切られたが、僕はそれで救われたような気がした。

ジェームズの誘いになど乗るのではなかった。用心していたのに、ついつい相手の思惑通りに動いてしまったと腹立たしい思いでクラスルームを出た僕の後を、そのジェームズが追いかけてきた。

「ありがとう、クリスター」

ジェームズは素早く僕に追いついて、廊下を歩いていく他の生徒の邪魔にならないよう僕を壁の方に引っ張っていくと、はにかむような笑顔で礼など言った。

「何が？」

気持ちを抑えようとしても、僕の口から出る声は尖った。

「その：すごく面白かったんだ、君と2人で討論していて：何と言うか、君は本当にすごかった。ぼんやりしていると負けるなとさすがの僕も緊張したくらいさ。それに、僕を本気で打ち負かしてやろうとする君の強い感情がビリビリと胸にリアルに伝わってきて：人と会話するのをこんなに心地いいと思ったのは、初めてだったよ。他の子達には悪いけれど、正直言って、彼らと話すのは物足りなくて退屈だったから」

誰のせいだと思っているんだとジェームズの言いぐさに半ば呆れ半ば怒りを覚えた僕は、まだ何か言いたげな彼を振り切って、その場を立ち去ろうとした。

「待ってくれ、クリスタ」

僕の腕をジェームズが掴んだ。逃がすまいというように力のこもった指が食い込んで、僕は痛さに顔をしかめた。

「ね、せっかくだから、さっきの話の続きをもう少ししないか？ カフェテリアに行こうよ、何かおごるから」

「どうして、僕がそこまで君に付き合わなきゃならないんだ！」

さすがにかつとなった僕はジェームズの手を振りほどきさま怒鳴りつけた。

「君だって、僕に負けっぱなしじゃ、気持ちがおさまらないだろう？」

罪のない笑顔で言われた途端、僕の胸でくすぶっていた火が燃え上がった。

「あんな討論くらいで、勝つも負けるもないだろう。僕も君も別に本当の死刑反対派でも擁護派でもない、ただその立場を演じて、もっともらしい主張を戦わせていただけだ。人を殺していい論理、殺してはならない論理、そんなもの、三十分も時間があれば、それぞれ十通りでも二十通りでも考え出してやる。そんな…たかがゲームに何の重要性があると言うんだ」

「僕が氣遣うのは、僕に負けたと思い込んで傷ついた君のプライドだよ」

僕の顔色が変わったのを見て、ジェームズは少し困ったような顔をしたが、そのあらゆる光を飲み込む深淵めいた瞳には、やはり何の感情も浮かんでいなかった。

それを間近で覗き込んだ瞬間、熱くなった僕の頭の芯が一気に冷えた。冷静になれ。これ以上挑発に乗ってはならない。

「クリスター、そんなに嫌なら別にさっきの討論の続きをなんて言わないけど、取りあえず、場所を変えないか。ここで、これ以上陰悪な会話を続けたら、僕達が喧嘩をしていると思われそうだよ」

僕が大声を上げジェームズを睨みつけている様は確かに目立ったのだろう、通り過ぎる生徒達がちらちらと不審そうな視線を向けてくるのに、僕は仕方なく、ジェームズの提案に従った。

僕とジェームズは校舎を出ると、カフェテリアの方へ、中庭を通って歩き始めた。ジェームズの知り合いらしい学生達が擦れ違いざま声をかけてくるのへ、彼はにこやかに応えていた。その様子だけを眺めていると、この人当たりのいい少年が、どうして僕達のクラスをあんなふう to 悪辣に弄ぶのか、疑問に思わずにはいられなかった。

「どうしてなんだ？」

僕が押し殺した声で尋ねると、ジェームズは不思議そうに振り返った。

「なぜ、あんな悪趣味なまねをするんだ？ 君が皆の心を支配してふぬけのようにしてしまったおかげでまともな話し合いにもなりやしない、退屈極まりないクラスになってしまった。一体、何が面白いのか、僕には理解できないよ」

こんな直截的な追求をしても、どうせ軽くかわされてしまうだけだろうと思ったが、ジェームズは意外な反応をした。

「理解できないだって？」

いきなり僕の前に回りこんでじつと顔を覗き込んでくるジェームズに、僕は思わず息を止めた。

「君に分からないはずはないと思うけれどね、クリスター、とぼけるのはよせよ。君は、僕がちょっと誘導しただけで、あっさり自分で考えることを放棄して羊のようにおとなしく飼いならされてしまった、あの馬鹿達とは違うだろう？」

温和な表情はそのままに、とてもクラスの皆には聞かせられないような蔑みのこもった口調で言う彼を、僕は呆気にとられて見返した。

「君は僕を警戒して、一度もちゃんと話をさせてくれなかったけれど、口に出さなくとも僕の意図は君には伝わるようヒントはあげてきたじゃないか」

僕は悪寒に身震いしそうになりながら威嚇するようにジェームズを睨み付けたが、やがて、躊躇いがちに口を開いた。

「君は、あのクラスを使って、一種のゲームに僕を誘っていた…ク

ラスの人間を駒に見立てた、チェスのような戦術的頭脳戦が楽しめるゲームだ：あつという間に彼らを自分の都合のいいように動かせる手駒にしてしまう君を見て、孤立させられた上に全員から攻撃されるのはまずいかなと僕が不安を覚えたのは確かだよ。だけど、君のやり方に倣って、彼らのうちの何人かを僕の味方につけて、それでクラスを二分してしまったら、君の思う壺だと危惧した。僕は君の誘いに乗って、他の人間を巻き込むような：そんな悪趣味なゲームなどしたくない。大体、現実において人を思い通りに操るゲームなんか成立するものか。君が思い描いているのは、やみくもに秩序を混乱させるだけの破壊行為にすぎないんだ」

ジェームズの行動からある程度立てていた推測を僕が述べると、彼は感心したような顔で頷いて、小さく拍手をした。

「ほら、やっぱり分かっていたじゃないか。クリスター、君が僕の見込んだ通りの人間でいてくれて嬉しいよ。でも、まだ君は嘘をついているね」

「嘘？」

「ゲーム理論を現実そのまま当てはめることができないのは、人間が必ずしも常に自らの利益のために合理的に動くとは限らないからだよね。だから、常に人間の心理を分析しながら動くことが重要な訳で：その辺り、チェスのもと全米チャンピオンの君なら、よく分かってるんじゃないのかな？」

どうやら冗談ではなく本気でジェームズが人間を使ったゲームをしたがっているのだと知って、今更ながら僕は愕然となっていた。

「チェスの場合は対戦相手の癖や心理を分析しながら、次の一手を

考えていくわけだけれど…もしもゲームの駒自体が一つ一つ意思や心を持っていて、その心理も分析しながらゲームを進めなければならぬとしたら、ボードゲームとは比べ物にならないほど、より高度で複雑なゲームができそうじゃないか。といっても、まだイメージだけで、僕にも、どんなルールにしようとか具体的には決まっていないだけだ。だってね、一人遊びならこれまでもしてきたけれど、僕と互角に対戦できそうなプレイヤーを見つけたのは、初めてだから」

「とても正気だとは思えない」

僕はうめくように呟いていた。そうか、ジェームズは、一人遊びならば、これまでもしてきた―おそらく、それは、彼が、いかにして他人の行動を支配し操れるか、時間をかけて研究し、実践してきたということなのだろう。複雑な人の心を思い通りにできるとは到底信じられないが、ジェームズはそれに近いことを僕らのクラスで証明してみせた。僕の関心を引くためだけに。

「ねえ、君だって、本当は興味があるだろう？ そんないい子の顔をしていないで、正直になれよ。それに人間を駒として使ったゲームが現実存在しない訳じゃない、戦争なんか、その典型だよ。だから、それをネタにしたゲームが数多く作られているわけで―」

強烈な嫌悪と反発に肌が粟立つのを覚え、ジェームズから少しでも離れたいとばかりに僕は後ずさりした。

「ジェームズ、君が何をしたいのか、僕には理解できないし、分かるとも思わない。クラスをかき回したいなら、勝手にすればいい。僕には関係のないことだ」

「まだ、そんなたてまえを言うんだ。自分に正直に生きないと疲れるだけだよ、クリスタ。それとも、本当に：気づいていないのかな？」

ジェームズは唇に浮かべた柔らかな笑みはそのままに、僕に当てられた目をすっと細めた。そうすると、優しい顔立ちが、何やら飽食した悪魔めいた禍々しい印象に変じた。

「さっき、僕と論戦を繰り広げながら、僕の心理を読んで、弱みを掴んでやろう、僕を打ち負かしてやろうとしていた君は、とても楽しそうだったよ。あの時君が僕に向けてきた目――君が自分で見られなかったことが残念だね。あれは、獲物を狙う獣の目だった。闘争本能に燃え上がって、そのくせひどく冷酷で容赦のない。僕の考えたゲームは、きっと君の気に入るはずさ。チェスやフットボールよりずっとはまることをうけあうよ。だって、僕達の思考形態はともよく似ているんだからね。騙されたと思って、僕の誘いに乗れば、君にも僕の言うことが正しかったと分かるだろう。退屈そうに自分が出られなかった試合を観戦していた君は本当に可哀想だった：だが、僕の手を取れば、つまらない日常はたちまち生き生きと、充実したものに変わるだろう。君にとって、悪い話じゃないはずだ」

それは違う。僕は反論しようとして、黙り込んだ。

僕が高校生活に満足していなかったことは確かだ。本当に欲しいものを諦めるために、少しでも興味の持てそうなものには手当たり次第に挑戦して、結局長続きしないでやめてしまう。人間関係でも似たようなものだった。思春期の只中だったのだろう、生きる理由が分からないと自分の殻に閉じこもったまま思いつめ、それを紛らわせるための刺激を求めていた。

だが、その空虚を、ジェームズが提供しようというような刺激で満たそうとは思わない。僕は、そこまで人間失格者ではない。

「僕は、君とは違う」

僕は用心深く目を細め、ジェームズの一見温和で人好きのする笑顔の裏に隠されたもう一つの貌を睨み付けた。

「ただの退屈しのぎのために、他人を操ったり弄んだりしない」

ジェームズは白々とした目で僕を見返した。

「何だ、残念だな。君とは気があいそうな気がしたんだけど…」

悲しそうに顔をしかめるジェームズは悪意の欠片もなさげに見えたが、それだけに一層怪物じみて思われ、続いてその唇から出た言葉は僕をぞっとさせた。

「それなら、君がその気になるような、別の手を考えてみるよ。近いうちに、また改めて君を誘いにくるから、楽しみにしておいてくれ」

「何を考え付こうと、僕は君の誘いには乗らない。君の相手など絶対にごめんだ」

いらいらと吐き捨てると、これ以上ジェームズと話していることが耐えがたくなった僕は、くるりと踵を返して歩き出した。

足早にその場を離れながら、僕は、じっと僕を見送っているらしいジェームズが微笑めいた吐息と共にこんなことを呟くのを聞い

た。

「強情なクリスター、君を本当の本気にさせるには、さて、どうすればいいんだろうね」

瞬間、思わず足を止めて振り返りたくなったほど、僕はその言葉に胸騒ぎを覚えた。

僕を、本気にさせる？

そう、この頃の僕には、まだジェームズと本気で相争う気はなかった。そして、彼の方も、すぐに僕に何かしかけようという気配は見せなかった。

クラスメートとしての当たり障りのない付き合いをそれからも続けたし、もう少し踏み込んだ話をすることも時にはあった。はたから見れば、僕とジェームズは仲良く付き合っているようにさえ見えなかったかもしれない。

そんな関わり方を変えることになったのは、ディベートのクラスが終了してずっと後―ジェームズと会う機会も少なくなり、もしかしたら彼は僕のことを忘れてくれたのではないかと安心し始めた矢先だった。

僕の代わりに、レイフがジェームズの仕掛けた罠に落ちたのだ。

僕を振り向かせるにはどうすればいいのか、ジェームズは的確に捉えていたわけだ。実際、僕を本気にさせるのに、これ以上の手段はなかっただろう。

レイフには、本当にすまないことをしたと思う。僕のせいで、あんな危険な奴に目をつけられることになってしまった。レイフはその辺りを誤解して、自分が悪いのだと、逆に僕に対して負い目を感じているようだが、事実は違う。明るい光の中で生きるのがふさわしい、無邪気でまっすぐなレイフだけならば、ジェームズの気を引くことはなかったはずだ。認めたくないことだが、僕の中で抑圧され封じ込められた何かぞつとするようなもの―ジェームズに似た資質が彼の興味をかき立てたのだろう。

この頃までに、僕に向かって宣言したとおり、ジェームズは時間をかけてゲームの体裁を整えていた。校内の不良分子を集めて凶悪化させ、ディベートのクラスメート達よりもずっと攻撃力のある手駒とした。本格的にその力を発揮しはじめた彼は、瞬く間に生徒も教師も取り込んで、学校全体を自分の影響下に置くことにほぼ成功した。J・Bという通称で囁かれる見えない恐怖が、あらゆる場所を席卷していた。ディベートのクラスで彼が僕に見せたのは、ほんの小手調べ、あくまでゲームの実験でしかなかった。学校という世間からは隔離された閉鎖社会が、彼が選んだゲームの舞台だ。後は、用意されたそのゲームボードの前に僕が坐ればいいわけだ。

こうまでされてしまっただけで、僕も黙って見ていくわけにはいかなかった。何よりもレイフを奪還するために、僕は反撃を開始した。

ジェームズを最初に惹きつけたのは僕だった。だから、僕には、あの怪物を始末する責任と義務があった。

怒りを通り越した後にくる、氷が張り詰めたような冷静さで、僕は静かに決意していた。僕が持てるあらゆる知略を尽くして、ジェームズ・ブラックを追い詰め、その存在を僕とレイフの前から永遠に抹消してやると―。

第4章黒い羊（2）

「うわあっ。何これ、何これっ」

ケージの中で母犬のおっぱいに吸い付いている、昨日生まれたばかりの子犬達を覗き込みながら、レイフは興奮した声をあげた。

アルバイト先の獣医のケンが飼っているレトリバーが子犬を産んだというので、この日仕事が終わった後、見に来たのだがー。

「あらあら、子犬を見るのは始めてなの？」

レイフの無邪気なはしゃぎように、ケンの奥さんや一緒に見に来た動物病院の職員のおば様達は微笑ましげに目を細めている。

「子犬を飼ったことはあるけど、さすがに、こんな生まれたてのほやほやは…わあ、きゆうきゆういってら」

レイフが触りたそうにしているのを見て取ったのか、ケンの奥さんは、ケージの中からミルクをたっぷり飲んで満足したらしい一匹の子犬を取り上げて彼の手の上に乗せてくれた。

「ひゃあ、ちっちえ、ちっちえなあ…すげ、かわいいやつ」

子供のように目を輝かせながら、手の平サイズのまだ目も開かない子犬に心底感心したように話しかけ、鼻先を押しついたり、頬を摺り寄せたりしているレイフに集まる視線は、あんたの方がよほど可愛いわよと言いたげだ。

「そんなに気に入ったなら、まだ貰い手の決まってる子もいるし、君が飼ってみるかい？」

部屋に入ってきたケンがレイフの後ろからひよいとケージを覗きこみながら提案した。

「えっ、本当……って、ううん、欲しいけど……いや、このままこっそりポケットの中に入れて帰りたいくらいだけど……」

レイフは子犬の頭を撫でながらかなり迷っていたが、やがて思い切るようにはっきりとした口調で言った。

「いや、いいです。ものじゃないんだし、ただ欲しいからってだけで、簡単にもらうわけにいかないから――オレ、来年高校を卒業したら、どこの大学に行くにせよ、家が出るつもりだし……そうなると寮に入るかアパートを借りるかで、犬を飼える状況になるかどうか分からないから。いざとなれば親に頼めばいいんだろうけど、オレが預かった命なら、やっぱり最後まで自分で責任持ちたいし」

「ああ、そうか、夏休みが明ければ君は最上級生になるんだね。早いものだねえ。まだどこの大学に行きたいとか、具体的な進路は考えてはいないのかい？」

レイフは名残惜しげに子犬をケージに戻し、ケンに向き直った。

「まだ何にも――大学のフットボール・チームのスカウトから何件かコンタクトがあるくらいで……でも、どれもすぐ行きたい学校ってわけでもチームでもないから」

「去年の優勝チームのエース級選手となれば、気の早いスカウトも

そろそろ動き出すのかな。でもね、レイフ、大学はそもそもフットボールだけをしに行く所じゃないんだよ。何かを勉強して身につけてープロ選手になるって夢は別にして、もしも将来職業に就くとしたらどんな仕事をしたいかと考えながら、進路は選ぶものだ」

ケンのもっともな助言にレイフはちよつと考え込んだ後、再びケージの中の子犬達を見下ろして、ぽつりと呟いた。

「獣医だったら、なつてもいいかなあ」

「おや、それなら、うんと勉強しなきゃならないよ。でも、君なら、なかなかいい獣医になれそうだね。1つの命を預かることの重い責任をちゃんとわきまえている」

「そうですか？」

「ああ、これも、2年間ここで働いて、有能な獣医である僕の薫陶を受けてきたおかげだろうな」

冗談めかして言いながら片目を瞑るケンに、レイフは素直に笑い返した。

「それなら、レイフ、将来はここで雇ってもらいなさいよ。若くてハンサムな先生目当ての奥様方が集まってきて、きっとここも今よりはやるわよ」

キッチンから人数分のコーヒーとクッキーを運んできがてら奥さんが言うのに、ケンはちよつと情けなそうな顔をする。

「何だよ、それじゃ、まるで僕がもう年寄りみたいじゃないか」

「そりゃ、レイフに比べたらねえ。お肌だって、この通りつるつるだし」

若いレイフを可愛がっている職員達は奥さんに賛同の声をあげながら、彼の腕をぺちっと叩いたり撫でたりした。

「やめてくださいよー。それ、セクハラっすよ」

レイフが身をよじって逃げながら言い返すと、コーヒーのいい匂いに包まれた部屋の中に楽しげな笑い声が弾けた。

そうやって動物病院の皆としばらく談笑した後、レイフはいつものようにジョギングしながら家路についた。五月も半ばを過ぎたこの頃、夕方と言っても、まだまだ外は明るい。

（進路かあ）

履き慣れたシューズにランニング用の上下に身を包み、爽やかな風の吹いてくる並木道を気持ちよく走りながら、レイフは先程ケンから受けた指摘を思い返していた。

あつという間に三学期も過ぎ、来月の頭からは長い夏休みが始まる。それが明ければ、レイフもいよいよ最上級生シニアだ。

（いよいよ、本気で大学のこと考えないとな。確かクリスマス・ホリデイまでには願書手続きもすませなきゃいけないはずだ）

獣医になるとはほとんど思いつきで言ったことだが、大学卒業後プロ・フットボールに進む以外の選択肢も現実としてやはり考えて

おくべきだろう。

（フットボールが盛んで、スポーツ推薦が取れて、なおかつ獣医学にせよ何にせよ、面白そうな学部がある所か：ううん、勉強と言われるとちゃんといいていけるかどうか悩むよなあ。その点、クリスターはどこに行っても通用するおつむがあるからいいよなあ）

兄のことを思い出すとレイフの胸は疼いた。

クリスターとは最近進路についての話はしていない。彼の志望がどこなのかも知らない。計画的なクリスターのことだから、頭の中では考えていることも色々あるのかもしれないが、それをレイフに聞かせる気はないようだ。

（あいつはオレから離れようとしている：お互い自立して、進路もそれぞれが希望する所を目指せばいいと思ってるわけか。もしかしたら、カレッジ・リーグでもっと力をつけて将来プロなるって計画は現実的ではないからと、あいつの中ではもう第一ではなくなっているのかもしれない。でもさ、クリスター、そんなこと本当にできるのかよ。一緒に叶えようと約束した夢をそう簡単に諦めきれるか？ オレには、できないよ。プロになるって夢も、おまえのこと——）

レイフはもどかしげに唇を噛み締めた。

（頭でっかちの理屈屋め。考えなくてもいいことまで考えて、挙句の果て、煮詰まって、自分がどうしたいのかも分からなくなってる。なあ、おまえ、やっぱりオレと一緒にやりたいんだろ、フットボール：嘘つくのはやめろよ。だって、おまえはすごく楽しそうだったじゃないか。チェスでもボクシングでも、何をやっても一流

のおまえだけど、やっぱりオレやチームの皆と一緒にプレイしている時が、いつだって一番いい顔してた。あれは絶対作ったものじゃないと思う。去年優勝してさ、おまえだって、すごく気持ちよかったろ、今まで生きてきた中で一番幸せだったろう？)

別にクリスターからはっきりとプロになる夢は断念すると告げられたわけではない。彼自身まだ迷っているのかもしれない。あるいは、レイフに話せば強硬に反対されるのが分かっているので、打ち明けられないでいるのかもしれない。つまり、レイフの真剣な求めを拒みとおせるほど確固たるものを今のクリスターが持っているわけではないということだ。

(だったら、あえてオレの方から、この問題をあいつにぶつけて追求してやろうか…？ あいつはしらを切って逃げようとするだろうけど、無理にでも捕まえてさ…自分に正直になれよ、オレと一緒に来いよって訴えて―ああ、どんなふうに言えば、あいつに分からせることができるんだろ。言葉って不自由なものだよな、オレが思うことの半分も伝えられない。ほんとは、一緒にプレイできたら話は早いんだけどさあ。早くフットボールのシーズンになって…チームの仲間達とも一緒になってがむしゃらに練習して、また去年みたいに優勝目指して…あんな楽しい時間が戻ってきたら、あいつも思いたせるだろう…。そうさ、同じ頂上と一緒に目指すことでオレ達は1つになれる…2人ともが幸せになれる。だから、絶対にやめることなんてできないんだ)

そんなことを考えるうちに、道路の向こうに見慣れた我が家が現れた。

一気に足を速めると瞬く間にそれは近づき、程なくしてレイフは家の前にたどり着いた。

(あっ)

何気なし覗き込んだガレージにクリスターの車を見つけて、レイフの心臓の鼓動は急に速くなった。

(珍しいな。兄貴の奴が、こんな早い時間に、もう家に帰ってるなんてーそうだっ)

クリスターが家にいるのなら、いい機会だ。その気になっている今のうちに、先程考えていたことを彼に正面からぶつけてみよう。レイフは瞬間的に決意した。

「ただいまっ」

レイフは勢いよくドアを開いて家の中に入ると兄の姿を求めて階段を駆け上がった。リビングの方から、こちらもう帰宅していたらしい父親が呼びかけるのが聞こえたが、とりあえずそれは後回しだ。

「クリスター、いるのかよっ」

レイフが2階に到達すると同時にクリスターの部屋のドアが音もなく開いて、中からずるりと出てきた彼とレイフは鉢合わせをした。

「あ…に、兄さん…」

クリスターとほとんどぶつかるように顔を突き合わせしまい、レイフはとっさに言葉を詰まらせて立ち尽くす。それを、クリスター

は僅かに目を見開いてじっと凝視した。

「何をしていたんだ、遅かったじゃないか」

「へ？」

予想外の兄の切り返しに、レイフは目をぱちくりさせた。

「今朝家を出る時に、母さんから、今日は僕達に何か大切な話があるから早めに帰るように言われただろ？」

渋い顔をしたクリスターに嗜められて、レイフは戸惑う。

「そ、そうだっけ……？」

クリスターはやれやれというように溜息をついた。

「やっぱり、ちゃんと聞いていなかったんだな」

「うん……ごめん。ああ、それで、今日はクリスターも、研究室にも寄らずにまっすぐ帰ってきたんだ。おまえの帰りをまともに待ってたら、下手したら真夜中になるものな。でも、話って、何だろ？」

「そんなこと、僕が知るものか。ともかく下に行こう。リビングで父さんと母さんが待っているから」

レイフの肩を軽く叩いて、クリスターはそのまま先に階段を下りていく。その後ろ姿をぽかんと見送りかけた後、レイフも慌てて追いかけた。

クリスターと2人で進路のことから何から腹を割って話すいい機会だと思ったのだが、取りあえず、それは後回しにするのかなさそうだ。

（母さん達が、こんなふうに変えてやる話だなんて…オレ達の進路のことって訳じゃないよな。仕事の方も万事うまくいってるらしいし…そういや、ちょっと前に母さんが体調悪そうにしてたことがあったけど、まさか、どこか悪いとか…？）

色々考えを巡らせてみたものの心当たりがなくて、レイフは首を傾げるばかりだった。

しかし、両親が待つ階下では、レイフの想像をはるかに超える展開が待ち構えていた。全くそれは、レイフの胸に引っかけかっているクリスターというもっか最大の懸案事項も一瞬吹き飛んでしまうほどの驚きだった。

「子供？」

思わず、レイフはコーヒークップを口元に運びかけた手をとめて、聞き返した。

「ええ」

にこにこ笑っているラースと並んでソファに坐ったヘレナは落ち着き払った態度で頷きながら、もう一度繰り返した。

「今日、病院に行ってちゃんと検査をしてもらったの。三ヶ月だそうよ。来年の頭頃には、あなた達に弟か妹ができるわけね」

「……………」

レイフは目をすがめるようにして、目の前で仲良く寄り添いあっている両親を見比べながら、言われたことの意味を咀嚼していた。

病院。検査。三ヶ月。弟か妹―。

次の瞬間、レイフの頭の中に、先程獣医のケンの家で見せてもらった生まれたての子犬の映像がうかびあがった。レイフの手から落ちまいと小さな足で必死に踏ん張っていた、ほんのり甘いミルクの匂いの―。

「あ、あか…ちゃんが、できたってことかよっ?！」

思わず後ろにのけぞりながら裏返った声でレイフが叫ぶのに、へレナはおかしそうに言い返す。

「さっきから、そう言ってるじゃないの」

「うわあ…」

呻くように呟いたものの、何とコメントしたらいいのか、適当な言葉が見つからない。レイフがひたすら絶句していると、天にも舞い昇りそうほど幸せな顔をしたラースが駄目押しのように付け足した。

「おまえも、これでお兄ちゃんになるんだなあ、レイフ」

レイフは喉に何かが詰まったような心地になりながら、助けを求めるように傍らの兄を振り返る。

「ク、クリスター」

するとレイフの呼びかけで我に返ったように、クリスターははつと息を吸い込んだ。どうやらこちらもしばらくの間固まっていたようだ。

「あ…その…びっくりしたけれど、ともかくおめでとう、父さん、母さん」

クリスターは神妙な面持ちになってしばし黙り込んだかと思うと、困ったように首を傾げた。

「ううん、いきなり弟か妹ができるなんて言われても、正直ピンとこないけれどね」

「うん…オレも…」

思わずレイフはクリスターと顔を見合わせ、苦笑しあった。

「子供の頃のおまえは、一時、弟が欲しいって母さんにせがんでいたものだがな、レイフ」

「そんなこともあったかなあ」

しかし、まさか今になってそれが実現するとは夢にも思わなかった。若くして結婚したヘレナはまだ38才で、子供を産めない年ではないが、立派な高齢出産だ。18年ものブランクもあるわけで、それはきつと大変なことだろうと、分からないなりにレイフも心配してしまう。

それでも、満ち足りた幸福感に包まれている両親―仕事による疲労も消し飛んで澆刺とした顔になっているラースと、体に新しい命を宿したことで内側から輝くように一層美しくなったヘレナを見ていると、次第に、そんな心配をする必要もないのかなという気がしてきた。

かなり年の離れたきょうだいを持つことになる双子の反応をそつと窺っている両親を、レイフは今度は満面の笑顔で祝福した。

「うん、おめでとう。まだ実感ないけど、新しい家族ができるって嬉しいことだよ。な、クリスター」

「ああ、そうだね」

レイフが明るく賛同を求めて腕を引っ張るのに、じっと黙って何事か考え込んでいたクリスターは目が覚めたような顔をして、ややぎこちなく頷いた。まだ現実を受け止めきれていないのだろうか、彼の反応は鈍い。

（まあ、確かに変な気分ではあるよなあ…母さんのおながが大きくなるってのも何だか想像つかないし、家に赤ん坊がいる生活ってのも…年明けくらいにはもう生まれているのか…ううんと、そしたらそれから高校卒業して大学に行きだすまでの八ヶ月くらいは一緒にいてやれるんだ。でも、まだ遊んでやれるほど大きくはならないよなあ）

その後は、久々に家族そろっての夕食を取ったが、別にそれ以上新しい家族についての会話が弾むわけでもなく、いつも通りの夜を過ごした。クリスターは勉強のためにさっさと自分の部屋に引っ込

んでしまったし、レイフもいつも見ているクイズ番組をリビングで見た後は、部屋に戻って、雑誌を読みながら眠り込んでしまった。

幸せそうな両親を素直に祝福したものの、2人とも、まだ見ぬきようだいに対する実感など、やはり持てなかったのだろう。

別にそれで毎日の暮らしに目に見える変化が現われるわけではない。いや、そのうち変わってくるのだろうが、それこそ妊婦にも赤ん坊にも縁のない男子高校生には、何が起こるのか想像もつかないことだ。

翌日。結局レイフは、学校の同じ年頃の友達には、そのことを話さなかった。どうせ彼らにも分からない話だし、興味本位でからかわれそうで、何となく照れくさかったのだ。

だが、アルバイト先の動物病院の女性職員には、あっさり打ち明けた。育児の真っ最中であったり、あるいは子育ても一通り終えたりと、経験豊富な彼女らは、うちの親にあかちゃんができたんだけどどうしようと不安そうに訴えるレイフに、これから何が起きるのか、どんなことに気をつけてあげればいいのかなどの具体的なアドバイスを、自分達の体験を交えて懇切丁寧に――生々しすぎてレイフが怯みそうになる話までしてくれた。

その詰め込み教育のおかげか、単純で、もともと子供好きでもあったレイフがその気になってくるのに、それほど時間はかからなかった。

（そういうことなら、レイフ、君もご両親とベビーに何かお祝いをしてあげないかね。夏休みの間ここでしっかり働いて、アルバイト料をためることだよ）

アルバイトの帰りにレイフがショッピング・モールに立ち寄ったのは、別にそのためではなく、クリスターに贈るバースデー・プレゼントを買うためだった。

以前クリスターが欲しいと漏らしていた、ナショナルジオグラフィック誌によく掲載される写真家の写真集を購入し、書店を出たレイフの目に、大きなベビー用品専門店のウィンドウが飛び込んだ。こんな店、以前なら決して目に付かなかっただろう、果たして昔からそこにあっただかも定かでないほど馴染みがなかったが、見た瞬間、ケンに言われた言葉を思い出し、レイフはふらふらと近づいていった。

（プレゼントって…何を贈ったらいいんだろ…？）

乳幼児の写真の入った大きなポスターや色とりどりの玩具や服やベビーカーが飾られた明るい大きなウィンドウの前にレイフはしばしばんやりと立ち尽くした。

（中に入ってちょっと見てみようか…い、いや、さすがにそれは恥ずかしいよなあ）

入ろうかどうしようかとドアの付近を落ち着きのない熊のようにうろうろしていると、そのうち、そのドアが開いて、中から1人の背の高い客が出てきた。

その姿を認めた瞬間、レイフは真っ赤な顔になって、げほっと咳込んだ。

「ク、クリスター?!」

弾かれたように振り返ったクリスターは、ぽかんと口を開けて立ち尽くしているレイフを見つけるや、目を見開いた。

「レイフ？　こんな所で一体何をしているんだ？」

「おっ、おまえの方こそ、こんな店に入って何やってたんだよっ？　想像できねえっ、クリスターがあかちゃん用品を物色してる図なんだ！」

レイフの大声に辺りを歩いていた人々が何事かと振り返る。クリスターは赤面し、慌ててレイフに歩み寄ると、まだ何か叫ぼうとする口を無理矢理手でふさいだ。

「この馬鹿っ」

そのままクリスターは、じたばた暴れるレイフの首根っこを掴んで、傍にあったドーナツ店に連れ込んだ。

「…商品カタログをもらいにちよっと立ち寄ってみただけだよ」

クリスターのおごりだと言うのでトレイの上に山のように積んだドーナツを頬張りながら、レイフは更に追求を続けた。

「カタログって何のだよ？」

「だから―たぶん、おまえがあそこに突っ立っていたのも同じ理由だと思うけれど、母さん達に子供が生まれたら、出産祝いに何か贈ろうかなって、ふと考えたんだよ」

「へえ。気が早いじゃん」

「お互いさまだろ。それに、別にそのためだけにわざわざここに来たわけじゃない…他に買うものがあつたから、そのついでで…」

そう言い訳じみたことを言うクリスターの傍らにはタワーレコードの包みが置かれている。それを見て、レイフはピンときた。

（あ、オレへのプレゼントだ）

確か、レイフが欲しがっていたCDの発売日が今日だった。

毎年、誕生日が近くなると、2人はお互いに自分が欲しいものをさり気なく相手に伝えるようにしている。黙っているときつかく贈ったプレゼントを相手が既に自分で買っているということがままあるからだ。

レイフは自分の隣の椅子の上にある、つい先程クリスターのために買った写真集を意識した。互いの心も体も遠のいていくような気がしていたのに、今でも2人は同じようなことを考えて、行動に移しているわけだ。

「何、にやけてるんだよ。気味が悪いな」

「えへへ…」

レイフがささやかな幸せを噛み締めていると、クリスターは軽く咳払いをして話をもとに戻した。

「それで、おまえもその気なら、2人で一緒に少し大きなものを買

って贈ったらい。細々としたものは母さん達が用意するだろうし、どのみち、そんなもの僕らには見当もつかないからね。チャイルド・シートなんていいかなあと僕は思っているんだけど――」

「相変わらず計画的だよな、兄貴。昨日はあんまり興味なさそうな顔してたのにさ」

「実感なら、今でもやっぱりないよ。今更どうして子供なんて作っただんだろうと思うし：むしろ母さんの体の方が心配だよ」

「うちの母さん、若いし元気だし、きっと平気だよ」

「それにしてもね、やっと僕らがそれなりに一人前になって独立しようという時に、また一からなんて：初めに聞いた時は、その：間違いでできてしまったのになって思ったよ。でも、よく考えれば、このタイミングを見計らって計画的に作ったんだだろうね」

「計画的って？」

「僕らが巣立っていなくなれば、父さんはきっとすごく寂しがるだろうからね。あの人は、自分が守ってやれる家族がいないと駄目な人なんだって、いつだったか、母さんが言ってたよ。子煩悩で、小さい頃の僕らのことも馬鹿みたいに可愛がって、あんまり甘やかしすぎて駄目にしてしまうんじゃないかと心配するくらいだったそうだよ」

「そんな記憶はあるよなあ」

「だから、母さんは父さんのためにあえてもう1人産むことにしたんじゃないかな。今なら、会社も軌道に乗っているし、母さんが一

線から退いても回っていきそうだしね」

淡々と分析するかのような口調でクリスターが言ったことに、しかし、レイフはすんなりと納得できなかった。

「ううん、クリスターの話も分かるけどさあ」

レイフはドーナツをつまむ手をふととめると怪訝そうな顔をするクリスターに向かって、ゆっくりと噛み締めるように言った。

「オレさ、そういう言い方好きじゃねえよ。子供を：作るってさ、何か、ものみたいじゃん。オレ達の弟か妹になるんだぜ？」

「おや：僕は別に、そんなつもりで言ったわけじゃないけど：いきなり、どうしたんだよ？」

「オレのアルバイト先にさ、昔児童福祉関係の仕事をしていた年配のおばさんがいるんだけど、その人が、昔は子供は授かるものだって言ったのに、今の親達は子供をものみたいに作る話をするって嘆くんだ。自分が作ったものだとか考えないから、その子が思い通りにならないとすぐ虐待に走る：神様から授かった大切な命と考えれば、大事に育てて、どんな苦勞をしても手放そうとは思えないはずだって」

他人からの受け売りだが、その言葉はよほど、今のレイフの胸に響いたのだった。

「なるほどね：それも一理あるか。しかし、レイフ、おまえ、たった一日で随分と様子が変わったじゃないか。昨日は、新しいきょうだいと言われてもピンとこない顔をしていたのに、今は楽しみでな

らないって口調になっている。おかしなものだね」

「ちっともおかしくないよ。何だよ、クリスマスは楽しみじゃないのかよ」

「弟なんて手のかかるもの、おまえ1人で充分だよ。まあ、可愛い妹なら、いてもいいかな：それにしたって、これだけ年が離れてしまったらね。せめて言葉が通じるくらいにある程度大きくなってくれるまでは、どう扱えばいいのか、僕は困ってしまいそうだ」

クリスマスは何を思い出したのか、遠い目をして、ふっと笑った。

「そう言えば、中学校の社会奉仕の時間にさ、幼稚園に行ったことがあったよね。子供って結構鋭く人を見る生き物なんだなって、あの時思ったよ。おまえは皆に好かれて、せがまれるままに遊んでやってたけれど、同じ顔をした僕のところには誰も来なかった。苦手に思われていることが分かったんだね」

「頭で理解しようと思うから、苦手になるんだよ。オレは、子供達とする遊びを自分も楽しんでしまうからさ」

クリスマスは目を細めるようにして、つくづくとレيفを眺めた。

「おまえはきつと：将来は、父さんみたいな子煩惱のいい父親になるんだろうな。僕はそれも無理そうだ：子供自体苦手だし、ましてや自分の子なんて、考えるだけでぞっとする」

穏やかな声の中にある羨望と諦念の響きは、レيفをうろたえさせた。

「な、何言ってるんだよ。子供だなんて、オレだって、今はごめんだよ。ていうか、親になった自分なんて、想像もつかないし：それより先に、産んでくれる相手を見つけないきゃ、話にならないだろ」

するとクリスタは視線をテーブルの上に落とし、コーヒーのカップの縁に指を滑らせながら、何気ない口調で言った。

「相手か：そう言えば、レイフは、その後気になる女の子は見つからないのかい？ アリスのことは忘れたのなら、早く新しい相手を探して付き合えよ」

レイフは思わず、何を言うのかとまじまじとクリスタを見つめてしまった。クリスタは顔を上げようともレイフと目を合わせようともしない。

ちくんと、レイフの胸の奥の心臓が痛んだ。

「ちえっ：ひでえよな：」

おまえが、オレにそれを言うのか―舌の先まで出掛かった恨み言を飲み下し、レイフはわざと明るい調子で返した。

「何だかさ、取りあえず一回経験したことで安心したのかな、今は別に彼女なんて欲しくないよ。気になる子が傍にいるなら、話は別かもしれないけど、わざわざ探すほどのことはないし」

「それくらい面倒くさがるなよ」

「オレはさ、兄貴みたいに器用じゃないから、一度に色んなことに手は出せないの。実際、女の子なんかよりずっと気になることがあ

るからさ…頭の中はそいつのことで一杯で、他のことを考える余裕はないよ」

レイフがクリスターに向けた眼差しに力を込めると、彼はそれかわすように店の中を眺めやった。

「なあ、クリスター…」

一瞬ためらった後、レイフが意を決して口を開きかけると、クリスターは話を遮るかのようにおもむろに立ち上がった。

「さて、僕はこれから約束があるから、先に出るよ」

「え、もう…?」

どこかぎこちない態度で早々に立ち去ろうとしているクリスターを見守りながら、レイフはふと思った。

（約束って、ダニエルとかな…?）

あの利発で可愛い後輩の顔を思い出すとレイフの胸は複雑な感情に揺れる。しかし、それよりもクリスターの余所余所しさの方が、よほどレイフにはこたえた。

クリスターは、レイフと先程のような家族としての当たり障りのない会話ならば普通にできる。しかし、レイフが一線を越えてクリスターの触れられたくない所に手を突っ込もうとすると、心を閉ざして逃げてしまう。

クリスターがレイフの傍を通り過ぎようとした時、レイフは思わ

ず手を伸ばして、クリスターの腕をつかんだ。

「兄さ…」

レイフに触れられた瞬間、クリスターは体に電流が走ったかのよう
に身を震わせ、振り返った。その顔は強張り、大きく見開かれた
瞳には不安と慄きが溢れている。

そんな兄にかけるべき言葉を、レイフはとっさに見失った。

「あ…いや、そのーなるべく早く帰れよな。大体、おまえ、高校生
のくせに門限も何もあったものじゃないような生活だろ」

張り詰めた空気が流れたその場を取り繕うように、レイフはただ
たどしく続けた。本当は、こんな意味のない言葉をかけたかったわ
けではない。

「ああ、分かったよ」

いつ追求されるかと恐れていたことをレイフが口にしなかったの
で安心したらしい、クリスターは再び落ち着きを取り戻した。

「レイフ…」

すまないと思ったのだろうか、しょんぼりとうなだれてテーブル
の上に視線を落とすレイフの髪の毛の先を軽く引っ張って、クリスター
は優しい口調で囁いた。

「母さん達へのプレゼントの件、今夜にでもカタログを見ながら相
談しようよ」

「ん」

店のドアへ向かって歩いていくクリスターの後ろ姿を、レイフは切なさに胸を塞がれながら黙って見送った。

（さっきオレを振り返った、クリスターのあの顔…あいつ、本気で恐がってた）

レイフの脳裏に、学校の体育館裏で去っていくこうとするクリスターを捕まえて、しばしじっと抱きしめていた時の記憶が蘇る。

このままクリスターと1つに溶け合ってしまったえばよいとレイフは確かに思った。クリスターも同じ欲求に心が揺らいでいたはずだし。しかし―。

（レイフ…レイフ、離せ…!）

（兄さん）

クリスターはぎりぎりのところで踏みとどまって、レイフを振り切って行ってしまった。レイフはそれ以上後を追えなかった。

（あの時みたいな危うい状態になることが恐いって訳か。オレに腕つかまれただけで、あんな過敏な反応しちまうほど…）

レイフは、テーブルの上に置いた両手を広げて、途方に暮れたように見下ろした。

「一体オレがおまえに何をするっていうんだよ、クリスター」

そのままずるずると崩れるようにテーブルの上に突っ伏して、レイフはしばし目を瞑った。

「マジ、へこむぜ…」

瞼の裏には、レイフが常に自分の一歩前に見てきた、クリスターの力に溢れた頼もしい背中。見失うことなどありえなかった。当然のようにいつもそこにあったのに、今のそれは、レイフの手が届かないほど遠くあるように感じられた。

第4章黒い羊(3)

(どこから現われるか知れない敵をただひたすら待ち続けるというのは、なかなか神経をすり減らすものだな)

夏休みを数日後に控えた、ある日の放課後、クリスターは新聞部の部室に立ち寄っていた。中庭に面する窓の傍に佇んで、校舎から出てそれぞれ帰路についたり寮に戻ったりあるいはクラブへ向かう生徒達を見下ろしながら考えにふけっている。

クリスターが立つ窓から少し離れたテーブルでは、アイザックが愛用のカメラの手入れをしていた。ふと手をとめて、クリスターに声をかけようとしたが、アイザックの存在を失念しているかのように無防備なその横顔に目を奪われ、黙り込む。

(ボクシングの試合会場で一度姿を垣間見て以来、J・Bは鳴りを潜めている。施設を出所して、半年近くにもなるだろう。僕にどんな挑戦状を送りつけておきながら、何をぐずぐずしているのか。いや、水面下では動いているのだろうが――以前は同じ学校にいて、目に見える特定のグループを率いていた分、行動を把握しやすかった。今は、Jはここにおらず、学校に残っている連中の内誰と誰に彼に息がかかっているのかも判断しかねる状態だ。同じ不自由さは向こうも感じているはずだが――つまり、手に入れられる敵の情報が少ないということ。この点を解決しようとするなら、おそらく彼は――)

いきなり部屋の中に鳴り響いたシャッター音に思考を中断されて、クリスターは目を瞬くと共に素早くテーブルの方を振り返った。

「アイザック」

クリスターのたしなめるような呼びかけにアイザックはにやりと笑って、またしてもカメラを構える素振りをした。

「無断で写真なんか撮るなよ。大体君はカメラマンじゃなくて、ジャーナリスト志望なんだろう？」

「ううん、シャッターの調子が悪いから、そのテストさ。しかしさ、被写体としても、おまえは最高だよな。羨ましいというかなんていうか、つくづく絵になる男だよ」

ファインダーを覗き込んでいるために、アイザックの表情はクリスターには見えない。

「下らないことを言うのは、よせよ」

いつもの悪ふざけだと思い、クリスターは苦笑しながら、軽くあしらった。

「そんなことよりもーそうだな、コリン達は、その後何か言ってくることはないのか？ J・Bが出所したからしばらく身边に気をつけた方がいいとは、君が伝えてくれたんだな？」

「ああ。夏休みに入ったら、一応実家に戻る前にコリンの所に立ち寄るつもりになっているけれど、今の所特に変わったことはないようだぜ。そう言う俺らの身边だって、今までと変わらず、いたって平和だけだな」

「アイザック…」

「油断はするな、だろ。それは分かるけれど、人間、緊張状態をそう長く続けることなんかできないからなあ」

アイザックはカメラを下ろすと、仕様がないうるように肩をすくめた。

「うん…」

アイザックの言い分には、クリスターも頷かざるを得ない。

日々は絶え間なく流れていく。そのどこかに悪意を持つ敵が潜んでいるとしても、姿が見えず、危険が迫っている実感がない現状では、次第に気が緩んでくるのも仕方がない。

いや、全くJ・Bの影も形も見当たらないわけではない。それに、基本的には相手の出方を窺う構えのクリスターだが、打てる手はある程度打っていた。

かつてJ・Bに最も近いとされていた、もとフットボール・チームのフレイの復学をはじめ、一度は解散したはずの不良グループの残党が再び活発になってきた気配はある。同じ学校の生徒である彼らの行動には、当然、常に目を光らせてきた。

そして、これは前回のJ・Bとの闘争の過程で知り合った警察関係者から得た情報だが、近頃街の所謂ストリート・ギャングの間で少々気になる噂が飛び交っているという。J・Bは、仲間達にやらせていた賭博やドラッグの売買などを通じて暗黒街にも関わりを持っている、結局は、そのために捜査機関から目をつけられて逮捕されるに至ったのだが、それと連動して捜査が入り解散に追い込まれた、あるギャングが復活の兆しを見せている。若さと狂暴さで一時的

恐れられた彼らが再び盛り返してきたのは、何者かが資金面で援助したからだと囁かれているのだそうだ。

別にそこにJ・B本人が関係している証拠が見つかったわけではないが、そう教えてくれた刑事は、彼の年齢に見合わない凶悪さを知るだけに、一介の高校生に過ぎないクリスター達にこっそりと自分の懸念を打ち明けてくれたのだろう。

（あいつはある日突然現われたかと思うと、たったの1年足らずで街の名もない若いごろつきどもを本物のマフィアも青ざめるほどの極悪非道の犯罪グループに仕立てちゃった。それが捕まえてみたら、名の知れた一流校の現役高校生だったっていうんだから、驚きさ。刑事生活を長いことやっていたが、あんなーあんな化け物を見たのは初めてだったよ）

気をつける。おまえ達は今でも奴に目をつけられているかもしれないーJ・Bの出所の知らせに顔を曇らせた刑事、サウスボストン署のケンパー警部は、クリスターにそう警告し、もしも本当に彼が暗黒街に舞い戻ったと分かれば、すぐに知らせると約束してくれた。だが、それ以上、危険な犯罪者達の蠢く裏社会に未成年のクリスター達が入っていくことを許さなかった。

現在のJ・B、ジェームズ・ブラックについて表向き知ることのできる情報といえば、ごく限られている。ジェームズは広大な敷地を誇る実家に父親と共に暮らしている。この父親は持病の糖尿病が悪化して事業から引退、今年に入ってから公の場で姿を見られることもなくなった。出所後のJ・Bは、この父の介護をしながら、ひっそりと暮らしているということだ。名門の出の母が遺した遺産と事業で成功した父の財産を合わせれば、何もしなくても一生優雅に暮らして尚あまるほどの金が彼にはある。

「正直、相手の出方を窺うことがこれほど辛いなんて思わなかったよ。やはり僕はディフェンスには向かないのかな」

クリスターは窓辺から離れると、手近に会った椅子を引き寄せ、アイザックと向かいあうように腰を下ろした。

「だからと言って、一応こちらは学校にもちゃんと通っている真面目な高校生だからな、表立っては何も仕掛けてこない相手にあんまり乱暴な攻撃をしかけるわけにはいかない。せめてJ・Bが俺達を実際どうしたいのか分かれば、対策も立てやすいんだがな」

アイザックは銀縁の眼鏡の下目をすっと細めて、自分の正面に長い脚を組んで坐っているクリスターの冷静な顔を観察しながら、用心深く問いかけた。

「なあ、クリスター、おまえは以前、奴は終わってしまったゲームの続きをしたがっているんだって言うていたが：おまえらのゲームって結局何なんだよ？ おまえとJの因縁も、俺には未だに理解しがたいものがあるんだけれどさ」

アイザックの鋭い追及を受けたクリスターは一瞬何と答えようかと迷ったが、やがて、自分の言葉を自分で確認するかのようにゆっくりと語りだした。

「こんなことを言うと、僕まで人でなしの片棒を担いだと非難されそうに嫌なんだけれど：つまり、僕らがやった闘いとは、言わば生きたチェスのような、生身の人間を駒として使い、頭脳戦を楽しむ：それ自体一種のゲームだったんだ。現実では成り立ちそうもない、Jの頭の中にだけ存在した夢想だったが、僕という格好の相手

を見つけたことで、俄然その気になったようだ。僕はなぜかJに見込まれてしまったらしい：理由なんか分かるものか」

クリスターは一瞬暗い目になって黙り込みそうになったが、それをアイザックには気取られまいとすぐに話を続けた。

「ともかくJは、無関係の大勢の人間を巻き込み、学校中を引っ掻き回し混乱させても構わず、無茶を突き通して自分の楽しみを追求しようとした。僕はと言えば、決して挑発には乗るまいと考えていたけれど、レイフに害が及んだことで気を変えた。とにかくJをどうにかしないことには、僕にもレイフにも平穏な学校生活は望めないと悟ったんだ」

「それでおまへは、俺達新聞部に協力を求めた上で、Jのアジトに乗り込んで、あの大打撃を打ったわけか」

「そう：Jの筋書きでは、僕は、もうちょっと正攻法を重んじる敵として、彼を追い落とすために論理的に動くはずだった。でもね、そんな読みやすい戦術で挑んでも到底勝ち目はないと思ったから、僕はことごとく彼の読みを裏切り、裏をかくような奇策を講じることで、強引に勝ちを取りにいったんだよ。あのロシアン・ルーレットもね、Jにとって想定外の攻撃になるだろうと思ったから、あえて危険を承知でやったんだ。フットボールの試合でもそうだけれど：作戦より戦術より、とにかくまず相手にシヨックを与えて怯ませることができた方の勝ち、なんだよ。頭で考えた理論ばかりで実際に他人との戦いを、僕にとってのチェスやチームスポーツのような経験を積んでこなかったことが、彼の弱点だった。まあ、相手の意表をついた奇策なんてものは二度と使えないし、彼自身僕のやり方から学習しただろうから、今度同じような条件で戦っても、僕が楽に勝てるとは思えないけれどね。自分が思い描いたゲームなのに、

その主導権を握らないままに、Jは僕に負けてしまった。さぞかし無念だったことだろうと思うよ」

「ふうん。つまり負けっぱなしじゃ気が治まらないから、雪辱戦をしたと思うというわけかい？ 全く、何がゲームだよ。奴の退屈しのぎの遊びのために、どれだけの人間が傷ついて、中には人生狂わされた奴までいるか考えると、今更ながらぞっとするぜ」

アイザックが無然とした面持ちで呟くのに、クリスターは複雑であいまいな笑みを唇にうかべた。

「ぞっとする、か…」

何だか少し後ろめたくなった。アイザックの言うように、人として誉められたものではないゲームに深く関わった当時の自分。そして、今また同じことを繰り返そうとしている自分は、果たしてJ・Bを責められるような人間か。

「それでさ、J・Bの心理をそこまで理解しているおまえなら、奴が今度はどう出るか、ある程度予想は立てているんじゃないのか？」

「推測できることは幾つかあるよ。彼の出方によって、それぞれ打つ手も考えている。ただ、中には、できればこれだけは使って欲しくない、ほとんど打つ手なしの最悪のパターンもあるんだけれどね」

アイザックは興味を惹かれたように軽く片方の眉を跳ね上げた。

「何だよ、それ？」

「いやー」

クリスターは言葉を濁すと、アイザックの探るような眼差しをさり気なくかわしながら、また別のことを言った。

「それよりもね、僕の悩み所は別にあるんだ。つまり、僕は一体いつまでJ・Bとの、こんなろくでもない関わり合いを続けなければならぬのか。どこまでやれば彼は引き下がるのか。僕が負ければJは満足するのかもしれないけれど、そんなことは論外だ。僕は、あいつにだけは負けたくない」

クリスターがつい強い口調で呟くと、アイザックは虚を突かれたように瞬きし、ふっと皮肉っぽく笑った。

「ふうん。クールなふりして、結構闘争心がめらめらになってるのな、おまえ。そんな台詞、今までボクシングでもフットボールの試合でも、おまえの口から聞かれたことはなかったのにさ」

「そんなことはないよ。ただ、僕としても、かかる火の粉は振り払わなければならないというだけさ」

クリスターが素っ気無く否定すると、アイザックはテーブルの上に肘を着き、顔の前でピラミッドの形を作るように指先を重ね、その上からクリスターをじつくりと眺めた。

「本当に、そうかな？」

アイザックのほめかしに、クリスターはわざと気がつかないふりをした。

「Jとの因縁を断ち切るには、どうすればいいんだろう。この点に

ついて、僕はずっと悩んでいるんだ。前は、僕はJを学校から追い出して犯罪者として施設に閉じ込めることで、一度は退けた。しかし、それでも彼は戻ってきた。次は、どうすればいい？ 例えまた同じやり方でJに勝っても、いつか彼が舞い戻ってくるという予感に脅かされて暮らすのは真っ平だ。そして、僕を壊したいと言った、Jは僕をどうすれば満足するのか？ 僕の体を傷つけたいのか、この心を突き崩したいのか、それとも――敵の命を奪うことが彼の目指す究極の勝利なのか」

記憶の奥底から、あの深淵めいた藍色の瞳が浮かび上がり、クリスターの全てを飲み込もうとするかのように迫ってきた。思わず、ぞっと身震いしそうになる。

「おい：そんな物騒な話はよせよ」

アイザックの声にこもった不安を聞いた途端、クリスターは無性に苛立って、冷ややかな声で言い返した。

「それくらいの覚悟は必要だということだよ。Jだって、今度こそ僕に勝つため、もっと悪辣な手を使ってくるだろう。以前は、自ら重犯罪に手を染めることは慎重に避けていたJだけれど、一度犯罪者として強制的に施設に入れられた経験で、その辺りの考えは変わったのかもしれないね。出所してきて早々にまたストリート・ギャングに接触したなんて噂が本当だとすれば：今更もう何をやっても恐くないというくらいに、たがが外れたんだ。だとすれば厄介なことだが、それを逆手にとれば：そうだな、彼が再び罪を犯すよう煽ってやるのも1つの手かもしれないね。いっそ人の1人でも殺すようなへまをしてくれればいいんだけど。残念ながらマサチューセッツ州は死刑を廃止しているけれど、そこまで道を踏み外せば、そう簡単には社会に出てこれないだろうから」

そう語るクリスターの口元に閃いた氷の刃めいた冷酷さに、アイザックは顔を強張らせた。まるで自分がよく知っているはずの友人が突然見知らぬ怪物に変貌してしまったのを目の当たりにしたかのような、隠しようもない畏怖と疑念が、今まで自分が忠実に尽くしてきたクリスターを見守るアイザックの黒い瞳に過ぎる。

やがて、アイザックは躊躇いがちに口を開いた。

「なあ、クリスター、もしもの話だけどーそんな無意味な闘いを繰り返すなんてやっぱり馬鹿馬鹿しいと目が覚めて、奴が素直に更生して社会復帰の道を歩いていたら、どうする？ おまえに送りつけたカードやら何やらは嫌がらせ程度の意味しかなくて、実際全ては俺達の取り越し苦労だとしたら？」

いきなりこんなことを試すような口ぶりで言うアイザックに、クリスターは戸惑った。

「まさか：J・Bが悔い改めてまともな人間になるなんて、想像できないな。そんなの全く彼らしくないよ。父親の面倒を見ながら、世間から隠れてひっそりと暮らすなんて、Jには無理だ。彼が一番嫌うのは、無為に過ぎていく日々の退屈：それを紛らわせるためだけに、他人の平穏な暮らしをぶち壊して省みない。そんなJが、僕との決着をつけずにいられるものか、僕が生きている限り、彼は必ずー」

「まるで奴にそうしてもらいたいような口ぶりだな、クリスター」

明らかに非難の混じった口調で、アイザックはクリスターの熱心な主張を遮った。

「アイザック？」

「いや、やっぱり、そうなんだ。向こうが仕掛けてくるんだから仕方がないなんて言い訳しているけれど、もしも奴が先にこのゲームから下りてしまったら、おまえはさぞかしがっかりするだろう。その点、おまえとJはやっぱり同類なんだよ。互いに憎んで、相手を追い落とそうと喰いあい、傷つけあって―でも、そうすることが楽しい。前の時にも、そう感じることはたまにあった。おまえは正義のために俺達と共闘しているわけじゃないと知って落胆もした。けれど、あの時はまだおまえの気持ちも分からないでもなかった。大切なものを守るために戦うってのも、しごく人間らしい動機だからな。けれど、今は…時々おまえが恐くなって、ついていけねえって思う。何だか、この頃のおまえは以前にも増してどんどんJ・Bに似てくるような気がするんだ。人を人とも思わない、あの冷酷な怪物に…。やめろよ、そっちに行くなって、おまえを引きとめたくない…けれど、おまえは俺の言うことなど、絶対聞きやしないんだ」

眼差しを伏せ口惜しげに唇を噛み締めるアイザックを静かに見つめながら、クリスターはその心情をじっと推し量っていた。

J・Bとの戦いを通じて知り合ってから、いつもクリスターの味方になってくれたアイザック。その彼が、今、クリスターにこのまま従い続けることに不安を訴えている。

この期に及んでどうしてと思わないでもないが、彼がついていかれないと思うほど、この頃の自分は、見ていて危ういのだろうか。

「アイザック…」

しばらくためらった後、クリスターは思い切って口を開いた。

「そう思うのなら、君はもう僕達の争いからは手を引け。僕にとって君を失うことは痛いけれど、無理に引きとめはしないよ」

弾かれたようになって、アイザックはクリスターを見上げた。その顔は一瞬青ざめたかと思うと怒気をはらんで赤く染まり、悔しげに歪んだ。

「俺が言ったことが気に入らないからって、ずいぶん簡単に人を切り捨てるんだな……つくづく冷めてえ奴だぜ」

「違う。僕にとって、これは簡単なことじゃないよ、アイザック。ただ僕は今、君やダニエル、そして、コリンやミシエルに対して負い目を感じている。君の言うとおりだよ——もともと僕にとって、J・Bとの争いはごく個人的な問題だった。それを自分だけで彼に対抗するのは無理があるからと、正義感に燃える君らを意図的に引きずり込んだんだ。結果として、君らは危険にさらされている。僕のせいだよ。こういう僕のやり方に君が不満を覚えたとしても無理はない。それでも今まで僕についてきてくれて、何かと助けてくれたことにはとても感謝しているよ。だが——そうだな、あの時と今とは状況が違う。僕も精神面で大きく変わってしまった。今の僕には、君を納得させられる大儀などない。無駄な争いは避けたいと言いながら、一方でJが現われるのを心待ちにしている自分がいる……奴のことを考えて頭が一杯になっているうちは、胸に溜め込んだ鬱憤を忘れられそうな気がするから——それでも、君の口から僕とJは同じ穴の貉なんだと言われると、正直本気で落ち込むよ。でも、これ以上僕に付き合おうことが君の信条に反するというのはなら、あえて強要はしないから……」

冷静に話していたつもりでも、最後の方の言葉はふと寂しげに響いて、クリスターは我ながら意外に思った。他人を当てにせず、1人でも立っていられると豪語できるほど自信過剰の自分知らずではもうないということか。それとも、常に自分を支持し補佐してくれた、頭が切れて行動力もあるアイザックを無意識のうちに頼りにしていたのか。

「畜生」

アイザックが苦々しげに吐き捨てるのに、クリスターは束の間の物思いから引き戻された。

「どうしてーそんな言い方しかできないんだよ。格好つけて心を隠すのも、いい加減にしろよ。今まで付き合ってきた、おまえの中のどろどろした部分に全く気がつかないほど俺は馬鹿じゃねえよ。それでも、俺はおまえに心底惚れ込んだから、おまえのためにできることは何だってやってきた。別にさ、ダニエルみたいにおまえとどうにかなりたいなんて思っちゃいない。ただ、一度でも、おまえが俺を友人として仲間として信頼してくれたらーそうさ、俺を納得させるのに大儀も正義もいらぬ。1人でJと戦うなんて無理だから、一緒に来てくれと素直に手を差し伸べてくれりゃ、それでよかったんだ」

アイザックは嘔き出す怒りに任せて拳をテーブルに叩きつけた。

クリスターと同様に自己抑制しがちなアイザックがこんなふうに感情的な姿を見せたのは初めてだったので、クリスターは動揺し、思わず椅子から腰をうかせた。

「アイザック…」

両手で頭を押さえ込み、こみ上げてくる衝動が止められないというように肩を震わせているアイザックにクリスターは思わず手を伸ばした。しかし、アイザックはそれを荒々しく振り払い、呆然となるクリスターを睨みつけた。

「なあ、クリスター、おまえにとって俺は一体何だったんだ…？
利用価値のある手駒以上の意味なんか、あったのか？」

クリスターははっと息を吸い込んだ。

怒りを閃かせた瞳がふと悲しげに曇ったかと思うと、アイザックは椅子から立ち上がり、クリスターが凍りついたように見守っているうちに、カメラをリュックサックの中に押し込んで、そのまま部屋を出て行こうとした。

「アイザック…！」

彼をこのまま行かせてはならないと直感的に思った、瞬間、クリスターは動いて、ドアに向かって歩き出したアイザックに追いつき、その腕を掴んだ。

「待てよ、アイザック…誤解しないでくれ、僕は、君をそんなふう
に思っていたわけじゃない。君が僕をJ・Bの同類だと責めるのも、
そのせいなのか？ 違う、僕は、他人を駒のように操ったり弄んだ
りはしない…むしろ、それだけはすまいと思ってきた。君に僕らの
争いから手を引けなんて言ったのは、いつだって僕が何も言わなく
ても自分の意思で僕についてきてくれた、君の気持ちを尊重すべき
だと思ったからだ。僕は君を―」

アイザックを引き止めたい一心でクリスターにしては精一杯の素直さで本心を打ち明けようとしたのだが、硬化したアイザックの心には響かなかったのか、暗い火をはらんだ声が彼の言葉を途中で遮った。

「違うな、おまえが必要としているのは、この世でただ1人レイフだけだよ」

虚を突かれて、クリスターは絶句した。なぜと問いかけるような目で、頑なに閉ざされたアイザックの顔をつくづくと眺める。

「どうして―そこで、レイフが出てくるんだ、アイザック…？」

アイザックは、言ったことをすぐに後悔したかのように顔をしかめ、黙り込んでしまう。居たたまれなくなったように、ずっと目を逸らすアイザックの態度には、何かしら、いつもの彼とは違う不自然さがあった。

そう言えば、今日のアイザックは、何から何まで彼らしくなかった。クリスターのやり方は承知してこれまで一緒に行動してきたものを、急に、やはりついていけないなどと言い出したことも妙だ。それに、クリスターのレイフに対する執着ぶりもアイザックはずっと承知していた。面白くは思っていなかっただろうが、今更言っても仕方のないことを蒸し返して人を責めるような男ではない。一番引っかかるのは、クリスターにとっての自分の立ち位置について、彼がやけに否定的な感情を漏らしていたことだ。

まるで、アイザックの胸の奥にばらまかれた、1つ1つはごく小さな不満の火種が、何かに刺激されて、一気に膨らみ爆発したかのような―。

「一体、どうしたんだ、アイザック：さっきから君らしくないことばかり言っているぞ。そうだ、お互い頭を冷やして、よく話し合おう…何か、あったのか…？」

アイザックはのろのろと頭を巡らせ、クリスターを見た。大きく見開いた黒い瞳は、自分でもどうすればいいのか分からないというような、惑いと迷いに揺れ動いている。

「クリスター、俺は―」

アイザックの喉が大きく上下した。意を決して彼が再び口を開きかけた、その時、部室のドアが軽くノックされた。

アイザックはぎょっとなってドアの方を振り返った。クリスターも思わずそれにつられて目を上げたが、まるで何かに怯えているようだ、アイザックの緊張ぶりに思わずにはいられなかった。

ドアが開いて、何も知らないダニエルがひょこっと顔を覗かせると、怒らせていたアイザックの肩から力がぬけた。

「あ、やっぱりここにいたんですね、クリスターさん」

ダニエルはクリスターの姿を認めた途端、素直な喜びに瞳を輝かせたが、すぐに、この場の只ならぬ雰囲気気づいて眉をひそめた。

「どうしたんですか、2人とも、そんな恐い顔をして…まさか喧嘩をしていたって、訳じゃないですよね…？」

クリスターはアイザックの腕を掴んだままでいた手を離すと、幾

分ぎこちなくダニエルに笑いかけた。

「違うよ」

アイザックを見ると、彼は一瞬何か言いたげな表情をしたが、やがて諦めたように頭を振った。

「僕は、しばらく席を外しましょうか？」

「いや、その必要はないぜ、ダニエル」

遠慮して出て行こうとするダニエルに親しげに腕を広げて近づいていくアイザックは、一見、いつも通りの余裕を取り戻していた。

「俺の方こそさ、邪魔者は早々に退散するわ。クリスターを見つけた途端、あんな嬉しそうな顔で笑いやがって、何だか見てるのが馬鹿馬鹿しくなるくらいだったぜ。おお、そういや、おまえ、夏休みは親元には戻らず、寮に残るんだってな。片時もクリスターとは離れたくないってか？」

「な、な、何を言うんですかつ」

アイザックがいつもの調子でからかうと、ダニエルはすぐに真っ赤になって、むきなって否定しかかる。彼らの普段どおりの軽いスキンシップだ。

そうしてアイザックは、ダニエルが本気で憤慨するまで一通りからかうと荷物をひよいと肩に引っ掛けて、先に部室から出て行った。

クリスターに対しては、ダニエルの手前だろうか、何事もなかつ

たような態度で、コリンの所に立ち寄った際にまた連絡を入れるとか、実家にしばらくいるつもりだが、なるべく早くにこちらに戻るようになるとか言い残したが、その際にも彼はクリスターの目をまともに見ることを慎重に避けていた。

そんな彼に、クリスターもつい普段どおりの態度で返してしまった。

だが、もしも――。

もしも別れ際、一瞬でもアイザックが振り返ったり足を止めたりして、追いつがる余地をクリスターに示してくれれば、すぐに彼はそうしただろう。

しかし、アイザックは追い立てられるように素早く部屋を出て行ってしまい、クリスターはと言えば、器用そうでいて、自分から断ち切られていく人の心を繋ぎ止める術にはあまり長けてはいなかった。

そして、間もなく彼は、この時アイザックを黙って見送ってしまったことを後悔することになるのだ。

数日後。11年生としての最後の学期をクリスターは滞りなく終え、三カ月間の長い夏休みが始まった――。

第4章黒い羊（4）

夏休みが始まったばかりのある朝、レイフがパジャマのままあくびをしながらぺたぺたと1階のキッチンまで下りていくと、いつもならとうに仕事に出かけているはずのヘレナがいたので、びっくりして足を止めた。

「あれ、母さん、どうして―？」

言いかけて、そう言えば、出産に備えてしばらく仕事は休むと彼女が言っていたことを思い出す。

「おはよう、レイフ。いいタイミングだったわね、丁度コーヒーができたところよ」

「なんか、母さんが家にいるって不思議…」

レイフが落ちつかなげに腕をかきながら椅子に腰を下ろすと、ヘレナはマグカップに入れたコーヒーをくれた。

いつも通り、砂糖はスプーンに2杯。一口すすって、ちょっと苦いかなとレイフは首を傾げる。

「今まで忙しかったのに、いきなり時間がたくさんできてしまって、私も慣れるまでしばらく落ち着かないでしょうね。まだ当分仕事を続けても差し支えはないと思うのだけれど、ラースはとにかく胎教に悪いことは駄目だと言うから…」

「別にいいじゃん、仕事のことなんか忘れて、のんびりすればいい

よ。音楽聴いたり花いじったり、胎教って奴によさそうなこととしてさ。父さんもあかちゃんのためならって張り切ってるし、この際会社は任せちまえよ」

レイフが明るく勧めるのに、ヘレナは微妙で曖昧な表情になって返した。

「ええ…ただちょっと気になることがあったから、もう少しオフィスの様子を見たかったの」

「何かトラブルがあるのかよ？」

「ううん、違うの。私の取り越し苦労かもしれないけれど―何だか、この頃オフィスの空気が変わってきたような気がするのよ」

「人間関係がうまくいかないとか？ 父さんの話だと、新しく入ったインターンの子がすごく仕事できて、性格もよくて、皆ともうまくいってるし、何も問題はない様子だったけどな」

「そうね、確かにジェイコブは何もかもできすぎるくらいによくできた子だけど…ラスや皆があんなに気に入って可愛がるのも不思議じゃないくらい…でも―」

才気に溢れたヘレナらしくない歯切れの悪い口調をレイフは不思議に思ったのだが、別にそれ以上追求しようと思うほど、親の仕事に興味があるわけでも、彼女の話を深刻に受け止めたわけでもなかった。

コーヒーをすすり、自分で焼いたトーストにたっぷりバターとジャムを塗りつけてかぶりつくと、レイフは家の中の物音にそっと

聞き耳をたててみた。

「なあ、母さん…クリスタは朝からどこかに出かけたのか？」

なるべくさり気なく聞いたつもりだが、ヘレナの耳にはきこちなく響かなかっただろうか。

「あなたが起きてくる1時間くらい前に出て行ったわよ。どこに行くのか場所は聞かなかったけれど、あのダニエルって子と一緒に遠出をするから、帰りも少し遅くなると言っていたわね」

「そ、そうか…」

レイフは思わず顔をしかめそうになった。目ざとい母親に怪しまれないよう、とっさにコーヒを飲むふりをしてうつむく。

「この頃、クリスタはダニエルを随分と可愛がっているのね。休みの度に2人で出かけているでしょう？ 特定の友達と常に一緒に行動するということのないあの子だったのに、どういう心境の変化なのかしらね。いつも人間関係については淡泊すぎて、あれで本当に心を許せる親友などできるのかしらって、心配するくらいだった…でも、ともかく大事に思える人ができたのはいいことね」

「そうだね…」

胸にわだかまる複雑な感情をもてあまし、レイフがおざなりな返事をするにとどめると、ヘレナはすかさず切り込んできた。

「…恋人なんでしょう？」

思いも寄らないヘレナの指摘に、レイフはぶはっと口からコーヒーを吹き出した。

「か、母さん、どうして知ってるんだよっ…?」

コーヒーが気管に入ってしまったてむせながらレイフが見上げると、やけに落ち着き払ったヘレナと目が合った。レイフの反応をじっと観察している。

「やっぱり、そうだったのね」

「あうっ」

しまったと思った時には、もう手遅れだった。レイフは真っ赤になって自分のうかつな口を押さえ、恐々ヘレナの様子を窺った。するとヘレナは、取り乱すどころか、思春期の子供を持つ母親としてはあっぱれなほどの冷静沈着な態度で応えた。

「安心なさい、私は、このくらいのことで動揺しないわ」

「そ、そうなんだ」

改めて、こういう肝の据わったところはクリスターにそっくりだなとレイフは思った。我が母ながら、全く恐れ入った。

ヘレナはレイフが汚してしまったテーブルをてきぱきと片付けて彼のために新しいコーヒーを注いでやると、その向かいに腰を下ろした。

「それにね…クリスターが男の子を好きになったことは、別にそれ

ほど問題じゃないの。むしろ、無理して女の子と付き合って、二股こそかけなくてもひどい時には月替わりでとっかえひっかえしていた頃のあの子の方が、今よりよほど私は心配だったくらいよ。長続きはしなくとも、恋人と呼べる人が傍にいるおかげであの子が幸せなような顔をしていたのならともかく、デートから帰ってくる度にいつも疲れて憂鬱そうな顔をして、眉間の皺が深くなるばかりだったんですもの。一体どうするつもりなのかしらと氣をもんだし、相手の女の子の立場に立って考えれば許せないものもあった…でも、クリスタは根が真面目で、真剣に付き合おうという努力が垣間見えるだけに、どう諭せばいいものかと頭を悩ませていたの。大体、あの子は私の前では今でもいい格好をしたがって、自分の間違いなど絶対認めないし、そういう空しい付き合いはやめなさいと正面から言えば、すぐに理論武装して反論しかかるでしょう。普段親に対しては言葉を出し惜しみしているのではないかと疑いたくなるほどのだんまりのくせに、いざとなると口が達者になるんだから、始末におえないわ。全く、あなたの半分でも素直に育ってくれば、よかったのにね。それが…確か去年のクリスマス辺りからしばらく精神的に荒れた時期が続いて―最近になって、ぱたりと女の子とデートすることはなくなり、代わりに友達と一緒に行動することが多くなった。やっと自分の間違いに氣がついたんだと胸を撫で下ろしたわ…初めは、氣の置けない同性の友達と時間を過ごすことで精神的に落ち着きを取り戻したのだと思っていたけれど、あのダニエルに關しては、ただの友人というわけではないようだと氣がついたのよ」

「で、でもさ、ほんとにいいのかよ、母さん、クリスタの相手が男の子でも…？」

混乱するままに、レイフはヘレナに訴えかける。

「まあ、その点は、親としては複雑だけれど……でも、現にクリスタがダニエルと付き合っているのなら、うろたえても仕方がないでしょう。それに、私はセクシャリティの問題については割と鷹揚だから、あの子達が互いを思いあって、いい付き合いをするなら、頭から否定はしないわ。ただ――」

ヘレナの凜然とした顔に、ふと心もとなげなものがよぎった。

「レースには、当分の間、黙っていた方がいいでしょうね。あの人には、同性愛なんて、きつと理解できない……その点、頑ななくらい保守的よ。他人事なら笑ってすませるでしょうけれど、溺愛している息子が……なんて、決して受け入れられないわ。あの人にとっては、今でもあなた達は、自分が肩車をして遊んでやった小さな子供なのよ。打ち明けるにしても、今は駄目……お互い子離れ親離れして、1人の人間としてちゃんと向き合えるようになるまでは」

「親父は……確かに駄目だろうなあ。っていうか、母さんがさばけすぎてるんだと思うぜ……でもさ、つまり、母さんの目から見ると、クリスターがダニエルと付き合うのはいいことなんだ……?」

ヘレナが2人の交際を認めたことが何だか悔しくなってきた、レイフは駄目押しのように聞いてみる。

「たぶんね。なぜかと言うと、近頃のあの子は、前ほど無理はしなくなかった、自分だけで全てを背負い込もうとすることもやめて、少しは他人に対して心を開こうとしているような気がするからよ。ダニエルと付き合いだしてそうだったのか、それとも、そういう心境

の変化があった末にダニエルの手を取ったのか、その辺りは分からないけれど―クリスターは器用そうでいて、人と心を通わせることはとても下手な子よ。何かにつけ頭が切れすぎものだから、つい他人の心も先に先にと読んで結論を素早く出してしまふ…でもね、人間関係において大切なのは結論よりむしろ過程の方でしょう。数式を解くようには人の心ははかれないわ。クリスターが、あの調子で自分の考えを押し進めていけば、あの子にそのつもりがなくても、周りの人間は自分の気持ちをないがしろにされたと誤解しかねないわ。クリスターはクリスターで、他人から思わぬ非難や反発を受けて戸惑うし、どうせ自分の思いなど誰にも理解してもらえないと心を閉ざし、表面だけの付き合いにとどめてしまふ。これじゃあ、本当の親友や恋人を作ることは難しいでしょうね。たぶんダニエルは…あの子にとって、自分を取り繕って接する必要がない相手なのよ。もしかしたら、ちょっと似たところがあるのかもしれないわね…一度会って話した時、とても利発で人の気持ちを察することに長けた子だと思ったわ。残念ながら、今まで付き合い合った女の子の中で、そこまでクリスターの心を思いやれる人はいなかったんでしょ。ダニエルと一緒にいることでクリスターが心を癒され、自分や周りの状況を冷静に見つめなおす余裕を取り戻すことができるのなら…私は2人の関係にとにかく言うつもりはないわ。それに、先のことはどうなるか分からないでしょう…長く付き合うかもしれないし、そのうち別れて違う人を選ぶかもしれない…2人ともまだ10代の少年よ。ただクリスターは今、自分の心に寄り添ってくれる誰かを切実に必要としているんだと思うわ」

「でもさ…」

焦燥感にも似た切迫した感情に駆られて、レイフは思わず口走った。

「でも、それは別にダニエルでなくっても、よかったんじゃないのかよ」

ヘレナの琥珀色の瞳が瞬くのに、レイフは怯んで、のろのろとうつむいていく。

（ああ、情けねえな。やっぱり、オレ、やきもち焼いてんのかな、あの2人にさ）

生まれた時から寄り添いあって生きてきた、レイフの半身は、今は他の人を必要としている。そう考えることは、やはり辛い。

（クリスターは、オレの手を振りほどいて、ダニエルの所に戻っていった：要するに、オレから離れるため、あいつは他の誰かに支えてもらうことを必要としているんだ。ここまで本気であいつがオレとのつながりを断ち切ろうとするなんて：こんなこと、初めてだ。それも、心境の変化って奴なのか？　ああ、どうすりゃ、あいつの心を引き戻せるんだろう：オレはこんなにクリスターが必要なのに、あいつは、もうオレを求めてくれないんだろうか）

そんなことをぐるぐると思い悩むうちに、レイフは自分をじっと見守るヘレナの存在も忘れていった。

（クリスター、おまえに必要とされないオレなんか、生きてても意味ねえよなあ）

感情の起伏の激しいレイフは、落ち込む時は一気にどん底まで落ち込んでしまう。母親がクリスターとダニエルの付き合いを好意的に見ていると知って、たちまち自分の存在意義に自信をなくして、しよげかえってしまった。

そんなレイフに向けられたヘレナの聡明な瞳は氣遣わしげに揺れていた。感情を隠すことのできないレイフの思いなど、彼女には、手に取るようによく分かっただろう。嫉妬などというさもしいものではなく、身を切られるような激しい痛みを覚えている息子に、しかし、母として一体どんな助言ができるのか。

「あなた達を初めからひとつに産んであげられたらよかったのかしらね」

ヘレナの唇から溜息混じりにポツリと零れ落ちた言葉に我に返ったレイフは、問いかけるような表情をうかべた。

ヘレナは迷うような目でしばしレイフを見つめていたが、やがて、ごくさり気なく尋ねた。

「ねえ、レイフ、あなたとクリスターは…この頃一体どうなっているの…?」

「ど、どうって…」

「うまくいってないんでしょう? あの子と喧嘩でもしたの…?」

「あ、分かるんだ?」

「あなたが、そんな切なそうな顔をしてクリスターのことを話すのを聞けばね…ダニエルが原因…?」

ヘレナがあくまで穏やかなのは、レイフにとって救いだった。おかげにあまりうろたえることもなく、落ち着いて、こんな話をする

ことができる。

「まあ、クリスターがホモに走ったなんてーうわぁ、言っちゃったー知った時にはかなり動揺したけれど、でも、それ自体が許せないって訳じゃないし、ましてやダニエルを憎んだり恨んだりはしねえよ。クリスターがそれで楽になれるなら、しばらくの間恋愛ごっこでも何でも好きにすりゃあいって思いもしたよ。ただー」

レイフは、とつとつと語りながら、自分の思いを再確認していた。

同性愛というのは、そう言えば、長い間2人の間で話題にするにとすらタブーになっていたのだ。それは、どうしても、2人が4年前に犯した、あの過ちの記憶につながっていくからだ。

（クリスターが女の子達と付き合っていた時は、オレはまあ多少ひがんだり寂しがったりはしたけれど、こんなにうるたえたことはなかった。女が相手なら仕方がないって、自分を無理にでも納得させることができたのかもしれない。それは、オレ達が昔やっちゃったことに比べて圧倒的に正しいことなんだから、太刀打ちできないって思おうとしていたーだからクリスターがダニエルを選んだことが…あいつ今でも、男相手にそういうことができるんだって分かったことが、すごいショックだったのか）

そう考えると、クリスターとダニエルのキスを目撃してしまった時の自分の理不尽なまでの憤りと取り乱しようにも納得がいく。

（畜生）

今更のように何だか腹が立ってきて、レイフは憎々しげに舌打ちをした。

（何だよ、クリスターの奴、ちゃんと男ともやれるくせに、どうしてオレを素通りして違う所に行っちまうんだよーって、ち・が・う・だろっ！）

いきなりレイフが、あうっというような奇声を発してテーブルの上に突っ伏してしまったのに、静かにコーヒーを飲んでいたヘレナはぎくりとしたようだ。

「レ、レイフ…?」

額をテーブルにぐりぐり押し付けて1人で身悶えしているレイフに、ヘレナは用心深く呼びかけた。

「ううん、やっぱり、朝っぱらから、この話題は重過ぎる…」

どきどきいっている心臓の鼓動がヘレナに聞こえるのではないかと疑いながら、レイフはちらつと彼女を見上げた。

（並みの母親よりよっぽど理解のある母さんでも、自分の息子達の実はできていたなんて知ったら、こんなふうに落ち着き払ってはいられないよなあ）

火がついたように熱い頬を指先でそろりと撫でて、レイフは溜息をついた。

（あれは、オレ達2人だけの秘密…もう決して蘇らせてはならない、忘れようと胸に刻んで、つる気持ちをごまかしごまかし、普通の兄弟として、ここまで何とか来られた…でもさ…）

再び目を伏せ、ざわめく心を静めようと胸をぐっと掴みしめると、ヘレナにというよりも、ほとんど独り言のようにレイフは呟いた。

「オレは、やっぱり今でもあいつにとって一番の相棒でいたいんだ……あいつが弱っているなら、オレのこの手で支え、守りたい。そのために、たぶん、一緒に生まれてきたんだ。他人から見りや幼稚な独占欲だ、たわ言だって言われるかもしれないけど、この役割は、他の誰にも譲れない……悪いけど、ダニエルにだってやれねえよ」

分かたれた双つ身への度を越した恋慕は、自分達以外の誰にも理解できないだろう。たとえどれほど身近で、自分達を愛してくれている人達であろうと、受け入れられるとは思わない。

だからレイフは、我とも分からぬ衝動のままに、心の中でダニエルに、母や父に、自分を取り巻く漠とした人々に対して、詫びる。

（ごめん、ごめんよ……あんたたちを全員敵に回しても、傷つけても、たぶんオレは――）

あまり物事を深く考えたり、結果を考えて行動したりすることの苦手なレイフでも、この想いを貫いた末に待ち受けているものについて、漠然とした予感があったのかもしれない。

レイフが柄にもなくしんみりと物思いにふけっていると、ヘレナの感慨深げな呟きが聞こえた。

「クリスターの後ろをいつもついて回っていた、甘ったれのあなたが、あの子を守りたいなんて言うようになったのね。今までずっとクリスターの方があなたを守ってきたのに……」

レイフはまだ少しぼんやりとした顔でヘレナを眺めやった。

もっと批判めいたことを言われるのを覚悟していたのに、そうじゃないんだと少し意外に思った。

「ねえ、レイフ：あなたが、そうまで強くクリスターを思っているのなら――ちょっと相談というか、あなたに確認したいことがあるのだけれど」

「へ？」

母から相談など持ちかけられたことなど初めてだったので、レイフは少々面食らった。

「クリスターのことよ。近頃、あの子――様子がおかしい、何か隠しているようだと思うのだけれど、あなたが見ていて気づいたことはない？」

「クリスターが変なのは、しょっちゅうだよ」

「私は真面目に聞いているのよ？」

母の目が細く鋭くなったのに、レイフはおっかなそうに首を縮めた。

「隠しているって：ダニエルとの付き合いを内緒にしているとかいうレベルの話じゃなくて？」

「私も、初めは、あの子の態度が妙に頑なであったり、話していても他のことに気を取られて心にここにあらずだったり、家と学校以

外の場所での行動に不明な点が多かったりするものも、思春期によくあることだと思っていたのだけれど――何だか、違うような気がするの。それで、もしかしたら、あなたに何か心当たりがないかと思つて」

「心当たりって…」

母が言わんとすることがなかなか飲み込めず、レイフは首を傾げるばかりだった。

「以前にも確か似たようなことがあったのよ…家族には隠して、何かを企んでいるというか、秘密の計画を進めているような…もっとも、怪しいと思った時には、あの子は既に自分で全てを終わらせていて、何食わぬ顔で普通の生活に戻っていたのだけれど」

「それって、いつ頃の話だよ」

「そうね…確か2年ほど前かしら、あなたが学校に馴染めずにちょっと荒れていたことがあった…その辺りよ」

「あ…」

瞬間、レイフの顔色が変わった。母が言及したのは、丁度、レイフがJ・Bの手に落ち、それをきっかけにクリスターとJ・Bの間で闘いが勃発、レイフが解放された後も2人の争いが水面下で繰り広げられていた時期だと気がついたのだ。

「あなたを、あの頃付き合ひのあった悪い仲間達から引き離すために、あの子はあまり大きな声では言えないような危ない橋を渡った…大まかに言うとなんなようなことだったんでしょね。でも、私

は昔のことを蒸し返してあなた達を困らせる気はないから、そんな苦しそうな顔をするのはおよしなさい、レイフ」

「う、うん」

少しほっとしながら、レイフはいつにも増して鋭く勘の冴えまくっている母の様子を窺った。懸命なヘレナは、事情が分かっている、口にすべき時期や相手ではないと判断すれば、多くを胸に秘めておく。特に、精神的にクリスターよりずっと未熟で幼いレイフに對しては、自分の懸念をこんなふうに打ちあけることは、これまでなかった。

「ダニエルと付き合いだしたことで精神的に安定したように見えて：一方でこの頃のクリスターからは、2年前のあの時期と同じ危険な匂いがする：とても気がかりよ」

母の呟きを聞きながら、レイフは胸の奥に得体の知れないもやもやが広がっていくのを覚えていた。

「心当たりなんだけど：もしかしたら、オレ、あるのかもしれない。はっきりとした証拠があるわけじゃないけど：」

J・Bの姿を一瞬垣間見た時から、あの怪物の影が密かに身近な場所に忍び寄っているのではないか、そんな嫌な予感レイフの胸にとりついて離れない。以前、クリスターに、この漠然とした危機感を訴えたことはあったが、彼は心配性だと笑って取り合ってくれなかった。クリスターがそう言うのなら間違っているのは自分の方かと、その時はレイフも納得した。しかし、実際クリスターは、いつもレイフに本当のことを話してくれるわけではないのだ。

「ただ、クリスターの腹の底で考えてることや、あいつがオレに見えないところで何をしているかまでは分からないよ。この頃のあいつは何かと理由をつけてオレを避けてるし：大体、クリスターが本気で隠し事をしようと思ったら、オレなんかに、簡単に尻尾を捕まえられるよ」

今度もクリスターに騙されていたのかなと悔しく思いながら、レイフはぷつと頬を膨らませた。

「それでも、クリスターが自分でも思いも寄らないような隙を作るのは、あなたに対してだけなのよ」

レイフはきょとんと瞬きをした。

「どうしてだか、クリスターはあなただけは最後まで騙しきることができない：心を隠し切ることができないの。あなたは、そう意識もせずに、あの子の心を覆う殻を簡単に破って、するりと中に入ってしまうのね」

「そ、そうかなあ」

こんな言葉で気をよくしている場合ではなかったろうが、レイフはつい顔をほころばせ、照れくさそうに頭をかいた。

「だからね、あなた、クリスターにくつついてなさい」

「は、はい？」

「たぶん、クリスターがあなたを避けるのは、あなた相手に秘密など保てるはずがないという危惧もあるからよ。ダニエルをだしにし

ているとまでは言わないけれど、あなたとの関係がぎくしゃくしている現状を利用して、あなたを遠ざけ、その隙にまた何か大それたことをしでかそうとしているのではないかしら」

「大それたことって…?」

「それは、あなたしか突き止められないと思うわ」

ヘレナは当惑するレイフの目を正面からしっかり捉えると、穏やかな理解に満ちた態度で、辛抱強く彼に言い聞かせた。

「あなたの中にもためらいや迷いはあるでしょうけれど、たとえクリスターが嫌がろうとあなたは今彼から離れるべきではないの。あなたの子を守り、支えるために一緒に生まれてきたのだと言ったわね。だったら、これがあなたのためたすべき役割よ…そう、あなたにしかできないの。だから、レイフ、クリスターの傍にいて、あの子が道を過たないよう、見ていてあげて…クリスターは時々自らをあえて危険にさらすような無謀なことをする傾向があるから—もしもあなたの手に余ることがあれば、私に話してくれればいいわ。いざとなれば、私はどんなことをしても、あなた達を守るつもりよ」

「母さん」

堂々たる母親の姿に、レイフはちょっと感動してしまった。改めて、クリスター、オレ達の母さんはすごいと心の中で感嘆の声をあげていた。

クリスターが同性の恋人と付き合っているなどという些事には捕らわれず、あくまで大所高所から物事を見ている。誰にも言えない問題を抱えた子供達に対して、思うことはあっても、あえて過剰な

干渉はせず、おぼつかない足取りで少しずつ大人になっていく彼らが、道を踏み外さないよう、本当に危険な目には合わないよう、傷つかぬよう、温かな愛情のこもった揺るがぬ眼差しで見守っている。

（オレらくらいの年ならもっと親に反抗するものだろうけど、さすがに母さんに歯向かう気にはなれないや…いや、普通に勝てないっしょ。それに、母さんの言うことなら正しいし信用できる…クリスタが危なっかしいからオレに見ていてやってくれなんてさ、何だかお墨付きをもらったみたいだよな。自信持っていないのかなって、我ながら単純だけど、思っちゃまう。でも―）

レイフはちらっとヘレナのまだ全然目立たないお腹を見やった。

「あのさ、母さんは別にオレ達を守ろうとしてくれなくてもいいよ。自分達の問題くらい2人で何とかしてみろ…だから、クリスタのこともしばらくオレだけに任せてくれよ。だって、オレ、今の母さんに余計な心配も負担もかけたくないよ」

真顔で訴えかけるレイフを、ヘレナはつくづくと眺めたかと思うと、嬉しそうに口元をほころばせた。

「あら、氣遣ってくれて、ありがとう。まだまだ子供だとばかり思っていたけれど、あなたも随分しっかりしてきたのね」

ヘレナが楽しげに囁くのに、レイフは不満そうに唇を尖らせた。

「ちえっ。オレだって、いつまでもガキじゃねえよ。もう18才になるんだぜ、立派な大人だよ」

ヘレナがすっかり冷めてしまったレイフのコーヒーを新しいものに取り替えてくれたので、レイフはまた砂糖を放り込んでかき混ぜ、揺らめく黒い液体の表面をぼんやりと覗き込んだ。

（オレの役割、か）

ヘレナに言われたことを一生懸命に考えているうちに、レイフの顔から次第に迷いは消え、自信を取り戻した、晴れ晴れとしたものになっていった。

思わず、一気にコーヒーを飲もうとしかけて、レイフはあちっと悲鳴をあげる。

「レイフ？」

洗い物をしていたヘレナが振り向くのに、レイフは照れくさそうに笑いかけた。

「ううん、クリスターが離れていくってうじうじ悩むより、オレがあいつのために今やれることをやってみるんだと、自分に発破をかけてたんだ。ダニエルとは違うやりようで、あいつを支えてみるよ。そうすりゃあさ、あいつもそのうち思い出してくれるかもしれない、オレ達が――」

マグカップをテーブルの上に戻しかけたレイフの手が微かに震えた。調子よく言いかけた言葉を、彼は途中でぐっと飲み込む。

（ひとつだということ――）

ふいに、体育館の裏でクリスターをじっと抱きしめていた時の記

憶が蘇り、レイフは赤くなって咳込んだ。

「大丈夫？」

ヘレナが胡乱そうな顔をして体の向きを変えるのに、レイフはうろたえた。

「あ、いや……とにかく、そういうことで、オレ、がんばるよ。母さんは心配しないで、あかちゃんのことだけ考えていればいいからさ。さてと、休みだからって、いつまでもパジャマのままにいるのもなんだし、着替えてくるよ」

何だか、このまま母と向き合っているとまたしても気持ちを見透かされそうで、レイフは幾分慌てて席を立った。

「ありがと、母さんのおかげで、少し吹っ切れたよ」

レイフは素直な感謝の言葉をヘレナに投げかけて、そのままあたふたとキッチンを出て行った。

（母さんの前で、あんまり、ああいったやばいことを考えたり想像したりするのは、まずいよなあ。オレ、絶対顔に出るし）

廊下に出たところで、レイフはふっと溜息をついた。そのまま少しぼんやりとした。

（クリスター）

今家にいない片割れが、レイフは急にたまらなく恋しく感じられた。

（オレ達は違う体を持った、ひとつの生き物で：だから、もとのひとつの状態に戻りたがるし、離れていると不安になる。それはとっても不自由なことだし、いつまでも一人前の人間にはなれないってことなのかもしれない。でもさ、片割れが弱って倒れそうになった時に支えられるこの体があることに、母さんがオレ達を別々に産んでくれたことに、やっぱりオレは感謝したいよ、クリスター）

とりあえず、クリスターが家に帰ってきたら、どんなに遅くても不機嫌な顔などせずに、戻ってきてくれて嬉しいという正直な気持ちで迎えようとレイフは思った。

いつだって、レイフが心を開いて接すれば、クリスターも、おまえに会えて嬉しいという心を隠し切ることなどできないのだから。

第4章黒い羊（5）

ターンを30回、超えたところで、クリスターはもう数えるのをやめた。

この公営プールで出された記録が何回か知らないが、この調子で泳ぎ続けたら、たぶん50はいけるだろう。

ほとんどあらゆるスポーツに対応できる、鍛え抜かれた体は、意識して使わなくとも一番無駄のない動きを知っているかのようだ。腕は力強いストロークを描き、足は水を打ち続ける。飽くことも、疲れも知らず、しゃにむに。

水の中では、周囲の他の泳ぎ手達がたてる物音や声は遠く歪んで聞こえる。何だか自分だけ隔絶された別世界にいるような錯覚にふと捕らわれた。

伸ばした指先に固いコンクリートの感触を覚えるや、クリスターは反射的に体を捻って再びターンをきった。

ぱしゃんと上がる水しぶき。

いっそ新記録を作ってやろうかーふっとそんな思いがクリスターの脳裏を掠めたが、たかが遊びにそこまで真剣になることはないかと思ひ直す。

クリスターはプールの中ほどでペースを落とし、後はクールダウンするようにゆったりとプールサイドまで泳ぎきって、水の中から立ち上がった。

瞬間、周りで彼の泳ぎを見物していた人々の間からちょっとした歓声と拍手があがった。

クリスターは顔に流れ落ちる水を振り払うように頭を振り、あがった息をしばし整えた。

頭上から差し込んでくるまぶしい光に目を細めてふと見上げると、プールを覆う高い天蓋にはめこまれた窓の向こうには、よく晴れた青空が広がっている。時間は、そろそろ正午を回った頃だろうか。

「クリスターさん」

声のした方に目を向けると、プールサイドに坐って休んでいたダニエルがこちらに向かって大きく手を振っていた。

クリスターは軽く手を上げて、彼のもとまで泳いでいった。

「クリスターさん、すごかったですね。全部で、ええっと：43回です」

クリスターがタイルの縁に手をかけてダニエルの足元に立つと彼は頬を赤くして興奮気味に伝えた。

「ああ：そんなものか」

「まだ余裕がある感じですね」

「うん：50回くらいやろうと思えばやれそうだったけれど、でも、何事も過剰はいけないと改心したばかりだから、やめたよ」

視線を感じて後ろを見やると、反対側のプールサイドに並べられた椅子に坐った女の子達が何やらはしゃいだ声をあげ、興味と期待感をこめた視線や笑顔向けてきた。少し前なら近づいて声くらいかけてみたところだろうが、今はもうそんな気分にはなれず、クリスタ―は無関心に背を向ける。

「…あの子達、さっき僕のところに来て、あなたのことをあれこれ聞いていきましたよ。ちよつと煩かったです」

「へえ」

ダニエルは少し拗ねたような顔をして、やり場のない鬱憤を晴らすように足先で水をかいている。

子供っぽい仕草にクリスタ―はつい微笑みを誘われ、ダニエルの細い足首をなだめように撫でながら優しい声で囁いた

「煩いと思うなら、君の恋人だと教えてやればいいんだよ。そうすれば、大抵女の子は怯んで逃げていくはずさ」

「こっ…恋人なんて、そんな…」

クリスタ―がからかうと、ダニエルはうっと言葉に詰まって、たちまち顔から白い胸の辺りまで茹でたように真っ赤になってしまう。

（可愛いな）

普通にそう思えるくらいには、この子を好きになってきたのだろうか―そんなことを考えながら、クリスタ―はダニエルに手を差し

伸べた。

「来いよ。もう充分休んだだろ？」

「でも、あなたのあんな泳ぎを見せ付けられた後じゃ、ちょっと…」

「何だよ、少しは体力をつけたいから、水泳を教えてくれって言っただのは君だろ？」

悪戯気を出したクリスターは、躊躇うダニエルの手を捕まえて強く引っ張った。

「わっ」

ダニエルは悲鳴と共に濡れたプール端から簡単に滑り落ち、クリスターの広げた腕の間に収まった。

「…強引ですね」

頭から水しぶきを浴びて濡れそぼったダニエルは、大きな目で恨めしげにクリスターを睨みあげたが、むき出しの肩に彼が掌で触れると小さく震えた。

「本当に君は華奢だね…肩も腕も…大事に扱わないと壊れてしまいそうだ」

クリスターがしみじみと呟くと、ダニエルは困ったように眉をひそめた。

「クリスターさん…僕は…」

「黙って…」

近くのプールサイドを歩いていた女性が、何をしているのかといぶかるような目を親密な様子で囁きあっている2人に向けながら通り過ぎる。

クリスターはさり気なくダニエルの肩から腕に手を滑らせ、水の中でそっと彼の指に指先をからめた。ダニエルは色白の顔を薄っすらと赤らめたが、傍目にも分かるような動揺は見せない。

（僕らが一応恋人同士だということは、やっぱり内緒にしておいた方がいいかな。この子が嫌な目に合わないよう、僕が気をつけてあげないと――）

大都会ボストンにも近く、この付近は同性愛に比較的寛容なりべラルな土地柄だとは思うが、やはり誰彼となく自分達は恋人同士だと見せ付けるような真似は慎んだ方がいいだろう。自分とはかく、幼く純真なダニエルには、まだ荷が重い。

（普通の友人のふりをして世間の目をごまかすことなどたやすいさ。ああ、これまで僕が我慢してきたことに比べたら――僕の苦しさになど気づきもしない、無邪気で鈍感なあゝの馬鹿に、あくまでただの兄弟として接しようとしてきた苦労に比べたら、うんと楽だよ。それに、敏感なダニエルは、僕の考えていることもこんなふうにすぐに察してくれる）

水中に隠して手を握り合ったまま、クリスターはダニエルに目配せした。

「実際、君にとって水泳は悪くないと思うよ。浮力のおかげで弱い部分に負担をかけることなく体を鍛えられる」

「は、はい」

それから1時間ほど、クリスターはダニエルにつきっきりで水泳のフォームから息継ぎの仕方から丁寧に教えてやった。

ダニエルは事故で脚を痛めて以来スポーツからは遠ざかっていたため、泳ぎも苦手なのだという。小さい頃は普通にプールに遊びに行っていたらしいから、もともと全く泳げないわけではなく、単に水に慣れていないだけなのだろう。

「…だから、水に慣れ親しんで恐怖心がなくなれば、そのうち体も思うように動かせるようになると思うんだ」

「そんなふうにあなたは簡単に言うけれど、あなたやレイフさんのようなスポーツ万能の天才のようにはいきませんよ」

教えられたように必死に泳いだものの、すぐに息があがってしまい、クリスターの腕にしがみついて引っ張られるがままになっていたダニエルは、疑わしげに言い返した。

「それじゃあ、教えるけど…レイフだってね、ああ見えて、昔は泳ぎだけは駄目だったんだよ」

「え、そうなんですか？」

「小学校に入ったばかりの頃かな、誤って池に落ちておぼれかけて、それからしばらく水を恐がって避けていたんだ。あのまま放ってお

いていたら、きっと今でもカナヅチだろうね。でも、夏休みに僕があいつをプールに引っ張って行って、目の前で他の友達と泳いでやったら、初めは恐がっていたくせに、そのうちじっとしていられなくなっただけ自分から水に入ってきたんだよ。そこから勘を取り戻すまでは、やっぱりレイフだけあって、早かったな。レイフは僕がやることは何でも真似たがったからね。僕が泳げるのに自分はカナヅチだなんて、我慢できなかったんだ。分かりやすいだろ。ふふ、何て言うか、僕はあいつをその気にさせるのが昔から得意だったんだ…」

懐かしげに目を細めて語るクリスターの顔には、幸福そうな温かな笑みが広がっていた。

しかし、そんな自分を澄んだ瞳でじっと見守っているダニエルが存在を思い出し、クリスターはちよつときまりが悪くなった。

「ごめん、ぼんやりして…」

「…それじゃ、クリスターさん、僕の泳ぎを見ててくださいね。せめて一往復くらいはできるよう、がんばりますから」

クリスターの無防備な笑顔の裏に隠された心情になど気づかぬふりをして朗らかに言うダニエルに、彼は少しほっとした。

「無理はするなよ」

本当に察しのいい一人の気持ちに敏感な分、繊細すぎる心を持つ子だ。だからこそ、もう二度と傷つけない。

反対側のプールサイド目指して一生懸命に泳ぎだすダニエルを守る、クリスターの心中は恋人に対するすまなさと自嘲とに揺れて

いた。

（可愛いダニエル：君のことだけいつも考えてあげられればどんなにかいいだろうに、あいつの面影が僕の胸から離れない。恋人と2人きりの時でも、実際にはいつも3人一緒にいるようなものか：ダニエルは何も言わないけれど、聡いあの子には分かっているだろう）

ゆらゆらと揺れる水面を見下ろすと、ぼやけた自分の影が映っている。

傷口から溢れる鮮血を思わせる紅い髪、引き絞られた弓のような、実に無駄のない筋肉のつき方をした逞しい体、長く伸びた手足――。

（切り離すことのできない影のように、いつも僕に寄り添っている。完全に忘れることも、心から閉め出すこともできない：他でもない僕自身の姿が、この顔も手も体も、見るたびにもう1つの似姿を思い出させずにはおかない。分かっている。それでも、僕は決めたんだ――）

大きな水音が上がったのに、はっとしてクリスターが顔を上げると、プールの真ん中辺りでダニエルの腕がもがくように上がるのが見えた。

クリスターは瞬時に水の中に飛び込み、脚を不自然に折り曲げながら何とか水をかこうとあがいているダニエルに素早く近づいて、その背中を抱きとめた。

水面に引き上げるや、クリスターの腕の中でダニエルは激しく咳き込んだ。

「足がつったんだね？」

「は、はい…やっぱり、こっちの脚が僕は弱いみたいでーごめんなさい…」

「謝るようなことじゃないよ」

しょんぼり項垂れるダニエルの頭を見下ろしながら、人目がなかったら優しく抱きしめてキスしながら慰めてあげられるのにとクリスターは思った。だが、こんな感情もこの子に対する後ろめたさの裏返しなのかもしれない。

ふいに、プールの塩素の匂いが鼻について感じられた。

クリスターは、ダニエルの細い肩に腕を回して囁いた。

「そろそろ、上がろうか」

プールに併設されているカフェテリアで2人は昼食を取った。

いつもはもっと空いているのだが、夏休みが始まったこともあって親子連れが多く、少々騒がしい。

「…アイザックは今、コリンさん達と一緒にいるんですね」

「ああ、彼らのアパートでしばらく過ごして、それから3人一緒に1週間ほどどこかにキャンプに出かけるとか言っていたな」

ハンバーガーのつけあわせのポテトをフォークの先でつつきながら、クリスターは何気ない口調で答えたが、後味の悪い別れ方をし

た友人がどうしているのか、実は気になって仕方がなかった。

「連絡はないんですか？」

「ああ」

ダニエルは大きな目をくるりと回して、いぶかしげに小首を傾げた。

「それは、ちょっと変ですね。まめなアイザックらしくない：J・Bのことがあるだけに、別にコリンさん達の身边で変わったことが何もなくとも、それならそれで、こっちはいたって平和に夏休みを楽しんでいるとか、報告くらいあってもおかしくないのに：」

夏休みに入る直前アイザックとクリスターの間で何かあったらしいと察しているのか、クリスターの反応を窺うダニエルの表情は氣遣わしげだ。

「そうだね」

クリスターはこの話題をこのまま続けるべきかどうかしばし逡巡した後、躊躇いがちにぼつりと漏らした。

「もしかしたら、アイザックはまだ僕を許していないのかもしれないな」

「許すって？」

「うん：どうやら彼には、僕に対して思うことが色々あったようなんだ。アイザックは、もともと自分の信条ややり方にとってもこだわ

るタイプの人間だ。それなのに、本当に誠実に僕につくしてくれた
：取材させるだのなんだのと交換条件をつきつけてきたけれど、あ
れは単なる照れ隠しの口実だってことは僕も分かっている。だが、
その裏には、僕に対する小さな不満や苛立ちが隠されていたんだね。
もしも僕が―アイザックのそんな気持ちを汲み取ることができてい
たら：いや、もっと心を開いて彼に接することができていれば、あ
んな他愛もない口論があそこまでこじれてしまうことはなかったん
だろうな」

胸のうちに溜め込んでいたものを爆発させてクリスターをのし
ったアイザックの口惜しげな顔を思い出し、クリスターの心は沈ん
だ。

（一度でも、おまえが俺を友人として仲間として信頼してくれたら
―そうさ、俺を納得させるのに大儀も正義もいらない。1人でJと
戦うなんて無理だから、一緒に来てくれと素直に手を差し伸べてく
れりゃ、それでよかったんだ）

他人を信頼せず、心を開こうとしてこなかったことの報いだろう
か。大切な友人の心をこうしてなくしつつあるのも―。

「この頃の僕はどんどんJ・Bに傾倒していくようで見ていて危う
い、ついていられない言うアイザックに、僕は、それならもう無理
に付き合ってくれなくてもいいと答えてしまったんだ。僕は：そん
なつもりで言ったわけではないんだけど、アイザックは僕に突き
放されたように感じたんだろう。使い捨ての駒のように扱われたと
思ったんだ」

「クリスターさん：」

「自分でも馬鹿だなと思うよ。アイザックがいなければ、僕はとても困ってしまうのに、傍にいてくれと素直に頼む代わりに、それは正反対のことを言ってしまった。これだから、僕には友達ができないんだね」

実に情けない気分で溜息混じりそう呟き、茫洋と周囲を見渡すクリスターに、ダニエルはふいに決然とした顔つきになった。

「そんなふうに愚痴るくらいなら、自分から早くアイザックに連絡すればいいじゃないですか」

ダニエルには珍しい厳しい口ぶりに、クリスターはちょっと驚かされた。

「コリンさんの連絡先は分かっているんでしょう？ それなら、帰ったらすぐに電話を入れてください。そんなふうに諦めてしまうことなんかないんです」

「ダニエル」

「なぜなら、あなたは、本当はそうしたいと思っているからです。アイザックを失いたくないんでしょう？ それなら、彼の声を聞きながら、あなたの言葉でちゃんと謝ればいいんですよ。この際、少しくらいみっともなくても恥ずかしくてもいいじゃないですか、人の心というかけがえのない宝物を手に入れるために、少しは努力してみてください」

胸の深いところを突かれて、クリスターは一瞬黙りこんだ。

小さな手をぎゅっと握り締めてクリスターに分かってもらおうと

全身で訴えているダニエルを、彼はつくづくと見つめた。

「友情を求めるのに手を抜くなどということか：何もせずに他人同士が分かり合えるはずもない。確かに、そうだ：僕が傲慢だった」

ダニエルの言葉を吟味しながら、クリスターはあの眼鏡で痩せぎすの、皮肉っぽく輝く黒い瞳が魅力的な、毒舌家だが頼りになる友人のことを考えた。

アイザック。まだ間に合うものならば、取り戻したいと思う。テーブルの上に乗せた手をクリスターは握り締めた。

（それに――最後に会ったアイザックは、今から考えてもどこか様子がおかしかった。うっかり口を滑らせた僕の一言を真に受けて、あんなにかつとなるくらい神経が張り詰めていた：僕と口論する前に、彼を追い詰めるような何かがあったんじゃないだろうか。そう、やはり、一度彼を捕まえて確かめた方がいい。これは僕の杞憂であつてほしいけれど、もしかしたら――）

沈黙考をしばし続けた後、クリスターは、我慢強く自分の答えを待っているダニエルに微笑みながら頷き返した。

「分かったよ、ダニエル：とりあえず今夜にでも電話を入れて、アイザックと話してみるよ。コリンのアパートに彼がまだいるなら、一度こちらから会いに行ってもいいな」

ダニエルはよほど安堵したのか、怒らせていた肩を下ろして溜息をついた。

「心配かけてすまないね、ダニエル」

するとダニエルは苦笑を含んだ眼差しをクリスターに投げかけた。

「だから―そういうところがあなたは水臭いって、不満の種になるんですよ。ほとんど弱点なんかない、完璧に見えるあなただからこそ、もっと他人に甘えたり、時には弱さを見せたりする方がいいんですね、きっと」

クリスターがじっと押し黙るとダニエルは顔を赤らめ、慌てて否定するように手を振った。

「ご、ごめんなさい…生意気なことばかり言って…ついさっきも、まともに泳ぐこともできないで、おぼれかけてクリスターさんに助けてもらったような僕なのに―」

「さっきは僕が君を助けて、今は君が僕に必要な助言をくれた―それだけのことだよ。ねえ、ダニエル、僕達は何だかことあるごとに謝りあっているような気がするけれど…そういうのはもうやめないか。水臭いだろ。そう、ここはむしろ…こうすべきだろうな」

クリスターはテーブルに置かれたダニエルの手をそっとすくい上げるようにして握り締めた。

「ありがとう、ダニエル」

「は、はい」

ダニエルはクリスターに手を取られたまま、おずおずと頷いた。

それからしばらくして、クリスターは車でダニエルを寮まで送っ

ていった。

今日は、午後からアルバイトが入っているのだと言うダニエルに、クリスターはつい心配そうな目を向けてしまう。

「ダニエル：何度も言うようだが、その仕事、やめてくれないか」

「大丈夫ですよ。あなたの思うような危険な目に僕があうことなんてありません。J・Bが僕の仕事場に現われることなんて：まずないんですから」

助手席に坐ったダニエルは自信ありげに笑うが、クリスターの懸念はぬぐいきれない。

こんな会話を2人はこれまでことあるごとに交わしてきたのだが、仕事を続けるというダニエルの意思は固かった。

クリスターが心配するのも無理はなかった。最初に聞いた時には、また思い切ったことをするものだと思っただけだ。ダニエルのアルバイト先―それは、ブラック家の主治医を勤める医師のクリニックなのだ。

Jの最近の動向を探るために、ダニエルはあれこれ手を尽くし、ひと月ほど前からそのクリニックにうまく潜り込んでいた。よくよく話を聞けば、面接を受けた時には既に他の学生に採用が決まっていたところを、ダニエルが直接そいつと話をつけて仕事を譲ってもらったのだそうだ。どんな手を使ったのか、ダニエルはクリスターにも教えてくれなかった。

ダニエルの雇い主である医師キャメロンは、重い糖尿病を患って

いるJの父親を診るために週に一度ブラック家に往診に出かけている。時折Jの健康状態も診ているようだが、ブラック家の人間が自らクリニックを訪れることはないのだという。

クリニックで受付やカルテの整理などの仕事をしながら、ダニエルは医師から間接的にブラック家の内情を知ることができるというわけだ。もっとも守秘義務のある医師の口から患者のプライバシーに関わる情報を聞きだすのは難しいだろうが。

「Jの父親の病状は、そんなに悪いのかい？」

「そうですね。カルテを見ると、投与されているインスリンの量もどんどん増える一方でしたし：服用している薬の数もかなり多かったです。年齢はまだ57才なのにほとんど寝たきりの生活のようですよ。ああ、そうすると、Jは随分遅くに授かった子供なんでしょうね。Jの他に子供はいないようですけれど…」

「確か、もう1人、Jの双子の妹がいたはずだけど、その子は早くに亡くなったんだよ、事故か何かでね」

クリスターの瞳にふっと不安そうな翳りがさした。何かにつかえたように一瞬言葉を切ったが、ダニエルが気付く前に、彼は再び話を続けた。

「妹だけじゃない、母親も：Jが中学生の頃に亡くなっている。彼女の場合は自殺だったそうだ」

「ブラック家は不幸続きだったんですね。それで、今では父1人子1人ですか：でも、唯一残された身内があんな悪魔のような奴だなんて、その父親こそ気の毒ですね」

Jの育った家庭環境は、以前色々調べたのだが、なかなか複雑なものがある。そもそもブラック家という一族が、何かしら得体の知れない背景を持っているのだ。

ヨーロッパの名門の流れをくむ旧家―と言っても、なかなかピンとこないのだが、それはどうやら事実らしい。先代の当主であった女性が、事業の才を見込まれたある男と結婚し、彼らの間に男女の双子が生まれた。その内の男児がジェームズというわけだ。

一体いつの時代の話かと思うが、ブラック家は旧大陸から持ち込んだ幾つかの奇妙な習慣を近代まで頑なに守っていた。その1つがかつてのヨーロッパの王族の間で繰り返されていたような血族婚。さすがにこれは今ではなかったろうが、それでも二十世紀の初頭までは続けられていたそうだ。また女当主のもとで家が栄えるとされており、主に女性が後を継いできた。実際、なぜかブラック家の男子は短命で、成人を迎えずに夭折するものも多かったという。単に、男が育たないのなら女が継ぐしかないという、実際的な事情があったのかもしれない。

それゆえ、ブラック家の跡取りも初めはジェームズではなく、彼の双子の妹と見なされていた。母親はこの娘のみを溺愛し、ジェームズのことはなぜか疎んじたという。だが、期待をかけた娘は呆気なく死んでしまい、落胆のあまり、彼女も精神に変調を来たし、娘の死の数年後に自殺を遂げてしまう。

1人残された息子にはとにかく不憫がかかったのだろう、ジェームズの父親は彼にありったけの愛情を注いだ。もともとブラック家とは血縁関係もなければ古風な価値観も共有していなかった彼は、妻が死んだ途端、それまで婿として抑圧されてきた反動もあったの

か、優秀なジェームズが才能を伸ばせるよう最高の教育を受けさせ、また彼の望むものは何でも与えるようになった。アーバン校に多額の寄付をし、理事になったのも、息子可愛さからだ。しかし、どうやら彼にはジェームズの本当の姿は見ておらず、自分の庇護の下で息子がどんな非道なことをしていたのか、彼が捕まり告発されるまで気がつかなかった。

そして今、施設を出所して戻ってきたジェームズと父親は改めて向き合うことになったわけだ。果たして、彼らの親子関係はどんな状況にあるのだろうか。

「その辺りも、また探りを入れてみますね。ジェームズの父親ならまだ彼に対して大きな力を持っているかもしれないですし……いくら親馬鹿だって、息子の数々の悪行の事実を突きつけられていい加減もう目が覚めたでしょう。Jがまたしても何かしでかそうとしていると気づいたなら、彼を阻止するために動いてくれるかもしれないん」

ダニエルは楽観的にそう言うが、寝たきりの病人にそこまでの力があるだろうか。クリスターの胸には疑問が生じた。

（むしろ、たとえ父親でも自分の邪魔をしようとすれば、Jなら容赦しないような気がするな）

クリスターの沈思は、ダニエルの声によって遮られた。

「クリスターさん、あの……僕が今のアルバイト先に固執するのは、他にも理由があるんです」

「うん？」

「クリニックに入って分かってきたことなんですけれど：ブラック家の主治医である、このドクター・キャメロンなんですが、もとの専門は遺伝学で、その専門性を見込まれてブラック家との付き合いが始まったらしいんです。ライフワークだと言って、ブラック家の援助を受けながらずっと何かの研究をしているという話もあるくらいで：」

頭の中の考えをまとめながら一言一言確認していくように語るダニエルをクリスターはちらりと見やった。

「あの：クリスターさん、あなたが以前気にしていた、ブラック家の血統にまつわる謎というのがありましたよね：？ あなたは興味を持ったけれど、突き詰めて調べるまでもなく、前はJ・Bを退けることができた」

「ああ：」

「まだ確信があるわけではないけれど、このドクターを手がかりにして調べていけば：その謎が何なのか、突き止められるかもしれないって僕は思っています。もっとうまくいけば、Jの弱点が分かるかもしれない。あなたが以前推理したことが、もし当たっていれば――あなたは彼に対して圧倒的な優位に立てる。たぶん、この先二度とJ・Bの影に脅かされずにすむ：」

「ダニエル」

次第に訴えることにのめりこんでいくダニエルにふと危うさを覚えたクリスターは、強い口調で彼の話を遮った。

「いいかい、これは探偵ごっこじゃないんだよ。子供じみた冒険心で関わっていいような相手じゃない。こんなろくでもないことに：Jとの体を張ったゲームなんか、一度ならず二度までも君を巻き込んでしまった僕のせいかな。君にまで悪い影響を与えてしまったようだ」

「クリスターさん、僕だってもちろんこれが遊びではないってことくらい分かっています。僕も、本当はJが怖い。でも、放っておいたら、Jはあなたに何をするか知れない：自分だけ安全圏にいてあなたの身の心配をするくらいなら、こうして少しでもあなたが彼に對して優位に立てるよう、僕にできる範囲で動いていたいんです」

懸命にかきくどくダニエルを、しかし、クリスターはびしやりとはねつけた。

「君は、決して無茶はしないと僕に誓ったはずだ。その約束を守れないなら、やっぱり君にはこれ以上この件に関わらせることはできない。ダニエル、夏休みなのにここに残ってまで、そんな危険を冒すことはない。いっそ、両親のもとに帰ってくれ。その方が、僕も安心してJとの闘いに集中できる」

クリスターの言葉は冷たく響いたのだろう、ダニエルははっと息を吸い込んだ。もどかしげに唇を噛み締めて、クリスターの怜悯な横顔を見開いた目でしばし睨みつけた後、震える言葉を搾り出した。

「そんなふうにして：あなたはアイザックのことも退けようとしたんですか？」

瞬間、クリスターはダニエルに引っぱたかれたかのように顔をしかめた。

「痛い所を突くんだな」

自分の望みどおりにたやすく折れてはくれないダニエルに苛立たしげに舌打ちをして、クリスターは荒っぽくハンドルを切った。

確かにこれと同じような状況で、アイザックに対してクリスターは失敗したのだ。この場合、失われるのはダニエルと一緒にいることで得られるささやかな安らぎか。だが、そんな自分勝手な都合とこの子の安全と、どちらがより大事なのか。

クリスターが葛藤していると、ダニエルは全てを分かっているかのような真摯な口調で言った。

「だって、あなたがまた自分の首を絞めるようなことを言うからですよ。アイザックと喧嘩して、その上僕までいなくなったら、あなたはたった1人でJと対峙しなければならなくなる。僕としては、あなたをそんな窮地に陥らせることはできません」

クリスターは複雑な表情で傍らの少年を見やった。ふと躊躇った後、ごく低い声でそっと囁きかけた。

「しかし、ダニエル：もしも君の身に何かあれば、僕は今度こそ自分を許せなくなるだろう。僕のためと言うのなら、君には第一に自分の安全を考えていて欲しい。これが、僕の正直な気持ちだよ」

「クリスターさん」

ダニエルは何かしら胸に詰まったように黙り込んだ。目の周りを薄っすらと赤くしてうつむいたまま、やがて学校の寮に着くまでの

間、助手席でおとなしくしていた。

「クリスターさん、ありがとうございました」

ダニエルは窓の向こうの寮の方をちらつと眺めると名残惜しげにクリスターを振り返った。クリスターはハンドルに手を置いて前方を見据えながらじっと考えに沈みこんでいる。

「それじゃ、また…」

はにかむように微笑んで、ダニエルはシートベルトを外そうとしたが、その手をふいにクリスターが捕まえた。

「クリスターさん？」

何か言いたげな神妙な面持ちを向けるクリスターにダニエルは首を傾げた。

「あの…分かっています、アルバイト先ではくれぐれも慎重に行動するようにしますから…あなたの迷惑になるようなことは決して…あっ…」

クリスターの気持ちを一生懸命に汲み取ろうとしながら賢しげな言葉が続けるダニエルを見ると、何だかたまらなくなってきた。クリスターは彼を衝動的に抱きすくめた

「馬鹿な子だ」

無性に苛立ち、無性に哀しくやりきれないような気持ちに駆られながら、クリスターはダニエルのか細い体を抱きしめ、その頭を撫

で、頬や額、震える脛にキスを落としながら呻くように囁いた。

「いつも、そんな気遣いばかり：僕のために君が必死になることな
んかないんだ：むしろ、何も考えずにいてくれ。ダニエル、君は僕
と一緒にいて幸せか？ 大切になっているつもりが、僕はまた君を苦
しめていないだろうか：？ それとも、やっぱり僕には他人を幸せ
にすることなどできないのかな」

この子を愛しいと思う気持ちに偽りはないと思うのに、ダニエルの
ひたむきさに接するたび言いようのない後ろめたさに駆られるのは
何故か。

「クリスターさん：」

ダニエルの滑らかな指先が煩悶するクリスターのうなじの辺りを
慰めるように撫でた。

「僕の方こそ、あなたに同じことを訴えたい：どうか何も考えない
でください：ましてや僕を幸せにしようなんて思いつめて、自分を
苦しめるのは：」

クリスターが思わず顔を覗き込むと、ダニエルは切なげな淡い笑
みを浮かべていた。

「それにね、僕は充分幸せですよ。だから、あなたは何も気にせず
に、自分の思うとおりにすればいいんです」

クリスターはかけるべき言葉をなくししばし途方に暮れて黙り込
んだ後、諦めたように呟いた。

「僕達は、こういうところは似たもの同士なのかな…お互いに対する気遣いばかり、何かある度謝りあって…こんなこと、いい加減にやめようと言ったばかりなのに」

そうして、ダニエルの額に自分の額をそっと押し当てて目を閉じ、ひっそりと溜息混じりの微笑を漏らすのだった。

「ごめんよ、ダニエル…」

その日、家に戻ると、クリスターはダニエルに約束したように、アイザックが滞在しているはずのコリンのアパートに電話を入れてみた。

しかし、その時も、また後に何回か電話かけてみたものの、結局つながらなかった。アイザックはコリンやミシェルと一緒にしばらくキャンプに行く計画を立てていたから、タイミングが悪く、彼らは出かけた後だったのかもしれない。

ふっと訳もない不安がクリスターの胸を掠めたが、それを確かめる術はなかった。

そして、それから3日後のことだ。

クリスターがずっと気にかけていたアイザックから、緊急の連絡が入った。

『悪い知らせだ』

そう告げたアイザックは、これまでクリスターが聞いたことのないような弱々しく掠れた声をしていた。

『コリンとミシェルが自動車事故にあったんだ…2人とも重傷を負って病院に搬送されて―畜生、やられたよ!』

第4章黒い羊（6）

アイザック、コリン、ミシエル、この3人はもともとアーバン高校の新聞部で知り合った。コリンとアイザックは同じ年だが、海外特派員だった親の仕事の関係で外国生活が長かったアイザックは1つ下の学年に入った。ミシエルはその彼らより2才年上だが、ませたアイザックは、入部早々一目で彼女を気に入ると猛烈なアプローチをかけて、じきに付き合いだすようになった。ただガールフレンドがいると言ってもアイザックはコリンとの友達付き合いを大切に、休日には3人一緒に遊びに行くことの方が多かったようだ。

ここまですがクリスターが知り合った頃の3人の関係だが、その後、ミシエルはアイザックと別れてコリンと交際を始めた。アイザックとの仲がぎくしゃくしていて悩んでいたミシエルに、コリンが相談に乗ってやりーというようなありがちなパターンだったらしいが、詳しいことはクリスターも知らない。ただ、その話を聞いて、自分の恋人の親友と付き合いだすなんて呆れた女だなと、ミシエルに対する評価を大幅に下げたものだ。

その後、1学年スキップしたコリンとミシエルは、アーバン高校卒業後、共にエール大学に進み、アパートをシェアして2人で暮らすようになった。

もしかしたらコリンは、せっかく手に入れた恋人と離れたくなくて必死で勉強してスキップしたのかもしれない。もともと彼も成績はよかったが、頭の切れ具合はアイザックの方が一枚も二枚も上だった。

いつだったか、クリスターがそんな考えをアイザックに話してみ

たところ、彼は『俺なら、女のためにそんな馬鹿馬鹿しい努力はしないが、コリンならありそうな話だな』と皮肉っぽく笑っていた。

そんな話を聞く限り、しこりを残しても不思議ではないような経緯だが、それでもアイザックとコリンの友情はずっと続いていたようだ。女が原因で友情にひびが入るのもひどい話なので、その点はクリスターも他人事ながらほっとしていた。

特にJ・Bが出所して以来、身边に気をつけるようにとの警告を含めて、アイザックは頻繁にコリンとは連絡を取っていたのだ。

だが、その気遣いも結局は無駄に終わってしまったのだろうか。

「どうということなんだ？」

まるで氷塊を胸に詰め込まれたかのようなと思いながら、クリスターは受話器を握り締めたまま、呆然とアイザックに聞き返したが、頭の中の冷静な部分は、こういう可能性もあったということを認識していた。

「2人とも命に別状はないのか：君は事故だと言ったが、それは確かか？ 一体、どんな状況だったんだ？」

思いがけずアイザックから電話をもらった時には一瞬クリスターの胸は安堵と喜びに躍ったものだが、彼から受け取った最悪のニュースに、その温かな気持ちたちはたちまち消し飛んでしまった。

『コリンの方は脚を複雑骨折したけれど、手術も無事終えて、どうやら大丈夫だよ：ミシェルは—ちよっと危ないかもしれない：まだ意識が戻らないんだ』

電話口の向こうにいても、憔悴しきったアイザックの様子が手に取るように分かる。

大概のことでは動じそうもない、年齢の割に世慣れてしたたかなアイザックでも、親友とその恋人―自分のかつての交際相手でもあるのだ―を突然襲った災厄にはかなりのショックを受けているようだった。しかも、その事故に不審な点があるのだから、尚更だ。

その力のない声を聞いていると、クリスターの胸には次第にすまなさがこみ上げてきた。

（今、僕が傍にいてアイザックを支えてやれば―彼にばかり負担を背負わせて、僕はこんな所で何をしている…？ コリン達が狙われるのも予想の範囲内だなんて他人事のように分析している場合か…Jの手が彼らに及ぶのを結局阻止できなかったということじゃないか）

クリスターは不甲斐なさに歯噛みし、体の脇に垂らした手をぐっと握り締めた。

「アイザック、君は…何ともないのか…？ その事故には巻き込まれなかったのか…？」

『ああ、たまたま、俺は彼らの車に乗ってなかったんだ。悪運が強かったということかな』

気遣わしげなクリスターの問いかけを聞いて、アイザックは一瞬彼らしい皮肉っぽさを取り戻した口調で答えるが、またしばらく黙り込んでしまう。

『すまねえな、ぼんやりして：事故の状況をおまえにちゃんと説明するつもりだったんだ。この2日、病院と警察を行き来したり、コリンとミシエルの親に連絡取って事情を説明したり、ばたばたして、ろくに寝てないんだ。まあ、どうせ、神経が昂ぶって寝られやしねえけどー』

それでも、アイザックは思考力を必死に取りまとめて、その問題の日にあつた出来事を、自分に分かる範囲で正確に伝えようとしてくれた。

アイザックは予定通り、夏休みが始まってすぐにコリンのもとを訪れていた。

コリンのアパートで過ごした数日間は特に変わったこともなく、J・Bもわざわざ隣の州にまで手を伸ばし、既にアーバン高校を卒業してクリスターとの付き合いもなくなった2人にまで復讐する労力をかける気はないのではないかという感触だったという。

しかし、何の前触れもなく、事件は突然に起こった。

計画通りキャンピングカーを借りて、翌日にはキャンプに出かけるはずだった、その日の夕方。買い忘れたものがあるからとコリンとミシエルは連れ立って近くのキャンプ用品店まで出かけていった。アイザックはアパートに残ったのだが、それから2時間以上経っても2人が戻らず、不審に思い始めた矢先に警察から連絡が入った。

現場は緩やかな下り坂。スピードの出しすぎでカーブを曲がり損ね、対向車線を走っていたトラックに接触したコリンの車は、弾き飛ばされるようになってガードレールに激突した。

2人が搬送された病院に、アイザックは取るものもとらず駆けつけた。

そして、そこで知らされた2人の容態に愕然とさせられる。

それでも、コリンは命に別状はないとすぐに分かった。だが、ミシェルの方は頭部に損傷を受けており、その時点で助かるとの保障はなかった。今は何とか持ち直しているが、意識不明の状態は続いている。

手術を無事終えて、しばらくして意識を取り戻したコリンとは、アイザックは話すことができた。医師は止めたのだが、コリンが彼を呼んだという。

『ブレーキがきかなかったんだって、コリンは言うんだ。つい前日までは何ともなかったし、大体その車は点検に出したばかりなのに、おかしいって—』

不注意が招いたただの事故という印象は、コリンのその言葉によって、一転、疑惑に変じた。

事故を起こして大破したコリンの車を詳しく調べてくれるよう警察には頼んでいるが、この手の自動車事故の数は多く、一見して不注意による暴走らしく思われるコリンのケースに対する関心は薄く、ちゃんと調査してもらえるのか疑わしいとアイザックは皮肉に言う。

『警察が頼りにならないなら、俺が自分で調べてみるつもりだよ。コリンが落ち着いたらもう一度話を聞いて…誰かが車に細工をしたなら、何としてもその証拠を掴んで…くっ…』

アイザックはふいに激しいものがこみ上げてきたかのように声を震わせ、黙り込んだ。

「アイザック：アイザック、大丈夫か？」

『ああ：』

アイザックの声が受話器の向こうから聞こえてきたことに、クリスターはほっとした。

アイザックがここまで追い詰められるなんて、状況はかなり厳しいのだろう。やはり、彼をこのまま1人にしてはおけないとクリスターは思った。

「僕も、明日にでもそちらに向かうよ。コリンは何とか話のできる状態なんだろう？」

アイザックもこれだけ困っているのだから、クリスターのこの言葉にてっきり安堵するかと思ったのだが、彼の反応は期待したものとは少し違った。

『えっ：クリスター：おまえ、こっちに来るのか：？』

そのアイザックの声の響きにクリスターは妙な引っかかりを覚えた。

なぜだろうか、クリスターがやってくると聞いて、アイザックはうろたえている。まるでクリスターと直接顔を合わせて話すことに抵抗を覚えているかのようなのだ。

不審に思いながらも、クリスターはそんな感情はおくびにも出さず、あくまでアイザックを力づけようとするかのごとく続けた。

「当たり前じゃないか。コリン達がそんなことになって、君だって、かなりのショックを受けている。放っておけるはずがないよ。それに、コリンの起こした事故について：いや、本当にそれが事故なのか、それともJ・Bの仕業なのか僕も自分で確かめたい」

電話口の向こうのアイザックが明らかに凍りつくのが感じられた。

クリスターが息を詰めて彼の反応を窺っていると、やがて喉の奥から絞りだすような掠れた声が聞こえた。

「ああ、そうさ：Jの仕業なんだ、これも：何てことだ、こんなひどい結果になるなんて思わなかった。阻止したかったのに：俺にはどうすることもできなかった：そうだ、コリンとミシエルがあんなことになったのは、俺のせいなんだ」

「アイザック、落ち着けよ。どうして、君がそんなふうに自分を責めなければならぬんだ」

アイザックらしくない取り乱しようにクリスターは当惑しながら、言い聞かせる。

「君は何も悪くないんだよ」

「いや、違う：そうじゃないんだ、クリスター」

「アイザック？」

クリスターは耳を澄まし、電話を通じて可能な限りアイザックの心を読み取ろうと試みた。

長い沈黙の後、アイザックが苦しげな吐息をつくのが聞こえた。

「すまない、俺は：どうかしていたようだ。おまえを困らせるような、おかしいことを口走ったかもしれないな」

「いや：」

冷静さを取り戻したアイザックに安堵するどころか、クリスターの胸に生じた不安はますます大きくなりつつあった。

「明日：おまえはここに来るんだな？」

念を押すようにアイザックは尋ねる。

「ああ、そうするよ。君のことも心配だし：僕が行くまで、もう何もするな。調査をするにせよ、君が単独で動き回るのは危険だ：僕と2人であたった方がいい。そうだ、病院の住所と電話番号を教えてください」

アイザックが読みあげる住所をメモに取っていた時、クリスターの背後で物音がした。振り返ると階段から下りてきたらしいレイフがいぶかしげな眼差しをこちらに向けている。

『クリスター』

何かしら切迫したものを感じさせるアイザックの呼びかけに、ク

リスターは再び注意を引き戻された。

『色々…本当にすまねえな…おまえにこんな…迷惑をかけちゃって―』

奇妙な違和感のある態度から一変、心に触れてくる真摯な言葉に、クリスターはつと胸を突かれた。

「何を言うんだよ…アイザック、僕は―」

クリスターはアイザックに言おうと思っていたあれこれをふいに思い出したが、じつと自分の様子を見守っているレイフの手前もあって、言い出せなかった。

それに、アイザックも何かに急ぎ立てられるように慌てて電話を切ってしまったので、結局お互い胸を開いてするような深い話ではできなかった。

クリスターは何だか消化不良の気持ちを抱えながら、受話器を戻した。

（大丈夫だ。明日、向こうに行ってアイザックに会って、もっと詳しい話をすればいい）

とん。

背中に何かが押しあてられるのにクリスターは眉をひそめて、肩越しに後ろを振り返る。

足音もたてずに近づいてきたレイフが、クリスターの背中に拳を

ぐりつと押し付けていた。

「どうしたんだよ、兄貴、そんな恐い顔して…何か悪い知らせだったのか？」

「おまえには、関係ないだろ」

まずい時に居合わせてくれたなど内心溜息をつきながらクリスタは素っ気なく言い返すが、レイフはへこたれずに食い下がった。

「関係なくはないよっ。何だって、クリスターのことなら」

一瞬何と言い返せばいいのか分からず、クリスターは真剣な面持ちのレイフをまじまじと見つめた。

「大げさだな」

そのままクリスターは無言で立ち去ろうとしたが、シャツの裾をレイフがいつの間にかしっかり掴んでいたため、身動きが取れない。仕方なく、弟に向きなおった。

「今のはアイザックからの電話で…友達が自動車事故にあったと知らせてくれたんだ。新聞部の部長をやったコリンのことは覚えてるかい？」

「アイザックと仲がよかった、あいつのことかな？ うん、人当たりのいい奴だったよな。怪我をしたのか？」

「話を聞く限り、重傷らしい…今アイザックが付き添っているんだけれど、僕も気になるから、明日にでも、病院に行ってみようと思

うんだ」

クリスターが心配そうに顔をうつむけるのを見守りながら、レイフは何事か考え込んでいたが、ふいに思い立ったかのように言った。

「オレも行くよ」

「えっ？」

クリスターの当惑もどこ吹く風、レイフは当然のような顔をしてそこに突っ立っている。

「馬鹿を言うなよ。遊びに行くわけじゃないんだぞ」

クリスターは怒ったようにレイフを睨みつけながら、ゆっくりと身を離そうとした。

「分かってるよ」

「分かってない！」

捕まえようとするレイフの腕を今度はかなり本気で振り払い、クリスターは2階の自分の部屋に駆け上がっていきこうとした。

「待てってば！」

するとレイフは、クリスターの前に回り込み、両手を広げて立ちはだかった。

レイフの奴、今日はやけにしつこいとクリスターは密かに舌打ち

をする。

「クリスター、オレに隠し事があるだろ」

どこまで分かっているのかいないのか、本能的に秘密の匂いを感じつけてくる弟にひやりとしながらも、クリスターは冷静さを装い続けた。

「何のことだ？」

「とぼけるつもりなら、別にいいよ。でも、オレはおまえから目を離すつもりはないから。おまえがオレに隠れてまた何か無茶をやるうとしても、絶対オレはおまえを1人で危険にさらすことはしないと決めてるから」

「おまえの言うことは訳が分からないよ、レイフ。コリンの事故が、どうして、そういう話につながるんだ？」

「だって、おまえは何でもなさそうなふりをしているけど、実際すごく殺気立ってピリピリしてる：怪我した友達の見舞いに行くだけで、そんなに神経が張り詰めるわけないだろ。表面だけ取り繕ったってさ、オレには分かるんだぜ、なあ……？」

言い返せるものなら言い返してみろとばかりの自信たっぷりな態度で迫ってくるレイフに、さすがのクリスターもしばし言葉を失った。

「だからさ、オレも連れて行けよ。オレに兄貴を守らせて。な？」

「断る」

クリスターが容赦なくむこうずねを蹴りつけてやるとレイフはギヤツと叫んで階段に尻餅をついた。

憤然と階段を上がっていくクリスターは、諦めきれずに目で自分を追いかけていたレイフが、ふいに何かを思いついたかのように手を打って、1人でしきりに頷いていたことには気がつかなかった。

（レイフを連れて行くなんて冗談じゃない：事情を知らないあいつにまとりつかれてあれこれうるさく聞かれて：ああ、考えたくない、はつきり言って足手まといだ。それに、僕はもう二度とあいつをJ・Bに近づけたくはない。そうだ、頼むから、何もせずにじっとしていてくれ）

レイフの直感力に驚かされたクリスターだが、断固としてその申し出を退けた後は、弟はもう諦めたものと考え、その思いはコリン達を見舞った災難の上に戻っていった。実際レイフの気まぐれにかまけている場合ではなかったのだ。

それに、もう一つ、クリスターは別の気がかりも抱えている。電話で話した時のアイザックの様子だ。

全くアイザックらしくないほどに動転し、奇妙なことを口走っていた。初めは、自分のすぐ傍でコリン達が事故に遭ったことがショックだったからだと思ったが、話しているうちにそれだけが理由でないような気がしてきた。

顔を見て話せば、アイザックが何を胸に抱えているのか分かるだろうか。アイザックの方は、あまりクリスターに会いたくないような口ぶりではなかったがいや、それも気のせいだろうか。アイザック

に対する後ろめたさが、そんなふう 크리스ターに思わせたのだろうか。

（いずれにもせよ、ここであれこれ推測していても埒が明かない。僕が自分で確かめに行くしかないんだ）

翌朝。クリスターは、アイザックやコリンに会うべくコネチカット州ニューヘイブンに向けて出発した。

そして、そこで彼は、初めて明らかになった数々の意外な事実と直面することになるのだ。

第4章黒い羊（7）

夏の訪れを感じさせるからりと晴れた空。こんな穏やかでない気持ちを抱えているのでなければ、ドライブするには最高の日和だと思ふところだろう。

（コリン達が『事故』に遭ったのが3日前：これが本当にJ・Bの仕業だとすると、狙われたのはアイザックも含めた3人全員か。運よくアイザックは難を逃れたが、2人は重症を負った：Jが彼らの命を本気で取ろうとしたとは思えにくい：というか、そこまでの関心を彼がコリン達に向けるとは思えない。おそらく助かるうが助かるまいが、どちらでもよかったんだろう。だとすれば、Jの目的は僕にプレッシャーをかけることだろうか。外堀から埋めていくようにして、僕をじわじわと追い詰めるつもりか：？ それとも、別の意味が隠されているのか？）

高速を愛車で走りながら、クリスターはJ・Bの思考パターンを分析し、その考えを読もうとしていた。もしも自分がJであればどう動くかを念頭に置いての推理は、自らを敵と同化させようという試みに等しい。こんなことを以前もよくやっていたのだ。おかげで時折まるでJに取り付かれているような気がし、これは果たして本当に自分の考えなのか確信が持てなくなるような不安感に苛まれたものだ。

（本当はあいつのことなんか分かりたくもない：嫌悪すら覚えるというのに、勝つためには、まずあいつの心に深く分け入り理解しなければならぬということだ）

そう言えばアイザックはクリスターがほとんどんJ・Bに似てくる

ように見ていて不安だと訴えていたが、それも仕方のないことなのかもしれない。

（確かに、怪物を仕留めることに夢中になっているうちに、気がつけば自分自身も相手と同じ怪物に変じていたなんて、しゃれにならないけど…でも、これきり最後だから―今度こそ、あいつを二度と出てこられない場所に追いやって、後はもう綺麗さっぱり忘れてしまうんだ。J・Bの存在も、あいつと僕の間で繰り広げられる、この危険なゲームも…）

クリスターはそう自分に向かって言い聞かせたが、どこからともなく浮かび上がった、『本当に忘れられるのか？』という問いかけに、ふと心もとなさを覚えた。

その時だ。

車の後部座席の方から、どんどん何かが打ち付けられるような異音が響いた。

コリンの事故の話を聞いたばかりなだけに、クリスターはぎょっとなって肩越しに後ろを振り返った。

だが、座席の辺りには何もおかしいものは見えず、その音もよく聞けば車内ではなく、もっと後ろの方から聞こえてくる。

（何だ…？ この音、トランクの中から聞こえてくる…ま、まさか―）

頭に閃いた考えの奇抜さに、クリスターは一瞬ハイウェイを走っていることも忘れて固まったが、すぐ脇を他の車がクラクションを

鳴らしながら通り過ぎるのに我に返った。

こんな所で自分まで事故を起こしてはたまらないので、クリスタ―は少し行った先でひとまず高速を下り、出口付近にあったファーストフード店の駐車場に車を乗り入れた。

クリスタ―が車外に飛び出しても、切羽詰ったようなどんどんという音は続いていた。

間違いない。トランクの中から聞こえてくる。

（まさか…いや、まさか―）

トランクに手をかけた時には予感には既に確信に変わっていたのだが、できれば信じたくなくて、口の中で短い祈りの言葉を呟くと、クリスタ―はえいとばかりに屋根を引っ張りあげた。

瞬間、むっとする熱気が上がる。そして―。

「に、兄さん…はあ、助かった…」

凍りついたようにその場に立ち尽くすクリスタ―の視線の先では、狭いトランクの中で大きな体を窮屈そうに折り曲げていたレイフが、よろよろと這い出てこようとしていた。

「こんなに蒸すなんて思わなかったよ…映画のヒーローみたいにくましくないのな…じつと隠れていて、ここはという場面になったら颯爽と登場して驚かせてやろうって思ったのに」

汗びっしょりになりながら、そんな馬鹿を言うレイフには、下手

をしたら脱水症状を起こすところだという考えはないようだ。もっと運が悪ければ、死ぬぞ、本当に。

「そんな格好の悪いヒーローがいるものか。大体、トランクに閉じ込められて運ばれるのは、映画でも、死体と相場が決まっているものだよ」

「ああ、そっか…」

こんな暢気な会話をしている場合ではないかとクリスターはぐらぐらする頭を押さえた。

「なぜ、おまえがここにいるんだ、レイフ？ 僕が出発する前に、見つからないようこっそりとトランクに隠れていたのか…信じられない…よくも、こんな非常識な真似ができるな！」

言っているうちに段々腹がたってきたクリスターは、最後の方は大声になって弟を怒鳴りつけた。しかし、レイフが青い顔をして手で口を押さえ気持ち悪そうにあえぐのに、はっとして黙り込んだ。

「う…変な姿勢で揺られたから酔ったみたい…気持ち悪い、吐きそう…」

ううっと呻く弟の肩に手をかけて、クリスターはちよつと泣きそうな気分で叱りつける。

「こら、待て…ここで吐くな、ここで！」

それからしばらくファーストフード店でレイフを休ませた後、クリスターはまた改めて車に乗り込んだ。

狭苦しくて蒸し暑いトランクの中から解放され、汗で失われた水分をたっぷり補給したレイフは、もうけろりとしている。

「だってさ、こうでもしなきゃ、クリスターはオレを連れていってくれないもの」

クリスターに散々説教されてしょんぼりと項垂れたレイフはそう言い訳をした。

「こんな無茶をしてまで、僕についてきたがるおまえの気が知れないよ。昨日も言ったように、僕は遊びに出かけるわけじゃないんだ。コリン達の見舞いと彼らに付き添っているアイザックが心配だから様子を見に行くだけで――おまえにとって面白いことは何もないんだよ。大体、大怪我をした人間のもとに何の用事もないおまえまでもが押しかけるのは迷惑だと思えないのか」

いかにももつともなクリスターの言葉にレイフは少し神妙な顔になったが、心底反省はしていないようだ。

「でも、オレは兄貴が心配だったから――そんなに怒るなよ、向こうに着いたら、オレは邪魔にならない所でおとなしくしているからさ」

「別にもういいよ。ここまで来てしまったら、おまえを追い返したくても追い返せない」

それに、あまり頑なにレイフを拒み続けるのも不自然で返って怪しまれるだろう。それならば、レイフが安心するまでしたいようにさせてやった方がいいと、クリスターは密かに考える。

しかし、それでも、クリスターのお許しが出たことで安心したレイフが先程の店で買ったスナック菓子の袋を早速破って食べ始め、『兄貴と2人きりでドライブするのって久しぶりだな』とか呑気なことを言うのには、こめかみの辺りに痠筋がうきそうになった。

（全く、こいつがいると調子が狂うな。さっきまでの緊迫感が嘘のようだ…自分が何を考えていたのかも忘れてしまったよ）

助手席におさまっても少しもじっとしていない。ラジオをつけてみたりCDを物色したりすることに飽きると、今度はしきりとクリスターに話しかけたり笑いかけたりするレイフをちらちらと見やりながら、クリスターは昨日アイザックの知らせを聞いた時からずっと張り詰めていた気持ちがふと和むのを覚えた。

（これが…本当にただのドライブだったらよかったのにな。レイフと2人きり、気の向くまま、こんなふうに乗を走らせて、他愛のない話をして1日過ごすんだ。ああ、僕達のことなど誰も知らない、どこか遠くにこのまま2人で行けたら―馬鹿、何を不謹慎なことを考えているんだ。コリン達が大変な目にあったばかりだというのに―）

温かな幸福感に満たされたクリスターの心に、後ろめたさの影が差し込めてくる。

だが大方は和やかな雰囲気を取り留めのない話をして過ごしながら、正午過ぎに、クリスターとレイフはコリン達が入院している病院に到着した。

「おまえは、しばらく席を外してくれ。1階にカフェテリアがあったから、そこで待っていてくれたら後で迎えにいくよ」

「ん…分かったよ」

レイフが素直に聞き分けてくれたのにほっとしながら、クリスタは1人、コリンの病室のドアをノックした。

ドアを開けてくれたのは、コリンの母親だろう、中年の女性だったが、クリスタが高校時代の友人だと名乗ると中に通してくれた。

「クリスタ…」

クリスタの姿を認めるやコリンは驚いたように目を見開いた。

「久しぶりだね、コリン。まさか、こんなひどい姿の君と再会することになるなんて…」

クリスタのぎこちない挨拶に、ベッドに体を固定されたコリンは、力なく笑った。かつては明るく澆刺とした印象だったコリンの顔には疲労と不安の色が濃く表われ、彼の受けた衝撃の強さがうかがい知れた。

「昨夜、アイザックから君とミシエルの事故の知らせを受け取って、心配になって、様子だけでもと来てみたんだが…長時間話すのは君が辛いだろうから、後でアイザックにも詳しい話を聞いて、すぐに帰るよ。とにかく、大変だったね」

「ああ」

コリンはぐったりと目を閉じた。

「でも、俺はいいんだ。命は助かったんだし、もとの体にだって時間をかければ戻れるだろう。ただ、ミシエルのことが気がかりで――」

「そうだな」

コリンは、しばらくクリスターと2人きりで話したいからと、心配そうな母親には病室から出てもらった。

クリスターは彼の神経に触らぬよう静かに動いて、ベッド脇の椅子に腰を下ろした。

「アイザックは……君が奇妙なことを言ったと教えてくれた。車のブレーキが壊れていたというのは本当なのか？」

「そんなことも、あいつ、おまえに話したのか……。誰に言っても信じてもらえない、下手な言い訳はよせて、言われそうだな。あれは、俺の不注意が招いた事故なんだ。そのせいでミシエルまで、あんな――」

「だが、少なくとも僕やアイザックは君の言い分を信じるよ。むしろ、君達が受けた被害を事前に阻止できなかったことが残念なくらいだ」

「被害……？」

「誰かが君の車に細工をしてあの事故を引き起こした。確かに警察に話してもなかなか信じてはくれないだろうけれど、僕達にはその心当たりがあるからね」

当然相手にも分かるものと考えて話を進めようとしていたクリス

ターだったが、コリンの顔にうかんだ当惑の色に気づいて、ふと口を閉ざした。

「心当たりって、何の話だ、クリスター？」

「コリン」

クリスターはしばし絶句した。

「まさかと思うけれどーアイザックから何も聞いていないのか？
J・Bが戻ってきて、僕達への復讐を目論んでいるらしいということ…？」

アイザックがJ・Bの出所の知らせを持ってきたのが、春休みが明けて間もない、3月の下旬ごろだった。ダニエルも含めた3人でこれからどうするか話し合い、その時、アイザックは自分からコリンにも伝えると言っていた。慎重なコリンならば、警告さえ与えておけばとりあえず安心だろうとクリスターもその時は考えた。

だが、実際には、コリンは、J・Bが自由の身になったことすら、アイザックから聞かされていないと言うのだ。

（どういうことだ…？）

そればかりか、アイザックとコリンは最近までずっと音信不通の状態だった。

「ミシエルと付き合っていることが後ろめたくてさ、俺も卒業後は何となくあいつとは連絡を取りづらかったんだ」

それが、夏休みが始まる少し前に突然アイザックが電話をかけたのだ。

「あいつは以前と少しも変わらない打ち解けた感じで話してくれて……正直、嬉しかったよ。俺達は親友同士だったから、女のことと仲違いしたまま縁が切れちまうってのも残念だろ。互いの近況とか話しているうちに、あいつが夏休みにこっちに立ち寄るって話になったんだ。ミシェルはちよつと気まずそうな顔をしたけれど、約束どおりアイザックはやってきた」

キャンプの計画や準備をしながら1週間ほどアイザックはコリン達のアパートで過ごしていた。しかし、その間もJ・Bについての話は彼の口からは出なかった。

「そんな大切なことを、どうしてアイザックは黙っていたのかな……何か事情があって隠していたんだろうか。それとも、もしかしたら……あいつを裏切ってミシェルを奪った俺に対して……恨みのような感情があったんだろうか……どう思う、クリスター？」

コリンはしばしじっと考え込んだ後、すがるような目でクリスターを見て、そう尋ねる。

アイザックとコリンとの間に確執はないとクリスターは思っていたが、それはどうやら大間違いだったようだ。少なくともコリンには、今回のように何かあれば、アイザックに恨まれているのではという考えにすぐに至るほどの後ろめたさがある。つまり、それなりの修羅場が、かつて親友同士だった2人の間で繰り広げられたのだろう。

「そんなことを僕に聞かれても、それこそ答えようがないよ。アイ

ザックに直接確かめるしかないんだろうな」

怪我人相手だとは承知していたが、つい尖った声が口から出るのをクリスターは抑えることができない。

「アイザックは、今、どこにいるんだ？」

訳もない焦燥感に駆られてクリスターは問いかけるが、それに対するコリンの答えは満足できるものではなかった。

「病室の付近にいないのなら、俺のアパートに戻ったか、事故車や事故を起こした現場を調べに行ったのかもしれないな。そう言えば、昨日の夜以来、俺はあいつの姿を見ていないよ。詰め所の看護師に聞けば、何か伝言を受け取っているかもしれないけれど」

これ以上コリンと話していても彼を疲れさせるだけで埒が明かないと判断したクリスターは、彼からアパートの鍵を借りて、ひとまず病室を出た。

ミシエルは今も面会謝絶の状態のため、会うことはできない。

幸い、詰め所の看護師の1人がアイザックのことを覚えていた。ここ数日、事故に遭った友人達のために寝る間も惜しんで奔走している彼のことを気にかけていたらしい。だが、その彼女もアイザックを最後に見かけたのは昨夜遅く、時間からすると彼がクリスターに電話を入れた直後だった。

コリンの病室の傍の椅子に疲れた顔でぼんやりと坐っていたアイザックに、その看護師は声をかけた。そこでしばらく2人で話しこんでいたが、アイザックは時計を見て急にそわそわしだしたかと思

うと、どこかに電話をかけてくると言い残して立ち去り、それきり戻ってこなかった。

（僕が今日ここを訪ねるということは知っているはずなのに、何の伝言もなく、どこかに姿を消してしまうなんて、これもまたアイザックらしくない）

昨夜アイザックと言葉をかわした時に覚えた違和感も相まって、クリスターの疑念はますます深くなるばかりだ。

（さっきの看護師がアイザックを最後に見たのが昨夜の10時過ぎ：電話をかけにいくと言い残したそうだが―誰に電話をするつもりだったのか。コリンの両親は事故のあったその日にすぐ駆けつけたそうだし、西海岸にいたミシエルの親も、翌日、彼女のオペが終わる頃には何とか間に合った。もちろんアイザックの家族や僕の知らない友人だっているわけだけど―何だろう、コリンからあんな奇妙な話を聞いたせいかな、アイザックの行動がいちいち引かかる）

直接会って話せば、こんな釈然としない思いはすぐに晴れるのかもしれない。だが、クリスターが捕まえる前に、アイザックはどこかに姿を消してしまった。

（ダニエルの言うとおり：悩んでいる間があったらさっさと彼に連絡を取って、腹を割って話すべきだった：いや、夏休み前のあの日、口論してしまった後、僕はアイザックの様子がどこか不自然だと思ったのに―そう、あのまま行かせるべきじゃなかったんだ。後悔しても、もう遅いけれどね）

クリスターはコリンから預かったアパートの鍵をポケットの中でぐっと握り締めた。先程電話をかけてみたが、やはり誰も出なかつ

た。念のため、これから自分の足でコリン達の部屋に行ってみようと思うが――。

「なぜだ、アイザック……？」

途方に暮れたようにクリスターはつぶやく。宙にういた問いかけの答えがおぼろげに見えたような気がしたが、クリスターはそこで無理矢理思考を遮断した。

直視したくない、最悪の可能性。

「クリスター、こっちだよ、こっち！」

はしゃいだ声がかけられるのに、クリスターは何やら助けられたような気分で顔を上げた。

考え事をしていたので気づかなかったが、クリスターはレイフとの待ち合わせ場所のカフェテリアにいつの間にか着いていたらしい。

入り口の傍で立ち尽くしているクリスターに向けて、窓の近くのテーブルから、レイフが手を大きく振っていた。

「何だよ、恐い顔して……コリンの容態、あまりよくなかったのか……？」

眉間にしわを作って黙然とテーブルに近づいてくる兄を、レイフは心配そうに見上げた。

「レイフ、悪いけど、もうしばらく、ここで待っていてくれないか。僕はちよっと出かけてくるから――」

「ええっ。出かけるって…どこに、何しに行くんだよっ？」

「アイザックを探しにコリンのアパートに行こうと思うんだ。昨夜僕に連絡をくれた彼なのに、その後どこかに行方をくらましてしまったようなんだ。アイザックのことだから、事故の後始末とかで飛び回っているのかもしれないけれど―ここまで来たんだから、彼にも会っておきたい」

「それなら、オレも一緒にいくよ。こんな所で1人でぼうっとしているのも退屈だし」

「勝手についてきたんだから、それくらいで文句を言うなよ。それに、もしアイザックが病院に戻ってきた時のために、おまえにはここにいてもらいたい。彼を見つけたら、僕が帰ってくるまで捕まえておいてくれ」

「何だよ…えらく焦ってるじゃないか、兄貴。アイザックをどうしても見つけたいんだ？」

弟の勘のよさにクリスターは密かに苦笑するが、言い訳もちゃんと考えているから、大丈夫だ。

「実は、夏休み前にアイザックとちょっと言い合ってたね…そのこともあって、できれば彼と直接話をしておきたいんだ。喧嘩したまま夏休みの間ずっと会えないなんて、気になるだろ」

「ふうん」

レイフは胡乱そうに目を細めてクリスターの顔を覗き込んだが、

やがて、仕方がないというように手を上げた。

「分かったよ。でも、用事が済んだら、寄り道せずにすぐ戻って来いよ」

「子供に言うみたいなこと、言うなよ」

その後、レイフを病院に残して、クリスターはコリンのアパートを訪れた。治安のよさそうな閑静な住宅街の中にある、なかなか大きな建物だ。

駐車場に車を止めた時、クリスターはまずアイザックの車を探したが、見つからなかった。やはり、彼はここにはいないようだ。

そして、教えられたコリンの部屋に上がる。

「残念だけれど、これも予想通りか」

コリンはゲスト用の部屋をアイザックに提供していたが、その部屋に彼の持ち物はなかった。衣服も愛用のカメラもIDも…。

空っぽになった部屋の真ん中に立って、ぐるりと周りを見渡しながら、クリスターは思考を巡らせる。

状況から判断する限り、アイザックは昨夜から今日にかけてこのアパートに一度戻り、荷物をまとめて出て行ったように見える。

「問題は、なぜ誰にも何も言わず、急にここを出て行ったのか。そして一体どこに行ったかだ」

クリスターがアイザックについて今まで思っていたことと、ここで知ったこととの間にはいささかの隙間があった。疑念を晴らそうと調べていけばいくほど、その隙間はますます広がっていくばかりだ。

警察やコリンの事故車を調べた保険会社にも立ち寄ってみた後、クリスターが再び病院に戻ったのは、午後遅い時間だった。

別に約束を破って寄り道をしたことが後ろめたかったわけではないが、クリスターはまっすぐにカフェテリアに向かった。だが、そこにレイフの姿はなかった。

（まあ、あいつが何時間も1つの場所でじっとしてられるわけではないか。車はないから、病院内か、外に出ても遠くまで行っていないと思うけれど…）

アイザックに続いてレイフまで行方不明ではたまらないなとクリスターはふと思ったが、こちらは程なくして見つかった。

「レイフ！」

病院の中庭の芝生の上で、入院患者なのだろうか、10才くらいの2人の子供達と遊んでいたらしいレイフは、クリスターの呼びかけにすぐに反応して、こちらを向いた。

「兄貴、遅かったじゃん」

クリスターがやってくると、レイフにじゃれついていた男の子達は、2人を見比べながら、そっくりだ、双子だあと目を真ん丸くして囁きあった。

「アイザックは…って、その様子だと見つからなかったみたいだな」

「うん…コリンのアパートはもぬけの空だったよ。荷物も全てなくなっていた。ジャーナリスト魂を刺激されて事故の調査をしているって訳では、どうやらなさそうだ。一体どこに行ったのか…何の手がかりもなしだ」

レイフの前であんまり深刻な口ぶりで話すのはまずいと分かっていたつもりだが、クリスタールはつい、ぽろりと本音を漏らしてしまった。

「アイザックの身に何かあったんじゃないかって、おまえは心配してるんだな？」

レイフにしてもやけに鋭すぎると思って、クリスタールが訝しげに見返すと、彼は芝生の上から身を起こし、ポケットをぐそぐそ探った。

「なあ、これに…見覚えはないか…？」

レイフが手の上に乗せて差し出したものに、クリスタールは目を見開いた。

「眼鏡…？」

クリスタールははっとなって、すぐにレイフからその眼鏡を引ったくって、確かめた。ツルのデザインが特徴的なシルバーフレーム。アイザックのものと同じだ。

しかも、どうしたことかレンズはひび割れ、ツルの部分も変形している。

「レイフ、一体これをどこで見つけたんだ…？」

レイフはどやって説明しようかと悩むように指先で頬を引っかいた。

「ううんと、見つけたのは正確にはオレじゃなくて、この子達なんだ。今朝、病院の庭で拾ったんだって」

「えっ？」

「初めっから話すときゃ…クリスタールが行っちゃった後、オレは退屈して、病院の中をうろうろしてたんだ。この病院広いよな…歩き回りながら、アイザックの奴、その辺にいないか探してたわけ。コリンの病室にも…中には入らなかったけど、その近くには行ってみたよ。で、この子達の病室はコリンの部屋の隣なんだ。2人で廊下を走り回って看護師に注意されてたから、そんなに元気なら外で遊ばないかって誘って、仲良くなったんだ。それで、もしかしたらアイザックのことを知っているかって聞いてみたんだよ。そして、こいつら…ここ数日コリンの所に入りびたりだったアイザックとは何度か話したことがあるって―それどころか、昨日の晩、大変なところを目撃したって言うんだ」

「大変な所って…一体、何を見たんだい？」

思わずクリスタールが厳しい顔を向けて追求すると子供達は恐がってレイフの後ろに隠れた。その頭をなだめるように撫でてやりながら、レイフはクリスタールを眺めやった。

「兄貴って、ほんとに子供の扱い下手だなあ」

「悪かったな……いや、それよりも話の続きを聞かせてくれ」

クリスターが真剣な顔つきで頼むと、レイフは素直に話を再開した。

「夕べ遅く……消灯時間はとくに過ぎてたんだけど、この子達はまだ起きていたんだ。暑くて窓を開けっぱなしにしていたら、人の言い争うような声が聞こえたんだって……それで窓の下を覗き込んでみると数人の人影が見えた。何をしているんだろう、喧嘩だろうか？と気になって、病室を抜け出して様子を見に行っただろう。カフテリアの近くの窓が丁度現場に近くて、外をそっと窺ってみると若い数人の男達が言い争いあっている……よくよく見ると、その内の1人がこの子達の知っている、あの眼鏡野郎だったというわけ。ただならぬそいつらの雰囲気、初めはただの好奇心で眺めていたこの子達も次第に心配になってきた。その時、アイザックと言いつついた1人の男が奴を殴りつけたそう。一瞬喧嘩になるかと思っただが、その場はそれで収まった。それから、またしばらく低い声でひそひそと何かを話し合っていたが、話に決着がついたのか、そいつらは連れ立ってその場を離れていった」

「アイザックは……その男達に連れて行かれたのか……？」

呆然とクリスターは呟いた。

「そうなるのかな。ただ力づくで強引に拉致されたって感じではなかったらしいよ。一応合意の上でついていた雰囲気だった。そうだな？」

レイフが後ろを振り返り、もっと優しい言葉に変えて確認すると、男の子達は真面目な顔つきでこくりと頷いた。

「その後は、この子達も何だか恐くなって病室に逃げ帰ったんだそう。朝になってから、やっぱり気になるんで、男達が口論していた場所を確かめに行ったら、近くの植え込みの中にその眼鏡が落ちていたんだって……たぶん、殴られた時にアイザックが落としたんだろうな」

クリスターはアイザックが残したもののらしい眼鏡をじっと見下ろしながら、考え込んだ。

つまり―時系列で並べるとこういうことか。

夕べ、クリスターへの電話を切った後、アイザックは他の誰かに電話をしてみるとコリンの病室を離れた。そのしばらく後に病院の敷地内で何者かと会い、口論になったが、結局は彼らと一緒にここを立ち去った。更に、その後、昨夜遅くか今日になってコリンのアパートに一度戻り、荷物をまとめ、今度こそ行方をくらましてしまった。

果たして、その時、アイザックは1人だったのか、それとも誰かと一緒だったのだろうか。

「なあ……アイザックって、おかしい奴らに関わって、厄介ごとに巻き込まれたんじゃないだろうか？」

不安そうに問いかけるレイフにクリスターは思わず肩を震わせた。

「兄貴は、何か心当たりがあるんじゃないのかよ？」

こちらにまっすぐに向けられているレイフの瞳には、クリスターの本心を読み取ろうとする色がある。

「まさか」

クリスターは抑揚のない声で言った後、弟から視線を逸らし、見舞い客や患者達が散歩をしている中庭の平和な情景をぐるりと見渡した。

「僕には分からない：アイザックの身に何か起こったことは確かかな
ようだけれど、一体どういうことなのか、見当もつかないよ」

この大嘘つきめと心の中で自らをなじる。

クリスターは自然な動作でアイザックの眼鏡をポケットにしまいこんだが、ふとすると指先が震えそうになった。

「ただ、どうやら、アイザックが姿を消したのは彼自身の意思でもあるようだ。その理由が何なのか、どこに行ったのか：もしかしたら、彼は――」

語っているうちに胸が塞がれるような暗澹たる気分になってきて、クリスターは途中で言葉を切った。これ以上は言いたくない。

「クリスター」

レイフにいきなり手を捕まえられて、クリスターは我に返った。

「何、力こめてるんだよ。ああ、手のひらに爪食い込むまで握り締めてさ」

指の色が白くなるほどきつく握り締められていたクリスターの手を広げさせて、レイフはその手のひらの上に自分の手を重ねた。

「握り締めるなら、オレの手にしるよ。な？」

冗談めかして笑いかけ、片目を瞑ってみせるレイフに、クリスターは口元を僅かにほころばせた。ありとあらゆる悲観的な考えの淵に沈みこみそうになっていたところを、すくい上げられたような気がした。

「馬鹿……」

何となくレイフと手を取り合ったまま見つめあっていると、2人の様子を興味津々眺めていた男の子達が、双子って仲がいいんだねえと感心したような声を漏らしたので、クリスターは急に恥ずかしくなって弟から身を引いた。一方そんなことは気にしないレイフの方は、もの欲しそうな目でしばらくクリスターの手を追っていたが。

「これから、どうするんだよ？」

やがて薬の時間だと看護師が中庭まで探しに来たので、まだ遊び足りない子供達に言い聞かせ、手を振って別れた後、レイフは傍らでじっと思索を巡らせているクリスターを振り返った。

「アイザックが行きそうな場所の心当たりがあるなら、片っ端から探してみるか？ オレも手伝うぜ」

今日一日、兄にくつついてここまで来たものの、ずっと病院に足止め状態で鬱憤が溜まっていたらしいレイフのやる気満々の顔を眺めながら、クリスターはこれをどうしたものかと思った。

傍にいてくれて助かった部分も確かにある。ほとんど何も教えていなかったにもかかわらず、動物的な嗅覚で、クリスターが欲しがっていた、消えてしまったアイザックに関する情報を探し当ててきた。それに、精神的な部分でもレイフのおかげで多少救われたことは認めざるを得ない。レイフがいなければ、クリスターは考えなくともいいことまで考えて、さぞかし辛い気分を味わっただろう。

しかし、今後どうするかという話は別だ。

クリスターが眉間に皺を寄せてかぶりを振ると、レイフは焦れたように再び口を開こうとする。

「クリスター…」

「いや…今日の所は、もう帰るよ」

「えっ？ いいのかよ、アイザックを放っておいて？」

「今の段階で、僕ができることは何もない。おそらく…アイザックはここに戻ってはこないだろう」

「でも、あいつがどこに行ったとか、それこそ、もし事件に巻き込まれたなら無事でいるのか気になるだろ？ それこそ、警察とかに相談した方が…」

痛い所を追求されて、クリスターはまた気が塞ぎそうになった。

「それは…もちろん僕だって心配しているよ。だからと言って、今の状況では、警察はまず動かない。18才を越えた青年が自分から進んで出て行ったのなら、事件性はないと判断されてしまう…！」

クリスターが苛立たしげに吐き捨てて見せると、レイフは口をつぐんだ。

「本当はね、アイザックがどこに行ったのか、心当たりが全くないわけじゃないんだ」

「え、そうなのか？」

「あくまで僕の推理した、幾つかある可能性の1つなんだけれどね。ただ、考えられる限り最悪なケースの場合でも、彼の命が危うくなるような可能性は低いと思うんだ」

だが可能性はあくまで可能性にすぎないと、クリスターはこみ上げてくる慙愧の念を握りしめた手の内に押しつぶす。

「それでも、まあ、こっちは何回か通うことにはなりそうだけど。コリンや…意識が戻るようであればミシエルとも話したいし、調べたいこともある。でも、その前に、アイザックの親に連絡を入れたり、彼の友人達にも心当たりがないか尋ねてみるよ」

「そうか…」

アイザックの親―考えると、クリスターは軽い眩暈を覚えた。

（アイザックを愛する人達に、僕のせいで、もしかしたら彼が大変

な窮地に立たされているかもしれないなどと：どんなふうに伝えたいのだろう）

今更のように、自分達を取り巻く人達に対する罪悪感がクリスタルの胸にこみ上げてくる。

（周囲の目から隠れて自分達だけで解決しようとしてきた、そのつかけを払わされているのかもしれない。確かに、大っぴらに話せない部分も多すぎる―母さんとはもなく、父さんに話しても悪戯に話を大きくしてしまうだけだ。普通の大人では、Jには歯が立たないからね。だからと言って、僕が愛する人達を騙していることに変わりはない）

頭の中に浮かび上がっては消えていく幾つもの顔に対して心の中で詫びて、クリスタルはレイフを振り返った。

「だから、僕と一緒に帰ろう、レイフ。僕はともかく、おまえは何も言ってこなかったんだろう？ あんまり遅くなると父さん達が心配する」

クリスタルらしくない気遣いにレイフは不思議そうに瞬きし、それから彼の横に立って、その肩に懐っこく腕を巻きつけた。

押し付けられるレイフの体の重みと力を感じながら、不思議な安心感をクリスタルは覚えた。そんなクリスタルの耳に、レイフは低い声でとつとつと訴えかけてきた。

「おまえの抱え込んでいる事情は複雑すぎてオレには全部は分からねえ。聞いても、どうせおまえははぐらかすんだろ。ただ、1つだけ言わせてもらおうなら：あんまりへこむなよ、兄貴。さっきから、

オレも：何だかすごく胸が苦しい」

「レイフ…」

一瞬不覚にも目の裏がじんと熱くなったが、クリスターはそれを見つめ、弟には悟られまいと顔を背け、ゆっくりと駐車場に向かって歩き出した。

コリン達を襲った災難だけではない。これまで自分を支えてくれたアイザックまで見失って、これから先のことを考えるとクリスターはひどく心もとないような、足元が覚束ないかのような不安に駆られる。

しかし、今、レイフと2人並んで歩きながら、もしここで自分一人だけで同じ道を鉛のような心を抱えて歩いていくことを思えば、足取りもそれほど重く感じられないのが、クリスターは不思議だった

第4章黒い羊（8）

この頃、家の中の空気が何だか少しピリピリしている。

ヘレナが妊娠して、本来なら幸福感に満ち溢れていて不思議ではないはずなのに、双子の両親は家にいても、厳しい顔つきで2人で話しこんでいることが多かった。

原因は、ラーズの会社で立て続けに起こったトラブルのせいだ。

ラーズの親友であり、長年仕事上でも彼を右腕として支えてきたブライアンが、急に会社をやめてライバル会社に行ってしまったのだが、その辞め方がよくなかったらしい。話を聞いても、あの『ブライアンおじさん』がとレイフにはにわかには信じられなかったくらいだ。ラーズの信頼を裏切って社の秘密を外に漏らしたことがばれ、それがきっかけで口論した末に彼はラーズに解雇を言い渡された。

それだけでもラーズにはショックだったのに、今度はやはり長い間経理を任されていたジョエルの不正行為が発覚し、こちらは訴訟問題に発展しそうだとのこと。

古株の社員達が次々と起こした不始末は他の社員達にも影響を及ぼし、日々の業務にも支障が出始めている。こうなっては、副社長のヘレナも妊娠中だからといって家にいるわけにはいかず、毎日出社して事態の収拾にあたっている。

レイフとしては、普通の体でない母親にそんなストレスのかかる仕事をしてほしくはなかったのだが、すっかり意気消沈したラーズだけでは今の厳しい状況を乗り切れそうにないらしい。

両親がそんな具合に仕事のことで手一杯だったせいで、クリスタの友人達が巻き込まれた事故や事件に対して、彼らがそれほど強い関心を寄せることはなかった。

コリン達を見舞った、あの日以来、クリスタはあちこちに連絡を入れたり色んな人に会ったりと忙しい。その全てについて、彼がレイフに詳しい説明をしてくれることはなかった。

そこまで意地になって秘密主義を通している場合ではないだろうとレイフは気をもんだが、一端こうと決めたクリスタの意志を覆すことは極めて難しいということもよく理解していた。

（ちえつ、クリスタの奴、少しはオレを信じて、頼ってくれたっていいじゃないか。しんどい時に1人で全てを背負い込むことはないだろう。オレなんかじゃ、力にならないってことなのかよ。そりゃあ、今まで何かと兄貴に助けられてばかりだったから、そう思われても仕方ないのかもしれないけどさ）

クリスタの頑固さに、レイフは途方に暮れるしかない。

（大体アイザックもまだ見つかってないっていうのにさ：ああ、それにしても、あの野郎、どこに消えちまったんだろ。クリスタをあんなに心配させて：拉致とか誘拐って奴とはちよっと違うみたいだけど、行方不明ってだけでも充分不安じゃないか）

アイザックについては、レイフも知っている人間のことだけに気になって追及すると、クリスタは不承不承ながら少しは話をしてくれた。姿を消してしまったアイザックだが、父親には数日前に一度連絡が入ったらしい。それで、アイザックが少なくとも無事でない

ることは分かったが、どこにいて何をしているのか、彼は父親にも充分な説明をしていなかった。

（アイザックは一人っ子で、母親も早くに亡くしているって話だったよな。親父さんもさぞかし心配してるんだろうな）

今日は、そのアイザックの父親と会って話をするため、クリスタは朝早くから出かけていた。

子供が行方知れずになってナーバスになっている親と一対一で会うのはプレッシャーだろう、付き合おうかとレイフが申し出ると、おまえには関係ないだろうとクリスタに冷たく拒否されてしまった。

（意地っ張りめ）

そんな訳で、レイフは朝から家に1人でいた。両親もとくに仕事場に出かけている。アルバイト先の獣医も今日は休診日のため、特にこれといった予定はないが、クリスタのことが気になって、友人を誘って遊びに出かける気にもなれなかった。

手持ちぶさたで妙に腰が落ち着かないまま、レイフはぼんやりとテレビを見たりして過ごしたのだが、そんなだらだらした時間は、突然受け取った1本の電話によって中断された。

『その声はレイフなのかしら…それとも、クリスタ？』

「レイフだけれど、誰だよ？」

『私よ、覚えていない…？ ハニー・ヘンダーソンよ』

予期せぬ名前に、レイフは息を飲んだきり、しばらく何も言えなくなってしまうた。

『ごめんなさい、突然電話をかけたりにして、驚かせてしまったかしら』

「本当に…ハニーなのか…？」

かつて恋をした少女がこんな声をしていたのか、レイフはとっさに思い出せなかったし、どんなふうに自分が彼女と話していたかなどもっと分からなかった。

「ひ、久しぶりだな…えっと、元気でやってるのかよ…？」

我ながらがちがちに緊張した声だと思う。レイフは唇を舌で湿しながら、次に何を言おうかと必死で言葉を探した。

レイフが固くなっていることは受話器を通して分かったのだろう、ハニーもこのまま話を続けることを躊躇するように黙り込んでしまう。

『もしかして、迷惑だった…？』

「違うよ。ただ…あんまり突然で驚いたただけだよ。長いこと聞いてなかったハニーの声を聞いてさ、どんな反応したらいいのか分からなくて、ちょっと固まっちゃった。ああ、でも、こうして言葉かわしていると勘が戻ってきたみたいだな」

レイフは気持ちを静めるよう深呼吸すると、今度は優しくハニー

に語りかけた。

「今、どうしているんだよ？ やっぱり今でも実家で暮らしているのか？ 学校は…？」

『去年の秋からやっと地元で高校に通い始めたわ。実家に戻ってもしばらくは普通の高校生活なんかできない状態だったけれど、これで何とかやり直すことができそうよ』

「ほんとにハニーは大変な目にあったものな。あんな人でなしに引かなかったばかりにさ…あつ…と…ごめん」

『いいのよ、レイフ。私がジェームズの思い通りに操られる人形だったことは本当だもの。そのせいで、あなたやクリスターに迷惑をかけてしまったことがずっと悔いとして胸に残っていたの』

「何もかもとつくに終わったことだよ。気にするなよ、ハニー」

しかし、そうハニーをなだめるレイフの胸にはまだ完全には消えていない古い傷が残っていて、彼女と言葉をかわすことによって、それが急にじくじくと痛み出すのをレイフは覚えていた。

一時は本当に好きだと思って付き合ったこともある人なのに、こうしながら徐々に蘇ってくるのは懐かしさよりも、あの時ああしてあればよかったのという悔いを伴う切なさばかりだ。

「レイフ」

押し寄せてきた追憶の波に捕らわれていたレイフは、ハニーの呼びかけにはっと自分を取り戻す。

「ああ、すまねえな。つい、ぼんやりしちまって」

女の子と接して固くなることもこの頃は少なくなってきたのに、何だか急に以前の気弱な自分に戻ってしまったかのようだ。

「ねえ、レイフ：実は、私、今あなたの家の近くまで来ているのよ。それで：もしあなたさえよかったら、今から会えないかと思って」

「えっ？」

レイフの心臓が慄いたように小さく震えた。

「えっ、今こっちに来てるのか：1人で：？ い、いいのかよ、この街に戻ることは親に禁止されてるって、確か前にクリスターから聞いたけれど」

レイフは助けを求めるような眼差しで周囲をぐるりと見渡した。

どうして今ここにクリスターはいないのだろう―乱れる気持ちをとりまとめようとレイフは汗ばんだ手をぐっと握り締めた。

「本当はずっと：落ち着いたら、一度あなたに会ってちゃんと話をしたいと思っていたのよ。色々あって、学校をやめて実家に戻って：それからもしばらくは自分のことだけで私は精一杯だった。一時はうつ状態がひどくて入院していたこともあったわ。それがやっと、こうして人並みの生活ができるくらいには、私は自分を取り戻すことができた。今なら、私の過去ともちゃんと向き合うことができると思うの。今だからこそ、あなたに話せることもある。お願いよ、レイフ、私と会ってくれる？」

「ハニー…」

ハニーの切々と響く訴えに、一時ざわついたレイフの胸もやがて落ち着きを取り戻していった。

「分かったよ。そうだな、オレも…ハニーがどうしているのか気になってたんだ。いや、オレなんかが今更気にかけてもどうしてやることもできないって、胸の奥に無理矢理押し込めてただけで、とても消化しきれていなかった」

一語一語確認し、ハニーだけでなく自分に対しても言い聞かせるように、レイフは言った。

「だからさ、オレも、やっぱり一度ハニーに会っておきたい。今のままじゃ、たぶん、あの頃起こった全てを終わったこととして片付けちまうなんて、オレにもできないんだ」

こうしてレイフはハニーと再会することになった。

情けないことだが、今から1人で彼女と会うのだと考えるとレイフはまた少し怯みそうになった。

ハニーを通じて、胸の奥底に封印していた数々の辛い記憶が蘇ってくる。

（あの頃のオレは、つくづく馬鹿なガキだった。ハニーの傍にいただけで、何の役にも立たず、オレの代わりにクリスターを危険にさらしてしまった…ああ、本当は、オレがあゝの役割を果たすべきだったんだ。ハニーを無理にでもJ・Bの手から救い出して、最後まで

守りきって闘うべきだった。それをクリスターに肩代わりさせてしまったことが、オレの最大の後悔、そして：あいつに対する、未だにぬぐい切れないわだかまりでもあるんだよな）

クリスターはJ・Bからハニーを解放した後、彼女と交際を始めた。今ならば、あれは仕方のないことだったのだと理解できるが、好きになった相手を兄に奪われた格好のレイフは、当時はかなり落ち込んだものだ。

（あれから、またオレの劣等感、クリスターには何をやっても敵わないって思い込みも一段と強くなったもんな。いや、まあ、実際その通りなんだけど…）

ただ、そこで立ち止まっていたはいけないのだと、レイフは思う。

（そうなんだ、クリスターに守られっぱなしのオレじゃなくて、あいつのことも守って支えられる男になりたい。あいつを追い越そうとかあいつに勝ちたいって訳じゃないよ。同じ場所に並んで立って、互いに助け合いながら一緒に歩いていける相棒でありたい、あいつに認めてもらいたい）

ハニーと会うのに肝心の彼女のことよりも、いつの間にかクリスターのことばかり考えてしまう自分にレイフは苦笑しそうになった。

（オレはきつと、これがきっかけになることを期待してるんだな。ハニーもさつき、自分の過去を向き合いたいって言ってた：たぶんオレと同じ気持ちでいるんだ）

過去に犯した過ちは消せないが、それと向き合うことなしには先に進めない。だから、それを認め受け入れるだけの勇気が欲しい――

レイフはそう祈念する。

ハニーとの待ち合わせ場所は、学校から程近い、昔何度か彼女と一緒に立ち寄ったことのあるスターバックスにした。

混んでいたら他の店にしようと思ったが、幸いいつもに比べて空いているようだ。駐車場に車を止めて、レイフは店内に足を踏み入れる。

コーヒーのいい匂いに満ちた店内で、レイフは注文より先にまず目当ての相手を探した。

きよろきよろと辺りを見渡しながら店の奥に入っていくと窓際の2人がけテーブルに坐っていた客が軽く手を上げた。レイフの視線は一旦その客の上を素通りしかけたのだが、明らかに自分に向けた合図に再び注意を戻す。

「ハニー？」

レイフは目を真ん丸く見開いてその場に立ち尽くした。

そこにいたのは、昔のままのイメージのハニー・ヘンダーソン、アッシュ・ブロンドの髪を長くのばした、陽炎じみたはかなげなイメージの華奢な女の子ではなかった。

「ほんとに来てくれたのね。嬉しいわ、レイフ」

髪は思い切りショート・カットにして、着ている服もカジュアルなジーンズにティーシャツと少年っぽい。レイフを認めて屈託なく微笑んだ顔は健康そうで、見違えるように明るく澁刺としていた。

「女って、やっぱり化けるんだ」

「え?」

ぼそりと呟いたレイフにハニーは不思議そうに細い首を傾げた

「あ、いや、雰囲気が随分変わったなと思って」

「そう? 昔からの友達とは私らしくなったって言うわよ」

そうすると、レイフが知り合った頃のハニーは本当の彼女ではなかったということだろうか。大勢の男達にレイプされた末、そう仕向けた張本人であるJ・Bの恋人になっていたハニー。

春先の冷たい雨に打たれて立ちつくしていた、今にも消えてしまいうような綺麗な女の子は、どこに行ったのだろうか?

「そう言うレイフも何だか感じが変わったわね」

「どんなふうに?」

「昔は『大きな男の子』ってイメージだったけれど、今は…ちょっと大人びて、男っぽくなったような気がするわ」

いつまでも突っ立っているのも他の客の邪魔になるので、レイフはカウンターでコーヒードラッグをオーダーし、再びハニーがいるテーブルに戻ってきた。

そこからは、緊張して構えていたのが嘘のように、レイフはハニ

ーとすっかり打ち解けて話をする事ができた。

懐かしい旧友に久しぶりに会った時にするような、互いの近況とか昔の友達の噂話とか、取り留めのない話を続けながら、レイフは、以前彼女と付き合っていた頃は、こんなふうに打ち解けた時間を過ごしたことなどなかったなと思い返していた。基本的にレイフは女の子が苦手だったし、ハニーといつものときどきして落ち着かなかった。それにハニーもあの頃は情緒不安定で、こんなふうにならずに邪気に笑う子ではなかった。

「ねえ、レイフ：クリスターはどうしているの？」

ハニーがおもむろにクリスターについて触れてきたのに、コーヒーを飲みかけていたレイフはちらっと目を上げた。

そう言えば、自分達がクリスターを話題にするのは今日会ってから初めてだなと頭の片隅で思いながら、レイフは特に変わった所のない口調で答えた。

「ああ、あいつも相変わらず：文武両道のスーパーマンぶりを発揮しているよ。まあ、最近は以前ほどがつつせずにはペースダウンしてるみたいだけど。去年の大会では見事にMVPを取ったし」

「それは：雑誌か何かで読んだと思うわ。クリスターはやっぱりあなたと一緒にプロを目指すつもりなのかしらね。あなた達の夢だったでしょう、2人で一緒にフットボールを続けたって」

「それは：よく分からねえよ。オレがいくらそうしたいと願っても、クリスターにはクリスターの考えがあるみたいでさ。いいいよオレらも夏休み明けからは最上級生になって、進路についても真面目に

考えないといけないってことや、そうなるって浮ついた夢ばかり言っていないでしっかりした計画を立てなきゃいけないってことくらい俺にだって分かるけど…じゃあ将来どうするつもりなのかって相談をしたくても、あいつは腹を割って話してはくれないんだ。全く、あいつの考えることなんか大半は余計なことだよ…なんで自分に正直になれないのかな。ほんとはさ、あいつだって、オレと同じようにフットボールが大好きで、ずっと続けたいと思ってるはずなんだ。あ…と、ごめん、こんなことばやいても、ハニーには分からない話だよな」

「ううん」

兄のこととなるとつい我を忘れて夢中に語ってしまう。照れくさそうに頭をかくレイフを、ハニーはじつと探るような目で見つめていた。

「あなたのそんなところは変わっていないのね、レイフ…そう、あなたは今でも変わらずクリスターのことを愛している…？」

思わずコーヒーを吹き出しかけたレイフだが、ハニーが言ったのは単なる兄弟としての愛情だろうと気を取り直した。

「そ、そりゃ、まあ…何と言っても、あいつはオレの片割れだもん」

「よかった」と、ハニーは胸に手を置き、小さな溜息をついた。

「ずっと気になっていたの。私がここを立ち去ってから、あなた達2人はどうなったんだろうって…何だか私の存在があなた達兄弟の間に余計な波風を立ててしまったんじゃないかって心配だったのよ」

「そんなこと、ハニーが気にしなくてもよかったんだよ」

レイフは優しく目を細めた。

「まあ、あの後しばらくオレは自分を役立たずだと責めて相当落ち込んだし、兄貴にハニーを取られたって悔しさが全くなかったわけでもないけどさ。オレも男だから、クリスターのやり方に、何ていうの、頭では納得しても心が許せない引っかかりってのが色々あるんだよ。あ、それは何もハニーについてだけじゃないから、気にしないでくれよ。あの時、あいつはオレがどうあがいてもできなかったことを鮮やかにやってのけた：実際J・Bをがつんとやっつけて、ハニーを救い出したのはオレじゃなくてあいつだったんだ。それが、しばらくの間は受け入れられなくてさ：同じように生まれてきた双子なのに、どうしてオレじゃ駄目だったんだろうって―」

「レイフ」

「それでも、実際ハニーがクリスターと一緒にいることでどんどん落ち着いて表情も柔らかくなっていくのを目の当たりにすると、これでよかったんだなと思うようになった。ていうか、認めざるをえなかったんだな：少なくともハニーに関しては、クリスターは正しいことをしたんだって。今日の前で明るく笑ってるハニーを見て、改めてそう思うよ」

切なさとはる苦さのこもった笑顔でレイフが話すと、ハニーは綺麗な顔を氣遣わしげに曇らせた。

「ねえ、レイフ：私は、今でもクリスターにはとても感謝しているわ。でも、ひとつだけ、もしあなたが誤解しているのなら言っておきたいのだけれど、あの頃の私達は本当の恋人同士というわけじゃ

なかったのよ。彼が私と交際し始めたのは、J・Bから私を引き離す口実にするためだった」

それは、レイフも何となく察していたことだったので今更驚きはしなかったが、当の本人の口から出ると一層真実味があつた。

「だからって、クリスターが私に対して薄情だったわけじゃない、むしろ逆だった。そうね：私に接する時のクリスターはまるでセラピストみたいだったわ。J・Bとの付き合いでばらばらに碎けてしまった私の心を、少しずつもとにあった場所に戻す手助けをしてくれたのよ。でも、それだけよ。やがて少しは冷静にものを見られるようになった私は彼と相談して、両親のもとに戻ることに決めたの。そして、彼ともそれっきりよ」

努めて落ち着いた態度で話そうとしていたハニーの口元にふつとうかんださびしげな微笑をレイフは見逃さなかった。

「クリスターが私に恋なんかしてなかったことは確かよ：彼が赤の他人の私にあそこまでしてくれたのは、ひとえにあなたのためだったと思うの。あなたが大事に思っていてくれた私だから、彼もできる限り大切に扱ってくれた。それほどに、クリスターはあなたを愛していたのね」

ハニーは失恋の告白をしているのだ。そう悟ると、レイフは何だかいたたまれなくなってきた。

「ハニーは、さっき兄貴に感謝しているって言ってたけど…」

レイフは衝動的にハニーに訴えかけていた。

「でもさ、それでいいのかよ？ オレがこんなことを言うのもなんだけど：ハニーはクリスターのことが好きだったんだろ？ なのに、クリスターが自分に恋をしていなかったことは確かだなんて―そんなひどいこと女に言わせるなんて、やっぱりオレには納得できないよ」

すると、ハニーは大人びた顔で苦笑した。

「あなたは相変わらず純粹ね、レイフ：でも、確かに、そんなことあなたが私に言うべきじゃないわ」

レイフは顔を赤らめてうつむく。ああ、こういうところが女心の分からない、無神経ってやつなんだな。

「ごめんなさい、あなたにあたるような資格は私にはないのにね」

「いや…」

「自分にあんなひどいことをしたJ・Bの恋人になっていて、彼に命じられるがまま、あなたに近づいて誘惑した：自分でも、よくあんなひどいことができたと思うわ。Jから離れて自分を取り戻していくにつれ、私はそんな自分が許せなくなつて：今だから言えるけど、私、一度自殺しようとしたことがあったのよ」

「ええっ？」

「それを察したクリスターがとめてくれなければ、私は今頃ここにいなかったわ。彼は私の命の恩人よ。私が必要な時に傍にいて支えてくれたあの人に、私がそのうち好意を覚えるようになったのも無理はないでしょう？ だから、次々と男を乗り換える軽薄な女だと

は思わないでね」

「うん：それは分かるよ」

「クリスターを意識し始めた私は、彼の気持ちも知りたがった。どうして私のためにこんなによくしてくれるのか、あの危険なJ・Bから私を守ってくれるのか：彼が私に好意を覚えているなんてうぬぼれるほど私は馬鹿じゃなかったから。ううん、ほんとは、ほんの少しだけ：そうだったらいいのになって期待していたのかもしれないわね。でもね、クリスターの言動を観察して、彼の仲間達から私の知らないところでクリスターがJ・Bとどんな争いをしていたのか漏れ聞いていると、決して、これは私のなんかのためじゃないって分かってきたの」

レイフははっと息を飲むと、身を乗り出すようにしてハニーの話に聞き入った。

「それで私、彼にさり気なく聞いて確かめてみたの。どうして私と付き合うふりなんかするのって？ たとえ形だけの付き合いでもあなたは弟の恋人を奪ったことになっているのよ。レイフにはちゃんと説明しているのって。するとクリスターはこんなことを言ったわ。レイフには詳しいことは話していないし、そのつもりもない。今のレイフに全てを打ち明けても余計に混乱するだけだし、何よりやっとJ・Bの罠から解放してやれたばかりなのに、この上自分とJの争いに弟を巻き込みたくはない。クリスターはね、自分の中にある絶対的な優先順位に従って行動しているのですって。だから、私を自分の手の内に囲い込んだことで、もしかしたらレイフに恨まれるかもしれないけれど、あなたにどう思われるかは、クリスターにはそれほど重要なことではなかったの。あなたの幸福と安全を守ることが彼の全てだったのよ」

「あいつ、そんなこと考えていやがったのか」

レイフは少し呆然となりながら呻くように呟いた。

（兄貴らしいといえば、その通りか…あいつはこうと決めたら限度というものを知らない―でも…）

クリスターの凄まじい愛情を今改めて眼前に突きつけられたレイフの心中は複雑だった。

（何だろう、少しも嬉しくない。むしろもやもやしたものが胸に広がっていく…クリスターのやり方はやっぱりオレには受け入れられねえ。いつだって勝手に独りで決めて独りで行動しちまう…オレは蚊帳の外にいて、あいつが何を考えているのか今どこで何をしているのか、やきもきしながら心配して…）

今でも続くクリスターの秘密主義。ことはアイザックの失踪にまで発展しているというのに何かを頑なに隠し続ける態度を思い返して、レイフは突き上げてくる苛立ちのままに吐き捨てた。

「ああっ、畜生、腹が立つ！」

イライラと頭をかきむしりながらいきなり大声を発するレイフに、目の前にいるハニーだけでなく他のテーブルの客達まで怯んだようだ。

「あ、ごめん、ごめん」

凍りついたその場の空気をほぐそうとへらへら笑って周囲に愛嬌

を振りまくと、レイフは改めてハニーに向き直った。

「何だかき、クリスターの込み入った考えや行動を理解しようとする、オレの脳みそはすぐ熱くなっちまってさ」

冗談めかして微笑んだ後、レイフはふと真顔になってポツリと呟く。

「いや、ほんととは笑い事じゃない、それこそオレの悩みの種なんだよ。ハニーが今話してくれたことでもそうだけど…あいつ、大切なことでもオレにはいつも黙っているんだ。オレのためだ、それが正しいんだって、あいつは思ってるらしいけど、それこそ大間違いなんだよ」

「レイフ…?」

レイフは眉間に皺を寄せて、ううんううんとしばし唸った。

「やべえな、何かマジで知恵熱が出てきそう…やっぱ考えすぎて煮詰まる前に、クリスターを捕まえて色々問い詰めてやるよ。その方がすっきりしそうだ」

ハニーはレイフが何を言わんとしているのか理解しようとしばらく考え込んでいたようだが、やがて諦めたのか、話題を変えてきた。

「ねえ、レイフ…実は、私がここに来て、あなたに会おうと思いつたのはあるきっかけがあったからなの」

「きっかけ? 何だよ、それ?」

頭の中はまだ半分以上兄のことで占められていたため、レイフは上の空で答える。

「あのね、ついこの間なんだけれど、あいつが突然電話をしてきたのよ」

何かに怯えるかのごとくふいに声を潜めるハニーにレイフもやつと注意を戻した。

「あいつって？」

「ジェームズ・ブラックよ…矯正施設から出てきたのね。あなたは知ってた？」

瞬間、レイフの全身に悪寒が走った。

「J・Bが出所したって…それは、いつのことだよっ？」

またつい大きな声を出してしまったレイフは慌てて手で口を押さえた。

「ごめん、つい興奮して…」

「そうすると、あなたは知らなかったのね？ 電話では、自由の身になってもうじき半年になると彼は言っていたわ」

「半年…」

そうするとレイフがJ・Bに似た人影を見た、あのボクシングの試合の時点で既に彼は施設を出ていたことになる。クリスターは否

定したが、やはり、あれはJ・B本人だったのではないか。

（あいつが、クリスターの試合を見に来ていた）

レイフは冷たい水を頭から浴びせられたかのように身震いして、思わず自分の腕を強く握り閉めた。

「それで…あいつは何と言ってきたんだ？」

気を取り直してレイフが尋ねると、ハニーはいつの間にか真っ青な顔になっていた。

「ジェームズは、私に会いたいと言ってきたの…ずっと私のことは気になっていた。一度会って話をしたいって」

「馬鹿な！」

こみ上げてくる吐き気を抑えるかのように喉もとを押さえるハニーをレイフは気遣わしげに見つめる。

「ハニー、あいつの誘いに乗ったら駄目だ。何があっても、絶対J・Bと会おうじゃない」

「うん…分かってる」

弱々しい声ながらもそう言って、ハニーは健気らしく微笑んだ。

「あいつの声を久しぶりに聞いて、私は改めてJ・Bの恐さが分かったの。すっかり立ち直ったつもりでいたのに、もしあいつと直接顔を合わせたら、その時自分を保てるか急に確信が持てなくなって

しまった。いえ、きつとまた私はあいつに捕まってしまう。そうなることが恐いから：彼とは会わないわ。決して」

「ハニーがあいつにたぶらかされるなんて疑ってはいないけど…」

「ううん：あいつと出会って、私が学んだことがあるとすれば、自分に関して絶対はありえないということよ。私は弱い：だから、うんと用心して二度とあんな奴に捕まらないようにしなくては駄目なの」

テーブルの上で固く組まれたハニーの手が微かに震えているのをレイフは認めた。

「私をあんなふうにしたのはJ・Bだけれど：彼にだって、1人の人間を全くの別人に作り変えることができるわけじゃないのよ。私があんなふうに身を持ち崩したのは、認めるのは辛いけど、ああなる素養があったからよ。ずっといい子を演じていることに疲れてしまつて、自分に正直に振る舞つてみたかった。そんな私を分かってくれたジェームズに惹かれたの。そうして彼は見事に、私自身も知らない、私の中のどろどろと醜い部分を引き出すことに成功したわ。あれは、ジェームズの一種の才能なんでしょうね。でも、全ての人間がジェームズの思い通りに変えられてしまうわけじゃない。あなたは、ジェームズの罠に落ちて、誘惑されたり脅迫されたりして、かなり追い詰められていたけれど：最後まで彼には影響されなかったわ。ジェームズの傍にいてここまで自分を保ち続けることのできた人を、私は他には知らない」

「だって、オレはあいつに共鳴するとこんなかこれっぽっちもなかったし：いや、普通に無理でしょ。ハニーはきつと、あいつにあんまりひどい目に合わされて、ちよつと感覚がおかしくなっていたん

だよ」

きょとんと瞬きするレイフをハニーは羨ましげに眺めた。

「J・Bがあなたには執着しなかったのも無理はないわね。あなたを墮落させるなんて絶対無理だって見切りをつけていたのよ」

「それなら、さっさと解放してくれたらよかったのにな」

「そうはいかなかったのね…だって、あなたは彼の関心からは外れていても、クリスターはまた別だもの」

レイフは嫌そうに顔をしかめた。

「なあ、ハニーはクリスターとJ・Bの戦いがどんなだったのか、詳しいことを知ってるのかよ？」

「ああ、あなたは知らないのね。クリスターはあなたには隠し続けていたから…でも、私もはっきり知っているわけじゃないのよ。当時彼と一緒に闘った仲間達なら傍で見ていたわけだから、詳しいでしょうけど」

「仲間って…アイザックとか…？」

「そう、当時の新聞部の部員だった、アイザック、コリンとミシエル、それから、クリスターを慕っていたダニエルって年下の子がいたわ」

「え、ダニエルもかよ」

クリスターに憧れて、いつも熱心に彼の後を追っていた。その延長で、J・Bとの闘いにも自分から進んで入っていったのだろうか。

（でもさ、ダニエルはまずいだろ。そりゃ頭はいいかもしれないけど、オレ達より2才も年下のほんの子供なんだぜ。兄貴の奴、オレを庇おうなんてするよりも、むしろダニエルを気遣ってやれよな。どっちが弱いのか、一目瞭然じゃねえか）

一瞬憤然となった後、レイフは、クリスターのかつての仲間達の名前を頭の中で並べ、ああ、なるほどそういうことかと、目の前が急に晴れて、今までおぼろげにしか分からなかったものがはっきり見えたような気がした。

「レイフ：私にジェームズが接触しようとしてきたなら、あなた達にももしかしたら彼の手が伸びてるんじゃないかって…そのことがすごく心配になって、私、どうしてもここに来なくちゃって思い立ったの」

レイフはしばし、ハニーに自分の懸念を打ち明けるべきかどうか迷ったが、これ以上彼女の不安を煽ることはないだろうと、近頃身辺にちらついているJ・Bの影やクリスターの不審な行動、先日起こったかつての彼の仲間達の事故や失踪事件については胸に収めておくことにした。

「私、どうして今更ジェームズが私に連絡など取ったのか考えたの…きっと、あいつは以前のように私をまた道具にしようと思ったのよ。かつてあなたを罠にかけるのに利用したようにね。レイフ、気をつけて、ジェームズはあなたやクリスターに復讐するつもりなのよ」

復讐。J・Bの手が、今こうしている間にもクリスターに伸びているような気がして、急に胸が苦しくなったが、レイフは何とか気持ち静めた。

「ハニー、分かったよ。ありがとう、オレ達のことを気遣って、わざわざ訪ねてきてくれて：オレ達のことなら、心配いらないよ。だから、ハニーはもうこれでジェームズのことなんかすっかり忘れて、生活を新しく立て直すことに専念しろよ。な？」

レイフが心からの思いでそう言うと、ハニーはじつとうつぶしていた顔を上げ、まっすぐに彼を見返した。

「ええ、そうね。ありがとう、レイフ、私もあなたに会って話すべきことを話せて、ほっとしたわ。これできつと後ろを振り返らずに歩いていける」

ハニーは長い間垂れ込めていた雲が晴れたようなすっきりした顔をしていた。

レイフはぱちぱちと瞬きをしたかと思うと、頬の辺りを指先で引っかきながら、ふっと笑った。

「うん：オレも、ハニーと会えてよかったと思うよ。これで、やっとオレも吹っ切れるかな」

2年近くもレイフの胸を離れなかった、数々の失敗や後悔、失恋の苦い記憶：これでやっと終わらせることができる。

（ハニーのことなんかとくに諦めて、ほとんど忘れたつもりだった：でも、ほんとは、あのままじゃ何一つ終わっていなかったんだ）

何も言わずに、ある日、いきなり学校を辞めて故郷に帰っていったハニー。レイフは、彼女が親元に戻ったことを後からクリスターを通じて知らされたのだ。

（ハニーはオレにさよならを言わなかった。オレはハニーにさよならを言えなかった：だから―）

レイフはハニーとスターバックスの駐車場で別れた。せっかくだから懐かしい街と一緒に巡ってみないかと誘ったのだが、ハニーはまだそこまで穏やかな心で思い出に浸ることはできないからと断った。

「それじゃ、気をつけて帰れよ。その：元気だな」

「あなたもね。さよなら：レイフ」

「ああ、さよなら」

レイフはハニーにくると背中を向けて、自分の車の方へ歩いていった。ちくんと心臓が小さく痛んだが、思ったほどひどくはなかった。

（つまり、オレ、今度こそ完全に失恋しちゃったわけか：ああ、なんか、すっきりしたような、物寂しいような…）

車の運転席に坐って、しばらくの間ぼうつとした。別に哀しくなどなかったつもりだが、目がじわりじわりと濡れてきて、しまいは鼻水まで出そうになってくる。

「うちに…帰ろう…」

くすんと鼻を小さく鳴らして目元を手の甲で荒っぽくぬぐい、レイフはエンジンをかけた。

「兄貴、もう戻っているかなあ」

クリスターに対して言いたいことは山ほどあったが、それより何より、今のレイフはただひたすら彼に会いたかった。

彼がコーヒーを淹れて社長室に持っていくと、仕事をするでもなく暗い顔をしてデスクに座りぼんやりと物思いにふけていたラーズが少しほっとした表情になった。

「そんなに気落ちしないでください、オルソンさん。ブライアンさん達があんなひどい辞め方をしたのは彼らに問題があったからで、あなたは何も悪くないんですから」

金髪の若者が同情のこもった柔らかな声で囁くとラーズは微かに目元を潤ませる。親友達に裏切られたせいか、随分感傷的になっているようだ。

ラースに勧められるがまま、彼は来客用のソファにそっと腰を下ろした。

「そんなことより：そうだ、あなたの自慢の子供達の話をしてくださいよ。この間見せてくれた小さい頃の写真、ほんとにヘレナさんにそっくりで、お人形のように可愛かったですね。それが今ではあなたよりも背が高いだなんて、イメージがわかりません。いつか実物と会ってみたいなんて思います」

「おお」

息子達の話振られると他のことに気を取られていてもラースは大抵乗ってくる。よほど件の双子兄弟を愛しているのだろう。相好を崩してソファの所にやってくるラースを、彼は温和な笑みの陰に隠した冷静な眼差しで観察していた。

この男のことなら、今ではもう、何から何まで手に取るようによく分かる。単純で読みやすい男。その点、今はもうここにはいないブライアンやジョエルよりも扱いは簡単そうだ。

始まったら止まらない息子達の自慢話に適当に相槌を入れながら、彼は出そうになるあくびを噛み殺すのにちよつと苦勞していた。

弟はきつとこの大らかで愛情深い父親と気があうだろうが、明晰すぎる兄はどうだろうか。愛すべきだが尊敬できない人物と思っているのではないだろうか。

ラースは目の中に入れても痛くないほど息子達を溺愛しているが、彼らのことを理解しているかというところでもない。実際、もう1

8才になった立派な青年達が、彼の頭の中では依然として幼い子供でしかない。子供が誰かとキスしたりセックスしたりするなどと、ラースが知ったらさぞかし困惑するのではないだろうか。いや、それよりも、息子達がひた隠しにしている、あの秘密を知ったら彼がどんな反応をするのか。想像できるだけに、おかしい。

ラースはことセクシャリティについては保守的で徹底したホモ・フォピアだ。

息子達の関係についても、全くの盲目というわけではなく、大きくなって子供の時と変わらない『親密すぎるスキンシップ』をする彼らに、訳もない不安や不快感を覚えていくらしい。親の勘というやつだろう。もしかしたらラースが彼らをいつまでも子供と見なしたがるのは、過剰な触れあいを説明する正当な理由が欲しいからかもしれない。

「…何と言っても2人きりの兄弟だ。もちろん仲がいいに越したことはないんだが、ちょっとばかり仲がよすぎるのが、どうしたものかと思うことがあるんだ。やっぱり双子だからかな…お互いに対する執着が普通の兄弟以上というか…考えすぎたとは思うがな」

歯切れの悪い口調でこんなことをラースが漏らす度、彼の胸の中の嗜虐心が頭をもたげそうになる。

「そうですねえ…ああ、以前読んだ本にこんなことが書いてありましたよ」

ねえ、ラースさん、本当のことを教えてあげましょうか。

「…一卵性双生児は総じてナルシストで同性愛に陥りやすい」

あなたの子供達は恋人同士なんです。あの2人は愛し合っているんですよ。

「冗談じゃない」

明らかにむっとなるラースに、彼は慌てて訂正するように両手を振ってみせた。

「まあ、心理学者の言うことをそのまま鵜呑みにすることはないですから：話に聞くとところではラースさんの息子さんにはちゃんとガールフレンドもいるようだし、心配することはないんじゃないですか」

「うむ。そうだ：そのとおりだ」

やはり少しは疑っている。信じたくない現実から目を逸らしている、この男に秘密をばらしてやりたくてたまらない気分には彼は駆られた。

自分の口から真実を明かしても少しも面白くないとは分かっていたけれど――。

「でもね、オルソンさん：」

誘惑に耐えかねて口を開きかけたが、その時、外に向かって半分開かれたままのドアが軽くノックされたので彼は出掛かった言葉をとっさに飲み込んだ。

「ラース、そろそろ時間よ」

ドアの向こうから姿を現した紅い髪の女は、ラースと親しげに話しこんでいた様子の彼を見つけて僅かに冷たい目になった。

「おお、もうそんな時間か。ジョエルの件で弁護士と相談しなきゃならんのだ。コーヒーをありがとうな、ジェイコブ」

ラースは慌ててソファから立ち上がるとヘレナから車のキーを受け取り、部屋から出て行った。

「ラースと…何を話していたの、ジェイコブ？」

コーヒーのカップを片付けようと身を起こす彼にヘレナが何気なく声をかけてきた。

「取り留めのない話ですよ…ラースさん、かなり落ち込んでいるようでしたから、何か話しかけて気を紛らわせてあげた方がいいような気がする…余計な気遣いだったでしょうか？」

「いいえ…もちろん、あなたを咎めているわけではないわ」

ヘレナの口調は穏やかだがほとんど瞬きもせず彼にあてられている目は異様に鋭い。彼が示す僅かな反応も見逃すまいとしている。

「ただ、どうして、アンチゲイのラースにあんな話をしたのかなって思ったの…」

いきなりストレートで来たかと彼は少しひやりとした。

「ああ…聞いていたんですか、ヘレナさん…？」

ばつが悪そうに顔をしかめて見せるとヘレナも少しすまなそうな顔をする。

「立ち聞きするつもりじゃなかったのよ：私は聴力が人並み外れていいの。息子達もそうだから、きっと遺伝的なものでしょうね」

息子達と聞いて、彼は思わず好奇心をかきたてられたが、ヘレナに見抜かれるのを用心して目は伏せたままにしておいた。

「本気で言ったわけじゃないですよ。もちろん。気を悪くしたなら謝ります」

ヘレナはじつと黙り込んで彼を見守っている。この沈黙は結構なプレッシャーになるなど彼はこの場から逃げる口実を探した。

「残念だけれど：僕はヘレナさんに嫌われているみたいです」

ふっと溜息をついて、彼はヘレナの前まで歩いていった。

「いいえ。どうして、そう思うの？　だって、私があなたを嫌う理由なんてないでしょう？」

「そうですねえ」

彼は首を傾げて考え込むふりをした。

「ただ、僕がここにやってきてからですから――立て続けに人間がらみの問題が起こって、ブライアンやジョエルのような、リースさんが信頼していた古株の社員達が辞めることになったのは。僕がここ

に不運を運んできたのだと受け取られても仕方がないのかもしれない
せん」

「私は、運とか不運なんて、理屈にあわないことは信じないわ。だから、その点はどうか安心してちょうだい、ジェイコブ。ただ：気になることがないわけではないのよ」

彼は問いかけるかのように首を傾げた。

「ラーズはあなたをととても信頼しているわ。出会ってまだふた月にもならない相手だとは思えないほど、あなたを信じきっている。長年の親友達に裏切られたのがショックで気弱になっているせいかもしれないけれど、あなたの言葉を鵜呑みにしかねない今のラーズは見ていてとても危ういの。だから、あなたにも言葉は慎重に選んでもらいたい。特に、さっきのようなことを、うかつに口に出されては困るわ。あなたを責めるつもりではないけれど、分かってちょうだい」

「はい：。分かりました、気をつけます」

この女はやはりクリスターを思い出させるなど、緊張感と共に言
いようのない興奮が沸き起こってくるのを意識しながら、彼は胸の
内でひとりごつ。

内面に限って言うならば、あの脳天気な弟よりもずっとこの女の
方がクリスターに近い。

どうする。感情を隠し通すのはどうやら無理そうだ。

「でも、ヘレナさん、僕は別にあなたの息子さん達を同性愛者だな

んて決め付けたわけじゃないですよ。うつかり口を滑らせたことをそんなふうに深刻に捕らえる必要はないじゃないですか。それが、別に本当じゃないんなら？」

ヘレナはぴくりとも表情を動かさなかったが、意志の強そうな瞳がほんの僅かだが心もとなげに揺らめいた。

勘のいいこの女は薄々知っているのかもしれない。

「それに、ラースさんが僕を信頼して傍に置きたがるのはあっちの責任で、僕にはどうしようもないことです。大体、あそこまで無条件に他人に心をさらけ出すなんて信じられない。よほどのお人よしか馬鹿のどちらかです。…誤解しないでください。僕はそれでもラースさんが好きなんですよ…子供のまま大人になってしまったような人だから、どうか誰にもあの純真な心を傷つけて欲しくないと思う。あなたもきっと、そんな母親にも似た心情であの人のことを心配しているんですね？」

これもどうやら凶星だったのか、ヘレナの冷たい琥珀色の瞳の奥に今度は明らかな怒りの火が揺らめいた。

「だからと言って、あまり無理はしないでくださいよ、ヘレナさん。今のあなたは普通の体じゃないんだし、ラースさんの言う通り、やはり家にいた方がいいんじゃないかと僕も思います」

「あなたが、そんな心配をする必要はないわ」

ヘレナが軽く片方の眉を跳ね上げて微笑むとますますクリスタールを思い出させ、これ以上傍にいるのが辛くなってきた彼は、軽く会釈をして彼女の脇を通り過ぎた。

「ラースはあなたのことを…クリスターにどこか似ていると言っていたけれど」

ヘレナが低い声で漏らすのに彼は思わず足を止めた。

「それは間違いね。あなたは、あの子と似ても似つかないわ」

ヘレナが苦々しく呟くのを背中に聞いて、唇の端を冷たい笑いに引き上げると、彼―ジェイコブならぬジェームズ・ブラックはそのままゆったりと歩き去った。

第4章黒い羊（9）

「兄貴、ちょっと話があんだけど」

クリスターが夜になって家に帰るとやけに真面目な面持ちをしたレイフが玄関で待ち構えていた。

「疲れているんだけど、今聞かなければならない話なのかな？」

疲れているのは本当だったが、それよりも弟から追及されたくない事情を色々抱えているクリスターは、あえて冷たい態度を取ることで予防線を張った。

「うん。悪いけど、今日は逃がしてやれないよ、兄貴」

レイフはいつになく強気な出方をする。

さては何か隠しだまを持っているかと察したクリスターは、無言であごをしゃくって、レイフに2階に上がるよう示した。

灯りの漏れたりリビングからは、父と母の声がテレビのニュース番組の低い音声に混じって聞こえてくる。近頃職場でのトラブルで忙殺されている彼らが、まだ8時過ぎのこの時間に家に帰っていることは珍しい。

クリスターにも彼らの抱え込む事情が気にならないわけではないが、さすがに今は自分が直面している数々の問題を片付けることに手一杯だった。むしろ両親の気持ちに他に向けられていることがありがたかったくらいだ。

（余裕があれば、オフィスの様子を覗きにいきたいし、せめて母さんに詳しい話を聞きたいところだけどー）

一瞬両親への気遣いに心を捕らわれたものの、背後でレイフが小さなくしゃみをしたのに、クリスターはすぐに意識を切り替えた。

他のことは後回しだ。ともかく、レイフが持ち出してくる話とやらに集中しよう。

（J・Bに関することだろうとは察しがつくが：そうだな、レイフに全てを隠し通すのはそろそろ限界か。もともとは勘のいい奴だ。僕はレイフを丸め込むのは得意だけれど、これだけ僕の周囲で不審な出来事が頻繁に起こっては、いつまでも騙しきれるものじゃない。そろそろ、本当のことを明かすべきだ。そうして、こいつが納得するような最低限の情報は与えながら、うまく操縦して、深入りさせない方向に持って行く：レイフに、J・Bにぶつかっていくような、勝手な暴走をさせてはならない―できるか、僕に？）

レイフの先に立って階段を上がりながらそんなことを考えるクリスターの脳裏にふと、大怪我をしたコリン達をレイフと一緒に見舞いにいった時の記憶が過ぎる。

あの日クリスターが受けた衝撃は大きかったが、レイフが傍にいてくれたおかげで和げられて、何とか平常心を保つことができた。

（こいつの手を取れば、確かに、僕は精神的にずっと楽になるだろう。アイザックがいなくなった今、Jとの闘いでも、レイフは頼もしい味方になってくれるかもしれない：だが、それではレイフの安寧が守れなくなる：駄目だ、こいつを頼るなど本末転倒じゃないか。

しっかりしろ、僕なら、きっとできる…!）」

クリスターは自分の部屋に入って明かりをつけると、レイフが口を開く前に素早く向き直った。

「話って?」

不機嫌な態度を取るクリスターに、レイフは一瞬鼻白んだ顔をした。すぐには答えず、ゆっくりと部屋の中を歩いて、クリスターのベッドの端に坐って落ち着く構えを取る。

それを、クリスターは腕を組んで立ったまま、冷たい目で見守った。

「あのさ」

レイフは何と切り出すべきか迷うように頭をかいていたが、やがて何かを吹っ切ったような顔になり、率直にこう打ち明けた。

「今日、ハニーと会っていたんだ、オレ」

久しく忘れていた名前をレイフが口にしたのには、ある程度覚悟していたクリスターも少しばかり意表を突かれた。

「ハニー・ヘンダーソンのことか?」

用心深く確認しながら、クリスターは素早く頭を回転させていた。

二度と自分達の前には姿を現さないと約束させて親元に帰したハニーがなぜレイフと再び接触したのか。彼女はレイフに何を伝え、

またレイフはそれをどう受け止めたのか。それらを推測すると、レイフが今から何を自分に言おうとしているのかも大方予想がつく。

大丈夫だ、ちゃんと対処できる。これもまだ自分の想定内の事態にすぎない。

「昼前に電話がかかってきてさ。会って話したいことがあるって言うから、学校近くのスターボックスでしばらく話しこんでたんだ」

レイフは、クリスターの反応を、じっと上目遣いで窺っている。

「なあ、兄貴、ハニーに二度とこの町には戻らないように言い聞かせていたらしいな。それって、オレと会わせたくなかったからだろ？ 彼女の口からオレに黙っていたあれこれが伝わると困るから――実際今も、どうしたらオレをごまかせるだろうって考えてるよな、秘密主義のクリスター？」

もう誤魔化されないぞというようにレイフが鋭く目を細めてみせると、ひどく自分に似て見え、クリスターは複雑な気分になった。

「それはおまえの考えすぎだよ、レイフ。僕がハニーを遠ざけたのは何よりも彼女自身のためだった。僕やおまえも含めた、ここにあるものの全てが彼女をJ・Bとの忌まわしい記憶に導いてしまう――当時のハニーの精神状態を考慮しての判断だった」

クリスターが冷静に説明すると、レイフはしかめ面をして、苛々と頭を振った。

「兄貴の嘘はもう聞き飽きたよ。大体、ハニーをその気にさせた挙句振っておいて、何より彼女のためだったなんて白々しいこと言う

なよ。まあ、おまえは別にハニーを振った覚えなんかないんだろうさーでも、ハニーが、自分にはなから関心のなかったおまえを…それでも庇おうとするのを聞いていると、やっぱりちよつとむかついたぜ！」

「レイフ…」

弟が一体何にそれほど憤慨しているのか分からずクリスターが当惑していると、レイフの頬がさつと赤らんだ。

「全部、オレのため、だったんだろ。オレからハニーを取り上げて付き合ったのも、新聞部の奴らを巻き込んでJ・Bと闘い、奴を施設送りにまでしたのも、オレが安全でいられるようにって動機からだったんだ」

なるほど。では、ハニーからその辺りの事情は聞かされた訳か。

レイフも薄々分かっていただろうが、この話題になるとクリスターはいつも彼を煙に巻いて、確信を抱かせないようにしていた。

「こんな大事なこと、オレには秘密にして、自分独りで背負い込んで…なあ、それでオレが喜ぶと思うのかよ？ いや、おまえはオレがどう考えるかなんてことは問題にしない。ただ、自分で考えた、オレのためになる、正しいことを行っただけだ。いいか、それ、ちつともオレのためになってねえぞ。オレをこんなに悩ませ、落ち込ませ、苦しめるのは、おまえのその独りよがりなやり方なんだ」

レイフはじっとしていられなくなったかのようにベッドから立ち上がり、クリスターの前に来た。鋭く切れ上がった双眸が、クリスターの瞳を真っ向から睨みつける。

「ハニーのことは別にもういいよ。今更腹をたてても、どうせ終わったことだし。ただ、おまえが今でも同じやり方を通そうとするのが気にいらねえんだ。なあ、オレだって、いつまでもおまえから一方的に守られるだけの馬鹿な弟じゃねえよ…少しはオレを認めてくれたっていいじゃないか。大体、そんな意地を張っている場合じゃねえんだろ、クリスター…」

レイフの口元が緊張のあまり強張るのをクリスターは認めた。

「あいつが…J・Bが戻ってきたんだろ…？　そうしておまえに復讐しようとしている…コリン達の事故も…もしかしたらアイザックの失踪もJ・Bの仕業じゃないのかよ。おまえの仲間が無事に残っているのはもうダニエルだけ…そんな状況でJ・Bから逃げ切れるのか？　オレは嫌だからな、兄貴があいつに傷つけられるなんて―」

熱心に訴えながらレイフは震える手を伸ばし、呆然となっているクリスターの腕を掴む。感情が昂ぶるにつれ次第に力がこもる彼の指は腕に食い込んで、クリスターに痛みを覚えさせた。

「レイフ、落ち着けよ」

クリスターはレイフをこれ以上刺激しないよう努めて冷静に返しながら、その手をさり気なく腕から引き剥がした。

「J・Bが出所したのは本当だよ。実際矯正施設なんていつまでもいられるものじゃないってことくらい、おまえにも分かるだろう？」

「おまえは、そのこともとっくの昔に知っていたくせに、オレには黙っていたんだ」

恨みがましげになじるレイフに、クリスターは溜息をついた。

「おまえを悪戯に動揺させるのが嫌だったんだ。それに、僕とJ・Bの確執は、もともとおまえと関わりのないところで生まれ発展したものだから―できることならおまえだけは二度とあんな奴に関わらせたくないというのは、僕の正直な気持ちだよ」

「何だよ、それ…?」

「おまえは、ハニーと会って、それで全てを知った気になっているようだけれど、おまえが聞いたのは、あくまで彼女の目を通して見たもの、彼女が考えた解釈でしかない。決して、それだけが真相の全てじゃないんだよ」

「おいおい、またややこしいことを言って、オレを煙に巻こうっていうのか?」

癪癪を起こしかけるレイフに、クリスターは辛抱強く言い聞かせた。

「そんなことは、もうしないよ。いいかい、レイフ、おまえは大事な点で、根本から考え違いをしている。もともとJ・Bのターゲットはおまえではなく、この僕だったんだ。昔、僕がJと同じデイベートのクラスにいた時、彼と親しくしていたことは知っているよね：本当は友人というよりもライバル―いや、少なくとも僕にとって彼は天敵のようなものだった。その頃から、Jは僕と戦いたくてもうずうずしていたんだ―そうして、どうすれば僕をその気にさせられるのか考えぬいた末に、彼はハニーを使っておまえを罠にかけたんだよ」

初めはただ疑わしげにクリスターの話聞いていたレイフの顔に、少しずつ戸惑いの色がうかんでくる。

「ど、どういふことだよ？」

「つまり、事実とおまえの認識は逆なんだよ：おまえが僕をJ・Bに引き寄せたわけじゃなくて、僕がおまえを彼との争いに巻き込んでしまったんだ」

「そ、それなら、そもそもどうしておまえとJは争うことになったんだよ」

「それを、おまえが理解できるように説明するのは難しいな：何しろ、あいつの頭は普通じゃないからね。ともかく、Jは、随分前から僕に目をつけていた。僕の気を引こうと躍起になって、僕を散々挑発し：一緒にゲームをしようと誘ってきた」

「ゲーム…？」

レイフはその言葉に寒気を覚えたかのように、ぶるりと身を震わせた。

「そう、Jにとって、僕との間であつた闘いの全て、おまえやハニー、他の大勢を巻き込んだ騒擾そのものが、遊びだったんだ。まるで子供のように無邪気に、嬉々として、彼は駒として操られ弄ばれた他人の痛みや苦しみを楽しむことができる：その点、僕らの常識や理屈は彼には通用しない。ハニーがあいつにどんなふうに扱われていたかを例に挙げれば、おまえにも少しは想像ができるかな？」

「う：あれを全部、無邪気に楽しんでたって…？ そんなことできる人間がいるなんて、信じられねえ：いや、でも確かにJなら…」

昔の嫌な記憶を思い出したのだろうか、理解の範疇を超えたことに対する衝撃が空白となってレイフの顔に緩やかに広がっていく。

「もちろん僕にはJの誘いになど乗るつもりはなかった。あんな奴の誘いに乗ったら、僕までが、ジェームズ・ブラックと同じ人でなしになってしまう：僕が彼の同類だと認めてしまう…。しかし、Jはあきらめなかった。やがて僕の最大の弱点はおまえだと知ったJは、まずおまえを手に入れることで僕を強請ったんだ」

クリスターはここで一息置いて、レイフの様子を素早く窺った。弟が自分とJ・Bの因縁を聞いてどう思つか気になったが、まだ、よく飲み込めていないようだ。

「結局、僕はJの挑戦を受けて立ったよ。おまえを押さえられては仕方がなかったんだ。そんな訳でしぶしぶ始めた戦いだったが、やるからには僕は容赦せず、徹底的に奴を叩いた。おまえまで巻き込んだJのやり方を僕は憎んだし、中途半端な対処法ではとても奴には勝てないと思ったからね。結果は、おまえも知っての通り、僕はJを学校から追い出して施設に閉じ込めることに成功した」

レイフ相手だからとはいえ、我ながらくどくどと言いついているなど、クリスターは密かに自嘲する。

「でも、戻ってきちゃった：あの怪物は、今度は一体何をするつもりなんだ…？」

呆然と呟いて、レイフはぞっとしたように自分の肩を抱いた。

「そうだね、Jが今、僕に復讐しようとしているのは本当かもしれない。コリンやミシェル、アイザックも、かつて僕と一緒に奴を追いつめるのに一役買ったせいで、奴に目をつけられていた。彼らを襲った災難にはJが絡んでいると見て間違いないだろう。これらは全て僕の責任だ」

アイザック達について言及した途端、強い罪悪感が心の底からこみ上げてきて、クリスターは思わず身をすくませた。

（いや、どんなもってもらしい言い訳をしても、彼らを生きた駒として使い、結果としてあんなひどい目に合わせてしまった僕は、J・Bと同罪だ）

クリスターは体の脇に垂らした手を握り締めると、食い縛った歯の間から押し出すようにして言った。

「だが、おまえはこの件には一切関係ない」

しばらくの間凍りついたように立ち尽くしていたレイフが、はっとなって、クリスターを振り返った。

「今の話で分かったろう、レイフ：おまえのせいじゃなかったんだから、そんなふうに関心を持って病むことはないんだよ。J・Bという災いを引き寄せてしまった僕が、自分で彼との決着をつける：コリン達に償うためにも、僕はそうしなければならんだ」

「ちょ、ちょっと待てよ！」

一方的に話を打ち切ってすっと身を引こうとするクリスターに、

レイフは顔色を変え、執拗に食い下がった。

「オレは関係ないなんてまぬけたことを言うのはおまえだけで、オレも、J・Bだってきつと思っちゃいねえぞ！　いつも冷静な兄貴が、何トチ狂ってんだよ、しつかり現実を見ろよ……いくらクリスタ―が完璧だって、1人じゃ、何もできないだろ！」

顔を背けて自分を見ようとしないうクリスタ―の肩を掴んで、レイフは強引に振り向かせようとする。

「だとしても、おまえがいて何になる？　おまえの助けなど、僕は必要としない。いや、はっきり言って、足手まといだ」

氷結した声で言い放ち、クリスタ―はレイフの手を荒々しく振り払った。

「クリスタ―！」

怒気のこもったレイフの声を聞いたと思った瞬間、クリスタ―は思い切り壁に叩きつけられた。

「レイフ……！」

背中をしたたかに打ちつけた衝撃に軽く咳き込みながら、クリスタ―は間近に迫った弟の顔を睨みつける。

「今までオレ、クリスタ―のことを物凄く頭の切れる天才だって信じてたけど、実はおまえ、救いようのない馬鹿なんじゃないかって今は疑うよ」

逃がすまいというように、レイフはクリスターの体の左右に腕をついて、彼を囲い込もうとする。

「どけ、レイフ！」

「どくもんかつ」

かっとなったクリスターが身をよじって暴れだすと、レイフもますますむきになって、体を押し付けクリスターの動きを封じにかか

る。
必然的にレイフの太股や下腹がクリスターのそれに密着し、そのリアルな感触に、クリスターは慄いたように震えた。

（あ…）

こんなふうには弟と親密に触れ合うことをクリスターは用心深く避けていたのだが、頭に血が上ったレイフには、彼の焦りに構う気振

りもない。
たちまち、クリスターの心臓の鼓動は激しくなり、頬は炙られたように熱を持ち、背中にはじつとりと汗が滲み出す。

これはまずいと、クリスターはとっさに自分とレイフの胸の間に手を入れて、じりじりと自分を圧殺しようとする弟の軀を押し返した。

するとレイフはそれ以上クリスターに迫れなくなったが、クリスターも隙あらば自分を捕まえようとするレイフの腕の間から逃げることはできなくなった。

2人の力がほぼ拮抗しているがために保たれる、この危ういバランス、この微妙な距離―自分達を取り巻く空気が微細な電流を帯びているかのごとくピリピリと張り詰めていくのを感じながら、彼らはしばし石と化したかのようにじっと睨みあっていた。

「どうして…どうして、分からないんだよ…！」

ついに、堪えきれなくなったかのように、レイフが叫んだ。

怒り狂ったその顔が、転瞬、泣きべそをかく子供のようにくしゃつと歪む。

「おまえの身に何かあったら、オレだって平気でいられない…J・Bの手がおまえに伸びてるってはっきり分かって、どうしてオレがおまえを放っておけるんだ、あんなサイコ野郎と独りで戦わせることができるんだよ！」

レイフの胸に押し当てた掌から彼の心臓の鼓動が伝わってくる。力強く動いて、熱い血を全身に送り出しながら、規則正しく打ち続けている。とくん、とくん…とくん…。それは、当たり前のようにずっとクリスターの体に馴染み溶け込んで、彼自身の心臓の鼓動と重なった。

（ああ、駄目だ）

ふいに自分を襲った圧倒的な激情の奔流に飲み込まれ、クリスターはぐらぐらと頭が揺れ始めるのを覚えた。

「頼むよ、クリスター…オレの手を取ってくれ。おまえの敵はオレ

にとっても敵なんだ。後生だからおまえと一緒に戦わせてくれ……オレは、あんな奴には、指一本オレのクリスターに触れさせたくねえよ」

まるで心と心が奥深い所でつながってしまったかのように、レイフの激しい感情がそのままストレートにクリスターの胸に伝わる。己を防御しようとする強固な意思の力もはねのけて、レイフの発する言葉のひとつひとつが剥き出しになった心に深く突き刺さる。

「オレ達は一生の相棒なんだよ。お互いを守り、助け合って生きていくために、一緒に生まれてきたんじゃないか。クリスターだって、ほんとは分かっているんだろ？」

切実に自分を求め訴える弟に、クリスターはなす術もなく魂ごと引っ張られるような気がしていた。

（レイフ、そうだ、僕だって、本当は……おまえと一緒にいたい……片時も離れたくない）

昔読んだ神話に描かれていた、唯一無二の半身とかき抱きあい、まつわりついて溶け合ったまま死んでいった人達のように――。

（他には何も欲しくない……何もしたくないし、これ以上余計なことを考えたくもない。レイフ、レイフ、おまえさえ手に入るなら、後にはもうどうなっても構わない。そうだ、なぜいけない？　こんなにも簡単に心がつながるのなら、体だって、ひとつになってもいいじゃないか）

体の奥底から湧き上がってくる魂の叫びに身を震わせながら、クリスターは熱を帯びた掠れた声で呼びかけた。

「レイ…フ…」

先程まではレイフの胸を突っぱねるようにあてられていたクリスターの手は、いつの間にか彼のシャツをつかんで今にも引き寄せようとしている。

「クリスター」

クリスターの昂揚が伝わったのか、レイフも頬を薄っすらと上気させ、あえぐように息をした。いきなり体の芯に灯った熱に戸惑うよう、大きく見開かれた目でクリスターを見る。

「な、何…?」

緊張のせいかわ、レイフはしきりと唇を舐めている。何か言いたげに開いたかと思うとぎゅっとすぼめられる、その唇を噛み付くようなキスでふさぎたい―突き上げてくる飢渴にクリスターは眩暈がしそうだった。

（切り離すことなどできない。おまえが可愛くて、可愛くて…おまえだけが欲しくて、レイフ、僕は―）

レイフがじつと様子を窺う中、クリスターはそろそろと手を上げて彼の頬に押し当てた。

「兄さん、オレ…」

緊迫感に耐え切れずに何か言いかけるが、レイフはすぐに絶句してしまう。

これだけ体を密着させていれば、クリスターが欲情していることくらい分かるだろうに、どうして無防備のまま、逃げようとしらない？ それは、レイフも欲情しているからだ。先にその気になったのはどちらかなどと確かめることは、自分達の場合難しいし、意味がない。

「レイフ、僕はおまえを―」

強烈な欲に駆られたクリスターがレイフを引き寄せようとした、まさにその瞬間、部屋のドアが開いた。

「お、おまえ達、一体何を―」

レイフの体越しに、顔を強張らせて立ち尽くすラーズの姿を見た途端、一気に我に返ったクリスターは、自分達の有様にも気がついた。

今にも互いをかき抱かんばかりに接近している双子の兄弟。父親であるラーズには、決して見せてはならない光景だ。

「…離れろよ、レイフ」

クリスターは衝撃のあまり声も出せずに凍り付いているレイフの体を力づくで押しのけた。そうして、弟を後ろに隠すようにして、こちらもやはり動転している父親の前に立つ。

「ごめんよ、父さん、つい大きな声で言い争ったりしたから、驚かせたのかな」

何事もなかったかのように平然として、クリスターは父親に話しかけた。こんな芸当は、馬鹿正直なレイフにはとてもできないだろう。

「クリスター、一体、おまえとレイフは2人で何をしていたんだ？」

上ずった声で不安そうに問いかけるラーズの瞳には、今まで自分達兄弟に向けられてきた温かなものとは明らかに違う、疑惑と嫌悪の色がある。

クリスターは背筋に冷たいものが走るのを覚えた。

「僕達が兄弟喧嘩をするのが、そんなに珍しいかな？」

レイフはクリスターの後ろで息を殺してことの成り行きを見守っている。下手に自分が口を開いたら事態はまずい方向に転がるということは直感的に分かっているようだ。

「喧嘩？ いつも仲のいいおまえ達が：それはまたどういう理由でだ？」

クリスターはふと口をつぐんだ。

ラーズが納得できるもってもらいたい理由はすぐに思いついたが、それを口にするには勇気がいった。

「僕達の進路のことで：ちょっともめてたんだよ」

怪訝そうなレイフの視線を背中に感じて、つい気後れしそうにな

ったが、クリスターは思い切って続けた。

「卒業したら、僕はハーバードに行くってレイフに言ったんだよ。フットボールも今年を最後にやめるつもりだから、僕に構わず、おまえは自分の好きな大学に進めばいいって：レイフならきつとスポーツ推薦を取れるし、フットボールの名門校にだって入れるだろうから―」

レイフが大きく息を吸い込む音が聞こえた。驚くはずだ。彼にとっては寝耳に水の話なのだから。

「ちよっ…ちよっと待てよ、クリスター…！」

黙って聞いていられなくなったレイフはクリスターに取りすがろうとしたが、それをクリスターは冷たく振り払った。

「ほ、本気じゃないだろうっ？」

「何度も言っただろ、僕は本気だよ、レイフ。僕にはフットボール以外にもやりたいことがある。おまえとの約束を反故にしてすまないけれど、現実的な将来を考えて、遊びは高校までで充分だと割り切ったんだ」

半ばは父親を納得させるための計算だが、本気には違いない。今だからこそレイフにも打ち明けられると、この場の勢いの力を借りて、クリスターは言い放った。

「だから、おまえもいい加減真面目に自分の将来を考えろよ、レイフ。僕がいなくなったら、おまえはちゃんとやっていけるさ」

父親の目をごまかすための芝居だと初めは思っていただろうが、クリスターの声や態度の中に真実を嗅ぎ取った途端、レイフは顔色を変えた。

「そんなこと勝手に決めるなよ、クリスター、オレは認めないぞ！
大体フットボールがただの遊びだなんて、嘘だろう！ やめられるはずがない、おまえだってオレと同じくらいフットボールを愛しているんだから」

ラースが傍で固唾を呑んで見守っていることも忘れ果て、レイフは必死の形相でクリスターの腕を掴んで引き寄せようとする。

「いい加減にしろ！」

クリスターはレイフの顔を平手で思い切り打ちつけた。

「に、兄さん」

兄に打たれた頬を押さえて、レイフは呆然と囁く。

「おまえのお守りにはもううんざりなんだ」

クリスターは苦々しげに吐き捨てた。

「おまえが何と言おうと僕は一人で好きな道に行く。甘ったれの弟に振り回されるのは、もうごめんだ！」

レイフが今にも泣き出しそうな顔をするものだから、余計に気持ちをかき乱されたクリスターは、つい必要以上に大きな声で怒鳴ってしまった。レイフを睨みつける目はつりあがり、歯もむき出され

ていたかもしれない。

「クリスマス、レイフ…2人とも、落ち着け…」

見かねたラースが、おろおろしながら間に入って彼らをなだめようとした。

「ごめん、また大声を出して…」

誰に対して謝っているのか分からぬ気分でそう呟く。クリスマスはがんと痛み出す頭を手で押さえると、凍りついたように立ち尽くしているレイフから離れ、そのまま部屋を出て行った。

レイフはきつと捨てられた子犬のような濡れた目で自分を追っているだろう。頼むからラースの前であまり感情をさらけ出さないでくれと祈りながら、クリスマスはともすれば崩れそうになる脚を無理に急かして階段を駆け下りていく。

「クリスマス」

階段の下では張り詰めた面持ちのヘレナが静かに立っていた。

クリスマスは一瞬その前で足を止めたが、今にも堰を切って溢れ出してきたような涙を母に見られるのが嫌で、無言のまま外に出て行った。

（レイフ、レイフ…このくらいのことで泣くのはやめろよ…ああ、何てことだ、まだつながったままなのか）

家から出ても、まだレイフの混乱と悲しみがクリスマスの胸に迫

ってくる。クリスターは、自分のものかどうか分からない涙を抑えるのに苦勞しながら、ガレージに向かった。

（落ち着け：僕まで動揺してどうする。進路のことは、どのみち近いうちにレイフに打ち明ければならなかった：丁度いい機会だったんだ。そう、僕はレイフと同じ大学には進まない：フットボールも今季が最後、プロになど、僕はならない）

胸のうちでは既に決まっていたことを口にただけでかくもうろたえる今の自分が滑稽で、クリスターは乾いた笑いを漏らした。

（ああ、でも、あんなふう突然に、あんな残酷な言い方でレイフに知らせるつもりじゃなかったのに―いや、そんなことばかり考えて逃げていたら、僕はいつまで経ってもあいつに打ち明けられなかった：あいつの手を振り払えなかっただろう）

クリスターは愛車に乗り込むと、レイフがとめに来る前に急いでガレージから発進させた。

（やめられるはずがない、おまえだってオレと同じくらいフットボールを愛しているんだから）

ふと、先程クリスターを思いとどまらせようとしたレイフの必死の訴えが思い出された。

（フットボールか：考えてみれば、僕にとって一番長続したものだ。レイフのように純粹に愛していたわけではないし、我を忘れるほどのめりこんだ覚えもないが―やめるとなると確かに少し：寂しいような気がするな：）

小学校に上がった頃からリトルリーグに入って、それからもう10年以上の付き合いだ。チームや傍にいる仲間達は変わっても、いつだってレイフと一緒に練習をして、どちらが先に強くなるのかうまくなれるのか競いあいながら、どんどん力をつけていくのが楽しかった。

（ああ、そうか、レイフが言ったように、やっぱり僕も好きだったんだな…でも、どんなに夢中になったものでもいつか終わる時が来る。自分に過酷な要求を強いて実力を出し切った末にたどり着いた今年の優勝とMVP：あれが僕の限界なんだ。天賦の才能に恵まれた弟と同等であるため、前に立ってリードするため、僕はいつでも必死でいっばいだった。だから、レイフ、後はおまえに任せるよ。僕がいない方が、おまえはきつと伸びて本来の実力を思う存分に発揮できるはずだから—そう、今度こそ、おまえの本気を僕に見せてくれ）

レイフと共に頂点を目指す夢を諦めた代わりに、自分にはとても手が届かないほどの高みにいつかレイフが到達する姿を見たいとクリスターは思う。

（おまえの未来に影を落とすもの、邪魔になるものは、僕が全部取り除いてやる…誰にもおまえに手出しはさせない—そう、J・Bのことは僕がこの手で始末をつける。もし奴が今度も執拗におまえを狙って危害を加えようとするならば、その時は—）

まだ興奮状態から抜けきらないのか、つい殺気立って物騒なことを考えてしまう自分にさすがに危機感を覚え、クリスターは気持ち切り替えようと頭を振った。

（全く、僕としたことが…）

フロントガラスの向こうの宵闇を茫洋と眺めながら、クリスターは自嘲的な笑みに唇を歪めた。

（もう少しうまくやれると思ったのにな……まあ、あそこまで事情が分かれれば、レイフが素直に僕の言うことに従うはずはなかったけれど、あんなに強気に逆らうとは思わなかった。レイフの奴、やっぱり最近少し変わってきたかな……もう僕が庇ってやる一方の甘えたな子供じゃないということか。あいつが少しは自分でものを考えるようになって、しっかりしてきたのは、僕も嬉しいけれど、でも――）

密着した弟の体の感触や顔にかかった吐息を思い出すと、また動悸が激しくなってくる。こみ上げてきた腹立たしさを押さえかね、クリスターはアクセルを踏み込んだ。

（レイフの馬鹿め……あんなふうにな不用意に僕に触ったり感情をぶついたりするなんて、反則だぞ……！）

レイフのうかつさを心の中でなじりながら、クリスターは改めて、双子の弟を求める自分の欲望の強さに慄然となっていた。

（いや、レイフばかりを責められない。何ということだろう、あいつと距離を置いて付き合うことにも大分慣れてきたように思っていたのに、いざ近づいてみると、何も変わってはいなかった。僕はすぐにあいつを欲しくなったし、レイフも同じようにやはり反応していた）

体育館の裏で抱き合った時にも覚えた衝動は、少しも変わらない強さで、彼らがこれまで必死で守ってきた全てをぶち壊そうとする。

（一生の相棒だなんて、まるで僕達の関係は子供の頃から少しも変わっていないかのようにおまえは言ったけれど――僕達は普通の兄弟じゃない。おまえだって、忘れたわけじゃないだろう？　一線を越えた13才のあの時からずっと、僕達は普通の兄弟のふりをしてきたけれど、それが嘘だということはお互い心のどこかで感じていた。ああ、ただの肉親としておまえに接することなんて、僕にはやっぱり無理だよ、レイフ……さっきのことですくづく思い知らされた。おまえが傍にいただけで、そんなつもりはなくても、ともすれば、あんなふうに勝手に体が反応して、歯止めがきかなくなる。あの時、父さんが部屋に入ってこなかったら、僕はおまえに何をしていたか分からない。レイフ、おまえだって、そこまで考えて行動していたわけじゃないだろう……？　父さんにまずいところを見られたって、すぐく動転していたじゃないか……僕達の本当の関係を知られるのが嫌だったんだ）

あの時は、さすがのクリスターも体中の血が一気に冷えたような心地がした。

（何てさまだ、レイフにばかり気を取られて、父さんが2階に上がってくる物音も気配も分からなかった……父さんがあんな怖気をふるような目で僕らを見たことなんて初めてだ。それほどに僕らは常軌を逸して見えたのかな）

張り裂けんばかりに見開かれた父の目を通じて、自分達の不自然なありようをまざまざと見せ付けられたような気がする。

（これからは、特に父さんの前では、レイフとの接し方にも注意した方がいいな。今までそんなふうに親に対して気を使ったことはなかったけれど、父さんのあの態度を見る限り、過度な触れ合いは避

けるべきだ：レイフを遠ざけたい僕にとっても、これは好都合だろう）

そこまで考えて、クリスタはふと首を傾げる。

（それにしても、一体父さんはどうしたんだろう：確かに、あの場面を見られたのはまずかったけれど、今までだって、父さん達の前で当たり前のように、僕とレイフは同じくらい接近したり触れ合ったりしていた。世間的には親密すぎる僕らの接し方に、ある意味父さんは慣れていたはずなんだ。それを、今更のようにいきなり気にしだしている：？）

漠然とした嫌な予感がクリスタの脳裏を掠めたが、それは形になる前に他の様々な感情の波の間に沈んでいった。

（とてもじゃないけれど、今夜は家には戻れない：かといって、こんな気持ちを抱えて1人で過ごすのもさすがに辛いな）

しばらくは当てもなく車を走らせていたクリスタだが、ふと思いつくままに行き先を学校に向け、やがて寮の近くで停車した。

そうして、近くの電話ボックスから暗記している電話番号をダイヤルする。

応対に出た受付を通して相手を呼び出し、しばらく話した後、受話器を元に戻した。そのまま、しばらくの間クリスタは待った。

10分もかからなかっただろう。やがてクリスタは暗がりの向こうから息せき切って駆けてくる小柄な少年の姿を見つけた。

「クリスターさん？」

電話ボックスの傍の街灯の下に途方に暮れたようにたたずんでいるクリスターに、彼は軽いショックを受けたように目を見開いた。

「何があっただんですか？」

一目で打ちひしがれていることが分かるほど今の自分はひどい顔をしているのかなと思いつながら、クリスターは心配そうに近づいてくる少年に向き直った、

「ダニエル、ごめんよ、急に呼び出したりして」

クリスターがいつもの癖でつい詫びると、ダニエルは何を水臭いことを言うのかというように頭を振った。

「レイフとね、言い争ったんだ」

クリスターは感情のこもらない淡々とした声で告げた。

「あいつと同じ大学には進まない、フットボールも今年限りでやめるということをね、今になってやっと…僕はあいつに打ち明けた」

ダニエルははっと息を吸い込んだ。

「クリスターさん」

聡明なダニエルはその言葉だけでクリスターの今の心情を察したようだ。たちまち大きな瞳を潤ませると、彼の体を支えようとするかのようにそっと寄り添ってきた。

他人に頼ることを少し前までのクリスターは嫌悪していたはずだが、今は、そんなことはもうどうでもよかった。

「ダニエル…」

クリスターが衝動的に抱き寄せるのにダニエルは素直に従い、おとなしい子猫のようにすっぽりと彼の腕の中におさまった。

「頼むよ、僕の傍にいてくれ：今夜は独りで過ごすことに耐えられそうにないんだ」

ダニエルはクリスターの気持ちに応えようとか細い腕を伸ばし、精一杯の力で彼を抱きしめようとしている。

ダニエルの艶やかな栗色の髪を撫でながら、なぜか弟の泣き出しそうな顔と声を思い出したが、クリスターはその記憶を無理矢理振り払った。

「大丈夫、僕はあなたの傍にいます。だから、クリスターさん：どうかもう自分を責めたり傷つけたりしないでください」

優しい声に張り詰めていた心が緩むのを覚え、そっと目を閉じると、クリスターは指先で探り当てたダニエルの唇に震える己の唇を重ねた。

第4章黒い羊（10）

結局クリスターはダニエルと一夜を共に過ごし、翌朝になってやっと家に戻った。

あからさまな無断外泊をした訳だから、両親の叱責はクリスターも覚悟していたが、意外にあっさりと彼らは許してくれた。

内実はどうあれ、羽目を外したことなどない優等生で通ってきたクリスターの突然の暴走は、彼らをよほど心配させたらしい。特に、一晩眠れなかったのだというラーズは、赤い目をしながら、素直に謝るクリスターの肩を叩いて、よかった、よかったとしきりに喜んでいた。

それからの数日は何事もなく過ぎ、家族の皆がすっかり元通りの穏やかな日常に戻れたかに見えた。

ラーズは、クリスターとレイフがただならぬ様子だったなどと、まるで見たこともないかのように、彼らの関係については一切触れようとしなない。ヘレナはいつものように余計なことと言わず、平静さを保っている。

クリスターも、何だかこのまま普段どおりの生活をずっと続けていられそうな気がしてきた。

（大丈夫だ。父さんが、あれ以来変な目で僕とレイフを見ることもない。僕達が節度を守った接し方を続ければ、怪しまれることはないだろう。人はたとえ目の前に真実を突きつけられようとも、それが受け入れ難いものであれば、自分が信じたいことの方を結局選ぶ

ものだ)

幸い、レイフも今のところおとなしくしている。クリスターとの親密な接触によって危うく心と体が暴走しそうになったところを父親に見られたことで、よほど懲りたのだろう。

だが、クリスターを見るレイフの目はずっともの言いたげで、何とか2人きりになって話し合える機会を窺っていることははっきりしていた。

(確かに、このままずっと逃げ回るわけにもいかない。J・Bの件でこれ以上レイフと話し合うつもりはないが、少なくとも進路のことはちゃんと説明した方がいいかな。その上であいつが納得しようがしまいが、それはもうレイフの問題だ)

クリスターの中に全くフットボールへの未練がなかったわけではないが、レイフに対して宣言したことで、それはもう決定済みの事項なのだと何とか割り切ろうとしていた。

だが、薄氷の上を息を殺して歩くかのような、その危うくも平穏な日々は、突然打ち碎かれることになった。

「ねえ、クリスター、あなたにちよつと相談したいことがあるのだけれど…」

始まりは、いつになくもの思わしげな母が、たまたま早く帰ってリビングで夜7時から始まるCNNニュースを見ていたクリスターに声をかけたことだった。

ラースは仕事からまだ帰っておらず、今日は友人達と映画を見るに

行くと出かけたレイフもまだ戻っていないため、家にいるのはクリスターとヘレナの2人だけだった。

「どうかしたの、母さん？」

「ええ：この頃私達のオフィスで問題が頻発していることはあなたも知っていると思うけど：どうしてこんな事態になってしまったのか、その原因を考えていく上で、私にはどうしても引っかかる点があるの。それで、一度あなたの意見を聞いてみたくて」

才気煥発なヘレナらしくない迷い躊躇うような口ぶりに、クリスターはこの深刻さを察して、すぐさまテレビのスイッチを切った。

「先入観を交えず、あなたが学ぶ心理学的な観点から考えて、こんなことが現実起こりうるのかどうか教えてちょうだい」

クリスターの前のソファに身を落着け、そう前置きすると、ヘレナは冷静な口調で話した。

「ここにあるひとつの集団が存在するのでしょうか。そこに属する人間達は、それぞれ小さな問題や欠点は抱えていても、お互いを尊重して、上手に付き合っていた。集団としてはとてもうまく機能していたの。それが、1人の新参者が加わった日を境に、少しずつ人間関係の歯車が噛み合わなくなっていった。それまでは表面に出さなかった不満や反発、欲求を皆が口にするようになって、それによってがらりと集団内の空気が変わってしまった。皆、急に人が変わったようになって、その人らしくない行動に駆り立てられていき：ついには争いにまで発展して、何人かは仲間と袂を分って去って行った」

「母さんは、新しく紛れ込んできた異分子が、他の大多数の考えや行動にそこまで強い影響を及ぼせるのかということを聞いているんだね？」

クリスターがヘレナの顔をまっすぐに見据えながら確認すると、彼女はふと不安に駆られたかのように、まだあまり目立たない腹部に手を置いた。

「白い羊の群れの中にたまたま生まれてしまった黒い羊は不吉なものだと嫌われて、昔は殺されたり追い出されたりしたそうだけれど――この黒い羊は何食わぬ顔をして群れに混ざりながら、他の羊を自分の色に変えていくのよ」

「つまり、それが…今母さん達のオフィスで起きていることなのかい？」

クリスターは言い知れぬ戦慄が全身に広がっていくのを覚えた。

ラースが信頼していた古株の社員達が相次いで問題を起こし、追放同然に社を辞めていった。ブライアンもジョエルもクリスターは子供の頃からよく知っているが、全くあの2人らしくない行動で、話を聞いた時は何かの間違いではないかとクリスターも疑ったほどののだ。

「一種のマインド・コントロールのようなものとすれば、全く起こりえないとは言えないな…」

ヘレナが与えてくれたヒントから、今まで漠然とした違和感でしかなかったものがはっきりと形を作り、欠けたピースがひとつひとつ合わさるように疑念に対する答えが見えてくる。

たった1人の人間によって他の大勢がコントロールされてしまったケースを、実際、クリスターは目の当たりにしたことがあったのだ。

「ねえ、母さん、もしかして―」

無意識にぎゅっと握り締めていた手のひらが次第に汗ばんでくるのを覚えながらクリスターが母に確かめようとした、その時、リビングのすぐ外にある電話が鳴った。

ヘレナはクリスターにちょっと待つよううなずき返して、すぐに電話の応対に出て行った。

「ヴァンなの…？ よかったわ、ここ数日連絡を取れなかったから心配していたのよ。今、オフィスに来ているのね。ええ、そう…ライスもそろそろ仕事を終えて戻るころでしょう。私も今からすぐにそっちへ向かうから、待っていてちょうだい」

ヘレナのよく通る落ち着いた声を聞きながら、クリスターはなぜか嫌な胸騒ぎを覚えていた。

程なくして、電話を切ったヘレナがリビングに戻ってきた。

「クリスター、話の途中だけれど、私は今からオフィスに行かなければならなかったの」

「母さん」

それを聞いて、クリスターは思わずソファから立ち上がった。

「僕も一緒に行こうか？」

「大丈夫よ。ヴァンと会って、ちょっと話をするだけだから」

ヘレナは壁の時計をちらりと見やって、付け加えた。

「ラースも警備の仕事が終わったら他の社員達と一緒にオフィスに戻るようになってるし、今から行けば丁度向こうで会えると思うわ。ラースも交えてヴァンと話し合うことになるでしょう：帰りはちょっと遅くなるかもしれないけれど、ラースが一緒だから心配しないで」

ヴァンはラースの信頼の厚い部下の1人で、人事を担当するヘレナの補助にもあたっていた。このところ、社の運営について不満を述べだしており、ブライアン達の件でたださえ情緒不安定なラースとうまくいってないらしい。ここ数日無断欠勤をしたともクリスターは両親から漏れ聞いている。

「でも、母さん、問題を抱えた社員の対応なんて、ストレスのかかる仕事、今の母さんは、本当はしない方がいいんだよ。せめて車の運転くらい、僕が代わるよ」

クリスターの気遣わしげな顔を見て、ヘレナは優しく微笑んだ。

「私の心配よりも、あなたには先に解決しなければならぬ大事なことがあるんじゃないの？」

クリスターは問いかけるように瞬きをした。

「そろそろレイフが戻ってくる時間でしよう。いい機会なんだから、私達がいらない間にレイフとちゃんと向き合って話をなさい」

明敏な母に見抜かれていたと知って、クリスターは思わず頬を赤らめ、うつむいた。

「うん…」

母さんにはまだまだ僕も敵わないと胸のうちに呟く。クリスターは柄にもなく素直な気分になっていた。それほどに、あの日以来ずっとクリスターの頭の中は弟のことで一杯だったのだ。

「でも、母さん、さっきの話の続きも後で必ずしよう。もっと詳しい事情を聞かせてほしい：僕は最近自分のことにばかり気を取られていて、母さん達が抱えている問題については、気になってはいたんだけど、あまり深く考えようとしてこなかったんだ、ごめんよ」

「馬鹿ね、何を言っているの。私の方こそ、あなたに余計な心配はかけたくなかったのに：ごめんなさいね、クリスター。ともかく先にヴァンの件を片付けてくるわ。いいわね、何も心配しないで―あなたは、レイフとの話し合いを最優先にするのよ。どんな結論を下すにせよ、それはあなたが勝手に決めるのではなく、レイフと2人でなければ駄目：あなた達はかけがえのない2人きりの兄弟なんだから」

母の気遣いに胸を突かれてクリスターは黙り込んでしまう。

ヘレナにはまだ肝心なことを確かめていないし、できればこのまま彼女を1人で行かせたくないという気持ちもまだあった。だが、クリスターが引き止める前にヘレナは素早く身支度を整えて、家か

ら出て行ってしまった。

躊躇いながらもそれを見送った後はもう、クリスターは気持ちを強引に切り替えることにした。

（レイフと腹を割って話し合う）

再びリビングに戻ってソファに身を落ち着けたクリスターは、深い溜息をついた。

（母さんも言ったように、やはりそうした方がいいんだろうな。今なら誰かの邪魔が入ることもない……この間のことを考えるとちゃんと自分を保てるのか不安だけれど、お互い突っ込んだ話ができるチャンスだ。ああ、でも、あいつをうまく説得できる自信などない……僕の本音は今でもあいつを手放したくないという欲でしかないんだから——それを理性でねじ伏せていても、いざ正面から向き合えば、レイフならきつと見抜くだろう）

クリスターはリビングでテレビを見ながら弟の帰りを待っていたが、内容などほとんど意識していなかった。しきりに壁の時計を見やって時間を確かめたり、窓を振り返ったりと落ち着かない。

思っていたよりもレイフの帰りは遅く、こうして何もせずに残っていると次第に焦りと不安がつのつてきて、クリスターを悩ませた。

（あいつめ、一体どこで何をしているんだか……下らない付き合いなんか、さっさと切り上げろよ。そうだ、やっぱり母さんの方も気になる……たとえば父さんや他の社員が一緒にいても無防備にオフィスに行かせたのはまずかったかもしれない。今からでも母さんを追いかけようか……僕が直にオフィスに乗り込んで、あそこで何が起きてい

るのか確かめるんだ。ああ、でも―参ったな、思考がまとまらない。レイフ、とにかく早く戻って来い！」

ヘレナが出かけてもう1時間以上が経過し、クリスターの我慢が限界に達しかけた、その時、家の外で足音がした。続いて、何かがぶつかるような音と共にドアが開き、レイフの飄々とした声がリビングにまで届く。

「ただいまーっ、兄貴、いるう？」

妙にハイテンションの声に神経を逆なでされたクリスターは、つい殺気立って、ソファからすっと立ち上がった。

「レイフ！」

怒声と共に廊下に飛び出したクリスターが見つけたのは、玄関でぐったりと座り込んでいる弟の姿だった。

怪訝に思いながらクリスターが近づいていくと、ぷんと漂うアルコールの匂いが鼻をついた。

「おまえ…酔っ払っているのか？」

愕然と立ち尽くすクリスターを見上げ、レイフはへらりと笑った。その顔は赤く、半分閉じた目はとろんとしている。どこからどう見ても、立派な酔っ払いだ。

「映画見た帰りにさ、ジョンの大学生の兄貴達がパーティーやってるっていうから、覗きにいったの。そこで、ビールとか色々飲ませてもらったの」

「誰だか知らないが、高校生にアルコールなんか飲ませるなよ…おまえもだ、レイフ、飲酒したってことが学校に知られたら、どうするんだ、この馬鹿っ」

「えへへへ。大丈夫だよ、オレ、高校生に見えないし。何か、大学生の女の人達にいっぱいもてちゃったの。オレのこと、可愛いつて」

「喜ぶな。からかわれただけだ」

痛み出した頭を手で押さえ、クリスターは、そう言えば先程ガレージの方では車の音など全くしなかったことを思い出した。

「レイフ、車はどうしたんだ？」

嫌な予感を覚えながら、クリスターは確認する。

「うん、オレ、ちょっと飲みすぎてさ。いくらなんでも運転して帰るのはまずいって友達が必死にとめるから、仕方なく車は捨てて、そのまま家まで走って帰ってきたっ。体中かつかと熱かったから、風切って走るのがすげえ気持ちよくて、つい服も脱ぎ捨てたくなっただくらいだよ」

「それだけはやめてくれ」

レイフはいきなりクリスターの脚に抱きついてきたかと思うと、ううっと呻いた。

「おかしいな、ふらふらして目が回る」

「飲酒した上に走ったりしたら、当然、アルコールが体中に回るよ」

何だかもう怒る気もなくして、クリスターは寄りかかったまま離れようとしないうちにレイフの背中をなだめるように叩いて、ゆっくりと立ち上がらせ、リビングまで連れて行った。

「兄さん、兄さん…」

「はいはい」

やけに甘えかかってくるレイフをひとまずソファに寝かせ、クリスターは立ち上がりかけるが、その手をレイフがしっかりと掴んで離そうとしない。

「ここにいてくれよ…オレを放って、どこにも行かないでくれ…」

「大丈夫だよ、レイフ、心配しないで…水を汲んでくるだけだから」

レイフは嫌々をするように頭を振って、クリスターの手に頬を摺り寄せた。レイフの固く閉ざした瞼は震え、見ると、長い睫の間には薄っすらと涙が滲んでいる。

「クリスターと離れるなんて嫌だ…おまえがいない将来なんてオレには考えられない…愛しているよ…」

意識してか、それとも無意識でか。レイフは涙声でとつとつと訴えている。フットボールをやめてレイフとは違う道を行くというクリスターの宣言は、よほど彼を傷つけていたのだろう。

クリスターは何かしら胸を揺さぶられて、自分の腕に押し当てら

れている弟の頭を見下ろした。

「僕だって…愛しているよ」

低い声で呟いて、クリスターはレイフの紅い髪を指先で撫で、そつと唇を押し当てた。

しっとり汗ばんだレイフの髪感触。触れた指先や唇から伝わる肌の熱さ、レイフの匂い…何もかもが欲しくて、どうしようもなく愛しい。

このまま抱き寄せたい衝動を堪え、ともすれば口走ってしまいそうになる許されない言葉を、クリスターは噛み締めた唇の内に閉じ込める。

「…全く、酔っ払ってくだを巻くにはまだ早いよ、レイフ」

めそめそ言いながら半分眠り込んでいるレイフの頭を軽く小突いて、クリスターがからかうように囁いた瞬間、電話の音が鳴り響いた。

クリスターは夢から覚めたような気分でゆっくりと立ち上がった。

電話のある廊下の方を肩越しに眺めやり、クリスターはふと、言い知れぬ胸騒ぎを覚えた。思い出したように、壁の時計を眺めやる。

（母さんはまだオフィスにいるんだろうか…ヴァンと話し合うと言っていたけれど、うまくいったのかな。父さんも一緒にいるのだろうか？）

クリスターは何かに急ぎ立てられるように廊下に飛び出して、電話の受話器を取り上げた。

「はい？」

それは、ラーズの部下からの緊急の知らせだった。

『ク、クリスター君か？ よかった、君が家にいてくれて…』

切迫した男の声を聞いて、クリスターの背筋に緊張が走る。

「どうしたんですか？ 父か母に、何か…？」

『実は、ヘレナさんが…大変なことになったんだ。詳しいことは後で説明するが、オフィスで社員に…興奮したヴァンに暴力を振るわれて怪我をした。命に別状はないだろうが、何しろ彼女は妊娠中だから…ともかく急いで病院に来てくれ…！』

クリスターは大きく息を吸い込むと、ふらつく体を支えようと、とっさに壁に手をついた。何だか今にも崩れそうな砂の上に立たされているような気分だった。

「…分かりました。すぐに弟を連れて、病院に向かいます。ええ、僕なら大丈夫です」

慌てふためいた社員に、どこの病院に行けばいいのか確認して、クリスターは受話器を下ろした。

「落ち着け…母さんはきっと大丈夫だ」

沈黙した電話を鋭く睨みつけ、クリスターは低い声で自分に言い聞かせる。

冷静さを保とうとしながらも、彼の心臓は今にも破れそうなほどの勢いで打ち鳴らされていた。

（嫌な予感的中したか。やはり僕が母さんに付き添うべきだった……だが、母さんをほとんど崇拝していた、あのヴァンがまさか暴力を振るうなんて――僕が知っている彼の人格からは全く想像できない話だ。しかし、それを言うなら、ブライアンもジョエルも全く別人と化したかのような行動を取って、最後には社を辞めていった。直接彼らと会って話をしたわけじゃなくても、これに似たケースは、僕には心当たりがある。母さんがほのめかした黒い羊……つまり、あいつが――あそこにいたということなんだ）

胸のうちが次第に煮えくり返ってくるような憤怒に駆られ、クリスターは思わず身を震わせた。

その時、リビングの入り口辺りで微かな物音がした。

「兄さん……何かあったのか……？」

クリスターが弾かれたように振り返ると、心配そうな面持ちをしたレイフが立っていた。

すっかり正体をなくして眠り込んでしまったように見えたのに、まるで自分の受けた衝撃が伝わって、レイフを揺り起こしたかのようだなとクリスターは思った。

「ああ」

レイフをこれ以上不安がらせないためには、自分がしっかりな
くてはならない。そうだ、強くなれ。

クリスターは自らをそう奮い立たせると、唇を噛み締めてじつと
自分の言葉を待ちうけているレイフに近づき、その肩に優しく手を
置いた。

「レイフ、今から病院に行くよ…母さんがね、怪我をしたらしいん
だ」

第4章黒い羊（11）

「君達のお母さんは、大丈夫だよ。目立った外傷はないし、精神的にも落ち着いている。明日の朝もう一度検査をして、異常がなければ、そのまま家に帰れるだろう。相当ショックな出来事だったろうに取り乱しもせず：気丈な人だね」

病院に駆けつけた双子は、担当の医師からヘレナの無事を聞かされ、ほっと胸を撫で下ろした。しかし、続いて彼の口から出た哀しい知らせには、思わず言葉をなくした。

「ただ、残念なことに：おなかの子供は助けられなかったんだ。我々も手を尽くしてみたんだが―彼女を襲った犯人と揉み合っているうちに階段から落ちたと聞いているよ。その時に腹部をひどく圧迫してしまったようだね」

ヘレナは流産していたのだ。

しばし2人とも呆然となった。

だが、ともかく母の様子を見に行かなくてはと、クリスターはぼんやりしているレイフを急かして、ヘレナの病室に向かった。

すると、病室の前では、先程家に電話をしてくれたラースの部下が、他のもう1人の社員と一緒に彼らを待ち構えていた。

「クリスター君、こんなことになってしまっって何と言ったらいいのか―」

沈痛な面持ちをする社員達に、クリスターはなるべく動転した様子を見せないよう感情をコントロールしながら接した。

「いいえ、ともかく母の命が助かったただけでもよかったです。それより、一体何がオフィスで起こったのか、詳しく説明してもらえますか？」

感情が激するほどそれを内に閉じ込めるため表面上はいつもより冷静になる、クリスターのことをよく知らない社員達は、あまりにも落ち着いた彼の態度に少し鼻白んだようだ。

だが、クリスターの後ろで途方に暮れたように立ち尽くしている弟を見て、さすがに兄はしっかりしているとでも納得したのか、彼らは、クリスターとレイフにオフィスで何が起こったのか教えてくれた。

家で受け取った電話では、クリスターは、ヘレナが激昂したヴァンに暴力を振るわれて怪我をしたとだけ聞かされたが、実際はもっとひどい話だった。

ヘレナはヴァンに性的暴行を受けそうになったらしい。

本当ならば、その時間には、レースや他の社員達もイベントの警備の仕事を終えてオフィスに戻っているはずだった。しかし、帰路の途中で彼らが乗る大型のバンが故障して立ち往生してしまい、そのためオフィスに着くのが遅れたのだ。

結果として、ヘレナは2人きりで情緒不安定なヴァンと話し合う状況になってしまった。

独身男のヴァンがもともとヘレナに崇拝に近い好意を抱いていることは皆に知られていた。だが、それは手に入らない高嶺の花に対する憧れで、実際これまで、ヴァンが夫も子供もいるヘレナにアプローチをかけるようなことはなかった。その彼が普段の紳士的な態度から豹変してヘレナを襲おうとした。

初めからそのつもりでいたわけではないだろう。おそらく、その場の勢いと、たまたま制止する者がいない場所で彼女と2人きりになったという状況が災いしたのか。

気丈なヘレナは果敢にも抵抗した。並みの女性よりよほど力も度胸もある彼女は反撃し、男が怯んだ隙に逃げ出すことに成功した。

だが、オフィスの外に逃げようとする彼女を執拗にヴァンは追いかけて、もみ合ううちに階段から2人とも落ちてしまう。

ラースや他の社員達が戻ってきたのは、丁度そんな修羅場の只中だった。

「それで―父さんはどうしたんです？　なぜ今、ここにいないんですか？」

病院に着いた時から気になっていたことをクリスターが尋ねると、ラースの部下はちょっと言いにくそうな顔をした。

「実は、ラースさんは―オフィスで何が起ったのか知ると激怒して、逃げようとするヴァンを捕まえ手ひどく打ちのめしたんだ。まあ、ラースさんがそうするのは当然だが、それにしても、ちょっとやりすぎたんだな。このままではヴァンを殴り殺してしまうと慌てて俺達がとめに入っても分からないくらい彼はひどく興奮して、と

にかく大変だったんだ。そのうち…たぶん、オフィスの近くのレス
トランやバーの連中が通報したんだろう、警察がやってきた―激昂
したラースさんを見て、危険だと彼らは判断したようだ。それに、
まあ、ヴァンを半殺しの目に合わせたのは事実だ。しばらくもめた
後、結局ラースさんは警察署に連行されてしまったんだ」

「そうですか、父がそんなことを―皆さんに大変な迷惑をかけてし
まって、すみませんでした」

クリスターが殊勝な顔つきで謝ると、人のいい社の連中は気にす
るなどと言って慰めたり、励ましたりしてくれた。

だが、クリスターの心中は、よりにもよってこんな非常時に警察
に連行されるなどというへまをした、ふがいない父に対する怒りで
いっぱいだった。

「だが、安心するといい、クリスター君。さっき、ラースさんに付
き添って警察署に行っている仲間から電話があつたんだが、ラース
さんは留置されずにすむそうだ。それで、ここが落ち着いたら、君
らにラースさんを迎えに来て欲しいと言っていたよ」

電話をくれた社員とは別の男がそう付け加えた。

「分かりました。保釈金のようなものは必要ないですね？」

「君が彼の息子だと照明するIDさえあればいいだろう。大体ラー
スさんは犯罪のむしろ被害者なんだ。恥ずかしがらず、堂々と迎え
に行つてやりなさい」

「…そうですね」

社員達は、そうしてクリスターとレイフに後のことを託すと、心配そうにしながらも帰っていった。

そうして、双子兄弟だけが母の病室の前に残された。

「レイフ」

クリスターが向き直って声をかけると、レイフは小さく身を震わせて不安そうに兄を見返した。一緒に病室に入ろうと誘うつもりだったのだが、弟が子供のように恐がっているのを見てとると、クリスターは気を変えた。

「僕がちょっと母さんの様子を見てくるよ。もしかしたら薬が効いて眠っているかもしれないけれど、無事な姿を確かめないことには安心できないだろ。おまえはいいから、ここで待っておいで」

何も心配することはないのだと落ち着いた態度でレイフに頷きかけると、クリスターは母のいる病室のドアをそっと開いた。

「母さん？」

柔らかな照明に照らされた部屋の中、ヘレナは静かにベッドに横になっていた。

病室は2人部屋だったが、もう1つのベッドは空だったので、クリスターは少しほっとする。

「大丈夫かい？　その…どこか痛んだり、苦しかったりはしないかい…？」

流産したばかりの母に何と声をかけたらいいのか、さすがのクリスターも分からず、躊躇いがちに発せられた言葉はぎこちなかった。「子供のことはとても残念だったね。でも、こうなったのは母さんのせいじゃないんだから：自分を責めるようなことはしないで、早く元気になってほしい。母さんはまだ若いし、子供だって、きっとまた授かると思うよ」

ヘレナはクリスターの言葉など聞いていないかのように、じっと天井を見つめている。

クリスターは沈黙に耐えられなくなってまた何か言おうとしたが、どうせ自分ではろくな慰めも母にあげられないような気がして、出掛かった言葉を飲み下した。

重苦しい静寂がしばし病室に流れたが、それにクリスターが我慢できなくなる前に、ふいにヘレナが口を開いた。

「クリスター」

母が反応を返してくれたことに、クリスターはひとまずほっとした。

「何だい、母さん？」

ゆっくりとベッドに近づいてくるクリスターをヘレナは振り返ろうとはせず、深い物思いに捕らわれたまま、抑揚のない声で言った。

「今まであなたにもレイフにも話したことはなかったけれど、あな

た達を妊娠中にも、私は一度流産しかかったのよ」

突然こんな話を始めるヘレナの意図がつかめず、クリスターは当惑した。

「臨月に差し掛かって、私はしばらく実家の両親を訪ねていたの。ある日、兄と：ビョルンと一緒に昔の友人達と食事をして：その帰りのことだったわ。レストランを出て近くに止めていた車に戻った時、強盗に襲われたのよ」

「えっ？」

「金目当てだろうと現金は渡したのに、ビョルンは殴打されて、気を失ってしまった。ひどく落ち着きのないその男の様子を見て、薬物を使用していると分かったわ。私に向ける視線も普通じゃなくて：自分達がとても危険な状態にいることに否応なく気づかされた。そんな時、ビョルンが車の中に護身用の銃を備えていたことを思い出したの。それで、覚悟を決めた私はおとなしくするふりをして、隙をついて取り出した銃を強盗に向けたわ。男は、私が女で、しかも妊娠していたことで油断していたんでしょ。まさか私が本当に撃つとは思っていなかったのかもしれない。でも、私はお腹の子供達を守るためなら、人1人殺しても構わないとその時本気で思っていた。だから、男が襲い掛かってきた時、私は迷わずその額を狙って至近距離から発砲した。でもね、よりにもよってそんな切迫した場面で、あなた達のどちらかが私のお腹を蹴ったのよ。それに驚いた私は狙いを外してしまい、強盗の片目を打ち抜いただけだった。きっと、あんなことをするのはレイフじゃなかったと今になって思うのだけれど：あなたなら、たぶん私のすることを邪魔したりしないで、息を殺して見守っていたでしょう。その後は、銃声を聞いた、付近をパトロール中の警官が駆けつけて、私達は保護され、重傷を

負った犯人は逮捕された。そうして、そのショックで産気づいた私は病院に運ばれて、予定日より半月ほど早くあなた達を産んだのよ」

「そんな話：今初めて聞いたよ。父さんもビョルン叔父さんも、何も話してくれなかったじゃないか」

クリスターは呆然となりながら、呟いた。

「別に秘密にしていたわけじゃないけれど、この話はラースを不愉快にさせるから、何となく黙っていた方がいいような気がしていたのよ」

ヘレナは苦笑とも取れる溜息をついた。

「あなた達を守り抜いたように、あの子のことも守ってあげたかったのに：できなかったわ」

ヘレナは静かに目を閉じて、こみ上げてくる悲しみを堪えるかのように震える唇を噛み締めた。

息子の手前もあるのだろう、何とか平常心を保とうと苦心している母親を見つめながら、クリスターは言いようのない胸苦しさを覚えていた。

母と自分は氣質がよく似ているということは自覚していた。2人とも、辛い時や苦しい時こそ強くなろうとつい自分に無理を強いてしまう。よく理解できるからこそ、そんな彼女の姿がとても痛々しかった。

「母さん」

クリスターは、ヘレナの神経に触らぬよう、ごく低い声で囁きかけた。

「こんな時まで強い女や母親でいることはないんだよ」

ヘレナはクリスターの言葉を噛み締めるかのごとく、しばしの間じっと押し黙った。

「…そうね」

深く息を吸い込むと、ヘレナは息子の方に顔を傾けて、微かに震える声で訴えた。

「お願いよ、クリスター…ラースを呼んできてちょうだい」

いつも毅然として揺るぎない母が垣間見せた弱さに胸を突かれ、クリスターは一瞬立ち尽くしたが、すぐに自分が今なすべきことを思い出した。

「分かったよ。急いで父さんを連れてくるから、少しの間待っていて」

クリスターが病室を出ると、ドアのすぐ前にレイフが待っていた。

「ク、クリスター」

レイフはまだ最初に受けた衝撃が抜けていないのか、何か言おうと口を開きかけたものの、混乱のあまり言葉がうまく出てこないよ

うだ。

「心配するなよ。母さんは大丈夫だから」

クリスターが励ますよう肩を叩くとレイフは唇を震わせた。

「オ、オレ、まさかこんなことになるなんて…夢にも思ってた」

くしゃつと顔を歪めたかと思うとレイフはまた黙り込んでしまう。

「おまえが動揺してどうするんだ、レイフ。辛い目に合ったのは母さんの方なんだよ。ほら、いい加減しゃんとして―僕は今から警察まで父さんを迎えに行くから、その間おまえはここに残って母さんを見ていてくれ」

「兄さん…」

レイフはクリスターの顔をじっと見返して、何か言いたげな、もどかしげな表情をした。

この時のクリスターは気持ちが急いでいたこともあって、レイフが何を訴えたがっているのか深く考えてやることはできなかった。ともかく、母のためにラースをここに連れてくるのが先決だったのだ。

「すぐ戻るよ」

優しいながらも有無を言わさぬ口調で言い聞かせ、引きとめようとするのかのように自分の腕にかかったレイフの手を素早く振り払

うと、クリスターは踵を返してエレベーターの方へ向かった。

先程の社員から教えられた警察署は、ラースのオフィスから程近い場所にあつて、クリスターも傍を通りかかったことなら何度もあった。

警官なら知り合いがないこともないが、連行された身内を引き取るために警察署を訪れるのは生まれて初めてだ。

ヴァンを叩きのめしたくなった父の気持ちは分からないでもないが、やはりどうしようもない情けなさがこみ上げてくるのを覚えながら、クリスターはその赤煉瓦の建物の中に入った。

（全く、父さんはかつとなると後先のことを考えずに暴走してしまふんだからな。その尻拭いを子供の僕がするといふのも、すつきりしないよ）

明るい色調のプラスチックの椅子が並ぶロビーを通り、事務を取っていた警官に尋ねた後、クリスターはエレベーターに乗り込んだ。指示された3階で下りると、週末の夜だからか、それともいつも

こうなのか、見渡す限り、フロアは制服を着た警官や酔っ払いや苦情をがなりたてている者や怪我人達で騒然としていた。

くたびれた顔で長椅子に坐っている中年の男の前を通り過ぎ、クリスターが廊下の奥に進んでいくと、向こうから見覚えのあるラーズの社員がほっとした顔でやってきた。

「ああ、クリスター君…全くとんだ災難だったね」

「すみませんでした。父がこんな面倒をかけてしまつて―」

「水臭いことを言うものじゃないよ。ラーズさんにはいつも世話になっているからな。それにしても、まさかヴァンがヘレナさんになんないことをするとは―」

言いかけて、朴訥そうな男は顔を曇らせた。

「さつき病院に電話をして、俺達もヘレナさんの流産のことを知つたんだ。ラーズさんはひどくがっかりしているよ。あんなに子供が生まれるのを楽しみにしていたのに―畜生、ヴァンの奴め、こんなことなら俺達もラーズさんをとめたりせず、一緒になつてあいつを袋叩きにしてやればよかった」

怒り心頭のラーズに殴打されたヴァンは処置を受けた後逮捕され、既に留置所に入れられたという。婦女暴行未遂で近いうちに起訴されるだろう。

ラーズも初めはヴァンに対する暴力行為で逮捕されそうになったが、社員達が事情を説明した所、犯罪には当たらないと担当の警部が言ってくれたらしい。

「なら、このまま父さんを母さんのところに連れて行ってもいいんですね」

「ああ。向こうにある受付で手続きをしておいで。俺達はラースさんに知らせてくるよ」

社員が言ったように、後は何も面倒なことはなく、クリスターがラースの身内だというIDを係官に見せ、引取りの書類にサインをただけでよかった。

その後、クリスターが担当警部の部屋までラースを迎えに行くと、彼は先程の社員に肩を叩かれ励まされながら、迷子のようにしょんぼりとうなだれてソファに坐っていた。おそらくヘレナの流産の知らせを受けてからずっと、こんなのだろう。

デスクには担当らしい赤ら顔のがっしりした警部が坐っていて、クリスターが入ってくると、気の毒そうな顔を向けてきた。

「父さん」

母を守れなかった父に対する怒りと失望を、ここに来るまでクリスターは熾火のようにくすぶらせていた。しかし、ラースの打ちひしがれた姿を見た途端、それらは嘘のようにクリスターの胸から引いていった。

「…大変だったね」

ラースは赤くなった目をしばしばさせながらクリスターを見上げた。

「クリスターか：おまえにまで色々心配かけてすまなかったな。母さんが無事だったことはとにかくよかったが―」

口元を震わせて黙りこんでしまうラースに、居たたまれなくなったクリスターは、途切れた彼の言葉を引き継ぐようにして、言った。

「そうだよ、父さん、とにかく母さんは大丈夫だったんだ。さあ、早く病院に行こう。母さんが父さんに会いたいって、呼んでいるんだ」

「おお…」

それを聞いて、ラースは堪えきれなくなったかのように手で顔を覆い、低くむせび泣きだした。

「ほら、泣いている場合じゃないだろ、しっかりしてくれ。父さんは母さんを支えて慰めてあげるべき人なんだよ」

クリスターが促すのにラースは声にはならずただ頷くのみで、よろよろと立ち上がる。その肩をなだめるように抱きながら、同情のこもった目で自分達を見守っている担当警部にクリスターは軽く会釈をした。

「ねえ、父さん」

ラースとその部下と共に警部の部屋を出た時、クリスターは頭の片隅にずっと引っかかっていた懸念について、思い切って父に確認してみた。傷ついているヘレナからは、どうしても聞き出せなかったことだ。

「少し前に、オフィスに新しくインターンとして入ってきた僕と同年代の男の子がいるって話していたよね。僕に雰囲気似ているって言ってた…そのインターンの風貌を覚えてくれないかな？」

ラースは半ば放心したような顔をクリスターに向ける。どうしてこんな時にそんな他愛のないことを聞くのだろうと不思議がっているようだ。

「それはジェイコブのことかな」

ラースの部下が代わりに答えた。

「風貌っていうと…金髪で目は黒…いや、濃い藍色かな？ 育ちがよくて頭が切れるって所は確かにクリスター君に似ていると言えば似ているが…彼がどうかしたのかい？」

「いえ、実はちょっと確かめたいことがあって―」

クリスターが言葉を濁すと、部下は怪訝そうに首を傾げ、それから辺りをきょろきょろと見渡した。

「何だかよく分からないが、それなら直接彼に会ってみればいい。ジェイコブもラースさんに付き添って一緒にここまで来たんだ。おかしいな、君が現れる直前まで、その辺りにいたはずなんだが―」

何気なく発せられた男の一言に、クリスターは殴られたようなショックを受け、立ち止まった。

「何だって？」

たちまち険しい顔つきになるクリスターに気圧されたのか、ラー
スも彼の部下もとっさに声を失った。

「あ」

その時、ラー스가何かを見つけたようにクリスターの背後に視線
を動かした。

何者かにじつと後ろから見られていることを感じたクリスターは、
その場に立ち尽くしたまま、深く息を吸い込んだ。

（ああ、この感じ……僕の背中にじつと注がれている、この視線には
確かに覚えがある）

氷のように冷たく突き刺さるわけでも、火のように激しく焼き尽
くそうというわけでもない、ひたすら飽きもせず執拗に向けられる、
この絡みつくような眼差しは忘れようにも忘れられない。

肌が粟立つ。息が詰まる。心臓の鼓動が急激に激しくなる。

クリスターは肩越しに後ろを振り返った。

先程同じように人々が蠢きあう雑然とした光景の中、滑らかに動
く1つの人影にクリスターの視線は吸い寄せられた。

（やはり、おまえか……おまえなのか……？）

丁度ドアが開いたエレベーターの中に素早く滑り込むと、こちら
を振り向いて、彼は微笑んだ。他の人間達などまるで存在しないか

のように、クリスターのみをまっすぐに見つめながら――。

天から降ってきたかのようなその無邪気な笑顔を見た途端、クリスターは目の奥で何かがスパークしたような気がした。

転瞬、クリスターはエレベーターに向かって凄まじい勢いで突進した。

行く手を遮る人々の間を鮮やかに駆け抜け、ぶつかりそうになった相手を押しのけ、エレベーターの前にあった長椅子を飛び越えるようにして、今まさに閉まろうとするドアにクリスターは迫った。

ドアの隙間にあの非の打ち所のない微笑が見える。

しかし、後少してクリスターの手が届くという所で、無情にもドアは閉ざされてしまった。

クリスターはエレベーターのドアに固めた拳を打ちつけ、言葉にならぬ咆哮をあげた。

（ジエームズ！）

一気に沸点にまで達した憎悪と怒りに頭ががんと痛むのを覚えながら、クリスターは冷たい鉄のドアに額を押し付け、しばし喘いだ。

「落ち着け」

彼が嘲笑う声を遠くに聞いたような気がする。

クリスターは肩で息を整えつつドアから身を離し、しんと静まり返って自分を遠巻きにしている人々を見渡した。

近くにいた者達はクリスターが顔を向けると怯えたように身を引き、あるいは慌てて視線を逸らせた。警官達は緊張した面持ちで様子を窺っている。

クリスターの突然の激昂は見知らぬ人達を恐怖させたようだ。

やがて、ラーズ達と一緒に様子を見に来たのだろう、先程の赤ら顔の警部がやってきて、クリスターの怒らせた肩をなだめるように叩いた。

「何があったか知らんが、親父さんに続いて、おまえさんまでが騒ぎを起こしちゃならん、坊や。そんなに余分なエネルギーが溜まっているのなら、いっそ警官にでもなるか？ 新規採用はいつでもしとるし、おまえさんのようなタフで鍛えがいのありそうな新人は大歓迎だぞ」

やんわりとたしなめられて、クリスターは恥ずかしくなって俯いた。

「すみませんでした」

クリスターが素直に詫びると周囲の人々も何事もなかったかのようにならから注意をそらし、それぞれの関心事に戻っていった。

「一体どうしたんだ、クリスター君」

ラーズの部下が心配そうに尋ねるのに、クリスターは、いえ、ち

よつと言葉を濁し、後ろのエレベーターをちらりと見やった。

（今ここで奴を追いかけて捕まえてもさして意味はない。それよりも優先すべきことが他にある）

瞼の裏に焼きついたあの顔を思い出すとまた激情が噴出しそうになったが、クリスターは、今度はそれをうまく制御することに成功した。

「驚かせてごめんよ、父さん…さあ、母さんのもとへ急ごう」

こうしてやっと、クリスターはラースを連れて、再びヘレナの待つ病院に戻った。

今夜は何とたくさんの事件が一气に起こったことだろうーラースがヘレナの病室に入るのを見送り、これでやっとなすべきことを終えたとひとまず肩の荷を降ろした途端、クリスターは急にひどい疲れを覚えた。

（母さんのことは父さんに任せておけば大丈夫だ。どのみち今は僕の出る幕などない）

先程病室のドアの向こうに垣間見えた両親の姿―一時はすっかり意気消沈して見えたラースがいざヘレナに接するとなると愛情深く頼もしい夫に戻り、そんな彼にヘレナが嬉しそうに微笑みかけていたことを思い出し、クリスターは何だか少し羨ましい気分になった。

多分に母を愛し、父をどちらかと言うと軽んじる傾向のあるクリスターは、どうしてヘレナはラースを伴侶に選んだのだろうと疑問に感じる事が度々あったのだが、そう思うこと自体間違っている

と今は分かった。

全てにおいて完璧であるがために他人を頼ることに慣れないヘレナがラースには安心して弱さを見せられるし、何かと感情に流されがちなラースはヘレナの前では穏やかになれる。あれはあれで、実にうまく噛み合った、素晴らしい一对ではないか。

そんなことをぼんやりと思いながら照明の暗く下りた廊下を歩いていくうちに、クリスターは無性に自分の片割れが恋しくなってきた。

しかし、病室の前で待っていると思いきや、レイフはどこかに姿を消していた。

（レイフの馬鹿め、あれほど母さんを見てくれと言い聞かせたのに、一体どこに行ったんだ？）

だが、それほど遠くには行っていないはずだと、クリスターは寝静まった幾つもの病室の前を通り過ぎ、レイフの姿を探した。

ソファやテレビのあるコーナーにもトイレにもレイフはおらず、もしかしたら一階のロビーにでもいるのだろうかと思えばエレベーターに向かう。

すると、エレベーターの更に奥にある階段の方から、しゃくりあげるような人の声が漏れてくるのに気がついた。

怪訝に思いながらクリスターはそちらに近づいていく。誰かが階段に潜んでひっそりと泣いているようだ。

「レイフ？」

薄暗い踊り場をひよいと覗き込むと、案の定レイフが階段の隅っこに膝を抱え込むようにして座り込んでいた。

「に、兄さん」

クリスターが声をかけるとレイフは膝の上に伏せていた顔を上げた。目の周りも鼻の頭も真っ赤になっていて、いかにも泣いてしまったという顔だ。

「ここで何をしているんだ？ 母さんの傍にいろと言ったろう？」

泣きべそをかいている弟にとっさに何と声をかければいいのか分からなくなって、クリスターはとがめるような口調でそう言った。

「ごめん…しばらくの間はちゃんと病室にいて、母さんを見ていたんだけれど…そうするのも何だか辛くなってきてさ。オレが落ち込んだ顔をしていると母さんに余計な心配かけると思って、部屋の外に出てぼんやり突っ立っていたんだ。そうやってまた色々考えていたら悲しくなって泣けてきて…すると、今度は通りかかった看護師が心配そうに声をかけてきたり怪訝な目で見たりするの。何だかもう落ち着かなくて、うざったくて、ここなら人目につかないかなと思って、隠れてたんだ」

レイフがへらりと笑うとその目に溜まった涙が頬にこぼれかかった。

「レイフ…」

弟が示す深い悲しみに戸惑いながら、クリスターはふと、病院を離れる前にレイフが何かを自分に訴えたそうにしていたことを思い出した。

「ごめんよ、1人にして…心細かった？」

それでもまだレイフがどうしてもそこまで悲嘆にくれているのか分からず、クリスターは躊躇いがちに近づいて、弟の傍に腰を下ろした。

レイフはクリスターが傍に来ると安心するようだ。また少ししゃくりあげた後、ほっと肩の力を抜いて、膝を掌でこすりながらぼんやりと考え込んでいる。

クリスターはレイフが今何を考えているのか気になって仕方がなかったが、直截的に尋ねることはできなかった。

すると、ふいにレイフが口を開いた。

「なあ…死んじゃったあかちゃんって、結局どっちだったんだろうな」

「え？」

「オレ達の弟だったのかな、それとも妹だったのかなあ」

クリスターは虚を突かれて絶句した。

（ああ、そうか）

瞬く間にレイフの気持ちを理解したクリスターは、どうしてもっと早くに分かってやれなかったのかと自らを責めた。

レイフは、もうじき会えるはずだったきょうだいが突然死んでしまったことがショックで、信じられなくて、そして哀しかったのだ。

クリスターにとってヘレナの体に宿った命はまだ漠然とした存在でしかなく、流産によって母が心身に負った痛手のことだけを心配していたが、レイフは違った。心の熱いレイフは、他者に対する感情移入や共感の度合いも、クリスターよりずっと深く激しいのだ。

（そうか、死んでしまったのは…レイフや僕の…妹か弟になるはずの命だったんだ）

レイフを通じて、今更のようにクリスターもそのことに気づかされた。いや、頭では分かっていたつもりだが、今夜起こった様々な事態に対処するために、残念だけれど仕方がないと合理的に割り切ってしまったのだ。

今やっと、現実味を伴った喪失感がクリスターの胸にも生まれた。

（新しい家族が、もし無事に生まれていたら―その小さな妹か弟は、どんな変化を僕らの生活にもたらしたのかな…きつと家はすごくにぎやかになっただろう。僕とレイフが独立して家を出て行っても、その子がいたら、きつと父さん達は寂しがることはなかったろう。時々実家に帰る度に、どんどん大きくなっていくきょうだいを見ることになったはずだ）

子供が苦手なクリスターは、赤ん坊の世話も相手もごめんだったが、どちらかというと妹が欲しいとか利発で可愛い子に育ってほし

いなどか、ふと思うことくらいはあった。そんな淡く、何やらくすぐったいような期待も楽しみも、ヘレナを襲った暴力によって、全で一瞬で奪い去られてしまったのだ。

「残念だったね…本当に…」

クリスターがしんみりと呟くのに、レイフは深く頷いた。

「うん、可哀想だった」

やっとクリスターから満足できる反応―理解と共感を得られたことで安堵したのだろう、レイフは見る見るうちに落ち着きを取り戻していった。濡れた頬を手で荒っぽくぬぐうが、新しい涙を流すことはもうなかった。

今はただ、胸を満たす静かな悲しみに浸るかのごとく、膝を抱えてじっとうずくまったままにいる。

「レイフ、大丈夫かい？」

こんなふうにレイフが無口になることなどめったにないので、クリスターは心配になった。

「うん…さっきより随分気持ちは楽になったよ。だって、今はちゃんと兄貴が傍にいてくれるから」

「レイフ…」

クリスターは気恥ずかしくてつい黙り込んでしまったが、自分がレイフに必要とされている、彼の心を支えているのだという事実には、

こんな時に不謹慎ではあるが、言いようのない喜びを覚えた。

ふと、脳裏に先程病室で静かに語り合っていた両親の姿がうかびあがった。

彼らを羨ましがることなどないのだと、今のクリスターなら断言できる。

（レイフ、僕の大切な相棒…おまえを守り幸せにするために、僕は生きている）

胸の中は溢れんばかりの想いでいっぱいなのに実際には何も言えず、クリスターは息を詰めて弟を見守っていた。

すると、レイフの頭が傾いでゆっくりとクリスターにもたれかかってくる。

クリスターはごく自然に腕を上げ、レイフの肩を抱いた。

先日の一件以来、レイフと至近距離で接したりましてや体を密着させたりすることなど恐くとてもできなかったのだが、今は何のためらいもなくレイフの体を支えてやれた。

そうして押し黙ったまま2人で寄り添いあっていると、レイフの静かな悲しみが胸に伝わってき、クリスターも今は当たり前のように死んでしまったきょうだいへの愛惜の念に浸っていた。

レイフは安心してクリスターに身を預けている。2人が危うく暴走しかけた場面をラースに見られたのはほんの数日前のことなのに、こうして親密に接していることが恐くないのか。

だが、レイフと一緒にじっとうずくまっている、この薄暗い病院の階段の片隅には、あの時2人を襲った衝動が忍び寄ってくる気配はどこにもない。

電流のように身のうちを走り抜けた性的な興奮や心を打ちひしがせた激情のかわりに、羊水の中をゆったりと漂っているかのような穏やかな安心感がここにある。

この一時、2人は日頃自分達を悩ませる様々な思い煩いを忘れ、当たり前のように寄り添いあい、支えあっていた。永遠に失われた肉親を悼む気持ちだが、今、離れつつあった心と心をしっかりと結び付けている。

（僕達は今、同じ哀しみを共有しているんだ）

そう思うと、クリスターは体の中心から温かさが全体に広がっていくような、何とも言えない不思議な気分になった。

もしかしたら、こんな素直で正直な気持ちは、明日になれば、あれはただの感傷だったのだと忘れてしまうのかもしれない。それでも――。

クリスターは静かに目を伏せ、弟も同じように感じていると確信しながら、ひっそりと噛み締めるように呟いていた。

（辛い時、哀しい時、こんなふうに何も言わずにただ一緒に時間を過ごすだけで癒される相手がいる…何て幸せなことなのだろうね、レイフ）

体の右側には、暖色系の灯りの中にうかびあがった、どこかノスタルジックなボストンの美しい夜景が広がっている。

頭上を見上げると、都会の光も届かぬ夜空の中心に猫の目めいた黄色い月。

夏だというのにチャールズ川の方から吹いてくる風はひんやりと冷たい。

「そんな所を歩くのは危ないぞ、J」

左手のやや後ろから懇願するような低い声がかけられたが、彼はうつすらと唇に笑みを浮かべただけで何も答えなかった。

「大丈夫、Jなら落ちやしないよ。ちょっととしたスリルを楽しんでるだけなんだから、黙ってなよ。でかい図体をして、フレイは心配性だな」

金属的な高い声が連れをあざ笑ったかと思うと、鉄製の柵の上を危なげない足取りでゆったりと歩きながら物思いにふけている金髪の若者に、憧憬を込めて話しかけてきた。

「でもさ、今夜のJはとてもハイになってるよね。そんなに嬉しかったんだ？」

ビルの屋上の柵の上を何の支えもなく歩いていた若者―ジェームズ・ブラックは足を止め、自分に忠実に従っている2人をちらりと振り返った。

小山のような大男とそれとは対照的に華奢で小柄な少年の姿が、都会に満ちる柔らかな光と影の中に浮かび上がっている。

「ねえ、あいつと話はしたの？」

嫉妬をひそめて囁く少年の緑の瞳がちかりと物騒に光るのを認めながら、Jは軽く肩をすくめた。

「いや、ほんの少し顔を見ただけだよ。まあ、あそこで騒ぎを起こすわけにはいかなかったし、今夜の所はあれで充分じゃないのかな」

再び彼とあいまみえるために1年以上も施設での退屈な生活におとなしく耐え続けたことを思えば、後少しくらい待っても、別にどうということはない。

（クリスター）

それでも、あの時の彼の顔を思い出すとJの胸は高鳴った。

激烈な怒りと敵意に満ちて、猛り狂った虎さながら、凄まじい勢いで突進してきた。自分を捕まえて八つ裂きにせんばかりの憎しみに燃え上がった、あの金色の双眸と閉じていくドアを挟んで睨みあ

いながら、心地よい戦慄が背筋を走り抜けていくのをJは覚えていた。

今回はうまく彼の手から逃げ切ったが、心のどこかでそれを残念に思う自分がある。

（ジェームズ！）

最後に見たクリスタは悔しげに唇を歪め、声にはならない声をあげ、確かに自分の名前を呼んでいた。

（少なくともあの一瞬、君の中は僕への憎しみでいっぱいになって、他のことなど一切忘れていた。君が何より愛する弟君のことさえね）

満足そうにほくそ笑むと、Jは再び不安定な足場を歩き出す。

（もっともっと…そうなければいい…君がもう片時も僕を忘れられなくなるほどに―）

柵の上を歩き続ける体の右手には光が躍る夜の街、左手には闇―心を誘われるのは美しい宝石箱めいた光の街の方だが、そこに身を躍らせれば確実な死が待ち受けている。この危うい一線に立ちながら、Jは不思議な酩酊感にも似た昂揚を覚えていた。

こんなふうには死と戯れるのは狂気の沙汰だと常識のある人間達は言うだろう。しかし、本物のスリルは命がけのぎりぎりの瞬間にこそ見つかるものだ。

（君が僕にそう教えてくれたんだよね、クリスタ―）

胸のうちにJが愛しげに呼びかけると、目の前に広がる光と影の世界の狭間に浮かび上がるようにして、自分と同じく危うい柵の上に立っている敵手の姿が見えた。

（思えば、君を見つける前の僕は本当の意味では生きてはいなかった。毎日が退屈で、詰まらなくて――何を見ても聞いても感動できず、興味もわかず、悪戯に空しい日々を重ねていくだけだった。だから、この出会いをもたらしてくれた運命に僕は心から感謝するよ。こう言くと君は嫌がるだろうけれど、君と僕は本質的に同じものなんだよ。そう、やっと見つけた、僕の大切な相棒……）

微笑みながら手を差し伸べるとクリスターの幻はその手を取ろうとするかのように近づいてきて、思わず身を乗り出したJは、それまでしっかりと自分を支えていた脚がふいに言うことをきかなくなったのを感じた。

ぐらりと傾ぐ体の下に広がる光の街――そこになすすべもなく飲み込まれていく感覚に襲われた、次の瞬間、何か強い力が彼の左手を捕らえ逆の方向に体を引き寄せた。

「ジェームズ！」

夜のしじまを貫くように甲高い少年の悲鳴があがる。

落下する感覚の次には軽い衝撃があった。

気がつくつと、ジェームズは自分を受け止めたフレイの腕の中にいた。

「だから、無茶はするなと言ったんだ」

控えめに自分をたしなめるフレイの声を聞きながら、Jは美しい夢から無理矢理起こされたような心地で、不機嫌そうに溜息をついた。

「せっかく…いい所だったのに」

Jは、自分がついさっきまで立っていた鉄柵を横目でちらりと見上げ、墜落し損ねた街を眺めまわした。

紅い髪をした死神の姿はどこにもない。

(…あのまま彼の手を取っていたら、僕はきつと死んでいただろうな。呆気ない最期だが、それはそれで悪くない)

自分を氣遣わしげに見守る2つの眼差しには応えず、足の麻痺が取れたことを確認しながらゆっくりと体を起こすと、Jは微笑と共にひっそりと呟いた。

「残念だな、全く」

ビルの屋上を吹き抜ける風が彼の淡い金髪をかき乱す。

眼下に広がるきらびやかな夜景を無感動に睥睨する、その藍色の瞳に宿った闇は、どんな夜よりもお暗く底知れなかった。

第5章深淵に潜むもの（1）

紫がかった煙にかすむ広々としたサロンは、隅から隅までびっしり人で埋まっているように見えた。

そこに集まっているのは十代の若者達がほとんどだが、中には目つきの鋭い怪しげな大人達も数人混じっている。

アルコールやドラッグで酩酊し、異様にハイな状態になって騒ぎ立てているか、正体なく眠り込んでいるか、あるいは人前であるという羞恥心も忘れてソファの上で絡み合っていることに及びかけているという連中だ。

ステレオから大音量で流されるロック・ミュージック。嬌声や笑い声の洪水。

上気した人間の体臭と共に立ちのぼるマリワナやコカインの臭いが鼻を突く。

サロンの入り口近くに、このパーティーの主催者と共に立ちながら、僕は嫌悪と軽侮に凍った視線を辺りに投げかけていた。

すると、すぐ隣で小さな吐息をつく音がした。

僕が振り向くと、淡い金髪の若者が退屈そうに肩をすくめ、ジャケットのポケットから取り出した古色蒼然とした懐中時計をぼんやりと眺めていた。

やがて僕の視線に気づくと、彼は喉に手をやりながら、苦笑を含

んだ声で話しかけてきた。

「ここはあんまり空気が悪いから、ちょっと部屋の外に出ようか。君も僕も、彼らに混ざる気は今のところないようだし」

ジェームズ・ブラック。

このひとつ年上の、一見人好きのする善良そうな顔をした少年に、僕は怒りに満ちた沈黙で答えると、彼と並んで、怪しくみだらな喧騒に満ちたサロンを後にした。

丸天井から巨大なシャンデリアが垂れ下がった玄関ホールは先程のサロンよりはずっとましな状態だったが、それでも隅の暗がりには座り込んで放心した面持ちで紫煙を吐いている連中がいたし、ホールの左右に広がる幾つもの部屋の方からは興奮した複数の男女がたてる様々な物音、叫びやすすり泣きや笑い声が漏れてくる。

聞きたくない音でも、僕の異様に発達した聴力ははっきりと捕らえてしまう。

できるなら両手で耳をふさいで、それら不愉快な物音を遮断してしまいかったが、僕の反応をつぶさに見て取ろうとしているジェームズを意識して、動揺など微塵も覚えてはいないようなポーカーフェイスを装っていた。

こんな吐き気を催すような乱痴気騒ぎの中に、つい数時間前までレイフがいたかと思うと、それだけで僕は、この呪わしい屋敷に火をつけて燃やしたくなるような衝動に駆られた。

レイフは、『恋人』のハニー・ヘンダーソンに乞われるがまま、

このパーティーに嫌々参加させられていたのだ。

幸いレイフはドラッグには手を出していなかったし、他の参加者達からの猥褻な誘いにも乗らなかったようだ。だが、あの今時珍しいくらいうぶで奥手なレイフにとって、ここは性に合わないどころかまさしく地獄だったろう。

しかし、どうしてレイフがそこまで追いこまれるに至ったのか―その経緯を、多少は拳にものを言わせて洗いざらい彼に白状させてみると、僕はこみ上げてくる深い憤りに齒噛みしたくなった。

（ジェームズ：僕が相手にしなかったからといって、何の関係もないレイフによくも手出しをして―）

体の脇に垂らした手を固く握り締めた僕を見守る、ジェームズ・ブラックの秀麗な顔に面白がるような笑みが過ぎった。

「そんなに不機嫌そうな顔をしないで欲しいな。僕は今夜君がこのパーティーに顔を出してくれて本当に嬉しい。正直に言うよ、こんなふうに君と2人でゆっくり語り合う機会を再び持てたなんて夢のようだよ」

「僕は、別にここに来たくて来たわけじゃない」

「そうだろうね。でも、君にはそうするしかなかった」

ジェームズの揶揄に、僕は胸中に火の滾るのを覚えたが、かろうじて感情を抑え込んだ。

「ああ、レイフがこんなろくでもない連中の仲間になれていると知

っては、兄としては黙ってられないからね」

「兄としては、ね」

含みを持たせたその言い方が引かかって、僕が足を止めて振り返ると、ジェームズの謎めいた目と目が合った。

こんなふうに向つ向からジェームズ睨み合うのは、昨年ディベートのクラスで彼と一緒にになった時以来ではなかったろうか。

あのクラスの終了後、僕はなるべく彼と関わりを持たないように気をつけていた。

生きた人間を駒として使ったゲームをしようなどと正気とは思えない提案で僕を誘ったジェームズ。彼は、人として根本的な何かが狂っている。

しかし、学校でジェームズの姿を見かけることも少なくなり、彼の方から僕に新たな接触をしようとする動きもなかったことから、一時は僕も安堵しかけていたのだ。

あれは一時の気まぐれで、僕のことなどジェームズは忘れてしまったに違いない―そう思ったかった。

だが、実際には、ジェームズは用意周到に罠を張り巡らせ、まずレイフを手中に捕らえることで、こうして再び僕を手元に引き寄せることに成功した。

この点は、彼に軍配があがったと言われても仕方がない。

苦い思いを無理矢理飲み下している僕相手に、ジェームズは憎らしいほど平然として語り続けた。

「別に、僕はレイフ自身にはそれほど惹かれるものはないよ。ううん、初めは、君の双子の弟と思えば、少しは期待していたんだけどね。でも、あれこれつつきまわしてはみたものの、残念ながら、君ほどの知性も思考力も複雑な人格も彼は持ち合わせてはいなかった。そんな弟でも、君にとっては馬鹿なところも含めて無条件に可愛くてならないんだろうな……片割れというのはそういう存在だものね」

「君に僕達の何が分かると言うんだ？」

「それがね、分かるんだよ、クリスター」

ジェームズは僕の訝しげな眼差しを軽く受け流して、再び歩き出した。その手は先程取り出した金色の懐中時計を手慰みに弄んでいる。

ジェームズの後ろに続いて、玄関ホールから2階へと続く大理石の階段に近づいていくと、アルコールとドラッグ漬けになった男女がくすくすと笑いあいながらそこに座り込んで、互いの体をまさぐりあっていた。

しかし、階段の前で立ち止まったジェームズに彼らが気づいて振り返った途端、どろりと濁った目がはっと見開かれ、だらしくゆるんだ顔に緊張感がみなぎった。

「どけ」

ジェームズが短く命じるのに、彼らは一言の反論もなく立ち上ると、乱れた服を整えながらそそくさと階段から離れていった。

ちらりと顔が見えたただけなので定かではないが、女の方は、同じ学校の生徒ではなかったろうか。全米でも屈指の名門校の生徒がこないかがわしいパーティーに参加しているなんて、嘆かわしい限りだ。

「どうしてなんだ？」

こんな問いかけはジェームズを喜ばせるだけだとは承知していたが、あえて僕は、前に行く彼のピンと伸びた背中に向かって言葉を投じてみた。

「さっきの部屋の中にいた怪しげな男達は、麻薬の売人か何かだろう？ 使われていたドラッグもマリワナだけじゃない、もっときついものもあった…参加者達の中には、軽い好奇心と遊びのつもりで手を出したのが、いずれ高い代償を払う羽目に陥る奴も出てくるはずだ。何の恨みもない他人を罠にかけ道を踏み外させて…一体何が楽しいんだ、ジェームズ？」

「彼らは自分の意思でここに来て、ああすることを楽しんでるんだよ。別に誰かに強制されたわけでもない、嫌ならすぐに出て行けばいい。僕らが、あのぞっとする部屋から脱出してきたようにね」

「詭弁だな」

少しも悪びれる所のないジェームズの言い草を聞いて、僕は忌々しげに吐き捨てた。

「それに、君はまだ僕の問いに答えていないぞ。君自身は、別に彼らに混じってドラッグやアルコールやセックスに溺れて我を忘れることには興味はないのに、なぜわざわざ場所を提供し、人を集め、違法なドラッグをばらまくような真似をするかということだ」

「うん、なかなかいい質問だね、クリスター」

一瞬、僕はジェームズの肩を掴んで振り向かせ、その顔面に強烈な一発を食らわせてやりたくなった。

「ね、こちらに来て見てごらんよ」

中国の大きな壺が飾られた踊り場で立ち止まり、階段の手すり越しに下のホールを見下ろすジェームズに、僕は無言で倣った。

サロンの熱気と空気の悪さで気分が悪くなったのか、ふらふらした足取りでホールに出てきた数人が、そこでもまた乱痴気騒ぎの続きを始めている。

別の部屋からは、半裸の男達が激しく言い争いながら飛び出してくて、ホールの真ん中で殴り合いを始め、それを見物にきた野次馬達のはやしたてていた。

「普段はどんなに取り澄ました顔をしていても、一皮剥けば、人間の本性なんてあんなものだ。だが、それでも退屈な外面よりは、よほど見ていて興味深いよ。そうだね、僕は、彼らのように異物の力を借りて自分を解放したいとは思わないけれど……人が我とも分からぬ衝動のままに自らの赤裸々な姿をさらけ出す様は、こうして眺める分には、なかなか愉快なものがある」

「つまり、抑制を解かれた人間の演じる痴態こそ、君を惹きつけて
ならないんだ？　ちよつと悪趣味すぎやしないか？」

「まあ、そう非難めいたことばかり言うなよ。君だって、本当は興
味がないわけじゃないだろう？　人の心の深淵に潜むものについて
――」

僕は眉をひそめ、改めて眼下の光景を眺め渡した。

一体、これのどこが面白いというのだ。他人のこんな醜惡な姿を
観察しても、不愉快な気分になるだけではないか。

この中には僕の顔見知りがもしかしたら混じっていたかもしれない
いが、彼らがどこの誰で、どんな気持ちでここに集まったかなど、
僕にはもうどうでもよく思われ、ドラッグに味をしめた彼らの行く
末を案じる気持ちも一切失われた。

僕は彼らを心底軽蔑していた。僕とは違う、存在しても無意味な
連中だと切り捨てて、冷ややかに見下ろしていた僕の顔には、果た
してどんな表情がうかんでいたのか――。

ふいに、何とも楽しげなジェームズの眩きが僕の耳を打った。

「でもね、クリスター、僕が本当に興味をかきたてられるのは、あ
んな浅はかな連中ではなくて、一部の隙もなく作りこまれた君の中
に抑圧され封じ込まれたものの正体なんだけどもね――」

その声にもった親しげな響きは、僕を芯から震え上がらせた。

「完璧なものほど壊しがいがある――」

弾かれたように振り返る僕に、ジェームズは滑るような動きで近づいてきて、僕の顔に手を添え、唇に唇を触れさせた。

ジェームズも背は高い方だったが僕の方がまだ上背があったため、僕にキスするため、彼は少し伸び上がらなければならなかった。

（この…！）

この不意打ちに僕は一瞬またかつとなりかけたが、目の前にあるジェームズの目が薄く開いていて、それがひどく冷静に食欲に、シヨックを受けた僕の反応を窺っていることに気づいて、すぐに我に返った。

（僕を動揺させ感情をさらけ出させることで、自分が優位に立とうという魂胆か。だが、こんなことくらいで、僕はうろたえたりなどするものか）

ジェームズに決して弱みなど見せるまいと、僕はほとんど意地になっていた。

僕の唇を優しく挟むようにして触れているジェームズの唇は滑らかで冷たく、性的な興奮がそこから伝わってくることはなかった。

僕はあえて逃げようとはせず、ジェームズに触れさせたまま、じっと彼の瞳の深淵を覗き込み続け、そこに潜む謎を探り出そうとしていた。

（何だか、魚類か爬虫類とでもキスしているような気分だな）

僕がそろそろ疲れてきた頃、ジェームズはやつと身を引き、軽く首を傾げるようにしながら問いかけるように僕を見た。

「ジェームズ…」

僕は手の甲で唇をぬぐい、溜息をついた。

「君の相手には、そろそろ本気でうんざりしてきた。いい加減、話の核心に入らせてもらうよ。なぜ君は僕に固執するんだ？ どうして、そこまでして…君の忌々しいゲームにこの僕を引き込もうとする…？ 僕は嫌だと断つだろう…君の考えには全く共感できない。そんな僕を無理矢理引き込んだところで、君にとって面白くもなんともない結果終わるだろう。どうしてもやりたいというなら、他をあたれ」

「君以外の誰が、僕と互角にやりあえるというんだい。それにね、君は僕と共感など出来ないと言ったけれど、その気になって正面から向き合えば、君と僕はちゃんと分かり合えると思うよ」

「まさか」

確信を持って答えるジェームズと対峙しながら、僕の胸には言いようのない不安が広がっていった。

「僕には、君と響きあう所など全くない」

「それは君が僕から逃げていたからだよ、クリスター。僕を嫌悪するあまり、僕を遠ざけ、存在ごと頭から抹消しようとしてきた。本当は、僕を深く知ることが恐かったんだろう…僕に共鳴してしまうことがね。でもね、僕の方は、君が入学した直後から君に惹かれる

ものを感じて、君の事を色々調べ、観察し、深く考察してきた。敵を攻略するにはまず敵のことをよく知らなければならない。君がさぼっていた間に、その点について、僕は君より優位に立ってしまったよ。君の最大の弱みは何であるかも突き止めて、君が油断している隙に簡単に押さえってしまった。こうまでされて、僕から目を背け続けることなどできるのかな。さて、どうする、クリスター？」

僕は眉間に皺を寄せてジェームズを激しく睨みつけた。

「：分かっていたつもりだけれど、やっぱり君はまともじゃない。人を人とも思わず、自分の目的のためには手段を選ばない。どうするだって？　よくも、そんな問いかけができるな。ああ、確かに君の狙いは的確だったよ。よくもレイフをあんな目に合わせてくれたな：おかげで、僕はもう君のやることに目をつぶることなど出来なくなつた。そう、僕は必ず君の手からレイフを守り通す：そのために闘う。これで満足か、ジェームズ？　僕という、君の退屈を紛らわせるための格好の玩具が手に入ったわけだからな！」

僕が火を噴くように怒鳴りつけると、ジェームズは少し傷ついたような心外そうな顔をした。

「君のことをただ玩具だなんて：思ったことはないよ、クリスター。君は僕と対等な人間だ：僕がそうだと認める唯一のね。頼むから誤解をしないでくれ、僕は君を大切に思っているんだ。そう、ずっと探してきた人を、もしかしたら僕はやっと見つけることが出来たんじゃないかと：まだ確信はないけれど、すぐ君に期待しているんだよ」

ジェームズはどんなふうに言えば僕に分かってもらえるのかというように、もどかしげに唇を噛んだ。これが演技だとしたら天才だ

というような真実味が、その仕草や表情に込められていた。

「そうだね、分かりやすく言うと、僕は君と友達になりたいんだ。学校を卒業してしまえばそのうち疎遠になって友情も終わってしまう、そんな上辺だけの付き合いじゃないよ。唯一無二の親友、人生の相棒：僕の片割れとして、君が傍にいてくれたらいいなと思っている」

僕是我知らず、ジェームズから一步後ろに下がっていた。強烈な悪寒が足元からじわじわと這い上がってくる。

「僕を敵だと呼んだ舌の根も乾かないうちに、今度は友達扱いか：どういう了見で、そんな台詞が言えるんだ？ 生憎だが、僕は君に一片の友情も感じない。第一、僕には――」

「自分の相棒はレイフだけだと言いたげだね。気持ちには分かるよ、僕も、昔はそうだったから」

ジェームズの声にふと寂しげな響きが混じったのに、僕はふと気を引かれた。しかし、これもまた僕を引っ掛けようとする彼の罠かもしれない。

警戒しながら僕が見守る前で、ジェームズは掌に乗せた懐中時計をしばし眺めた。

「そう、人は、失われた自らの半身を求めて、世界を彷徨う……」

詠うように呟かれたジェームズの言葉に僕はぎくりとした。

それは、僕が昔、まるで自分とレイフのことが書かれているよう

だとの感想を抱いた、プラトンの『饗宴』を引用したものだと分かったからだ。

単にジェームズもあの本を読んでいたというだけのことか。それとも、僕にとって、あの記述が特別な意味を持っているということを知っていたのか。だが、どうやって？

ジェームズを問いただしたい気持ちに駆られたが、下手にそうすると彼に自分の心の秘密をさらけ出してしまうことになりそうで、僕には一言も発するとは出来なかった。

ゆっくりと目を上げ、階段の後ろの壁の上を漂い始めたジェームズの視線の先を僕は追いかけた。

旧家の例に漏れず、この古い屋敷の歴史に登場したかつての主達を描いた肖像画や写真が、そこには数多く飾られている。やがて、その中の1枚にジェームズの眼差しはとまった。

比較的新しい写真だ。この屋敷の正面玄関を背景に、1人の若い婦人とその左右に並んで立つ幼い2人の子供達が写っている―その子達の顔を見て、僕ははっと息を吸い込んだ。

「僕達は、互いに分かり合うことが出来る」

目を瞬き、今見たものをもう一度確認しようとした僕の前に、ジェームズが立ち塞がった。

「これで君も、僕が真実を語っていると少しは分かってくれたかな？」

僕が呆然となりながら顔を向けると、ジェームズはやはり、あの光の差さない藍色の双眸で僕を見返していた。

僕の相棒？ 片割れ？ 違う。そんなことはありえない。

ほとんど本能的な、凄まじい反発を覚えながら、僕は底知れぬ井戸を思わせるジェームズの瞳を覗き込んだ。

瞬間、体中の血が凍りついた。

僕がそこに見出したのは、黒々とした暗い深淵の中からこちらを見返す、他でもない自分自身の顔だったのだ。

車でハイウェイを下り、少し進んだ辺りで前方に林を取り囲む高いフェンスに取り付けられたゲートが見えてくるのに、クリスターは長い悪夢から目覚めた気分で瞬きをした。

ゲート脇の門衛小屋は無人だったので、クリスターはひとまず車から下り、鉄製の巨大なゲートに取り付けられたインターフォンのスイッチを押した。

応答があるまで、クリスターはしばし待たなくてはならなかった。

やがて、耳障りな雑音と共に通話状態になったインターフォンから人の声が流れてきた。

「ジェームズの友人のクリスター・オルソンだ。彼に取り次いでもらいたい」

淡々とした声でクリスターが告げると応対に出た人物―年配の用人らしい―は、アポイントメントは取っているのか、どういう用件かと追求してくる。

「：特別アポは取っていないが、ジェームズには僕が近いうちにここを訪ねてくるだろうと分かっていたはずだ。彼に確認してくれればいい」

傲慢とも取れるクリスターの落ち着き払った声音に相手は一瞬沈黙し、それから確認のため屋敷の奥にしばし引っ込んだ。

数分後、クリスターは開け放たれたゲートを通ってブラック家の屋敷に続く私道に車を走らせていた。

手入れの行き届いた道の両側に広がる、こんもりと木々の茂った林の中を進むのは、なかなか気持ちのいいものだった。

この先にある屋敷で待ち受けている人物のことを思い出さなければ、美しい景色に素直に感嘆できるだろう。

程なくして林を抜けると、低い丘陵の懷に抱かれるようにたたずむ風格のある大邸宅が姿を現した。

夏の眩しい日差しを受けて白く輝いて見える屋敷は鮮やかな丘陵

の緑色とコントラストをなして、実には清々しく、美しい。

しかし、そこにまつわる忌まわしい思い出からか、クリスターの目に、その屋敷は何やら得体の知れない瘴気を発している伏魔殿のように映るのだ。

（君とレイフの秘密を…僕は知っているよ、クリスター）

またしても、あの優しいのに妙にぞっとする響きを帯びた声が蘇り、ねっとりクリスターに絡み付いてきた。

「君達は、本当は恋人同士なんだってね」

束の間ジェームズの瞳の呪縛に捕らわれていた僕は、その言葉を聞いた途端、頭から冷水を浴びせられたような心地で我に返った。

「…何の話だ？」

さっぱり意味が分からないというような顔をして、用心深く問い返しながら、僕はジェームズの意図を読み解こうとした。

ジェームズはこれまで、僕の知らない所で、僕に関してあれこれ調べていたらしい。一体、何を、どこまで正確に詳しく知っている

というのか。

意味ありげに僕にほめかした後のジェームズは、異様に貪欲な瞳で僕の反応を観察していた。

僕とレイフの2人だけの秘密について彼がどこまで確信しているのか分らないうちは、こちらからうかつなことは言わない方がいい。

僕が押し黙っているので、ジェームズは更に追及を重ねた。

「君達2人は、兄弟で愛し合っている。双子だから仲がいいとか、一緒にいて当然とか、互いに意識しあっているとかいのように、周りの人間を欺いて、互いに許されない恋をしている。分かたれた双つ身への度を越した執着は、やがてはひとつになるうとする行為そのものに行き着くのかな。君達の間には何かありそうだと疑ってはいたけれど…さすがの僕もそこまで予想していなかったので、知った時はかなり驚いたんだけれどね」

僕はぷつと吹き出し、ジェームズが最高の冗談を言ったというように笑い出した。

「なかなか想像力が豊かなんだな、ジェームズ。確かに僕とレイフは、昔から仲がよくていつも一緒にいたけれど、それをそんなふうを受け取る奴がいるなんて、全く信じられないな。あいつのことは可愛いけれど、恋人だなんて…確かに僕は同性愛にはそれほど偏見はないけれど、双子の近親相姦なんて、ちょっとどうかと思うよ」

僕の笑いの発作が収まるまで涼しげに見守ると、ジェームズは感心したように頷いた。

「さすがに君はなかなか尻尾をつかませないね。君の半分でもレイフにしゃあしゃあと嘘を言っただけのける厚顔さがあれば、こんな興味深い秘密を僕に知られることもなかったらうにね」

僕は、背中に冷たい汗が流れるのを覚えた。

「レイフは話し相手としては退屈だったけれど、君との関係について僕に追及されているうちに、すっかりぼろを出してくれた。それだけでも、僕は彼を抱きしめて感謝のキスの1つでもしてやりたい気分だったよ。もちろんレイフも言葉では否定しつつけたけれど、彼は、君と違ってまっすぐで正直だからね」

「それは君の言いがかりだよ、ジェームズ。大方君がレイフを誘導しておかしたことを言わせただろう」

内心動揺していたが顔色には出さずに答える僕に、ジェームズは肩をすくめた。

「そこまでしらを切るなら、取り合えず、そういうことにしておこうか」

ジェームズはひとまず引き下がったが、僕の抗弁など信じていないことは明らかだった。

（少しばかりまずいことになったな…よりもよって、こいつに僕達の秘密を知られるなんて―だが、それをねたに僕達をゆすろうにも別に証拠などあるわけでもない。ここは、頑として、ジェームズの思い違いだと押し通すしかないな。それにしても、ジェームズの態度は何から何まで気に入らない…僕とレイフの関係をあんなに嬉

々として追及してくるなんて―)

僕は、先程見つけた壁の写真に再び視線を向けた。ジェームズが懐かしげに眺めていたものだ。

「…それは、君の家族かい？」

ジェームズの個人的なことなど本当は一切知りたくはなかったが、話題を変えるためにも、僕はあえて尋ねた。

「ああ」

ジェームズは嬉しそうに唇をほころばせた。僕が彼のプライベートに関心を見せたことが嬉しいのか、それとも共通の話題ができたことを喜んでいるのか。

「そうだよ。僕の母と…小さい頃の僕と双子の妹のメアリ」

確かに双子というだけあって、写真の中の幼い兄妹は驚くほどによく似ている。まだ7、8くらいだろうか。その年頃では性差ゆえの肉体的な違いもまだ表われてはいない。

「妹が…いたんだ」

真綿でゆっくりと締め付けられるような胸苦しさを覚え、僕は喉もとに手をやった。訳もなく、実に嫌な気分がこみ上げてきた。

「11歳の時に、事故で死んでしまったんだけれどね」

ふいに、ジェームズの顔がうつろになり、涼しげだった声も暗く

沈んだ。

11歳かと、僕は胸のうでで呟いた。その年頃の自分とレイフは一体何をしていたのかなと2人の子供時代に思いを馳せていた。

僕が懐かしい思い出をひそかに蘇らせている一方で、ジェームズもまた過去の追憶に浸っているようだった。

「僕達兄妹はとても仲がよかった。当然のようにいつも一緒にいたし、片割れの姿が傍に見えないと不安になって見つかるまで屋敷中を探し回ったものさ。そんなふうだったから、僕達があまり固くついていることを好まなかった母も、僕達がひとつの子供部屋を共有することをしばらくは大目に見てくれていた。それでも、やがて10才を迎える頃になると、兄妹が同じ部屋で眠るのは適切ではないとの理由で僕らは引き離されることになった」

何やら聞き覚えがあるような話に、僕は眉をひそめた。これはまるで思春期を迎えた頃の僕とレイフの物語にそっくりではないか。

いや、これもきっと僕を動揺させるためのジェームズの作り話に違いない。そう自分に言い聞かせ、僕は冷静さを保とうとしたが、目の前にあるそっくりな顔をした幼い子供達の写真を見ていると確信が持てなくなってきた。

こうなると、完全に心を遮断することなどもう出来なかった。ジェームズの愛惜の念のこもった声によって紡がれる物語は、用心深く構えていたはずの僕の胸に蛇のようにするりと入り込んでくる。

「当然ではあったんだけどね：その辺りから、僕は男に、妹は女の体が変わっていったし、物事の感じ方や考えにも差が出てきた：

以前は簡単に通じ合った心がいつの間にかお互い分からなくなっていた。次第に遠ざかり、自分を映し出す鏡でなくなっていく相棒を見るのはなかなか苦痛なことだったよ」

僕は、ゆっくりとジェームズの方を振り向いた。

迷い混乱している僕の顔をジェームズは正面から見つめ、満足そうに頷いた。

「ほら、君も今、僕に深く共感しただろう、クリスター？ 実際、僕達には似ている点がたくさんあるんだよ。もしかしたら、見た目は君にそっくりだけれど中身は似ても似つかない、あの弟君よりもねえ、クリスター、君の気持ちなど分かりもしない、鈍い相手に君はこれまで散々失望させられてきたんじゃないのかな？」

たちまち僕の顔に浮かび上がった険悪な表情に、ジェームズはまづいことを言ったかなというように口をすぼめた。

僕は頭を振りたてて、束の間手離しかけた平常心を再び取り戻した。

「ジェームズ：僕が君の話を鵜呑みにして信じると思うのか？ もしかしたら君はいくらかの真実を語っているのかもしれないが、僕にはそんなことは確かめようもない。子供部屋の話だって、君がレイフから引き出したものを使っただけかもしれない。第一、君が子供の頃に妹を喪って、その悲しみを今でも引きずっているとしても、僕には全く関係のないことだ。君は、自分の都合よく脚色した話を聞かせて僕の共感を引きずり出し、それによって僕をうまく操ろうという魂胆ではないのか」

「君は、本当に素直じゃないね」

ジェームズは呆れ返ったように溜息をついた。

「君が信じようが信じまいが、僕は君に一応伝えた方がいいかなと思っただけ、話したまでだ。聞きたくなかったなら、聞かなかったこととして忘れてしまえばいい。ただね、クリスター、僕のことを分かりもせずに僕に勝てるなんて、思い上がらないことだよ」

ジェームズは端正な薄い唇を歪めて、僕の頑なさを冷たく嘲笑った。

「君は、僕の仕掛けたゲームにのると言った。しかし、君が僕を本気で葬り去りたいなら、僕に近づき、僕の心の深淵を覗き込んで、そこにあるものをまず理解しなければならぬ。そうする勇気さえあれば、君には、それほど難しいことには思わないけれどね」

ずっと細くなったジェームズの藍色の瞳の奥に小さな赤い火花が散るのを、僕は煮えたぎる闘争心をもう隠しもせずに睨み返した。

（こんな奴が、僕に似ているはずがない。僕の相棒はレイフだけだ）

そんな思いはジェームズにも伝わったのだろう、彼は妖しく、更に明瞭に笑った。

「いずれ、君は認めるしかなくなるよ」

そうぽつりと呟くと、ジェームズは放心したような表情になり、手の内の時計を確かめるように握り締めた。

「…その時計は？」

ジェームズのことなど知りたくもなかったはずが、純然たる好奇心から、うっかり僕は尋ねてしまったのだが、すぐ後でそのことを後悔した。

「ああ」

僕の言葉にジェームズは夢から覚めたように瞬きをして、掌の懷中時計を見下ろしながらしばし考え込んだ。

「そうだな、せっかくだから、君にだけは見せてあげようか…僕の秘密の宝物なんだ」

ジェームズが手招きするのにためらいつつも僕が近づくと、彼は古風な時計の蓋を開けた。

「これは僕の曾祖父がボストンの有名な時計屋に作らせたものなんだけれど、蓋の部分が二重になっていて、ちよつとしたものを隠せるようになってるんだ」

ジェームズが蓋の縁を軽く指先で押さえると内蓋が外れ、中から奇妙なものが出てきた。

1センチくらいの長さの白茶けた細い枯れ枝かと初めは思ったが、よく観察してみると、何かの骨であることが分かった。

「妹なんだ」

僕の耳元で囁くジェームズの声は、とっておきの秘密を心許せる

親友に打ちあける時のような無邪気な喜びに満ちていた。

「メアリが死んだ時、僕はどうしても彼女と離れがたくて：埋められてしまう前に、彼女の小指の先をこっそり切り落として形見としてもらったんだよ」

全身を凍りつかせた僕が声もなく見守る前で、ジェームズは再び骨を蓋の内側に封じ込め、その時計を耳に押し当ててうっとり目を閉じた。

「彼女がこの世界からいなくなってしばらくの間、僕は悲嘆に沈んだけど、こうしていると不思議と心が静まった。時計の規則正しい音って、心臓の鼓動にどこか似ているんだよ。規則正しく針が刻む音は、あの子の小さな骨を震わせている：骨の啼く音を僕は聞いている。音というのは共鳴によって鼓膜にまで届き、その内側にあつる小さな小さな骨を震わせて内耳に伝えられ、そこで初めて音として認識されるんだ。魂の不滅など僕は信じていないし、子供じみた感傷もとうに過ぎ去ったけれど、今でもこうしてメアリのたてる音を聞けるなんて素敵だよ。それに、生身の彼女が僕の傍にいないことは今でもやっぱり寂しいけれど、同時に安心もできるんだ。死んでしまったおかげで、僕は彼女が変わっていくのをあれ以上見ずにすんだわけだし、それに、メアリはもう僕以外の誰のものにも永遠にならないわけだからね」

ジェームズの臉がまるでかちりと音でもたてそうな素早さで開き、黒々とした瞳が動いてこちらを見たのに、僕は思わず後ずさりししそうになった。

「そうだ、許されない恋に身を焼くくらいなら、いっそ君も僕に倣って見たらどうだい、クリスター？　きつと、楽に、なれるよ」

ぞっとする示唆を含んだ言葉に身の毛がよだった、その恐怖さえ凌駕するほどの怒りに僕は瞬く間に満たされていった。

まるで捕まえた獲物を弄ぶ猫のように、自分の優位を確信したジェームズは、僕をからかい、動揺させ、急所を突きまわして遊んでいた。どこまで本当か知らないが、わざわざ自分に関する情報を僕に与える余裕さえ見せて。

ジェームズが他の誰でもない僕を選んだ動機には、彼がほのめかしたように、何かおぞましい裏があるのかもしれないが、それについて考えてみてもジェームズの思う壺にはまるだけで、僕にとって利点はあまりなさそう。ならば余計なことに気持ちを取られまい――そう自分に言い聞かせ、僕は改めて、ジェームズに向き直った。

「ジェームズ」

「うん？」

「君が本当は僕に何を求めているかなど、知るものか。要は、どんな手段を用いても、君を僕とレイフの前から永遠に消し去ってしまったらそれでいい。遊び半分で僕をこれだけ怒らせ、闘いなど挑んだことを必ず後悔させてやる」

敵意と反感と憎しみ以外の感情を覚えることを一切拒否して決然と宣言する僕を、ジェームズはしげしげと眺めたかと思うと、収まりの悪い金髪に手をやりながら捉えどころのない微苦笑をうかべた。

「ああ。それは楽しみなことだね、クリスター」

そうして、その夜、僕はおとなしく彼の屋敷を後にした。

後から振り返れば、ジェームズに対する僕の嫌悪感と反発ぶりは度を越していたと思う。だが、彼と接していると、僕は魂の奥底から込み上げ迸る否定的な感情をどうしても抑えられなかったのだ。

親しげに僕を相棒と呼び、僕達は似たもの同士で、その気になればちゃんと分かり合えるなどとジェームズは言った。（受け入れられるはずがない）

それにもまして、ジェームズが双子の妹について語る姿は、歪んだ鏡に映る僕自身を見るようで、とても正視できなかった。（僕は彼とは違う）

ジェームズがどうあっても僕を捕まえて離そうとしないなら、自分の歪んだ鏡像など見たくない僕は、彼をこの手で叩き壊すしかない。

僕が父の銃を持って、改めてジェームズのもとに乗り込んだのは、それから1週間後のことだった。

（あの夜を境に、僕はジェームズとの闘いを：ゲームを始めた。あいつの挑発に乗ったことが結果的によかったのか、まずかったのか、

今では迷うところだが――僕は結局歯止めがきかずやりすぎて……それどころかゲームそのものに夢中になっていった……結局僕は彼の見込んだとおりの人間だった訳だ。そうして、僕のそんな暴走ぶりが余計にジェームズを煽ってその狂気に火をつけたような気もするし……いや、あいつはもともと狂っていたのだから、僕が少しくらい手加減したところで結果は同じだったとも思える。どんな形であれ僕が勝てばあいつの僕への執着は増しただろう……だが、もし僕があいつの望むように負けていたとしたら――あいつは結局僕をどうするつもりだったのか)

クリスターが車を母屋の前廊の前に車を止めると、彼の到着を待ち受けていたらしいきちんとした身なりの年配の使用人が近づいてきた。

「ご案内いたします、クリスター・オルソン様。ジェームズ様がサロンにてお待ちです」

屋敷のロビーに足を踏み入れた途端、過去にここを訪れた時の強烈な印象が打ち寄せてきて、一瞬圧倒されたクリスターは思わず立ち止まった。

「オルソン様？」

「いや、何でもない」

うろんそうに振り返る使用人に鷹揚に頷き返すと、クリスターは気を取り直して、再び歩き出した。

大理石の階段の下を通り過ぎながら踊り場の方を見上げると、あの時と変わらず、壁には大小さまざまな肖像画や写真が飾られてい

る。

幼いジェームズと失われた彼の半身の姿もそこにまだ残っているのだろうか。

扉を大きく開かれたサロンの中からは複数の人間達のたてる話し声や物音が聞こえてきた。

「ジェームズ様、お客様をお連れしました」

天井の高いサロンにクリスタールが入った瞬間、そこにいた者達の視線が一斉に彼に集中し、同時に、それまで部屋に満たされていた談笑がぱたりとやんだ。

はりつめた空気の中中で、クリスタールは顔色も変えずに泰然と佇んで、さり気なく素早く周囲に視線を走らせた。

革張りのソファや肘掛け椅子がそこかしこに置かれた広大なサロンには、十代の若者ばかりが集まっていた。

暖炉の前のソファの周りにいる者達には、クリスタールが見覚えのある顔も幾つか混じっている。ジェームズに感化されたアーバン高校の生徒や、彼の逮捕に伴って退学処分を受けたもと生徒だろう。

サロンの奥にはまた別のグループがいて、こちらにはクリスタールの知った人間はいなかった。初めの連中よりもっと若い、中にはどう見てもローティーンの少年も混じっているが、目つきは鋭く、どこことなく物騒な尖った雰囲気漂わせている。

どちらも、ジェームズの現在の取り巻き、あるいは配下だろうが、

出自や育ちが違ふことが一目で分かる彼らはそれぞれ派閥を作っている様子だ。

「クリスマス？」

喜びに弾んだ声が響き渡るのにクリスマスが先程の暖炉の前の辺りに視線を戻すと、こちらに背中を向けてソファに坐っていた1人の青年が立ち上がって、信じられないといった表情で振り返った。

「本当に、ここまで来てくれたんだ」

ジェームズ・ブラックは軽く首を傾げるようにしてクリスマスに微笑みかけた。

その顔を見た瞬間、みしりと、クリスマス胸の深い場所で何か凄まじいものが目覚め、身じろぎする気配がした。

「空々しいことを言うなよ。僕がこうすることは君には分かっていたはずだ」

クリスターが唇の端を僅かに吊り上げて冷めた口調で答えると、ジェームズの顔にうかぶ微笑はますます深くなった。

ジェームズはクリスマスを一たと見据えたまま、滑るような足取りでゆっくりと近づいてきた。彼が片割れとも呼んだ仇敵に近づく一歩一歩を味わうかのごとく。

すると、ジェームズの近くに控えていた見事な体躯の男が、慌てて、その後を追ってきた。かつてはクリスマスと同じフットボール・チームで活躍した選手だった。ジェームズに付き従ったがために停

学処分を受けたものの、最近になって復学したフレイだ。

今でもジェームズに忠実なのは変わらないようだ。彼はジェームズを後ろに庇うようにしながら、威嚇を込めてクリスターを睨みつけた。身長は2メートルを超え、鎧のような筋肉に覆われた逞しい体と比較すると、クリスターですら華奢に見えるほどだ。

「相も変わらずいい度胸だな、クリスター」

低い声ですぐむフレイの瞳には敵意と警戒心がみなぎっている。かつてここで行われた伝説的な一騎打ちを目の当たりにした1人として、クリスターがジェームズにあの時と同じような常軌を逸した勝負を強いるのではないかと疑っているのだろう。

「フレイ、退いてくれ」

しかし、主であるジェームズがやんわりとたしなめたので、フレイは不承不承ながらも後ろに下がるしかなかった。

サロンにいる他の連中は、何が起こるかと思いを固唾を飲んで見守っている。

そうして、クリスターとジェームズ・ブラック―J・Bはおおよそ1年半ぶりに対峙した。

大きく見開かれたジェームズの目は今、クリスターの全身をとらえている。

クリスターは顔色ひとつ変えず冷静沈着を装っていたが、ジェームズには彼の肌から立ち上る熱や昂揚のあまり早くなった心臓の鼓

動、今にも獲物に襲い掛かる肉食獣めいて体中の筋肉にぐっと力が込められていることが分かっただろう。

実際、仇敵を目の当たりにしたことで刺激されたのか、ここしばらく静まっていたはずの内なる破壊衝動が一気に目覚め、それを抑えるのにクリスターは密かに苦勞していた。

「…大人っぽくなったね、クリスター」

ジェームズは目を細めるようにしながらしみじみと言ったかと思うと、ゆるやかに腕を伸ばし、親愛の情のこもった仕方でクリスターを抱擁した。

「会いたかった」

万感胸に迫るような囁き。クリスターの背中に回されたジェームズの腕に力がこもる。

「僕もだよ、ジェームズ」

ジェームズにあわせるようにクリスターもまた彼の肩をぐっと引き寄せ、金色の柔らかな髪に頬を押し付けながら、その耳に低い声で囁いた。

この光景を見守る一同がはっと息を飲み、当惑の視線を交わしあい、信じがたいものを見たかのように凍りつく。

それも無理のないことだ。クリスターとJ・Bの過去の経緯を知る人間ならば、この虚虚実実の言葉や態度の応酬に背筋がぞっと冷えたことだろう。

（僕を待っていたのか、僕に会えてそんなに嬉しいか、ジェームズ：そうだな、ある意味では僕も：君との再会を喜んでいるようだ。君の全てを嫌悪し、激しく反発しながらも、もう一度君と闘える日を僕の一部は待ち望んでいた：だが、こんな歪んだ関わりあいはいつまでも続けられるものじゃない。だから、これでもう最後になよう）

煮えたぎっているくせに妙に芯の冷たく冴えた心で、クリスターは誓った。

（今度こそ僕は：二度と戻ってこれない場所に君を葬り去ってやる）

それぞれの思惑を胸に秘めながら、クリスターとジェームズは、唯一無二の親友との再会を演じるかのごとく固く抱きあっている。

腕の中の宿敵が喉の奥で不吉な笑い声をたてるのを聞きながら、クリスターは激しい輝きを秘めた琥珀色のずっと目を細めるのだった。

第5章深淵に潜むもの（2）

ジェームズは、非友好的な空気に満ちたサロンからクリスタールを連れ出すと、2階にある一室に自ら連れて行った。

「君が今日訪ねてくることが分かっていれば、他の連中は屋敷から締め出していたんだけどね。2階は僕と家族のプライベートな空間だから、ここなら誰にも邪魔されることなく君とゆっくり話ができる」

ジェームズは、先程クリスタールをサロンまで案内してくれた年配の使用人―執事のロバートにお茶を運んできてもらうと、ガラスのテーブルを挟んで向かい側のソファに坐っている彼に嬉々として話しかけてきた。

「ロバートの入れる紅茶はとてもおいしいから、是非君にも味わってもらいたいな。僕が施設を出てこの屋敷に戻ってから、それまで勤めていた使用人達は次々に辞めていって、今では、ロバートの他に通いの家政婦と父の面倒を看ってくれる看護師がいるくらいになっってしまった。他の使用人達は引きとめる気にはなれなかったけれど、このお茶を飲めなくなるのは辛いから、ロバートだけは何かあっても手放せないって思うんだよ」

クリスタールは勧められるがまま紅茶のカップを持ち上げて、その香りを味わうふりをしながら、甘いメレンゲ菓子をつまんでいるジェームズをじつくりと観察した。

（逮捕される直前に会った時より少し痩せたかな…顔色が悪いわけではないが、妙に生白く光沢のある肌をして―）

ジェームズが軽くむせたように咳込むのに、クリスターは瞬きをした。

「そう言えば、ヘレナさんはその後どうだい？　まさかヴァンがそんな暴挙に及ぶなんて信じられない話だったけれど、そろそろ流産のショックも薄らいで、元気になってきたのかな？」

クリスターの胸に、一瞬、殺意にも似た狂暴な感情が弾けた。

「おかげさまで、すっかり回復して、仕事にも復帰しているよ。活動的な母にしてみれば、家にいるより外に出て忙しくしている方がきつと気も紛れるんだろうね」

「ヘレナさんはとても芯の強い人だからね。僕には、むしろラーズさんの方が心配だな。あの人は、普段タフに見せかけているけれど、感情的に不安定で脆い部分を抱えているからね。何よりも家族を大切にしているラーズさんにとって、楽しみにしていた子供の死、それも自分が信頼していた部下が原因になったというのは耐え難い苦痛のはずだよ。ヘレナさんはもちろんだけれど、ラーズさんのことも、君はもっと気遣ってあげるべきだろうな」

ジェームズは同情のこもった口調で言いながら、クリスターの反応をじっと窺っている。

「父は、君が急に社をやめてしまったことをとても残念がっていたよ」

「ああ、そうだろうねえ。ラーズさんは、僕をとても気に入って、可愛がってくれていたから」

ジェームズは何を思い出したのか、喉の奥で低く笑った。

「ラースさんはね、僕を君と重ねていたんだよ……僕と一緒にいると、君と打ち解けて話しているようで楽しいんだって。君も何かと忙しいんだろけれど、たまには父親の相手くらいしてやれよ、クリスター。時には煩わしくても、自分を無条件に愛してくれている親の存在は、やはりありがたいものさ」

クリスターは白々と冷めた目をしばしジェームズの優しげな顔にあてた後、おもむろに口を開いた。

「そう言えば、君の父親のゴードン・ブラック氏はどうされているのかな？　少し前までは精力的な実業家として活躍していた人が、いきなり倒れて一線を退き、すっかり世間から姿を消してしまった……氏と交友のあった人々の間では、容態はかなり悪いらしいと噂になっているようだよ。君が出所して一緒に暮らし始めてからのことだよ」

ジェームズは殊勝な面持ちで溜息をつき、しみじみと言った。

「やっぱり、僕が色々心配をかけたのがいけなかったんだろうね。久しぶりに顔を見たら、父もめっきり老け込んでしまっていた。僕の逮捕だけでもショックだったのに、身内から犯罪者を出したせいで、社交クラブから除名されたり仕事の取引を断られたり、社交界でも実業界でもつまはじきにあったんだ……気落ちをした父はビーコンヒルにあるセカンドハウスでしばらく愛人と暮らしていたんだけど、この女がまた食わせものでね。父が倒れ、別れ話が出た途端態度を豹変させて、慰謝料を払えだの訴えるだの――病身の父に負担をかけるのは忍びないからと僕が対応したんだけど……やっとその

女の納得する額の手切れ金を渡して街から追い出すまでは、さすがの僕でさえ辟易させられたよ」

クリスターは用心深くジェームズの話聞きながら、じっと考えを巡らせていた。

ジェームズの父親の姿を見た者は、彼が愛人と共に住んでいたセカンドハウスを離れてこの屋敷に移って以来、ほとんど皆無だ。通いの医師と看護師が、持病の糖尿病の悪化と全身の機能の低下を外部にももらしているくらいだ。

（さっき階下のサロンで見かけた、あんな胡散臭い連中が堂々と屋敷の中をうろつきまわっている有様からも、ジェームズが誰の支配も干渉も受けず、好き勝手に振る舞っていることは明白だ。昔は、ジェームズは学校に近い場所に部屋を借りていて、せいぜい父親の不在の週末にここに戻っては、趣味の悪いドラッグ・パーティーを開いていた程度だった。しかし、今やこの屋敷の主はジェームズだ。寝たきりの父親にはもはやジェームズの暴走を止めるだけの力はないのだろう：いや、それどころか、ひょっとしたら――）

クリスターは以前ここで働いていた使用人達から聞いた話を思い出しながら、ジェームズが戻ってこの方、屋敷内で何が起こったかについて推理を巡らせていた。

そんなクリスターに向けられているジェームズの顔には相変わらず穏やかな笑みがあるばかりだったが、よく見れば、その瞳孔は大きく開いており、恍惚とした熱を帯び始めていた。

「レイフはどうしているんだい？」

ふいを突かれたクリスターは、今度は感情を隠しきれず、つい反射的にジェームズを睨みつけた。

「怖い顔をするんだね。僕がレイフに関心を示すのがそんなに嫌なのかな？ 別に僕は、今更彼にちょっかいを出すつもりはないんだけれどな」

「僕は、君の言うことなど何一つ信じない」

「そうなんだ。別にいいけれどね…確かに、僕も今君に嘘をついた」

クリスターが眉根を寄せるのに、ジェームズはソファの背もたれにゆっくりともたれかかりながら、悪びれもせずと言った。

「ハニーがたぶんレイフの所に行っただろう？ 僕がこの街に戻ってきたという知らせを、何も知らなかった君の可愛い弟に伝えたんじゃないのかな？」

クリスターは思わず軽く舌打ちをした。

「やっぱり…そういうことだったのか」

ハニーがこのタイミングで現われ、J・Bが復讐しに現われるという警告をレイフに与えたことには、クリスターは実は引っかけかり覚えていた。

クリスターは、レイフを二度とJ・Bとは関わらせたくなかったのに、おかげで真実を白状しないわけにはいかなかった。知ってしまった以上、レイフはクリスターを守りたい一心で何としても首を突っ込んでくるだろう。

「もちろんハニーに悪気はないよ。僕はただ、今の彼女なら、僕が電話で会いたいと誘っただけで不安に駆られ、いてもたってもいられずに君かレイフに知らせようとするだろうと読んだだけだ。君には遠慮があるようだから、ハニーにとってレイフの方が打ち明けやすい相手だということも考慮に入れてね」

「君が今度もハニーをうまく使えたからといって、レイフも思い通りに操れるなんて思わないことだよ、ジェームズ。生憎、弟が何を考えどう行動するかなら、僕の方こそ、手に取るようによく分かる：君の介入できる余地などあるものか。君の相手は、望みどおり僕がしてやるんだから、この際レイフのことは放っておいてくれないか」

「相変わらず、君はレイフのためなら必死だね。今度も自分が盾になって弟を守るつもりなんだ。でもね、唯一無二の相棒のくせに、一方的に君が庇護するだけなんて、そんな関係はフェアじゃない」

「僕とレイフのことは放っておいてくれ。フェアであろうがなかろうが、それが僕のやり方だ。僕には、兄として、あいつを守り、いい方向に導いてやる責任がある」

固い口調で言い切るクリスターを瞳の中心に映し出したまま、ジェームズはゆっくりと瞬きをした。

「兄としてねえ…ふうん、その様子じゃ、君はまだレイフを手に入れているのかな。よく我慢がもつものだね。君の忍耐力には全く頭が下がるよ。それとも…本気で諦めようとしているのかい？」

鋭い刃で切り裂かれたような痛みを胸に覚えながらも、クリスタ

―は平然とした顔で、ジェームズの言葉を受け流した。

「君はまだそんなくだらないことを言っているのか、ジェームズ。僕とレイフは君がかんぐっているような関係じゃない。そんな馬鹿げた妄想、君以外の誰も信じるものか」

「君達の心の問題だものね。証拠などあるはずもない。よほどのへまをしない限り、誰も、君達が愛し合っているなんて夢にも思わないだろう。だが、もし知られたら―君達は終わりだよ。プロスポーツの選手になるという夢どころか、君達の周りいる全ての人達から一斉に顔を背けられ、家にも学校にもいられなくなる。ヘレナさんは理解するかもしれない…でも、頭の固いラースさんは、とてもじゃないけれど受けつけないだろうね」

「そんな心配は無用だよ。だって、僕達はただの兄弟なんだから」

クリスターは軽く肩をすくめてみせたが、弱みを的確についてくるジェームズの言葉に、内心はあまり穏やかではいらなかった。

（こんな奴に言われなくても、そのくらいよく分かっているとも。レイフと僕は、おかしいことになりかけた所を父さんに一度見られてしまった。あの時の父さんはまるで僕らをおぞましいものを見るような目つきで見っていた…そうだ、あれがたぶん常識的な人間の反応なんだ）

クリスターはつい心をさ迷わせかけたが、その時、自分に浴びせられるジェームズの強い視線に気づいた。心の底にわだかまる不安を読まれたかもしれないと、背筋がひやりと冷たくなった。

「ああ、そうだ」

クリスターの瞳を捉えたまま瞬きもせず、ジェームズは唇だけを動かして、思い出したように言った。

「実は、君に渡したいものがあるんだ。以前ある人から預かったんだけど、なかなか君に手渡す機会がなくてね。ずっと気になっていたから、今日君が訪問してくれたのは僕にとっても好都合だよ。探してくるから、ちょっと待っていてくれ」

にこやかにそう言い残して部屋から出て行くジェームズを、クリスターは凝然と見送った。

一体ジェームズが何を渡すつもりなのか、クリスターにはさっぱり見当がつかなかったが、どうせ後で分かることなのだから、別にいい。

それよりも、今1人きりになれたことの方が、クリスターにとって大きな意味がある。

「僕が、おとなしく待っているはずがないだろう」

唇の端を僅かにつり上げるようにして微笑んで、クリスターはおむろに立ち上がった。

ジェームズが出て行ったばかりの扉を音もなく開き、クリスターは外の様子を窺った。

家族だけのプライベートな空間である2階では、先程下のサロンにたむろしていたジェームズの配下がいてクリスターを見張っているということもないようだ。

クリスターは何食わぬ顔で廊下に出ると、じっと耳を澄ませて周囲の音を拾い、気配を窺った。

ジェームズはこの部屋の向かいにある自室に入って、何かを探しているらしい。

その部屋の前をクリスターは息を殺して通り過ぎ、屋敷の更に奥深くに入り込んでいった。

廊下の左右には幾つもの扉があったが、それらの部屋の中はしんと静まり返って人のいる気配はない。

（僕が話を聞いて回った、もと使用人達の話では：ジェームズの父親はここで今も暮らしていることになっている―少なくともひと月前には、最後に辞めた家政婦が彼の声を聞いたと証言していた）

大体の部屋の間取りや誰がどの部屋を使っているかも確認していたクリスターは、たぶんこの部屋だろうとあたりをつけた一室に素早くたどり着き、ドアノブを掴んだ。

（鍵がかかっている）

クリスターはちょっと顔をしかめたが、すぐに気を取り直して、ポケットから一本のピンを取り出した。

（こんなことが特技だというのも考えものだけど―）

鍵の構造というのはパターンが限られていて、これは比較的簡単に開く種類のものだとして取ったクリスターは、鍵穴に素早くピン

を差し込んだ。案の定、それほど手間取ることもなく開錠することができた。

（さて、問題は、果たしてジェームズの父親が、今も無事でいるかということだな）

大きく息を吸い込んで部屋の中に音もなく滑り込むと、クリスタは後ろ手にそっとドアを閉じた。

窓にブラインドの下ろされた部屋の中は暗く、初めは細部まで明らかではなかったが、クリスタが視力を取り戻すのにそれほど時間はかからなかった。もともと彼は、暗い所でも猫なみによく見ることができるのだ。

次の瞬間、クリスタはショックを受けたように息を飲み、思わず後ろによろめいて、扉に背中をぶつけた。

（なんだ、この部屋は…？）

ジェームズの父親を探すつもりが、どうやら部屋を間違えたりしたということは、すぐに分かった。

そこは病人の寝室ではなく、書き物用のシンプルな机にコンピューター、ぎっしり本の詰まった本棚にキャピネット、隅にはテレビのある、小さな書斎のような雰囲気の家だった。

無論、それだけならばクリスタをかくも喫驚させることはなかったろう。

クリスタの目が釘付けになっているのは、壁一面にピンで留め

られた無数の写真、新聞や雑誌の切り抜きだった。それら全てにクリスターが写っている。

これだけの数を集めるだけでも大変な労力だったろう。それをものともせぬほどの並々ならぬ関心―凄まじい妄執が、その光景の中にはあった。

クリスターは半ば魂を飛ばして、他ならぬ自分の展示場となっている壁を呆然と眺めていた。

束の間彼の頭は、見たものを受け入れ考えることを拒否したかのように真っ白になっていた。

(あ…)

クリスターは、こみ上げてくる震えと吐き気を押さえ込もうとするかのごとく我が身をかき抱き、床に目を落とした。無数の虫に肌を這いまわれているような気がする。

「落ち着け」

クリスターは何とか気持ちを静めると、再び顔を上げ、用心深く壁に近づいて、そこにある写真や切りぬきを確認した。

古いものでは中学時代にクリスターがチェスの世界で活躍した頃の記事の切抜きが混じっていたが、ほとんどはここ2、3年のフットボール関係のものだ。

だが、写真の方は―。

初めは誰かが隠し撮りをしたのかとも思ったが、すぐに、そんないい加減な撮り方をしたものではないとクリスターは気がついた。中には、いつ、どこで撮られたのか、すぐに思い出せるものもある。昨年、高校フットボール州大会決勝での数々の場面を、絶好のカメラ位置から撮った写真。そう、アイザックが撮影し、後に勝手に焼き増しをして売りさばいたものだ。学校外の人間でも、つてさえあれば、それらを集めることは別にそう難しくはない。

胸に浮かんだ疑惑が解けて、クリスターはほっと胸を撫で下ろしかけたが、すぐに、その顔は再び厳しくなった。

クリスターは壁に手を伸ばして、そこにあった一枚の写真をはがし、目の前に持ってきた。

写真には、窓の前に立ってぼんやりと外を眺めながら物思いにふけているクリスターの姿が写っている。

嫌いなカメラを向けられていたというのに珍しくも無防備な横顔を見れば、自分が撮影者に対して心を許していたのが分かる。それに、この見覚えのある背景は、新聞部の部室に間違いなかった。

（ああ、そうだ：夏休みに入る前日、放課後の部室で撮られたものなんだ。アイザックは、時々ふざけて、あんなふうに僕の不意を突いては勝手に写真を撮っていた。あの後、僕とアイザックは些細なことでもなぜか言い争ってしまっただけで、僕が彼の姿を見たのは、あれが最後になってしまった。だが、こんなプライベートな写真がジェームズの手に移っていたなんて）

写真から顔を上げ、壁を覆う無数の写真の上に、急に不安に駆られたような眼差しをさ迷わせながら、クリスターは声を出してぼつ

りと呟いた。

「アイザック…？」

その名を口に出した途端、急に現実味を帯びてきた不吉な予感に、クリスターは唇をきつく噛み締めた。

その時だ。

外の廊下に面する別の部屋のドアが開く音を聞いて、クリスターは弾かれたように背後を振りかえった。

（しまった、ジェームズが部屋に戻ってくる）

ジェームズは一度、先程クリスターと一緒にいた部屋を覗いたが、そこに彼がいないうちに気づいて、また廊下に出てきたようだ。

ひたひたという足音は、今度は迷いもせず、こちらに近づいてくる。

クリスターはほとんど反射的に扉から身を引いたが、そんなことをしても意味はないということとは分かっていた。

手にした写真を見下ろしてふと考え込んだ後、クリスターはそれをもとあった場所にピンでとめなおした。

（この部屋で、ジェームズはずっと僕のことを調べ研究し、どうすれば攻略できるのかというようなことを考えて過ごしていたんだろうか…）

薄ら寒いものを見るような目つきで、クリスターは改めて部屋をさっと眺め回した。

キャビネットにあるビデオテープは、おそらくクリスターの出たテレビのスポーツ番組などを録画したものだろうと見当がつく。

ふと、クリスターは右手の壁にドアがあることに気がついた。写真のインパクトがあまりにも強すぎて、つい見過ごしていたが、続き部屋があつたようだ。

クリスターは何かしら気になるものを感じたのだが、その時、後ろの扉が音もなく開き、外の明かりがこの部屋に満ちる暗がりの中にすうっと差し込んできた。

クリスターは、うなじの辺りの皮膚がちりちりとそそけ立つのを感じた。

「クリイ…スター…？」

どこからこんな声を出しているのかというような猫なで声に呼ばれ、つい激烈に反応してしまいそうになる自分をなだめながら、クリスターは肩越しにゆっくりと扉の方を振り返った。

「ほおら、見つけた。ごめんよ、僕があんまり待たせたものだから、退屈したんだね？」

明るい光に淡い色の髪を半ば溶け込ませながら、ジェームズはまるでかくれんぼ遊びに熱中している子供ように屈託なく笑って、手にした大きな茶封筒をクリスターに見えるように高く差し上げた。

「これだよ、僕が君に渡したかったものは」

その後、クリスターはジェームズと共に再び先程の部屋に戻った。

ジェームズはクリスターが何をかぎ回っていたのか追求してこなかったし、クリスターも自分に関する夥しい資料で埋まっていたあの部屋に言及しようとはしなかった。

もったも、どうしても胸に引っかって離れない疑惑が、クリスターにはあるにはあったのだが――。

「さて」

新しいお茶を用意させてソファに落ち着くと、ジェームズはテーブルの上に例の大きな封筒を置いて、両手の指先をすり合わせるようにしながらおもむろに切り出した。

「これは僕がある人物から手に入れた、とても興味深い資料なんだ」

クリスターは、目の前に置かれた封筒とジェームズの顔を用心深く見比べた。

「ドクター・アイヴァースのことは覚えているかい？」

クリスターは思わず目を見張った。

デイビット・アイヴァース。忘れられるはずがない。13才のクリスターの心の闇を、誰よりも鋭く的確に見抜いた精神科医。そして、クリスターに初めて同性愛を教え込んだ男。

（一体なぜアイヴァースのことをこいつが知っている…？ ああ、成程、僕の過去についても詳しく調べあげた訳か。あの常軌を逸した部屋を見た後では、それくらいやるだろうとすんなり納得がいくな。だが、今ここでアイヴァースの名前を出す意図はなんだ？）

胸に沸き起こった小波を落ち着き払った仮面の下に封じ込めたまま、クリスターは顎に手をやって、しばし考えを巡らせるふりをした。

「ドクター・アイヴァース：僕が中学時代に世話になったカウンセラーだよ。有名な精神科医であり心理学者だった彼の著作を、僕は何冊も読んだし、心理学に興味を抱いて本格的に勉強し始めたのも彼の影響からだった。何だか懐かしいな」

「随分彼を好いていたような口ぶりだね」

意味ありげなジェームズの口調に、クリスターは焦燥感が次第に喉もとにせりあがってくるのを覚えたが、彼の胸倉を掴んで追究したい気持ちをぐっと堪えた。

「つまり君はアイヴァースと個人的にとっても親しかった。彼が不始末を起こして君の学校を追放同然に辞めてからどうなったのか、知りたいんじゃないかい？」

「そうだな…興味がないとは言わないが…」

ジェームズはクリスターの刺すように鋭い眼差しも気にせず、ティーカップの中に角砂糖を1つずつ落としこんでいる。

ひとつ、ふたつ、みつつ…おい、その辺りでやめろよと、甘いも

のの苦手なクリスターがとめたくなくなるくらいに甘みをつけた紅茶を一口すすって、ジェームズは満足そうに頷いた。

「アイヴアースはネブラスカ州のオマハに移り住んでいた。しばらく病院勤めをした後、自身のクリニックを開いて、それがなかなかの評判だったそうだよ。一度は挫折したものの、もともととはとても優秀な精神科医でありセラピストだ。仕事に対する情熱が戻れば再び成功することもそう難しくはなかった。恋人もいたようだし、なかなか充実した生活を送っていたのではないかな」

ジェームズの口からアイヴアースのその後について聞かされるのは複雑な気分だったが、昔の『恋人』であり恩師の再起を密かに願っていたクリスターにとって、本当ならばほっとできる知らせだった。

「13才の悩める子供だった君は、尊敬するドクターに自分の悩みを色々打ち明けて、救ってもらおうとしたそうだね。でも、結局君はアイヴアースが突きつけた真実を受け入れられず、彼の全てを拒否した」

ジェームズが砂糖壺を自分の方へさり気なく押しやるのを、クリスターは視線を逸らして無視する。

「双子の弟への許されない恋情について、君は思い悩んでいたんだ。アイヴアースは君をどうにか救ってやろうとしたものの、結局彼が果たした役割といえば、レイフに対する執着心の凄まじさを君に自覚させたことくらいだった。アイヴアースは、君のその後をとてども気にかけていたよ。成長して大人に近づくにつれ君の苦悩も深くなっていくだろうと、慧眼のドクターは当時から既に予想していたんだね。そして実際、大当たりだったわけだ」

「ジェームズ」

ついに忍耐の限界に達したクリスターは、忌々しげに口を開いた。

「でたらめを言うな」

「でたらめなはずがないだろう。だって僕はドクター・アイヴァー
スその人に会って、直接彼の口から君のことを聞いたんだから」

クリスターの双眸がずっと細く冷たくなった。

「それこそ大嘘だな。僕の知るドクター・デイビット・アイヴァー
スは本物のプロのセラピストだった。何があっても、君のような人
間に患者の秘密を漏らすことなどありえない」

ジェームズは白々とした目でクリスターを眺め、軽く肩をすくめ
た。

「君にそこまで信頼してもらっていると知ったら、アイヴァースは
さぞ喜んだろうな。彼は、できることなら君に再び会いたいと願っ
ていたようだよ。残念ながら、それはもう永遠に不可能になってし
まったけれどね」

「え？」

「アイヴァースは2年前に亡くなっているんだよ」

クリスターはしばし息をすることも忘れ、痛ましげに頭を振るジ
ェームズを呆然と眺めた。

「ジェームズ、まさか：まさか、おまえが：？」

すぐに思い至った恐ろしい可能性に、クリスターが呻くように呟いた途端、ジェームズは慌てて手を振り否定した。

「違う、違う、僕がアイヴァースを手にかけたなんてとんでもない誤解をしないでくれ。僕がアイヴァースの居場所を突き止めて会いに行った時、彼は病床に伏していたんだ。末期の肺ガンでね」

「そんな」

「僕は、アイヴァースの著作に感銘を受けた、心理学を学ぶ学生を装って彼に近づき、その信頼を勝ち取って何とか君に関する情報を引き出そうとしたけれどーああ、確かに君の言うとおり、彼は絶対口を割らなかった。それどころか僕に何か危険なものを感じ取ったようだ。自分の死期が近いことを知っていた彼は、過去に診た患者に関する個人情報全て処分するよう即座に手配したんだ。ただ、彼が特別思い入れのある1人の少年のケースについて記した原稿だけは、どうしても燃やしてしまうことはできなかった。その代わり、アイヴァースはその原稿を、モデルになった人物の手に渡らせようとした。だが、アイヴァースはそれらをまとめて送る前に力尽きて亡くなってしまった。そして、死後の整理を頼まれたアイヴァースの恋人は、残念ながら、脅しに屈しない強い意志など持ち合せてはいなかった」

クリスターはテーブルの上に無造作に置かれている封筒を凝然と見下ろした。

「そう、それは君をモデルに書かれたアイヴァースの遺稿なんだ。」

彼には別にそれを出版しようというつもりはなく、ただ自分のための記録として残そうとしていたようだけれどね。万が一にも君に迷惑がかからないよう、場所も人物の名前も変えている。もっとも読む人が読めば、このモデルは君だとすぐに分かってしまうけれどね」

「どおりで：！」

乾いた笑いを漏らすクリスターを、ジェームズは得体の知れぬ深い微笑をたたえた瞳で見守っている。

「他人が知るはずもない僕の事情や背景に君が異様に詳しかったり、まるで心を読むかのような心理分析をしたりするはずだ。こんな参考資料を隠し持っていたなんて、ずるいな」

「そう、邪魔者のドクターがいなくなった後は、僕はこの原稿を易々と手に入れ、じっくり読み込んで、君の心の深淵に潜むものを知るに至った。そこに描かれていた13才の少年には、とても親近感を覚えたよ、クリスター：君の苦悩は僕にはとてもよく理解できる。もしかしたら、僕になら：アイヴァースは結局失敗した、救いの手を君に差し伸べることもできるのではないかと思うくらいに――」

「だが、君の望みは、僕を救うことではなく壊すことなんだろう？」

クリスターが皮肉をこめて言い返すと、ジェームズは謎めいた表情をうかべ黙り込んだ。

「まあ、そういう訳でこの原稿をずっと手元に置いていたんだが、僕にはもう用のないものだし、本来これを持つべき君に返そうと思ったんだよ。実際僕は、そこに書かれていた内容ならば一字一句暗記してしまった」

ジェームズは封筒を取り上げ、クリスターの胸元にぐっと突きつけた。

「受け取りたまえ、クリスター、この原稿にはアイヴァースからの最後のメッセージがこめられている。彼はこれを君に託したがっていた。君の彼に対する感情は好意的なものばかりではないだろうが、少なくとも1人のプロとして君の抱えた問題に向き合いながらこれを書いた彼の姿勢は真摯なものだ。君はこれを読むべきなんだ」

いやに誠実そうな顔をするジェームズと突き出された封筒をしばし逡巡しながら見比べた後、クリスターは彼の手からためらいがちに封筒を取り上げた。

「一応もらってはおくが：僕がこれに目を通すと君は思うのか？」

ジェームズはこれをもとにしてクリスターを分析し、その弱点や癖などを研究して攻略にかかろうとしている。興味がないわけではないが、そういう観点に立ってこの原稿を読めば、どうしても、クリスターが書かれた内容に捕らわれてしまう。

「さあね。君が今はその気になれないのなら、いずれ読みたくなかった時に読めばいいんじゃないかな。アイヴァースはきつと待ってくれるさ」

飄々と捕らえどころのない口ぶりと言って、ジェームズはソファから立ち上がり、窓に向かって歩いていった。

屋敷の外に広がるブラック家の広大な敷地を眺めながら何事か考えているジェームズの背中を、クリスターは無言で睨みつけていた。

「すまないね」

ジェームズはクリスターに背中を向けたまま、気遣わしげな声で囁いた。

「アイヴァースの死の知らせも、僕を通じて彼の遺稿を手にしたことも、君にとってはショックだったり不愉快だったりしただろう。どうだい、気晴らしに一緒に外を散歩しないか、クリスター？」

ぬけぬけとよく言う。クリスターは膝の上に軽くのせていた拳にぐっと力をこめたが、それに対して応える声はまだ冷静さを保っていた。

「…そうだな」

大丈夫、予想外の事実を前に動揺したのは確かだが、取り乱すまではない。ジェームズと顔を突き合わせて話し合えば、これくらいの精神的ダメージは被るだろうと覚悟の上で、あえてここに乗り込んだのだ。

そう自分に言い聞かせるクリスターの脳裏をアイヴァースの懐かしい面影がふと掠めたが、彼はそれを無理矢理頭の片隅に追いやった。

（果たして、ジェームズは、今度はどんな手を使って僕を揺さぶるつもりなのか…毒を食らわば皿までだ、おまえの手の内を僕にもっと明かしてみろ）

体を半ばこちらに向け、瞬きもせずじっと自分の反応を窺ってい

るジェームズに、クリスターは無性に挑戦的な気分を駆られながら微笑みかけた。

「そう言えば、ここに着くまでに通り返してきた林も庭園も、とても素晴らしかった。君と2人、歩いてみるのも悪くないだろうね」

第5章深淵に潜むもの(3)

クリスターがジェームズと共に屋敷の外に出ると、そろそろ夕方に差し掛かったこの時刻、日差しはまだ強いが爽やかな風が吹いていた。

綺麗に刈り込まれた芝の上を2人はゆっくりと歩いていく。

広々とした丘の上では、数人の少年達がブーメラン投げをしていた。先程サロンで会った、物騒な雰囲気を漂わせていたグループのようだが、さんさんと降る陽光の下で弾んだ笑い声をあげながら遊んでいる様子は、普通の子供達とそう変わらない。

それを横目に、クリスターはジェームズの後ろについて、庭園の奥に広がる林の中に入っていく。

鳥のさえずりや羽ばたきが時折響き渡る、木立の間に作られた乗馬用の道を無言で進んでいくと、やがて、目の前に綺麗な水を湛えた大きな池が現れた。

池の前の空き地には、白やピンクの可憐な草花が咲いている。

クリスターは立ち止まって、ジェームズが何かに引き寄せられるように池に近づいていくのを眺めていた。

ジェームズは池の畔に佇み、ズボンのポケットから取り出した金色の小さな時計に触れながら、じっと物思いにふけている。そうすることが、ほとんど無意識の癖になっているようだ。

クリスターはふと、先程屋敷で見かけた幼い双子の写真を思い出した。あの階段を通る度、ためらいながらも、そこに存在することを確認せずにはいられなくなって何度も眺めてしまった、ジェームズと彼の失われた半身の姿。

ジェームズに共感してしまうのは危険だとクリスターは固く自分に言い聞かせてきたのだが、あんなものを目の当たりにすると、つい心がぐらつきそうになる。

「あ」

いきなり手を滑らせ、時計を地面に落としてしまったジェームズは、幾分慌ててそれを拾おうとするが、また取り落としてしまった。なぜか、手にうまく力が入らないようだ。ジェームズは強張りをほぐそうとするようにゆっくりと指を曲げ伸ばししている。

何かしら放心したように前日の雨のせいでぬかるんだ地面の上に落ちた愛用の懐中時計―彼の妹の骨が封じ込まれている―を見下ろしているジェームズの後ろ姿に、クリスターは次第に落ち着かない気分になってきた。

「ジェームズ」

クリスターは大股で歩み寄って足元に落ちている時計を拾い上げ、ジェームズの胸の前に無造作に差し出した。

「大事なものを、こんな場所に落とすなよ」

クリスターがしかめ面をしてたしなめると、ジェームズは驚いたように軽く目を見開き、ちよつと恥ずかしそうに微笑んだ。

「そうだね。ありがとう」

クリスターはジェームズの笑顔からとっさに目を逸らした。

「メアリはね、この池で溺れて死んだんだ」

何かしらはっとして、クリスターは目の前に広がる森閑とした深い池を眺めやった。

「当時のメアリは、鴨の親子を見に、よくこの池に来ていたんだ。子供達だけでは行かないように母にはきつく言い聞かせられていたんだけど、実際には、そんな言いつけなど守らないことが多かった。その時も、近くで雛達を見ようとして足を滑らせ池に落ちたというところのようだった。ただ本当のところは分からない。彼女の死体を最初に発見したのは僕だった。でも、彼女の死に関しては、頭の中に濃い霞がかかったように、僕は全く覚えていないんだ。片割れを急になくしたショックのせいで、僕は記憶だけでなく言葉さえも数ヶ月間失っていた。僕の治療には主治医のドクター・キャメロンと彼の仕事を手伝っていた精神科医のドクター・ワインスタインがあたった。ワインスタインの催眠療法のおかげで僕は再びしゃべれるようにはなったけれど、それでも妹の死の前後の記憶だけはきれいに抜け落ちている。たぶん、僕にとって思い出さない方がいいことだからだろうね」

クリスターは黙ってジェームズの言葉に耳を傾けながら、考えを巡らせていた。

ドクター・キャメロンは現在でもブラック家の主治医を務めている、ジェームズと関わりの深い人物だ。今、ダニエルが彼のクリニ

ックに潜入して、ブラック家の、ひいてはジェームズに関する、ある秘密を探り出そうとしている。

「君の妹の突然の死から、ブラック家にはしばらく不幸が続いたそうだね。すぐ後に君達の家庭教師が自殺し、君を治療したその精神科医も確か自動車事故にあって…」

「ああ、ワインスタインも亡くなった。僕の母もずっと後に神経衰弱が高じて自殺してしまったし：あんまり悪いことが続くものだから、周囲に変な噂をたてられて父も困っていたようだよ」

クリスターはふと眉を顰めた。ジェームズの今の言葉とクリスターが調査したことの間には僅かに差異がある。精神科医のワインスタインが事故に遭ったのは事実だが、かろうじて命は助かったはずだ。

「噂というのは、でも、あながち馬鹿にできない時もあるよ。君の周りには実際、常に不慮の事故や死や痛ましい事件に溢れているじゃないか、ジェームズ。子供の頃だけでなく、それは今も変わらない」

皮肉を込めて言うクリスターに、ジェームズは痛烈な揶揄で返した。

「そう言う君だって、同じようなものだろう？ 家族があんな事件に巻き込まれたただけでなく、ついこの間、君の友人達が不慮の事故に遭ったばかりだよ、クリスター」

瞬間クリスターの胸の奥で燃え上がった瞋恚の炎を感じ取ったかのように、ジェームズは素早く身を引いた。

2人は池の畔に立ったまま、しばし無言で睨みあった。

池の周りに生い茂る草や木々の梢を風が揺らし、ジェームズの柔らかなような金髪を撫でている。足元の水の中では、魚が水飛沫を上げて跳ねる音が聞こえた。

世界はこんなにも穏やかに見えるのに、相容れない敵同士である自分達だけが、そこから隔絶した存在であるかのようなのだ。

「君は、僕をどうしたいんだ？ 一体…僕にどうして欲しいんだ？」

クリスターが思わず率直な問いを投げかけると、ジェームズは何か言いたげに唇を動かした。しかし、すぐに気を変えたかのようにクリスターから目を逸らし、池の方に体を向けた。

「ジェームズ」

ジェームズは黙然として答えず、池の中をじっと覗き込んでいる。

クリスターはジェームズの隣に立って、彼が何をそれほど熱心に見ているのか確かめようとしたが、明るい光の踊る水面にはぼやけた自分達の影が映るばかりだ。

「僕は昔からちょっと変わっていたんだ」と、ジェームズが静かな声で語りだした。

「普通の子じゃないと、母は小さな頃から僕を毛嫌いしていた。僕自身も、自分が周りにいる他の人達とどこか違うということとは早くから感じ取っていた。1人だけ違う星から来て偶然ここに迷い込んでしまったかのような疎外感にいつも付きまとわれていたけれど、

周りにうまく合わせて溶け込む努力は怠らなかったよ。おかげで友達はできたし、母以外の大人達からも可愛がってもらった。でも、僕は誰のことも本当に好きなわけではなかったし、他人になど何の興味も関心もなかった。僕の仲間はメアリだけだった」

「君の妹も：『普通』の子供ではなかったのかい？」

「いや、メアリは僕と違って、ここにちゃんと居場所を持っていた。友達のこと好きだったし、彼らに共感することもできた。一方で僕の疎外感も理解していたから、僕が寂しがらないように傍にいて、僕とこの世界の橋渡しになろうとしてくれたんだ。だから、メア리를亡くすことによって、僕は这个世界との接点も完全に失ってしまった：何だか糸が切れた風にでもなったような気分だったよ」

ジェームズの手はまたポケットの中の時計を神経質に探っている。

「僕はこの先死ぬまで独りだと自覚した途端、何だか自分を歪めてまで周りに合わせようとするのが急に馬鹿らしく思えてきた。もう、いい。僕は彼らに何の期待もしない。僕の人生だ、好きなように生きて何が悪い。そう割り切った途端、急に心が軽く、晴れわたったような気がしたよ。確かにメアリの死は辛かったけれど、おかげで僕の魂は解放されたんだ。僕はもう何も恐くない：いいものだよ、自由は」

ジェームズは両腕を大きく軽く広げて、清々したというように微笑んだ。

「何だか君は、妹の事を大切な片割れだと言っておきながら、一方でその死を歓迎しているかのようだな」

ジェームズの態度に不快感を覚えたクリスターの口調は固い。

「結果として、僕のためにはよかったのかもしれないというだけの話だよ。もったも、いいことばかりではなかったけれどね。どうせ僕と分かり合える人間などいるはずがないと割り切って付き合っていて、そうなるをやっぱり退屈でつまらないんだ、毎日が：学校でも、社交界でも、気晴らしに通い始めた夜の街でも：会う人間会う人間、簡単に底が見えてしまつて、僕を倦ませる。そろそろ本気で生きることになんざりし始めていたんだ。君を見つけるまではね、クリスター」

ジェームズの矛先がまた自分に回ってきたことを感じて、クリスターは気持ちを引き締める。

「自分の望むままに生きてきたつもりでも、僕はこれまでの人生で、どんな満足も幸せも得られはしなかった。一体僕は何のための生きているのだろう。退屈しのぎの悪戯やゲームで時間を費やしてきただけで、僕の心はいつも空っぽのまま、満たされたことなど一度もない：死ぬまで、こうなのか：嫌だ！」

いきなり激しい焦燥感に駆られたかのように、ジェームズは叫んだ。

そのまましばし、ジェームズは放心したような眼差しを周囲に彷徨わせていたが、やがてクリスターに辿りつくや急にまた生き生きとしてきた。

「独りでいることにもすっかり慣れたと思っていたのに：僕は結局、なくしてしまった自分の半分を無意識にずっと探してきただけのよくな気がする：メアリが欠け落ちた部分にぴたりとあてはまってくれる誰かを――そう、クリスター、君は僕の理想の相棒に限りなく近

いんだ」

全身の血が逆流するかのような嫌悪感に、クリスターは鼻をしわめ、歯を剥いて、吼えるように応えた。

「生憎だな、ジェームズ。僕は、僕だ。君の死んだ片割れの身代わりになどなれるものか」

「今はそんなことを言っている君だって……唯一無二の相棒を失えば、自分の胸にぽっかりと開いた空虚を満たしてくれる、他の何かを求めてさ迷うことになるんだよ。もしかしたら、その時にこそ、僕達は本当に分かりあえるのかもしれないね。クリスター、もしも君が本当にレイフを諦めるつもりなら、自分の半分をなくしたもの同士、僕達はきつといい一対になれるはずだと思うけれどね」

「僕にも選ぶ権利はある」

「もしも君が僕のものになってくれたら、僕は君の家族や友人達にこれ以上危害は加えないと約束する。そして、君が他の何にも増して守ろうとしているレイフからも永遠に手を引く」

とっさに言い返せなくなって黙り込むクリスターに、ジェームズは悪魔のような甘い声で更に言い募った。

「クリスター、君さえよかったら、このままここに残って僕と一緒に暮らさないか？」

石と化したかのように立ち尽くしているクリスターの肩にジェームズの手がかかり、全てを飲み込もうとする貪欲な闇を秘めた双眸がクリスターの見開かれた目を捉えようと迫ってくる。

そして――。

「断る」

鋼を思わせる、びんと響く声が、クリスターの口から放たれた。

「僕は、何があろうと決して君のものになどならない。それだけは、死んでもごめんだな」

一片の迷いも共感もない冷然とした態度で、彼はジェームズの手を払いのけ、その体を池の方にぐっと押し返した。ジェームズは池の縁で足を踏み外しかけ、軽くよろめいたが、その目は執拗にクリスターの冷たい顔にあてられている。

「何があろうと決して、か」

体勢を立て直したジェームズは、胸に手をあてながら、感に堪えないといった口調で囁いた。

「ああ、それでこそ君だよ、僕の愛するクリスター」

ジェームズの白面に、実に愉快で満足そうな笑みが広がる。

（この……！）

遊ばれたと気づいた瞬間、憎悪の奔流がクリスターの胸の奥から迸り、体の隅々まで流れていった。

「僕がこう答えるだろうと初めから分かっていたくせに……あえて言

わせたな…！」

芝居がかったジェームズのやり方に辟易しながら、クリスターは吐き捨てるように言い返した。

「あはは、ごめんよ、君との会話自体が僕には楽しくてならないものだから、つい回りくどくなってしまおう。でも、君の方にも、僕の答えなど分かっているくせに、どうしても言っておきたい一言があるんだろう？　せっかくだから、言ってしまうよ、もしかしたら僕の気持ちを変えられるかもしれないし？」

クリスターは、悔しげに唇を噛み締めた。

「僕のことはいい…だが、僕の愛する人達にはもう手出しはするな、ジェームズ」

「さあ、どうしようかな…残念ながら、その件についての交渉は既に決裂している。君が今、僕の妥協案を断ったことによってね」

「そう返すと思ったよ」

「うん、だからね、後はやっぱり、僕達のゲームで決着をつけるしかないよね」

浮き浮きとした声で告げるジェームズは、大好きな遊びに夢中になっている無邪気な子供のような顔をしていた。

それを、煮えたぎるような気持ちで眺めながら、クリスターは密かに思った。

（ジェームズは、僕達はよく似ていて、その気になればいい相棒になれると言った。しかし、僕達が分かり合えるのはお互いを陥れ、食い合おうとする、こんな殺伐としたゲームを通じてのみだ。それさえも一種の魂の交感なのだとジェームズには感じられるのだろうか。吐き気がする：ジェームズの狂気にも、当たり前のように、そんな彼に対応している自分にも―）

クリスターは、身の内で、今にも爆発せんばかりに膨れ上がってくる激情を必死で押さえ込もうとしていた。しかし―。

「クリスター」

愛しげに自分に呼びかける、ジェームズの声を作る音のひとつひとつに肌が粟立つ。

（僕にだって、どうしても我慢しきれない、許せないものがある。感情をさらけだすのは得策でないと分かっているけど、こいつだけは、どうしても無視しきれない）

じつとりと汗ばんだ掌の内に、クリスターは何かを掴みしめ、押しつぶそうとした。

（そうだ、僕は、こんなにも他人を憎んだことなどない。こいつの発する悪魔のような一言一言が、僕の神経を逆撫でしてくる：いっそ、こいつの喉を握り潰してでも黙らせてやりたいほど、僕は―）

そんなにも憎いなら、いっそ殺してしまえばいい！ クリスターの中に巢食う凶暴な獣がそう叫ぶ。

クリスターは、がんがんと鳴り響き、激しく痛みだす頭を手で押

さえた。

そんなクリスターを見守るジェームズの双眸が妖しく細められる。

「君は今、僕を殺したいほど憎悪しているね。嬉しいことだよ、クリスター、そんなにも強い感情を君が僕に向けてくれるなんてね。あんまり心地よくて、つい、君になら殺されてやってもいいかなと思ってしまうそうだ」

一体何を考えているのか、ジェームズは陶然と目を閉じて、爆発寸前のクリスターに両手を差し伸べながら誘うようにそっと喉を反らせた。

（この…何て奴だ…！）

挑発だとは分かっていたが、ここに至って、クリスターは自分をもはや制御しきれなくなった。

正常な判断を狂わせるもとだと、ここに乗り込むにあたって退けてきた記憶、何を見聞きしても揺るがぬよう押さえつけてきた感情が一気に弾け、激しい波となってクリスターに押し寄せてくる。

（こんな奴の口からいきなりアイヴァースの死を聞かされるなんて…あの原稿は、僕のために彼が残してくれたものなのに、それを勝手に盗み読んで、僕の全てを知った気になっている…許せるものか）

一端堰を切って溢れ出した熱い感情のうねりの前には、それを堪えきとめようとする理性や知性の力など何の役にもたたない。クリスターはもはやなす術もなく、押し流されるしかなかった。

（あの閉めきった暗い部屋の壁一面に張られていた写真：ああ、アイザック、君はどこに行った：今も無事でいるのか？）

行方知れずの友への思いに心が締め付けられた後は、愛する家族を襲った辛い出来事が、クリスターの脳裏にフラッシュ・バックのようにうかびあがっては消えていった。

（死んでしまった小さな命：母さんも父さんも深く傷ついて悲しんでいる：そして、レイフ―なあ、死んじゃったあかちゃんって、結局どっちだったのかなあ―そうだ、レイフは泣いていた：もっと早くに僕がジェームズの存在に気づいていれば防げたかもしれないのに、母さんも僕達のきょうだいも守れなかった：）

クリスターの中で、ふつふつと煮えたぎる泡の中で生まれた怒りがやがて純粋な殺意にまで昇華されていくのを見透かすかのように、ジェームズは楽しげに囁きかけた。

「あ、君の瞳の色が今変わったよ、クリスター。攻撃行動に出ようとする時の虎の目のような金色に輝いて、ぞくぞくするくらいに綺麗だ。ねえ、知っていたかい、君は元来とても感情的な人間だってこと？ クールぶってはいるけれど、本当はすごく激情家で、一端感情の堰が切れるとどめることができず、行き着くところまで行ってしまう。そんな自分が恐いから、常に抑制しようとするんだろ？」

クリスターは、唇の端を僅かにあげながら悠然としゃべり続けるジェームズの唇を見、シャツの間から覗くすっきりとした白い喉を見た。

（この距離ならジェームズに逃げる暇も与えずに飛び掛って、その首をへし折ることくらい容易いな）

熱くなっているくせに妙に芯の冷めた頭で、クリスターは想像した。

「僕は今でも忘れられないよ。君が銃を片手にここに乗り込んできた夜のことを……今にも火を噴きそうな目で僕を睨みつけながら自分の頭に銃口を突きつけて、ためらいもなく引き金を引いた。毘だということは僕も薄々感じ取っていたんだ。でも、どうしても……命がけのゲームに僕を引き込もうとする君を拒めなかった。僕はとても興奮していたし、それにたぶん生まれて初めての恐怖を他人に対して覚えた。だってね、君は……あの時、僕を殺してもいいと半ば本気で思っていたんだ。銃に細工をしていたんだって？　だから、君には何発目で弾が出るか予め分かっていた。僕の番でそうなるはずだったんだろう？　僕が途中で降りたからいいようなものの、もし僕が降りなかったら……君は果たして僕が自分の頭を撃ちぬくのをとめたであろうか？　いや、とめなかっただろうと思うよ。だって僕は、あの時の君の瞳を間近で覗きこんだんだ。僕の頭蓋が砕けて脳漿が飛び散る瞬間を待ちわびて、凄まじい殺気を放っていた。今の君は、それと同じ目で僕を睨みつけている。隠すことなどない、そう、一度くらい自分に正直になれば、クリスター……僕を殺したいんだろ？」

なぜ、こうまでして自分を煽ろうとするのか——そんな疑問が一瞬クリスターの脳裏に浮かんだが、突き上げてくる破壊衝動の前に雲散霧消した。

ほとんど意識もせず、腕に、脚にぐっと力が蓄えられるのをクリスターは感じた。すっと上げられた右手が、凶器と化して、吸い寄せられるようにジェームズの喉笛に伸びていこうとする。

（駄目だ、やめろ！）

自分の理性の叫びを空しく聞いた、その刹那、クリスターの耳は、空気を切り裂く異様な音が後方から迫ってくるのを捉えた。

「！」

反射的に体をずらして危険を回避したクリスターのすぐ脇を、物凄い勢いで飛来した物体が掠めた。それは旋回しながら、池の上で大きなカーブを描いて再び戻ってきたかと思うと池の傍の茂みの中に突っ込んだ。衝撃音と共に、断ち切られた小枝や草の葉が飛び散る。

ふいを突かれたクリスターは喫驚したが、その目はしっかりと今見たものの正体を捉えていた。

「ダミアン」

ジェームズがたしなめるような声音で呼びかけた先を振り返ると、1人の小柄な少年が木の陰からひよいと姿を現した。

「悪戯が過ぎるな。僕の大切な客人に向かって、なんてことをするんだ」

ジェームズに叱られた少年は不服そうにちよつと唇をすぼめた。そうして、先程茂みの中に墜落した飛行物体―競技用の大きなブーメランを拾いあげ、池の畔に立っていたジェームズのもとにまろび寄ってきた。

「こら、お客様にちゃんと挨拶をして、それから今の非礼を詫びるんだ」

少年はジェームズの背中に取り付いて、どうしようかと迷うようにじっとクリスターを窺い見た。

突然の新手の乱入のおかげですっかり正気を取り戻したクリスターは、つい興味を引かれて、しげしげと少年を観察した。

背格好がダニエルに少し似ているが、年は彼よりもっと下かもしれない。

銀というよりほとんど白に近い髪は、前髪の一房に紅いメッシュが入っている。肌の色も異様に白い所を見ると色素欠乏症なのかもしれない。人形のように整った顔立ちの中で印象的なのが、生き物の目というよりも鉱物めいた無機質な光を放つ、鮮やかな緑色の瞳だ。

先程丘の上でブーメラン遊びをしていたグループの1人だろう。クリスターとジェームズが2人で歩いていくのを見咎めて、後をつけてきたのか。

「ごめんなさい」

少女のように甲高い声で少年はクリスターに言ったが、こんなふうにじっと身構えられては、少しも謝られている気がしなかった。

「でもさ、何だか、あんたがJに襲い掛かろうとしているように見えたから」

クリスターの頬が僅かに引きつった。

確かに、その通りだった。怒りのあまり、危うく我を忘れそうになっていた。この少年が止めなければ、クリスターは本当にジェームズを傷つけていたかもしれない。

「僕からも謝るよ、クリスター。怪我がなくて何よりだった」

故意にクリスターを煽っておきながら、ジェームズは何事もなかったかのような和やかさで続けた。

「この子は、ダミアン・ハート。僕の友人の弟でね、色々事情があって、今は僕が預かっているんだ」

「ハート？」

聞き覚えがある名前だったので、クリスターはつい聞きなおした。

そうだ、ジェームズが関わっていたストリート・ギャングのボスがそういう名前の青年だったはずだ。麻薬の売買、武器の不法所持、殺人の容疑で逮捕され、今は刑務所に収監されている。

（そいつの弟か）

ジェームズの陰にじっと隠れている少年のまだ幼さの残る顔を、そこに自分に対する恨みはないかと探るようにクリスターは見てしまった。

「ねえ、J、そろそろ屋敷に戻ろうよ。あんまり長く姿を見せない

と、フレイだって心配するよ」

ダミアンはクリスターよりジェームズの方が気になるらしく、彼の服の裾を軽く引っ張りながら、甘えた声で訴えかけている。

「…そうだね」

何とも子供じみた少年の仕草に警戒心を緩めかけたクリスターだが、その時、自分を見やった鮮やかな緑色の瞳の奥に閃いた残酷な光に、はっと息を飲んだ。

「この人のことは、結局、どうするの？　今、ここで始末をつける？」

一瞬耳を疑うような恐ろしい台詞を、あどけない顔をした少年はさらりと言って、ジェームズの指示を待つかのように首を傾げた。

「ダミアン」

ジェームズは少年の不調法をたしなめるかのように顔をしかめ、それから、改めてクリスターに向き直った。

「君をどうするか…確かに、せっかく僕の手の中に飛び込んできてくれたものを、このまま何もせずに返すのは惜しいかな」

クリスターは一瞬、ジェームズの見開かれた瞳の中に広がる暗黒に引き寄せられ呑み込まれてしまいそうな感覚に襲われた。

無傷ではここを出られないかもしれないとクリスターは半ば覚悟を決めたが、意外なことに、ジェームズはあっさり引き下がった。

「本当は君を離したくはないけれど、でも：そうだな、今日の所は帰れたまえ、クリスター。屋敷にはもう戻らない方がいいだろう：僕はともかく君を快く思っていない他の連中が何かしでかさないと限らないからね。このまま林を抜けてまっすぐ駐車場に行くんだ。アイヴァースの残した原稿は、僕がロバートに頼んで、すぐに君のもとに持って行かせるから」

クリスターは当惑しながらジェームズの親切そうな申し出を聞いていた。

「よかったね、あんた、命拾いしたよ」

ジェームズの腕に自分の細い腕を巻きつけながら、ダミアンがチエシャー猫のように笑った。

「ジェームズ」

まだ納得しきれしていないクリスターが呼びかけるのに、ジェームズはくるりと背中を向けた。

その時、以前に比べて彼がかなり痩せていることにクリスターは改めて気がついた。細い首、骨ばった手。その華奢な肩がゆっくりと上下するのを、今初めて見るかのような不思議な気持ちで見守った。

「いいから、帰れ。僕も今日は興奮しすぎて疲れてしまったし、君にも心の整理をする時間が少しばかり必要だろう：焦って今決着をつけようとしなくても、どうせ、すぐにまた僕達は対峙することになるんだ」

「では、次に会う時が君の最後だな、ジェームズ。こんな不毛な闘いはさっさと終わらせて、今度こそ君との因縁を断ち切ってやる」

ジェームズはしばし黙り込んだ。

「確かに、僕も…これ以上君との勝負を長引かせることはできないだろうな。終わらせてしまうのは惜しいけれど、人生のうちの楽しい時間は、いつだってとても短いものらしいから」

その声はふいに弱々しくかすれて、ジェームズが本当に疲れきっているのが感じられた。

ダミアンが、支えようとするかのようにジェームズの体に手を回す。

（クリスターさん、あなたが以前気にしていた、ブラック家の血にまつわる謎というのがありましたよね…？）

そんな2人の様子を眺めながら、クリスターは、いつだったか、ダニエルが熱心にかき口説いていた言葉を思い出していた。

（うまくいけば、Jの弱点が分かるかもしれない。あなたが以前推理したことが、もし当たっていれば―あなたは彼に対して圧倒的な優位に立てる。たぶん、この先二度とJ・Bの影に脅かされずにすむ…）

クリスターが口を開こうとすると、それより先にジェームズが別れを告げた。

「近いうちにまた会おう、クリスター」

「ああ、ジェームズ」

ジェームズがそのまま後ろを振り返ることなく、白い髪の少年に伴われて屋敷の方に向かって歩き出すのをクリスターはその場で見送った。

クリスターがジェームズ・ブラックとこんなふう直接会って話をしたのは、およそ1年半ぶりのことだった。

年月は人を変える。ジェームズも昔のままの彼ではないということだろうか。

内面から滲み出る禍々しさは以前と同じ、もしかしたら一層強烈なものになって、クリスターを翻弄した。だが、それに反して、肉体的にはむしろ脆弱さが目立つ。

（あいつが僕に弱みを見せるまいと無理をしていたとすれば、余計に消耗して、後でどっと疲れが出るのも当然だが…）

ゆっくりとした足取りで林の中の乗馬道を歩いていくジェームズの後ろ姿を冷静な観察者の眼差しでしばし探ってみた後、諦めたように頭を振ると、クリスターもまた池を後にし、車をとめてある駐車場を目指して歩きだした。

（どうやら本当に、このまま無事に帰してもらえようだ）

ジェームズと別れてしばらく歩いた所で、クリスターはやっと肩の力を抜いた。たちまち、ひどい疲れを意識する。消耗したのはお

互い様だったのかもしれない。

（それにしても、我ながら思い切ったことをしたな…後でダニエルに聞かせたら、何て無茶をしたんだと涙ながらに叱られそうだ）

駐車場でしばらく待っていると約束どおりロバートが現れたので、アイヴァースの遺稿を受け取り、クリスターはそのまま屋敷を後にした。

ジェームズが最後に何か仕掛けてくるという危惧も少しはあったが、結局、何も起こらなかった。

つまり、クリスターとジェームズが本当の決着をつけるのは、次回に持ち越しということだ。

疲れた目を傷めない程度に照明を落としたリビング。ステレオからは心を落ち着かせるピアノ曲の旋律が流れている。

「…本当に、あいつをあのまま帰してしまってよかったのかよ、J」

皮張りの大きなカウチに身を横たえて静かに目を閉じているジェームズに、その傍に寄り添うよう、床にぺたんと座り込んでいるダミアンが緑の瞳を妖しくくるめかせながら問いかけた。

「そうだねえ。今思うと、惜しかったかな」

ジェームズは少年の柔らかな髪をぼんやりと手で撫でてやりながら、うつらうつらしていた。この頃彼は非常に疲れやすくなっており、今日のようにとても興奮する出来事があった日の終わりには、心身ともにぐったりしてしまうのだ。

「でも、それではやっぱり面白くないと思うんだ。クリスターを精神的にもっと追い込んでやるような舞台と仕掛けが……まだ足りないから――」

「いつになく慎重だね。やっぱり一度失敗して返り討ちにあった相手だから、今度はなんとしても勝ちたいって訳？　もっともあんたの勝ち負けの基準って、オレにはよく分らないんだけれどさ。憎い敵だっていうなら、オレなら、さっさとこの世から消しちゃうけど」

「別に僕は、クリスターを憎んではいないからね。むしろ、自分の一部であるかのように愛しているんだよ」

ダミアンは解き明かせない難題を突きつけられたようにちよつと悩ましげに眉をひそめたが、すぐに考えることを放棄したようだ。床の上に広げたマンガ本に目を落としながら、チョコレートを口に運んだ。

すると、誰かが部屋の扉をノックして、ジェームズの応えも待た

ず、慌てた様子で中に入ってきた。

「あいつが来ていたのか？」

部屋に入ってくるなり何の前置きもなく開口一番にそう尋ねてくる相手に、ジェームズは目を瞑ったまま苦笑した。

「残念だったね。もう少し早くここに戻っていたら、あんたも、あいつに会えたらうに」

ダミアンがからかうように声をかけると、彼は明らかに怯んだようだ。

「あいつ、あんたを探して、ここまで乗り込んできたんじゃないのかなあ。何の説明もなくいきなり姿を消したものだから、すごく心配してるんだよ、きっと」

くつくつと喉の奥で笑うダミアンの声は耳障りで、せつかくの美しい音楽を損なってしまうなど、ジェームズは少し苛立ちをこめて白い髪の一房を指先で引っ張ってやった。

「きゃっ、何すんだよ」

ダミアンが大げさな悲鳴をあげる。

「あまり彼を苛めるものじゃないよ、ダミアン、可哀想じゃないか。僕達に関わったがために、なかなか辛い立場に立たされてしまったんだからね」

同情的な台詞が我ながら白々しかったが、自分の手の内にある限

り、彼のことは大切にしておこうとジェームズは思う。

（だって、クリスターを追いつめるための、これもなかなか役に立つ道具のひとつだからね。せっかく手に入れたのだから、せいぜい有効活用させてもらおう。それにしてもクリスターは、あれだけ圧倒的なカリスマを備えているくせに、案外人心を掌握して使うことが下手だな。でも、まあ、キリストだって最後には身近に侍っていた人間に裏切られて死んだ訳だし、放つ光があまり強すぎると、それによってできる影もまた濃くなるもの……心を許した相手に、そうとは知らないうちに裏切られて、足をすくわれることになるんだよ）

ジェームズはゆっくりとカウチから身を起こし、あくびを噛み殺しながら、強張った肩を手で揉み解した。

（クリスターはこのことに勘付いただろうか？ おそらくもう気づいているだろうな。あの部屋を見つけておきながら、僕に何も聞いてこなかったことから、そう推測できる。ふふ、意地っ張りめ……本当は僕を締め上げてでも白状させたかったくせに……それとも、こんな残酷な真相を目の前に突きつけられるのが恐かったのかな）

ジェームズは漏れそうになる笑いをあくびでごまかし、首だけを動かして、扉の前に青ざめた顔で立ち尽くしている痩身の青年に向けて、親しげに笑いかけた。熱のせいで微かに潤んだ瞳には、あからさまな侮蔑の色がある。

「お帰り、アイザック」

裏切り者のユダー。

第5章深淵に潜むもの（4）

ジェームズの屋敷を訪れた数日後、クリスターは学校近くのカフェでダニエルと会っていた。

「一体、どうしてそんな無茶をしたんです！ Jのアジトにたった1人で乗り込むなんて、無謀すぎます」

やはり黙っている訳にはいかないとクリスターが打ち明けた途端、案の定、ダニエルは顔を真っ赤にして、涙目になりながら怒り出した。

そんな彼を、クリスターは苦笑を含んだ目で見ている。

「人が真剣に話しているのに、何がそんなに面白いんですか」

「すまない、ついー」

ダニエルが細い眉を吊り上げるのに、クリスターはさすがに神妙な顔をした。「大体、あんな広い敷地の中じゃ、何が起こったって外部には分かりようがない：Jの仲間だって大勢いたっていうじゃないですか。無事で帰れたからいいようなものの、Jがその気になっていたら、あなただってアイザックみたいに今頃行方不明ってことになっていたかもしれないですよ」

興奮したダニエルがうっかり口を滑らせると、クリスターは微かに頬を強張らせた。

それに気がついたダニエルは、はっとなって口をつぐむ。

「すみません、クリスターさん：言い過ぎました」

「いや、いいんだよ、ダニエル。君が僕に腹を立てるのはもったなし：それに、アイザックが今も尚消息不明だという現実も：辛くても、僕らは直視しなければならぬ」

アイザック。夏休みに入る前までは、こんなふうなちょっとした作戦会議をする時は必ず一緒にいた友人の顔を、2人はしみじみと思いついていた。

つい独断で行動してしまうクリスターを、アイザックがいれば、制止できていただろうか。

「アイザックが今どこでどうしているか、その手がかりはJの屋敷では見つからなかったんですか？」

束の間漂った気まずさを払いのけるように、ダニエルは氣遣わしげに聞いてくる。

「：アイザックが撮ったものらしい写真が何枚か見つかった。どういう手段でJがあんなものを手に入れたかは、気になるところだけど――」

あの閉めきった光の差さない部屋の至る所に張られていた尋常でない数の写真を思い出して、クリスターは体中の血がひやりと冷たくなるような気がした。

「だが、それだけだ。直接アイザックの行方につながる手がかりのようなものではなかった」

「そうですか」

ダニエルは、残念そうにかわいらしい顔を歪める。

クリスターに対しては、言っても詮のないことを悪戯に繰り返して騒ぎ立てたりはしないが、彼もまたアイザックの身を案じていることに変わりはない。

（だからこそ、僕が推論していることは僕の胸にだけ秘めておこう。確たる証拠もないのに、この子をこれ以上心配させるは気が進まないからね。僕だって、本当はこんな最悪の可能性なんて考えるのも嫌だ：アイザックは僕達を裏切ってジェームズの側についたのかもしれないなんて――）

クリスターは胸の内の煩悶をダニエルには気付かせまいと用心しながら、あの屋敷での出来事を思い起こしていた。

（あそこに行けば、ひょっとしたらアイザックが見つかるかもしれないとは：僕も確かに思った。結局アイザックには会えなかったわけだが：それについては安堵と落胆とが半々の複雑な気分だな。あの時思い切ってジェームズを問い詰めるべきだったのかもしれない：アイザックをどこへやった、一体彼に何をしたのか――だが、そうしていれば：もし本当にジェームズがアイザックを押さえていた場合、僕はいきなり窮地に立たされていただろう。アイザックを盾に取られれば、ジェームズの脅しや要求を拒否しきれなくなるかもしれない：それとも僕は、必要ならば、大切な友人さえも冷酷に見捨てていたのだろうか：？）

所詮クリスターも自分と同類なのだ、それ見たことかと笑うジェ

ームズの顔が、脳裏に白く閃く。

クリスターは、ダニエルには見えないテーブルの下で、指先を食い込ませるように自分の脚を掴みしめた。

「アイザックのお父さんは、何か言ってきたいるんですか？」

レモネードの中の氷をストローでつつきながら、半ば物思いに沈みこんだ表情で、ダニエルが問うてくる。

「うん。ウォルターとは昨日ちょっと電話で話をしたんだけど、近いうちにボストンにやって来るそうだよ。もうこれ以上頼りない警察なんかに任せておけない、長期の休暇が取れそうだから、こっちにアパートを借りて、自分の足でアイザックを探し出してやるって息巻いていたよ。さすがに、若い頃紛争地域で命がけの取材をやっていた人は強いね」

息子そっくりな顔をした、しかし、もっと精力的で豪胆な男を思い出し、クリスターはふと口元をほころばせた。

ウォルター・ストーンとは、アイザックが消息不明となった時点で、クリスターは一度会っている。

彼の顔を見た途端、あやふやな説明でごまかせる相手ではないと悟ったクリスターは、腹を括って、コリン達が巻き込まれた不審な事故から、アイザックも含め自分達全員がJ・Bの恨みを買っていること、それについては全面的に自分の責任であることまで打ち明けた。

するとウォルターは、息子を拉致されたかもしれない父親にして

は見事なほど冷静な態度を崩さず、鋭い質問を投げかけてクリスタ―を追及し、彼とジェームズの根の深い確執にまで及ぶ長い話を聞き出した後、しばらく考えを巡らせると

「大まかな状況は分かった。君が俺のたった一人の息子をとんでもなく厄介な事件を巻き込んでくれたことについては、今更責めても仕方のないことだから、この際水に流そう。それに、アイザック自身が進んで、そのJって悪党と戦うと決めたのだしな。確かに、あいつならそうするだろうさ」

と、過去の経緯については、短くコメントしただけで、それ以上触れようとしなかった。

「だが、今現在息子が置かれている状況は、俺としても全く腑に落ちないだけに、どうにも気に食わん。親友のコリンが事故に遭ってすぐ、誰に何の説明もなくいきなり姿を消すなんて：一体、どんな事情があるのか――」

ウォルターのもとには、アイザックが姿を消した後、一度彼から連絡が入っていたらしい。その時の受け答えに違和感を覚えたものの、まさかアイザックが何事か重大なトラブルに巻き込まれているとまでは分からなかったので、追求することなく、そのまま電話を切ってしまった。

その後クリスタ―からの連絡を受けたウォルターは、すぐに西海岸からボストンまで飛んで、その足ですぐに警察に向かったのだが、誘拐事件の可能性があると訴えても、まともに取り合ってはもらえなかった。

アイザック本人から家に電話があったのなら、単なる家出だろう

と受け取られたのだ。

それにもへこたれずに、ウォルターは自分のつてやコネを使って警察をせっつき、独自にアイザックの捜索を続けていたが、いつまでたっても埒が明かないので、ついにロサンゼルス新聞社の仕事を放り出して、事件の片がつくまでこちらに拠点を移すことにしたので。

（僕が昨日話した：ジェームズの屋敷で見つかった、アイザックの写真のことをウォルターはどう考えたんだろう。彼がボストンに着いたら、これからのことも含めて話し合わなければならぬ。コリンとミシエルの事故の件も、彼は自分で調査していたらしいし、何か新しく分かったことがあれば聞いておきたい。それに、彼がボストンにとどまって本格的に動くつもりなら、サウスボストン署のケンパー警部を紹介してもいい：彼ならきつと力になってくれるだろう）

ジェームズ・ブラックの前回の逮捕時に知り合い、今また何かと世話になっている刑事のことをクリスターは考える。

相変わらずケンパー警部は、クリスター達未成年者が犯罪に巻き込まれかねない冒険をすることを奨励しないが、コリンの事故とアイザックの失踪以来、クリスターにまで何かあつてはと心配し、気がかりな情報があれば教えてくれる。

保護観察期間中の要注意人物とはいえ、何も問題を起こしていないジェームズに対して、警察が動くことはもちろんできない。

しかし、先日起こった、ある事件のために、ケンパー警部は再びジェームズ・ブラックの身边を捜査し始めていた。

それはただの偶然であつたのかもしれないし、ジェームズという悪が野にとり放たれば、必然として起こったことかもしれない。

いずれにしろ、ジェームズの弱みを掴みたいクリスターにとって、それは有用な情報だった。

「それで…Jの父親の方はどうだったんです？ 本当に、ドクター・キャメロンのカルテにあるような半身不随の状態になっていたんですか、それとも…」

ダニエルが声を低めて問うのに、クリスターは我に返った。

「ああ…残念ながら、ゴードン・ブラック氏とも会えなかった。彼の寝室だと目星をつけた部屋にもぐりこんでみたんだが、どうやら間違えてしまったようだね。ただ…あの屋敷のどこかに、話に聞くような介護を必要とする病人がいるという印象はあまりなかったな。もっとも、あんなに広い屋敷だから、奥まった場所に移されていたら、人の気配なんて分からないだろうけれどね。ただジェームズのあまり素行のよくない友人達が自由に振る舞っていたことから推測するに、やはり今のゴードン氏は心身ともに全くの無力状態なんだろう」

ダニエルがきらりとした眼差しで言った。

「それは…あの噂が本当で、もしかしたらゴードン・ブラックは今生きているかも怪しいということでは…？」

「そこまでは言い切れないよ。ジェームズにとってはたぶん、一線を退いたとはいえ、地元の名士であり有力者の父親は生きている方

が何かと都合がいいはずだから――」

クリスターがジェームズの屋敷に入り込んだ直接的な理由は、実は、彼の父親に接触を試みることだった。

世間に全く姿を見せなくなり、友人達や親戚でさえ連絡を取れなくなったゴードン・ブラックについて、近頃では、実はもう亡くなっているのではという気味の悪い噂が囁かれるようになっていた。

それだけならばまだしも、更に、ゴードンに近い人間達が、ごく最近続けざまに失踪していた。ゴードンの愛人だった女とその情夫だ。

（この女がまた食わせものでね。父が倒れ、別れ話が出た途端、態度を豹変させて、慰謝料を払えだの訴えるだの――病身の父に負担をかけるのは忍びないからと僕が対応したんだけれど……やっとその女の納得する額の手切れ金を渡して街から追い出すまでは、さすがの僕でさえ辟易させられたよ）

世間話をするようなのどかな声の裏に冷ややかなものを感じさせる口調でジェームズが話していたことを、クリスターは思い出す。

ジェームズがあえて話題にしたのは、クリスターの疑惑を薄々感じ取っていたからか。

あの時のジェームズは自分の身边に警察の捜査が及んでいる気ぶりも見せなかったが、一度はケンパー警部が彼を訪ねているはずだ。

（別に今のところ、ジェームズ・ブラックは事件の容疑者でもなんでもない、行方不明者の捜査の一貫として、参考までに話を聞きに

言っただけがな)

かつてジェームズを逮捕した警部を再び彼に引き寄せた新たな事件―それは、ゴードン・ブラックの元愛人エバ・ハミルトンの謎の失踪から始まった。エバと深い付き合いのあった男が搜索願を出したことで明らかになったのだが、彼女は多額の慰謝料を要求してブラック家とトラブルを起こしていた。そして、その支払いの件で父親の代理人であるジェームズを訪ねていったきり、エバは二度と戻ってこなくなったのだという。

だが、その時点では警察はまだ、事件性は薄いと判断して動かなかった。

その態度が急変したのは、エバの行方を追いながら一方でジェームズを恐喝していたらしい、その男までがある日忽然と姿を消してしまったからだった。

エバについては、多額の慰謝料を独り占めするために愛人を置いて一人姿を消したとしても説明がつくが、男の場合はそうもいかなかった。

(ゴードンの愛人だったエバという女もその情夫だった男もどちらもあまり素性のよくない連中だったという：金を搾り取れるとは思ってジェームズに近づいたのだろうとは、ケンパー警部も言っていたが：すると、そんな低俗な連中に強請られる材料をジェームズは抱えていたということになる。父親の世話をしていた相手に謝礼を払うくらいなら、別に揉め事にするようなことはないはずだ。だが、もし何か知られてはまずいことを彼らに知られて、そのために恐喝されていたとしたら？ どうしても彼らの口をふさぐ必要があると考えた時、ジェームズならどうするだろう？ いや、まさか：とは

思うけれどね。あの用心深いジェームズが、そこまで荒っぽいことをするだろうか。少なくともかつての彼なら、自分の立場を危うくするような、そんなへまはしない。だが、もし今のジェームズが、僕が疑っているような状態にあるとすれば――焦りや自棄の気持ちから、何をしでかすか分からない……)

一年半ぶりに再会した時のジェームズの様子を頭の中に思い浮かべながら、クリスターは自分が仮定した1つの可能性を検証してみた。

どうしても引っかかるのは、別れ際にジェームズが垣間見せた、その肉体的な脆弱さだ。以前のジェームズには決して、あんなことはなかった。

(ジェームズは僕より1つ年上だから、今年で19才になるのか。ブラック家の男子は総じて短命：彼の母の兄も21才で病死していた―ブラック家の『負の遺産』を受け継いだ男子としては、ジェームズもそろそろ危険な年齢に差し掛かってきたことになるな)

幼い頃から、ブラック家の双子兄妹には主治医として著名な遺伝学者でもあるドクター・キャメロンが、その私的な研究費の援助を受けることを条件に雇われていた。それほどに兄妹の両親は彼らの健康状態を気にかけていた訳だ。

(ジェームズの妹のメアリは子供の頃に事故で亡くなっているから、彼女にまでその危険性があつたかは結局分からなかっただろう。それに双子とはいえ、二卵性なら普通のきょうだいと変わらない。『男子にのみ表われる』という口承が真実なら、ジェームズのみがそれを受け継いでいることになる。確か、ブラック家の血を引く男性はもう本当に彼だけで……傍系の家もほぼ途絶えている。結婚しても

子供を持つこと自体を恐がるケースもあったというし、ジェームズの叔父のように独身のまま亡くなった者も少なくない…年を取った、ジェームズの遠い親戚が何人か生きているだけだ)

考えてみれば、これだけ子孫を残すことが困難な一族がこの時代まで細々ながらも血脈を保ってこられたのは、奇跡のようなことかもしれない。そのことで、莫大な財産を分与によって先細らせることもなく、裕福であり続けたわけだが。

(施設を出所した後、ジェームズは以前よりも頻繁に主治医のドクター・キャメロンと会っている。表向きは定期的な往診を受けている父親の付き添いという形だが、実は、むしろジェームズ自身の健康状態の方をチェックしているのではないか?)

ゴードン・ブラックのカルテならば、キャメロンのクリニックでアルバイトを続けているダニエルは何度か目にする機会があった。だが、ジェームズのカルテはドクターが自宅の方にいつも保管しているため、一度も見られないそうだ。

(ドクター・キャメロンが保管している、ジェームズのカルテか…。何が書かれているのか、見たいな…)

クリスターは自分をじっと見守っているダニエルを急に意識したが、一瞬脳裏を過ぎった考えを激しく退けた。

「クリスターさん、難しい顔をして、何を考えているんですか？」

聡明で人の心の機微に敏感なダニエルに、自分の胸の内を悟られたのではないかと、クリスターはひやりとした。

「ん…ごめんよ、ダニエル、せっかくのデートなのにね。僕ときたら、こんな殺伐とした話ばかりするかと思えば、君を無視して黙り込んだり…本来は楽しいはずの夏休みなんだから、君と2人、せめて近場でもドライブかキャンプくらい行けたらいいんだけど」

「何を言ってるんですか、クリスターさん。あなたがのんびり羽伸ばしなんてできる状況じゃないことくらい僕も分かっています。それに僕は、こうしてあなたの傍にいて、少しでもあなたのために動いていられるだけで嬉しいんですから、余計な気遣いはなしですよ」

薄っすらと頬を赤らめ屈託なく返すダニエルを見ると、クリスターは、こんなに素直でいい子を自分のために危険にさらし続けていることに、今更のように罪悪感に駆られた。

「ダニエル、ジェームズと会ってみて実感したことなんだが…何だか、今のジェームズはかつて僕らが学校から追放したJ・Bよりもずっと危険で厄介な存在になった気がするんだ。君のような子が不用意に近づいていいような相手じゃない…だから、ダニエル、そろそろドクター・キャメロンのクリニックは辞めて欲しいんだ」

「辞めません」

きっぱりと言い切って、ダニエルはレモネードのストローに杏色の唇を寄せて、ちゅっと吸った。

「僕が頼んでも、駄目なのかい？」

「だって、あなたは、口で言うことと本音とが正反対ということがよくありますから」

クリスターは先程頭に閃いた身勝手な考えを思い出して、つい押し黙った。

「それに、不用意に近づいていい相手じゃないなんて、僕に内緒でジェームズの屋敷にまで行ったあなたが言うのはおかしいです」

「まだ怒っているのかい？」

「だって」

クリスターが機嫌を取るように飛び切り優しい声をかけると、ダニエルは顔をうつむけ、ストローの先でグラスの中の氷を突きまわしながら、じっと考え込んだ。

しかし、クリスターがテーブルの下でそっと足を動かしてダニエルの脚に触れさせると、すっと逃げてしまった。その手の懐柔策には乗らないということらしい。

「参ったな」

クリスターがふっと溜息をつくとき、ダニエルは気になるらしく、ちらっと大きな目を向けてきた。

「もう少しだけ：続けさせてください。どうしても気になることが、1つ残っているんです。それさえちゃんと調べられたら、あなたの言う通りにします」

「この上、何か無茶をする気じゃないんだろうね？」

「僕は、あなたより、よっぽど慎重な性質ですよ。それに、仕事を

やめると言っても、すぐには無理でしょう。今丁度レセプトの計算をしなきゃいけない時期で忙しいんです、周りに迷惑をかけてしまします」

「そんなの、どうしても親元に帰らなければならなかったとか、いくらでも言い訳はできるだろ」

クリスターが語気を強くしても、ダニエルは、彼に心配してもらえて嬉しいとでもいうように、優しげに微笑むだけだ。

「僕なら、本当に大丈夫ですから、心配しないでください」

「しかし――」

ダニエルの状況判断能力を疑っているわけではないが、恋人に尽くしたいという一途な幼い恋心に、クリスターはふと危うさを覚えた。

「そんなことよりも、クリスターさん、レイフさんとは、その後ちゃんと話し合ったんですか？」

ふいを突かれて、クリスターはコーヒー・カップを持つ手を震わせた。

「レイフと…？」

「ええ。ジェームズの企みでヘレナおばさんがあんなことになって、家族としては大変な時期なのは分かりますけれど…そのごたごたに紛れて、あなたはまた一番苦手な問題を先送りしているんじゃないですか？」

「また随分と手厳しいね、ダニエル」

そこはダニエルにでもあまり追求されたくない所だったので、クリスターはつい嫌そうに顔をしかめた。

「確かに、あいつとの間にある齟齬やら軋轢やは、棚上げにしままだけれどね。このままにはできないと分かっているよ。でも、せめて家の中が少し落ち着くまではと一時休戦中なんだ。この上僕らの仲まで悪化して、ただでさえ気落ちしている両親に心配はかけられないからね。目下の所、僕もレイフも周りの様子を窺いながら、話を切り出すタイミングを見計らっているというところかな」

「また、そんな理由をつけて…ねえ、クリスターさん、あなたのせっかくの決心を挫くことを言うようで悪いんですけれど、あなたはやっぱりレイフさんを必要としているんですよ。よほど考え抜いた末に進学やフットボールでも、レイフさんと決別する選択をしたんでしょう。…僕も、そう思い切った方があなたのためだと考えていたこともあります。でも、結果として、あなたが少しも幸せにならないのなら、やっぱり、そんな無理を自分に強要することはないんです」

クリスターはダニエルの優しい言葉をほろ苦い気分で聞いていた。

レイフを失った後、自分にまだできることを積極的に探そうとか幸せになろうとか、もともとクリスターは考えていない。むしろ、半ば自棄的な気分で諦めている。

（せめて、この子のことは、できるなら幸せにしてあげたいとは思うけれど…こんな抜け殻のような僕に、他人を愛して幸福になどで

きるのだろうか……?)

クリスターの瞳が暗く沈んでいるのにも気付かず、ダニエルは真剣に彼の説得を続けている。

「それに――僕も、今あなたが置かれている状況を見れば、やっぱりレイフさんに傍にいてももらいたいと思います。あなたは、どうしてもJ・Bとの争いにレイフさんを関わらせたくないようだけれど……1人でJと対峙するのは、いくらあなたでも負担が大きすぎる。あなたには、自分の考えを素早く読み取って一緒に動いてくれる、あなたを補助し、時には守ってくれる……そうして、あなたが暴走しそうな時は阻止してくれる……それだけの能力があって、あなたの信頼も厚い、副官の役割を果たせる人が必要なんです。残念だけれど、僕には、そこまでの力はありません。せめてアイザックがいればと口惜しく思うけれど、今それを言っても仕方がない……ケンパー警部やアイザックのお父さんは頼りになりそうだけれど、それぞれまた違った立場にいる人達です……ねえ、クリスターさん、あなただって、レイフさんがいてくれたらどれだけ助かるだろうって思うでしょう?」

その一瞬、ダニエルの何気ない言葉がクリスターの胸を揺さぶった。

(辛い時、哀しい時、こんなふうに何も言わずにただ一緒に時間を過ごすだけで癒される相手がいる……何て幸せなことなのだろうね、レイフ)

ヘレナが流産した夜、病院の薄暗い階段の片隅でひっそりとレイフと寄り添い会っていた時に感じた温かさの記憶を、クリスターは蘇らせていた。

あんなふうに2人で支えあって生きていきたい―胸の中心に隠された、クリスターの本心は今でもそう叫んでいる。しかし―

「弟に支えてもらおう守ってもらおうなんて期待するほど、僕はまだ落ちぶれてはいないつもりだよ」

クリスターが固い声で苛立たしげに吐き捨てるのに、尚も言い募ろうとしていたダニエルは顔を強張らせ、黙り込んだ。

気まずい空気が、向かい合って座っている2人の間に漂う。

クリスターはしばし瞳の奥に熾火をくすぶらせながらダニエルの青ざめた小さな顔を睨んでいたが、やがて、そんな自分に恥じ入るかのように頭を振った。

「クリスターさん…」

胸の奥から振り絞るように、クリスターは言った。

「ごめんよ…レイフのことを追求されるとつい僕は感情的になってしまう」

理不尽な当り方をしたのに少しも揺るがないダニエルの澄みきった眼差しを避けるよう、クリスターは視線を窓の外に向けながら付け加えた。

「心配しなくてもいいよ、ダニエル…進路のことはともかく―ジェームズ・ブラクの復活に気づいてしまったレイフを今更1人蚊帳の外にはできないことは、僕も充分分かってる。僕の気が進まなく

ても、多かれ少なかれあいつにも一定の役割を課さないことには、あいつは自分勝手に動き出すだろう―そちらの方が僕には恐い」

「それじゃあ、レイフさんにもちゃんと事情を打ち明けて、協力してもらうんですね？」

ダニエルはほっと胸を撫で下ろしたようだ。

「助けになるどころか、むしろ足を引っ張られかき回されそうな気がして、嫌なんだけれどね」

むっつりとクリスターは呟く。

「フットボールの試合でもいつも、あんなに息のあっているあなた達じゃないですか。きっと大丈夫ですよ」

ダニエルがいやに嬉しそうなのは、これをきっかけにクリスターとレイフが歩み寄って再び絆を確認することを期待しているのだろう。

だが、ダニエルはそれでいいのだろうか。いつも弟のことばかり考えている恋人に、普通なら不満や怒りを覚える所だろうに、こんなふうに氣遣ってばかりいる。

（どうしてこの子は、もっと僕の心を自分に向けさせようとしなのかな…僕達が付き合い始めて二月以上経つ。そろそろ気安く打ち付けてきてもいい頃なのに、そういう意味では、全く進展がない。大体2才も年下のダニエルが僕に対して物分りよく振る舞う必要なんかないんだ、もっと正直な感情をぶつけてくれたっていいのに）

クリスターは、奇妙な苛立ちともどかしさを覚えていた。

（もしかしたら、この子は…僕に愛されることなんか全く期待もしていないのか…？）

クリスターは、はっと胸を突かれて、ダニエルの透き通るように綺麗な笑顔を見返した。

本当なら、恋人に対してもっと素直な我が侘や甘えを見せて当たり前の年頃なのに、ダニエルはいつも気持ちを抑えている。自分達が今もって、自由に伸びやかな恋愛関係を構築できていないという証拠だ。

（だとすれば、僕のせいだ…この子を可愛いと思いながら、それ以上で愛することはできず、不自然な関係が続けている。もしもダニエルがもっと馬鹿な子だったら、この期に及んで誠実ぶることもないからと僕もいっそ割り切って、うまく騙すこともできただろうか…たとえ嘘でも、その方がダニエルにとってはまだ幸せだったろうか…？）

恋人と呼ぶ人すら幸せにできない、自分の無能さ加減に腹が立つのを通り越して哀しくなりながら、クリスターは堪らず、テーブルの上のダニエルの手を強く掴んだ。

ダニエルは不思議そうに首を傾げて、クリスターの思いつめた顔を見上げた。

「ダニエル、僕は―」

その表情のあどけなさに胸を塞がれ、ともすれば口について出そ

うになる様々な言い訳やごまかしや嘘を飲み込むと

「…すまない」

クリスターは、やっとの思いでそうとだけ言った。

使い古された言葉だと我ながら苦々しかったが、クリスターには他にダニエルにかけるべき適当な言葉が見つからなかったのだ。

第5章深淵に潜むもの(5)

(誰だ…こんな朝早くから、煩いな。調子はずれな下手くそな歌を歌って…)

窓の外から聞こえてくる、お世辞にも上手とは言えないが気持ちよさそうな歌声に、まだ夢心地のクリスターは、両手で耳を押さえ、不機嫌そうに唸った。

(ああ、レイフだな…全く騒がしい奴…)

歌声の主が誰か分ると、クリスターは納得したようにふっと笑って、薄っすらと目を開けた。

まだ早朝かと思っていたら、窓から差し込んでくる日差しから察するに、既に太陽は高く上っているようだ。

「レイフ！」

クリスターが窓を開けて下の芝生を見下ろすと、ハーフパンツ一枚で、歌に合わせて体を微妙にくねくね動かしながら水をまいている弟の姿があった。

「あ、おはよう、兄貴。珍しいな、クリスターがオレより寝坊するのって」

「おまえが自発的に庭の水撒きをするのも珍しいと思うけどね…父さんと母さんは？」

「とつくに仕事に出かけたよ。ふうん、それにも気がつかないほど、ぐっすり眠ってたんだ」

「うん…」

クリスターは、真っ青な夏の空にも負けないほど明るい弟の笑顔を見下ろしながら曖昧に頷くと、再び部屋に引っ込んだ。

以前はひどい不眠症に悩まされていたものだが、いつの間にかそれは治っていて、特にこの頃は夢も見ないほど深く眠れる。

（妙な話だが、ジェームズとの対面を果たしてから、僕の体調は急に回復してきたような気がするな。相変わらず抱え込んだままの悩みを紛らわせることができる、格好の遊び相手を取り戻したからという訳か：だけど、これじゃ、以前と少しも変わらない。あいつとの腐れ縁もこれを限りに終わらせるんだと自分に言い聞かせながら、全く、僕も性懲りがないな）

軽く落ち込みながら着替えを済ませ、クリスターがキッチンに下りていくと、庭に面したガラス戸の向こうでは、レイフがまだホースをぶんぶん振り回しながら―もしかしたら、あれはどこぞのミュージシャンの真似かもしれないが―水をまいている。

クリスターはガラス戸の前に腕組みをして立って、勢いよく飛び散る水に濡れることも楽しげに生き生きと動いている半裸の弟をじっと観察した。その眉根に次第に深いしわが寄っていく。

ふいに、レイフが悪寒を覚えたかのようにぶるりと身を震わせ、後ろを振り返った。

「…レイフ、ちょっとここに来い」

クリスターがガラス戸を開けて顎で示すと、レイフはホースを芝の上に置いて、おっかなびっくり、クリスターの機嫌を窺いながらやってきた。

「な、何だよ？」

水をまくだけでどうしてこんなに濡れるのか、体からぽとぽと雫を滴らせているレイフを、クリスターは恐い顔で睨みつける。

「おまえ、最近トレーニングをさぼっているだろう。腕や脚の筋肉量がシーズン中に比べて若干落ちているし、胸周りやウエストを見ても、これは自己管理がちゃんとできていないって、僕には分るぞ」

「ひゃー、相変わらず目ざとい奴…まさか弟の体見ただけで、スリーサイズ言い当てたりはすんなよな、こええよ」

「来月半ばには、選手やコーチ達も皆戻ってきて、合同練習が始まる。その頃までに、ハードな練習に充分応えられる体を作っておくよう、自分でトレーニングを続けるのが選手としての務めだ。おまえには、エースとしての自覚が足りなすぎる」

「だって…自主トレーニングって、1人でやっても退屈でつまらねえんだもの…」

「トムが先週から寮に戻ってきただろう。1人じゃ気分が乗らないなら、彼と一緒にやればいいじゃないか」

「そう言う兄貴だって、さぼってるじゃん、トレーニング」

唇を尖らせて不満げに訴えるレイフを、クリスターはまじまじと見返した。

「僕には、フットボール以外にもやるべきことがあるんだ。それに、心配しなくても、チームリーダーとしての責任は果たす。僕にとっても、高校最後の大切なシーズンだからね：ちよっと待て、そのままでは家の中に入るなよ、床が濡れる」

レイフが何か言いかけるのをさり気なく無視して、クリスターはキッチン奥に戻り、引き出しからタオルを一枚取ってくると、レイフの濡れた頭に被せ、力任せに拭いてやった。

「痛えよ、兄貴」

「後で、練習メニューを作ってやるよ。それに、明日なら、僕もおまえと一緒に学校のジムに行けるし」

「ほんとかつ？」

タオルを持つクリスターの手を払いのけ、食らいつくように聞きなおすレイフに、クリスターはすぐに答えられなかった。

「僕がいないと練習もできないなんて、言うなよ」

苦笑しながら、クリスターはタオルをレイフの手に押し付け、すっと身を引いた。

その後ろを、濡れた体をタオルで大雑把に拭きながら、レイフがついてくる。

「親父がさ、今年はまたすごい量の手紙が大学から来て、リクルーターからもばんばん電話がかかってくるって喜んでるぜ。なあ、やつぱり去年の優勝校のエース、しかもMVP取ったとなると違うよな」

「そうだね」

クリスターがあまり関心を示さないので、レイフは不服そうに唇を歪めた。

「あのさ、クリスター、そんな興味のない顔をせずに、ちっとは親父の相手をして喜ばせてやれよ。あかちゃんをなくしてから、母さんより父さんの方ががつくりきっているんだから――オレ達宛に来る、大学チームからの誘いの手紙が、父さんの気分を明るくしてくれているんだぜ」

「僕に分まで、おまえが相手をしてあげればいいよ。スカウトからの手紙なんて大体似たような内容だし、いくら誉めておだててくれたって、今シーズンの状態が悪ければ掌を返すように無関心になる。そんなあてにならないものにいちいち浮かれるのは馬鹿のすることだ」

まるで他人事のように血の通わないクリスターの応えに、レイフは驚いたように目を見張った。

「ちえっ、冷てえな……」

レイフの哀しそうな呟きには心がぐらついたが、クリスターは聞こえない振りをして、コーヒーを淹れにかかった。

トレーニングやスカウトの話にかこつけて、レイフは、フットボールをやめると宣言したクリスターの心に変化があるのかないのか確認したかったのだろうが、ここで甘い期待をさせては駄目だ。

レイフのもの言いたげな視線を背中に痛いほど感じる。

確かに、母の流産の騒ぎからずっと、周囲を慮って、お互い言いたいことも言わずに過ごしてきた。

(僕はともかく、レイフはそろそろ限界かな：無理に明るく振る舞っているけれど、内心では鬱屈したものが溜まっているだろう。もしかしたら、今、何か切り出す気かな：父さんも母さんも出かけていて、僕とレイフは今2人きりで…)

クリスターは僅かに頭を動かし、後ろのテーブルに腰を落ち着けて自分の一挙一動を見守っている弟を見やった。

一瞬、その目つきの鋭さに、クリスターはぎくりとした。

やはり、今日のレイフは腹に何か一物あるようだ。

「なあ、兄貴」

声だけは暢気に、レイフは話しかけてきた。

「うん？」

緊張感に身を引き締めながらも平静さを装って、クリスターは2つのカップにコーヒーを注ぐ。

「サウスボストン署のケンパー警部って、兄貴の知り合いなんだ？」

一瞬、ポットを持つクリスターの手が震えた。

「えっ、誰だって？」

胸に沸き起こった動揺の小波はすぐに抑え込んだ。クリスターはカップを手に、レイフが待ち受けているテーブルに近づく。

「ケンパー警部」

「ああ…彼に会ったのかい？」

「昨日さ、トムと一緒にボストンまで行ったんだよ。シャツとかシューズとか買い物しながらコープリー辺りをうろろしていたら、知らない男に声をかけられたんだ。オレをおまえと間違えたんだよ…オレはピンときて、しばらくおまえのふりして話を聞いてさ…まあ、すぐにばれちゃったけれど…警察だって分かった時点で、ああ、これはJとつながった話だと思ったから、もっと詳しく聞かせてくれ、教えてくれないとボコるぞって、警部に迫ったって訳」

「…刑事を脅すなよ」

ふっと溜息をついて、コーヒーカップを口に運びながら、クリスターは静かに考えを巡らせていた。

自分の手持ちのカードを突きつけたレイフは、もっと激しくクリスターに詰め寄りたいのを堪えるかのごとく肩にぐっと力を入れながら、彼の応えを待ち受けている。

（フットボールや進路についての話し合いより、先にこちらから片付けないと駄目かな。J・Bが戻ってきたことを知ってしまったレイフに何もせずにおとなしくしていると言いつても無理だし、その上、僕の知らない所でケンパー警部にまで接触してしまった。警部を通じて、レイフがどこまで、僕がこれまで秘密にしていたことを知り得たのかも気になる。こうなった以上、何をしでかすかわからないレイフを野放しにするよりは、僕の目の届く範囲に置く方がまだましだ）

あまり気の進まないクリスターが吐息を漏らすのを見咎めたレイフは、形のいい眉をきつと吊り上げる。

「クリスター…」

しかし、弟が口を開くより先に、クリスターは上から被せるようにして言った。

「レイフ、今日一日、何も予定がないなら、僕に付き合ってくれないか？」

「え…えっ…？」

クリスターの切り返しに一瞬反応できず、レイフは戸惑うよう、目を泳がせる。

「J・Bと僕の確執におまえを巻き込むことは避けたかったんだけど、そうも言っていない状況かなと思ひ直したんだよ」

ゆっくりと噛んで含めるように、クリスターはレイフに向かって

囁いた。

「おまえがケンパー警部に偶然会って話をしたことで、僕もやっと決心したよ。確かに、ダニエルやケンパー警部達に助けられても、あいつと戦って勝つには、僕の方がまだ不利だ。だから、この際、おまえの力も借りたい」

「そ、それじゃあ、クリスター…」

クリスターの言わんとしていることを理解したレイフの顔に見るうちに朱の色が上り、琥珀色をした瞳は火が灯ったようにきらきらと輝きだす。

「ああ、僕が今度こそJ・Bの手から永遠に逃れられるよう、一緒に闘ってくれないか、レイフ」

「やっほうっ！」

待ちに待ったクリスターの一言がよほど嬉しかったのか、レイフは椅子を蹴倒すように立ち上がってガッツポーズをする。

さすがのクリスターも一瞬唖然となった。

「いや、その…そんなふうに分かれはしゃぐような話ではないと思うのだけれど―要するに僕は、おまえの手も借りたいほどの窮地に立たされているということなんだよ?」

「へへ、ごめん…でもさ、やっとクリスターがオレの手を取ってくれたことが、物凄く嬉しいんだよ。オレの手の届かないどこかでおまえが危険にさらされているかもしれないと想像して苛々もやもや

するより、たとえどんなに危険でも、おまえの傍にいて一緒に何かに立ち向かえる方が、ずっと楽なんだよ」

言いながら、感極まったらしいレイフは、照れくさそうに鼻をすすった。

「レイフ…」

その素直な反応に、クリスターはまだ弟を騙しているような気がして、何やら後ろめたくて仕方がなかった。

「細かい事情はおいおい話すとして…ともかく、食事をすませたらすぐに出かけるから、おまえも着替えて来いよ」

気を取り直して、クリスターは話を元に戻す。

「出かけるって？ どこに、何しに？」

「ジェームズ・ブラックの謎を解きに行くのさ」

クリスターの脳裏に、瞬きもせずに自分をじっと見つめるジェームズ・ブラックの光の差さない深い藍色の瞳が浮かび上がった。

「実はね、レイフ、4日前に僕はジェームズに会いに行ったんだ」

思いもかけないクリスターの告白に、レイフは目を剥いた。

「ク、クリスター?! 冗談じゃないぜ、おい…あいつはおまえを狙っているんだろ。会いについて、1人で行ったのか、まさか、何もされなかったらうな？」

真っ青になって、手を差し伸ばして駆け寄ろうとするレイフから逃れるよう、クリスターは椅子を引いて立ち上がった。

「こうして無事に帰ってきているんだから、今更、そんなふうに変色を変えるなよ」

「だってさ、まさか、そこまで兄貴とあいつが接近しているなんて、思ってたなかったんだもの」

「このくらいのことで怯んでいたら、僕と一緒になんて戦えないよ。まあ、何にせよ、ブラック邸でジェームズと色々話してみても、やっぱり、何がどうあっても、あいつは僕を放っておいてはくれないってことを実感した。もう一度僕と戦い、僕を攻略して打ち負かした上で―あいつは、たぶん、それ以上のことを僕に求めてくる」

「それ以上のことって？」

レイフは気味悪そうに顔をしかめた。

「その辺りが僕にもはっきりとは分らない。ジェームズが、結局僕をどうしたいのか―僕を傷つけるか殺すかして満足するただの復讐者なら、その行動も読みやすいし、もっと闘いやすかったろう。だが、ジェームズの僕に向かう感情は複雑で、二重三重の謎を秘めている…そもそも、どうしてあいつは僕に目をつけたのか、対等に渡り合える敵手として永遠に僕と遊んでいたいのか、僕を憎んでいるのか、それとも別の想いがあるのか―だから、一度ジェームズのことを昔からよく知る人物に会って、意見を聞いてみようと思うんだ。ジェームズが僕に異常な執着を示す理由を、もしかしたら彼は知っているかもしれない…もっとうまくいけば、ジェームズの心の深淵

に潜む、彼の弱点もね…」

クリスターの声には、何かしら逡巡するような響きが混じっていた。

「はっ、あいつの頭の中にあることなんて、たとえ誰かに解説してもらったって、理解できるなんて思わねえよ。でもさ、クリスターは闘う相手のことは事前にできるだけ調べて、作戦練っておきたいって考えなんだな？」

「要するに、そういうことかな」

「うん、分った。それが必要だって言うなら、オレもクリスターと一緒にどこにだって付き合うよ…でもさ、そのジェームズをよく知っている人物って、何者？」

「昔、ジェームズの主治医の助手をやっていた男だよ。精神科医で、ジェームズが妹を亡くしたショックから一時失語症に陥った時、その治療にもあたったらしい」

「へー、あいつ、妹なんていたの」

双子のとは、なぜか、クリスターは言い出せなかった。

（あいつは、僕に――亡くしてしまった半身の身代わりになってほしと言った。何を馬鹿げたことを言うんだと、僕は初めから取り合わなかった…どうせ、僕を混乱させて隙を突こうとする罠か何かだろうとさえ疑って、あいつがほのめすことを考えまいとしてきた。だが、もし、あれが本気だとしたら、恐ろしい…）

あの藍色の双眸を覗き込んだ時、クリスターがそこに見出したのは、黒々と広がる闇に投影された他ならぬ自分のもう一つの顔、影の半身―そんな想いが、この所ずっと心のどこかにつきまとっている。

（馬鹿な、何を不安がっているんだ、僕は：ジェームズの妄想に僕まで影響を受けてしまったのか……。だとすれば、これもあいつの罠だろうか。気をつけろ、あいつに付け入る隙を与えれば、僕もアイザックのように取り込まれてしまうぞ）

本音では、ジェームズのことなど何一つ知りたくない。謎は謎のまままで永遠に葬り去ることができれば、いっそ清々するだろう。

実際、一度はそうしてジェームズを退けることに成功したのだ。しかし、彼はまた舞い戻ってきてしまった。

（敵を攻略するにはまず敵のことをよく知らなければならない……いっただったか、ジェームズの奴にそう言われたけれど、そんなこと、僕だって分かっている。ただ、そうやって、あいつに深入りしすぎるのが嫌なだけだ）

ジェームズに打ち勝つために必要だからと、彼のことを深く知ろうとすればするほど、その得体の知れない心の闇に引きずり込まれてしまうような、言いようのないような寒さを、クリスターは感じている。

「何、また難しい顔しているんだよ、クリスター」

服を着替えて再びキッチンに戻ってきたレイフは、2人で力を合わせてJ・Bと戦うことに決まったというのに、妙にうかない面持

ちの兄を見て、怪訝そうに言った。

「ああ、うん：ちよつとね、これからのことを色々考えていたんだ」
穏やかに微笑んでレイフの追求を避けると、クリスターはテーブルから離れ、弟に歩み寄った。

「つたく、1人で悩むなよ、兄貴。ほら、オレも準備できたし、早く出かけようぜ。これからのことなら、道々一緒に考えようよ」

レイフはじゃれかかるようにクリスターの肩に腕を回し、ぎゅつと抱きしめる。

「うん：そうだね」

クリスターの悩みなど夢にも思わぬだろう、レイフの顔はお日様のように明るい。

（ジェームズの心の深淵に潜む闇は、僕がこの胸に密かに飼っている闇とどこか似通っている―そんなこと、レイフにはとても打ち明けられないな）

唯一無二の相棒と思う弟の手前、クリスターは、ともすれば不安の檻に囚われそうになる自らを強いて奮い立たせるのだった。

第5章深淵に潜むもの(6)

ドクター・ワインスタインの現住所は、予め調べ上げていた。

子供時代のジェームズに深く関わった人間。また精神科医という観点から彼がジェームズをどう分析するのか、クリスターは興味がある。

(ジェームズは、ワインスタインを事故で亡くなったものと認識していた。もし本当にそう信じていたとしたら、僕がワインスタインに接触することは、ジェームズにとって想定外の出来事ということになるな)

滑らかに愛車のハンドルを操りながら、クリスターは助手席の弟をちらりと見やる。

(僕にとっての想定外は、今ここにこいつがいることか。いや、こんな状況を全く考えなかった訳じゃない…大丈夫だ、僕なら、こいつをうまく操縦できる)

レイフの懇願を受け入れて、共にJ・Bと闘うと誓ったクリスターだが、それは言わば見せ掛けで、本当に危険な部分にまで弟を深入りさせる気はなかった。

クリスターを信頼しきっているレイフは、彼がうまく促すのに乗って、ケンパー警部から何をどこまで聞きだしたのか、素直に話してくれた。

一方で、クリスターもレイフに乞われるがまま、ジェームズから

のクリスマス・カードを受け取って以降今に至るまでの経緯をざつと説明してやった。

レイフが胸に抱いていた疑問―アイザックの失踪やコリン達の事故にジェームズがからみ、それに対してクリスター達がどう動いているかが明らかになって、レイフはこれでやっと腑に落ちたと満足したようだが、弟に知られてはまずいことは、クリスターはやはり伏せていた。

例えば、ヘレナの流産の陰に密かに両親の会社に潜り込んでいたジェームズの暗躍があったなどとは、口が裂けても言えない。

（もし知ったら、レイフは必ず逆上し、僕がどんなにとめても、ジェームズの屋敷に殴りこみに行こうとするだろう。駄目だ、想像するだけでぞっとする：そうだ、こうして手元に置くことにしたからには、レイフが暴走しないよう、僕がしっかりと見張ってやる）

しばらくは興奮状態が続いて、クリスターにしつこいくらいの質問攻撃を浴びせたり、彼がまたしても自分に隠れて危険を冒してきたことをなじったり、ジェームズとクリスターの対決が既に警察まで巻き込んだ大事になりつつあることに驚いたりとうるさかったレイフだが、今はひとまず落ち着いて、窓の外を流れすぎていく風景をぼんやりと眺めている。

その横顔には、これから未知の冒険に乗り出そうしている子供のような澁刺とした昂揚感が溢れ、何の憂いも翳りもない。

J・Bがどれほど危険な人間か、一度は彼の罠に落ちて苦しめられた経験があるレイフなら分かっているはずだが、不安は感じていないのだろうか。

「ねえ、レイフ：僕は、おまえが以前ジェームズにどれだけひどい目にあわされたのか覚えてる。だからこそ、二度とあの時のような思いはさせたくなくて、ずっとおまえをこの件から遠ざけていたんだよ」

「うん」

「今でもまだ心配なんだけど、本当に大丈夫なのかい？　また、あのジェームズと顔をつき合わせるようになったり：ましてや争ったりなんて耐えられる：？」

そこまでレイフにさせることはないだろうと思いつながら、クリスターは確認のために聞いてみる。

するとレイフは、クリスターが少し拍子抜けするくらい簡単に答えた。

「オレのことなら心配しないでいいよ、兄貴。J・Bとの間で昔あったことは、そりゃ、嫌な記憶として忘れてないけど、別に恐がってなんかないよ。今度はあの時みたいにかないぞ、見てろよ、Jって、ボコる気満々だし」

「おまえの腕っ節だけで易々と決着のつく相手なら、僕もここまで悩まされないよ。大体、ジェームズの周りには、あいつの息のかかった不良グループだけじゃなく、もっと物騒な―ジェームズが関わっていたストリート・ギャングの残党らしい連中もいて、念入りにガードしている。そうになると、どんな武器を所持しているか知れない：真っ向から力で勝負とはいかないさ」

「銃で撃たれるのはぞつとしないけど：でもさ、今は警察だって動いてるんだろ？ 行方不明になったのは誰だっけ：ええと、ジェームズの親父の愛人だったよな、Jの奴が何かしたに決まってるよ」

「警察にあまり過度な期待はできないよ。行方不明になったエバ・ハミルトンとその情夫の捜索のため、ジェームズにも一応聞き取り調査をしたようだけれど：それだって、担当のケンパー警部が奴に特別な関心を持っていたからだ。これ以上の介入は現実として難しい：例えば—そうだな、いつそ2人の死体が見つかるとか、犯罪の動かぬ証拠が見つからない限り、捜査はひとまず打ち切られるだろう」

「じゃあ、その動かぬ証拠になりそうの物を見つけ出して、Jを警察に突き出してやればいいんだ」

ぽんと手を叩いて、名案だろうとばかりにちよつと得意げに眉を跳ね上げるレイフに、クリスターは苦笑した。

「おまえのようにすっきり明快に答えを出せたら、さぞ気分がいいだろうな」

「クリスターは何でも複雑に考えすぎるんだよ：J・Bについてもそうさ。オレに言わせりゃ、おまえの方こそ、そんな調子でJとぶつかって大丈夫かなって、心配だよ」

「僕が？」

「勝つために敵を分析するのはいいけど、そもそもJを心底理解してやる必要なんてねえんじゃないか。普通の人間相手なら通用しても、Jの頭の中はやっぱりまともじゃない。そういや、オレも昔、

Jの傍にいた時、一体こいつ何考えてるんだろって悩まされたものだけれど…Jの奴さ、例えば目の前で誰かがひどいリンチを受けても、ちょっと興味深い見世物が演じられている程度にしか感じていないようだった。そんな時のJは、まるで本当に心を持たない怪物みたいで…ええと、つまりオレの言いたいのは、そんないかれた奴の考えをまともに読み解こうとしても、クリスターが混乱するだけで、それこそ逆にJの思う壺になるんじゃないかってことだよ」

そう言い切るレイフを、内心ぎくりとしながら、クリスターは横目で素早く眺めやった。

「ふうん…あいつは心を持たない怪物、か…また、おまえにしては、随分と容赦のない言いようだね。だから、理解しようと努めること自体必要ない―相手が憎いJ・Bだからかな？」

「だって、オレはクリスターほどあいつに特別な関心を持っている訳じゃないから、あいつのやることに意味なんか求めねえの。あいつが何者であろうと興味ないし…ハニーのこととかで恨みはあるけど、それも終わったことだ。Jが本当に改心して二度とオレ達の前に現れなかったら、おまえにしつこく付きまたって復讐しようなんて企んでいなかったら、たぶん、あいつの存在自体今頃はきれいに忘れさることができていただろうさ。って、今だから、ここまで言い切れるんだろうな…一時は、J・Bのことを思い出すだけで、あの頃の悔しさや苦しさが蘇って、どうしようもなかったもんな」

屈託のない口調で語るレイフには、実際J・Bの影に脅かされていた頃の片鱗もなく、そんな弟が、何だかクリスターは少し羨ましかった。

（よかった…レイフは、もうすっかりジェームズの呪縛から解き放

たれている。そうだ、レイフもあの頃と同じ不安定な子供じゃない
：まっすぐに闊達な本来の自分を取り戻したレイフなら、あんな奴
に捕まるはずがないんだ。むしろ僕の方が、その点は危ういのかも
しれないな：僕の心はジェームズに近い：だからこそ、レイフのよ
うにあいつに対して無関心を保つことができないんだ」

何も分かっていなさそうで、時々妙に鋭く核心の部分に切り込ん
でくるレイフは、先程もクリスターの密かな懸念を見抜いたかのよ
うなことをさらりと言ったのけた。

（このままJの心の闇に近づいていくのは危険だ、下手をすれば、
この僕があいつに取り込まれてしまう：僕の抱いた漠とした不安を
こいつがちゃんと理解しているとは思えないけれど――今の僕に、何
となく危ういものを感じ取っているということか）

クリスターが前方を睨みつけたままじっと押し黙っていると、レ
イフはまた何かを嗅ぎつけたかのように鼻をぴくぴく動かして、ク
リスターに絡んできた。

「ん、また何か余計なことを考えているな、クリスター？」

遠慮のない手がにゅっと横から伸びてきて、クリスターの肩にか
かる。

レイフにとっては普段どおりのスキンシップだろうが、触れた先
から自分の不安定な心が彼に伝わってしまいそうな気がして、クリ
スターは思わず身を固くした。

「なあ、どうしたんだよ？」

「：運転中にじゃれつくなよ、危ないだろ」

しかめっ面をしてたしなめると、クリスタはレイフの腕を邪陰に振り払い、運転に集中するふりをした。

「ちえっ、愛想ねーな」

レイフは不満そうに唇をすぼめ、クリスタの不機嫌な横顔をじつと見ている。

これ以上何も気取られまいと、クリスタは思わず身構える。溜息が漏れそうになった。

（やっぱり、何だか、やりにくい）

レイフを傍に置くということは、これまでのように心の秘密を保てなくなることでもあり、それを考えると、果たしてうまく弟を御しきれなのか、クリスタは心もとないような気分させられるのだった。

閑静な住宅街の外れにある、赤煉瓦の古い一軒家の前でクリスタ

―は車を停めた。

門扉には、ワインスタイン・メンタル・クリニックの小さなプレートがはめ込まれている。

それをひよいと覗き込んだレイフが、何となく面白くなさそうに顔を歪めた。

「心理カウンセラーとかセラピストって奴は今でも苦手だよ、オレ……」

むっつりと呟くレイフの念頭には、彼にとっては悪党以外の何者でもない、デイビット・アイヴァースの印象があるのだろう。

今はもうこの世に存在しない男に対する複雑な想いをクリスタ―はふとよみがえらせそうになったが、すぐにそんな感傷を振り払った。

「嫌なら車の中で待っているかい？」

「まさか。おい、待て、置いてくなよ」

さっさと門をくぐって家の玄関へ向かうクリスタ―を、レイフが慌てて追いかけてくる。

クリニックの診療日を避けてのアポなしの突然の訪問だが、ガレ―ジに車があるところを見ると、おそらくワインスタインは在宅中だろう。

クリスタ―がドアの横のインターフォンを押すと、犬の鳴き声が

家の中から聞こえた。

しばらく待っていると、扉の向こうから、何か固いものが床にあたる音と共に人の気配が近づいてきた。

「どなたかな？」

温和そうな男の声が呼ばわった。

「ドクター・ワインスタインですか？ 突然で申し訳ありません。実は、あなたにどうしても聞いていたきたい話があって――」

「診療の希望なら、先に電話で予約を取ってもらわなくてはいいですよ」

「患者として、あなたのカウンセリングを希望しているわけではありません。ですが、あなたの助言を必要とする大変な問題を抱えていることには違いありません」

ワインスタインは、謎かけめいたクリスターの言葉を吟味するかのうようにドアの向こうで黙り込んだ。

レイフは心配そうな眼差しをクリスターの冷静な横顔に向けている。

ゆうに十秒は待った後、ドアが半分だけ開いて、その向こうから松葉杖で体を支えた痩せた中年の男が姿を現した。家の中でも身なりはきちんとして、髪も綺麗に撫で付けてある。職業上、人に好感と信頼感を抱かせるような外見を心がけているのだろう。

「それは一体、どういう意味なのかな？」

ワインスタインは品のよい顔に微かな戸惑いと不審の色をうかべながら、クリスターの全身をじっと観察した。

ジェームズ・ブラックの治療終了後ブラック家を去ったワインスタインは、それから間もなく交通事故に遭い、以来、片足が不自由となった。今でも杖なしで歩くのは困難で、自宅でひっそりと精神科医としての仕事を続けている。

（ここでも、また『事故』か：ジェームズに深入りしすぎた人間は、いずれこうなるということか）

その右瞼のすぐ上にある古い傷跡に、クリスターはふと気がつく。これも事故の時に受けたものだろうか。

「僕は、クリスター・オルソン。あなたがよくご存知のジェームズ・ブラックの―友人です」

ワインスタインは表情こそ変えなかったが、考え深げな瞳に一瞬隠し切れない動揺が過ぎったのを、クリスターは見逃さなかった。

「ジェームズ・ブラック…？ 知らんな、そんな名前は」

「あなたは、かつて、ドクター・キャメロンの助手としてブラック家に雇われていた。キャメロンが、精神科医であるあなたを自分の仕事に誘ったのは、ブラック家の双子兄妹の精神面での成長と発達を分析させるためだった」

傍らで息を詰めてクリスターとキャメロンのやり取りに耳を傾け

ていたレイフが、さっと兄を振り返った。

「どうして君が、そんなことを知っているんだ？」

ワインスタインの声のトーンが僅かに高くなった。

「ある事情から、ジェームズのことを僕は色々調べ上げたんです。ジェームズの過去、彼の背後に隠されたブラック家の複雑な事情も……彼が一体何ものなのか、どうしても知る必要があった。実を言えば、僕は今ジェームズに脅かされています。僕だけでなく、僕の家族や友人達までが危険にさらされているんです。ですから……」

「確かに、一時、私はブラック家での仕事についていたが、それはもう随分昔の話だ。今の私はキャメロンとも一切連絡を取り合っていないし、ブラック家とも何のかかわりもない。君が何の目的でここに來たのか知らんが、君に教えられることなど何もない。帰ってくれ」

ワインスタインは固い声でそう言ってドアを閉じようとするが、クリスターはそれを手で押さえた。

「その手を離して、おとなしく帰りなさい……私に警察を呼ばせたいのか……！」

威嚇するように叱りつけるワインスタインの顔を冷静に見据え、クリスターは底冷えのするような低い声で言った。

「ドクター、ある時、ジェームズは僕にこう囁いたんです……彼が子供の頃になくした妹の代わりに自分の半身になってほしいと……どういふつもりで彼はそんなことを言ったのでしょうか？」

瞬間、ドアを掴んでいたワインスタインの手が震えた。

「何だと…?」

ワインスタインは、ゆっくりと目を見張った。

クリスターの真剣そのものの厳しい表情、ここまで来て簡単に引き下がることはできないという、彼の覚悟と決意のほどに、ワインスタインも気付いたようだ。

「ジェームズ・ブラックか…何年ぶりで聞く名前だろうな…君、クリスター君だったねージェームズに脅かされているといったが、彼は一体君に何をしたんだい…?」

「一言では説明できませんが、もうずっと僕はジェームズの影に悩まされています。一度は、さすがにもう諦めたかという所まで彼を退けることに成功しましたが、また戻ってきてしまいました。ジェームズはどうしても僕を逃がさないつもりなんです…正直、これ以上、どうやって彼に対抗したらいいのか…」

「ふむ」

興味などないふりをしていても、そこはやはり医者だからだろう、かつての患者であるジェームズについて無関心を通すことはできないようだ。

「君の目を見ればとても嘘をついているとは思えないが…しかし、あのジェームズが、そこまで1人の人間に没頭するというのが、私にはまず想像できない。君をメアリの身代わりにだと…あり得ない。」

そもそもあの子は、メアリ以外の誰にも決して心を開かず、何の興味も示さなかった。君はさっきジェームズの友人と名乗ったが：実際あの子には、メアリ以外の仲間はいなかったんだ」

「しかし、現にジェームズは、僕に常軌を逸した執着をしています：僕がどんなに拒否しても執拗に僕に迫り、決して諦めません」

「：にわかには信じられないな：君が本当のことを言っているとして、ならば、どうしてジェームズは君を選んだのか、納得のいく理由がなければね」

「でしょうね。僕が知りたいのも、実は、その点についてなんですよ」

ここで、クリスターは賭けに出ることにした。

どうしても腑に落ちないような疑い深い目で睨みつけているワインスタインを軽く牽制しながら、クリスターはドアを大きく開いて、自分だけでなく、傍らでじっと息を殺して様子を窺っていたレイフの姿も、彼が見られるようにしたのだ。

たちまち、ワインスタインの両目が大きく見開かれた。

「僕がジェームズの半身になれるはずがない：僕の片割れはここにちゃんと存在している。それなのに、一体、彼は僕にどうしろと言うんでしょね、ドクター？」

自分の前にそそり立つ、そっくり同じ姿をした兄弟を、ワインスタインはぼかんと口を開けたまま凝視した。そのまま石と化したかのように、しばし身動きも息をすることすら忘れたかのように固ま

ってしまった。

その瞳は、クリスターとレイフを通して別の誰かを見つめているかのようだ。

レイフを連れてきたのはある程度の計算の上でのことだったが、ここまでの衝撃をワインスタインに与えたことに、クリスター自身少なからず戸惑っていた。

「なあ、そのおっさん、どうしたんだよ…？ それに、おまえをJの半身にして、一体何の話なんだよ…？」

レイフが我慢しきれなくなったようにクリスターにそつと耳打ちをした瞬間、ワインスタインは大きく身を震わせた。

「何てことだ、またしても双子とはな」

忌々しげに吐き捨て、自らの言葉にまたぞつとしたかのように腕を体に巻きつけると、ワインスタインは改めてクリスターとレイフをしげしげと見比べた。

「ドクター…」

口を開きかけるクリスターをさつと手を上げて制すると、ワインスタインは観念したように肩を落とし、言った。

「いいだろう、2人とも、中に入りなさい。私が君達の助けになれるかどうかは分らんが、少なくとも話だけは聞こうじゃないか」

「感謝します、ドクター」

家の中に引っ込むワインスタインに続いてドアをくぐろうとするクリスターの腕を、何か訴えたような顔をしたレイフが捕まえた。

「あいつが双子だったってこと、何で、オレには黙ってたんだよ？」

何となく言いにくかったただだが、深く追求されるのもまた嫌で、寝耳に水の話に戸惑うレイフに対しては、クリスターは素っ気なく答えるのみにした。

「全てを説明する時間がなかっただけさ。ともかく、ここで質問攻撃はなしだよ、レイフ。いいから、黙ってついておいで：ワインスタインと僕の話に耳を傾けていれば、おまえの疑問も解けていくはずだから」

「何だか、またちょっと兄貴に騙されたような気がする…」

「騙すつもりがあったら、そもそもおまえをここに連れて来たりしないよ」

恨みがましそうな顔で睨みつけてくるレイフの肩を軽く叩き、腕にかかった指をはがすと、クリスターは先に立ってワインスタイン宅に足を踏み入れるのだった。

第5章深淵に潜むもの（7）

ワインスタインは、クリスターとレイフを、いつも患者との面接に使っているらしい、落ち着いた雰囲気の出接室に通した。

ソファの上には一匹の大きなレトリバー犬がいて、犬好きのレイフは目を輝かせると親しげに話しかけたり頭を撫でたりしはじめた。

ワインスタインは、この自宅兼仕事場に1人で暮らしている。妻とは数年前に離婚したが、現在大学生の娘は、体の不自由な彼を心配し、時々様子を見に来てくれるという。

まだ動揺が収まらないらしいワインスタインはタバコを一服し、その間に、クリスターは一連の事情をかいつまんで説明した。

常識も分別もある大人からしてみれば眉を潜めなくなるようなジエームズとクリスターの関わりあい、ワインスタインは余計な感想は交えることなく辛抱強く傾聴していた。しばし考えを巡らせるように黙りこみ、ようやく重い口を開いた。

「それで、一体君は、私から何を聞きたいんだい？」

「ジエームズ・ブラックに関して、あなたが知る全てを」

医者には守秘義務というものがあるから、何でも教えてあげられる訳ではないよといなすワインスタインに、患者が反社会的な行動をするのを阻止するのも医者の義務ではないのですかとクリスターは言い返した。

「あなたにとってジェームズは過去に診た患者の1人かもしれないが、僕にとっては現在身近に迫っている危機なんです。僕だけで済むならともかく―弟にまで火の粉が飛んではいけないかと心配です」

犬が外に出たがるのでドアを開いて出してやった後、レイフはソファに戻ってきた。

それを斜めに見ながらクリスターが付け加えると、ワインスタインもようやく決心したようだ。

「私がブラック家の双子兄妹、ジェームズとメアリに初めて会ったのは、彼らが9才の時だ。キャメロンは、大学時代、私の科目選択指導教授の1人でね、卒業後も親交が続いていたんだ―恩師からの依頼ということで、軽い気持ちで引き受けた仕事だった」

「ドクター・キャメロンはあなたが助手につくずっと前からブラック家の主治医になっていたんですよね」

「そう…双子が生まれてすぐくらいではなかったかな…。彼らの両親が、キャメロンの経歴を調べ上げたうえで、主治医となり双子の健やかな成長を守ってくれと頼み込んだんだ。だが、それは…まあいい…」

口を上らせかけた何かを飲み込むと、ワインスタインは神妙な面持ちでソファに並んで腰掛けているクリスターとレイフを見比べた。

「とりあえずジェームズとメアリの話をしよう…初対面の私には、君とジェームズの共通点と言えば双子だということしかとっさに思いつかないが、話を進めていくうちに、ジェームズがどうして君に

目をつけたのか、何らかのヒントが見つかるかもしれないからね」

そう前置きして、ワインスタインは幼い頃の双子兄妹について語りだした。

「初めて彼らを見た時の印象は、ありきたりだが、驚くほどそっくりだなということだったよ。性別は違ってても：おとなしく優しい印象のジェームズと澁刺としておはねなメアリは、どちらが兄で妹か一目では分らなかった。特にメアリは、髪型も服も、男の子っぽいものを好んでいるようだったからね。第一印象では、双子のうち優性なのは、物怖じせずによくしゃべるメアリの方かと思った。ジェームズは傍らで妹の話を微笑みながら静かに聞いているだけだったからだ。私はたちまち彼らを好きになったよ：2人とも可愛く、素直で利発な、とてもいい子達だった。互にくっついていて、安心して、依存しあう双子の典型のようでもあったが、その年頃では、まあそれも不自然ではなかった。だが、二度三度と彼らと面接し、様々なテストを受けさせていくうちに、私の精神科医としての自信は崩れていった」

「どうしてですか？」

「これは予めキャメロンから聞いていたのである程度予想してのだが、彼らの知能は非常に高く―特にジェームズの方は、そのIQも軽く200を越えていた。それに加えて、他人の心の裏側を読んで、自分の思うように操ることも、信じられないほど巧みだった。要するに、嘘や演技で大人を上手に騙してしまうんだ。だから、双子の間で実際に主導権を握っているのがジェームズだということに気がつくのに、しばらく時間がかかった」

やっぱり子供の時から嘘吐きだったんだとレイフがぼそりと感想

を漏らすのに、黙っている目配せをして、クリスターはワインスタインに注意を戻す。

「つまり、実際にはジェームズが妹のメアリを支配していたと……？」

「そう：メアリが男の子のような格好をしていたのも、むしろジェームズがそう望んでいたからだ」

「彼女は嫌がらなかったんですか？」

「そうなんだよ：彼らは、一心同体だった。生まれた時から傍にいる自分そっくりな相棒と一緒にいることで、完璧な安心感を得られる。ジェームズだけでなくメアリも、それを望んでいた。彼らは時々、自分達だけに分かる奇妙な遊びをしていた：顔を寄せ合ってひそひそと何事かを囁きあっているだけなんだが、どういう意味か初めは分からなかった。だが、気をつけて観察していると、双子はそれぞれ、自分ではなく相棒の口調を真似て、相棒に成り代わって、会話を楽しんでいったんだ。つまりジェームズがメアリを演じる、妹は兄に変身する―だが、その会話には不思議と整合性があり、まるで本当に双子の中身が入れ替わったかと疑うほど自然だった。たぶん、あれは：彼らがひとつであることの確認の行為だったんじゃないかと思うんだが……」

自分達にだけ分かる奇妙な遊び―どんな内容だったのか、細かいことは忘れてしまったが、クリスターにも心当たりがある。

クリスターが複雑な感慨に捕らわれていると、傍らのレイフが猛烈な悪寒を覚えたかのように身震いした。

「ですが、いつまでもそんな関係を2人が続けることは、結局でき

なかったんですね？」

「その通りだよ…彼らにはひとつ、決定的な違いがあった。つまりジェームズは男でメアリは女だというね…。思春期を迎えれば、嫌でもその違いが目立ってくる。身体的な成長と共にそれぞれ自我も強くなってくる…メアリが、ジェームズの分身以外の何者かになろうとしたのも当然の流れなんだ」

「ジェームズはどんな反応をしたんです？ 自分から離れていく妹、自分を映し出す鏡でなくなっていく相棒を見ることは彼にとって苦痛だったでしょう？」

ジェームズが以前語ったことをそっくりそのまま質問にして投げかけながら、クリスターは何だか息苦しいような気分を味わっていた。

「ああ、もちろん妹の変貌は彼を混乱させ、悩ませ、怒らせただろうと思うよ。裏切りとさえ、思ったかもしれない。ある時メアリは、『兄さんは、私がいつそ男の子だったら満足したのかしら』とこぼしたが…当時のジェームズの心に生じた恐慌は、そんな生易しいものではなかった。それはジェームにとって足元を根底から覆されるような恐怖だったんだ」

ワインスタインの目が、クリスターの顔からレイフの顔に移る。おそらく彼は今、彼らとブラック兄妹を比較しているのだろう。

果たして、ワインスタインは二組の双子の間に何か相似点を発見しただろうか？

「ここで、ジェームズ個人の人格についても触れた方が、後に双子

に起こった悲劇を理解しやすいかも知れないな。君は：おそらくもう、彼がどこか普通でないことに気がついているんだね？」

クリスターが何と答えるべきか迷っているうちに、ワインスタインはゆっくりと話し出した。

「メアリに関しては、ジェームズの片割れであるという以外、特に他の子供達と大きな相違は見られなかった。私と打ち解けるにつれ、彼女はよく私に悩み事を相談してくれたが、その気持ちはとてもよく理解できるものだったよ。だが、ジェームズは2年もの間傍にいたというのに、その心は最後まで謎のままだった。ジェームズはあまり積極的に友達を作らなかった：彼に言わせると他の子供達なんか面倒でつまらないからだそうだ。ただ、それではいけないのだという自覚はあって、メアリに倣って、友達と遊ぶ努力をしていた。単に妹にとって当たり前の世界が自分にとってそうでないことに焦りを覚えていたからかもしれない。それでも、友人達は皆、ジェームズを好きになったよ。普段の彼は、とても優しく親切で、一緒にいると心がほっと和らぐような温かな魅力に溢れていたからね。だが、彼自身は誰のことも本当に好きではなく、心の底ではおそらく軽蔑していた。そんな対人関係はジェームズを時に苛立たせた。その頃から、彼は次第に自分が周囲から遊離していることに気づくようになったからだ。時々ジェームズは、わざと露骨に他人の悪口を言って、私を戸惑わせることがあったんだ。それで私が、そんなことではいつまでたっても心を開ける親友なんてできやしない、君が寂しい想いをするんだぞと言いつ聞かせると、ジェームズは次第に青ざめ、困惑し、ついには黙り込んだ。自分の何が悪いのか、どうしたらメアリのようになれるのか、彼は本当に分からなかったんだ。高い知性と洞察力、鋭い感受性を持っているにもかかわらず、この心の成り立ちのアンバランスさはどういうことだと驚いたよ。友達だけでなく他の誰に対しても同じだった：表面的には何の問題

もない、皆から好かれるいい子を演じているが、他人と深く関わろうとしない：そんなジェームズの行動を時間をかけて観察し、面接を繰り返していくうちに、この子はもしかしたら人の心にうまく共感することができないのではないかという気がしてきた」

「人と共感する能力の欠如：？ それだけ聞くと、何だか、アスペルガー症候群のような発達障害にも聞こえますが：？」

「だが、ジェームズの場合、心の理論が分からないがために対人関係に不自由をするという訳ではないようだ。むしろ、我々が何を感じ、どう考え、どんな行動に移るのか、空恐ろしいほどに熟知している。ひょっとして読心術でもあるのではないかと勘ぐりたくなるほどにね」

「：そうやって、人を思うように操っちまうんだ」

ふっと思いついたように漏らすレイフを、クリスターは訝しげに振り返る。

「いや、前にハニーと会った時、彼女が言ってたことをちよっと思いついたんだ。人の心を読んで、本人も知らないどろどろした部分を見つけ、引き出してしまふ、違う人間に作りかえちまう：それが、J・Bの才能なんだって」

レイフの言葉にワインスタインは瞬きを繰り返した。一瞬彼を追及しようとするかのように口を開きかけたが、気を変えたようだ。

「私は、ジェームズの内面を分析するため、面接を更に繰り返した」
ワインスタインは再び遠い目になった。

「時としてジェームズは、私の自尊心を満足させる好ましい味方のようにあり、別の時には、どんな理論も通用しない、私の無能ぶりを痛感させる苦々しい敵のように振る舞った。やがて私は、自分がジェームズに遊ばれていたことに気付き、怒りのあまり身悶えたものだが、そんな反応すら、ジェームズの謎めいた笑みを深くさせるばかりだった。ジェームズは、私という人間の心を見透かしていたんだ。よい仕事をして上司であるキャメロンに認められたい、子供の相手をするだけで安定した収入まで得られるのだから楽なものだ、その上、双生児の相互依存に関する論文のひとつでも書ければ儲けものだ―僅か10才の子供にそこまで指摘されたら、精神科医としての面目は丸つぶれというものだ。一瞬そのままブラック家を去ることも頭に浮かんだが、その後にジェームズが投げつけた言葉を聞いて、気を変えた。『医者としてのプライドを傷つけられたと怒る前に、ドクター、もっと必死になって、僕が何ものなのか分析して、どうしたら普通になれるのか突き止めてよ』愛らしい天使の顔で皮肉るジェームズに、私は何かしらはっとさせられたんだ。ジェームズは悩んでいた。妹以外の誰とも心を通わせることはできずに孤立し、疎外感と不安に駆られ、どうか助けて欲しいと切実に訴えていることが分かったからだ」

ワインスタインの口調から、なんだかんだ言いながら、彼が幼い頃のジェームズを親身に気にかけていたことが窺えた。

「そうして、あなたはもう少し真剣にジェームズと向き合い、彼の問題解決に力を貸そうと決意したんですね？」

ワインスタインは自嘲的に微笑んだ。

「今思えば、私はとんだお人よしだったのかもしれないが、患者に

すがられたら果然奮起するのが医者というものだからね。だが、ともかく私は、それ以来可能な限りの時間をジェームズと過ごすようになった。ジェームズはその頃には、急に大人びてきたメアリともぎくしゃくしてくさっていたし、心を通わせることのできない友達と過ごすよりは私と一緒にいる方が気が紛れていいようだった。私はジェームズに振り回されながらも、その話に耳を傾け、助言を与えながら、理解しようと努めつづけた」

「それで、あなたは、ジェームズの願いに少しは応えられたんですか？」

ワインスタインは眉間に深いしわを作った。

「そうだね、私が想像するに：ジェームズの心にある重大な欠陥とは、要するに、他人の感情を自分のものとして実感することができないという点に尽きる。他人の喜怒哀楽は、彼の表面を掠め過ぎていくだけで、その胸を揺さぶらない。現実ではない、自分から切り離された別世界の出来事、せいぜい映画や本の中の登場人物に対するような捉え方しかできないんだ」

だからこそ、あんなふうに入の心の痛みに対して無感覚なのだ。

かつてデイベートのクラスで見たことや、ハニーや他の被害者達に対するジェームズの態度を思い出しながら、クリスターは胸がしんと冷えるのを覚えた。

「しかし、だからといってジェームズに人間らしい感情がなかった訳ではない。彼だってちゃんと心を持っていたんだ。しかし、それは完全に内側に向かい閉ざされていた。彼の抱いた感情は彼の中で孤立し、他の人間達のそれと響きあうことはなかった」

「ただ、メアリだけは、例外だったと？」

クリスターがつい傍らのレイフを振り返ると、彼は神妙な表情でじっと考え込んでいた。この話、どこまで弟に聞かせていいものか、クリスターは今更ながら躊躇った。

「ああ。それこそが、あの双子の興味深い所であり、ジェームズが妹を決して手放そうとしなかった理由でもあった。さっき、双子がしていた奇妙な遊びのことを話しただろう：あの遊びの中では、ジェームズは妹とひとつになって、同じように笑ったり、悲しんだり、怒ったりすることができた。人間らしい感情は彼の中でも生き生きと花開いていたよ。だが、そんな人並みの喜びすら、彼は妹の助けなしでは味わえなかったんだ。メアリは、周囲とのつながりが希薄なジェームズにとって、仲立ちのような役割も果たしていた。だから、彼女がいなくなること、ジェームズは完全にこの世界から切り離されてしまったんだ」

またしても、クリスターは何とも名状しがたい息苦しさを覚えた。

心を見透かすような笑みを湛えたジェームズの顔が脳裏に蘇り、クリスターにそっと囁きかける。

（ほら、君も今、僕に深く共鳴しただろう？）

隣に坐っているレイフが胡乱そうにクリスターを振り返った。

「どうしたんだよ、兄貴、気分悪そうじゃん？」

クリスターがぐっと握み占めていた手の上に、レイフは無造作に

自らの手を重ね、宥めるようにさすった。

レイフの手の暖かさに、クリスターを捕まえていた緊張状態はゆっくりとほどけていく。

「別に、何でもないよ」

強がるように、クリスターは呟いた。

「…そう、メアリの突然の死こそ、その後のジェームズを形作る、決定的な出来事だった」

自分の話に没頭しているワインスタインは、小声で囁き交わす双子には気がついていないようだ。

「メアリの突然の死はジェームズにとって大きな衝撃だったということは、僕も彼の口から聞きました。事故があった日の前後の記憶とともに言葉も失って…あなたが治療にあたられたんですよね？」

気を取り直したクリスターは、ワインスタインの話に再び神経を集中した。

「ああ…数ヶ月間をかけて幾つかの心理療法を試みたが、なかなか功を奏しなかったので、最後に催眠療法を使ってみた。迷ったんだがね…言葉を封じ込んでしまうほどのトラウマであるメアリの死の記憶を蘇らせるのは精神的なダメージが大きい…ジェームズが耐えられるか確信が持てなかった。だが、最終的には彼の母の意向で、ジェームズの記憶を蘇らせることにしたんだ。メアリの遺体を最初に発見したのはジェームズだったから…愛娘の上に一体何が起こったのか、夫人は知りたがった。ジェームズよりもメアリの方を偏愛

していた彼女にとって、彼の受けた心の傷などどうでもよかったのさ」

ワインスタインの静かな声に隠しきれない非難が滲んだのにクリスターは気がついたが、それより今は話の続きを知りたかった。

「それで、ジェームズの記憶は戻ったんですか？ あなたの治療は成功し、彼は再び話せるようになったと…」

ワインスタインは言いにくそうに口ごもった。

「声を取り戻せたんだから成功だとは言いつれないな…あの治療には、いまだに後味の悪さを覚えている…。あんなふうにジェームズの心を無理矢理こじ開けるのではなかった…パンドラの箱を開いたようなものだ…中から溢れ出したものに、我々は愕然とするしかなかったし、ジェームズはいえ術中であるにも関わらず錯乱状態に陥って、私に襲い掛かった」

苦渋の表情を浮かべて、ワインスタインは右瞼の引きつれた傷跡に触れた。

「これはジェームズにやられたんだよ。治療中、失語状態のジェームズには筆記によって、彼の思ったことを書かせることにしていたんだが…突然叫び出したかと思うと、その時使っていたペンを私の目に突きたてようとした。驚いた私が椅子から転げ落ちなければ、きっと失明していただろうな」

ワインスタインは重々しい溜息をついた。

「予想外のアクシデントで治療は中断されてしまい、その後はもう

滅茶苦茶だった。ジェームズは極度の興奮状態でずっと叫び続け、近づこうとする人間は誰彼構わず攻撃しようとしたし、自分自身も傷つけようとした。何とか取り押さえて、薬で眠らせたが：目が覚めればまた泣き叫ぶので再び強い薬を投与するしかなかった：だが、眠りの中ですら悪夢に襲われているようだった。もしかしたら、このまま精神崩壊をきたすのではないかと本気で恐れたよ。そんな状態が2日続いた末に、ようやくジェームズは目覚めた」

ワインスタインはこみ上げてくる後悔の念を堪えるように、身を2つに折って深々と項垂れた。

「私はあの子の心に取り返しをつかない傷をつけてしまったのではないかと心配したが、意識を取り戻した少年は、私の知るジェームズ・ブラックとは全く様子が変わってしまった。感情を激しく爆発させて取り乱したのが嘘のように平然としていたし、その瞳は深沈と静まり返っていた。以前と同じように話せるようになっていた。催眠療法をしたことは覚えているかと私が尋ねたら、彼は治療のこともその後自分がどうなかつたかも覚えていると答えた。次に、メアリが死んだことは分かっているかと尋ねると、はいと答えた。ほとんど他人事めいた冷めた口調に驚かされたよ。では、メアリの遺体を発見した時の状況を思い出したかねと、最後に確認してみた。彼は少し考え込んだ後、いいえ、覚えていませんと答えた」

「覚えていない：？ 錯乱したのは、ジェームズが一度記憶を取り戻したからでしょう：？ 思い出してはみたものの、やはり直視するには辛すぎる記憶だったから、また忘れてしまったとでも？」

「記憶というのは我々が思う以上にあいまいなで、自分の望むように作り変えられたり捏造されたりする：ジェームズの場合、厳密に言うと、彼の記憶喪失は治ったはずなんだ。だから、彼が嘘をつい

ているのでなければ―ジェームズの意識のより深い部分で、彼の脳が、耐え難いショックを回避するために、問題の記憶にブロックをかけているのかもしれない。無意識に、そこに至る神経の経路を断っているのかもしれない」

クリスターは疑わしげに首を捻った。

「…自分で自分に暗示をかけているようなものですか…？」

「おそらく、そんなところかな…だが、私には、眠りから覚めた後のジェームズについては、全く分からないというのが本音だ。あれきりジェームズはがらりと変わってしまった。あれほど愛したメアリの死さえ、完全に克服したかのようにだった。私はメアリという仲立ちを失った彼が果たして周囲とちゃんとつきあっているのかを案じたが―ジェームズはもはや以前のようには悩み不安に駆られることも、劣等感に苛まれることもなくなっていた。表面上は好ましいようである、その変化は、私をひどく落ちかなくさせたよ。少し前までは何とか分かることのできていた彼の心が全く見えなくなった…さながら、半身の死と共にジェームズ・ブラックという人間も死んでしまったかのようにね」

「それからしばらくして、あなたはブラック家での仕事を辞めたんですよね？」

「ああ、ジェームズの状態を見て、私のできる仕事はもう何もないと悟ったんだ。彼はもう誰からの助けも導きも必要としていなかった。この先ジェームズが一体どんな大人に成長していくのか考えるとは暗澹たる気分にもなったし、正直危惧したが、本人がこれでいいと言うのなら、もはや精神科医の出る幕はないよ」

「そう…ですね…」

ぼんやりと相槌を打ちながら、クリスターは、ワインスタインの理解も及ばなくなったジェームズの変化に思いをはせた。唯一無二の半身を失った彼が、何を考えたのか想像した。

（おそらくジェームズは、その日を境に、何かを吹っ切ってしまったんだ。こちら側に引き止めてくれる相棒はもういない…人間として大切な部分が欠落したままでも、それが己の自然な姿であるならば、あるがままに受け入れ、後はひたすら突き進むしかなかった）

クリスターは体の奥底からこみ上げてくる得も言われぬ怖れを抑えようとするかのごとく、己の腕を強く掴んだ。

（そうして、僕が知るジェームズ・ブラックが生まれた―かつてワインスタインに助けを求めた、ちょっと風変わりな子供は、今や立派な『怪物』にまで成長したということだ）

ぎこちない沈黙がしばし流れた。やがて、ワインスタインが耐え切れなくなったかのように口を開いた。

「…別れる際に、私は、ジェームズに今どんな気分がするかと尋ねてみた。すると彼は『あなたが心配するほど悪くないですよ』と答えた。『この世で僕はたった1人、完璧に自由な存在だから』と、晴れ晴れとした顔で笑うジェームズは幸福そうにさえ見えたよ。我々には理解のできない幸せだがね」

クリスターはワインスタインの顔をちらりと一瞥すると、視線を床の上に落とした。

ジェームズの心情がゆっくりと足元から這い登ってくる。押しやることもはね除けることもできない、執拗にまつわりつき、絡みつき、やがてそれは、クリスターの胸の奥にすっと忍び込んできた。

（ほら、君の心を捕まえたよ、クリスター。言っただろう、僕達は互いに分かり合うことができるんだ）

勝ち誇るかのようなその囁きは、これまでになく身近に、まるで自分の内側から発しているかのようにクリスターには感じられた。

（そうだな、ジェームズ、確かに僕には、君がその時何を思ったかが分かるよ。いっそ自ら怪物になってしまえば、楽になれる、瑣末な悩みに足をとられることも、悪夢に苦しめられることもなく、ぐっすりと眠れる…）

クリスターは顔をしかめ、嫌なものを振り払うかのごとく頭を振った。

「どうかしたかね？」

ワインスタインは真っ青になっているクリスターの顔色に気付いて、眉を潜めた。

「一体何がジェームズ・ブラックのような怪物的な人物を作り上げたのか、僕はずっと疑問だったんです。僕にとってジェームズは、関心はあったけれど知るのが怖いような謎でした。あなたの話で、少しずつ彼の隠された貌が明らかになってくるにつれ、僕の理解は深まっていく…そのせいでしょうか、何だか彼の心が僕の中に流れ込んでくるような錯覚を覚えるんです」

額に浮かんだ冷たい汗をぬぐうと、クリスターは心を落ち着けるため大きく息をついた。

「それは、あまりぞっとしない気分だろうな」

ワインスタインは、そんなクリスターの反応に興味を引かれたような顔をした。

「ところで、ドクター、さっきから話を聞いていると、あなたは随分ジェームズに対して、好意的……いや、同情的なようですが……？」

気分を切り替えるためにも、クリスターは何か質問をせずにはいられなかった。

「私は、幼い頃のジェームズの相談相手として、彼の置かれた状況もよく見てきた。感情移入しすぎたんだろうね。君が、ジェームズを嫌悪し恐れるのはよく分かるが、彼だとして、自ら望んでああ生まれついた訳ではない。それに私は今でも、やりようによってはジェームズを正しい方向に導くことも可能だったのではないかと思うんだ。未発達な共感能力も、訓練によって少しずつ改善できるはずだった。周りが彼の状態をちゃんと理解し、愛情と忍耐によって必要な援助を与えてくれればね。だが、彼の場合、それは難しかった」

「どうしてですか？」

「彼の母親だよ」

ワインスタインはもはや腹立たしさを隠しもしなかった。

「彼の母は、自分の生んだ子供だというのに、『普通』じゃないと

いう理由で、ジェームズをひどく忌み嫌っていた。初めから、彼がいつか何か恐ろしいことをしでかすと決めてかかっていた彼女は、いずれはジェームズをメアリから引き離しどこか遠くにやることを考えていた」

「どうして、そこまでジェームズを疎んじたんです？」

「それには、彼女の兄―つまりジェームズの叔父だがね―に原因があっただ」

「若いうちに病気で亡くなったという…？」

キャメロンの研究対象にもなっていた人物が出てきたことに、クリスターはつい耳をそばだてた。

「そんなことまで知っているのか…全く、君も得体の知れない子だな、クリスター君」

「それより話の続きを…」

「夫人の話から考えるに、どうやら彼女の兄もジェームズと似た障害を抱えていたらしい。いや、こちらはもっと明白に人格異常者と言ってもよいくらいの極端な人物だったらしいが、夫人の思い込みも多分あるようだから、よく分からんよ。ただ、彼女がこの兄から虐待を受けていたのは確かなようだ…二十歳そこそで兄が死んでやっと解放されるまでね。ところが、結婚して自分が産んだ子は、どうしてもその兄を思い出させる…気性も話し方も何から何までそっくりでぞつと言っていた。そして、メアリのことを案ずるあまり、一層ジェームズには辛くあたったんだ」

「彼女は、かつて自分が兄から受けたような仕打ちを、今度はジェームズがメアリに対してするのではないかと恐れていたんですね」

「全く、とんだ妄想だよ……夫人にも同情はするが、そのとばかりを受けた子供達こそ哀れだ。あんな偏見に凝り固まった母親の監視下で育てられては、ジェームズ自身がまともな人間になろうと努力したところで、望ましい成長を遂げることなど土台無理だったのさ。夫人はメアリにもジェームズから離れるよう、ことあるごとに悪意のある考えを吹き込んだ……双子の絆は固かったから、メアリは母の言うことなど受け付けなかったが、思春期になって、何となくジェームズとの仲がうまくいなくなってくると次第に影響されるようになった。あんなに仲のよかった子達が大人の思惑に左右されて……全く、不幸な話さ。そういうしているうちに、メアリがあんなことになって――」

ワインスタインはふいに寒気を覚えたかのように、ぶるりと身を震わせた。

その様子を、クリスターはじっと押し黙ったまましばし凝視した。

ジェームズ・ブラックを哀れだと、この男は語る。果たして、自分はどう思う？

「ドクター」

「うん？」

クリスターは床の上の一点を睨みつけながら、固い声で言った。

「たとえば、ジェームズがどんな家庭環境で育ったのだとしても、僕

は、あなたのように簡単に、彼に同情することはできません」

そうして、ともすれば萎えそうになる気概を奮い起こして、自分に言い聞かせる。

（そうだ、ジェームズに感情移入した男の話を鵜呑みにしてどうする：僕は必要な情報を手に入れるためにここに来たんだ。この男の下らない感傷に引きずられるためじゃない）

強引に気持ちを切り替えて、クリスターはこれまでワインスタインが語った話を思い返し、その内容を吟味し始めた。

すると、すぐに、ひとつの疑問に行き着いた。

（ワインスタインの催眠療法によってメアリの死に関する記憶を蘇らせたジェームズは、精神崩壊寸前になるまで錯乱した。彼にとってそれほど辛い記憶、ワインスタインが開いたパンドラの箱の中から溢れ出したものとは、一体何だったのだろうか…？）

ふと、クリスターが顔を上げると、ワインスタインが奇妙な顔で自分の横をじっと眺めていた。

訝しく思っ彼に声をかけようとした時、規則正しい寝息が隣から漏れていることにクリスターは気がついた。

「レイフ…？」

まさかと思っ隣を見たクリスターはちよつと唾然となった。

しばらくやけにおとなしいと思っいたら、レイフはがっくりと

頭を垂れてゆらゆらと舟を漕いでいたのだ。

「お、おい…」

思わず顔を赤らめ、焦ったクリスターがレイフの肩を掴んで揺り起こそうとすると、ワインスタインが小さく吹き出した。

「…目覚ましにコーヒーでも淹れてこよう」

立ち上がってキッチンに向かうワインスタインを見送った後、クリスターはすやすや眠っている弟の暢気な顔を睨みつけた。

確かに、レイフには小難しい話が多かったかもしれない。それに、ジェームズ・ブラックの内面になど彼ははなから興味はなかったのだから、長い話につきあわされて退屈もしただろう。しかし――。

「僕がワインスタインとあんなに重い話をしていたのに勝手に寝てしまうなんて、信じられない…大体J・Bと闘う気満々の割には、おまえ、緊張感がなさすぎないか…？」

脱力するやら無性に腹が立つやら、クリスターはレイフの前に仁王立ちになって、その向こう脛を思い切り蹴りつけてやろうかとしばし迷ったが、何だかそれも馬鹿馬鹿しいのでやめた。

代わりに、ワインスタインの消えたキッチンの方に向った。

ワインスタインは、これまでクリスターの心の中であって、形にならず、混沌のままとどまっていたものを言葉にしてくれた。

しかし、彼はまだ何か大事なことを隠している――そんな確信にも

似た思いが、クリスターを急ぎ立てていた。

第5章深淵に潜むもの(8)

「すみません、ドクター、手伝います」

「ああ」

火にかけたポットを眺めながら思案に暮れていたらしいワインスタインは、クリスターを見て少し困ったような顔をしたが、彼がキッチンに入ってくるのを拒みはしなかった。

戸棚の中からコーヒー豆を取り出して再びコンロの所に戻る、ワインスタインが不自由な側の脚を少し引きずるようにして歩くのを横目で眺めやり、クリスターは言った。

「…その脚は、例の車の事故で傷めたんですね」

ワインスタインは胡散臭そうな目つきでクリスターを振り返る。

「ジェームズは、あなたはその事故で亡くなったものと思っているようでした…」

ワインスタインはクリスターに背を向けると、感情を抑えた声で淡々と言った。

「そうか…確かに一時は生死の境をさまよったからね。誰かが勘違いをして、私は死んだものとジェームズに伝えたのだろう…どのみち私とブラック家との縁は切れていた。催眠療法の結果があんな騒動となって以来ジェームズの両親との折り合いもよくなかったからね…キャメロンは何度か見舞いに来てくれたが…」

ワインスタインの説明はどこかぎこちなかったが、クリスターは追求しないことにした。

（ジェームズに嘘の知らせを伝えたのは：大方キャメロンあたりか）

ワインスタインはジェームズの心の深淵に誰よりも深く分け入った人間だ。その人間が、ブラック家を去って間もなく、事故に遭い、命をなくしかけた。キャメロンは、クリスターが今抱いているのと同じ疑惑を密かに覚えて、あえてジェームズに嘘をついたのかもしれない。

（考えが飛躍しすぎかな。コリン達の事故の記憶が生々しいせいとか、つい深読みしてしまう。しかし、もしもーワインスタインが、ジェームズに関する、何か知ってはならない事実を掴んでいたとしたら、口封じの対象となったということもあり得るか…）

胸にわだかまる疑念がゆっくりと形を取り始めるにつれ、クリスターは妙な焦燥感に駆られて、また口を開いた。

「ドクター、1つ、伺ってもいいですか？」

人数分のカップをテーブルの上に置くと、クリスターはワインスタインに向き直った。

「あなたはジェームズに催眠療法を施して、一度は彼の記憶を蘇らせた人だ。ジェームズ自身が恐怖のあまり再び封じ込んでしまった記憶とは何なのか、あなたは承知しているのではないですか？」

クリスターがその点を追求してくることは予想していたのか、ワ

インスタインは動揺こそしなかったが、後ろめたそうに視線を逸らした。

「そう容易く他人に漏らせるような話じゃない」

「生憎、ジェームズにとって、僕は他人じゃないんです。唯一無二の半身だったメアリの身代わりになることを望むくらいですからね。彼は一体――」

クリスターは一瞬言葉を途切れさせた。自らが口の上らせようとしていることに気付き、愕然となった。

（そうだ、ジェームズにとって、唯一愛した妹が池に落ちて死んでいるのを見つけたことは、確かにショックだったろう。しかし、メアリの死自体を受け入れられなかった訳じゃない――そのことはちゃんと認識できていた。ジェームズが自分に暗示をかけてまで忘れようとした、それがきっかけとなって彼を本物の怪物に変えてしまったほどの忌まわしい記憶とは、つまり――メアリが何故、どうやって死んだのかという、ジェームズだけが知っている真実そのものではないのか……）

思い至った、ある恐ろしい可能性にクリスターは一瞬息を止めた。

（まさか……いや、まさか、そんなこと――）

いつの間にか口の中がからからに乾いていることを意識しながら、クリスターは掠れた声で囁いた。

「ジェームズはあの日……自分の妹に一体何をしたんです？」

ワインスタインのコーヒー・ポットを持つ手が震えた。

「そんなことを君が知る必要があるのかね？　私が君に話す必要があるのかね？」

怒ったように吐き捨てて、ワインスタインはカップに湯気をたてるコーヒーを注ぐ。

「僕がジェームズに関する全てを知らなければならない理由は説明したはずです。それが彼の弱みとなりうる情報ならば、尚更です。僕はレイフを守りたい。ジェームズが、自分の片割れとして僕を本気で欲しがっているのなら、弟は当然邪魔な存在のはずですからね」

言った後で、クリスターは思わず身震いしそうになった。

（冗談じゃない！）

クリスターはのしかかってくる恐れを払いのけるかのごとく頭を振りたてると、息を殺して自分の様子を窺っているワインスタインを凄みのある目で睨みすえた。

「もう二度とレイフに手出しできないよう、ジェームズ・ブラックを葬り去るためなら、僕はどんなことでもする覚悟なんですよ、ドクター」

クリスターの低められた声に今までとは違う危険なトーンが加わったことにワインスタインははっと身を固くし、慄いたように一歩退いた。

それへ、クリスターは一步一步ゆっくりと近づいていく。

両手はいつでも素早く使えるよう体の脇に垂らし、獲物を追い詰めていく猫さながら足音もさせず。

「くそっ、君らを家に入れるのではなかったな」

ついに降参したワインスタインが、忌々しげに吐き捨てた。

クリスターはすぐに足を止めた。

「そうかもしれませんね」

にこりと笑って何事もなかったかのようにコーヒーのカップを一つ取り上げるクリスターを恐ろしげに見守り、ワインスタインはついに重い口を開いた。

「実を言うとね、メアリの死の少し前から、彼女とジェームズの関係はかなり悪化していたんだ」

クリスターはコーヒーを口に運ぶ手をとめ、ワインスタインをちらりと見やった。

「その頃、メアリには親しくしているボーイフレンドがいたんだ。子供らしい可愛い初恋だったわけだね。でも、ジェームズには気に入らなかった。そんな折、屋敷で子供達を大勢招いたパーティーがあったんだ。メアリのボーイフレンドももちろん出席していたが、その席で、その子は大怪我をしてしまった」

「何があったんです？」

「ブラック家で飼われていた大きなグレイトデンに襲われたんだ。その犬はよく訓練されていたので、どうしていきなり子供を襲ったのか、誰にも分からなかった」

「ジェームズがけしかけたんですか？」

「証拠はないよ。でも、メアリはそう思ったようだね。嫉妬に駆られたジェームズが、自分のボーイフレンドを殺そうとしたんだとね。実際、その子の怪我は運が悪ければ死んでいたような大層なもので、しばらく入院を要したし、体にも大きな傷が残った。当然親は激怒し、散々もめた末にブラック家が慰謝料を払うことで和解したが、その子とメアリの友情は引き裂かれてしまった」

この顛末にクリスターはなぜか心を乱され、居たたまれなくなつたように目を閉じた。

（ここはジェームズの異常さに眉を潜めるところのはずなのに、どうして、こんなにも切なく痛ましい気分になるのだろうか……？）

片割れの心が自分以外に人間に寄せられていくのを目の当たりにし、何としても阻止しようとしたジェームズ。それに似た苦しさならば、クリスターにもおそらく馴染みがある。

「メアリの死は、その一件が解決して数週間後のことだった」

ワインスタインの言葉に、クリスターは我に返った。

「実は：ブラック夫人は最初からジェームズを疑っていた。私は初め、彼女のたわ言など信じてはいなかったんだが――しぶしぶ行なった催眠療法の結果、信じがたい事実が明らかになったんだ」

あの日、メアリはジェームズと例の池の傍で言い争っていた。

怪我をさせられた友達のこと、彼女は心底実の兄を恐れ、反発するようになっていた。

これ以上自分を縛らないで欲しいと泣きながら訴える妹にジェームズは途方に暮れ、次第に絶望感をつのらせていった。

唯一の理解者、もう1人の自分である相棒に拒否されただけでなく、もはや彼女が以前と同じではなくなっていることを悟ったからだ。

幼い子供から少女に成長しつつあったメアリはもうジェームズにあまり似ていなくなっていた。心も遠くなっていた。彼女はジェームズの分身であることをやめて独立した人格を獲得しつつあったのだ。

メアリの容赦のない非難の言葉を浴びせかけられているうちに、ジェームズはかっとなって妹に襲い掛かった。後ろには、池があった。

「池に落とされたメアリは兄に助けを求め、何度も這い上がろうとした：しかし、ジェームズは許さなかった。抵抗する妹の頭を押さえて水の中に沈めたんだ：彼女の力がつき、もはやその体が動かなくなるまで、ジェームズは泣き叫びながら、そうした」

どうして、こんなことをするの、兄さん…？ どうして、どうして…？

「催眠状態のジェームズは、呆然と彼の告白を見守る私の前で、涙に掠れ震える声で何度も何度もそう叫んでいたよ」

かつて妹との2人だけの遊びの中でそうしたように、メアリの口ぶりを真似て、彼女の恐怖を絶望を自分のものとして味わいながら――。

「そう、ジェームズは、もはや自分のものではなくなった半身をその手で葬り去ったんだ」

沈痛な面持ちのまま語り終えると、ワインスタインは深い溜息をついた。

長年胸の奥にしまいこんでいた暗く重過ぎる秘密をついに誰かに打ち明けることができたという安堵も少し混じっていたかもしれない。

やがて彼は、自分の前で石と化したかのように立ち尽くしているクリスターに気がついた。

「どうした、また調子が悪くなったのかい？」

ワインスタインの心配そうな声を聞かなくとも、自分が今ひどい顔色をしていることはクリスターにも察しがついた。

クリスターは自分のものとは思えないほど重い手をのろのろと上げ、額を覆った。冷たい汗が噴き出している。

「大丈夫です……ただ、ちょっと――色々想像してしまっ……」

気持ちを静めようと固く目を瞑り、深呼吸をするが、胸を圧迫されるような苦しさは収まる気配がない。

瞼の裏には、あの池の畔に放心したように佇んでいたジェームズの姿がまざまざと映し出されていた。

（メアリはね、この池で溺れて死んだんだ）

その姿がかき消えたかと思うと、今度は、少年の姿になったジェームズが双子の妹を泣きながら池に沈めようとしている場面が、まるで見たことがあるかのように鮮やかに浮かび上がる。

変わってしまった相棒。昔のように心の通じ合わなくなった半身。彼女はジェームズを捨てて、手の届かないどこか遠くへ行ってしまうのだ。

（愛している、でも、僕のものでないおまえなら、いらぬ。僕ではない他の誰かとおまえと一緒に生きていくのを見ることには、とても耐えられないから――）

ジェームズが決して語らなかった言葉が、異様な生々しさを持って、クリスターに頭の中に流れ込んでくる。

クリスターは強烈な寒気に駆られてがたがたと震えだした。もはや抑えることはできなかった。

（そう、殺したんだ、おまえは……自分と同じ唯一のもの、同じ血、骨、肉を――おまえ自身をその手で殺した！）

体が鉛の塊にでも化してしまったかのようにひどく重い。膝から

力が抜け、今にも崩れ落ちてしまいそうだ。

（生身の彼女が僕の傍にいないことは今でもやっぱり寂しいけれど、同時に安心もできるんだ。死んでしまったおかげで、僕は彼女が変わっていくのをあれ以上見ずにすんだわけだし、それに、メアリはもう僕以外の誰のものにも永遠にならないわけだからね）

クリスターに死んでしまった双子の片割れのことを懐かしげに打ち明けたジェームズは、彼の共感を引き出せることを確信していた。

共感どころか激しい反発を抱いたクリスターだが、実際のところ、それは同族嫌悪に他ならない。

（そうだ、許されない恋に身を焼くくらいなら、いつそ君も僕に倣って見たらどうだい、クリスター？　きっと、楽に、なれるよ）

クリスターも、いつか同じ状況に立たされれば、自分と同じ相棒殺しになるかもしれない――からかい口調でジェームズが仄めかしていたのは、つまり、そういうことなのだ。

（どうして、こんなことをするの、兄さん？）

冷たい水の中で苦しげにもがいている女の子がいる。

助けを求めて伸ばされる、その手を振り払い、空気を求めて浮かび上がろうとする、その頭を何度も執拗に押さえつけている、あれは――誰？

歪んだ鏡に映るもう1人の自分。もしかしたら、いつかああなるかもしれないクリスター自身――。

あり得ない話だと分かっているつもりなのに退けることができない。圧倒的な恐怖がクリスターの全身をひしがせていた。

（どうして、こんなことをするんだよ、クリスター？）

いまや、水の中で溺れかけている者のイメージは、レイフだった。クリスターは、自分の手がもぐ弟を執拗に水の中に沈めようとしているのに気付いて、声にならない悲鳴をあげた。

（あ…あ…あ…）

頭ががんと痛む。世界がゆっくりと回転し始める。

まともに立っていることすらできなくなってきて、クリスターは後ろに大きくよろめいた。

その時、転倒しかけたクリスターの背中を誰かがぶつかるときに支え、左右にぐらぐら揺れている肩をしっかりと手が支えた。

「兄貴！」

耳元で聞きなれた大声に呼ばれ、クリスターははっと目を見開く。

自分の体を支えていた腕に、クリスターはそれこそ溺れていた人がするようにすがりついていた。

「ど、どうしたんだよ、クリスター？」

クリスターはゆっくりと目を上げて、レイフの心配そうな顔を認めた。それから頭を巡らせて、ワインスタインがやはり喫驚した、しかし同時に医者らしい冷静さで自分を観察していることに気付き、唇を噛み締めた。

「あんた、一体クリスターに何をしたんだよっ?!」

兄がこれほどショックを受ける理由がさっぱり分からず、つい事先をワインスタインに向けるレイフの手を、クリスターはなだめるように叩いた。

「ドクターのせいじゃないよ、レイフ。彼はただ、僕の求めに応じて、ジェームズの秘密を教えてくださいただけなんだから」

「あいつ、妹を…殺したって…?」

クリスターはついレイフの腕を強く掴んでしまった。

「聞いてたのか…」

「うん…うつかり居眠りしてたのに気付いて、慌ててキッチンの方に行ってみたら、何か、兄貴達が深刻そうに話しているから入りづらくなって…タイミングを窺っているうちにクリスターの様子がおかしいことに気付いて、とっさに飛び込んできたんだよ」

「そうか…」

クリスターは溜息をついた。

「おい、しっかりしろよ、クリスター…ったく、何でおまえがここ

までショックを受けるんだよ。そりや、オレも、いきなり妹殺しながら聞いて、えっ、マジかよってびっくりしたけれど……」

レイフの声を聞いているとクリスターを捕らえていた束の間のパニック状態は収まり、あの生々しいジェームズの声も潮が引くように遠ざかっていった。

それでも、ジェームズの感情をしばし共有してしまったことで、クリスターは精神的にひどく消耗していた。

「……君のお兄さんはおそらく、ジェームズ・ブラックに対し、ある意味感情移入しすぎたんだよ」

ワインスタインが口を挟むのに、レイフはうろんそんな目を向ける。

「犯罪者の心理を分析する捜査官や心理学者には、そういうケースが時々出るらしい。相手の心の深淵を覗き込んでそこにあるものを理解するため、自らを相手の心理に同化させる。謎の解明のために必要なプロセスだが、それが高じて、分析する相手との間に一種の共感状態が生じてしまうんだ。分析する側が主導権を握っている限り弊害は少なからうが、万が一にも相手の方が強かった場合、心を取り込まれ、支配されることにもなりかねない。察するに、そういうことなんだろうね、クリスター君？」

先程脅された意趣返しだろうか、したり顔のワインスタインをクリスターは軽く睨みつけた。

「クリスター、気分が悪いなら、向こうの部屋のソファで休ませてもらえよ」

レイフがクリスターの手を励ますようにぐっと握り締める。

「いや、もう大丈夫だ」

クリスターがきまり悪くなりながら身を引くと、レイフはまだ納得できないように手を伸ばして彼の腕に触れ、寄り添ってきた。

「クリスター君」

ワインスタインの眼差しが興味深そうに自分達に当てられていたことに気付き、クリスターは少し不愉快な気分になった。

「ひとつ聞いていいかな：君とその弟君は、いつも、そんなふうと一緒に行動しているのかい？」

「片時も離れずに一緒ということはないですよ。この年になって、そんなの無理でしょう」

「子供の頃、君達のご両親は君達に同じ服を着せたのかな？ 友達と遊ぶよりも、兄弟2人でいる方が好ましかったんじゃないかい？」

クリスターは眉根を寄せて、何か言いかけるレイフを後ろに隠すようにワインスタインの前に立った。

「ドクター、そんなことは、あなたには関係ない話でしょう？」

「君が一方的に私に質問を投げかけるばかりではフェアじゃない。それに、君はそもそも何故ジェームズが自分に執着するのか、一体自分をどうするつもりか、知りたいんだろう？ 私にも少しはヒン

トをくれないと答えようがないよ」

クリスターは言葉に詰まって、黙り込んだ。

「クリスター君、君は今まで、弟のガールフレンドや彼が特別親しくしている友達に対して嫉妬を覚えたことはあるのかい？」

即座にアリスのとの一件が思い出され、クリスターはワインスタインの追求から思わず顔を背けたくなった。

背後にいるレイフをひどく意識してしまう。答えることをためらっている、後ろから、あっけらかんとした声が代わりにその質問に答えた。

「やきもちなら、オレは、しょっちゅう焼いてるよ。クリスターがつきあってきたガールフレンドや恋人：オレよりもそっちの方を優先されると、仕方ないとは思ってもちよっと寂しいよ。そんなの当たり前じゃん」

クリスターがじっと耳を傾けているとレイフの腕が無遠慮に伸びてきて再び彼を抱き寄せた。

「でもさ、クリスターの一番の相棒はやっぱりオレだって思ってるから。こいつの隣の場所は誰にも渡さないよ」

ふざけるようにクリスターの肩に顎を乗せたまま、レイフは明るい口調で言って、ぎゅうっと抱きしめる腕に力をこめた。

「ふむ…」

自分よりも大きな双子が目の前でじゃれあっている光景に、ワインスタインは微妙に目を泳がせながら、指先で頬の辺りを引っかいた。

「レイフ、分かったから、もう、離せよ……！」

「やだ」

恥ずかしさのあまり本気で怒ったクリスターが足を踏みつけると、レイフはぎゃっと叫んでやっと彼を解放してくれた。

「ドクター？」

片足で跳ね回りながら痛い痛いと大げさに騒ぎ立てるレイフは放っておいて、クリスターが恐る恐る呼びかけると、ワインスタインはコーヒーをゆっくりすすりながら何事か考え込んでいた。

「メアリという唯一無二の半身を自ら殺してしまったジェームズ……彼女と同じものなど二度と手に入らないと諦めていたはずだ。その彼が、今、君を選んだ……ジェームズと同じように双子の相棒がいて、その絆はとても強い。クリスター君、ジェームズは確かに君をメアリの身代わりと言ったのだね……？」

「は、はい……正確には、メアリが欠け落ちた部分にぴたりとあてはまってくれる者と――」

「ジェームズは君に、かつてメアリの上に投影したような、自分の似姿を発見したのかもしれない……。あるいは、永遠に失ってしまったはずの己が影、復活した半身を君の中に見たということか……？」

ワインスタインはまたしばし黙り込んで、思案に没頭した。

「だが、それだけでは腑に落ちないな。メアリがジェームズにとって特別な存在だったのは、彼女との間にのみ、ジェームズは感情の共有ができたからだ。私はジェームズとは随分長い間会っていないから、この推論がどこまで正しいか分からないが――ジェームズが他人である君にそこまで本当に執心しているとすれば、ジェームズは君とならメアリの間に成立したような何らかの心の交感ができると思っっているのかもしれない……」

「心の……交感……？」

背筋に薄っすらと寒いものを覚えて、クリスタ―はまた少しレイフの温かい手が欲しくなった。

「その点については、君の方こそ心辺りがあるんじゃないか？ 先程の君の動揺ぶりを見る限り、ジェームズの感情を君は共有することができるようだ。彼の閉ざされた心に深く食い入り、孤立した感情に直に触れることができる、君だから――ジェームズはかくも強く欲するんじゃないのかね」

「僕はジェームズに共感を覚えたことなど一度もありませんよ」

クリスタ―は言葉では頑として否定したが、ジェームズの過去を聞いてあんなふうに取り乱してしまった後では、そのことに自信が持てなかった。

ワインスタインはふっと苦笑した。

「ともあれ、私が君から聞いた話から察するに……君は、やはりジェ

ームズにとって特別な存在となってしまうている。君とジェームズの間で持たれた闘いも、彼の思い込みを助長してしまったんじゃないかな？　君とジェームズは、お互いの心に深く分け入り分析することで勝ちを取ろうとした―これもある種の心の交感と言えないことはない。そして何より、ジェームズにとって、君が現れたことによって、妹の喪失以来すっかり色あせてしまった世界が急に生き生きと輝きだしたように感じられるようになった。純粋に楽しかったし、嬉しかったんだ。彼の心を理解し、対等に渡り合える者。君は確かにジェームズが切望した理想の相棒なんだろうな」

つい怖気を振るいそうになっていたクリスターの傍らに、いつの間にかまたレイフがぴたりと寄り添っていた。

（しっかりしろよ、クリスター、オレなら、ここにいるからさ）

（うん…）

ほんの一瞬交し合った眼差しだけで気持ちを通じ合う心地よさに、クリスターの肩の力がすんと抜け落ちる。

（違う…ジェームズと僕の間には、こんな温かな心の交流はない―何が理想の相棒なものか、あいつは単に僕を玩具にして壊したいだけなんだ）

クリスターが微笑むとレイフは分かっているというように頼もしく頷き返してくれた。

そのままレイフは、ワインスタインの方に目を向けた。彼の語ったぞっとするような説を、レイフならすぐさまむきになって否定しかかるかと思ったが、その横顔は厳しく引き締まっていたものの、

いつになく冷静だった。

「まあ、私の推測はそんなところだよ。当っている部分もあるかもしれないし、間違いもあるだろう…多少なりとも君が答えを導き出す一助になればいいがね」

簡単に締めくくるワインスタインに、レイフは目をきらりを光らせ、すぐさま食らいついた。

「待てよ、まだ、教えてもらってないことがあるぜ」

ワインスタインは虚を突かれたようだ。

「あいつは、要するに、クリスターをどうするつもりかってことだよ…相棒にとって望んでいるのなら傷つけるつもりはないのか…？ 妹相手にしてたみたいに、仲良くしたいって？ でも、実際、あいつのやっていることは、クリスターを苦しめ、傷つけることばかりだ。一体何がやりたいんだよ、あいつは？」

「うむ…」

ワインスタインはレイフの素直な疑問に眉を潜め、ポケットからタバコを取り出すとそれに火をつけた。

「ジェームズが君をどうしたいのか…君から何を手に入れれば、彼は満足できるのか…それこそ、私などより、彼の心の深淵を覗き込んだ、クリスター君、君の方が答えを容易に導き出せそうだがね？」

「おい、肝心な所で、逃げるなよ」

「逃げているんじゃない…私にも本当に分からないんだ…いや、待てよ…ジェームズは自分じゃないものを欲しがっている―メアリが死んでからずっと、その大切なものが欠けたままで生きてきた…彼は、ひよっとしたら…」

ワインスタインはタバコをふかすのをふいにやめた。

「ひよっとしたら？」

ワインスタインは自分の頭に閃いた考えに啞然としたようだった。その顔をゆっくりと、固唾を吞んで見守っている双子兄弟に向けた。

「ジェームズ・ブラックは、君の感情を喰らいたがっている」

レイフが怪訝そうに顔を歪めた。

「何だ、そりゃ？」

「今ちょっとおかしい連想をしてしまったんだが、獏という中国の伝説上の生き物がいてね、夢を喰うと言われているんだ。よい獏は悪夢を喰って人を助けてくれるが、悪い獏は人の精神そのものを喰らってしまう。よって、人間の精神崩壊は、人知を超えた何か邪悪なるものの仕業だという訳だ」

早口になって説明した後、ワインスタインははたとなって、苦笑いしながら頭を振った。

「発想が飛躍過ぎたな…人の精神を喰らう怪物か―」

「なぜ、そんなことを思いついたんです、ドクター？」

黙っていられなくなって、クリスターが尋ねた。

「ジェームズの胸を占める、もっとも大きな衝動は何だと思うかね、クリスター君？」

クリスターは自分の心臓が石となった気がした。答えずにいると、ワイスタインは言った。

「飢えだよ」

石の心臓がちがちときこなく動いて鼓動を打つのを感じながら、クリスターはワイNSTAINの指が新しいタバコを取り出して火をつけるのをぼんやりと見ていた。

「ジェームズはきっと自分の中に、ぽっかりと空いた巨大な空虚を感じているのだろう。メアリを亡くした直後、彼は、これでやっと自分は解放された超然として笑っていたが、彼の得た自由とはすなわち孤独の裏返しだ――不幸なジェームズは自覚することすらできないが、それは我々には想像もつかないほどの圧倒的な空しさに違くない。外界から感情を切り離されているがゆえに自分の状態を正しく認識できず、しかし、何かを強烈に求めずにはいられない衝動のみが肥大している。空っぽな胸を再び豊かな感情で満たしたい：心の共鳴版であるメアリが傍にいた時のように……。おそらく、ジェームズが他人の精神を支配し、操り、弄ぶことに異常な関心を示すのも、その辺りに根があるのだろう。そうして、クリスター、君を通じてジェームズは感情を取り戻したがっている：だが、他人の人格に全く配慮しないジェームズであればこそ、君にとっては恐ろしいことになるだろう。それで私はつい、君の心を喰い尽す怪物を想像してしまっただよ」

クリスターが堪えきれなくなったように微かな喘ぎを漏らすのに、レイフがすかさず、その体を支えるよう、手を添えた。

「クリスター、落ち着けよ、ここにジェームズの奴はいねえ、おまえに手出しすることなんか、できねえんだ」

いつもは心の揺れ幅の大きいレイフが今に限って動揺もせず、しっかりと声で自分を励ましているのがクリスターはちよつと思議だった。

「それに、あいつがいかれた頭で何を夢想していようが、オレがおまえに絶対手出しさせねえよ。おまえの相棒はオレなんだ、奴の割り込む余地なんかありはしねえ——そうだろ？」

クリスターの背中をなだめるように叩きながら辛抱強くかき口説いたかと思うと、最後はやけに強い口調になってレイフは兄に言い聞かせた。

「ああ」

クリスターはぐったりと目を閉じて、レイフの言葉にのろのろと頷いた。

自分を捕らえ引き寄せようとする得体の知れない触手の気配をまだ身の回りに感じる。しかし、それ以上、その見えない悪意がクリスターに近づくことはなかった。

そうこうしているうちにクリスターは落ち着き、自分の足で再びちゃんと立つことができるだけの力も戻ってきた。

すると、レイフの前で不様な姿をさらしてしまったことが、急に腹立たしくなってきた。

（何をやっているんだ、僕は―レイフに頼るなんて、どうかしている…。大体、ジェームズの魂胆も僕には何となく分かってはいた…。直視するのを避けていただけで―こんなに取り乱すようなことじゃないし、レイフに守ってもらうなんて、論外だ）

思わず舌打ちするとクリスターはうるさげに弟の手を振り払い、ワインスタインに向き直った。

レイフの心配そうな視線を感じたが、これ以上弱い自分を見せるのは我慢ならなかった。

「ドクター、貴重な意見をありがとうございます。確かに僕は、とてつもない怪物に見込まれてしまったのかもしれないですね」

思わず、自嘲のこもった苦い溜息を漏らす。

「ついでにうかがっておきたいのですが、ジェームズ・ブラックを退けるために、僕は一体どうすればいいと思いますか？」

「なかなか難しい質問だな。私が君なら、とにかく逃げて、ジェームズが絶対に突き止められない場所に身を潜めることを考えるだろうね。あるいは、彼の身柄をどこかに物理的に隔離してしまうか」

クリスターの顔に浮かんだ微笑を見て、ワインスタインは肩をすくめた。

「だから、君がジェームズを施設送りにしたのは、無茶なようだが、正しいやり方だったと言えるな。だが、いずれ自由の身になってしまえば、再び君を悩ませることになる」

「だから今度は、僕はもっと徹底的に奴を叩かなくてはならない：二度と再び僕の前に現われることがないよう――」

「あまり、物騒なことを考えてはいけないよ」

クリスターの口ぶりに何かしら危険なものを感じ取ったのか、ワインスタインは素早く釘を刺した。

「まあ、ジェームズを再び何らかの方法で拘束するのは妥当な手段だろうな。もしも君の言うとおり、彼が何らかの犯罪に手を染めているとしたらね。そして、今度はちゃんと精神鑑定をしてもらい、しかるべき施設に強制的に隔離する」

ワインスタインは複雑そうな顔をした。

「ジェームズの精神鑑定か：事情を知らない医者では、騙されてしまいそうだな。かと言って、私も――あの子にとって不利な証言をするのは気が引けるよ」

「ジェームズを怪物とまで言うておいて、まだ庇うのかよ、気が知れねえや」

「レイフ……」

レイフがなじるのにワインスタインは少し哀しそうな顔になって、視線を伏せた。

「クリスター君」

「はい？」

「君のことだから、おそらく、キャメロンの研究についても調べが及んでいるんだろうね」

「え、ええ：どういう内容のものは、大方つかめていると思います」

ワインスタインが自分から触れてくるとは思っていなかったので、クリスターは少しばかり虚を突かれた。

「私だけでなくキャメロンにも意見を聞いてみると言いたいところだが―おそらく彼は私以上に深くジェームズに心を取り込まれているだろうから、君の助けになってはくれまい」

事故で傷めた脚を無意識にさすっているワインスタインを神妙な気分で眺めながら、クリスターは頷く。

「そうですね」

「だが、ジェームズの年齢を考えると―そろそろ彼にもタイムリミットがいつ来てもおかしくはないと思う：君が彼の手から逃げ切れるかどうかは、結局、時間こそが最大の鍵かもしれないよ」

クリスターははっと目を見開いた。

「私と言えるのはここまでだ。どのみち私は、キャメロンがあのだ」

子相手にどんな研究をしていたのか、ちゃんと教えられていた訳ではないからね」

これで話は終わったとばかりに、ワインスタインがくると背中を向けると丁度庭の方から先程レイフが外に出してやった犬が吼えた。

「おお、中に入りたいのか」

ワインスタインはガラス戸を開けて愛犬を入れてやり、尻尾を振りながらまつわりつくその犬の頭を両手で撫でてやった。

場の緊張感が一気に解けていく。

クリスターはテーブルの上からカップを取り上げ、すっかり冷めてしまったコーヒーを一口すすった。顔をしかめて、呟いた。

「随分苦かったんだな、これ……」

先程はコーヒーの味も分からないほど緊張していたのだろうか。

「クリスター……」

レイフの指が今度は少し遠慮がちに手の甲に触れるのに、クリスターは肩で息をついた。

「うん」

一呼吸おいて、クリスターはレイフを振り返った。

「今日はこんな所までおまえをつき合わせてしまつて、悪かつたね」

「何、水臭いこと、言つてんだよ」

レイフはくしゃつと顔を歪めて笑つた。ここに来る前と少しも変わらなない、おおらかなレイフの笑顔を眺めていると、自分ばかりが意地を張っているのが随分小さいことのように思われてきた。

「それに」とクリスタは言いよどみ、俯いた。唇を噛み締めた。

レイフは唐突に黙り込んでしまった兄を前に、いつもように焦れることもなく、我慢強くその言葉を待ち受けている。

（たまには、少しくらい素直になつてみる、簡単な一言だろう）

黙っていても気持ちに通じあうことのできる相手。それは、時に恐くもあり、時に自分を甘やかす―都合によつて遠ざけてみたり、こんなふうに傍に置いてみたり。

レイフをここに連れてきたのは彼との約束を履行するためだったが、おそらく、ジェームズの心の闇に迫ることで動揺するであろう自分を支えて欲しいと無意識に望んでもいたのだ。

（レイフ、僕は、おまえがいたから、自分を保つことができた）

クリスタが思い切つて顔を上げてみると、ひたむきに自分を見ているレイフと目があつた。

途端に、何かが吹っ切れたような気がした。

ごく自然に手を伸ばしてレイフの肩に置くと、クリスターは、言葉では言い尽くせないほどの深い感謝を込めて囁いた。

「おまえが傍にいてくれて本当に助かったよ。ありがとう、レイフ」

第5章深淵に潜むもの（9）

どうして、こんなことをするの、兄さん……？

ジェームズ・ブラックは、手の内の金色の懐中時計をぼんやりと見下ろしていた。

滑らかに白い指先が蓋の部分を愛しげになぞる。

穏やかに優しい笑みが端正な口元にたゆとう。

外から差し込んでくる陽光に淡い金色の髪をきらきらと輝かせ、大きな窓の前にゆったりと立つ姿は、絵画の中の聖人や天使めいて超然としている。

ふいに、窓の下が少し騒がしくなった。

何気なく庭の方を見下ろすと、ジェームズが先程小一時間ほど話し合ったスーツ姿の訪問客達の姿が見えた。

ジェームズは涼しげな顔でしばし彼らを見下ろしていたが、その深沈と静まり返った藍色の瞳には何の感情のそよぎも現われなかった。

「：保護観察期間が終わったと思ったら、早速、裏世界の人間からの表敬訪問を受けるなんて、全く信じられねえな」

「ただのビジネスの話だよ」

背中にかけられた棘のこもった声に対し、天気の話でもするかのようなどかさで彼は答える。

「ビジネスって言ったって、犯罪がらみのことだろう、堅気らしく装ったって所詮マフィアなんだからさ」

「彼らは、ただ純粹に金儲けがしたいだけだよ。別に犯罪そのものが好きなわけじゃない。現に彼らはもう麻薬や武器の不法売買に関わるよりも、もっときれいに儲けられる金融事業を始めたがっている。僕は、まあ、そんな彼らの相談に乗ってあげているだけだよ」

ジェームズは体ごと部屋の方に向け、中央にある大きなソファに坐っている人物に、軽く首を傾げるようにして微笑んだ。

「もっとも君の言う所詮マフィアの作る銀行が、綺麗な金ばかりを扱うとは限らないけれどね」

不思議なことに、ジェームズ自身が何ら喧伝することはなくとも、ある種の人間達は特定の臭いを嗅ぎつけるようにして、ここにやってくる。

有り体に言ってしまうえば、金の臭いだろうか。

ここに来れば、己の欲望を満たすことができると何故か思い込ん

でいる、貪欲な犬達――。

「たぶん、僕が以前面白半分にやったことが裏世界でちょっとした評判を取ってしまったからだろうね。僕が自由の身になったら、ここぞとばかりにスカウト：と言うのもためらうけれど、何件か仕事の誘いを受けてしまったね。病床に臥せている父親の介護もあるし、当分働くつもりはないと断ってはいるけれど、相手が相手だからむげにもできなくて――何となく相談役におさまってしまったんだ」

少し困ったような曖昧な笑顔で言って、ジェームズは自分にずっと鋭い視線を送っている相手に向かって、軽やかな足取りで近づいていった。

「ただ、僕自身はもう裏世界に深く関わる気はないんだ。マフィア同士の血生臭い抗争も汚い金を巡る駆け引きも、もう充分に楽しませてもらったからね」

今からほんの4年前、ボストンの闇社会において突如勃発した抗争によって、犯罪組織の構図はがらりと変わってしまった。

ほとんど無名の存在から瞬くのにのし上がったハートという青年が率いたギャング団と彼らの動きに便乗した犯罪組織は、1年足らずで、それまで利益を独占していた古参のマフィアを事実上解散に追い込んでしまった。

ハートの背後にいて、彼のちっぽけな犯罪グループが、組織力でも資金力でも圧倒的に有意だったマフィアを切り崩して勝ち上るための戦略を練り、細かな戦術も与えていたのが、犯罪とはおよそ縁のない上流階級に育った、当時たった15歳の少年だったということとは、今では知る人ぞ知る伝説となっている。だが――

「飽きたんだよ」

ジェームズが近づいていくにつれ、一応平静さを装っている話し相手の顔には、隠しようのない慄きが浮かび上がってくる。

それを涼しげに眺めながらソファにたどり着くと、ジェームズはガラスのテーブルの上のチェス盤にしなやかな手を伸ばし、素早く、駒の1つを動かした。

「今は、どんなゲームより僕を夢中にさせてくれるものを見つけたからね」

眼鏡の下の黒い目が大きく見開かれるのを認めながら、何食わぬ顔をして、ジェームズは囁いた。

「その新しい眼鏡、似合うね、アイザック」

じっと押し黙っているアイザックの前のソファにすんと身を落として、ジェームズは先程執事のロバートに運ばせたばかりの熱い紅茶を一口すすり、目の前のチェス盤を指し示した。

「ほら、君の番だよ」

アイザックは肩を落として深い溜息をついた。

ここに来た当初に比べて随分やつれ、どこか暗くすさんだものを帯びてきたようにも見える、その顔に、ジェームズは少しばかり気を引かれた。

「：何だか疲れた顔をしているけれど、ここでの暮らしに不自由はないかい？　ダミアンや他の荒っぽい連中には、絶対君に手出ししないようきつく言い聞かせてあるけれど、困ったことがあれば、遠慮なく僕に言ってくれればいいんだよ」

「別に、何も問題はないよ：」

うつろな声が答える。かつては、とても覇気のある話し方をしていた彼が、今は全く別人のようだ。

「ところで、君の父親がこちらに来ているようだね」

弾かれたように、アイザックは顔を上げた。

「親父が？」

「何も驚くようなことじゃない、大切な子供が突然いなくなったんだから、探しに来るのは親として当たり前のことだ。：クリスターと頻繁に会っているそうだよ」

堪えきれずにソファから立ち上がりかけたものの、すぐに諦めたように再び腰を下ろし、膝の上で手をぐっと握り締めるアイザックの煩悶ぶりに、ジェームズはとろとろと目を細めた。

「どうしても気になるなら会いに行ってもいいんだよ、アイザック、僕は君をとめない。会って、君の愛する人達に全てを正直に打ち明ければいい」

アイザックは食い入るように、ジェームズの柔らかな笑みをたたえた顔を見据えた。

その目の周りは僅かに赤らみ、頬は微かに震えている。

「俺がどんな気持ちでここにいるのか分かって、そんなことを言っているんだな、おまえは…」

随分また無意味なことを言うんだなと、ジェームズのアイザックに対する興味は少しばかり薄れた。

「確かに、顔は合わせ辛いだろうね。尊敬する父親に自分の今のひどい様子を説明するのも辛いし…仲間達に対してはもっと顔向けができない」

理解に満ちた聖者の顔で、ジェームズはゆっくりと頷いた。

「そして何より、クリスターは自分を裏切り傷つけた君を決して許さない、こうなった以上君も僕の仲間と見なされ、攻撃の対象になってしまったのだと―君は思っている」

確かにクリスターは、そういう苛烈さも冷酷さも持っている。敵とみなした相手にはとことん非情になれる男だ。いざとなればかつての仲間だろうが容赦しないだろう。しかし―。

「あいつなら、裏切りがあったと分かれば、俺ごときは冷静に切り捨てるさ。俺はクリスター・オルソンの大切な人間じゃない…利用価値のある手駒の1つにすぎなかったんだからな」

「でも…会えば、それは君の誤解なんだと、クリスターは言ってくれるかもしれないよ?」

アイザックは唇を噛み締めた。暗い瞳は葛藤のあまり揺れている。

「今更、何もかも遅すぎる…俺は、もう取り返しのつかない所に来ちまった…いくら後悔して懺悔したって、クリスター達のもとに戻ることもなんかできないんだ」

黒髪の頭が力なく左右に振られる。己が神を売ってしまった、どこにも行き場のない哀れなユダ。

「全て僕のせいなんだと言えばいい」

アイザックは信じられないといった面持ちでジェームズを見た。

「実際、それは嘘じゃない。僕が君をそそのかせたのだと説明すれば、皆納得してくれるだろう」

アイザックは痩せた頬を微かに引きつらせた。

「最初に君が僕を訪ねてきた時、僕はとても喜んだ。君が、クリスターの信頼厚い右腕だったからだ。そうして、何としても君を手駒にしたくなった僕は、必死になって知恵を絞り、あらゆる手段を使って、君が仲間達を裏切って僕の手を取るしかなくなるよう仕向けた。僕のやり方を心得ているクリスターならば、理解を示してくれるだろうと思わないか？」

アイザックは聞くに堪えないというかのごとく、ジェームズの話を遮るよう、荒々しく手を振った。

「どうやら、納得できないのは君自身のようだね、アイザック」

「俺は、自分が何をやったのか、ちゃんと認識している：クリスタに協力するなんて言いながら、同時に、あいつには黙って、おまえとも会っていた：そこまでおまえに強要されたなんて言い訳はしねえよ。危険だと分かっているながら、おまえに近づいていったのは、やっぱり俺の意思だったんだ。それに：」

アイザックはこみ上げてくる感情を堪えるかのごとく肩を大きく上下させた。

「コリン達をあんない目に合わせたのは：他の誰でもない、俺だ。俺が、この手で親友を殺そうとした：」

「それこそ、ダミアンに脅すかされて嫌々やったことだろう。銃口を頭に突きつけられたら、誰だって、自分の命が助かることを優先してしまう。それほど恥じることはないと思うけれどね」

「そんなふうに俺をあやすように言うおまえが、腹の底では別のことを考えていることを俺は知っている」

「ふうん」

「おまえは、俺がコリンの車に細工をする間、何も言わなかったけれど―俺の心をちゃんと見透かしていた。今でもそうだ。俺が決して自分からここを出て行かないと分かっているから、そんな同情的な口ぶりで、俺に仲間のもとに戻ってもいいなんて促すんだ」

ジェームズは伸びかけて額に落ちかかる髪をいらいながら、困ったように笑った。

「うーん、君もなかなか難しい人だね、アイザック。もっと楽に考

えられたら、そんなに苦しむことはないのに」

ジェームズは紅茶のカップを持ち上げ、そこにぼんやりと映る自分の影を見下ろしながら、あまり関心のない口調で言った。

「いずれにせよ、どこにも行き場がないのなら、君はここにいたいだければいいよ。僕は近いうちにクリスターとの決着をつけるつもりだけれど、君を刺客にして彼に差し向けるとか、そんなひどいことをするつもりはないから、その点は安心してもらっていい。それに君も、ここまで深く僕とクリスターの双方に関わってしまったのなら、どうしても見たいだろう…?」

カップの中のジェームズの顔は、心から楽しそうに笑っている。

これほどの高揚感、己の知略だけでギャングやマフィア相手に渡り合っていた時でさえ得られなかった。

「僕とクリスター、一体どちらが最後に勝つのか」

アイザックははっと息を飲んだ。

「ジェームズ、おまえ…おまえはクリスターを―殺すつもりなのか…?」

まるで言葉にするのが恐ろしいかのようにおずおずと尋ねるアイザックに、ジェームズは少々苛立った。

「全く、どうして皆、僕がクリスターを傷つけるとか殺すとか、そんな野蛮で物騒なことばかり言うのかな。物凄く心外だよ」

珍しくも強い口調で慨嘆するジェームズを、アイザックは、その本心を必死に読もうとするかのごとく凝視している。

「それなら、一体どうするつもりなんだ……？」

「僕は、クリスターの全てが欲しいんだ。彼の心も体も意思も、僕のものにして、取り込んでしまいたい。そうすればきっと、僕も――この胸の巨大な空虚を満たされて、ああ、こんな人生でも生きてきてよかったと本当に実感できるような気がする」

アイザックの顔に、困惑と共に、理解できないものを前にした言い知れぬ慄きが広がっていく。

それを、いつも他人に対して感じてきた、諦めにも似た達観の境地から、ジェームズは眺めた。

並の人間よりよほど切れるとは言っても、所詮はこの程度だ。

クリスターのように、鋭く、深く、この胸に切り込んでくることはできない。

「難しく考えることはないよ。要するに、僕はクリスターを愛していて、彼の一番の相棒になりたいがっているんだと思ってくれればいい」

「クリスターは……おまえを望んでなんか、いない……！」

「さあ、それはどうかな。確かに、僕らの間には今まで争いしかなかったけれど、ほら、よく喧嘩するほど仲がいいと言うじゃないか。僕とクリスターも、実は結構気があうんだよ」

「あいつが聞いたら、さぞ、胸糞悪くしたことだろうさ」

「クリスターは素直じゃないからね。僕を必要としていると認めるのが、悔しいのさ」

思わずかっとなったのか、アイザックは大声を出した。

「レイフがいるだろう！ クリスターはレイフ以外の誰も必要としないし、愛してもいない！」

ジェームズはすっと目を細め、怒気をはらんだアイザックの顔を冷たく睥睨した。

たちまちアイザックは青ざめ、自らの激昂を後悔するように黙り込んだ。

「レイフね……クリスターの唯一無二の相棒——確かに、大きな障害だ。君は、彼らの結びつきの固さを思い知って……いや、クリスターがあれほど深く弟を想う一方で、その同じ心の欠片すら君には与えなかったことに絶望して、ついには彼のもとを離れる決心をしたんだものね。そして、いまや、あれほど心酔していたクリスターの敵に回った。全く、大した悲劇だ」

「ジェームズ……頼む、黙ってくれ……」

アイザックは両手で顔を覆い、震える声で懇願するが、ジェームズは彼の言葉など虫の鳴く声ほどにも気にとめていなかった。

「だけど、僕は諦めないし、場合によっては、僕の存在がクリスタ

―を救うことにもなるんじゃないかとさえ思っている。だってね、僕は知っているんだ：唯一無二の半身を失った後の圧倒的な虚無感を―それでも生きようとするのなら、結局、空っぽな胸を満たしてくれる他の何かを探すしかないということもね」

確信のこもった口調でジェームズが言い切ると、アイザックは顔を伏せていた手の平からゆっくりと目を上げた。

「クリスターはね、自分の度を越した愛情がいつかレイフを潰すと思いつ込んでしまっているんだ。だから、レイフに幸福な未来を確約してやるために、その人生から身を引こうと努力している。我が身の一部を自分で切り離そうとするようなものさ―とても、とても痛いんだよ―だが、意地っ張りな彼のことから、ぼろぼろになっても最後までやり遂げるだろうな」

ジェームズはつい想像してしまって、低い含み笑いを漏らした。

「本当は、クリスターを手に入れたいだけなら、僕は何もせずにただ待っていればよかったのかもしれないね―本当に1人きりになって、孤独と絶望に打ちひしがれた彼を迎え行けばよかったのかも」

ジェームズの言葉がよほど癪に障ったのか、再び反抗心を取り戻したアイザックは噛み付くように言い返した。

「ありえねえ…それこそ、おまえの都合のいい妄想だろうっ」

すると一瞬、ジェームズの端正な口元に苦い笑いが浮かんで、消えた。

「ああ、そうだね、確かに―のんびりと待つなんて、今の僕にはで

きそうもないことだものね」

軽く肩をすくめるジェームズをしばし睨みつけると、アイザックは今頃になって気がついたように目の前のチェス盤に手を伸ばして、腹立たしげに駒を動かした。胸の底に煮えたぎる感情を抑えた低い声で言った。

「確かに、おまえはゲームの天才なのかもしれない。けれど、人間はチェスの駒じゃないんだ。誰も彼もが、俺のように、おまえに心を掴まれて思うように操られてしまうわけじゃない」

ジェームズが何も答えずにいると、アイザックは我慢の限界がきたというかのようにソファから立ち上がった。

「チェスの決着はつけないでいいのかい？」

「ああ、どのみち俺じゃあ、おまえの相手をするには役不足だからな」

何かを堪えるような固い表情に戻ったアイザックは、ポケットに無造作に手をつっ込んで、そのまま部屋から出て行った。

「：一応、自分の身の程は分かっている訳だ」

アイザックが退出していった扉に、ジェームズは無感動な眼差しをしばしあてていた。

「だったら、初めから、手に入りそうにないものを高望みしたりしなればよかったのにね」

アイザックには、もともとクリスターに対して、心酔すると同時に、この男には何もやっても敵わないという諦め混じりの羨望と嫉妬があった。そんな負の感情をクリスターの信頼を勝ち取ることで封じ込もうとしたのだが、いくら尽くしても一顧だにされず、所詮自分は駒の1つでしかないと悟るに至って、それまで溜め込んだ憤懣が一気に爆発した。

（君にそう思い込ませたのは僕なんだけれどね、アイザック：君の中に、クリスターへの払拭できない不信の種を見つけた時から、その種が芽をふき、君の中で根を張り巡らせるよう、用心深く育て続けた。あんまり思い通りになりすぎて、むしろ拍子抜けしたくらいさ。それほどまでに君はクリスターを愛し、また憎んでもいたわけだ）

かつての恋人ミシエルを奪った親友コリンに対するわだかまりも、ジェームズがアイザックの心に食い込む余地を作ってくれた。

（確かに、僕はアイザックの手を無理矢理汚させることで彼の逃げ道を断った。だが、僕には分かっていたんだ、アイザックが心のどこかでコリンとミシエルの2人に復讐したがつっていたことを——分かっていたから、あえて、やらせた。そして、アイザックが溜飲を下げるのを黙って見守った。アイザックは、自分の屈折した満足感など誰にも悟られないと思っていただろう、だからこそ、僕には全てお見通しだったと分かって一層居たたまれなくなったろう。強制されたわけではなく、自分が望んで、裏切り者の友人殺しに成り下がったのだと思い知って——）

ジェームズは、アイザックが逃げたくても逃げられないことを、よく分かっている。

強いられたわけではなく自ら望んだこと――己の心が犯した罪の重さに打ちのめされた彼は、そのことを知りながら自分を受け入れてくれているジェームズから離れることができない。

だが、それもまたジェームズの計算のうちなのだ。

「君が特別悪人だったわけじゃないよ、アイザック：誰だって、多かれ少なかれ、心の内にどろどろとした負の感情を秘めている。君が堕落したのは、僕がそれを見つけて、引きずり出したからだ――そう、君のせいじゃない」

まるでまだアイザックが目の前に坐っているかのように、優しく慰めるようにジェームズは囁き、そして一転、冷たい口調で付け加えた。

「だが、それでも、君には責められて然るべき非が1つだけある」

ジェームズは薄手のジャケットのポケットの中から一枚の写真を取り出した。以前アイザックが写したクリスターのスナップ写真だ。

「全く、君ほど聡い人間が、どうして気がつかなかったのだろうね。よく目を凝らしてみれば、すぐに分かったろう。こんなに近くに、君の疑いを晴らしてくれる証拠はあったんだよ」

写真の中では、クリスターはごく自然にくつろいで、無防備な横顔を撮影者であるアイザックに対して向けている。

こんな写真、他の誰にも、あの用心深いクリスターは決して撮らせなかったろう。

クリスターがアイザックを深く信頼し、心を許していた証だ。

「クリスターには、君を簡単に切り捨てることなんて、できやしない。敵に回ったら回ったで、君の存在は彼の動きを鈍らせる枷になる。こんな簡単な答えすら見過ごすほど、君の目は瑣末に不満に曇らされていた。君は大切な友人なんだとちゃんと口に出して言わなかったクリスターも悪いけれどーいずれにせよ、ちょっとしたボタンのかけ違いがこんな結果を招くなんて、やりきれない話だね」

深く項垂れて、溜息混じり、ジェームズは呟く。

「もったも、だからと言って、僕は同情なんかしないけれどー」

額に落ちかかる柔らかな金髪の陰。僅かにつりあがった唇にうかぶ笑みには人間味の欠片もない。

半ば開いた藍色の瞳は相変わらず虚無的で、何も持たないがゆえに一層何かを強烈に欲し、喰らい尽くそうとする巨大な闇だけが黒々と広がっていた。

ジェームズはおもむろにソファから起き上がり少しばかり乱れた髪を手で整えた。ふと、テーブルの上に放置されたままのチェス盤を見下ろすと、しなやかな指先で駒をつまみ上げ、迷いのない滑らかさで動かした。

「チェックメイト」

特に感慨もなく呟いて、ジェームズ・ブラックは、己が貪欲な空虚を満たしてくれる好敵手を追い詰めるための次の一手を考えながら、その場を静かに立ち去っていった。

第5章深淵に潜むもの（10）

その日、クリスターは、アイザックの父ウォルターとケンパー警部に、ワインスタインから聞いた話を報告した。

かつてジェームズ・ブラックを分析した精神科医の意見に深い関心を示した彼らは、しばし、クリスターを挟んで、今後個人としてどう動くべきか、警察が介入できる余地はあるのかなどを話し合ったが、現時点で具体的な打開案は出なかった。

ジェームズの妹メアリの死に関しても、一精神科医の証言だけでは立件は難しく、ましてや当時僅か11才のジェームズを罪に問えるかという疑問が残る。

ただ、クリスターの今後に対する大人達の意見は一致した。

『ワインスタインの話からすると、これ以上君が単独でジェームズと相対するのはやはり危険だ』

ウォルターが言えば、ケンパー警部も同調する。

『そうだとも、この期に及んで迷うことはない、ご両親にこれまでの経緯をちゃんと説明し、その上で家族共にどうするべきか相談するんだ。いいかい、これは、もう君一人に負いきれる問題じゃない。確かに、現段階では我々警察が君らを保護するのは困難かもしれないが、しばらく家族でどこかに身を隠すなり、ボディガードを雇うなりした方がいい』

『必要なら、俺と一緒にご両親に説明しに行こう。悪い連中に息子

を拘束されているかもしれない父親として、君のご両親にまで同じ思いをさせるのは忍びないからな』

2人の助言は至極もつともだった。

いくらクリスターが頭脳明晰で行動力にも優れ、実際一度はジェームズを撃退することに成功したといっても、18才の若者にできることは限られている。

そして、ワインスタインによって暴き出された、ジェームズの心に潜む深い闇の正体は、さしものクリスターも怯ませていた。

レイフや家族の安全を一番に考えるならば、ジェームズとの決着を自分でつけることにこだわるのは間違っている――そちらの方向にクリスターの気持ちも今は少し傾いている。

しかし、それでは駄目なのだと、クリスターの理性とは別の部分が訴えるのだ。

結局、両親に打ち明けるかどうか、もう少し考えさせて欲しいと言って、クリスターはその場を逃れた。

（実際家族そろって逃げると言っても、それなら今度は、いつまで隠れれば安全になるのかという話になる。ジェームズを逮捕できるあてもない現状では、その選択自体あまり意味がない。大体、どこに隠れ潜んだ所で、ジェームズなら難なく探し出すだろうということについては、僕はこの首を賭けてもいい。むしろ自由な行動が制限される分、僕の足枷となるだけだ）

2人と別れた後も、クリスターは1人悶々と悩み続けていた。

（大体、そんなことをしているうちに学校だって始まる―僕とレイフにとって高校最後の大切なフットボールのシーズンも：そうだ、僕はともかく、レイフは今季こそ本来の実力を出し切らなければならぬ。昨年の優勝のおかげでスカウトの注目は僕らのチームに集まっているとはいえ、レイフ個人の評価はまだそれほど高くない：あいつが希望する名門チームに入るためには、これまで以上の努力が必要だ。そんな大事な時期に、あいつの集中力を妨げるような事態は何としても避けたい）

新学期の始まりまで、いつの間にかもうひと月を切ってしまった。

できるなら、ジェームズとの決着をこの長い夏休みの間、学校生活に支障が出る前につけてしまいたかったのだが、そんなに都合よく話が進むはずはなかったか。

（焦った所で、どうしようもない：時間は限られているし、僕にできることにも限界がある。すべきこととしたいこと、優先順位をつけて、どうしても譲れない、上位にあるものから順番に解決していくしかない―）

対J・Bの闘いにレイフを関わらせてしまったことで、秘密を保つための苦労はなくなったものの、クリスターの胸にはこれまでにない焦りの気持ちが生じていた。

（ウォルターとケンパー警部の意見を否定するわけじゃない。僕は、もっと現実的になるべきなんだろうな。ここまで事態が逼迫して、これは僕とジェームズの個人的な闘いだから、余人に介入して欲しくないなんて言うこと自体、僕の我が侘なんだ―勝ち負けなどは、この際どうでもいい。僕が死守するべきものは何なのか、今一度思い

出せ)

クリスターがそう自らに強く言い聞かせると、車のフロントガラスに映る自分の影が、ふいにジェームズの嘲るような顔に変わった。(いいのかい、そんなに簡単に僕との勝負を諦めてしまつて―後悔するんじゃないのかい?)

クリスターは忌々しげに舌打ちし、怒鳴った。

「うるさい!」

何となく気持ちが落ち着かないまま、クリスターは家に帰る途中に、よく利用する書店に立ち寄った。

特に目的があつたわけではない。好きな本を物色すれば気分転換になるだろうと思いついたただけだ。

奥にある専門書のコーナーにまっすぐ向かおうとしたクリスターだが、入り口近くにあつた雑誌コーナーに平積みされていたスポーツ誌がふと目に付いた。

レイフがよく購読しているフットボールの専門誌だ。

(ああ、そう言えば、今日が発売日だったかな)

クリスターは最近この手の雑誌は読まないようにしていた。レイフが話を振ってきてても、興味のない態度を取り続けてきた。

この時も、一瞬その雑誌の前で歩く速度が落ちかけたものの、そ

のまま立ち止まらずに通り返した。しかし――

「……………」

クリスターは、次のコーナーを右に曲がり、本棚をぐるりと回ってこいで先程通り過ぎた雑誌コーナーにまた戻ってきた。

（全く、何をやっているんだろう、僕は…）

溜息をつきながら、その雑誌を1冊取り上げる。ちらっと目に付いた、表紙の文句がどうしても気になってしまったのだ。

「名門カレッジのスカウトが選ぶ、今シーズンの注目選手か…」

プロの記事に混じって、大学・高校リーグに関しても最新情報が掲載されていて、シーズンが始まる直前ともなれば、昨年活躍した有力校の戦力分析や選手個人のデータ、現時点でのランキングも発表されている。

クリスターはぱらぱらとページをめくりながら、自分に関係のあるような記事を探して、ざっと目を通していった。

さすがに去年の州大会優勝校だけあって、ポジション別のランキングに知った名前が幾つも出ている。MVPを取ったクリスター自身もマサチューセッツ州のナンバーワンQBに堂々と輝いていた。

問題は、ランニング・バック部門だ。

（ああ、レイフの名前もちゃんとあった…けれど、3位とは微妙だな。あれでもうちのオフENSEの要なんだぞ、もうちょっと上でも

いいんじゃないか？ 確かに悪くはないけれどよくもない、何とも中途半端なところがあいつらしいか。ベスト・スリーには入っていても、州の中だけの話だし、全国レベルで考えると、どの辺りの実力と考えられているんだろうか）

はあっと溜息をついて雑誌を閉じかけたが、その時、めくりかけていたページの下の方にあった、小さな記事が目にとまった。

「ネブラスカ大のスカウト―注目選手として、レイフの名前をあげている…？」

思わず食らいつくようにその小さな記事を読んだクリスターは、まるで自分が誉められたようにちよつと得意になった。

レイフに触れられていた箇所はごく僅かだったがけれど、単純にこれまでの成績をベースにしたランキングによるのではなく、潜在的な期待値が大きい選手として今季の活躍に注目していると書かれていたからだ。金の卵達を必死になって探している名門校のスカウトの評価だから、ある程度信用してもいいだろう。

これが自分のことだったら、ここまで嬉しくならない。実際、これまで自分宛に送られてきた大学チームからの手紙やスカウトからの電話にはそれほど心を動かされたことはなかった。

（ネブラスカ大はレイフが行きたがっている名門校の1つだ。これまでもあちこちの大学から手紙くらいはもらっていたかもしれないけれど、希望校のスカウトからのコンタクトはまだなくて―あいつはやきもきしながら待っているはずなんだ）

クリスターはその雑誌をそのままレジに持って行って購入した。

もしかしたらレイフも既に手に入れているかもしれないが、そうではないなら少しでも早くこの記事を見せて喜ばせてやりたい。

再び車に乗り込んで家に着くまでの束の間、クリスターは目の前に差し迫った問題を忘れることができた。

日曜の午後遅く、ひょっとしたらレイフは出かけているかもしれないと思ったが、家の駐車場に弟の車があるので、ほっとする。

だが、その傍に見慣れない車が一台止まっているのに、クリスターはふと眉を潜めた。

（誰だろう…？）

訝しく思いながらクリスターが家に入ると、奥のリビングから父親の上機嫌な笑い声が聞こえてきた。ラーズがこんなふう to 楽しげに話しているなど、ここしばらくなかったことだ。

「ただいま、父さん」

クリスターがリビングを覗くと、そこにはラーズ、レイフと一緒に、1人の見知らぬ男がソファに坐っていた。

「おお、お帰り、クリスター、おまえを待っていたんだぞ。マイク、これが上の息子のクリスターだ。上といってもレイフと12分しか違わんのだな」

昼間から少し赤い顔をしているラーズの前には缶ビールが置かれている。

ウイスキーでないだけましだなと内心溜息をつきながら、マイクと呼ばれた男にクリスターは向き直った。

「こんにちは、クリスター君、私はマイケル・シュミット。大学時代、ラーズのチームメイトだったんだ」

「はじめまして、シュミットさん」

立ち上がって握手を求める男に礼儀正しく挨拶をしながら、クリスターは相手が自分を値踏みするような目で見ていることが気になっていた。

「マイクは今テキサス大のスカウトをやっているんだよ。今朝電話があつて、この近くに仕事で来ているんだが、大学時代のよしみで話をさせてくれないかと頼まれてな」

これでラーズの機嫌がいい訳が分かった。彼自身の母校でもある、カレッジリーグの名門校からのスカウトが直々にやってきたのだから。

クリスターは、素早くレイフに目をやった。

（テキサス大学もレイフの希望校だったな。すごくいいコーチがいて、その下でやってみたいと言ってた）

レイフはにこにこしながらクリスターを見返している。その屈託のない顔を見る限り、これはレイフにとっていい話のように思われるが――。

先程読んだ雑誌記事の影響もあって、クリスターの心臓の鼓動は

僅かに早くなった。

「クリスター君、去年の君の成績は大変素晴らしいものだったようだね」

クリスターがレイフの隣に坐るのを見計らって、シュミットは切り出した。

「実は、君のチームのフランクス・コーチに頼んで昨シーズンにおける君のプレイを記録したテープを送ってもらったんだ。それで、君に興味を持ってね」

「フランクス・コーチが？」

「ああ、君なら自信を持って推薦できると言っていたよ。確かに、君のパス・コントロールは実にいいね。それに、これはフランクス・コーチも絶賛していたが、君はどんな時でも平常心を失わない、自分をコントロールする術を知っている」

何やら風向きはクリスターが予想したものとは違うようだ。

「そう言ってもらえて…光栄です」

クリスターは幾分ぎこちなくなりながら、もう一度隣に坐っているレイフを横目で見た。

レイフは、シュミットが兄を褒めちぎるのを自分のことのように嬉しそうに目を輝かせながら聞いている。

（この…馬鹿…！）

思わず、クリスターは舌打ちをしそうになった。

シュミットの目当ては、レイフではなくクリスターの方だったのだ。

そうと分かった時点で、クリスターの期待感は瞬く間に萎み、ここにおとなしく坐って、いい年をしてうかれた父と自分の気を引こうと躍起になっているシュミットに合わせて話をすることはたまらない苦痛になった

何より、クリスターに舞い込んだ大きなチャンスを素直に喜んでいる、レイフの暢気さに腹が立った。

「：君が今シーズンも立派な成績を残して、卒業後の選択には是非ともうちを考えてくれることを願っているよ」

もちろん悪気はないのだろうが、シュミットの期待を込めた訴えは、クリスターを居心地悪くさせるばかりだ。

（いっそ、僕の進路はもう決まっているからと、はっきり断るべきだろうか。でも、この場で僕がそんなことをぶちまければ、父さんとレイフが一緒になって興奮して騒ぎ出すのは目に見えている。家族の修羅場に、何の関係もない、この男を巻き込むのも気の毒だ。それにしても、父さんも父さんだ。フットボールは今シーズン限りにやめるという僕の宣言を、レイフと一緒に耳にしたはずなのに、まるで綺麗に忘れ去ったような顔をして―）

何だか、弟と父親の2人にタッグを組まれプレッシャーをかけられているような気がして、クリスターはますます憂鬱になった。

「…そんなこと、まだシーズンが始まらないうちから僕には何とも
言えません。もちろん今季もチーム一丸となって優勝を目指すつも
りですが、僕個人の成績なんて、蓋を開けてみないと分かりません
からね」

「うむ…それは確かにその通りだが―」

クリスターの人事めいた冷めた口調にシュミットは少し鼻白んだ
ような顔をした。

「すみません、まだ今シーズンも始まらないうちから、その先のこ
とまで僕には考えられないんです。昨シーズンがチームも僕自身も
絶好調だっただけに、周りからはかなりのプレッシャーを感じます
し、チーム・リーダーとしての僕の責任は重大ですから」

しょんぼりとほとんど同時に肩を落とす、似たもの父子の方は、
とりあえず見ないことにする。

（まあ、確かに僕もあれきり、はっきりと今後の進路についてレイ
フや父さんに話したわけじゃなかったから―それに、フランクス・
コーチは、僕が大学でもフットボールを続けるつもりだとまだ思っ
ているはずだ。だから、親切心で、このスカウトに僕を薦めたんだ
ろう。でも―レイフのことは、推薦しなかったんだらうか？　コー
チなら、レイフの実力も分かってきているだろうに、どうして…
？）

無性に腹立たしくて、悪気のない父親やフランクス・コーチまで
恨めしく思ってしまうのは、この突然の申し出にクリスターも少な
からず動揺させられたからだろう。

やっこの思いでフットボールをやめると決心した自分のもとに、こんな話が舞い込んできて、肝心のレイフにチャンスはまだ来ない。

その後しばらくして、昔話をしたいからとラースはシュミットと連れ立って外に飲みに出かけていった。

遠方の友人を見舞いに行った母も、まだ帰ってこない。この家には今、クリスターとレイフの2人だけが残った。

そうと悟ったクリスターは、父達を玄関先まで見送るや、すぐに厳しい面持ちになってリビングに戻っていった。

「レイフ、話がある」

膝を抱え込むようにしてソファに坐ってテレビを見ていたレイフはきよとんと兄を見上げたが、その表情に何かを感じ取ったのか、すぐにリモコンのスイッチを切った。

「何だよ、えらく機嫌が悪そうじゃん」

クリスターはむっつりと黙り込んで、レイフの前の席に腰を下ろした。

「さっきだって一応礼儀は守っていたけれど、内心ものすごく苛々してたよな？　おい、分かっているのかよ、テキサス大だぜ？　そのスカウトがわざわざおまえのために、こんな遠い所まで足を運んでくれたんだ。何で、もっと素直に喜べないんだよ？」

クリスターは視線を落とし、膝の上で手を組んだり解いたりしな

がら、一呼吸置いた。

「僕は、ちゃんと分かっている。分かっているのはおまえの方だよ、レイフ」

「はん？」

「スカウトなんて、今更、僕にはもう必要ないものなんだ。それを、あんなふうに周りが勝手に盛り上がったら、困惑して当たり前だろ」

努めて淡々と語りながらも、クリスターはなかなかレイフと目を合わせることができなかった。

レイフは一瞬言葉を失ったようだ。しかし――。

「嘘だっ」

すぐに、噛み付くように言い返してきた。

「クリスターだって、自分がちゃんとカレッジでもやっていける実力があるって評価を受けて、嬉しくないはずがない。いいから、正直に認めちまえよ。オレに遠慮することなんかねえんだ」

「レイフ……！」

堪りかねたかのように、クリスターは手を上げてレイフの言葉を遮ろうとしたが、彼は黙らなかった。

「これは、おまえがこれまで積み重ねてきた努力の成果なんだよ、クリスター。ちゃんと実力で勝ち取ったものなんだから、後ろめた

く思う必要なんて、これっぽちもない。それにオレも、おまえが認められて心から嬉しい：オレの兄貴はやっぱりすごいんだって誇りに思ってる」

クリスターは途方に暮れたような顔を上げて、尚も熱心に訴えかけているレイフを見た。

「おまえは、本当に：僕にチャンスを奪われて悔しいと思ったり、腹が立ったり、焦ったりしないのか：？」

苦しげに掠れた声で問いかけるクリスターに、レイフは少し戸惑ったようだ。

「え：？ そんな訳ないだろ、自分にチャンスが回ってこなかったからって兄貴を恨むなんて、全く筋違いじゃねえか。大体ポジションだって違うのにさ。他のガッコのランニング・バックなら、ライバルとしてはよほど気になるし、スカウトが殺到しているらしいなんて噂を聞いたら落ち着かないけどーでも、クリスターのことは、そんなどろどろした感情抜きで、素直に祝福できる。うん、今ちょっと思ったけど、おまえが早いうちにQBにポジション替えしてくれてよかったよ。おまえと争いあうなんて、オレにゃ、絶対無理だもん」

レイフが何気なく口にした台詞に、クリスターの怒りの堰が切れた。

「レイフ：！」

次の瞬間、クリスターはソファから立ち上がりざま、レイフの顎の辺りを拳で殴りつけた。

中途半端な一撃だったが、ボクシングの練習で研ぎ澄まされたクリスターのパンチをまともに受けたレイフは、ひとたまりもなく、ソファごと後ろにひっくり返った。

何が起こったのか、レイフは一瞬理解できなかったようだ。床にはいつくばったまま、呆然としている。

「いつ…てえっ…な、何するんだよ、クリスター？」

レイフは痛みに顔をしかめて起き上がり、口元に手を持っていく。唇が少し切れたのだろう、滲んだ血を手の甲でぬぐって、自分の前に立ち尽くしている兄を恐る恐る見上げた。

「どうして―どうして分からないんだ、レイフ…？ 一体、いつになったら、おまえの目は覚める？」

琥珀色の双眸を火のように爛々と燃やし、胸の前で拳を震わせながら、クリスターは喘ぐように訴えかけた。

「レイフ、おまえは―カレッジでもフットボール続けて、その次はプロを目指すつもりなんだろう？ それが、おまえの子供の頃からの夢だったんだろう？ その夢にようやく現実味が出てきた今、本気で叶えたいと思うなら、そんな甘ったれた考えは捨てろ！ 大学の名門チームなら、それこそ全国から選りすぐりの選手が集まる。その中から頭角を現すには、並の能力では不可能だ。これまでみたいに手を抜くことなんて許されない、ライバル達より一步でも先に出るために、相当の努力が必要になるんだ。ましてや将来プロを目指すつもりなら、尚のことだ。相手が誰でも負けるものか、自分こそがナンバーワンなんだ―おまえ自身がそう信じられずに、夢など

叶えられるものか！ 僕と同じポジションを争う羽目にならずにすんでよかっただって？ 違うだろ、たとえば相手が僕でもチャンスを掴むためなら蹴落とすんだ、僕を乗り越えてその先を行け、たとえば1人でも――おまえが目指す頂上にいつか立つために……」

そうクリスターが熱を込めてかき口説くのを、レイフは床に座り込んだまま呆気に取りられて眺めていた。

「クリスター……」

ふいに喉もとを震わせたレイフは、掠れた声で兄に呼びかけるが、途中で唇を噛み締めた。

胸の中にはたくさんの言葉が詰まっているのにそれをうまく伝えられないのがもどかしいというかのごとく、口を開きかけては閉じ、感情の昂ぶりにあわせて微妙に色を変えていく目を見開く。

「違う……そうじゃないんだよ、クリスター……」

レイフが苛々と激しく頭を左右に振るのを、クリスターはきつい目で睨みつけていた。

「何が違うと言うんだ？ ただ漠然と夢を見ているだけじゃなく、それを叶えるためには、何をどうしなければならぬか、おまえは自分の頭で考えなくてはならない。当たり前のことじゃないか。もう子供じゃないんだぞ、僕に頼らず、おまえは自分の意思で将来どうするか決めるべきなんだ」

頭ごなしに否定されたレイフの頬に、さっと朱の色が上った。

「オレの意思だって？ そんなことを言うおまえが、オレの気持ち
をちゃんと確認してから物事を決めたことなんて、これまでにいっ
ぺんだって、あったのかよ！」

感情を爆発させると同時に床から飛び起きたレイフは、自分を威
嚇するように睨みすえている兄に激しく詰め寄った。

「いつだって、おまえは、それがオレのためだからって、何でも勝
手に決めてやってきたんじゃないかっ！ 大事なことでオレには
黙って、自分1人で背負い込んで―今もまた勝手にオレの将来を決
めようとしている」

「馬鹿なことを言うな！ 確かにジェームズとの確執を長い間おま
えに黙っていたことはすまなかったけれど、それとこれとは別問題
だ。僕はただ―おまえにはちゃんと子供の頃から追ってきた夢を叶
えてもらいたただけだ。僕の陰に隠れてしまうことなく、おまえの
本当の力を十二分に発揮して、大好きなフットボールを続けて欲し
い：僕にはとても望めないような栄冠をいつか手にして欲しい―」

「だから何で、オレとおまえが離れることを前提にして、話を進め
るんだよっ！」

「駄目なんだ：僕には、おまえほどの能力はない。去年出した成績
が、僕の限界なんだ。これ以上やると僕はきつと壊れてしまう：た
とおまえと一緒にカレッジに進んで、プロになろうとしても、僕
はきつとおまえの足枷にしかない。おまえにはまだまだ伸びる
余地があるけれど、僕は―」

プライドの高いクリスターにとって、こんなことをレイフの前で
認めるのは耐えがたかった。

レイフを納得させるためならと血を吐くような思いで告白したのだが、とにかく兄の気持ちを变えたい一心のレイフには伝わらなかったようだ。

「そんなのやってみなきゃ分からないじゃないかっ。大体、自己評価が低い割にオレのことは買いかぶりすぎるなんて、おまえ、変だよ。それに、全く現実を見てない。さっきのスカウトもフランクス・コーチだって、おまえの実力を認めているっていうのに――」

「彼らの判断が常に正しいとは限らないよ。少なくとも僕には納得できない――おまえが正当に評価されないなんて…そうだ、フランクス・コーチを一度問いただしてみよう」

「いい加減にしてくれよっ!」

レイフは悲鳴のような声をあげ、クリスターの肩を掴んで揺さぶった。

「おまえの方こそ、いつもの冷静な判断なんか吹っ飛んでるぞ、クリスター。自分が俺を差し置いてチャンスを掴んだのが許せないから、フランクス・コーチに文句を言うだって? そんなの全く理屈にあわねえじゃんか」

「レイフ…」

「オレの成績が高校1年目をピークに後はがたと落ちて、今でも伸び悩んでいるのは全てオレの責任だ。他の誰のせいでもない。まして、おまえがオレの邪魔をしているなんて、おかしいことを言わないでくれ…もしも本気でそう考えているのなら、おまえはオレを

馬鹿にしている…!」

一瞬心底憎らしそうにクリスターを睨みつけたかと思うと、レイフはすぐに表情を和らげ、深い溜息をついた。

「小さな頃から身体能力に関してだけは少し勝っていたはずのオレが、何でいざとなると、いつもクリスターより劣るのか…オレだって、考えないでもないよ。もしかしたら、さっきおまえが言ったような、相手が誰でも蹴落として一番になろうとする気概がオレにはないのかもしれない―心の強さって奴が足りないのかもしれない。確かに、おまえほどの精神力がオレにあればとは思うけれど―」

レイフは我ながら不甲斐なさそうに唇をきゅっと噛み締めた。

「それは、たぶん―おまえが僕の背中をいつも見続けて、それを後から追いかけることに慣れてしまっていたからだよ」

どこか疲れたようにクリスターがぼつりと漏らすのに、レイフは不思議そうに顔を上げた。

「おまえにとって二番目というのはさぞかし楽で、安心できる位置なんだろうね、レイフ。僕を追いかけていれば間違いないと素直に信じてついてきて、それで今まで、そこそこうまくやってこられた。でも、おまえを高い場所に連れて行くために常に能力以上のものを出さなければならなかった僕は―いつものしかかってくる責任とプレッシャーに押しつぶされそうだった。それでも僕に、プロという遥かな頂上にまでおまえを引き上げてやるだけの力が本当にあれば、僕は最後までずっと先頭に立っておまえを導いてやったと思うよ。でも、現実には、そうじゃない」

クリスターは肩を掴むレイフの手を引きはがした。

「だから、僕は、フットボールをやめる」

「ク、クリスター！」

慄いたように目を見開くレイフを見るのは辛かったが、心を鬼にして、クリスターは決然と言い渡した。

「今の自分よりもっと強くなりたいなら、僕の背中ばかりを追って
いては駄目だ。これからは夢を追うことに伴う責任は自分で負い、
自分の力で道を切り開いていけ」

「待ってくれよ…そ、それなら、オレだって、もっと努力するから
―今までクリスターにばかり負担をかけてたなら、謝るよ。これか
らは自分の面倒は自分で見れるようにする、兄貴にいちいち頼った
り、甘えたりしない。何だか当たり前すぎるけど、自主トレーニング
グだって1人でちゃんとやるし、面倒くさいからってミーティング
勝手にさぼったりしない―とにかく、今季は死ぬ気でやって去年以
上の成績出すから―」

捨てられまいとしている子供のように、目を潤ませ鼻の頭を真っ
赤にして、レイフは、たどたどしい口調で必死に訴えている。

それをしばし見守ったクリスターは、苦笑しながら、身を引こう
とした。

「それはいいことだな。おまえが本当の本気になれば、僕の助けな
んかなくたって、どこのカレッジ・チームに入っても立派にやっ
ていけるよ。スカウトの目にだって、きつととまる」

「おい、オレの話をちゃんと聞けよっ」

「何が話なものか、駄々をこねているだけだろ」

かっとなったレイフは、手を伸ばしてクリスターを捕まえようとしたが、クリスターは素早くそれをかわした。

「よせよ、レイフ」

途端にレイフの目の色が変わる。その射すくめるような強い眼差しに、クリスターははっと息を飲んだ。

「クリスター！」

レイフの手がまたクリスターを求めて伸ばされる。クリスターはすかさず払いのける。

クリスターの足がさり気なく後ろに引かれる。すぐにレイフの足が追ってくる――。

ついに壁際にまで追い詰められたクリスターは、こんなふうにはレイフに迫られて、つい理性のたがが外れそうになった、いつかの夜のことを思い出した。

とっさに、クリスターは弟から顔を背けた。緊張感に身がすくむ。

己を捕まえようと肉迫するレイフが、くすんと鼻を鳴らすのを聞くまでは。

「レイフ…？」

クリスターは背中にあたる壁を感じながら、恐る恐る振り返った。

「駄目だ、クリスター、オレを置いていかないでくれよ…おまえなしで1人で生きていくなんて…オレには、できねえ…」

心細げに肩を震わせ、今にも泣き出しそうな顔をして、自分の目を捉えようと必死に追っている弟の目をクリスターは見返した。

一瞬、2人の視線は重なり、絡まりあって、言葉以上に雄弁に互いを希求する心を伝えようとする。

クリスターの唇が震えた。

（おまえなしで1人で生きていくなんて、僕にも、できない…）

喉の奥から熱い叫びが迸りそうなる。

しかし、それをかろうじて飲み込むと、クリスターはレイフを力づくで押しのけて、よろめくようにリビングから出て行った。

「オレは、兄さんと一緒じゃなきゃ嫌なんだ！」

途方に暮れたレイフの発する声が、その背中に叩きつけられる。

クリスターは一瞬立ち止まったものの、弟のもとに戻りたがる足を叱咤し、何も言わず、そのまま逃げるように家を後にした。

第5章深淵に潜むもの（11）

フットボールをやめたって、僕達が兄弟であることは変わらない。今までと同じように、僕はおまえを愛し続けるよーそうとでも言っ
て、レイフをなだめるべきだったろうか。

だが、レイフは、そんな形ばかりの慰めなど受け付けはしなかつ
ただろう。

僕達は、ただの兄弟ではないから。

フットボールという、2人の間に唯一残されていた共通の言語を
失って、ただの肉親としての距離を保ちながら付き合うなんて、僕
にもレイフにもきつと無理だ。

フットボールをやめるという僕の宣言は、僕がレイフと決別する
という意思表示なのだといつもちゃんと分かっている。

兄弟という枠にはどうしてもはまりきらず、かといって、恋人や
伴侶になることもできない、こんな行き詰まりの僕達の関係は、こ
こで終わらせなければならぬんだ。

家のドアを開いたセオドア・フランクスは、そこに固く張り詰めた面持ちで立ち尽くしているクリスターを見つけて、少し驚いたようだ。

「すみません、コーチ、突然押しかけてきたりして―」

「いや、別に構わんよ。まあ、とにかく中に入れ、クリスター…ちよっと散らかっているがな」

レイフとの口論の末、家を飛び出したクリスターは、どうしても気持ちが静まらず、フランクス・コーチを訪ねたのだった。

彼の家族はテキサスに留まっているため、この2年間彼は1人でここに暮らしている。

今シーズンがうまくいって契約更新になったら、家族を呼び寄せて本格的にこちらに住むつもりらしい。

フランクス・コーチは、リビングのテーブルやソファの上に散らかしていたビデオ・テープやフットボール関係の資料を簡単に片付けて、クリスターに坐るよう促した。

「男の1人暮らしは、何かと不便だな…ううん、オレンジ・ジュースがきれているな」

冷蔵庫の中を覗きこんで嘆息するフランクスに、クリスターは慌てて声をかけた。

「コーチ、どうかお気遣いなく。別に喉は渴いてません」

キッチンから戻ってきたフランクスは、クリスターの向かい側に腰を下ろすと改めて自分の教え子をまじまじと見つめた。

「何かあったのか、クリスター？」

「実は、今日家に戻ったら、テキサス大学のスカウトが待っていたんです。マイケル・シュミットと名乗っていました。父の大学時代のチームメイトだったそうで――」

「ああ、マイクか。おまえに興味を示していたが、また随分行動が早かったんだな」

「僕を彼に推薦したのはコーチだと聞きました」

「ああ、マイクは今回は優秀なクォーター・バックを特に欲しがっていたんだ：どうしたんだ、クリスター、さっきから妙にうかない顔をしているが」

クリスターは恩師を落胆させるのが忍びなくてしばらく黙っていたが、やがて思い切って、自分が今季限りにフットボールをやめるつもりであること、進学もそれを前提に既に志望校を決めていることを打ち明けた。

「本気なのか？」

フランクス・コーチはラースのようにあからさまに動揺することなく最後まで冷静にクリスターの話を聞いていたが、どうしても確認せずにはいられないかのごとく、そう問いかけた。

「はい」

「そうか：惜しいな。確かに以前、進路について迷っているとおまえから聞かされたことはあったが、それでも、昨年の優勝経験で気持ちは固まったものだと思っていたよ。おまえならきつとやれると俺も確信していた。だが、おまえは、もう自分は限界だと言うんだ：？」

クリスターはゆっくりと頷いた。

「そのことは、おまえの親父さんや：レイフにもちゃんと話したんだな？」

クリスターは思わずコーチから目を逸らしたくなった。

「僕は一応伝えたつもりだったんですが、2人ともちゃんと納得していなかったんです―そこに、今日いきなりスカウトが訪ねてきたものですから、僕は色々困ってしまっ―シュミットさんが帰った後にレイフと話し合ったんですが、僕も弟もつい感情的になってしまいました。それで、居たたまれなくなった僕は家を飛び出して、ここに―」

「なるほどな」

「コーチ、あの：」

「何だ？」

珍しくも口ごもるクリスターを見て、フランクスは訝しげに眉を寄せた。

「コーチは、スカウトが接触してきたら、今回の僕のケースのように、将来性を見込んだ選手を推薦したり宣伝したりなさるんですね。僕以外にも何人か、資料を送ることも含めて、そんな対応を既になされているんですか？」

「シーズンが始まらない今は、問い合わせの数自体それほどないが――ただ、去年の成績がよかっただけに、これまでになく各大学チームの関心がうちに集まっているのは確かだ。既に進学を決めている生徒は別にして、俺も、可愛い教え子達になるべくチャンスは与えてやりたいからな。これはという活躍をしてくれた子には、可能な限り、多くのスカウトの目にとまるようにしてやるつもりだよ」

「それで、レイフは――これまで、弟に関心を示してくれたスカウトはいないんですか？ その：コーチは僕のこととはとても大きく評価してくれましたが、弟は――コーチの目から見て、レイフはまだ推薦できるレベルではないんでしょうか？」

「ああ：なるほど、おまえは自分のことよりも、弟の将来の方が気になるのか。やれやれ――」

フランク스가どこことなく哀れむような眼差しを投げかけるのに、クリスターはついむきになった。

「あいつは僕と違って、将来にわたってフットボールを続けることを前提に進学を考えています。僕も、レイフの実力なら、立派にカレッジ・チームでやっていけると信じています。本当なら、僕よりもレイフの方にもっとスカウトの関心が集まってもいいはずなのに、弟が正当に評価されていないのが僕は悔しいんです」

「クリスター、その点については、残念だが、俺の意見はおまえとは違う。確かにレイフは素質のある選手だと思うが、その力を実戦で未だ充分に発揮できていない。おまえのようにもっと目に見える形で能力をアピールしてくれないことには、スカウトの食指も動かないし、俺も推薦するのをためらう」

「でも、レイフを傍で見してきたコーチなら、あいつが本気で力を出せば、州ランキングの三位程度で終わるはずがないと分かるでしょう？ あいつは、あれでもまだ余力があるんです…いつだって、僕が必死になって努力した末にやっとできたことを、あいつは遊び半分に楽々こなしてしまうんです」

「クリスター…おまえは明らかに、弟可愛さに目が眩んでいるぞ」

「そんなことはありません」

「それなら言うがな。俺にとって、レイフの何が一番齒がゆいのか、腹立たしいのか―それは今おまえが言ったことそのものなんだ。人がうらやむほどの才能に恵まれていながら、それを活かすことを知らない。楽しいことは喜んでするが、辛いことはやりたくない―精神的にいつまでも子供のままだ。その性格が成績にもはつきり出ている。調子のいい時には、俺でさえ思わず目を奪われるような才能のきらめきを確認に見せるくせに、そのすぐ後にどうしようもなく平凡なプレイをする。それでも俺は、ずっとあいつに期待をかけていた。いつかすごい選手に成長してくれるんじゃないかと…だが、今のところ裏切られっぱなしだ。たとえ天才でも、気ままな子供は当てにならない。当てにできないものを、おいそれと推薦などできないということだ」

ぴしゃんと言いつ切った後、フランクスは、クリスターがまるで自

分が侮辱されたかのように悔しげに唇を噛み締め、膝の上の手をぐっと握り締めて押し黙っているのに気が付いた。

さすがに少し言い過ぎたと思ったのか、幾分口調を和らげて、多少は理解も見せながら付け加えた。

「レイフが高校1年目に出した記録のすごさは俺も分かっている。あれだけ見れば、確かに俺だって、あいつの潜在能力を信じたくなる。しかし、あの時がレイフのピークでもあったんだろう。成長期の一時信じられないくらいの身体能力が発揮されることがあるものだ。単なるスランプなら、いい加減それを脱してもいいはずだ。3年前と同等の能力を今のレイフが出せるのか、実際なかなか難しいんじゃないか……？」

「僕は、あいつが本気にさえなれば、かつての自分を乗り越えることも不可能だとは思いません」

「では、いかにして、その本気にレイフになるかだろうな」

何を言われても頑として認めないクリスターを前に、さすがに呆れたのだろう、フランクスの声の温度は僅かに下がった。

どこかピリピリした静けさが、向き合って坐っている師弟の間にしばし下りた。そして――

「コーチ、レイフには確かに面倒なことを避けたがる子供じみた性向がありますが、フィールドの上に立ってしまえば、いつだってあいつは真剣にプレイをしていますよ。なのに肝心な所で力を出し切れないのは、たぶん他の理由からです」

クリスターが喉の奥から搾り出すようにそう言うのに、フランク
スは怪訝そうな目を向ける。

「他の理由？」

「あいつは、いい所まで行っても、何故か途中で怯んでしまう。こ
れ以上は駄目だと自分にブロックをかけて、力をセーブしてしまう
…それは、単なるあいつの甘ったれた性格からくる気の弱さや怠慢
のせいだとコーチや他の人達もずっと思ってきたことでしょう。僕
も少し前までは、そう思っていました。でも、違ったんです」

「クリスター？」

「あんまり早い時期にピークに達してしまったレイフだから、その
後にきた長いスランプからなかなか脱せないでいるせいで、あれが
あいつの限界なんだと言われるのも仕方ないことかもしれない。で
も、本当は、あいつはまだ自分の限界を試してすらいんです。
無意識の抑制が働いてしまうために、完全燃焼する前でいつも火が
おさまってしまう」

うつむいたクリスターの目は、落ちつかなげにテーブルや床の上
をさ迷っていたが、フランクスの顔には決して向けられなかった。

フランク스에語りかける口ぶりでありながら、実際には彼の存在
など忘れ果て、自分の内面に対してのみ語りかけているかのようだ
った。

「子供の頃、僕達と一緒に柔道を習っていたんです。僕とレイフは
同程度に強くて、昇級のスピードもほとんど同じでした。ただ僕は
中学卒業を一区切りと思って柔道をやめ、レイフはその後も続けま

した。何が起こったと思います？　そこからのレイフは師匠さえ目を見張るくらいの成長を見せ、今では四段、国際試合に出たって通用するくらいの力をつけるまでになっています」

「おい、クリスター、おまえは一体何を言っているんだ？」

フランクスの声には今や明らかに不安がこもっていたが、クリスターは全く気にも留めなかった。

「だから、僕は思うんです。身動きを封じる枷がなくなって自由になれば、あいつは本来の実力を思う存分発揮できるに違いない：柔道だけでなく、たぶんフットボールでも同じことだろうと――」

クリスターは唇を震わせ黙り込んだ。

（要するに、僕さえいなくなれば、あいつは本気にならざるを得なくなる訳だ）

そのこと自体は、クリスターは少し前からある程度認識していたが、だからどうするとまでは突き詰めていなかった。

それゆえ、今ここに至って頭の中に天啓のように突如閃いた考えに、クリスターは愕然となるしかなかった。

たぶん、クリスターが傍にいる限り、レイフはその存在を意識して、己に抑制をかけてしまう。フットボールは今季限りと言言することでクリスターはレイフを突き放したが、それでも一緒にフィードに立ち続ける限り、彼はクリスターの背中を追うことをやめはすまい。

今季は、レイフにとって、自らの将来につながられる、最後のチャンスだというのに――。

（何てことだ……レイフに限界まで力を出させ、本当の実力をコーチや大学リーグの関係者に見せ付けるには、そこまでやらなければならぬのか……！）

クリスターは両手で顔を覆い、こみ上げてくる感情を静めようと何度も息をついた。

（でも、いくらなんでも、そんなこと――この僕にだって、できるものか！　僕だってまだフットボールを愛している……今季限りと決心したからこそ、思い残すことがないように全力を尽くして打ち込みたい。この気持ちに偽りは無い。それに、僕にはチーム・リーダーとしての責任だってある。これまで一緒にやってきた大切な仲間達……僕に期待をかけてくれているコーチやスタッフ、僕とレイフにフットボールの楽しさを教えてくれた父さんを裏切ることなどできない、でも――）

伏せた掌に隠されたクリスターの顔は苦しげに歪んでいた。さながら生きながら心臓を切り裂かれようとしているかのごとく。

「おい、クリスター、しっかりしろ……！」

動転したフランクスを耳元で聞いたと思った途端、肩を揺さぶられ、クリスターははっと我に返った。

「どうした、顔色が真っ青だぞ」

まっすぐにクリスターの目を覗き込むフランクスの顔には教え子

に対する真摯な気遣いが溢れていた。

クリスターはとっさにそこから顔を背け、弱々しく掠れた声で囁いた。

「すみません、コーチ、何だか急に気分が悪くなって――」

フランクスは額に冷たい汗を浮かべているクリスターをソファの上に横にならせようとするが、クリスターはその手をそっと押さえた。

「大丈夫です、コーチ」

「大丈夫という顔色じゃないぞ。今、冷たい水を持ってきてやる」

なだめるようにクリスターの頭に手を置くと、フランクスは素早くキッチンの方へ飛んでいった。

それをすまなげな眼差しで見送って、クリスターはおもむろにソファから立ち上がった。

その唇が動き、フランクスに向けた謝罪の言葉を形作る。

クリスターは音もなく動いて、玄関の方へ向かった。

「……なあ、クリスター、レイフのことだがな、俺はさっき随分厳しい評価を下したが、別にあいつを見放したわけじゃないんだぞ。むしろ、高校最後の今シーズンこそ、あいつは化けてくれるんじゃないかないかと今ちょっと期待しているんだ。あいつのな、陸上部のコーチ連中とこの間会って話す機会があったんだが、前学期の後半、あい

つのタイムが急に伸びてきたんだと。何があったか知らないが、あのさばり魔が真面目に練習に打ちこむようになったらしい。それを聞いて、ようやくと、あいつにもエースの自覚が出てきたのかなと少し思ったんだが―おまえはその辺りレイフから聞いていないのか？」

冷たい水と氷を入れたグラスを手にはリビングに戻ったフランクスは、入り口で立ち尽くした。

つい先程までそこにいたはずのクリスターは、いつの間にか、忽然と姿を消していたのだ。

そして、フランクス最後の言葉を聞かぬまま、彼の家を飛び出したクリスターは、深い物思いに捕らわれたまま、家路に着いていた。

（シーズンが始まる前にジェームズとの決着をつけようと思うなら、時間はもうそれほど残っていない：僕の手でできることにも限りがある。僕が最も望むこと、僕が一番にすべきこと―もしも、どうしても1つだけしか選べないのなら、僕は迷わない。たとえば、それ以外のものは全て切り捨てるしかなくとも、他の何を犠牲にしても、僕は―）

クリスターが家に着いた頃には、もう日は暮れかかっていた。

ここに戻るまでの間に、クリスターは大分落ち着きを取り戻していた。いや、むしろ激しい感情の昂ぶりの後にくる一種の麻痺状態に陥っていた。

家の中があんまり静かなので、もしかしたら両親だけでなく弟も

どこかに出かけたのかと思いながら、クリスターは2階に上がってみる。

レイフの部屋の扉を軽くノックしたが返事がないので、少し開いていたそれを押して、中を覗き込んだ。

すると、ベッドの上でぐっすりと眠り込んでいるレイフを見つけた。

ベッドの脇にはクリスターが買ってきてやった雑誌が落ちている。

クリスターは足音を殺して部屋の中に入ると規則正しい寝息をたてている弟に近づき、ベッドの下に落ちている雑誌を拾い上げた。

「人がせっかく買ってやったものを落とすなよ」

ごく低い声で囁き、レイフの頭の横にそっとその雑誌を置いた。

レイフはよほど深く眠り込んでいるのか、微動だにしない。

クリスターは弟の顔の上に屈みこんだまま、しばらく、その寝顔をじっと見ていた。

いつもなら、そのまま身を引くところだが、この時のクリスターはレイフから離れがたかった。その無心な寝顔をいつまでも見ていたかった。

子供時代のように。何の迷いも疑いもなく、この子は自分のものだと思われていた、あの遠い日のように――

クリスターの手が上がり、レイフの頬に優しく触れた。

レイフの肌の温もりが触れた部分からクリスターに伝わる。

その瞬間、張り詰めた氷が一気に溶け崩れ、クリスターの中に熱く狂おしい感情が弾けた。

「レイ…フ…」

クリスターの顔が切なげに歪んだ。目尻に薄っすらと涙が滲む。

（レイフ、レイフ、おまえだけが僕に――我を忘れさせる…！）

クリスターはレイフの唇に己の震える唇を触れさせた。深く重ね、飢えたように貪った。

たちまち電流に似た衝撃が体の隅々にまで走る。

甘美で苦しく、そして痛い――。

クリスターは打たれたかのようによろめき、立ち上がり、まさか目を覚ましはすまいかと恐れながら弟を見下ろした。

レイフは身動き1つしない。

それでも、二度と触れないと自らに課した誓いを破ってしまったことで、クリスターはひどく打ちのめされていた。しばしその場に呆然と立ち尽くした後、無力感にひしがれたまま、静かに弟の部屋を後にした。

そして、クリスターが去った後の薄闇の降りた部屋の中―。

眠っていたはずのレイフの胸が大きく上下した。

固く閉ざされていた瞼が上がり、動揺のあまり揺れ動いている琥珀色の瞳が、つい今しがたクリスターが出て行った扉の方へ向けられる。

レイフは力の入らない体を起こし、こみ上げてくる震えを抑えようとするかのごとく両肩を抱いた。

「あ…っ…」

微かな嗚咽が漏れかける口をとっさに手で塞ぐ。

その唇に触れたクリスター唇の感触。触れた先から伝わった電流のような衝撃が、痛くて、苦しくて―。

（クリスター、クリスター…！）

狂ったような飢渴感が爆発した。

もう一度クリスターをここに引き戻したい、離れぬようぎゅっと抱きしめ、あの唇を思い切り吸いたい。

ドアを食い入るように見据えていたレイフの両目から涙が迸った。

一線を越えてしまった13才のあの時からずっと、レイフとクリスターはあそこには戻らないよう、必死になって取り繕い、忘れようと努力してこれまでやってきた。

しかし実際には、離れるどころか、あの場所から一步も動くことなどできなかったのだ。

（ああ、オレ達は今まで、何て空しい、無駄な努力を重ねてきたんだろうな、クリスター）

何年経とうが消えない胸の中の炎。

何年経とうが、2人がどんな風に変わろうが、決して許されることのない恋。

（オレ達は、兄弟なんかじゃない、愛し合う恋人同士だ。昔も、今も、たぶんこれからもずっと――）

レイフは膝を抱え込み、声が漏れぬよう手で押さえたまま、密かにむせび泣いた。

クリスターを想いながら、そして、自分達を愛してくれている他の大切な人達に溢れる涙と共に謝りながら、レイフは哀しみの淵に深く静かに沈んでいった。

第6章最後の闘争（1）

ダミアン・ハートは長い間、死んだも同然の状態だった。

貧しい母子家庭に生まれたダミアンはボストンのロウアー・エンドの集合住宅で幼い頃を過ごしたが、若い母親が男と蒸発した後は、兄と共に施設に預けられることになった。

最低限必要な世話は受けられたものの、施設の環境は劣悪で、そこを出て行った子供達の多くが行き着く先はホームレスか犯罪者という厳しい現実が、ダミアンの前に横たわっていた。

その例に漏れず、15才で先に施設を飛び出していったダミアンの兄ネルソンも、すぐに地元の犯罪組織に入り、じきに窃盗事件等を起こして警察に捕まった。

それでも、1人残してきた弟のことを気にかけていたネルソンは、ある程度自立した生活ができるようになるまでダミアンを迎えに来てくれた。

しかし、時既に遅く、兄が不在の3年間、他に守ってくれる人もいない中、施設の職員達や孤児仲間―中には通いの神父もいた―から性的虐待を受け続けたダミアンの心はばらばらに碎け散っていた。

暗く凍てついた目をし、一言もしゃべらず、ネルソンを含めた誰から話しかけられても何の反応も示さない。

人形のような存在に成り果てたダミアンが、唯一興味を示したものが、兄が教えてくれたブルーメランだった。

ネルソンは、死んだ弟がやっと息を吹き返してくれたようだと言純に喜んだが、この遊びに対するダミアンの熱中ぶりは少々度を越していた。

ほとんど一日中1人で黙々と練習を続けているうちにどんどんうまくなっていったダミアンは、そのうち小さな生き物を標的にしてブーメランを投げるようになった。

この様子に、当然ネルソンは眉を潜めた。しかし、ようやく自分の意思で動き始めたダミアンから唯一の楽しみを取り上げるのをためらうあまり、弟の行為がどんどんエスカレートしていくのを止められないでいた。

我とも分からぬ衝動に駆られるがまま、生き物を殺すダミアン。殺傷能力をより高められるよう、ブーメランのブレイドを加工し、投げ方にも工夫を凝らし、狙った獲物の体を切り引いた瞬間に、胸の奥に封じ込まれた鬱屈とした苦しさがずっと消えさるのを感じていた。

初めはスズメやカラス、それから野良猫や野犬―小さな生き物を殺すことに次第に飽きたらなくなってきたある日、ダミアンは家の傍で1人のホームレスを見つけた。

自分が何をしようとしているのか分からぬまま、ダミアンはそのホームレスの後をつけ、人気のない路地に入り込んだところで愛用のブーメランを構えた。

たぶん、ダミアンは、その男を的にするつもりだったのだ。本当に殺していただろう。ダミアンの様子がおかしいことに気付いて後

を追ってきたネルソンが、彼の手を掴んでとめなければ―。

『お前は、自分が何をしようとしたのか、分かっているのか？』

その訴えの意味も理解できないダミアンを前に困り果てたネルソンは、それから間もなく、ダミアンの知らない1人の少年を連れてきた。

『…ダミアンを助けてやってくれないか。あんたなら、何とかできるだろう？このままだと、あいつはきつと取り返しのつかないことをしちまう！』

ダミアンが彼と初めて出会ったのは、家の近くの小さな教会の中だった。

『そうだねえ：確かにこのまま放っておけば、生き物を殺すことに満足できなくなったあの子は、ほぼ確実に、次は自分よりも弱い子供や女を狙うようになるだろうね。でも、不思議なものだね、他人を傷つけたり殺したりすることも平気なはずの君が、弟が人殺しになるかもしれないからと途方に暮れているなんて』

長椅子に坐って、光に透けるステンド・グラスの中の天使をぼんやりと見つめているダミアンの耳には、兄が誰か知らない人と交わす言葉が届いていたが、それらも初めのうちは彼にとって何の意味もなさなかった。

『ダミアンは自分が何をしようとしているのかも、相手が誰なのかすら分かつちやいないんだ。オレだって、たった1人の弟を、狂った無差別殺人鬼になどさせたくない』

『ふうん…自分で分かってやっている殺しならいいけれど、理由もない、手当たり次第の殺しは駄目だっていうことかな？』

この辺りでは聞いたこともない綺麗な発音の英語。耳に快い柔らかな笑い声。やがて自分の方に近づいてきた静かな足音に、ダミアンがふと顔を向けると、色つきの窓から漏れてくる光の中、ゆつたりと佇む金髪の人が笑いかけてきた。

『やあ、ダミアン』

まるで天から舞い降りてきたかのような、こんなにも純真無垢な笑顔を見るのは初めてだとダミアンは思った。

彼は、ダミアンがさっきまで眺めていたステンド・グラスの中の天使に少し似ていたが、その深沈とした暗い闇を湛えた瞳は全く異なっている。

ダミアンは思わず身震いをした。

昔施設のいた頃神父が聞かせてくれた話を、その時、なぜか思い出していた。

（気をつけるんだよ、悪魔は常に自らを光の使いであるかのように見せかけるものだからね…）

ふいに、その神父が自分にしたことを思い出しかけたダミアンは、固めた拳を自分の頭に叩きつけようとした。

『駄目』

その手を、ダミアンの知らない温かな手がとらえた。

『自分を痛めつけるような馬鹿なことはやめるんだ、ダミアン』

弾かれたようにダミアンが目を上げると、金髪の少年の顔がすぐ近くにあった。藍色の瞳の中心に慄くダミアンの顔を映したまま、その双眸がゆっくりと細くなる。

『僕の名前はジェームズ・ブラック。君に会うためにここに来ただよ。さっきお兄さんに色々君のことを教えてもらったんだけど、ブーメランが得意なんだってね？　ねえ、ダミアン、よかったら僕に君の腕前を見せてくれないか？』

他人からこんなことを気安く頼まれても、普段のダミアンならば無視するところだが、ジェームズの願いを断ることはなぜかできなかった。

ダミアンの心にするりと入り込んできたジェームズの声は、優しくはあったが、否とは言わさない魔力を帯びていたのだ。

その日から、ジェームズはダミアンを度々訪ねてくるようになった。

ダミアンは相変わらず一言も話せないままだったが、ジェームズには、そんなことを気にする様子は全くなかった。穏やかに響く声で、機嫌よくダミアンに話しかけてき、その綺麗な唇から柔和な笑みが絶えることはなかった。

ダミアンは次第に彼の存在に慣れていき、共に過ごす時間を心地よく思うようになっていった。

ジェームズは、ダミアンが得意のブーメランでカラスや野犬を殺すのを見ても、他の人達のように驚いたり騒いだりもせずに、凄いなえと誉めてくれる。今まで他人から肯定されたことなどなかったダミアンは、ジェームズに感心されると、それだけでちょっと嬉しくなった。

傍からは人形のように無反応に見えるダミアンだったが、実はちゃんとジェームズの話に耳を傾けていた。ジェームズもそのことに気づいていた。

ばらばらに砕け散ったかに思われたダミアンの心は、ジェームズの助けを借りて少しずつ元に戻ってきていた。しかし、まだ真に目覚めるまでには至っていなかった。

（あの人はオレの全てを分かっている。受け入れてくれる。オレを裏切り、傷つけた、他の連中とは違うんだ…）

いつしか、ダミアンはジェームズを深く信頼するようになっていた。

信じられる対象が傍にいることは、子供に安心感をもたらす。

だが実際、ジェームズがダミアンに与えたのは、それ以上のものだった。

（ねえ、ジェームズ、何をしに、どこに行くの？）

その夜、ダミアンはジェームズに連れられて、暗い夜道に行く先も知らず歩いていった。

ダミアンが目で不安を訴えかけると、ジェームズは彼をなだめるよう、絹のような手で頬を撫でてくれた。

『君が何を必要としているのか僕には分かっているんだよ、ダミアン・ハート。だから、心配することなどない：僕を信じて、言うとおりにするんだ』

いつの間にか、暗い公園の中に、ダミアンはジェームズと共に立っていた。

『ダミアン、あそこに君の新しい標的がある。君のために、わざわざ僕が見つけてあげたんだよ。さあ、試してごらんよ。狙いを外さず、ちゃんとあてることができたなら、僕は君に、とっても素敵なプレゼントをあげるよ』

まるでクリスマスの話でもするかのように楽しげなジェームズが指し示した方向を見やると、1人の若いホームレスがゴミ箱を漁っていた。

傍にあった外灯が薄っすらと照らし出した男の顔を見た途端、ダミアンはいきなり気分が悪くなった。

じりつと後ずさりするダミアンの背中を、ジェームズの手が支える。

『大丈夫、恐がらないで、ダミアン。本当の君は強いんだよ…あいつをやれ。そうして、君が心と体に受けた傷の痛みを、自分の力で克服するんだ』

ベンチに坐ってタバコをふかしているホームレスを眺めながら、
がたがた震えているダミアンの耳を、ジェームズの微笑混じりの吐
息がそっと撫でる。

『見てごらん、あれはただの薄汚いホームレスだ：壊すことなど、
簡単さ』

死をもたらす甘い毒を含んだ蛇の囁き。

聞いた途端、ダミアンの中で、何か狂暴なものが身じろぎした。

ダミアンは、肩に引っ掛けていたリュックサックをおもむろに下
ろして、中から1本の大型ブーメランを取り出した。ブレイドはよ
く切れるよう、研ぎ澄まされている。

（あれは、ただの薄汚いゴミだ。殺すことなんか、簡単だ）

次の瞬間、ダミアンは全身を鞭のようにしならせてブーメランを
投じた。

空を切りながら飛んでくるブーメランの音に気付いたのか、訝し
げに顔を上げる男の頭にヒットした後、それは見事な弧を描いて戻
ってき、ダミアンの計算どおりの場所に落下した。

『素晴らしいね』

ジェームズが後ろで拍手するのを聞きながら、ダミアンはベンチ
の下に倒れている男に恐る恐る近づいていった。

頭を割られて死んでいる男を、肩で息をしながらしばし見下ろし

たダミアンは、思い切って、足で男の体を裏返した。

外灯の明かりに照らされた、その若い顔には見覚えがあった。施設にいた頃、ダミアンを嬲り者に使っていた連中の1人だ。

ダミアンの目の奥で赤い火花が散った。長い間眠っていた彼の心が、その瞬間に目覚めた。

「あ……うあああ……！」

獣のようにダミアンは吼えていた。胸の内に封じ込んでいた熱く狂おしい衝動のまま、泣き叫び、猛り狂い、既に死んでいる男の体に激しく打ちかかった。

やがて――いつの間ここに來たのか、ダミアンの兄が彼を死体から引き剥がした。

「その男の顔、間違いないね？」

ジェームズが冷静に確認するのに、ネルソンはうつそりと頷き、死んだ男を忌々しげに睨みつけた。

「ああ、ダミアンを弄んだ畜生だ。オレが先に見つけていたら、この手で殺してやったところさ。しかし――」

「この場合、ダミアンが自分の手で始末をつけることが必要だったんだよ」

死体の傍にぺたんと座り込んで放心していたダミアンは、ジェームズが自分の名を呼んだ途端、さっと顔を上げた。死んだ魚のよう

だった緑の瞳には、生き生きとした輝きが灯っていた。

「ジェームズ…」

ダミアンは掠れた声でジェームズを呼び、手を伸ばした。傍らではっとネルソンが息を飲んだが、ダミアンはジェームズしか見ていなかった。

「ああ、やっと目が覚めたようだね」

満足げな深い笑みを口元に浮かべたまま近づいてきたジェームズは、地面に膝をつくと、その胸にダミアンを抱きよせてくれた。

「お帰り、ダミアン」

結局、ジェームズの言ったことは全て正しかった。

その夜の出来事をきっかけに、ダミアンは再び現実世界に戻ってきた。

心を失った人形ではもはやない。ちゃんと言葉を話し、兄や他の人間達とも普通に接することができる。

何もかも元通りのダミアン・ハート。いや、それ以上の生命力に満ちていたが、根本的なところはやはり狂ったままで―。

実際、目覚めたダミアンが真っ先にしたことは、かつて自分を虐待した者達を1人ずつ処刑していくことだった。

頭や首を鋭利な刃物で切り裂かれて死んだ男達の数是最初に殺さ

れたホームレスも入れて5人にもなったが、犯罪歴のない11才の
か弱い子供の名前が捜査線上にのぼることはついになかった。

復讐を終えた後、得体の知れない胸の苦しさもすっかり癒えたダ
ミアンは、新しく生まれ変わったような気分だった。

何人も無残に殺したが、罪の意識など微塵もなかった。

「だって、オレはあいつらが誰なのかちゃんと分かっていたし、あ
いつらには殺されても仕方のない理由があったんだからさ」

一方、どこことなく釈然としない様子のダミアンの兄に向かっては、
ジェームズが悪びれもせずにごう言つてのけた。

「手当たり次第の無差別殺人でないだけ、よかったじゃないか。ま
さか、君だって、この子が今更普通の子供に戻るなんて期待して
いたわけじゃないだろう？ そんな悲しそうな顔をしないで、君の
弟を認めてやることだよ、ネルソン。それにね、君がこれから始め
ようとしている計画においても、この子はきつと役に立つ武器とな
る。自分の力を兄さんのために使えと分かれば、ダミアンは喜ぶ
だろう。人は、誰かから必要とされることで、自分の存在意義を見
出すものだからね」

ダミアン自身は、兄よりも他の誰よりも、ジェームズにこそ認め
られ必要とされたいと強く願っていた。

（あなたは、オレを長い眠りから目覚めさせてくれた。生きる力を
与えてくれた）

ダミアンが暗闇の中で出会った天使―あるいは、それを装った別

の何かだろうか？

ジェームズ・ブラックがいなければ、ダミアンの世界は再び凍てついた闇となり、彼自身も糸の切れた人形のようにたちまち動きをとめてしまうだろう。

ダミアンは館の大理石の階段をぽんぽんと跳ねるように上っていった。

2階はジェームズのプライベートな場所だから他の連中が勝手に立ち入ることは禁じられていたが、彼とフレイだけは自由に訪れることができた。

窓から廊下に差し込んでくる光は、夕暮れ時のオレンジ色を帯びている。

今日一日、ジェームズは一度も部屋から出てこなかった。

ひっそりと静まり返った幾つもの扉を通り過ぎ、ジェームズの寝室の前で足を止めたダミアンは、何か気になったように、後ろの扉を振り返った。

くんくんと鼻を動かし、嫌そうに顔をしかめたものの、気を取り直して、ジェームズの部屋の方に向き直る。

「ジェームズ？」

ダミアンは、ノックもせずドアを開いて、素早く中に入りこんだ。

部屋の主は、薄いカーテンを引いた部屋の奥にある天蓋付きのベツドの中で、背中をこちらに向けて休んでいる様子だ。

「眠っているの…？」

さすがに少しは遠慮したダミアンが小さな声で確認すると、ジェームズの痩せた肩が震えるように動いた。

「いや、起きているよ、ダミアン」

ジェームズはゆっくりと身を起こし、猫っ毛の金髪がはねている頭を無造作にかき回した後、ダミアンを振り返った。

「どうかしたの？」

「ううん…ずっと起きてこないから、ちょっと心配になって…」

ぼそぼそ言いながら近づくと、ベッド脇の小さなテーブルに置かれた食事の盆に目をやる。スープや柔らかいオムレツは半分ほどなくなっているが、固形物はほとんど手をつけられていない。

「起きようと思えば起きられるんだけど、何だか億劫と言うか…体の芯がだるくてね…眠気が取れないのは、たぶん薬の副作用だと思うんだけど—」

「熱は？」

「相変わらずの微熱だよ」

あまり気のないジェームズの返事を聞きながら、ダミアンは急速にこみ上げてくる不安を意識したが、直視したくない現実からはあえて目を逸らした。

「明日になれば、きっとよくなるよ」

「そうだね」

ダミアンはジェームズのベッドにより登ると、その膝の上に頭を乗せて、猫のようにまるくうずくまった。

「ねえ、ジェームズ、向かいの部屋のあれのことなんだけれどーそろそろ片付けないと臭いがやばくない？」

ジェームズのしなやかな指先が頭を撫でる感触の心地よさに目を細めながらも、ダミアンは真剣に訴えかけた。

「オレにまかせてくれたら、今夜にでも綺麗に片付けるよ。ほら、ちょっと前に始末した、あんたに逆らった馬鹿な2人みたいに…」

すると、ジェームズは放心したような眼差しを虚空に向けたまま、感情のこもらない声で淡々と呟いた。

「父さんは、僕のことを理解したことは一度もなかったけれど…少なくとも、僕を愛してくれていた。何の根拠もない盲目的な感情で

も：僕が肉親から得られた数少ないものの1つだった。父さんがあのままずつと僕に騙されつづけてくれたら、よかったんだけどね」

ダミアンはぱちつと瞬きをした。何だか居たたまれなくなつて、ジェームズの膝の上から起き上がるや、今度は両腕を彼の肩に絡めてひしと抱きついた。

「ごめんなさい。二度と言わないよ」

「謝ることなどないよ、ダミアン」

ジェームズの声はいつもと同じ、凧いだ海のように静まり返っている。それでも時折、ごく小さな感情の泡が、深い水底から浮かび上がっては弾けて消える。

「オレさ、ジェームズが好きだよ」

こんな直截的な言葉をぶつけることしかできない自分が、ダミアンとはもどかしくて仕方がなかった。

いや、こんなにも深く狂おしく、絶対的な感情を、そもそも言葉で表現しきれるものではない。

「分かっているよ。ありがとう」

「ジェームズが考えている以上に愛しているよ。あんたが望むなら、何でもするよ、本気だよ」

「そう」

ジェームズは薄っすらと微笑んだようだ。ダミアンの白い髪に唇を押し付け、ごく低い声で囁いた。

「それなら、僕のことをずっと覚えていてくれ。僕がいなくなった後も、決して忘れないで――」

呟いた後、頼むべき相手を間違えたとしてもいうかのごとく頭を振って、ジェームズはダミアンの体をそっと押しのけた。

「ジェームズ……」

ベッドから降りたジェームズは、テーブルの上から水の入ったペットボトルを取り上げ、グラスに注いだ。

「アイザックはどうしている？」

いきなり話題を変えられてダミアンは一瞬戸惑ったが、日頃敵意を燃やしている相手の名前を聞いて、いささかむっとしながら答えた。

「あいつなら、いつものように、そこいらをこそこそと嗅ぎまわっているよ。別に屋敷を抜け出したり、誰かに連絡を取ったりする様子は今のところないけれど、あのまま自由にさせておくことには、オレはやっぱ反対だな。一度自分の仲間を裏切った奴だ。あんたのことも裏切らないとは限らない」

ジェームズは、ベッドの端に坐って足をぶらぶらさせているダミアンを横目で見ながら、眉を軽く上げた。

「彼の服に盗聴器をしかけただろう？ 昨日、僕に文句を言いなき

たよ」

「あは。ばれたんだ」

「あまり行儀の悪いことをするものじゃないよ、ダミアン。僕の教育の仕方が悪いと思われてしまう」

「何だよ、それ」

最高の冗談だというようにけらけらと笑い転げながら、アイザツクの奴、後で脅しつけてやると、ダミアンは心に誓った。

「いつの間にか、こんな時間になっていたんだ」

ジェームズはグラスを手窓の所に行き、カーテンを開いて、外を眺めた。

「何だか、また時間を無駄にってしまった気がするな」

苦笑しながらグラスを口に運んで、水を飲む。

いきなり、ジェームズは咳込んだ。喉を押さえ、何度も激しい咳をする。

「むせた？」

ダミアンはちょっと眉を潜めて、身を2つに折って喘いでいるジェームズを見守ったが、すぐに慌ててベッドから飛び降りた。

「ジェームズ？」

ジェームズの様子がおかしい。

「いや…大したことじゃ…な…」

言い終えるより先に、ジェームズの手から滑り落ちたグラスが床の上で碎け散る。

ダミアンは息を飲んだ。

ジェームズは、グラスを取り落とした己の指先が小刻みに痙攣しているのを呆然と眺めている。

ふっと、何とも苦い微笑みがジェームズの口元にうかんだ。

手の指だけでない。やがて両脚までも彼の意思の制御を離れて震えだし、力が抜けた膝から崩れ落ちるように、ジェームズはその場に転倒した。

「ジェームズ！」

ダミアンは悲鳴をあげて、床に倒れたまま自由にならない体をぎゅっと丸め、突然襲ってきた発作に耐えているジェームズに駆け寄った。

「ジェームズ、嫌だ、嫌…しっかりして！」

すがりつくダミアンを、こんな時でも冷静なジェームズの手が押し返し、大きく見開かれた藍色の瞳がしっかりと見据えた。

「フレ：イを呼んで：くれ：早く：」

がちがちと鳴る歯の間から押し出すようなジェームズの訴えに、
ダミアンは涙目になりながらも瞬時に反応し、傍にあった電話に飛びついた。

（あなたがなくなった時、オレにとっての世界は終わる―）

たとい何ものであっても、どんな姿に変わり果てようとも、ジェームズには生き続けてもらわなければならない。

あれから4年経った今でも、ダミアンを支配し、動かす、見えない糸の先を掴んでいるのは、ジェームズ・ブラック、ただ1人なのだから―。

第6章最後の闘争（2）

僕はあなたを愛している。でも、あなたは別の人を想っている。

だからと言って、あなたが僕にすまなく思う必要なんてないんです。

僕があなたの『唯一の絶対』になれないことは、初めから分かっているから…。

ただ、せめて、あなたの役立ちたい、少しでもあなたを支えたいと、僕が願うことだけは許してください。

ドクター・キャメロンの自宅はクリニックのすぐ隣にある。

ダニエルは、灯りのついていない家に用心深く近づいて、中に人の気配がないことを確認した後、ポケットから取り出した合鍵―隙を見て作っておいたのだ―を使って扉を開けた。

時間は午後8時過ぎ。

今夜、キャメロンはボストン市内で開かれている学会とその後のパーティーに出席するため、帰りは遅くなるはずだ。

クリニックの仕事をいつも通り何食わぬ顔で終わらせ、他の従業員も皆帰った後、ダニエルはかねてからの計画を実行に移した。

ドクター・キャメロンが自宅に保管しているはずのジェームズ・ブラックのカルテを見つける。

ジェームズ・ブラックに関する重大な秘密が、そこには隠されているはずだからだ。

（そもそもブラック家が、ドクター・キャメロンをわざわざ子供達の主治医に選んだことからして怪しい、何かあるに違いないと、クリスターさんは睨んでいたんだ。普通の子供達を診てもらうのに、なぜ高名な遺伝学者を雇う必要がある？ でも、実際、ブラック家には、どうしても子供達の健康に留意しなければならない切迫した事情があったんだ）

ジェームズとの最初の闘いの最中に、クリスターが可能な限り調べあげ、推理を巡らせ、ここに至ってほとんど確信するまでに至ったジェームズの秘密。それらに思いを馳せながら、ダニエルは暗い家の中にするりと忍び込み、キャメロンの研究室を目指した。

（そう、ブラック家の男子は概して長生きできない――一見どこも悪くない子供として生まれ、健康に成長していったのが、20才前後でいきなり正体不明の病気にかかり、治療の甲斐もなくすぐに死んでしまう。昔は、こんな不吉な話は公にはできない、名家の名に傷がつくからと、事故にあったとか適当な理由をでっちあげて処理されたこともあった。そして、迷信深い者達は陰でこう囁きかわした――かつて旧大陸からやってきた彼ら一族の当主は、莫大な富を得ることと引き換えに悪魔に自分の子供の魂を売った、ブラック家の不

幸はその犠牲にされた子供の呪いなのだ。男子にのみ受け継がれる『ブラック家の負の遺産』：やがて、それは一種の遺伝病なのだということが分かった。そして、現代の医療技術をもってすれば治療も可能なのではないかと考えたジェームズの両親は、キャメロンにすがったわけだ。ブラック家の最後の男子、メアリ亡き後は唯一の後継者になった、ジェームズの命を救うために）

つまり、ジェームズ・ブラックは生まれた時から、いつスイッチが入るか分からない時限爆弾を抱えて生きてきたわけだ。

だが、たとえジェームズが長く生きられない体であったとしても、それがどんな性質の病であるのか分からず、ましてやいつ発症するかも知れない。現実には進行中のジェームズとの闘いにおいて、そんな不確定の要素をあてにするわけにはいかなかった。

（それに、以前のクリスターさんは、アイザックやコリンさんの手前、ジェームズの仕掛けた闘いに自分は仕方なく応えているだけだと装っていたけれど、実際彼との勝負そのものに結構拘っていたから：ジェームズの知略以外のところにある弱点につけこむのは、プライドの高いあの人には抵抗があったのかもしれない。ある程度調査はして、仮説を立てたりしたけれど、それはそれとして胸に留めておくだけにした。第一、そんな可能性に頼らなくても、クリスターさんはジェームズに見事に勝って、彼を施設に閉じ込めることに成功したんだ）

しかし今は、あの時とは状況が違う。

ただ閉じ込めるだけでは、ジェームズから完全には逃れられないのだと、今度のことで、クリスターにしても思い知ったはずだ。

（かつての仲間達：コリンやミシエルがあんな目にあって、アイザックも行方知れず―何よりも、自分の家族にまで害が及んでしまったことで、クリスターさんはどんなにかショックを受けただろう。何としても、今度こそはジェームズを永遠に葬り去らなければならないと、あの人は決意している）

だが、一体どうすれば、あの人間らしい恐れも迷いも持たない、限度というものを知らない怪物に勝てるのか。

突き詰めると、ジェームズの命を奪うしか、クリスターが彼から逃れる道はないのではないかとさえ思われてくる。

（怖いのは、もしかしたらクリスターさんなら本当にやりかねないということなんだ。あの人も：ある意味、ジェームズと同じ、限度というものを知らないから：そう、もしも―再びレイフさんにジェームズの手が伸びるようなことがあれば、たぶん、あの人は躊躇わない）

そこまで考えて、ダニエルは思わずぞっとしたように身震いした。

「駄目。クリスターさん、あなたをそこまで追い詰めるようなことには、絶対させない」

自分に強く言い聞かせると、ダニエルは、暗がりの中たどり着いた、キャメロンの研究室に忍び込んだ。そうして、一応用心のため灯りはつけず、持って来た懐中電灯でデスクや本棚の周りを照らしながら、目当ての資料を探し始めた。

（僕がここで、ジェームズの正確な健康状態が分かるデータを見つければ…そして、それが、僕が怪しんでいることを裏付けてくれた

なら、クリスターさんにとって大きな安心材料になるはずだ。施設から出てきた後のジェームズの生活態度、父親の治療を通じてドクター・キャメロンと頻繁に会っていること、そしてクリスターさんが語った彼の印象からすると、あながち僕の思い込みとばかり言えないもの。ううん、やっぱり僕は期待しているんだ。だって、ジェームズの時限爆弾のスイッチが入ったのだとしたら、それが仮説どおり速やかな死を彼にもたらししてくれるものなら―クリスターさんは何ひとつ犠牲にすることなく、彼の魔の手から逃げ切れるだろうから―)

人の死を、かくも切実に願う自分は間違っているだろうか。自然にこみ上げてくる人間らしい罪悪感が、ダニエルの小さな心臓を震わせる。しかし、若いだけに一途に燃える愛情は、それを凌駕していた。

(間違っているとしても、構わない…あなたさえ無事でいてくれるなら、何の憂いもなく幸福に暮らせるようになるのなら、僕は―)

キャメロンの机の引き出しの中にあった、大量のファイル・ケースを探っていたダニエルの指先が、ふいにとまった。

「見つけた…ジェームズのカルテだ」

机の上にそれを広げ、素早く目を通してみる。

古い日付のものには、せいぜい年に数回なされた検査の結果と異常なしというような短い所見が記されているだけだった。しかし、それが一転、ここ最近のカルテにはびっしりと書きこみがなされている。

（やっぱり、父親の往診時に、ジェームズもキャメロンの診察を受けていたんだ。自分の今の健康状態が外部に漏れた時の影響を慮って、隠してきた）

更に、ダニエルはカルテに添付されている検査データを調べてみた。クリニックのアルバイトをしているうちに覚えた一般的な検査項目も多かったが、中にはほとんど馴染みのないものもあった。しかし、素人目から見ても、明らかな異常を呈しているのが分かる。

（血液検査だけじゃない：筋電図検査、神経伝道検査、脳波の検査までしているけれど、さすがにこれは専門家じゃない僕には分からないな。とりあえずデータを写して、後で細かく調べてみないと）

それら検査データをカメラに収めた後、ダニエルは、また別の引き出しの中に、今度はキャメロンの手によるものらしい一冊のノートを見つけた。

ブラック家に特有のこの病気に関する、キャメロンの研究の記録のようだ。

きちんとまとめられたものではないが、一族の家系を辿りながら個々の病例についての考察を述べたものや―近い所ではジェームズの叔父の例があった―また、病気の原因と思われる遺伝子の欠損部分についても書かれている。

初めは内容を拾い読みしながらぱらぱらとページをめくっていたダニエルは、途中で目に止まった記述に思わず手をとめ、それを食い入るように読み始めた。

（発症年齢は20才前後が最も多いが、中には早くも10代半ばで

症状が出た者や、30代後半まで健常者として過ごした者もある。女性にもまれに症状が表れた例はあるが、ほぼ九割がた男性に伝わる：症状としてはまず運動神経系の異常が顕著に現れ：神経の細胞死による筋力や反射機能の急速な低下。小脳、脳幹部にも萎縮・脱落が起こり、それに伴う四肢の不随意運動が強くなるケースもある：間歇的な痙攣発作を起こす：しかし、知能低下はほとんど見られない：発症した後の進行は極めて早く、予後も悪い。発症後半年程度で自立歩行は困難となり、全身の筋肉が衰え、2年以内で多くの場合死に至る。残念ながら、現時点で根本的な治療法はない）

死に至る―ダニエルは思わず息を飲んだ。そして、先程引き出しの中に戻したジェームズのカルテを慌てて取り出し、もう一度詳しく読み始める。

「3月14日：この日、ジェームズは出所後初めてキャメロンの診察を受けている。手の違和感の訴え。長引く微熱。それが病気の最初の兆候だったとすれば、発症して、そろそろ半年が経つのか。ジェームズの場合、まだ歩けなくなるほど状態は悪化していないようだけれど―」

ダニエルの可愛らしい顔に、ふっと妖しい陽炎めいた笑みがうかんだ。

「でも、いずれせよ、ジェームズ・ブラックはじきに体の自由も利かなくなつて：1年かもう少し経てば死ぬんだ。J・Bがどんな悪魔だつて、死んでしまえば、これ以上クリスターさんに付きまとうことなんてできない：よかった」

心から安堵して息をついたものの、自分の台詞の残酷さにふと気付いたダニエルは、さすがに少しばかり恥じ入った顔になった。

その時―低く唸るような車のエンジン音が、この家に向かって近づいてきた。

ダニエルははっとなつて顔を上げた。まさかと思いつつ窓に駆け寄り、そつと外の様子を窺った。

すると、あろうことか、今夜は遅くまで帰宅しないはずのドクター・キャメロンの黒のベンツが家の前に止まり、続いて、その後ろにもう一台見慣れぬ白い車が停車した。

「どうして―学会のためにボストンに行っているはずのドクターが、急に戻ってくるなんて…」

動揺のあまり上ずった声で呟いた、その直後、ダニエルは、己が見たものに本気で喫驚して叫びそうになった。

（ジェームズ…?!）

白い車の運転席から出てきた大型な男、そして後ろの座席から外に飛び出してきた華奢な少年、彼ら2人の助けを借りて最後に車から降りたのは、誰あろう、ジェームズ・ブラックその人だったのだ。

（ど、どうして―いつも自宅でキャメロンの往診を受けてきたジェームズが、今夜に限ってここに現われるなんて―）

そんな疑問が脳裏を掠めるも、聡いダニエルはすぐにジェームズの様子がおかしいことに気付いた。

ダニエルが出所後のジェームズを目にするのが、この時が初めて

だった。

確かにクリスターから、彼が会った時のジェームズの様子については聞かされていた。しかし今、実際目の当たりにするジェームズは、以前よりも痩せて体力が落ちているどころか、自分で動くのも覚束ないほど弱っているように見えた。一度は大柄な男―フットボール・チームの一員だったフレイダーが支えようとするのを断って自力で歩こうとしたものの、結局はあきらめたのか、彼に半ば抱きかかえられるようにして、この家に向かってくる。

ベンツから降りてきたキャメロンが、心配そうに彼らに声をかけるのが聞こえた。

「私の今夜の予定を君達が把握していてくれて、全く幸いだったな。いきなりホテルの前で待ち構えられていたのには驚いたが―」

ジェームズの傍らにぴたりとくっ付いていた小柄な少年が、少女のような甲高い声でキャメロンに噛み付く。

「そんなことはどうでもいいから、早くジェームズを治せよ、このやぶ医者!」

「発作なら、見ての通り、もう収まっているよ。だが、そうだな…念のため検査をして…痙攣予防の薬を少し変えてみようか」

キャメロンのその言葉を聞いて、ダニエルは自分が置かれた状況の危うさによりやく気がついた。

4人は何事か話しながら、ジェームズの歩調に合わせて、こちらにゆっくりと近づいてくる。

ダニエルは動転しながらキャメロンの研究室から飛び出し、逃げ場を求めるように辺りを見渡した。すると階段の下に小さな物置を見つけたので、とっさにその中に隠れこんだ

狭い空間の中、みっしりと詰まった暗闇。

胸の奥の心臓が激しく打ち鳴らされるのを感じながら、ダニエルが息を殺して待ち受けていると、家の扉が無造作に開けられ、中に人が入ってくる音と気配がした。

廊下の灯りが、物置の扉の隙間から僅かに漏れてくる。

足音はダニエルの隠れ場所のすぐ傍を通り過ぎ、先程まで彼が資料を探していた研究室の隣の部屋に入って行った。そこには、簡単な診察ができるようなベッドや薬品類があったはずだ。

（こんな時間にいきなりキャメロンを訪ねてきたのは、ジェームズの容態が急変したからだろう：さっき発作がどうか言ってたし：ジェームズ自身も動くのも辛そうに見えた。彼の病状は、実際の所、どこまで進んでいるんだろうか：？）

しばらく物置の中に身を潜めていたダニエルだったが、彼らが部屋に入ったきりしばらく動きそうにないと見定めるや、慎重に扉を開き、廊下に出てきた。

（頭では分かっているけど、あのジェームズが本当に死にかけているなんて：まだ信じられない）

ダニエルはジェームズやキャメロンがこもっている部屋にそろそ

ろと近づき、その扉に耳を押し付けて、中で交わされている会話を拾おうとした。

「…ジェームズ、これまで何度も言い聞かせてきたが、そろそろ自宅療養も限界だよ。今度の発作は単純な痙攣だったが―今後は下手をすれば突然死にもつながるような急激な容態悪化も起こりうる。私が紹介する病院ならば、君に似た病気のケアにも慣れている。この際、ちゃんとした施設に入院して治療に専念してみたらどうだね？」

医者らしい威厳の中にも真摯な気遣いのこもったキャメロンの声が、最初に聞こえてきた。そして、

「ドクター…もしも治療によって回復する見込みが少しでもあるのなら、僕はあなたの助言に素直に従っていたでしょうね」

ジェームズの声は、話すことも苦しげに、弱々しく掠れていた。それでも、自らの意思を伝えようとする力を失ってはいなかった。

「そんな辛そうな顔をしないでください。あなたが子供の頃からずっと僕を見守り、この病気の発症を抑える方法を真剣に探し続けてくれたことは、ちゃんと承知しています。残念ながらあなたは間に合わず、僕は発病してしまった。でもね、ドクター、たとえばあなたがそのことについてどう感じていようが、僕自身は長生きしようなんて無駄な希望は初めから抱いていない…んです」

乾いた咳によって、ジェームズの言葉は一瞬途切れた。そして、今度はゆっくりと、一語一語胸の内から押し出すように、切々と彼は訴えた。

「ねえ、ドクター、僕は別に、命を助けてくださいなんて、あなたに頼んでいるわけじゃないですよ。ただ、せめて後ひと月、いや2週間でもいいでいいから、僕が自由に動けるよう、この体を保たせてほしいんです。僕の人生最後の望みを叶えるために、そのくらの時間は必要なんです。その後は、たとえば廃人になろうが死のうが、僕は全く構わないから――」

ダニエルは一瞬、今この扉の向こうで語っているのは、本当にあのJ・Bだろうかと思った。こんなにも切迫した声をジェームズが出すなんて、信じられなかった。

「ジェームズ：君がそんなにも必死になって私に頼みごとをするのは初めてだな。子供の頃から自分の背負った宿命を知っていた君は、それを受けいれ、超越してしまったかのように、私の与える助言や忠告にもずっと無関心だったが：いや、それこそ私の思い込みだったのだろうかね：？」

「いいえ、ドクター。確かに僕は、ずっと自分の生にも死にも無関心でしたよ。特にメアリがいなくなった後の僕は、何もかもどうでもよくなってしまったから――下らない連中相手のゲームや悪戯で退屈を紛らせながら、空しく日々を過ごすだけでした。あんまりつまらなくて、どうせ、こんな毎日はそう長く続かないんだと自分に言い聞かせる僕にとって、いっそ、その日が待ち遠しいくらいでしたよ。それが、ここに至って、僕にももっと生きたいという欲が出てきてしまったんですね。全く、こんな僕にもやっと生きがいが見つかったと喜んだのに、この体はもうもたないなんて、残念でならない：人生のうちの満ち足りた時間というものは、誰にとってもごく短いものだと思いはいたけれど――」

ジェームズの慨嘆に、ダニエルはつい夢中になって耳を傾けてい

た。

だから、廊下の突き当たりにある裏口の扉が音もなくゆっくりと開いて、暗がりの中から人形めいた白い顔が現れ、緑色の双眸が自分を見据えてきらりと不吉に光ったことには気がつかなかった。

ひた、ひた、ひた。猫のように音もさせず、ダミアン・ハートは無防備なダニエルの背中に近づいてくる。

ふいに、ダニエルは得体の知れない寒気を覚えて身震いした。

その肩にじゃれかかるように絡まる細い腕。耳にかかる、熱い吐息―たちまちダニエルは硬直した。

「ね、こんな所でこそそと何してるのさ、うさぎちゃん？　かくれんぼのつもりなら、オレと一緒に遊んでやるよ？」

くつくつという笑い声を頭のすぐ後ろに聞いて、ダニエルの中の恐怖が一気に爆発した。

ダニエルは無我夢中で自分の体に巻きつく腕を振りほどき、ダミアンを突き飛ばした。思ったよりも小柄な相手は、バランスを崩してよろめき、床にしりもちをついた。

「痛ぁいっ」

甘えた声で叫びながらも、ダミアンは、どこか面白がるような、残忍な笑みを浮かべてダニエルを見上げている。

「どうした？　ダミアン？」

部屋の中から、フレイのものらしい太い男の声がした。ダニエルは弾かれたように体を反転させて駆け出し、玄関から外に飛び出した。

（クリスターさん、クリスターさん…）

目立たないよう、クリニックから少し離れた路上に停めてある、友人から借りた車を思い描いた。

そこを指してダニエルは懸命に走るが、もともと左脚の不自由な彼のことだ。追っ手がすぐに行動し、本気になって後を追えば、簡単に捕まってしまうだろう。

しかし、一向に誰も追いかけてこない。

ダニエルも多少不審の念を覚えはしたが、ここから逃げ切らねばと焦る思いの方が強かった。

（何としても、あなたに知らせなければ…あなたの推理は正しかった。ジェームズの命はもう長くない―）

ダニエルが広い庭を突っ切って敷地の外に逃れようとしていた時、そのずっと後ろ、彼が今しがた飛び出してきた家の前では、ダミアンが伸び上がるようにしながら逃亡者を見送っていた。

「ダニエル・フォスターか」

うっそりとした声がつぶやくのに、ダミアンが後ろを振り返ると、苦虫を噛み潰したような顔のフレイが佇んでいた。

「クリスター・オルソンの仲間だね？」

ゆるゆると目を細めながら、ダミアンが確認をする。

「どうして、すぐに捕まえなかった？」

「だって、暴れる相手と取っ組み合いなんて、疲れるから、嫌だもん」

ダミアンは悪びれもせずに言い放って、ますます渋い顔をするフレイにからかうような眼差しを投げかける。

「でも、今からでも遅くないから捕まえろって言うなら、一発でちやんと仕留めるよ？ どうする？」

足元に置いた黒いスポーツバッグを足でつついて、ダミアンが無邪気に促すと、フレイは迷うような素振りを見せた。

（こいつ、図体はでかいけれど、根は臆病者だな）

ダミアンが再び口を開きかけた、その時、家の中からジェームズが姿を現した。

ダミアンとフレイは、とっさに姿勢を正した。ゆったりと前に進み出るジェームズの両脇に素早く控える様子は、まるでよく躰けられた二頭の猟犬のようだ。

「ジェームズ：大丈夫か、中で休んでいた方が――」

おろおろと手を伸ばして支えようとするフレイをそつと制して、ジェームズは、逃げていくダニエルの姿を別に意外でも何でもなさそうに眺めやった。

「ジェームズ、ねえ、やってもいいだろ？」

期待に満ちて、ダミアンが訴えかける。フレイは口を挟むことなく、諦めたように地面に目を落とす。

ジェームズは、ふつと微笑んだ。

「いいよ。ただし、絶対に殺しては駄目だからね」

それが目的でわざと逃がしたんだろうと言外にたしなめるよう、ジェームズはダミアンの頭を軽く小突いた。

「うん、分かってるって！」

ダミアンは嬉々としてしゃがみこみ、黒いスポーツバックを開けた。

中から取り出された、殺傷用のブーメランのブレイドが、後ろから差ししてくるポーチの灯りを受けて、不吉なきらめきを放つ。

皮の手袋をはめた両手に2本のブーメランを携えて、ダミアンは芝生の上に立った。

狩りを前にした昂揚からか、滑らかな白い頬は赤味を帯び、息も僅かにあがっている。

ダミアンは慣れた所作で大型ブーメランを滑らかに操り、構えた。視線の先には、次第に遠く小さくなっていく、ダニエルの姿がある。

（あれは、ただのちっぽけなウサキだ。仕留めることなんか、簡単だ）

ダミアンの華奢な体が、鞭のようにしなう。細い腕が素早く旋回する。

凶器は放たれた。

一方、全力で駆けて行くダニエルは、まさか、そんな恐ろしいものが自分に向かって投じられたなどと夢にも思わない。

振り返りもせず、何としてもクリスターのもとに辿り付かねばという一念だけで動いていた。

（大丈夫、きっと、このまま逃げ切れる…もう少しがんばれば、僕の車が見えてくる）

次の瞬間、空気を切り裂く異様な音をダニエルは聞いた。

反射的に振り返りかけた、その肩を熱い衝撃が掠めていく。

「あぁっ！」

肩先がかつと燃え上がったかに思われた。

血しぶきが上がり、綺麗に刈られた芝生の上に飛び散った。

ダニエルの肩を切り裂いたブーメランは、大きく弧を描いて、再び彼のもとに戻ってくる。

ダニエルは信じられないように目を見開くと、血の噴きだす肩を庇いながら、何とかそれをかわした。

だが、そのすぐ後、ダミアンが放った2本の目のブーメランが、彼の背中に命中した。

「ああああっ！」

絶叫をあげ、ダニエルは地面に倒れ付した。二、三度体を痙攣させ、そのまま動かなくなった。

「やった！ ほら、ジェームズ、見てよ！」

親に誉めてもらうのを期待する幼児のような表情で、ダミアンは後ろに静かに佇んでいるジェームズを振り返る。

その妖しく光る緑の瞳が、心もとなげに翳った。

「ジェームズ…？」

ジェームズは、自分が命じるがまま倒されたダニエルの無残な姿も、興奮のあまり頬を紅潮させて自分にじゃれかかろうとしているダミアンも、全く見てはいなかった。

その深沈と暗い闇を湛えた藍色の瞳は、今周囲で展開している現実を突き抜け、その先に横たわる何か、彼にだけ見える未来の啓示を凝然と見据えているかのようだ。

「ついに時は満ちたということかな」

心ここにあらずのジェームズはひっそりと呟き、胸の辺りに持ってきた左手を見下ろした。依然として微かな震えの残っている指先を、もう片方の手でそっと包みこむ。

「僕にとってか、それともクリスターにとって…?」

誰に問いかけるふうでもなく問うてみた後、ジェームズは胸の前で重ねた手の上に頭を垂れ、瞑目した。

あたかも神に祈りを捧げるかのような厳かな沈黙がしばし流れ、そして――。

「ダミアン、フレイ」

じっと息を殺してジェームズの様子を窺っていた2人は、つい反射的に、びくっと身を震わせた。

そんな彼ら1人ずつにゆっくりと顔を向けながら、ジェームズは何事もなかったかのように、にこりと笑いかけた。

「そろそろ屋敷に引き上げるよ。フレイ、あそこに倒れているダニエルを拾ってきてくれ、彼も連れて帰るから…ああ、でも、その前にドクターに頼んで手当てをしてもらわないといけないかな。出血が結構ひどいようだ。ダミアン、か弱い獲物相手には、もう少し手加減してほしかったな」

まるで、少し前に自分が病人としてここに運び込まれたことなど

忘れ去ったかのように、ジェームズは生き生きとして、楽しげだった。

「だって…血が出なきゃ、おもしろくないじゃん」

不服そうに唇を尖らせるダミアンの顔には安堵の色が浮かんでいた。彼の唯一の神は蘇った。そう、ジェームズが死ぬなどありえない。

「ジェームズ：君らはまた何と言うことを――」

部屋にいるよう言い含めていたのが、いつの間に外に出てきたキヤメロンは、フレイが血まみれのダニエルを抱えてこちらに戻ってくるのを見て、ショックのあまり言葉を失った。

ジェームズは、そんなキヤメロンの肩に手を置いて、なだめるようにさすりながら、その耳に唇を寄せた。

「こんな時のためにあなたがいるんですよ、ドクター…どうか余計なことは何も言わず、ダニエルの処置をしてください。後のことは僕がいいようにしますから――あなたは何も聞かなかったし、見なかった――これまでずっと、僕のことに対して、あなたが保ってきた態度を変えないでください。僕は、僕を死なさぬようあなたが払ってきてくれた努力には心から感謝しています。でも、それらが全て水泡に帰そうとしている今、どうか、最後の望みを叶える時間を僕から奪わないでください」

深く、静かに浸みていく水のように、ジェームズの優しい声は人の心の隙間にすっと入り込み、人を呪縛する。まさに、これこそ悪魔の囁きだった。

キャメロンは体を強張らせ、拳をぐっと握り締めるが、結局ジェームズに反論はしなかった。

「ありがとうございます、ドクター、あなたは二重の意味で僕の恩人です」

力なく項垂れるキャメロンに、謝辞を述べながら無邪気に笑いかける彼は、すっかり、もどおりのジェームズ・ブラックだった。

完璧な調和を体现するかのような優雅さを身にまとい、人の心を震撼させる底知れぬ邪悪さを滴らせて―彼は、フレイが連れ戻ったダニエルをちらりと一瞥すると、すぐに全ての興味をなくしたかのように素っ気無く肩をすくめ、扉の内側に再び戻っていった。

それから小一時間もしないうちに、ジェームズ達は意識を失ったままのダニエルを連れて、キャメロン宅を後にした。

日常の静けさが戻った今、ここであつた凄惨な出来事の痕跡はほとんど見当たらず、ダニエルが密かに拉致されたことを知る者も、今のところ、貝のように固く口を閉ざすことを決め込んでいるキャメロン以外にはいない。

じきにクリスターはダニエルの身に起きた異変を知らされることになるが、それには翌日まで待たねばならなかった。

第6章最後の闘争（3）

クリスターが家に戻ってきた。

ずっと兄の帰りを待ちわびていたレイフだが、クリスターの車が家の駐車場に止まったのを感じた時、すぐに玄関先まで迎えに飛んでいく代わりに、ついベッドで寝たふりをしてしまった。

何しろ、あんなふうに激しく言い争った後だ。どんな顔をしてクリスターに会えばいいのか分からなかったのかもしれない。

たぶん、クリスターのことだから、レイフがどうしているか気にして、真っ先に様子を窺いに来るだろう。

（もしクリスターが部屋に入ってきたら、近づいてくるのを見計らって、いきなり飛び起きて驚かせてやるんだ）

そんな子供じみた悪戯が、頭の中に閃いた。

（そうしたら、クリスターはちょっと驚いたように目を見開いて、何ふざけた真似をするんだと渋い顔をしてオレをたしなめるだろう。そんなあいつにじゃれかかるように抱きついてさ、いつもと変わらぬ態度で笑いかけることができたら、気まずさを取り払って、すんなり打ち解けられそうな気がする）

どきどきいっている心臓をなだめるように、レイフは己に言い聞かせる。

（そうさ、さっきはお互い興奮しすぎて失敗したんだ。今なら少し

は頭も冷えただろうから、ちゃんと正面から向き合ってオレ達の将来のこと：どうするのが一番いいのか、腹を割って話そうよ。オレ、さっきは頭ん中がかあっとなって、うまく言えなかった：オレの気持ち、兄貴にまだちゃんと伝えてない。おまえはオレに、子供の頃からの夢を叶えるためには、たとえ1人でも迷わず天辺を目指す気概を持てと言った。おまえを乗り越えて、その先を行けとーでも、それって、ちよつと違うんだよ。クリスター、オレの本当の望みは、たぶん：)

クリスターが家の中に入ってくる。一瞬階段の下でためらうように立ち止まった後、ゆっくりと階段を上ってくる柔らかな足音に耳を傾けながら、レイフは胸から溢れ出した尽きぬ想いに浸っていた。

(おまえと同じものを見つめて、一緒に歩いていきたい。オレ達にとって、それはずっとフットボールだった。だからこそ、楽しかった、夢中になった：そのオレに、おまえなしで1人で頂上を目指せと言うのか。1人で天辺に立って、そこに一体何を見つけられるのか、オレはそんなものを欲しいと思うのか：分からない、分からないよ、クリスター)

いつの間にか部屋の扉が静かに開いてクリスターが中に入ってきたことに、レイフはたと気付いた。

クリスターは扉の前でレイフの様子を窺うようしばし佇んだ後、ベッドの方に近づいてき、床の上に落ちていた雑誌を拾い上げて、ふつと溜息をついた。

「人がせっかく買ってやったものを落とすなよ」

ごく低い声で呟き、レイフの頭の横に雑誌を戻す。そのまま、ク

リスターはじつと動かなくなった。

顔の上に注がれる、クリスターのひたむきな眼差し。

飛び起きて相手を驚かせるタイミングを見計らっていたはずが、兄の視線に縫いとめられたよう、レイフは身動きすることができなくなった。

じわじわとこみ上げてきた緊張感に、次第に息苦しくなってくる。

クリスターの手の指が、レイフの頬にかかった。その指先に宿った微かな震えが、レイフの心臓を慄かせる。

「レイフ…」

クリスターが切なげな声で呼びかける。

何だかもう堪らなくなったレイフが目を開けようとした時、クリスターの唇が彼の口を塞いだ。

瞬間、レイフの脳裏で何かが弾け、かつて聞いたことのある、遠い声が耳元に囁きかけてきた。

（僕は…アイヴァースとセックスしたけれど…彼のことを欲しかった訳じゃない。僕は…レイフ、おまえが欲しかったんだ）

2人共、まだ13才の子供だった。あの夜、今と同じほどに切迫した声で、クリスターはレイフに訴えかけたのだ。

呆然と声も出ないレイフの唇を塞いだ、クリスターの唇が微かに

震えていたのを覚えている。丁度今、レイフに触れている、この唇と同じように――。

（レイフ、おまえを愛している）

尚も耳に訴えかける、ごく低く掠れた声にこもる希求の深さに、レイフは気絶しそうになる。

それは、ずっと忘れようと努力してきた、2人が犯した罪の記憶だった。

熱い、苦しい、痛い。胸の奥から奔流のように溢れ出した狂おしい感情に圧倒されながら、レイフは己の口を飢えたように貪る兄の唇を味わっていた。

突然、クリスターは激しく慄いたかのようにレイフから身を引いた。

彼は息を殺してレイフの傍にしばし佇んでいたが、やがて、ひどく打ちひしがれたような足取りで部屋から出て行った。

その後、レイフは、やっこの思いで、金縛りにあったように自由にならない体を起こした。

（クリスター、クリスター……行くな、ここに戻ってきてくれ、兄さん……！）

クリスターへの思慕と飢渴に身悶えながら、レイフは扉に向かって手を伸ばした。そこから出ていった者を取り戻そうとするのかのぐとく。

しかし、ベッドから飛び降り、クリスターを追いかけていくことまでは結局できなかったのだ。

（もしも、あのままオレがあいつを捕まえに行ってたなら、どうなっていたのかな…？ キスされた俺がちゃんと分かっていたと伝えたら、あいつはどんな顔をしたんだろうか。もうこれ以上お互いの気持ちをごまかすのはやめようよ、忘れるなんてはなから無理だったんだ。おまえは昔と変わらずオレを愛してて、同じようにオレもおまえが欲しいんだと訴えていたら…？）

あんなことがあった翌日、レイフは珍しく自主的に朝から学校のジムにやってきて、黙々とトレーニングをしていた。

単純に、クリスターと顔を合わせることを避けたかったからだ。

（マジでこれからどうしようか…クリスターなら、オレの態度がおかしいことなんか一目で見抜いて、すぐに、昨日自分がオレにキスしたことに思い至るだろう。どうせ遅かれ早かればれるなら、オレの方から言っちゃおうか）

唇には、今でも兄の唇の感触が生々しく残っている。頬に触れた震える指先、唇を食る合間に漏れた熱い吐息、己を呼んだ切なげな声が、ともすれば鮮やかに蘇ってくる。

たちまち体の芯に生じた狂おしい熱を紛らわせるために、レイフはしゃにむにトレーニングに打ち込むしかなかった。

（ごめん、実はオレ、あの時ちゃんと起きてたんだよ。寝た振りしておどかしてやるつもりが、いきなり兄貴にキスされて、びっくりして動けなかったんだ。でも、ちっとも嫌じゃなかったよ。いや、ほんと言うと嬉しかったよ。だって、オレも兄貴を愛してるから、昔と同じように今でも）

ぐっと腕の筋肉に力をこめ、バーベルを持ち上げる。これで何回目かなど、いちいち数えていない。

（そうさ、オレ達、相思相愛なのさ。だから、もうこれ以上つまらない意地なんか張るのやめて、この先もずっと一緒に生きていこうよ。同じカレッジ・チームに入って、一緒にプロになって―もちろん同じ家で仲良く暮らすのさ。オレ達きつと幸せになれるよ、そうだろ、相棒？）

一生の相棒。これまでだって、レイフはずっとクリスターにそう呼びかけてきた。

無邪気な言葉だ。まるで子供の頃から2人の関係は少しも変わっていないような錯覚を覚えさせてくれる。

（一体、オレ達は何なんだろう…ただの兄弟なんかじゃない…やっぱり恋人か…一生の伴侶っていうと何か夫婦みたいだよなあ。一番愛している人ってだけじゃ、いけないのかな？　そうさ、オレはクリスターが一番大切だ。あいつさえいれば、他には何もいらなんて思える…うん、たぶん大丈夫だ…オレ達のことを知って、父さんや

母さんがどんなに傷ついても、友達全員失っても、ここで暮らせなくなっても、おまえさえいれば平気だよ、きつと…)

強く己に言い聞かせたすぐ後に、迷いがずっと心の隙間に入り込んでくる。

本当に、そこまで思い切れるのか？ クリスター1人を選んで、他の全てを捨てさる覚悟があるか？

兄弟で愛し合うことが、誰からも認められない、許されない罪だということくらい分かるだろう？

答えることを躊躇った瞬間、レイフは、持ち上げようとしていたバーベルを汗で滑らせてしまった。

「うげぷっ」

押しつぶされたカエルのような妙な声をあげて、ベンチプレスの下でくたつとなるレイフのもとに、一緒にジムでトレーニングをしていたトムが慌てて飛んできた。

「おい、大丈夫かよ、レイフ？」

ひょいと上から覗き込んでくるトムの目には、心配そうな表情がうかんでいる。

「うん：平気、別にどこも傷めてないし」

レイフは汗ばんだ額を覆う手の陰から、トムに向かってにこりと笑ってみせた。

「何だか、今日のおまえは変だよ、レイフ。無駄口も叩かず、一見真面目にトレーニングに打ち込んでるけれど、頭の中は他のことでいっぱいみたいだ：何かあったのか？ ひょっとして、クリスターと進路のことでもめたとか？」

レイフは誠実そうな親友の顔をまじまじと見つめ、ちよつとためらった後、何気ない口ぶりで言った。

「そう、その通り、この頃ずっとクリスターのことで頭がいっぱいなんだよな、オレ。おかげで彼女を作る気にもならないくらい、いつもいつも兄貴ばかりでさ、何だかブラコンもここまでくるとちよつと恋みたいだよな？」

「恋だあつ？」と、トムは目をまんまるくした。

「あはは、確かに、おまえのブラコンはあぶねえくらいに重症だよな。ほんと、このままじゃ、たとえ彼女ができて、迷わず兄貴を優先しそうでしゃれにならないよ。やきもち焼きの女だったら、おまえ、きつと殺されるぜ」

レイフの言葉をただの冗談としか思っていないトムは、屈託なく笑っているが、もし本気なのだと知ったら、同じような態度で接してくれるだろうか。

（トムのことは大好きだよ。いい奴だし、オレと気があう。何でも気兼ねなく相談できる。高校を卒業したって、こいつとはずっと友達でいられそうな気がするよ。でも、このことを打ち明けたら、こいつのオレを見る目は変わってしまうんだろうな）

無性にやるせない気分を驅られて、レイフはさり気なくトムから視線を逸らした。

「おい、そこにいるのはクリスターか？」

ジムの入り口付近からいきなり自分に向かってかけられた、聞き覚えのある声に、レイフは体をよじってそちらを見やった。

「フランクス・コーチ：あぁっと、オレはレイフです」

「何だ、サボリ魔のおまえがここにいるのに、真面目な兄貴は今日に来てないのか」

フランクス・コーチはなぜかがっかりした顔をして、ベンチプレスの下から這い出すレイフを手招きした。

「コーチ、何です？」

「いや、実はな―クリスターが昨日俺の自宅を訪ねてきたんだ。何でも、テキサス大のスカウトがやってきて、その件でおまえとちょっともめたらしいな」

「ああ、そのことですか。あいつ、ほんとにコーチの所に乗り込んだんだ」

正直、スカウトのことなど忘れ果てていた。そんなことまで今は考える余裕のなかったレイフだが、フランクスが何やら気がかりそうな目をしていることが心に引っかかった。

「まさか、クリスターの奴、何かコーチを困らせるようなことを言

ったんですか？」

「うむ：いや、それは別にいいんだ、レイフ。だが、どうしても昨日のクリスターの様子が気になってな。ここであいつに会えたら、もう一度ちゃんと言い聞かせておこうと思ったんだが――」

昨日自分と言い争ったクリスターがどんな様子で家を飛び出して行ったか、その後しばらくして戻ってきた時彼がどんなだったかを思い出したレイフは、急に不安に駆られた。

「あいつは、一体コーチに何を話したんですか？」

フランクスは一瞬ためらいを見せたが、いつにないレイフの真剣さに負けたのか、昨日突然現われたクリスターが何を自分に訴えたのか、どんな態度だったのか、包み隠さず話してくれた。

「クリスターがフットボールは高校までと決めたことは――まあ、あいつの将来だ、あいつがそれでよしとするなら、オレには口出しすることはできないさ。確かに、本人の言うとおり、クリスターはずっとぎりぎりの所でやってきたんだろう。のしかかってくるプレッシャーに負けて折れそうになっても、チームメイトやスタッフ、誰よりもおまえのしている前では弱音を吐くことなどできず、自分を奮い立たせて、前に立ってリードするしかなかった」

昨日クリスターが自分に向かって訴えたことを思い出して、レイフはちよつと落ち込んだ。

「オレがもっと早くに、あいつがそこまで思いつめてるって気がついてれば、よかったんだ。なのに、オレ、強いクリスターに寄りかかるばかりだった。2番目がオレの定位置だと思い込んでいたから、

そこから抜け出す努力をしなかった。本当は、少しでも早くあいつに並べるくらいに強くなって、あいつが背負っているものを、オレが半分引き受けなきゃならなかったのに――」

レイフが半ば独り言のようにもらした慨嘆に、フランクスはおやというように目を瞬いた。

「―何です、コーチ？」

しげしげと自分を眺めるフランクスに、レイフは胡乱そうに顔をしかめた。

「いや、おまえもやっとそこまで考えられるくらいに成長したのかと思っただ。高校４年目に差しかかって、やっとエースらしくなってきたか。陸上部のコーチもおまえの態度が今までと違う、これは期待できそうだと行ってたが――裏にはおまえのそんな心境の変化があったんだな」

何の話か分からずきよとんとするレイフを尻目に、フランクスは何事かじっと考え込んだ。

「クリスターは、おまえを何より大切に思っている……全く過剰なほどにな。今回も、あいつは自分の進路よりもおまえの将来のことを気にしていた。おまえの才能を信じ、オレが何を言っても頑として認めない……あの理性的なクリスターが、どうしておまえに関してだけはああなのか……俺はあいつの態度や考えが理解できず、はつきり言っただけを覚えた。弟のことばかりにかまけていないで、もっと自分のことこそ真剣に考えるべきだと分からせたくて――それでいい、必要以上に、おまえについて厳しい評価をあいつに聞かせたんだ。あいつの目を覚まさせたくてな。だが、今思えば、それはどう

やら逆効果だったようだ」

「逆効果？」

「俺の話を聞いてから、あいつは急に様子がおかしくなったんだ：突然妙なことを言い出したかと思えば、顔色が真っ青になって、本当に気分が悪そうだった。俺は慌てて、あいつを落ち着かせようとし、水をくみにキッチンに飛んでいった。だが、再び部屋に戻ってみると、あいつはいなくなっていた。俺の言ったことに単純に腹を立てて出て行っただけならいいんだが：俺は実際、ちよつと言いきたと後悔して、訂正つもりだったんだ。しかし、あいつは肝心な所を聞かず、俺の意図を誤解したまま帰ってしまった」

フランクスは肩を落とし、困り果てたように頭をかいた。

レイフは何と言えいいのか分からず、当惑顔で恩師の次の言葉を待つばかりだった。

「なあ、おまえ達は、子供の頃、一緒に柔道を習っていたんだってな？」

「えっ…？ は、はい、そうですけど―」

「何で、いきなりあんなことを言い出したんだろうな、クリスターの奴：自分が柔道をやめた途端、おまえはどんどん強くなっていたなんて：本当にそうなのか、四段だって？」

「そんなことより、どんな流れで、あいつ、そんな昔話をコーチに話して聞かせたんです？」

「ああ、そうだな、確か―どうして、実力は誰よりもあるはずのおまえが、肝心な時に力を出し切れないのか：そんな話だったな。おまえの精神的な未熟さや弱さがそうさせるのか、それとも単なる怠慢なのか、どうしたら長いスランプを脱することができるのか。クリスターは、おまえが本気にさえなれば、かつての自分を乗り越えることも可能だと言っていた。だが、そのためには―」

フランクスは口にするのをためらうよう、ふっと黙り込み、何とも言えない目でレイフを眺めやった。

「身動きを封じる枷がなくなって自由になれば、おまえは本来の実力を思う存分発揮できるに違いない…」

「えっ？」

「どういう意味なんだろうな、クリスターはひどく苦しそうに、そんなことを言ったんだ。追い詰められ、途方に暮れたようなあいつを見ていて、俺はちょっと恐くなったよ。あいつの考えることは俺には到底分からんが：あの回りすぎる頭で何やらろくでもないことを考えていそうで、昨日のことを思い出すにつけ、どうにも落ち着かなくてな」

レイフは体の脇でぐっと拳を握り締め、心を静めようと深々と息を吸い込んだ。

（それは、たぶん―おまえが僕の背中をいつも見続けて、それを後から追いかけることに慣れてしまっていたからだよ）

進路について口論した時、どこか疲れたような口ぶりでクリスターが言ったことを、レイフはまざまざと思い出していた。

クリスターと話している最中、どうしても引つかかっていたことがあるが、それが何なのか今はっきり分かった。

（クリスターは、自分がいるから、オレがいつまでも実力を出し切れないんだと思い込んでいるんだ。もしもオレをてっぺんまで引っ張っていけるだけの力が自分になればそうしただろうけど、そうじゃないから―オレの足手まといになるくらいなら、フットボールをやめると…）

レイフは目を上げて、怪訝そうに自分の反応を窺っているフランスクスを眺めた。

（柔道の話なんか引っ張り出して、あいつがコーチに言おうとしたのも、たぶん同じことなんだろう―身動きを封じる枷がなくなれば、オレはきっと本気になる。待てよ、枷がなくなれば―ど、どういう意味なんだよ、クリスター？）

突然、言い知れぬ震えがレイフの全身を襲った。

「まさか―いや、全く冗談じゃねえけど、あいつ…本気でオレの傍からいなくなるつもりじゃないだろうか…？」

からからに渴いた喉から搾り出すように、レイフは呟いた。

「レイフ…？」

激しい焦燥感に駆られながら、レイフはフランク스에言った。

「すみません、コーチ、オレ、これで失礼します。クリスターを捕

まえて、確かめないと――」

レイフの瞳の中に何を見たのか、フランクス顔も厳しいものに変わる。

「待て、レイフ――あいつがおかしな真似をしでかしそうなら、俺も一緒に行つて――」

「あなたは来なくてもいい！」

他人の話聞く余裕などなかったレイフは、つい激しい口調で怒鳴ってしまった、フランクスを怯ませた。

ジムの中でトレーニングしていた、数人のチームメイトが驚いたように一斉に顔をこちらに向ける。そこに不安そうなトムの姿を見て、レイフは恥ずかしくなった。

「大声を出して、すみませんでした、コーチ。でも、クリスターのことは俺に任せてください。あいつの態度がおかしいのは、全部オレのせいなんです」

そうフランクスに素早く詫びると、レイフはもう一秒たりとも無駄にしたくないとばかりに、足早にジムを離れた。

（兄貴、頼むから、そんな一方的な思い込みで早まったことするなよ。大体、オレは昨日おまえに訴えたよな、おまえがオレの邪魔をしているなんて、おかしなこと言わないでくれって……人の話、少しはまともに聞いてくれよ、おまえはなんて独りよがりな奴なんだろう）

クリスターと向き合うことをためらう気持ちは、この得体の知れない危機感の前に消し飛んでしまっていた。

（クリスターの考えの全てを理解することは、オレには難しいけれど、昨日あった色んな出来事が、どれだけあいつを揺さぶったかは分かる気がする。突然のスカウトの訪問がオレではなく自分目当てだったこと、それをオレが焦るどころか暢気に喜んでいたこと、その後での口論の末にフランク・コーチに会って―あいつの心はぐらぐらになっていたんだ、いつものように自分を保てなくなるくらい。だから、家に戻ってきた時、眠っているオレを見つけてつい、あんなことをしちまったんだろう。普段のあいつなら、決してあんなふうにオレに触れることはなかったはずだ）

レイフは体育館のロッカー・ルームで着替えをすませると、荷物を引っつかんで、急いで駐車場に向かった。

（まだ昼前けれど、クリスターは家にいるだろうか？ いなかったら、あいつが行きそうな場所を片っ端からあたって、必ず見つけ出してやる）

クリスターの誤解を解かなければ、自分の正直な気持ちを今伝えなければ―言いようのない焦燥感がレイフの足を速める。そして―

「あれっ？」

車に乗り込みエンジンをかけようとした時、レイフは、同じ駐車場の端に見慣れた車が止まっていることに気がついた。慌てて外に飛び出し、その車に早足で歩み寄る。

「クリスターの車じゃん：なんだ、あいつ、学校に来てんのか。ジムには現われなかったけれど、一体何の用事だろ：コーチにでも会いに来たんだろうか？」

首を傾げはしたものの、とにかく意外と近い場所に求める相手がいるらしいことに安堵し、レイフはもう一度学校の方に戻りかけた。その足が、途中でぴたりと止まった。

「クリスター？」

レイフの目は、駐車場を出てすぐの道路脇にある電話ボックスの中に、自分とそっくり同じ、背の高い赤毛の青年の姿を捉えていた。

「嘘：何だか今日はついてるみたいだな、オレ」

暗雲が垂れ込めていた胸は、兎にも角にも無事な兄の姿をすぐ目の前に発見したことで、瞬く間にすっきりと晴れ渡り、レイフは物凄く嬉しくなった。

「兄貴、兄貴っ！」

両手を天に向かって突き出し、ぶんぶん振り回しながら、自分の存在をアピールするが、背中をこちらに向けて誰かと真剣に話しているクリスターはなかなか気づいてくれない。

仕方なく手を下ろし、レイフは電話ボックスに向かってまっすぐ走っていった。

すると、丁度受話器を下ろして、クリスターが外に出てきた。

「ク、クリスター…！」

歓喜の声をあげかけたレイフだったが、電話ボックスの外に立ち尽くして考えに沈んでいる、クリスターの顔に浮かぶ厳しい表情を見て、何かしらはつとなった。

（クリスター？）

そこにいるのは確かにレイフの双子の兄のクリスターなのだが、久しく見たことのないような冷たい眼差しをして、どことなく近寄りがたいような冷厳な空気さえまとっていた。

（何だろう、オレ、前にも一度見たことがある…クリスターのこんな顔―一体、どこでだろう…？）

レイフが声をかけることをためらっているうちに、クリスターの方が彼の存在に気付いた。

「レイフ…？」

感情を抑えた低い声。レイフに向けられた、琥珀色をした瞳は揺らぎもせず、いつもよりも心なしか黒ずんで見えた。

「何だ、朝から一体どこに出かけたのかと思ったら、おまえも学校に来ていたのか」

クリスターは目を細めるようにしてレイフを眺めながら、何か他のことに心の半分を捕らわれているかのような、乾いた口ぶりで言った。

「ジムでトレーニングしてたんだよ」

そんなクリスターの反応を注意深く観察しながら、レイフは返した。

穏やかに微笑んで頷くクリスターは、どこにもおかしな所は見当たらない、いつも通りの彼に見えた。だが、昨日2人の間で起こった一連の騒動の後では、その落ち着きは返って不自然に感じられた。

「クリスター：おまえこそ、どうしてここに：？」

妙に緊張して、レイフは問いかけた。

「今朝、寮の管理人から電話があったんだよ。ダニエルが昨日出掛けたきり、未だに戻ってこないそうだ」

レイフは目を見張った。

「えっ、ダニエルが？　そ、それって、まさか―」

「行き先は誰にも分からず、それで、彼と親しい僕に心当たりがないかと尋ねてきた。そう、心当たりなら、僕にはある：それを確かめるためにダニエルの部屋を調べてみたら、僕宛にこんな書き置きを彼は残していた」

クリスターがポケットから出した手紙を、レイフは引っ手繰るようにして読んだ。

そこには、今夜（つまり昨夜だ）、アルバイトという名目で近づ

いた、ドクター・キャメロンの自宅に忍び込んで、そこに保管されているはずのジェームズ・ブラックのカルテを探すつもりだと、ダニエルの丁寧な筆跡で書かれてあった。

もしもの場合に備えて、自分の行方を知らせる、この手紙を残しておいたのだ。

「この手紙で、ダニエルの身に何が起こったか、大方理解した僕は、今その電話ボックスからジェームズに電話をかけて、ダニエルが無事でいるか確かめたんだ」

ここに至って、クリスターの冷静沈着な仮面に小さなひびが入った。

一瞬黙り込んだ後、彼は何か激しいものを堪えるかのごとく拳をぐっと握り締め、悔しげに吐き捨てた。

「ダニエルは、ジェームズ・ブラックに拉致されたんだ。誰もいないキャメロン宅に忍び込んだはずが、これまでクリニックに顔をみせたことなどないジェームズ達が昨夜に限ってやってきて、見つかってしまった」

レイフは悔しげに舌打ちをし、感情を抑えて立ち尽くしているクリスターの腕を強く掴んだ。

「それで…ダニエルは大丈夫だったのか？」

すると、クリスターは暗い瞋恚をはらんだ目をして、皮肉っぽく呟いた。

「ああ：無傷とは言いがたいけれど、ダニエルはちゃんと生きていたよ。彼の声を：聞かされたからね」

「あいつらに傷め付けられていたのか？」

クリスターは答えたくないというように顔を背けた。その固く強張った横顔を見たレイフは居たたまれない気分になったが、すぐに気持ちを切り替えた。

レイフは、クリスターの正面に回りこみ、その両肩をしっかりと抱いた。

「ダニエルを助けに行こう、クリスター」

レイフが決意に満ちた声で囁くのに、クリスターの肩が僅かに揺れた。

「もともとそうするつもりだったんだろう？　ダニエルがあいつの手の内に捕らわれているって分かった以上、おまえは奴のもとに乗り込んで、一戦交えてでもあいつを取り返すつもりでいる」

クリスターは何も言わず、レイフの言葉にじっと耳を傾けている。

「だが、もちろん、そんなこと、おまえ1人じゃ無理だ。オレも行くよ、兄さん、当然だろう？」

クリスターが答えないので、ちよつと焦れたレイフは彼の体を揺さぶろうとした。その手を、クリスターが押さえた。

「僕達だけで動く前に、まずケンパー警部に連絡を取った方がいい

な。ダニエルがアルバイト先から強制的に連れ去られたことが立証できれば、誘拐事件として警察の介入する余地もできる」

レイフが鼻白むくらい、クリスターの応えは冷静だった。

「う、うん：そうだな、おまえの言うとおりだ」

クリスターは素っ気無くレイフの手を振り払って、身を引いた。レイフは訳もなく不安になった。

「警察に行く前に、ちょっとクラブハウスに立ち寄って、僕のロッカーから持っていきたいものがあるんだけど、レイフ、おまえも付き合ってくれるか？」

「ん、別にいいけど」

クリスターの態度に何となく釈然としないものを感じて、レイフは首を傾げた。

（オレと一緒に行くって言った時、てっきりまた反対されるかと思っただのに、クリスターの奴、何も言わなかった。そりゃ、ここまで切羽詰った事態になれば、オレの手だって借りたいところなのかもしれないけどーなんか、引っかかるんだよな。いや、オレが疑いすぎるのか。クリスターはオレに言ってくれたんだ、一緒にJ・Bと闘おうって…）

レイフは、自分の脇を通り過ぎようとするクリスターの腕をとつさに掴んだ。

クリスターが訝しげに眉を寄せて振り返る。

「兄さん：オレさ、さっきフランス・コーチに会って、話を聞いたんだ。昨日、クリスターが訪ねてきたって言ってた：」

こんなことを話している場合ではないと分かっていたが、レイフはなぜか言わずにはいられなかった。

「クリスターの様子がおかしかったって、コーチは随分心配していたよ。おまえともう一度話したがっていた。オレのことでおまえと口論になったらしいな：どんなに言い聞かせても聞く耳を持たないおまえの態度に腹がたって、つい言いすぎたって、後悔してたーおまえが、思いつめているんじゃないか、何か馬鹿なことをしでかすんじゃないかと心配してた」

「僕が、一体何をするっていうんだい？　コーチの考えすぎだよ」

クリスターは唇を皮肉っぽく歪め、まるで他人事のような冷めた顔で返した。

「で、でもーオレと口論した時からおまえ、言ってることがおかしかったじゃないか。さっきコーチの話を聞いて、オレ、マジで恐くなったんだ：おまえがはやまった真似しちまうんじゃないかって：」

クリスターは呆れたように目を丸くした。

「僕が自殺でもするつもりじゃないかと疑ったわけかい？」

「ク、クリスター：！」

「全く、馬鹿なことを考えるね、おまえ：それを言うなら、フラン

クス・コーチもだ。いや、僕がおかしな態度を取ったばかりに、余計な心配をかけて、コーチには申し訳ないことをしたと思うけれど――安心しろ、レイフ、僕は自殺なんて無意味な真似はしないよ」

「でも、それなら、どうしてあんな昔話をコーチに――なあ、おまえ、自分がいるせいでオレが伸びないとか何とか、とんでもない勘違いをしているぜ、オレはな――」

レイフの言葉を途中で遮るように手を上げ、クリスターは強い口調で言った。

「レイフ、いずれにせよ、今はそんな話をしている場合じゃない……今ここで昨日の口論の続きをする余裕は、僕にはないんだ。頼むから、ジェームズの手からダニエルを救い出す方策を考えることに集中させてくれ」

「う……うん、ごめん」

「おまえの言いたいことは分かっているよ、レイフ――この件が片付いたら、もう一度ゆっくりと話し合おう。フランクス・コーチにも……あんな形で挨拶もせずに飛び出していったのはまずかったと思うし、改めてちゃんと謝りに行って、その時にコーチの話も聞かせてもらうよ」

優しい口調で言い聞かせるクリスターを前に、レイフはそれ以上食い下がることはできなくなった。

だが、それでも――クリスターに向かって溢れ出していきそうな感情を堪えかねたレイフは、彼が戸惑うのもお構いなしに、その体をぐっと抱き寄せた。

「クリスター、クリスター：なあ、約束してくれよ、おまえ、オレの傍から勝手に消えたりしないって」

クリスターの肩に鼻先を押し付け、レイフは心の底から懇願する。

「レイフ：」

クリスターは言葉を詰まらせたかと思うと黙り込み、レイフの抱擁にじっと身を委ねた。やがて、自らも手を上げ、弟の体を強く抱きしめた。

「この僕がおまえから離れようなどとするものか、レイフ、そんなことできやしない：僕はいつでもおまえの手の届く場所にいて、おまえを見守っている：この気持ちに嘘はないよ」

まるで子供をあやすようにいとおしげで、どこか寂しい、クリスターの声を耳元で聞きながら、レイフは訳も分らず無性に哀しくなってきた。

抱き合っているために、相手の表情は見えない。クリスターの顔を覗き込んで、そこにどんな感情が浮かんでいるのか確かめようと、レイフがほんの少し体をずらすと、それが合図と受け取ったようにクリスターはレイフから離れた。

「時間が惜しい。行こう、レイフ」

またしても取り付くしまもない冷徹な態度に戻ったクリスターは、レイフに背を向け、さっさと歩き出した。仕方なく、レイフもその

後続く。

（なぜだろう、この違和感…クリスターが何を思っているのか、分からない。今オレに話してくれたこと、全く正しく耳には聞こえたのに、なぜか胸に入ってこなかった。どうしてなんだ、クリスター…おまえの心は今オレから閉ざされている…）

体育館とそこに併設されているジムから、クラブハウスのある場所は少し離れている。

夏休み中のことであり、クラブハウスの周囲は静まり返っていた。ジムの方には何人かチームメイトがいて、トレーニングに励んでいたが、皆わざわざフットボール・チームの部室にまで足を伸ばすことはなく、体育館内のロッカーを使っているようだった。

その人気のないクラブハウスに、レイフはクリスターと共に入っていた。前に行くクリスターはあれから一言もしゃべらず、レイフを振り返りもしない。

「ロッカーに、こんな時にわざわざ取りに来なきゃならないような、何を置いていたんだよ？」

何となく気詰まりになってきたレイフが声をかけると、クリスターはさらりと答えた。

「拳銃」

「ええっ?!」

「…は、さすがにないけれど、家に置いて、うっかり父さんや母さ

んに見つかったらちよつとまずいようなものを隠してあるんだよ。護身用のアイテムや盗聴器や簡単な発火装置まで――」

「な、何で、高校生がそんなものを隠し持ってんだよ」

レイフのうろたえぶりに、クリスターは小さく笑ったようだ。

「以前、新聞部の連中とJ相手に共闘した時に、ちよつと必要になつてね」

フットボール・チームのロッカー・ルームに入ると、クリスターはレイフが見守る前で自分のロッカーの鍵を開けた。

「レイフ、ケンパー警部の連絡先は分かるか？」

唐突に聞かれたレイフは目をぱちくりさせた。

「ええつと……いや、電話番号までは聞いてないけど――サウスポストン署のどこの部署だったかな……？」

「おまえにも一応ケンパー警部やウォルターの連絡先を覚えておくよ、何かあった時のために――」

クリスターはロッカーから取り出したメモに2人の電話番号を書いて、レイフによこした。

レイフはそのメモを見下ろし、眉根を寄せた。何かあった時のためというのは分からないでもないけれど、どうして今、こんなものをくれるのだろう。

「なあ、兄さん…」

得体の知れないもやもやした感情を胸に抱えて、レイフが呼びかけた時、クリスターはロッカーの奥から黒いスポーツバッグを取り出すところだった。

顔を上げたクリスターとレイフの目があった。すぐに、クリスターは視線を逸らした。

「これ、持ってくれ」

無造作に投げよこされたバッグを受け止めようと慌てて腕を伸ばしたレイフは、前のめりの姿勢になる―クリスターのコントロールが悪かったのか、危うく荷物を取り落としそうになった。

（あれ、おかしいな、クリスターの奴が投げそこなうなんて―）

そんな小さな疑念がレイフの脳裏を掠めた。

次の瞬間、目にも止まらぬ速さで動いたクリスターのパンチが、レイフの横面をまともに捕らえた。

がつんと、肉と骨がぶつかりあう鈍い音が響く。声はあがらなかった。

レイフはどうつと横様に倒れこみ、そのまま動かなくなった。

「ふう…」

クリスターは肩で大きく息をつき、拳をさすりながら、床の上で

ぐつたりと白目を剥いて失神している弟に歩み寄った。

「レイフに見つかるなんて、危うかったな…一撃でこいつを倒せるのか、僕にも自信はなかったけれど、何とかうまくいったか」

クリスターは床に膝をついて、レイフの顔を覗きこんだ。何しろボクシング部のエースの渾身のパンチをもろに食らったのだ、頬骨の辺りは既に赤くはれてきている。しばらくの間は、ずきずきと痛むだろう。

「ごめんよ、レイフ」

すまなげに眉を寄せ、クリスターはレイフの口元に滲んだ血を指先でそっとぬぐってやった。

「でも、おまえをあそこに連れて行くわけにはいかないんだ…本当にごめん…」

クリスターはレイフの頭に手をのせ、いとおしむようにゆつくりと撫でた。

「大丈夫、あいつとの決着をつけた後、僕はちゃんとおまえのもとに帰ってくるよ…死んだりして、おまえを哀しませるものか。ただ、僕は決めたんだ、おまえの将来に影を落とす邪魔者は今度こそ完全に取り除く—そう、1人はジェームズ」

胸の深い所で密かに重大な決断を下してしまったクリスターの瞳は、今は静かな海のように凪いでいる。嵐の前の一時の静寂だろうか。

「そして、もう1人は――」

クリスターの指先が滑り、レイフの唇にかかった。つい昨日、溢れ出した衝動のままに思わず触れてしまった、この唇――。

クリスターは火傷でもしたかのように指を引っ込め、苦笑しながら頭を振った。

「愛しているよ、レイフ、僕はおまえのためだけに生きている。昔も、今も、これからもきつと――」

クリスターは力をなくしたレイフの手を優しくすくい上げ、両手で押し戴きながら唇を押し当てた。

「だから、もう何も恐れはしない」

クリスターはおもむろに床から立ち上がり、辺りを見渡した。そうして、まずは、気を失ったままのレイフの体を後ろから抱くようにして引きずりながら、どこかに移動しにかかった。

第6章最後の闘争（4）

（ダニエル…！）

アイザックは血相を変えて、館の2階へと続く階段を駆け上りかけた。しかし、途中にある踊り場で、丁度下に降りてきた色素欠乏症の少年と鉢合わせをしてしまった。

「アイザック、あんた、誰の許しをもらって上に行こうっていうんだよ？」

どことなく神経のささくれ立ったような声で、ダミアンは牽制してくるが、今のアイザックはその程度の脅しに怯むどころではなかった。

「おい、ダミアン、おまえ達は昨夜、ダニエル・フォスターを拉致して、ここに連れてきたそうだな？」

アイザックは単刀直入に問いただした。

「しかも、ダニエルは怪我をしていたそうじゃないか。ジェームズはあいつには手出しをしないと断っていたはずだ。それなのに、コリンばかりか、あいつまで襲撃したのか…？」

今この時まで、アイザックはダニエルがこの屋敷に連れてこられたことなど知らなかった。つい先程、同じアーバン校の生徒である、ジェームズの手下達が噂をしているのを小耳に挟んだのだ。

「誰が誰を襲撃しただって？ ふん、忘れたのかい、コリンとミシ

エル、あんたの親友達をあんな目に合わせたのは、あんた自身だよ？」

厳しい顔で迫るアイザックに負けじとばかり、ダミアンは半分伏せた瞼の陰から酷薄な緑の瞳を光らせながら、嘲るように言い返した。

たちまち、アイザックの顔が朱に染まる。

「何だ、そんなつまらないことでいちいちジェームズを煩わしに行くつもりなのかい？ 冗談じゃない、ジェームズは今、とても疲れているんだ。あんたの相手なんかさせられないよ」

アイザックは屈辱に頬を引きつらせながらも、ダミアンを押しのけて、ジェームズの部屋を目指そうとした。

瞬間、ダミアンは豹変した。アイザックの手を払いのけるや、ポケットから取り出したバタフライ・ナイフを素早く構え、激しく威嚇する。

「聞こえなかったか、アイザック、おまえをジェームズの部屋には行かせない。血を見る前に、素直に下がちな！」

そんなダミアンの憤怒に歪んだ顔を凝視した後、アイザックはひとまず引き下がった。

今までことある毎に衝突し諍いを繰り返してきた2人だが、この時のダミアンにはいつもと違う切迫したものが感じられたからだ。

「ダミアン、俺が知りたいのはダニエルが無事にいるかどうかだ…

怪我の状態はどうなんだ？　今、この屋敷の中のどこに、あいつはいるんだ？」

「ふうん」

アイザックが大人しく引き下がったのを見るや、すぐにダミアンもナイフを下ろした。

「ダニエルはちゃんと生きてるよ。傷の手当してもらったし。そうか、あんたは友達のことを心配しているんだ…ねえ、あの子の声、聞きたいかい？」

「ああ」

ダミアンの人形めいた小さな顔に、ひどく残忍な表情がうかんだ。彼はポケットから小さなテープレコーダーを取り出すと、アイザックの眼前にかざして、スイッチを入れた。

『嫌っ、嫌だ、やめて…あ、ああっ…あっ…うわあああっ！』

たちまち、追い詰められ恐怖に駆られた者の、か細い悲鳴がテープから流れ出す。

アイザックはびくつと身を震わせた。

『いや、離せっ…ああっ…』

ダニエルの苦しげな声に混じって、他の複数の人間達が発する含み笑いや嘲り、呻き声、そして、人の肉体がこすれぶつかる、いやに生々しい音が聞こえてくる。

束の間、アイザックは状況を理解することを拒んだ。顔を強張らせたまま、惨く淫靡な音声が響き渡るのに呆然と耳を傾けていた。

「どう？ この音声、クリスター・オルソンに生で聞かせてやったんだよ？ ダニエルって、あいつの恋人なんだってねえ：そうだと知ったものだから、八つ当たりじゃないけど、ついあの子にまで腹が立ってきて、大勢の男達に散々やらせちゃったー。あはは、どう思ったんだろうね、クリスターは：可愛がっていた子の悲鳴はさすがに胸にこたえたかな。どんな顔で聞いていたか、見られなくて残念だったさ。もっとも一度はジェームズを追いつめたほどの怪物なら、自分の恋人が弄られても、案外何も感じていないかもしれないけれどさ」

「クリスターをジェームズと一緒にするな！」

思わず大声で怒鳴った後、アイザックは複雑な気分になって、黙り込んだ。

「面白い男だねえ、アイザック。自分が進んで裏切った相手なのに、まだ未練があるのかい？」

ダミアンはくすくす笑いながら、テープレコーダーの電源を切った。

「そんなあんたにとって、いい知らせなのか悪い知らせなのか分からないけど、たぶん、もうすぐクリスター・オルソンがここに乗り込んでくるよ」

アイザックははっとなった。

「この間は、残念なことに会えなかったものね。さあ、行方不明のあんたをこんな所で見つけたら、クリスターは一体どんな顔をするんだろうねえ。楽しみだよ、あんたの裏切りを見せ付けられた時、クリスターがあんたをどう扱うのか……？」

弱みを突かれ、動揺のあまり居たたまれなくなったアイザックは、ダミアンから顔を背けた。

「まあ、安心しなよ、アイザック……あいつと会いたくなけりや、隠れてればいいんだ。それに――」

ダミアンの声の中に何かぞつとするような響きを聞いて、アイザックは思わず振り向く。

「クリスターがここに現われたら、オレがきつと始末してやる。あんな危険な奴をジェームズに会わせられるものか……あいつ、今度はきつとジェームズを殺すつもりなんだ」

ダミアンはアイザックを睨みつけたまま、悔しげに齒軋りした。透けるように白い頬に血の色が差し、目尻には薄っすらと涙が滲んでくる。

「それなのに、ジェームズはあいつに執着している、あいつを欲しがってる――あの、何にも心を捕らわれたことのないジェームズが、あいつには惹かれている。ああ、どうしよう、ジェームズを取られちゃう……」

残忍なくせに妙に子供っぽい、熱にうかされたような口調で呟くダミアンを、アイザックは危うげなものを見るかのような目で見守

っていた。

「ダミアン、おまえはいかれてるよ…」

アイザックが頭を左右に振りながらぽつりと漏らすと、今日はいつも以上に情緒不安定なダミアンはいきなり興奮しだした。

「オレがいかれてたら、どうだっていうのさ！ 何だよ、嫌な目つきで見やがって…畜生、ジェームズがとめてなきゃ、あんたなんかとつくの昔にばらしてやった、他の奴らみたいに―」

ダミアンがうっかり漏らした、その台詞にアイザックは眉をしかめた。その時、階段の上の方から、低い男の声が彼らに向かってかけられた。

「ダミアン、そこまでにしておけ。あんまり声を高くすると、部屋で休んでいるジェームズの神経に触る」

ジェームズの名前を出されたダミアンはぐっと言葉を詰まらせ、黙り込んだ。

「それから―さっき、クリスターを殺すとか言っていたが、それは駄目だ。クリスターは何があっても決して傷つけてはならない、それはジェームズからの厳命のはずだ」

ゆっくりと降りてきたフレイの巨体を憎たらしげに睨みつけると、ダミアンはふいっと顔を背け、そのまま一階に駆け降りていった。

「すまん、アイザック、あいつはジェームズに精神的に依存しきっているんだ。だから、ジェームズの関心を独占しているクリスタ

―とその仲間達を異常なほどに敵視している」

アイザックは激しい疲労を感じながら肩で息をついた。

「まだほんの子供のくせに、あいつは人殺しをゲームのように思っている…まるで殺人狂だ。ジェームズがそうさせたんだな？」

「あいつに関しては、色々と込み入った事情があつてな」

フレイは無骨な顔に複雑な笑みを浮かべて、ダミアンが消えていった方を眺めやった。

「アイザック、だが、分かっているだろうが、おまえにもこれからしばらく行動を自重してもらうぞ。おまえは自ら俺達の側についたんだということを忘れるな…おまえの手は汚れている、もうクリスタルのもとには戻れない」

「…分かっている」

フレイの重々しい口調で宣告されると、今更ながら自分の犯した罪を思い知らされ、アイザックは実に暗い気分になった。

「それなら、おまえをダニエル・フォスターに会わせてやる。とりあえず生きていることを確認すれば、おまえの気持ちも静まるだろう。堪え性のないダミアンがいたぶったおかげで酷い有様だが、命に別状はない。ついて来い」

親切とも言えるフレイの申し出は少々意外だったが、ダニエルの無事を何としても確かめたいアイザックは、素直に彼の案内に従った。

それにフレイは、狂気じみたダミアンよりは、ずっとまともで道理の分かりそうな男に見えた。少なくとも、この男ならば、あまり無茶や理不尽なことはしないような気がしていた。

フレイはアイザックを連れて一階まで降りていくと、いつもジェームズの手下達がたむろしているサロンや遊戯室は通らず、あまり使われることのないゲスト・ルームや美術・工芸品を納めた部屋などがある別棟へ続く廊下に入っていた。

廊下の壁には所々古い肖像画が飾ってあるが、その中の人物達の暗い色の瞳がふとジェームズのそれと重なって、アイザックを何となく落ち着かなくさせた。

「なあ、フレイ…あのいかれたダミアンはともかく、どうしてあんたがジェームズなんかに従っているんだ？」

何でも話せるほど気安い仲では全くないが、気分を変えたいこともあって、前に行くフレイの広い背中に、アイザックはかねてからの疑問を投げかけてみた。

「あんたは、ジェームズが俺らの学校で好き勝手していた頃からずっとあいつの傍にいたな。ジェームズが捕まった後、他の多くの仲間達はいいつから離れ、今じゃ自分らがジェームズの下でかつてどんなに非道なことをしていたのか忘れたような顔をしている。それなのに、どうしてあんたは残ったんだ？ あんたは別にジェームズに騙されているわけじゃない。それに、こう言っちゃなんだが、ダミアンと比べると随分常識的でまともだ。なあ、フレイ、あんたはジェームズがどんな奴かちゃんと分かっているんだろう？」

アイザックはどこまでこの男を追及するか一瞬迷ったが、ここま
で言ったのだから最後まで言ってしまうと更に鋭く問いかけた。

「ただの悪党ですらない、あいつは――本物の怪物だ。見えない悪意
を撒き散らして、周りにいる人間皆おかしくしちまう。ジェームズ
さえいなかったら、あいつの取り巻き連中なんか、1人じゃ何もで
きない、その辺にいる普通の若者達と同じさ。だが、あいつに接す
れば、たちまち狂犬みたいになっちまう――フレイ、あんたもそのク
チなのか？ ジェームズに心を蝕まれて、人としての良心も道理も
忘れちゃったのか？」

フレイは何も答えない。その寡黙な背中をアイザックはきつと睨
みつけた。

「このまま、どこまでもジェームズについて行くつもりか？ ろく
なことにならないぞ、あいつは――あいつは既に越えてはならない一
線を越えてしまった。俺が気付いていないとでも思うのか、ジェー
ムズは、自分の父親を……いや、その前に既に父親の愛人達をダミア
ンに命じて始末させた、そうなんだろう？ いつまでも隠し通せる
ものじゃない、刑事だって一度ここに来たっていうじゃないか。お
まえ達は疑われているんだ。フレイ、ジェームズに付き合ってお
まえもあいつと共に犯罪者として裁かれるつもりなのか？ そこま
で尽くす、一体どんな価値がジェームズ・ブラックにあるっていう
んだ？」

ふいに、フレイの足が止まった。

「相も変わらずよく回る口だな、アイザック、よくもそれだけ詰ま
りもせずにしゃべれるものだ。それも、全くくだらんことばかり――」

うつそりとした声が呟いたと思うや、ぷんと振り回された太い腕がアイザックの痩身をなぎ払い、壁に打ちつけた。

衝撃に、アイザックは一瞬息が止まるかと思った。その胸倉をフレイが掴み、壁にぐっと押さえつける。

アイザックは逃れようともがくが、もとフットボール・チームのラインマンの怪力に抗えるはずもない。

「ジェームズは、他の誰とも違う特別な人間だ：おまえの言うとおり、本物の怪物なのかもしれんな。だが生憎と俺は、ジェームズのそこが気に入っているんだ。ああ、確かに俺は彼の毒に蝕まれているのかも知れん、だが、それが何だ？」

凄まじい力に圧迫されて息も絶え絶えのアイザックに、フレイはずいっと顔を近づけた。その細く小さな目の奥には、獲物を食い殺そうとする獣めいた、ぎらつく光が宿っている。

「俺は、ジェームズと出会う以前のくだらない日々よりも今の暮らしの方がはるかに好きだぞ。家族や学校の仲間達なんて、些細なことで悩まされていた俺を楽にしてくれた、ジェームズには深く感謝しているし、大事に思っている―それに今のジェームズは、たがが外れた分、以前よりもはるかに危ないが、俺にはずっと愛しく思える。俺が傍にいて支えなければと感じられるからだ―ジェームズは俺のことなど他と同じく駒の1つ程度にしか思っていないが、それでも俺を必要としてくれている。だからこそ、彼の望みは何であれ叶えさせてやりたい。ジェームズがどこに向かうつもりか知らんが、俺は最後まで見届けてやるつもりだ」

フレイの揺るぎない声のうちに、その時、ふっと苦いものが混じ

った。

「終着地まで、どのみち、そう長い道のりではあるまいからな」

唐突に体を押さえつける力が離れ、支えを失ったアイザックは、がくりと床に崩れ落ちた。

「う…うう…」

何か言い返そうにも声にならず、アイザックは紅潮した顔で相手を睨み上げる。

するとフレイは、見下げ果てたというような冷たい目をして、言った。

「俺がどうしてそこまでジュームズに付き合おうとするのか、おまえなんぞに理解してもらおうとは思わん。アイザック、おまえは、自分が駒のように扱われることが許せなくて、クリスターを裏切った。おまえは結局、クリスターの信頼よりも、自分の小さなプライドを守ることを優先させたんだ。俺は、そんなおまえを心底軽蔑しているぞ」

アイザックは震える唇をきつく噛み締めた。フレイの今の言葉に、反論などできるはずもなかった。

フレイは、力なく項垂れるアイザックから廊下の向こうへと視線を移した。

「見えるか、この廊下の突き当たりの部屋にダニエルは監禁されている。あそこに見張り2人がいるが、俺の許可をもらっていると

えば、数分くらい中に入れてもらえるだろう」

フレイが指し示した方向を見ると、確かに廊下の一番奥の部屋の前にはジェームズの配下の若者2人がいて、訝しげにこちらの様子を窺っていた。

フレイは、これで役目は果たしたとばかりに、アイザックをその場に残して、もと来た道を引き返していった。

「裏切り者、か…」

フレイをぼんやりと見送り、ようよう身を起こしたアイザックは、自嘲的に呟く。

ジェームズ・ブラックのような悪魔に付き従うフレイにさえ、たとえ相手からどんなふうに扱われようと問題にせず、忠誠を尽くそうとする、一種の信念なり誇りがあった。それに引き比べて、自分はどうなのか。

「俺には、フレイやダミアンを責める資格さえない。俺の方こそ、悪魔に誇りも何もかも売り渡してしまった、最低のくずなんだ…」

アイザックはゆるゆると頭を振った。

それから、用心深くこちらを注視している見張り達の方へ、ゆっくりと歩いていった。

「フレイがおまえをわざわざここまで連れてきたなら、別に会わせるくらい構わないだろう。ただし…いいか、5分だけだぞ」

「どうせ、今会っても話なんかできないはずさ、ダミアンとこの連中に随分ひどくやられたからなあ」

にやにやと嫌な笑いを浮かべている見張り達―ダミアンが連れてきた下町の若いごろつきではなく、アイザックも顔見知りのアーバン高校のもと生徒だ―は、すんなりとアイザックを部屋の中に通した。

「ダニエル？」

ベッドと椅子があるだけの殺風景な部屋に足を踏み入れた途端、アイザックは空気の中に微かに残る嫌な臭いに、思わず鼻をしわめた。

だが、乱れたベッドの上にぐったりと壊れた人形のように横たわっているダニエルの無残な姿を見つけると、すぐにそんなことは意識の外に飛んでいった。

「ダニエル、おい、しっかりしろ…！」

慌ててベッドの近くまで駆け寄ったアイザックだが、何かつまずいたように足を止めると、それ以上近づくことはできなくなった。

ダニエルは、今は真新しいシャツに着替えさせられているが、それを脱がせて確かめなくても、その体がどんなふうに痛めつけられたかは、か細い首や手や足に残る鬱血した跡や顔に残る傷を見ても明らかだった。

「ひどいことをしやがる」

アイザックは低く呻いた。

ダニエルは肩や胴に包帯を巻かれていた。血と消毒薬の臭いが生々しい。

「これは、昨日ここに運び込まれた時に既に負わされていた傷か。やられたのは肩と胸……いや、背中の方か――」

少しためらった後、アイザックはベッドの傍まで歩み寄り、ダニエルの体をそつとうつ伏せにしてみた。案の定、背中の傷は、一度ちゃんとした処置は受けたのだろうが、ここに来てから受けた仕打ちのせいで再び開いたらしく、新しい血がシャツにまで染みてきている。

「畜生、無茶苦茶しやがって――」

さすがに堪え切れなくなったアイザックは、声を震わせた。こみ上げてくる熱いものを抑えつつ、扉に向かって怒鳴りつける。

「おい、ダニエルが出血しているぞ！ 新しい包帯と消毒薬を持ってきてくれ……それから、できれば誰か、傷の手当のできる人間を頼む……！」

胡乱そうに扉を開けた見張りは、アイザックの切迫した表情を見てちよつと考え込んだ後、執事のロバートがたぶん簡単な傷の処置ならばできるはずだと言って、彼を探しにいった。

枕元であれだけ騒いだのに、ダニエルは意識を取り戻す気配もない。心身ともによほどひどいショックを受けたか、消耗しきっているのだろう。

「ダニエル…」

アイザックは傍にあった小さな椅子を引き寄せて腰を下ろし、目の下に黒い隈のできた、見るからに痛々しいダニエルの顔を見下ろしながら、その手をそっと握り締めた。

「何てこった、おまえまでこんな酷い目に合わされるなんてークリスターが知ったら、何て言うか…いや、あいつはもう知っているのか。そうして、ここにやってくるーおまえを助け出すため…いや、あいつのことだからそれだけではすまさないだろう。たぶん、今度こそジェームズとの決着をつけるつもりでー」

フレイやダミアンにほめかされたことを思い出して、アイザックは瞳を揺らした。

（ここに来て、俺の裏切りの事実を突きつけられたら、あいつは何と言うだろう…そして、その時、俺はどうする…？）

アイザックは深々と頭を垂れ、胸の奥から搾り出すような深い溜息をついた。

「いや、別に、俺は今更どうなってもいい…だが、ダニエル、おまえのことは…」

アイザックの暗く沈んだ瞳に、その時ふいに、かつての才気煥発とした切れ者を髣髴とさせる、強い光が灯った。

「そうだ、おまえだけは、俺が何とかしてやるージェームズ達はおまえを人質にしてクリスターに脅しをかけるつもりだろうが、こん

なろくでもない場所に、傷ついたおまえを閉じ込めておけるものか。隙を見て、何とかおまえだけは脱出させてやるからな」

アイザックはダニエルの頭に手を置き、いたわるような指先で、彼の栗色の髪をすいてやった。

「すまない…ダニエル…」

眼鏡の下の黒い瞳がふいに潤んだかと思うと、一粒の涙がアイザックの頬に零れ落ちた。

（コリン、ミシェル…そして、クリスター）

アイザックは顔を手で覆い、声を殺して、しばらく泣いた。

後悔の念というにはあまりに重く、絶望的な感情にかられながら、自分が裏切り捨ててきた、愛する者達に向かって、彼は謝り続けた。

ジェームズは窓の傍に持ってこさせた、大きな革張りの椅子に身を預け、深い物思いにふけっていた。

窓の向こうに広がるブラック家の所有地――緑の美しい森や丘陵が作る風景はこの上もなく心安らぐ魅力に溢れているが、ジェームズの放心したように見開かれた双眸は、それらを見ても何の感慨も覚えおらぬかのように乾いていた。

ふと思いついたように、己の左手を目の前に持ってくる。

ドクター・キャメロンが新しく処方してくれた薬が効いたのか、あの忌々しい痙攣も痺れもひとまずおさまっている。だが、いずれにせよ、それは対症療法に過ぎず、我が身を蝕む病気の進行を止めるものではないということは、ジェームズにはよく分かっていた。

「どこまでもつてくれるかな、この体……」

ひっそりと呟き、色味のない唇を噛み締める。

「全く、皮肉なものだな――以前の僕ならばきつと、こんなふうに自分の終わりが見えてきたからといって、特に何の感慨も覚えず、心静かにその日を待ちうけることができたろうに……でも、今の僕は、死の運命に対して必死に抵抗しようとしている。どうか、せめていま少しだけの猶予が欲しい」

ジェームズはゆるゆると瞼を伏せ、金色の頭を垂れた。新しい薬に慣れていないせいかな、頭の芯が重く、ともすれば眠りこんでしまいそうになる。

クリスターとの最後の闘いを控える今、あまり好ましい状態ではないが、他に選択肢はなかった。

ジェームズは薄手のジャケットのポケットの中に手を差し入れ、そこにいつも入れてある、妹の形見の懐中時計に触れた。

「メアリ…」

ジェームズの口元に、ほのかな笑みがうかぶ。

大切な半身との思い出は、今も胸の中の引き出しにちゃんとしまっていて、そうしようと思った時にいつでも、こうして取り出して、好きなだけ眺めることができる。

ジェームズにとって、それは、ごく限られた癒しの時間だった。彼自身にその自覚はなかったかもしれない。他人とつながっているという感覚を味わうことで得られる、孤独からの束の間の脱却。

（ねえ、ジェームズ、一体母さんになんて言われたの？）

ふいに、気の強そうな女の子の声が胸の引き出しの中からこぼれ、ジェームズの頬に淡い影を落とす長い睫を震わせた。

これは一体いつの頃の記憶だろうか。ジェームズがじっと意識の中を探っていると、その周辺に散らばっていた記憶の断片が1つまた1つと浮かび上がり、ある場面を形作っていった。

両親が僕のことと言い争うのはいつものことだ。珍しくはない。

（君は自分の子供が可愛くないのか！ ジェームズをどこか遠くの病院にやるだって？ あの子はまだ9才だぞ！ ジェームズが問題の遺伝子を持っているといっても、発病するにはまだまだ時間がかかる、その間に治療法を探せばいいんだ、諦めることはない。そのためにこそ、あの医者を高額の報酬を払って雇ったんだろう？ それを、こんなにも簡単に見捨てるのは、親としてあんまり薄情じゃないか）

（私達の子供はジェームズだけじゃありません。メアリのことも考えてやらなければ―幸い、メアリには何の問題もないということが分かったんです。それでも、肉親が遺伝性の疾患を抱えているなどという噂が立てば、メアリの将来が心配です。それに、私がジェームズをここから離そうと考えるのは、病気のためだけじゃありません―あなたには分からないんですか、ジェームズは普通の子ではないんですよ。あの子の心には恐ろしい怪物が住まっているんです。本当にあの子は私の兄にそっくり：きっと病気だけでなく、歪んだ心根も受け継いでいるんですわ。兄と同じように、放っておけば、いつかジェームズは、メアリや私達に害をもたらすに違いありません）

夜半、喉が渴いて目を覚ました僕は、両親の部屋の傍を通りかかった時、中から聞こえてきた声に思わず足を止めた。すると、少し

だけ開いた扉の隙間から、まるで憎みあっているかのような激しい口論をしている2人が見えたのだ。

（いい加減にしないか、君が君の兄さんからどんなひどいことをされたか知らんが、それがジェームズと一体何のかかわりがある？それに、あの子は私の子でもあるんだぞ、君の勝手にはさせん）

（あなたには、ジェームズの本性が分からないんです。ええ、あの子には人を騙す才能がありますものね。でも、私にはあの子の心が透けて見える：無邪気な子供のふりをして、盲目的に自分を愛するあなたを嘲笑っているんですよ。でも、あなたがそうまでおっしゃるのなら、いいでしょう、これ以上無理は言いません。ただし、メアリとはなるべく近づけないようにしますわ。でも、そうねー確かに、あの子を恐れる必要はあまりないのかもしれないかもしれませんわね。どうせ、長くは生きられない子なんですから…）

僕は、自分の母親が皮肉っぽく笑って言い放つのを、まるで他人事のように冷めた気分でただ見守っていた。

（君は―君と言う女は、全く信じられない…）

僕に同情的な父親の嘆きも、やはり自分のこととは思えず、遠く感じられる。

（君はジェームズを怪物と呼んだが、私の目から見れば、わが子を少しも愛せないばかりか、その死を待ち望む君の方こそ、怪物と呼ぶにふさわしいよ）

そこまで非難しながらも、父は母とは別れないだろう。自分の子をまともに育てたいと本当に望むならば、僕を連れてここから出て

行こうとするはずだが――。

いずれにせよ、この辺りでもう充分だと思った僕は、扉から離れ、自分と妹の部屋に戻っていった。

僕には、さっき母が言った言葉の意味は、全て理解できていた。

僕らの主治医、ドクター・キャメロンは様々な検査を僕ら兄妹に施してきたが、彼の専門を考えてみれば、それらが何を目的とするものであったのか、容易に分かる。

僕の中には、目覚めればすぐに死に至る、特別な遺伝子が組み込まれている。だが、双子の妹のメアリにはない。

若くして亡くなった叔父の話は知っていたが、僕も彼と同じような運命を辿るのだろう。

しかし、だからと言って、特に何の感情も湧いてこなかった。

母は、僕には人間らしい心がないのだとよく言った。その通りなのかもしれない。

おそらく、普通の子供ならば、こんな時僕と違った反応をしたはずだ。

哀しいとか怒りとかいう感情を爆発させて、たぶん泣くだろう。頭では僕もある程度理解できるが、それを我がこととして感じるのは難しい。そう、分かりたくとも、分からないのだ。

しかし、この場合、僕の胸が人間らしい痛みとは無縁であるとい

うことは、不幸か、それとも幸運か？

母は、どうせ僕は長生きできないのだと言った。彼女は僕を見捨てた。

「ああ、そうなのか」

口に出して呟いてみた。それでも、やはり胸に迫ってくるほどの実感はない。

「どうせ長く生きられないから、僕が何をしようと少しくらい大目に見るつもりか、ふん…僕にとっても、望むところかな」

僕は淡々と自分に言い聞かせながら、子供部屋の扉を開けた。

「つまり、僕は何をしても許されるんだ—どうせ、すぐに死んでしまいうから」

僕が部屋に足を踏み入れると、2つ並んでいるベッドのうちの1つから、人が身じろぎをする気配が伝わってきた。

「うーん、ジェームズ？」

僕によく似た声が、僕を呼ばわる。

「ごめん、起こしてしまったかな、メアリ」

僕は妹のベッドを覗きこんで、眠たい目で僕を見上げる片割れの頭を撫でてやった。

「どうかした？」

僕が触れると妹はすぐに反応した。眉をしかめ、ぱちぱちと瞬きしたかと思うと、すぐに僕に問いかけてきたのだ。

「別に、何でもないよ」

「嘘。ジェームズ、何かあったんでしよう？ 何を見てきたの？」

メアリはむくりと起き上がって、僕の目をまっすぐに見据えた。

「父さんと母さんが、僕のことで喧嘩をしていたんだ、いつものことだよ」

「あなたを傷つけることを言ったのね？」

メアリは自分が傷ついたかのように可愛らしい唇を噛み締めた。

「傷つく？ 僕が？」

僕はふっと鼻先で笑った。

「母さんの言葉なんかで傷つくものか、僕は――心を持たないんだ。だから、あの人に何をされても言われても、平気だよ、少しも痛くない」

「それも嘘ね」

確信のこもった妹の言葉に、僕は少しばかり苛立ちを覚えた。

「心を持たない人間なんか、いないわ。母さんは、間違ってる」

それなら、僕は人ではない別の何かなんだろうさ――言いかけた僕の手を妹が引っ張った。僕は仕方なく、彼女のベッドによじのぼった。

こんな時に彼女の傍に行くのは少しばかり恐かったが、僕がその温もりに接したがっていたこともまた事実だ。

「ジェームズ」

メアリの温かい手が僕の頬に触れた。僕とそっくり同じ顔で近づいてきて、額に、ちゅっと小さなキスをくれた。

「あなたは痛がってる……私には分かるわよ、ほら」

メアリはふいに声を震わせ、大きく目を見開いた。

僕は呆然となりながら、メアリが喘ぐように肩で息をつくのを、その顔にさっと赤味が差してきたかと思うと、大きな目からたちまち涙が溢れ出すのを眺めていた。

「どうして……どうして、こんな――ああ、ジェームズ、あの人、あなたに一体何を言ったのよ!」

僕の頬に押し当てられたメアリの手は、熱を帯びて震えている。

まるで、その震えが伝わったかのように、僕の体もがたがたと揺れだした。

鼻の奥がつうんとなって、目の周りがずきずきしてきた。僕の顔をじっと覗き込んでいる妹の顔が急に霞む。

そして僕は、何か熱いものが目から溢れ出して頬を濡らすのを感じた。

「可哀想なジェームズ：わたしの前でまで意地を張らないで。嘘をついたって、こうすれば、あなたがどう感じているのかくらい、すぐに分かるんだから…」

泣き笑いのような顔を囁くメアリの優しい指先が、僕の流した涙をそっとぬぐってくれた。

母親とは名ばかりのあの女が発した悪意の滴る言葉もはね付けるほど、固く凍りついた心の表面を温かなものがそっと洗い、たちまちのうちに溶かしていく。

メアリ、メアリ、普段は自覚しようもない、我が身が置かれた現実がもたらす数々の苦痛に、かくも易々と僕を直面させる、愛する妹。切り離された僕の魂の半分。おまえが傍にすることは、僕にとって幸福か、それとも不幸なことなのか。

胸の奥からこみ上げてきた、耐え切れないほどの苦しさに、僕は顔を歪め、身悶えした。

「…痛い」

悲鳴のように呟くと、僕は妹の体にひしと抱きついて、咽ぶように泣き始めた。

ジェームズは、半ば夢見心地のまま、遠い子供時代の追憶に浸っている。

（あれから、随分長い時間が過ぎた。僕のメアリはもうどこにもいない。そして、僕だけが1人、ここに取り残されている）

かつてジェームズは、妹の喪失によって自分はやっと解放されたのだとうそぶいたものだが、彼が得た自由は、実際それほど具合のいいものではなかった。

この茫漠たる広い世界を、ジェームズはずっと独りきりで彷徨ってきた。幸せどころか、時が流れていくほどに、圧倒的な空しさばかりがつのっていく。

この空虚を、たぶん、人は孤独と呼ぶのだろう。

（だが、それも仕方のないことだ、僕はそんなふうに生まれついたのでから：このまま死ぬまで独りきり、そう諦めていた。けれど、僕はクリスターを見つけた）

死ぬほど退屈な無彩色の世界の中で、クリスターの姿だけは、いつでも、強烈な鮮やかさを放って網膜に焼きついた。遠いざわめきのような大勢の声の中でも、彼の語る言葉だけは胸の奥にまで届き、時には傷みを伴って突き刺さった。

（もしも、クリスターを手に入れたら、メアリが抜け落ちてしまった後、この胸にぽっかりとできた巨大な空洞を満たすことができるだろうか。人間臭い痛みや苦しみとは永遠に無縁になった代わりに何の喜びもない、この心：クリスターを取り込むことで、僕はまた豊かな感情を取り戻せるかもしれない）

貪欲な飢えのままにクリスターを欲すると同時に、ジェームズはまたこうも思う。

（かつて、僕と共鳴し合うことのできる相手は、メアリだけだった。彼女が死んで久しいけれど、もしも、今でもその代わりが見つれば：遠くに行ってしまった彼女の魂は再びこの世に戻ってくるかもしれない。肉体は魂の入れ物に過ぎないのだとか：ならば、滅んだ体の代わりになる、別の器を用意してやればいいんじゃないか：？）

真に望むのは死者の復活か。今の自分には手の届かない場所にある、あの温かな記憶の再生か。荒唐無稽な想像に思わず苦笑するジェームズの耳に、その時、どこからともなく悲しげな少女の声が聞こえてきた。

（ねえ、どうして、こんなことをするの、兄さん…？）

ひやりと、冷たい感触が肌を撫でるのを覚える。

子供の頃の優しい思い出に混じって、何か別の、恐ろしく忌まわしい記憶が、深く暗い水底から浮かび上がってこようとしていた。

（どうして、どうして…？）

いつも静かに凧いでいる、ジェームズの心にさざなみがたった。

いわく言いがたい恐れをかきたてる、その声を振り払おうと、ジェームズは重たい頭をゆらゆらと動かした。

遠くに聞こえる水しぶき。女の子の切迫した悲鳴。狂ったように泣き叫んでいる少年の声―ジェームズは思わず両手で耳を塞いだ。

水中を一杯に満たす泡のイメージが脳裏に広がる。

ここは池の中だ。小さな見た目よりもずっと深さがあって危ないと、両親によく言われた。それにも関わらず、メアリとよく遊びにいった、家の敷地にある池だ。

ふと、池の底の方に何かが沈んでいるのにジェームズは気がついた。それは、たくさんの泡に包まれて、ゆらゆらと揺れながら浮上してくる。

あやふやな影めいた形が、水面に近づくにつれ、次第にその正体を明らかにしていき―だが、いきなり電源が落ちたかのように、ジェームズの頭の中から何もかもが消えうせた。

（思い出してはならない。さもないと、蘇った悪夢は、僕自身を今度こそ粉々に打ち砕くだろう）

ジェームズは溺れかけていた人がやっこの思いで手がかりを掴み、水面に顔を出したように、はっと息を吸い込んだ。その瞬間、彼は覚醒した。

「あ…」

本当に息が苦しく、ジェームズはしばし呼吸を整えることに集中しなければならなかった。

「これも薬の副作用じゃないだろうね、キャメロン」

忌々しげに吐き捨てると、ジェームズはゆっくりと頭を傾け、壁の時計を確認する。まどろんでいたのは、ほんの数分間のようだ。

背中がじつとりと汗ばんでいるのを気持悪く思いながら、ジェームズは椅子の背もたれから身を離れた。

胸の上に手を置いてみる。動悸がまだ収まらない。

何となく落ち着かないまま、ジェームズはポケットの中から金色の懐中時計を取り出し、その冷たい表面にそっと耳を押し当てた。

規則正しく秒針が刻む音を聞いていると、不思議とジェームズの心は静まってきた。まどろみの中で危うく蘇らせそうになった忌まわしい記憶は、彼を責める少女の声と共に急速に退いていった。

「全く、何だったんだろうね、今のあれは――」

完全にもとの落ち着きを取り戻したジェームズは、当惑顔をして、手の下の懐中時計に向かって囁きかけた。

その時、部屋の扉を叩く音がした。ジェームズは顔を上げた。

「ジェームズ様、よろしいですか？」

執事のロバートが、扉の外から遠慮がちに呼びかけてくる。

「ああ、大丈夫だよ。どうしたんだい？」

どういう知らせか、ジェームズにはもう察しがついていた。懷中時計をポケットに戻し、落ち着いて返事を待ち受けた。

「クリスター・オルソン様がおいでになられました。今正面ゲートにて待たれています。お通ししてもよろしゅうございますか？」

第6章最後の闘争(5)

その時オレは、何事かと周囲を取り巻く生徒や教師達のはるか向こうに、恐ろしく冷たい目をしたクリスターが佇んでいるのを見つけた。

オレ達が中学生だった頃の時の話だ。

クリスターのふりをしてカウンセリング・ルームを訪れ、アイヴアースを騙そうとしたおかげで、オレはあいつにキスされる羽目になった。

怒りに我を忘れたオレが散々騒いだ末にアイヴアースをグラウンドで追い詰め、叩きのめすのを、クリスターは校舎の陰からじっと眺めていた。

あいつはただ眺めていた。

まるで、オレの手でアイヴアースに制裁が下されることで己の深い憤りを晴らそうとしているかのような、酷薄な表情で。

突然自分が巻き込まれたショックな体験に心底傷ついていたオレは、クリスターにすぐにでも駆け寄って慰めてもらいたかったけれど、できなかった。

あいつの全身から放射されている、近寄りがたいほどの冷たさが、オレの足をその場に縫いとめた。

それからしばらくして、オレは、全てが兄の仕組んだ計略である

ことを知った。あいつは、アイヴァースを学校から追い出すために、オレを利用したんだ。

目的のためには手段を選ばない、時として、自分の大切な人達さえも利用する。クリスターの芯には、そういう情け容赦のない冷酷さがある。

当然ながらオレは傷つき、クリスターをなじったが、最後にはあいつを許した。あいつの狡さに腹を立てながらも、認めるしかなかった。

仕方ないさ、オレはあいつを愛しているんだ。

ただ、頼むから、二度とオレを騙さないでくれ、裏切らないでくれ。

クリスターはたぶん分かってくれたと思う。

それでもオレは、その後もずっと、あの場面を忘れられないでいた。まるでオレの知らない他人のような、クリスターのあんな表情を見たのは、たぶんあの時が初めてだったからだろう。

何てことだろう、あれと同じクリスターの顔を再び見ることになるなんて――。

（畜生畜生、何と一緒に闘ってくれ、だ。あれは、オレをなだめておとなしくさせるための方便で、本心じゃなかったんだ。J・Bがどんなに厄介な敵でも、オレはあいつの相棒として、あいつを守りながら2人で立ち向かうつもりだったのに―クリスターは結局、オレを認めてくれてはいなかった）

数時間前、学校の駐車場近くで偶然見つけた、クリスターの表情や態度を思い返しながら、レイフは悔しげに唇を噛み締める。

（クリスターのあの顔、どっかで見たなあと引っかかっていたんだけど、思い出したよ。オレをはめてアイヴァースを追いつめるために利用した時だ…心を閉ざした、オレの理解できない、他人のようなクリスター…）

そんなことを思うにつけ、怒りと哀しさがこみ上げてきて、ただでさえぐつぐつと沸騰している頭が一気に爆発しそうになる。

（おまえは、今度も勝手に自分1人で決めて、行動しちまった…それがおまえの正しい判断とやらなのか？ オレを騙してまで振り切って、1人で危険の中に飛び込んでいくことがか！）

抑えても抑えても噴出しそうになる激情を静めようと震える拳をぐっと握り締めるレイフに、運転席に坐ってレイフの代わりにハンドルを握っているトムが、気遣わしげに声をかけてくる。

「そんなに心配するなよ、レイフ、クリスターならきっと大丈夫さ。だって、あのクリスターが何の考えもなしにこんな無茶な行動を取るものか、そうだろう？」

思い出したようにはつと傍らの親友を振り返ったレイフは、神妙な顔つきをして、言った。

「すまねえな、トム：こんな面倒なことにつき合わせちまって―」

「ああ、いいから、妙な気を使うなよ。大体、あんな興奮状態のおまえにハンドルを握ることを許したりしたら、それこそ犯罪になっちまうよ」

「ごめん」

クラブ・ハウスに閉じ込められていたところを発見された時の自分の有様を思い出して、レイフは薄っすらと顔を赤らめた。

「それにしても、ひどくやられたなあ、その顔：見事な青たんになりそうだぜ。ちったあ手加減してもいいだろうに、クリスターの奴」

これには苦笑いしながら、レイフは、クリスターに殴られた、顔の左側を手で覆った。

レイフが意識を取り戻した時、彼はフットボール部の用具室に閉じ込められていた。しかも手は手錠によって壁の鉄製のパイプにつながれ、足はロープで嚴重に縛られ、更に口にはタオルが噛まされていた。

自分の状況を理解した途端怒り狂った獣と化したレイフが、力を振り絞ってもがき、呻きながら、一時間ほど脱出を試みていたところ、たまたまクラブ・ハウスの傍を通りかかった寮生が中から怪しい物音がすると管理人に報告した。

知らせを聞いたトムは、部室の鍵を持ってすぐに飛んできてくれた。それに、手錠の鍵もクリスターがすぐに分かる所に置いていたため、レイフは程なく自由を取り戻すことができた。

その後しばらくは説明を求める管理人達との間でもめたが、とにかくレイフは荒れ狂っており、強引に振り切って出て行く彼を無理矢理引き止めるだけの勇気のある者もいなかった。

「でもさ、後でコーチにこっそり絞られるくらいは覚悟しとけよ。弁償くらいですめばいいけど、おまえの破壊行動おかげで、用具室は一部損壊だし、チームの備品中には駄目になったものもありそうだったからなあ。全く、あの惨状を見た時には、啞然としたよ、おまえはモンスターか？」

「何だよ、オレは被害者なのに、ひっでえなあ。弁償なら、クリスターをとっ捕まえて、あいつのアルバイト料から出さしてやるよ」

「そうそう、ついでに慰謝料もふんだくってやれよ」

「よくもオレのこのキュートな顔にキズをつけたなーってか？」

ピリピリしていたレイフも、こうやってトムと他愛のない冗談を言い交わしているうちに少しずつ落ち着きを取り戻していった。その意味でも、この気の置けない親友が今隣にいてくれて、よかったのかもしれない。

トムには、こうやって車に乗り込んでクリスターを追いかけて行く前に、一応大雑把に事情を説明した。もっとも、口下手な上、取り乱しているレイフの言うことをどこまで彼が理解したかは不明だ。

こうして今レイフに付き合ってくれているのは、とにかく1人では行かせられないという純粋な友情からだろう。

そのトムが、ふいに思い出したように提案した。

「なあ、レイフ、おまえの知り合いの刑事にもう一度電話を入れてみたらどうだ？」

レイフはちよつと迷った。

実際、学校を飛び出す前に一度、先に親や警察に知らせた方がいいというトムの主張にクリスターからもらったメモを思い出したレイフは、ケンパー警部に連絡を取ろうとした。しかし、生憎と彼が不在だったため、非常事態を知らせる短いメッセージだけを残して、電話を切ったのだ。

「うん……でも、とにかく先にジェームズの屋敷まで行きたいんだ。もしかしたら――クリスターが1人で乗り込んでしまう前に捕まえられるかもしれないし――」

だが、実際、それは望み薄だとはレイフにも分かっていた。

レイフがクラブ・ハウスに監禁されてから、やっとのことで脱出し、こうしてクリスターを追い始めるまでに、既に4時間以上経過している。クリスターがどんな方法でダニエルを救い出そうと考えているのか知らないが、レイフが間に合うほど悠長な真似はしないだろう。

（クリスターの馬鹿野郎、おまえ1人で一体何ができるっていうんだよ。こんな時こそオレを頼ってくれたらいいのに、どうして、そ

こまで―)

「またしてもこみ上げてきたやりきれなさを堪えるよう、レイフは密かに歯を食い縛る。

車の助手席にじっと坐っていることが耐え難いほどの焦燥感に胸を焼かれながら、レイフが窓の外を見ると、ハイウェイの出口から、遠くに広がるブラック家所有の私有林、その向こうにぽつんと佇む門衛小屋が見えた。

かつてここを何度か訪れた時の嫌な記憶が、その風景の中からうかびあがってくる。

(くそっ)

レイフは軽く身震いした。

次の出口からハイウェイを下り、側道をしばらく進んでいくと、屋敷へと続くメイン・ゲートが見えてきた。だが、ひとまずそこは通り過ぎ、ブラック家の敷地である林を囲う金網を横に見ながらしばらく走った所で、一端車を停め、地図を確認する。

「メイン・ゲート付近には、クリスターの車はなかったけれど―これから、どうする?」

「正面から訪ねていっても、オレらは招かれざる客だし、追い返されるか警察を呼ばれるかが関の山だろうさ。どっかから、こっそり中に忍び込めないかな?」

そうして彼らは、しばらくフェンスの周りをぐるりと一周するよ

うに側道を走ってみた。

メイン・ゲートの他にも幾つか入り口はあったが、いずれも固く閉ざされている。

（門を破ったりフェンスを越えていったりすること自体は、それほど難しくなさそうだけれど、警備の方が気になるな。確か、昼間のうちは敷地の管理業者が働いていて、それに門衛小屋にも警備員がいるはずだ）

かっかとなっていた頭も、目の前に迫る現実について考えているうちに冷えたらしい。レイフはじつと状況を分析した末に、ぼつりと言った。

「明るいうちは、忍び込むのは無理そうだな。暗くなるまで待つしかないか……夜になれば、敷地の警備員達は帰っていくし、これだけ広い所有地なら、1人や2人忍び込んでも見つからないと思うぜ」

自分で言った後、レイフはふいに堪らなくなって、黙り込んだ。

（クリスターはおそらくもう屋敷の中に入っちゃったんだろう。あの下手なストーカーよりたちの悪いジェームズに会って、一体どんな目に合わされるか知れたものじゃない……一刻も早く助けに行きたいのに、ここまで来ていながら、待つしかないのか……）

レイフは焦燥感に駆られながら車の外を見やった。

「レイフ？」

不審そうなトムの呼びかけにも応えず、車の外に出たレイフは、高いフェンスに近づくと、金網にすっと手を伸ばし、掴んだ。

（この向こうにクリスターがいる）

我慢しきれなくなったレイフが衝動的にフェンスによじ登ろうとした時、トムの緊張した声が背中にかけられた。

「レイフ！ 戻って来い、誰かがこっちにやって来るぞ」

弾かれたように、レイフはフェンスから飛びのいた。素知らぬふうを装って車に戻っていきながら、運転席から顔を覗かせているトムが示す方を見る。

少し離れた路上に停車していた一台のバンの方から、1人の男がこちらにゆっくりと近づいてくる。

レイフがじっと凝視していると、相手もこちらが何者か確かめようとするかのごとく見返してきた。

（ブラック家に関係のある奴かな…オレ達がこんな所をうろろしているから、怪しまれたんだろうか）

レイフは思わず舌打ちした。

（何をしているんだと追求されたら、道を間違えたとか何とかしらを切って…それが通じなきゃ、一発がつんとやって、のしてしまうしかないか）

クリスターの安否が気遣われる非常時であるせいか、つい殺気立

ったことを考えてしまうレイフがぐつと拳を握り締めた時、その男がいきなり足を止めた。

「クリスターか？」

「え…？」

「何だ、やっぱりおまえか…よかった、少し前にメイン・ゲート近くでおまえと同じ車を見かけたものだから、気になっていたんだ。あれがもしクリスターだったとしたら、こんな時にブラック家を訪れて、一体何をしでかす気なんだろうとな」

レイフの姿を見て警戒を解いたらしい。その中年の男は軽快な足取りで近づいてきながら、親しげに話しかけてくる。

一方、レイフの方にも、男の姿にどこかで見覚えがあった。

（あれ…このおっさんの顔、誰かに似ている―そうだ、あいつにそっくりなんだ）

レイフははたとなって手を打った。

「そうだ、あんた、アイザックの親父さんだろっ?!」

レイフの言葉に男は再び立ち止まった。

「あー、そういや、本当にアイザックによく似てら」

様子を見て車の運転席から出てきたトムも、感心したように呟く。

「そうすると―君はクリスターではない、ああ、そうか、クリスターの弟のレイフか：！」

後20年くらい経ったアイザックという容貌の、知的で、痩せてはいるが芯に強いものを感じさせる男は、にやりと笑いながら、レイフに手を差し出した。

「驚いたな、てっきりクリスターかと思って声をかけたんだが、まさか弟までがここに乗り込もうとしているとはな。俺はウォルター・ストーン、アイザックの父親だ。俺のことは、クリスターから聞いているのか？」

レイフはこんな場所での思わぬ出会いにまだ少し戸惑いながらも、ウォルターとしっかり握手を交わした。

「うん、一応は：アイザックを見つけるために、仕事を休んでボストンにやって来て、どこかに部屋を借りてるって：あ、ちょっと待てよ、ウォルターさん、あんた、今確か、クリスターの車を見かけたって：オレ、クリスターをとめるつもりで追いかけて来たんだ」

はっとなって聞き返すレイフに、ウォルターは神妙な顔になって、頷いた。

「近くで見たわけじゃないから、確信は持てなかったんだが：そうすると、やはりあれはクリスターだったのか。メイン・ゲートから屋敷の方に確認を取って中に入れてもらったようだぞ。だが、一体なぜクリスターは急にここに来る気になったんだ？　俺は何も聞いていないぞ？」

レイフはウォルターに促されるがまま、ダニエルが拉致されたこ

となど、昨夜からの急展開について説明した。

「そんな大変なことになっていたのか：しかし、クリスターの奴、無防備のまま1人で乗り込んでいくなんてどういうつもりなのか。せめて、先に俺やケンパーに相談してくれてもいいようなものだが：」

無念そうに呟いて、ウォルターは考えを巡らせている。

「やっぱり、こんな所で時間をつぶしてられない、早くクリスターを助けなきゃ。J・Bは頭がいかれてて、クリスターに何をするか知れない、とても危ない奴なんだ：もしかしたら本当に、あいつ、クリスターの心を壊しちゃうかもしれない：」

ワインスタインから聞いたぞつとするような話を思い返して、ますます不安に駆られたレイフは苛立たしげに訴えるが、冷静で現実的なウォルターは反対した。

ここしばらくこの辺りに張り込んで、ブラック家の動きを監視していたウォルターが言うには、数日前からいきなり敷地内の警備が厳しくなったという。

アイザックが屋敷内にいるのではと疑っていたウォルターは、一度は強硬手段さえ講じて、自ら侵入しようとしたこともあった。近くの町で知り合った若者達数人に頼んで、酔っ払いのふりをして敷地内でちよつとした騒ぎを起こしてもらった。その隙に、ウォルターは別のルートから忍び込み屋敷を目指したのだが、予想外の警戒態勢に阻まれ、結局建物までたどり着くことはできなかったのだ。

「平時でも、まだ明るいうちから、こんな大邸宅に忍び込むのは計

画としてあまりに無謀だ。どうしてもやるなら暗くなってからだが――それでも、俺が今話したような状態だから、難しいぞ。人間の見張りだけでなく、大きな犬まで何頭も放してあったからな」

「だからって、クリスターがJ・Bに傷つけられるかもしれないって時に、何もせずにここで待っている訳にやいかないんだ！ あいつに何かあったら、オレ……」

「確かに、差し迫った状況ではあるな……昨日拉致された、ダニエルの状態も気がかりだ……しかし、やはり、まずは警察に行こう」

「ここまで来て、引き返せって言うのか？！」

「ここにいても、日が沈むまでは動きようがない。それなら、先にケンパーに会って事情を説明し、警察に介入してもらえるなら協力を頼んだ方がいい」

互いに一步も引かず、睨みあっている2人の間に、おろおろしながらトムが入って来る

「おまえの気持は分かるけど、ウォルターさんの言うとおりだよ、レイフ……J・B相手に、俺達だけじゃどうにもならない。何も考えないで突っ込んでいても、返り討ちにあって、とっ捕まるのがおちだよ。そうなりゃ、クリスターとダニエルを助けようって人間は誰もいなくなる。頭冷やして、よく考えてみるよ、レイフ」

トムにまで反対されては、さすがのレイフの心も揺らいだ。

「まあ、他に手段がなけりゃ、最後には力づくで押し入ってみるのも仕方ないがな。他にもっと有効な手が使えるなら、それを試みる

のが賢明だろ？」

しょんぼりと頭を垂れるレイフの肩を叩きながら、ウォルターは明るく前向きに付け加えた。

「心配なら用事を済ませてすぐに戻ってくればいいんだ、レイフ。ケンパーに話を通して、捜査令状やら何やらの手続きには相応の時間がかかる。それまで待ってはいられないから、後は彼に任せてすぐに引き返そう：なあに、日暮れまでには余裕で帰ってこられるさ」

「分かったよ…」

ついに観念したレイフはうつむいたまま、口惜しげに呟いた。頭では正しいことだと分かっている、レイフにとっては辛い決断だった。

（クリスター）

レイフは狂おしげな眼差しをフェンスの向こうに広がる林の方に送った。

（この先に、おまえはいるはずなのに：今すぐにでも、こんな柵なんか飛び越えて、おまえの所までまっすぐ走って行きたいのに、畜生…！）

腹立ち紛れに、レイフは足元に転がっていた石を蹴飛ばす。

傍にすっと寄ってきたトムが、そんなレイフの腕をそっと掴んだ。

「さあ、行こう、レイフ。ここで夜になるまで粘っていても、時間の無駄だし、万が一にも警備員に見つかったりしたら、それこそ厄介だろ？」

「トム……」

レイフは切なそうな顔で親友を見返して、溜息をついた。

（クリスター、頼むから無事でいてくれ……おまえもダニエルも、何とかそこから無事に助け出してやるから、それまでは無茶なことはするなよ）

レイフは最後にもう一度ジェームズの屋敷の方向を見やった後、くるりと踵を返し、トムと一緒に車に乗り込んだ。

（そうだ、警官に来てもらえたら、クリスターとダニエルの救出もきつとうまくいく……そのままJの野郎を逮捕してもらって、クリスターに二度と近づけないよう、刑務所にぶちこんでやるんだ）

そう言い聞かせることで自分を無理に納得させた。

そして、先に車を発進させたウォルターに続いて、後ろ髪を引かれながらも、レイフ達はひとまず警察に向かったのだった。

第6章最後の闘争（6）

屋敷の玄関ホールまで出迎えに現われた執事のロバートによって、前回ブラック家を訪れた時に通されたのと同じ部屋に、クリスターは案内された。

すると、既にそこにはジェームズがいて、彼がやって来るのをじっと待ち受けていた。

クリスターは部屋に入った所で、とっさに足を止めた。

椅子に深く身を預け、ピラミッドのような形で組んだ手の上に軽く顎を乗せるような姿勢で、何事かを思い巡らせているジェームズ・ブラック。

あの印象的な再会からそれほど日は経っていないはずなのに、急に痩せ衰えたように見える、その姿に少しばかり虚を突かれた。

「やあ、クリスター」

作り物めいた綺麗な微笑が、ジェームズの形のいい唇にうかんだ。

「また君と会えて嬉しいよ」

その目には、うたた寝する猫の目にかかる薄膜のように、うつすらと無表情の紗がかぶさっていたが、クリスターを認めた瞬間、すっと膜が引いて、その瞳があらわになった。

クリスターは思わず身震いしそうになった。

「あれだけ酷いやり方で挑発されたんだ、普通ならばもっと感情的になってもいいはずだけれど、さすがに君は冷静だね。今度はどうやってここに乗り込んでくるのか、ちょっと楽しみにしていたんだけれど、正面から堂々と入ってくることを選んだんだ。勇敢なのか、それとも、この期に及んで無駄な悪あがきをするつもりはないということかな」

クリスターはすぐには答えず、ジェームズの後ろの方で、壁に背中をもたせかけるようにして立っている、白い髪をした小柄な少年を見た。

クリスターの注意が自分に向けられていることに気付いたダミアン・ハートは、威嚇するかのように白い歯を剥く。

瞬間、クリスターの脳裏に、電話の受話器越しに聞いたダニエルの悲惨な叫び声でこだました。

「：後者の方だよ、ジェームズ、この屋敷の警備をいかくぐって忍び込むなんて無駄な労力と時間をかけるよりは、正面から扉を叩いて中に入れてもらう方が簡単だからだ。第一ダニエルを人質に取られてしまつては、僕には歯向かいようがない」

声に出してはあくまで平静に、クリスターはジェームズに語りかけた。

「そうだったね：あんな詰まらない子でも、ある程度、君の足枷になるんだ。少し意外かな：そんなに簡単に他人に心を預けるような人間ではなかったと思うけれど、僕がいない間に、随分甘くなったようだね…？」

ジェームズが気だるげに手を上げて、クリスターに自分の前の席に坐るよう促す。クリスターは無言で従った。

「でも、やはり、僕にレイフを押さえられていた時ほどの深い瞋恚は伝わってこない。できることなら、あの時と同じ、うかつに触れるとずたずたにされてしまいそうな、研ぎ澄まされた刃のような凄まじい殺気を放つ君をもう一度見たかった。そう言えば、レイフは連れて来なかったのかい？」

「置いてきたよ。君も充分承知しているように、あいつは僕の最大の弱点だからね。レイフは安全圏にいてもらう方が、僕にとっては好都合なんだ。例えば、こうして君を目の前にしても、何とか理性を保って交渉に臨むことができる」

ほんの一瞬、クリスターの琥珀色をした瞳の奥にゆらりと立ち上る業火の片鱗を認め、ジェームズは喉の奥で楽しげに笑った。

「交渉？ 一体、今更何をこの僕と話し合おうというんだい？ ダニエルを解放して欲しいというのなら、僕はその件については吝かじゃないよ。だって、君が僕の手の内に飛び込んできてくれただけで、あの子はもう充分役割を果たしてくれたわけからね。それに、誤解してもらっては困るけれど、怪我人を更に痛めつけるような悪趣味は、この僕は待ち合わせていない」

居心地悪そうに身じろぎするダミアンを斜め後ろに軽く睨みつけて、ジェームズは再びクリスターに向き直った。

「ジェームズ」

「うん？」

「ダニエルの解放はもちろんだが、僕はそれのためだけにここに来たわけじゃない」

ジェームズは問いかけるかのごとく眉を上げた。

「僕は君に、降参を告げるために来たんだよ。このゲームは、ジェームズ、君の勝ちだ」

クリスターが落ち着いた口調でそう言った途端、ジェームズの隙なく作りこまれた穏やかな仮面に微かな小波がたった。クリスターがいきなり何を言い出したのか理解できず、怪しんでいるようだ。

そんなジェームズの暗い双眸をまっすぐに見据えたまま、クリスターは、ここに来るまでに既に考えていただろう話をゆっくりと語って聞かせた。

「僕と君は、周り中を巻き込んでの闘いをゲームのように楽しんできた：僕が望んで始めたわけじゃないという言い訳も、この際だからしないよ。実際僕も、こんなことは間違っていると思うながらも、君との危険な係わり合いの中に、一種のスリルと快感を覚えていた。それらを、日々の空しさや苛立ちを忘れるために、時には必要とさえした。君が施設に閉じ込められても尚僕を諦めず、もう一度闘いを挑む気なんだと知った時には、正直喜びさえした。もう一度、我を忘れるほどに没頭できる、あのゲームができる：僕と対等に渡り合える、僕の心の裏の裏まで読み、本当に僕を攻略しかねない手強い敵である君を、ある意味好ましくさえ感じた、でも……」

クリスターは一瞬何かが胸に詰まったように、言葉を途切れさせ

た。ゆっくりと頭を左右に振った。

「僕には、これ以上続けることは出来ない。もう充分過ぎるほど、僕は、僕の家族、友人、恋人……大切な人達に犠牲を強いてしまった。彼らを守るためだと言いながら、現実には、僕はその逆の結果をもたらしてしまったんだ」

「そんな些細なことを君が気にするのかい、クリスター？ 何も知らなかった君の家族はともかく、君の仲間達は自ら望んで君に従ったのだから、立場は同じはずだよ？ それほどまでの責任を君が感じる必要はないと思うけれどね」

「僕は君とは違う」

クリスターは強い口調で言い切った。

「そう、違うんだ……僕にはどうしても、ダニエルやアイザック、コリン、ミシエル……大切な仲間達を僕の計略を実行するためのただの手駒として扱うことは出来ない。彼らの誰も、これ以上傷つけたくない、追いつめたくない。ましてや僕の家族には、もう二度と決してあんな悲しい思いはさせたくない」

クリスターは両腕で己の体をかき抱くようにしながら、熱心に訴え続けた。

「君には僕の胸の痛みなど分からないだろう……それは、君が愛する者、守るべき者を持たないからだ。僕が君の心に揺さぶりをかけようとしても、実際君には付け入る隙がない。攻めるべき弱点などひとつもない、君はまさしく怪物だ。そんな君に、所詮はただの人間である僕が闘いを挑んでも、初めから勝てる見込みなんてなかった

んだ」

「だが、君は一度、僕に勝った」

苛立たしげな固い声で、ジェームズは言い返した。

「あれも一時しのぎに過ぎなかったじゃないか。君からしばらくの間自由を奪うことはできたが、君は精神的には全くダメージを受けなかった。諦めるどころかむしろ嬉々として僕との再戦に期待をかけ、そして、今ここにいる。君を喜ばせるだけの戦いをこのまま続けていても、きりが無い……だから、僕は降りることにしたんだ」

「そんなに簡単に諦めてしまえるものなのかい？ 確かに、僕は君から大切な仲間達を1人ずつ奪い、君の使える手を封じようとしたけれど――君にはまだ僕に隠している手駒も幾つかあれば、頭の中で考えている策だってあるはずだよ？ それらを試すことすらせず、君が僕との勝負を投げ出すなんて信じられないな。僕に負けを認めるだって？ 冗談だろう？ 第一、君の僕に対する、同族嫌悪とも言える憎悪は、それじゃあ鎮火できないはずさ」

クリスターはおもむろに椅子から立ち上がった。はっとなったダミアンがポケットに手をやりながら身構えるのを、ジェームズが手で制する。

「それでも、ジェームズ、僕の負けなんだよ」

クリスターは疑り深げに自分の挙動を見守っているジェームズに歩み寄り、その前に跪いた。

「頼むから、これ以上の無駄な争いをしかけないでくれ……僕達のゲ

ームは終わったんだ」

クリスターは、椅子の肘掛部分をぐっと握り締めているジェームズの手を取り、その指の付け根にそっと唇を押し当てた。

プライドの塊のようなクリスターにいきなり恭順の姿勢を取られて、ジェームズは困惑したようだ。

「そんな言葉は信じられないな、クリスター……君は僕を欺こうとしているだけじゃないのか？」

「信じてもらうしかないよ、ジェームズ……何なら、君の勝者としての権利を行使してみるかい？」

クリスターはジェームズの手を捕らえたまま身を乗り出すと、反対側の手で彼の肩を捕らえ、そっと引き寄せた。

2人は今にも触れ合いそうなほど顔を接近させて、互いの瞳の奥にある深淵を覗き込みながら、囁きかわした。

「僕は今、君の手の内にある。君はそうしようと思えば、僕を傷つけることも殺すことも好きにできるんだ」

「まさか、本気で言っているのか？」

「殺されるのは困るけれどね。でも、君の期待に反して一方的にゲームを降りたペナルティは受けるつもりだよ」

クリスターの声が一層低く、深遠な響きを帯びた。

「君が僕から奪うことで、ある程度満足できるものだ―この条件で僕を取り巻く全てから手を引いてほしい」

クリスターは、その時頭の中に浮かび上がった、レイフの責めるかのような顔に向かって謝りながら、ジェームズに告げた。

クリスターの語ることにじっと耳を傾けていたジェームズの藍色の瞳が、次第に大きく見開かれていく。

これほどまでに驚かされたことは生まれて初めてだというように、ジェームズの顔は束の間全くの空白になった。

「クリスター、君は―一体どういうつもりで、そんな…？」

呆然と呟いた後、ジェームズは軽い眩暈でも覚えたかのように目を閉じ、眉をきつく寄せて、じっと思考を巡らせ始めた。

「ほんと、いかれてやがる」

クリスターの提案を耳にしたダミアンまでが唾然となってそんな言葉を漏らす。

ふっとクリスターが苦笑した時、突然、ジェームズは彼の腕を指先が食い込むほどの強さで握り締めた。

「ああ、君の考えが読めたよ、クリスター…なるほど、そういうことか…！」

ジェームズはクリスターの腕を掴んだまま、くすくすと笑い出した。

「全くろくでもないことを思いつくね、君は―自分の目的を果たすために、この僕まで利用しようとはね！　そして、そんな身勝手な頼みごとをこの僕に面と向かってするとは、呆れるのを通り越して感服するよ」

「だが、君にとってもこれは悪い話ではない：そうだろう、ジェームズ？」

束の間剥き出しになっていたジェームズの顔が、再び用心深く閉ざされた。

「君の提案を僕が素直に受け入れるなどと、本気で思っているのかい？」

「さあ、どうかな…だが、少なくとも君は今迷っているように見えるよ？」

黙りこむジェームズの顔を覗き込んだクリスターは、誘いかるように目を細めながら、その手を引き寄せて自分の頬に触れさせた。

「僕が欲しくないのかい、ジェームズ？」

ジェームズは食い入るようにクリスターの顔を見つめた。その喉が、渴きを覚えたかのように上下する。薄く開いた口からは、蛇めいた紅い舌がちろりと覗いて唇を舐めた。

「クリスター」

クリスターは軽く伸び上がってジェームズにキスをした。微かに

唇の表面を擦り合わせた後、開いた唇の間に舌を差し入れてやる。

外側はひんやりと冷たげなのに内側に入ってみると意外と熱いのだなと、クリスターは思った。

ジェームズの手がクリスターの頬を這うように動いて、頭の後ろに回りこんだ。指先にぐっと力がこめられ、それにも増して貪欲さを発揮した唇がクリスターの唇を吸い、舌に舌を絡ませてくる。

己の全てを呑み尽くさんとする巨大な空虚の存在を、今、自分がかき抱いている瘦せた体の内に確かに感じ取ったクリスターは、本能的な恐れに思わず肌を粟立たせた。

塗れた唇と舌が触れ合う音が響く合間に、漏れる吐息。

ジェームズの柔らかな金髪の中に指を入れたクリスターは、薄っすらと目を開いて、壁際に硬直したように立ち尽くしているダミアンを見やった。

自分でも抑えられないかのように小刻みに体を震わせ、嫉妬のあまり狂わんばかりの形相をして、ダミアンはクリスターを睨みつけている。

クリスターは冷たく目を細めながら、少年に見せ付けるよう、更に強くジェームズを引き寄せた。

緑の瞳の奥に殺意が灯る。

ジェームズが苦しげに息をついたところで、クリスターはようやく彼の体を押し返した。

「参ったな…」

ぽってりと紅く塗れた唇を舌先で舐めながら、ジェームズは苦笑の含んだ眼差しをクリスターに投げかけた。虚無的な瞳は常になく熱っぽく潤み、人工物のめいた白い肌さえも薄っすらと赤味を帯びている。

「僕の中に君が付け入る隙がないなんて、本当は思っていないだろう…？ 実際、僕は君には弱いようだ…毘だと分かっている、つい飛び込んでみたくなる」

乱れた髪を手で撫で付けながらジェームズが椅子に坐りなおすのを見て、クリスターは立ち上がった。

「それにしても、本当に、君をどうすればいいのかな、僕は―君をずっと手に入れたいと願ってきたはずが、こうして君が実際手の中に飛び込んできて、しかも僕の好きにしているなんて言い出すと、どうすればいいか分からない…夢に見るほど、あまりにも深く君を想いすぎたのかな」

ひんやりとしたものを肌のすぐ下に感じながらも、クリスターは表面上平静さを保ち続けた。

「ゲームを打ち切る代償に君を―確かに、多少心を引かれることは認めるよ、しかし」

ジェームズは瞼を半分下ろしながら、意味ありげな含み笑いをした。

「それだけで君との縁を断ち切るなんて、あんまり呆気なさ過ぎて、僕は諦めきれそうにない……もう少し君には僕に付き合ってもらいたいな……」

「いつまでだい？ ジェームズ、君の諦めがつくまで何なら僕は待ってやってもいいが、君の方には果たして、そんな悠長なことをしている時間はあるのかい……？」

引っ掛けるつもりでクリスターが尋ねると、ジェームズの顔にふっと微妙な表情が過ぎった。だが、更に追求する前に、ジェームズは会話を一方的に断ち切った。

「フレイ」

ジェームズが声をあげると部屋の扉が開いて、無表情を装ったフレイがのっそりと姿を現した。

「クリスター、君の申し出については、少し考えさせてもらうよ。その間、君にはこの屋敷に留まってもらう。悪いけれど、しばらく不自由な思いをさせるよ。油断をすると、君はまた策略を巡らせて、僕の懷から勝手に飛び出し、何かとんでもないことをしてくれそうだからね」

「僕1人で何ができるというんだい、君の考えすぎだよ」

ジェームズはあいまいな笑顔を見せると、無言のまま待ち受けているフレイに頷き返した。

「来い、クリスター」

感情を抑えた低い声が呼びかけるのにクリスターは素直に従って、部屋を後にした。

扉を潜る時、ふと後ろを振り返ると、消耗しきったようにぐったりと椅子に身を預けたジェームズが片手で頭を押さえるのが見えた。

クリスターも疲労を感じながら、肩でほっと息をついた。

「…ダニエルには会わせてもらえないのか？」

フレイの後について階段を降りていきながら、クリスターは慎重に尋ねてみるが、それに対しては素っ気無い返事が返ってくるだけだった。

「そんなことはジェームズから命じられていない。それに、腹に一物ありそうなおまえに、ダニエルの居場所を教えることが懸命だとも俺は思わん」

クリスターは僅かに苦笑した。

「相変わらず、ジェームズに忠実なんだな」

どこに連れて行くつもりかと思いついていくと、フレイはクリスターを物置やワインセラーの他、使われていない部屋が幾つかある地下へと導いた。

「おまえは油断ならない。だから、念のため、逃げられないよう体を拘束させてもらうぞ。部屋の前にも見張りを立たせる。ジェームズからの呼び出しがあるまで、居心地は悪かろうが我慢しろ」

クリスターが脱出をはかるとフレイは疑ってかかっている。だからこそ、逃げ道の限られた地下室に嚴重に閉じ込めるつもりなのだ。

「ここだ」

扉の1つの鍵を開けて押すと、ぎいっときしむような音を立てて、それは開いた。

長い間閉めきったままだったのか、やけに黴臭い湿った空気を感じ、クリスターは鼻をしわめた。

窓1つない部屋は暗かった。フレイが壁のスイッチを入れると天井の裸電灯がつき、内部を照らし出した。

クリスターは眉をしかめた。家具らしいものはひとつもなく、がらんとした部屋で唯一クリスターの目についたのは、黒っぽい染みのついた壁の近く、天井から垂らされている二本の太い鎖だった。端にはしっかりとした手かせがついている。

「…なかなかいい部屋だな。ジェームズの手下達が誰かを監禁して制裁を下したか、あるいは単にいたぶるのにでも使っていたのか」

冷氣と共に足元から這い登ってくる嫌悪感を押し殺しながら、クリスターが感想を漏らした、その時、いきなり傍らにいたフレイが体を捻り、クリスターの腹に拳を打ち込んだ。重いパンチにクリスターは身を2つに折って、呻く。

「う…っ…」

フレイはすかさず、喘ぐクリスターの横っ面を殴りつけた。

さすがに持ちこたえられず、クリスターはよろめいた。その体をフレイは乱暴に掴み、部屋の奥へと押しやった。

「あまり調子に乗るなよ、クリスター」

乱暴に壁に背中を打ち付けられたクリスターは、軽く咳き込む。

フレイはクリスターの両手首を頑丈な鎖に固定すると、彼の胸倉を引き寄せ、唸るように言った。

「俺がおまえをこの場で八つ裂きにしないのは、ジェームズの命令があるからだ。だが、もしも、おまえがジェームズに逆らい、彼に害を及ぼそうとするなら、俺はおまえを今度こそくびり殺してやる脅しではないぞ」

フレイの落ち窪んだ小さな目の奥にちろちろと燃えている燐火を、クリスターは冷ややかに見返し、何も言わず顔を背けた。

「それにしても、なぜジェームズはここまでおまえに甘い…？　どれほど危険な奴か分からないジェームズではないだろうに、なぜ無傷のまま捕らえこんでおこうとする…？　クリスター・オルソンはジェームズにとって何なんだ、おまえを一体どうすれば、彼は満足できるというんだ？」

そうフレイは口惜しげに呟いたが、クリスターは無関心のまま、目を上げて彼を見ようとしなかった。

その態度に怒りを掻き立てられたものの、ジェームズの命令があったては、さすがのフレイもそれ以上クリスターに何もできなかった

ようだ。クリスターを鎖につないだまま放置して、腹立たしげな足取りで部屋から出て行った。

後に残されたクリスターは、やっと一人になれたことを確認すると、全ての緊張を解いて、長嘆した。

それきり、後は、特に戒めを解こうとあがくわけでも、ここから出すよう扉の外に向かって訴えるわけでもなく、ひたすら静かに、深く、己の思考の中に沈んでいった。

そして、その頃、クリスターと同じほど深い物思いにふけっていたジェームズは、今にも泣き出さんばかりに気持ちを昂ぶらせた。ダミアンが足元に身を投げ出すように跪き、膝に顔を埋めるのに、ちよつと眉をひそめた。

「今は、おまえの相手をしてあげる気分じゃないよ、ダミアン」

声までもつい尖ったものになってしまう。それほどにクリスターが先程示した意外な提案に心を乱されているのだろう。

「ジェームズ、オレにあいつを殺らせてよ、お願いだから――」

クリスターとジェームズの親密な接触を目の前で見せつけられてしまったダミアンは、身の内から噴出してくる殺意を抑えきれなくなっているようだ。

「何度も言っているけれど、駄目だよ、ダミアン。ダニエルを勝手に痛めつけたことは僕も大目に見てあげるけれど、もしもクリスターの髪一筋、傷つけてごらん、僕は二度とおまえを可愛がってあげないからね」

「そんな…」

よほどショックだったのか、幼児のようにめそめそ泣き出すダミアンの白い髪を、ジェームズは指先で撫でてやる。

「あいつ、あんたを騙そうとしているんだよ、ジェームズ：あんな奴の言葉を信じちゃ駄目だ。あんな常識外れの取引を持ちかけるなんて、あんたを惑わすための罠じゃないなら、クリスター・オルソンは頭がおかしいんだ！」

「あの申し出自体は、クリスターは本気で言ったんだと思うよ。ただ、ここで気をつけなければならないのは、クリスターがある行動に出る時、その目的は大抵ひとつだけはないということなんだ。自分の愛する者達にこれ以上迷惑をかけないために、ゲームを打ち切りたい、そのための代償は払うから――これだけを額面どおりに受け取ると、その裏に隠された、もう1つの目的を見過ごす。幸い僕はクリスターの真の目的まで読めた：いや、クリスターは僕に心を見透かされることまで予想しただろう。それでも僕は拒否しないと、彼は踏んだんだ」

「断っちまいなよ、あんな奴の思い通りにしてやることはない！」

ジェームズはここで悩ましげに眉根を寄せ、ゆらゆらと頭を左右に振った。

「僕が今一番困っているのは、僕自身クリスターの妥協案に惹かれていることなんだよ」

「まさか、本気なの？」

「少し前までは、受け入れることなど全く考えられない、馬鹿げた申し出だと拒否するところだけれど、今の僕にとっては――」

自嘲的に呟きながら、ジェームズは、またしても微かな痺れが戻ってきた指先を掌に包み込んだ。

「この機会を逃せば、僕は二度とクリスターと対峙することはできないだろう。僕達のゲームを、こんな呆気ない形で終わらせるのは悔しいけれど、実際問題、僕に残された時間は僅かだ……ならば、せめて、クリスターから奪えるものは奪っていかうか――ああ、でも……」

激しいジレンマに陥ったジェームズは、何かを振り払おうとするかのごとく乱暴に頭を振りたてた。

気持ちの昂ぶりが体にも影響するのか、彼は苦しげに呼吸を乱し、椅子の背に力なく寄りかかった。

「ジェームズ、ジェームズ……大丈夫かい？　クリスターを相手にすると何だかあんたはとても消耗するみたいだ……部屋でちょっと休んだらどうだい？」

おずおずとジェームズの脚をさすりながら、ダミアンが訴える。

「そうだね……」

ほんの僅かな時間クリスターと話ただけなのに、体力が続かなくなってきたことを、我ながら情けなく思いながら、ジェームズは頷いた。

その時、ジェームズの傍らにかしずいたダミアンの服のポケットから、カチッと何かのスイッチが切れるような音がした。

「あ、忘れてた」

ジェームズが訝しげに見やる前で、ダミアンはポケットから小型のテープ・レコーダーを取り出した。

ジェームズは呆れたように目を丸くした。

「なんだ、クリスターと僕の会話を録音していたのかい？ 全く、盗聴なんて悪趣味な遊びを覚えてしまつて――」

「ごめんなさい、つい……」

悪戯っぽく舌を出してみせたダミアンは、テープを適当に巻き戻した所で再生スイッチを押した。すると、クリスターの落ち着き払った声が掌よりも小さな機器から流れ出した。

『「君が僕から奪うことで、ある程度満足できるものだ――この条件で僕を取り巻く全てから手を引いてほしい。僕の未来を君に潰させてやる。それは――」』

クリスターの声によって再び語られる、あの信じがたい申し出に耳を傾けながら、思わず想像してしまったジェームズは、ぞくりと戦慄にも似た甘美な感覚が全身を走り抜けていくのを覚えた。

「やっぱり、何度聞いても、あいつの言うこと、おかしいよ」

普段は、他人の目から見ればよほどいかれているはずのダミアン

が、しごくまともな感想をもらすのを聞きながら、ジェームズはじつと考えこんだ。

「そのテープ、僕にもらえないかな、ダミアン」

思いつくままに頼み込むと、余計な勘繰りをしたらしいダミアンはちよつと嫌そうに顔をしかめたが、ジェームズの頼みを彼が断れるはずはなかった。

「どうするのさ、それ？」

「何かあった時のために、取引の証拠は大切に保管しておかないかね」

意味ありげに微笑んでテープを受け取ったジェームズの脳裏には、クリスターが考えたであろうよりも更に先の未来予想図があった。

（何もかも君の思い通りにはさせないよ、クリスター。もつとも、君が気づくのはずっと先になりそうだけれどね：僕という毒は遅効性なんだと君はやがて思い知る。この頃の君は余計なことにはばかり気を取られて、僕のしかけた罠を見過ごしがちだから―）

そう、ジェームズもまたクリスターと同じ、行動を起こす際、その目的は常に1つとはしない人間だったのだ。

第6章最後の闘争（7）

「母さん、オレだよ、レイフだよ」

ワルター達と共に、クリスターとダニエルの救助を頼みに行った警察署で、レイフは家に電話を入れた。

応対に出たのが父ではなく、いつも冷静な母親の方であったことにほっとしながら、レイフは言った。

「あのさ、オレ、今日帰りが遅くなるかもしれないんだ。ちょっと面倒なことになっちまったんだけど、話すと長くなるから、事情は帰ってから説明するよ」

ヘレナは受話器の向こうで何事か考え込んでいるらしく、すぐに質問を投げかけてはこなかった。

「トムと一緒にいるんだ。1人で無茶なことしたりしないから、心配しないで、待っててよ」

沈黙が続くことが恐くて、レイフが付け足すと、ようやくヘレナは口を開いた。

「クリスターのメッセージが電話に残っていたのよ。今日の昼過ぎに家に電話をかけたよね…あの子も、あなたと同じようなことを言っていたわ。帰りは遅くなるけれど、心配しないでって―」

ヘレナの落ち着いた声音の中に隠された不安気な響きに、レイフはとっさに胸を突かれた。

「母さん、オレ…」

胸の奥から急にこみ上げてきた様々な感情に圧倒され、レイフは言葉を詰まらせる。

「ごめんよ、オレ、母さんとの約束、守れなかった…」

あれは夏休みに入ってすぐのことだったろうか、ある朝、ヘレナと交わした会話を思い出しながら、レイフは目をしばたいた。

「クリスターが無茶をしないよう、傍にいて見ていてやってくれて、あの時確か母さんは言ったよな…。オレ、本気だった、クリスターを守って一緒に闘うつもりだったのに、あいつからうっかり離れちゃった…。あいつは1人で رفتっちゃったんだ…」

電話をしている傍を通りかかった、婦人警官がちらちらと好奇の目を向けてきたので、レイフは壁の方に体を向けて、ぐっと涙を堪えた。

「レイフ」

ヘレナの微かな呼吸音が受話器から聞こえてきた。勘のいい彼女は、クリスターの身に危険が迫っているということをレイフの短い言葉だけで感じ取ったようだ。

「あなたは今、どこにいるの？」

しかし、語りかけてくる声は、あくまで平静だった。

「うん：サウスボストン署まで来ているよ、またすぐに出て行くけど―」

「警察に助けを求めるような事態になっているのね？」

ヘレナは一瞬間を置いた。

「…もうじきラースも帰ってくるはずよ。彼と一緒に、私もすぐにそこに行くべきかしら？」

レイフは唇を舌で湿しながら、ちよつと考え込んだ。

「ケンパー警部って人が：クリスターとも親しいんだけど、事情をよく知っているんだ。その人がクリスターのために動いてくれている：今ちよつと手が離せないみたいだけれど、今後母さん達はどうしたらいいのか、彼に電話を入れてくれるよう頼んでおくよ。でも、たぶん、母さん達は家で待機してもらった方がいいと思う。父さんに伝える時には慎重にしてくれよ、かっとなると何をしでかすか分からないから―」

「分かったわ。父さんのことは私に任せておいて。でも、あなたはどうするの…？」

「オレは、クリスターのいる所に戻るよ」

レイフは決然とした口調で言った。

「オレは、あいつから離れるべきじゃなかったんだ。なのに、油断したせいで、あいつを勝手に行かせてしまった：オレのせいだよ。だから、何としてもあいつを捕まえてやる、あいつの暴走を止めら

れるのは今でもオレだけだと思うから：」

「クリスターだけでなく、あなたの身にまで何か起こってしまうなんてことにはならないでしょうね？」

ここに至って、ヘレナの声に微かな震えがこもった。

「クリスターにもオレの身にも、何も起こらないよ。そうさせないために行くんだ：大丈夫だから、心配せずに待っててよ。父さんも母さんも、愛してるよ」

またちよつと胸が詰まりそうになりながら、レイフは受話器を下ろした。

後ろを振り向くと、ウォルターとトムが何と声をかけるべきか迷うような顔をして立っていた。

「待たせちゃったのかな、ごめん」

レイフは潤んだ目を誤魔化すよう、笑った。

ダニエルの誘拐、そして、それを助けに単身乗り込んでいったクリスターの話を聞いたケンパーは、ブラック家の捜査令状を取るため奔走してくれている。

だが、レイフにはやはり、クリスターのことを他人任せにはできそうになかった。

「さあ、ジェームズの屋敷に戻ろう。ここ以上ここにいるとオレ、頭が変になっちまう」

この部屋に閉じ込められてから、一体どのくらいの時間が経ったのだろう。

窓のない地下室では外の様子など分らないし、腕時計を見たくても手首を頭の上で固定されているため、クリスターには確かめようがなかった。

（さすがにこの姿勢を長時間続けるのは辛いな…立たされたまま、眠ることもできず…これが数日間続けば、かなりきつい拷問になりそうだ）

そんなことを考えていた時、クリスターは扉の向こうにいる見張り達が動揺したような声を発し、しばし、何者かともめているのを聞いた。

（やっと来たか）

クリスターは頭を上げると、唇に挑戦的な笑みを浮かべて、正面にある扉が開かれるのを待ち受ける。

複数の足音が部屋の前から遠ざかっていくと思った途端、扉はゆっくりときしむような音をたてて開いていった。

「クリスター・オルソン：」

扉の陰から顔を出したのは、らんらんと目を光らせたダミアン・ハートだった。

身動きできないよう天井から垂らされた鎖によって手首を拘束されているクリスターを見つけて、ダミアンはチェシャー猫のようににいつと笑った。

「いい様だね」

するりと部屋の中に入って扉を閉めると、ダミアンは背中を手を組んで、軽くスキップするようにクリスターの前までやって来た。

「その顔、フレイがやったのかな？　ちえっ、あいつ、オレにはクリスターには絶対手出しするなっとうるさいくせに、ずるいな」

ダミアンはゆっくりとクリスターの周りを回りながら、彼の全身を舐めるように眺めた。

「こうして近くで見ると、あんたって、すごいハンサムだね：セクシーだし、もてるだろ？　でも、さすがに大きすぎて、ダニエルみたいに皆に輪姦させて遊ぶのは無理っぽいな：下手に近づく、並の男じゃ、返り討ちあいそうだ。薬か何かで自由を奪ったら、できないことないかな：？　ねえ、ダニエルみたいな可愛い子を抱いてやることはあっても、自分が男に弄られたことなんて、ないだろ？　試してみる？」

クリスターは顔色も変えず、ダミアンの今にも爆発しそうな狂気

を内包した目が見開かれ、その白い頬が時折ピクピクと痙攣する様を観察していた。

「何、すました顔してんだよ！」

ダミアンはいきなりヒステリックな声をあげた。

「あんた、自分の立場が分かってるのかい？ たった1人で敵の中に飛び込んできて、そんなふうに縛り付けられて、恐くないの？ それとも、ジェームズが命令してるから、誰も自分に手を出せないって、高を括っているのかい？」

「だが、それは本当なんだろう？ 僕に手出しをすることを、ジェームズに禁止されているのは？ だから、僕を殺したくてならないのにできなくて、君はそんなにイライラしている」

凶星をさされたダミアンはますます激昂した。ポケットから取り出したバタフライ・ナイフを、クリスターの目の前にかざすようにしながら凄んだ。

「その目をくり抜いてやる！ ジェームズが大好きだって言ってた、あんたの琥珀みたいに綺麗な目：でも、オレは大嫌いだ。さっきはよくもオレの目の前でジェームズを誘惑しやがって：許せない！ その代償にあんたの片目をもらう。ジェームズにあんないかれた提案をした、あんただ：そのくらい、構わないだろ？」

怒りに我を忘れたダミアンなら本当にやりかねない、ぞっとするような宣言を、クリスターは、しかし、冷然と受け止めた。

「僕を傷つければ、確かに君の溜飲は下がるだろうね。でも、ジェ

ームズが知れば、彼は二度と君を愛してくれなくなるよ。それでも構わないなら―やれ」

クリスターの低い声はまるで恫喝のように響いて、ダミアンは思わず立ちすくんだ。

「う…う…」

朱の色に染まっていたダミアンの顔が、瞬く間に紙のように白くなっていく。

（もしもクリスターの髪一筋、傷つけてごらん、僕は二度とおまえを可愛がってあげないからね）

クリスターの警告はそのままジェームズが放った冷淡な言葉に重なって、ダミアンの動きを封じた。

「畜生…畜生…！」

いきなり足元にナイフを投げ捨てて、ダミアンはクリスターの体に闇雲に打ちかかった。拳を固めてクリスターの胸や顔を殴りつけ、足で蹴りつけた。だが、小柄な少年には肉体的なパワーはさほどなく、これらの攻撃をクリスターは黙って耐え忍んだ。

「悔しい、悔しい…あんたを生かしておいたら、ジェームズはもう俺なんか構ってくれなくなる…でも、殺してしまったら、ジェームズは俺を絶対許してくれない…ああ、あんたが憎いよ、クリスター」

身も世もなく泣き出すダミアンを、クリスターは苦笑混じりに見守った。

「そういう単純で分かりやすい愛し方をする人間は、ジェームズはきつと嫌いではないと思うよ…」

やがて、クリスターは、穏やかな声で、泣きじゃくっているダミアンに向かって語りかけた。

「なんで、そんなこと、あんたに分かるのさ」

涙に潤んだ目でダミアンはクリスターを睨みつけるが、そこにはもう先程までの力はない。

「僕もジェームズと同じで、そういう人間が好きだからだよ…複雑な思考をする相手とは、たまに会うには刺激になっていいけれど、長くは一緒にいられない。だから、ほら、僕とジェームズなんて惹かれる以上に反発しあって、いつも互いに相争うことでしかコミュニケーションを取れないだろう？」

ダミアンは悩ましげに眉根を寄せた。

「君はジェームズを愛している」

「そうだよ」

「それなら、ジェームズを自分だけのものにしたいはずだよね…？」

「もちろんさ」

「できれば、邪魔者である僕を排除したいと思っている」

「それは、そうだけれどーできないから、腹が立つんじゃないか！」

癪癪玉を破裂させて足を踏み鳴らすダミアンを、クリスターは目を細めるようにして眺めた。

「できないことはないと思うよ」

「えっ…？」

戸惑うダミアンを見据えながら、極力相手の反発を招かないよう、クリスターは用心深く切り出した。

「もしも僕がここから逃げ出せば、ジェームズは当然腹を立てるだろう。しかし、それは君のせいではなく、うかつにも僕をここに閉じ込める際、ボディ・チェックをしなかったフレイの責任だ」

「何を言ってるんだよ、あんた…？」

ダミアンはいまや不安そうで、クリスターを恐がっているようにさえ見えた。

「僕のベルトに針金が一本仕込んである。面倒をかけるけど、それを引っ張り出して僕の手握らせてくれないかな？」

クリスターは目に力を込めながら、ダミアンに向かって優しく穏やかな口調で語り続けた。

「本当は手錠の鍵が欲しいんだけど、そこまでは頼むと君に迷惑がかかりそうだ…針金さえあれば、ちょっと時間はかかりそうだけれど、僕は手かせを外せるし、どうにか自力でこの部屋からも脱出

することができるだろう」

「このオレに、あんたを逃がせて言うのかい？ そんなこと――」

ダミアンの言葉を途中で遮り、クリスターは畳み掛けるように言った。

「このままでは、君は僕に指一本触れることはできない。けれど、もしも僕が勝手にここを抜け出し、ダニエルを連れて逃げ出そうとすれば――君には僕の脱出を阻むという大義名分ができる。君の仲間達と一緒に僕を追い詰め、捕まえようとしたものの、つい誤って僕を殺してしまった。こんな筋書きならば、ジェームズも納得するしかないだろう。君が1人で僕を襲ったのではなく、ちゃんと仲間も目撃していれば、言い訳だって立つしね？」

「オレに――ジェームズを裏切れて言うのか？」

ダミアンはその考えにはどうしても抵抗を覚えるらしい、反抗的にクリスターを睨みつける。

「つまるところ、これは君の大切なジェームズのためだ。ジェームズはあんなふう傍目にも分かるほどに僕にぞっこんだけれど、僕をこのまま生かしておいて、果たして大丈夫だと思うのかい？ 僕は一度彼を打ち負かした人間だ、二度目は無いと言い切れるか？」

ダミアンの中に渦巻いている混乱と迷いを見透かしながら、クリスターは悪魔のように甘い声でもう一度囁いた。

「ジェームズを愛しているんだろう？ 僕さえいなくなれば、失意落胆した彼はきっと君を一番好きになるよ」

ダミアンの顔から陰が消えた。彼は、果たしてこれは一体何者なのだろうと探るような眼差しを、おずおずとクリスターに向けてくる。

「あんたって…まるでジェームズそっくりな話し方をする…」

鋭い牙も爪もすっかりおさめ、飼い猫のように大人しくなっってしまったダミアンが、そんなことを不安そうに呟いた時には、クリスターも自嘲的に唇を歪めずにはいらなかった。

「そうだよ、僕はジェームズに近いからね…彼の心の動きなら、手に取るように感じられる。だからこそ、どうすればジェームズが僕を諦めて君を振り向いてくれるかも分かるんだよ」

ダミアンはいまや瞬きも忘れたようにクリスターの顔に見入り、その語る言葉にじっと耳を傾けている。

思ったとおり、この少年は非常に依存心が強く、流されやすい。何かあればすぐに武器をかざして自分を強く見せかけようとしているが、その心は実は弱く、不安定だ。他人を怯ませる狂暴さも攻撃性も、むしろ内面のもろさを隠すための擬態に過ぎない。隙があるからこそ、こんなにも徹底的にジェームズに心を預けてしまうのだ。

ジェームズの被害者や部下達には、ここまで極端ではなかったものの、同じように彼に依存しきっている人間がよく見られた。初めから精神的に不安定であったがためにジェームズのカリスマに魅了されてしまった者。ハニーのように暴力によって徹底的に自我を踏みにじられた末に、彼の思い通り動くようになってしまった者。

彼らの多くと実際に接してきたクリスターには、ある意味、扱いやすい人間だった。

（僕には、こういう人間のツボが分かる…ジェームズが駆使しただろう手管なら、僕にも使えるんだ。そう、自我の脆弱な人間達は確信のこもった強い言葉に惑わされやすい。ましてや、それが自分の望みに沿うものであれば、たとえ見え透いた嘘であっても本当だと信じ込んでしまう…なぜなら、彼らはそうだと信じたいからだ）

クリスターは、まるでジェームズのように考え行動しようとしている自分に些かの嫌悪感を覚えながらも、心の中で念じた。

（ジェームズの操り人形よ、さあ、今度は僕の思い通りに動け…！）

ダミアンはしばし逡巡するように瞳を揺らしていたが、やおらクリスターに近づいてきた。クリスターが見守る前で、その小さな手が彼のベルトにかかる。程なくして、ダミアンは、ベルトの裏側に隠されていた針金を指先で探りあてて引っ張り出すと、無言のままクリスターの手に握らせた。

「いい子だ」

クリスターの全身をダミアンは神妙な顔で見ていたが、ふいに思い切ったように、ポケットから鍵束を取り出した。

「片手だけでも先に自由にしてやるよ。そうすれば脱出しやすいだろう？」

「そうしてもらえると助かるよ、ありがとう」

そこまでやるなら両手とも戒めを解いて欲しかったが、たぶん完全に自由になったクリスターが自分に襲い掛かってくるのを警戒しているだろう。ならば、これ以上強く要求するのは控えた方がいい。

「外の見張りは何人だい？」

「2人だよ、オレが飯でも食って来いって追い払ったけれど、じきに戻ってくるよ」

2人ならたとえすぐにここに戻ってきても、どうとでもできるとクリスターは内心ひとりごつ。

「それから、ダニエルの監禁場所を教えてくださいか……？」

これだけは何としても聞き出しておきたかったので、ダミアンが意外なほどあっさりと彼が閉じ込められている部屋への行き方を教えてくれたことには正直ほっとした。

「ダニエルの部屋の前にも、やっぱり見張りはいるのかな？」

「そうだよ。2人立ってる。オレの仲間じゃなくて、あんたと同じ学校出のなよなよした奴らだよ。あんたなら、簡単にのせるだろ」

「ダニエルの部屋へは、一端外に出て、窓から侵入することはできるかい？」

「小さい窓はあったけど、しっかりした鉄格子がはまってから、無理だろうね。昔、頭のおかしくなったジェームズの母さんを一時閉じ込めていた部屋らしいからな」

クリスターはダニエルを連れての逃亡計画を頭の中で練り始めた。ダニエルの部屋までたどり着くことはできたとして、問題は、その後だ。もしもダニエルが1人で動くことも困難な状態なら、追っ手に捕まる前に敷地内から脱出するのは少々困難かもしれない。

「あんたはダニエルを連れてここから脱出する。その後を追いかけて、オレはあんたを――殺す：ゲームみたいだね、面白そうだ」

クリスターの思案になど何の興味も示さず、夢見るように呟くダミアンに、クリスターは鷹揚に頷いた。

「ああ、きっと楽しいだろう。そして、僕を首尾よく殺してしまえば、何もかも君の望みどおりになるよ」

ダミアンは屈託のない笑顔を見せた。そうして、くると踵を返すと、うきうきとした軽い足取りで部屋から出て行った。

ダミアンはクリスターの言葉にすっかり魅了され、暗示にかかったような状態になっている。そのうち目が覚めて、自分が騙されたことに気がつけば、烈火のごとく怒るだろう。クリスターとしては、願わくば、できるだけ長い時間楽しい夢を見てくれという気持ちだった。

（さて、まずはここから脱出し、ダニエルのもとに行こう。それから――）

再び1人になったクリスターは自由になった左手で針金を操り、もう片方の手を戒める枷を外しにかかった。

これからの計画を冷静に組み立てている頭の片隅に、もう1人、

どうしても忘れることのできない人間の面影がふと掠め、彼の指先を鈍らせた。

（アイザック、君はどこにいる…？）

もしも、ここでアイザックを見つけることができればという可能性も、捨てきれない。しかし―。

クリスターは絡み付いてくる何かを振り払うように頭を振って、再び作業に専念し始めた。

第6章最後の闘争（8）

レイフは焦りのこもった眼差しを、森林の上に広がる、今まさに暮れていこうとしている遠い空に向かって投げかけた。

（全く、何だってこんなに夜になるのが遅いんだ。これが冬場ならとうに真っ暗になっているだろうに…）

レイフ達は今、屋敷の業務用のゲートを見下ろせる、道路から少し離れた場所にある丘の上に待機していた。

彼らが乗って来た車は、ここからは見えるが、私道の目立たない場所に停車させて、何かあればすぐに戻れるようにしている。

さっきから落ちつかないげにうろろしながら日が暮れるのを待っているレイフの傍には、トムがいて、気を紛らわせようと何かと声をかけてくれるが、親友との会話もはや彼の焦燥感を和らげてはくれない。

ウォルターは屋敷の周囲をぐるりと偵察に回って、今戻ってきたところだ。

レイフは腕時計を確かめた。

（管理者達とはとくに仕事を終えて帰っていったし、警備員の勤務時間もそろそろ終わる頃だろう…）

レイフはじりじりしながら、ケンパー警部の到着を待っていたが、我慢もそろそろ限界に達しつつある。

ここに帰ってから、警察には何度か確認の電話を入れてみたが、その時点では捜査令状はまだ下りていなかった。

（結構時間のかかるものなんだな…ただの紙切れ一枚じゃねえか、さっさと出してくれりゃいいのにさ。世話になっておいて言うのもなんだけど、あんたらの仕事、遅いぜ、ケンパー警部）

レイフがまた西の空を恨みがましそうな目で振り返った時、下の業務用のゲートの方から車のエンジン音が聞こえてきた。

見ると、大きなバンが5台もやってきて、先頭の車両から降りてきた屈強な男が、ゲートで待機していた警備員に何やら確認を取ってもらっている。

（誰だ、あいつら？）

レイフはウォルターに借りた双眼鏡で彼らを観察した。

ゲートの警備員と話している男も、その他のバンの窓から顔を出している連中も何だか雰囲気は普通ではない。柄が悪いというよりも、独特の物騒な凄みがある。

「昼間は堅気の警備会社が敷地内の警備を取り仕切っているが、夜間は別の連中が交代でやってくるんだ」

いつの間にか隣にやってきたウォルターが、レイフの肩に手を置き、言った。

「あいつら、堅気じゃないよな…？」

「ああ、そのようだ。ジェームズ・ブラックは出所後にマフィアの後ろ盾を手に入れたらしい：表向きは汚い仕事からは手を引き実業家としてビジネスを起こそうとしているそうだが、中身は昔と変わらない、表の仕事はいわば隠れ蓑だな。ジェームズには過去に暗黒街での『実績』がある。そこを見込まれて、知恵を与える代わりに、ジェームズは彼らから欲しいもの―例えば、あそこにいる闘い慣れた連中を警備員という形で送り込んでもらっているんだ」

「あいつら、武器も持ってるよな？」

「そりゃ、マフィアだからな、銃撃戦はお手の物だろう」

「：そういうことは先に言って欲しかったな」

「昼間会った時に話していたら、おまえはやけっぱちになって、昼でも夜でも危険に変わりはないならと、すぐにでも乗りもうとしただろうからな」

「ずるい大人は嫌いだ」

レイフは顔をしかめて、ウォルターの手を腹立たしげに払いのけた。

「警察に任せておけ、レイフ、ケンパーが来るまで待つんだ」

「そんなのんびりしたことをやってる間に、クリスターの身に何かあったら、どうしてくれるんだ！ それに奴らに捕まっているのはクリスターだけじゃない、ダニエルだって―それに、アイザックもたぶんここにいるんだろう？ あんただって、息子を助けるために

必死になって――一度は自分で忍び込んだこともあったんじゃないか。それなら、オレの気持ちだって少しは分かるだろう!」

ウォルターはレイフに平手打ちでもくらったように顔をしかめたが、その言葉に揺らぎはなかった。

「俺は親だからな……ついおまえの親御さんのことを考えてしまうんだ。本当はもっと早くにクリスターを説き伏せて、一緒に彼らのもとの行き、事情を説明するべきだった。子供達に勝手なことをさせてしまった挙句に、この体たらくだ。この上、おまえまで危険の中に無鉄砲にも飛び込んでいかせるなんて――俺にはできん」

ウォルターは俯き、足元の草を睨みつけるようにしながら、低い声で言った。

「俺は……アイザックがあそこにいるだろうことは、ほぼ確信できている。だが、どんな状況にあるのかは分からない……コリンの事故を調べていて引っかかる点も出てきたが、それもあいつに会って話を聞かないと確かめようがない。そもそも、あいつは今も無事でいるのか――アパートに戻って、1人、色んなことを考え出すとたまらなくなってくる。この際、どんな形でもいいから、あいつの命さえ無事なら、俺は――」

「ウォルター……」

悄然と頭を垂れるウォルターに、レイフは何と声をかければいいのか分からなくなって、黙り込んだ。

（こんなふうに、オレ達の父さんや母さんを苦しませるのは嫌だよ、クリスター）

物騒な男達を乗せたバンはゲートを潜り、屋敷の方へと向かって行った。門番は、それが今日の最後の仕事だったのか、ゲートを閉じて鍵をかけると帰っていった。

いつまで時間がかかるのかとじりじりしながらレイフが見ていた夕陽も、やっと地平の彼方に沈み、次第に濃さを増していく闇が訪れた。

そして――。

「おい、また車がこっちに来るぞ」

黄味がかったカーライトがゲートに向かってくるのを見つけたトムが、声をあげた。

今度はウォルターが双眼鏡で様子を窺っていると、ゲートの少し手前で止まった車から1人の中背の男が降りてきて、辺りをきよろきよろと見渡した。ぼさぼさした髪、疲れたようにネクタイを緩めて、まだ三十代半ばの若さだが実際より少し老けて見える。

「ケンパーだ」

ウォルターの呟きを聞いた途端、レイフは転がるように丘を駆け下りた。その後をウォルターとトムが慌てて追っていく。

「ケ、ケンパー警部！」

暗闇の向こうから駆け寄ってくる人影に、初めケンパーは警戒したようだ。しかし、レイフがライトの前に身をさらし、手を振りな

がら近づいていくと、ほっと緊張を解いた。

「よかった…。ずっと待ってたんだよ、警部。…で、令状は出たんだよな、今からクリスターを助けに行けるんだよな？」

息せき切ってレイフが尋ねるのに、しかし、なぜかケンパーは顔を曇らせた。

「どうしたんだよ、警部？」

怪訝に思いながらレイフはケンパーの後ろに目をやった。車には他に誰も乗っていないし、後から続いてパトカーがやってくる気配もない。

「おい…まさかと思うけれど…」

ケンパーは言いにくそうに口ごもった後、息を吸い込み、告げた。

「すまない、レイフ…ブラック家の捜査令状は出なかったんだ」

「何だよ?!」

レイフは思わず、ケンパーのシャツを引っ掴んで、激しく詰め寄った。

「俺も上層部に掛け合って、やれるだけのことはやったんだ…だが、どうやら相手の方が一枚うわてだったらしい」

「だから…どうして—」

頭の中がかつと熱くなってまともな言葉も出てこないレイフの肩を、後ろからウォルターが叩いた。

やっとケンパーの胸を締め上げる手を離れたレイフは、気持ちを静めようと、肩を震わせながらゆっくりと息をつく。

すぐにトムが傍に寄ってきて、何か声をかけながら腕をさすっていたが、レイフの耳にはほとんど入ってこなかった。

「ケンパー、どういうことなのか説明してくれ」

代わりに事の次第をちゃんと聞きだしてくれたのは、ウォルターだった。

「俺はずっとジェームズ・ブラックには目をつけていたんだが――今回は、相手にそれを逆手に利用されてしまった」

ネクタイを指先で更に緩めながら、忌々しげにケンパーは吐き捨てた。

「上層部に、奴の父親のゴードン・ブラックから苦情の電話があったそうなんだ。俺に付きまとわれて、息子共々大変迷惑していると。向こうは、俺が変な言いがかりをつけて、自分達を強請っている、深夜にも訳の分からない脅しのような電話をかけてくるので困ると主張したそうだ：確かに、俺は一度ブラック邸に行方不明のエバ・ハミルトンの件で話を聞きにいったことならあるが、直接ジェームズ・ブラックに接触したのはその時だけだ。それを、とんだ嘘っぱちを並べ立てやがって――」

言いがかりをつけられたのは、それこそケンパーの方だったが、

上層部は明らかにブラック家を庇う態度だった。病床にあって一線から引退したとはいえ、大富豪で有力者のゴードン・ブラックの鶴の一声はまだまだ効力があるらしい。それに、誘拐容疑と言っても、実際にジェームズがダニエルを拉致したという証言はない―ダニエルが行方不明になる前にアルバイトとして出勤していたクリニックの職員達も、何も知らないと言ったそうだ―確かな証拠が見つからない以上、現時点で警察の介入は難しい。

「だが、その苦情を申し立てたのは本当にゴードン・ブラック当人なのか？ 噂では、ほとんど寝たきりで表には全く出てこないということだが―」

「そこまでは知らんよ…どうせ電話でのことだろうしな…」

大人達が話しこんでいる間、俯き、我が身をかき抱くようにしてじっと考え込んでいたレイフが、おもむろに顔を上げた。

「レイフ…？」

トムが訝しげに呼びかけたが、答えず、レイフは少し離れた場所にとめてある自分の車の方へまっすぐ歩いていった。

慌てて、その後をトムが追いかけてくる。

「ど、どうしたんだよ、レイフ？」

レイフは無言のまま、次第にその足を速めていった。

「レイフ、どこに行くんだ？」

ウォルターの不審そうな声が後ろから聞こえたが、レイフは構わず、走り出した。

木の陰に隠すように停めていた車に乗り込み、エンジンをかける。ようよう追いついたトム切羽詰った顔が、ライトに照らし出された。

「どうする気なんだよっ？」

トムは、息を乱しながら、助手席に滑り込んだ。

「今から、クリスターを助けに行く」

レイフは微動だにしない瞳で前を見据えたまま、やけに冷静な声で答えた。

「ウォルターが言っていたように、これから先は、どんな危険があるか知れない。だから、トム、おまえは残れ」

トムははっと息を吸い込んだ。

「レイフ……」

そんな無茶なことはやめろートムもとっさに言いかけたかもしれない。しかし、レイフのいつになく厳しく張り詰めた横顔を見て、気持ちを变えたようだ。

「おまえが行くなら、俺も付き合うよ」

レイフはトムを振り返った。何か言いたげな顔をした。

「仕方ないよ、やっぱおまえを放っておけないもの、俺」

「トム」

レイフはちよつと照れくさそうに笑った。

フロントガラスの向こうに、ウォルターとケンパーが走ってくるのが見えた。

レイフは構わず、車を発進させた。

「おい、待て、レイフ！」

動揺するウォルター達の傍らを走り抜け、レイフはそのまま閉ざされたゲートへ向かった。

業務用道路を守る鉄製のゲートは、昼間見た時は、古く、錆びついていたように思う。車で突っ込めば、破れないことはないというレイフは思った。

単純に、アクション映画やドラマのワンシーンから出た発想だろう。スタントマンならうまくやるだろうが、普通人がやって成功するものか、かなり怪しい。しかし、今のレイフにそこまで突き詰めて考えるゆとりはない。

どんどんスピードを増しながら、レイフの車は暗闇の向こうに浮かび上がるゲートに迫っていった。

「トム、歯を食い縛って、しっかり座席に捕まっておけ！」

「レイフ…！」

レイフが何をやるつもりか悟ったトムは、肝を潰して悲鳴をあげる。

次の瞬間、レイフの愛車は凄まじいエンジン音をあげながら、行く手を遮るゲートへと突入した。

ダミアンが去った後、クリスターの脱出は、拍子抜けするほどうまくいった。

見張りに立っていた連中は、ジェームズに感化されて凶悪化したとはいえ、もともとは普通の高校生だ。それほど闘い慣れしているわけでもなく、捕虜の扱い方を知っているわけでもない。

彼らが食事から戻ってきた時、既に自分で手枷も扉も開錠して自由の身になっていたクリスターはすかさず飛び出し、声をあげさせる暇も与えず、打ち倒した。

後は部屋の中に引きずり込んで、先程まで自分がつながれていた

鎖に1人を拘束し、声を出せないよう口も塞いだ。

もう1人はどうするかと、クリスターはちょっと考え込んだ末、ダニエルが監禁されている部屋に向かう際のカモフラージュに使うことにした。

人目につかないように用心して、目的の場所まで行けたとしても、部屋の前には見張りが立っている。彼らに騒がれるのはまずい。

そういう訳で、その青年を叩き起こして、彼から没収したナイフで散々脅しすかして震え上がらせた後、クリスターは前に立って歩くよう命じた。

ナイフはぴたりと青年の背中に押し付けたまま、しかし、前から見るとクリスターの方が彼に連行されて見えるようにした。ダニエルを見張っている連中を油断させるためだ。

ダニエルの監禁場所にたどり着くまでの間、幸い、フレイはおろか、ジェームズの他の配下と出くわすことはなかった。皆がたむろしているだろう、遊戯室やサロンはここからは離れているせいもあるだろう。

ダニエルの部屋の前、退屈そうに小さなテーブルの上でカードゲームをしていた見張り達は、自分の仲間がクリスターを連れてくるのを見て、怪訝そうな顔をした。しかし、怪しいとまでは思わなかったようだ。危険に対する反応は、彼らもまた鈍かった。

『ジェームズの許可が出たので、クリスターをダニエルに面会させる』

ジェームズの名前を聞いただけで納得したのか、クリスターを近づくのを許した連中は、続く数秒のうちに悲鳴もあげずに殴り倒された。

最後に、ここまで同行してくれた気の毒な青年をもう一度意識不明にしようとして、クリスターは部屋の扉を開けた。

「ダニエル…！」

ここまで冷静沈着にことを進めていたクリスターも、いざ目の当たりにした恋人の哀れな姿に、さすがに気持ちを抑えきれなくなつた。

ベッドまで駆け寄り、そこに壊れた人形のように力なく横たわっているダニエルを呆然と見下ろした。

「よくも…ひどいことを―」

わななく唇を噛み締め、クリスターは床に膝をついた。

ダニエルはこちら側に体を向けて、深い眠りに沈んでいる。鎮静剤でも投与されているのかもしれない。

「いや、ジェームズやダミアンだけじゃない、これは僕のせいでもあるんだ」

真新しい包帯の巻かれた、哀しくなるくらいにか細い腕、殴られた跡の残る小さな顔を凝視しながら、クリスターは罪悪感に打ち震えた。

（どうして、僕はこの子をこんな危険なゲームに巻き込んだ…？
恋人としてつき合いながら、こんなことになる前に、どうしてやめ
させなかった…？）

自分の中にあるあざとさに吐き気を催しそうになる。

「僕には、君に好きになってもらう資格なんてない…ジェームズと
同じ、人でなしの冷血漢、それが僕の本性だから―」

クリスターは、自分が触れることで壊してしまうのではないかと
恐れるように、ダニエルの頭に指先を置いた。

すると、ダニエルの長い睫が震え、閉ざされていた瞼がゆっくり
と上がっていった。

「クリスター…さん…？」

朦朧と定まらない青い瞳が、それでもクリスターを愛する人と認
める。

「ダニエル」

クリスターが固唾を呑んで見守っているうちに、ダニエルは唇を
ほころばせ、花のようにふわりと笑った。

「よかった…もう二度とあなたに会えないかと思ってた…」

何だかもうたまらなくなったクリスターは、ダニエルの体をすく
い上げるようにして抱きしめた。しかし、ダニエルが痛みを覚えて
小さく叫ぶのに、慌てて腕の力を緩め、傷ついた体に響かないよう

慎重に抱きなおした。

「ダニエル、すまない、こんなひどいことになってしまっ——僕は君にどうやって詫びたらいいいのか……」

先程までかけ布の下に隠れていたダニエルの体が思っていた以上にダメージを受けていることに気付いて、一層居たたまれない気分になりながら、クリスターは彼の傷の状態を確認した。

（まるで拷問を受けたようだ……抵抗できない弱い相手にここまでするなんて——）

肩や背中に受けた傷からの出血は、今のところ止まっているようだ。しかし、傷口からの感染かショックのせいか、発熱している。それに、もともと不自由な脚をひどく傷め付けられたようだ。今、自力で歩くことはまず無理だろう。

「クリスターさん、どうして謝るんですか……？ 最後にせめて一目、あなたの顔を見たいとずっと僕は祈っていたんです。あのまま本当に殺されてしまうかと恐かった——あっ……？」

熱にうかされたようにクリスターに向かって語りかけていたダニエルが、その瞬間、大きく目を見開いた。

「あ……ああっ……嫌あ……！」

自分が何をされたか思い出したのだろう、ダニエルは細い悲鳴をあげて、逃げようとするかのごとく必死にもがいた。

「ダニエル……！」

ぷつりと糸の切られた人形のように、そのまま再び意識を失うダニエルの体を受け止め、クリスターは瞳を揺らした。

その時、後ろの扉の方で物音がした。

（しまった…！）

クリスターは険しい顔で振り返った。

誰かがこの部屋の様子を見に来たのだろうか。うかつなことに、見張り達は外に放置したままだ。ダニエルのあまりに悲惨な有様に心を乱されて、人が近づいてくることにも気がつかなかった。

クリスターはダニエルをベッドの上に静かに戻すと、見張りから奪ったナイフを手に、ゆっくりと開かれていく扉に向き直った。

「ダニエル…？」

用心深く低められた、その聞き覚えのある声に、クリスターは胸の鼓動が一際激しく打つのを覚えた。

（この声…まさか…？）

そうして開け放たれた扉の向こうに、ひょろりと痩せた青年の姿を見出した時、胸に押し寄せた感情はあまりに複雑で、さしものクリスターもどんな反応をしたらいいのか分からず、呆然と立ち尽くすことしか出来なかった。

そして、それは相手にとっても同じようだった。

「アイザック…」

やっこの思いで胸から押し出した声は、我ながら滑稽なほど動揺していた。

クリスターの呼びかけに、アイザックは大きく身を震わせた。信じられないとばかりにもう一度クリスターを見つめなおしたかと思うと、この場から消えてなくなりたいような恥辱に頬を赤らめ、一歩後ろに下がった。

「何てこった…おまえがここにいるなんて…」

しかし、つい怯んでしまう自分の弱さを払いのけるように頭を激しく振ると、アイザックは再び部屋の中に入ってきて、親指を立てて扉の向こう側を指し示しながら、淡々とした声で言った。

「外で、ジェームズの部下達が3人のびてるけど、あいつら、とりあえず部屋の中に隠しちまわないとまずいんじゃないか？」

クリスターはほっと息を吐いた。

「そうだな」

ゆうに二月ぶりに顔を合わせた2人は、気を失ったままのジェームズの配下を部屋に運びこんだ。力を合わせて彼らの体を拘束し終えると、改めて向き直った。

「アイザック…やはりここにいたのか…無事でいてくれて、よかった…」

クリスタルのぎこちない言葉に、アイザックは唇を皮肉っぽく歪めた。

「クリスタル、今更オレに気遣いなんてしないでいいんだぜ。おまえには、分かっているんだろう、俺がどうしてここにいるのか…?」

「ああ…君は僕を見限って、ジェームズの側についたということなんだね…?」

「そうだ、弁解はしない、俺はおまえ達を裏切った」

体の脇に垂らした手をぐっと握り締めながら固い声で告げるアイザック。

それを凝然と見つめるクリスタルの胸には、とても一言では説明できない様々な感情が去来していた。

『なあ、クリスタル、おまえにとって俺は一体何だったんだ…? 利用価値のある手駒以上の意味なんか、あったのか?』

夏休みの直前、アイザックと最後に会ったあの日、彼が自分に叩き付けた、悲しみと怒りのこもった言葉がまざまざと脳裏に蘇った。

『ただ、一度でも、おまえが俺を友人として仲間として信頼してくれたら―そうさ、俺を納得させるのに大儀も正義もいらぬ。1人でJと戦うなんて無理だから、一緒に来てくれと素直に手を差し伸べてくれりゃ、それでよかったんだ』

確かに、これまでクリスタルは、アイザックにそう誤解されるよ

うな態度や言葉を取ってきた。

だが、本当は、クリスターはアイザックを深く信頼し、頼りにしていた。自分で自覚していた以上に、彼を好いていた。クリスターが間違ったのは、それをちゃんと伝えようとしなかったこと、アイザックなどいなくても少しも構わないかのように振る舞い続けたことだった。

（どうして、こう僕は素直じゃないのかな…本音とは逆のことばかりして、それで大切な人の心を傷つけ、遠ざけてしまう…）

後悔と呼ぶにはあまりにも深く、ほとんど絶望的な無力感が、クリスターを押し拉こうとする。

アイザックの存在は、クリスターの心に深く突き刺さった棘だった。彼の無事を祈りながらも、こうして実際に顔をあわせることが恐かった。

こうして今、避けようもない現実として、かつての右腕、クリスターの数少ない友であった男と向き合いながら、突き刺さった棘の痛みはいや増したようだ。しかし―。

「クリスター、おまえには俺に言いたいことが山ほどあるだろうが、今は堪えてくれ。先にダニエルを何とかしなきゃならないから―」

クリスターの沈黙を誤解したらしいアイザックの言葉だったが、そのおかげで、クリスターも現実を思い出した。

「そうだ、ダニエル…」

ちらりと後ろのベッドに寝かされているダニエルを振り返り、クリスターは再びアイザックの方を向いた。

「すると、アイザック、君もダニエルをここから逃がしたいと思っているわけか…？」

アイザックの頬が、今度は怒りのあまり赤くなった。

「当たり前だ！　こんな状態のダニエルを、いつまでもこの悪党どもの巣窟に置けるものか！　あの狂犬ども、ジェームズの言いつけも無視して、ダニエルを弄びやがった…今は大人しくしているけれど、堪え性のない奴らのことだ、放っておくとまた何をするかもしれない…」

「ならば、ダニエルを助けたいという点では、僕達の思いは一致しているわけだね、アイザック」

アイザックは、クリスターの気持ちを推し量ろうとするかのごとく目を細めた。

「そのようだな…まさか、おまえとここで鉢合わせするとは思ってなかったが…ダニエルを助けるために忍び込んだのか？　よく、警備をかいぐぐって、ここまで来られたな」

「僕は、ジェームズと話し合うために正面から訪問したんだよ。ジェームズには僕を拒む理由はないからね、すぐに通してもらえたさ。そこで、彼をちょっと悩ませる課題を突きつけてやったんだ。案の定、彼は少し考えさせてくれと言って、僕を地下室に閉じ込めた。そうして時間稼ぎをしているうちに、僕はダニエルを助けるために監禁場所から脱出して、まっすぐここに来たんだ」

アイザックは軽く眉を跳ね上げた。

「へえ、それはまた大胆なことをやったな…そう言えば、さっきサロンの傍を通りかかった時、連中、妙にざわついているなとは思ってたんだが、おまえの噂で持ちきりだったんだろ。俺は、ちょっと脱出の準備や何やらで忙しかったものだから、生憎気付かなかったが―」

「なら、ここで僕を見つけて、さぞ驚いただろうね」

「全くさ。気を失うかと思ったよ」

クリスターが微笑むとアイザックもほんの少し固い表情を和らげたが、すぐにまた暗く沈みこんでしまう。

「脱出手段は、一応確保しているんだ」

アイザックはクリスターから目を逸らしながら、努めて感情を排除したような声音で言った。

「屋敷の裏手に車を用意してある。これはブラック家のものだし、ジェームズの仲間としてここに居候していた奴が運転してくれるから、カムフラージュにはなるだろう」

「ジェームズの配下を懐柔したのか？」

「予め、このままジェームズについていくことに不安を覚えてる、うまくつついてやれば裏切りそうな奴は、何人か目星をつけていたんだよ」

「それでも、よく協力なんてしてもらえたな」

するとアイザックは、かつてクリスターと共にJ・Bと闘っていた時の鋭い参謀役の面影を蘇らせた、きびきびとした口調で言った。

「一口にジェームズの仲間や配下と言っても、決して一枚岩じゃないのさ。2つの派閥に見事に分かれている。もともとうちの学校の生徒で、昔ジェームズが率いていた不良グループにいた奴ら、そして、ジェームズが深く関わりを持っていたストリート・ギャングの残党：今、ここで力を持っているのは専ら後者の方だ。ジェームズが彼らの再建に力を貸すと約束して資金援助をしたり、彼らの仲介でマフィアと接触を持ったり、お互いに持ちつ持たれつの関係だからな。それが、ほとんどただの居候のような前者のグループには不満なんだ。ジェームズが以前のように頻繁に仲間達に接して、彼らの間の軋轢をうまく調整していれば、それなりにうまくいったんだろうが、この頃のジェームズは何故か自分の部屋に引き籠もることが多くてな。末端の部下達の細々した所にまで、その影響力は及んでいないのが現状なのさ」

ここで、アイザックはどうにも腑に落ちないといった顔をした。

「昨日、俺はダニエルの件でジェームズを問いただそうと思って、彼の部屋に向かったんだが、途中でダミアンに追い返されてしまった。どうやらジェームズは体調を崩しているらしい：だが、それだけにしては、何だか様子が変わなんだ」

クリスターは眉根を寄せた。

「アイザック、それは――」

クリスターが追求しようと口を開きかけた、その時、後ろのベッドの方から、弱々しいながらもしっかりとした意思を感じさせる声が聞こえてきた。

「ジェームズは…病気なんです…それも非常に悪性の…」

クリスターもアイザックも、弾かれたようになって、そちらを見た。すると、ベッドから半身を起こしたダニエルが、必死の形相でクリスターに何かを伝えようとしていた。

「クリスターさん…あなたの考えた可能性を僕は何としても確かめたくて…ドクター・キャメロンの家を調べて、分かったんです…ジェームズの命はもう長くない…」

しかし、やはり自力で動くことは辛いのか、ぐらりと体を傾がせるダニエルに素早く駆け寄って、クリスターはその肩を抱いた。

微かに震えている肩をいたわるように撫でながらも、クリスターは問いかけずにはいられなかった。

「今、何と言ったんだ、ダニエル…？」

ダニエルは、細かな汗のういた小さな顔を上げ、クリスターの目を見据えながら、驚くほど明瞭な声で言った。

「クリスターさん、ジェームズは発病しています」

そうして、ダニエルは、残った力を振り絞るように、自分がドクター・キャメロンの家で見つけた資料や検査データ、そして、たま

たま現われたジェームズ自身がキャメロン相手に話したことなどを打ち明けた。ジェームズがブラック家の男子の宿命である遺伝病を受け継いでいること、既に半年前にそれを発症し、ここに至って、急激に病状が悪化してきていること――。

「なるほどな、『ブラック家の負の遺産』ってのは、そういう意味だったのか……」

それについては、クリスターから聞かされていたものの、ダニエルほどの深い関心を持っていたわけではないアイザックは、まだ信じられないような顔をしていた。

無理もない。不治の病に蝕まれて余命幾ばくもないなどと、あの怪物 J・Bらしくない話だった。

「だが、それが事実だとすると、出所した後のジェームズの変わりようも納得がいくな」

「彼は変わったと……どんなふう……?」

「何だか、保身に关心がなくなったというのかな……以前のジェームズは仲間の非道は許しても、自分がそれに関わることはなかった。巧妙に立ち回って自分にまで火の粉が降りかかることは避けていた。ましてや、決して自らの手を汚すことなんてなかった。その辺りが、今のジェームズには欠けているんだ……一度施設送りになって、表向きの輝かしい経歴に傷がついちまったせいかなと思ったりしたんだけれど――むしろ、自分の命の期限が分かったせいなんだろうな。今更何をして、どんな罪に問われようが、どうせ死んでしまうんだから、誰もジェームズを裁くことはできない」

クリスターは奇妙に心乱されながら、アイザックの話に黙って聞き入った。

（ジェームズが死ぬ…？）

ふと腕の中のダニエルを見下ろすと、彼はやっとクリスターに伝えるべきことを伝えられた安堵感からか、また失神していた。

「アイザック、ともかく、ここを早く出よう。君が味方に引き込んだ奴だって、あまり待たせておくと、やっぱり恐くなって、気を変えないとも限らない」

「そうだな」

クリスターはぐったりしているダニエルを抱き上げ、アイザックに頷きかけると、周囲の様子を窺いながら用心深く部屋の外に出た。

ここの見張りの交代の時間がどうなっているのか知らないが、そのうち誰かが様子を見に来るだろう。見つかる前に、ダニエルを無事に脱出させなくてはならない。

（そして、アイザックもだ…ウォルターはこの近くで張り込んでいるはずだから、屋敷の敷地を出てしまえば、きっと保護してもらえる）

先頭に立って脱出路を案内してくれているアイザックの背中を見つめながら、クリスターは胸の奥に刺さったままの棘を意識する。

（そうだ、僕はアイザックにまだちゃんと自分の気持ちを伝えていない）

訳もない焦燥感に駆られて、クリスターは口を開いた。

「アイザック…」

その時、アイザックがいきなり立ち止まったので、クリスターも足を止めて顔を上げた。すると、長い廊下の終わりに、1人の青年がこちらをぼかんと見ながら凍り付いていた。

アイザックとその後ろにいるクリスター、そして彼の腕に抱かれたダニエルを見比べると、彼はさっと顔を紅潮させた。

「だ、誰か、来てくれ！ クリスターが逃げ出したぞ！」

クリスターの腕っ節はよく知っているのか、転がるように逃げ出す相手を見送った後、クリスターは苦々しげに顔を歪めた。

「しまった…！」

アイザックが、厳しい顔つきでクリスターを振り返る。

「急ごう」

アイザックはホールの近くにある1つの部屋の扉を、予め手に入っていた鍵を使って開け、クリスター共々中に飛び込んだ。

そこは個人所有のちょっとした美術館になっていて、ブラック家が集めた貴重な絵画や調度品の類が納められている。

廊下の反対側には大きな張り出し窓がついていて、車を待たせて

いる裏庭へもここからなら近いそうだ。

少々がたのきている窓を、体をばねのように使ってこじ開けると、アイザックは素早くクリスターを振り返った。

「さあ、おまえが先に行けよ」

クリスターはすつと目を細めた。

「いや、君が先に出てくれ、アイザック。外でダニエルを受け止めてもらった方がいい」

「そうか」

アイザックは微妙な顔をしたが、ここでぐずぐずしている訳にはいけないので、すぐに窓を潜って、外に立った。

続いて、クリスターは、ダニエルを壊れ物でも扱うようにしながらアイザックの腕に渡した。

「さあ、早く来いよ、クリスター」

じりじりしながら促すアイザックの顔をクリスターはじっと見つめた。

「何だよ？」

アイザックは怪訝そうに眉を寄せる。

「いや、どうして僕はいつも、君に自分の本心を打ち明けることを

怠ってきたんだろうとつくづく思っていたんだ。君のことを頼りにしている、君が必要なんだと、もっと早くに素直に言っておけばよかった」

クリスターの真摯な気持ちのこもった言葉に、アイザックは怯んだようだ。

「突然、何を言い出すんだよ、クリスター……大体、そんな話をして
いる場合じゃないだろ？」

しかし、クリスターは一向に動こうとはせず、アイザックの動揺する顔にまっすぐな眼差しを当てたまま、続けた。

「僕は君がいてくれることを当たり前のように思っていた……何も言わずとも、君なら僕の気持ちを察してくれるなんて、とんだ甘えだった。すまない、アイザック……僕のために君まで窮地に追い込んだ。今更許してもらえとは期待しないが、僕にとって、君は今でも大切な友人だよ」

アイザックは瞠目した。穏やかに微笑むクリスターの顔を前に、どうしても言葉が出てこないようだった。

「ダニエルのことを、くれぐれも頼む」

一転、クリスターは表情を引き締めて、そう言った。

「クリスター？」

クリスターは、人の怒鳴り声や足音が近づいてくる、扉の方を肩越しに振り返った。

「追っ手の注意は僕が引き付ける…その隙に君はダニエルを連れて、ここから脱出するんだ」

アイザックは喘ぐように息をした。

「おい…待てよ、冗談じゃないぜ、おまえを置いて行けって言おうのか」

自分の手をぐっと握り締めるアイザックの手を見下ろしながら、クリスターはふと目を和らげた。

「彼らの目的は僕だ。君らには人質としての価値も、今ではそれほどない。だから、僕に構わず、行け…！」

クリスターの思惑を察したアイザックは顔色を変え、必死で食い下がった。

「おまえ、1人でジェームズとの決着をつける気だな！ それは危険すぎる―ジェームズはもう以前と同じ奴じゃない…避けられない死の前に、本当にたがが外れちゃった。…あいつはな、自分の親父も殺しているんだぞ。それだけじゃなく、邪魔な人間を何人もダミアンに始末させている。今あいつに捕まったら、おまえ、何をされるか分からないぞ」

「分かっている。でも、僕はやらなければならないんだ」

離すまいとするアイザックの手から自分の手をもぎ離して、クリスターは決然とした態度で言った。

「頼むから、行ってくれ、アイザック。このままじゃ、3人とも捕まるぞ」

アイザックの顔が一瞬悲痛に歪んだが、クリスターの揺るぎもない瞳が物語る決意の程を理解するのも、彼はまた早かった。

「分かったよ、クリスター…ここを脱出して、すぐに警察の保護を求める。俺とダニエルが証言すれば、ジェームズには逮捕されて充分すぎるほどの罪状があるからな。…その証拠も俺は持っている」

アイザックは確かめるようにズボンのポケットに触った。

「必ず、おまえを助けるために戻ってくる。だから、それまでくれぐれも無茶な真似はするな」

「ああ」

クリスターが分かっているというように頷き返すと、アイザックはダニエルの体を抱き上げて、窓の前から立ち去っていった。

「さて…」

クリスターは自分達を探しているらしい連中のたてる物音で騒がしい、廊下側に体を向けた。

足音もさせず、滑るように扉に近づく―その途中で目に付いた、壁にかけられた中世の武具から、小振りの剣を手にとった。刃の部分は模造品だが、振り回せば脅しくらいにはなるだろう。

「アイザック、ダニエル―どうか無事に逃げ延びてくれ」

口の中で小さく祈った後、意を決したクリスターは、荒々しく扉を開け放ち、とっさに凍りつく敵達の只中に飛び込んでいった。

第6章最後の闘争（9）

レイフの車は、物凄い音をたててゲートを突き破った。

衝撃で車体をがたがた揺らし、次第に減速しながら数メートル走った所で一時停止する。

車体の前部はへこみ、フロントガラスにも大きなひびが走っていたが、幸い、煙が出たり、走行不能になったりはしていないようだ。

「ひい…なんて無茶するんだよ！」

恐る恐る目を開けて我と我が身の無事を確認すると、トムは顔を引きつらせながら、レイフに対して抗議の声をあげた。

「いいんだ、こんな車、別に壊れたって…どうせ兄貴のお下がりなんだし…」

ハンドルをしっかりと握り締め、がちがちに固まったまま、正面を睨みつけているレイフの目は据わっている。

「違うだろーっ！ 言うことがずれてるぞ、おまえ…おい、ほんとに大丈夫か、レイフ？」

トムが目の前で手をひらひらさせてみると、やっと正気ついたレイフは、肩の力をぬいて、深々と息をついた。

「怪我はねえよな、トム」

「うん：何とか。でも、ああいう乱暴なことをやる時は、もうちょっと前に言ってくれ、心の準備ってもんがあるだろ」

レイフは自分の暴走ぶりを振り返って、ちょっと恥ずかしそうに笑った。

「ん：」

レイフは気を引き締めて、再び車を発進させようとした。

すると、後から追ってきたウォルターのバンがレイフの車の前に回りこみ、行く手を遮るように停車した。

「ウォルター：！」

レイフは、バンからケンパーと一緒に降りてきた瘦身の男を、運転席の窓を開けて、憎々しげに睨みつけた。

「邪魔するな、そこをどけ！ さもないと、このままあんたの車に突っ込んで、無理矢理にでもどかしてやるぜ」

レイフのすごい剣幕に、この時ばかりは、ウォルターも少し怯んだようだ。

「レイフ、落ち着け：おまえ達だけでクリスターを助けに行くなんて、無茶だ。さっきの男達を見て分かっただろう、ジェームズは侵入者に対しては容赦しないつもりだ」

「分かってないのはあんたの方だ！」

レイフは噛み付くように吼えたてた。

「警察はいつまで経っても来ることはない：これ以上待っていても意味がないなら、一か八かやってみる。何もやらずにあきらめることなんか、絶対できるものか！」

「そんな危険な真似を許すわけにはいかないぞ、レイフ、家でお前達のことを心配しながら待っている親御さん達のことを考えろ」

ウォルターの後ろのケンパーが、厳しい表情をして、そう口を挟んだ。

「確かに、今警察が動けないことはすまなく思うが、他にもきつと手立てはある。取りあえず、俺と一緒に家に戻って――」

レイフはもどかしくてならないというように、荒々しく手を振って、ケンパーの話を遮った。

「もう、そんなことを言ってる場合じゃないんだ。今一番差し迫った危険にさらされているのは、クリスターだ！ それに比べりゃ、オレのする無茶なんて：本当に分からないのかよ、ジェームズはずつとあいつを手に入れたがっていた：そのために、事故を装ってコリンとミシエルに大怪我をさせ、ダニエルを誘拐し――アイザックだって、たぶん抑えているんだろう。そうしてやっとな、クリスターを手の内に囲い込んだんだ。あいつがいつまでも紳士的にクリスターを扱うと思うのかよ？ それに、ダニエルとアイザックだって、クリスターを手に入れたしまった今、ジェームズにとってはもはや用なしだ。あいつらの安全だって、もう保障できないんだぜ？」

取り乱しているようでいて意外と鋭く問題の部分を突いてくるレ

イフに、ウォルターもケンパーもとつさに反論できなくなった。

「それは―確かに、そうだが…」

特にウォルターは、アイザックのことが脳裏を掠めたのだろう、眉を寄せて黙りこみ、葛藤している

「レイフ…おまえの言い分はよく分かった。俺だって、ここまで事情が分かっている何もないのは悔しい、しかし―」

警官という立場上、尚も説得を続けるケンパーに、レイフがもう一度言い返そうとした、その時、ウォルターが言った。

「分かった」

ケンパーはぎよつとなったようにウォルターを振り返った。

「おまえの言うことにも一理ある…無茶であることには変わりはないが、この際、一か八かの賭けに出ることで現状を打破できるかもしれない」

レイフはぱつと顔を輝かせた。

「ウォルター…分かってくれてありがとうよ。それなら、早く車をどけてくれ」

ウォルターがいきなり意見を翻したことに驚いて、しばらく絶句していたケンパーが、慌てて2人の間に割って入った。

「おい、何を言い出すんだ、ウォルター」

その腕を軽く押さえながら、ウォルターは尚もレイフに向かって話し続けた。

「レイフ、最後まで人の話を聞け。おまえ達を単独で行かせることは、リスクが大きすぎて、やはり認められない。だから、俺も一緒に行く」

「はっ？」

今度は、レイフばかりか、じっと事の次第を窺っていたトムまでが、喫驚した声をあげた。

「二手に分かれて、別々に屋敷を目指そう：いや、先に俺が騒ぎを起ここして、あの物騒な警備員達の注意を引き付ける。陽動作戦だな。ちよっとばかり荒っぽいことになりそうだが、どうせやるなら徹底的にやった方が少しでも成功の確率が高くなるからな。その隙に、おまえ達は屋敷に忍び込め：だが、くれぐれも無茶はするな。駄目だと思ったら、様子を見るだけにして、素直に引き返すんだ」

てきぱきとした口調でこれからの段取りを説明するウォルターを呆氣にとられて眺めながら、そう言えば、この人は若い頃多くの紛争地帯取材して名を馳せたことがあるんだよなあと、クリスターから聞いた話をレイフは思い出していた。

「ウォルター、おまえ、正気か！」

焦ったケンパーが声を荒げた、丁度その時、屋敷の方角から一台の車が私道を通ってこちらに近づいてくるのに、彼らは気がついた。

たちまち辺りに緊張が走る。

「おまえらが車で突っ込むなんて無茶をするから、様子を見に来たんだ。セキュリティ・システムが働いたんだろう」

忌々しげに舌打ちしたのはケンパーだ。

今更隠れる時間も場所もない。彼らがじっと身を固くして見守っているうちに、車は道を塞いでいるレイフとウォルターの車の少し手前で停車した。

ケンパーはレイフを渋い顔でにらみつけた後、身分証を高く上げながら、突然現われた車に向かってゆっくりと歩いていった。

「俺はサウスボストン署のケンパー警部だ」

レイフは謎の車の眩しいライトに目を細めながら、次に何が起くるか、じっと身構えていた。

（もしもJ・Bの部下だったら、速攻飛び出して行って、クリスターとダニエルがどうなったか締め上げて白状させてやる）

ケンパーが呼ばわってしばらくした後、車の後部座席のドアが開いて、ひよろりと痩せた男が外に出てきた。

ライトが邪魔で、初めは相手の顔かたちはよく分からなかった。

しかし、一瞬のためらいの後こちらに近づいてきた、男の顔が明らかに変わった時、レイフはほとんど叫ぶようにその名前を呼んでいた。

「アイザック！」

アイザックは車のライトを背中に浴びながら、足を止めた。レイフを見つけると、軽く眉を跳ね上げ、唇を皮肉っぽく歪めて微かに笑った。

「間違いねえ、正真正銘のアイザックだ」

呆然と呟いたレイフは、次の瞬間、しばし石と化したように固まっていたウォルターがアイザックに駆け寄り、無言でその体を抱きしめるのを見た。

「すまねえ、親父：迷惑かけちまった―」

いつもは強気のアイザックが、頭を垂れて、弱々しい声で詫びると、ウォルターはこみ上げてくる熱いものを堪えるように低く言い聞かせた。

「いいんだ。無事でよかった、アイザック：今はそれだけで、俺は満足だ」

アイザックが乗ってきた車の窓を覗き込んだケンパーが息を飲み、叫んだ。

「おい、これはダニエルじゃないか…！ 怪我をしているのか？」

思わぬアイザックの登場でしばし気を逸らされていたレイフは、はっとなって、そちらを見やった。

「そうだ、こんなことをしている場合じゃない」

アイザックは手の甲で目の辺りをぐっとぬぐって、父親の腕から身を引いた。

「親父、まずダニエルを病院に運んでくれ：ジェームズの子飼いの連中に散々傷めつけられた上、発熱している：」

「分かった」

じっと聞いていられなくなったレイフは、トムと一緒に車から降りてアイザックのもとに行く。同時に、ケンパーもこちらに戻って来た。

「つまり、ダニエル・フォスターはジェームズ・ブラックによって誘拐され、暴行を受けた―ということなんだな、アイザック？」

厳しい顔で確認してくるケンパーに、アイザックは冷静に向き直った。

「そうです、警部」

「では、今度こそ、誘拐容疑で奴の取り調べができるな」

「警部、ジェームズ・ブラックの犯した犯罪はそれだけじゃありません。あなたが一度聞き取り調査のためにブラック邸を訪問した、例の行方不明者：エバ・ハミルトンとその愛人の殺害に奴は関わっています」

思わぬ証言がアイザックの口から出たことに、ケンパーは目を剥

いた。

「何だと？」

「俺は直接犯行の場面を見たわけじゃありませんが、ジェームズの仲間が噂をしているのを耳にしました。ジェームズと親しいダミアン・ハートという少年が手を下し、敷地内に死体を密かに埋めたということです。俺は一度、その場所を探ろうとしました。確かに、そこにはまだ新しい土を掘り返したような跡がありました。しかし、詳しく調べてみる前に、ダミアンに見つかり、阻止されてしまいました」

「ハートというと…以前逮捕された、ストリート・ギャングのボスの身内か？」

「弟だそうです…まだ子供ですが、こいつはかなり危険な奴です。殺傷用のブーメランを扱います。ダニエルも、こいつによって大怪我をさせられたようです」

「ううむ…」

ケンパーは顎に手を置き、難しい顔をして唸った。

「それから、ジェームズの父親のゴードン・ブラックも、おそらくもう死んでいると思います」

「何だって?!」

「俺がああ屋敷に軟禁されて、約2か月間―俺は一度もゴードン・ブラックの姿を見たことも声を聞いたこともありません。彼は2階

の一室にほとんど寝たきりの状態でいるはずですが、そこに生きている人間の気配はない。確かに、主治医は往診のために頻繁に通っています。それだってゴードンのためだとは思えない。それに――」

ここで、アイザックは強烈な寒気を覚えたかのように、ぶるりと身を震わせた。俯いたその顔も、心なしか青ざめている。

「最近、館の2階に近づくと異臭がするんです。何とも言えない、あの臭い……まさかと思うけれど――」

ケンパーは、傍らで黙って話に耳を傾けていたウォルターに困惑した顔を向けた。

「ゴードン・ブラックは既に死んでいるというような噂は確かに囁かれていたが――それじゃあ、当局に圧力をかけて捜査を妨害したのは誰なんだ？」

「ゴードンを装った別人だろうさ。ジェームズにとって、父親は生きていた方が何かと便利だからな……亡くなった後も生きているかのように偽装したんだろう。死因が他殺なのか病死なのかは、何とも言えないが――」

話が込み入ったことになりつつあるのに苛立ったレイフが、声を張り上げた。

「そんなことはジェームズを捕まえた後に白状させりゃいいじゃないか！ 警部、とにかく、これでジェームズを逮捕できるんだろう？」

レイフの直截的な要求に、ケンパーはとっさに返事に窮して言葉

を詰まらせ、いらいらと頭をかきむしった。

「いくらなんでも、いきなり殺人容疑で逮捕はできんよ、ちゃんとした物証がないことにはな。ええい、頭がくらくらしてきたぞ…やはり最初はダニエルの誘拐容疑の線から行って―」

「麻薬容疑でなら、今、その物証という奴があるぜ」

ズボンのポケットから何かを取り出すアイザックの方を、皆一斉に振りかえった。

「ジェームズが懇意にしているマフィアを通じて手に入れたものだ…麻薬の密売に関わった容疑ということでブラック邸の捜査に踏み切れないか？ その過程で、他に思わぬ犯罪の証拠がぼろぼろと出てくることになったとしても、警察にとってはむしろ好都合だろう？」

アイザックが手渡した小さな包みを凝視しながらしばし考え込んだケンパーは、『麻薬課に連絡してくる』と言い残して、自分の車の方へ走っていった。ダニエルのための救急車も一緒に呼んでくれるらしい。

「これで、やっと警察も捜査に踏み込めるな」

ほっとしたウォルターの呟きを聞きながら、レイフは、しかし嫌な胸騒ぎを覚えていた。

（何だろう、すごく嫌な感じがする…今後こそうまくいきそうなのに、不安が消えない。クリスター、おまえ今どうしているんだ、無事なのか…？）

レイフは目を瞑って胸に手を置き、本当に自分達がどこかでつながっているのなら兄の安否も分からぬかというように強く念じてみた。

（今から当局に連絡しても、すぐに許可が出るわけでもないだろう。駄目だ、やっぱり時間がかかりすぎる）

レイフは苦しい目をして、闇の向こうを透かし見た。喉もとに何か重苦しい塊がせりあがってくるような気がした。

「やっぱり、オレ、クリスターを助けに行くよ。もうこれ以上待つのは無理だ、今じゃなきゃ、間に合わない……！」

ほとんど直感的に確信したレイフは、そう叫ぶや、ウォルターが止める間もなく再び車に乗り込んで、素早くエンジンをかけた。

「レイフ！」

トムが危ういタイミングで助手席に飛び込んでくる。レイフは、彼がちゃんとシートに身を落ち着けるのも待たず、車を急発進させた。

柔らかい草地にはみ出しながら強引に車を走らせて道を塞ぐウォルターのバンを避けると、後は屋敷へと続く私道をまっすぐ突き進んでいった。

後に残されたアイザックとウォルターは、しばし呆然とその場に立ち尽くして、遠ざかっていく車のライトを見送っていた。

「レイフ、あの馬鹿：勝手なことを！ あれほど単独では行動するなど言い聞かせたのに――」

「でも、親父、確かに事態は急を要するものなんだ。実際、警察が捜査に乗り込んでくるまで待つのは無理だ」

ウォルターの腕を掴んで、アイザックは真剣に訴えかけた。

「クリスターはジェームズを欺いて俺とダニエルを逃がした後、屋敷に留まった。俺達がここまで逃げ切れるよう、時間稼ぎをしてくれたんだ。でも、いくらあいつでも1人じゃどうにもならない、おそらくまた捕まっちゃったろう」

アイザックはこみ上げてくる不安を堪えるよう、ぎゅっと唇を噛み締めた。そして、再び自分を奮い立たせると、はっきりした口調で言った。

「クリスターを無事救出したいなら、俺も今しかないと思う……だから、俺もあいつを助けに屋敷に戻るよ」

ウォルターは息子の決意に満ちた顔をつくづくと見つめた後、天を仰いで溜息をついた。

「やっと無事に戻ってきたと思えば、また無茶をするつもりか？」

「止めるなよ、親父」

牽制するアイザックに、ウォルターは苦笑を含んだ眼差しを投げかけた。

「ああ、分かった、もうとめはしない。だが、クリスターを助けに行くなら、俺も一緒に行く」

「え？」

ウォルターは、自分のバンの方に泰然とした足取りで歩いていった。

「おまえを助けてくれたクリスターは、俺も何としても無傷で取り戻したいからな」

ウォルターが手招きするのに怪訝な顔で近づいていったアイザックは、覗き込んだバンの後部座席にあるものに目を丸くした。

「何だ、こりゃ」

「手作りの爆薬だな……ちよつとしたナパーム弾くらいの発火力がある。随分昔になるが、しばらく行動を共にして取材をさせてもらった某国のゲリラ達に作り方を教わってな」

アイザックは顎が外れそうなほど口を開けてしばしばかんとした後、じろりとウォルターを睨みつけた。

「ここは紛争地帯じゃないんだぜ」

ウォルターは悪戯小僧のようににと笑った。アイザックに顔を近づけ、声を潜めて囁いた。

「ああ、だから、もちろんケンパーには内緒だぞ。見つかるとうるさいどころか、こっちの手が後ろに回ることになりかねないからな」

アイザックは半ば呆れたような、しかし、頼もしげな目でウォルターを見つめながら言った。

「いい年してさ、あんたが一番とんでもねえこと考えるやがるな！」

銃声が鳴り響いた。

クリスターに向かって撃たれた弾は、その狙いを大きく外し、彼が追い詰められている壁の天井近くに小さな穴を穿った。

「フレイ……！」

拳銃を持つ手を、いつの間にか傍にきていた巨漢に捕らわれていたダミアンは、憎悪のこもった目で相手を睨み上げた。

「何しがる！ オレの邪魔をするな、その手を離せ！」

「おまえこそ、何をするつもりだったんだ？」

腹の底に響くような低い声で凄まれ、ダミアンはぐつと言葉に窮する。

「……見りゃ分かるじゃないか、こいつが逃げ出したから、捕まえよ

うとしていたんだよ」

フレイから手をもぎ離れたダミアンは、膨れっ面をして、そっぽを向いた。

仲間と一緒にこの手強い獲物を狩り、やっとのことで追い詰めたというのに、とどめを刺す直前で取り上げられてしまうなどと、憤懣やるかたない気分だ。

「ご苦労だったな、ダミアン。後のことは俺に任せろ」

ちっと舌打ちをするダミアンに釘を刺すよう、フレイは続けた。

「子供じみた小細工で、ジェームズを誤魔化せるなど思うな。彼の機嫌を損ねたくないなら、クリスターにはこれ以上構わんことだ。さあ、その物騒なものは早くしまうんだ、ダミアン」

恨み深い目をして黙り込むダミアンを尻目に、フレイは他の仲間達に合図をして、クリスターを取り囲ませた。

突然の脱走によって屋敷中を混乱させ、捕まえるまでに相当てこずらせたクリスターだが、ここに至って観念したのか、おとなしくフレイの仲間達に押さえ込まれた。

「ダニエルとアイザックは、おまえのおかげで、どうやら逃げ延びたようだぞ。満足か、クリスター？」

フレイが苦々しい声で告げるのに、その静まり返った琥珀色の瞳に明るい光が瞬いたが、クリスターは言葉にしては何も言わなかった。

フレイはつかつかとクリスターに近づいて、その首を大きな手で掴みしめた。

「くっ…」

このままくびり殺そうとするかのごとく、じわりと喉を締め付けていくフレイの手に、クリスターは苦しげに顔を歪める。

それを凝然と睨みつけながら、フレイは重々しい口調で言った。

「だが、おまえはもう二度と逃がさない。この脱走のことを知れば、いくらおまえに甘いジェームズでも、おまえをどう処分するべきか、きっと決心がつくだろう…」

フレイはクリスターを乱暴に突き飛ばした。

「そいつを地下室に引き立てろ」

そして、まだ未練がましげに立ち去ろうとしないダミアンに冷たい目を向けると、それ以上は何も言わず、自らもクリスターをもとの地下室に連行する者達の隊に加わった。

「畜生…もう少しで仕留められると思ったのに…悔しい…!」

クリスターがフレイ達に連れ去られるのをなす術もなく見送ったダミアンは、全ての力をなくしたようにふらふらと壁に近づき、そこに寄りかかるようにしてしゃがみこんだ。

「おい、ダミアン…」

彼自身の仲間、兄が健在だった頃から同じストリート・ギャングの一員として暴れまわっていた連中は、しよげ返っているダミアンを心配そうに取り囲こんでいる。

彼らの中でもダミアンは一番幼かったが、いつ爆発するか分からない狂気と仲間でさえも震え上がらせる残忍さ、独特の武器を扱ったの戦闘能力などから一目置かれ、自然とリーダーにおさまっていた。

それに、他の連中もダミアンと同様に、まだ子供と呼んでいいような年齢だったのだ。

遊びを無理矢理中断させられた欲求不満を抱えて、もやもやしていた少年達のもとに、その時、仲間の1人が慌てた様子でやってきて、ある報告をした。

「侵入者？」

ダミアンが胡乱そうに顔を上げた。

「業務用のゲートのセキュリティが異常を起こしたらしくて、担当の警備員がさっき確認にいったんだよ。そしたら、ゲートが破られていた上、不審な車両が屋敷の方向に向かった形跡があるって…」

ダミアンはじっと考え込みながら、低い声で呟いた。

「侵入者…誰かが、この屋敷に向かってくる…クリスターの仲間だな…？」

落胆していたダミアンの顔が、再び生き生きと輝きだした。仲間が見守る前で、彼は、猫のように素早く床から飛び起きた。

「この際、誰でもいいや。クリスターの身代わりに、そいつらを狩ってやる…！」

ダミアンが細い腕を振り上げ、歯を剥いて吠え立てると、興奮した仲間達も賛同の叫びをあげた。

「殺してやる…今度こそ…」

ダミアンの血に飢えた心は、たとえ別の獲物でも屠ることで血を見ないことには、どうにもおさまりそうになかった。

第6章最後の闘争（10）

母屋まで半分ほどの距離を進んだ所で、レイフは車をとめた。

ルームライトをつけて、地図を確認した後、トムと一緒に車外に出る。

ここからは、目立たないように、歩いていくつもりだった。

周囲を取り囲む森林の上には上弦の月がかかっていて、レイフ達を冷ややかに見下ろしている。

別に寒いわけでもないのにぶるりと身を震わせるトムを振り返って、レイフはもう一度確認した。

「トム、ここで待っていてくれてもいいんだぜ」

「馬鹿言うなよ」

2人はそれきり黙りこみ、歩き出した。

足下の道路はいつの間にか砂利道になっている。なるべく音を立てないよう静かに、しかし可能な限り急いで、彼らは歩いた。

トムは念のため懐中電灯を持ってきたが、ほとんど猫並みに夜目のきくレイフには、月の発する仄かな明かりだけでも充分に辺りを見渡せた。

砂利道を取り囲む木々や雑草の生い茂った林からは、時折そこに

住まう小動物達がたてる物音や鳴き声が聞こえてきてレイフを一瞬警戒させたが、それ以外は至って静かなもので、とても危険が潜んでいるようには感じられなかった。

（オレ達が忍び込んだことにはまだ気付かれていないのかな…？
強引にゲートを破ったりしたから、センサーが何かが反応して、向こうに伝わったんじゃないかとてっきり思ったが…この調子で何事もなく、母屋までたどり着けないかな）

そんな楽観的な考えが頭の中に浮かんた、次の瞬間、レイフは、少し上り坂になった道の彼方から近づいてくる何者かの足音に気付いて、立ち止まった。

（やっぱり、そんなに簡単にいく訳なかったか…1人じゃないな、5、6人くらいか―それに、犬も連れてやがる…）

レイフの耳は早くも敵の接近を正確に捕らえたが、トムはまだ事態が飲み込めていないらしく、怪訝そうな目を向けてきた。

「どうしたんだよ、レイフ？」

レイフはずっと目を細めた。

坂道の向こうに、今、小さな人影が現われた。

「見つかったしまったようだぜ、トム」

やがて、彼らもレイフ達の存在に気付いたようだ。警戒しながらも、こちらに近づいてくる足を速めた。

「トム、おまえはちよつと避難してろ」

先にトムを林の方に逃げ込ませ、レイフは唇を舌で湿しながら、ちよつと迷った。

（5人か：この人数なら、素手でやりあうなら勝てる自信はあるけれど、たぶん武器を持ってるだろうな。銃とかだったら、やばいしな、ううん…）

それでも考える余裕があったのは、相手がまだ銃器など構えておらず、どのみちこの距離と暗闇では拳銃など下手に撃っても当たらないだろうと踏んだからだ。

だから、彼らの中にいた小柄な少年が、いきなり前に進み出たかと思うと、妙なものを手にして構えたのには、意表を突かれた。

ふいに、坂の上からこちらに向かって吹き降ろしてくる風が強くなった。

（ああ、あれって、ブーメランじゃないのかな。ガキの頃、そう言えば遊んだことが―）

ぼんやりと思ったのは、少年が細い両腕をしならせるようにして、2本のブーメランを投じるまでの数秒のことだ。

まだまだ距離があると高を括っていた自分のもとにまっすぐに飛来してくるブーメランのたてる、空気を切り裂く音を聞いた瞬間、レイフはうなじの辺りの毛がちりちりと逆立つのを覚え、反射的に地面に身を伏していた。

両手で抱え込んだレイフの頭の上をブーメランは旋回しながら通り過ぎていった。

（な、何…？）

ひとまず危険を回避した時、人は反射的に安全を確認しようとするもので、レイフも一瞬頭を上げかけた。しかし、続けて襲った強烈な悪寒に、ほとんど本能的に頭を地面に押し付ける。

すると、再び戻ってきたブーメランがレイフの頭上の際どい所を、それぞれ、僅かな時間差をつけて、掠めていった。

あのまま身を起こしていたら、少なくともどちらか1つを、レイフはもろに体に受けていただろう。

（うっ…うう…）

どっと全身から冷たい汗が噴き出すのを覚えながら、レイフはこちらに向かって走ってくるジェームズの手勢と目の前に広がる暗い森を見比べた。

「くそうっ！」

あんな訳の分からないもので殺されてはたまらない。

レイフは、トムが先に隠れた林へ向かって、匍匐前進の格好で、一目散に逃げ出した。

「あはははっ！ 何あれ、あの格好、すっげえまぬけ！」

ほうほうの態で雑草と木々の中に逃げ込んだレイフを見ていたダミアンは、おなかを抱えて大爆笑した。

ダミアンは、道端に突き刺さっていた2本のブーメランを取り戻し、刃の状態を確かめてから、再び手に握り締める。

砂利道に沿って広がる林の中を、目を細めるようにして眺めみると、この辺りは特に木々の密集度が高く、雑草も生い茂っているせいもあって、逃げ込んだ連中の姿は目視できなかった。おまけにこの闇だ。

（ブーメランはもう使えない……ここは障害物が多すぎる。まさか、あのとっさの場面で、あいつがそこまで判断したわけじゃないだろうけれど――）

諦めて愛用のブーメランを背中のリュックサックの中にしまいこみ、今度は拳銃を構えるダミアンの傍に、仲間達が寄ってきた。

「行くのかよ？」

「こう暗けりゃ、あいつらを見つけるのも困難だし、下手に銃なんか使ったら味方にあたるぜ」

ダミアンは困ったように眉を寄せて、少し考え込んだ。

「あいつらはたったの2人だ。犬を使って、追い立ててやるんだ……いいから、行くぞ！」

とにかくこの獲物くらいは仕留めたいという一念が、結局ダミアンを動かした。

そうして彼らは、レイフ達を追って、暗い森の中に恐る恐る入り込んでいった。

（やっぱり追いかけてきやがったか…）

追っ手が使うライトが、木々の間で揺れている。

レイフはトムと一緒に息を殺して、その様子を眺めていた。

犬がいることを考慮して、一応風上にじりじりと移動してみたが、見つからないという保証はない。

（見つかるくらいなら、いっそ、こっちから打って出て、あいつら全員倒しちまうか。このまま屋敷に向かっても、あいつらに騒がてられて、更に大勢の援軍が加勢に来ても困るし）

そう決心したレイフは、不安そうなトムの肩を引き寄せ、その耳に低い声で囁いた。

うんうんと頷きながら聞いていたトムは、途中でぎょっと怯んだようにレイフを見返した。

レイフがトムに頼んだのは、囹となって追っ手の目を引き付けてくれということだった。彼らがトムにばかり気を取られて、必死になって後を追いかけている最中に、背後から密かに近づいていったレイフが1人ずつ倒していく。

フットボール・チームでレイフに次ぐ俊足を誇るトムを見込んでの作戦だったが、もちろん危険はある。

相手は大きな犬を二頭連れているし、視界がきかない中で無闇に発砲することはないだろうが、万が一ということもある。

「大丈夫だよ、レイフ、任せておけって」

健気らしく笑ってみせるトムにレイフが何か言おうと口を開きかけた、その時、犬の吼え声が近くでした。

レイフが顔を上げた瞬間、一頭の犬が高く生い茂った下生えの向こうから飛び掛ってきた。レイフは反射的にのけぞりながら、犬の胴を脚でなぎ払った。犬はギャンと声をあげて吹っ飛び、近くにあった木の幹に体を叩きつけられて、ぐったりとなった。

「あ、ごめん」

大好きなレイフは、思わず顔をしかめた。

「いたぞ、こっちだ!」

追っ手の持つライトが、レイフ達の頭の上を照らし出す。

「レイフ、行くぜ!」

腹を括ったトムが、すかさず茂みから飛び出した。

（トム…!）

一瞬すぐにでも出て行きたい衝動に駆られたが、じっと堪え、トムを発見した連中が慌てて追跡し始めるのを待ってから、レイフは

後を追いはじめた。

並みの視力しか持たず、小さな懐中電灯を頼りに進む彼らには、自分達が今追っている獲物が1人だけだということまで分らないだろう。まさか、もう1人がこうして自分達の後を素早く正確につけてきているなど、夢にも思わないだろう。

レイフは暗闇に強い。遙か頭上から差ししてくる弱々しい月明かりだけでも、その足取りは危なげなく、木々の向こうに揺れている懐中電灯の明かりを目標に、気配を殺して近づいていく。

トムを追跡するうちに、初めは固まっていた彼らも次第に離れ離れになっていき、そうしてはぐれた奴から1人ずつ、確実に、レイフは片付けていった。

トムを狩ることに夢中になっている少年達の背後や側面から、足音を殺して忍び寄り、声をあげる暇も与えず、飛び掛って、ほとんど一撃で殴り倒す。

初めは5人いた仲間達の数次第に減っていつていることに、彼らはいっ気付くだろうか。

既に3人を仕留めたレイフが、4人目を小さな小川の手前の少し開けた場所で捕まえた時には、少々手こずり、悲鳴をあげるのを許してしまった。それでも、がつんと頭に一発くれてやると相手はすぐに大人しくなった。

（でも、たぶん今の声で残りの奴は気がついただろうな：いや、待てよ、後1人だけなのか）

レイフは額にうかんだ汗をぬぐい、目標となる灯りを探した。しかし、この近くには見当たらない。

（遠くまで行っちまったのか、それとも今の悲鳴で異変に気付いて、灯りを消したのか―）

その時、小川の向こうの茂みの方から、小さな枝が踏みしだかれて折れるような音がした。

「誰だ？」

レイフが身構える前に、疲れきった様子のトムが現われた。

「よかった、無事だったのか、トム」

トムは肩で息をしながら細い小川を跳び越して、ほっとした笑顔で待ち受けるレイフの傍にやってきた。

「何とか、無事だよ…いつの間にか、追っ手はいなくなっていたけれど、全員やったのか、すごいな」

「いや、まだ1人残っているよ」

刹那、レイフの耳は、またあの空気を切り裂くぞっとするような音をとらえた。

「トム、伏せろ！」

レイフは、トムを突き飛ばして一緒に地面に倒れ付した。その上を飛んでいった小振りのブーメランが、彼らの後ろにあった木の幹

に深々と突き刺さった。

（げっ。単なる玩具じゃなくて、武器になるよう細工しているんだ。ああ、そう言えば、さっきアイザックが言ってたな、殺傷用のブーメランを使う危ない奴がいるって）

呆然となりながらも、レイフが地面から体を起こそうとすると、今度は草むらから黒い犬が飛び出してきた。先程の犬よりも一回り大きい、猟犬グレートデンド。

「レ、レイフ！」

動転した声をあげるトムが見守る前で、レイフは喉笛に喰らいつつこうとする犬の首を押さえながら、地面をごろごろと転がった。

「あははっ、そのまま、そいつを食い殺してしまえ！」

甲高い哄笑と共に森の中から姿を現したのは、髪も肌も真っ白な少年だった。人形のように綺麗な顔をしているが、前髪に入ったメッシュと唇の赤さが、禍々しい印象を放っていた。

「クリスターと瓜二つのその顔、噛み裂かれて、二目と見られないようになっちまいな！」

少年の爛々と輝く緑の瞳に宿る狂気に圧倒されて、トムはつい後ずさりしてしまう。

もつれ合うようにして地面で暴れていた1人と1頭は、やがて、力尽きたかのようにじっと動かなくなった。

「レ、レイフ」

トムが真っ青になり、ダミアンはにんまりと笑う。

「ああ、また犬を苛めちゃった…」

情けない声をあげて、レイフは身を起こした。その左手は、大きくこじ開けられた犬の口の中に深々と差し込まれている。

「殺しちゃいないぜ、こうして氣道をふさいで、失神させたのさ」

誰にともなく言い訳をして、そろそろと腕を引っこぬき、肌に残った牙の跡を指先でぬぐうと、レイフはおもむろに立ち上がった。

「そのクソガキ、オレのこのキュートな顔をどうするって？」

しばし呆気にとられていたダミアンは、レイフが中指を立てて凄んでみせるのに、くると背を向け逃げ出そうとした。

「おっと、待てよ」

しかし、レイフは逃がさなかった。ダミアンの首根っこを素早く掴んで、引っ張り上げた。

「は、離せ！」

レイフは、じたばた暴れるダミアンを苦もなく引きずって、大きな木の幹に押さえつけた。

「クリスターは屋敷のどこにいる？」

「そんなこと、オレが教えると思うのかい？」

狂暴なダミアンが歯を剥いて言い返すと、レイフは恐い顔をして、固めた拳を振り上げてみせた。

「言わねえと、さっきの犬みたいに、このゲンコを口の中に叩き込むぞ！」

ダミアンはさつと青ざめ、ウサギのようにぶるぶると震えだしたかと思うと、いきなり泣き叫びだした。

「ジェームズ、ジェームズ、助けて！」

何だか子供を虐待している気分になってきたレイフがつい力を緩めると、ダミアンは彼の手に思い切り噛み付いた。

「いてーっ！」

レイフは思わずダミアンから手を振りほどいた。

その隙に、ダミアンは身を翻し、暗い森の中へ逃げ込んでいった。

「あのガキ…！」

気色ばんだレイフは一瞬追いかけようとするが、ここであんな奴のために時間を費やすのも惜しいと思ってやめた。

（オレ達の接近は向こうにもばれている。あんな奴らが偵察に来たくらいなものな。当然屋敷の外だけじゃなくて中の警備も強化され

てるだろう。うまく侵入できたらいいが：そうだ、ウォルターがさつき言ってたような陽動作戦を仕掛けてくれたら、助かるんだけどな。勝手に飛び出してきちまったから、確認できなかった。まあ、助けがなけりゃないで、何とかするしかないさ」

しっかり歯型のついた手を痛そうにさすりながら、レイフは傍らのトムを振り返った。

「母屋に急ごう、トム：こうなったら一刻も早くクリスターを見つけて出して、助けないと」

再び地下室に連行されたクリスターは、既にそこに来ていたジェームズが、感慨深げに部屋の中をじっと眺め回しているのに出会った。

ジェームズはこちらに背を向けて部屋の中央に立ち、空になった鎖に目を留め少し首を傾げた。その下に目を落とし、気になるものを見つけたように歩み寄ると、床から何かを拾い上げた。

針金だ。クリスターが鍵を開けるのに使った。

「わざとこんな所に落としていくのが、いかにもカムフラージュのようにも思えるけれどね。：君が脱出する前に、ダミアンが君に会いにここに来たそうだね、クリスター？」

ジェームズは頭を巡らせて、クリスターの方を眺めやった。その顔には、いつもと変わらぬ柔和な笑みが湛えられている。

「でも、そんなことは、もうどうでもいい」

天使の顔をした悪魔は、滑るような足取りで、彼の手下達に拘束されているクリスターに近づき、その顔に手を伸ばした。

「血が滲んでいるよ…可哀想に、誰にやられた？」

気遣わしげに眉を寄せて、ジェームズはほっそりと長い指でクリスターの口元にこびりついた血をぬぐい、それを舐めた。

ジェームズの落ち着いた物腰には怒りを感じさせるものは少しも見当たらないが、それだけに一層ぞっとする深い瞋恚が感じられた。

「フレイ」

ジェームズの呼びかけに、忠実なフレイはすぐに動き、クリスターの腕を掴んで部屋の中に引っ立てた。

「あ、鎖でつなぐのはちょっと待って…このままで彼と話したい」

クリスターは、ジェームズの手が薄手のジャケットのポケットの中に差し込まれ、無意識にそこにある何かを探っているのに目を留めた。

あの懐中時計だろう。ジェームズの双子の妹メアリの骨を封じ込んだ、彼の宝物。

ジェームズは、あの時計に触れていると心が静まるのだと言っていた。彼にとって亡くしてしまった半身への思慕はかくも強いのかと、つい共感しそうになったこともあるクリスターだが、その愛する妹を手にかけたのは他ならぬジェームズ自身なのだと言った今は、また別の感慨を覚えてしまう。

（まるで平気な顔をして、僕の前でメアリの思い出を語ったジェームズ：自分が彼女を殺したのだという自覚は今でも全くないんだろうか：？　ワインスタインはジェームズの記憶喪失は治ったはずだと言っていたが：）

クリスターはワインスタインが語った話を思い起こし、吟味してみた。

（記憶というのは我々が思う以上にあいまいなもので、自分の望むように作り変えられたり捏造されたりする：ジェームズの場合、厳密に言う、彼の記憶喪失は治ったはずなんだ。だから、彼が嘘をついているのでなければ―ジェームズの意識のより深い部分で、彼の脳が、耐え難いショックを回避するために、問題の記憶にブロックをかけているのかもしれない。無意識に、そこに至る神経の経路を断っているのかもしれない）

一種の自己暗示をかけているのだろうか、その意見を聞いた時にクリスターは思ったものだ。だが、自分でかけた暗示などというものが、それほど強い効果を何年もの間持続させ得るだろうか。

（いずれにせよ、ジェームズは、メアリを手にかけた時の記憶に何らかの方法で封印をしている。さもなくば、いくらジェームズでも平気ではいられないだろう：かつてワインスタインの催眠療法で記

憶を取り戻したジェームズは、ショックのあまり錯乱した。妹殺しは、彼にそれほどのダメージを与えうる出来事だったんだ」

じっと思索を巡らせながら、クリスターは、ジェームズの神経質な指先が執拗な程にポケットの中を探っているのを観察続けた。

メアリの骨。死んだ妹とどうしても離れがたかったジェームズは、彼女の小指を切り落とし、片時も離さずに持ち歩いている。

「他の皆は、もう解散してもらっていいよ。ああ、3人ほどは残って、部屋の前で見張りとして立っていてくれ。手間をかけたね、ありがとう」

ジェームズの手下は、彼の命令に何も疑問も持たず、素直に部屋から出て行った。

フレイだけは何か言いたげにジェームズを見返したが、結局言われたとおり、クリスターを彼の正面に立たせた。そうして、何かあればすぐにでもクリスターに飛びかかれるよう、自分はその後ろに立った。

「本当に君は油断ならないね、クリスター。僕を驚かせたあの提案には、時間稼ぎの意味もあったんだね？ 首尾よくダニエル、そしてアイザックまで脱出させることが出来て、さぞ満足だろうね？」

ジェームズはやっとポケットから手を出し、軽く腕組みをしながら、クリスターの冷たい顔を見上げた。

「アイザックにあそこで遭遇できたことは僥倖と言うしかなかったけれどね―彼は彼で、自分の意思で君の呪縛を振り切り、ダニエル

を救出しようとしていたんだ」

平然と返すクリスターに、ジェームズもまた世間話でもしているかのような口調で言った。

「ああ、そうなんだ。彼もダニエルの酷い扱いには相当ショックを受けていたらしいからね：今度は、それを口実にした訳だ。別に驚かないよ、アイザックはもともと僕のものではなかったし、それに、裏切り者はどうせまた同じことを繰り返す」

クリスターは眉間に皺を寄せて、不愉快そうにジェームズを睨みつけた。

「でも、そうすると君は、ダニエルを救う計画は頭にあっても、アイザックのことまでは考慮に入れていなかったんだね？ この間僕に会いにここまで来た時も、アイザックの行方を僕に直接尋ねることはしなかった：君は、真実を知ることが恐かったんだ。アイザックは君を裏切ったのか、どうして裏切ったのか。敵としてのアイザックに相對することが嫌で、避けていたんだね。もし偶然が君達に味方しなければ、君は今でもアイザックと和解できないままだったろう：おや、どうしてそんな苦しそうな顔をするのかな、よかったじゃないか、大切な友人と仲直りできて――」

どうして、こんなにも的確に人の弱みを突けるのか――今更ながら、クリスターはジェームズを憎いと思った。

そんなクリスターの心の揺れを見透かすよう、ジェームズは目を細めた。

「君が、素直に喜べない理由を言い当ててみせようか、クリスター

？ 聡い君は、アイザックが何をしてしまったのか気付いているからだ。それは、彼が僕から離れられなかった理由でもある。そう、事故を装ってコリンとミシェルを殺しかけたのは、アイザックだよ。僕が無理矢理そうさせた？ そうかもしれないね。しかし、アイザック自身が望んだ復讐も兼ねていたんだよ……？」

クリスターはついに堪りかねて、ジェームズの話の鋭く遮った。

「そんな話は聞きたくない……！」

ジェームズはおやおやというように肩をすくめた。

「では、なぜアイザックが君を裏切ったのか、教えてあげるよ。ねえ、クリスター、アイザックと僕は一体いつからつながっていたんだと思う？」

クリスターがじっと押し黙っていることなどお構いなしに、やけに楽しげな調子でジェームズは続けた。

「あれは、以前僕が逮捕された時――つまり、僕と君の闘いが一度決着を見た直後だった。アイザックの方から、拘留されている僕に面会を求めてきたんだよ。あの事件の当事者の1人として、自分なりに記録をまとめたい、敵側の話も一度聞いておきたい――ジャーナリスト志望の彼らしい言い訳だったね」

クリスターは思わず目を瞬き、探るようにジェームズを見返した。

「ああ、やっぱり、これは君にとっても意外な話だったんだね。そんなに早い時期から、アイザックが僕と接触を持っていたなんて――」

ジェームズはふいに真顔になった。

「初めから君を裏切るつもりではなかったと思うよ。ただアイザックは知りたかったんだ――僕と君との間にあった、あの闘いの意味は何だったのか。もっと突き詰めると、君のことを知りたかったんだと思うよ、クリスター：アイザックは君が好きだったんだ。君に近づきたかった、信頼してもらいたかった、友人として心を開いて欲しかった。そこで、相談を持ちかけたのがよりによってこの僕だったというのが、何とも皮肉だけれどね」

クリスターは、動揺している心臓に向かって、落ち着けと念じずにはいられなかった。

「でも、せっかく頼りにしてもらったのだから、僕は誠実に彼の悩みに応えたよ。クリスターの心を手に入れようなんて無駄な努力だと教えてあげたんだ。なぜなら、クリスターは根本的に他人を必要とはしていないからだ。彼の世界は、自分とその片割れであるレイフだけで完結している。それ以外は、余分なものなんだよってね」

「ジェームズ：！」

ぐっと拳を固めるクリスターに、ジェームズは尚も容赦なく語り続けた。

「アイザックを絶望させたのは君だよ、クリスター：その結果、彼は道を大きく誤った。僕が導くままに、ついには取り返しのかない罪に手を染めてしまった。僕と手を切ったところで、もうもとは戻れないんだ。君には分かっている。だから、そんなにも深い罪の意識に苛まれているんだ」

クリスターは奥歯を噛み締めて、激情のまま怒鳴り返したくなる衝動を堪えていた。ここで感情的になっては相手の思う壺だと、必死に自分に言い聞かせていた。

「僕に言わせれば、中途半端に情を介在させるくらいなら、初めから距離を置いた付き合いに留めておけばよかったのさ。愛憎が絡むと人間は簡単に間違いを犯す。ダニエルについても同じ過ちを君は犯したね？」

ジェームズが、今度はクリスターの別の弱点を突こうとしてくる。クリスターは警戒したが、やはりジェームズの心理攻撃は巧みだった。

「どうして君がダニエルを恋人にしまったのか、初めは疑問だったんだけどー君、弾みで彼をレイプしてしまったんだね？ 君らしくもない馬鹿なことをしたものだ」

ジェームズは、ちらと冷たい一瞥を、石像と化したように身動きしないクリスターに投げかけた。

「ダニエルは5月頃にしばらく体調を崩して、授業を休んだことがあった。心配した寮長が医者と呼んだけれど彼は頑なに体を見せなかったそうだよ…でも、大勢が集団生活している場所だから、ちょっとした隙に他人に見られたり、それが噂として人の口の上ることは完全には阻めないんだよね」

困ったように眉根を寄せて、ジェームズは大げさな溜息をついた。

「ともかく、その後、君は償いのためにダニエルと付き合い始めた。だが、これも本当は口実だったよね？ 君は、レイフへの許されな

想いを断ち切るために、ダニエルを恋人にして、愛情を注ぐと努力した。嘘でも貫き通せばいつか本当になるかもしれないと思ったのかい？ そんなごまかしなど一番信じていないのは君だったくせに、とんだ偽善者だな。ダニエルは君の傍にいて、少しは幸せになれたのかい？ 君にただ騙されているだけの馬鹿な子だとは思えないけれど？」

瞬間、ダニエルの、いつもクリスターに対して遠慮がちで控えめな、どこか寂しそうにも見える笑顔が脳裏に蘇った。

「黙れ、僕は―あの子を大切に思っている…」

言葉に出せばまたジェームズに付け込む隙を作ってしまうと分かっていたが、クリスターはどうしても黙っていられなくなった。

「君は、ダニエルを大切に思っている」

ジェームズは鸚鵡返しに言った。

「ならばなぜダニエルをとめなかった？ なぜ、僕に近い、あんな危険な場所に―キャメロンのクリニックに彼を通わせ続けた？ やめさせることはいつでもできたはずだ。だが、君はそうしなかった。これがレイフなら、君は全く違った行動を取ったはずだ。ダニエルがこんなひどい目に合うことまで予想しなかったなんて言い訳は、君に限ってはできないよ。君はその可能性も充分考えた上で、愛情を餌にして、ダニエルを操り、利用したんだ」

「違う…！」

「違うないよ、クリスター。本当に愛していたのなら、どうして君

は今、そんな追い詰められた目をしているんだい？」

「僕は、あの子を――」

「利用したのさ、クリスター……その結果は、君もさっき目の当たりにしたよね。可哀想なダニエル……あんなに華奢で可愛かったのに、玩具されて、壊された。もともと不自由だった左脚は大丈夫かな、ダミアンは人の弱い部分を徹底的に痛めつけるのが大好きだからね」

慄いたように瞠目するクリスターの耳に唇を寄せ、ジェームズは悪意に満ちた声を吹き込んだ。

「そう、君のせいだよ。アイザックもダニエルも、君のせいで運命を狂わされた。君が……君が、君が――彼らの人生を滅茶苦茶にしたんだ……！」

ジェームズは、クリスターの強張った肩を愛しげにかき抱いて、くすくすと笑った。

「けれど、君のそんな人でなしのところが、僕はとっても好きだよ、クリスター。鏡に映った像のように、僕にそっくりだからね」

かっとなったクリスターは、ジェームズに激しく掴みかかった。

「この……！」

「あはは、君でもそんなふうには直情的な反応をすることがあるんだ！　よほど僕の言ったことが癪に障ったのかな。人は本当のことを言われて傷ついた時にこそ、攻撃に出るものだからね」

ジェームズはクリスターに振り回されながらも、おかしくてたまらないというように肩を揺らせて笑い続ける。

クリスターがついに拳を振り上げた時、低い唸り声と共にフレイが突っ込んできた。

彼は、強引に2人の間に入って引き離し、尚もジェームズに迫ろうとするクリスターに渾身の体当たりを食らわせる。

もともとフットボール・チームのラインマンあがりの力技に、クリスターは壁にしたたかに打ち付けられた。

衝撃にぐらつく頭を上げると、またしてもフレイの巨体が肩から突っ込んできて、さすがのクリスターも思わず苦鳴をあげた。

「この…」

クリスターは、フレイの太い腕に締め上げられながらもがくが、体格差がある相手にがちり捕らえこまれた状態は、明らかに彼に不利だった。

気がつけば、クリスターのつま先は僅かに床を離れ、フレイに持ち上げられる格好になっていた。格闘でも他人に後れを取ったことのないクリスターだけに、これには軽いショックを覚えた。

「いいざまだな、クリスター。おまえなど、その気になれば、俺はいつでも捻りつぶせるんだ」

憎い敵を力でねじ伏せることで溜め込んでいた怨みを晴らそうというのか、にやりと不敵に笑うフレイの顔を、クリスターは睨みつ

けた。

「あまり…調子に乗るな…」

次の瞬間、クリスターは己を締め上げる2本の腕の間に腕をねじ込み、捻った。とっさに離れたフレイの左腕を捕まえ、肘の裏側に腕を添えて、槌の原理でへし折りにかかる。

今度はフレイの口からうめき声が漏れ、顔が朱の色に染まった。

床に膝をつき、クリスターに締め上げられた喉が苦しいのか軽く咳き込んでいたジェームズは、この有様にちよつと顔をしかめた。

「フレイ、その辺りでやめておけ…クリスターを離すんだ」

ふらつきながら立ち上がったジェームズは、つい癖で、ジャケットのポケットの中に手を差し入れた。

その頬が僅かに震えた。いつもそこに入れてある懐中時計にあたるはずの指先は、空のポケットの内側を滑っただけだった。

「まさか…?」

数瞬の間呆然と固まっていたジェームズは、見開いた目をゆつくりと壁際で格闘している男達の方へ向けた。

「う…おっ…!」

フレイは、悲鳴と共にクリスターを突き飛ばすと、腕を押さえて、よろよろと後じさりした。

「この野郎…ふざけた真似を…」

だらりと垂らした左腕を庇い、脂汗を流しながら、壁に手をついて喘いでいるクリスターをねめつける。

「フレイ、いいから、そこまでにしろ！」

何かしら切迫したものを含んだジェームズの命令に、もう一度クリスターに襲いかかろうとしていたフレイは、はっとなって身を引いた。

「クリスター」

ぎこちない足取りでゆっくりと近づいてくるジェームズを見ながら、クリスターはフレイに傷めつけられた体をようよう起こした。

「さっき僕ともみ合っていた時に、すり取ったのか？」

用心深く尋ねるジェームズの低められた声には、ふつつつとたぎるような憤りと共に、恐れにも似た微かな震えがこもっていた。

人間らしい感情を超越したはずのジェームズにも、恐れるべきものはあったということだろうか。

そんなジェームズに冷徹な眼差しを向けながら、クリスターは悪びれもせずに言った。

「ああ、君の大切なものを拝借したよ」

クリスターはズボンのポケットから、先程盗み取ったばかりのものを取り出し、ジェームズの目の前に掲げた。

メアリの骨が封じ込まれた、金の懐中時計だ、

ジェームズの顔からあらゆる表情が消え、すうっと細くなった目は、クリスターが手にしている時計を食い入るように見ている。

「さっきは僕の弱みをあれこれ突きまわして、随分と悦に入ってたね、ジェームズ：」

クリスターは懐中時計を右手に包み込み、それを胸の前まで持ってきたところで、やにわに、ぐっと力を込めた。

彼の手の内で、小さな時計がみしという小さな悲鳴をあげた。

「クリスター…！」

たちまち、ジェームズの顔が紙のように白くなる。まるで自分の喉を締め上げられたかのように、彼は苦しげに喘いだ。

ジェームズの体からひしひしと伝わってくる慄きを味わいながら、クリスターは冷たい嘲笑に唇を歪めた。

「君の妹の形見をこのまま握りつぶしてやろうか…君が殺したメアリの骨を今ここで僕が粉々にしてやろうか…？」

底光りする目の中心にジェームズの青ざめた顔を映しこんだまま、クリスターは凄みの含んだ声で、そう恫喝した。

第6章最後の闘争（11）

初めは、何か確たる動機があつて、こんな真似をしようと思いついた訳ではない。

もしかしたら単純な意趣返しのもりだったのかもしれない。

しかし今、自分がしたことの意味も寄らぬ効果を目の当たりにしながら、クリスターは、心の中で引かかっていた疑問が解けかかっているような気がしていた。

「クリスター、そんなことをして何の意味がある？　僕を挑発しているのだとすれば、この場合、あまり得策とは言えないな」

ジェームズは不愉快そうに眉間に深い皺を刻んで、クリスターに手を伸ばした。

「さあ、その時計を返してくれ。僕にとっては、大切な妹の形見だ。それを奪って脅迫するなんて、いくらなんでも卑怯だし、子供じみているじゃないか、君らしくないよ」

自分の前に差し出された白い手。その指先は微かに震えている。内心の動揺のせいかな、それとも彼の体を蝕む病のせいだろうか。

「大切な妹、か…自分の手で殺しておきながら、よくも、その形見を肌身離さず傍に置けるな」

もう一度、クリスターはジェームズを揺さぶってみた。彼が、その忌まわしい記憶に今でも封印をしたままなのか、試してみた。

「何を言っている…?」

ジェームズは怪訝そうに聞き返した。その表情を見る限り、彼は本当に何も覚えていないようだ。嫌なことは忘れてしまうよう、自分にかけての暗示はまだ有効らしい。

だが、その時、幽かな不安と惑いが、凪いだ水面をかき乱す微細な泡沫のように、ジェームズの仮面めいた顔に浮かびあがってくるのをクリスターは認めた。

ふいに、ジェームズは慄いたように目を見開いた。恐怖のあまり凝固した眼差しは、今、目の前に立つクリスターではない、別の何かに向けられていた。

「ジェームズ?」

クリスターの呼びかけに、ジェームズはぱちりと瞬きをした。まるで白昼夢でも見ていたかのような戸惑い顔をしていたが、一応の平静さが戻っていた。

だがそれは、いつもと違って、ひどく脆く、心もとなげだ。

ジェームズの手は、何かを探すかのようにジャケットの上を空しく滑り、ぐっと握り締められた。

(いくら大切にしていたからって時計を取られたくらいで、こんなに不安定になるなんてジェームズらしくない。だが、とにかく、彼は今すぐこれが必要としているようだ。もし、どうしても取り戻すことができないとなると…一体どうなる…?)

クリスターは、己が手の中で、ちっぽけな時計が熱を持ち、脈打つように感じられた。ジェームズの半身の欠片がそこにある。

おぼろげなものだった、ある可能性が、クリスターの頭の中で確かな形を持つてくる。

（もしこれが、ジェームズにとって、ただの形見以上の意味があるものだしたら―）

いきなり、ジェームズは苛立たしげに金色の頭を振りたてた。

「いい加減にしてくれ、クリスター、それを僕に返すんだ。僕がこうして紳士的に頼んでいるうちに素直に従った方が、君のためだよ？」

冷静沈着を装った物腰で辛抱強くクリスターに言い聞かせるが、瞬きも忘れたように大きく見開かれた藍色の瞳には、暴発の予兆めいた、物騒な赤い火花が散っていた。

「僕は、この間、ドクター・ワインスタインを訪ねたんだ」

クリスターは我が身に迫りつつある危険を察知しながらも、あえて戦端を開いた。

「彼のことは覚えているだろう…？ 子供の頃の君とメアリをキャメロンと共に診ていた、精神科医だよ。メアリが死んだ時、君は彼の治療を受けたそうだね？」

ワインスタインが存命であることを、もしかしたらジェームズは

今でも知らないのかもしれない。そう思いながらクリスターは手持ちのカードの1枚を切ったのだが、これに対しては、ジェームズは眉一筋動かさず、その内心も読めなかった。

「メアリを突然喪った君は、ショックのあまり、しばらく失語状態に陥った。妹の死の前後の記憶も失った。それをワインスタインが催眠療法を使って治療した。その結果、君は言葉を取り戻した。しかし――」

クリスターは一瞬躊躇した。錯乱したジェームズに襲い掛かられたという、ワインスタインの告白が脳裏を掠めたのだ。その顔にいまに残っていた傷跡は、ジェームズにつけられたものだった。

「メアリがどうして死んだのか、今の君は覚えているのか、ジェームズ？　ワインスタインは、君の記憶喪失は治療によって治ったはずだと言っていた。そう、少なくとも一度は思い出したんだ。なのに君は、耐えられなくて、メアリの死の真相に自ら再び封印してしまった」

ジェームズに懇々と語って聞かせながら、クリスターは頭脳をフル回転させて、彼の弱みとなりうる、最後の秘密を暴き出そうとしていた。

ジェームズは背中中で手を組んだ姿勢で立ち、クリスターが言うことにじっと耳を傾けている。顎を深く引いて、クリスターの上で眼差しを凍りつかせたまま微動だにしない、彼の心の中では今何が起こっているのだろう。

ジェームズと対峙するクリスターの背は、いつの間にか冷たい汗でびっしょり塗れていた。

そのうち、部屋の扉がそろそろと開いて、外で見張りとして立っていた連中が不安そうに顔を覗かせた。先程から中が騒がしいものだから、気になったのだろう。

「ねえ、君達、銃を持っていたら、僕に貸してもらえないかな？」

その見張り達に向かって、ジェームズは穏やかに呼びかけた。視線はずっとクリスターに固定したままだ。

若者達は泡を食ったようだが、その内の1人がびくびくしながら中に入ってきて、ジェームズに小型の拳銃を手渡した。

「それから、ロバートを探して、ここに例のものを持ってきてくれと伝えて欲しい」

「例のもの？」

愚鈍そうな若者が問い返すのに、ジェームズはちらりと冷たい目を向けた。

「そう言えば、ロバートには分かるよ」

ジェームズの微笑を間近で直視した若者は、見てはならないものを見たかのように震え上がった。そして、この場所から逃げるように出ていった。

「さて、下らない話はそろそろおしまいにしよう、クリスター」

ジェームズは、先程の若者から借りた銃を迷いのない動きでクリ

スターに向けた。

「ジェームズ：！」

動揺の声を発したのは、傷めた左腕を押さえながら、傍らで固唾を呑んでことの成り行きを見守っていたフレイだ。

「僕が自分を撃つはずがないと君は思っている。僕も、できれば、そんなことはしたくない：君を殺すことは僕の究極の望みとは異なるからね。でも、今となっては：そんな終わらせ方になったところで、この際仕方がないのかなとも思うよ」

これは単なる脅しか、それとも本気だろうか。

クリスターの心臓を正確に狙う銃口。その向こうにある、黒々とした深淵を宿す双眸―人食いのホオジロザメならばこんな目をしていそうだなと思いつながら、クリスターは一際激しくなった胸の鼓動を感じていた。

「さあ、最後にもう一度言うよ、その時計を返してくれ」

クリスターを襲った、その声に屈したいという誘惑はあまりにも大きかった。しかし、かろうじてクリスターは踏みとどまった。

「使い慣れない銃で脅してまで、僕の口を塞ぎたいのかい、ジェームズ？」

乾いた唇を舌で湿すと、用心深く身構えながら、クリスターはもう一度囁きかけた。危険な賭けだが、せっかく掴みかけた、ジェームズの弱点から手を引く気にはなれなかった。

「君は、メアリを殺した」

銃を持つ、ジェームズの手が震えた。

クリスターの投じた、たった一言が、その真実が深い衝撃となつて彼を揺さぶるのが分かる。

一部の隙もなく作りこまれたジェームズの顔に、小さなひびが走った。動揺を押さえ込もうと彼も努力しているのだろうが、今度はうまくいかないようだ。

クリスターに突きつけられた銃口は、次第に下がっていく。

「君はメアリを深く愛していた。でも、自分のものでない彼女なら、いらない。自分ではない他の誰かと彼女と一緒に生きていくのを見ることには、とても耐えられない。だから――」

ジェームズは震える手を上げて、頭を押さこんだ。激しい痛みでも覚えているかのように、その顔は苦しげにゆがみ、薄っすらと汗ばんできている。

「クリスター、黙れ……!」

蘇りつつある悪夢を必死になって消し去ろうとするかのごとく、ジェームズは固めた拳を何度も頭に叩きつけた。

「黙れ、黙れ!」

ジェームズの取り乱しように、忠実なフレイは慌ててその傍にて

近寄ったものの、どうしていいか分からぬようにおろおろするばかりだ。

クリスターは構わず、容赦のない口調で、ジェームズを断罪し続けた。冷静な計算に基づいてばかりではなかった。彼自身も随分と感情的になっていた。とても他人事とは思えなかったからだろう。

「殺したんだ。その手で、君の半身を、もう1人の自分を葬った……それを忘れて、あまつさえ自由になったと嘯いて、自分1人がのうと生き長らえるなんて――メアリは決して許すものか!」

ジェームズは鞭を振り下ろされたかのように、びくっと肩を震わせ、黙り込んだ。

しばし頭を抱えたまま凍りついたように身動きしなかったが、ふいに、全くの空虚になった顔をクリスターの方に向けた。

クリスターは息を飲んだ。ジェームズではない、別の誰かの顔をそこに垣間見たような気がした。

「どうして、こんなことをするの、兄さん……?」

色を失った唇が微かに動き、そこから、まるで少女のような細かい声が溢れ出した。

「どうして、どうして……どうして――!」

ジェームズの見開かれた目から、突然、一筋の涙がこぼれた。たちまち堰を切ったように溢れ出し、涙は滂沱の滝となった。

がくがくと揺れる体に腕を巻きつけ、咽ぶように泣き出すジェームズを前に、クリスターは呆然と立ち尽くしていた。

（まさか…ジェームズ・ブラックが泣いている？ 心を持たないはずの怪物が泣けるのか？）

クリスターは、自分が今見ているものが全く信じられなかったが、頭の片隅では冷静な分析を続けていた。

（メアリの死の真相を思い出したから…いや、これはむしろ、死の瞬間のメアリの感情と共鳴を起こした結果なのか？）

双子の妹のメアリを通じてのみ、ジェームズは人間らしい感情を実感することができた。だから、妹の死と共に、ジェームズの心は完全に閉ざされ、その感情も枯れ果ててしまったように見えた。

それでは、今ジェームズの身に起こっていることは何だ？ 胸の底から迸り出た圧倒的な感情に振り回され、ずたずたに引き裂かれようとしている。

（記憶と一緒に、ジェームズはなくした感情を取り戻そうとしている…それが彼自身のものなのか、それとも死んだ妹が残っていたものなのか区別することは容易ではないし、彼らにとって、たぶん意味のないことなんだ）

鏡のこちら側と向こう側。いつでも同じように動いて、考える、2人でひとつの生き物だからー。

「クリスター！」

ジェームズの反応にすっかり気を取られていたクリスターの隙を突いて、フレイがまた襲い掛かってきた。

フレイは、クリスターの手からジェームズの時計を奪い取ろうとする。そうはさせじと、クリスターは抵抗する。

フレイには、ジェームズのこの突然の変貌振りの理由まで分かっていなかったかもしれない。ただ感覚的に、ジェームズにこの時計を返さなければ、更に何かとんでもないことが起こりかねないと悟ったようだ。

だが、2人が格闘しているうちに、ちょっとした弾みで、金色の懐中時計は床に転がり落ちてしまった。

必死になって取っ組み合いをしている彼らは、そのことに気がつかなかった。

振り下ろされる拳を頭の上でブロックしたクリスターが、フレイの腹に膝蹴りを見舞ってやると、彼は身を2つに折って呻いた。

更にもう一発、頭を狙ったクリスターの拳を、今度はフレイが捕らえこむ。

万力のような力でぎりぎり締め付けられる痛みにも、クリスターは顔を歪めた。

「パワーでは俺の方が上だな、クリスター」

フレイはがっちりとした腕にクリスターを囲みこんで、圧殺しにかかった。またしても、クリスターには不利な接近戦だ。何とか隙

を見て、身をもぎ離し、自由になったところで反撃したいのだが、相手もクリスターの得意な戦法は心得ているらしく、チャンスを与えてくれない。

「降参しろ、クリスター、そうしてジェームズに許しを請え…！
貴様のせいで、ジェームズはおかしくなったんだ」

フレイが呪詛を含んだ言葉をクリスターに投げかけていた時、ようやく感情の噴出が収まったジェームズは、疲れきった体を立ち直らせようとしていた。

「あ…」

ジェームズは、揉み合っている2人の傍に、大切な金の懐中時計が落ちていることに気がついた。

あれを取り戻さなければという強い衝動に突き動かされて、ジェームズはふらつく足で近づこうとする。

「メアリ、メアリ：僕から離れていくなんて許さない…おまえは僕で、僕はおまえ―独りで生きていくことなんてできやしないんだ」

ぶつぶつと夢にうなされたような口調で呟きながら、ジェームズは床に跪き、時計に手を伸ばした。

（悪夢が、すぐ後ろにまで迫ってきて、僕を捕まえようとしているのが分かる。捕まりたくはない。ほんの断片が戻ってきただけでも、僕はこれほどの打撃を受けた。これ以上の痛みには耐えられない）

あの仄暗い水底に、無数の泡に包まれて沈んでいる、忌まわしい

何かが急速に浮かび上がってくるのが感じられた。

（ああ、そうだ、僕はあれが何なのか知っていた。けれど、無理矢理忘れたんだ。記憶の一番深い場所に封じこめて、うっかり取り出してしまふことがないように、用心深く鍵をかけた）

ジェームズは自由に動くこともままならない体を叱咤して、時計を掴もうと試みる。

（鍵はあそこにある：あれさえ手に入れば、もう一度閉じ込めることができる、忘れることができる。今までだって、何度も危ない時はあったけれど、あの時計に触れ、あの中にあるメアリの骨のたてる音に耳を傾けていれば、いつの間にか僕を脅かす影は去った。今でも遅くない、あれを取り戻しさえすれば、この混乱も収まって、僕はまた楽になれる）

そう言い聞かせることで、ジェームズは自分に信じ込ませる。強く、深く、暗示のように、呪いのように。

（あんなこと、忘れてしまわなければ、僕は1人でとても生きていけなかった）

メアリは死んだ。だが、どうやって死んだのか、誰のせいで死んだのか？

怖気を奮って、ジェームズは思わず肩を震わせる。

考えないようにしようとすれば、余計に考えてしまう。こんな厄介な記憶を、我ながら、よくも今まで遠ざけることに成功してきたものだ。

「ジェームズ、やめて…わたしを殺さないで、兄さん…」

勝手に動いてメアリの言葉をつむぐ口を押さえ、ジェームズは涙で霞む目で、それをひたすら追い続ける。

一方、争い続けている2人には、今、目の前の敵しか見えていない。

さすがに体力が続かなくなったクリスターの息は上がり、足元が僅かにふらつきだした。

それを見逃さず、フレイはその腹に重いパンチを打ち込んだ。

「うっ…ぐ…」

腹部を押さえてよろよろと後ろに下がるクリスターを、勝ち誇った顔をしたフレイが追い詰めていく。

その足が、床に落ちたままの、ジェームズがもう少しの所で触れようとしていた、金の懐中時計の上にかかった。

「あっ…」

ジェームズの喉が、恐怖に駆られたように、ひくりと鳴った。

ぱりん。

彼の目の前で、メアリの骨を封じ込んだ小さな時計は踏み潰された。内部にはめ込まれたガラスが割れる脆い音が、そこに隠されて

いた骨の碎ける様を連想させた。

瞬間、ジェームズは妹の悲鳴を聞いた。もはや避けることはできなかった。

ジェームズが水の中に沈めて殺したメアリの断末魔の声が、彼の心臓に深く突き刺さり、切り裂いた。

「あ…あああっ…！」

ジェームズは床にもんどりうって倒れ伏し、我が身をかき抱いたまま、振り絞るような絶叫をあげ出した。

クリスターの腕を捻り上げていたフレイが、はっとなって、そちらに目を向ける。

「ジェームズ?!」

クリスターもまた、一体何が起こったのかと当惑しながら、この世の終わりのように叫び続けるジェームズ・ブラックを眺めた。

フレイは一転、クリスターの体を床に投げ出すと、錯乱するジェームズに駆け寄った。

「ジェームズ、しっかりしろ、ジェームズ！」

クリスターは視線を動かして、床に転がっている懐中時計の残骸を見つけた。傷ましげに顔をしかめ、もう一度ジェームズを見やった。

（ワインスタインの催眠療法で記憶を取り戻した時も、ジェームズはこんなふうになったのだろうか？　錯乱と昏倒を繰り返し、このままでは精神崩壊をきたすのではないかと、ドクターが恐れるほどだったという―）

今から振り返れば、おそらく、妹の形見であるあの時計が、ジェームズが自分でかけた暗示なり催眠なりの条件付けに必要なキー・アイテムだったのだろう。

それが壊れてしまったことで、ジェームズの術は解けた。本来ならば、とうに克服していなければならぬトラウマは、なまじそのままの形で凍結されていたがために、蘇った今、事件当時と同じほどの打撃をジェームズの心に与えている。

少しばかりしんみりと考え込んでしまったクリスターは、そんな自分を叱りつけた。

（いや、同情などするな、こいつには相応の報いだ）

クリスターは痛む体を引きずるように歩いて、床から時計を拾い上げると、頭を抱えて呻いているジェームズの目の前に差し出した。

「君の心を守る鍵は壊れてしまったな、ジェームズ：今、どんな気分だ？」

ジェームズはクリスターの手の上の時計を食い入るように見、それからクリスターを見上げた。これがあのJ・Bかと驚くほどの無防備な顔をしていた。

何とも苦い微笑が、ジェームズの口元に浮かんだ。

「ああ、痛いよ、とても…」

双眸から溢れた涙が、傷つき疲れきった白い顔を塗らす。

「思い出したよ…泣いて助けてくれと懇願していたのに、僕はあの子を許さなかった…裏切られたと思ったから、いや、むしろあの子に置き去りにされるのが恐かったんだ。だから、殺した…ひよっとしたら一緒に死ぬると思ったのかな。僕はあの子で、あの子は僕—メアリだけが死んで僕は生き残るなんて、考えられなかった」

クリスターの手からもう動かない時計を受け取り、ジェームズはそっと胸に押し当てた。

「ごめんよ、メアリ、僕はひどいことをしたね…でも、ずっとおまえを愛していた」

まともに見ていられなくなったクリスターは、哀しげな独白を続けるジェームズから顔を背けた。

「おまえをなくした後の空虚を埋めようと僕がこれまでしてきたことは、ほとんど無駄な努力だったけれど、最後の1つだけ、どうしてもやり遂げておきたいことがある。それが終われば、僕にも思い残すことはない…今後こそ、おまえに会いに行けるよ」

そう呟きながら、ジェームズはすっと顔を動かし、こちらを魂を飛ばしたように呆然と立ち尽くしていたフレイの方を向いた。

何か問いたげなフレイにジェームズは目配せし、手で合図を送った。

すぐにフレイは顔を引き締め、深く頷き返す。

「ジェームズ？」

不穏な気配を察したクリスターが身構えるより先に、体当たりをしてきたフレイによって、彼は床に叩きつけられた。

更に、フレイの足が情け容赦なくクリスターの体を蹴った。もう手加減など一切なかった。

「ジェームズ…！」

急所を庇うのが精一杯のクリスターが叫ぶ。

ジェームズはすっと立ち上がった。まるで、クリスターの感じる痛み、苦しさを全て味わいつくそうとするかのごとく熱心な眼差しを、その暴力的な光景に注いでいた。

その時、部屋の扉を遠慮がちにノックする音がした。この凄まじい修羅場にはやけに場違いに響いたが、フレイの一方的な暴力に晒されているクリスターには、注意を向ける余裕はない。

「ジェームズ様？」

開いた扉から躊躇いがちに顔を覗かせたのは、執事のロバートだった。

ジェームズは嬉しそうにそちらに近づいて、穏やかな口ぶりで礼など言いながら、忠実な使用人から何かを受け取った。

頭をやられたのだろう、クリスターの意識は一瞬途切れた。

ロバートに持ってきてもらった蓋つきのトレイを手にも、ジェームズはクリスターのもとに戻っていった。

フレイは、ぐったりと床にのびて動かなくなったクリスターの髪を掴んで、顔を上げさせた。唇から赤い血の筋が伝っていく。

クリスターの前に跪いたジェームズは、その頬に手を添えて、愛しげに囁きかけた。

「汝の敵を愛せ―君がどんなに僕を憎もうと僕は君を愛するよ、クリスター―」

ジェームズはクリスターの傷ついた唇に己の唇を重ね、抵抗をなくした口腔に舌を差し入れると、そこに残る血を味わうように探った。

「君の血は甘い…」

陶然と微笑んで、ジェームズは床に置いたトレイの蓋を開け、そこから注射器と薬品の入ったアンプルを取り出した。

クリスターの腕を引き寄せて裏返し、ジェームズは、素人にしてはなかなかの手つきで、注射器の針を綺麗に浮いた血管に沈めた。

ちくりとした感触に、クリスターは瞼を震わせた。

「あ、ごめんよ、痛かったかい？」

クリスターが目を開けると、自分の腕から注射器の針が抜き取れるのが見えた。

「何を…した…？」

慄然となりながら問いかけるクリスターの頭を、ジェームズは宥めるように撫でた。

「本当はこんなものを君に使うのはぎりぎりまでよそうと思っただけけれど、残念ながら僕にも余裕がなくてね」

すまなげに顔をしかめるジェームズの腕を、クリスターは強く握んだ。嫌な予感などという生易しいものではない、確信だ。

「最強の洗脳薬―そう言えば、君には大体どんなものか察しがつくかな…？ 君のために、懇意にしているマフィアからわざわざ譲ってもらったんだよ、クリスター」

「ジェームズ…！」

「これを与えてバッドトリップをさせると、どんなに意志の強い人間でも子供のように素直になってしまっただってね」

悪名高い幻覚剤の名前が思い出され、クリスターは背筋を凍りつかせた。

とっさに、彼はジェームズに掴みかかろうとしたが、すぐに手に力が入らなくなり、ずるずると服の上を滑るように落としてしまう。

「大丈夫、恐がらないで、君に地獄を見せるようなひどいことはないよ。もっとも、何度か実験はしたけれど、僕にも完璧にやれる自信があるわけじゃない。万が一君が悪夢に襲われて、心を壊されてしまったら―その時は、僕がばらばらに砕け散った君の自我を拾い集めて、新しい君を再構築してあげよう。僕の大切な相棒としてね」

慈しみに溢れた天使のように、ジェームズは笑う。その輪郭が光を放ってぼやけて見えてきたのは、早くも体に回ってきた薬のせいだろうか。

激しい眩暈に襲われながらも、クリスターは、残った力を振り絞ってジェームズを突き飛ばした。

「わっ」

ジェームズは、後ろざまに倒れ掛かった所をフレイに支えられた。威嚇するように自分を睨みつけているクリスターをつくづくと見返しながら、軽く肩をすくめた。

「こんなことをしても…無意味だ、ジェームズ…僕を君の思い通りにすることなんかできない…」

「そうだね、時間が絶対的に足りないことは認めるよ。でも、無意味かどうかは僕が決めることだ」

ジェームズはフレイの腕から離れると、自力で身を起こすことも出来ずにもがいているクリスターに向かって、じわりじわりと這うように迫っていった。

「こうやって君に近づき、君の更に奥深い所に入り込んで、そこにある柔らかな部分に直接触られる：この一秒一秒が僕にとっては至福の時間だ。これまでの無味乾燥な人生を耐えてきたかいがあったと思えるほどにね」

クリスターはがちがちと鳴りそうになる歯を食いしばり、体を引きずるようにしてジェームズから逃げる。それを、やけに楽しげなジェームズが追いかける。

悪夢のようだった。

「ほら、捕まえた」

ジェームズは、壁に行き着いたクリスターの顔に両手を添え、ぐいと身を乗り出して、その目を覗き込んだ。

喉から出かかった叫びを、クリスターはぐっと飲み込む。

「僕を見て、僕の目を見て、クリスター、そこに何かがあるのか確かめて：！」

ジェームズの大きく見開かれた藍色の瞳がすぐそこにある。ほとんど光の差さない底知れぬ井戸のようだ。

その真闇の中になす術もなく落ちていきそうな錯覚に、クリスターは見舞われた。

「何が見える？ 君にとって馴染み深いものがあるんじゃないか？」

ジェームズの熱心な囁きに呆然と耳を傾けながら、クリスターは

瞬きもできず、眼前に広がる深淵を見つめ続けた。

淵の底には怪物が潜んでいる。だから、長く見つめ続けてはいけない。気がついた時、自分自身もまた相手と同じ怪物になってしまっていることがないように――。

（僕は君、君は僕――）

誰かが、唄うように囁きかけている。

そうして、クリスターはジェームズの内なる深淵に潜む者の正体を認めた。

（僕……？）

そう、他ならぬクリスター自身がこちらをじっと見返していた。

ひどく酷薄で、情け容赦のない顔をした、我ながらぞっとするほど邪悪な者。ジェームズに負けず劣らずの怪物がそこにいた。

（ああ、君の目に宿る僕はこんなにも恐ろしい……そして、それは、僕が見る君の姿にそっくりなんだ。まるで、鏡に向き合っているかのように――）

認めざるを得ない。確かに、命がけのゲームにジェームズを引き込んだ時、クリスターは半ば本気で彼を殺してもいいと思っていた。

「君は僕で、僕は君――ほら、僕達はこんなにもよく似ている……」

ジェームズの瞳を映し出す、クリスターの瞳がゆらゆらと揺れだ

した。

葉は確実に、クリスターの精神に効果を及ぼしている。彼の視界はあり得ない形に歪み、見えるはずのないものが見え、何よりも心の中の恐怖が具現化したものに支配されていた。

「僕の愛しい半身」

クリスターにそっくりな顔をした男―しかし、レイフでは決してありえない―底知れぬ悪意を感じさせる笑みを湛えた、その男に抱擁された瞬間、言語に絶する恐怖の前に心がついに折れたかのように、クリスターは完全に意識を手放した。

束の間とは言え、逃避が叶っただけ、クリスターにとって幸いだっただろうか。

だが、そのことによって、彼の全てを貪欲に取り込もうとする怪物の手を退けられたわけではなかった。

第6章最後の闘争（12）

ダミアン達を撃退した後も、レイフは何の障害もなくジェームズの屋敷までたどり着くというわけにはいかなかった。

侵入者が屋敷に向かったという知らせは警備員達にも伝わったのだろう、広い敷地内に分散していた彼らは徐々に戻ってき、母屋を中心に守りを固めつつある。

先に気がつけばなるべく避けるようにして、迂回しながら屋敷に接近していったのだが、一度はそうした連中に見つかってしまい、危うく銃を向けられそうになったこともあった。

幸い、相手は2人と少人数で、本当にたまたま鉢合わせしてしまった分、向こうにも隙があり、素早く反応したレイフが発砲される前に打ち倒したが、いくら腕っ節が強いといっても素人の高校生にとってはなかなかショックが大きかったことは確かだ。

（マジで、ちびりそうになったぜ）

冷や汗をいっぱいかいたレイフは、その後ろにぴたりくつついたトムと一緒に、今、屋敷の裏手に広がる植え込みの陰に潜んでいた。

建物の付近には、ゲート前で見かけた物騒な雰囲気の子達がいち、周囲に鋭い目を向けている。

彼らがいなくなることには、母屋に接近することなど不可能な状態だ。

（もし見つかったら、あいつら撃ってくるかな…？ マファイなんだから、その点抵抗ないんだろうな。ああ、素手での勝負なら負けない自信あるんだけど―）

他に進入できそうな経路はないかと、建物の周囲をぐるりと回って調べてみたが、どこも同じようなものだった。

（だからって、ウォルターの言ったように無理だから引き返すなんてできない―クリスターがあの中にいる、あいつの身の何か起こりそうだって、とてもヤバイ感じは消えない…）

先程から心臓の鼓動がうるさいほどなのは、敵の近くにいる緊張感のせいばかりではないだろう。

（こんなったら一か八か、あいつらの注意を逸らして、一気に襲い掛かるか…でも、どうやって？ またトムに囚になってもらうなんて、危険すぎて頼めない）

レイフが煩悶していた、その時、屋敷の正面の方で騒ぎが起きた。

警備員達の怒号や仰天したような叫びが聞こえてくるのに、レイフは胡乱そうに顔を上げて、建物の上の辺りに目をやる。

唸るような車のエンジン音が近づいてきたと思ったら、ぱらぱらと乾いた銃声が幾つかあがり、続いてずしんというような鈍い衝撃音が響き渡った。

（一体、何が起こっているんだ？ まさかと思うけれど―）

用心深くレイフが様子を窺っていると、建物の扉が開いた。そこから顔を覗かせた男に、裏庭で張り込んでいた連中が訝しげに問いかける。

「おい、表の方のあれは、何の騒ぎなんだ？」

「正体不明の暴走車が中央の前廊付近に突っ込んできたらしい……ちよっと火の手があがっているが、今消火に当たっているから、たぶんすぐに消し止められる……」

扉の所に立っている男が皆まで言い終えるより先に、先程の衝撃音など比べ物にならない爆発音があがり、建物全体が揺さぶられた。

思わずあっと叫んだレイフの顔が、建物の向こう側に上った巨大な火柱によってオレンジ色に照らし出される。

「な、何事が起こったんだっ?！」

さしものマフィア達も想定外の大掛かりな攻撃に浮き足立った。

「表の様子を見に行こう」

「おい、早く火を消し止めないと大変なことになるぞ！」

自分達の受け持ち場所を守ることも、この大事の前に忘れ去り、警備員達は慌てふためいて建物の表側へと急ぎ向かった。先程扉を開けて出てきた男も一緒だった。

彼らの姿が見えなくなったのを確かめて、レイフは植え込みから

飛び出した。

（あれって、もしかしたらウォルターがやったんだろうか…いや、なんぼなんでも常識のある大人が爆発物を使うようなことはしないよな…？）

若干の疑いと不安に首を傾げつつ、夜空に高く上っていく黒煙と火の粉を見上げ、レイフは胸に溜めていた息を吐いた。

「トム、大丈夫か？」

トムも、少々青い顔をしながらも、植え込みから出てきて、レイフの傍に立った。

2人は、警戒しながら素早く芝生の上を走りすぎ、先程男が出てきたドアに取り付く。

「おお、ラッキー」

思わず、レイフははしゃいだ声をあげてしまった。

男達はよほど動転していたのだろう、ドアに鍵はかけられていなかったのだ。

レイフとトムは、無言で視線をかわしあうと、覚悟を新たにしてい敵の本拠地に飛び込んでいった。

「それで、その時父さんがあんまり恐い顔をしてレイフを叱るものだから、僕は本気で父さんのことを憎いと思ったんだ。可哀想なレイフはすっかり混乱して涙ぐんでいた：僕と同じ子供部屋にいたいって言っただけなのに、どうして駄目なのかも教えてもらえず、頭ごなしに否定されてさ」

クリスターはすっかりリラックスして、先程からずっと饒舌にしゃべり続けている。

壁に背中をもたせかけるようにして床に座り込んで、心許せる親友のようにジェームズ・ブラックと肩を寄せ合い、楽しげに語り合っている。

「君は、その時どう思ったんだい？ やっぱり弟と共有できる部屋を手放すのは嫌だった？」

クリスターの膝の上に置かれた手の上にジェームズが手を重ね、優しくさすっても、それを振り払うことなど彼の頭には浮かんでこないようだ。

薬がもたらす効果は絶大で、多幸感と共に、たやすく暗示にかかっている精神状態にクリスターを縛り付けている。

「それは無論失いたくなかったよ。ずっとこのまま一緒にいたいと望んだけど、そんなことは認められないと思うくらいの分別を僕は持っていた。ただ少しでも長い間、僕とレイフの幸せな子供時代

を引き伸ばしたかった。あそこから出て行かなければならなかった時、僕達は大人として別々の道を歩き始めるのだと知っていたから――」

「同じ部屋、同じベッドの中、互いの体に回された腕の中が、子供時代の君達にとって一番安らげる小さな楽園だったんだね？」

ジェームズが共感を込めて囁きかけると、クリスターは理解してもらえて嬉しいというように無邪気に微笑んだ。

「ああ、そうだよ」

「僕にも双子の妹がいた：同じ部屋でいつも一緒に過ごして、寝付けない夜などは、時々彼女が僕のベッドのもぐりこんでくることもあった。そんなの当たり前のことなのに、親というものは、どうして訳知り顔をして禁じようとするんだろうね」

「それは、あの人達が双子じゃないからだよ、もう1人の自分と一緒に眠る安楽を知らないからだ。子供の頃の僕は、どうやって双子じゃない人達は独りきりの不安な夜に耐えて眠ることができるのだろうと不思議がったものさ」

深い優越感のこもったクリスターの含み笑いが、耳に心地いい。他者に対するここまであからさまの冷淡さを、普段の彼は意識さえしないだろう。

「ああ、全くだね」

賛同の意を表しながら、ジェームズは手元に引き寄せたトレイから新しいアンプルを取り出して、クリスターの腕に易々と注射した。

「医者でもないのに、器用だね」

クリスタは感心したように、ジェームズの手つきに見入っている。

「痛みはまだあるかい…？」

フレイに散々弄られた痕の残る顔を眺めて、ジェームズが心配そうに問いかけると、クリスタは頭を振った。

「いや、もう、あまり痛くない。その注射が効いたのかな？」

従順なクリスタ。すっかりジェームズを信頼し、心を開いている。

無防備にこちらに向けられた琥珀の目は、瞳孔が異常に拡大しているせいで、いつもより深く濃い蜜色を呈していた。他人を射るかのような、あの冷たく冴えた輝きは失せ、今はとろけるように甘く、艶めいて見える。

「蜂蜜か飴玉みたいな目だね…本当に甘そうだ…」

ふっと笑って、ジェームズはクリスタの肩を抱いて引き寄せ、その目の上に唇を押し当て、小刻みに震えている睫を舌でなぞり、その陰に半ば隠れている眼球をねつとりと舐めた。

びくりとクリスタの肩が揺れたが、拒みはしない。

「まるで夢のようだな」

満足そうに呟いて、ジェームズは唇をずらし、今度はクリスターの口を覆った。

ジェームズが求めるがまま開いた口の中に舌を入れ、熱い口腔を思う存分に侵しても、今のクリスターは抵抗など思いつきもしないようだ。

このまま支配されることに慣れさせてしまえば、葉自体の効力が消えても、呪縛は残る。慎重に時間をかけてことを進めれば、どんなに強固な自我を持つ人間でも必ず落とせる自信がジェームズにはあった。だが、今もつとも必要な、その時間が足りない。

こんなことなら、クリスターが自ら一度この屋敷を訪問した時、あのまま捕らえこんでしまえばよかったのかもしれない。準備不足だと自分に言い訳して行かせてしまった、彼とのゲームにいかにして勝つかに拘りすぎていた。そのゲーム自体、ジェームズにはこれ以上続けられる余裕などなかったというのに。

「今更だな」

ジェームズは長嘆した。

「君をどれだけ強く僕に縛り付けることができるかな、この残り僅かな時間の中で――いや、むしろどれほど深く君の中に僕を刻み込めるか：僕がいなくなった後も、君が決して忘れることなどできないように――」

差し迫った現実を思い出しかけて、ジェームズの胸は焦燥感にちりちりと焼かれたが、せつかくの幸福な時間を、それによって台無

しにしてしまうのも惜しかった。

「どうしたんだい、ジェームズ？」

「いや、君が傍にいてくれると楽しくて、時間が過ぎていくのも忘れそうだと思っていたんだ」

「じゃあ、忘れろよ」

クリスターの手がジェームズの頭を引き寄せ、深く重ねられた唇の間から漏れた熱い息が絡まる。互いの口腔を行き来する舌と舌を擦りつけ、夢中で吸いあう。

本当に、何もかも忘れて溺れてしまいそうだった。

「愛しているよ、クリスター」

しかし、唐突に扉を撃ち叩いた乱暴なノックの音に、ジェームズは我に返らされた。

扉を開いてひよいと顔を覗かせたのはダミアンだった。ぴたりと寄り添いあって、ひそひそと親密に囁きあっているジェームズとクリスターの姿に、ぎよつとしたようだ。

「な、何してるんだよ…？」

思い切り怪しげに眉をしかめて部屋の中に滑り込んでくると、ダミアンは、扉の傍で腕を組んだまま石と化したようにじっと佇んでいるフレイに尋ねた。

「知らん。俺はただ、ジェームズのしたいようにさせているだけだ」

フレイは、半ばさじを投げたかのような疲れた声を出して、もう何も言いたくないとばかりに顔を背けた。

「ちっ、指をくわえて見ているだけなんて、だらしねえな」

ダミアンの緑の瞳に狂気を孕んだ火が揺らめきあがったが、それも切迫した事態が思い出されたためか、すぐに消え去った。

「ジェームズ、クリスターを奪還するために、そいつの仲間達が敷地内に侵入した。オレも、さっき、そいつらを狩りにいったんだけど、なかなか手強くて、返り討ちにあっちまったよ。今、あんたが雇ったプロの連中にも連絡したけれどーいざとなったら、奴らに射殺させてもいいかい？」

ジェームズはクリスターを愛しげに見つめたまま、ダミアンの話にはさして関心なさそうに答えた。

「僕の許可をいちいち求めに来るなんて、おまえにしては慎重だね、ダミアン」

大方、クリスターに丸め込まれてその脱出の手助けをしてしまったことに今更のように気付いて、後ろめたくなっているのだろう。これ以上へまをして、ジェームズの機嫌を損ねたくないのだ。

「だってさ、この獲物は特別だからね。もしかしたらジェームズは生かしておいて、道具として使いたがるかなって思ったからー」

甘えた声で媚を売りながら、ダミアンは、嫉妬の滲んだ眼差しを、

ジェームズの腕に身を預けているクリスターのうつろな顔に向けた。

「ふん、葉づけにしたのかい、そいつ…？　そうでもしなきゃ、いくらあんだで手懷けられそうにない、厄介な奴だもんね」

「そんなことより、クリスターの仲間達と言ったけれど―僕に知らせたい特別な獲物とは、一体誰を指しているのかな？」

やっとジェームズの関心を引くことには成功したものの、これも話題としてはあまり楽しいものではないらしく、ダミアンは険のこもった口調で吐き捨てた。

「レイフだよ、そいつの弟の―あんだに聞いた話から、てっきり役立たずのへたれ野郎かと想像していたんだけど、実際には、とんでもなく強い奴だったよ。オレの仲間をことごとく倒しやがった。このまま放っておくのは危険だ。腕の立つ奴らを集めて、さっさと始末してしまった方がいいとは思うんだけれど―」

ちらとジェームズの感情の読めない横顔を窺って、ダミアンは語尾を濁した。

「ふうん…レイフが来たのか」

ジェームズはクリスターの紅い髪の一筋を指先に絡めながら、ふと考え込んだ。

「クリスターはレイフをここによこしたくなかったはずだけれど―やっぱりレイフも、このままおとなしく僕に相棒を奪われるのを許すほど、馬鹿じゃなかったみたいだね。さて、どうしようかな…？」

迷うような口ぶりでジェームズがレイフの名を呟くのを聞いた途端、クリスターは反応した。指先がぴくりと震え、朦朧と定まらない瞳は次第に焦点があってくる。

「あいつの使い方も一応考えてはいたけれど――何だか面倒になってきたな。僕も精神的に色々参ってしまったし、この上あの喧しいレイフの相手なんて余計に疲れるだけだ。いいよ、もう、殺してしまえ」

「ほんと？」

ダミアンの顔に喜色がうかぶのを認めながら、ジェームズは鷹揚に頷いた。

「ああ、でも、なるべく傷はつけずに、綺麗なまま、死体はここに運んでくれないか」

「クリスターに、見せ付けてやるのかい？」

「せめて最後のお別れくらい、ちゃんとさせてあげたいからね。もっとも、この状態でクリスターがどこまで弟の死を認識できるものか、怪しいけれど」

想像し喉の奥で低い笑い声を立てるジェームズの肩にかかった、クリスターの手に力がこもった。

「うっ?!」

次の瞬間、はっとなって振り返りかけたジェームズの横面に、クリスターの拳が打ち込まれた。

あっさり殴り倒されたジェームズの体は、勢いよく床を転がった。弾みで、傍に置いてあったトレイは引っくり返し、中に残っていたアンプルが周囲に散らばる。

「ジェームズ！」

ダミアンが真っ青になって悲鳴をあげ、扉に背中をもたせかけていたフレイは目を光らせながら身構える。

「痛っ…」

クリスターのパンチは破壊力があるとは聞いていたけれど、実際の奥に火花が散ったような気がした。

床にしばし這いつくばっていたジェームズが、ぐらぐらと揺れている頭を上げると、口から溢れた血が床に滴り落ちて、赤い小さな血だまりを作った。

ジェームズは顔をしかめて、ぬるぬるになっている口の中を舌で探り、舌尖に触れた異物を吐き出した。

「奥歯が1本折れた…やりすぎだよ、クリスター」

束の間の麻痺がひいた後、鈍痛が広がっていく顎に手を添えて、恨めしげにそちらに睨み付けると、クリスターは床に手について必死に起き上がろうとしていた。

「それにしても、大したものだね…葉が回ってすっかり正気をなくしていたくせに、レイフの名前を聞いただけで復活するんだもの、

参ったよ」

燃えるような琥珀色の瞳が、ジェームズを激しく睨みつける。

たちまち、ジェームズの背中に心地よい戦慄が駆け抜けた。

従順な彼を弄ぶのもいいが、この凄まじさこそ、やはりジェームズが愛するクリスター・オルソンの本質なのかもしれない。

「ジェームズ、血が―」

動転しながらも傍に寄ってきて支えようとするダミアンの手を借りて、ジェームズは体を起こした。

「大丈夫だよ、ダミアン」

クリスターに醜態など見せられるものと痛みに耐え、ジャケットのポケットからハンカチを取り出して口元をぬぐい、立ち上がるうとした、その時、ジェームズは脚にうまく力が入らないことがついた。

愕然となりながら、ジェームズは震える手で脚を押さえた。キャメロンの処方した薬が功を奏して、しばらく軽減していた麻痺が再び強く現われつつあった。

ジェームズは人知れず、口惜しさに唇を噛み締める。

（時間が尽きる…）

その実感が、微かな慄きと共にじわじわと四方から忍び寄ってきて、

ジェームズを圧倒しようとしていた。

（嫌だ、僕はまだ生きていたい…やっと思えるようになったのに、もうあきらめなくてはならないなんて）

ジェームズは狂おしげにクリスターを眺めた。

向こうは向こうで、立ち上がるだけの力はないようだ。全身を小刻みに震わせ、ともすれば崩れ落ちそうになる心を奮い立たせて、かろうじて頭を上げている。

（僕の体が壊れていく。僕の命の火が消えていく。この肉体も心も全てなくなった後、僕がこの世に残せるものが何かあるのだろうか…？）

ジェームズは、奥底から沸きあがってくる名状し難い感情に突き動かされるよう、クリスターに手を差し伸ばした。

あまりに切なく、苦しく、絶望的で、もともと感情というものは疎遠だったジェームズには、自分の今の気持ちを正しく分析することもできない。

ただ胸が痛かった。

「許さない、よくもジェームズを…！」

いきり立ったダミアンが腰から拳銃を抜き構えようとする。その手をとっさに押さえ、ジェームズは頭を振った。

「駄目だよ、ダミアン…クリスターは僕の大切な人だ、殺さないで

くれ」

「ジェームズ…」

ダミアンは今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「それじゃあ、一体そいつをどうするつもり…？ 何をしたって、クリスターは絶対あんたのものにはならないよ。そいつの目を見りゃ、分かるだろ…飼いならそうとして、逆にあんたが食い殺されることになっちまうよ」

無知なダミアンにしては、なかなか的を射たことを言う。それとも、単純な者の方が、得てして真実を見抜くのだろうか。

答えずに押し黙っているジェームズの脇を、フレイが肩をいからせて通り過ぎた。

訝しげに眺めやるジェームズの前で、フレイはクリスターの右腕を乱暴に捕まえ背中で捻りあげた。更に、空いた方の腕で、後ろから首を締め付けにかかる。

「ジェームズが何と言おうと、もう許さんぞ、クリスター」

クリスターは顔を真っ赤にして、左手でフレイの腕をかきむしるが、思うように力が出ないのか、その抵抗は弱々しい。

「いいぞ、フレイ、そのままクリスターを絞め殺してしまえ…！」

ダミアンはジェームズを抱きしめたまま、ヒステリックな笑い声をあげた。

（クリスターの命を奪うことは僕の目的ではない：だが、どうしても手に入らないのならば、いつそ殺して、僕がじきに行くだろう場所に、彼も連れて行こうか。それとも―？）

ジェームズは、大きく見開いた藍色の瞳にクリスターの苦闘する様を映しこみながら、煩悶した。

その時だ。

ずしんと地面を揺るがすような音が、ここからさほど遠くない場所から響き渡った。

ジェームズは夢から覚めたように瞬きをし、何事かと扉の方を振り返った。

「な、何、今の音…？」

フレイもクリスターを締め上げる腕を緩め、辺りの気配を窺うかのようにじっと聞き耳を立てている。

しばらくすると部屋の外が急に騒がしくなり、神経質な顔をした見張りの1人が扉を開けた。

「どうしたんだ？ さっきのあれは爆発音みたいだったけれど、何が起こった？」

鋭い声で、ダミアンが追求する。

「正体不明の暴走車が、屋敷の前廊辺りに突っ込んできたそうです。」

初めはちょっと煙が出ていただけなんで大したことはないと思ってたら、いきなり爆発して―とにかく火がすごいんで、母屋に燃え移る前に皆で消火にあたっているところです」

ダミアンは忌々しげに唸った。

「きっとクリスターを奪い返しに来たんだ！ 車を運転していた奴は捕まえたのか？」

「いえ、それが―どうやら突っ込む前に脱出したらしくて：それに火災の方に気を取られたせいで、犯人には逃げられてしまったようです」

ジェームズは、フレイに腕を捕まれたままじっと考えを巡らせているクリスターを、ちらりと眺めやった。

「：消火には引き続き全力であたって欲しい。けれど、それとは別に屋敷内に進入した者がいないが至急確かめるんだ。状況からして、その暴走車が起こした火災は、警備の目を逸らすのが目的のものだろう」

ジェームズの冷静な指示に、見張りははっとして姿勢を正し、彼の命令を伝えるべく、慌てて外に出て行った。

「何だか、色んな所から邪魔が入ってきたね。君と過ごす貴重な一時に水を差されて、僕は大変不本意だよ」

軽い口調で言いながらも、ジェームズの胸をちりちりと焼く焦燥感はますますつのってきた。

（ああ、僕は、一体クリスターをどうすればいい…？）

ジェームズは唇を噛み締め、疲れたような笑みをクリスターに向けた。

すると、自分を食い入るように見ているクリスターと目が合った。

そうして視線と視線を交し合うだけで、ジェームズにはクリスターが何を伝えようとしているのかが分かり、クリスターにもジェームズが何を思いつめているかが分かった。

「ジェームズ：おまえには、もう僕を自由にできる時間はない」

まだ薬の効果は続いているはずだが、クリスターは驚くほど明瞭な言葉でジェームズに語りかけてきた。

「僕の仲間達がすぐそこまで僕を助けに来ている。それに、アイザックとダニエルが脱出に成功した今、じきに警察が捜査に乗り込んでくるだろう。そんなことになれば、もう言い逃れもきかないほどの犯罪の証拠が明るみに出、君はきっと逮捕される」

ダミアンがびくつと身を震わせたかと思うと、守ろうとするかのごとくジェームズの肩をかき抱いた。

「そうすれば、君は二度と僕には会えない…長い拘留生活を経て再び僕のもとに戻ることも、君にはもう望めない」

黙れ。我知らず、ジェームズは口の中で小さく呟いていた。

白い眉間に皺を寄せて、彼は、クリスターの唇が冷然と動き続け

るのを見据えた。

「ジェームズ、君は発病している…ブラック家の血を引く者の宿命である病気は君の体を蝕んで、やがて…殺すだろう」

ほんの一瞬、クリスターは口に出すことを躊躇った。だが、そんな感情の揺らぎは、すぐに、鋭い刃先のような冷徹さに取って代わられる。

「君は死ぬ。僕には二度と触れられない…分かるだろう、ジェームズ、君にとって、これが最後のチャンスなんだ」

ジェームズは愛しげに目を細めながら、自分を挑発するように轟然と顔を上げているクリスターをつくづくと眺めた。

（ああ、君は何て冷酷で、情け容赦なく、そしてずるいんだろうね。僕までそうやって利用しようとする…ここに至って、僕が君の意図に逆らうことはあるまいと確信して―）

クリスターならば、自分の体に隠された秘密を探り当てるのはそう難しくないはずだとは思っていた。だが、このタイミング、この場面で、最後の切り札のように目の前に叩きつけられるのは、何とも胸にこたえた。

（だが、罨だと分かっていながら君の言葉に耳を傾けた時から、僕には選択の余地など残されていなかったのかもしれないな）

ジェームズの体から緊張が抜け、強張っていた顔が緩んで、諦念したような淡い微笑がうかぶのを、クリスターを羽交い絞めにしているフレイは息を飲んで眺めた。

「分かったよ…もう、いい…」

誰に聞かせるともなく、自嘲的にジェームズは呟いた。

「ジェームズ、どうしたの？」

ジェームズの中で何かが起ころうとしていることを敏感に感じ取ったダミアンが、不安そうに肩をさすったが、それをジェームズはわずらわしげに振り払った。

「いいんだ、もう、これで終わらせる…」

ジェームズは小さく痙攣している脚を指の関節が白くなるほどの力を込めて押さえ込み、振り絞るようにして囁いた。

「フレイ…クリスタを壊して…」

信じられないことを聞いたかのごとく、ダミアンは目を瞬き、ジェームズの顔を覗き込む。

フレイでさえ、ジェームズの口からその命令が出されることを待ち望んでいたにも関わらず、とっさに怯んだような表情をした。

「そうだ、右肩がいいな…もう二度と大好きなフットボールができないよう、弟と一緒にプロになる夢など見られないように…」

ジェームズはすっと手を上げて、小さな震えを帯びている指先でクリスタの右肩の輪郭を愛しげになぞった。

「君がフィールドでプレイをする姿…僕も好きだったよ…」

夢みるようにうっとり目を細め―転瞬、ジェームズは、心が振り切れるのではないかと思うほどの激情を迸らせて、叫んだ。

「そいつの肩を壊すんだ！」

ジェームズの口から無情な命令が発された瞬間、それを聞いたクリスターは、乱れかかった前髪の陰で何事か呟いたようだった。

彼は何と言ったのか、その瞳に過ぎた感情は一体何であったのか―恐怖か絶望か、あるいは、ある種の深い満足感であったのか。

ジェームズが見極めようと身を乗り出した時、主人の命令を得て鎖から解き放たれたフレイは、低い唸り声と共にクリスターの頭を床に叩きつけた。そうして、彼の右腕を不自然な形に捻じ曲げると、渾身の力を込めて、一気に引き上げた。

ごきりというような鈍い音が、いやに生々しく、無機質な地下室に響き渡った

第6章最後の闘争（13）

レイフの合図で、トムが配電盤のブレーカーを一気に下ろした途端、周囲は真っ暗闇になった。

拳銃を手には廊下の向こうからやってきた強面の男達は、視界を奪われた瞬間、立ちすくんで、何事かと動揺した声をあげた。

いくら銃の扱いに慣れていても、的が見えなければどうしようもない。

灯りを消した小部屋に隠れて、予め暗闇に充分目を慣らしながら、彼らが近づくのを待ち受けていたレイフは、そこですかさず飛び出した。

（ヤマダ先生、ごめんなさい！）

小さい頃から世話になっている道場の師匠に心の中で一言詫びて、後は、電光石火、暗闇の中で右往左往していた男達に掴みかかり、柔道の大技をかけて、1人、2人と確実に打ち倒していった。

うおっとか、ぐっという叫びや悲鳴がそこかしこであがり、それと共に何か重いものが床に叩きつけられる音が響いたのは、時間にしてほんの10秒程度だったろうか。

ことがすむまで、配電盤のあった物置代わりの小部屋の中に息を殺して潜んでいたトムは、レイフが無遠慮にドアを開けた途端、文字通り飛び上がった。

「あ、ごめん、驚かせちゃったな」

大立ち回りを演じながらも無傷なレイフが現われて、すまなげに笑いかけるのに、トムはほっと胸を撫で下ろした。

「あの警備員達は全員片付けたのか？」

「うん。銃は怖いけど、それが使えないんだったら、マフィアだろうが何だろうが、オレの敵じゃないぜ」

ちよつと得意げに胸を張るレイフをトムは頼もしげに見上げた。

「おまえが、こんなに喧嘩というか戦闘向きだとは夢にも思わなかったよ…度胸があるだけじゃなくて、何かと機転が利くし、追い詰められても色んな知恵を出して切り抜けるしさ」

「まあ、火事場の馬鹿力みたいなものだよな。とにかくクリスターを助きたい一心だから、オレ…」

ふと遠い目になるレイフだったが、すぐに我に返って、神妙な面持ちのトムに頷きかけた。

2人は屋敷の中の搜索を再開した。

廊下には、例の火災現場から流れてきたものだろう、薄い煙が漂ってきている。消火活動はされているのだろうが、あの火柱の大きさから考えて、そう簡単に消し止められるものか少々怪しい。

「クリスターが閉じ込められているっていう地下室へは、ここからどうやって行くのか、分かるか？」

灯りの落ちたままの廊下を早足で歩きながら、トムが問うてくる。ここに侵入してすぐに鉢合わせした、ジェームズの配下の1人をぶん殴って白状させた情報だった。

「ああ、オレも昔はこの屋敷には入りびたりだったからな…地下に幾つか部屋があるんだけど、そのうちの1つを、ジェームズの仲間達は制裁というか、リンチというか、他人に暴行するのに使ってたよ…。オレもジェームズに意地悪されて、ちょこっと閉じ込められたこともあったかなあ」

嫌なことを思い出して、胸がむかつくのを覚えながら呟いた、その時、レイフは、いきなり重いものを振り下ろされたかのように激痛を右肩に覚えて、よろめいた。

「レイフ?!」

肩を押さえてとっさに壁に寄りかかるレイフに、トムが顔色を変えて駆け寄る。

「どうしたんだよ?」

レイフは真っ青になっていた。あまりの衝撃に、しばし息をすることもできなかった。

「あ…」

レイフは、体をぎゅっと縮めたまま、苦しげに喘いだ。

(おかしい。肩が、腕が思うように動かない。痛い。痛い…)

肩を引き裂かれるかと思った感覚は、そのうち嘘のように引いていったが、レイフを襲った恐慌は収まらなかった。

心臓の鼓動は速くなり、汗がどつと噴出す。

（な、何だったんだ、今の…？ まさか―）

真っ白になっていたレイフの頭の中に、瞬間、何かが閃いた。

「クリスター…？」

レイフは呆然と顔を上げ、何もない虚空を見据えた。慄いたように見開かれた、琥珀色の瞳の中心にある瞳孔は、とてつもない怒りに駆られたかのように、ぐっと収縮している。

「クリスター！」

レイフは吼えた。

トムが、取り乱すレイフを宥めようと声をかけてくるが、親友の気遣いに満ちた言葉も、今のレイフの耳には入ってこなかった。

金色の瞳を爛々と燃やしながら、レイフは齒軋りをした。

「あいつら、クリスターに一体何をしゃがった！」

我が身を束の間圧し拉いだ恐怖を凌駕する、迸るような激情に突き動かされて、レイフは兄のもとへと走り出した。

「うっ…ああ…っ！」

クリスターは右肩を押さえ、床に這いつくばったまま、激しい痛みを震わせている。

その口から堪えきれない声が搾り出されるのに、ジェームズは放心したまま耳を傾けていた。あれほどの感情を迸らせた記憶など、これまでほとんど―それこそ、メアリを殺した時以来なかったことなので、力尽き、すっかり空っぽになってしまったような気分だった。

「関節が外れたか…もしかしたら骨も砕けたかも知れないね。元通りに動かせるようになればいいけれど―」

精神にかつてないほどの負荷がかかったためか、ひどい疲れを覚えながら、ジェームズは乾いた声で言った。

心ばかりか肉体の方もぼろぼろだという点では、今のクリスターと自分とどちらがよりひどい有様なのか、ジェームズにはとっさに判断がつきかねた。

すぐ傍でか細い啜り泣きが聞こえたので、ゆっくりと振り返ると、ダミアンが大粒の涙をこぼしていた。

「どうしておまえが泣くんだ…？」

うろんそうにジェームズは尋ねたが、ダミアンはしゃくりあげながら頭を左右に振るばかりだ。

自分がいなくなった後、この子は一体どうなるのだろう。これまで取り立てて関心を覚えなかったことを、ジェームズはふいに意識した。

「たぶん、僕はおまえと一緒に連れて行ってやるべきなんだろうな。ごめんよ、ダミアン…そこまでする余裕がないんだ」

手駒に過ぎない相手になぜそんな言葉をかけたのか、自分の言動を怪しみながら、ジェームズはダミアンの白い髪をひと撫ですると、クリスターの方に向き直った。

ちらりと視線を床に落とし、そこに散らばっているアンプルと注射器を眺めやった。

「フレイ、すまないけれど、手伝ってくれ」

ジェームズは、クリスターの後ろで石と化したかのように立ち尽くしていた巨漢に呼びかける。

フレイはすぐに我に返って、ジェームズのもとに駆け寄り、膝をついた。ジェームズを見下ろす彼の目は痛々しげだった。

ジェームズは、この忠実な男に何か声をかけようと口を開きかけたが、結局黙って微笑みかけることしかもうできなかった。

ジェームズはフレイの手を借りて、自由にならない体をどうにか動かし、床に落ちていた薬品と注射器を拾い集めながら、クリスターににじり寄っていった。

「クリスター」

はっとなって顔を上げたクリスターに、ジェームズは手を伸ばした。ふいにバランスを崩して、そのまま彼の上に倒れ掛かった。

「うあっ…」

壊された肩に響いたのか、仰向けにジェームズに押し倒される格好になったクリスターの口から、引きつった苦鳴が漏れる。

脂汗のうかんだクリスターの顔を、ジェームズは上から覗き込んだ。

警戒心にはりつめた、その表情から察するに、体の自由はまだきかないが、精神ははっきりしているようだ。痛みのせいか、それとも薬を早く解毒してしまう体質なのか。

ジェームズはクリスターの額に浮かんだ汗を指先で優しくぬぐいながら、囁きかけた。

「僕を殺してくれ」

クリスターの目があからさまに冷たくなったのを確認し、ジェームズはくすりと笑った。

「分かっているよ、僕をどれほど憎んでも、君は僕を殺しはしない。その手を汚すことで家族に迷惑はかけたくない、もっとありていに言ってしまうば、レイフに犯罪者の身内だなんてレッテルを貼られて、その将来にまで影響が及んでしまうのは、君が最も避けたい事態の1つだからだ」

ジェームズはクリスターの無事な方の腕をさすりながら、静かに語りかけた。

「他にも君には多くの制約があったのに、それらを巧妙に避けて、僕をここまで追いこんだ。守るべき者を持たない僕は君より優位にあったはずなのに…大したものだと素直に賞賛するべきなのかな」

ジェームズはクリスターの胸の上に頭を置いて、目を閉じた。

クリスターの力強い心臓の鼓動、その高い体温が伝わってくる。若く、迸るような生命力がはっきりと感じられる。ジェームズがいなくなった後も、彼はずっと生き続けるのだろう。

このままここで眠り込んでしまったらきっと心地いいだろうと思ったが、ジェームズはそうはしなかった。どうせ、じきに永い眠りが訪れるのだから、今は這いつくばってでも現実にとどまり、何かを成し遂げたい。

「もうじき、レイフがここに来そうだな」

ジェームズがぽつりと呟いた途端、クリスターの胸が戦慄くように大きく上下した。

ジェームズは、クリスターには見えない所で注射器とアンプルを

持つ手を動かし、彼が自分の言葉に気を取られている隙に、その腕に素早く針を埋めた。

「ジェームズ……！」

クリスターに力いっぱい押しのけられて、ジェームズは易々と床に転がった。

クリスターは怒気をはらんだ目をして起き上がろうとするが、いきなり膝が碎けて、再び倒れこんでしまう。

ジェームズはそれを見て、満足そうに笑った。

「君にはしばらくおとなしくしてもらおうよ、クリスター。今度は絶対動けない量の薬を投与しておくからね」

更に新しいアンプルから薬液を吸い上げ、ジェームズはクリスターの腕に突き刺した。

「この期に及んで、一体何をするつもりだ……？」

薬液が自分の中に注入されていくのを呆然と見ながら、クリスターは恐れ of 滲んだ声で問いかけてくる。

「大したことじゃないよ、クリスター……どのみち闘いの勝者は君だ。ただ僕としては、君の書いたシナリオ通りにこのまま動いてやるのも癪だから、ささやかな変更を最後に書き加えてやろうかなと思いついたんだ。まあ、どんなラストシーンになるのか、黙って見ておいでよ」

更にもう1本、クリスターに薬液を投与し終えると、ジェームズは彼の顔を両手で挟みこんで、切々と囁きかけた。

「愛しているよ、クリスター。叶うならば、君とずっと一緒にいたかった。けれど、僕にはもうほんの僅かな時間しか残されていない。君を手に入れることができないのなら、せめて――僕が死んでも、忘れないで欲しい」

大量の麻薬を投与されて早くも朦朧と霞んできた琥珀色の双眸に己の目を近づけて、まるで愛の告白のように、ジェームズは告げた。

「君の胸に深く刻み込まれて一生消えることのない傷跡に、僕はなりたい」

外の廊下の方から、見張り達がどよめきたつ声が聞こえた。

涙の収まらないダミアンが怯えたように扉を振り返り、黙って動いたフレイが扉の前に敢然として立った。

「やっと、たどり着いたようだね」

一瞬、クリスターの手が狂おしくジェームズの腕を掴み、そして力を失って滑り落ちた。

浮き足立ったような若者達の怒号、人と人が争い合う物音、叫び声が続いてあがり、そして静かになった。

ダンと、何者かが扉を外から打ち付ける音が部屋に響いた、次の瞬間、それは勢いよく開け放たれた。

ジェームズは前後不覚に陥ったクリスターの頭を撫でていた手をとめ、顔を上げた。

開いた扉の所には、鮮血のような紅い髪をした長身の男が、肩を怒らせて立っていた。

「やあ、久しぶりだね、レイフ」

ジェームズは楽しげにまなじりを下げながら、呼びかけた。

「残念だけれど、君がここに来るのは、少しばかり遅かったようだよ」

無我夢中で、ひたすら走ってきた。

どうやってここまでたどり着いたのか、レイフはよく覚えていない。

背後には人のうめき声がいくつもあがっているが、自分が彼らを叩きのめしたこともほとんど記憶に残っていない。

「クリスター」

重たい鉄の扉を恐れ気もなく開いた後、レイフは数瞬の間、そこに立ち尽くした。

不安定な感情が明滅する瞳を動かし、他の一切を避けて、その人の姿のみを探す。

すると、部屋の奥の方に、ぐったりと横たわっているクリスターを見つけた。顔や体のあちこちに殴打の痕が残っている。目は開いているが何も映し出してはおらず、こちらに向けられた顔はうつろだった。

「兄さん…？」

レイフは喘ぐように息をして、とっさに自分の右肩を押さえた。そこは、まだ少し熱を持っていた。

「やっぱり、伝わったんだね…」

やけに冷静な声のした方をほとんど反射的に見やると、クリスターの傍らに座り込んでいた金髪の青年が、レイフに意味深長な言葉を投げかけてきた。

「そんな、どうでもいい感覚よりも、もっと大切な想いが互いに伝わればよかったのに―いや、本当に大切なことは、やはり言葉でこそ伝え合わなければならなかったのかな」

あれは誰だ。そうだ、J・Bことジェームズ・ブラックだ。レイフの記憶にあるよりも随分線が細くなっているが、人の心の隙間に

入り込んでこようとする嫌な響きの声は変わっていない。

「クリスターに…何をした…？」

レイフは自分の中で何か危険なエネルギーが蓄積されていき、それが体の外にじわじわと染み出して、皮膚が電気を帯びたようにビリビリしだすのを覚えていた。

「何をした?!」

レイフの怒号を聞きながら、ジェームズは猫のように怪しく目を細めた。血の滲んだ唇には、あからさまな嘲笑がうかんでいる。

「だから、君は一足遅かったんだよ、レイフ。僕はクリスターを壊してしまった」

レイフの頭の中が真っ白になった。

（クリスターを…壊した…？）

レイフは、もう一度、確認することが恐いというようにゆっくりと、倒れているクリスターの上に視線を戻した。

不自然に捻じ曲げられたクリスターの右腕。

（あ…）

束の間の空白の後、これまで感じたことのない強烈な破壊衝動が突き上げてき、レイフの体を隅々まで満たしていく。

薄い笑いを貼り付けたジェームズの顔に、幽かな動揺がよぎった。

レイフのすっと細められた双眸の奥に灯った、冷酷で情け容赦のない輝きは、その兄のものにひどく似通っていた。

危険を察知したレイフが、レイフとジェームズの間割り込み、逞しい腕を伸ばして彼に飛び掛ってくる。

レイフは敵の顔を見もしなかった。反射的に体を低めて、素早くレイフの腕を捕まえるや、見事な背負い投げをかけた。

「ぐあっ！」

背中からコンクリートの床に叩きつけられたレイフは思わず声をあげたが、レイフはまだ許さなかった。捕らえたままの彼の腕を捻り、そのまま一気にへし折ってしまう。

レイフの口からあがった絶叫に反応したのか、クリスターの頬が微かに震えた。彼の黒ずんだ瞳には、歯を剥いて唸りながらこちらにじりじりと近づいてくる、レイフの凄惨な姿が映し出されている。

「J・B、よくもーてめえだけは、許さねえ！」

鬼の形相をしたレイフに、今度はダミアンが手にしたナイフを突き出し襲い掛かったが、これも簡単に振り払われた。

「きゃあっ」

か細い少年は壁に体を打ち付けられて、ぐったりしてしまう。

「許さないって―どうするつもり？」

ジェームズは、自分を守る忠実な部下が2人とも叩きのめされても、顔色1つ変えなかった。いかにも無邪気に小首を傾げて問いかけながら、クリスターの頭を愛しげに撫でた。

瞬間的に、レイフは飛び出した。クリスターに触れているジェームズの手を掴んで、その体を引きずり上げ、無造作に床に投げ出した。

「乱暴だな」

自分のすぐ前で、拳を震わせながら仁王立ちになっているレイフを恐れ気もなく見上げると、ジェームズは何の迷いもなく言い放った。

「大体、僕には君に許しを請うことなど何もないよ。ああ、実際クリスターの肩が二度と使い物にならなくなったとしても、その件については、僕は全くすまないとは思わないな」

「何だと？」

レイフのこめかみの辺りに、太い血管がぴくりと浮き出す。

「自分の失敗を棚に上げて、僕ばかりを責めるのかい、レイフ。クリスターをこんな危険な場所に1人で来させてさ、おまけに助けに来るにも遅すぎた：大方、役立たずの警察なんか頼んだせいで時間を浪費したんだろう、このグズ」

レイフの顔がはっと強張るのを認め、ジェームズは堪えきれなく

なったかのように、ぷつと吹き出した。

「全く、何て正直な…」

レイフは血走った目でジェームズを睨んだ。

「この野郎！」

喉をのけぞらせて笑い出すジェームズに、レイフは掴みかかった。胸倉を締め上げ、拳を振り上げる。

ふいに、ジェームズは笑うのをやめて、真顔になった。

「レイフ、素直で可愛い君のために、ひとつ忠告しておいてやるよ。クリスターを信じるな」

レイフはかっとなって、ジェームズを殴った。何度も何度も殴りつけた。

ジェームズは抵抗の素振りも見せず、レイフの暴力に身をさらしている。唇が裂け、鼻から血が出ても、殴打の合間に語る言葉は、ひどく冷静だった。

「忘れるな、そいつは裏切り者だ」

この忌々しい悪魔を黙らせようとするかのごとく、レイフはジェームズの首に手をかける。

「黙れ」

レイフは呪いのように呟きながら、ジェームズの首を締め上げにかかった。

瞬く間にジェームズの白い顔は朱の色に染まり、ほとんど無意識に上がった指が、喉に食い込むレイフの手を外そうと引っかく。

「もう我慢ならない、おまえはオレが殺す…クリスターにこれ以上付きまとうな…！」

まるで頭蓋の中で脳がぐつぐつと沸騰しているかのようだった。

生まれて初めて覚える殺意に突き動かされるがまま、レイフはジェームズの首を更に強く締め続ける。

そのうち、ジェームズの喉がごろごろと異様な音をたてだした。

殺せ殺せ殺せ―レイフの中で目覚めた狂暴な怪物が叫びたてている。

この瞬間、レイフはジェームズを消し去ろうという衝動以外の一切を忘れ果てた。

すぐ傍で、全ての力を失って横たわっているクリスターが、殺人者になろうとしている弟を見守りながら、声にならない声をあげて必死にとめようとしていることにも気付かなかった。

そう、クリスターは全てを見ていた。起き上がることはおろか、声を発することもできなかったが、ジェームズが最後に仕掛けた、この悪夢のような展開を何としても阻止しようとしていた。

レイフ。

その手の指先が小さく動いて、床を打った。コツコツ。

ごく小さな指の動きなど、この凄絶な場面に居合わせた者は誰も気付いていなかった。

それにも拘らず、クリスターの指は動いた。コツコツ。

コツコツ。荒れ狂うレイフの心の扉をノックするように、辛抱強く。

コツコツ…レイフ、頼む…やめるんだ…コツコツ…。

純粹な殺人衝動に支配されていたレイフの中に、何かがするりと入り込んできて、麻痺していた心に触れた。

レイフはぶるつと身震いした。何度も目を瞬いた。

「クリスター…？」

彼に呼ばれたような気がして、レイフはそちらを振り向く。

クリスターの様子にほとんど変化は見られなかったが、その時レイフは、大きく見開かれた兄の瞳に映っている、今の自分の姿に気がついた。

（あれは何だ…オレなのか…？）

人一人の命をその手で奪おうとしている、恐ろしく残忍で邪悪な

怪物を、クリスタールは見ていた。

その事実には、瞋恚の炎に満たされていたレイフの胸は、一気に冷えた。

レイフを正確に映し出す、もう1人のレイフがそこにいる。

その瞳に宿る自分が、こんな恐ろしい者であっていいはずがない。

コツコツ。クリスタールの指は尚も動き続けている。

こんなひどい有様になっても、彼は、その指先を小さく動かして床を叩きながら、身を落とすな、怪物になどなるなど、必死になって訴えているのだ。

「そんな目で見ないでくれ…とめないでくれよ、クリスタール…」

ジェームズを殺したいという願望はまだレイフを突き動かしている。しかし、その顔には次第に、本来のレイフらしい表情が蘇ってきた。

「どうしても、こいつだけは…オレの手で…」

レイフはくしゃつと顔を歪めた。目から熱い涙が溢れ出し、クリスタールの顔もぼやけて見えなくなった。

レイフ、レイフ…クリスタールの声が聞こえてくる。自分をなだめるように抱きしめる、温かなものを確かに感じる。

レイフは、唐突にジェームズから手を離れた。

力を失ったジェームズの体は無造作に床に崩れ落ちる。

「くそっ！」

レイフは流れる涙をぬぐおうともせず、足元に倒れているジェームズを見下ろした。その呼吸がとまりかけているのに気付いたレイフは、憎々しげに舌打ちしながらも、どすんと体重ごとその胸に腕を打ち下ろした。

すると、ジェームズはうっと叫んで息を吹き返し、身を2つに折って、激しく咳き込んだ。

レイフが冷ややかに見守っていると、ようやく落ち着いたジェームズは、訝しげに顔を上げた。

「何だ、僕を殺すんじゃないのかい？」

喉を傷めたのか、ジェームズの声は、老人のようにしわがれていた。

「オレはおまえを殺さない。誰が、おまえの思い通りになどしてやるものかっ」

レイフが獐猛に歯を剥いて威嚇すると、ジェームズは心底残念そうに肩を落とした。

「惜しいところだったのに……」

ジェームズが口惜しげにクリスターを眺めやる。

その視線からクリスターを隠すように、レイフは兄の傍に跪いた。

「兄さん…」

レイフが恐る恐る頬に触れても、クリスターは何も答えなかった。ただ、その瞼がゆるゆると下りていって、心配そうなレイフの顔を映し出す琥珀色の瞳を覆った。ついに力尽きたのか、それとも安堵したためか。

床に落ちている注射器と空になったアンプルに目を留めて、レイフは眉をしかめた。

「おい、クリスターに一体何を注射したんだ？」

レイフが焦りつつ後ろを振り返ると、ダミアンに助け起こされたジェームズが疲労困憊の態で答えた。

「LSDだよ。ああ、クリスターを助けたいなら、早く病院に運んだ方がいいかもしれないね…思ったような効果が出ないものだから、常人なら中毒を起こしかねないほどの薬液を投与してしまったから」

「な、何だって?!」

たちまち顔を強張らせ、クリスターの体に取りすがり、その名を呼ぶレイフを、ジェームズはつくづくと眺めた。

彼らを通して一体何を見つめているのか、焦がれるような熱を帯びた、奇妙な表情をしていた。

「それほどクリスタルが大切なら――レイフ、これから先何が起っても、彼から離れないことだよ。他の全てを犠牲にしても死ぬまで相棒の手を離すな：周り中から拒絶されても、独りきりでこの広い世界を彷徨うよりは、よほど幸せになれるだろう」

レイフは憤然とジェームズを睨みつけるが、こちらに向けられた白い顔にあの毒を含んだ嘲笑はなく、代わりに、切なげな淡い微笑が漂っていることに虚を突かれた。

「ジェームズ：？」

レイフは思わず、彼の名前を呼んでいた。そう言えば、J・Bではなく、ファースト・ネームで彼に呼びかけたことなど、これまでほとんどなかった。

今のジェームズはひどく弱々しくて、調子が狂うのだろうか。もはや怪物じみた所はなく、やけに人間臭く感じられる。

ジェームズは、ひっそりと鼻をすすっているダミアンに何事か囁きかけ、レイフにへし折られた腕を押さえながらよろよろと近づいてきたフレイに手を差し伸べた。

その時、どこからともなく近づいてくるサイレンの音に、レイフは気がついた。そして、開いたままの扉から流れ込んでくる煙に軽くむせる。結局火災は食い止められず、誰かが消防を呼んだのだろうか。

「いや、あれは多分パトカーだろうね」

まるでレイフの心を読んだかのように、ジェームズは答えた。そうして、傍らに跪くフレイの腕に身を預けながら、静かに目を閉じた。

「クリスターを早く連れて行け、レイフ：意識不明とはいえ、彼の前で警察ごときに一度ならず二度までも捕まるのは、僕にも抵抗があるからね」

レイフはクリスターを用心深く抱き起こし、背中に背負った。さすがに、自分とほとんど変わらない体格の兄を軽々と抱き上げるといふわけにはいかなかった。

「おおい、レイフ、レイフ、そこにいるのかっ?！」

必死に自分を呼ぶトムの声が、近づいてきた。途中ではぐれたが、レイフの後を一生懸命に追いかけて、ここまでやってきたのだろう。

レイフは何だかほっとしながら、叫び返した。

「オレは無事だ、トム。今からクリスターを連れて、そっちに行く」

そうしてレイフは、このぞつとする地下室から出て行こうと歩きかけた。しかし、つい気になって、観念したようにじつとうずくまっていたまま動かないジェームズ達を見下ろし、疑わしげに尋ねた。

「おい、まさか、とっ捕まるのが嫌だからって、馬鹿な真似しようなんて考えちゃいないだろうな?」

するとジェームズはぱつちりと目を開けて、呆れたように眉をはねあげると、幾分彼らしさを取り戻した皮肉っぽい口調で言い返し

た。

「この僕が自殺でもするって言うのかい？　よしてくれ、そんな無意味な真似はしないよ」

似たような会話をどこかで交わしたことがあるなと嫌な気分になったレイフは、思わず顔をしかめ、慌ててジェームズから離れた。

その背にひたと注がれる、哀切な眼差し。

「さよなら、レイフ」

…クリスタール。

ジェームズの寂しげな声にこもった別の響きを感じながら、レイフは、ようやく奪還した相棒と共に地上を目指した。

その後間もなく到着した警察によって、ブラック邸は麻薬の不法所持及び売買に関わったとして強制捜索された。

その過程で、彼らはすぐに屋敷内で一体の死体を発見する。ジェ

ームズの父親のゴードン・ブラックだった。一部で囁かれていた噂どおり、既に死去したいたわけだ。

死後一月以上が経過した遺体は半ば腐乱していたが、特に目立った損傷はなく、病死か殺人か判断するのに、更なる時間を要した。

だが、続いて、敷地内の詳しい搜索の末に見つかった、更に二体の死体―行方不明のエバ・ハミルトンとその情婦だ―によって、ジエームズ・ブラックとその仲間が関わった犯罪は確かなものとなった。

地下室に潜んでいた所を発見されたジエームズは、彼の仲間達と共にその場で拘束され、後に殺人容疑で正式に逮捕された。

もっとも、起訴されるより前に、もともと重病を患っていたジエームズは急に体調を悪化させて病院に収容され、そこから再び外出することは二度となかったのだが、それはまた別の話となる。

第7章 F A K E (1)

クリスターが大怪我をした。おまけに薬付けにされて、意識もない。

それでも、オレはまだ信じていた。

クリスターが、こんなに簡単に壊されてしまうわけがない。

今はオレの背中に力なく寄りかかって、何度名前を呼んでも答えられないクリスターだけれど、じきに気がつく。

フレイに傷めつけられた右腕だって、きっとよくなる。

だって、クリスターはオレのチームのエースなんだ。

ボールを投じる時のクリスターの腕さばきには、いつも見惚れた。下手にパス・カットに入った相手の指をへし折るような剛球も、針の穴に糸を通すような正確で繊細なパスも、あいつは見事に操った。

クォーター・バックにとっては命とも言える、その腕が動かなくなったら、一体クリスターはどうなるのだろう。

いや、大丈夫だ、クリスターは必ず復活する。

これまで一度だって、クリスターがオレや仲間達の期待と信頼を裏切ったことがあったか。

だから、オレは信じ続ける。

そう思わなければ、心が張り裂けてしまいそうだった…。

あの忌々しい地下室からどんどん遠ざかり、最初に受けた衝撃と緊張感が薄れていくに連れていくにつれ、レイフの胸にはまた別の苦しさがつのつていった。

（クリスター、クリスター、クリスター…！）

トムと一緒に屋敷を出た所で、警官達に紛れて待ち受けていたウォルターとアイザックがすぐに駆け寄ってきたが、レイフは彼らの呼びかけにまともに応えることもできなかった。涙で目を一杯にして、ひたすら、クリスターを病院に連れて行かなくちゃと繰り返した。

ケンパーは機転をきかせて、救急車を二台呼んでくれた。一台は、既にダニエルをどこかの病院に運んで行ったそうだ。

そうこうするうちに救急隊員が飛んできて、クリスターをストレッチャーに乗せて移動させようとしたが、レイフは反射的に彼らに逆らってしまった。

「クリスターに触るな！」

ひどく気を昂ぶらせたレイフは、まるで敵を見るかのようなすごい目で、何の非もない救急隊員達を睨みつけた。

矛盾した反応だったが、この時のレイフは、とにかくもうクリスターから片時も引き離されるのは嫌だった。誰かがクリスターを無理矢理奪い去ろうとしたら、その人間を打ち殺しかねないほど殺気立っていた。

レイフの精神状態がおかしいことを察したウォルターが救急隊員達に何か言ってくれたおかげで、結局彼はそのまま自分でクリスターを運び、待機していた救急車と一緒に乗り込むことができた。

そうして、重傷を負った上、薬物中毒の疑いもあるクリスターとレイフを乗せて、救急車は病院へと向かった。

それからしばらくの間――病院に到着してクリスターが処置室に運び込まれるまでのことは、レイフは途切れ途切れにしか覚えていない。

とにかくうるさいサイレンの音、初めて乗る救急車がやたらと揺れるので、クリスターの容態が余計に悪くなるのではないかと心配だったことは記憶に残っている。

その搬送先の病院でも、レイフはちょっとした騒ぎを起こした。

クリスターに引っ付いて処置室に入ろうとしたのを医者にとめられたために、また暴れだしそうになったのだ。

興奮したレイフをなだめたのは、この時もまたウォルターだった。彼がここまで自分達に付き添ってくれていたのだということに、レイフはそこで初めて気がついた。

「とにかく落ち着け、レイフーおまえが取り乱してドクター達の邪魔をしては、クリスターを治療することもできないんだぞ」

ウォルターに辛抱強く言い聞かせられて、レイフもやっと少しは自分取り戻した。

クリスターは意識を失ったまま、処置室の中に運び込まれていた。

そうして今、レイフは、病院の長椅子に悄然と項垂れて、坐っている。

ウォルターはレイフの家に電話をして、一度戻ってきたが、またどこかに姿を消していた。レイフがひとまず落ち着いたと見て、傍を離れたのだろうが、実際レイフの心の中はまだ荒れ狂っていた。

ジェームズの屋敷の中で怪我をしたクリスターを見つけた時は、ショックだったものの、まだ実感を持てないでいた。

現実として考えられる余裕が出てきた今の方が、精神的にきつい。

目からとめどなく溢れ出す涙が、受け止めようと広げた手の上に

ぼたぼたと落ちていく。それをぼんやりと眺めていたレイフは、いきなり苦しげに顔を歪め、両手で頭を抱え込み、押しつぶそうとするかのごとく力を込めた。

（ジェームズの奴：やつぱり、あの時殺しておけばよかった…！
どうして許したりなんかしたんだ！ クリスターがされたように、あいつの腕も脚もへし折って、痛みのにた打ち回らせてやればよかった）

まだ手に生々しく残る、ジェームズの首を締め上げた時の感触を思い出しながら、レイフは、どうして最後までやりとげなかったのかと自分を責めた。

しかし、そんなレイフの脳裏に、あの時クリスターが最後の力を振り絞って訴えてきたことがよみがえった。

（怪物になどなるな）

本気でジェームズを殺そうとしていたレイフをとめたのは、大量の薬物を投与されて、身動きはおろか声を発することもできないクリスターだった。

クリスターの大きく見開かれた瞳に映るレイフの姿はぞっとするほど恐ろしく、煮えくり返っていたレイフの頭を一気に冷ましたのだ。

憎しみに駆られてあのままジェームズを殺してしまったら、レイフもまた 人を人とも思わぬ怪物J・Bと同類になってしまう。

（身を落とすな、そちら側に行っては駄目だ）

レイフは結局クリスターの願いの方を優先させた。クリスターの瞳の中に宿る自分は、まっすぐ健やかでありたい、いつも太陽に顔を向けていられるような、曇りのない心を持つ人間でありたい。

（分かっている：オレは正しい選択をした。ただ、クリスターがあんな目に合うのをとめられなかったことが悔しい：ああ、どうしてオレは間に合わなかったんだろう。ジェームズが嘲笑うのも当然だ、オレのやることなすことみんな失敗ばかりで：こんなことになるくらいなら、オレがクリスターの身代わりになればよかったんだ、オレの腕が折られればよかったんだ）

レイフの心は、後悔と慙愧の淵の中に深く沈降し続けて、浮かび上がる気配もない。

クリスターが処置室に運び込まれてからどれほどの時間が経過したのかも、彼にはもう分からなかった。

そんなレイフの意識を現実呼び戻したのは、ウォルターの急報を受けて病院に駆けつけた両親だった。

「レイフ！」

聞き慣れた太い男の声に名前を呼ばれ、がっしりした手に肩を抱かれた瞬間、レイフはびくっと身を震わせた。

とっさに顔を上げて見れば、父親のラースが目を潤ませながら、レイフを覗き込んでいる。

「レイフ、レイフ：おまえは無事なんだな？ 本当にどこも怪我は

ないな…?」

ラーズは大きな体を屈めて、レイフが無傷であることを確かめるように、ソフの頭や肩、腕をさすった。初めはまだ落ちついてたものの、レイフの泣きはらした顔を見ているうちに、何かこみ上げてきたものがあつたらしく、ふいに彼は、顔を背けるようにして立ち上がった。

ラーズの後ろには、沈痛な面持ちしたヘレナが静かに佇んでいる。

「母さん…」

レイフはくしゃくしゃに顔を歪めると、叱られるのを恐がる子供のように、しゃくりあげながら椅子から立ち上がった。

「ごめんよ、オレ…母さんに約束したのに…あいつを守れなかった。クリスターがあんな酷い目に合ったのは、オレの失敗だ…オレのせいなんだ。オレが、代わってやればよかった!」

肩を揺らせてめそめそ泣いているレイフを前に、さすがのヘレナも一瞬唇を震わせたが、いかにも気丈らしく、ぴしゃりと言った。

「あなたのせいだなんて、馬鹿なことは言わないで、レイフ。それに、クリスターだって、確かに怪我はしたけれど、命には別状ないと聞いているわ…大丈夫よ、レイフ…あの子はすぐによくなるわ」

でも、クリスターの肩や腕は—と言いかけて、恐くなったレイフはすぐに口をつぐんだ。

（そうだ、母さんの言うとおりで、クリスターはすぐによくなる…

きつともと通りに治る…!)

挫けそうな心にそう言い聞かせながら、レイフは再び長椅子に腰を下ろした。

少し離れた場所では、ウォルターが両親にこれまでの経緯をざつと説明しているようだった。

ジェームズ・ブラックとクリスターの長い確執、彼らが密かに繰り広げた闘いなど、ほとんど寝耳に水の話聞かされて、どんなにかショックを受けるだろう。

「どうして、そんな危険な真似を子供達にさせたんだーあんただって、知っていたのなら、もっと早くに俺達に相談してくれたって…」

案の定ラースは興奮して、話の途中で声を荒げたり、ウォルターに掴みかかろうとする素振りを見せたりし、間に入ったヘレナになだめられていた。

それを眺めるレイフの胸には、今更のように、彼らに対してすまない気持ちがかみ上げてきた。

(本当にごめん、父さん、母さん…自分達だけで何とかできると思いついた末、結局こんなに心配かけることになった…あぁ、オレがクリスターの独断と暴走をとめることができていれば…)

レイフが情けなさに臍を噛んだ、その時、処置室のドアが開き、移動式の簡易ベッドが看護師達達によって運び出されてきた。

レイフは椅子から跳ね起きて、ベッドの上に死んだように横たわ

っているクリスターに駆け寄った。

「に、兄さんっ！」

クリスターはレイフの呼びかけにもまだ反応せず、その顔は死人のように青ざめている。剥き出しになった肩は包帯で嚴重に固定されていた。

それを見ると、レイフは胸が詰まって、何も言えなくなってしまふ。

気がつけば、ベッドの後ろから廊下に出てきた男女2人の医者から、両親が説明を受けていた。

「薬物の解毒の方はうまくいったと思います。呼吸も心拍も正常に戻っていますから、後はこのまましばらく様子を見ましょう」

中年の男性医師が慣れた口調で言うと、今度は女性医師の方が後を引き継ぐ。

「肩の方は、脱臼を起こしていました。また、レントゲンにかけたところ、上腕部に幾つか骨折の箇所が見られますので、しばらくは安静にし、患部を固定する必要があります――」

「クリスターの肩は、ちゃんと元通りになるんだよなっ！」

いきなりレイフが大声で尋ねたので、その女性医師は驚いたように振り返った。自分達が今まで処置していた患者とそっくり同じ顔を見つけて、一瞬たじろいだようだが、そこは医師らしく、冷静に返した。

「最低でも3週間：もしくはそれ以上、傷めた肩と腕は安静にしないでほならないわ。若い人だからきつと回復は早いでしょう。ただ肩脱臼は再発することが多いのでーもしかして、彼は何かスポーツをやっているのかしら？」

分かりやすい言い方でそう説明する、まだ若い女医の理知的な瞳に微かな翳りが差したが、レイフはそれを見ないふりをした。

「ああ、クリスターはオレと一緒にフットボールをやっているんだ。オレ達のチームのエースQBだよ」

すると、男性医師の方が、思い当たったかのようにぽんと手を打った。

「赤毛で双子の：ああ、どこかで見た顔だと思ったらー去年州大会で初優勝したアーバン高校の選手だろう？　うちの娘が君らのファンなんだよ：今年も友達と一緒に試合を見に行くのが楽しみだと言ってたな」

「ジョン…」

同僚の女性医師に軽口をそつとたしなめられた彼は、ぼつが悪そうな顔をして黙り込んだ。

「クリスターはすぐ治るよな？」

ベッドにすがりついたまま、レイフがしつこく問いかけるのに、女性医師は言いにくそうに口ごもった。

「すぐにとは難しいわーそれは、また明日以降、彼の容態が落ちついてから詳しい検査をしてみないことには、何とも言えないから：ともかく今は、あなたのお兄さんを病室に運んで、休ませてあげてちょうだい」

柔らかな声でたしなめられて、レイフは赤面しながらベッドを押さえこんでいた手を離し、どうしようかと困っていた看護師達に向かって慌てて詫びた。

「レイフ、あなたは先に病室に行つて、クリスターの傍についていてあげて。私達はドクター達にもう少し詳しいお話を伺ってから行くわ」

運ばれていくクリスターと医師達の方を交互に見比べて、どうしようかと迷っているレイフを見かねて、ヘレナが促した。

「う、うん…」

医師達を追及したい気持ちはまだあったが、結局レイフはクリスターについていく方を選んだ。

（クリスター、クリスター…もう大丈夫だよ、麻薬は解毒できたし、肩だってちゃんと治してもらえた…元通りになるには少し時間がかかるって、あの医者は言ったけど、兄貴はオレと同じで丈夫だから、すぐに治るよ。それに何より、兄貴に付きまとうJ・Bはもういない…だから安心して―）

意識不明のクリスターを励ますよう、心の中で呼びかけながらも、レイフの目からは、ともすれば涙が滴り落ちそうだった。

用意された個室にクリスターを運びこみ、手際よく点滴その他を整えた後、看護師達は出て行った。

部屋の灯りは消してもらったので、レイフは今、廊下の光が差し込んでくるだけの薄暗がりの中、ひっそりと横たわるクリスターの傍らに椅子を引き寄せて坐っている。

「オレもトムに笑われたけど、ほんと、兄貴もまたひどくやられたよな、せつかくのハンサムな顔が台無しだぜ」

わざと軽い調子で話しかけてみたが、応える相手がなくては、空しさだけがつのる。

クリスターの体の布で隠されていない部分は、痛々しいほどに傷だらけだった。

それを見ているとまた堪らなくなってきた、レイフは、点滴のチューブにつながれたクリスターの手を掴んだ。

「クリスター」

その手をそっと持ち上げながら、レイフは低い声で呼びかけてみた。

「クリスター…？」

どんな時でもレイフを力強く励まし、引っ張ってきてくれたクリスターの手は、今はだらしとして、レイフの手を握り返してくれることさえない。

そのことが信じられないレイフは、途方に暮れながら、クリスタ
ーの顔を見つめるばかりだった。

ついに諦めたレイフは、クリスターの動かない手をシーツの上に
戻した。

今度は、青ざめてひやりと冷たげな頬に触れてみたが、意外とそ
の肌が熱いことにびっくりして、すぐに手を引っ込めてしまう。

「兄さん」

レイフは顔をくしゃりと歪めて、また少し涙をこぼしながら、小
さな椅子からふらふらと起き上がった。

乾いてひび割れ、殴られた跡も痛々しいクリスターの唇から漏れ
る微かな息を確かめるよう、手をかざす。

その震える手で再び兄の頬に触れると、レイフはこみ上げてくる
熱い感情に駆られるがまま、とっさに身を屈め、クリスターに唇に
キスをした。

（もう誰にも…二度と傷つけさせない、触らせない…!）

レイフの閉ざされた目からこぼれた涙が、クリスターの傷ついた
顔を濡らした。

（兄さんはオレが守るよ。今更こんなことを誓っても、遅すぎるの
かもしれないけれど―）

何らかの反応が返ってくることを期待するように、レイフはクリ

スターの唇を唇でついと押してみるが、彼を捉えこんでいる眠りはよほど深いのか、その微かな息遣いが乱れることすらない。

また少し哀しい気分になりながら、レイフがクリスターの上から静かに身を引いた時、背後のドアががたと音をたてた。

レイフは文字通り飛び上がった。

「あ…ああ…父さん…」

開いたドアに手をかけたままじっと黙り込んで立ち尽くしている父親の顔に、どことなく奇妙な、余所余所しい表情を垣間見たような気がして、レイフは背筋にひやりとしたものを覚えた。

「ドクターの話、どうだった？」

レイフはとっさにクリスターの枕元に置いてあったタオルを掴み、さりげなく彼の額に浮かんだ汗をぬぐうふりをした。

部屋の灯りは消してあったし、レイフの背中に隠れて、何をしていたかまではラースには見えなかったはずだ。

「…クリスターはまだ意識を取り戻さないのか？」

レイフが屈託なく尋ねるのに、ラースはほっと息をつき、ヘレナと一緒に部屋の中に入ってきた。

「うん…まだ薬がぬけきらないのかな…怪我のせいかな、熱も少しあるみたいだよ」

しょんぼりとなるレイフの肩を、ラースが大きな手で励ますよう、叩いた。

「大丈夫だ、レイフ。使われた薬品はLSDらしいが、中毒の危険は脱したし、後遺症のようなものが残ることはまずないらしいからな」

「うん…」

ヘレナは何も言わず、クリスターの枕元に立って、その傷つき疲れ果てた顔をじっと見下ろしている。どんな時でも毅然とした母の横顔が、この時は込みあげてくるものを必死に堪えているかのよう
に弱々しげで、レイフは見ているのが辛くなってきた。

ヘレナはレイフが自分をじっと見つめていることに気がつく
と、いつもの表情に戻って、穏やかに言い聞かせた。

「レイフ、父さんと一緒に今夜は家に帰りなさい。後は、私が朝までクリスターに付き添うわ」

「嫌だ！」

反射的に、レイフは叫んだ。母親相手でも、クリスターから離れるという考えを受け入れられるほど、まだ安心できていなかった。

「でも、あなただって今夜は色々無茶をしたのでしょ…？ その格好を見れば分かるわ。家に戻って、熱いシャワーでも浴びて、少しは休まないと…」

「誰が何て言っても、オレは、今夜はクリスターの傍から離れない

からなっ」

普段は素直なレイフが眉を吊り上げ、クリスターの手をしっかり握り締めたまま頑として拒むのを、ヘレナはクリスターに似た思慮深い琥珀色の瞳でしばらく見守った。

「分かったわ」

低い声で呟いて、ヘレナは2人のやり取りを心配そうに見守っていた。ラースに向き直り、少し相談した後、ひとまず病室から出て行った。

病室の外で待っているウォルターと今回の事件についてももう少し突っ込んだ話をして、それから、ヘレナは病院に留まるだろうが、ラースとウォルターはひとまず帰ることになりそうだ。

だが、レイフは、彼らがどんな話をするかには興味はなかった。

それらは、言ってしまうえば、もう終わったことだ。

「クリスター、早く目を覚ましてくれよ…おまえの声を聞きたいよ」

レイフはクリスターの手を押し頂くようにしながら目を閉じ、祈った。

大丈夫だ。クリスターを喰らおうとした、J・Bという闇は永遠に去った。彼を脅かすものはや何もない。

悪夢のようだった、この忌まわしい夜が明け、明日になれば、きっと何もかもよくなる。

「明日だ、そう、明日―忌々しいことは皆忘れて、オレとクリスタ―と2人で力を合わせて、やり直すんだ」

たといそこでどんな過酷な現実が待ち構えていたとしても、2人でならきつと克服できると、レイフは固く信じていた。

クリスタ―は、長い間、夢を見ていた。

それらは、まどろんでいる最中は、今まで見たこともないような象徴的なドラマ性に溢れているように思われたものの、所詮は薬物によって異常な敏感になった精神が作り出した無意味な幻覚に過ぎなかった。

怪しい惑乱状態から何かの拍子でふい覚醒した時は、夢よりも更にぞっとするような光景を目の当たりにし、クリスタ―を一層ひどい気分にした。

おそらくあれの正体はクリスタ―に応急処置を施していた救急隊員だったのだろうが、頭から三本の角を生やした怪物に覆い被さられるのは、実際気持ちのいいものではない。

思わず小さな悲鳴をあげて、すぐに目を瞑り、後はひたすら早く薬の影響から抜け出せるよう祈っていた。

妖しい夢とうつつの境を、そうやって、どのくらいの時間さ迷ったのだろうか―クリスターは唐突に目を見開いた。

周囲は真っ暗で、しんと静まり返っていた。

見慣れぬ白い天井、鼻をつく消毒薬の臭いに、すぐに、ここは病院だと思い至る。

（ああ、僕は生きている）

ほっと安堵の息をついた途端、体中で疼いている痛みに気付き、クリスターは顔をしかめた。

（あの地下室から、僕はどうやってここまで運び込まれたのだろうか…警察が来て、ジェームズは捕まったのか…？ いや、そんなことより―）

ばらけた記憶を一つ一つなぎあわせ、現実に戻ろうと努力している、その時、何か暖かいものが自分の左手を包み込んでいることに気付いて、クリスターはそちらへと頭を傾けた。

（レイフ…）

クリスターの双子の弟は、彼の手をしっかりと握り締めたまま、ベッドの上に頭を預けて眠り込んでいた。

こちら側に向けられた、その顔は疲れきり、目の周りを赤く泣き腫らしている。しかし、それはクリスターのよく知るレイフ、彼が何としても守り通そうとした愛しい弟の変わらぬ姿だった。

（よかった：ジェームズが最後の最後であんな悪足掻きしてくれた時には、心臓がとまりそうになったけれど―おまえはあいつの挑発には乗らなかった。あいつを殺すのを思いとどまった。ああ、そうだ：おまえは決してあんな奴の色には染まらない…）

深い安堵と共に、クリスターは満足そうに微笑む。

（ジェームズは、僕の中に自分と同じ怪物を見た。相棒として選ぶほど、彼にとって僕は近しい存在だったんだ。そう思うと、我ながら全くぞっとするな：果たして、僕は初めから、ジェームズと同じ闇を心の中に飼っていたのだろうか、それとも彼という深淵を長く見つめすぎたせいなのか。だが、おまえはあの暗い淵を覗き込んではいらない、取り込まれてはならない：明るい光の下で笑うおまえがいる限り、僕の中に今もいるかもしれない、あの怪物は永遠に影を潜めるだろう）

クリスターは、レイフの手からそっと手を引き抜こうとしたが、しっかりと捕まえられてどうしても動かせないのです、仕方なくそのままにして、きゅっと握り返した。

（変わらぬおまえがここにいる…これ以上、何も望むことはない…）

クリスターは、再び顔を天井の方に向けた。

いちいち見て確認しなくとも、自分の右肩が動かすことのできぬよう固定されているのは分かる。熱を伴った痛みが、そこから発しているのが感じられる。

（フレイの奴、また思い切りよくやってくれたものだな。肩関節後方脱臼：軟骨や腱まで損傷したとすると回復には相当時間がかかり

そうだ：もしかしたら手術することになるだろうか。下手すれば、肩の運動範囲は狭くなる：これでは、以前と全く同じようにプレイするのはやはり難しいな）

冷静に自己診断をするクリスターの虚空を見る瞳は暗く、乾いている。

（おそらく、フットボール・プレイヤーとしては、僕はもう二度と――）

その時、クリスターの胸が大きく上下し、何かを飲み下そうとするかのごとく喉が動いた。

じわじわとこみ上げてくる感情を抑え込もうと格闘しながら、クリスターは唇をきつく噛み締めた。

（何も動揺するようなことじゃない。命があっただけ、まだ幸運だった：ほとんど僕の想定範囲内でジェームズとの決着がついたことに、むしろ満足すべきなんだ。そう、僕は少しも辛くない）

自らに執拗に言い聞かせるクリスターの、一切の感情を廃したかのような目がふいに揺らぎ、大きく見開かれた。乾いた瞳が見る見るうちに潤んでいき、ついには涙がこぼれ落ちる。

（何を泣く：？ 嘆く理由などないはずじゃないか：何もかも僕の計算どおりうまくいった）

しかし、クリスターの意思に逆らって、唇はわななき、ともすればそこから低い嗚咽が漏れそうになる。

ついに、クリスターは挫けた。

（ああ…もう駄目だ…！）

クリスターは必死になって身をよじり、体にかけられているかけ布の端を噛むことで、口からあふれ出ようとする声を封じ込んだ。

しかし、目から堰を切ったように流れ出す涙だけは、どうしようもなかった。

（哀しい）

本当は、平気でいられるはずがない。

クリスターはフットボールを深く愛していた。時折プレッシャーに押しつぶされそうになることもあったが、それ以上にフットボールを通じて得た喜びは大きく、彼の胸を幾度も熱い感動に満たしてくれた。

プロになるという夢を、一度は真剣に追いかけたこともある。どれほど困難な道程であっても、レイフと共に目指し、越えていく、頂の一つ一つに自分の幸福があるのだと確かに思っていたのだ。

そのとても大切なものが、クリスターの手からすり抜け、遠ざかっていく。

（もう二度とフィールドに立てない、レイフや仲間達と一緒にプレイできない…自分の全てを賭してひとつのことに夢中になれた、あんな瞬間はもう来ない…）

そう思うと、後から後から涙がこぼれて、どうしても止まらなかった。

（フットボールができなくなることが、こんなにも辛いなんて―今この瞬間まで、僕は思わなかった…）

何もかも分かったような顔をして何も分かっていなかった、自分の愚かさに、泣き喚きたくなる。しかし、それでもクリスタ―は必死になって、今直面している現実を受け入れようと努力していた。

（ああ、僕はきつと恐ろしく誤った選択をしてしまったんだろうな―でも、もう後戻りはできない。今更嘆いても仕方のないものを、今更、後悔などするな…！ そうだ、これで僕はやつと諦めることができる。フットボールという夢も、レイフのことも…これでやつと諦められる）

その時、クリスタ―の左手を捕まえたまま眠り込んでいるレイフが小さく身じろぎし、くすんと鼻をすすりながら寝言を呟いた。

自分の動揺が伝わってレイフを起こしてしまうことを何より恐れるクリスタ―は思わず身を固くし、息を殺して、レイフの気配を窺った。

（レイフ、レイフ、頼むから今は目を覚まさないでくれ…こんなにも取り乱した、不様な僕を見ないでくれ）

今レイフが起きてしまったら、さすがにクリスタ―にも取り繕える自信はない。

（明日…そう、明日になれば、僕はきつと落ち着きを取り戻す。辛

いのは今だけだ。明日になれば、いつもの僕に戻って、ちゃんとレイフに向かい合える。僕達にとって一番残酷なことを……レイフに伝えられるだけの勇氣もきつと持てるだろう）

いつの間にか、レイフの寢息は再び静かなものになっていた。それと共に、クリスターの中で束の間荒れ狂っていた感情も静まっていった。

（そうだ、ジェームズはもう二度と戻ってはこない。僕はと言えば、この有様だ。あいつに対して、何一つ失うことになし勝つのは不可能だと思い切った時、僕は、ならばいっそ相打ちを狙うことで僕の最終的な目的を果たせばいいと考えを切り替えたんだ）

クリスターはしばしじっと考えに沈んだ後、頭を傾け、傍らで眠っている弟の上に深い眼差しを注いだ。

要は、何が一番大切かということだ。ジェームズとの勝負そのものよりも、クリスターにはもっと優先させるべきものがあつた。

（レイフ、これでおまえの将来を脅かす邪魔なものは全てなくなつた）

心の中でゆっくりと言ひ聞かせるクリスターの目には、もう引き返せないところまで来てしまった者独特の強い覚悟が宿っていた。

（……明日からは、おまえにとっても厳しい日々が始まるだろう）

耐え難い現実を前に、レイフはどう対処するのか、目を背けて決して見まいとするか、辛くとも受け入れ、前に進もうとするのか。

その点については、クリスターの中では、既に明確な答えが出ていた。

（大丈夫だ。レイフなら、必ず克服できる。容赦のない現実はいをフをむしろ鍛え、今度こそ本当の本気にさせるはずだ）

レイフの性質を誰よりもよく理解しているクリスターは、そう確信していた。

第7章 F A K E (2)

だらしくもクリスターにしがみついたまま寝入ってしまったレイフは、夜が明ける頃になってやっと目を覚ました。

「え、嘘、いつの間にオレ…」

レイフが慌ててベッドから身を起こすと、病室の窓から差し込んでくる淡い朝の光の中、既に起きていたクリスターが、彼に向かって目を細めるようにして微笑みかけてきた。

「ク、クリスター！」

レイフはクリスターに抱きつこうと手を伸ばしかけたが、彼の痛々しく包帯で固定された肩が目に入ると、そのままじっと固まってしまった。

「レイフ」

弟の躊躇いを察したのか、クリスターは自ら無事な方の手を伸ばして、彼の頭をぐっと引き寄せた。

「兄さん」

「心配させて、ごめんよ。おまえを巻き添えにしたくないばかりに、自分だけで解決しようとしたけれど、結果として、余計に迷惑をかけてしまったようだ」

身も心もぼろぼろのはずなのに、クリスターの声はいつもと変わ

らず穏やかに耳に響いて、それがレイフを一層切なくさせた。

「いいんだ、そんなこと―クリスターが助かったのなら、オレはもう何も―」

たどたどしい口調で何かを言いかけたものの、こみ上げてくる想いに胸が詰まって、レイフはすぐに黙り込んでしまう。

「レイフ、泣いているのかい…？」

心配そうなクリスターの呼びかけに、レイフは慌てて顔を上げ、むきになって否定しにかかった。

「ち、違うよ。ただ、ほっと気が緩んだせいで…い、いや、やっばり、まだちょっと涙が残っていたみたいだな」

意地を張って強がってみせても、クリスターの前ではどうにもうまくいかない。レイフは手の甲で目元を荒っぽくぬぐいながら、クリスターに向かってへらりと笑いかけた。

「兄貴のおかげで、オレ、すごい泣き虫だって、ここの看護師達に思われちゃったよ」

冗談めかして言ったつもりなのに、クリスターは余計にすまなそうに顔をしかめた。

「ごめん」

クリスターの優しい手がレイフの頭の上に乗せられ、寝癖のついた髪をいたわるように撫でつける。

その心地よさに素直に目を閉じ、レイフはクリスターの体にゆるく腕を巻きつけて、ほっと息をついた。

（よかった。目を覚ました。オレのもとに戻ってきてくれた）

クリスターの体温に触れ、その規則正しい心臓の音に耳を傾けながら、レイフは、そのことをじっと確認していた。

（もしかしたら二度と取り戻すことはできないかもしれないと怯えたこともあったけれど、今、オレのたった1人の相棒はちゃんとこの腕の中にある）

レイフは、涙と鼻水で濡れた鼻先をクリスターの胸に押し当てて、心の中で呟き続けた

（これで、やっと安心できる…クリスターさえいれば、オレには何も恐いことなんかないよ）

気持ちが昂ぶるがまま、つい力任せに相手を抱きすくめなくなるレイフだったが、クリスターの怪我が思い出されては、熱くなった頭をまた少し冷やされる。

（大丈夫、これで何もかも元通りになるはずだ）

嬉しいくせに、どこかまだ張り詰めたような奇妙な気分が続いていた。

自分達のすぐ傍に不吉な影が忍び寄っているかのような嫌な予感を、レイフは必死に振り払う。

（いいや、気のせいだ。危険は去ったはずだもの、なあ、クリスタ―？）

クリスタ―はレイフの抱擁を辛抱強く受け止めたまま、何も話しかけてこようとはしない。

二度と離すまいとするかのようにクリスタ―を抱きしめたまま、レイフはしばらく動こうとはしなかった。

病院に運び込まれた翌日は一日中、クリスタ―は検査ばかりさせられた。

頭も強く打っていたので念のためCT検査をしたが、幸い異常はなく、薬物の影響も残っていなかった。

外傷としては、肋骨や腕に小さなひびや骨折が数箇所あったらしい。だが、やはり一番重症なのは右肩だった。

このまま肩を固定して治すにしろ、思い切って手術をするにしろ、ちゃんと動かせるようになるには最低でもひと月、直視下での手術となるとリハビリも含めて数ヶ月かかるという。

今後の治療方針については、クリスタ―は少し考えさせて欲しい

と答えた。

昨夜救急処置を施してくれた女医、サンドラ・オブライエンがクリスターの主治医を務めることになったが、彼女も彼がスポーツ選手であることを氣遣っている様子だった。

当然だ。もしもクリスターが戦線を抜けることになれば、チームに与えるダメージは計り知れない。

「大丈夫だよ、クリスター：もしかしたら初めの数試合はベンチを温めることになるかもしれないけれど、ひと月もあれば兄貴ならきつと回復して、普通に試合に出られるようになるさ。ほら、ガキの頃から、オレ達って、怪我の治りはすごく早かったじゃん」

レイフの励ましをクリスターは黙って聞いているだけで、淡々と義務的に検査を受ける姿からは、彼が何を考えているのか全く分かっていなかった。

その日一日、レイフは、検査のために離れなければならない時以外はずっと、クリスターの傍にっていた。

もしかしたら両親にはウォルターやケンパー警部から何か連絡があったのかもしれないが、病室のクリスターのもとにまでは届いていなかった。

大怪我をしたばかりのクリスターに与える影響を慮って、刺激的過ぎる外からの接触や情報はシャットアウトされたのだろう。

レイフも今は積極的に、逮捕されたジェームズがその後どうなったか、アイザックはどこにいるのか、あるいは別の病院で手当てを

受けたはずのダニエルの詳しい容態についても、知ろうとはしなかった。

目の前にいるクリスターのことだけで、レイフの頭はもういっぱいだったのだ。

夜になって、やっと落ち着いた頃、ついに黙っていられなくなったのか、クリスターがレイフに家に帰るように促した。

帰りたくなどなかったレイフは、クリスターと一緒にいると頑固に主張したのだが、昨日からシャワーも浴びていない体を『臭い』と一喝されて、仕方なく一度戻ることにした。

考えてみれば、昨夜の騒ぎ以来、着替えもしていない。確かに薄汚れてはいたし、たぶんジェームズのものらしい血の染みがシャツについたままだった。

そうして、何だか久しぶりに戻ったような気がする我が家――。

汗と埃を熱いシャワーで洗い流してやっと心地ついたレイフは、すぐにベッドにもぐりこんだ。しかし、なかなか寝付けなかった。昨夜クリスターに付き添っていた時は、泣きながら、いつの間にか寝てしまったのに、1人になるとどうにも気持ちが悪く落ち着かなくて、全く眠気を覚えなかった。

自分の部屋の隣にある空っぽのクリスターの部屋を思うと、ひどく寂しかった。

まんじりもせずに過ごした、その夜、レイフはクリスターのことばかり考えていた。

病院で医師から聞いた話の全てを理解することはできなかったにしろ、レイフにもクリスターの容態の厳しさは感じ取れる。

（これから先、一体クリスターはどうなるのだろうか……？）

本当は、薄々分かっている部分もある。しかし、自分達の目の前にある過酷な現実を、レイフはなるべく見ないようにしていた。

（嫌なことばかり想像すると、何だかそれが本当になっちまいそうな気がする。そうだ、前向きに考えるんだ……クリスターは元気になる、必ずオレ達のチームに戻ってくる）

そんなふうにはレイフは、クリスターがいない間チーム・メイトと一致団結してブラック・ナイツを守ろう、クリスターが戻るまでの辛抱だからがんばってこの危機を切り抜けようと、自分にひたすら言い聞かせていた。

朝方になってやっと眠りについたレイフが次に目を覚ましたのは、昼前だった。

この2日間、レイフの時間の感覚はどうもおかしくなっているようだ。

（ああ、寝過ごしちゃった：母さんも、父さんも、起こしてくれたらしいのにさ！）

両親がレイフをそっとしておいたのは、肉体的な疲れはそれほどではなかったにせよ、精神的には昨日一日落ち込んだり妙に陽気になったりと不安定だった彼を休ませようという気遣いだったのだろう。

その彼らも既に家にはおらず、1人で遅い朝食をかき込むと、レイフはすぐに家を飛び出した。

途中、ドライブスルーのタコベルでクリスターへの差し入れを買い込んで、レイフが病院に着いた時のことだ。

クリスターの見舞いに訪れた帰りだったのだろう、フランクス・コーチ達とレイフは、玄関を入った所ではったり出会った。

「あ、フランクス・コーチ」

深刻な顔つきで他の2人のコーチ達と話しながら歩いてきたフランクスは、ファースト・フード店の大きな袋を抱えたレイフが手を振っているのに気付くと、微妙な顔をして、立ち尽くした。

「クリスターを見舞いに来てくれたんですか」

レイフは屈託のない笑顔になって、彼らにまっすぐ駆け寄っていた。

「ああ。昨日、レースから知らせを受けていたんだが、クリスターと直接会って話をするのは今日まで待ってくれと言われてな…いや、

全く驚いたよ。何と言えはいいのか、正直言葉も見つからん。すまん、レイフ、俺もさすがに動揺しているようだ」

「で、でも、クリスターは結構元気そうだったでしょう？」

フランクスや他のコーチ達の上に漂う重苦しい空気には気付かない振りをして、レイフはわざと明るいい調子で言った。

「散々ぼこられて、ちょっと人相変わっちゃってるけど、見掛けほどひどい傷じゃないんですよ。頭も打ったけれど、中身は無事だし……まあ、あいつの場合は、少し馬鹿になったくらいで丁度いいんだろうけれどーそうそう、クリスターの主治医のオ布莱エン先生には会いました？　すごい美人なんですよ、オレも入院するなら、あんな先生に診てもらいたいなあ」

「レイフ……」

フランクスは、これまでレイフが見たこともないような辛そうな顔をして、唇を噛み締めた。

「コーチも、あまり深刻に考えなくてくださいよ。クリスターの怪我はすぐに治りますからーシーズン開幕までには、きっと間に合いますって」

陽気な台詞が上滑りしているのにも気付かず、レイフは根拠のない楽観的な話を延々と続けようとしたが、たまりかねたフランク스가それを制した。

「レイフ、チームのこれからについては、おまえが落ち着いてから、ちゃんと相談しよう。全く、負傷したクリスターは信じられないく

らいに落ち着いていて、こっちが気を遣うほどだったのに、現実を受け止められないのはおまえの方か。しかし、クリスター抜きでチームを一から立て直すことを考えれば、要となるおまえには、何とでもしっかりしてもらわなければならんだ」

「何を言ってるんです、コーチ？」

まるで言葉が通じていないのか、きよとんと瞬きするレイフを、フランクスは哀れみのこもった眼差しで見た。

「いいから、今はクリスターの所に行ってやれ、レイフ：俺達の前ではいつもどおり冷静に振る舞っていたが、あんな酷い目にあってシヨックを受けていないはずがないからな。あいつが一番心を許せるのは、やはりおまえなんだろうし：いいか、何があってもクリスターをしっかり支えてやるんだぞ」

レイフは当惑顔で、フランクスをじっと見返すばかりだ。

そんなレイフをフランクスはもどかしげに見つめたが、振り切るようにして背を向けると、深刻な面持ちの他の2人と共に足早に去っていった。

「コーチ：兄貴と一体どんな話をしたんだろ」

ぽつりと呟いた後、レイフは、いきなり寒気を覚えたかのように、軽く身震いした。

公式練習の開始日直前に負傷してしまったクリスター。レイフにとってはいくまで個人的な問題だが、チーム全体のことを考えなければならぬコーチ達は、全く違う見方をして当然だった。

レイフは、何かに急ぎ立てられるように、クリスターの病室に向かった。

「クリスター…」

レイフが病室のドアを開けると、クリスターはベッドの上に少々窮屈そうに長身の体を横たえて、白い天井をじっと見据えていた。

その厳しく張り詰めた表情に、レイフはとっさに胸を突かれ、立ち尽くしてしまう。

やがて、気配に気付いたのか、クリスターが怪訝そうにこちらに頭を傾けた。

「レイフ…？」

声をかけづらそうにもじもじしているレイフの姿を認めると、彼はすぐに親しみにこもった笑顔になった。

「今日はやけに来るのが遅いから、どうしたんだろうと思っていたところだよ。そんな所に突っ立っていないで、中に入れよ」

昨日よりも、クリスターの顔色は大分いいように見えた。

「寝坊したんだよ。昨日、ちょっと寝つきが悪くてさ」

レイフはぎこちなく笑い返しながら病室に入っていく、手にしたビニール袋をクリスターに見えるように持ち上げた。

「これ、差し入れ」

メキシカンのファースト・フードの大きな袋を見て、クリスターはちよつと顔をしかめた。

「おまえ、何人分買ってきたんだ。それに、昼食なら今さっき運ばれてきた所だよ……まだ食べてないけどー」

「病院食なんて、どうせ食った気しないと思ってさ」

そう言いながら、レイフは棚の上に置かれたままの食事のトレイをひょいと覗き込んだ。

「ん、量は少ないけど、結構うまそうじゃん。何で、食わねえの？」

「欲しいなら、おまえにやるよ」

「食わないと元気出ないぞ……そうだ、オレが食べさせてやるよ、兄貴。利き腕は使えないし、左手じゃ、難しそうだもんな。いいから、遠慮するなって」

他人に食べさせてもらうことに抵抗のある素振りを見せるクリスターを、レイフは半ば強引に起こして、ベッドの上に簡易テーブルをセットした。そうして、トレイの上にかけられたラップをはがし、まだほんのり温かさの残っているプラスチックの容器から、チキンの塊をフォークに刺して、クリスターの口元に運んだ。

「ほら、口、開けろよ」

クリスターは居心地の悪そうな顔でレイフをじっと見返したが、

やがて観念したように口を開いて、弟に介助されての食事を始めた。

「慌てなくていいからさ、よく噛んで、食えよ」

「おまえ、母さんみたいなこと言ってるぞ…ああ、全く、この僕がおまえの世話を受けるなんて、情けないな」

「たまには、いいじゃん。思い切り甘えてよ。オレ、クリスターのためなら何でもするからさ、な？」

普段何をするにしても卒がない、器用なクリスターが、今は楽に食事を取ることすらできず、自分の手から与えられるものを黙々と食べている。

レイフは、この奇妙な状況に戸惑い、胸を痛めながらも、これまで兄に対して覚えたことのない強烈な庇護欲をかき立てられていた。

クリスターがレイフの差し出したものを口に含んで、咀嚼し、飲み込む、その様子から、どうしても目を離すことができない。

クリスターが病院食を食べ終わると、レイフは、自分が持つてきた差し入れをいそいそとテーブルの上に並べだした。

クリスターは呆れたように目を丸くして、笑った。

「おいおい、いくらなんでも、こんなに食べきれないよ。僕を豚みたいに太らせる気かい？ 運動もせずに、ベッドにじっと横になっているだけなんだよ？」

レイフはけろりとして言い返す。

「しっかり食べたら、その分早く元気になるって、クリスター…ほらっ」

強引なレイフは、口を大きく開けて見せながら、煮込んだ豆の入ったブリトーをクリスターの顔の前に突きつける。

クリスターは苦笑しながら、ブリトーを掴んだレイフの手に左手を添えるようにして、思い切りよく噛み付いた。

瞬間、クリスターの唇がレイフの指に軽く触れた。びっくりしたレイフは、思わず、手を引っ込めそうになった。

「何？」

クリスターは口を動かしながら、真っ赤になって瞳を揺らしているレイフを怪訝そうに見返す。

「な、何でもない…ああ、確かに、これ、兄貴1人じゃ食いきれないよな。オレも手伝うよ」

動揺を誤魔化すよう、そう言って、レイフはクリスターの前のテーブルからタコスをとりと取り上げた。

それを見るなり、クリスターは説教モードのしかめ面になって、レイフを軽くたしなめる。

「おまえ、こんなジャンク・フードを食べるのはほんとにしろよ。いつも言っているだろう、脂質の取りすぎになる…僕が見ていなくても、食事の内容も考えて、シーズンが始まるまでに体作りはきち

んとやっておけよ。本当は、こんなふうに僕に付き添って時間をつぶすよりも、練習に打ち込んでくれた方がよほどいいんだけど――」

「馬鹿言うなよ、クリスターを放って、練習なんかできるかよ」

すると、クリスターが急に恐い顔になったので、レイフは慌てて視線を逸らした。

ふいに、先程病院の玄関で出会った、フランク・コーチの何か言いたげな表情を思い出した。彼らがクリスターとどんな話をしたのか気になっていたが、レイフはなぜか尋ねられないでいた。

「……ジュース、もらうよ。クリスターは、コーヒーでいいよな？」

外で買ってきた飲み物をストローで吸いながら、レイフは横目でちらりとクリスターの様子を窺った。

クリスターは、ブリトーの残りをブラックのコーヒーで流し込むようにして食べ終わると、残りはビニール袋に丁寧に戻していった。

（何だよ、せっかくクリスターのためにたくさん買ってきたのにさ）

レイフは胸の内文句を言うが、さっき見たクリスターの顔に浮かんだ怒りの色を思い出すと、気安く彼に話しかけられなくなった。

ランチをすませたレイフは、簡易テーブルやベッドの周りを黙々と片付けたり簡単に掃除をしたりし始めたが、その間もクリスターに対する気まずさがぬぐえなかった。

家ではめったに部屋の掃除などしないレイフがまめに動き回って

いるのを、クリスタは黙って見守っている。

レイフもクリスタも、相手に言いたいこと、尋ねたいことがあるのに、なかなか口火を切るチャンスを見つけれないでいた。

「レイフ」

ついに沈黙を破って話を切り出したのは、クリスタだった。

「おまえが来る直前までフランク・コーチ達が見舞いに来てくれていたんだけど、彼らには会わなかったのかい？」

することもなくなって窓の外をぼんやりと見ていたレイフは、クリスタの試すような声を背中に聞いた途端、ぎくりとした。

「う、うん……？ ああ、そう言えば、玄関を入った所でばったり会ったよ。何だか急いでいたみたいだから、ちょっと挨拶だけして、すぐに別れたんだけど」

クリスタの方を振り返りもせずに、レイフは簡単な返事をした。自然に振る舞おうとしても、その態度にはどこか固さが滲み出ている。

「僕とコーチは、僕が抜けた後のチームの再編について、話し合ったんだ」

クリスタの声は穏やかそのものだったが、それを聞くレイフの心臓は、緊張のあまり今にも破裂しそうだった。

「レイフ、さ来週にはチームメイトも皆戻ってきて、ブラック・ナ

イツは本格的に始動する。結論を先延ばしにしている余裕はない。だから僕は、ドクターの診断を彼らに正確に説明し、今季僕がチームに参加するのは不可能だと伝えたんだ」

そう聞いた瞬間、レイフの頭の中で、何かが弾けた。

「不可能なんかじゃない！」

体ごとクリスターの方に振り向けながら、レイフは噛み付くように叫んだ。

「馬鹿、何てことを言うんだよ、クリスター！ エースのおまえが、そんなに簡単に諦めるのかよ！ そんなこと、認められねえ…：そうだよ、怪我のせいでおまえは気が弱くなってるんだ。大丈夫だよ、クリスター、そんな故障なんか、すぐに治るから」

レイフの切迫した訴えを、クリスターは冷厳とした態度で退けた。

「レイフ、僕は今の自分の状態を正しく認識しているつもりだ。別に悲観しているわけでもない、ただ現実を見て、今後の対策を早急に練る必要があると――」

「何が現実のものか！ おまえは間違ってる…！」

クリスターの言葉を激しく遮ると、レイフは恐怖に駆られたように目を見開き、じりじりと後じさりした。

「レイフ、レイフ、頼むから、落ち着いて、僕の話聞いてくれ。僕がいなくなった後は、おまえが――」

「嫌だ！」

レイフは、辛抱強く言い聞かせようとするクリスターの言葉を思い切りはねつけ、絶対に聞くまいとするかのように両手で耳を塞いで、嫌々をする。

そんな弟を、クリスターはしばし途方に暮れたように見守っていたが、その顔がふいに厳しくなった。

「いい加減にしろ：！」

クリスターはベッドから起き上がってレイフの方に体を向けようとしたが、突然の動作が固定された右肩に響いたのだろう、たちまち低い苦鳴を漏らした。

「ク、クリスター！」

レイフは慌てて、顔を歪めて痛みに耐えているクリスターの傍に駆け寄った。

「大丈夫か？　いきなり動くなんて、無茶だよ」

泣きそうになりながら、おろおろとクリスターの体に手を添えるレイフを、彼は青ざめた顔で見上げた。

「ああ、おまえの言うとおりだ、レイフ。今の僕は、これだけの動作にも支障が出る」

はっと息を飲み、とっさに目を逸らそうとするレイフの腕を、クリスターは逃がすまいとするかのごとく左手で掴んだ。

「しっかりその目で見る、レイフ、これが現実だ」

レイフの腕を捕らえたクリスターの手に、ぐっと力が込められる。

「僕が今季の大会に復帰するのは絶望的だ。それどころか、たぶん僕はもう：フットボール・プレイヤーとしては二度と活躍することはできないだろう。僕の選手生命は絶たれたものと言ってもいい」

レイフの体が、衝撃のあまり、大きく震えた。

「そんなこと：そんなことないよ、クリスター：まだちゃんと治療も終わっていないうちから、簡単に諦めるなよ。フットボールやったりや、誰だって怪我はつきものだ：きつと何とかなるよ：」

レイフは苦しげに歯を食いしばり、混乱する頭で必死に言葉を考へ出してなおも訴えかけるが、その声は随分弱々しくなっていた。

「怪我はいつか治っても、僕は完全に元通りにはならないよ。肩に爆弾を抱えたクォーター・バックが、この先どこまでハードなプレイに耐えられると思う：？ 怪我の知らせを聞けば、僕に熱心にアプローチをかけていたカレッジのスカウト連中はきつと見向きもしなくなるはずだ。ましてや、ずっと厳しいプロの世界でやっていくはずがない：そんなに甘いものじゃないんだ、父さんを見たって分かるだろう：？」

駿足で馴らしたランニング・バックだったのに、事故で脚を傷めたがためにプロの世界から去らなければならなくなった父親の例を出されて、レイフは言い返せなくなる。

「そう：僕は二度と：フィールドには立てない：」

ここまで冷静に話していたクリスターが、ふいに込み上げてくる気持ちを抑えきれなくなったかのように、声を詰まらせた。

「ク、クリスター」

ぐらりと傾いだクリスターの体を、レイフは慌てて抱きとめる。

クリスターは、レイフの胸に頭を押し付けて、何とか落ち着きを取り戻そうとするかのごとく、深呼吸した。

「クリスター：な、泣くなよ」

ここに至って兄が初めて見せる動揺に触発されて、レイフはまた涙ぐみそうになった。

クリスターは、レイフの胸に顔を伏せたまま、動かない。

てっきり泣いているのかとレイフは思ったが、再び顔を上げた彼の目に涙はなかった。

「レイフ、今となってはチームをやめるしかない僕の願いを、どうか聞いてほしい」

クリスターは、強い切望を湛えた眼差しでレイフの目を捉えながら、はつきりとした口調で告げた。

「レイフ、僕の代わりに、おまえが先頭に立ってチームを引っ張ってくれ。何があっても必ず勝ちを取れる、強いエースが必要なんだ。

僕だって…できるものなら、優勝という喜びをもう一度体験したかった。僕が果たせなかった夢を、おまえが皆と一緒に叶えてくれ。レイフ、僕の想いの全てを、後はおまえに託したいんだ」

クリスターの振り絞るような訴えは、レイフの震える胸に深く突き刺さった。

「夢…おまえが…オレ達がずっと追いかけてきた…？」

呆然と呟くレイフに向かって、クリスターは深々と頷きかける。

「そうだ、レイフ…僕達の夢をもう一度、今度はおまえの力で現実にしてくれ」

その時、レイフの脳裏に、去年の州大会決勝戦での興奮と感動に満ちた様々なシーンが蘇ってきた。

もちろん、楽にあそこまで行けたわけではない。苦労の汗と涙の末にたどりついた頂点だった。

（もう一度、あそこまで勝ち上るのか…いつも追いかけてきたクリスターの背中を見ることもなく、今度はオレが皆の先頭に立って？）

そこまで考えた途端、レイフはぞっとしたように身震いした。

「レイフ？」

訝しげに問いかけるクリスターに、レイフは傷ついた子供のような無防備な眼差しを向けた。

「独りじゃ嫌だ」

くしゃりと顔を歪めて、ぼろぼろと涙をこぼしだした。

「独りじゃない、チームの皆がいるだろう？」

クリスターははっと息を飲み、しゃくりあげているレイフの頭を引き寄せようとした。

しかし、レイフは彼の手を振りほどいた。ふらふらとドアの下がりながら、恐慌に駆られた顔をして叫んだ。

「駄目だ：おまえの代わりなんて、オレにはできねえ：クリスターのいないブラック・ナイツなんて、想像できねえよっ！」

クリスターの顔が苦しげに歪むのを見たくなくて、レイフはさつと背中を向けると、そのまま逃げるように病室を飛び出した。

「あら、レイフ君？」

廊下に出た所で、レイフは、丁度診察のために訪れたのだろうドクター・オブライエンとぶつかりそうになった。

彼女は、涙に濡れたレイフの顔を見て、目を瞬いた。

「一体どうしたの：？」

どこかヘレナに似た理知的な声が気遣わしげに尋ねてくるが、レイフは悲しみに胸が詰まって答えることもできず、そのまま病室か

ら立ち去った。

「レイフ、戻ってこい！」

クリスターの悲痛な呼び声が後ろの方から聞こえたが、それでもレイフは立ち止まらなかった。

その後、レイフは病院には戻らなかった。

クリスターは弟が戻ってくるのをずっと待っていただろうか。

しかし、クリスターが二度とプレイできないという現実には耐え難く、ましてや彼の代わりにエースとしてチームを率いるという頼みを受け入れる勇気など持てないレイフは、家でラースにクリスターと何かあったのかと尋ねられても答えず、ヘレナさえも避けて、頑なに自分の殻に閉じこもり続けた。

その同じ日の深夜、クリスターが病院で騒ぎを起こした。

「…ええ、消灯になるまでは、クリスター君には何も変わった様子はなかったと看護師から報告を受けています。本当に、突然のことだったので、駆けつけた私も驚きました」

問題が起こった時、クリスターの主治医のドクター・オブライエンはたまたま当直にあたっていたという。

「そうなんです、ひどく興奮して、暴れだして…泣き叫びながら、周りにあるものを掴んで投げつけたり、壊したり、初めは手のつけられない状態でした。私達の呼びかけも、全く聞こえていないようでした。急に感情のコントロールができなくなったようなーそのうち、固定されている右肩の包帯をほどこうとしたので、慌ててとめようとしたが、何しろ彼は力が強いですから…ええ、大丈夫、誰も怪我はしておりません。私が何とか落ち着かせようと話しかけているうちに、次第にクリスター君も平静さを取り戻してきたので、鎮静剤を注射して何とか休ませました」

レイフは診察室の隅っこに所在なげに佇んで、机の前で向き合って低い声で話し合っている母親とドクター・オブライエンの声にじっと聞き耳を立てていた。

「あの子は、何も覚えていないんですか？」

ヘレナの声には、さすがに隠し切れない動揺が滲んでいる。

「そのようです。そして、今朝診察した限り、クリスター君は昨夜起こったことが嘘のように平静です。でも、おそらく、あれは表面的にそう装っているだけで、内面はひどく不安定で脆い状態にあるでしょう。何かあればあんな形で噴出してしまいう程の負のエネルギーが、心の中に溜まっている。それが周囲や自分を傷つける形で出てしまわないかが、案ぜられますね」

ドクター・オブライエンは首を傾げてしばし考えこんだ後、遠慮がちにそっと質問した。

「クリスター君は、普段から、何でも悩みを打ち明けたり相談したりできる相手を、ご家族や親しい友人の中に持っていますか？ 弟さんとはとても仲がいいようですね」

ドクターの目がちらりと自分に向けられるのと同時に、昨日クリスターと言っていたところを見られてしまったことを思い出し、レイフは縮こまった。

「いいえ、あの子は、たとえ親しい相手でも、なかなか本心を話そうとはしません。いつもそうなんです、自分の感情は常に抑制して、決して取り乱した姿など見せようとしない。例え、どれほど身近な親しい家族であっても――」

ヘレナはレイフに背中を向けているため、表情は分からないが、その声はひどく哀しそうに聞こえた。

「そうですか。私は専門ではありませんが：怪我を負ってしまったことは、クリスター君にとって周囲や本人が自覚する以上のショックだったんでしょう。もしかしたら、プロのセラピストにしばらくかかられた方がいいのかもしれませんが。よろしければ、私の知り合いの心理療法士を紹介しましょうか…？」

じっと話を聞いていると段々居たたまれなくなってきたレイフは、そっと部屋を抜け出し、クリスターの病室に向かった。

廊下で擦れ違った看護師達のうちの幾人かが、重々しい足取りで歩いていくレイフをちらちらと窺ってくる。クリスターが昨夜起こした騒動が噂になっているのかもしれない。

取り乱した所を他人に見せるのを極端に嫌うクリスターが、感情を抑えきれずに爆発した。今でも信じられないが、本当のこのようだ。

レイフは、先程ヘレナがドクター相手に話していたことを思い起こした。

（そうだ、クリスターは、どんなに親しい相手でも本心を明かそうとはしない。たとえオレにだって、弱みなど見せない、むしろオレの前ではいつも強くあり続けようとする。今まで、それを当たり前のように思ってきた：オレもクリスターも…）

昨日、クリスターはレイフに、自分はもう二度とフットボールは

できないのだと告げた。

どんなに追い詰められても決して弱音など吐かないクリスターが、あそこまで言わなければならぬほど、彼の状態は絶望的なのだ。

（たぶん僕はもう：フットボール・プレイヤーとしては二度と活躍することはできないだろう。僕の選手生命は絶たれたものと言ってもいい）

同じ台詞を、レイフがもし彼と同じ状態になったとして、平然と言うことなどできるだろうか。できるはずがない。

クリスターだって、本当は泣き喚きたいくらいの気持ちだったのだ。今にも崩れ落ちそうな自分を奮い立たせ、かろうじて冷静を保っていたのだ。

（それもこれもみんな、オレのため…か）

クリスターには、依存心の強いレイフが、自分の怪我によってどれほど不安定になるのかも分かっていた。

しかし、自分と一緒にレイフまでつぶさせるわけにはいかないから、どんなに辛くても我慢して、レイフをなだめ、独り立ちさせようとした。

自分にはもう成し遂げることにできない願いを、何としてもレイフに託そうと、クリスターは必死だったのだ。

（そう、オレを奮い立たせるために、あいつはずっと無理をしていた）

クリスターにエースとしてチームを引っ張ってくれて頼まれた時、レイフは怖気づいた。先頭に立つことなど、とてもできないと思った。そこはいつも、クリスターがいるべき場所だったからだ。

（オレにおまえの代わりがつとまるわけがない。おまえは最高のチーム・リーダーだ、とても真似なんかできるものか。でも、それなら、一体誰にクリスターが今まで背負ってきたものを任せられる…？）

クリスターが去った後、否応なしに、誰かがその責任を引き継ぐことになる。

そこまで思い至った途端、強烈な反発心が、レイフの中に急にわきあがってきた。

（嫌だ。このオレがあいつから直接託されたものを、他の誰かに渡すなんて）

レイフは打たれたようになって、思わず立ち止まった。そこで、いつの間にか自分がクリスターの病室の前まで来ていることに気付いた。

（クリスター）

半分開いたドアの向こうに、ベッドに身を預けてぼんやりと窓の外を眺めているクリスターの横顔が見えた。

どこか放心したような、クリスターには珍しいほど隙のある姿で、レイフが自分をじっと見ていることにも気付かない。

（おまえは、昨夜自分が錯乱したことさえ、覚えていないのか…）

いつだって、誰よりも強く、賢く、完璧だったクリスターが、今はひどくもろく見えた。

（ごめん…兄貴の方がオレよりもずっと辛いのに―オレ、ガキみたいに恐がって、逃げ回ろうとした）

じわりと目の奥が熱くなってくるのを感じた、その時、レイフは後から追いついたヘレナに声をかけられた。

「レイフ、何をしているの？ 病室に入らないの？」

レイフは慌てて、手の甲で目の周りをごしごしこすった。涙を誤魔化すよう、母を振り返って、笑いかけた。

「うん、オレ、今日は、クリスターに会うのはやめとくよ」

レイフの意外な言葉に、ヘレナは訝しげに眉を寄せた。

「どうして？ ここまで来ていて、会わないなんて…？」

しごく当然な母の疑問にどう答えるべきか、レイフは迷ったが、結局、自分の今の気持ちを簡単に説明するのは無理だと割り切って、あっさりとした返答にとどめた。

「クリスターのためにも、オレ、今は他にやらなきゃいけないことがあるんだ」

はっきりした口調でそう言い切って、もう一度ちらりと病室の奥のクリスターの姿に目をやると、レイフは扉から離れた。

「ああ、そうだ、母さんからクリスターに伝えておいてよ」

そのまま踵を返して立ち去りかけたところで、ふと思いつくまま、レイフはヘレナに言った。

「オレ、昨日クリスターが言おうとしたこと、分かったから…兄貴から託されたものは全部オレが引き受けるから、安心してくれって」

何かを吹っ切ったようなレイフの態度に、ヘレナは驚いたように目を見張った。

クリスターが怪我をしてからずっと、びくびく、おどおどしていたレイフが、今はちゃんと背を伸ばして、ヘレナの目をまっすぐに見返している。

何も聞かなくても、ヘレナは直感的に事情を察したようだ。穏やかな理解に満ちた眼差しをレイフの上に注ぎながら、確認するかのように尋ねた。

「そう伝えれば、あの子には分かるのね？　それで…あなたは、今から一体どこに行くつもり？」

それに対して、レイフは歯を見せてにっこりと笑うと、他に行く場所などないとかのごとくきっぱりと答えた。

「学校だよ。シーズンが始まるのはもうすぐだもん。この2、3日休んじまった分、オレ、今から猛練習して取り返さなきゃならない

んだ」

そうして、レイフは、クリスターには会わぬまま、病院を後にした。

（クリスター、オレはおまえの願いどおりにするよ。オレが先頭に立って、チームを引っ張る。必ず今年も優勝する。オレは、もう二度と弱音を吐いたり、泣いたりしないから―安心して、見ていてくれ）

一度は進むべき道を見失いかけたレイフだったが、クリスターの気持ちを受け取ることで、新たに目標とするものができた。

（おまえの夢はオレの夢―だから、絶対に諦めるものか）

今、迷いない心で前に進みだしたレイフは一度も足を止めようともしない、病室に残してきた兄の方を振り返ろうとしなかった。

第7章 F A K E (3)

クリスターが入院して1週間目。

今日は、ウォルターが彼を見舞いに病室を訪れていた。

クリスターが大怪我をした直後は、両親に連絡を取ったり警察との連絡窓口になったりと事後の対応を一手に引き受けてくれた彼だが、ここしばらくは、ジェームズの共犯としての容疑をかけられたアイザックのことで奔走していたため、なかなかクリスターに会いにこれなかったのだという。

「それじゃあアイザックは――まさか、このまま殺人未遂の罪で起訴されることになるんですか？ でも、彼は望んでジェームズに手を貸したわけじゃない、脅されて、無理矢理従わせられていたんです」

コリンの事故の背後にアイザックも絡んでいたことを知った時点で、こうなることはクリスターにもある程度予想はついていたのだが、だからと言って、現実にはすんなりと受け入れるなどできない。

他ならぬ自分が、アイザックがジェームズの罠に落ちる一因となったことを自覚しているクリスターだけに、一層強く、どうにかして彼が処罰を免れる道はないものかと願わずにはいられなかった。

そんなクリスター思いつめた顔をつくづくと眺め、ウォルターは、さすがにずっと休む暇もないだけに幾分疲れを帯びた顔で、ふっと溜息をついた。

「コリンの車に細工をしたのがアイザックであることは事実だが、

銃で脅されたための不可抗力であると、その点は弁護士も強く主張して、何とか不起訴処分に持っていけるようにすると言ってくれている。だが、それだけでは、アイザックが2ヶ月間もジェームズの元に留まり続けた事情を説明するのは難しいからな……」

ウォルターの苦しい胸中を察したクリスターは悩ましげに眉をしかめ、シーツの端を握る手にぐっと力を込めながら、固い口調で呟いた。

「ジェームズは、人の弱点につけこんで、それをうまく利用することで、もともと自分に反抗的な人間ですら意のままに操ってしまう……彼の才能を知らない人間にとっては、理解することは難しいでしょうからね。でも、いざとなれば、僕にも証言する用意があります。アイザックをこんな窮地に追い込んだのは僕の責任——いえ、僕の友人達の多くを巻き込んだ、今回の事件のそもそも発端になったのは、ジェームズと僕の個人的な闘いだったんですから……」

その点については、ウォルターにもクリスターに対し思うことがないわけではなかったのか、否定はしなかったが、かと言って、彼を責めようとしなかった。さすがに怪我人であるクリスターに、きつい態度は取れなかったのかもしれない。

実際、クリスターの肩の負傷が彼のスポーツ選手としての生命を奪うほどのものだと思った、ウォルターの彼に向ける眼差しは、同情と気遣いに満ちていた。

「そう言ってくれるのはありがたいが——クリスター、おまえだって色々大変だろう……しばらく治療に専念した方がいいんじゃないか……？ その……俺も事件の後はばたばたして、おまえの状態にまで気が回らなかったが、その肩、手術することになるのか……？」

話題として触れていいものか迷いながらおずおずと尋ねるウォルターに、クリスターはにこりと笑った。

「いえ、僕も迷ったんですが、今回は手術なしで様子を見ることにしました。もしまた脱臼を起こすようであれば、その時には思い切ったメスを入れることも考えます。このまま保存しても再発の恐れはあるし、手術したらしたで肩の可動域が狭くなる可能性がある……どちらを選択しても、スポーツ選手としては大きなハンデになるでしょう」

「そうか……何というか、残念だったな……来週にはフットボール・チームのオープニング・セレモニーがあるとラースから聞いたが――」

「残念ながら、僕は参加できませんよ。それは今シーズン活躍する選手を激励するためのものですから、引退した僕には出席する資格はありません」

フットボールに対する未練は一切ないとばかりにきっぱりと答えるクリスターの怜悯な顔を、ウォルターはすっと細めた目で探るように見つめた。

「そんなことより、今の僕にとっては、アイザックが受ける措置の方がよほど気がかりです」

炯眼のウォルターには自分の嘘など簡単に見抜かれてしまいそうで、何となく気詰まりになったクリスターは、強引に話をもとに戻した。

「ただ、ミシエルが意識を取り戻したというのは朗報ではありません

ね」

一時は生死の境をさ迷い、危険を脱した後もずっと意識不明の状態で続いていたミシェルだったが、先月末にやっと目覚めたという。まだしばらく治療とリハビリのために入院しなければならぬが、薄紙をはぐように徐々に回復に向かっている。

「そうだな、コリンも2週間前に退院した。昨日、俺は留置されているアイザックの代理として彼に会いにいったんだが、腹を割って色々話した末、今回の件に関しては、彼はアイザックを責めないと言ってくれた。俺は、アイザックがしでかしたことの大きさを考えると、どれほど罵倒されても仕方がないと覚悟していたんだが、コリンはアイザックを許してくれた。自分も危うく殺されかけたというのにな」

ウォルターは、コリンに対する心からの感謝の気持ちのこもった口調で、そう語った。

だが、クリスターは、コリンとアイザックが実際には長い絶交状態にあったこと、そこに至る経緯を知っているだけに、ウォルターのように素直にコリンの寛大さに感激することはなかった。

「：コリンは、そういう奴なんですよ」と、ここは、短い感想を述べるだけにして、つい皮肉を言いたくなるのを堪えた。

単純でまっすぐな正義漢のコリンにとって、親友だったアイザックが事件に絡んでいたことはショックだが、J・Bの卑劣なやり口を知っている彼ならば、もと親友に同情もしただろう。それに、コリンには、ミシェルをかつてアイザックから奪ったことで、彼に対する後ろめたさがずっとあった。

自分を殺しかけたアイザックを憎むよりも許してやる方が、気持ちとしてまだ楽だったのかもしれない。

まあ、悪気はないのだが無神経で鈍いコリンよりも鋭敏なアイザックの方を好ましく感じる、クリスターの彼に対する評価はつい辛口になってしまうのだ。

「ケンパーとも先週末に連絡を取ったんだが、ジェームズ・ブラツクの取調べの進展具合について教えてもらったよ」

ジェームズの名前を聞いたクリスターは、思わず、シーツの端を無意識にいじっていた指先を小さく震わせた。

「取調べ中の事件の詳細を外部に漏らしていいんでしょうかね、全く、ケンパー警部は…」

内心の動揺を相手に気取らせぬよう、努めて平静な顔を装うクリスターは、ウォルターの知らせに呆れたように眉を跳ね上げてみせた。

「打ち明けることのできない極秘事項は、あいつもちゃんと黙っているさ。何の関係もない他人なら――ましてやマスコミなどは論外だが、ただ、事件の当事者であり被害者でもあるおまえには、当然知る権利があるだろうからな、というのが、ケンパーの見解なのさ」

そうして、クリスターはウォルターの口から、あの後ジェームズがどうなったのかを知らされた。

屋敷から発見されたゴードン・ブラツクの死体は詳しく鑑定され

たが、他殺された証拠は見つからず、病気が悪化しての自然死らしいとの意外な結果が出たという。

「もつとも、ジェームズが父親に必要な治療を受けさせずに放置し、意図的に病気を悪化させたという疑いは残るがな。ブラック家の主治医のキャメロンはゴードンの往診をしていたということになっていたが、その実態はなく、カルテなどは偽装されたものだったそうだ。現在キャメロンも参考人として取調べを受けているそうだが、この男のジェームズに対する感情移入は度を越しているとケンパーが気味悪がっていたな。全く、赤の他人に過ぎない相手、それもあんな恐ろしい犯罪者を庇おうなどと普通するか？ まあ、それを言うなら、ジェームズと一緒に逮捕された少年達にもついても同じことが言えるがな」

ウォルターの素朴な疑問に、クリスターはじっと考えを巡らせながら答えた。

「おそらく、彼らもジェームズと離れて長い時間が経てば、ある程度は正気に戻ってくるのでしょうがーいえ、人によっては、もしかしたら呪縛はずっと残るかもしれませんね。僕は以前、子供時代のジェームズを診ていた精神科医に会いましたが、彼はいまだにジェームズに対しては随分同情的でした。ジェームズの危険性にいち早く気づいていたワインスタインでさえ、『不幸なジェームズ』を追い詰めることには消極的だったんです。ジェームズは、これと見込んだ人間を捕まえ、一端自分の味方にしてしまえば二度と裏切られない、魔力のようなもの駆使できるのかもしれませんがね」

クリスターは、あの悪夢のような夜、自分を手に入れようと執拗に迫ってきたジェームズの鬼気迫る姿を思い出し、寒気を覚えたかのように身を震わせた。

(君の胸に深く刻み込まれて一生消えることのない傷跡に、僕はなりたい)

耳の奥に不快な残滓となつてこびりついている、あの嫌な声を必死になつて退けようとしているクリスターにとって、ウォルターが何も気付かず話を続けてくれるのは幸いだった。

「それにしても、分からないのは――どうして、ジェームズは父親の死体を早く処分してしまわなかったのだろうか。他の2人は早々に埋めてしまったのに、なぜゴードンだけはずっと傍に置いていたのか。そこまで父親に執着するなんて、他人に対する情の極端に薄いジェームズだけに、矛盾する行動じゃないか？」

しきりと首を傾げるウォルターを眺め、また少し考え込んだ後、クリスターは、今度は幾分ためらいながら口を開いた。

「たぶん本当は、ジェームズは情が薄い訳じゃなかったんですよ」

ウォルターは、いきなり何を言い出すのかというような、訝しげな顔をした。

「彼はただ、どうしたら人と心を通わせることができるのか分からなかったんです。結果として彼の愛情は、他人を支配し、自分の思い通りに操ろうとする執着という形でしか発揮されることはなかった」

「そうして妹も父親も殺したわけか：ジェームズに愛された人間にとっては、とんだ災難だな。あんな異常者を長い間野放しにしていたことが、そもそも間違いなんだ。クリスター、おまえも危うく同

じような目に合うところだった：そう思うと、全くぞっとするよ」

アイザックに犯罪の片棒を担がせたジェームズには個人的な恨みもあるのだろうが、嫌悪も露に吐き捨てるウォルターを、クリスタ―は複雑な気分で眺めた。

あれほど憎み嫌ったジェームズなのに、他人が彼を否定する言葉を聞いていると胸が疼いて、なぜかあまりいい気分がしなかった。

（ジェームズが捕まって、これでやっと逃げ切れたと安心したのに、僕はまだあいつの影を引きずっているのだろうか。このままゆつくりとジェームズ・ブラックの亡霊に蝕まれ、気がつけば取り込まれて―ああ、嫌だ、そんなことにならないよう、あいつのことなど早く忘れてしまおう）

ふいに、クリスタ―の胸を言いようのない心細さが満ちたした。

レイフは公式練習の始まった今、フットボールに専念して、病院へは毎日夕方遅く、クリスタ―の顔を見にちよつと立ち寄る程度だ。

これまでにないほど熱心に練習に打ち込んでいるレイフを見て満足を感じると同時に、我が侘なことだが、クリスタ―は一抹の寂しさを覚えている。

（もう少し傍にいて欲しいなんて：せっかくその気になっているレイフの集中をかき乱すようなことは言えない：あいつの甘えをはねつけた、この僕が何を馬鹿なことを考えるんだ。ずっとベッドに縛り付けられているせいで、ちよつと気が弱くなっているんだな。じきに退院して自由に動きまわれるようになれば、気分も変わるさ）

ふいに黙り込んでしまったクリスターの顔に漂う寂寥感に気付いたのか、ウォルターはしばし考え込んだ後、用心深く切り出した。

「ダニエルが君に会いたがっていたぞ、クリスター」

クリスターははっと瞬きして、顔を上げた。

「ダニエルの怪我の具合は…どうなんです…？　今も入院中なんですか？」

クリスターとは別の病院に収容されたダニエルとは、ずっと連絡が取れないままだった。

事件を知って、海外の赴任先から慌てて飛んできたダニエルの両親は、息子をこんな目に合わせた原因となったクリスターを快くは思わなかった。ヘレナを通じて、せめて怪我の状態だけでも知らせて欲しいと頼んではいたのだが、今のところ何の音沙汰もない。

（もしかしたら、ダニエルは予想以上に重傷だったのかもしれない…まさか、彼の親が僕を許せないと思うほど…取り返しをつかないようなことになってしまったのだろうか…？）

慄くように大きく見開かれたクリスターの目には、ウォルターを深く追求したい気持ちと、知ってしまうことを恐れる気持ちとがせめぎあっている。

彼の苦しい心の内を察したのか、ウォルターは慎重に言葉を選びながら、答えた。

「もうすぐ退院というわけにはいかないようだが、ダニエルはちゃ

んと回復してきているよ。肩と背中への傷は、それほどひどくはない。ただ監禁中に彼は拷問のようなものを受けたらしく、脚をひどく痛めつけられていてな…医者の話では、もしかしたら障害が少し残るかもしれないということだ」

クリスターは大きく息を吸い込んだ。

「ダニエルは…歩けなくなるんですか…？」

目の前が真っ暗になったような気がして、クリスターは呻くように呟く。

そんな彼に、ウォルターは焦って、手を振った。

「いや、そこまでひどい後遺症が残ることはないだろう。えい、この際はっきり言うが、ダニエルは大腿部を骨折していて、その手術を先日受けたんだ。今は車椅子だが、リハビリを受ければ、ほとんど元通りの生活ができるようになるはずだ」

「でも…完全に同じ体には戻れないかもしれない…」

呆然と呟くクリスターの肩を掴んで、ウォルターは強い口調で言い聞かせた。

「いいか、クリスター、これは別に君のせいじゃないんだ。勘違いをするんじゃない、君がそんな罪悪感に捕らわれることなど、ダニエルは決して望んじやいなかった」

「でも、僕がちゃんとめていれば、ダニエルはあんな目にあわなかった…ジェームズの言ったとおりだ、僕はダニエルの人生を滅茶

苦茶にしてみました」

「おい、俺の話をちゃんと聞け：ダニエルは君にそう受け止められることを何より恐れていたんだ。あの子は、本当に君が好きなんだな：自分が君の重荷になるなんて耐えられないと思っている。そうして、大怪我をした君のことを気遣っていたよ。今度のことで、体もさることながら、君の心が折れてしまうのではないかと心配していた：ダニエルからの伝言だ、こんな時まで意地を張って、平気な顔などしないで、自分が一番傍にいて欲しいと思う人に素直に頼って欲しいとな。こんな状態にある君が今独りきりになってしまうことが何より恐いと―」

「もう、やめてください、ウォルター：」

ダニエルらしい気遣いに溢れた言葉に、クリスターは胸を突かれ、これ以上聞くことには耐えられなくなって、頭を振った。

「僕にはそこまであの子に想ってもらう資格なんてないのに―大体、あの子の方が僕よりよほど酷い目にあったのに、どうして、こんな時まで僕のことばかり：」

「クリスター、クリスター、しっかりしろ：俺はさっき、ダニエルが君に会いたがっていると聞いた。生憎彼は今自力で動くことはできない状態だ。だから、君の方から、彼に会いに行ってみてやれないか：？」

クリスターは微かに肩を揺らした。途方に暮れたような様子で呟いた声は低く、張りがなかった。

「ダニエルに：どんな顔をして会えばいいのか、僕は分からない：」

会うのが恐いんです」

珍しくも弱気になっているクリスター相手にウォルターはしばしどうするか迷う素振りを見せたが、ついに思い切ったように、打ち明けた。

「クリスター、ダニエルは来週この土地を離れることになるんだ」

「え？」

何を言われたかとおっさに分からなくて、クリスターは単純に聞き返した。

「ダニエルの親が、今度のことで大層心配してな、彼を父親の赴任先のイギリスに連れて行くつもりなんだ。残念ながら、君に対しては彼らは気持ちを硬化させていて、このままではダニエルは君に二度と会えないままアメリカを去らなければならない。ダニエルは泣いて嫌がったが、あんな体の子供を1人にさせられないという親の言い分ももっともではある。それにしたって、何も言わずに君と別れるのはあまりにも不憫だ。だから、クリスター、最後に一目、ダニエルに会ってやって欲しい」

クリスターが事情を飲みこみ、そしてそれを現実として受け止め、答えられるようになるまで、少し時間がかかった。

「ダニエルはいつ…ここを離れるんですか？」

クリスターはやっとの思いで、そう尋ねた。

「来週の土曜の午後のフライトだと聞いている…また詳しいことが

分ければ連絡しよう。だから、それまでに、いつでもいいからダニエルを見舞いに行って欲しい。ああ、病院の住所と電話番号を渡しておこう」

「…分かりました。ちょっと考えさせてください…そうですね、外出許可は多分出ると思いますから―」

クリスターはウォルターから渡されたメモを眺めながら、軽い眩暈を覚えたかのように額を押さえた。

「ダニエルが…いなくなる…」

メモを持つ、クリスターの手が微かに震えた。

ダニエルのはにかんだような優しい笑顔が、クリスターの脳裏に浮かびあがる。

どうしたのだろう。胸が苦しい。

「おい、大丈夫か、クリスター？」

ウォルターに声をかけられて、クリスターはひどく驚いたように振り返った。

「あ…すみません、ぼうっとして―」

「本当に大丈夫なのか？ 随分ショックを受けているようだが―」

「少し驚いただけです」

些かむきになってクリスターが否定すると、ウォルターはまだ少し納得しきれない顔をしながらも引き下がった。

（アイザックは拘留中、ダニエルは遠くに行ってしまった：僕の周りから大切だと思っていた人達が去っていく―ああ、そのことが僕は辛いのか）

ただ単に、怪我をして気が弱くなっているだけではないようだ。

もともとクリスターは、対等に付き合える友人となるとかなり選り好みをするため、数は少ない。アイザックもダニエルも、クリスターにとっては自分に近い場所にいる、貴重な相手だった。

（寂しい）

悄々と沈み込んでいたクリスターだったが、ウォルターがちらっと壁の時計を眺めやったのに、目ざとく気がついた。

「ウォルター、他にも用事があるんじゃないですか？ いいんですよ、僕に構わず、行ってください」

クリスターが気を利かせて言うと、ウォルターは少しほっとしたような顔をした。

「うむ：アイザックの件で、弁護士と相談することがあってな。ばたばたしてすまないが、今日はこれで帰らせてもらおうよ。またすぐに見舞いに来るから、ゆっくり養生するんだぞ」

ウォルターは、クリスターの頭を励ますようひと撫でて、おもむろに椅子から立ち上がった。

「僕のことまで心配して駆け回っていたら、いくらあなたでも体がもちませんよ。心配しないでください、自分のことは自分で何とかしますから」

気を取り直して応えるクリスターをウォルターはしばし何か言いたげに見つめ返したが、結局、そのまま病室を出て行った。

ウォルターの背中を凝然と見送った後、クリスターは疲れたようにベッドに横になって、目を瞑った。

（ウォルターにもう少し余裕があれば、相談したいことがなかったわけじゃないけれど、仕方がないな）

ウォルターが息子であるアイザックを優先させるのは当然のことだ。ヘレナやラーズが自分のために心を痛めているのと同じように、彼もアイザックを愛している。それだけのことだ。

（馬鹿、何を心細がっているんだ、僕らしくない―）

真っ白な病室に独りきりでいるのは好かない。病人でなくとも、こんな所に1日中閉じこもっていたら、気が滅入るだろう。

練習に行っているはずのレイフはむろん、ヘレナも今日はまだ来ない。ラーズのオフィスでどうしても彼女を必要とする仕事ができたとかで、遅くなるとは予め聞いている。

全て納得ずみのことなのに、自分だけ世界から取り残されてしまったような気がして、クリスターの中にはイライラがどうしようもなく募っていった。

何もせずにじっとしているということ自体に、もともと耐えられない性質なのだ。

（ああ、あのドクターに頼んで、早く退院させてもらおう…このままじゃ、僕は本当に気が変になってしまう）

ふいに、クリスターは5日前の夜のことを思い出した。

自分がひどく興奮して暴れたということだが、その時の記憶は今でもおぼろげで、現実感がない。

ただひどく苦しくて、何もかもが辛くて堪らず、涙がとまらなかったことは覚えている。

誰でもいいから、この最悪の状態から救い出して欲しいと、滅多なことでは他人を頼らないはずの自分が切に助けを求めている。

（たぶん、僕は―あの時、近くに母さんがいると思っていたんだろうな、レイフが戻っていないことは分かっていたから…だから、あんな勘違いをしてしまったんだ）

何人もの看護師達がクリスターをなだめようと必死だったが、彼は激しく取り乱して手のつけられない状態だったらしい。

そう言われれば、自分に向かって伸ばされてくる幾つもの手を振り払ったり、誰かも知れない相手に威嚇するように唸ったりしたような気もする。全く、今から思えば、赤面ものだ。

そんな時、落ち着いた女の声が、クリスターに呼びかけてきたの

だ。

（クリスター、大丈夫よ…落ち着いて…ここは安全な場所よ。皆、あなたを守り、助けたいと思っているわ）

とっさに振り上げた手をその相手に向かって打ち下ろさなかったのは、穏やかで誠実な口調が母親のヘレナにそっくりだったからだろう。

（安心なさい、誰もあなたを傷つけはしないから―）

クリスターが戸惑っているうちに、その声の主が彼の頭を引き寄せ、子供をあやすように胸に抱いた…。

部屋の扉をノックする音に、クリスターははっと目を見開いた。

「ドクター・オブライエン…」

自分の担当医師の知的で美しい姿を扉の所に認めて、クリスターはついい顔を強張らせた。

「クリスター、気分はどう？」

彼女はきびきびした動作で、クリスターのベッドに近づいてくる。

「すこぶる悪いですよ」

クリスターはにこりともせず、素っ気無い口調で言った。

「たかが腕1本、動きを制限されるだけで、こんなに生活が不自由

になるとは思ってもみなかった。体の他の部分は健康だけに、こうしてベッドにじっとしていることが我慢できなくなってくる。ねえ、先生、僕はいつ退院できるんです？」

「そうね：思った以上に経過はいいようだから、あなたが早く家に戻りたいというのなら、週明けの検査結果を見て、来週いっぱい退院できるようにしてもいいと思うわ。ただし、その場合、しばらくまめに外来に通って、それから決して右肩に負担になるような無理なことはしないよう約束してもらわなければね」

オブライエンの抑制のきいた、穏やかな笑みを凝然と見返しながら、クリスターはまだ何となく不満げに溜息をついた。

「この固定具はやっぱり当分外せそうにないですか？」

「ちゃんと治したいのなら絶対安静が基本です。クリスター、あなた、意外に我慢がきかないのね？」

何だか子供扱いされたようで、クリスターは些かむっとしながらオブライエンを睨んだが、彼女はクリスターの刺々しさに気付いているのかいないのか、更に幾つかクリスターに問診をして、手元のカルテに記入していった。

「：僕をセラピストに一度診せた方がいいと、母さんに勧めたそうですね？　それほど僕はやわに見えますか？」

クリスターが突っかかるような口調で尋ねると、オブライエンはカルテから顔を上げ、ペンを持つ手を顎に軽く添えながら、じっと彼を見つめた。

「そこまで私はあなたのことをよく知らないわ。ただ、あなたのお母さんはあなたをとでも心配して、こう言っていたわ。クリスターは心根が強い分、耐え切れないほどのプレッシャーにさらされた時は、きつと、曲がるのではなく折れてしまうだろうって―」

クリスターは虚を突かれた。つい居たたまれなくなって、どこもなくヘレナを思い出させる、オブライエンの涼やかな眼差しを避けるよう、顔を伏せた。

（ああ、やっぱり僕は相当参っているんだろうな：妙な意地を張っている場合じゃない、母さんの言うとおりだ、ごめんよ）

クリスターが軽い自己嫌悪に陥っていると、何の前触れもなく、病室のドアが勢いよく開かれた。

「クリスター！」

息せき切って部屋に飛び込んできたのは、レイフだった。

レイフはクリスターと目があうと、今日も彼に会えて心から嬉しいという気持ちも頭に、大口を開けて笑った。

「今日は母さんが来られないって聞いたから、オレ、練習終わってすぐ、急いで飛んで来たよ。兄貴が寂しがってるんじゃないかって思ってたさ」

レイフの機嫌のよい顔を見ながら、クリスターは何だかほっとしたような気分になった。

暗く沈みがちな、この病室の雰囲気、いつも元気で騒がしいレ

イフが現われると、たちまち変わる。

「あ、オブライエン先生、こんにちは」

レイフは、微笑を含んだ優しい目で自分を見ている白衣の女性を見つけると、しゃきんと姿勢を正して、挨拶をした。

「こんにちは、レイフ、今練習の帰りなのね。調子はどう？」

「もちろん絶好調ですよ」

オブライエンは、懐っこく笑いかけるレイフと他愛のない言葉を幾つかかわした後、クリスターを振り返って「また明日」と言い残し、病室を出て行った。

彼女が白衣の裾をひらりとさせて去っていくのを、レイフはもの欲しそうな目でじいっと追っていた。

「…おい、女性をそんなにあからさまにじろじろ見るなよ」

渋い顔をしてクリスターがたしなめるが、レイフはあまり気にせず、感心したような口調で言った。

「あの先生、美人でかっこいいよな、独身かなあ、何才だろ？」

「おまえ、そういう失礼なことをドクターにストレートに尋ねたりするなよ」

「なあ、ちょっとうちの母さんに感じが似てないか？」

「うん…」

レイフもそう思うということは、やっぱり似ているのだろう。ならば、自分が彼女に対してした多少の粗相は、大目に見られて然るべきだ。

物凄く格好の悪い、素の自分を見られた恥ずかしさのせいで、クリスターは自分がついドクター・オブライエンに対して反抗的になってしまっていることを自覚していた。

「よかったな、クリスター、あの先生となら、気があって、治療でも何でも気軽に相談できそうじゃん」

「…そこまで積極的に打ち解けようとは思うほど、相性がいいとは思わないよ」

「そんなはずないだろ、クリスターって、もともとから、ああいうタイプ好きじゃん、年上のインテリ女って」

クリスターは露骨に嫌そうに顔をしかめ、レイフのあくまで悪気のない顔を睨みつけた。

「馬鹿言うなよっ」

そのままぷいっと顔を背けてしまうクリスターに、レイフはちよつとびっくりして、続けて軽口を言いかけた口を閉ざした。

「何だよ、今日は随分虫の居所が悪いんだな…何かあったのかよ？」

レイフの呟きに、クリスターは肩を小さく揺らしたが、ウォルタ

ーのもたらした様々なニュースについて思い起こすとまた気持ちがかき乱されそうで、今は打ち明ける気にはなれなかった。

「…別に」

そのまま不機嫌そうに窓の外を睨みつけているクリスターに向けられた、レイフの目がふと怪訝そうに翳ったが、この所ずっと情緒不安定な兄を氣遣ってか、結局彼もそれ以上追求することはなかった。

実際、フットボールに専念することで気持ちを安定させることのできるレイフと病室で無為に過ごす時間の長いクリスターでは、気持ちの持ちように差異が出てくるのは仕方がない。

その後、レイフはすぐにいつもの陽気な調子に戻って、クリスターの気を上向きにしようとしきりと話しかけ、何くれとなく世話を焼いてきたが、クリスターは心あらずの様子でぼんやりと受け流し続けた。

（僕は、これから、どうすればいいんだろう…？）

そんな問いかけがつい頭の中に浮かんできて、クリスターを心細い気持ちにさせている。

（アイザックもダニエルも僕の傍から去っていき、独りきり、退院した所でチームに戻るわけでもない…まるで僕は何ものでもなくなってしまうたような、心もとない気がするな）

安定を取り戻したレイフが、大きな愛情と優しきで弱っている自分を包み込もうとしてくれているのを感じながらも、それに甘えて

寄りかかりたくはない。

そんなことになれば、あれだけの犠牲を払って、レイフを突き放した意味がなくなってしまう。

（分かっている…僕がしたことの結果を引き受けるのは僕でしかないということだ。今は苦しくても、僕が自分で克服しなきゃならない…大丈夫だ、僕だって、レイフのように、きっと立ち直ってみせる）

そう自らに言い聞かせ、打ち明けることできぬ煩悶は、レイフの手の届かぬ、胸の奥に深く封じ込める。

フットボールという将来の大きな夢を失ってしまったクリスターの前に、また別の新たな道が開けてくる兆しは、しかし、今ところまだ訪れてはくれなかった。

第7章 F A K E (4)

レイフは、夕方に差し掛かって涼しい夜気を含んできた風を感じながら、1人、グラウンドに佇んでいた。

今日は、日中はトレーニング・ルームで筋力アップのトレーニングをし、日が翳ってきてからは外に出て、専ら走りこみをしていた。

初めはコーチの監督の下、他のチーム・メイトも一緒に練習していたが、今夜はチームのオープニング・セレモニーがあり、その準備のためにスタッフは早めに引き上げ、チーム・メイトも皆、寮やそれぞれの家に一度戻っていった。

今このグラウンドに残って黙々と自主練習を続けているのは、レイフだけだ。

「おい、レイフ、そろそろあがらないか？」

そうレイフの背中に声をかけたのは、とっくに練習を終えて寮に戻り、シャワーを浴びてさっぱりしてきた顔のトムだった。

「おまえもそろそろ着替えて、準備して来いよ、レイフ」

レイフは、傾いてきた太陽の方をちらりと眺めやりながら、いつの間にこんなに時が経っていたのかと軽く驚いているかのように尋ねた。

「今、何時かな…？」

「もう6時前だよ。おまえさ、練習熱心なのはいいけど、あんまり初めから飛ばしすぎると、体を傷めちゃうぞ」

ベンチに坐って親しげに声をかけてくる親友の方を振り向いて、レイフはふっと笑った。

「ん：そうだな、オレもそろそろあがるよ。最後にさ、久々にタイム測っておきたいから、計測を頼むよ」

「全く、かつてのサボリ魔が今はチーム一の練習の鬼なんだから、信じられねえ変わりようだよな。コーチ達は、やっとおまえがその気になってくれたって、泣いて喜んでそうだけど…」

トムがベンチの上からストップ・ウォッチを取り上げて、軽い足取りで近づいてくるのへ、レイフは苦笑を含んだ目を向けた。

「のんびりサボってなんかいられないよ。これまでとは違うからな：負っているものの重みが―」

トムは何かしらはっとしたように、レイフを見た。無邪気に好きなスポーツを楽しんで、それ以外のことはあまり深く考えようとしてこなかったレイフが、今は強い使命感にでも駆られたような、厳しく、揺ぎない目をしている。

クリスターがいない今、自分がエースとして先頭に立つことで、開幕前に動揺も激しいチーム・メイトを勇気付けなければならないとでも思っているのだろう。

クリスター不在の心細さをやはり抱えているトムは、神妙な気分になりながら、そんなレイフのために自分もできる限りのことをし

ようと心に誓った。

レイフは50ヤード走用のスタートラインの位置に移動し、構えた。そのまま鋭い目でゴール地点を見据え、微動だにしない。

「何か、すげえマジなのな」

陸上部でもレイフと一緒にトムは、彼が走る所など見慣れているはずだが、大きな大会でもこれほどの集中力を発揮するレイフを見るのはまれだという気がして、ただのタイム計測なのに軽い緊張感を覚えるほどだった。

トムが発した合図と共に、レイフは弾丸のようなスタート・ダッシュを切った。

数瞬後、トムは思わず唸った。

「うわっ…」

その迫力につい圧倒されたかのように身を引くトムのすぐ前を、レイフが凄い勢いで駆けぬけていく。

砂埃を撒き散らして立ち止まったレイフは、素早くトムを振り返り、まっすぐに問いを投げかけた。

「何秒だ？」

すっかり気を飲まれていたトムは、レイフの呼びかけを聞いて、我に返ったように瞬きをした。

「あ…ああ…」

トムは汗ばんだ手の内にぐっと握り締めていたストップ・ウォッチを慌てて覗き込んだ。その両目が信じられないように見開かれる。

「トム？」

訝しげに眉を寄せてゆっくりと近づいてくるレイフを、トムは茫然と見上げた。

「おまえが3年前に出した、自己ベストって何秒だっけ？」

レイフはちよつと首を傾げて、考え込んだ。

「うーん、4・30ジャストだったけど…？」

その後長いスランプに入ったレイフは、陸上の大会でも新記録を出した、絶好調だった時期の自分に戻ることはできなかった。しかし―。

「見ろよ、これ！」

やけにはしゃいだ声をあげるトムが突き出したストップ・ウォッチを、レイフはしげしげと見た。

4・28秒。僅かだが、かつての自分を超えた、自己ベスト・タイムだ。

レイフは、ストップ・ウォッチが掲示する数字を睨みつけたまま、手で顎の辺りをゆっくりと撫でた。

「：おまえさ、何か、ずるした？」

実感がなくて、レイフが指先で頬をかきながらぼつりと言うと、こちらは打って変わってひどく興奮したトムが言い返す。

「するかよ、馬鹿っ。おまえが、今、これだけすごいタイムを叩き出したんだよっ。そういや、確かに、夏休み前の陸上部での練習見せて、調子いいなとは思ってたけどー冗談じゃなく、その気になったら、オリンピックとかでも目指せちゃうんじゃないか？」

かつてのレイフの走りに惚れ込んでいたトムが我がことのように喜ぶのが、ちょっと照れくさく、レイフは言い訳のように呟いた。

「別に、今までだって手を抜いていた訳じゃないんだけどさー」

ただ、これまでもとは背負うものの重みが違う。

（そう、今年もブラック・ナイツは優勝するーそのために、オレは全力を尽くす。クリスターの代わりに、オレが皆を引っ張って、もう一度天辺に立ってやるんだ）

クリスターから託された、エースという大きな責任が、ずっと肝心の所は彼に任せきりだったレイフを本当の本気にさせたのだ。

8月も後半に入った、この夜、ブラック・ナイツのオープニング・セレモニーが開かれた。

会場となったアーバン校のホールは、チーム関係者やその父兄、後援会の人々でにぎわっていた。

念願の初優勝を果たした昨年の記憶はまだ新しい。

今夜は例年以上の人数が、本年度のブラック・ナイツを激励するために集まっているようだ。その多くが、チーム・カラーである黒を身につけていた。

会場の片隅に設けられた売店では、ロゴ入りの帽子やティーシャツなどが飛ぶように売れている。

そうして、今夜の主役であるフットボール・チーム、黒のジャージに身を包んだ彼らは、ホールの奥の舞台の上に、華やかなチャ・リーダーの少女達と向かい合う形で、並んでいた。

眩しいライトと客席からかけられる声援を浴びて、そわそわしたり、はしゃいだり、ふざけあったりしている少年達の中に、レイフもいた。

普段ならば、この場の華々しい雰囲気にもまれ、舞い上がって、誰よりも騒がしそうなレイフだが、今夜に限っては、ただはしゃいでばかりではなかった。

気心の知れた仲間の中でリラックスしているようでいて、じっと周囲に目を配り、ちよっと気になる相手には声をかけたり、調子を

尋ねたりしている。

クリスターが怪我のために戦線を離脱したというニュースを合同練習の開始日にいきなり聞かされた時には相当浮き足立った彼らも、今は表面上は落ち着き取り戻していた。しかし、皆口に出すところはないが、クリスター抜きで大丈夫なのか、去年のように勝てるのかという不安を払拭することはできていない。

特にクリスターが抜けた大きな穴を埋めることになるオフェンス陣、中でも、昨年までは控えのクォーター・バックだったショーン・マイルズは、早くも凄まじいプレッシャーと闘っているように見えた。

無理もない。あのクリスター・オルソンの代わりを務めるのだ。

「力をぬけよ、ショーン、まだ今シーズンは一試合も始まっちゃいないんだぜ。今は何も考えずに、このお祭り騒ぎを楽しめよ。それに、試合になったらさ、とにかくオレにボールを渡してくれりゃいいんだよ。そうすりゃ、後は何とかするからさ」

レイフが、ショーンの緊張した肩を叩きながら軽い調子で励ますと、彼は少しほっとしたような顔をした。

チームの皆にとって意外だったのが、クリスターの突然の怪我によって他の誰よりも動揺するはずのレイフが、平常心を保っていることだった。まるで去年と何一つ状況は変わっていないかのように黙々と練習に打ち込んでいる彼のおかげで、他のチーム・メイトもコーチ達が案じたほど混乱することはなかった。

もっとも、好きなことしかしない、気分屋のレイフのそんな変貌

ぶりこそが、去年とは大きく違うことの表れでもあったのだ。

大勢の観客を前にして誇らしげな校長の演説から始まったセレモニーは、昨シーズンのハイライトを記録したビデオの上映で一気に盛り上がった。

時折、『ブラック・ナイツ』という掛け声や拍手があがる中、レイフもチーム・メイトと一緒に、舞台から、スクリーンに映し出される懐かしい場面に見入っていた。

レイフがタックルを次から次へと外し、サイドライン際を快走する場面では、わっというどよめきがあがって、彼をくすぐったい気分にした。

他にも多くの名シーンが再現され、見ているうちに、レイフの胸に、去年のシーズン中に燃え盛っていたのと同じ熱い火をかきたてた。

ふいに、ビデオの場面が切り替わり、クリスターを大きく映し出した。

レイフは思わず息を飲み、ここがどこかということも忘れて、ふらふらと椅子から立ち上がりそうになった。

スクリーンの中では、最高の司令塔としてチームを率いた、在りし日のクリスターが鮮やかなロング・パスを決めている。

(あ…)

ずっと平静だったレイフが、その瞬間激しく動揺した。

去年苦楽を共にしたチーム・メイト、卒業していった先輩達以外は皆揃って、今シーズンの始動を前にこうした晴れがましい場を与えられ、大勢から祝福を受けているというのに――。

（どうして、ここにクリスターだけがないのだろうか……？）

そう思うと、押さえつけていた様々な感情が胸の奥からせりあがってきて、レイフを圧倒しようとする。

目の奥がじんじんと痛くなるのを感じ、ここでは泣くまいと歯を食い縛りながら、レイフは、スクリーンの中のクリスターが演じる名プレイを睨みつけていた。

やがて、ビデオ上映が終わり、ホールの明かりが再びついた時には、レイフは何とか気を取り直していた。

「大丈夫か、レイフ？」

肩に手を置いて気遣わしげに囁きかけてきたトムに、レイフは黙って頷き返した。

続いて、セレモニーはフットボール・チームのメンバー紹介に移り、会場は盛大な拍手に沸いた。

メンバーが1人1人、名前を呼ばれて、舞台の中央に進み出る度、参会者達の間からは親しみのこもった声援と拍手が送られる。

それを舞台の後ろで他の仲間達と笑ってはやしたてながら眺めていたレイフは、ふと誰かを探すように、客席を埋めている人々に視

線を巡らせた。

（あ、父さんが来てら。：母さんはいないけど、きっと今頃病院に行ってるんだろうな）

レイフが自分を見つけたことに気付いたのか、ラースが大きく手を振る。それに向かって軽く手を上げた後、レイフは眼差しを伏せた。

（クリスターはやっぱり来ないか：プライドの高いあいつのことだから、怪我を負った自分を人目にさらすことには我慢できないんだ
：）

そんなクリスターの気持ちは痛いほどによく分かるレイフだが、それでも、去年チームを優勝にまで導いた立役者の1人として、何人かの卒業生が招かれているように、彼にもここにいる資格はあるのにと、寂しく思うのだ。

（クリスター、今頃おまえはここから遠く離れたあの病室で何を思っている：？）

また少し切ない気分に乗らわれかけた時、フランクス・コーチの声が聞こえた。

「レイフ・オルソン」

俄然熱気を帯びた拍手と声援が響き渡る中、レイフはぼんやりと顔を上げる。

「ほら、おまえの番だぜ、行って来いよ、レイフ」

トムに肩を押されて、レイフはゆっくりと前に進み出、マイクを手待ち受けるコーチのもとに近づいていった。

フランク・ス・コーチのレイフを見る目は、物思わし気で、これまでになく真剣だった。この厳しい指導者から、こんなふうに熱心に見つめられた記憶など、レイフにはほとんどなかったので、何だか不思議な気がした。

それに、客席から自分に送られる視線の熱さ、声援の凄さにも、些かの戸惑いを覚える。

まるで、この夜一番のスターはレイフであるかのように、彼は他の誰よりも多くの注目を集めていた。

（あれ、何でだろ…？）

素朴に疑問に思った、その時、客席から自分の名前を呼ぶ声に混じって、クリスターと呼びかける声を聞いて、レイフは何だか腑に落ちた気がした。

ここに集まった人々の多くは、既に、かつてのヒーローを襲った悲劇を知って、その不幸を悲しみ、惜しんでいる。そうして、彼と同じ姿をした弟の上に、今、その面影を重ねて見ているのだ。

（ああ、そうか…これは、オレとクリスター、2人分の声援なんだ。あいつはこのセレモニーには出られないけど、それでも今、オレやチームの皆と一緒にここにいる）

そう悟った途端、レイフの顔に素直で晴れやかな、心からの笑み

が浮かんできた。

そうして、いつもレイフに対しては辛口のフランク스가、クリスターの離脱に触れた上で、ブラック・ナイツのエースの名を継ぐのはレイフしかない、また彼がその期待に見事に応えてくれると信じていると言った時、緊張感と共にとてつもない誇らしさを感じた。

フランクスからマイクを向けられて、照れ屋のレイフはいつものらぶつきらぼうに一言コメントするだけのところを、それでは満足できない聴衆の熱心な声援に励まされて、一度はチーム・メイトの列に戻りかけたのを引き返し、改めて、ステージの前に進み出た。

再び暖かい拍手の波がレイフに押し寄せてき、それは、つい去年の夢のような優勝のシーンを想起させて、レイフの胸を強く揺さぶった。

感動のあまり一瞬うまく声が出なかったが、レイフは、すぐに落ち着きを取り戻し、エースにふさわしい堂々たる態度で支援者達に語りかけた。

「誰もが認めていたように、クリスターは最高だった。体力やテクニクだけじゃない、フィールドにあいつ以上のものはないと思わせる強烈な存在感―内に秘めた激しい火みたいなのが、あいつにはあった。あいつに率いられた昨シーズンのブラック・ナイツは無敵だった―そうして、皆も知ってるように、見事に優勝した!」

レイフが声を張り上げると、それに煽られるように一際大きな歓声があがり、広いホールの隅々までを満たし、揺るがした。

その熱狂が鎮まるのを見定め、レイフは再び、今度は幾分抑えた、

真摯で真率な口調で続けた。

「オレはクリスターではないけれど、あいつと同じ火はオレの中にもあって、今も消えない。オレは自分が何をするべきか知っているし、オレにはできるとも信じている。オレは全力でフィールドを走り、相手を抜いて抜きまくって、勝ちを取りに行く」

レイフは、後ろの方で息を詰めて自分を見守っている仲間達を肩越しに振り返り、再び聴衆に向き直った。

すうっと大きく息を吸い込み、レイフは拳を天に向かって突き上げながら、大声で宣言した。

「そうして、今年もオレ達ブラック・ナイツが目指すものはただ1つだ―皆と一緒にもう一度天辺に立ってやるぞ！」

これには、後ろの仲間達もじっとしていられたくなったのか、わっと声をあげるなり、一斉にレイフのもとまで駆け寄って、彼の肩を叩いたり、抱きついたりした。

「この野郎、柄にもなく格好つけやがって、クリスターのまねかよっ」

「おまえがやるっていうなら、オレ達ディフェンス陣もちろん全力でやってやるさ」

「頼りにしてるぜ、エース、誰にも負けない走りを見せろよ」

仲間達の荒っぽい励ましにもみくちにされながら、レイフは笑っていた。

（皆と一緒に、クリスター、おまえもここにいる）

大いに奮起するチームを前に、それを見守る支援者達も熱い拍手と声援を惜しまなかった。

こうして、初めは不安な影を潜めて望んだオープニング・セレモニーだったが、これまでにないほどに盛り上がり、温かい雰囲気にも包まれた、実にいい式として参加した人々の心に刻まれることになったのだ。

第7章 F A K E (5)

その感動的なオープニング・セレモニーから一夜明けた日のことだ。

いつも通り朝早くからトレーニング・ジムに入っていたレイフは、少し遅れてやってきたトムから、思わぬ知らせを聞いた。

「何だって、ダニエルが学校をやめて、海外に行く…?」

青天の霹靂のような話にしばし絶句するレイフに、返って、トムの方が戸惑った。

「おい、知らなかったのか? てっきりクリスターを通じて、おまえにも知らせが行ってるかと思っていたんだが―」

レイフはまだショックが抜け切れないまま、トムに向かって、鋭い口調で言い返した。

「初耳だよ。って、本当なのかよ、その話…おい、おまえは一体誰から聞いたんだ?」

まだ信じられないという顔をしているレイフに、トムは考えこみながら、慎重に口を開いた。

「昨日寮で、ダニエルのルームメイトから聞いたんだ。急なことだけど、自主退学して、あいつの親父さんが仕事で赴任しているロンドンに行くことになったらしい。…体がよくなったら、向こうの学校に編入することになるのかな。まあ、ダニエルが負った怪我や、

J・Bから受けた酷い仕打ちを考えれば、親にしてみりゃ、とてもじゃないけど、このままここにあいつを1人で置いておくことはできなかつたんだろうな」

レイフは打たれたかのように、呆然と立ち尽くした。

「そんな…」

ダニエルがクリスター以上に、ある意味酷い暴行を受けたことは、レイフも知っていた。

そして、ダニエルの両親が、息子を事件に巻き込んだクリスターに非常に立腹しており、オルソン家との接触を一切拒んでいるため、彼がどうしているのなかなか事情が伝わってこないこともあって、密かに気を揉んでいた。

それが、自分達の預かり知らぬ所で、いつの間にかそんなふうの話が決まっていたなどと、何だかだまし討ちでもされたようなショックだった。

それから、レイフは、はたと気付いた。

「クリスターは…ダニエルがいなくなるなんて一言も言ってなかった。そうだ、たぶん、あいつもまだ知らないんだ」

この残酷な知らせを聞いたら、クリスターはどれだけ傷つくだろう。

病室に閉じこもりきりのせいか、この数日間やけに塞ぎがちな兄を思い、レイフの胸はますます痛んだ。

ダニエルはクリスターの恋人だ。そう考えると、レイフの胸中には、なかなか割り切れない、複雑な感情が揺らめきあがったが、さもしい嫉妬よりも、今はこの知らせがクリスターに与える影響の方が気がかりだった。

（クリスターは、以前からダニエルのことをとても可愛がっていた。一時あいつがひどく荒れてたことがあったけど、ダニエルが傍にいてくれたおかげで、それもいつの間にか落ち着いたんだ：クリスターが自分では認めているかどうか分からないけど、あいつはダニエルに支えてもらっている）

そのダニエルが、こんなふう突然手の届かない所に行ってしまった二度と会えないなどということになれば、今また精神的に参加しているクリスターはますます不安定になりかねない。

「おい、それで―ダニエルは、いつボストンを発つんだよ？」

何だか切羽詰った気分でレイフが尋ねると、トムは怯んだような顔をした。

「どうしたんだよ？」

トムの顔に浮かんだ表情に、嫌な予感を覚えながら、レイフは問うた。

「いや、それが―今日なんだ」

「何だって?!」

レイフの大声に驚いた、トレーニング中の他のチーム・メイトが、何事かと一斉にこちらに顔を向けるのに、レイフは慌てて手で口を押さえる。

今更だが、レイフはトムを引っ張って、トレーニング・ルームの隅に移動して、そこで改めて追求した。

「今日ボストンを発つてーおい、一体何時のフライトなんだ？」

「確か、12時丁度発だったと思うよ」

レイフは素早く、後ろの壁にかけられた時計を確認した。

「ローガン空港か：車を病院まで飛ばして、クリスターを連れて行くとしてーぎりぎり間に合うかどうかってところだな」

頭の中で、素早く、これからの段取りを組み立ててみる。大丈夫だ。間に合わせてみせる。

「レイフ…」

レイフは、おろおろと心配そうに見守っているトムを振り返ると、その肩を叩きながら、頼もしげな口調で言った。

「知らせてくれてありがとうよ、トム。おまえが言ってくれなきゃ、手遅れになるとこだった。心配するなって、オレが何としてもクリスターをダニエルに会わせてやるからさ」

そのまま、レイフは取るものもとりにあえず、トレーニング・ルームを飛び出した。

クリスターにこの急な知らせを伝えるため、そして、彼を連れて空港に向かい、ダニエルに一目会わせるために、車を急ぎ走らせて病院に向かった。

（いくら子供が可愛いからって、親って奴は、時に残酷なことをしやがる）

クリスターのもとへ急ぐ途中でも、レイフはともすれば、この強引な決定を下した者に対する率直な怒りをかきたてられそうになった。

こんな時ほど、自分達がまだ世間的には何の力も持たない子供なのだということを思い知らされる。

（ダニエルだって、このままクリスターと引き離されたりしたら、どんなにか悲しむだろうに……ああ、けれど、ダニエルがクリスターと付き合っていることは、たぶんあいつの親は知らないのかな……？ 同性愛だなんて知ったら知ったで、また話がこじれるか）

ダニエルの親が同性愛についてどんな考えを持っているかは知らないが、たぶんクリスターとの関係を喜びはしないだろう。親の権限を行使して、反対し、何としても引き離そうとしても不思議ではない。

レイフはますます苛立って、苦々しく、眉を逆立てた。

（ええい、くそっ、男同士で好きになったって、別にいいじゃないか。あいつらが互いに必要としあっているのなら、それを認めてやってくれよ。ああ、でも――）

そう言う己は、彼らの関係についてどう感じているのか。自問したレイフは軽く煮詰まりそうになった。

同性愛を認めるかどうかではなく、もっと個人的な感情の部分で、彼らを許せるか……？

（クリスターの相棒はオレだけだ、ダニエルにだって、譲れない……そんなことを母さん相手に宣言したこともあったけど――）

クリスターがダニエルと付き合っているのを知ってから、レイフは散々思い悩んだ末に、当分の間静観することに決めた。その後すぐにJ・Bの件で頭が一杯になったため、2人の関係についてはあまり深く考える機会はなかった。

だが、忘れたわけではなかった。レイフだって、やはり傷ついていたのだ。

（そうだとも、オレだって、やきもちくらい焼いたさ。クリスターがオレ以外の誰かの支えを必要としているなんて認めたくなかった……でも、やっぱりオレは、クリスターが大事だから、ダニエルを突然失って、あいつが落胆するのは見たくないし、ダニエルだって……あんなにクリスターのために一生懸命な、いい子のことを憎いなんて思えない。だから、あの2人が傷ついたり、心残りになるような別れ方はさせたくない。そうだ、今は離れるしかなくても、また近いうちにきつと会えるさ……せめて、あいつらが自分の口でそう伝え合えるようにしてやりたい）

そう結論付けて、胸の中のもやもやしたものを吹っ切ったレイフの口元には、やっと明るい笑みが浮かんできた。

（だって、未来のことは、どうなるか分からないじゃないか。あいつらは、いつかまた出会って、新しい関係を始めるかもしれない…）

考えてみれば、イギリスなんて、それほど遠くない。高校を卒業したら立派な大人なんだし、クリスターのことだから、アルバイトで稼いで、やりくりをうまくして、会いたい時にいつでもダニエルに会いにいけるはずだ。

（そうになったら、オレはまたやきもち焼くんだろうなあ。ううん、オレ、もしかしたら損な役回りをしているのかもしれないけど、まあ、いいや。クリスター、オレはただ、おまえに幸せであってほしい）

病院の駐車場に些か強引に車を突っ込むと、レイフは玄関から病室まで、エレベーターなど使わずに、一気に駆けあがった。

「クリスター！」

レイフが荒々しくドアを開くと、クリスターは仰天したように目を瞬きながら、顔を向けた。

「レイフ、一体どうしたんだ？」

戸惑いの混じったクリスターの呼びかけも、とにかく焦りが先立つレイフは、イライラと遮った。

「いいから、早く服を着替えろよ、クリスター」

説明する時間も惜しいとばかり、レイフはクローゼットからクリ

スターのシャツやジーンズを引っ張り出して、ベッドの上に投げ出した。

その様子を、クリスターはじっと押し黙ったまま、眺めている。

「クリスター」

レイフは一瞬、この鬨い傷ついた兄に、大切な人が去っていかうとしている事実を、どんなふうに知らせたらよいのか迷ったが、結局ありのままに伝えることにした。

「気を落ち着けて聞けよ、ダニエルが学校を辞めたんだ。あいつの親が決めたらしい。そうして、すごく急な話なんだが、今日、あいつはボストンを経て、イギリスに行くって――」

レイフが息せき切って話し出した途端、クリスターは慄いたように瞳を見開き、さっと顔を背けてしまった。

それを見たレイフは、たちまちピンときた。啞然となった。

「おい、まさか、おまえ――知っていたのか、ダニエルがこの街から出て行くって……?」

クリスターの手がぐっと握り締められるのを認めながら、レイフは、こここの所クリスターが随分と沈んでいる様子だったことを思い出していた。入院生活のせいでうつになっていたわけではなく、ダニエルのことで落ち込んでいたのだ。

「ああ、1週間ほど前にウォルターから聞かされたよ。残念だし、辛いけれど、ダニエルの親がどうしても彼を連れて行くというのだ

から―仕方ないだろう？」

レイフには全てもう合点がいったのに、まだ平静を装って取り繕おうとするクリスターの頑なな態度に、彼は思わず眉を吊り上げた。

「仕方ないだって：おまえにとって、それだけで片付けられる話じゃないだろう？　大体、知っていたなら、どうして―今日まで、自分からダニエルに会いに行こうとしなかったんだ？　あいつの病院の名前くらいは、知っていたはずだろう？　親に迷惑がられても、一目くらい会ったって構わないじゃないか、遠慮なんかすることねえんだよ、ダニエルはおまえのこ：恋人なんだからっ」

レイフは真剣に訴えるが、クリスターは、そんな話を聞くのは耐え難いというかのごとく、頭を振った。

「僕は―ダニエルに会わす顔がないんだ。僕のせいで、彼はあんなに酷い目にあって、学校を去らなくてはなくなり、体にも大きな障害が残るかもしれない：それなのに、僕がどうしてあの子の前に立てるだろう、何と声をかけることができるだろう」

レイフは、思いもよらない弱音を吐くクリスターを見て、一瞬、言葉を失った。

（全く、こいつは、賢いくせに、どうしてこんな馬鹿なことばかり、思いつめちまうんだろう）

クリスターがダニエルに会いたくないはずがない。それなのに、今言ったようなことをずっとぐるぐると考え続けて、身動きを取れないでいたのだ。

「無責任だし卑怯だとも思ったけれど、僕は、どうしても――」

「うるさいっ！」

レイフはくわっとなつて、まだ言い訳を続けようとするクリスターの言葉を途中で荒々しく遮った。

「それ以上下らないことをぐだぐだ言うな！　ダニエルに会わす顔なんか、この際どうだっていい、要はおまえがどうしたいかなんだ。クリスター、おまえはダニエルに会いたいんだろ？　だったら、素直にそうしろよ。こんな時まで自分の心をごまかすな。いいか、ダニエルはイギリスに行っちゃまうんだぞ、今会いに行かなきゃ、おまえはこの先ずっと後悔する」

レイフのまつすぐな言葉に、クリスターははっと息を吸い込んだ。今更のように、そのことを現実として認識したらしい。

「ダニエルが…行ってしまう…」

苦しげに呟いたかと思うと我が身をかき抱いて身震いする、クリスターを見かねて、レイフは彼を軽く抱擁した。

「さあ、クリスター、もういいから、とにかく空港まで急ごう。大丈夫だ、きつとまだ間に合うよ」

すると、クリスターはそれ以上レイフに逆らうことはせず、黙ったまま、こくりと頷いた。

その後は、二人とも、それ以上時間を無駄にすることはなく、素

早く準備を整えて、病院を飛び出した。

本当は外出許可をもらわなければならなかったのだろうが、そこまでの余裕はなかった。どのみち明日にはクリスマスは退院する予定なのだから、数時間くらい病院から姿を消しても、別に構わないだろう。

クリスマスにとってはおよそ2週間ぶりの外出だが、それが恋人との突然の別れのためなどと、何とも胸が詰まるような話ではないか。

運命というやつは、このところ、やけにクリスマスに厳しい。

つる焦燥感を無表情の仮面の下に封じ込んだままの兄を助手席に乗せて、車を走らせる最中、レイフはそんなやるせない思いを噛み締めていた。

ボストン、ローガン空港。

国際便が幾つも乗り入れている割にはこぢんまりとした地方空港に、レイフとクリスマスが到着したのは、11時過ぎだった。

「急げよ、クリスマスー！」

空港と向き合う形である大きな立体駐車場から空港ビルへと直接つながっている通路を駆け抜け、一階にある出国ロビーに辿り着いた彼らは、ダニエルの姿を必死に探し求めた。

ダニエルが搭乗する便は12時丁度発のブリティッシュ・エアウェイズで、ロビーの上の方に設置された大きな電光掲示板を確認すると、既に『オン・ボード』の表示が出ている。

時間をつぶす場所も特にならないような簡素なロビーなので、大抵の乗客はチェックイン後はさっさとゲートに入ってしまう。

一応ロビーの端から端まで手分けして探してみたが、ダニエルの姿は見つからず、2人は、大勢が列を作って順番を待っている、セキュリティの前で途方に暮れたように立ち尽くした。

「時間的に考えて、もう中に入っちゃったか……」

レイフの悔しげな呟きを聞いたクリスターは暗い顔をして、俯いた。

「クリスター……」

レイフの心配そうな呼びかけを聞いて我に返ったクリスターは、再びちゃんと顔を上げた。

「レイフ、もういいよ……残念だけど、一足遅かったんだ」

レイフの肩に手を置き、大丈夫だというかのごとく頷きかけるクリスター。また無理をして、平気な顔を装おうとしている兄を見て、

レイフはついかったな。

「いいや、よくなんかないっ！」

レイフはクリスターの手を荒々しく払いのけると、搭乗客で込み合うセキュリティのすぐ前まで歩み寄った。

「レイフ？」

怪訝そうなクリスターの声が後を追ってきたが、それも無視し、大きく息を吸い込むと、レイフはいきなり大声で叫んだ。

「ダニエル・フォスター！！！」

もともと声の大きいレイフのあげる大音声は、よく通った。

セキュリティ・チェックを待つ人々は一体何かとぎよつとなり、あるいは半分飛び上がりそうになりながら、自分達のすぐ傍で仁王立ちしている大男を振り返り、その真剣な面持ちに恐れおののいたかのように、慌てて彼から遠ざかろうとする。

「ダニエル、聞こえるか、ダニエル・フォスター！ クリスターがおまえに会いに来ているぞ。早く、出てこいっ！」

恥とか遠慮という概念は、この際無視して、ターミナル中に響き渡れとばかり、大声で呼ばわり続けるレイフの目は据わっている。

「レ、レイフっ」

一体何をしでかすのかと赤くなったり青くなったりしながら、レ

イフのもとにすぐに駆け寄ってきたクリスターが、その腕を掴んで、揺さぶった。

「馬鹿、こんな場所で妙な騒ぎを起こすな。不審者だと思われたら、面倒だぞ」

クリスターがそう心配するのももつともで、既に近くにいた警備員達がレイフの行動に不審な眼差しを向けて、じっと様子を窺いながら、近づきつつある。

「だって、せっかくここまで来たのに、もしかしたらまだ傍にいてもかもしれないのに、ダニエルをみすみす諦めることなんてできないじゃないか…オレは、クリスターにそんな口惜しい思いなんかさせたくないんだ」

「レイフ…」

まるで自分のことのように必死になっているレイフの顔を見て、クリスターは絶句した。

喉の奥に何かつかえたように微かに喘いだ後、彼は、やっこの思いで再び口を開いた。

「いいんだ、レイフ―僕のこと、おまえまで、そんなふうに心を痛めるのは―」

たどたどしくクリスターが言いかけた、その時、セキュリティ・ゾーンのシールドの向こうからちよつとした騒ぎが聞こえてきた。

レイフとクリスターは弾かれたように顔を上げて、シールドの向

こうに視線をやった。

「おい、あれって、もしかして―」

レイフはクリスターの腕を掴み、期待のこもった口調で囁きかけたが、彼は息を詰めて見守るばかりで、何も応えようとはしなかった。

やがて、ざわめきたつ乗客達が左右に分かれ、その向こうから車椅子に乗った小柄な少年が姿を現した瞬間、レイフは思わず小さな快哉をあげていた。

「クリスターさん!？」

切迫した小さな顔が必死になって何かを探し求めるように辺りをきよろきよろと眺め回し、ついに、客達の向こうに立ち尽くしている赤い髪をした長身の男を見つける。

「クリスター…さん…!」

たちまち、その大きな青い瞳が潤み、声が震えるのが、ここからでも分かった。

「ダニエル…」

クリスターは呆然と、その名前を呼んだ、

ダニエルは懸命に車椅子を操ってクリスターに近づこうとし、ついには我慢しきれなくなったかのように、自分の足でふらふらと立ち上がった。

「ダニエル！」

クリスターは堪えきれなくなったかのように、自分に向かって両手を差し出しているダニエルのもとへと駆け出した。

「馬鹿、動くな…」

ダニエルは、クリスターに近づこうと歩き出しかけたものの、手術したばかりの体には到底無理なことで、すぐによろめいて転倒しそうなる。

クリスターも怪我をしているのはダニエルと同じだが、もともとの体の造りと体力が違う。以前と少しも変わらぬ俊敏さで動いた彼は、無事な方の左腕を素早く伸ばすと、ダニエルの小柄な体をすくい上げるようにして、しっかりと抱きとめた。

「クリスターさん、クリスターさん…」

ダニエルはクリスターの胸にしがみつきながら呼びかけるが、その声は溢れ出す涙と嗚咽の中に紛れて、それ以上は言葉にならない。

クリスターは、そんな彼の頭をあやすように撫でながら、何事か囁きかけている。

彼らの向こうには、ダニエルに付き添っている母親らしい人の姿が見えたが、この短い時間の中で懸命に互いの想いを伝えようとしている2人を前に、彼女も言葉を差し挟むことはできないようだった。

（ああ、よかったなあ、クリスター）

ダニエルと親密に語り合っているクリスターは、このところずっと張り詰めていたものが解けて、めったに見られないほど素直な、年相応に若者らしい表情をしていた。

その厳しい瞳は和らいで、しっとりと濡れている。もちろん、辛いし、哀しいのだろうが、少なくともこうして顔を合わせて言葉をかわすことができたおかげで、絶望的な暗さはぬぐいさられていた。

そうして、遠慮がちに少し離れた場所に立ちながら2人の様子を静かに見守るレイフも、切ないながらも、満ち足りたような穏やかな気分になっていた。

（あ、あれ…？）

微笑みながら、うんうんとしきりに頷いていたレイフは、ふいに、目から涙が零れ落ちたのにびっくりとして、手で押さえた。

自分のことじゃないのに、おかしくなりに気持ちぐらぐらと揺れ動いて、胸の奥から熱いものがこみ上げてくる。

（ああ、また伝染しちまった…ったく、参るぜ）

クリスターの感情が伝わって、つい涙目になっている自分を笑いながら、レイフはさり気なく壁の方に移動して、人目を避けることにした。

ダニエルを見送った後、レイフは意気揚々と車を停めてある立体駐車場まで戻っていった。その後ろを、クリスターが黙然とついていく。

「ほら、オレの言ったように、ちゃんと間に合っただろう？」

「うん」

クリスターの声がまた少し沈んでいたので、気になったレイフが振り向くと、彼は駐車場の向こうに建つ空港施設の方をぼんやりと眺めていた。

丁度、建物の陰から、離陸した飛行機が空高く上がっていくところだった。

レイフはクリスターに倣って、しばし目を細めて、どんどん空に昇って小さくなっていく機体を追った。

それがダニエルが乗っている機かどうかは分からないが、切なげな眼差しで遠くになっていく機体をじっと見送っているクリスターの心中は、レイフにはよく分かった。

（本当に、素直でない奴）

懸命に何かを堪えるかのごとく微動だにしないクリスターの背中を、レイフはしばらくの間、車に寄りかかりながら見守っていた。

ふっと溜息をつくど、ゆっくりと近づいていき、その肩に手を置いた。

触れられた途端、クリスターはびくつと身を震わせる。

「こんな時まで、無理すんなよ、クリスター」

低く柔らかな声で囁きかけると、レイフはクリスターの顔は見ないようにしながら、その体を引き寄せ、ぎゅっと抱きしめた。

「ダニエルと別れて辛いのは、おまえにとって当たり前のことじゃないか。平気なふりをする事なんてねえんだ。泣きたけりゃ素直に泣いて、胸に溜め込んだものは全部吐き出しちまえよ。その方がよほど気分がすっきりして、楽になれるぜ」

クリスターは声に出しては何も応えなかったが、レイフの手をはねのけることはせず、その抱擁におとなしく身を委ねている。

レイフが辛抱強く待っていると、やがて、クリスターの頭がレイフの肩の上にそっと置かれ、微かな震えがそこからレイフの体に伝わってきた。

（クリスターが、泣いている）

抑制された、ごく静かな嗚咽に耳を傾けながら、レイフは、胸の中心から切ないながらも温かな感情がじわじわと広がっていくのを覚えていた。

（どうせ泣くなら、遠慮なんてせずに、もっと盛大に声をあげて泣けよ。ほら、オレはこうしてお前の傍にいて、黙って受け止めてい

てやるからさ)

クリスターの肩越しに空港の彼方に広がる青い空を睨みつけている、レイフの目はいつの間にか潤んでいた。

(クリスター)

涙と共にこみ上げてくる愛しさに、胸が詰まりそうになる。

(おまえが二度と傷ついたり悲しんだりすることがないように、おまえがいつも幸福でいられるように：オレは全力を尽くす)

レイフはクリスターの体に回した腕にぐっと力を込めながら、祈るかのごとく、心の中でそっと語りかけていた。

(オレはおまえを守り、幸福にするために生きているんだよ、クリスター。この世に、おまえ以上に大切なものなどあるものか)

たとえば、人として許されないことでも、誰からも理解されないことだとしても、胸の奥から自然に溢れ出してくる、この熱い想いはごまかせない。

(おまえを愛している―)

そのまま駐車場の片隅でレイフとクリスターがじっと身を寄せあっていた、その時、たまたま入り口から入ってきた男が、2人見つけて、ぎよっとなったように立ち尽くした。

他人の視線に気付いたクリスターが、怯えたように身を固くする。

(せっかくなのに、邪魔しやがって)

レイフは眉根を寄せながら頭を傾けて、ぽかんと口を開けて自分達に見入っている中年の男を不機嫌そうに睨みつけた。どこか非難がましく感じられる他人の注視に悪びれるどころか、開き直って、にやりと不敵な顔で笑いながら言い放った。

「何、人のことを物珍しげにじろじろ眺めてやがるんだよ、おっさん。双子を見るのは初めてなのかい？」

その言葉に男は震え上がった。慌てふためきながら逃げていく男を、レイフはクリスターと一緒に見送り、それから、顔を見合わせて笑いあった。

「さ、そろそろ病院に戻ろうか、兄貴。ホームシックだったって、どうせ明日は退院なんだ、後一晩くらい我慢できるだろ？」

レイフがからかうように言うと、クリスターはむっとしたように目を細めて、レイフのわき腹を軽く小突いた。

「僕がちょっと弱みを見せたからって、調子に乗るなよ」

「今更照れなくなっちゃっていいじゃん。なあ、これからたまにはあんなふうに素直になってよ、可愛いから」

レイフは、へらへら笑いながらクリスターにじゃれつこうとするが、思い切り足を踏まれて悲鳴をあげる。

「兄貴をからかうな」

「ひっでーな」

ぎゃあぎゃあと大げさに喚きだすレイフ相手に、いつもの素っ気無い調子で返すクリスターは、晴れ晴れとした顔になっていた。

少なくとも今は、レイフの腕の中で流した涙と共に、ダニエルとの別離がもたらした痛みも薄らいだように見える。

レイフは安堵の息をつきながら、ここに来るまでとは随分様子の変わったクリスターを助手席に乗せて、帰路に着くべく、車を発進させた。

第7章 F A K E (6)

クリスターは先程からずっと、緊張した面持ちで、時々学校帰りに利用するカフェの奥まった場所にある席に坐っていた。

以前はよくダニエルやアイザックとここに立ち寄り、特にJ・Bとの攻防を繰り広げた頃には何時間もねばって―店にとっては迷惑だったかもしれないが、学校関係の知り合いと出くわすことはめったにない穴場だったので重宝したのだ―作戦会議をすることもあった。

今となっては、遠い昔のことのようだ。

落ちつかなげに窓の外を眺めやり、街路を行きかう人々の上に視線をさ迷わせ、クリスターは溜息をついた。

腕時計の時間を確かめると、約束の5時を少し回った所だ。

(本当に、ここに来るんだろうか…? やっぱり僕の顔などもう見たくないと気を変えてしまったのかも―)

そんな不安が胸に差すのを覚えた時、店の扉が大きく開いて、どこか慌てた様子の1人の客が中に入ってきた。

クリスターは弾かれたように、そちらを振り返った。

店の扉を入った所で、誰かを探すようにきよろきよろと辺りを見渡している、ひよろりと痩せた黒髪の青年―その視線が、じっと息を詰めて固まっているクリスターの方について向けられる。

その張り詰めた顔を見た瞬間、クリスターの胸の沸きあがった感情は、とても一言では言い表せないものだった。

とにもかくにもお互い自由の身となってこうして会えたという喜び。あまりにも多くの犠牲を払わせてしまったという負い目。あの時ああしていればよかったのという様々な後悔が一斉に押し寄せてきて、束の間、クリスターの声を封じた。

「アイザック」

やっこの思いで、クリスターは久しぶりに会う友人に呼びかけた。その声は僅かに震えていた。

「クリスター…」

アイザックのクリスターに対する感情も、やはり相当に複雑なものなのだろう。

顎が尖って見えるほどに痩せた、その顔を微かに強張らせ、アイザックはその場に凍りついたように立ち尽くした。

しかし、大きく見開かれた黒い瞳は、強い光を放って、クリスターの上にひたと当てられている。

本当は、互いに対してこんな後ろめたさを覚えてしまうような関係になるはずではなかった。もっと早くに様々な誤解を解く努力を払っていれば、かけかけえのない親友同士として、今でも一緒にいられただろう。

だが、2人の間に実際起こってしまった出来事は、今更変えられない。

ようやく、アイザックは意を決したように、クリスターのテーブルに近づいてきた。

「久しぶりだね」

勇気を振り絞って、クリスターは声をかけた。

「ああ：あの大修羅場の一夜から、もうじきひと月になるのか：」

アイザックはクリスターの三角巾で固定された肩を見て、痛ましげに眉をしかめ、ぎゅっと唇を引き結んだ。

「突っ立ってないで坐れよ、アイザック」

微苦笑混じりにクリスターが促すのに従って、アイザックは彼の前の席に身を落ち着けた。

「その肩：ちゃんと治るんだよね？」

「完治させたいなら、時間をかけて慎重に治療した方がいいそうだよ。でも、来週辺りには、この厄介な固定は取れて、様子を見ながらのリハビリとトレーニングが始まる予定さ。さすがに以前のようにはハードなスポーツをするのは無理でも、日常生活に支障が出ることはないと思うよ」

既に達観したような穏やかさで応えるクリスターから、アイザックは居たたまれなくなっただかのように顔を背けた。そうして、急に

こみ上げてきたやり場の無い怒りに任せてテーブルを打った。

「畜生……！」

店にいた他の客達が一瞬うろんそうな顔を向けてきたが、クリスターがじろりと一瞥するのに慌てて目を逸らした。

「こんなことになるのなら、やっぱり、あの時、おまえ1人をあそこに残して行くんじゃないかった。何としても、一緒に脱出するべきだった……いいや、俺が代わりに残っていればよかったんだ。ああ、これも俺のせいだ、俺がJ・Bの手管にまんまと引っかかって、おまえらを裏切るような真似をしたから――」

澱のようにならずと心の奥底で凝っていた感情を吐き出すアイザックを、クリスターは懸命に宥めようとする。

「アイザック、馬鹿なことを言わないでくれ。僕がこんな目にあつたのは、いわば身から出た錆だよ。むしろ僕は、君をこんな窮地に追い込んだ自分が許せないくらいだ……入院中、君の事は時々訪ねてくれるウォルターから聞いていたけれど、僕のせいで君が犯罪者として裁かれることになったらと思うと居ても立ってもいられなかった。だから、君の不起訴処分が決まって、僕がどんなに胸を撫で下ろしたとか。本当によかった、アイザック……そうして、今日ここで僕に会ってくれたことにも感謝するよ。僕は、君にどれほど恨まれても仕方がない人間だからね」

「何、馬鹿なこと言ってるんだよ。大体、俺の方こそ、勝手な思い込みでおまえを恨んで……いや、もうこんな話はやめよう。きりのない繰言になっちゃう」

「そうだね」

丁度カフェのウェイトレスが注文を取りに来たので、それを頃合に、2人は話題を変えることにした。

「レイフの奴は、どうしてるんだ？」

アイザックが、努めて、以前のような自然さを取り戻そうとしながら、口を開いた。

「うん、元気でやってるよ。待ちに待ったシーズンが始まってからはフットボール三昧で、調子もいいようだし、あいつにとって今は一番充実した時期じゃないかな」

「おいおい、他人事みたいな顔して、とぼけるなよ。おまえがレイフのコンディションをチェックしてないわけがないだろ」

クリスターがわざとはぐらかすような返事をする、アイザックはつい生来の癖が出て、追及口調になる。

「今はそれほどでもないさ。さすがに、口ばかり出してうるさがるのも嫌だから、影ながら見守るにとどめているよ」

「プレシーズン・ゲームからこっち、ブラック・ナイツが下馬評を覆す連戦連勝だったのは、俺も聞いているよ。こう言っちゃなんだが、予想外だった。シーズン直前におまえが…こんなことになって、チーム・メイトは皆大きなショックを受けただろう、きっと、そのダメージを引きずって、下手すりゃがたがたになっちまうんじゃないかって思ったよ」

「僕も：それについては、とても心配して、怪我をした直後にフランク・コーチとも色々話し合ったよ。どうすれば、皆の精神的なショックを和らげることができるか、チーム全体が浮き足立つことなく、シーズンを迎えられるかが、第一の課題だった。まあ、そうは言っても、僕にできることは実際ほとんどない：僕とコーチの結論は、レイフを中心にチームを立て直すこと、レイフにエースとしての自覚と責任に目覚めてもらい、チームのまとめ役として立つてもらうことだった」

「それは、レイフにしてみれば、降って沸いたような話で、さぞ戸惑ったことだろうなあ」

「ああ。でも、どうしてもレイフに引き受けてもらうしかなかった。そのために、僕も必死でレイフを説き伏せたよ：初めは怯んで、逃げ出そうとさえしたレイフだったけれど、ついには覚悟を決めてくれた。あいつが毅然として立つことで、チームもいい感じでまどまどすることができたんだ」

「ふうん：でもさ、あの甘ったれのレイフが、おまえなしで本当にうまくやれるのか？」

揶揄するようなアイザックの口調には若干の疑いがにじんでいる。新聞部の部長として、フットボール・チームの取材にも熱心だった彼のレイフに対する評価は、残念ながら、少々厳しかった。

それに対し、クリスターは軽く眉を跳ね上げながら、自信ありげに断言する。

「そんな心配は無用だよ、アイザック。レイフは、エースして立派にチームを引っ張ってくれているよ。あいつは変わった。僕がいな

くても大丈夫どころか、今やっとあいつは本来の実力を存分に出来るようになったんだと思うよ」

アイザックは腕組をして、しばし難しい顔で考え込んだ。

「でもさ、エースだなんて、面倒なことの苦手なあいつに務まるのか？ それも、あいつは『完璧なクリスター』の跡を継いだようなものなんだ。ポジションが違うから関係ないなんてことはない、おまえに匹敵する存在感を発揮しないことには、エースだなんて認めてもらえない。その点、今のQBよりもしんどいだろう。どうしてもあいつの上におまえの面影を重ねちゃう、周囲から受けるプレッシャーは相当きついはずだぜ。実力はあってもいざって時に頼りにならない、精神面での幼さが、あいつの最大の弱点だったじゃん」

さすがに鋭い所をついてくる、アイザックの分析に、クリスターは手厳しいなとばかりに顔をしかめた。

（もしも今レイフがここにいて、この辛辣な批評を聞かされたらどんな反応をしただろうか）

ふと、ここにはいない弟の上に、クリスターは思いを馳せた。

（真っ赤になって怒り出すかもしれない。それとも、結果を出すことで自信をつけつつある、確かに僕が見ても変わったなと思える今のレイフなら、多少の辛口批評には動じない余裕を見せて、軽く笑い飛ばすだろうか）

やがて、クリスターの口元には、ゆったりとした笑みが広がっていった。

「そりゃ、最初は僕も、いきなり大きな責任を背負うことになったレイフが、エースとしての重圧に耐え切れるのか、少しは心配したよ。でも、実際シーズンが始まってみれば、それさえも杞憂だったと分かったんだ。まあ、覚悟を決めればあいつも変わるだろうとは思っていたけれど、予想以上の変貌振りには、さすがの僕も驚いたかな」

クリスターの顔に、何とも満足そうで誇らしげな、しかしどこか寂しげでもある表情が浮かぶのを、アイザックはじっと見守った。

「レイフは確かに気分屋で、自己を制御するのは苦手だけれど…僕は、そんなしようない弟をその気にさせることが昔から得意だったんだ」

クリスターは、何かしら遠い眼差しをしてぽつりと呟いたが、その小さな呟きは、コーヒーを運んできたウェイトレスによって遮られたため、アイザックの耳には入らなかったようだ。

アイザックは、熱いコーヒーを一口すすった後、思案顔のクリスターを見上げ、にやりと笑った。

「ふうん…おまえがそこまで言い切るなら、間違いはなさそうだな。俺も、変身したレイフの活躍ぶりに興味がわいたよ。ブラック・ナイツの次の試合でも、体が空いてりゃ、見に行こうかな。そうだ、おまえもどうせ応援しに行くんだろ？　なら、一緒にどうだよ？」

アイザックが誘うのにクリスターはちよつと迷うような顔をした。しかし、結局きっぱりと首を横に振った。

「いや、僕はやめておくよ…ああ、そんながっかりした顔をしない

でくれ。実は、今シーズンが始まってから、僕は一度もブラック・ナイトの試合は見に行っていないんだ」

「見に行っていないって…何でまた…？」

不審そうに眉を寄せて追求しかけたアイザックだが、クリスターの肩に巻かれた包帯に目をやって、開きかけた口を閉ざした。

「まあ、僕もまだ、フットボールの試合を落ち着いて観戦できるほどには、心情的に回復していないってことかな。それに、僕が姿を見せたら、返って、今絶好調のレイフの集中力をかき乱してしまいそうな気もするし—」

クリスターは悩ましげに溜息をついた。

「クリスター、おまえの気持ちは分からないでもないけれど、レイフはきっと、おまえに自分のプレイを見てもらいたがってると思うぜ。思い切って、ちらっとでも見に行ってみてやれよ、あいつにとって何よりの励みになるはずさ」

アイザックの同情のこもった優しい声を半ば上の空で聞き流しながら、クリスターは反射的に相槌を打つ。

「うん」

フィールドを自在に駆け回るレイフの力強く躍動感に満ちた動き、彼の上に降り注がれる惜しみなない拍手と賞賛の声―想像するだけでも、クリスターの胸には熱いものがこみあげてくる。あれは自分の弟なのだと、きっと周囲に誇りたくなるだろう。

自らは、フィールドに立つことは二度となく、近くても遠いスタンドに、他の観客達に混じって坐りながら――。

「たぶん、そのうちに――きっと、そうするよ」

時が経てば、自分が置かれた、この新しい状況にもきっと慣れるだろう。レイフが見事に克服し、順応したように。だが、今まだ、あの懐かしい、昨年の栄光の記憶も生々しい場所に戻る勇氣はない。

コーヒー・カップを手に物思いに沈み込んでいるクリスターを、アイザックは、かけるべき言葉がなかなか見つからないとでもいうかのごとく見守っている。

どことなくしんみりとした空気が、2人が坐っているテーブルに流れた。

「……ああ、そうだ」

いつまでも黙り込んでいる訳にはいかないとでも思ったのか、アイザックがついにこの長い沈黙に終止符を打った。

「おまえに伝えるべきことがあったんだよ、クリスター。俺も今朝親父から聞いたばかりのニュースなんだけれどさ」

クリスターはちらと目を上げて、アイザックの顔を正面から見た。

「ウォルター経由のニュースというところ――ジェームズに関してかい？」

アイザックが関わった事件の首謀者でもあり、たぶん記者としても彼のように怪物的な犯罪者には関心を覚えているのだろう、ウォ

ルターはジェームズの処分の行方を熱心に追っているのだ。

気持ちが沈んでいても相変わらず勘は鋭いクリスターに、アイザックは幾分ほっとした顔になった。

「ああ、その通りさ。ジェームズの奴の起訴が決まったことまでは、おまえも知っているのかな？」

「ああ…」

ジェームズの名前を聞くと、今でも何とも言えない緊張感と興奮に身が引き締まる気がする。クリスターは心臓の鼓動が早まるのを意識しながら、慎重に答えた。

「次は罪状認否手続きに入るんだろう…？ 奴のことだから、あくまで罪を認めずに無罪を主張して法廷を引っ掻き回しかねないけれどーそれとも、言い逃れのような証拠があれば出れば、さすがの奴も今回は観念するのかな…？」

「それがさ、罪状認否手続きは3日後に予定されていたんだが、昨夜急に、ジェームズの奴、体調を崩してな、拘置所から警察病院に搬送されたそうなんだ」

不安に駆られたかのように声を低めて言うアイザックに、クリスターはとっさに何と応えればいいのか分からなくなった。

「ジェームズが…入院…？」

この知らせに、クリスターは自分でも驚くほどのショックを受けていた。

「そうなんだ：逮捕された時点で、既にジェームズの病気のことは分かっていたんだが、奴が引き起こした事件の悪質さから保釈も認められず、拘置所に一月近くもいた間に更に病状が悪化したようだ。あいつの病気は特殊なもので、拘置所内では対応しきれなかったんだろう」

「ジェームズの容態は、それほど悪いのか？」

クリスターは愕然となって聞き返す。

「そこまで具体的なことは、俺にも分からないよ。だが、ジェームズは不治の病でもうあまり長く生きられないーそう調べ上げたのは、おまえとダニエルだったよな。なら、おまえの方が、ジェームズの身に今何が起きているか、俺よりずっと詳しいはずじゃないか？」

「ああ、確かに、僕には分かっている：そのつもりだったけれど、何だか実感がわかなくて：おかしいな、どうして僕がこんな不安な気分になるんだろ？」

自分を震撼させているものの正体が分からなくて、クリスターは動揺を噛み殺しつつ、頭を軽く振った。

ジェームズを最後に見たあの夜ー自由の利かなくなった体を最後の力を振り絞るようにして引きずりながら、じりじりと迫ってきた彼の鬼気迫る表情が、忘れようとしても忘れられない。

（僕を殺してくれ）

冗談めかして囁きかけてきたあの台詞には、実は本気も混じって

いたのではないかと、今になって、クリスターには思われる。

「大丈夫か、クリスター、顔が青いぜ」

アイザックが気遣わしげに声をかけてきて、クリスターの腕にそつと手を置いた。

「ジェームズとの最後の闘争は、おまえにとって生易しい経験じゃなかった。トラウマになるのも無理はないけどーもうジェームズ・ブラックはおまえには手の届かない場所に行っちゃったんだ。あいつのことであれこれと思い悩んだ所で、何にもなりやしない。…うん、この知らせ、おまえには黙っていた方がよかったのかな…？」

アイザックの囁きに、クリスターは力なく微笑みながら首を振った。

「いや、教えてくれてありがとう、アイザック。君が教えなかったとしても、結局僕は自分でジェームズの状況を知ろうとしただろうからね。一時は、あいつがちゃんと拘置所に閉じ込められているって確認しないと不安で堪らなかった。今でも、聞けば心をかき乱されるくせに、どうしても聞かずにはいられないんだ。ある意味、あいつとの腐れ縁はまだーたぶん、あいつが本当にこの世から消滅するまで続きそうだな」

「クリスター…」

「あんまり健康的な精神状態とは言えないけれど、たぶん、これも時間が解決するしかないんだろう。僕のこの怪我が癒えて、今の自分の体の状態を僕が正しく受けとめられるようになるのに時間がかかるのと同じようにね」

半ば諦念したような笑みを薄く浮かべるクリスターをアイザックはしばしもの言いたげに見つめていたが、結局、これ以上この話を続けるのは好ましくないと判断したようだ。

「分かった、忌々しいJの話はここまでにしとこう。なあ、クリスター」

「うん？」

アイザックは、これもどう切り出すか少し迷ったようだ。一瞬間をおいてから、思い切ったように続けた。

「ダニエルが自主退学して、ロンドンに行っちゃったのは残念だったな。俺も、できれば一目会っておきたかったが―あの時俺はまだ拘置所内にいて、保釈されるかどうか微妙な時だったし、親父も俺に余計な心配をさせまいと黙っていたんだ。実際、すべて後から聞かされたんだよ。また随分急な話だったらしいな」

「うん…」

別れて間もない恋人のことが思いだされて、ほろ苦い気分になりながら、クリスターは頷く。

「おまえは、あいつが発つ前にちゃんと会えたのか？　ダニエルの親とかなりもめたと聞いたけれど―」

「ああ。話を聞いたレイフが、尻込みする僕を強引に空港まで連れて行ってくれたおかげで、短い時間だったけど、ダニエルと話すごとができたよ。実際僕は、ダニエルに対するすまなさが勝って、彼

と会うのをためらっていたんだけどー思い切って、会ってよかった。あのまま顔を見ずに別れてしまったら、僕の胸にはずっと後悔が残ったろうし、ダニエルをまた余計に傷つけてしまったらうからね」

「へえ、レイフがねえ：気の効かないあいつにしては、なかなかやるじゃないか。俺も、ダニエルがイギリスに行っちまったって聞いた時から、気になっていたんだ。おまえらが、お互いわだかまりのないきれいな別れ方ができたかどうか：あからさまにはしていないかったけど、結局付き合ってたんだろ、おまえら？」

「まあね」

クリスターは一瞬とぼけようかとも思ったが、アイザック相手に本心を隠すのも今までの経緯を考えるとためらわれたので、今度はかりはあっさりと認めた。

「あー、やっぱり：ダニエルの方はおまえに恋しているのは見え見えだったけど、おまえは、俺の前ではあまりそういう雰囲気は出さなかったものな」

「そりゃ、君にはこんなことうかと話せないよ、おかしな記事を書かれたら困るし」

「俺はしょうもないゴシップなんか書かねーって、いつも言ってるだろ。ああ、でもー」

まるでかつて新聞部の部室でダニエルも交えて一緒にふざけ合っていた時に戻ったかのような調子でそう言った後、アイザックはふいに切なげに目を細めた。

「寂しくなるな―あの可愛いダニエルがもうここにいないと思うと
…」

アイザックの呟きに、クリスターも瞳を揺らして、ひっそりと頷いた。

（クリスターさん：僕、向こうに行っても一生懸命勉強して、きつ
といつか自分の力でアメリカに戻ってきます。あなたに認めてもら
えるような立派な大人になって、もう一度あなたに追いついてみせ
るから―どうか、僕のことを心の片隅にでも覚えていてください）

空港での別れの際、初めは気持ちを昂ぶらせてろくに話せなかつ
たダニエルが、最後には生き生きとした光を瞳に宿し、決意に満ち
た強い口調で宣言したのをクリスターは思い出していた。

J・Bの手下によってあれほど惨い目に合わされたのだから、ど
れほど深い心の傷が残っていても不思議ではなかった。

体も心を壊された恋人の悲惨な姿と対面することを半ば覚悟して
いたクリスターに、ダニエルは意外なほどの芯の強さを最後に見せ
てくれた。

（ああ、ダニエル：僕は決して君を忘れない。短い間だったけれど、
君が傍にいてくれて、よかった）

あの時、胸から迸った熱い感情にまかせて、クリスターは人目も
はばからず、ダニエルをひしとかき抱いた。

恋人の感触を覚えておこうとするかのようにしがみついてくるダ

ニエルのか細い体を腕の中におさめて、クリスターはやっと、心から素直に彼のことを愛しいと思うことができたのだ。

「大丈夫、いつかまた会えるさ」

ぽつりと、ダニエルに対して言った言葉を確かめるかのように唇に乘せてみる。

「そうだな…いつか―」

アイザックが感慨深げな面持ちをして、相槌を打った。

クリスターはゆっくりと瞬きをして、アイザックの方に顔を向けた。

「そう言えば、アイザック、君は―今後、どうするんだ？ 落ち着いたら、学校には戻れそうなのか？」

アイザックはクリスターをまっすぐに見つめた。クリスターが不安に思うほど長い間そうした後、ふっと微笑んだ。

「いや―俺も、あれだけの事件に関わって、一時はジェームズの共犯として告訴されかかった身で、何事もなかったかのようにこのまま学校に留まるというわけにはいかないよ」

「それじゃあ…君も、行ってしまうのか…？」

思わず呆然と呟いてしまったクリスターの反応に、アイザックは少し驚いたようだ。

「あ、いや…そりゃ、うち学校は所謂名門だし、何かと煩い人間だっているだろうけれど、何だか納得できないと思ってね」

アイザックの眼差しを避けるよう、慌てて俯き、口ごもりながら言い訳をする。クリスターは動揺していた。

「仕方ないさ…俺だって、別に無罪放免って訳じゃないんだ。ジェームズの罪を告発する、所謂司法取引をして、どうにか不起訴処分免じてもらっただけで、何らかの罪の償いはしなくちゃならない。コリンは俺を許すと言ってくれたそうだが、俺の気持ちがおさまらないし、それにミシエルは、意識を取り戻したとはいえ、社会復帰できるようになるまでには相当に長いリハビリを続けなければならぬ。これから、弁護士も交えて慰謝料などの相談もあるし、迷惑をかけちまった親父のもとに戻って、しばらくは大人しくするよ」

「それじゃあ、ウォルターと一緒にロスに行くのか」

「ああ、結局そうなるだろうな。まだしばらく、こっちに残って片付けなきゃならぬ手続きやら、交渉ごともあるが―ジェームズの公判が始まるのを待つかもしけないけど、それはあいつの病状を考えるといつになるか微妙だな。実際、これからのことについては俺も、まだ具体的に考えられるほど心の整理はついていないんだ。たぶん、何もかも片付いたら、向こうの学校に編入することになると思うよ」

「そうか…」

たちまち、クリスターの胸を何ともいえない寂寥感がふさいでいく。

（ダニエルに続いて、アイザックまでいなくなってしまうのか。あれだけの事件に巻き込まれてしまった僕達が、以前と同じでいられるわけがないとは分かっていたはずだけれど――）

クリスターがじっと黙りこくっているので、アイザックは心配になったらしく、何事か声をかけようと口を開きかけたが、それより先に、クリスターは思い切って言葉を継いだ。

「すぐにボストンを離れるわけじゃないなら――まだしばらくの間は、僕とこうして会ってくれるな、アイザック？」

「えっ？」

アイザックは何を言われたかとおさに分ならず、きよんとして、はにかむように笑うクリスターの顔を凝視した。

「君がいなくなると寂しくなるから、今のうちにできるだけ、一緒にいたいなと思うんだ。君さえ、僕と話すのが嫌じゃなければ……だけれど――」

意地っ張りのクリスターにとって、こんなことを口にするのは非常な勇気がいったが、今度こそ、いつも裏切り続けたこの大切な友人に対して、真摯で正直であろうと心に決めていた。

もっとも、ダニエルに対しても同様だが、別れを前にしてやっとこんな正直な気持ちになれたなんて、我ながら何とも情けなかった。

「クリスター」

アイザックはしばらくぼかんと口を開けたまま、クリスターの言

葉をじっと反芻していた。その頬が見る見るうちに赤らみ、目がじわじわと潤んでくる。

己の発した言葉の意外な効果に、クリスター自身驚いていた。

皮肉屋で天邪鬼のアイザック。なかなか素直になれないという点では、彼はクリスターと似通っていた。しかし、クリスターの発した率直なメッセージは、今度こそ彼の胸にしっかり届いたようだ。

「クリスター：当たり前じゃないか、俺は、おまえのことがすげえ気に入ってるんだ。色んな擦れ違いや誤解があったけれど、やっぱり俺は――」

アイザックは一瞬言葉を切った後、照れくさそうな笑みを浮かべて、小さな声で確かめるように問いかけた。

「なあ、俺達は今でも友達なんだよな……？」

クリスターは、アイザックの目を正面から見ながら、頷いた。

「うん：君は僕の掛け替えのない友人だよ、アイザック」

壊れかかった友情を修復するのに、遅きに失した訳ではない、クリスターはかろうじて間に合ったようだ。

（アイザックも近いうちに僕から離れていく：そのことは、もう仕方がない。でも、いつかまた会えた時には、何のわだかまりもなく、親しい友として再会を喜び合えるような間柄でいたい）

クリスターにとって、ダニエルだけでなくアイザックまでも自分

の傍らから去っていくのは痛手ではあった。しかし、少なくとも、
こうして2人とも危機を脱し、心を通わせる機会を持てた。

それだけでも、自分には充分過ぎるほどの幸運であり幸福なのだ
という思いを、クリスターは今しみじみと噛み締めていた。

第7章 F A K E (7)

わっというどよめきが、総立ちになった観客達の間からあがった。

ボールをしっかりとキープしたレイフは、ぐんぐんスピードを上げて敵ディフェンス2人を抜きさると、もはや誰にもとめられない勢いでサイドラインを疾走する。

この試合、とにかくレイフを潰そうと、プレイの大半で2人、3人がかりのタックルをかけてくる相手を、彼は稲妻のようなスピンをかけてかわし、時には逆に相手が失神寸前になるほどのあたりでぶちのめしながら、ひたすら前進しようとし続けた。

そのプレイには実際観客達の目を見張らせるものがあつた。大胆で、攻撃的で、猛烈な気迫に満ちていた。

かつての優柔不断さは影も形も見当たらない。フットボール・プレイヤーなら誰もが羨む天性の資質に、今は揺るぎない精神力が備わったかに見える。

キャリアでも、ブロックでも、レイフの手のつけられない攻撃を止められる者は誰もいなかった。

第4クォーターも残りわずかとなった最後の攻撃。レイフは、彼のランを何としてもとめようとする捨て身のタックラーを引きずったまま、強引な力技でついにエンドラインを超えた。

「し、信じられねえ…何で倒れねえんだ」

レイフの腰にしがみついたまま呆然と呟いたのは、ライバル・チーム、ヒル高校のLBニックだ。

巨大な体軀を武器にした反則すれすれのおどいプレイや、下卑た挑発行為で、これまで幾度もレイフを逆上させてきた因縁の相手を、彼はじろりと見下ろした。

「おい、いつまで男の腰に抱きついてる気だよ。いい加減離しやがれ、この変態!」

腕を振り上げ、ぶるぶるっと大げさに腰を振るレイフから、ニックは慌てて手を放し、飛びすさった。

強豪と謳われ、エースQBクリスターを欠いた今年のブラック・ナイツよりも有利と評されていたにも関わらず、結果はヒル高校の惨敗。州ランキングのLB部門でベストスリー入りするほどのニックにしてみれば、まさかここで自分達が敗退するとは夢にも思っていなかったようだ。

「去年までは、クリスターがいなけりゃ何もできねえ、ガキのへたれ野郎だったのに…」

ニックは、地面に膝をついたまま、悔しげに吐き捨てる。

それを聞きとがめたのか、既にその場から立ち去りかけていたレイフは、足を止めて、振り返った。怒りと口惜しさに真っ赤になっているニックの顔をしげしげと眺め、口を開いた。

「オレはもう、今までと同じオレじゃない。クリスターがいなければ今年のブラック・ナイツは弱いなんて、もう誰にも言わせねえよ」

ふんと鼻息も荒く言い捨てると、レイフは、開幕から既に三勝をあげて、喜びに沸き立つチーム・メイトのもとにゆったりと戻っていった。

今回はかなりラフ・プレイが目立ったが、背筋をしゃんと伸ばして悠然と歩くレイフには、ダメージは全く見当たらない。

緊張も見せず、己に期待された仕事を見事にやってのけたレイフは、名実共にエースの名にふさわしい風格をまといつつある。

プレシーズン・ゲームから始まった、レイフの目覚ましい活躍は、フットボールに関心のある人々の耳目を集めていた。

作年までは、圧倒的な存在感を持つ兄の陰に隠れて目立たなかったレイフが、今年は別人のような成長ぶりを見せて付けている。40ヤード走で最近では自己最高の4・27秒を記録したという、他を寄せ付けないスピードに、今は思い切った大胆なプレイもできる度胸が備わり、超高校生クラスのプレイヤーとして、その周囲では早くも大学のスカウト達が熾烈な争奪戦を始めていた。

『白い奴で、あんな走りをする選手を見たことがあるか？　きっと黒人並みに筋肉がしなやかで柔らかいんだろうな』

この試合でも、スタンドに陣取るリクルーターの口からは、そんな溜息混じりの賞賛の声があがっていた。

『あのパワーとスピードで突っ込まれたら、並大抵のブロックでは止まらんだろう。だが、あんな強引なパワー・プレイが続くと、いつ怪我をしないかと見ていてひやひやするな』

『いや、今のレイフは力技だけじゃない、前回の試合では見事なフエイクをかけて、ディフェンスに触れさせもせずによく抜いたぞ。あの体格であんな俊敏な身のこなしができるなんて、全く信じられないと目を剥いたよ』

レイフは以前からカレッジでプレイすることを望んでおり、来年には高校を卒業する。こんな逸材を逃がしてはならないとスカウト達はかたがたしいが、渦中にあるレイフ自身は、周囲の騒ぎには一切関心を見せなかった。

（オレはただ、目の前の試合を1つずつ勝ち進むことに全力を尽くすだけだ。チームのために、そして、オレに後のことを託してフィールドを去ったクリスターのために――）

カレッジの名門チームに入りたい、更にその先にはプロになりたいという夢や野心よりも、今のレイフをしゃにむに動かしている、強い想いがある。

（今年も、ブラック・ナイツは優勝してみせる。そのためなら、オレは何だってやってやる。困難な道だということは初めから分かっているさ。でも、どんなに辛くて苦しくても弱音など吐くものか、これはオレがクリスターから任されたエースとしての責任だ。他の誰にも任せられない、クリスターが残したものならば全て受け取る。オレのものだから――）

宿敵ヒル高校との試合に大勝してはしゃぎまくるチーム・メイト達のもとに戻り、彼らの荒っぽい抱擁を受けながら、レイフは顔を上げて、大勢の観客達で埋め尽くされた応援席を眺めやった。

ライトに照らされたスタンドには、父や母も含めて知った顔がいくつも見られたが、そこに、レイフが誰よりも自分の活躍を見て欲しいと願う、クリスターの姿はない。

強い輝きを放つレイフの金色の瞳に、仄かな影が差した。

（今夜こそは必ず見に来てくれって、あれほど言ったのにークリスターの奴…）

高校の試合に出るようになって以来、何かと自分達双子を目の敵のようにしてきたニツクを相手にした最後のプレイは、我ながら会心の出来だった。あれをクリスターに見てもらえなかったなんて、残念でならない。

（オレのがんばりはまだまだ足りないのかな…？ この程度で満足して手を抜くんじゃないって意味なのか？ それとも、自分が姿を見せると、またオレが甘えを出して頼りたがるとでも思っているんだろうか…？）

残念そうに肩を落とし、小さく悪態をついたレイフだったが、チーム・メイトやコーチの呼びかけに、すぐに我に返った。

「レイフ、おまえがいてくれて本当に助かるよ。俺の力だけじゃ、クリスターが抜けた穴なんてとても埋められないからな」

クリスターの代わりにQBとなったショーンも、ここまでの試合で勝ちを重ねることで、ようやく肩の抜けてきたのか、時折笑顔をみせる余裕も出てきた。

「いいや、おまえもよくやってくれてるよ、ショーン。今夜も、ヒ

ル高校相手に3本もタッチダウン・パスを決めるなんて、大したものさ」

「なあ、今夜、ちょっと思っただけどさ」

「何をだよ？」

「もしかしたらさ、このままずっと勝ち進んでー本当にまた優勝できるかもしれないって…」

「今頃何言ってるんだよ、当たり前じゃん、オレらは必ず優勝できる」

レイフが明るく笑いながら肩を叩くと、ショーンもはにかむように笑い返す。

ショーンに限らず、ここまで勝ち進んで次第に自信をつけてきたチーム・メイトは、クリスター不在の心細さを口にすることもなくなってきた。忘れたわけではないが、二度と戻らない者の面影をいつまでも引きずり続けることもできない。

本当は未だに深い喪失感を覚えているレイフも、ここで無闇にクリスターのいない寂しさを漏らして、せっかくいかに盛りに上がってきたチームの雰囲気の水を差すわけにはいかなかったのだ。

それでもー。

チーム・メイトの輪の中に溶け込んで、屈託なくふざけあったり、笑いあったりしながらも、レイフの目の奥底には、皆と同じ熱狂には浸れない、冷めたものがあつた。

ここまで順調に勝ち進んできても、なぜかレイフの胸には、去年初優勝に向かって皆で力を合わせ、1つずつ勝ちを取っていった時ほどの熱い感動は生まれてこない。

たった一度の優勝経験のせいで、勝つことに去年ほどの新鮮味が感じられなくなったのだろうか。あるいは、エースという責任を背負い、やはり自分もぎりぎりいっぱい、いちいち一つの勝利に浮かれ騒ぐように精神的な余裕がないのだろうか。

（いや、そんなことじゃねえ…オレが、1年前のように勝利に素直に酔えないのは…）

レイフ自身少し前から薄々感じ取っていた、その理由が、今夜はひとしお身にしみる。

クリスターがいない。

（大好きなフットボールで勝利して嬉しくないはずがないのに、どうしてかな…ああ、やっぱり、オレにとって重要な部分が、去年までとはまるで変わっちゃったんだ。クリスター、おまえがいない勝利は、こんなにも味気なく感じられるよ）

明るく笑いあう仲間達と共と眩しいライトを浴び、観客席からの拍手に応えながら、レイフはまるで子供のような、堪えきれない寂しさに襲われるのだった。

いつの間にか、フットボール・シーズンが始まって、早くもひと

月が経過しようとしていた。

それは同時に、レイフ達シニアにとっては、高校最後の年が始まったことも意味し、皆そろそろ真剣に進学先を決める必要にも駆られてきた。

レイフは当面フットボールの試合で頭が一杯で、この先に待ち受ける学生としての現実などまだ何一つ片付けられていないが、フットボールを引退したクリスターは、早々とハーバードに進学を決め、願書を提出した。

もともと件の大学の研究室で世話になっている教授には相談していたらしいが、フットボールをやめた後のクリスターの変わり身の早さに、レイフは少しばかり鼻白んだものだ。

とはいっても、さすがに今度ばかりは、レイフはクリスターをとめられなかった。とめたくても、その理由がもう見つからなかった。

2人一緒にカレッジ・リーグに進み、更にその先にはプロになるという、子供の頃からの夢は完全に断たれたのだという現実を突きつけられたようで、着々と大学進学の手続きを進めるクリスターを見るにつけ、レイフの気持ちは沈んだ。

クリスターは今でも学校の帰りに病院に通い、リハビリを受けている。普段の生活にはもうほとんど支障がないように見えるが、スポーツができるまでには回復していない。

自分達はこれから先どうなるのだろうか、と考え出すと、楽観的なレイフでさえ煮詰まりそうになるのだが、2人共に納得のいく、一緒

に幸せになれる道はどこかにあるはずだか信じて、今は己のなすべきことに集中しようとしていた。

レイフはクリスターを大切に思っている。誰よりも愛している。だから、この先もずっと一緒にいたい。

（オレが、クリスターに頼らなくても充分にやっていけるほどの力をつけ、大人として自立すれば、クリスターも勝手な思い込みをやめて、やっぱり2人で生きていくのが一番いいという気持ちになっ
てくれるかもしれない）

たとえどんな紆余曲折があっても、最後には自分達は共にあるだろう。そういう運命にあるのだと、単純に、レイフは信じていた。

（ダニエルに続いて、アイザックまで遠くに行っちまった。クリスターは口に出しては言わないけど、やっぱり寂しがってるだろう…なかなか素直になれないクリスターでも、そのうちオレのところに話くらいしくるかもしれない。そうしたら、オレ、クリスターが飽きるまでずっと傍にいて、あいつの言うことに耳を傾けていてやるよ）

そんなことを想像するレイフの脳裏には、ダニエルの旅立ちを見送った後、静かに涙を流すクリスターをじっと抱きしめた時の切なくも温かな記憶があった。

（オレは、おまえを支えたい、守りたい…おまえが幸せになるためなら、何だってするよ。オレは、おまえのために生きているんだ…たぶん、あの時、クリスターも分かってくれたと思う）

自分の前で初めて弱さをさらけ出したクリスターとああして束の

間心を通わせることのできた経験が、クリスターが離れていくという不安に苛まれていたレイフに、この所少しばかり自信と余裕を取り戻させていた。

クリスターの心中を気遣いながらも、彼の方から何らかのサインを送ってくるのを、半分は待つ構えでいた。

後から思えば、レイフの方からもっとクリスターにべったりくっついて、何くれと世話をやき続けていればよかったのかもしれない。

だがレイフは、クリスターから託された使命を果たすことに日々集中しており、負傷して以来フットボールからは完全に身を引いてしまったクリスターとは、共に過ごす時間はますます少なくなっていた。

以前のレイフならば、こんな状況になれば、寂しさと不満を訴えてクリスターにつきまとおうとしたものだが、その点、やはり彼はかつての甘ったれではなくなっていた。

それに、たとえクリスターが傍にいたくとも、彼から託されたチームに貢献することで、レイフは孤独を忘れることができる。

一方、チームからもレイフからも身を引き、独りきりで取り残されたクリスターは、レイフの想像する以上に孤独だったのかもしれない。

だから、その寂しさを紛らわせるために、クリスターがフットボールとは全く関係のない場所に慰めを求めるのも、ある意味仕方のないことだったと言える。

それでも、クリスターが新しい相手と交際を始めたという話を最初に聞いた時、レイフは、何だか手ひどく裏切られたような気分になった。

因縁の深いヒル高校との試合で勝利した、その夜遅く―レイフはこの嬉しい知らせを早く伝えようと意気揚々とクリスターの部屋のドアをノックした。

この頃、クリスターの帰宅時間は10時を回ることが度々あった。もともと大学の研究室に通っていたり他のつきあいがあったりと門限などあった試しのない生活をしていたクリスターなので、レイフもそれまで不審に思うことはなかった。

だが、あくまで単純にクリスターを喜ばせたために部屋を訪れたレイフは、そこで、クリスターから思わぬ告白を受けることになった。

「え…ちょっと待てよ、一体誰と付き合ってるだって…？」

どういう経緯でそんな話題になったのかはショックのあまり忘れてしまったが、気がつけば、レイフは呆然とそう問い返していた。

「うん…恋人として付き合っているかというところちょっと微妙なんだけれどね。何しろ相手はうんと大人だから、さすがの僕も経験値が違いすぎてリードできない、恋愛対象というよりもむしろ弟扱いされて、すっかり甘やかされているような気もするし―」

クリスターはコーヒーを飲みながら、不本意そうに顔をしかめた。J・B戦の緊張から解放たれたせいだろうか、触れれば切れそうな、あの鋭さは、今の彼からは影を潜めていた。年相応の高校生ら

しく見えると言えは聞こえはいいが、何だか精彩を欠いていて、やはり心身ともにまだまだ本調子ではないのだと、クリスターびいきのレイフでも思わざるを得ない。

「いや、だから、今さ、あの美人の女医さんと一緒にいたから今夜は遅くなったって、言っただけじゃなかったの？」

レイフは束の間固まってしまった頭脳を無理矢理動かして、念のためにもう一度確認してみた。

「うん、そうだよ」

「つまりーええと、オブライエン先生と交際してるって：あの美人の女医さんの：？ いやいや、冗談きついで、クリスター」

引きつった顔で笑い飛ばそうとするレイフを、クリスターはどこか神経質な目つきでちらりと見やった。

「僕は嘘も冗談も言っていないよ、レイフ：確かに、僕みたいな高校生とキャリアのある大人の女性がなんて、大っぴらにはしにくいかもしれないけれど、僕は確かにサンドラと付き合ってるよ。言っておくけど、彼女が誘惑したんじゃないからね。僕が熱心にアプローチをかけて、やっとの思いで口説き落としたんだ。でないと、10才以上も年下の男の子なんて全く対象外だと、彼女は鼻にも引っ掛けてくれなかったろうさ」

「ええと：」

レイフは、どこことなく後ろめたそうに顔を背けているクリスターを凝視しながら、のろのろと首を傾げた。

「そ、それじゃあ、本当にあの女医さんと付き合ってるのかよ？
い、いつの間に、そんなことに…」

やっとクリスターの言わんとしていることを飲み込んだレイフは、
呻くように呟いた。

「確かに、クリスターの好きそうなタイプだと言って、からかった
ことはあったけど、まさかマジで手を出すなんて…」

「何だよ、その非難がましそうな目は」

むっとしたらしい、クリスターは眉を吊り上げ、睨みつけてくる。

「だ、だってさ、だってー確かに、オレだって惚れ惚れと見蕩れち
やうくらいカッコいい人だけど、オブライエン先生って、一体年は
いくつなんだよっ？」

「たぶん、33、4才くらいだよ…ちゃんと聞いたわけじゃないけ
ど…」

「かつ」と、レイフは何か喉に詰まったかのように真っ赤になっ
て、言い返した。

「かかか母さんと同じくらいの年じゃないか、いくら若く見える
からって、オレらから見ればもうおばさんだよ。うっわーっ、信
じられねえ！」

「馬鹿、大声を出すな！」

一階のリビングでテレビを見ている両親に、何の騒ぎかと上がってこられては困るので、クリスタは、今にも錯乱状態に陥って喚きだしそうな弟の口を、慌てて塞いだ。

「母さんよりはまだずっと若いよ…大体、独身女性に『おばさん』はないだろう。僕が好きで付き合っているんだ、別に年齢なんてどうだっていいだろ？　いいか、このことは母さん達には絶対に言うなよ、分かっているだろうな？」

口を酸っぱくして言い聞かせるクリスタの顔を、レイフは彼の腕から逃れようとがきつつ、睨みつける。

親に言えない、自分でも何となく後ろめたく思ってしまうという時点で、その交際はどこか間違っているのではないかと、色恋の経験値は圧倒的に低いレイフではあったが、普通に思う。

レイフの眼差しにこもった非難に、クリスタは居たたまれなくなったかのように瞳を揺らして、ひっそりと呟いた。

「サンドラと一緒にいると何だかほっとするんだ…だから、頼むから、今は騒ぎ立てたりせず、僕のこととは放っておいてくれ」

クリスタの声の内に何かしら切迫したものを感じ取ったレイフは、それ以上暴れるのをやめた。

「大体、おまえには、僕に構うよりも他にすべきことがあるだろう？　おまえには、同時に2つのことに気を配るなんて器用なまねはどうせできないんだから、今はフットボールに専念しろよ。僕のことなら、取り合えずサンドラが面倒を見てくれるから、おまえの心配なんて無用だよ…」

クリスターの腕からそっと身を離れたレイフは、気まずそうに立ち尽くしている彼を探るように見返した。

「クリスター」

「うん…」

憤懣やるかたないレイフは、一瞬もっと追求してやろうかと口を開きかけたものの、クリスターが警戒するかのごとく身構えるのに、その気が萎えてしまった。

恋人と親友を一気に失ったクリスターが次に手を取ったのは、十どころかもっと年上の自立した女性だという。

（このマザコン…）

決して納得などしなくなかったが、クリスターが不安定になっていく今、どうしてもあのドクターなのか、クリスターを見舞いに行く度にちよくちよく顔をあわせたり一度はカフェテリアでコーヒーを奢ってもらったこともあったりと、彼女とはまんざら知らない仲でもないレイフには、何となく分かってしまった。

（ああ、確かに母さんにそっくりだもんな。クリスターが嫌がる女の感情的な部分がなくて、いかにも芯が強そうで、落ち着いてて、包容力があって、高校生と分かって付き合うくらいなんだから、きつと肝だってすわってんだろ）

一途にクリスターを恋い慕い、懸命に支えようとしてきた可愛いダニエルは、いなくなってしまうた。一時は友情に亀裂が入ったも

の、やっと心を通わせることができたと思った途端、アイザックもまた去っていった。

クリスターは今、他人に対して虚勢を張ったり、自分を完璧に見せかけたりすることも一切したくないほど、本当にもう心が弱ってしまっているのだ。だから、そんな必要のない相手―そのままのクリスターを丸ごとあやすように抱きしめてくれる、母親みたいな女がいいのだ。

心理学的にもっともらしい分析などしなくても、レイフにさえ、そのくらい読めてしまう。

（でもさ、なりふり構わず、こんなにあからさまに他人に寄りかかっていくなんて、兄貴らしくないぜ：いや、これまで無理してきたのが、ついに限界が来て、張り詰めてたものがふつつり切れた後ってのは、人間、ここまで弱くなっちゃうのかな。たとえばそれが、クリスターだって―）

そこまで考えた途端、急に悔しさがこみあげてきて、レイフは、わなわなと震えだした唇をきつく噛み締めた。

クリスターが救いを求めて手を伸ばしたのは、この期に及んでもレイフではなく、ヘレナの分身のような他の人だなんて―。

「レイフ…？」

どうしようもないやりきれなさを懸命に堪えていたレイフは、クリスターの躊躇いがちの呼びかけを聞いた途端、つかつかとなって、怒鳴り返した。

「まったく、寄りにもよってあんな年増と付き合うなんて、クリスタ一の気が知れねえよ。面倒を見てくれるって、何だよ、それ？ お、おまえのプライドは、一体どこにいったんだ？ 若いツ：ツバメだなんて、あゝ遊ばれてさ、後で泣いたって、オレは知らないからなっ」

言った途端、レイフのもろい涙腺は決壊し、目からどっと涙が噴き出した。

それを見たクリスタが息を飲むのに、ますます居たたまれなくなったレイフは、くると踵を返して、荒々しい足取りで部屋を出て行った。

（畜生、今度こそ、素直にオレのどこに来てくれるって思ってたのに、またしてもスルーだなんて、ありかよっ。大体、オレは今、兄貴を喜ばせたくって必死にがんばってる最中なのに、もうフットボールのことは忘れたような顔して、チームに近づこうともしないでゝあんなークリスタのことは何も知らない、他人のもとに逃げこんでさ）

自分の部屋に戻るや、腹立ち紛れにドアを叩きつけるようにして閉じ、レイフはいらいらと頭をかきむしった。

（1人でこんなに一生懸命になって、オレ、馬鹿みたいじゃないか）
ちくんと胸を刺す痛みに、レイフは切なげに顔をしかめる。

（何のために、オレは――）

レイフはふと、先程のクリスタの様子を思いうかべた。いつも

自信に満ち溢れた、レイフを支え引っ張ってきてくれた頼もしい兄が、今はまるで別人のように脆い顔をしていた。

（クリスター…）

しばらくはかっかと燃え上がっていた気持ちが収まらず、いらいらと部屋の中を歩き回っていたレイフが、何かに気がついたかのように、急に足を止めた。

（サンドラと一緒にいると何だかほっとするんだ）

レイフの方をまっすぐに見ようとはしなかったにも関わらず、ひどく意識して、ちらちらと視線を投げかけてきたクリスター。

（大体、おまえには、僕に構うよりも他にすべきことがあるだろう…僕のことなら、取り合えずサンドラが面倒を見てくれるから、おまえの心配なんて無用だよ…）

あの時は頭に血が上って気がつかなかったが、今振り返れば、レイフに言いたいことがありそうだったのに、懸命に抑え付けようとしていたような気がする。

（クリスター、おまえ…？）

レイフは、ドアの方を振り返り、一瞬、そこを開いて、もう一度クリスターの所に戻ろうかしかけた。だが、ついためらうように足を止めた。

（クリスターがあんなふうに意地を張り出したら、オレが何を言っても、決して自分から折れやしない。黙っていると決めたことは、

絶対白状なんてするものか。畜生、参ったな…なあ、クリスター、おまえはオレに一体どうして欲しいんだ…?）

レイフは、途方に暮れたように、肩を落とした。

（クリスター、おまえの心は複雑すぎて、いつだってオレを悩ませる）

レイフは悶々とした気分を持て余しながら、力のない足取りで部屋の中に戻り、ベッドにどさりと腰を下ろした。

弾みで、そこに無造作に積み重ねられていた何冊かのフットボール雑誌が崩れ、レイフの手に当たる。

レイフは、その一冊を何気なく手に取って、膝の上に置き、しばし凝視した。

自分で買ったものもあるし、クリスターがさり気なく置いていたらしいものも混じっている。関心などないふりをして、レイフに関係のある記事は今でもちゃんとチェックしているのだ。

（自分のことは心配しないで、オレにはフットボールに専念しろってか…それが、おまえの望みなのか…?）

苦いものを無理やり飲み下そうとするかのごとく、レイフは顔をしかめた。

全てにおいて『完璧』だったクリスター。フットボール・プレイヤーとしても将来を嘱望されていたのに、今はその夢を絶たれてしまった。移り気な周囲は、新しいヒーローの出現に気を取られ、少

しずつ、かつての彼の勇姿を忘れていく。

レイフだって認めたくはないが、それが、今のクリスターを取り巻く現実だ。

（オブライエン先生といえはつとずるっていうのは、たぶん本音なんだろう：それで本当にいいのか、おまえは幸せか？ フットボールを思い出させるものは一切遠ざけて、これまでの自分は全て捨て去って、新しい恋人と過ごすことでおまえが受けた傷が少しでも癒されるというのなら、オレは―）

レイフはふっと寂しげな、しかし、落ち込みかけている自分をどうにかして奮い立たせようとしているかのような、健気らしい笑みを浮かべた。

（ああ、そうだ。オレ、何馬鹿なことを言ってたんだろ、クリスターがオレの期待通りの反応をしてくれないからって、ガキみたいになやましてさ。オレは別に、クリスターを手に入れて自分が満足したために、柄でもないエースなんかはって、あいつのいないフットボールを続けているわけじゃない）

自分にとって一番肝心なことを思い出したおかげで、レイフは、見る見るうちに落ち着きを取り戻し、晴れ晴れとまではいかなかったも、迷いを吹っ切ったような顔になっていった。

（オレは、おまえを幸せにするために生きている：おまえが望むなら、オレは本物の天才にだってなってみせるし、どんなに強く勇敢にもなっても、エースとしてチームを見事に率いてみせる―おまえを誰よりも愛しているから）

この信念さえ揺るがなければ、クリスターが当面の間年上女にのみりこもうが嫉妬など感じない――とまではさすがに言えないが、もう少し度量の大きい男として、クリスターを見守る気持ちにはきつとなる。

（大丈夫だとも。もうしばらくの間くらい、我慢できるよ）

レイフはばちばちと両手で自分の頬を軽くはって、気合を入れた。

（細かいことまでは分らないけど、要するに、クリスターはまだ素直にオレの手を取れるような精神状態じゃないってことなんだ。それならいいよ、無理強いなんてしないから。でもオレは、あいつに向かって差し伸べた手を引っ込めたりしない。だって、オレが一生のパートナーだと思えるのはあいつしかいないし、あいつにとっても、それは同じはずなんだ）

自分達2人の将来のことを真剣に考え出すと、単純なレイフでさえも、不安に駆られ、行き詰まりそうになる。しかし、前向きに、目の前に立ちふさがる現実を変えられる、がんばっていればきっと何とかなると信じようとしていた。

（だから、とにかく今は、オレができることに全力で取り組もう。エースとしての責任を最後までやり遂げて……そうして、あいつとの約束、もう一度ブラック・ナイトの皆と優勝という天辺まで辿り着いたら、その時こそ、オレは――）

レイフの想いは、まだ見ぬその日にまで、一気に飛んだ。

それは、何もそう遠い日の話ではない。ふた月もしないうちに、今季の結果は出ている。

ブラック・ナイツが昨年に引き続き、二度目の優勝を決めるだろう、その日―。

（クリスターの所に行つて、今度こそはつきりと、胸を張って、オレの気持ちを伝えるんだ）

優勝の高揚感を借りれば、レイフも思い切つて、大胆に、普段はなかなか言えないような言葉でも、クリスターに真正面から言えるだろう。

レイフは高鳴ってくる心臓の鼓動を懸命に抑えながら、このところずっと胸の奥に抱いている想いを口に出してみた。

「クリスター、オレ―」

言った途端、ぱつと顔全体が火のついたように熱くなり、握り締めた手の内は、どつと噴き出した汗でぬるぬるになってしまう。

レイフはベッドの上に仰向けに倒れこみ、はあつと溜息をついた。

（ううん、ちゃんとと言えるかなあ…？）

一瞬心もとない気持ちになりかけたが、いいや、いざとなれば大丈夫だと自分に言い聞かせた。

（だってさ）

レイフは、ちょっと複雑な気持ちになりながら、本音を言えば二度と思い出したくもないような、J・Bを最後に見た夜、彼が最後

に残した言葉を思い起こした。

興奮状態にあったレイフは、ジェームズの言ったことなどほとんど耳を素通りして覚えていないのに、その台詞だけは後になって思い出され、レイフの中で引っかかっていた。

（本当に大切なことは、言葉で伝え合おうとしなければならなかったんだって―あの野郎は言いやがった。そんなこと、Jなんかにかいちいと言われなくなっただけで分かっている。でも、オレ達が今まで、その点で手を抜いてたっていうのは紛れもない事実だなあとも思うから―）

言葉などなくても簡単に通じあってしまう自分達だからこそ、最も大切なことは、ちゃんと正面から向き合って、言葉で伝えあわなければならない。

（そうすれば、オレもクリスターの心は複雑すぎて分からないなんて悩まずにすむし、オレの気持ちをあいつが無視して、勝手に物事を決めちまうなんてこともなくなるだろう。当たり前と言やあ、当たり前のことなんだけども。友達相手なら普通にできることなのに、一番近いあいつにそうすることが、こんなに難しいなんて…）

そう反省がてらひとりごち、また1つ、レイフは切なげな溜息をついた。

「クリスター、オレ、おまえに話したいことがあるんだよ。とても大切なことだから、最後まで逃げずにちゃんと聞いてくれよ…」

そうやってレイフは、予行演習とばかりに、クリスターに言おうと練っている告白を、真っ赤になりながら、ひとり、呟いてみるの

だ
っ
た。
。

第7章 F A K E (8)

11月の第一金曜日、ブラック・ナイツは大差で相手チームを下し、正規シーズン日程を終了した。

週明けから、学校内は、六戦全勝で地区リーグの首位に立ち、プレーオフに進出することが決まったフットボール・チームの話題で持ちきり。注目の的となった選手達には新聞部の取材が授業の合間を狙って、押しかけているという。

当然、クリスターの耳にも生徒達の噂話は耳に入ってくるし、中には、わざわざ声をかけてきて、弟の活躍を称える者もいる。

(このまま波に乗ってプレーオフに臨めば、州チャンピオンも夢じゃない：去年の優勝経験で自信もついていただろうし、全体的な戦力は昨シーズンよりむしろアップしていたくらいなんだ。僕1人が抜けたくらいで揺らぐチームではなかったということかな。それにしても、皆、実によくやっている)

未だに一度も自ら試合に足を運ぶことはなく、学校生活でもかつての仲間達とは距離を置き、まるでかつて自分がフットボールに熱中したことなど忘れ去ったような顔をしているクリスターだが、チームの好調を聞けばやはり嬉しいし、試合後にその内容を密かに分析するなど、常に関心を持ち続けていた。

(もう僕が心配する必要もないかな：最初は、僕がこんな体でチームに顔を出したり、試合を見にいったりしたら、返って皆に悪影響を及ぼすかもしれないなんて気遣ったけれど：今なら、僕のは、『かつてのチーム・メイト』して普通に受け入れられるだろう)

安堵と共にクリスターの胸を過ぎる、一抹の寂しさはあるものの、さすがにこの頃では慣れてきたのか、苦しいほどの痛みは覚えなくなっていた。

（そうだな、そろそろ僕も、ブラック・ナイツの試合を見に行ってみようか：そうすれば、レイフも喜ぶだろう。それに僕も―観客の1人としてフットボールを観戦しても：自分があるそこには二度と戻れないのだと思い知らされても、たぶん、もう大丈夫だ）

確認するかのように、そっと己の胸に手を置いてみても、そこはもうしんと凧いでいて、かつてクリスターを夢に向かって駆り立てた、狂おしいまでの熱情は消えうせていた。

（どれほど辛くとも、時間が経てば、人間、現実を受け入れられるようになるものだ。フットボールができなくなることがこんなに辛いなんて思わなかったと泣いた僕でも：いつの間にかあの夜に流した涙を忘れて、淡々と目の前に置かれた課題をこなすように、日々、前に進んでいる）

フットボールで頭が一杯のレイフ達とはかく、他のシニアは、進学指導のカウンセラーの面接を終えてから、この方、SATを受けたり、カレッジ・エッセイを何度も書き直したり、成績表を大学に送ってもらったりと忙しく、どこことなくカリカリしている。

クリスターは卒業に必要な単位はほとんど取得し、フットボールに裂く時間もなくなった分、余裕を持って、肅々とそれらの手続きを進めていた。ハーバードにMIT、エール大等に推薦状と願書を提出してしまえば、後は面接を待つだけで、特にすることもない。

合否については、クリスターは、こう言うと他の生徒達には嫌味になりそうだが、全く心配していない。スポーツ推薦で入学してきた優秀な選手も大勢いる、フットボール・チームでエースを張り続けるために人知れず耐えてきた労苦に比べれば、それはクリスターにとって無理せず楽に進める道だった。

（結局、僕にはこっちの方があっているのかな…？　僕はレイフと違って、フットボールがなくとも生きていける。その気になれば、きっと何だってできる…今はまだどこに行って何をすればいいのか決められない僕だけれど、そのうち、新しい夢だって見つかるさ）

学校でのつきあいは、親しかったアイザックやダニエルがいなくなったため、それほど面白くはなかったが、大学の研究室では以前よりも長い時間を過ごすようになった分、親しい相手もできた。同じレベルで話せる、優秀なエリート達―高校卒業後、彼らの仲間になるのも悪くはないとクリスターも思っている。

（アイザックやダニエルと違って、連絡を取ろうと思えば、いつでもできる。それに、今は恋人と呼べる相手もいる訳だし、これで寂しいはずがない。そう、僕は今でも充分幸せだ）

放課後、クラスの仲間としばらくカフェテリアで過ごした後、1人、まっすぐに駐車場に向かって歩きながら、クリスターはもうほ

とんど支障なく動くようになった右肩に触れてみた。

（予想よりも遥かに経過はいいし、やっぱり僕は運がよかったんだ。このことについては、もちろん治療してくれたサンドラに感謝するよ）

穏やかに目を細め、大分葉の黄色くなってきた街路樹の下を時折擦れ違う知り合いに声をかけながら、クリスターは平和な日常が戻ってきたことのささやかな喜びを噛み締めていた。

（僕が失ったものや犠牲にしたものを差し引いても、たぶん、今の状況は満足できるもののはずだ。ダニエルやアイザック、コリンにミシェル：父さんや母さんにも、たくさん苦しい思いをさせてしまったけれど、あの人達に二度と災厄は訪れないと保障されただけでも、僕はどんなにか救われるし：それに、レイフはようやくと僕を乗り越え、夢に向かって邁進し始めた。あの時僕が思い切らなければ、こうはならなかったろう：あいつの変身ぶりを見る度、一層強く確信できる、僕はやはり間違っていなかったのだと――）

吹き抜けていく風が木立を揺らし、飛び散った金色の葉が、高い所からクリスターの上にはらはらと落ちかかってくる。

クリスターはふと足を止め、頭上を覆う木の枝を振り仰ぐと、舞い落ちてくる葉を遮るように手をかざした。

（だから、僕は、決して後悔などしない）

満足そうな笑みを浮かべてクリスターが目を閉じた、その時、そんな彼を冷たく嘲るような声が耳の中に響き渡った。

（君は、実に全く大した嘘つきだねえ、クリスター）

ようやく取り戻した平穏を一気に覆されたような気がした。忘れたくとも二度と忘れられない、悪意に満ちた声音に、クリスターは慄いたように目を見開いた。

（いかにも罪のない被害者ぶった顔をして、周りの人間達全てを欺いて―ついには自分自身さえも、そうして欺いてしまおうというのかい？）

クリスターが声の主を探して頭を巡らせると、金色の葉を散らす街路樹の1本に背中をもたせ掛けるようにしている、ほっそりした金髪の若者の姿が目に入った。

（まさか、なかったことにできるとは思っていないよね、君の張り巡らせたあざとい策略を？ あの日、あくまで犠牲的精神に基づいて行動したかに見えた君が、一方でそんな計算をしていたなんて、誰も思いつきもしないようだったけれど、僕には分かった。君の考えなら、僕には手に取るように分かる：なぜなら、僕だって―自分の究極の望みを果たすためとあらば、そのくらいの大芝居は平気でやってのけただろうからさ）

クリスターはその場に打たれたように立ち尽くしたまま、体の脇に垂らした右手をぐっと握り締めた。

（今更そんな善人面はするなよ、クリスター、全く君には似合いもしない。被害者面は尚更だ。君は、自分の書いたシナリオどおりに見事に登場人物を操って、舞台を成功させた。そうして、この僕に勝った。僕はそんな君に心から敬意を表するよ、この僕を上回る、君の中の悪魔にね）

金髪の若者―ジェームズ・ブラックは天使のようなあの無邪気な笑みをたたえて、クリスターを挑発している。だが、これが現実の彼であろうはずがない。

本物のジェームズ・ブラックは警察病院に収容されて、体を蝕む病魔と闘っている最中だと、クリスターは伝え聞いている。

ならば、今クリスターの前に現われたこの若者は、何なのだ。とても死にかけている人間とは思えないほど生き生きとした力に満ち、クリスターにとってのジェームズが常にそうであったような、限らない邪悪さを発散させている―。

（そう、僕だけが知っている。クリスター、君が愛する者達全てに對して犯した、ひどい裏切り、大きな嘘を―）

限らない優越感に浸りつつ、ジェームズは、歌うかのような調子でクリスターに囁きかけてくる。

よく見れば、彼は、クリスターが最後に見た時と同じ、この季節にはふさわしくない夏物の薄手のジャケットを着ていた。

微かな違和感を覚えながらも、クリスターはこみ上げてくる敵意に突き動かされるよう、ジェームズに向かって皮肉っぽく笑いかけた。

（今更、それが一体どうしたというんだい？）

本物か偽物か、現実かただの幻かなど知るものか。自分がいまだにジェームズにこだわっている事実をまざまざと意識しながら、ク

リスターは熱を込めて語りかけた。

（僕の嘘を知る唯一の人間である君は、どうせ、もうじき死ぬじゃないか。僕自身は、この先誰にも話すことはない、墓場まで持っていくつもりだ：秘密は、こうして永遠に秘密のまま保たれるというわけさ。どんな大きな嘘だって、皆がそれを望み信じている限り本当なんだ：いや、意地でも真実にしてみせる）

このところずっと生気を欠いていたクリスターだが、敵手を前にほとんど反射的に燃え上った憎悪と闘争心のせい、か、たちまち全身に力が漲るのを感じた。

（そうだ、おまえなど早く死ねばいい。そうすれば、僕もいつまでもこんなふうにおまえの影に悩まされることもなく、安心して暮らせる。おまえは僕の中の悪を映し出す鏡―おまえが滅びるのと共に、僕は僕の暗い側面も永遠に葬りさることができんだ）

火を吹きそうなクリスターの目を涼しげに見つめ返しながら、ジエームズは呆れたように問い返した。

（おやおや、また随分と都合のいいことを考えるものだねえ。しかし、果たして君の思うようにうまくいくのかな。君を悲劇のヒーローと頭から信じ込んでいる、おめでたい奴らはともかく―君に一番近いレイフでさえも、最後まで騙しとおせる自信はあるのかい？君を心から信じきっている、あの素直でまっすぐな弟君を裏切ることに躊躇いはない？）

もしかしたら、このしたり顔の忠告者を見せるのは、他ならぬ己の良心の呵責だろうか。疼くような痛みを胸に覚えながら、クリスターはジエームズの姿をしたものを鋭く睨みつけた。

（ああ、何としても、あいつには僕の嘘を信じていてもらう。他の誰にもましてあいつにだけは――見破られてはならないんだ）

固い声で、己に言い聞かせるように呟く。そんなクリスターの胸にたち込める不安を見透かすよう、ジェームズは猫のように妖しく目を細め、嘲笑った。

（ああ、全くだ。見破られたら、おしまいだものね……純粹なだけに裏切られたと分かった時の怒りは深く激しいだろう、レイフはきつと君を許しはしないよ？）

その言葉に、クリスターは寒気を覚えたかのように我が身をかき抱き、きつく目を瞑った。

（そんなこと、君に言われなくても、分かっているさ。僕は、誰よりもレイフの気性を熟知している。だからこそ、あいつにだけは知られてはならない……これからも僕は、我ながらぞつとするような嘘をつき続けるんだ）

歯を食い縛り、クリスターは挫けそうな心を叱咤しながら、そう己に言い聞かせた。

（どのみち、僕は、もう後戻りはできないのだ）

壊された右肩が、ふいに、焼け付くように感じられた。

（あははは、そうやって一生、いつ真実が明るみに出るか恐れながら生きるがいいさ、この裏切り者……！）

不安に震えるクリスターを嘲笑するジェームズの声は、いつまでも続くかに思われた。そして――

「クリスター」

己を呼ぶ低く柔らかな声音と、肩を揺する優しい手の感触に、クリスターはかっと目を見開いた。途端に、息をすることを思い出したかのように空気を吸い込み、肩を大きく上下させて喘いだ。

「大丈夫？ うなされていたわよ、あなた……」

クリスターを覗き込んでいるのは、艶やかな黒髪を肩に垂らした、知的で美しい女の顔だ。

「サンドラ……？」

クリスターは慌てて身を起こし、ここはどこかを確認するかのよう
うに、周囲を見渡した。

何度も訪れたことのある、サンドラ・オブライエンの住まう高級
アパートメント。窓の外、宵闇の彼方には、州議事堂の金色のド
ームがぼんやりと浮かび上がって見える。

今夜はオペラに連れて行ってくれるというので、リビングのソファの上で雑誌を読んでサンドラがドレスアップするのを待っていたら、いつの間にかうたた寝をしていたらしい。

クリスターは脱力し、黒の革張りのソファの上にどさりと身を預け、目を瞑った。

（夢か…そうだ、あれは、ただの夢だったんだ）

ようやく気持ちを静めたクリスターが、再び目を開け、念のためもう一度、恐る恐る辺りを窺ってみると、やはりジェームズの姿は、初めからそんなものは存在しなかったかのように影も形もなかった。

クリスターは安堵のあまり、深い溜息をついた。あんな夢を見るなんて、心の中に、よほど深い不安や迷いを抱えているのだろうか。

「クリスター、顔色が悪いわ」

気遣わしげな囁きに注意を向けると、サンドラがソファの傍に膝をついて、肘掛を固く握り締めているクリスターの手をなだめるようにさすっていた。

「調子が悪いなら、今夜出掛けるのはやめにしましょう。落ち着くまで、ここでゆっくり休めばいいわ」

物思わし気な灰色の目をじっと見返し、クリスターは不本意そうに顔をしかめた。

「平気だよ、サンドラ…ちょっと夢見が悪かっただけさ。大体、あなたはいつも僕を甘やかし過ぎるよ、何だか子ども扱いされてるみ

たいで、好きじゃないな」

だが、意地を張って言う口調にも、隠し切れない不安や甘えが滲んでいるのに気付き、クリスターは我ながら唾然となった。

「そうなの？」

「うん…」

サンドラが、クリスターの反発に気を悪くするどころか、可愛らしいものを見るかのような温かな眼差しを向けてくるのに、彼は居心地悪そうに身じろぎした。

（ああ、この間レイフにマザコン呼ばわりされたけど、そうじゃないと否定しきれないな、この様じゃ。でも…）

自己嫌悪に駆られて溜息をつく、クリスターの頭を優しく撫でて、サンドラは静かに立ち上がった。その手を、クリスターはとっさに捕まえた。

「クリスター？」

クリスターは掴んだ手をどうしようかと迷いながら、おずおずとサンドラを見上げた。

「そんな心細げな目で見なくても、私はどこにも行きはしないわ、クリスター。今夜のあなたは、本当に、いつもと人が違ってしまっただみたいね…そんなに悪い夢だったの…？」

サンドラの穏やかな低い声質は、ヘレナによく似ていて、他愛の

ない話でも、その声に耳を傾けているだけで、クリスタールは何となく気持ちが悪く落ち着いた。

「サンドラ：ごめんよ」

クリスタールがいきなり、不安に耐え切れなくなった子供のよう、腕を伸ばしてしがみついてくるのに、包容力のある年上の女は一瞬驚いたものの、大した動揺は見せず、黙って彼の背中に腕を回し抱きしめてくれた。

（ジェームズの言う通りかもしれない。僕は、愛する者でも何かと理由をつけて騙し、利用する：この優しい女のこと、たぶん）

サンドラには、クリスタールと同じくらいの年に自殺した弟がいたのだと、彼は早いうちに聞き出していた。身近な者の死を止められなかったことをサンドラが密かに悔いていることも、見抜いていた。そんな心の隙間に食い込むことで、クリスタールは彼女の関心を引き付け、ついにはその愛情も手に入れた。

サンドラは、もしかしたら今でも、情緒不安定なクリスタールは放っておくと自殺しかねないと本気で心配しているのかもしれない。クリスタールにはそんな気は毛頭なかったが、あえて積極的に誤解を解こうとも思わなかった。

（でも、こんな嘘偽りで罠にかけるようにして手に入れた愛なんて、きっと長くもたない。そのくらい僕だって覚悟しているさ。この女は馬鹿じゃない、じきに僕の本性に気付いて、去っていくだろう。でも、レイフのことは：何が何でも、僕は最後まで騙しとおさなければならぬ）

クリスターは何とも心もとない気分に駆られ、夢の中に出てきたジェームズの悪意に満ちた顔を避けるよう、サンドラの温かな胸に顔を埋めた。

真実を知れば、レイフは、決してクリスターを許しはしない。

（大丈夫だ、僕はきつとうまくやる。大体、単純なレイフには、僕の思惑など想像もつかない……こんな怪我まで負って、心身ともに弱っている僕を疑うことなど、万が一にもあるものか）

それでもークリスターは、ジェームズの警告のせいで気が弱っているせいでもなく、自身に向かって執拗に言い聞かせた。

（僕は、常に用心し続けなければならない。子供の頃からいつもそうだった、僕が秘密にして隠そうとしていたことを、レイフはいつも、どうやってか最後には探り当ててしまうのだからー）

第7章 F A K E (9)

スタジアムのドレッシング・ルームの奥のベンチに、レイフはじつと腰を下ろして、瞑想するかのように目を閉じていた。

その表情は穏やかなものだったが、閉ざされた瞼が時折ぴくぴく動いているあたりに、彼が、内心に渦巻く様々な感情と闘っているのが見て取れる。

州大会決勝戦の開始を待つ、この一時、ここに集っている少年達は皆それぞれ、己を圧しようとする緊張や不安に必死に立ち向かっていた。

トムは壁に背中をもたせかけて、ヘッドホンをつけた頭を左右に軽く揺すっている。

洗面所の方からは、先程から、ションが嘔吐する音が鳴り響いていたが、誰もそれに気にとめようとはしない。

普段よりもうやに高く響いて聞こえる、チーム・メイトの靴底のクリートがコンクリートの床を打つ音に耳を傾けていると、こうしたプレッシャーとの闘いにもこの頃では慣れっこになりつつあったレイフでさえ、己の中で否応なしに沸き上がってくる緊張を意識せずにはいられない。

(今までの試合の中で、我ながら最高だと思ったプレイを思い出してごらん。細部まではっきりと頭の中に描きこむんだ)

レイフは、以前クリスターに教えてもらった、試合前の緊張への

対処法を思い起こし、これまでずっと忠実に守ってきたように今もまた試みていた。

（緊張するのは悪いことじゃない。むしろ何の緊張もなく試合に臨むよりは、楽しめるくらいの緊張はあった方がきつといいプレイができるよ）

1年前の同じ時期、初めて挑む決勝戦を前に子供のように不安がるレイフを、クリスターは自信と確信に満ちた態度で力づけ、立ち向かう勇気を与えてくれた。

その兄がいない今年、レイフは、彼の遺した全てを背負う覚悟でしゃにむに突き進み、1つずつ勝利をもぎ取ってきた。そうして今夜ついに、熱望した場所にいる。

（大丈夫だ、オレは今夜、最高のプレイをする。誰が相手でも負けやしない、オレをとめられる奴なんかいるものか。ブロックを仕掛ける奴は吹っ飛ばすか、フェイクをかけて見事に抜け去って、何度でもタッチダウンを決めてやる。そうして今夜―数時間後には、オレ達ブラック・ナイツは州チャンピオンに輝いてるんだ。ああ、そうさ、必ずやってみせるとも）

そうならなければ、これまでの努力や苦労は全て水の泡と消えて、後には何も残りはしない。この手につかめるのは栄光か無かのどちらか1つなのだということは、強豪とか優勝候補と呼ばれた他のライバル・チームを下して、ここまで這い上がってきただけに、レイフには実感として分かっていた。

（いいか、勝つことだけを考えるんだ。他の可能性なんて、オレ達にはいらない）

別にこの試合を落としたところで、世界が終わるわけではないのだという単純な事実さえ、ただ1つの夢だけを追い続ける、ひたむきな心には思い浮かびもしないようだ。

（大丈夫だ、大丈夫…）

まるで祈りのように、誓いのように呟きながら、レイフはこみ上げてくる震えを押し殺そうとするかのように、じつとりと汗ばんだ手を握り締めた。

（オレ達は負けやしない、負けない、負ける…ものか―でも、もし負けたら…？）

考えまいとすればするほど、心の間隙を縫うように襲い掛かってくる、悲観的な考えに、レイフはともすれば挫けそうになった。

（畜生）

ついに、堪え切れなくなったかのように、レイフは、食い縛った歯の間から苦しげな吐息を漏らした。

（ああ、もしも―今ここに、この手をしっかりと握り締めてくれる、あいつがいたなら、重圧に負けて今にも崩れ落ちそうな肩を抱いてくれる、あいつがいてくれたなら―！）

一瞬激しい恐慌に駆られそうになったレイフは、他の仲間達には気取られまいと用心しながら、肩を大きく上下させた。

（しっかりしろ、何、甘えたこと言ってんだ、おまえはエースだろ

?)

レイフが恐る恐る目を開くと、吐き終えてすっかりした顔でドレッシング・ルームに戻ってきたショーンの姿が視界に入ってきた。

(ああ、オレもあんなふうに簡単に、不安や緊張を吐き出して、すっかりできたらいいのになあ)

にこりと笑いかけてくるショーンに手を振り返し、レイフは、きよろきよろと辺りの様子を窺った。

そろそろ集合の合図がある頃だろうとフランス・コーチを探したが、つい先ほどまで他のコーチ達と何事か話し合っていた彼の姿は、近くには見あたらなかった。

「なあ、コーチ、どこ行っただよ?」

レイフは、傍を通りかかったチーム・メイトを呼び止め、怪訝そうに尋ねた。

「ああ、ついさっき、客だって、スタッフがコーチを呼びに来てたけど―」

「何だよ、こんな大事な時に客だなんて―」

レイフが不愉快そうに眉を潜めた、その時、ドアが開いて、当のフランス・コーチがにこやかな笑みをうかべて部屋に入ってきた。

「皆、集まってくれ」

レイフはやれやれというようにベンチから起き上がり、他のチーム・メイト達と同じようにコーチにもとに行こうとした。

しかし、コーチの後ろに続いてドレッシング・ルームに滑り込んできた、背の高い男の姿を見た瞬間、レイフは何かに躓いたかのよう足止めた。

仲間達の間から、はっと息を飲む音がした。

「クリスター…」

呆然と呟いたのは、誰だったろうか。

教え子達が動揺を押し隠しながら徐々に集まってくるのを、フラックス・コーチは背中手で手を組んで、辛抱強く待ち受けている。その斜め後ろに、穏やかな顔をして立っているのは、誰だろう、これまで一度も試合を見に来なかったクリスターだった。

少年達の視線は、かつてのリーダーの上に一斉に集中したが、どんな反応をしたらいいのか分からない、かけるべき言葉が見つからないというかのごとく、皆、ぽかんと口を開けたまま立ち尽くしたり、もじもじしたりしている。

「あー」

ぎこちなく見詰め合うばかりの彼らを見かねたのだろう、コーチがこほんと咳払いをした。

「どうしたんだ、皆？ クリスターの顔を見忘れたか？」

すると、気を取り直したらしいトムが、陽気な声で言い返した。

「忘れるわけないだろ、その顔なら、今でも毎日、飽きるほど見てんだからさ」

「ああ、違いない」

幾分ほっとしたような笑い声が、そこかしこであがった。はりつめていた部屋の空気が、たちまち和んだものに変わっていく。

レイフは、まだ声を出すことができなかったが、誰かが腕を叩いて前に出るよう促すのに、ほとんど無意識に従って、動いた。

「やっとここに帰ってきてくれたんだな、クリスター、長いこと待たせやがって」

なじるような口ぶりの中にも親しみのこもった声をかける、チーム・メイトの頭の向こうに、クリスターのはにかむような笑顔が見える。

「ごめんよ、なかなか試合に足を運ぶ勇気が持てなかったんだ。けれど、せめて今夜くらいは、皆のプレイをこの目で見たくて、ここに来た。僕は――」

かつて苦労も栄光も共にした、チーム・メイトに対する優しさと信頼を眼差しに込めて、クリスターは皆の顔を1人ずつ見渡した。その視線がレイフの上でとまった時、彼は琥珀色の瞳を僅かに見開き、何か言いたげに口元を震わせた。

「去年、君達と共に決勝戦を戦った時――」

クリスタは顔をしゃんと上げて、メンバー1人1人の胸に届くよう、真摯な口調で語りかけた。

「僕は持てる限りの力を出し、あの一試合のために全てを捧げた。まるで力の限りを尽くしている時には、己の全てが研ぎ澄まされ、純粹で、あらゆるものから解き放たれて自由であるかのようにね。君達だって、あの時、同じ感情の昂ぶりを覚えたはずだろう？」

賛同の声が皆の間からあがるのに、深く頷き返し、クリスタは続けた

「…残念ながら、今夜、ブラック・ナイツの一員として皆と一緒に勝ちを取りに行くことはできないけれど、僕は、君らの活躍をスタンドから見守っている。客席とフィールドに離れてしまうけれど、君らが味わう高揚の片鱗に触れ、そして、栄光の瞬間を君達ともう一度共有できたらと思っているよ」

クリスタは、チーム・メイトへの激励の言葉を言い終え、最後にもう一度レイフに視線を送ると、後はコーチに譲るよう、素早く脇に退いた。

時間は押してきていた。皆そろそろ、最後の闘いの待ち受けるフィールドに出て行かなければならない。

「さて」

フランク・コーチは、興奮と闘志を全身に漲らせた、輝く瞳の少年達を見渡すと、自信に満ちた泰然たる態度で、簡潔で明快な指示を与えた。

「フィールドに出たら、出し惜しみをせず、全力で試合を戦え。我々は必ず勝つ。それ以外のことは考えるな」

スタッフの1人が、時間の来たことを告げにきた。コーチはもう一度、少年達に愛情のこもった眼差しを向け、言った。

「さあ、行って来い。恐れず、怯まず、自分達の力を信じてな」

おおっという、ときの声をあげて、ブラック・ナイツのメンバーは大きく開かれたドアに殺到していった。その多くが、微笑みながら見送るクリスターの手を握り締め、肩を叩き、あるいは、見ていてくれというような声や合図を送っていく。

「レイフ」

いきなりクリスターが自分の名前を呼ぶのに、その場にまだぼうっと立ち尽くしていたレイフは、はっと我に返った。

「ほら、おまえも行っていくよ。エースが出遅れて、どうするんだ」

「う、うん…」

レイフが慌ててドアの方を振り返ると、フランク・コーチが微妙な表情でこちらの様子を見ていた。

「あ、すみません、コーチ、今行きます！」

レイフは、慌ててベンチに置いたヘルメットを引つつかむと、ドアの向こうに消えていく指揮官を追いかけて、走り出しかけた。し

かし、思い直したように足を止めて、クリスターを振り返った。

「ク、クリスター」

レイフの顔が、さっと紅潮した。意を決した彼は、クリスターのもとに素早く駆け戻った。

「レイフ、どうした？」

不思議そうに問い返すクリスターを、レイフは手を伸ばして引き寄せ、力いっぱい抱きしめた。

「ありがとう、試合、見に来てくれて……今ここでおまえと会えて、オレ、すごく嬉しい……！ オレにとって、何よりの励みになるよ」

「ああ」

実際、クリスターとこうして言葉をかわすだけで、レイフは、もう何も恐なくなっていた。クリスターが見ていてくれる、彼のために戦うのだと思えば、無限の力が体の底から湧き出してくるような気さえする。

「兄貴、オレ、オレ……絶対、勝ってくるから——見守っていてくれよ、この試合が終わるまで……」

クリスターは、レイフの強引な抱擁に身を預けたまま、彼がたどたどしい口調で訴える言葉に、静かに耳を傾けている。

「そうして、クリスターとの約束通り、ちゃんと州チャンピオンになって戻ってきたら——オレ、その時、おまえに聞いて欲しい話があ

るんだ」

「話？」

訝しげにレイフの顔を覗き込もうとするクリスターの頭を、レイフはぎゅっと肩に押さえつけた。戦いを前にした興奮のためばかりではなく、真っ赤になって顔に彼に見られないように、今でも瞳から溢れだしそうな、本当の気持ちを彼に読まれてしまうことがないように――。

「うん、とっても大事なことなんだ。今はちょっと言えないけど、今夜の試合に勝てたら、オレ、きつとおまえに打ち明けるだけの勇気が持てる。だから、クリスターも、その時は逃げずに、最後までオレの話を聞いてくれよ」

そう言いながらも、レイフは、このまま離したくない、少しでも長く触れることで力を奮い立たせようというかのごとく、クリスターを抱きしめ続けた。

「レイフ：分かったよ。さあ、おまえはもう行かなくては――」

クリスターの優しい手が、促すようにレイフの肩を叩く。

「うん：」

レイフは、まだクリスターとは別れがたかったが、そんなことも言っておれず、しぶしぶ身をもぎ離れた。

「それじゃ、行ってくるよ、クリスター」

照れくさそうに視線を逸らし、鼻の頭を引っかいて告げるレイフに、クリスターは愛情のこもった笑顔を向ける。

「僕は、ずっとおまえを追いかけているよ。おまえの活躍を全て、この目に焼き付けるつもりでいる。そう、一瞬たりとも見逃すものか……これが、僕とおまえの高校生活最後の試合なんだ。おまえも本当の本気を出して、思う存分戦っておいで、レイフ」

これからスタンドに行つて、たぶん両親や友人達と一緒に試合を観戦するのだろうクリスターを、レイフはちよつと切ない気分になつて見つめた。

（本当なら、おまえは、こんな所に1人残つて、オレを見送るはずじゃなかった、一緒に皆が待っているフィールドに向かうはずだったのに――）

だが、それはもう、今更考えても仕方のないことだった。

レイフは最後に、クリスターに屈託なく笑いかけながら親指を立てて見せると、くると背を向け、開いたドアの向こう、フィールドという戦場目指して、走り出した。

絡み付いてくる何かを振り切るよう、通路を走り抜け、角を曲がると、黒い服装に身を包んだ観客が多く見られるアーバン校サイドのスタンドが初めて目に入った。

ふいにレイフは、現実ではない、別の世界にでも迷い込んだような錯覚に襲われた。

フィールドを照らす眩しいライトの中、レイフは、忘我の気分の

まま、自分を待ち受けるチーム・メイト達に加わる。

（ああ、本当に、ここまで来たんだ。去年と同じこのフィールドに、オレ達は再び勝つため、戻ってきた）

スタンドにこだまするブラック・ナイツという声援にぼんやり耳をかたむけているうち、レイフは、自分の中にふつふつと熱い闘争心が湧き上がってくるのを感じた。

（ああ、何もかも去年と同じだ。大丈夫、今度もオレ達は勝てる）

敵側のサイド・ラインを眺めやると、ウォーム・アップをしている相手チームの選手が目に入った。部門別ランキングの上位に食い込む優秀な選手が何人もいるだけあって、その体格を一瞥しただけでも、手強い相手になるだろうことは予想がつく。

しかし、彼らが何者であろうが、恐いとは思わない。

（クリスターが言ったように、オレの全てをこの試合に捧げ、力を出し切ればいい：そうすれば、必ず勝てる）

瞬く間に戦闘モードに入っていく、レイフの顔つきは猛々しいものに変わり、琥珀色の瞳は、獰猛な肉食獣を思わせる金色に爛々と輝きだした。

（勝ってみせる！）

コイン・トスの結果、オープニングのキックはブラック・ナイツが手に入れた。

試合の開始直後、ブラック・ナイツは緻密さで定評のある攻撃で前進を続け、瞬く間に、レイフのランにより、最初のタッチ・ダウンを奪う。

決勝戦ともなれば、大学のリクルーターの数も半端でなく多かったが、レイフは、彼らの貪欲な目に自分がどう映るかなど、全く頓着していなかった。

彼の頭の中にあるのは、ただ1つ、この試合を勝ちたいという執念だけだった。

（そうさ、この後にくるものなんか、オレはもうどうだっていいんだ。カレッジの名門チームに入るとか、そこで4年、プロ・チームとうまく契約にこぎつけるとこまで何とか怪我也せずにかんばって、いい成績を残したいなんて、もう思わない。ここで勝てたら、たとえ怪我をして二度とプレイできなくなっても、たぶんオレは構わない。いつの間にか、オレにとって、フットボールはそれほど重要なものじゃなくなっちゃった）

戦いの興奮の最中にありながら、レイフの中の依然として冷めた部分は、そのことを自覚していた。

（ずっと、どうしてなんだろう、何で今までのようにフットボールに素直にのめりこめないんだろうって、不思議に思ってた。今じゃ、オレもエースとしての責任や何やら面倒なことを一杯しよいこんだせいで、無邪気に楽しめなくなっちゃったんだろうって考えてた。このプレッシャーから解放されたら、また前のようにフットボールが大好きになるって：でも、そんなに簡単なものじゃないみたいなんだ）

前半有利に試合を進めていくブラック・ナイツへは、観客席からの熱い声援が惜しみなく降り注がれる。空気を奮わせる、大勢の人々の声の響きも拍手も、レイフに去年の決勝戦を想起させていた。

攻撃権をもぎ取って、新たなフォーメーションを組むために移動しながら、レイフは素早く観客席を眺めやった。

どこに坐っていると別に教えられたわけでもないのに、レイフは、不思議なほど素早く、正確に、求める人の姿を大勢の観客でひしめきあうスタンドの中に見つけ出した。

黒っぽい服に身を包んだ有象無象の只中、そこだけが真紅の火を上げて燃えているかのように、レイフにはつきりとその存在を伝えてくる。

（そう、どんなに遠く離れても、オレがおまえを見失うはずがない）

レイフと同じ姿をした若者が、確かに、そこに立っていた。切り離されてしまった、置き去りにしてきた、レイフの魂の半分…。

（クリスター）

レイフは奇妙な動揺が胸に走るのを覚えながら、きゅつと唇を噛み締めた。

（でもさ、おまえ、一体そんな所で何をしてるんだよ…？ やっぱおかしいよ、何で、オレの傍にいないんだ？）

何もかもが1年前のあの日の体験と酷似しているというのに、一番肝心な部分が、レイフの記憶とは大きく違う。

（そして、オレは一体、ここで何をしているんだろう？ クリスタ
ーがいないフィールドに、エースとして立ち、必死になって戦っ
ている、オレは…？）

レイフは齒を食い縛りながら攻撃の構えを取り、己の前に立つ、
QB ショーンの背中を睨みすえた。

ふいに、その背中が別の者の背中とだぶって見えるのに、レイフ
は愕然と目を瞬いた。

それは、QBとしてレイフの前に立ち続けた、クリスターの頼も
しい背中、彼が常に見続け、共にありたいと願い続けた兄の後ろ姿
だった。

（ああ、やっぱり…何もかも、去年とは変わっちゃまったんだ。この
試合も、オレにとってのフットボールの意味も―）

ヘルメットの陰で、レイフは人知れず、ほろ苦い笑みをうかべた。

（それなのに、オレは、どうして戦っているんだ？ 何のために勝
とうとしている？ 一生懸命努力しても、それで、オレは何をこの
手に掴めるのか…）

ふと、何か冷たいものが腕を濡らすのに、レイフは雨が降り始め
たことに気がつく。

この雨を受けて冷たいと感じるのは、フィールドにしようが、ス
タンドにしようが、同じはずだ。

レイフが味わう闘いの昂揚は、スタンドにいるクリスターの胸にもきつと伝わって、その体を熱くするだろう。

（そうだ、今、オレの全てをクリスターが見てるんだ。あいつの前で、生半可なプレイなんかできるものか、オレはあいつの分も、思う存分暴れまわって、完全燃焼してやる。そうすりゃ、あいつもきつと：フィールドにはいらなくても、少しは気持ちよくなれるよなあ）

これは、レイフとクリスターの高校時代最後のフットボール・ゲームだ。2人にとって大切な一戦を、悔いの残る思い出にはできない。

（クリスターがいないという現実が変えられないものだとしても、オレはこの試合に勝ちたい。だって、あいつがオレにそれを望んでいるんだからーフットボールで天辺に立つってというのが、オレ達が長い間、一緒に追いつけた夢だから…）

一瞬鎮火しかかったレイフの瞳に、再び激しい闘志が灯る。身の内に力が漲り、冬の雨の冷たさも、激しいプレイによる疲れも一気に吹き飛ばす。

「SET」

攻撃再開を告げるショーンの声が、フィールドに響き渡った。

「HAT、HAT：HAT！」

レイフは力一杯地を蹴って、クリスターと自分、2人の最後の夢に向かって猛然と駆け出した。

必死になって努力すれば、叶えられない夢などない。

力の限りを尽くせば、きっとどんな困難な道程も乗り越えて、あの栄光に満ちた頂点に辿りつける。

だが、その夢が叶った時、目指した頂上に立った時、オレが見つけるのは、果たして、オレが本当に欲しいと思うような何かなのだろうか…？

長いようすでいて実際にはとても短かった、夢に見続けた場所での闘いが終わった後、レイフは1人、ぐっしょり濡れたフィールドに長いこと立ち尽くしていた。

試合が終了した途端強くなった雨足に追われるよう、スタンドを埋め尽くしていた観客達の大半は、既にスタジアムを去っていた。

残っていた者がいたとしても、照明のほとんど落ちたフィールド

の片隅に、黒っぽいフード付きのジャージに着替えてぽつんと佇む、赤い髪の青年に注意を向けることはもはやない。

今年の大会は終わったのだ。

（ここは、夢のフィールド：ブラック・ナイツの―オレとクリスタ―の…）

何を思ったか、レイフは濡れたフィールドにぺたんと腰を下ろし、そのままごろりと仰向けに横たわった。

瞬く間に冷たい水が服に染みてきたが、燃焼しきった体はまだ熱く、体温が急速に奪われていくことも、レイフは気にならない。

雨が降ってくる暗い夜空の彼方を見透かすよう、彼はじっと目を凝らした。

（ああ、これで本当に何もかも終わっちゃった。この4年オレ達を駆り立ててきた、大きな目標はなくなっちゃった）

目の奥から熱いものがこみ上げてくるのを覚えた、次の瞬間、見開いた両目から涙がぼろぼろとこぼれ出した。

「レイフ」

フィールド・ハウスの方から己を呼ぶ声が聞こえたが、レイフは応えず、何もない空を睨み続けた。

やがて、濡れた地面を歩く足音が、ゆっくりとこちらに近づいてきた。いつまでも起き上がる気配のないレイフを心配して、迎えに

来たらしい。

「何をやってるんだ、おまえは…」

呆れたような声がするのに、レイフが目だけを動かすと、すぐ傍に佇んでいるクリスターの姿があった。黒っぽいコートを着て、傘はさしていない。

「いつまでここにはへばりついている気だ。他の連中は皆、パスに乗り込んで、おまえが戻ってくるのを待っているぞ」

レイフの顔が、雨だけでない、別の水で濡れていることに気付いたのか、クリスターは口調を柔らかくした。

「もう行こうよ、レイフ。そのままじゃ、いくらおまえでも風邪をひくぞ」

レイフの目に映るクリスターの顔が、ふいにぼやけて、見えなくなった。

「クリスター、オレ…ごめんよ、オレ」

レイフは涙にむせながらクリスターに謝ろうとしたが、こみ上げる悲しみに喉が詰まって、言葉にならない。

「謝ることなんてないよ、レイフ、おまえはよくやった。今までで最高のプレイを、今夜おまえは僕に見せてくれた。試合の間、皆の視線はおまえに釘付けだったよ。あれは僕の弟なんだと…僕がどんなに誇らしかったか、想像できるかい？」

クリスターの優しい言葉は、しかし、レイフをますます居たたまれない気分にした。

「でも、結局勝てなかったなら、いくらいいプレイをしたって意味がない……！」

レイフは激しく頭を振り、涙を迸らせながら、強い口調で言い返した。

「絶対優勝してみせるって約束したのに、本当にあと少しで勝てそうだったのに、最後の最後で逃しちまった……畜生、畜生、悔しい、悔しい！ ああ、オレのやることって、ほんとツメが甘いよなあ」

最後には悔しいのを通り越して泣き笑いのような顔になりながら、自分を執拗に責めるレイフを、クリスターは辛抱強く慰める。

「いいか、レイフ、おまえもチームの皆も、惜しむことなく全力を尽くして戦ったんだ。何一つ、恥じることも、後悔することもない。実際、今夜の決勝戦は、どちらが勝ってもおかしくないくらい、とてもいいゲームだった……今シーズンで一番の名試合だったと、スタンドのいた皆も口をそろえて言っていたよ」

「でも、オレ、勝ちたかったんだ。クリスターにもう一度、天辺に立ったブラック・ナイツの姿を見せてやりたかったんだよっ」

レイフは、圧倒的な哀しみに胸ふたがれて、両手で顔を覆い泣きじゃくった。

「子供みたいに泣くなよ、レイフ」

「別にいいじゃないか、兄貴以外は誰も見てないんだからっ。オ、オレは、ずっと我慢していたんだ。例えば試合に負けたって、エースはエースだから―最後までちゃんと責任は果たそうと思って、テレビとか雑誌のインタヴューアの質問にもしつかりと答えた。ほんとはすぐにでも独りきりになって泣きたかったのに、平気な顔して、がんばったんだ。そうして、ようやくオレは解放されたんだから、今は泣きたいだけ泣いていいだろう」

「…そうだね」

ぴしゃんと水が小さく跳ねる音がしたので、びっくりしたレイフが顔から手を離すと、クリスターが彼の傍に跪き、その顔を覗き込んでいた。

「でも、レイフ、僕は今夜、優勝するよりいいものを見せてもらったと思っているよ。おまえの実力を、本当の本気を見られたんだ。ありがとう、レイフ、僕は心から満足しているよ」

「兄さん」

クリスターの手がレイフの手首を掴み、引っ張った。レイフはやつと地面から上体を起こし、優しく微笑みかけてくるクリスターの顔をじっと見返した。

瞬間、レイフは、自分の中で、ふつつりと何かが切られたように気がした。

「終わった…終わっちゃったよ、オレの…オレ達のフットボール、今夜でもう全部終わっちゃったよおっ…」

レイフはクリスターに抱きついて、わんわんと大声をあげて泣いた。これまで胸の中に溜め込んでいたものを全て吐き出してしまおうとするかのように、顔をぐしゃぐしゃにして、泣き続けた。

「レイフ、レイフ、今夜の試合が終わったって、それで世界が終わるわけじゃない。むしろ、おまえのフットボール・プレイヤーとしての道は、これから大きく開けていくだろう。これは、その前のちよつとしたほろ苦い経験でしかないんだよ」

クリスターはレイフの肩をあやすように叩きながら、穏やかにかき口説いている。その声は、どこまでも優しく、温かく、深い満足とある種の幸福感に満ちてさえいた。

クリスターの意識は既に、この試合の後、レイフに訪れるだろう大きなチャンスに向けられているようだ。その点、レイフの心情とは大きくかけ離れていた。

（たった一つの試合の終わり？　ちよつとしたほろ苦い経験…？　違う、クリスター、違うんだ…オレが、終わっちまったと泣き叫ぶくらいに哀しいのは―）

どうしてクリスターには分からないだろうともどかしくてならなかったが、それを口で説明するには、レイフはまだあまりにも取り乱していた。

今のレイフは、クリスターの腕に身を預け、声にならない嗚咽をあげながら、名状しがたい喪失感を噛み締めることしかできなかった。

「こんな所で立ち止まって、泣き続けることなんてない。おまえは

これからもずっと、フットボールを好きなだけ続けられる。もっと大きな舞台で、もっと大きな勝利を掴む機会は、いくらでもあるんだ」

今大会のMVPは、どうやらレイフが取ることになったらしい。昨年クリスターが予言したことが現実になったわけだ。しかし、それについて、レイフ自身は、あまり嬉しいとは感じなかった。大学リクルーター勢が己に与えた最高の評価も、気にならなかった。

（オレにとってのフットボールは終わった。いや、それはもうとっくに終わってたんだ。今夜、はつきりそのことが分かったんだよ、クリスター）

1年前のあの日、初めて州チャンピオンとなった瞬間、このフィールドで、レイフはクリスターと並んで立ち、勝利の喜びに浸っていた。

（あれが、フットボール・プレイヤーとしてのオレの最高の時だったんだ。たとえこの先、カレッジやたとえプロの世界に入って、どんなに大きな試合を戦って、勝利を掴んだとしても、オレは、1年前のあの時と同じほどの感動は覚えないだろう。たとえ、どんなに素晴らしい仲間達に恵まれ、オレ自身まだフットボールを愛しているのだとしても、この胸が完璧に満たされることは二度とないだろう―そこに、おまえがいないなら…）

いつまでも自分にしがみついて泣き止もうとしない弟を、クリスターは驚くべき忍耐力を発揮してなだめながら、何とか立ち上がらせた。

「さあ、皆の所に戻ろう、レイフ」

「う、うん」

ようやくレイフは、クリスターに支えられるようにして、フィード・ハウスの方によろよろと足を踏み出した。

ふと顔を上げると、一度は先に立ち去ったものの、いつまで経っても来ないレイフを心配したらしい、トムやショーンが入り口の向こうから遠慮がちに顔を覗かせているのに気がついた。

「やべ、大泣きしているの、見られちゃった」

「おまえがもともと泣き虫なことなんか、皆知ってるよ」

レイフは唇を尖らせてクリスターを軽く睨んだ後、彼の腕から身を離し、トム達の方に手を振った。

「ねえ、レイフ：さっき試合の前に、僕に聞いて欲しいことがあるって言ってたけれど――」

クリスターの躊躇いがちの言葉に、レイフははっと息を吸い込んだ。

「話していいよ。逃げずに、聞くから：」

ぱらぱらと降りしきる冷たい雨の中、クリスターは真摯な眼差しでレイフを見つめ、佇んでいる。

（優勝できたら、その時、クリスターにオレの本当の気持ちを話そう。約束をちゃんと果たせたら、愛してるって、伝えられるだけの

勇気もきつと持てる)

自分がつい数時間前に固めた決意を思い起こし、レイフは、切なげに瞳を揺らした。くしゃっと顔を歪めて笑うと、その瞳からまた少し涙がこぼれた。

「ごめん、オレー今はちよつと無理…みたい…」

何かがつかえたように、それ以上声を出せなくなるレイフに、クリスターは理解に満ちた顔で頷いた。

「そうか。いいんだよ、レイフ、落ち着いて、ちゃんと話ができるようになったら、いつでも僕の所においで。おまえは、僕にとって、この世の何よりも大切な弟だ」

クリスターはレイフの頭に軽く手を置き、ごくさりげない調子で、囁いた。

「…愛しているよ」

きゆうっと、レイフの心臓が切なく、苦しく、締め付けられる。

「うん」

レイフは紅くなって俯き、手の甲で目の周りや鼻を乱暴にぬぐうと、クリスターと並んで、ゆっくりと歩き出した。

最後に一度だけ、立ち止まり、レイフは後ろを振り返った。

過ぎ去りし夢のフィールド。

クリスターの前で散々泣いたせいだろうか、荒れ狂っていた感情はようやく鎮まったものの、今度は全身をひしぐような空虚に襲われていた。

今のレイフは、今シーズンの話題を集めたフットボール選手ではなく、これから先どうやって生きればいいのか分からず途方に暮れる、ひとりの高校生だった。

しかし、この哀しみと虚脱感もじきに薄れていくだろう。そうすれば、これからどうするのか、考えることもできるようになるかもしれない。

（ああ、今から1年後、オレは一体どこで何をしているんだろう……？）

急に寒さを意識して、ぶるっと身を震わせるレイフの手をクリスターが掴み、しっかりと握り締めた。

「大丈夫だよ、レイフ」

クリスターの手は温かだった。触れている部分から、クリスターの体温が伝わって、レイフを少しばかり元気にしてくれた。

レイフは素直にこくと頷いて、クリスターに導かれるがまま、もう誰もいない、三ヶ月に及ぶ全ての熱狂の過ぎ去ったフィールドを後にした。

第7章 F A K E (10)

シーズンが終わった後、フットボール・チームのメンバーは皆、それぞれ学業や他の関心事に移っていき、ばらばらになっていった。

特に、今季限りで引退となったシニア達は、いよいよ学生としての現実、進学問題に本気で取りかからねばならず、かつての固い結束も次第に過去のものになりつつある。

チームの内の何人かは、希望する大学にスポーツ推薦で入れそうだが、多くはやはり、一般の学生と同じような手続きを踏まなければならない。

そんな中、レイフの周囲は、いまだに騒がしかった。

優勝校の選手を押さえ、今シーズンのMVPを取ったレイフは、その後スポーツ専門誌の全米ベスト選手にも選ばれた。今や、どの強豪大学が彼を獲得するかに、皆の関心も移っている。

実際、テキサス大学、ノートルダム大学、ミシガン大学等、フットボールの名だたる名門チームを抱える大学からの電話や手紙、時には家庭訪問による熱い勧誘は、一向に収まる気配もない。

レイフがまだどの学校に進みたいと明言せず、具体的な条件を口にするわけでもないことが、一層彼の争奪戦に拍車をかけていた。

昨年には州チャンピオンに輝き、今年は惜しくも逃したものの、強いフットボール・チームを擁するということでアーバン校は知名度をあげた。得意満々の校長によって、学校の宣伝活動にも、フツ

トボール・チームの活躍は使われるのだろう。

当然、エースとしてチームを支えたレイフは、校内ではヒーロー扱い。おまけに、雑誌やテレビで取り上げられたせいか、時々怪しげな記者や学校関係者以外のファンがカメラ片手に校内をうろつく姿も見られた。

ハンサムでスタイルがよくて、性格も人懐っこくて可愛いので、一部でちよつとしたアイドルのような人気が出たらしい。

それまであまり女の子に好かれた経験のないレイフは、『人生最大のモテ期』を迎えても、浮かれるどころか戸惑い気味で、普通の高校生に戻りたいと半ば本気で友人達にもらしていた。

レイフが自分の置かれた状況の目まぐるしさに適応できずにいるうちに、周りの友人達は次々に大学の申し込み手続きを終え、フットボール・チームの中で、レイフと同じように推薦のもらえた選手も契約をすませた。

とつくに願書を提出し、面接の手ごたえも上々だったクリスタは、余裕の構えで合否結果が送られてくるのを待っている。

そんな中、レイフだけが、まだ正式にどこの大学に入るとも返事をしていなかった。

レイフにしても、本当は、頭の中には希望する大学、カレッジ・チームがないわけではなかった。以前から気になっていたテキサス大学は、一度クリスタのスカウトに訪れたシュミットが、ラースの大学時代のチーム・メイトで、レイフがもしテキサスに来るなら自分の息子のように世話をしようとして約束してくれていたし、何より、

そのコーチに惹かれていた。それから、ネブラスカ大のスカウトは、レイフがこれほど注目を集める前からその才能を買っていて、とにかく熱心な勧誘に、レイフも心が動いていた。

しかし、レイフは、家を出ることにも、この土地を離れることにも、なかなか踏ん切りがつかなかった。

クリスターが地元の大学に進学し、レイフがテキサスなりネブラスカに行ったとなると、彼ら双子兄弟は、生まれて初めて離れ離れで暮らすことになる。一体どのくらいの頻度でクリスターと会えるのだろうか想像すると、正直、レイフは恐かったのだ。

それに、レイフは、カレッジでフットボールを続けることそのものに、以前ほどの興奮を覚えなくなっていた。

アルバイト先の獣医のケンに、つい、『動物のお医者さんになるには、どれだけ勉強しなくてはならないのか』と尋ねてしまうほど、これまでひたすらまっすぐに突き進んできた、将来の展望が見えなくなっていた。

別に、本気で獣医になりたい訳でも、プロ・フットボール・プレイヤーになるのが嫌になったわけでもないが、レイフの迷いは一向に晴れなかった。

そんな具合に、レイフが去就を決められないでいるうちに年々明け、学校も二学期に入った。この頃になると、さすがに進学指導のカウンセラーやラースも本気で心配し始めた。

『一体、何を迷っているというんだい、レイフ？ 考える時間なら、充分あったはずだろう？ いくら先方が君を欲しがっているからと

言って、こうも返事を先延ばしにしては、我慢の限界がくることになりかねない。大体、君はプロ選手ではなく、高校生なんだ。スポーツができるから優先的には入れるとはいえ、大学はそもそも勉強をするところなんだよ、その辺りを君ははきちがえていないかね？」

『なあ、レイフ、心配なことがあるなら、ちゃんと説明してくれ。父さんは、昨日もシュミットから電話でせっつかれたぞ。おまえの将来に関わるからだから、よく考えて、おまえにとって一番いい大学に行ってほしいが、それにしたって、もう一月だ。そろそろ決心しても、いい頃だぞ？』

そんなふうには、周囲からプレッシャーをかけられても迷いは吹っ切れず、精神的にかなり追い詰められてきたレイフは、思い切って、クリスターに悩みを打ち明けるところにした。

これまでクリスターは、レイフの進路について、一切口を挟もうとしなかった。あれほどレイフがカレッジ・チームに進むことを望み、チャンスが来たことを我がことのように喜んでいた兄なのに、何も言わないことが、レイフにとっては意外でもあり、寂しかった。

（まあ、オレも、クリスターに進路の相談なんて持ち掛けなかったけれどさーだって、そうするといよいよ現実として自覚しなきゃならなくなる、オレとクリスターが、別の大学、それぞれの将来に続く別の道を歩いていくんだって―）

フットボールに熱中している時はそれほど意識しなかったが、いよいよレイフとは異なる自分の道を歩き始めたクリスターは、いつの間にか遠い存在になってしまっていた。ダニエルとの別れの際、心を通わせあうことができた記憶も、この頃では夢のようだ。

今でも一応同じ学校に通ってはいるのだから、たまにはクリスターの姿を校内で見かけることはある。しかし、今彼の周囲にいるのは、レイフの知らない生徒ばかりだ。クリスターと同じクラスを取っているのだから、優秀なエリート達ばかりなのだろう。そんな連中に取り囲まれたクリスターは、レイフにとっては近づきがたく、他人のように余所余所しく感じられた。クリスターの方も、レイフの存在に気がついたとしても、ただ遠くから視線を投げかけるだけで、決して近づいてこようとはしない。

（クリスターがどんどん遠くなっていく。このまま高校を卒業して、離れ離れになってしまったら：オレ達は、二度ともとは戻れなくなるんじゃないだろうか？　クリスターはハーバードのエリート街道まっしぐらで、オレはずっとフットボールばかりして、久しぶりに会う度に、心も体も似ているところは少なくなつて―そんなの嫌だ、嫌だよ。でも、実際問題、いつまでも、このまま答えも出さずに、ぐずぐずしているわけにもいかない）

レイフはクリスターの部屋の扉を切なげな目でしばし眺め、それから、思い切って、ノックをした。

「兄貴、オレだけど、ちょっといいかな？」

今夜は久しぶりに、クリスターも一緒に、家族でテーブルを囲んで夕食を取った。その席でも、レイフはラースに進学について追及されて困っていたので、クリスターにも今レイフがやってきた理由は察しがつきそうだった。

「ああ、入っておいで」

クリスターの声には、やはり、レイフの訪れを予期していたよう

な響きがあった。

レイフは心を静めるために、すうっと深呼吸をした。

（オレは今、迷いを捨て去ろうとしているのか。それとも、一番大切なものを諦めようとしているのか―？）

レイフが思い切ってドアを開くと、クリスターは学校の授業のレポートか何かを書きかけていた手をとめて、こちら側に体を向けた。

怪我をした右腕は、こうして見る限り、支障なく動くようで、レイフをほっとさせる。しかし、用心のためか、ボクシングもやめているので、レイフには、クリスターがどの程度回復しているのか、正確なところは分からない。

身の内から湧き上がる熱を吐き出すようにスポーツに打ち込んでいた頃の猛々しさは、今のクリスターからはほとんど消えていた。少し痩せた顔は、ヘレナによく似た知性が前面に出て、ひんやりと冷たげだ。

（こいつは、本当にオレと双子だろうか…？）

レイフは急に不安に駆られて、確かめるように、自分の顔にそろりと指先を滑らせてみた。

「随分深刻そうな顔をしているね、レイフ？」

レイフは慄いたように目を閉じた。

（ああ、でも、この声は変わってない…オレのクリスターだ）

レイフは後ろ手でドアをしめると、黙ってクリスターのベッドに近づき、その端に腰を下ろした。クリスターは椅子を引き寄せて、そんなレイフの前に坐った。

「さっき父さんと言い合った話の続きかい？」

「うん…まあ…」

レイフが言いにくそうに口ごもるのを見て、クリスターは困った奴と言いたげな溜息をついた。

「父さんがイライラするのも無理はないと思うけれどね。この期に及んで、一体何を迷っているんだい？ 条件を引き上げようとか、そういうつもりでもないだろう？」

「ち、違うよ…何だか、車やアパートメントやら、高価なオプションがついてくるってことをにおわすスカウトもいたけど、オレ、そういうの好きじゃないし…いい環境で思う存分プレイできたら、それで充分だよ」

「それじゃ、おまえの期待する、いい環境って、どんなものなんだい？」

「そりゃ、いい仲間にコーチがいて…やっぱボウル・ゲームに出られるくらい強いチームがいいよ。ネブラスカ大やマイアミ大にも惹かれたけど、やっぱ、テキサス大とかいいかなって思ってるけど…」

クリスターは深く椅子に坐ったまま、顎の下で指をピラミッドの形に組み、じっとレイフの目を見据えた。

「そこまで固まっているのなら、なぜ、いつまでも返事を先延ばしにするんだい？」

柔らかな口調ながら、核心の部分に食い込まれて、レイフはうつと言葉に詰まった。

「だってーだってさ、テキサスって南部だよ、こことは随分土地柄も違うだろうし、第一遠すぎるよ。めったに帰ってこれないかも知れないじゃないか…？」

「おいおい、高校を卒業したら、おまえはもう一人前の男なんだぞ？ 知らない土地に1人で行くのが心細いなんて、子供じみたこと言うなよ」

突き放すように言うクリスターに、思わずかとなったレイフは、激しくなじるような口調で、食い下がった。

「そ、そう言うおまえは平気なのかよ、クリスター？ オレ達今まで、離れ離れになって暮らしたことなんて、なかったじゃないかって？」

クリスターはレイフの眼差しを避けるよう顔を俯け、膝に置いた手を組んだり解いたりしながら、低い声で言った。

「どこの家の兄弟だって、そのうち独立すれば、家族とは離れて暮らすようになるものさ。確かに、最初のうちは寂しいし辛いかもしれないけれど、僕達だって、そのうち慣れるよ」

クリスターは、まるで、レイフに対してだけでなく、自分にもそ

う言い聞かせているようだった。

「クリスター…」

レイフはきゅっと唇を噛み締めて、黙然と考え込んでいるクリスターを見返した。

（そのうち慣れる？　それだけかよ、もっと他に言うことあるだろ、オレがいなくなっても、おまえ、本当にいいのかよ？）

レイフは身を乗り出すようにして、クリスターの反応を探ったが、彼の伏せられた顔には、諦めたような虚無感が漂うばかりだった。

（どうして―？）

2人の間に、気まずい沈黙が漂った。

「オ、オレさ、この間、ケンに聞いたんだ、獣医になるにはどうしたらいいのかって」

いきなり、レイフが話の流れを大きく変えて口走るのに、クリスターは怪訝そうに顔を上げた。

「獣医…？　何だよ、それ…？」

「う、うん、やっぱり大学って勉強するところだろ、せっかくだから、オレも将来に生かせるようなことを一応学んでいた方がいいのかなって、この頃ちょっと思うんだ。もちろんプロにはなりたくないけど、途中で怪我することだってあるかもしれないし…オレ、動物好きだから、獣医なら、なってもいいかなあって…」

わざと明るく何でもないことのように言いながら、レイフは、クリスターの様子を内心びくびくしながら窺った。

フットボール選手になること以外の将来など考えなかったレイフが、こんなことを突然言い出した心情を、クリスターは測りかねているようだ。

「ケンから聞いただろうけど、大変らしいよ：医学か生物関連のコースを初めに取って、そこから獣医学部を受けることになるのかな。医学部より難関だと聞いたけれど：目指すなら、よほど本気で取り組まなければならないと思うよ」

あくまで現実的なクリスターの指摘に、レイフはしょんぼりと肩を落とし、困ったように頭をかいた。

「うん：そうだな、やっぱ無理かなあ。オレ、今までフットボールばかりで、勉強はいい加減にしてたし—こんなことなら、ちっとは勉強にも身を入れとくんだったなあ」

「フットボールに取り込むのと同じほどの本気を発揮できるなら、不可能ではないと思うよ。おまえは、好きなことや興味のあることに關しては、すごい集中力を発揮するからね。フットボールなら、どんなに複雑な作戦だって、おまえ、一度の説明で飲み込むじゃないか？　ただ—おまえが今になってそんなことを言い出した理由が、ちょっと気になるけれどね：まあ、ここまで来れば、ただの夢じゃなくて現実としての細かい部分が色々見えてきて、これまで気にならなかった些細なことが不安になってきたのかな：？」

クリスターは顎に手を添えて、じっと考え込んでいる。

（だって、仕方ないだろ。このままフットボールを続けたって、オレは、おまえと一緒に優勝した時のような高揚感は二度と得られないだろうって、分かっちゃったんだ。カレッジもプロになるって夢も、今じゃ少し色あせちゃったんだよ）

しかし、そんなことを、自分に夢を託してフットボールを断念した、この兄に言えるはずもなく、レイフは切ない気分で黙り込んでいた。

「これから先どう生きれば分からずに途方に暮れているのは、僕ばかりではなかったようだね。おまえはいつも、まっすぐひたむきに夢に向かって突き進んで、それは決してぶれないとばかり思っていたけれど――」

感慨深く呟いた後、クリスターはレイフを正面から見据え、真剣な口調で諭しにかかった。

「でも、そんな迷いは一時的なものだと思うよ、レイフ。おまえが子供の頃からずっと追いかけてきた夢に、やっとここまで近づいたんだ。不安がらずに、思い切って飛び込んでいけば、おまえの望むような道は開けるはずだ。おまえには実力がある。せっかく掴んだチャンスを、今は生かすことだけを考えるべきだよ」

クリスターの確信のこもった眼差しを受け止めるのは、今のレイフには辛かった。いくら兄に励まされても、夢に対する情熱をかき立てられない自分に、落ち込むばかりなのだ。

（少し前のオレなら、もちろん嬉しくて有頂天になっていただろう、大チャンスなんだろうけどさ……ああ、こんなはずじゃなかったのに

な)

レイフが子供の頃からずっと思い描いていた夢の中では、クリスターが常に彼の傍にいた。どんなに望んでも、それはもう叶わない。

「なあ、そういや、クリスターはハーバードに入って、その先、どうするんだよ？ 何を勉強して―将来は何になりたいとか、考えてるのかよ…？」

レイフの思わぬ切りかえしに、今度はクリスターが痛い所を突かれたというかのごとく、びくっと肩を揺らせた。

「兄貴は賢いし、その気になったら、何にでもなれそうだもんなあ。むしろ、才能がありすぎて、なかなかひとつに絞れないんじゃないか？」

「まあ、僕みたいな手八丁は、何でも適当に器用にこなすけれど、結局どれひとつものにできないというのが現実に近いんだけどね―今も、いくつか興味のあるクラスはあるけど、将来にどうつなげるとか、まだ、そこまで具体的なことは決めてないよ。学問としての心理学は好きだけれど、やっぱり僕は、セラピストとかには向いてないと思うし―ああ、そうだ…！」

何を思いついたのか、クリスターの声の調子が、ふいに弾んだものになった。

「いっそ、医者になろうかな…」

いきなり何を言い出すのかと、今度はレイフが目を丸くした。

「オレが獣医なんて言ったから、張り合おうってのかよ。まあ、おまえなら、苦勞せず、獣医でも人間相手の医者でもなれそうだけだな」

「スポーツ医学を学ぶんだよ。うんと腕のいい医者になって、そうしてさ、いつかおまえが―プロのフットボール選手になったら、僕が主治医になってやるよ。いい考えだと思わないかい？」

遠い目をして、そんな本気なのか冗談なのか分からない話を樂しげにするクリスターに、レイフは半ば戸惑いつつ、適当な相槌を打つ。

「ふうん…兄貴がオレの専属ドクターになってくれるなら、何かと心強いし、安心だろうけどさあ」

レイフの賛同に、クリスターは目を輝かせ、更に熱っぽく語り続けた。

「だろ？ おまえが所属するチームのホーム・グラウンド近くににある病院に勤務して、そのうち開業するんだ。おまえが怪我しないように、体調を常に整えていられるように、僕がずっと診てやるよ。お互い近くに家を構えてさ…いや、その頃には、僕達はまた一緒に暮らせるようになっていくかもしれないね、きっと、そうだよ。たとえ今は遠く離れ離れになってしまっても、大学を出るまでの数年間の辛抱じゃないか…あ…」

クリスターはふいに我に返ったような顔になり、口をつぐんだ。束の間明るさを取り戻した顔が、見る見るうちに、再び暗く閉ざされていく。

「ク、クリスター…?」

心配になったレイフが伸ばした手を振り払い、クリスターは己の体を抱くようにしながら、やけに神経質な声をたてて笑った。

「馬鹿だな、一体何を言ってるんだろう、僕は…別に医者になるつもりなんてこれっぽっちもないのに…大体、そんな先のことなんて―僕たち2人とも、どうなっているかも分からないじゃないか。もしかしたら、おまえは他に大切な人を見つけて一緒に暮らしているかもしれない、その頃には、僕のことなどもう必要としなくなっているかもしれない…」

自嘲するよう呟くクリスターを見ているうちに、レイフは何だか堪らなくなってきた。気持ちが高ぶるまま、ベッドから跳ね起き、クリスターの肩を強く掴んだ。

「兄さん…!」

クリスターがはっと身を固くしながら、顔を上げる。

「なあ…どうしても―どうしても、離れなきゃならないのか…? このまま一緒にいちゃ、駄目なのかよ? 何年も先の夢物語よりも、オレは今、おまえに傍にいてもらいたいのに―」

レイフが切々と訴えると、クリスターは苦しげに顔を歪め、こみ上げてくる何かを堪えるよう、唇を噛み締めた。

クリスターの手が上がり、肩を掴みしめるレイフの手を振り払おうとするが、レイフは逃がすまいと一層力を込める。

すると、クリスターはもうレイフの手をほりほどこうとはしなくなったが、ある意味分かりやすい拒絶よりもレイフを途方に暮れさせる、暗く空虚な目を向けてきた。

「現実を見ろよ、レイフ。僕とおまえがずっと一緒に暮らし続ける理由なんて、もうどこにもないじゃないか…？ フットボール以外に、僕らが共有できるものが他にあるというのかい？」

今の自分を見ろと言いたげに両手を広げるクリスターを前に、レイフは泣きたい気分になった。

フットボールは、クリスターとレイフにとって、唯一、共有することのできる世界だった。そんなことは、もう随分前から分かっていた。

他には、2人が関心を持つ分野、得意なこと、友人や仲間達、何一つ重なる部分はない。

フットボールを離れたクリスターが、日々何をし、考えているのかさえ、レイフにはほとんど把握できない。

それでも――。

「理由なんか――理由なら、ちゃんとあるよ…！」

レイフは声を詰まらせながら、言い返した。

（おまえを愛しているから一緒にいたいって、それだけじゃ駄目なのか？ どうしても、許されないのか、オレ達が兄弟だから――？）

クリスターは、レイフが必死に伝えようとしている何かを敏感に感じ取ったのか、慄いたように目を見開いた。

「レイフ…？」

「オレさ、オレ、決勝戦の前に、兄さんに言ったよな…どうしても話したいことがあるって、逃げずにちゃんと聞いてくれって―優勝したら打ち明けようなんて自分に言い聞かせてさ、惜しい所で負けちまったから、その後はどうしてもきっかけがつかめなかった」

触れたクリスターの肩から、緊張と惑いが震えとなって伝わって、レイフの心臓の鼓動を速くする。

「…ああ、覚えているよ」

クリスターは、レイフの眼差しに耐え切れなくなったかのように、目を閉じた。一呼吸ついて気持ちを静めると、再び目を開けて、まだ少し躊躇いながらも、勇気を奮い起こしたように言った。

「おまえが話せるようになったら、いつでもおいでと僕は答えた。逃げずに、ちゃんと最後まで聞くからって―」

クリスターは動揺を鎮めようとするかのごとく手を握り締め、レイフの言葉をじっと待ちうけている。

「クリスター、オレ…」

レイフは喉をぐくりと鳴らして、クリスターの張り詰めた顔を見つめた。

何度も何度も、頭の中でシミュレートしたはずなのに、いざとなると全て吹っ飛んでしまって、なかなか言葉になって出てこない。

それでも、レイフはただたとしくも懸命に、自分の気持ちを伝えようとした。

「オレは、おまえと…この先もずっと一緒に歩いていきたいんだ。オレのパートナーはクリスターだけだから…どうしても離したくない、だって、オレはおまえを―」

レイフの心臓は、今にも爆発しそうなほど激しく打ち鳴らされている。体は火がついたように熱く、今にも震えがきそうだった。

だが、その時、レイフの耳はドアの外のごく小さな物音を捕らえた。

レイフにひたすら向けられていたクリスターの目が、はっと我に返ったように瞬きをし、素早くドアの方に向けられる。

(あ…)

レイフは、クリスターの肩を掴んだまま、喘ぐように肩で息をついた。

クリスターのことだけを考えて、激情で溢れんばかりだった胸に、しんと冷たいものが突き刺さった。

「ク、クリスター…」

ドアの外も気になったが、ここまで言いかけたのなら、いっそ思

い切って最後まで言ってしまったと、更に言い募ろうとするレイフの口を、クリスターの手がそっと封じた。

「おまえには無理だよ、レイフ」

現実を思い出したらしいクリスターは、ひどく優しい口調でそう囁いた。瞬間、レイフの頭の中は真っ白になった。

「おまえには、たとえ僕と2人で幸せになれたとしても、それによって傷つくだろう、他の人達のことを忘れてしまうことはできないよ」

クリスターは俯き、辛そうに唇を震わせた。

「目を覚ませよ、レイフ、僕達は、どこまで行っても兄弟でしかありえないんだ」

どこかで聞いた台詞だと、レイフはぼんやりと思った。

（ああ、そうだ…オレが言ったんだ。昔、クリスターと寝た後…オレ達は恋人同士だ、愛してあっているんだから一緒にいようって訴えるこいつに、オレはそう言って、それ以上関係が続けることを拒んだ）

ほろ苦さがこみ上げてくるのを覚えながら、レイフは、顔を伏せてしまったクリスターの上に、切なげな眼差しを注いだ。

（ああ、本当に痛いよなあ…おまえに、それを言い返されるなんて――）

震える唇を噛み締め、喉の奥からせりあがってくる熱い塊を、レイフは無理やり飲み見下した。

レイフは、クリスターの肩からそろそろと手を離した。

（それでも、オレは、おまえを本当に愛している…）

レイフは今に溢れ出しそうな涙を押さえながら立ち上がり、つかとドアに近づいて、大きく開け放った。

「何やってんだよ、親父…！」

案の定、そこには、気まずそうに立ち尽くしているラースがいた。

「い、いや…すまん、おまえらが何を話しているのか、つい気になってな…ちゃんとノックをして、尋ねるつもりだったんだが、おまえが何やら声を荒げたりするのが聞こえて、入りづらくなってな」

ぼそぼそと下手な言い訳をする父親を、レイフは、涙の滲んだ目で睨みつけた。

「そんなこと、親父には関係ねえだろ！ オレとクリスターが自分の達の進路について深い話をしたって、別におかしくも何ともないじゃないか。オレ達は2人きりの兄弟なんだぜ。他の誰ともできないような相談でも、こいつとなら心を開いてすることができるんだ。邪魔、するなよっ」

怒りに燃えた顔つきで、ぼろぼろと涙をこぼしながら、父親に対して久しく投げつけたことのないような激しい言葉を吐くレイフに、ラースはショックを受けたようだ。

「レイフ」

クリスターの戒めるような声を背中に聞いて、レイフは少しばかり冷静を取り戻した。手で涙を荒っぽくぬぐいながら、努めて抑えた声で、ラースに謝った。

「すまねえ、親父…ああ、オレが悪いんだよな。大学のこと、せっかくいい話をたくさんもらってるのに、いつまでもぐずぐずと決心せずに、心配かけてたから―」

レイフは、高校を卒業後は、大学のチームに入ってフットボールを続ける。それは、既に決まった道筋となっていた。今更変えようにも、レイフには、どうすればいいのかも、どんなふうに変えればいいのかも、分からない。

（ああ、現実っていうのは、つくづく…夢と違って、わずらわしいことだらけだな）

レイフは気持ちを静めようと何度も息をして、やっこの思いで、ラースに向き直った。

「父さん、オレさ、決めたよ。卒業後には、テキサスに行く」

まるで自分ではなく、他人が言っているような気分だった。いつの間にか涙も引いたレイフは、無表情に告げた。

「シュミットさんに、そう連絡しておいてくれよ…待たせてすみませんでした、オレは、卒業後はあなたのチームに入りますって」

「レ、レイフ？」

ラーズは、いきなりのレイフの宣言に、面食らったように目を瞬いた。

「テキサス大について、おまえ、本当に：おお、やっと決心がついたのか？　そうか、よかった：なら、早速シュミットに電話を入れても、いいんだな：？」

「そう言ってるだろ！」

また少し神経を逆撫でされたレイフは、唸るように言い返す。

（クリスター、どうして黙っているんだ：？）

クリスターは、レイフに全て決めさせようとしているのか、一言も口を挟もうとはしない。しかし、その眼差しがずっと己の背中に注がれているのを、レイフは痛いほどに感じる。

（何か言ってくれ、クリスター：言ってくれよおっ：！）

レイフは、後ろを振り返り、まっすぐにクリスターのもとに駆け寄って、その体を激しく揺すりながら訴えたくなった。

（このまま黙って、オレを行かせるのかよ：？　おまえ、本当はオレを手放したくないんだろ？　おまえが行くなど言ってくれたなら、オレ、テキサス行きなんか蹴ったって構わないんだぜ？）

必死に自分を抑えているレイフの顔に何を見たのか、ラーズが眉をしかめる。

これ以上、ここには感情が抑えきれなくなる、一番知られてはならない父親の前で、クリスターに対する気持ちをぶちまけてしまいたい。

そう悟ったレイフは、ラースの体を乱暴に押しのけるようにして、クリスターの部屋から出て行った。

2人で幸せになるために愛する者達を傷つけることなど、レイフには無理だと、クリスターは言った。その通りなのかもしれない。

レイフはほとんど絶望的な気分で、重い体を引きずるようにして、自分の部屋に戻っていく。

（オレが、一番愛しているのは、他の何にも増して欲しいと思うのは、おまえなのに――）

そう思うと、引き裂かれた心の傷口が痛んで、堪えきれなくなった涙が溢れて、レイフにはどうしようもなかった。

第7章 F A K E (11)

レイフの進学が決まった後は、学校でも家でも、表面上は平穏な日々が過ぎていった。

2月に入るとクリスターには大学の合格通知が次々と送られてき、予定通り、彼はハーバードに進学を決めた。フットボールを断念するまではあれほど思い悩んだ選択なのに、いざ思い切ってしまう、その後は張り合いがないほど順調に、卒業後の進路は定まっていた。

そうして、穏やかではあるもののやや退屈な、残り少ない高校生活は瞬く間に過ぎ去り、シニア達が楽しみにしていたプロムも終わって、いつの間にか、卒業式まで残すところ半月となっていた。

レイフもこの頃ではすっかり覚悟を決めたのか、卒業後に家を出ることの不安や悩みを漏らすこともなく、学校でたまに友人達と一緒にいる姿を見る限り、明るい笑顔を取り戻している。

家でも、クリスターに対して、あれきり何か言いたげな素振りも見せず、あくまで弟として普通に接していた。直情的で、後先の結果を考えて行動することの苦手なレイフでも、自分が危うく何を犠牲にしようとしていたのか、悟ったのだろう。

2人が用心深く節度を守っているために、もしかしたら怪しまれたのではとクリスターが密かに警戒していたラースも、2人の関係についての疑いをすっかり解いたようで、レイフのテキサス行きの準備を嬉しそうに手伝っていた。

ラーズのス精神状態は、実は、ジェームズズの陰謀によって、親友達に裏切られ、ついには楽しみにしていた子供まで失って以来ずっと、不安定で荒れ気味だったのだが、今は自慢の息子達がそれぞれ前途洋々たる未来に向かって歩き始めたことの喜びが勝っているようだ。医者に散々言われているのに一向に減らなかった酒量も、本気で心配したレイフがカレッジ・チームでもすぐレギュラー入りできるよう励むことを約束して、何とか控えさせることに成功していた。そのせいか、最近では随分と顔色もよく、年相応の気力と体力を取り戻しつつある。

レイフとクリスターがいなくなった後は、またしばらくラーズは気落ちして寂しがるだろうが、しっかり者の母がついていれば、きっと大丈夫だろう。クリスターも独立するつもりではあっても、どうせ近くに住むのだし、ちよくちよく実家の様子を見に帰るつもりでいる。

もしかしたら、残念なことをした、あの子の代わりに、新しい命を授かることも、まだ若いヘレナを思えば、充分にありうる。ラーズが何を必要としているか分かっている彼女なら、そうした考えはどうに頭の中にあるかもしれない。

そんな具合に、現在の平穏で円満な家庭環境に、クリスターは至って満足しているのだが、ふと、こんなふうに考えることもある。

（もしも、あの時、僕がレイフの話を最後まで聞いてやっていたら、どうなっていたかな…？）

今更考えても仕様のないことだが、後少しで聞けたはずのレイフの言葉に未練がないと言えは嘘になる。

（オレは、おまえと…この先もずっと一緒に歩いていきたいんだ。オレのパートナーはクリスターだけだから…どうしても離したくない、だって、オレはおまえを―）

レイフがあの後何と続けようとしていたか、本当は聞かなくても、クリスターには分かっていた。

クリスターがレイフを欲しいと思うように、レイフもクリスターを求めている。それだけのことだ。

（ああ、それだけのことさ…けれど、叶えてはやれない。僕達はどこまで行っても兄弟でしかないから、普通の恋人同士のようにはなれやしない。そう、昔レイフが言った通りさ。あの時は僕の方が、あいつを欲しいという気持ちを止められなかった。レイフさえいれば、他のことなどどうなってもいい、家族も友達も皆犠牲にしても構わないなんて傲慢にも思っていたけれど、実際そこまで割り切れるものじゃない。父さんに怪しまれていると思えば、僕だって恐くなるし、ましてやレイフは…そう、愛情深くて優しいレイフには、他の誰かを傷つけてまで自分が幸せになることになど、きつと耐えられない）

クリスターは、ひっそりと、諦め混じりの嘆息をする。愛する人と一緒に幸せになりたいという単純な夢が、自分達にとっては、どうあがいても手の届かないほど、遠い。

（馬鹿だな、僕も―分かっていたのに、つい、あいつが僕をあんなふうに熱っぽく見るものだから、最後まで聞きたいと思ってしまった。あいつの口から、愛しているって言わせなくなった…おかげで危うく、これまで築き上げてきた何もかもを台無しにしてしまうところだった）

レイフがもうじき自分の生活からいなくなることを想像すると、クリスターは今でも、足元から世界が崩れ落ちそうな不安に駆られる。

本当はどこにも行かせたくない。いや、傍にいて欲しいのだと、意地などかなぐり捨てて、レイフに訴えてみる夢想を何度したことだろう。

（しっかりしろ、卒業するまで後僅かだ。レイフが無事テキサスに旅立つまでは、僕は平気な顔をして、あいつが気を変えることのないうよう励ましつづけなければならぬ――その後のことは、あまり考えたくないけど、僕も何とか慣れるよう努力するしかないな）

昼間は、学校などでなるべく人と会ったり、卒業式の準備のために忙しくしたりで、何とか気を紛らわすこともできるのだが、夜になるとたちまち気が滅入って、隣の部屋にいるレイフの気配について意識を傾け、まんじりと寝つけずに過ごすことが多くなっていた。

（何もかも順調すぎるのがいけないのかもしれないな：僕には、もっと緊張感に満ちた時間が必要なかもしれない。こんなことを言うともまだ懲りないのかと顰蹙ものだけれど、ジェームズが僕の敵として存在していた頃みたいに――いや、いくら何でも、それはもうごめんだな。ただ、毎日が平和すぎて取り立てて熱中できることもないとなると、こんなふうにすぐに心に迷いが生じて、弱い方に流れて行きそうになる）

そんな淡々とした日々の中にも、ふとしたきっかけで足元が崩れ落ちそうな心もとなさを密かに抱えながら過ごした、ある夜――クリスターは久しぶりにジェームズの夢を見た。

この頃では、彼のニュースは入らなくなっていたし、思い出すことも随分少なくなっていたので、どうして今頃になってそんな夢を見たのか理由はよく分からなかった。

寝覚めた時にはざらりとした後味の悪さが残っていた、その夢の細かい部分は覚えていなかったし、どのみちそれほど意味のある内容でもなかったように思う。

そのまま忘れてしまってもよかったのだが、おそらくクリスタは退屈を持て余してもいたのだろう、その夢をきっかけに、ジェームズと繰り広げた、あの闘いを久しぶりに少しばかり振り返ってみる気分になった。

勝つには勝ったが、こちらは無傷とは言えない終わり方をした。クリスタの友人達や家族にも犠牲者が出てしまった。それでも、誰かの命が奪われるような最悪の事態は避けられた。

ジェームズは、クリスタの体に付けた傷以外には、何一つ望みを果たせぬまま、その仲間達と共に逮捕され、二度と再びクリスタを脅かすことはない。

被害を受けた者達は、受けた痛手から少しずつ立ち直り、すっかり元通りとは言えないものの、憂いのない平穏な生活に戻っている。

（ああ、僕だって、今の状況には満足しているとも――腕一本の犠牲で、ここまでうまく収まれば、安いものさ。どのみち僕は、フットボールはもうやめるつもりだったんだし、レイフに至っては全くの無傷のまま、ジェームズの魔の手をやり過ぎることができた。ジェームズとしては、僕が一番の弱点であるレイフをどうにかしようと

は考えていたはずだけれど――結局うまく使いこなすだけの時間がなかったのかな……病魔があいつの邪魔しなければ、どうなっていたか分からないが……どうやら運も僕に味方をしてくれたようだ）

そう全体を見渡してみても、ほとんどクリスターの計算どおりに終息させることができたと評価できる。にもかかわらず、今更のうちに、クリスターは、自分の中で何かが引っかかっていることがついた。

何か、大切なことを見落としている。忘れてしまっているような気がする。

（おかしいな、ジェームズがこの上僕を悩ませることはありえないのに、何か大きな問題が未解決のままに残されているような――あいつの顔を夢に見たせいで、神経質になっているだけかな……？）

考えているうちに胸騒ぎにも似た不安に駆られたクリスターは、ジェームズが今どうしているのか、急に気になりだした。

最後に会った時から、もう九ヶ月にもなる。キャメロンが記した研究資料から推察しても、ジェームズの病状は相当悪化しているはずだ。

ウォルターは事件後のジェームズと何度か面会をしていたはずだが、その彼も、2月頃に一度、警察病院に入院中のジェームズを見舞いに行ったきりだ。

ウォルターが最後に会ったジェームズは、人工呼吸器につながれて、言葉を発することもできなくなっていたそうだ。

（ジェーズ・ブラックはもう終わりだよ。俺も、おそらくもう二度と彼と会うことはないだろう。）

ウォルターがオルソン家に立ち寄った際、複雑な顔をしてそう話したことを、クリスターも覚えている。

（…奇妙なことだが、アイザックをあんな目に合わせた憎い奴だからというだけじゃない、俺はジェームズという人間に興味を覚えて、これまで何度も会いに行った。今だから告白するが、危うく彼に捕まりそうな気分になったこともある。ああ、こうやって彼は人を支配し操るのだと、ぞっとしたものだ。ああいう奴は、放っておくと世の中を震撼させるような希代の犯罪者になりかねない…いや、それ以上の大きな悪にだ。彼はな、ある時こんなことを漏らしたんだよ。もしも自分の命が限られたものでなかったなら、政治か軍事の道に進み、いつかは国家の中枢に入って、国や世界の趨勢に関わる仕事をしてみたかったとな。それはとてもスケールの大きな、複雑で、面白いゲームになっただろう…全く、冗談じゃない、あんな怪物に国の舵取りなどさせられるか。そう思うと、俺達はジェームズに取り付いた病魔に感謝してもしきれない立場にあるのかもしれないな）

そう、病むことさえなければ、ジェームズは今でもクリスターを悩まし続けていたかもしれない。今でもクリスターを手に入れようと画策し、ウォルターに語った、ぞっとするような彼の将来の夢に、クリスターを相棒として引きずり込もうとしていたかもしれない。

（ジェームズは今ではかろうじて生きてはいても、ほとんど廃人同然となっているはずだ。話すことも、自力で体を動かすこともできず、機械の力でかろうじて命をつないでいる…そんな状態ではさすがにあいつの魔力も効き目を失って、人を操ることはもうできない

だろう。体がそんな状態でも、あいつの頭脳は依然として無傷のままなのだしたら、いつそ一思いに死にたいくらいに辛いはずだ。もはや何の希望も楽しみもなく、残された日々を、あいつは何を思っ
て過ごしているのだろうか……？)

ほんの一瞬、クリスターは、ジェームズに最後に一目会いに行くことを考えたが、すぐに怖気を奮って、そんな思い付きを振り払った。

別に、会ったところで今のジェームズが自分に何ができる訳でもないとは承知していたが、その妄執は今でも恐ろしかった。

(あいつは、どんな姿になろうとも僕を忘れてはいない……思い上がりなんかじゃないさ、あいつにとって、僕はそれだけの価値がある。もしかしたら、体は役立たずになりながらも、相変わらず悪魔のように働く頭脳をフル回転させて、何とか僕に一矢報いたいと思いつく限りの策略を組み立てているかもしれない……ああ、だが、君が何を企もうが、それを実現することはもう不可能なんだよ、ジェームズ)

もう一度、クリスターはジェームズに面会することを考えてみた。話す機能が失われていたとしても、ジェームズを一目見れば、胸の奥に引っかかっている漠然とした疑念の正体が分かるかもしれない。

(いや、やはりよそう……単なる気のせいかもしれないのに、わざわざジェームズに会いにいくなんて不愉快な真似はしたくないし、それに、僕は、病み衰えたジェームズの姿など見たいとは思わない。あいつだって、嫌がるだろう。ジェームズ・ブラックは確かに憎い敵だけれど、僕はそこまで悪趣味じゃないさ)

直接面会する考えは退けたが、それでもジェームズのことが気になりだすと頭から離れなくなったクリスターは、これも久しぶりにケンパーに連絡を取って、彼を通じてジェームズの容態を調べてもらうことにした。

もしかしたら、クリスターは予感めいたものを薄々感じ取っていたのかもしれない。

ジェームズ・ブラックはまだ生きているのか、それとも―？

しかし、クリスターは最後まで、その事実を認めたくはなかった。

『…クリスター、実は、ジェームズのことなんだが―』

そうして、卒業式を10日後に控えた、その日の夕方、クリスターはケンパーからジェームズの死の知らせを受け取った。

『君から連絡をもらった、つい2日前のことだったそうだよ。医者
の話では、意識不明の状態がずっと続いていたらしいし、誰にも気
付かれないまま、静かに息を引き取っていたそうだ。そう…もしか
したら、君は、虫の知らせのようなものを感じ取ったのかもしれない
いな』

電話の受話器から流れてくるケンパーの声をぼんやりと聞き流しながら、クリスターはまるでジェームズにこんなことを言われているような気がしていた。

（やあ、クリスター、卒業おめでとう。僕が死んだというこの知らせは、君にとって最高のプレゼントになったかな…？）

ケンパーにぎこちなく礼を述べた後、クリスターは電話を切り、まっすぐ自分の部屋に戻った。

10日後の卒業式のことを考えた。クリスターは代表としてスピーチをしなければならぬので、その原稿をそろそろ仕上げておきたかった。

両親はまだ仕事から帰っていない。

クリスターより先に帰宅していたレイフの部屋からは、彼の好きな激しいリズムのロックが流れてくる。

（レイフにも、知らせるべきかな…いや、今はよそう。何だか頭の中が真っ白になってしまつて、まともに話をできるとは思えない。一体、どうしたのかな、僕は…ひどく気分が悪い）

クリスターが逃げるように足早に自分の部屋に入ろうとした時、唐突に隣の部屋のドアが開いて、怪訝そうな面持ちをしたレイフが出てきた。

「何かあったのかよ、クリスター？」

レイフはクリスターの顔を見るなり、おかしいと分かったのか、眉をしかめ、迷いなく追求してくる。

クリスターは、レイフのまっすぐな眼差しからとっさに顔を背けたくなったが、自分の動揺振りを認めるのも嫌で、かろうじて平静を保ちながら返事をした。

「うん…ケンパー警部から、今、知らせを受け取ったんだ」

「ケンパー警部？ ああ、久しぶりに聞く名前だよな…って、一体何の知らせだったんだよ？」

レイフの眉間に深いしわが寄った。

クリスターは一瞬躊躇ったが、自分と違ってレイフがジェームズの生死に影響を受けるとも思われず、事実をありのままに伝えることにした。

「ジェームズ・ブラックが、2日前に息を引き取ったそうだ」

「え…えっ…？」

レイフは意表を突かれたかのように、目を瞬いた。本当に、彼は今までジェームズのことなどほとんど思い出しもせずにくたのたろう。羨ましいほどに、レイフはジェームズの影響をほとんど受けていない。こんなレイフだから、ジェームズも駒として使うことなど最初から諦めていたのか。

「J・Bの奴が死んだって…それ、ほんとかよ…？」

「彼がずっと闘病生活を送っていたことくらいは知っているだろう？ これでも、よくもった方だよ。発症すれば余命は半年程度だと、ドクター・キャメロンは予測していたようだからね」

レイフは驚愕のあまり口をぽかんと開いて、クリスターの顔を見るばかりだった。やがて、ほっと肩の力をぬいて、溜息をついた。

「そうか…あいつが不治の病なんて聞いてもピンとこなかったけど、

本当に、死んじゃったんだ。オレ達より1才だけしか年変わらないのに…」

「まさか可哀想だなんて言い出すつもりじゃないだろうね？」

「そりゃ、J・Bはとんでもない悪党だったし、今でもあいつがやったことを思えば、絶対に許せないけどーそれでも、死んじゃったって聞くと、やっぱ少し同情しそうになるよ」

レイフはちらりとクリスターの右肩に視線を投げかけると、複雑そうな顔をして、付け加えた。

「一時は、この手で殺してやりたいとまで憎んだけれど、もしもあいつがあんな体に生まれついたんじゃないかなかったらとか、親とか妹とうまくいったらとかーああ、でも、オレがそんなこと言ったって、あいつは鼻先でせせら笑いそうだな」

ふっと苦笑した後、レイフはクリスターにじっと探るような目を向けてきた。

「そんなことよりさ、クリスターは大丈夫なのかよ？」

「え？」

「顔色悪いし、ジェームズが死んだってことに、随分ショックを受けているみたいだぜ…？」

レイフにはっきりと指摘されたことで、もう認めるしかなかったクリスターは、のろのろと手を上げて、額に押し当てた。

「そう見えるか…？　ただ単に驚いただけだと思っているんだけど、おまえがそう感じるのなら、やっぱり動揺しているのかな…？　全く、この僕があいつの死の知らせにこんなにも気持ちを揺さぶられるなんて、おかしい話さ」

クリスターは笑い飛ばそうとしたが、うまくいかなかった。眉間に深いしわを刻んで、訳の分からない感情がこみ上げてくるのをじっと堪えていた。

「ジェームズ・ブラックが死んだ」

その言葉は、氷で火傷したようにクリスターの唇に張り付いた。慄いたようにクリスターは目を見開き、震える唇を噛み締めた。

「ク、クリスター？」

レイフが喫驚した声をあげ、おろおろとクリスターに手を差し伸べようとする。

「い、いきなりどうしたんだよ、クリスター…なに、泣いてんだよ…？」

レイフに言われてやっと、クリスターは自分がいつの間にか涙を流していることに気がついた。

呆然となりながら目を上げると、ぼんやりと霞んだ視界に、レイフの心配そうな顔が見えた。

「全く、僕はおかしいね、レイフ…あいつの死を、僕ほど待ち望んでいた人間は他にいないと思うのに…」

クリスターは、理解しがたい自分の反応に戸惑いながら、震える手で目元を覆った。

「自分でも分からない、どうして泣いているのか：あいつが死んで哀しいのかもしれないし、もしかしたら、ほっとただけなのかもしれない」

レイフはクリスターの惑乱ぶりを戸惑いながら見守っていたが、やがて、黙って手を伸ばし、彼の肩を慰めるようにそっと抱きしめた。

「すまない、レイフ、よりによって、あんな奴のために泣くなんて――」

クリスターは恥ずかしそうにレイフに謝ったが、彼は問題にならないというように大らかに微笑んで、クリスターの頭をこつんと己の頭に押し当て、優しく囁いた。

「おまえの涙の理由なんて、きっとややこしすぎて、オレには理解できそうにもないさ。ただ、泣いて楽になるなら、すっきりするまで吐き出してしまえばいい。オレ相手に恥ずかしがることなんてないからさ、気にするなよ」

クリスターは素直に頷き、レイフの体に手を回し、その肩に顔を埋めて、ひっそりと泣き続けた。

ジェームズ・ブラックが、死んだ。

その簡単明瞭な事実が、これまでジェームズとの間にあったどろ

どろとした深い怨嗟を、この一瞬、クリスターの中から吹き飛ばしてしまったかのようだ。

憎んでも憎みきれない仇敵の死を、こんなふうにはくなど、どうかしている。しかし、実際、クリスターはまるで自分の影を失ったような、おぼつかなさに見舞われている。

（ジェームズ、僕の中の悪を写し取った鏡であるかのように、僕は君を憎んだ。ああ、僕達は似た者同士なのだと言ったね、僕は決して認めまいとしたけれどーもしかしたら、僕も、どこかで道を踏み外せばあぁなってしまうのではないかと思うと恐かった。僕の影の半身、君が減ぶことで僕はやっと解放される…）

レイフは不器用な仕草で、クリスターの頭を慰めるように優しく撫でている。

「情緒不安定でごめんよ、レイフ…ダニエルの時以来、僕は、おまえになだめてもらうのがすっかり癖になったのかな…？」

「へえ、そうなのかい？ そんな癖なら、オレとしては大歓迎なくらいだよ」

レイフが冗談めかして、ぎゅっとクリスターを抱きしめ頬を摺り寄せるのに、クリスターは些か閉口しながら、言い返す。

「調子に乗るなよ、馬鹿」

レイフは喉を柔らかく鳴らして笑う。クリスターに注がれる、その温かな眼差し。その腕はクリスターを支えるように、しっかりとその背に回されたままだ。

（レイフ、ジェームズに危うく魅入られそうになった僕なのに、おまえは今もこうして、変わらぬ態度で寄り添っていてくれる…ああ、あの怪物は今度こそ消滅したんだ。僕も、これでやっと安心して暮らせるようになる…そうだな、きっと…？）

レイフの大きくて温かな腕の中、クリスターは、喪失感と安堵の入り混じった奇妙な悲しみにじっと浸るのだった。

第7章 F A K E (12)

クリスターが頭の中で今日の式典での計画をシミュレートしながら鏡の前でネクタイを結び、髪を軽く手で撫で付けていると、部屋のドアが開いて、先に支度を整えて一階のリビングに降りて行っただけのレイフが、ひよいと顔を覗かせた。

「ごめん、待たせたかな？」

「ううん、何となく、兄貴何してるのかわかんなくて様子を見にきたくなっただけ。時間はまだ充分にあるんだから、焦ることはないさ。なあ、今日のスピーチはうまくできそうか？ 父さんが、すごく楽しみにしているぜ？」

「ああ、大丈夫だよ。僕のする仕事にミスはない。原稿も一応書いたけど、全て頭の中に入っているからね」

「おお、自信満々じゃん。オレも期待してるからさ、カッコよく決めてくれよ、兄貴」

懐っこく笑いかけながら、レイフは着慣れないワイシャツの襟を窮屈そうに引っ張っている。

「あまりいじりまわるなよ、ネクタイが歪んでいるぞ。どうせ自分じゃ直せないくせに……」

「どうせ上からガウンを着るんだから、中はティーシャツだって別に構わないような気がするんだけどさあ」

「それじゃあ格好がつかないよ。写真にも残るんだから、きちんとしておけよ」

クリスターは微笑んで、レイフの襟に手を伸ばし、ネクタイの形を直してやった。

「あ、クリスターも、そのリング注文したんだ」

自分の喉もとで動いているクリスターの指をちらりと見下ろしながら、レイフは言った。卒業記念にと注文した、グラデュエーションリングがそこに輝いている。

「おまえもかい？」

「うん、他にマグカップとティーシャツも：リングは高いからどうしようかなって迷ったけど、これも記念だと思って、アルバイト料から奮発したよ」

レイフは自分の名前と卒業年度が裏に刻まれている、クリスターと同じデザインのリングを示しながら、嬉しそうに言った。

「へへ、兄貴とお揃い」

「何言ってるんだよ、気持ち悪いな」

クリスターは唇をすぼめ、素っ気なくレイフから身を引くが、まだじゃれつきたりないらしいレイフは、クリスターの指輪のはまった手を捕まえ、ためつすがめつ眺めながら、何か考えている。

「レイフ、ふざけるのはそろそろよせよ。父さん達を待たせている

「んだろ？ 家の前でも一枚写真を撮ろうって、言ってなかったか？」

次第に落ち着かなくなってきたクリスターが促しても、レイフはクリスターの手をしっかりと掴んだまま離そうとしない。

クリスターが怒って手を振りほどこうとするより先に、レイフはぱっと顔を上げて、クリスターの目をまっすぐ覗き込んだ。

「なあ、クリスター、頼みがあるんだけど、聞いてくれるか？」

クリスターはとっさに怯んだ。

「何だよ…？」

「この指輪、オレの指輪と交換してくんない？」

冗談めかした軽い口調で言っているものの、レイフの目は真剣そのもので、クリスターを戸惑わせる。

「な、いいだろ？ 頼むよ…オレ、クリスターの名前が入ったもの、何か欲しい」

クリスターの指に絡みつく、レイフの指先に力がこもる。

何だか息が苦しくなってきたクリスターは、レイフから少しでも体を離そうと身動きしたが、手を捕まえられているので、どうしても逃げられなかった。

「そういうことをするのは、たぶん、付き合っている子達くらいだよ…大体これはおまえの卒業記念だろ。代わりに僕の名前が入った

リングなんか持って、どうするんだよ？」

「まさか、誰かと交換する約束してるのか？ 嫌だよ、誰にもやるなよっ、オレがもうんだから」

「そんな約束誰ともしていないよ…おい、僕がいつおまえにこのリングをやるなんて言ったんだよ。勝手に決めるなよ、これは僕のなんだから」

クリスターがすげなく断ろうとすると、レイフは俄然本気になって、食い下がった。

「で、でも、オレ、どうしても欲しいんだよ。兄貴のリング持ったら、卒業して、1人でテキサス行っても、そんなに心細くならなिकाなッて…」

さすがに恥ずかしくなったらしいレイフが、顔を赤らめ、口ごもりながら訴えるのに、クリスターは息を吸い込んだ。

クリスターから離れてテキサスで暮らすことが心細いなどと、もうずっとレイフは訴えなくなっていたのに、内心では、やはり不安で不安でたまらなかったのだ。

すっかり明るさを取り戻したかに見えた顔の裏で、レイフもクリスターと同じように、隣の部屋にいる片割れを恋しがって、悶々と眠れぬ夜を過ごしていたのだろうか。そう思うと、そんな弟がいじらしくて可愛くて、クリスターはもうどうしたらいいか分からなくなッた。

「ば、馬鹿…分かったよ。リングくらいやるから、手を離せよ。痛

いじゃないか」

動揺を誤魔化すよう、わざとイライラした口調で言って、クリスターは自分の指から真新しい金のリングを抜き取り、レイフの眼前に突き出した。

「ほら、代わりにおまえのをよこせよ」

「あ、ありがとっ」

クリスターがそっぽを向いている間に、レイフは早速自分の指輪を外して、代わりにクリスターの指に収まっていた指輪をはめると、クリスターの広げた手の上に自分の名前の刻まれたリングを落とし込んだ。

「全く、兄弟で指輪の交換なんて寒いこと、友達にばれたら、何て説明するんだよ」

「デザインもサイズもおんなじだから、単純に間違えたんだって、誤魔化せばいいじゃん」

クリスターが仏頂面でぶつぶつ文句を言いながら、自分のリングを指にはめるのを、レイフは満足そうに眺めている。

クリスターはやれやれというように溜息をついた。別に今日がそれほど特別な日だという意識はクリスターには薄かったのだが、レイフのおかげで、随分気持ちを揺さぶられてしまった。

「さあ、もういいだろう、レイフ。行くよ」

「うん」

クリスターの手が、まだ少ししんみりと考え込んでいるレイフの頭に伸び、赤い頭をくしゃりと撫で、肩にかかる。

（レイフ、僕の可愛い弟…たとえこれから先、どんなに遠く離れて暮らすことになっても、僕はおまえを片時も忘れることはないだろう）

そうして2人は一緒に部屋の外に出て行き、階下で彼らを待っている両親のもとへ急ぎ向かった。

フィリップス・アーバン高校の卒業式は、晴れ渡った空から降り注ぐ初夏の光が眩しい、6月3日に開かれた。

大勢の父兄や教師が待ち受けるホールの中へ、濃紺のガウンと帽子を身につけた、生徒達が次々と入場していく。

卒業生代表のスピーチを行なうクリスタは列の先頭に立って入場するため、レイフがいる位置からは離れていて、彼がどんな表情をしているのかは分からない。

レイフは、学校から貸し出された長いガウンや帽子をまとい、ホールの外で待機している間、周りにいた友人達とふざけあっていたが、そんな楽しく明るい雰囲気の中にも、トムや他の仲のよかった友人達とも今日で別れるのだと思うとちよつと寂しい気分になっていた。

トムは、実家はテキサスだが、大学は南カリフォルニア大学に決まったので、残念ながら、卒業後はレイフとは遠くなる。大学でもフットボールを続けたい気持ちはあるが、どうなるかは分からないという。

（だって、俺はおまえのような天才とは違うからさ、まさかフットボールで将来生活しようなんて思っちゃいないよ。もちろん好きだから、カレッジ・チームに入れたらいいけれど、俺の体格じゃあ難しいな。実はさ、将来映像関係の仕事につけたらいいなって夢があるんだよ。だからさ、これから大学で、そのための勉強をしたいんだ）

フットボール・チームの仲間達の中で、一体何人がこれからもフットボールを続けるのだろう。レイフのような恵まれた状況にある者はむしろ少なく、トムのように、大学では別の目標を定めて心機一転取り組み連中が大半だろう。別にそれは悲しいわけではなく、1つの区切り、新しい時代の始まりであるというだけのことだ。

（そうやって、皆ばらばらになって、それぞれ自分の道を歩いているんだ。それが、一人前の大人になるっていうことなんだよな）

この先に待ち受けている新しい出会いや発見を思うと、レイフももちろんわくわくしたり、ちょっと楽しみな気になったりはする。

ただ、卒業してしばらくの間は、かつての仲間や友人達が恋しいだろう。人一倍情の深いレイフは、コーチ宅で開かれた、卒業を控えたチーム・メイトとのパーティーでも、最後の方は半べそをかいてしまい、皆にからかわれたものだった。

（今日は泣かないぞ、絶対泣くもんか：人前で大泣きするなんて、男としての沽券に関わる：そんなこと言っちゃって、今更手遅れっばいけどさあ）

ホールの中に入ると、黒のガウンを着た教師達が並んで卒業生を迎えてくれた。客席には父兄や親戚、友人達が彼らの入場を待ち受けていて、手を振ったり、カメラのシャッターを切ったりしている。

レイフのためには、両親の他に、叔父のビョルンが駆けつけていた。ヘレナと同じ血筋らしい、背がずっと高く、知的で端正な容貌の叔父は、自分に子供がないだけにレイフ達をとて可愛がっていた。レイフの視線に気付いたのか、ヘレナと親しく話しこんでいたのをやめて、穏やかな笑顔をこちらに向けてくる。

ラースは、立派に成長してこの日を迎えた、溺愛する息子達の姿にひたすら感無量の様子だった。レイフの姿を見つけるや嬉しそうに手を振り、身を乗り出すようにしてカメラを構えている。

（ああ、親父ってば、子供みたいにはしゃいでら：その辺にしとかねえと、母さんに叱られっぞ。ビョルン叔父さんは、ちょっと久しぶりだなあ：おばあちゃんの調子が悪いから、代わりに見に来てく

れたのかな)

スピーカーから流れてくる行進曲は、『威風堂々』だ。一通り終わるとまた初めに戻って何度も繰り返されるので、耳に馴染んで、しばらく離れなくなりそうだ。

人気者のレイフは、家族や知り合い以外に、彼に憧れる下級生達からもシャッター・チャンスを狙われていて、あちらこちらでたかれるフラッシュの光にちよつと目が眩みそうになっていた。

いつ写真を撮られても大丈夫のようにしゃんと背を伸ばし、きりとした顔をして、ペアになった女生徒と並んでホールの中央を肅々と歩いていくうちに、レイフの意識はふつと現実からさまよい出ていった。

(卒業後、オレは、生まれて初めてクリスターと離れて、1人、別の土地に住み、新しい生活を始める。オレが双子だなんて知りもしない新しい仲間、友人達に囲まれて、大学でもやっぱりフットボールが中心の生活を続けるんだ：カレッジの強豪チームの練習は相当ハードだろう。それなりに勉強もしようとすると大変だろうな。毎日がへとへとになるほど忙しくて、高校時代なんか思い出す余裕もなくなったりしてさ。そのうち、もしかしたら：クリスターのことすら、それほど恋しくならなくなったり、あいつが言ったように、他の誰かと一緒に暮らしていたりなんてことになるんだろうか：?)

人生の晴れの舞台にいながら、急に何だか息苦しいような気分になってきたレイフは、右手の指にはめた金のリング―内側にクリスターの名前が刻まれている―に、確かめるように触れてみた。

(いいや、どんなに遠く離れてしまっても、オレはおまえを忘れな

い。決して見失ったりするものか：クリスター、オレの一生の相棒はおまえだけだ。いつか必ず、オレはおまえを取り戻してみせる）

齒を食い縛って、そう自分に言い聞かせ、レイフはまっすぐ前を向いて歩き続けた。

この先にあるのは、ここに集う仲間達と共にあった、ひとつ時代の終わり、そして、新たな未来に続く道―多くの道は、自分とは違う方向に伸びていくが、そのうちの幾つかは縁があれば再び交わることもあるだろう。

クリスターとレイフも、今は違う道を歩き出そうとしている。目標とするものに何の共通点もなく、この先一緒にいられるようになる見込みもない2人だが、このままなす術もなく遠ざかってしまうことなどあり得ないと、レイフには断言できる。

（オレとクリスターのことだもの、運命の逆転って奴が、何か起こりそうな気がする：そうだと、そんなに簡単に切れてしまうような絆であるものか）

これは直感なのか、単なる願望、祈りのようなものなのか自分でも分からないが、ここまで来ても、レイフはまだ深くそう信じていたのだ。

式辞が全て終わった後、合図と共に、ホールの天井目掛けて、一斉に房つきの帽子が飛んだ。

「コングラチュレイションズ！」

これで晴れて卒業となった生徒達は、近くにいた仲間達と抱き合ったり、ハイタッチをしたりして、喜び合った。

「やったな！」

「卒業、おめでとうっ」

「これで自由の身だ！」

4年間の高校生活、苦労した学業や苦手な先生達からおさらばだとはしゃぐ生徒達の顔には、解放感があふれている。

式の終了と共にホールに下りてきた父兄も交えて、そこかしこで早速記念撮影が始まった。

クリスターも、近くにいた友人達と肩を叩きあったり、客席から駆け下りてくる後輩達と写真を撮ったりしながら、レイフの姿を探したが、両親と共に先に外に出てしまったのか、ホール内には見当たらない。

「スピーチ、よかったよ！」

「おまえとレイフの掛け合い、最高！ 卒業記念に、すごくいいものを見せてもらったぜ」

卒業生代表として、『レイフと共に』スピーチを行なったクリスターには、擦れ違いざま、多くの卒業生達が声をかけていく。

実は、レイフには直前まで内緒にしていたのだが、クリスターは、代表としてスピーチするにあたって、1人ではなく、弟をペアにすることにしていた。

トムやレイフの周りの友人達にも協力してもらい、いざスピーチの段になってから、レイフをステージまで引っ張り上げ、ほとんどアドリブで掛け合いをやったのだ。

訳も分からず、いきなりスピーチなどする羽目になったレイフの驚きぶりは相当なものだったが、本番に強い彼は、クリスターの誘導も手伝って、うまく話に乗ってきてくれた。

おかげで、結果は予想以上の大成功。うけにうけまくった、双子の息のあった掛け合いは、しばらくの間校内でちょっとした語り草になりそうだ。

「クリスターさんって、あんまり完璧すぎて近づきにくそうに見えるんだけど、実は結構面白い人だったんですね」

下級生達から、そう親しみのこもった声をかけられた時には、ちよつと眉をしかめそうになったが、クリスターも卒業という場の雰囲気巻き込まれて、解放的な気分になっていたので、すぐに、まあ、いいかと思ひ直した。

（これも思い出の1つさ…この学校での4年間…大勢の友人や仲間達に囲まれて、僕とレイフはとても大切な時期と一緒に過ごしたんだ）

ホールの外に出ると、まばゆいばかりの日差しが降り注ぎ、青々とした芝生の上でガウンの裾を翻してはしゃいでいる卒業生達の笑顔を一層明るいものに見せている。

一瞬しんみりとなったクリスターの顔にも、すぐに明るさが戻ってきた。

「よおっ」

その時、聞き覚えのある声が後ろからかけられたのに、クリスターははっとなって、足を止めた。

「卒業おめでとう、クリスター」

クリスターは僅かに胸が高鳴るのを意識しながら、振り返った。

「アイザック！」

すると、そこには、ウォルターと共にロサンゼルスに行ったはずのアイザックが、あの懐かしい、どこか皮肉っぽく見える笑みを浮かべて立っていた。

「ロスから、僕の下手なスピーチを見物するために、わざわざ来てくれたのか？」

クリスターが親しげに笑いかけながら手を差し出すと、アイザックはそれをしっかり掴んで、大きく振り回した。

「うん、実際にはもっとおもしろえものを見れたって、満足してる

よ。おまえらの掛け合い、下手なコメディ・ショーよりずっとよかったぜ、実際」

言った先から、アイザックは軽く思い出し笑いをした。

「レイフには、後で責められそうな気がするんだけどね。あいつには秘密で進めていた計画だったんだ。前もって知らせると、あいつは始まる前からがちがちに緊張して、ステージに上がっても素直な反応ができなくなりそうだからね」

「ええっ？　すると、あれ皆、ぶっつけ本番でやったのか？　それにしちゃ、うまくできすぎるくらいのも出来だったぜ。まあ、レイフはほとんど素で受け答えしてる感じではあったけど……すげえな、おまえら」

「ふふん、僕の読みに狂いはない。ご覧の通り、計画は大成功さ」

昔のようにアイザックと肩を並べて歩きながら、クリスターは上機嫌だった。

今のクリスターが一番会いたい人間と言えば、やはり、このアイザックとロンドンにいるダニエルだろう。

ダニエルからは、少し前に、クリスターの卒業式に駆けつきたいが、どうしても親に許してもらえず行けそうにないという手紙をもらっていた。ダニエルがこの学校を去らなければならなかった経緯を考えれば、それは仕方がない話だろう。むしろ、あれほどの目に合いながら、自力でいつか戻ってこようとしているダニエルの強さに感心するほどだ。

「ダニエルの奴、おまえがハーバードに行くなら、自分も絶対入ってやるんだって、意気込んでいたぜ」

「うん、僕がもらった手紙にもそう書いていたよ。あの子なら、やると言ったことは必ず実現できるような、努力して、本当に2年後にはここに舞い戻ってきそうだね」

「自分はおまえの卒業式に出られないから、代わりに俺に、絶対行ってきたってくれてさ。まあ、オレも、おまえに会いたかったし：ああ、さっきの式での写真を撮らせてもらったから、現像したら、ダニエルにも何枚か送ってやっても構わないよな？」

2人は、ホールを見下ろせるならかな丘陵の途中にぺたんと腰を下ろして、芝生の上で動き回っている、紺のガウンの卒業生達とその父兄や親戚、お祝いに駆けつけた友人達を眺めながら、久しぶりの積もる話に花を咲かせた。

「そう言えば、君も、向こうの高校、卒業できることになったそうじゃないか、おめでどう」

「必死に単位を取って、何とかぎりぎり間に合ったってところだな」

「大学は…？」

「ううん、大学行くかどうか決めかねてただけど、色々考えて、実はカナダの大学に願書を提出したんだ。俺の亡くなった母親がバunkerバーの出身で、ガキの頃は夏休みによく遊びに行ったし、向こうには親戚も知り合いもある。何より応募の締め切りが6月だったから、卒業ができると決まってからでも間に合ったし：合否の通知が来るのが8月なんで、まだどうなるか分からないんだけどな」

「君なら、きっと大丈夫だよ」

優しく目を細め、確信のこもった口調で言うクリスマスターに、アイザックははにかむような笑顔を向けてくる。

「カナダにはまだ行ったことないけれどーと言うか、外国を訪れたこと自体まだないけれど、君がいるなら、またいつか遊びに行こうかな」

「おお、今年の冬休みにでも、レイフと一緒に訪ねて来いよ。スキーとか、連れて行ってやるからさ」

「僕達は初心者だから、一から教えてもらわないと駄目だよ？」

「おまえらなら、あっという間にこつを飲み込んで、その日にうちに上級者コースで滑ってそうだな」

明るい日差しのさんさんと降り注ぐ、幸福と喜びに満ちた、この場所に並んで坐っていると、1年前にあったことが全て悪い夢のようだ。

「…あれから、もう1年経つんだよな」

アイザックも、どうやらクリスマスターと同じ感慨を噛み締めていたらしい、遠い眼差しをして、ふっとそう漏らした。

「ああ…」

クリスマスターは膝の上に置いた己の手の上に視線を落とした。

「あいつが死んだそうだな。俺も、ついこの間、親父から聞いたよ」

「うん」

クリスターは心の中に沸き起こった漣を隠すよう、震える瞼を下ろした。

「怪物J・Bも、最期は呆気ないものだったな…何だかずっと、俺は心のどこかで、あいつがまた復活してきやしないかと、不安でならなかった。これでやっと、安心して眠れるようになる」

アイザックは、半ば自分に言い聞かせるようにそう言う。J・Bの亡霊に悩まされていたのは、クリスター1人ではなかったようだ。

「そうだとも、ジェームズはもうこの世にはいない…君も僕も、これできつとあの長い悪夢から解放されて、今度こそ自由になれるさ」

同調するように呟いたクリスターの声が、しかし、思いの外暗いことに気付いたらしい、アイザックは怪訝そうに彼の顔を覗き込んだ。

「大丈夫か、クリスター…？」

「ああ…うん」

クリスターは何でもないというように笑い返そうとしたが、思ったように、うまくはいかなかった。

「ジェームズの死の知らせを聞いて、俺、おまえが動揺してるんじ

やないかって、気がかりでさ…今日ここに來たのは、それを確かめる目的もあったんだ」

相変わらず鋭いなとちょっと感心しながら、クリスターはアイザックの真摯な顔を眺める。

「そうだね…君に対して、今更誤魔化す必要もないから、正直に白状するけれど、確かに僕は、ジェームズの死を知らされて、随分ショックを受けたよ。いつかその日が来ることは、ずっと前から知っていたはずなのに、それでも、にわかには信じられなかったし…ひどく混乱した。自分でもなぜか分からないけれど、哀しいような、ほっとしたような奇妙な気分で、少し泣いたよ…」

「ジェームズのために、おまえが涙を…?」

クリスターがここまでではっきりと自分の取り乱しように打ち明けるとは思っていなかったのか、アイザックは目を見開いた。

「ううん、俺もちょっとした放心状態にはなったし、知らせを持ってきた親父の体を揺さぶって、本当かって、ヒステリックなくらいに何度も確認せずにはいられなかったけれど―」

アイザックにも、クリスターのような反応は理解しにくいのだろう、眉根を寄せて考え込んでいる。

「まさか、あいつに同情なんて―おまえさ、J・Bの影響をまだ引きずっているって訳じゃあないだろうな…? なあ、ジェームズに最後まで付き従っていた、ダムアンってエキセントリックな子を覚えているか? あいつさ、ジェームズと引き離された後は精神的におかしくなって、施設に収容されてしまったんだぜ。あいつはジェ

ームズの作った人形みたいな奴だったから、主をなくしちゃ、生きられなかったんだ。おまえまで、ジェームズとハードな心理戦をやったせいで、変な後遺症みたいなのが残っちゃいないだろうな？」

「後遺症とは、また、うまい表現を思いつくね。だが、まあ、確かに僕はあいつの影響を最も受けやすい人間だとは思うよ。何しろ僕は、ジェームズに似ているらしいからね、鏡の向こうとこちら側みたい……いつの間にか、あいつに心を取り込まれてしまっていたなんてことにも――」

「しやれにならないぜ、クリスター……」

「そんな顔するなよ、もちろん本気で言ってる訳じゃないさ。ジェームズは、僕を自分の側に取り込めると信じていたようだけれどね。あいつは、なくした半身の身代わりに僕をしたてたかったのさ。だが、そんなことは結局できなかったし、今となっては、どうでもいいことさ」

「本当に、大丈夫なんだな……ジェームズの妄想に、おまえ、とっつかれちゃいないな？」

「どうやら余計なことを言いすぎたせいで、本気で不安がらせてしまったらしい。結構真剣なアイザックな顔を見て、クリスターは後悔した。」

「ああ、僕も、死んだ人間にいつまでも悩まされるほど、心弱くはないよ。だが、それでも――ジェームズの死の知らせを聞いて以来、僕がある疑念に駆られていることは本当なんだ。だから、つい、あいつの話題となると神経質な反応をしてしまう」

「何だよ、その疑念って？」

アイザックに鋭く追及されて、クリスターは悩ましげに眉を潜めた。

「はつきり確信できるものがあるわけじゃないんだ：ただ、ジェームズが逮捕されて万事解決になった後も、僕は、これで本当に全てが終わったんだろうか、何か見落としていないだろうかという引っ掛かりをずっと覚えていた。何だか、とても大切なことを見落としているような気がして、落ち着かなかったんだ」

こんな漠然とした話をして、アイザックには分かってもらえないかもしれないも思ったが、クリスターも誰かに打ち明けて冷静な意見を聞きたかったので、せっかく信頼できる腹心の友が傍にいるこの時に、自分の胸にわだかまっている疑念を口に出してみることにした。

「だが、ジェームズは拘置所に送られ、その後病気の悪化によって入院し、どう考えても、これ以上何かを仕掛けてくるのは不可能な状態になっていくにつれ、僕は、その訳もない不安感を忘れていった。正直、ジェームズのことなど早く忘れたいという気持ちもあった：そうして、忘れることにほとんど成功していた矢先に、僕は、あいつの死の知らせを受け取った」

「久しぶりにあいつのことを思い出して、色々考えてるうちに、おまえが感じていた引っ掛かりの正体が分かったってことか？」

アイザックの黒い瞳が考え深げに細められるのを眺めながら、クリスターは深く頷いた。

「丁度1年前のこの時期になるのかな：ジェームズが僕の知らない所で、偽名を使い、父の会社にアルバイトとして潜り込んでいたことは君も知っているよね？」

「ああ、そうだったな：出所したジェームズが、どんな手を使っておまえに復讐しにかかるか、ピリピリしながら様子を窺っていたのが、まさか、そんな近い所に潜んでいたなんて、おまえにしてみれば、さぞかし驚いたことだろうな」

その頃、アイザックは丁度、コリンとミシエルの謀殺未遂の事件に引き込まれ、ジェームズの屋敷に軟禁状態になっていた。自身の苦い過去も含めて思い出しているのか、彼の面には複雑な感情が漂っていた。

「あいつは、何の罪もない学生アルバイトの顔をしながら、父の信頼していた社員達を次々と取り込み、感化していった。あいつの存在に気付きもしない僕を嘲笑いながら、あいつは会社の中を散々引っ掻き回して、父の心を傷つけ、ついには、ジェームズのおかげで人の代わってしまった社員に暴行を受けた母は流産してしまった：僕とレイフの妹か弟になるはずだった子だ」

「ああ…」

「僕は、母を暴行した相手を叩きのめして、警察に連れて行かれた父を迎えに行き：そこで、ジェームズと思わぬ再会をした。してやられたと思ったよ。僕に直接向かってくるのではなく、僕の家族を通じて、あいつは僕に手痛い最初の一撃を食らわせてくれた。それなりに警戒はしていたはずの僕の裏をかいてみせることで、僕を挑発する目的だったんだろう：実際、怒り心頭に発し、これ以上家族に害が及ぶことを危惧した僕は、その後、単身あいつの館に乗り込

んで行った」

話しているうちに、あの時の悔しさを思い出して、クリスターは拳を固く握り締めた。

「クリスター、その辺りの経緯は、俺も一応知っている。一度はおまえから直接聞いたこともあったはずだが、今、おまえが改めてその話を持ち出したのは、どうしてだ…？」

アイザックは、確かに恐ろしくも痛ましくもあるが、とうに終わったはずのこの事件の一体どこに、クリスターを今頃になって落着かなくさせるような不審な点があるのか、じっと考え込んでいる。

「ジェームズが父の社にいた二月ほどの間に、ブライアン、ジョエル、ヴァンの3人が、ひどい形で父を裏切り、社を去ることになった。彼らは皆、父がとても信頼していた人達で、僕もレイフも子供の頃から可愛がってもらっていた。その彼らを別人のように変えてしまったのはジェームズだった。3人はジェームズを気に入って、何くれとよく世話していたらしい…親しくしていた分、ジェームズの毒気をたっぷり受けてしまったということだろう」

「その3人が、いまだにジェームズの刷り込みなり暗示を引きずっているという可能性は、いくらなんでも薄いだろう…？」

「ああ、僕もそこまで考えていないよ。彼らがしでかしたことの結果は、もう修復のしようがなく、僕達家族との関係も永遠に断たれたままだ。もし、向こうから近づいてくることがあれば、それこそ怪しいとすぐに分かるしね」

「それじゃあ、一体何をおまえは気にしているんだ？」

「ジェームズの思考は僕によく似ている：あいつも僕と同じで、1つの行動を起こす際、その目的を1つとはしない。本当に、ただ僕を逆上させるためだけに、あいつは、自ら父の会社に入り込むなんて大胆なことをしたのだろうか？　そう、僕は、ずっと大切なことを見落としていた：あまりにも、身近にすぎたせいで分からなかった」

「クリスター、おい、何を言っているんだ？」

クリスターは自分が口走ろうとしていることを恐れるあまり、思わず、腕をぐっと掴みしめた。

「アイザック、ジェームズを傍に置いて社内で一番可愛がっていたのはね、実を言うと、僕の父なんだ」

「えっ？」

「ジェームズと話していると、僕と親密な時間を過ごしているようで楽しいと言ってね。殊に、ブライアンやジョエルとの不愉快な諍いがあったからは、一層ジェームズを手放さなくなった。あんまり無条件に彼を信じるものだから、母は心配したらしい：彼女は、早いうちから、ジェームズに何かしら不信感を覚えていたそうなんだけれど、ジェームズは母のことはうまく立ち回って避けていたらしく、実際父と2人でいる時に、ジェームズがどんな話を彼に吹き込んでいたのかは分からないんだ」

アイザックはしばし言葉もなく、クリスターの深刻な顔をまじまじと見つめるばかりだった。

「おい、おまえ、まさか―ジェームズの奴が親父さんに何かしたんじゃないかと疑っているのか？　つまり、ジェームズはラースを手駒にして、おまえやレイフに対して使おうと目論んでいた？　ラースさんの部下をけしかけて、ヘレナさんを襲わせたみたいにおまえ達を傷つけよう―まさか！　ラースさんは、おまえ達の父親じゃないか。いくらジェームズだって、それはムリってもんだぜ」

「でも、僕に対して有効な道具になると踏んだから、わざわざ父に近づいたのだと思えば、あの時期のジェームズの行動は、僕にとってすんなり納得のいくものになるんだ」

アイザックは唇を舌で湿しながら、どう応えるべきか、必死になって考えを巡らせているようだ。

「いくらなんでも、それは疑りすぎだと思うけれど：そこまで言うからには、何か心当たりでもあるのかよ？　ラースさんが、おまえらに何かしようとしたとか、おかしいことが実際にあったから、それをジェームズと結び付けて考えるのか？」

クリスターはとっさに言葉に窮した。

（心当たりか：ああ、確かに、心当たりならあるとも：どうして気付かなかったんだろう。父さんの僕とレイフを見る目は、昔とはまるで違う。おかしいと思ったことは、何回かあったんだ：僕とレイフが、世間の兄弟に比べて少しばかり過剰に触れ合ったからと言って、当たり前のように見慣れていた父さんは、不自然に思うことはなかった。それが、ある時から急に気にし始めて―今思えば、ジェームズが父さんに近づいた時期に重なるんだ）

クリスターはアイザックの眼差しを避けるよう俯いて、密かに臍

をかんだ。

（ジェームズの奴がもし、父さんが僕達に不審の目を向けるよう仕組んだのだとしたら―父さんが時々、僕達が2人きりで話し込んでいる時に、様子を見に着たり、聞き耳を立てたりしているのも納得がいく。まさか本気で、自分の息子達が愛し合っているなんて思っ
てはいないだろうけれど、確かめずにはいられない程度には不安がつているんだ。ああ、確かに、父さんにだけは知られてはならない
：同性愛嫌いな上に、僕達を盲目的に愛している父さんが、自分の子供達が本当は恋人同士だなんて知ったら…）

想像したクリスターは、思わず身震いをした。

「クリスター、どうして黙り込んでいるんだよ…？」

クリスターはアイザックを振り返ったが、さすがに、こればかりは彼に打ちあけるわけにはいかず、あいまいな返事をするとしか
できなかった。

「いや、ごめん：僕は神経質になりすぎているのかもしれないな。
ジェームズが、あのまま、僕に一矢も報いることなく死んでいっ
たということが、単に信じられないだけなのかもしれない。確かに
父さんは、ジェームズの引き起こした事件以来、人間不信に陥って、
社でもイライラと人にあたるが多くなったらしいし、家でも酒
量が上がったことが気になる：僕やレイフにはとても愛情深いけれ
ど：あれも生まれてくるはずの子供をなくした反動かな、少しばかり
度を越していて、時々重荷に感じるくらいなんだ」

肩を落として、疲れたような溜息をつくクリスターを、アイザックは辛抱強くなだめにかかった。

「だが、それら全てがJの野郎の計略だとは言えないだろう…？
もし仮にジェームズがラースさんを操ろうとしたのは事実だったとしても、それ自体1年も前のことになるじゃないか。もう時効だよ。大体、いくらジェームズだって、ラースさんに、この世の何より大切にしているおまえ達を傷つけるよう、仕向けることなどできやしないさ」

「うん…そうだね、君の言うとおりでよ、アイザック」

クリスターも、ブライアン達がラースを裏切り傷つけたような形で、ラースが自分達に害をなすなどとは夢にも思っていない。

だが、もしもラースが真実を知れば、クリスターとレイフを育ててくれた、大切な家族は粉々に崩壊してしまうだろうと恐れるのだ。
「ジェームズのせいで父さんが精神的に不安定になったからと言って、肝心のジェームズは死んでしまったんだ。これ以上操られるような心配はないし、時間が経てば、精神的な痛手からも立ち直って、もとの父さんに戻ってくれるはずさ」

クリスターは、先程の卒業式でも、自分達のために心から喜んで目に涙を溜めていた父親の姿を思い出した。いい年をした大人の男のくせに子供のようだ、時々クリスターを苛立たせることはあっても、素朴で純粋でまっすぐな、レイフそっくりな人柄の父をクリスターもまた愛している。だから、知らなくてもいい真実を知らせて、傷つけたくなどない。

（大丈夫だ、父さんはもう僕達を疑ってなどいない…一時は怪しんでいたものの、あれは自分の勘違いだったのだと完全に安心してい

る。どのみち、この夏が終われば、レイフはテキサスに行き、僕も家を出る。それまでの間、くれぐれも用心して、父さんの疑惑をこれ以上かき立てないようにすればいいんだ)

そう自分に言い聞かせ、クリスターは依然として胸の底にわだかまっている不安を拭い去ろうとする。

(僕の家族を滅茶苦茶にすることが、ジェームズのしかけようとした計略だったんだろうか…だとすれば、何とも中途半端な仕上がりだったな。気付くのが遅れたけれど、どうやら無事にやり過ごせそうで、よかった。でも—)

クリスターには、まだ完全に安心しきることはできなかった。この不安は、アイザックにも説明できない、振り払おうとしても絡み付いてくる脅迫観念めいていた。

(これで、本当に最後だろうか…他に何か、僕が見過ごしている点はないか…? 一体何を、僕はこんなにも恐れている…?)

つい眉間に寄せて黙り込んでしまうクリスターの肩を、アイザックが軽く叩いた。

「おい、レイフの奴がこっちに来るぜ?」

クリスターが顔を上げると、ホールの方向から、大勢の友達とふざけあいながら歩いてくるレイフの姿が見えた。意気揚々とガウンの裾を翻し、時折擦れ違いざま彼に声をかけてきたり、握手を求めてきたりする生徒達に、ざっくばらんに打ち解けた態度で応えている。

（レイフ…）

卒業というこの日を迎えるまで、様々な障害や危機があったものの、何とかそれらをやり過ごすことができた。

クリスターが予想した以上に、短い期間にぐんと逞しく成長したレイフには、前途洋々たる未来が開かれている。

喜びと希望にあふれた、レイフの生き生きとした姿を眺めていると、せっかくこんな晴れ晴れとした場にいるのに、1人、陰気な顔をしているのも馬鹿馬鹿しくなってきた。

（ああ、もうやめよう…何をどう疑ってかかっても、ジェームズは死んだ。死んだ人間のことなど、いい加減もう忘れてしまえ…！）

そうやって、クリスターは、鬱屈とした思いを強引に振り払った。

「な、この後の予定はどうなってるんだよ、おまえ？」

クリスターの気分が上向きに変わってきたのを見計らっていたのだろうが、アイザックがそう声をかけてきた。

「そうだな、コーチの家でバーベキューをするってレイフが言っていたから、それにちよつと顔を出して…その後デートする予定だったけれど、せっかく君が来てくれたんだから、そっちの方はキャンセルするよ」

「おいおい、いいのか？」

「夜は、学校主催のパーティーがあるから、よかったら、君も来い

よ。 そうだ、今夜はこっちに泊まるんだろ、うちに来ないか？」

「ありがとうよ。でも、新聞部の友達ん所に荷物預けてんだ。明日の朝早くにこっちを出て、コリンに会いにくつもりだし…」

クリスターとアイザックが芝生からゆっくりと立ち上がって、服についた草を払っていると、こちらの存在に気がついたのだろう、下の方にいるレイフが大声を張り上げた。

「おおい、クリスター、そこに一緒にいるのはアイザックじゃねえのか！」

自分の存在をアピールするようにぶんぶんと手を振り回すレイフを見下ろして、アイザックが口に両手を当てて叫び返す。

「よお、レイフ、久しぶりだなっ。さっきのスピーチ、もう最高だったぜ！」

たちまちレイフがううつと頭を抱え蹲るのを見て、クリスターはアイザックと一緒にあって、声をあげて笑った。

そう、世界はこんなにも平和で、明るく、喜びに満ちている。不吉な影が入り込む隙間などありはしない。

「もう大丈夫だな、クリスター？」

「ああ」

傍らにいる親しい友が肩を叩くのに、素直に頷き返すと、クリスターは彼と一緒に、レイフの元まで丘を一気に駆け下りていった。

第7章 F A K E (13)

(レイフ、素直で可愛い君のために、ひとつ忠告しておいてやるよ。クリスターを信じるな。忘れるな、そいつは裏切り者だ)

レイフが、夕方になってコーチ宅から一度家に戻った時、アイザックと一緒にどこかに行ったクリスターも、叔父ビヨルンと食事にかけた両親もまだ帰っていなかった。

夜は、学校が主催する卒業記念のパーティーが郊外の大きな娯楽施設で開かれるので、レイフもトム達と一緒に参加することになっている。

クリスターも後で合流すると言っていた。

卒業式やその後のパーティーでもずっと、浮かれたお祭り気分は続いていて、レイフをそわそわと落ち着かなくさせていた。今日は一日中、仲のいい友人達と思う存分はしゃぎまくるつもりでいた。

(ようやくと長かった高校生活が終わったんだ。今日は少しくらいはめを外して、夜中まで遊んだって構わないよな)

デイスコはほとんど貸し切り状態になるらしいし、アルコールは

もちろん厳禁だが、食事やドリンクもついている。すぐ近くに大きなゲームセンターもあるから、踊るのに飽きたら、そちらに流れてもいい。

（オレ、今モテ期だからさ、女の子連中に踊ってくれとかせがまれそうだけど：やっぱ、そっちは適当にちょっとだけ付き合って、トム達フットボール仲間と一緒にいようっと：寮生のほとんどは明日それぞれの実家に帰っちまうからな）

仲間達と過ごせる残り短い時間をせいぜい楽しい思い出にするこ
とで頭が一杯なレイフは、出かける前に、ひとまずバーベキューの
臭いや油のついてしまった体をシャワーで流して、さっぱりした格
好に着替えることにした。

（あれ？）

まっすぐ2階に上がろうとしかけたが、何となく覗き込んだキッ
チンのテーブルの上に、レイフは小さな荷物が置かれていることに
気がつく。

「あ、オレ宛じゃん：どっから送られてきたんだろ」

親戚か友達から送られてきた卒業祝いのプレゼントか何かだろう
かと、差出人を確認するが、荷札に書かれてあるのは全く覚えのな
い名前だった。

レイフは首を傾げながら、それを2階の自分の部屋に持っていき、
無造作に開封した。

「何だよ、このテープ：？」

中から出てきたのはプラスチック・ケースに入ったカセットテープと一通の手紙だった。

ますます胡散臭そうに、レイフは顔をしかめる。直感的に、これはよくないものだと感じたのか、背中の辺りが早くもぞくぞくしていた。

（サスペンス映画みたく、いきなり爆発なんかしたりして―あは、まさかね）

テープの方は机の上にそっと置いて、レイフは取りあえず手紙の方から調べてみることにした。

タイプライターできちんと打たれた文面は、無味乾燥な事務的なものだったが、その手紙に目を通して、レイフはやっと、これが誰から自分に送られてきたものであるのか、理解した。

「ブラック家の顧問弁護士？」

喫驚のあまり上ずった声が、レイフの唇から迸った。

「ジェームズの遺言の実行って、一体何のことなんだよっ?! 一体何で、オレにこんなものを送ってきやがったんだ…?」

怖気を奮ったレイフは、反射的に、その手紙を床に投げ出し、それこそ爆発物から回避するかのように大きく飛びすさった。

「う…ううっ…」

レイフは、眉を逆立てながら、床に落ちた手紙をしばし睨みつけていた。ぐっと握り締めた手の内は汗ばみ、心臓の鼓動は速くなっている。

（やばい…よく分からないけど、何だかすごくやばいもののような気がする）

レイフは床の上の手紙から、机の上に取り残していたテープの方に視線を移した。

（送られてきた荷物は、これ1つだった…ジェームズの遺言だった？　これがクリスター宛なら、まだ納得できるけど、どうしてオレなのか―あの野郎、一体何を企んでやがるんだ？）

そこまで考えて、レイフはこれがジェームズのまさしく『遺言』であること、彼が2週間ほど前に既に亡くなっていることに気がついた。

（そ、そうか、J・Bの奴は死んじまったんだな）

レイフは唇を舌で舐めながらしばらく考え込んだ後、ゆっくりと床に散らばった手紙に近づいて、用心深く拾い上げた。

（あいつ、自分が死ぬのを予期して、こんなものを準備してやがったのか…全く驚かせやがる）

レイフは改めて、ジェームズの弁護士からの手紙を読み直した。

内容は至って、簡単明瞭なものだ。ジェームズ・ブラックの依頼に基づき、彼の死後、予め指定された日に、この遺品がレイフの手

に届くよう、処理させてもらう。テープの内容については、一切触れられていない。その後、このテープをどうすればいいのかも、記されていない。

「依頼通り、送るだけ送ったから、後は好きなように処分しろってことかよ……ったく、こんな怪しいものを人に押し付けやがって、無責任な」

何のヒントも手がかりも得られない手紙に、レイフは不満そうに口をすぼめ、いらいらと頭をかきむしった。

（ジェームズの『遺品』だぜ……怪しすぎるだろ、どうせろくでもないものに決まってる。たぶん、見なかったことにして、このままゴミ箱に捨てちまう方が安全なんだろうけれど――）

レイフは迷いながら、そろそろ伸ばした手で、机の上のテープを取り上げた。

（ああ、どうして今、ここにクリスターがいないんだろう……もしあいつがいてくれたら、開封するかどうか相談して――いや……）

レイフはそこまで考えて、自分の優柔不断さを思い切り退けた。

（あいつがいたら、J・Bから送られてきた荷物など、絶対オレに開けさせはしない。自分が処理するって、強引に取り上げちまうのがオチだ……それに、実際これはオレ宛のものなんだ。ジェームズからの贈り物ならろくでもないものなのは確実だけど、これくらい自分の手でちゃんと始末をつけてやる。大体、クリスターは、この間ジェームズの死の知らせを受けとった時の様子を見ても分かるように、まだ精神的に不安定だからな……）

レイフは、ジェームズの死の知らせをクリスターから聞いた日のことをまざまざと思い出していた。

（オレはジェームズのことはもう終わった話だからと、最近ではほとんど思い出さなくなっていた…喉もと過ぎれば熱さを忘れるって、ホント、オレらしいや。だから、クリスターのあの取り乱しように見て、すごく驚いたよ…オレに比べりゃ、あいつとジェームズの因縁はずっと深いんだろうけど、それにしたってさ…）

あれ以来、今更のように、レイフもあの怪物のことを度々思い出すようになっていた。その矢先に、こんな『遺品』が送られてきたのだから、薄気味悪く思いながらも、その内容については正直気になっている。

（去年の夏休みの話になるのか…J・Bとの『戦争』って言ったって、オレはほとんど蚊帳の外で、実際ジェームズの野郎と顔を突き合わせたのは、クリスターを助けに行ったところで出会った、ほんの短い時間だけだ。オレはすっかり頭に血が上ってて、あの場面の記憶は所々飛んでいる。ジェームズの奴、オレに向かって、何やら意味深なことをべらべらしゃべっていたけれど、大半は取るに足りないことだと聞き流してた。でも、今思い出してみると、あいつ、随分おかしいことを言いやがった…そう、クリスターを信じるなって…あんな奴の言葉をまともに受け取る必要はないのかもしれないけれど…）

レイフは、胸の奥から言い知れぬ不安感が噴き出してくるのを覚えながら、しばしテープのプラスチック・ケースの表面を睨みつけていた。脳裏に鮮やかに蘇るのは、あのぞつとするような夜―クリスターを守れなかったレイフを馬鹿にするかのように、彼の殴打を

受けながらも笑い続けたジェームズが、ふいに真顔になり、謎めいた言葉を投げかけたことだ。

「やめよう…死んだ奴なんかに、今になって振り回されるのはごめんだぜ…！」

レイフは、苦々しく吐き捨てて、頭を左右に激しく振ると、ゴミ箱の中にテープを手紙ごと放り込んだ。そのまま、シャワーを浴びに、部屋を出ようとした。しかし―。

（大体、僕には君に許しを請うことなど何もないよ。ああ、実際クリスターの肩が二度と使い物にならなくなったとしても、その件については、僕は全くすまないとは思わないな）

底知れぬ暗い深淵から、永遠に葬られたはずの怪物の声が蘇り、振り切ろうとするレイフに執拗に絡みつき、その足を止めさせた。

（クリスターを信じるな。そいつは、裏切り者だ）

レイフは、実際には聞こえるはずもない、その声を遮ろうとするかのごとく、両手で耳を塞いだ。

（黙れ、この悪魔め…いいや、オレがこの手で黙らせてやる…殺してやる！）

レイフは混乱していた。あの夜怒りに任せてジェームズを殺そうとした、荒れ狂う獣と化した自らが再び戻ってきたような、激烈な怒りに駆られて身震いした。

（何、馬鹿なことを言いやがる…どうしてクリスターがオレを裏切

るはずがあるんだ？ あいつはオレの相棒、この世で一番信頼できる相手じゃないか。たとえ世界中の人間がオレの敵に回ったって、あいつだけはオレの味方でいてくれるはずさ。そうとも、オレはあいつを信じている。いつだって、あいつはオレのために…)

そこまで考えた、次の瞬間、レイフは何か重大な事実に気付いたかのように、愕然と目を見開いた。

(ああ、そうだ…あいつはオレにためだと思えば、いくらでもオレを騙し、嘘をつく…いつだって、そうだったんだ)

胸に芽生えた小さな疑惑を駆り立てようとする亡霊の囁きに対して、レイフは必死に抵抗しようとする。しかし、自分の主張する信頼が現実にはことごとく裏切られてきたことを、彼は今思い出していた。

クリスターはレイフを異常なほど愛し、常に最優先する。だが、クリスターの優先順位が一番上にあるということが、レイフをいつも幸せにしたわけではない。実際、クリスターはレイフの気持ちなどお構いなしに、勝手に自分1人で決めた正しいことを強引に押し通す。

そんなクリスターの独りよがりなやり方に、レイフがこれまで、どれだけ傷つき、失望してきたか。

(あの時も、クリスターはオレを騙すようにして、ジェームズと一騎打ちするため、敵の只中に入り込んでいった。クリスターに出し抜かれたおかげですっかり出遅れたオレが、あの忌々しいジェームズの屋敷の地下室でようやく見つけたのが、あいつのあんな変わり果てた姿だった)

レイフは、完全に消えていたかに思われていた心火を再びかき起こされ、何とか制御しようどぐつと拳を握り締める。

（オレのために、他の皆のために、自分1人で何もかもをひつかぶって、あんな怪我を負ったクリスターを責めることなんて、オレにはとてもできなかったけれど―それでも、心の底では悔しくて腹が立って仕方がなかった。どうして、あの時オレを連れて行ってくれなかったのか：一緒に戦わせてくれなかったのか：オレがついていたら、絶対クリスターをあんな悲惨な目には合わせなかったのに：）

認めたくはないが、レイフにも本当は分かっている。

目的のためには手段を選ばない、時として、自分の大切な人達さえも騙し、道具として利用する。クリスターの芯には、そういう情け容赦のない冷酷さがある。

これまで、クリスターに何度も欺かれながらも、レイフはずっと彼を許してきた。全ては、自分を愛するがための行為と分かれれば、許すしかなかった。それに、詰まるところ、レイフ自身、どんな怒りも及ばぬほどクリスターを深く愛していた。

（だからって、あいつのやり方そのものを許したわけじゃない。あいつにしてやられたって気付く度、オレは心の底から願った。頼むから、これを最後にしてくれ、もう二度とオレを騙さないでくれ、裏切らないでくれと―）

死んだ人間の残した囁きが、何をもってしても揺るがすことはできないと信じてきた強固な壁に、疑いという名の小さな穴を開ける。

（クリスターを信じるな、そいつは裏切り者だ）

放っておけば、それは次第に亀裂を広げ、2人の関係を決定的に打ち崩す致命傷になるだろう。

だから、一刻も早くこの疑いを晴らして、穴を塞がなければ―レイフは訳の分からぬ焦燥感に駆られ、身震いした。

そうして、頭を抱えて低く唸るや、いきなり踵を返して、部屋の中に戻っていった。

「ああ、くそっ、忌々しいっ」

腹立たしくてならないというように、ゴミ箱からテープを拾い上げ、ベッドサイドのカセット・デッキにセットする。

すぐにスイッチを入れようとして、レイフはためらった。これを聞けば、きっとジェームズの思い通りになってしまう。ジェームズが、あの時、レイフにほめかしたことの意味が分かってしまう。

レイフは喉をぐくりと鳴らした。

「何も怖がることなんかない：J・Bは死んだ。こんなテープ1つで、オレやクリスターをどうこうすることなんか、できやしない」

つい怖気付きそうになる自分を励まして、スイッチをオンにすると、レイフは引き寄せた椅子に坐り、身を乗り出すようにして、何が始まるのか待ち受けた。

あまり状態がいいとは言えないテーブルらしく、ザーツという低い

ノイズがしばらく続く。

もしかして何も録音されていないのではないかと、レイフが早速りにして確かめようとした時、突然スピーカーから、緊張感の欠片もない、やけにハイな声が流れ出した。

『サプラーイズ！』

緊張のあまりがちに固まって待ち構えていたレイフは、泡を食って、椅子からずり落ちそうになった。慌てて坐りなおす間にも、まるで彼の今の動揺振りを見透かすようなくすくす笑いがテープから流れてくる。

『やあ、卒業おめでとう、レイフ。この晴れの日を、君はどんな気分で迎えたのかな？』

のんびりと明るい口調でからかい混じりの言葉をレイフに投げかけてくるのは、紛れもないジェームズ・ブラックだ。

「な、何だよ、いきなり…びっくりするじゃねえか、この野郎！」

思わず、顔を真っ赤にして怒鳴り返して、レイフはこれがただの録音された音声であることを思い出した。振り上げた拳をのろのろと下ろして、やり場のない怒りをぐっと堪えた。

『君が、このテープを僕の指示通り卒業式の日に取り、聞いているのだとすれば―僕はクリスターとの最後の闘いに負けたのだろう。そして、もちろん、この世にはもういないはずだ。今日は、8月6日。今現在、クリスターは僕の手の内に従順に捕らえこまれている。僕には、このゲームがどんな形で収束するのか、いまだ定か

ではない。だが、レイフ、このテープを聞いている君は、もう知っているよね?』

実に奇妙な気分だった。死んだ人間が、こうして自分に向かって語りかけてくる声に、耳を傾けるのは――。

(8月6日:すると、このテープは、クリスターがブラック邸に乗り込んでいった、あの日に録音されたものなんだ。ジェームズの奴まるで自分がクリスターに負けて、警察にとっ捕まるってことを予想したみたいに――いや、もし自分が勝てなかった場合の可能性まで視野に入れて、こんなサプライズを用意してやがったんだ。でも、一体、何のために……?)

レイフがあゝの悪夢のようだった日を振り返って考えこむのを見計らったかのように、絶妙の間を取って、ジェームズの声は続けた。

『僕は、クリスターが僕とのゲームに勝利し、全てを彼の思い通りに終わらせてしまった場合、おそらく誰にも知られることのないままに葬り去られるであろう真実をここに残しておこうと思う。そして、他の誰でもない君にこのテープを贈るのは、君こそ、その隠された真実を知る権利を持つ人間だからだ。クリスターが君だけには決して知られてはならないと恐れている事実をね。僕にとっては、クリスターに対するちよつとした意趣返しくらいにはなるかな……もつとも、僕が投じた一石が君達の間どんな波紋を作るのか、僕自身は見届けることはできそうもないな。ねえ、レイフ、君も知りたيدらう……? あの日、君の知らない所で実際僕とクリスターの間で何があったのか……』

ジェームズの独特の唄うようなリズムを含んだ声に、レイフはいつの間にか引き込まれてしまっていた。すぐには話の核心に入らな

い、含みを持たせた言い方に苛立ちながらも、どうしても先を聞きたいという気持ちに駆られてしまう。

『レイフ、どうしてクリスターは君を置いて、危険も顧みず、わざわざ1人で僕に会いにきたのだと思う？』

まるでレイフの心の中でもやもやと形をなさないままにわだかまっている疑念をすくい上げるかのように、ジェームズ・ブラッカー既に死んだはずの青年は語り続ける。

『警察に通報することもせず、身を守るための策を全て放棄して、無防備のまま敵の巣窟に飛び込むなんて、あの用心深いクリスターらしくない：自分の弱点である君は安全圏に置きたいという気持ちは確かにあったろうし、ダニエルの無事を一刻も早く確認したい思いもあったろうし、しかし、何よりも、彼には、どうしても仲間達の介さない場所で僕と2人だけで話す必要があったからなんだよ』

レイフは、ジェームズの語ることに耳を傾けながら、あの日の記憶を必死になって手繰り寄せていた。

クリスターはレイフを意識不明にしてクラブハウスに閉じ込め、その隙に、ジェームズの館に向かった。やっとの思いで脱出したレイフが、クリスターの後を追いつ、警察にも通報した、その間に、4、5時間もの時間のロスがある。クリスターがどうしても自分の力でジェームズとの決着を付けようなどと早まった真似をしなければ、事態は別の形で推移したかもしれない。

（もっともオレがクリスターを助けようと警察の協力を求めたって、結局捜査令状は出なかったんだけれどさ。ダニエルを連れて脱出してきたアイザックの証言があって初めて、警察の介入できる余地が

できたんだ。するとクリスターは、警察に期待をかけても望み薄だからと、さっさと見切りを付けて、あんな無謀な真似を――）

レイフは何だかしっくり来ない考えに首を傾げた。確かに、クリスターに限って、焦りや怒りのあまり早まった行動に出してしまうこととは無い気がする。

その間にも、ジェームズの不安を煽るような語りは続いた。

『クリスターはさっき、僕にこんなことを言ったよ、レイフ。僕とのゲームをもう終わりにしたい、打ち切らせてくれとね。驚いたことに彼は、僕に自分の負けを認めた上で、家族や友人達からは手を引いて欲しいと懇願した。しかも、僕を満足させるために、一方的にゲームを降りた相応の代償は払うというんだよ。そんなことを訴えるために、彼はわざわざ僕のもとに來たわけだ。全く、信じられるかい？』

何がそれほどおかしいのか、ジェームズは堪えきれなくなったかのように吹き出し、声をたてて笑った。

（くそっ、この笑い声、人の神経を逆撫でしやがる。オレに教えたことがあるなら、さっさと言いやがれっ！）

たまりかねたレイフが、テープを早送りしようと指を伸ばしかけた、その時、ジェームズは一転、真剣味を増した口調で言った。

『クリスターは、あたかも愛する者達を守るために自分が犠牲を払うのだというかのように、僕にこんな交換条件を突きつけた。僕も最初は戸惑ったけれど、彼の意図することはすぐに分かったよ。クリスターも僕と同じ、ある行動を取る際、その目的は1つとはしな

い：これから君にも、僕とクリスターが交わしたやり取りを聞かせるけれど、果たして君に、クリスターがこんな常軌を逸した提案をした、本当の目的が読み取れるだろうか。物事の表面を単純に捉えることしかできない君には、クリスターの複雑で深遠な考えを汲み取ることは難しいかもしれないね。せっかくだから、ヒントを与えてやるよ。全ては、レイフ、君のためにさ：全く、この僕まで利用しようというんだから、呆れるほどの徹底ぶりだね。だが、僕も――このままでは、結局クリスターの思い通りにしてしまいそうな気がするよ。毘だとは分かっているのに：馬鹿だな、僕も：』

ジェームズらしくない、妙に自嘲的な、どこか諦めたような口調で呟いた後、ぷつりと、テープが途中で切られたようなノイズが入った。

レイフが、ここで終わりかと怪訝そうに身を乗り出しかけた時、これまでのジェームズの独白とは違う、別の人物の声が聞こえてきた。

『：それでも、ジェームズ、僕の負けなんだよ』

クリスターだ。レイフははっと息を飲んだ。

『頼むから、これ以上の無駄な争いをしかけないでくれ：僕達のゲームは終わったんだ』

胸の中の心臓が次第に鼓動を早めていくのを感じながら、レイフは、今テープによって再現されている場面を頭の中に思い描こうとした。

（さっきのジェームズの前置きから察するに：オレを置いていった

クリスターが、ジェームズと対面した時だろうか……これ以上身内に犠牲者が出ないよう、あいつはジェームズに闘いをやめさせるため、直接交渉しようとしたんだ。別に少しもおかしな話じゃない。でも……)

レイフは神経を集中して、テープから流れてくる、クリスターとジェームズの会話にひたすら聞き入っている。

『そんな言葉は信じられないな、クリスター……君は僕を欺こうとしているだけじゃないのか？』

『信じてもらうしかないよ、ジェームズ……何なら、君の勝者としての権利を行使してみるかい？』

クリスターの声は、己の身を危険にさらしている人間とはとても思えない、冷静すぎるほどに冷静だった。

『僕は今、君の手の内にある。君はそうしようと思えば、僕を傷つけることも殺すことも好きにできるんだ』

ごく低く柔らかな声に相手の神経に触れる挑発をこめて、ジェームズに働きかけるクリスターはひどく冷酷そうで、何だかレイフの知らない人間が話しているように感じられた。

(やめろよ、クリスター、そんなふうになんか煽るな。J・Bの奴は、頭がいかれてるんだから、おまえに何をするか分からない……ああ、くそっ……！)

レイフははらはらしながら2人の会話を聞いていた。自分がクリスターの傍についていたら、きっと黙らせていただろう。現実には

阻止できなかった結末を思い、唇を噛み締めた。

『まさか、本気で言っているのか？』

ジェームズが珍しくも動揺している。状況的にはジェームズの方が有利なはずなのに、不思議なことに、このやり取りの主導権を握っているのはクリスターのように感じられる。

『殺されるのは困るけれどね。でも、君の期待に反して一方的にゲームを降りたペナルティは受けるつもりだよ』

レイフは、おやというように首を傾げた。どこかおかしい。クリスターの主導でなされる、この会話自体ひどく芝居がかって、不自然な気がする。

他人めいて響く兄の声に耳を傾けるレイフの眉間には、いつの間にか深いしわが刻まれていた。

『僕の最大の楽しみを勝手に奪っておいで、それに見合う代償だなんて、そう簡単に見つかるとは思えないけれど？』

ジェームズにもクリスターの誘導に自分が乗せられていることは分かっているのか、言い返す口調はどこか腹立たしげだ。

『そうでもないさ、君の気持ちなら、僕はちゃんと見通せるからね。僕が差し出すのは、君が僕から奪うことで、ある程度満足できるものだよーこの条件で僕を取り巻く全てから手を引いてほしい。僕の未来を君に潰させてやる』

『君の未来？』

不思議そうに問い返すジェームズがいつそ無邪気に感じられるほど、クリスターの言葉は賢しく、悪辣だった。

『ああ、そうさ：君も知っているだろう、僕が幼い頃からずっと弟と一緒に追っていた夢：フットボール・プレイヤーとしての僕の命とも言える、この右腕を君にやるよ、ジェームズ』

何の躊躇いもなく無造作に投げ出された提案に、ジェームズはすぐには答えなかった。

『どうだい、命以外のもので僕が君に支払うことにできる、最大の代償だと思っただけ？ どうせ君は、僕をただ殺してしまうだけでは満足できないだろう：むしろ、僕から最も大切なものを奪った上で尚も生かしておきたいはずだ。君の手から離れても、僕が一生君を忘れることなどできないように：』

ジェームズはさぞかし困惑しただろうが、これは悪い冗談ではなく本気なのだということを相手に執拗に理解させようとする、クリスターが何を考えているかなど、レイフにも全く分からなかった。

『僕との縁を断ち切るために、君の腕を引き換えにすると…？ 二度と以前のようにプレイできなくなつて、もちろん将来プロになるという夢も断たれー確かに、僕はこの手で君に一生消えない深い傷をつけることができるというわけだ。だが、クリスター、君は一体どういうつもりで、そんな…？』

ジェームズの声が低くなり、ふっと途切れる。深い沈黙考に沈みこみ、クリスターの真意を解き明かそうとしている、怪物の密やかな吐息まで感じられるようだ。テープによって再現された場面に

漲る緊張感に耐え切れず、レイフは思わず喘いだ。

『ああ、君の考えが読めたよ、クリスター…なるほど、そういうことか…！』

突然、ジェームズの毒々しい含み笑いが発せられたのに、レイフはぎくりとなった。

『全くろくでもないことを思いつくね、君は—自分の目的を果たすために、この僕まで利用しようとはね！　そして、そんな身勝手な頼みごとを僕に面と向かってするとは、呆れるのを通越して感服するよ』

ジェームズの耳障りなくすくす笑いがしばらく続いた後、クリスターの少しも動じない鋼のような声が覆いかぶさるように言った。

『だが、君にとってもこれは悪い話ではない…そうだろう、ジェームズ？』

ジェームズは再び黙り込んだ。

『君の提案を僕が素直に受け入れるなどと、本気で思っているのかい？』

『さあ、どうかな…だが、少なくとも君は今迷っているように見えるよ？』

『クリスター…』

ジェームズの喉に絡んだような呼びかけを最後に、テープは唐突

に終わった。

レイフは、椅子に坐ったまま、スイッチの切られたカセット・デツキを凝然と眺めていた。

「えっ…」

レイフの手がのろのろと上がり、赤い髪をくしゃりと掴んで、かき回した。

「え…えっ…何だよ、これ…？ て、おい、これで終わりなのかよ、ジェームズ…何がなんだか、さっぱり訳が分からないぜ」

今聞いたやり取りを思い返して反芻しているうちに、混乱の極みに達したレイフは、椅子から跳ね起きるようにしてカセット・デツキに掴みかかり、荒っぽくテープを巻き戻した。

（果たして君に、クリスターがこんな常軌を逸した提案をした、本当の目的が読み取れるだろうか）

テープの前半に入っていたジェームズの意味深な言葉が、レイフの熱くなった脳裏に蘇る。

（一体、どういうことなんだよっ…クリスターの言ってること、全然意味が分からねえ…！ ジェームズの奴に自分の右腕をやるって…そんな馬鹿なこと、あいつが自分から言ったのか？！ 何でそんな…嘘だ、信じられねえよ）

レイフの震える指が再びテープをオンにする。

『…しかないよ、ジェームズ…何なら、君の勝者としての権利を行使してみるかい？』

レイフはもう一度問題の部分を最後まで聞き、それが終わると、またテープを巻き戻した。

『…この条件で僕を取り巻く全てから手を引いてほしい。僕の未来を君に潰させてやる』

終わったら、すぐに巻き戻して聞きなおすことをレイフは何度も繰り返した。執拗なほど、何度も何度も。語られる言葉の表面だけでなく、その裏に隠された、クリスターが意図する本当の目的は何なのか、彼は懸命に探り続けた。

（…せっかくだから、ヒントを与えてやるよ。全ては、レイフ、君のためにさ…）

ジェームズの揶揄するような声が頭の中に鳴り響き、レイフを一層激しく揺さぶる。

（オレのため…？ 何で、こんなことがオレのためなんだ…自分の腕とオレの安全を取り引きしたってことか…？ いや、違う、そんな単純なことじゃない…あいつが自分の選手生命と引き換えにしてまで果たそうとした目的は…？）

考えれば考えるほど、レイフは次第に気分が悪くなってきた。当時の状況を鮮明に思いだすにつれ、見えてきた真実を受け入れることを、レイフの感情は頑なに拒否しようとする。

（ああ、そうだ、あの事件の直前にオレ、クリスターと大喧嘩した

んだ。シュミットさんがクリスタをスカウトに来て…あいつ、自分がオレを差し置いてチャンスを掴んだことで、ひどく腹を立て、取り乱してた―オレを殴りつけて説教しただけでは飽き足らず、コーチにまで抗議しにいったさ…)

レイフの胸の中で、その心臓はどくどくと激しく打ち鳴らされている。

(コーチもひどく心配したくらい、あの時のクリスタは言ってることもやることもおかしかった。オレもあいつがひどい勘違いをしているんじゃないかと恐くなって…自分が足かせになってるせいで、オレがいつまでも伸びないんだとか、だから、フットボールをやめるんだとか―)

突然、頭の中に閃いた考えに、レイフは慄いたかのように目を見開き、何度も瞬きした。

(あいつは、オレにはフットボールでいつか成功して欲しいと願っていた。カレッジ・チームで活躍することも、プロになることも、オレが本気になれば可能はずだと、例え周りの評価がどうであれ、あいつだけはずっと信じていた…なかなかスランプを脱することができず、自信も持てないオレをどうにかして奮い立たせようとしてきた。高校最後のシーズンは、オレに残された唯一のチャンスだったから、あいつはあんなにも焦っていたんだ)

レイフは己の体に両腕を巻きつけ、ぶるりと身を震わせた。

(だから…なのか…? オレが本当の本気になるためには、邪魔だと思ったから…だから、消し去ろうとした…?)

レイフの将来に影を落とす、邪魔なものは取り除く。あの当時のクリスターにとって、その1つは紛れもなくジェームズ・ブラックであり、そしてもう1つ、おそらく彼自身でもあったのではないか。

（そうだよ、レイフ、全ては、君のために、クリスターが仕組んだ計略なのさ）

ジェームズが生きていたら、きっとそう言って、どうしても信じたくないレイフの葛藤を嘲笑ったことだろう。

（まさか、そんなーいくらあいつでも、そこまでするものか、そんな酷いこと…）

レイフはぜんまい仕掛けの人形のようなぎこちなさでテープをもう一度巻き戻して、最初から最後まで聞いた。

どんなに否定したくても、信じたくなくても、クリスターがあの日、レイフが見ていない所で何をしたのか、その証拠は厳然として残っている。

一縷の希望さえ打ち砕くような、確信犯的な冷たさで響く兄の声に耳を傾けるうち、初めは混乱だけに満たされていたレイフの顔に、次第に圧倒的な空しさが広がっていった。

くっつと、レイフの喉が鳴って、まるで自らを哀れむような短い苦笑が漏れた。

（ああ、オレ、またしてもクリスターに騙されてたってことなのか…ほんとに何度も何度も凝りねえよな）

クリスターの言葉や行動の、一体どこからどこまでが本当で、嘘なのか―レイフには、本当にもう分からなくなった。いや、これまでだって、真実理解したためしなどなかったのかもしれない。

（おまえはオレを愛している…何度欺かれても、一番大切なそのことではおまえは嘘をつかないって分かってたから、オレは今まで我慢できた。ああ、でもさ、クリスター、愛してさえいれば、他には何をしたって許されると思うのか…？　どんなひどい仕打ちでもオレが認め、受け入れると…？　いいや、今度ばかりはやりすぎだよ、クリスター）

テープが切れた後、レイフはがっくりと頭を垂れて椅子に坐ったまま、微動だにしなかった。

その暗く虚ろな顔は、いつの間にか目からあふれ出した涙で濡れていた。明るく屈託のない普段のレイフを知る者がその姿を見たら、別人のようだと思うに違いない。彼は深く傷ついていた。

いきなり、レイフは机の上においていたカセットデッキを手で荒々しく払いのけた。

音をたてて床に落ちたデッキから、反動でテープが飛び出す。

怒りの発作に身を震わせながら、レイフは両手で頭を抱え込み、食い縛った歯の間から深い恨みのこもった言葉を押し出した。

「裏切り者…！」

第7章 F A K E (14)

色とりどりのライトが明滅する店の中、テンポのいい音楽に乗って、晴れ晴れとした表情の若者達が踊っている。

アーバン高校の卒業記念パーティーは今がたけなわだった。

自分に向かって親しげに声をかけてきたり、踊りに誘ったりする知り合い達にはおざなりの返事だけをして、レイフは仏頂面のまま店の奥に入っていた。

途中、カメラのフラッシュのような白っぽい光が視界の片隅で閃いたのに、レイフが怪訝そうにそちらを振り向くと、アーバン校の関係者とは思えない、見知らぬ男がカメラを抱えて、慌てて逃げさっていった。

レイフは軽く舌打ちをした。巷でのレイフのアイドル的な人気はまだ続いていたので、妙な記者やカメラマンに付きまとわれることは、今でも時折あった。卒業記念パーティーでの激写を狙って、どこぞの怪しいカメラマンが忍び込んでいるようだ。

「レイフ、ここだよ、ここっ！」

声のする方を眺めやると、ダンスフロアの向こうにあるテーブル席から、トムが手を振っていた。フットボール・チームの仲間2人も彼と一緒にいる。

レイフは強張っていた表情をほんの少し和らげて、親しい友人達の輪に加わりに行く。

「随分遅かったじゃないか、何してたんだよ」

「うん、ちょっと…」

レイフのぎこちない態度と暗い面持ちに、トムはふと訝しげな顔をしたが、追求しかけた時に、おそらくレイフ目当てだろう、チアの女の子達がやってきて声をかけたものだから、結局親友の態度の不自然さの理由を尋ねることはできなかった。

女の子達が加わったことで、テーブルの雰囲気は一気に華やいだものになったが、楽しい仲間達の中で、レイフだけが心ここにあらずの物思いに沈んだ顔をしていた。

「ねえ、レイフ、さっきからずっと黙り込んで、一体どうしたのよ？」

「せっかくのパーティーなんだから、もっと積極的に楽しまなきゃ。まだ誰とも踊ってないんでしょ、私と一緒にどう？」

女の子達は、会話の間に度々レイフをつついて、自分に関心に向けてようとしたり、ダンスに連れ出そうとモーションをかけたりするのだが、あまりはかばかしい答えが返ってこないのに、ついに諦めたのか、もっと自分達に優しい他の男の子に誘われるがまま席を立っていった。

「…あーあ、野郎ばかりが取り残されたなあ」

「おまえも誰かと踊りたかったら、オレに構わず行っちゃっていいんだぜ、トム」

「おまえがここに来るまでに、何人かとうとう踊ったよ。別に取り立ててダンス好きってわけでもないし、卒業前に彼女とは別れちゃったし、女の子の相手はしばらくいいわ、俺も…なあ、後で退屈してそんな仲間を集めて、ゲームセンターでも行こうか？」

トムは皿の上に残されたチキンをつまみながら、辺りの様子をきよろきよろと窺ったかと思うと、ふいに声を低めて囁きかけてきた。

「それにしてもさあ、おまえ、一体どうしたんだよ？ 昼間皆の話題をかつさらった明るくて楽しい人気者とは別人みたいじゃないか？ まさか、あの後クリスターと喧嘩したってわけじゃあないよな？」

「！…な、なんで、オレがクリスターと喧嘩したなんて思うんだよっ」

トムは別に深い意味があって言ったわけではないだろうが、懊悩の中核にいきなり触れられたレイフは、つい過剰に反応して、怒っているような大声をあげてしまった。

「レ、レイフ…？」

トムが口に運びかけたチキンを思わず落として固まるのに、レイフはすぐにしまったという顔をした。

「あ、ごめん、トム…いきなり大声なんかあげちゃって、驚いたよな…確かにオレ今、ちょっとむしゃくしゃしてるけど…大した理由がある訳じゃないんだ。気にしないでくれよ、せっかくの卒業記念のパーティーなんだから」

全くだ。本当なら、もっと楽しい気分で、女の子と踊って、今日で別れることになる仲間達とはしゃぎまくるつもりでいたのに、どうして自分だけがこんないらいと神経を昂ぶらせているのだろう。そう思うと、レイフは無性に哀しくなってきた。

（あのまま家で一人きりでいるのに耐えられなくなって、皆の顔を見たら、少しは気が紛れるなとも思ったのに：やっぱり来るんじゃないかな。このままじゃ、オレのせいで、パーティーが白けちゃう。もう帰ろう：それが一番だ）

家に帰ろうと決心したレイフは、トムにもう一度謝ろうと口を開きかけた。その時、彼は、正面に坐っているトムが、何やら緊張した面持ちで、自分の肩越しに後ろの方に目をやっていることに気付いた。

「どうした、トム？」

訝しげに眉を寄せるレイフの背中に、どこかで聞いたことのある、あまり品のよくない野太い声がかけられた。

「おい、そこの赤毛！」

うろんそうにレイフが振り返ると、こちらに向かって近づいてくる、大柄な体格の若者達数人が目に入った。

「誰かと思ったら、やっぱりレイフ・オルソンか」

真ん中の一番大きい黒人の若者が、やけに馴れ馴れしく、齒をむき出してレイフに笑いかけてくる。

ゴリラに似ているなあと思ったところで、レイフは、この相手が誰かを思い出した。

「ニック：何で、ヒル高校のおまえがうちのパーティーに紛れ込んでんだよ？」

馬鹿正直なレイフは、ライバル・チームのエースLBとして、高校での四年間、試合の度にいつも腹立たしい思いをさせられてきた相手の出現に、思い切り嫌そうに顔をしかめた。

「うちも今日が卒業式で、この近くでパーティーをやってたぜ。そろそろ飽きてきたんで、仲間と一緒に抜け出してぶらぶらしてたら、アーバン校のパーティーをここでやってるって聞きつけてさ。せっかくだから、どんなものかと覗きに来たのさ」

「それって、すげー迷惑。大方自分とこのパーティーでは女の子達には見向きもされなかったものだから、代わりにうちでうさを晴らそうって魂胆だろうっ」

レイフが齒に衣着せぬ口調でずばりと決め付けるのに、ニックは一瞬顔を真っ赤にして、黙り込んだ。どうやら凶星だったらしい。

「レ、レイフ：」

レイフとニックの間の空気が陰悪なものになりかけるのを見て、焦ったトムが、なだめるよう、レイフの肩に手を置く。

「こんな場所で喧嘩なんかするなよ？」

それへ、レイフはちらりと目をやって、分かっているというように、鷹揚に頷いた。

「トム、オレ、やっぱ先に帰るわ…明日の朝、おまえが引き上げる前に寮に行つて、見送つてやるよ」

「ええっ、でも、おまえ…今夜はずっと朝まで仲間達と盛り上がるぞつて、遊ぶ気満々だったじゃん…おまえがいねえとつまらないつて、皆がっかりするぞ」

「うん…悪いけど、オレの代わりに謝つてくれ…ああ、中には今夜で最後つて奴もいるんだよな。でも、挨拶すると泣きそうなるから、このまま帰るわ」

ひそひそと囁きあっている2人を遮るように、ニックが大声で話に割つて入ってきた。

「もう帰るつてのか、レイフ、そんな水臭いこと言うなよ。せっかく夏休み明けからは、同じテキサス大学のチーム・メイトになれるつていうのにさ？」

断りもなしに隣の席にどしんと腰を下ろすニックの方を、レイフはぎよつとなつて振り返った。

「チーム・メイト？ 何の話だよ、オレと一緒にの大学つて…まさかおまえもテキサス大に決まったのか？」

にやにや笑いを貼り付けていたニックの顔が、たちまち強張った。

「信じられねえ…おい、トム、本当か？」

思わず、傍らの親友に確認すると、トムはちよつと呆れたように目を丸くしていた。

「おまえが知らなかったことの方が、俺には信じられないよ、レイフ：本当におまえって、世事にうといっというか、自分に関係のない人間にはとことん無関心なんだよなあ」

確かにニックは、常にランキングの上位に食い込む、州屈指のラインバッカーなのだから、スカウトの目に止まっても不自然ではないのかもしれないが、自分と同じカレッジ・チームに決まっていたなどと、レイフにとっては寝耳に水だ。

（最悪：うわあ、すごいテンション下がったぞ、今：予め知ってたら、シュミットさんには悪いけど、テキサス大は辞退したかも：）

ショックを受けたことを隠しもしない、頭を抱え、口の中で小さく悪態をつくレイフを、ニックは一瞬殺してやりたそうな目で睨みつけた。

「また、随分嫌われたものだなあ、レイフ：だが、これからは仲間になるんだ。これまでのことは水に流して、仲良くしようぜ」

ニックは、もしかしたらレイフが嫌がることを承知でやっているのかもしれないが、ますます馴れ馴れしさを増してきた。レイフの肩に太い腕をかけ、ぐつと顔を近づけて、耳障りな猫なで声で囁きかけてくる。

レイフはぞつとしてニックから身を引き、鼻をしわめながら、威嚇するように言い返した。

「おまえと馴れ合う気はねえよ、ニック」

「つれねえなあ……せつかく俺が下手に出て、親睦を深めようとしてやってるのにさ。ふん、名門大学に三顧の礼で迎えられた、今季一番の注目株だからって、お高くとまりやがって……去年までは、全然ぱっとしなかった、へたれ野郎だったくせに、何が全米ベスト選手だ。どうせ、たまたま調子がよかっただけで、大学に入れば、すぐにぼろが出るのがオチさ」

次第に本音を明らかにしだして、レイフに憎まれ口を叩くニックに、風向きが怪しいと見て取ったのだろう。彼の注意をレイフから逸らそうと、トムが落ち着いた態度で話しかける。

「おい、ニック、レイフに絡むなよ。おまえの言ったとおり、レイフとはチーム・メイトになるんなら、そんな喧嘩を売るような態度はやめろってば。レイフはさ、今夜はちよつと虫の居所が悪いみたいなんだ。少しくらい態度がカリカリしてたって、許してやってくれよ」

「おまえは黙ってろよ、チビ！」

ニックが目をむき、吼えた。トムは顔を引きつらせ、黙りこんだ。

「トムにまであたるなよ、ニック」

目の前で親友を脅しつけられたレイフは、剣呑な目になり、低く抑えた声でニックを恫喝した。

「トムの言ったことは本場で、オレは今、めったにないってくらい

機嫌が悪いんだ……だから、試合中におまえが散々やったような下手な挑発はするなよ、ニック……」

先程のニックの怒声を聞きつけたのか、レイフのフットボール仲間が心配そうに近づいてくる。

「おい、レイフ、大丈夫か」

「ヒル高校の奴らが、何でここに紛れ込んでるんだよ」

彼らの呼びかけに冷静を取り戻したレイフは、沸点に達しかけた怒りを抑えこみ、仲間達に向かって手でそっと押さえるような仕草をした。

「さて、オレは本当にもう帰るよ。このままここにいて、おまえの下らない話を聞かされても、楽しくないし」

レイフが立ち上がるのと一緒にトムも席を立った。彼が仲間達の輪の中にずっと入っていくのを見届けて、レイフはくると背を向け、ニックとその仲間が居座っているテーブルから立ち去ろうとした。

しばしそのままぽかんとレイフを見送りかけたニックだが、自分が散々馬鹿にされ無視されたことに、やはり腹の虫が収まらなかったのだろう。仲間達の制止の手を振り切って、テーブルから荒々しく立ち上がり、レイフの背中に向かって嘲りの声を投げつけた。

「逃げるのかよ、この臆病者！」

ニックの挑発に、レイフは一瞬足を止めたものの、そのまま振り

返りもせず、再び歩き出した。

「ふん、俺が恐いのかよ。試合中何度も俺にぶつつぶされてたものなあ、おまえ…その度に、悔し泣きしてクリスターになだめられてたよなあ。その甘ったれのブラコンが、頼りにしていた兄貴が脱落した途端、えらく人が変わっちゃまったじゃないか。不思議なものだよなあ、ずっとスランプだって言われて、二流止まりの選手だったおまえが、クリスターがいなくなった途端、一気にスターになっちまった。どうだい、兄貴のかわりにちやほやされて、いい気分だろう？」

クリスターの名前が出た途端、レイフは、背中に鞭の一撃でも受けたかのように硬直した。

「クリスターの代わりに周囲の注目を集めて、チャンスを抑え込んでさあ…これも皆、あいつが大怪我したおかげだよな、レイフ。もしもクリスターがフットボールをやめていなかったら、やっぱり、おまえは今でもうだつの上がらない二番どまりのへぼプレイヤーだったことだろうさ！」

レイフは体の脇に垂らした手をぐっと握り締め、何とか気持ちを静めようとしたが、今度はどうしても抑えきれなかった。

「おい…どういう意味なんだよ、それ…？」

ゆっくりとニックの方に体を向け、今にも吹き出しそうな破壊衝動と必死になって闘いながら、レイフは唸るように問い返した。

「だから、クリスターが大怪我をして一番得をしたのはおまえだってことさ。皆、陰で噂していたぜ…クリスターっていう邪魔者がい

なくなったから、おまえはスターになれたんだって…」

ニックには、自分が今、もろに地雷を踏んだことなど分からなかっただろう。レイフの顔が悲痛に引き歪むのを見て、満足そうにせせら笑いながら、他の2人の仲間と一緒にこの場から立ち去ろうとする。

「おい、ニック、おまえよくも…そんな酷いことを言いやがって…！」

堪えかねたかのように叫んだのはトムだった。自分達のエースを目の前でひどく侮辱されたことに気色ばんでいる、他のフットボール仲間と一緒にニックの前に立ちふさがり、今にも殴りかからんばかりの激しさで、相手を睨みつけた。

ニックは、相手と自分達とどちらが強いかと推し量るかのように、しばしトム達をじっと観察した。やがて、馬鹿にしたように鼻を鳴らして、ずんと前に進み出、一番前にいたトムの胸倉を掴んだ。

「邪魔だから、そこをどけよ、雑魚ども…俺らラインマンとおまえらじゃ、まともにぶつかるにゃ、パワーが違いすぎる。怪我するぜ！」

どんと突き飛ばされてよろめいたトムは、後ろにいた仲間にとっさに抱きとめられた。

「おい、誰か、うちのライン連中を呼んで来いっ」

めったに怒らないトムが顔を真っ赤にして、後ろの仲間に向かって叫んでいる。ラインを連れてくると言われて、さすがに、敵の只

中で多勢に無勢となれば形成不利と悟ったのか、これ以上の騒ぎになることを恐れたのか、ニックは他の仲間にも頷きかけて、足早に店から出て行こうとした。

その時――。

「逃がさねえ……！」

打たれたようにその場に立ち尽くしていたレイフの口から、深い憤りを含んだ、押し殺した声が発せられた。

「レ、レイフ！」

トムの動転した声を聞いたような気がしたが、レイフは構わず、電光石火の動きで、こちらを振り向こうと仕掛けるニックに殺到し、強烈な体当たりを食らわした。

「うわあっ」

不意打ちを喰らったニックの巨体は簡単に吹っ飛ばされ、近くにあったテーブルの上に倒れこんだ。そのテーブルの近くにいた連中は悲鳴をあげて、逃げ出す。

この有様に、ニックの仲間達はたちまち殺気立った。

「レイフ、てめえ、よくもニックを……！」

「もう遠慮なんかしねえぞ。おまえのことは、前から気に入らなかったんだ……」

かっとなった大柄なラインマンが2人がかりで飛び掛ってくるのを、レイフは素早く身を引いてかわした。次の瞬間、逆に2人を、ほとんど間髪をいれず、続けざまに投げ飛ばしていた。

「立てよ、ニック…」

床の上に這いつくばって喘いでいる他の2人には目もくれず、レイフは、ほうほうの態で、割れたグラス類が散乱するテーブルから起き上がろうとあがいている、ニックの前に立ちはだかった。

「この野郎、よくも…ぶっ殺してやるぞ…！」

ガラスで切ったのだろう、手や顔から出血したせいで、ニックは完全に理性を失っているように見えた。

頭を低くして身構え、自分に向かって突っ込んでくる機会を窺っているニックを、しかし、レイフの方は、ここに至って急に冷静さを取り戻した冷たい目で眺めていた。

この騒ぎに驚き怯えたアーバン校の生徒達は店の外に逃げ出すか、安全な距離を保った場所から恐々レイフ達の様子を窺っている。

「おい、誰か、店員を呼んで来い…！」

「一体、何事だよっ？」

「大変だ、ヒル高校とうちのフットボール・チームの連中が大喧嘩を始めたぞ」

「レイフ、レイフ、そのゴリラ野郎をぎゃふんを言わせてやれよっ」

「待てよ、卒業記念のパーティーで喧嘩沙汰なんて起こしたら、後が大変だぞ。皆、やじってないで、とめてやれっ」

様々な野次や怒号、静止の声が飛び交う中、レイフは奇妙なほど冷めた頭の中で、今の状況を分析していた。

（ここで大騒ぎを起こしたら、大変なことになる、か…もし、本当にこれが皆が青ざめるような事件になったら、騒ぎを引き起こした張本人であるオレはどう責任を取ることになるのかな…？）

怒れる野獣のようなニックから目を離し、ぼんやりと周囲を見渡してみると、生徒達の向こうに、カメラを構えた見知らぬ男の姿が見えた。

（ああ、そうだ…いっそのこと、取り返しのつかないような大騒ぎになっちまえばいい…）

その瞬間、レイフの頭の中に、ある考えが閃いた。普段のレイフならば決して思いつかないような、悪辣な計画―レイフを裏切り傷つけた者に対する、強烈な意趣返しだった。

「うわおおっ！」

雄叫びと共に、ニックがレイフに頭から突っ込んでくる。レイフはとっさにそれを受け止めたが、受け止めきれず、ダンスフロアの真ん中まで吹っ飛ばされた。

とっさに急所を庇って仰向きに倒れたレイフの上に、ニックの巨体が襲いかかる。

周囲にどよめきが走った。

「きゃああっ、レイフ！」

「け、警察を呼べ！」

腹の上に乘られたニックから、強烈なパンチを何度か受けた後、レイフは更にもう一発食らわそうとする相手の拳を掴み、捻りあげた。

「調子に乗るな、このデカブツ！」

体のばねを使って起き上がりざま頭突きを食らわせると、ニックは額を押さえてぎゃっと叫び、レイフの上から転がり落ちる。

今度は、レイフの猛攻が始まった。

よろよろと立ち上がるニックの胸倉を素早く掴み、柔道の大技をかけて、一回、二回と投げ飛ばした。

ニックはふらふらになりながらも、レイフに向かってパンチを繰り出し攻撃してくるが、レイフの体には一発もヒットせず、逆にレイフのかけた足払いに引っかかって、またしても転倒してしまう。

ニックはレイフよりも大柄で逞しく、確かに膂力は優れていそうだが、レイフのように子供の頃から格闘技を習っている訳でも、闘いのセンスがある訳でもなかった。

「ち、畜生…この野郎、おまえなんか、俺は認めちゃいない…クリ

スターと離れて、カレッジ・チームに入って1人でやったって、どうせ、おまえは長続きなんかするものか…」

レイフは思わず顔をしかめた。自分達の事情などニックが知る由もないのに、意外と勘がよいのか、鋭いところをついてくる

「ああ、確かに、そうかもな。でも、カレッジ・チームなんて、オレには、もうどうでもいいことなんだ」

ふっと苦い思いを込めて呟いた後、レイフは床で這いずっているニックを引きずり起こし、その顔を思い切り殴りつけた。

「安心しな、ニック…おまえのチーム・メイトになんて、オレはならねえよっ」

更にもう一発、レイフは手加減なしのパンチをニックの血まみれの顔に打ち込んだ。その間、カメラのフラッシュらしい光が何度か瞬くのに気付いたが、あえて無視した。

「レイフ、もう、やめろっ!」

さすがに見かねた生徒達から、制止と非難の声が上がる。

「いくらなんでも、やりすぎだぞ、レイフ」

レイフは最後に、これで仕上げとばかり、ニックの腹に重いパンチをくれてやった。

ニックはううと呻いて、腹を押さえて床に倒れ付し、げえげえと吐いている。

「ふん、汚ねえ奴」

レイフは散々叩きのめした相手を冷ややかに嘲笑い、拳をさすりながら、ゆっくりと身を引いた。

「警察だ！ この騒ぎを起こしたのはどいつだ？」

いつの間にか音楽も止められ、しんと静まり返った店の中に、厳しい誰何の声が響き渡った。

不穏にざわめきたつ生徒達の向こうから、数人の制服警官が用心しながら近づいてくるのが見えた。

「ああ、全く、ガキ同士の喧嘩にしちゃあ、ハデにやったものだなあ」

床に伸びている、真っ先にレイフが倒したニックの仲間2人を床から起こして同僚に任せ、残りの警官達がまっすぐに、ダンスフロア真ん中で仁王立ちしているレイフとその足元にうずくまっているニックのもとに近づいてくる。

「レ、レイフ…！」

トム達フットボール仲間が血相を変えて、レイフに駆け寄ろうとしたが、それも警官に阻止された。

「おまえか、こいつらにこんな怪我をさせたのは？」

「はい」

警官は大げさな溜息をついた。

「若いうちは、つかつとなつて喧嘩に走ることもままあるものだが、ちよつとやりすぎだぞ。見たところ、おまえさん、武道か何かやってるだろう？ たとえ挑発したのが向こうだったとしても、この状況を見れば、おまえさんが加害者だということになってしまう」

レイフはおとなしく黙り込んだまま、俯いた。

「まあ、詳しいことは署で聞こう…さあ、ついてくるんだ」

レイフは逆らう様子も見せず、警官の誘導に従つて、店から出るため歩き出した。事の成り行きを、固唾を吞んで見守っていた生徒達は、潮が引くように両脇に退いていく。

その時―。

「レイフ！」

レイフがずっと待ちわびていた、一体いつになれば現われるのだろうと待ちかねていた、その人の声が耳に届いた。

レイフを遠巻きにしている人垣をかき分けて現われたのは、そう、紛れもないクリスターだった。傍らには、呆然とした面持ちのアイザックもいる。

厳しく引き締まった顔をした警官がクリスターをとめるべく近づこうとしたが、制止されるよりも先に、クリスターはレイフのもとに素早く駆け寄り、その肩を掴んでいた。

「レイフ、レイフ：一体どうして…どうして、こんな馬鹿なことを…？」

いつもは雄弁なクリスターも、この騒動を引き起こした張本人がレイフであり、実際警察沙汰にまでなってしまったことの衝撃に、なかなか言葉が出てこないようだった。

「こら、その手を離しなさい…！ おっと…同じ顔、双子の兄弟か…」

警官にレイフから無理矢理引き離されそうになると、クリスターは奪われまいとするかのように弟を抱き寄せて、相手を鋭く睨みすえた。

そんなことをしても無駄なのに―いつも冷静なクリスターの取り乱しように乾いた目で眺めながら、レイフは皮肉っぽく笑った。

「いい加減、その手を離せよ、兄貴」

「レイフ？」

思いもかけぬレイフの冷たい声に、クリスターは戸惑ったようだ。一体どうしたのかと怪しむような、揺れる琥珀色の瞳で彼はレイフを見つめた。

「離せって言ってんだよ。オレがどうなろうが、おまえには関係ないだろ！」

ついに、ずっと抑えつけていた感情の堰が切れたように、レイフ

はクリスターを怒鳴りつけ、その手を荒々しく振り払った。

「レイフ…」

クリスターは、一体何が起こったのか分からないという顔をしていた。レイフに打たれた手を無意識に押さえたまま、言葉を失い、立ち尽くしている。

そんな様子の兄に、冷ややかな蔑みのこもった一瞥を最後に投げかけて、レイフは警官達に連れて行かれるがまま、店を出て行った。

レイフ、そして、ニック達騒ぎの原因となった他の連中も続いて連れて行かれた後、店の中は蜂の巣をつついたような騒ぎとなった。

「レイフ!!」

尚も必死に追いつくがろうとするかのようなクリスターの悲痛な叫びを耳にしても、一切心を閉ざしたレイフは、足を止めることも後ろを振り返ることもなかった。

第7章 F A K E (15)

アイザックと一緒に、予定よりも遅れてクリスターが到着した時、パーティー会場は物々しい空気に満たされていた。

音楽はやみ、顔を引きつらせた生徒達が不安そうにそこかしこに立ち尽くしている。

嫌な予感を覚えてその辺りにいた男子生徒を捕まえ、事情を聞きだしたクリスターは啞然となった。

『レイフがヒル高校のニック達と大喧嘩をしたんだよ。：あいつらが何でうちのパーティーに入り込んでいたかなんて、知るものか。ヒル高校とうちのフットボール・チームは犬猿の仲だしな：とにかく、レイフの奴、ニックとその仲間達を散々痛めつけたんだ。まあ、レイフはちょっとやりすぎたんだよ。ニック達は怪我したみたいだし、店の中も滅茶苦茶だ。それで、慌てた店員が警察を呼んだという訳だよ』

にわかには信じられない話だったが、ともかくレイフを見つけるのが先だと、クリスターはアイザックと共に辺りを探し始めた。

そうするうちにも、血だらけになったニックとその仲間達が警官に支えられるようにして店を出て行く姿が目に入ってきた。クリスターは事態の重さを悟ると共に、ますます焦りをつのらせていった。

(なぜだ、レイフ：一体どうしてこんな真似を：？)

どうやら、ダンスフロア周辺がこの騒ぎの中心らしい。

クリスターは焦燥感に駆られるあまりつい速くなる足取りで、そこに近づいていった。案の定、レイフの長身の姿が、不安そうに遠巻きにしている生徒達の向こうに確認できた。

（レイフ、ああ、レイフ：1人でニック達とやりあって、おまえは怪我などしていないのか：？）

ニックの反則すれすれのプレイにやられ、しばらく試合を欠場する憂き目を見たこともあるクリスターは、一瞬レイフの身の心配をしたが、まっすぐに立って警官の質問に落ち着いて答えている様子を見る限り、どうやら彼は無傷であるようだ。

クリスターはひとまず、ほっと胸を撫で下ろした。

「レイフ：！」

クリスターの叫びに気付いたのか、レイフはピクリと反応した。胡乱そうに顔を上げ、声の主を探すように、目を眇めて周囲を眺めやっている。

クリスターは必死になった。辺りにひしめく大勢の卒業生らをかき分けて、少しでも早くレイフのもとに駆けつけようとした。

その時だ。クリスターは、人垣の中にいた1人の怪しげな男がカメラを構え、レイフを狙ってシャッターを切るのを目撃した。

（！：あの男：今、レイフを隠し撮りした。さては、どこかの記者かカメラマンか：待て、寄りにもよって、こんな警察沙汰になるような騒ぎをマスコミなどに知られたら、どんなひどい記事にされる

か知れたものじゃないぞ)

束の間唾然となったクリスターの顔が、たちまち突き上げてきた憤怒に引き歪む。

「クリスター！」

傍らにいたアイザックが、鋭い声で警告するよう、クリスターを呼んだ。どうやら彼も、たった今逃げていったカメラマンの姿を見、クリスターと同じく、発生した事態の厄介さを理解したらしい。

クリスターは素早くアイザックを振り向いて、切迫した声で叫んだ。

「アイザック、頼む……！」

「分かった。任せておけ」

聞きなおしもせず、アイザックはくるりと体を反転させ、人垣の向こうに消えたカメラマンを追っていった。

1人残されたクリスターは、やっこの思いでダンスフロアに飛び出すと、阻止しようと近づいてきた警官を振り切って、おとなしく拘束されているレイフに駆け寄った。

「レイフ、レイフ……一体どうして……どうして、こんな馬鹿なことを……？」

クリスターはほとんど絶望的な気分になりながら、じっと俯いて黙り込んでいる弟の肩を抱き、震える声で囁く。

クリスターはどうかしてこの事態を収める方法を考え出そうとするのだが、レイフが振るった暴力がこうして衆人環視のもとで事実として残っている以上、今の段階では、彼の打てる手はほとんどなかった。

（何とかしなければ：レイフが警察に連行されるなんて、あり得ない：せつかく無事に卒業の日を迎えたのに：秋からは名門テキサス大に行くことが決まっているんだぞ。こんな馬鹿げた騒ぎのせいで、今更、レイフの進路に影響が出るなんてことになれば―）

脳裏を過ぎった最悪のシナリオにぞっと寒気を覚えながら、クリスターは何とか冷静を取り戻して、切り抜ける方法を探そうとした。しかし―。

「いい加減、その手を離せよ、兄貴」

いまだかつて聞いたこともない、深い憤りを孕んだレイフの声に、クリスターの思考は途中で断ち切られた。

「レイフ？」

クリスターは当惑しつつ、一体どうしたのかと問いかけるような目を弟に向けた。するとレイフは、いきなり感情を爆発させ、クリスターの手を荒々しく振りほどいた。

「離せって言うてんだよ。オレがどうなろうが、おまえには関係ないだろ！」

打たれた拍子にレイフの爪が引っかかったのか、ピリツと、小さ

な痛みがクリスターの手の甲に走る。

「レイフ…」

傷ついた手を押さえながら呆然と立ち尽くす、クリスターに向けられるレイフの目は、まるで仇敵を見るかのような憎しみの心火を燃やして、爛々と輝いていた。

まるで怒れる虎の目だ。射すくめられたクリスターは、身動きも声を発することもできなくなった。

そうしてレイフは、クリスターの目の前で、警官達によって連れ去られていった。

（レイフ…レイフ、レイフ…！）

興奮して、目の当たりにした事件について口々に言い合う生徒達の只中で、石と化したかのように立ち尽くしたまま、クリスターは心の中で悲痛な絶叫をあげ続けた。

（駄目だ、行くな、レイフ…ああ、誰か、弟を止めてくれっ！）

クリスターの金縛り状態を解いたのは、ようやく戻ってきたアイザックの呼びかけだった。

「おい、クリスター！」

アイザックに激しく肩を揺さぶられて、クリスターははっと大きく息を吸い込んだ。

「アイザック：ああ、アイザック：」

クリスターは混乱のあまり揺れる目を心配そうな友の顔に向けたものの、とっさに何と言えいいのか分からなくなったかのように、口ごもってしまう。

「しっかりしろよ、クリスター：レイフは警察に連行されちまったんだな。これだけの大騒ぎになったら、それも仕方ないが―」

「さっきの男はうまく取り押さえられたのか：？」

クリスターは肩に置かれたアイザックの手をぐっと掴み、すぎるような思いで問いかけた。

「ああ、トム達にも協力してもらって、何とかとっ捕まえて、カメラもフィルムも没収したよ」

アイザックは、レイフの姿を隠し撮りしたカメラをクリスターの目の前にかざすようにして、重々しく告げる。

「フリーの記者だって名乗ってやがった：案の定、レイフ目当てでパーティーにもぐりこんでやがったんだ。全く、学校もあれだけフットボール・チームの活躍を宣伝に利用したんだから、少しは気遣って、客のチェックくらいもっと厳しくしてくれたらよかったのに：」

アイザックは苦々しげに吐き捨てた後、ショック状態の抜けないクリスターを連れて、目立たぬ場所に移動しにかかった。

クリスターがいることに気付いた卒業生達は、彼の様子を窺いな

がら、ひそひそと声を潜めて囁きあっている。

しかし、彼らはクリスターには聞こえないよう気遣ったつもりかもしれないが、異常に聴覚の発達した彼の耳には、それら聞きたくない話もしっかり届いてしまうのだ。

（あーあ、レイフのおかげでせつかくのパーティーが台無しだよ）

（確かに、いくら何でも、あれはちょっとやり過ぎだったわ…）

（…そう言えば、レイフの奴、昔からかっとなると何をするか分からない所があったよなあ。去年のフットボール・チームでの大活躍のおかげですっかりヒーロー扱いだったから、忘れていたけれどさあ）

それまでレイフをさんざんもてはやしていたくせに、一瞬の内に掌を返したような生徒達の冷たい言葉を聞いて、クリスターは悔しさのあまり顔を赤らめ、歯を食い縛った。

アイザックは、生徒達の目から隠すようにクリスターを奥の空いていたテーブル席に押し込めて、その隣に素早く坐るや、話の続きを再開した。

「そう、幸い、俺達が見つけたカメラマンは押さえられた。だがな、クリスター…それで万事解決したわけじゃないんだ」

「どういうことだ？」

「俺達が捕まえた男を少しとちめてみた所、どうやら、今夜のパーティーに紛れ込んでいたのはそいつだけじゃなかったらしい。雑

誌に売りつけるのを目的にシャッター・チャンスを狙う奴が他にもいたって話なんだよ。だから、もしも、そいつが：レイフにとってまずいシーンをカメラに収めて、それをどこかに売り込みでもすれば――」

「何てことだ：」

クリスターは眩暈を覚えて、思わず、アイザックの腕にすがりついた。鉄の自制心でもって知られたクリスターのめったにない動揺ぶりに、アイザックはとっさに怯んだように口をつぐんだ。しかし、すぐに気持ちを切り替え、わざと厳しい口調で彼を叱咤した。

「おい、クリスター、おまえが動揺する気持ちは分かるが、今は他にしなければならぬことがあるはずだぞ。レイフを助けたいんだろう？　こうして事件があつたばかりの現場にいるってのに、おまえが今、しっかりしなくてどうする！」

「僕は一体どうすればいいんだろう、アイザック：？」

アイザックは瞠目した。こういう緊急時にどう対処すればいいのか、いつものクリスターなら、アイザックの意見など聞かなくても、1人で判断がつくはずなのだ。

「いいか：おまえはひとまず、親父さんに連絡を取って、一刻も早くここに来てもらえ。それから、この店の責任者に会って：レイフの家族として、こんな事件を引き起こしてしまったことを謝罪するんだ。訴訟問題にされると後が厄介だからな：ラースさんが来たら、後は任せて、ひとまず家に帰ろう」

クリスターは混乱してまとまらない頭をどうにかして働かそうと

するが、ともすれば警官に連行されていたレイフの姿が脳裏にちらついて、動揺を鎮めることができなかった。

（そうだ、父さんを通じて、一刻も早くシュミットさんにも連絡を取ってもらって、これからの対策を考えないと…万が一、問題になるような写真や記事がマスコミを通じて世間に流れた場合…レイフが怪我をさせたヒル高校の連中の出方によっては、更に話がこじれる可能性もある…そうだ、ニックもテキサス大に決まっていたんだ…まずいな。レイフの奴、寄りによって未来のチーム・メイトに怪我をさせるなんて…これは、よほどうまく大学側に釈明しないと、彼らの心証を悪くしてしまうぞ）

理路整然と考えようとしても、頭の中にうかぶのは最悪の展開ばかり。いつものような冷静沈着さを発揮して、事態の收拾にあたることもできないクリスターに代わって、結局はアイザックがほとんどしきって、ラースやパーティーの主催者である学校への連絡、果ては、トム達と一緒に店の責任者に話までしてくれた。

（どうしてなんだ、レイフ…一体何があった？ おまえがこんな騒ぎを引き起こしたなんて、僕にはまだ信じられないよ…）

ほとんどの生徒達は帰り、トムやアイザックを含む、少数の関係者達だけが店に残った。慌てて駆けつけたラースが、学校の主催者や店側の人間達と話し合っているのを待つ間、クリスターは頭を抱えてうずくまるように椅子に坐っていた。

傍らには、クリスターを守るように、アイザックがじっと押し黙って控えている。

（レイフ…昼間はあんなに明るく、機嫌がよさそうだったのに…こ

の店に現われた時から何だか様子が変わったとトムは言っていた。ひどくイライラして、ちょっとしたことで大声をあげたり、浮かない顔で黙り込んでいたり：レイフには自分の感情を隠すことはできない。ここに来るまでの間に、あいつの身に何かあったのだろうか：幸福な気分を一転させてしまうような、何か？ それにしたって、あの気の優しいレイフが、こんな滅茶苦茶な暴力沙汰を起こす理由など見当もつかない：それに：)

クリスターは警官に伴われて店から出て行く際、レイフが向けてきた、暗い怒りを孕んで燃えていた琥珀色の双眸を思い出していた。

（離せって言ってるんだよ。オレがどうなるうが、おまえには関係ないだろ！）

あれは、単純に気がたっていたとか、八つ当たりのようなものではなかった。レイフは相手がクリスターだとちゃんと認識していた。そう、彼は他でもない兄に対して、あれほどの憤りを覚えていたのだ。

（レイフが、あんな目で僕を見たことなんて、これまでにない：そりゃ、僕達だってたまには喧嘩くらいしたし、僕の秘密主義を怒ったレイフに詰め寄られたことだってある：それでも、レイフがあんなふうに僕を憎んだことはなかったんだ。まるで殺しても飽き足りない敵を見るような：それこそ、J・Bを怒りに任せて殺しかけた時のあいつを再び目の当たりにするような思いだった―）

その瞬間頭の中に閃いた考えに、クリスターは体の芯から力が抜けて崩れ落ちそうになった。

（まさか…）

クリスターの顔色がますます青ざめてくるのに気付いたアイザックが氣遣わしげな眼差しを向けてきたが、それを避けるように俯いて、彼は今思いついた可能性を考えてみた。

（まさか：いや、そんなはずはない。ジェームズが死んだ今、あの秘密がレイフに知られるなんてあり得ない）

クリスターとジェームズだけが知っている秘密。他の誰にも、特にレイフにだけは知られてはならない、墓場まで持っていく覚悟で、クリスターは己の胸にそれを封印した。

（もしも知ったら、レイフは僕を許さないだろう。純粹な彼にとって、それは耐え難い裏切りと映るはずだから：）

脳裏を過ぎった不吉な考えを、しかし、クリスターは強引に振り払った。

「しっかりしろ、クリスター」

クリスターの様子をじっと窺っていたアイザックが、その手を励ますように掴んで、ごく低い声で囁きかけてくる。

「うん：分かっているよ、アイザック：すまない、君にまでこんなに心配をかけて：でも、君が今夜ここにいてくれたことは、僕にとって不幸中の幸いだった。僕の代わりに本当に何から何までしてくれて：ありがとう」

クリスターが素直に礼を言うと、アイザックははにかむように小さく答えた。

「俺のことはいいんだよ、クリスター：ただ、何だか今のおまえは、ともすれば壊れちまいそうで：目が離せないよ。レイフが警察に連れて行かれたことが、そんなにショックだったのか：？　だが、目撃したトム達の話を聞いた限りでは、何もレイフ1人が悪いわけでもない。うまくいけば喧嘩両成敗ってことで、一晚留置所に入れられただけで明日には帰ってこられるかもしれないぜ：？　俺が言うのもなんだけど、別に起訴だの裁判だのになるような話とは思えない。な、前向きに考えようや」

クリスターは、自分が今回の出来事にいかに打ちのめされているか、アイザックのその言葉で自覚した。

（アイザックの冷静な目から見てそうだと言うことは、やはり、今の僕はよほど取り乱しているのだろな。けれど、たぶん、僕にとって何よりもショックだったのは：レイフが警察に連行されたことよりも、あいつがあんな目でこの僕を見たことなんだ）

だが、そんな個人的な感慨をアイザックに漏らすこともできず、クリスターは友の励ましに対しては当たり障りのない答えをするだけにとどめておいた。

「ああ、君の言うとおりだよ、アイザック：僕は、悲観的になりすぎているようだね」

アイザックに弱々しく微笑みかけ、取りとめのない短い会話を切れ切れに交わしながら、クリスターは、レイフの射るような厳しい眼差しを何度も思い出しては、密かに胸を震わせていた。

（レイフ、一体何がおまえをこんな後先を考えない暴力行為に駆り

立てた…？ ニックの奴がよほどおまえの逆鱗に触れるようなひどいことを言ったのか…だが、それでは、僕に対する、あの怒りの説明がつかない…誰も見ていないところで、誰かがレイフにろくでもない話を吹き込んで、僕に反発させるよう仕向けたのか―いいや、レイフが僕よりも他の人間の話を信じるはずがない。だが、もし…僕がレイフをずっと騙していたことをあいつが知れば―）

いくら否定し打ち消そうとしても、胸の奥から執拗に浮かび上がってくる、ほとんど強迫観念めいた疑念がクリスターを悩ませ続ける。

（違う…僕の嘘を知るのはジェームズだけだ。正確には、あの話をした時、傍にダミアンという少年もいたけれど、僕の提案の裏にある、本当の目的まで理解できたのはジェームズだけだった―もしも、あの後、ジェームズが僕の策略を他人に漏らしたとしても、事情をよく知らない人間は意味のない戯言として取り合わないだろう…いや、数回にわたって接見したウォルターにさえ、何も打ち明けた形跡はないんだ。それが今頃になってレイフの耳に入るなんてことは…）

冷静に、何か見落としている点はないか、逮捕拘束されたジェームズが操れる手管はなかったのか、思いつく限りの可能性を分析しようとしても、どうしても否定したいという私情がクリスターの思考の邪魔をする。

（どんな悪辣なやり方で作られた虚構であっても、それで万事がうまく解決できるなら、僕が必ず真実にしてみせる。そう心に誓って、一生誰にも言うまいと決めていた秘密だった。どんな言い訳をしたって、僕の行為はただの裏切りなのだということには目を瞑って…）

たった今直面している事態を引き起こしたものが何であるのか、クリスターにも本当は薄々感じるものはあった。

密かに恐れ続けてきた悪夢が今まさに現実になったのだということ、しかし、受け入れられないまま、クリスターはこみ上げてくる罪悪感と後悔に苛まれ続けるのだった。

（ああ、僕はこんなにも、レイフに知られることを恐れていたんだな…）

アイザックが言ったように、レイフは一晚留置所に置かれただけで、翌朝には釈放されて戻ってきた。

レイフに叩きのめされたニックの友人達2人は幸いかすり傷ですんだが、ニックは肋骨を折る重傷を負って入院するはめになったため、その治療費や場合によっては慰謝料を払うことになるかもしれない。

せっかく、夏休み明けからはカレッジ・フットボールの名門テキサス大に入学も決まっていたというのに、下手をすれば訴訟問題にも発展しかねない喧嘩沙汰など引き起こしたレイフに、当然のことながら、ラーズは大きな雷を落とした。しかし、騒ぎの張本人であるレイフの反応は意外なほど乏しく、反省するどころかまるで人事のような態度で、ラーズをますます激昂させるばかりだった。

「いいか、レイフ、今日は一日家から出るなよっ！俺が戻ってくるまで、自分が一体何をしでかしたのか、どれだけ大きな迷惑を周囲にかけたのか、よく考えて反省するんだ」

ラースはまだレイフを叱り足りなそうだったが、昨夜レイフが暴れた店のオーナーや学校関係者に会わなければならないので、午後から渋々出かけていった。

ヘレナはしばらくレイフの傍について、彼女特有の決して取り乱さない穏やかな態度で、辛抱強く、頑なに心を閉ざしてしまっているレイフに語りかけ、一体何が原因なのか、人に言えない理由があるのではないかと尋ねていた。しかし、包容力に溢れたヘレナにさえ、レイフが本心を明かすことはなく、暗い顔をして黙然と俯いているだけだった。

「母さん、シュミットさんは今度の事件について、何て言っていたんだい？」

レイフよりもよほど事件の今後への波及について心配しているクリスターは、弟の耳に入らないところで母親を捕まえ、そう確認せずにはいられなかった。

「そうね、ラースが昨夜のうちに電話でシュミットさんに事情を説明していたけれど…暴力事件など起こしてもらってはさすがに困ると言っていたわ…確かに、そうでしょうね」

「まさか、レイフの入学取り止めなんてことには―」

「現段階では、そこまで考えていないようよ。けれど、万が一にも

訴訟や裁判になるようなら：レイフは微妙な立場に立たされるでしょうね。ううん、それも話の持っていきようで、何とかなると思うわ。少なくとも刑事裁判になるような、悪質な事件ではないのだから：シュミットさんも、自分が特別目をかけて、やっとの思いで獲得した有望選手が突然こんな事件を引き起こしたことに、単純にショックで、腹を立てているのよ。落ち着いてから、改めてラースと話し合ってもらえばいいわ」

しかし、この世の誰よりも信頼する母の言葉すら、クリスターに取り付いた不安を完全に拭い去ることはできなかった。

家の電話は、心配したレイフの友達や噂を聞きつけた学校関係者達からの確認や問い合わせで、朝から鳴りっぱなしだ。

今日ボストンを発つことにしているトムが両親と共に訪ねてきた時は、レイフも部屋から出てきて、最後の最後で心配や迷惑をかけた親友に詫びたり、慌しい中で別れを惜しんだり、束の間本来のレイフらしい優しい表情を取り戻していたが、それも、トムが去っていくと再び暗く閉ざされてしまう。

レイフは、今朝早くに帰宅してから、まだ一度もクリスターと口をきかず、目を合わせようとしてもしていなかった。

（僕は、レイフと一度胸を開いて話し合わなければならない。勇気がいることだけれど、こうなってしまうては、避けるわけにはいかないな）

クリスターもこの頃には半ば覚悟を決めていた。レイフとの直接対決から何が飛び出してくるか知れないが、そうしないことには真実は明らかにならず、事態も一向に動かないだろう。

（たぶん、レイフも同じ気持ちでいるのだろう：父さんや母さんの問いかけには一切答えずにいるのも、誰よりも先に僕と2人だけで話をしたいから：その機会を、ひたすら沈黙を守りながら窺っているんだ）

嵐の前の静けさにも似た、ピリピリした空気の漂う家の中にいるのは、なかなか気詰まりなことだった。別にそれから逃げるためではないが、クリスターは一度、アイザックと会うために外出した。

アイザックは今朝早くボストンを離れ、コリンを訪ねると共にかねてから希望していたミシエルの見舞いもするはずだったが、このままクリスターを放っては行けないと予定をずらしてくれていた。

アイザックの気遣いにクリスターも気持ちが揺らいで、いつそ、この鋭敏で頼りになる友人に真実を打ち明けた上で、助言を求めた衝動に駆られた。しかし、そのアイザック自身も巻き込んだ、そのために彼の人生を大きく狂わせることにもなった事件の陰で、自分が意図的に仕組んだ大芝居を明らかにすることは、やはり躊躇われた。

（駄目だな：いくらアイザックが僕に對するわだかまりを解いてくれたからって、そこまで虫のいい願いは持てないよ。大体、アイザックに打ち明けて楽になろうとするくらいなら、初めから、あんな秘密の計略など立てはしなかった。やはり、これは僕の胸だけに収め、もしも、そのために不都合が起ころうなら、その後始末も僕が全て引き受けなければならぬ。それくらい覚悟していたはずじゃないか：僕を愛してくれている人達を欺き、裏切ったのだから、その報いは自分1人で受けようと…）

アイザックならば、たとえ真実を知ったとしても、クリスターが心底から窮状を訴えれば、全てを許した上で助けの手を差し伸べてくれたかもしれない。しかし結局、その気持ちだけを受け取ることにして、クリスターは、何となく後ろ髪を引かれている様子の彼を強引に送り出した。

（ごめんよ、アイザック：もしかしたら、次に会う機会には、僕は今とは違った考えに至っているかもしれない。死ぬまでに、君には本当のことを話そうという気持ちになって：それで今度こそ君の僕に対する友情が消えてしまうなら、それも仕方がないけれど、もしも許してもらえるなら、こんな僕でも、得難い一生の親友を持てたことになるんだろうな）

そんな訳で、肝心な部分には触れずじまいだったが、今回レイフが引き起こした事件についてアイザックと話しあいながら、少しは気持ちの整理がついたのだろう。再び家に戻った時には、クリスターはレイフと対峙するだけの平常心を取り戻すことができていた。

「レイフ：？」

クリスターが家の駐車場に車を入れた時、出かける前にはあったヘレナの車が消えていたので、母が外出したことには気付いていた。

（ああ、いよいよ僕は、一対一でレイフと対決することになるのか
…）

クリスターはドアの前で一度立ち止まって深呼吸をし、改めて弟と対峙するための勇気を奮い起こした上で、家の中に入っていった。

ドアの内側はしんと静まり返っていた。テレビの音声もしなければ

ば、レイフの部屋からよく漏れてくる、テンポの速いロック・ミュージックも聞こえない。

（まさか、どこかに出かけたんだろうか。いや―）

クリスターはこのまままっすぐ2階に上がろうかと思ったが、リビングに人の気配があるので中を覗きこむと、無然とした面持ちでソファにどっしりと座っているレイフが見つかった。

「ただいま、レイフ：母さんは？」

表面上は平静を装って、クリスターは弟に声をかけた。

するとレイフは、彼の帰りをずっと待ちうけていたかのようにソファから僅かに身を乗り出し、気持ちを静めようとするかのごとく肩で息をついた。その両手は、膝をぐっと握りしめている。

「1時間ほど前に父さんから電話があって、出かけて行ったよ」

「そうか…」

クリスターは、この日初めてレイフが自分に話しかける声を聞いた。温かみの欠片もない、余所余所しく固い声だったが、少なくとも全く無視されるよりはよほど救われた気分だった。

「なあ、クリスター、オレ、おまえに尋ねたいことがあるんだけれど：今、いいよな？」

微妙に視線を外したまま、ごく低い、感情を抑えた声でレイフが切り出すのに、クリスターは内心ひやりとしながらも、平静さを保

ったままゆっくりと頷き返した。

「ああ…いいよ、僕も丁度おまえと話したいと思ってたし…」

レイフの唇が皮肉っぽい笑いの形に歪んだ。

「そりゃあ、よかった…おまえがまた適当な言い訳をして逃げようとしたら、オレ、力づくでも白状させなきゃならないところだった」

「どういう意味だ、レイフ？」

クリスターが眉根を寄せて聞き返すうちにも、レイフはソファから立ち上がると、足元に置いていたカセット・デッキを持ち上げて、近づいてきた。

「2階に行くのか？」

「ああ、そうだな…いや—」

レイフはちょっと首を傾げて考え込むと、無愛想に答えた。

「地下室に行こう…あそこなら、オレ達が少しくらい大声で言い合ったって、外に漏れないだろうし…」

地下室まで降りていってレイフと怒鳴りあいなどと考えるとあまり気は進まなかったが、嫌とも言えず、代わりに、クリスターはさり気ない口調で、気にかかっていることを聞いてみた。

「そのカセット・デッキは、何に使うんだい…？」

するとレイフは、傷口にいきなり触れられた人のように顔を強張らせ、今にも火の噴出しそうなすごい目でクリスターの顔を睨みつけた。

「レ、レイフ…？」

レイフの敵意の矛先を真っ向から突きつけられて、クリスターはショックのあまり黙り込んだ。昨夜から時間もある程度経って、少しは鎮火したかと思いきや、収まるどころか、ますます得体の知れない怨嗟を深めているようにさえ思われる。

「これが何なのか、知りたいってのか？」

レイフは手にしたカセット・デッキをクリスターの眼前に乱暴に突き出すようにした。一瞬これで殴られるのではないかと焦ったクリスターは、慌てて一歩後ろに下がった。

「おとなしくついてくりゃ、すぐに聞かせてやるよ。たとえば、おまえが嫌だと言ったって、どうしたって聞いてもらうさ…さあ、これ以上余計なことは言わず、オレについてこいよ」

苛々と言い渡すレイフのこめかみには、薄っすらと痠筋が浮き出している。それ以上クリスターに追求する間も与えず、彼は荒々しい足取りでさっさとリビングを出ていった。

（レイ…フ…）

これからレイフがどう出るつもりか、自分に何を聞かせようというのか考えると、これまで感じたことのない恐れが足元から抑えようもなくこみ上げてくる。指先の震えを封じ込めようとするかのご

とく、クリスターは両手をぐっと握り締めた。

（おまえは僕に対し、今、とてつもなく怒っている…いや、ほとんど憎んでいるとさえ言っている。まさか、この僕が、我が身の一部のようにいつも感じていた…この世で最も大切な存在であるおまえから、こんな激しい憎悪を向けられる時が来るなんて、夢にも思わなかった）

そう慨嘆した後、クリスターは、そんな自分を突き放すような気持ちになって、苦笑った。

（いや、違う、僕は…いつかこんな日が来るような気がして、ずっと恐かったんだ…）

重く沈んだ足取りで、クリスターはレイフの後を追ひ、地下室に下りていった。

地下には、ゲスト用の二部屋の他に、収納スペースのたくさんあるユーティリティルーム、ラースが時々日曜大工に使う道具や作業台などが置かれた部屋がある。子供が生まれたらここを改装して自然光のたくさん入る遊び場を作ろうという話も出ていたが、それもヘレナの流産によって立ち消えとなってしまった。

地上階に比べるとやや薄暗く、外界の物音も遮断されているような感じがする。

レイフは、ラースの作業室でクリスターを待っていた。

何となく息詰まる思いで、クリスターは入り口近くで立ち尽くしてしまった。そんな兄に、レイフは暗い情念をたたえた目を向けた。

「入って来いよ、クリスター」

クリスターは重々しく頷き返した。レイフの中で渦巻いている、今にも爆発しそうな、たぎるような深い憤りを前にしては、黙って言いなりになるしかなかった。

レイフの怒りの根幹にあるものが何なのか、クリスターにはまだはっきりと分かってはいない。訳が分かるまでは、自分からうかつなことは言わない方がいいだろう。心乱されながらも、何とか冷静を保ち、どんな展開が待ち受けていようとも対処できるよう、用心深く身構えていた。

レイフは作業台の傍にある椅子にどっかと腰を下ろし、ドアの方に体を向けて、クリスターが中に入ってくるのをじっと見守っている。

「レイフ……」

クリスターが呼びかけるのを遮るよう、レイフは手を上げた。当惑して黙り込むクリスターに、レイフは低く押し殺した声で、牽制するかのようにはしゃいだ。

「まだ、何も言うなよ、クリスター……まず先に、このテープを聞くんだけ。その後で、オレの質問に今度こそ正直に答えてもらう」

レイフは作業台の上に置いたカセット・デッキにおもむろに手を伸ばし、クリスターに刺すような一瞥を向けた後、スイッチを入れた。怒りのせいか緊張のせいか、その指先は微かに震えていた。

（レイフ、おまえも苦しんでいる…僕に対して怒り、僕を憎まなければならぬことで、傷ついている…）

クリスターが思わず、打たれたような気分で、そんな感慨を覚えた時、それは何の前触れもなくいきなり始まった。

『…それでも、ジェームズ、僕の負けなんだよ』

己の声がザーツというノイズの中から聞こえてきたのに、クリスターは小さく息を吸い込んだ。

『頼むから、これ以上の無駄な争いをしかけないでくれ…僕達のゲームは終わったんだ』

レイフは一瞬、このテープを止めるかカセット・デッキごと壊したい衝動に駆られたようだ。逞しい肩を震わせ、たまりかねたように音声の流れ出るデッキから顔を背けた。

『そんな言葉は信じられないな、クリスター…君は僕を欺こうとしているだけじゃないのか？』

己の声に続いて聞こえてきた、ジェームズの台詞に、クリスターはこのテープに録音されている会話が、いつ、どこでなされたものであるのか、完全に理解した。

（そうか、これは…僕がブラック邸に乗り込んでジェームズと対峙した、あの日に録られたものなんだ。僕が、皆には秘密で、ジェームスに取り引きを持ちかけた…）

クリスターは雷に打たれたかのように身を震わせ、目を閉じた。

テープから流れ続ける音声に耳を傾けなくても、あの時の記憶は封印した扉を打ち破ってあふれ出し、クリスターの脳裏に鮮やかに蘇る。

（そうか、あの一部始終をジェームズは密かに録音していたのか。全く、してやられたな：最後の最後で僕の企みを一気に覆すため、僕には決して知られないよう安全な場所に保管し、自分が死んで、さすがに僕もそろそろ警戒を解き始めた頃になって―誰よりも知られたくないと僕が願った、レイフの手に渡るよう取り計らっていた）

あの怪物が己に一矢も報いることなく、こんなにも呆気なく死んでしまうなど信じられない。ジェームズの死の知らせを聞いてからずっとクリスターが感じていた、得体の知れない不吉な予感はどうやら的中してしまったようだ。

（この期に及んで、ここまで僕を追い詰めるなんて―大したものだと言うべきかな、ジェームズ、そして…）

クリスターはゆっくりと目を上げ、己の反応を少しも見逃すまいと爛々と燃える目で観察しているレイフを、そっと窺い見た。

（レイフ：もしも、このやり取りをそのまま素直におまえが受け取ってくれていたら、事態は、僕が恐れるような最悪なことにはならないかもしれないが―）

だが、レイフの全身から揺らめきあがるかのような瞋恚の炎をこうして肌で感じては、己の期待通り簡単に片付けられるような話ではないと判断するしかなかった。

（そうだったな、レイフ：子供の頃から、僕はおまえを最後まで完

壁に騙しとおすはできなかった。僕がうまく秘密にしていたつもりでも：おまえ自身すっかり僕を信じ込んで騙されていたはずでも：いつの間にか、おまえは僕の隠し事の核心に辿り着いて、全てを明るみにしてしまうんだ：）

敗北感を伴った複雑な感慨を噛み締めているクリスタルの口辺に、笑みというにはあまりにも苦い、仄かな歪みが生じるのを、レイフは怪訝そうに眉をしかめて見つめている。

（ああ、でも、僕はもう後戻りすることも、全てをなかったことにしてやり直すこともできない。この肩と引き換えにしても：結果的に、レイフや僕を愛してくれる他の大勢の人達を裏切ることになっても、どうしても僕は：レイフには夢を叶えて幸せになって欲しかった）

すっかり打ちのめされ、うつろな表情で言葉もなく立ち尽くすのみのクリスタルだったが、このままなす術もなく破局を迎えるわけにはいかないと一念で、悪夢の淵から浮上しようとしていた。

（そうだ、僕にとって本当に重要なのは、レイフ、おまえだけ：おまえの輝かしい将来を守るためなら、今までもそうだったように、これからも僕は何だってやってやる。ああ、僕は少しも後悔などしていない：陋劣な裏切り者だと、おまえに憎まれそしられたって構わない。僕は正しい：少なくとも一番肝心な点では、決して誤ってはいないのだから――）

クリスタルの体の脇にだらりと垂らされていた手が上がり、頭にかかる。熱く沸騰しているような頭蓋の内で、彼の脳は必死になって回転を続け、この場を切り抜けるための策を弾き出そうとしている。

だが、そうやって非情になろう、ここまで来たなら最後まで裏切り者で徹しようとしながらも、クリスタールは一瞬挫けそうになった。

（ああ、僕は一体なぜ―こんな大きな犠牲を払ってまで、本当は何をしたかったのだろう…？ いや、そんなことは考えるな。今は、どうやってレイフを落ち着かせるかだ。こうなったら、これ以上耳障りのいい話で誤魔化すことはできない。もう一度僕を信じさせることができるか確かめてみてもいいが、それが駄目なら…本当の話聞かせた上で、無理にでも納得させるしかない…）

レイフを騙すことなど所詮できないのなら、どんなにひどい真実でも、全て打ち明けて直面させるしかない。その結果、レイフがクリスタールを見限り、その心が離れていったとしても、それが最終的にレイフのためになるのであれば、構わない。

（今でも、僕はレイフをうまく誘導できる…レイフの怒りの理由が分かったなら、僕には、こいつが何をどう考えるか読むことも容易い。大丈夫だ、こいつがこれ以上道を踏み違えないよう、今からでも修正できる）

意を決したクリスタールは、目を瞑ってゆっくりと深呼吸した後、再び睜目した。

クリスタールの気持ちの変化を敏感に察したかのように、レイフが椅子の上でぶるりと武者震いをし、警戒を込めて身構える。

いつの間にか、テープは終わっていた。全ての物音が絶え、緊迫感の漂う静寂の中、双子兄弟は互いに相手の出方を窺いながら、対峙していた。

「レイフ」

クリスターは、緊張のあまり張り詰めたレイフの顔を、食い入るように鋭く睨みすえた。乾いた唇が動き、静かなだけに異様なほど奇妙な迫力のある声で、じっと待ち受ける弟に正面から問いかけた。

「それで―この僕に、一体何を尋ねようというんだい？」

第7章 F A K E (16)

一瞬前まで怯えた目をしていたクリスターの顔つきは、今や別人のようにがらりと変わっていた。いや、これこそがクリスター、レイフを意のままに操り、コントロールしようとしてきた兄の正体なのだ。

「それで―この僕に、一体何を尋ねようというんだい？ 全く、こんなろくでもないテープ、どこから手に入れたかと怪しむよ。わざわざもったいぶって聞かせるほどのものじゃないけれどね。ああ、僕も確かに驚いたことは認めるよ。でも、だから、どうしたというんだい？」

傲然と顎をそびやかし、うんざりしたように言いながらカセットデッキをこちらに押しやる兄に、レイフは啞然となった。

「どうしただって…？ 他に言うことはないのかよ、クリスター…オレがこのテープをどこから入手したかなんてことは問題じゃない。ともかく、これは間違いなくおまえの声だろう？ おまえがあの日、ジェームズのくそ野郎とかわした会話じゃねえのかよ！」

クリスターがまさかこんなふうに出るとは思わず、意表を突かれて動転したレイフは、声を詰まらせ、喘ぐように言い返した。

「ああ、そうだよ。これは、僕があの日、ジェームズとブラック邸で会った時にかわした会話だ。間違いないよ、僕も覚えている…ジェームズは僕には秘密でこれを録音し、万一の場合に備えて、おそらく…弁護士にでも託したんだろう。そして、自分の死後、おまえの手に渡るよう仕組んでいた…大方、そんなところさ。あたってい

るだろう？」

「う…」

「やっぱりね…つまり、僕もおまえも、まんまと奴の罠にかかったというわけだ。レイフ、冷静になれよ。こんなテープごときで取り乱しては、ジェームズの思う壺だぞ」

「ジェームズの罠がどうかなんてことは、どうだっていい！」

レイフはイライラと頭を振って、クリスターの話を遮った。

「確かに、たぶんこれは罠なんだろう…オレだって、そう考えて、初めは聞くまいとした。けれど、結局聞かずにはいられなかった。どうしてだか分かるか、クリスター？」

クリスターは答えず、椅子を後ろに蹴倒して荒々しく立ち上がるレイフを、鋭い目で見据えている。

「オレだって、あの事件のあった日以来、胸の奥ですっと引っかかって取れない棘みたいなのを感じてたんだ…あの日ブラック邸であったことは一体何だったのか、どうして、あんな結末を迎えることになったのか…これ以上誰も巻き込むまいとたった1人でジェームズとの決着をつけに行って、あんな怪我を負ったおまえを疑うことのできる人間は1人もいなかった。オレだって、どうしてあんな無茶をしたんだと腹立たしく思いながらも、おまえを責めようなんて気にはとてもなれなかった…それでもさ、やっぱり何かが変だとは感じてたんだ。この会話を聞いて、やっと腑に落ちたような気がしたよ」

話すうちに胸が苦しくなってきたレイフは、途中で言葉を切り、気持ちの昂ぶりを抑えようと肩で大きく息をついた。

「ジェームズは、あの日、オレに殴られながら、こんなことを言いやがった…クリスターを信じるな、そいつは裏切り者だって…」

「レイフ、おまえは僕よりもジェームズの言葉を信じるのかい？」

「違う！」

レイフは吼えた。こみ上げてくる悔しさに歯噛みし、己の赤い頭を爪を立てるようにして両手でかきむしった。

「違う…このオレが、おまえよりジェームズの方を信じるわけないだろ…実際、くだらねえたわ言だって聞き流して、ほとんど忘れかけてた。でもさ、今になって…あいつのあの言葉だけは本当だったんだと分かっちゃった。死ぬほど悔しいけれど、こんなテープをわざわざ寄こして、おまえへの疑いをかきたてようとするあいつを否定しきれだけの証拠を、オレは持たなかった。だってさ、クリスター…おまえはオレを愛してくれているけれど、それはオレに決して嘘をつかないってことじゃない。誰に言われなかったって、このオレが一番よく知っている…自分が絶対正しいと思っているおまえは、オレのためだと思えば、いくらだってオレを騙し、裏切ることができる…オレがどんなに傷つこうが構いやしない…認めたくないけど、オレの兄貴はそういう奴なんだ」

レイフは一瞬泣き笑いのような顔になった。じわりと潤みそうになった目を荒っぽくこすると、改めて、泰然と佇むクリスターを睨みつけた。

「ジェームズがどんな目的でこいつをオレに送ったのだとしても、オレには、ここに残されている内容を黙って聞き流すことなんてできやしない……おまえの言うように、これは罠なのだとしても——だって、これは、おまえがずっとオレに隠し続けてきた真実なんだ。おまえは、オレを含めた、おまえを信頼し愛している人間全員を裏切った。全く、こんな話、こうして実際にテープに録って聞かせられでもしなきゃ、誰も信じやしないさ。クリスターはジェームズと取り引きして——わざと、自分の肩を壊させたなんてさ！」

レイフが傷ついた子供のように激しく喚くと、微動だにせずにレイフにあてられている、クリスターの厳しい瞳の奥に微かに揺らめくものが垣間見えた。だが、それも一瞬のこと。

「レイフ」

この男の心は、石か氷のように冷たく動かしがたいのではないか。そう感じさせるほど、動じた素振りはそのとも見せず、クリスターは極めて平静な口調で、弟に話しかけてきた。

「おまえは誤解している」

「誤解だって?! この期に及んで、言い訳なんかするなよ、潔くねえぜ」

「確かに、このテープに残されている会話は本物だ。しかし、おまえは、僕が本気でこんな馬鹿げた取り引きをジェームズ相手にもちかけたなんて思うのかい？」

「何を言いやがる……クリスター、これ以上、オレを欺くのはよしてくれ」

「レイフ、これはジェームズの注意を逸らすための策の1つに過ぎなかったんだ。あの日、单身ジェームズの手の内に飛び込んだ僕は、何とかあいつを油断させ、隙を作らせたかった。あいつに捕らえられているダニエルとアイザックを見つけ出し、救出する時間を稼ぎたかったんだ。これは、そのための方便に過ぎなかったんだよ」

「本気で言っていたんじゃないかって…？ このテープに録音されているおまえの声には、本気しか感じられないぜ」

「ああ、我ながら、迫真の演技だと思うよ。おかげで、おまえまでが信じ込み、こうして誤解を解くのに苦勞している。…よく考えろよ、レイフ、相手はあのジェームズだったんぞ。僕だって、必死だったのさ。あいつを混乱させ、本気で考える価値はあると一時でも迷わせるくらいリアルな作り話が必要だった」

レイフはクリスターの饒舌を黙らせたかったが、何と言い返したらいいいのか分からず、口をぱくぱくさせるだけだった。

「その結果、僕は自由に動けるチャンスを手に入れ、ダニエルとアイザックを見つけ出して、脱出させることに成功した。残念ながら、全てが計算どおりというわけにはいかず、僕は再びジェームズの手に落ちて、僕自身が煽ったような怪我を結局は負わされてしまった。それでも、ダニエル達を助け出すという目的は果たせたんだから、決して無駄な犠牲を払ったわけではないと思っているよ…いや、そう思わなければ、やってられないというのか正直な気持ちかな」

微かな苦笑いを浮かべ、肩をすくめてみせるクリスターは、動揺や後ろめたさの片鱗も見せず、レイフを戸惑わせるくらい落ち着き払っていた。

（何だよ、まるで全ては勘違いだ、オレの方こそ悪いんだと言ってるみたいじゃないか…）

レイフは悔しさのあまり、歯噛みした。しかし、こうまで相手が冷静では怒りの持っていきようがなく、もしかしたら本当に自分の間違いではないのかとの迷いにも駆られて、煮えたぎっていた怒りの火もふっと揺らいだ。

（ひょっとして、クリスターは本当のことを言っているのだろうか…全ては、ジェームズを欺くための大芝居で、このテープはオレを惑わせてクリスターと争わせてやろうというジェームズの嫌がらせだとしたら―）

人は自分の信じたいものを信じてしまう。レイフも結局はクリスターを信じたいのだ。ぐらつきかけた反抗心を、しかし、レイフは意地でも保ち続けようとした。

（いいや、騙されるな！ こいつは嘘の上に嘘を塗り重ねて、どこまでもオレを欺く気だ。ここでまんまと丸め込まれたら、オレはこの先ずっと、自分の意思でなく、こいつの手によって作られた人生を生きていくことになる…）

レイフの心に生じた葛藤を見透かしてか、クリスターは弟に向かって手を差し伸べ、懇願するように言い募った。

「レイフ、僕はおまえを裏切ってなどいない、信じてくれ」

レイフは途方に暮れたように、クリスターの誠実そのもののような顔を見返した。

「兄さん…」

今度ばかりはクリスターを許すまいと決めた、レイフの意思とは関係なく、喉から漏れた声は掠れ、見開いた目からは涙がこぼれた。

「分からない…おまえは本当のことを言っているのか…？ 信じてくれだなんて言って、またオレを騙す気じゃないのか、クリスター…？」

「違うよ。僕が嘘をついているのかどうか、おまえなら分かるはずだろ…？」

レイフが言葉に詰まって黙り込むと、クリスターは手を差し出したまま、ゆっくりと近づいてきた。

「この期に及んで、そんな言い方するなんて…おまえはずるい奴だ、クリスター。オレなら分かるはずだって…？ オレがおまえの考えることを本当に理解できたためしなんて、これまで一度もなかったのに―」

思わず、ぽつりともらした恨み言―次の瞬間、レイフは、自らの言葉にはっとなった。

（ああ、そうだ…）

レイフは、こちらの様子を窺いながらじりじりと迫ってくるクリスターの目を見た。異様なほど強い力のこもった琥珀色の双眸は、レイフのはりつめた顔を中心に映しこんでいる。まるで、その中に魂ごと吸い込まれ、取り込まれてしまいそうな気がして、レイフは

軽い眩暈を覚えた。

（クリスター：おまえが、そのいかにも真実らしい顔の裏で、本当は何を考えているのかなんて、オレがいくら読み取ろうとしても分からないだろう。それでもオレは、おまえに關しては、いつだって理屈抜きにピンと感じるものがあるんだ：だから―）

慄いたように目を閉じる、レイフの頬にクリスターの指が触れた。その滑らかな指先が帯びた微かな震えが、レイフの体に、ごく弱い電流のような痺れとなって伝わる。

自信にあふれたクリスターの態度とは裏腹の怯えが、そこに隠れていた。

（ああ、クリスター、おまえは何をそんなに怖がっている…？）

転瞬、レイフはかっと目を見開き、クリスターの手を荒々しく振り払った。

「違う。おまえはまだ本音で話しちゃいない。オレに触るな、この嘘つきめ！」

レイフが確信のこもった激しい言葉を叩きつけると、クリスターは頬を強張らせ、今にも弟をかき抱こうとしていた手を引っ込めた。

「レイフ…」

呼びかけてみたものの、続く言葉が見つからないかのように口ごもる、クリスターの顔は青ざめ、瞳は動揺のあまり揺れ動いている。

「僕が嘘をついているなんて、どうして…？」

「証拠なんて何もないさ…このテープに録られた会話が実際どういう意味のものだったか、証明できるのは、ジエームズが死んじまつた今、おまえの言葉以外にないのと同じように…でもさ、オレには分かるんだ。クリスター、おまえが嘘をついて、オレを騙そうとしているってことが…生憎だったな、このオレを最後まで騙しきることなんざ、おまえがどんな策士だってできるものか。何て言ったら、オレは、おまえの片割れなんだからな！」

瞬間、クリスターはレイフに殴られでもしたかのように微かによろめき、後ろに一步下がった。

「さあ、いい加減観念して、本当のことを言えよ、クリスター…どうしてオレを裏切ったのか、おまえの本心が知りたい…！」

クリスターは万策尽きたというかのごとく、両手をだらりと体の脇に垂らして立ち尽くし、どこか悲哀を感じさせる空虚な眼差しをレイフに注いでいた。

「クリスター、黙ってないで、何か言えよ！」

クリスターはレイフからふっと視線を逸らし、何もない天井辺りの空間をしばし見上げた。それから再び、レイフを正面から見た。

「ああ、そうだよ、レイフ…おまえの言うとおり、僕はずっとおまえを騙していた」

「ク、クリスター」

ほとんど感情を感じさせない声。仮面のような無表情で語りだす兄の前に、レイフはとっさに怯んだ。

「確かに僕は、あの日ジェームズと取り引きをした…いや、むしろ僕の本当の目的を果たすために彼を利用したんだ」

その口調に先程までのような雄弁はなく、低くなった声は聞き取りにくかったが、レイフは真剣に彼の言葉に耳を傾け、内容を理解しようとした。

「ジェームズを利用した…？ それって、つまり…あいつを挑発して、わざと怪我を負わされるように仕組んだってことなのかよ？」

「あんな見え透いた挑発にジェームズが乗るものか。あいつは、あんな提案をした、僕の真意など初めから見抜いていたよ。全てを承知の上で、それでも、僕に利用されることを選んだのさ…あいつにとっても、僕に一生消えない傷を負わせられるというのは魅力的な話だったんだろうね」

「よくも…あの事件続きの只中で、そんな企みをする余裕があったもんだな…ジェームズのおかげでコリン達は大怪我を負い、アイザックは行方不明、ついにはダニエルまで浚われて、おまえ自身相当追い込まれていたはずなのに、同時に、周りの目を欺くような策略をたてていやがったのか」

「別に初めから、あんな芝居を打つことを考えていたわけじゃないよ。それに、僕とジェームズの闘いに巻き込んでしまった、アイザック達にはとてもすまなく思っている…あの時も今も、それは変わらない。だが、一方で僕は、ジェームズとの闘いそのものより、大切な友人達の想いよりも、もっと優先されるものがあったんだ。そ

のことに気付いた時、僕はジェームズとの闘いの勝敗に拘ることもやめて、奴を道具として徹底的に利用することにした」

「優先されるものって…何だよ…？」

見えない手で喉を締め付けられるかのような息苦しさを覚え、レイフはかすれた声で問い返した。どんな答えが返ってくるか分かるような気がして、恐かったが、それでも聞かずにはいられなかった。

「分かっているだろう、レイフ…おまえのことだよ」

レイフの煩悶を見透かすよう、クリスターは両目を僅かに細めて、苦笑した。

「僕は、おまえをあらゆるものから守りたかった。おまえの将来に影を落とす邪魔ものは全て取り除いてやると決めていた。ジェームズ・ブラックはかつてそうだったように、おまえにとって危険極まりない存在だったから、まず奴をどうにかしなければならなかった。それから—もう1人、存在しては、おまえのためにならないだろう人間がいた。それが、この僕自身だったんだよ」

レイフは、束の間ぽかんとなって兄を見つめたかと思うと、たちまち気色ばんだ。

「な、何を言ってやがる…クリスター、そんな—そんな馬鹿な話、あるものか…ジェームズはともかく、何だっておまえがオレにとって邪魔者になるんだよ。全く、訳分かんねえよ…！」

「僕がいるから、おまえはずっとフットボール・チームの二番に甘んじていたんだよ、レイフ。僕は、いつも不思議だった。僕よりも

才能に恵まれているはずのおまえが、いつも肝心な時に実力を出し切れないのは、どうしてだろうって……その理由がやっと分かったんだ。そう、おまえは僕が傍にいる限り、その存在を意識して、無意識に自分に抑制をかけてしまう……逆に、僕がいなくなれば、おまえは本来の力を発揮して、伸び伸びとフィールドの上でプレイできるに違いないと――」

「馬鹿野郎！」

クリスターの口から語られるのは、レイフがあの手紙を聞いた時に推測した通りの答えだった。本当は、違う答えが返ってくることを期待していたのか。思い違いであって欲しいとの一縷の望みも打ち砕かれて、これ以上聞くに耐えなくなったレイフは、思わず、彼の話を途中で遮った。

「自分がいなくなったら、オレが本気を出してプレイするだろうか、フットボールから身を引こうとしたってのか……？ おまえほど賢い奴が、なんて馬鹿なこと考えたんだよ！ オレに直接あたって確かめた訳でもないくせに、そんな勝手な思い込みで、オレとおまえの将来に関わる決定をするなんて――そんなこと、オレが認めるわけねえだろ！」

「ああ、おまえはきっと認めないだろうと思ったから、どうしても受け入れるしかない状況を作り出すことにしたのさ」

クリスターの言葉に、レイフは再び息を飲んだ。

「僕が事故か何かに巻き込まれて怪我をして、不運にもフットボールを断念するしかない身になれば、おまえも諦めてくれるだろうと思った。だが、そんな都合のいい事件は、待っているだけではやっ

てこないからね。僕の望むような不可抗力の事態を設定するのに、タイミングよく持ち上がっていた、ジェームズとの闘いを利用したんだよ」

レイフはさすがにクリスターの話についていけなくなって、しばし、絶句した。頭では、ああ、やはりと思うところはあったものの、生来まっすぐに嘘や裏切りを嫌う彼の性情が拒否してしまう。

「う：嘘だ、信じられねえ：オレをその気にさせるためだけに、そこまでするなんて：おまえはどうかしてたんだ、クリスター」

何を思い出したのか、クリスターは遠い眼差しをして、ふっと微笑んだ。

「ジェームズにも呆れられたよ：確かに、僕はおかしいのかもしれないね。自分の体をわざと仇敵に壊させるなんて、正気の沙汰じゃない。全てが終わった後、一時だけ、もしかしたら僕は恐ろしく誤った選択をしてしまったのかもしれないと愕然となったけれど：もう後戻りはできない以上、自分が取った行動に後悔などすまいと決めたんだ。高い代償を払ったのかもしれないが、自分の思う通りの結果に収まったのだからね：そうとも、僕は満足しているよ」

「クリスター：」

反論しようと口を開きかけたものの、その気が萎えて、レイフは黙り込んだ。急に、この賢しくも愚かな兄が、どうしようもなく哀れに思えてきた。

「満足しているなんて、嘘だよ、クリスター：自分が一体何を失ったのか思い知らされて、おまえだって心の底では激しく後悔してい

るんだ」

レイフは打ちのめされたような気分になって、傍にあった机に手をつけて力の抜けた体を支えながら、低く呻いた。

「ああ、オレはどうすればいい…？ オレのせいで、おまえに取り返しのつかない間違いを犯させちゃった…どうしたら、おまえを救ってやれる…？」

レイフの詠嘆を耳にした途端、暗く打ち沈んでいたクリスターの顔つきが、険しいものになった。

「僕は、間違ってたのではない…！」

クリスターは怒れる虎のように瞳を爛々と燃やしながら、ぎよっとなって怯むレイフに歩み寄り、その顔を睨みつけながら、強い口調で言い切った。

「僕の考えが正しかったことは、おまえ自身が証明しているじゃないか、レイフ。今の自分を見ろよ、一年前のおまえとは、まるで別人のようだ…長い間眠っていた才能を開花させ、フットボール・プレイヤーとしての将来を嘱望されている。惜しくも最後のシーズンでの優勝は逃したけれど、おまえの活躍は高校で終わるものじゃない、きっとカレッジでも、その先プロの世界に入ってもやっていくはずだ。誰もおまえのここまでの変身は予想していなかった…フランク・コーチでさえ疑わしげだったけれど、僕はずっと、きっかけさえあれば、おまえは変わると信じていた。こうして現実になった今、僕はやはり間違っていなかったと断言できるよ」

「クリスター、おまえ…！」

束の間クリスターに圧倒されていたレイフの頬に、たちまち血の色が上ってくる。再び怒りの火をかき立てられたレイフは、寄りかかっていた机から身を起こしざま、クリスターを激しく睨み返した。

「おまえのやったことの、一体どこが正しいって言うんだよ！　よくも、そんな勝手なことが言えるな！　オレを裏切り騙しておいて――いいや、オレだけじゃない、父さんや母さん、おまえを愛している人達が、今のおまえの言いぐさを聞いたら、何て思うか――」

「僕の取った手段を他人がどう思うかなど、大した問題じゃない。レイフ、要は結果さえよければいいんだ」

クリスターの冷たい台詞に、レイフはかっとなった。

「おまえは…今言ったのと同じことを――おまえを守ろうと危険も顧みず一生懸命働いて、その結果、あんな酷い目にあわされたダニエルにも、平気な顔で言えるのかよっ！」

一瞬で、クリスターは顔色を失った。唇を震わせ、レイフの非難の眼差しを避けるよう俯いた。

「クリスター！」

クリスターは頭痛でも覚えたかのように、額に手をやった。

「ジェームズの奴に同じように問い詰められた時にも、僕は言い返せなくなった…ダニエルを本当に愛していたのなら、どうして僕のために危険を冒そうとする彼をとめなかったのか―やっぱり、あいつの言うとおりであったのかな、僕はあの子を利用しただけなのか…」

クリスターが自嘲を帯びた述懐をするのを、レイフは、憎しみと哀れみのこもった何ともいえない目で見守った。

「オレは、おまえのことなら何だって分かるつもりでいた。本音でものを言うことはめったにないひねくれた奴だけど、根っこの部分ではオレとしっかりつながってるから、本当の気持ちはちゃんと伝わってくる。おまえがオレを何度騙しても裏切っても、オレを愛していることには変わらないから、許せた。でもさ、今度ばかりは、おまえはやりすぎたんだ、クリスター：オレは、おまえを許せない。いくらオレのためだと言われても、納得できるものか。オレには、到底、今のおまえを分かってやることはできねえよ…」

クリスターは乾いた、痛切な悲哀をひそめた声で呟いた。

「この僕にだって：時々、自分が分からなくなる時があるよ」

レイフは途方に暮れたようにクリスターを見つめ、クリスターは同じく途方暮れたようにレイフを見つめ返した。

「どうして…」

急に、言いようのない深い悲しみがこみ上げ来て、ともすれば嗚咽となって漏れそうになるのを、レイフはやっこの思いで飲み下した。

「どうして待っててくれなかったんだ？」

ややあって、レイフは寂しそうに、そう問いかけた、

「えっ…?」

「おまえはオレを变身させるために、そこまでのことをやってのけた…でもさ、オレだって、あの頃…このままの自分じゃ駄目だって、必死に変わろうとしていたんだ。おまえと一緒に歩いていくために、おまえに引っ張ってもらっただけじゃなくって、おまえの隣に並んで立って、おまえのことも守れるくらいの男になろうと努力してた―どうして、オレを信じて、もう少しだけ待ってくれなかったんだよ?」

クリスターは今初めて見るような目で、己とそっくり同じ顔に深い悲哀を湛えて立ち尽くしている弟をまじまじと凝視した。

「そうだったのか…おまえの気持ちに気付いてやれなくて、ごめんよ。でも―そうだね、残念ながら、おまえの成長をゆっくり待つだけの余裕は、僕にはなかったんだろうね」

クリスターは悄然と呟いて、力なく目を伏せた。

「何もかも、今更言っても仕方のない繰り言だ…」

唇をきつく噛み締め、何かを払いのけようとするかのごとく頭を振ると、クリスターは再び目を見開いた。

「おまえが僕を許せないというなら、それでもいいよ、レイフ。僕はどのみちフットボール選手としては終わった人間だ。どうしたって、おまえと一緒に歩いていくことはできない」

自らの手で、いまだにじくじくと疼いている傷口を再び開いて見せるかのようなクリスターの痛切な言葉は、レイフの胸をも鋭く切

り裂いた。

「だが、おまえには輝かしい未来がある。そうだ、子供の頃から追いつけた夢が、こうして現実になりつつある今、何を迷うことがある：おまえを裏切った僕のことなど、構わず切り捨てればいい。僕の呪縛から離れて自由になれ。そうして、今こそ、その手でしっかりと掴むんだ、おまえの夢を：！」

「クリスター：！！」

深手を負った人のように苦しげに胸を押さえ、レイフはかすれた声で兄に呼びかけた。

「このオレに、せっかく自由になったんだから、おまえに拘るのはもうやめて、夢を叶えろだって：？　子供の頃からおまえと2人で追いかけてきた大切な夢を独りよがりな思い込みで滅茶苦茶にしておいて―よくもそんな見当違いなことが言えるな！」

ここまでの兄との熾烈なやり取りを経て、疲れ果て、空しさに打ちひしがれていたレイフが再び勢いを得て、激しく言い返した。

「おまえがお膳立てしてくれたオレの未来のどこにも、輝かしいものなんか、ありやしない：フットボールでいつか天辺に立ってみたいって、その栄光の瞬間を確かに夢見たこともあるオレだけれど：オレが、フットボールで心からの感動を覚えることなんか、この先二度とあるものか。オレが他の何にも増して夢中になって打ち込んだフットボールは、おまえと一緒に優勝経験をした2年前の決勝戦を最後に、終わっちゃったんだ：！」

「レイフ：おまえは、一体何を言っているんだ：？」

クリスターは当惑し、幾分不安そうに、小さな声で尋ねた。

「分からねえのかよ、クリスター、フットボールはもうオレにとって夢でもなんでもない：昔追ってた夢の残骸だ、もう、どれだけ自分が夢中になっていたのかも思い出せない：」

クリスターは驚き、一体レイフは何を口走っているのかと怪しむような顔つきになって、弟を見返した。

「案外物分りが悪いんだな、クリスター、オレは、おまえのおかげでフットボールに対する情熱をすっかりなくしちゃったんだよ！」

クリスターの顔に衝撃が走るのを、レイフは奇妙な、残酷な満足と喜びを覚えながら見守った。

「嘘だ」

「嘘じゃない」

クリスターは困惑しながら、叫んだ。

「レイフ、おまえは僕を憎むあまり、そんな心にもないことを言い立てているんだ。：そうだろう？」

レイフは本当におかしくなってきた、喉をのけぞらせて笑い出した。同時に、その両目からは苦い涙が流れ出した。

「ばっかじゃねえの、おまえ：オレが、嘘や冗談でこんなことを口にするかよ：根っからの嘘つきのおまえとは違うんだからさ」

「レイフ…」

「オレは、おまえが抜けた後、必死になってチームを率いて、最後まで全力を出し尽くした。おまえの責任を引き受けるのはオレしかないという自負があったからだ…結果は準優勝どまりだったけれど、オレはやれるだけのことはやったと思うよ。でも、かつてのようにゲームそのものを楽しんだわけじゃない。消えてかけた胸の中の火を必死になってかき起こして、自分を励まし続けたんだ。そして、もうおまえの代わりを務める責任も、この先の目標もなくなった以上、オレにとって、これ以上フットボールを続ける意味はないんだ」

「レイフ、おまえ、まさか本気で言っているのか？」

「ああ、本気だとも。おまえの企みを知る前は、どうにかがんばってみようと決意していたんだけどさ…フットボールを断念したおまえにもう少し夢を見させてやりたかった。でも、これ以上自分に嘘はつけねえ。オレに期待をかけてくれる人達には悪いけれど、オレはカレッジ・リーグには進まないし、プロにもならない」

むしろ清々したというように胸を張って言い切る弟に、クリスタは愕然となって、幾分震えを帯びた声で囁いた。

「テキサス大に行くのもやめると言うのか？ 馬鹿な、やっこの思いでここまで来たんじゃないか！ せっかく手にしたチャンスをみすみす逃すなんて—そうか、レイフ…おまえ、まさか…？」

レイフはにやりと笑った。

「ああ、ここまで言えば、おまえも分かるよな。オレがニツクの野郎を病院送りにまでしてやったのは、わざとだよ：オレが、下手すれば警察沙汰になるような問題を起こして、入学取りやめになれば、これ以上自分の本当の気持ちに嘘ついて、別にやりたくもないフットボールを続けなくてすむからさ！」

「レイフ！」

クリスターは絶望的な声で叫んだ。

「本当は、オレが怪我をして：それこそおまえみたいに、選手生命を絶たれるほどの大怪我をしてしまってもよかったんだけど、ニツクの奴、てんで弱くてオレの相手になんかなりやしない。やっぱオレって、腕っ節にかけては最強なんだよなあ：おまけに、本気でオレの腕や脚をへし折るくらいの度胸すらないんだ、あいっ：ったく、だらしねえ。おまえはよかったよな、フレイみたいな思い切りのいい奴が手近にいて、思うように利用できたんだからさ！」

狂ったように、勝ち誇ったように、涙を流しながら笑い続けるレイフを、クリスターは呆然と見ている。

「レイフ、なんてことを：おまえは、なんてことをしたんだ：！」

「おまえにオレを責める資格なんてないぜ、クリスター」

レイフはぎらりと物騒な光をたたえた目をクリスターに向けた。

「おまえが今更何をしたって、手遅れさ：テキサス大はきつとオレの入学を取り消すだろう。それに、オレはもう決めたんだ。フットボールは金輪際やらないって：おまえが無理強いしたって従うもの

か。そうさ、オレは今やっと、自分の意思で将来の選択をしたんだ
」！

第7章 F A K E (17) (前書き)

この話には性描写が含まれています。ご注意ください。

第7章 F A K E (17)

「レイフ…」

クリスターは呻くように呟いた。

「おまえは馬鹿だ…僕に対する腹いせに、後先も考えず、自分の将来を滅茶苦茶にしてしまうなんて…この時期に暴力沙汰のせいで入学取り消しになって、それでこの先どうするつもりなんだ…何も考えていないだろう？ 本当に、何て馬鹿なことを…」

途方に暮れたクリスターの嘆きを、レイフは冷ややかに嘲笑った。

「そんなこと、もうおまえが心配する必要なんてないんだぜ、クリスター。オレは、ようやくと目が覚めて、おまえの呪縛から解放されたんだ。この自由を、オレはオレの好きなように使う」

クリスターの瞳に、怒りの火が閃いた。

「そんなこと、僕が許さないぞ、レイフ」

クリスターは、不祥事を引き起こした弟を正しい道に立ち返らせることのできるのは自分だけなのだという使命感にでも駆られているようだった。

「おまえは間違っている。いくら僕のしたことが許せないからといって…一時の感情に任せて、大変な過ちを犯してしまった。後になって頭が冷えたら、おまえは必ず後悔するんだ。いいか、今からでも遅すぎることはない…おまえが今回のことを心から後悔している

と大学側に納得させれば、きっと最悪の事態は避けられる…いや、この僕が絶対そうしてみせる…！」

厳しい顔に決意を漲らせ、激しく詰め寄ってくる兄に、レイフも少し怯んで、じりじりと後ずさりした。

「おまえこそ、何馬鹿なことやってんだよ…オレは二度とおまえに従うものか。もう決めたんだ！」

苦々しく吐き捨てて、レイフはぷいっとクリスターから顔を背けた。

「レイフ！」

クリスターの怒号を聞いたと思った、次の瞬間、強烈な衝撃を頬に受けて、レイフは床に投げ出された。

「なっ…何を…？」

じんじん痛む頬を手で押さえ、レイフは、たった今自分を殴り倒したクリスターが、拳を震わせながら、すぐ前に仁王立ちしているのを、呆然と見上げた。

「言葉を尽くしても分からないなら、力づくでも、おまえを修正してやる」

「そっ、そんな…オレが言うことを聞かないから暴力に訴えるなんて、おまえのやり方じゃねえだろっ！」

「うるさい」

クリスターの手が伸びてくるのをとっさに振り払い、レイフは慌てて床から飛び起きた。

「クリスター、やめ…！」

レイフが制止の声をあげる間もなく、素早い動きで間合いに入ってきたクリスターのパンチが続けざまに彼を襲った。

「う…わあ…」

レイフは必死の思いでそれらをかわしながら、クリスターの腕を押さえてこんな一方的な殴打をやめさせようとしたものの、あまりに素早い動きに対応できない。次第に彼は、じりじりと壁際に追い詰められていった。

（やべえ、こいつ、本気でキレやがった）

頬を掠めていった衝撃の鋭さに皮膚がちりちりする。少しでも気を抜くと際どい所に飛んでくる拳に、レイフは、どっと冷や汗が吹き出すのを覚えた。

思えば、こんなふうにはレイフが、ボクシングでならしたクリスターの攻撃を真っ向から受けるのは初めての体験だ。

ついに、レイフの背中が壁に突き当たった。

「頼むから、やめてくれ！」

追い詰められたレイフの叫びにも答えず、クリスターは体ごと飛

び込むようにして渾身の一撃を繰り出してきた。

「うわぁっ！」

レイフは頭を抱え、転がるようにして、その場から逃れた。

鈍い破壊音が聞こえ、ぎよっとなって顔を上げたレイフが見ると、クリスターの拳は壁を突き破って、穴を開けていた。丁度、レイフの頭があった辺りだ。

「クリスター、お、おまえ、弟のオレを殺す気か！」

顔から音をたてて血の気が引いていくような気分で、抗議の声をあげるレイフを、クリスターは振り返った。

怒り心頭に発しているにもかかわらず、恐ろしく冷たく光る瞳に自分を捕らえて、じりじりと近づいてくる兄に、レイフは慄然となった。

（普段何かと自分を抑え付けている奴が我慢の限界MAX超えとこうなっちゃうのかよ…て、しゃれにならねえ…！）

胸の前に拳を構え、リズムを取るように体を軽く揺らしていたクリスターが、転瞬、レイフの胸元に稲妻のようなストレート・パンチを繰り出してきた。

今度もレイフはぎりぎりでのその攻撃をかわした。そうして、クリスターの右腕をがっしり捕まえると、体を捻るようにして思い切り相手を振り回し、壁に叩きつけた。

「くっ…」

衝撃で一瞬目が眩んだらしいクリスターに起き上がる間も与えず、レイフは襲い掛かった。胸倉を掴んで、思い切り彼の体を壁に押さえつけ、拳を振り上げた。

クリスターははっと息を飲み、今まさに拳を打ちおろそうとしている弟の顔をまっすぐに見上げた。

「この僕に手を上げようというのかい、レイフ？」

「うっ」

とっさにレイフが怯んだように拳を震わせ固まる瞬間を、クリスターは見逃さなかった。レイフの腕を左手で押しやって攻撃を封じ、素早く右のパンチを打ち込んだ。

ずしんと響くような、重い一撃を鳩尾に喰らったレイフは、たまたらず、膝から床に崩れ落ちた。

（ひ、ひでえ奴）

こみ上げてくる強烈な吐き気に身を二つに折って喘ぎながら、レイフは涙目になって、己の上に聳え立つクリスターを仰ぎ見る。

「何が使えないものにならない、だよ、クリスター…おまえ、その肩、もうほとんど治ってんじゃないのか…？」

クリスターの唇に、酷薄な笑みが浮かぶ。

「立て」

低い声で命じられ、レイフは悔しさに齒噛みしながらよろよろと起き上がり、片方の手でまだ痛む腹を押さえ、身構えた。

「どうしてかな、レイフ、おまえは僕との一対一の争いでは、いつも劣勢になってしまうよね」

「クリスター…」

「僕を打ち負かしてまで何かを成し遂げようという気概が、おまえには、そもそもないんだ。僕は違う…目的を果たすための強い信念がある。そのためにあらゆる努力も犠牲も惜しまない、持続する意思の力がある」

クリスターは、確かに強い信念に支えている人間特有の揺るぎない眼差しを、レイフの苦しげな顔にあてながら、何としても彼の心を変えようと執拗にかき口説いた。

「僕には、おまえが進むべき正しい道筋が何なのか分かるんだよ…確かに、僕は取り返しのつかない過ちを犯したのかもしれない。しかし、この一点についてだけは、僕は正しいと断言できる。おまえの憤りはもつともだけれど、それはただの感情論にすぎない。レイフ、僕を許さなくてもいい。ただ今だけは、僕の指示に従ってくれ」

レイフはクリスターの迫力に飲まれまいと必死で闘争心を燃やし、反抗的に叫んだ。

「嫌だ！ おまえの指示になんか、オレは絶対従うものか！」

クリスターの顔が、たちまち突き上げてきた憤怒のあまり、引き歪む。

「レイフ…！」

殺気立ち、激情を迸らせながら自分に向かって突っ込んでくるクリスターを、レイフは瞬きもせず見ていた。

（やばい、やられる…！）

危険を知らせるシグナルが、彼の身の内を戦慄となって駆け抜け、奥深くに隠れていた強暴な何かを目覚めさせた。

次の瞬間、レイフの体は、ほとんど反射的に動いていた。

まっすぐに打ち込まれてくるクリスターのパンチを避けざま、レイフはその腕を捕らえ、体勢を深く沈めながら、鋭くなぎ払うような足払いをかけた。

「せえええいっ！」

裂帛の気合が、レイフの口から迸しる。

レイフ必殺の背負い投げは見事に決まった。クリスターの大柄な体は宙を舞い、傍にあったラースの作業用の簡易テーブルを巻き添えにして、勢いよく床に叩きつけられた。

木っ端微塵になったテーブルの残骸。埃がもうもうとあがる中、ぐったりと伸びているクリスターを、レイフはしばし、技をかけた姿勢のまま、爛々と輝く獰猛な目で見据えていた。しかし、数瞬後

には、夢から覚めたように、いつものレイフの顔に戻った。

「兄さん…！」

レイフは真っ青になった。他ならぬ自分がクリスターを叩きのめした事実慌てふためきつつ、仰向きに倒れたまま動かない兄に駆け寄り、ひしとすがりついた。

「だ、大丈夫か？　しっかりしろ、クリスター！」

固く目を閉ざしているクリスターの肩を掴んで揺さぶりながら、レイフは、先程見せた猛々しさの片鱗もなく取り乱し、子供のよう泣き喚いた。

「目を開けてくれよ、クリスター！　し、死ぬな…オレを置いて死なないでくれえっ！」

ふいに、クリスターの目がぱたりと開いた。

「クリスター！」

クリスターはうるさそうに顔をしかめ、レイフが伸ばす手を邪険に振り払った。

「だ、大丈夫か、どこか痛む…？　体は動かせるか？」

クリスターはまだ少し意識が朦朧しているようだったが、やはり体を動かすと痛いのか、起き上がろうとして小さく唸った。

レイフはおろおろしながら、クリスターが完全に正気を取り戻す

のをじっと待ち受けた。

「レイフ…?」

クリスターは、己の脇にぺたんと膝をついて、心配そうに腕をさすっている弟をじっと見上げた。

「痛むなら、無理して動くなよ、クリスター…怪我はしてないみたいだけれど、変なところ打ってないとも限らないし…ごめんよ、オレ、つい本気になって、クリスターを思い切り投げちまった…」

しょんぼりと項垂れる弟を静かに見守りながら、クリスターは己の取り留めのない考えを追っているようだった。

「おまえが本気になれば、この僕でも敵わないか…分かっていたつもりだが、実際に思い知らされるとなかなかショックなものだな」

溜息混じりのひっそりとした呟き。

レイフは問いかけるように、クリスターの顔を上から覗き込んだ。

「レイフ」

「な、何？」

クリスターは、己の手をしっかりと掴んで放そうとしない弟を苦笑の混じった目で見上げた。その顔には、もはや怒りの色はなく、何としてもレイフを従わせようという強い意思を窺わせるものは全て消えうせていた。

「心底惜しいと思うよ…それほどの身体能力、プロのスポーツ選手にもならず、一体何に活かす気だ…？」

「うん…」

レイフは一瞬きょとんと瞬きした後、困ったように頬を引っかいた。

「それはまだ分からないけれど…でも、きっと、どこかに何かあるはずだから…これから探してみようと思うよ」

クリスターは、まだ少し放心したようなところのない目を、ふっとレイフの上から逸らし、何もない天井にさ迷わせた。

そんな兄を、レイフは心配そうに見守った。

「一体、何のための苦勞だったんだろう」

ふいに、疲れたように、クリスターは呟いた。

「おまえのためによかれと思ってやったことなのに、全てが裏目に出てしまった。僕はこの手で、自分だけでなく、おまえの夢まで壊してしまっただね…」

何の力も勢いも持たず、その乾いた唇から吐き出される言葉は、そのまま空中でばらばらになって分解していくようだった。

「おまえのことを一時の感情で動く馬鹿だと僕は否定したけれど…本当の愚か者は、他でもない、この僕だった。ごめんよ、レイフ…僕のせいで、おまえにまで余計な苦勞をさせてしまって…本当にご

めん…」

クリスターのうつろな顔を、一筋の涙が力なく滑り落ちていく。

「クリスター…」

クリスターはレイフの視線に耐えられなくなったかのごとく、両手で顔を覆ってしまった。

「…う…っ…」

そのまま声を殺して静かに泣き始めるクリスターを、レイフは胸を締め付けられるような思いでじっと見守っていた。

（ああ、本当に…どうして、こんなことになっちまったんだろう。結局オレもクリスターも、一番大切なものをなくしちまった。オレ達2人はフットボールを通じて分かりあい、この先ずっと一緒に歩いていくこともできたはずなのに、どこでどう道を踏み外して―）

クリスターの悲哀と絶望のこもった切れ切れの歔歔を聞きながら、そんな感慨をひっそりと噛み締めていたレイフは、その時、ふっとあることに思いあたった。

「クリスター…」

レイフは何かしらはっとなりながら、小さく肩を揺らせて泣いているクリスターの上に身を乗り出すようにして、震える声で問いかけた。

「どうしてなんだ…？」

レイフの声の中に今までとは違う響きを感じ取ったのか、クリスターは顔を覆っていた手を下ろし、訝しげに弟を見つめ返した。

「どうして…いくらオレのためだからって、おまえはここまでやらずに、なくてはならなかった…？　クリスター、おまえをそこまで追い詰めた、本当の理由は何だ？」

「レイフ…何を言ってる…？」

クリスターは初めレイフの問いの意味が分からず当惑していたが、すぐに思い当たったようだ。慄くように目を見開き、さっと顔を背けてしまう。

「ここまで来て、もう隠すな…オレもおまえも、どうして、こんな犠牲を払わなきゃならなかったんだ！　どうして、こんなに傷ついて、苦しい思いをしなきゃならなかったんだ！　オレ達はただ、一緒に夢を叶えて幸せになりたかっただけなのに…何で、それが駄目だったんだよ？！　言えよ、クリスター…言ってくれっ！」

頑なに心を閉ざそうとするクリスターを激しく問い詰めながら、レイフはその顔に手を添えて、強引に自分の方を向かせた。

「頼むよ、兄さん…」

レイフの目から溢れた涙が、クリスターの混乱した顔の上にぽたりと落ちかかった。それは、クリスターの流した涙と混じりあい、彼の頬を伝い流れ落ちていく。

突然、張り詰めていた糸が切れたように、クリスターはぽつりと

漏らした。

「僕達は普通の兄弟じゃない……だからだよ」

弱々しいクリスタルの囁きに、レイフははっとなって耳を欹てた。

「おまえは、いつも僕を、兄さん、兄さんって屈託なく呼ぶけれど……そんな振りをしたって、いつまでも誤魔化せるものじゃない。少なくとも、僕には自信がなかった……おまえのことをただの弟として愛そう、もう二度と触れるまいと決意したのに、そのことに次第に耐えられなくなってくるのが分かる。おまえには誰よりも幸せになってもらいたいから、僕の手から離れてちゃんと自立した大人の男になってほしい。いずれは愛する人を見つけて家庭を持ち、可愛い子供達に囲まれた豊かな人生を送って欲しい……そう願う反面、僕は自分の目の前で、おまえが僕以外の誰かのものになることには、きつと我慢ならない。どんなに努力しても……おまえの幸せをこの手で壊しても構わないほどに、僕は……おまえを欲しいという気持ちを消し去れないんだ」

クリスタルは途中で言葉を切ると、こみ上げてくる何かを飲み下すように喉を上下させた。

「こんな僕には、とてもおまえのように無邪気に、一緒に夢を叶えて幸せになろうなんて言えない……無理なんだ。だから、諦めるしかなかった……僕達の大切な夢も、おまえのことも……わざと怪我をして、自分の選手生命は終わったと自覚した時、これでやっと諦められると泣きながら思ったよ。テキサスは遠い……おまえさえ僕の手の届かない所に行ってしまったえば、うっかり触れてしまう心配もなくなるだろう……?」

言い終えた後、クリスターは、喉の奥で低く、何とも自嘲的に笑った。

「クリスター、おまえ…クリスター…」

レイフはうろたえ咳込みながら、クリスターに呼びかけるが、クリスターは今度こそ力尽きてしまったかのようにぐったりと目を閉じ、静かに涙を流すだけだった。その姿は、レイフの胸を痛ませた。

「オレ達が普通の兄弟じゃないってことくらい…オレだって、分かってたよ…」

ふいに、胸の奥からこみ上げてきた熱く、苦しく、切ない感情に、レイフは息が詰まった。

「オレだってずっと…クリスターが欲しかったんだから…！」

レイフは深く息を吸い込むと、思い切って、クリスターの上に身を屈め、微かに震えている、その唇にキスをした。

勢い込みすぎたせいで歯に歯がぶつかってしまい、少し痛かったが、そんなことは構わず、レイフは無我夢中でクリスターの唇を貪った。

クリスターは突然の出来事にとっさに対応できず、レイフの下で体を硬直させたまま、彼の荒っぽいキスの嵐を一方的に受け止めている。

「クリスター…好きだよ…」

キスの合間に熱っぽく囁きながら、レイフは慣れない手つきでこそごとクリスターの体をまさぐり、引っ張り上げたシャツの裾から手を突っ込んで、その素肌に直接触れた。

「レイフ：おまえは、一体何をしている…？」

あまり色気のない、困惑しきった固い声が返ってくるのに、レイフは些か不満を覚えながら、はつきりと言い返した。

「何って、今からおまえとやるんだよ…決まってるだろうっ」

クリスターの動揺が、震えとなって、直接触れた肌から伝わってくる。興奮を誘われたレイフがむしゃぶりつこうとするのを、クリスターは必死になって押し返した。

「馬鹿、やめろ…！ おまえ、自分が何をしようとしているのか、分かっているのか…？ 駄目だ、僕達はもう昔のような何も知らない子供じゃないんだぞ。分かかって、同じ間違いを二度犯したら、それはもう確信犯だ…言い訳も、後戻りもできなくなる…」

「オレを欲しいって、さっき自分で認めたくせに、この期に及んでくだらねえことをぐちゃぐちゃ言うなよ…ああ、もちろんオレは言い訳なんかしやしないさ…！」

レイフはクリスターの手を押さえ込み、荒々しく言い返した。

「おまえと寝たら、それでどうなるかなんて、分からないけど…でも、とにかくやってみるんだよっ！ オレ達がずっと我慢して、避け続けてきた、このことが…そんなにものすごく罪なことなのか…？ こんなに好きなのに、傷つけあうばかりで、お互いから遠ざか

らないといけないほどにか？ オレにはどうしても分からないから、
こうすることで確かめるんだよっ！」

まだ何か言いかけるクリスターの口をレイフは噛み付くようなキ
スで再び塞ぐ。クリスターは歯を食い縛って抵抗するが、レイフは
果敢に挑み続け、ついにはクリスターの熱い口腔に舌を滑り込ませ
ることに成功した、

「あ…うつ…」

レイフの腕の中でクリスターの体が震え、仰け反る。

「んっ…う…ぐっ…」

レイフは舌先で、クリスターの濡れた口内を思う存分に侵し、探
った。奥に引っ込もうとする舌を執拗に追い、絡ませ、夢中になっ
て味わった。

「う…うう…」

一呼吸つくために唇を解放すると、クリスターはむせたように咳
込み、苦しげに喘いだ。そのまま半ば放心状態り、床にぐったりと
横たわっている。

レイフはクリスターと体を密着させながら、息を弾ませ、熱っぱ
く囁いた。

「クリスター…なあ、いいだろ…？ もっと色んなこと、させてく
れよ…」

クリスターは答えなかった。かろうじて残っている理性でレイフの行為をとめようとしながらも、その体の芯には既に熱が灯っているようだ。こみあげてくる震えを堪えるように喉もとを手でぎゅっと掴みしめる仕草が意外にも扇情的で、レイフは思わず喉をぐくりと鳴らした。

「兄貴って…何かすげ、色っぽいのな…」

いつまでもキスだけでは埒が明かないと、レイフはクリスターのジーンズに手をかけるが、焦るあまりどこかに引っかけたのか、ジッパーがうまく下ろせない。

「ああ、もうっ…こんな時に…！」

イライラしながらジーンズ相手に格闘しているレイフを、クリスターはしばし微妙に定まらない眼差しで見ていたが、次第に、その眉間には深い皺が刻まれていった。

「うわっ」

突然、クリスターの脚に体をなぎ払われて、レイフは横様に倒れ伏した。

「何、するんだよっ」

突然の反撃に、レイフが慌てて起き上がろうとすると、今度は顔を張られ、床の上に仰向きに引き倒された。その上に、無言のまま、クリスターがのしかかってくる。

「ク、クリスター…？」

動転するレイフの唇を、クリスターの唇が強引に塞ぐ。殴られた時に少し切ったのか、再び彼と交わすキスは、錆びた鉄のような血の味がした。

（こいつ、いきなり攻めに出やがって…ああ、でも―）

レイフはクリスターのキスに応えるように、積極的に口を開いた。

「ふ…っ…ん…んっ…」

2人は濡れた唇をすり合わせ、何度も角度を変えて深く重ねて、飢えたように貪りあった。

荒く速くなった吐息を吐き出しながら、レイフは、あっという間にクリスターに主導権を奪われたことを悟ったが、別に無理に取り返そうとまではしなかった。

（ほら、見ろ。駄目だの、諦めるだのは口先だけで、やっぱりオレに負けず劣らず、滅茶苦茶やりたがってるじゃん）

くっつと、喉の奥から笑いがこみ上げてきそうになったところに、肺の中の空気まで持っていかれそうなほど熱烈に吸い上げられて、レイフは一瞬酸欠を起こしそうになった。

「ふ…うっ…」

ようやくクリスターは唇を離し、荒い呼吸下で、自分と同じように胸を激しく上下させているレイフを見下ろした。そうして、レイフのものがジーンズのぐわぐわした布地を押し上げているのを確認

するや、ためらわずに手を伸ばし、素早くジッパーを引き下ろした。

「ひゃっ…」

レイフはさすがに恥ずかしくなって、顔を赤らめた。

「レイフ…レイ…フ…」

欲情に濡れたクリスターの声が、火がついたように熱くなったレイフの耳に響く。

レイフはびくつと体を痙攣させ、声にならない声をあげて、大きく喉を仰け反らせた。

「僕に触れられるのが、そんなにいいのかい…？」

先程危うくレイフに屈しかけたことに多少の恨みでもあるのか、弄るように囁いて、クリスターはレイフの耳たぶに軽く噛み付いた。

「あっ…んっ…！」

レイフは逃げるように顔を背けたが、気持ちのいいのは本当なので、一方的に攻め立てられることに悔しさを覚えても、彼の手を引き離すなどできなかった。

「クリスター…クリスタ…ああっ…」

電流にも似た快感が、クリスターに触れている部分から頭の芯にまでびりびりと伝わってくる。レイフは身悶えし、クリスターの腕に指先を食い込ませながら、鼻にかかった声で囁いた。

「クリスター、オレにも…おまえのを触らせろ…よ…」

この言葉に、クリスターは軽く片眉を跳ね上げ、面白そうに笑った。

「そうだね…」

クリスターは素早く己のジーンズの前をくつろげると、そこにレイフの手を導いてやった。

「おまえも…気持ちよくしてやるよ…」

レイフがそれを握り締めてゆっくりと上下に動かすと、クリスターは、あぁっと、痺れたような甘い吐息を漏らした。

2人は共に横たわり、激しく抱き合い、絡み合いながら、かつて感じたことのないほどの興奮に浸りきっていた。

こんなふうに触れあうことをあれ程慎重に避けてきた2人なのに、一端たがが外れると、後はもう、ただひたすら、相手のことがもっと欲しい、ひとつにつなりたいという欲求だけに突き動かされて、やめることなど、どちらも思いつかなかった。

「あ…あぁっ…あ…んっ…」

レイフが、堪えかねたように内腿をぶるぶる震わせながら、クリスターの体にしがみつく。

「オレ、もう駄目、イキそう…イかせて…」

「まだだ…レイフ…」

荒い息の合間に囁くや、クリスターはいきなりレイフの体をうつ伏せに転がし、ジーンズを下着ごと一気に膝の辺りにまで引きおろした。

「あ…」

クリスターの手が剥き出しになった尻の上に乗せられる。レイフは息を飲み、緊張のあまり身を固くした。

「力を抜け、レイフ…これじゃ、僕が何もできないよ…」

クリスターの苦笑混じりの声が、レイフを少しリラックスさせた。

「う…ん…」

レイフが、なるべく力が入らないようにしながら、膝について脚を開くと、クリスターはレイフと自分が零したもので濡れた指を引き締まった尻の合間のその部分に押し当て、ゆっくりとほぐしにかかった。

「さすがにジェルも何も持ってないからね…なるべく、ひどくならないようにはしたいけれど…」

クリスターの指が進入した瞬間、レイフは汗ばんだ背中をびくりと震わせ、言葉にならぬ啼き声をあげた。

「う…うう…ひ…いっ…」

内壁を探りかき回しながら押し広げているのがクリスターの指だ
と思うと、それだけで達してしまいそうだったが、その次にくるも
のを期待して、一層欲望は強くなるばかり。レイフはがたと身を
震わせ、全身を駆け巡る快感に、唇を噛み締め耐えていた。

こいつとつながりたい、ひとつに溶け合いたい―。

「クリスター、もう、いいから…挿れろって…」

荒い息の合間に、レイフは切れ切れの声で囁いた。

「レイフ…?」

「早く…いいから、クリスター、早く…オレの中に、おまえのを挿
れてくれ…よおっ…!」

ついに堪えきれなくなったレイフはすすり泣きを漏らしながら、
頭を揺らして懇願する。

すると、クリスターは待ちかねていたかのようにレイフの熱く蕩
けた内部から指を引き抜き、己のものをレイフの股間に押し付け、
力を込めてねじ込んでいった。

「アッ…ア…!」

がたがたと脚が震え、背中には汗が玉のように噴出した。不自然
な交わりに、引き裂かれた体が悲鳴をあげているのが分かる。

「んっ…くっ…」

レイフが最初の衝撃から立ち直るのを見計らって、クリスターは、その腰を片手でしっかりと押さえ、更に奥深く侵入を試みた。

「!…っ…うっ…クリスター…んんっ…あっ…」

己の体を貫き犯すものの圧倒的な質量に、レイフは喉を引きつらせ、息も絶え絶えに喘いだ。生理的にあふれ出す涙が、ぼたぼたと床に零れ落ちる。

（ああ、こんな痛い目見るなら、あんなに簡単にクリスターに主導権を渡すんじゃないかったな…）

最初は、ただ股間から突き上げる痛み顔に顔をしかめ、目を固く瞑って耐えていたレイフだったが、いつしか、それは体の芯を燃え立たせる快感に変わっていった。

「ああ…っ…ふう…んっ…あ…んっ…」

レイフの苦鳴が明らかな嬌声に変わっていくつれ、クリスターは次第に大胆に、激しく腰を使い始めた。

「うわっ…あああっ…!」

レイフは泣き叫び、身悶えし、激しく頭を振りたてた。

「レイフ…レイ…フ…くっ…」

半ばうわ言のように、熱っぽく呼びかけてくるクリスターの囁き

を背中に聞きながら、レイフは彼をもっと深く受け入れようと腰を突き上げる。

「あっ…あ…んっ…ひっ…い…」

自分達が没頭している行為が何なのか、これまで逡巡してきたのはなぜなのか、そんなことは、もう完全に抑制の弾けとんだ頭の中にはうかんでこない。

「クリスター…クリ…スター…もっと…そうだ、もっと…あ…ああっ…！」

ますます激しくなるクリスターの攻めに体を揺さぶられながら、レイフがぎゅっと締め付けてやると、彼はレイフの上で耐えかねたように呻いた。

「ん…く…うっ…」

レイフのものも今にも暴発しそうなほど固く張り詰めている。おかしいことに、別に触れられているわけでもないのに、レイフは己の性器をぎゅっと締め付ける熱い肉の感触を確かに覚えていた。クリスターの感覚とどこかで交叉しているのだろうか、抱かれているのに、同時に抱いているような、言い知れぬ感覚にレイフは酔いしれている。

「あ…ああ…っ…」

腰を支えるクリスターの手は震え、その指先が肌にぐいぐい食い込んで痛いほどだ。

「はっ…はあっ…はっ…ああっ…レイフ…！」

激しく抜き差しを繰り返していた動きが唐突にやんだ。瞬間、クリスターが吼え、その体をぐんと反り返らせた。

「ああ…クリスター…！」

ほとんど同時にレイフも達した。

（クリ…スター…）

頭の中まで真っ白に燃え尽きたように、レイフはしばし何も考えられなかった。

クリスターとつながったまま、ぐったりと横たわり、放出後の脱力感に呆然と浸っていた。

（クリスター、クリスター…オレのクリスター…）

レイフは荒い息をつきながら、背中にのしかかっているクリスターの体の重み、その熱さ、依然として己の中に残っている彼の一部を感じ、この上もない幸福と満足感がこみ上げてくるのに薄っすらと笑みをうかべた。

「レイフ…」

クリスターが身じろぎした。彼はレイフの胸に腕を回し、愛しくてならないというようにぎゅっと抱きしめてくる。その唇が首筋に押し当てられ、恋人達がするように優しい言葉を何事か囁きかけるのに、レイフはくすぐったいような幸せな気分であつとりと耳を傾

ける。

「…オレも愛してるよ…クリスター、おまえを愛している…」

レイフもまた、幸せのあまりに泣きそうになりながら、あまやかな声で呼びかけていた。

一度は熱を吐き出して満足したものの、やっとの思いでひとつになった体をまだ離し難く、レイフは、これだけでは足りない、何度でもクリスターと同じことをしたいと考えていた。

クリスターも同じ思いなのだろう、レイフの中におさめたものをまだ抜こうとはせず、後ろから彼の首筋や肩に柔らかなキスを繰り返している。

（ああ、クリスター、やっぱり、オレとおまえは恋人同士だ。たぶん、生まれる前からそうだったんだ。離れられるはずがない、オレ達はこんなに愛し合ってるんだから―）

羊水の中をゆったりと漂っているかのような安心感の中、レイフはついうつらうつらしそうになる。

まるで、とっくの昔になくしてしまった、あの2人きりの子供部屋、ベッドの中の温かい暗がりで抱き合い眠っていた頃に戻ったようだった。

互いの体に回した、腕の中にだけ存在する、全てが完璧に満たされた幸福な楽園―もう二度と手放しはしないとレイフは固く心に誓っていた。

その時、飽きることなくレイフの肌を唇でついばんでいたクリスターが、ふっと、その動きをやめた。

レイフは、密着している肌を通して、クリスターの体が緊張のあまり固くなるのを、その心臓が慄いたように震えるのを敏感に感じ取った。

「クリスター…？」

レイフは重たげに半ば伏せていた瞼を上げて、首を捻って、問いかけるように兄を見上げた。

クリスターは答えず、上体を僅かに起こした姿勢のまま、レイフの頭の向こう、この部屋の入り口辺りを強張った表情で見据えている。一体何を見つけたのか、彼の体からは先ほどの行為の余韻の熱が急速に失せていく。

「どう…したんだよ…？」

レイフはいぶかしみながら、クリスターの視線を辿って、頭を巡らせ、部屋の入り口を振り返った。

（あ…っ…）

レイフは息を吸い込んだ。

大きく開かれた工作室の扉の向こうには、だらりと両腕を垂らし、呆然と立ち尽くすラーズの姿があった。

まるで、親に悪戯を見咎められた子供のように震えあがり、怯え

て縮こまるレイフの体を、クリスターが反射的にぎゅっと抱きしめる。

「父さん…」

からからに渴き、震える喉の奥から、レイフは搾り出すように囁いた。

受けた衝撃の大ききのせいで束の間空白になっていたラーズの顔が、苦しげに引き歪んだ。

ラーズは、床の上で、自分の息子達がそっくり同じ体を絡ませ、愛しあう姿を見てしまった。彼らが本当は恋人同士なのだと知ってしまったのだ。

混乱のあまり揺れ動く目で2人を見比べている、今のラーズには、双子達のどちらがレイフでクリスターなのか、区別することもできていないに違いない。

「と…父さんっ…」

ラーズは嫌悪も露に、半裸のままひと抱き合っている子供達から顔を背け、扉の向こうから姿を消した。どさりと倒れ込むような気配がし、続いて、彼が激しく嘔吐する音が聞こえてきた。

（あ…あ…）

レイフとクリスターは身を寄せ合ったまま、凍りついたように、父親のたてる物音に耳を傾けていた。

そうしながら、彼らは、自分達がもはや親に悪戯を見咎められた小さな子供ではないのだということを、これも2人が罪なく寄り添いあって眠っていたあの部屋でないのであるということを思い知らされていた。

2人とも、この行為が何か知らなかった訳ではない。知っていて尚、愛する相手と結ばれ、求める幸福を手に入れようとした。それでいいのだと、一瞬前まで思っていた。

（オレ達がずっと避け続けた、この行為が、それほどまでに許されないことなのか：ただ確かめようとして、知りたくて、そして―）

自分達の体と体をぶつけあって知ろうとした、疑問に対する答えを、彼らは今、こうして逃れようもない現実として目の前に突きつけられている。

クリスターとレイフは愛し合う恋人同士だ。そして、血を分け合った双子の兄弟だ。

どちらも真実だが、彼らが生きる、この世界では、共に成り立つことは決して許されないものだった。

第8章 Paradise Lost (1)

あの悪夢の瞬間から後に続いた、嵐のような混乱状態については、今でも語ることはおろか、思い出すこともできればたくない。

凄まじい修羅場を実の父親と繰り広げたはずだが、彼が泣きながら発した怒号と罵りの言葉はほとんど記憶から抜け落ちている。おそらく、思い出すのも耐え難いからだろう。

僕でさえここまでのダメージなのだから、父親思いのレイフの受けた衝撃はどれほどのものであったのか、想像するに難くない。

レイフ。僕と一緒に罪を犯してしまった、愛する弟――。

あの日を境に別れたきり、僕は、その後の彼の消息を知らない。

懐かしい我が家。

二度と再び戻ってくることは許さないとラースに宣告を受けてから、早、ひと月半、クリスターは、かつて当然のようにそこで暮らしていたことが夢のような気分で、道路を隔てた場所に立ちながら、その建物をじっと見つめていた。

腕時計をちらりと見下ろす。19時30分。

もう1時間以上、彼はここで待ち続けていた。

こんな所に1時間も突っ立って、一体何をやっているのかと思わないでもないが、あの家まで行って自ら扉を叩くだけの勇氣は、さすがのクリスターにも持てなかった。

7月のことであり、この時間でも外はまだ明るい、普段ならば、そろそろヘレナが帰宅してもおかしくない頃合だ。

（もしかしたら仕事が大変で、近頃は帰るのも遅くなっているんだろうか：家よりも先に事務所を訪ねていったほうがよかったろうか。ここに來たって、どうせ僕が中に入れてもらえることはないんだろうし…）

クリスターがそう考えていると、低いエンジン音と共に見慣れた白い車が視界に入ってきた。

（母さん）

手を振って知らせようか、近づいて声をかけようかとクリスターが迷っているうちに、白のシボレーのドアが開き、紅い髪をタイトにまとめたヘレナが現われた。

いつも凜として美しい母が、久しぶりに見るとどこか疲れたような顔をして見えたことに、クリスターははっと胸を突かれた。

（父さんの体調が悪くて、今は母さんが1人で社を仕切っていると

は聞いたけれど…)

先日街で偶然出会ったラーズの部下から聞きだした父母の近況を、クリスターが半ば呆然となりながら思い起こしていた時、懐かしいハスキーな声が彼の名前を呼んだ。

「クリスター？」

クリスターは思わず、息を飲んで、立ちすくんだ。恐る恐る目を上げると、ヘレナがまっすぐにこちらを見返していた。

「母さん…」

もしも愛する母の目に、あの日ラーズの目の中に見たのと同じ嫌悪や拒絶の感情を見いだしたら、クリスターは居たたまれなくって、きっと逃げ出していただろう。

しかし、こちらに向けられたヘレナの顔はどこか悲しげではあったものの、その眼差しに他人を見るかのような冷たさはなく、母はやはり変わらぬ母だと、クリスターを安堵させた。

彼女はクリスターに手を差し伸べようとして、一瞬躊躇うように家の方を振り返った後、意を決し、ゆっくりと息子のもとに近づいてきた。

「クリスター、心配したわ…」

ヘレナは、明晰な彼女らしくもなく、突然表れたクリスターに何と言葉をかければいいのか分からないというように、口ごもった。

「母さん：久しぶりだね。心配させてごめん、でも、僕なら大丈夫だよ」

母との間に気まずい沈黙が訪れることを恐れるように、クリスタはぎこちなく口を開いた。

「しばらくの間は色々大変で、なかなか連絡を入れることもできなかったけれど、今やっと落ち着いたところなんだ。まあ、万事解決とまではいかないけど、今のところ住む場所はちゃんとあるし、9月から始まる大学もローンを組んで何とかかなりそうだから、その点は安心してくれていいよ」

「結局、あのまま：恋人と一緒に暮らしているの：？」

クリスタは母の気遣わしげな視線を避けて、うつむいた。

「うん：僕があんまり年の離れた恋人を持つことに、もしかしたら母さんは抵抗があるかもしれないけれど、サンドラはいい人だよ。ほとんど身一つで家を飛び出して、混乱したまま転がり込んだ僕を、何があったのかと問い詰めもせず受け入れてくれた：僕もつい彼女の好意に甘えて居ついてしまったけれど、出て行けと言われたことも、嫌な顔をされたこともない。それどころか、学費についても援助を申し出てくれている：さすがに、それは申し訳ないから断って、ローンだけで何とかしようとは思っているけれどね」

ヘレナはしばらく沈黙して何事か考え込んでいる様子だった。クリスタが庇護を受けている年上の恋人とは、彼女も面識があるのだから、多少複雑な気持ちはあるのかもしれない。

「学校が始まったら、学生寮に入るか、同じ学生仲間でアパートの

シェアリングができる相手を探そうと思っているよ」

一応言い訳のように付け足して、クリスターは改めて、母を恐る恐る観察した。

サンドラとの関係よりも、よほど、クリスターにとって、ヘレナにどう思われているのか気になることがある。

そう、「あのこと」を、ヘレナはどう思っているのだろう。不運なラースのように実際目の当たりにしたわけではなくとも、双子の間に一体何があったのか、彼女も知ってしまったはずだ。

「父さんのことを聞いたんだ：クインシー・マーケットの近くで、アンドルーにばったり会ってね。その：具合が悪くて、事務所にも随分長いこと出てないんだって？ それほど調子が悪いの？ 病院にはちゃんと行っているのかい？」

クリスターがヘレナの反応をうかがいながら、ためらいがちに語りかけると、彼女の美しい顔が僅かに曇った。

医師の言いつけを守ってしばらく禁酒していたラースは、再びアルコールに溺れ、今ではほとんど出社などできない状態だという。

（ブライアイン達の裏切りやヘレナさんの流産でしばらく荒れてたこともあったラースさんだけれど、それでも、今ほどひどい状態じゃなかったと思うよ。一体、何があったんだ、クリスター？）

詳しいことは何も知らない父の部下に正面から追及されて、本当のことなど言えるはずもないクリスターは黙り込むしかなかった。

（僕らの関係を怪しんでいる節のある父さんには、何も気付かれな
いよう用心しようと思っていた矢先だった：それを、寄りにもよっ
て、あんな場面を見られてしまうなんて、何という失態だ。そうは
言っても、あの時の僕にレイフを拒否することなどできなかったろ
う。そうだ、僕とレイフはやっとお互いの気持ちを正直に打ち明け
て、確かめ合ったんだ。あの一時、僕達は確かに幸せを掴んだのに
：その報いが、この惨憺たる現状だなんて）

擦れ違いや誤解、迷いや苦悩の末にやっとなレイフと結ばれた、あ
の時のことを思い出すと、クリスターの胸は相克する2つの感情に
引き裂かれそうになる。

（ああ、僕はレイフと愛し合ったことを後悔しているのか：それと
も、父に見られたせいで、あいつとのつながりを無理矢理断ち切ら
れましたことが悔しいのか：まだ自分の気持ちさえ整理がついて
いないけれど、はつきりしているのは、もう何もかも取り返しがつ
かないということだ）

クリスターもレイフも深く傷ついたが、一番痛手を受けたのはど
うやらラーズのような。あれほど溺愛した子供達に二度と戻ってく
るなど勘当を言い渡し、自らも自暴自棄に陥って、アルコールに逃
避している。

頼もしかった父の心がこんなにもろく崩れてしまったことに、ク
リスターは何かしら信じられない思いだったが、同時に、彼を傷つ
けてきた不幸の連続と、最後のとどめのような、親子の断絶となる
今回の事件を思えば、無理もない気もした。

（何だかまるでジェームズの望みどおりになったみたいだな。いや、
こうなることまで見透かして、何もかもあいつが仕組んだなんてい

うのは、いくらなんでもうがちすぎか。そうだとも、ジャームズのせいになどするな。僕達が犯したことの結果、大切な家族は粉々に壊れてしまったんだ」

クリスターは、見たくない現実からつい顔を背けようとする自分を心の中で叱り付けた。

「あの人の具合は、残念だけれどあまり思わしくないわ…体も心もね。ラーズが心配で、ここに戻ってきてくれたの？」

「うん…」

母の言葉に、良心がちくんと痛むのを覚えながら、クリスターは小さく頷く。

「ありがとう、でも…あなたは今のラーズには会わない方がいいわ。会ってもきつと辛い思いをするだけよ…ラーズも、あなたの顔を見たら、きつとまた取り乱して、どうしようもなくなるでしょう。ごめんなさい、クリスター…あの人が落ち着くまで、もう少し待ってちょうだい」

「母さん、ごめんだなんて…そんなこと…」

クリスターは慌てて口を開きかけるが、出なかった謝罪の言葉は、形になる前に舌の上でばらばらに崩れていった。

一体何に対して謝るのか。謝れば、壊れてしまった大切なものを元通りにできるのか。

（僕には、何も言えない…通り一遍の言葉ですませられるような、

そんな簡単なことじゃない。第一、僕は：こんな不幸と悲しみを父さん達にもたらししておきながら、それでも、僕は――)

途方に暮れたような顔でじっと押し黙っているクリスターを見て、ヘレナは、どこか試すような口ぶりで静かに言った。

「レイフが今どこでどうしているか、聞かないの、クリスター？」

いきなり核心の部分に鋭く突き刺さるような問いをなされて、クリスターは肩をびくりと震わせた。

「ずっと気になっていたはずよ：あなたの姿を見つけた時、私はてっきりレイフの行方を尋ねに来たのかと思ったわ」

相変わらす鋭く冴えた母に、胸の奥に秘めた想いを見透かされたような気がして、クリスターは慄いたように目を見開いた。

(そうだ、僕はずっと、レイフがどうしているのか知りたくて、気が狂いそうだった。もちろん父さんのことも心配したけれど、それはむしろ口実で：母さん達に会えば傷つくのを覚悟してここにやって来たのは、やっぱりレイフに会いたい、それが駄目なら、せめてどうしているかだけでも知りたいという、この期に及んでも懲りない、あいつを求める、僕のどうしようもない心のせいなんだ)

いつもはもっと巧みに言葉を操って、いくらでも言い抜けできるクリスターが、今はしゃべること自体を忘れてしまったかのように固くなって立ち尽くしている。そんな彼をヘレナはもの思わし気な眼差しでじっと見つめ、それから、溜息混じりにぽつりと漏らした。

「あなた達を初めからひとつに産んであげたら、よかったのかしら

ね…」

クリスターは何かしらはっとなって、ヘレナの聡明な、今は深い悲しみに沈んで見える顔を眺めた。

「レイフは今、ビョルンの家にいるわ」

クリスターの胸の中で、その心臓が大きく跳ねた。

「ニューヘイブンのビョルン叔父さんの所に…？　そうか、どおりで、この辺りでは、レイフの噂を聞かなかったはずだ」

クリスターは、ヘレナの兄である、彼ら兄弟を子供の頃から可愛がってくれていた、物静かで賢明な叔父の姿を思い浮かべた。

「叔父さんがレイフを保護してくれているなら、安心だね…最近は随分ましになったけれど、一時はマスコミがレイフの暴力事件を取り上げて、うるさかったから…彼らが家庭内のごたごたまでスクープしないかとひやひやしてたんだ」

レイフがニック相手に起こした暴力事件は、裁判や訴訟問題に発展することはなかったものの、アイドル的な人気でマスコミにも露出していたレイフだけに、一部のタブロイド紙などは、あることないことひどい記事をかきたてた。そして、これは大事に発展しそうだと言った大学側の判断で、結局テキサス大はレイフの入学を取り消した。レイフが何の断りもなく消息を断ち、事態の收拾にあたってくれるはずのラスまでも一切の話し合いに応じなくなってしまうのでは、彼らの処置も仕方がなかった。

「ビョルンの話では、レイフはこの頃やっと落ち着いてきたようよ

：しばらくは家の中に閉じこもってほとんど口もきかなかったのが、今ではビョルンと一緒に食事のテーブルについて、当たり前障りのないことなら普通に会話できるようになってきたって…」

「そう…」

レイフの今の様子を聞かされると、クリスターは胸の中を激しくかきむしられるような気分になった。

「叔父さんは、僕達が父さんに勘当された事情を…全て承知しているのかい…？」

「いいえ、あなたが知られたくないと思っていることは知らないはずよ。それに、レイフが聞いて欲しくないと思っていることをあの子を傷つけでまで聞き出そうとする人ではないわ。何か、よほどの事件が家庭内で起こったとは察しているでしょうけれど…そうね、一度だけ、ビョルンは私に何があったのか尋ねたわ。私は答えなかった。それきり、兄は何も言わない」

ビョルンの優しさに感謝しつつ、クリスターは悄然と項垂れた。自分達がどれだけ愛する人達に心配と悩みをもたらしたのかを思いしらされて、すまなさで胸がいっぱいになっていた。

（でも、確かにビョルン叔父さんのもとでなら、レイフはここにいるよりかずっと精神的に落ち着いて、これからのこともじっくり考えられるようになるはずだ。そうだ、僕の考えに振り回されることなく、今度こそあいつの意思で、これから先どう生きるか決められるようになる）

そこまで考えて、レイフは結局、自分と関係のない道を選び取り、

手の届かないどこか遠くに行ってしまうのかと、クリスターは無性に寂しくなった。

（レイフの精神状態を慮れば、今はそっとしておいてやるのが、あいつのためなんだろうけれど…なら、僕はいつまで待てばいい…このまま二度と会えないなんてことにはならないだろうか…？ もう決して離れないと誓ったばかりなのに…どうして、僕達はまた離れてしまったのだろうか…？）

なまじ、レイフが今どこでどんなふう to 暮らしているという話を聞いてしまったがために、弟へのつのる想いを、クリスターは抑えることができなくなった。

「クリスター、あなた、レイフに会いたいよね…？」

母の的確な言葉に、クリスターは思わず震え上がった。緊張を解くため、大きく息を吸い込んだ。

（レイフ…レイフ、おまえは僕を愛していると言った。僕もおまえを愛している、今でも―）

兄弟で愛し合うことが本当に許されないことなのか確かめようとした、あの行為の後、2人は、この世界の現実というものを、もつとも残酷な形で思い知らされた。

それでも、あの時の記憶が脳裏に蘇れば、レイフの声、ぬくもり、肌の感触、何もかも全てがたまらなく恋しい。胸がつぶれそうなほど、恋しい。

「母さん、僕は…」

クリスターの震える唇から漏れ出たのは、ほとんど涙声だった。

「僕はレイフを…」

その時、家の方から、誰かが荒々しくドアを開く音が聞こえた。

「クリスター！」

雷鳴にも似た、深い憤りをはらんだ声が自分の父親のものだと、クリスターはとっさに理解できなかった。

「と、父さん…？」

母の体の向こうに、よろよろと覚束ない足取りで家の中から出てきた男が見えた。

それがラースの変わり果てた姿なのだと悟ったクリスターは、愕然となった。がっしりと逞しかった体はこの僅かの時間で随分と痩せ、そのくせ腹は出て、大量の飲酒のせいか顔は赤らんでいる。

その震える手に重たげな拳銃が握られているのを見つけた時、クリスターは凍りついた。

「父さん、まさか、そんな…」

目にしている光景が信じられなくて、悪い冗談か夢を見ている気分になりながら、クリスターは喘ぐように呟く。

「言うな！」

ラースはクリスターの言葉を遮って、激しく吼えた。

「おまえはもう俺の子供じゃない、よくも…よくも俺の前に、その汚らしい顔を出せたな…二度と来るなど言っただろ」

クリスターを睨みつける血走った目には、理性を凌駕する怒りがたぎり、ほとんど狂気じみてさえた。

「ヘレナから離れろ、クリスター、離れるんだ」

ラースは両手で拳銃を構え、ゆらゆらと不安定に揺れる銃口を、石と化して立ち尽くしているクリスターに向けた。

（父さん、父さん、ねえねえ、僕ね、今日、コーチに足が速いって誉められたよ）

（おお、さすがは父さんの子だなあ。試合を見に行く度にどんどんうまくなっていくんだから、おまえもレイフも、全く大したものだよ）

かつて、どれだけ父親に愛され可愛がられていたか、クリスターはふいに思い出した。

クリスターとレイフに向けられた、あの温かな眼差しと笑顔、優しい声、抱き上げられたり頭を撫でられたりした手の感触―遠い子供時代の記憶が、クリスターの脳裏に鮮やかに蘇る。

どんなことがあっても、父は自分達を愛してくれている、決して裏切ったり傷つけたりしないと、あの頃は疑いもなく信じていた。

今、その父親は怒りに我を忘れ、クリスターに銃を突きつけている。

（あれだけ父さんを傷つけておいて、のこのこ戻ってくるなんて、僕が馬鹿だった…許してもらえると、心のどこかでまだ期待していたんだろうか。だとすれば、とんだ甘えだ…やっと分かったよ、僕の家はもうここにはない…なくなってしまったんだ）

ふいにこみ上げてきた喪失感、後悔と羞恥の思いに、クリスターは力なく項垂れた。

「僕は、あなたの前に姿を現すべきじゃなかった…ごめんよ、父さん…」

クリスターの慙愧に満ちた眩きなど耳に入っていないのだろう、ラーズは、忌々しげに何事か吐き捨てながら、トリガーにかかった指に力を入れた。

（撃たれる…!）

クリスターは思わず、目を閉じた。

「ラーズ、やめて!」

父親に殺されると半ば覚悟した瞬間、ヘレナが鋭く叫んで、クリスターを庇うように大きく腕を広げ、その前に立った。

「ヘレナ…!」

ラーズは動揺した。

「そこをどけ、そんな奴を庇うことはない……そいつはもう俺達の子供なんかじゃない。畜生だって、親の前であんなことをしやしないだろう……おお、そうとも、そこをどくんのだ。そいつは俺がこの手で撃ち殺してやる！」

逆上し、殺気立つラーズに対し、しかし、ヘレナは毅然とした態度を崩さなかった。

「ラーズ、ラーズ……あなたが何と言おうとも、クリスターは私達の子供、私があるあなたのために産んだ子よ……自分がどれほど双子の誕生を待ち望んでいたのか、一度に2人も子供を授かったことを喜んだのか、忘れたの？」

激情の発作に駆られ、まともな判断もできなくなっているラーズに、ヘレナは忍耐強く接し、彼に本来の愛情深い心を取り戻させようとかき口説いた。

「そんなことを……今の俺に思い出させるな！　いいから、そいつから離れろっ」

「いいえ、ラーズ、あなたにクリスターを殺させるなんて馬鹿なことで、私が見過ぎすと思ってる？　どうしても、その物騒なものを下ろせないと言ひ張るなら、いいわ、この子と一緒に私も撃ちなさい」

狂乱する父を前に一歩も引かず、必死の説得を試みる母の気迫に圧倒されて、その背中を呆然と見ているだけだったクリスターが、その瞬間、顔色を変えた。

「母さん！」

まさかラースがヘレナまで撃とうとするとは考えられなかったが、今の彼の混乱振りでは、誤って発砲しないとも限らない。

「危ないから、そこを退いてくれ、母さん」

しかし、ヘレナは腕を広げてラースの前に立ちはだかったまま、振り返りもせず、クリスターに言った。

「大丈夫よ、ここは私に任せて：行きなさい、クリスター」

クリスターは瞳を揺らせながら、母の背中を見つめた。

「母さん：」

「いいから、早く行きなさい：！」

叱責のように厳しく響く母の声の中にある何かが、クリスターの心の琴線に触れた。

（父さんをこんな無残な状態に追い込んでしまった僕でも、母さん、あなたは許してくれるんですか？ 生きていけと言ってくれるんですか？）

クリスターはヘレナをじっと見つめたまま、ゆっくりと後ろ向きに数歩下がった。視線を上げると、途方に暮れたような顔をしたラースが、のろのろと銃を下ろしていくのが見えた。

ふいに、目の奥が焼け付くように熱くなるのを、クリスターは覚

えた。

（父さん、18年間息子として愛してくれて、本当にありがとう……それから、母さん、こんな僕でもまだ我が子として愛し、命がけで庇ってくれたあなたに、僕はどれだけ感謝してもしきれない……ありがとう、母さん）

ラースは拳銃を取り落とし、その場につくりと崩れ落ちた。そのまま顔を覆って、心の底から搾り出すようにむせび泣きだす彼に、ヘレナがすぐに駆け寄っていく。

（さよなら……！）

クリスターは踵を返し、その場から離れた。まるで何かに追われるように、その足はどんどん速くなっていく。

歯を食い縛って嗚咽が漏れそうになるのを噛み殺し、こみ上げてくる熱い涙を堪えながら、父と母、かつて自分を守り育んでくれた『家族』から、クリスターは立ち去っていった。

第8章 Paradise Lost (2)

兄弟で愛し合うオレ達の有様を見て、吐き気に駆られた父さんが、扉の向こうで苦しみ喘いでいる。

胃が引っくり返りそうな勢いで嘔吐する、耳障りな音を聞きながら、オレは、ひどく恥ずかしくて惨めな気分になっていた。クリスターの重みが体から離れたのに、慌てて床から這い上がり、まるで取り繕おうとするかのように必死に服の乱れを直した。

『父さん…父…さん…』

しばらくは恐くてとても動くことなどできなかったけれど、父さんが本当に苦しそうだったから、心配になったオレは、そろそろと部屋の外の様子を見に行った。

クリスターが何か言った。

オレは応えず、扉に手をかけ、恐る恐る、顔を覗かせた。

『父さん…』

悪戯がばれた後、叱られるのを承知でつい親に声をかけずにはいられない、何か言って欲しいと願う子供になったような気分でオレが呼びかけると、壁に手をついてせいぜいと喘いでいた父さんの背中が大きく震えた。

父さんはオレを振り返った。まるでオレが誰なのか分かっていない、他人を見るような目をしていた。

心配したのだろう、いつの間にかクリスターが部屋から出てきて、オレの斜め後ろに寄り添うようにして立った。

クリスターはもう一度、オレに声をかけた。今度は何を言われたか分かった。

『行こう、レイフ…』

オレ達2人を見比べる、父さんの目つきが険しくなったと思った、次の瞬間、信じられないことが起こった。

雷が落ちたような物凄い声で怒鳴られて、オレの頭は真っ白になる。

そうして、気がつけばオレは、唸り声をあげながら突っ込んできた父さんに引っつかまれ、力任せに殴られていた。

こんな激しい折檻なんて、オレが子供の頃悪戯して叱られた記憶をひっくり返して探しても、見つからないだろう。

涙混じりの声で散々罵られたはずだけど、実際何て言われたのかは覚えてない。殴られて痛いのも、父さんをここまで傷つけたこと、父さんに嫌われたことが胸に痛かった。

抵抗もできず、一方的にぼこぼこにされているオレを助けようと割り込んできたクリスターが、今度は、父さんともみ合いになった。

またしても、耳を覆いたくなるような怒号と罵り。

クリスターが必死で宥め落ち着かせようとしても、狂ったように暴れる父さんには通じない。

クリスターの顔も、今にも泣き出しそうなほど、悲痛に歪んでいる。

クリスターと父さんが格闘しているのを眺めながら、オレはうわ言のように呟いていた。

『やめてくれ、やめてくれ…』

ついに、クリスターに力いっぱい突き飛ばされてバランスを崩した父さんは、よろよろと後ろ向きに下がり、床に尻餅をついた。

そのままオレ達を呆然と見上げたかと思うと、今度は顔を真っ赤にして泣き出した。泣きながら、オレ達が生まれてきたことを呪い、オレ達を愛し育てた自分を罵った。

クリスターは疲れたように肩を上下させながら、そんな父さんをしばらく見つめ、それから、壁に背中を押し付けたままじっと息を殺しているオレを振り返った。

こんなにも傷つき、途方に暮れたクリスターの顔は、オレも見ることがないかもしれない。きっと、オレも同じような顔をしていたはずだけだ…。

オレ達は父親の呪詛の籠った泣き声を聞きながら、お互いをひたと見つめ続けた。

クリスターの喉が何か言いたげに上下に動いたが、どうしても言

葉に出ないようだった。

オレはクリスターの傍に行きたかった。けれど、どうしてもそうすることができなかった。

父さんの絶望的な嘆きはいつまでもやまない。

これ以上、この場所にいることに耐えられなくなったオレは、殴打の跡の痛む体を壁から引き起こし、オレを食い入るように見ているクリスターから顔を背けるようにして、出て行った。

オレはクリスターを置いてきてしまった。クリスターもオレを追いかけるようとはしなかった。

あれほど真剣に、二度と離れはしないと誓い合ったばかりの2人なのに…。

父さんがオレ達に向かってぶつけた言葉のほとんどは忘れているけれど、オレが逃げ去る時、最後に聞いた、むせび泣くような言葉だけは忘れられない。

『おまえ達はもう俺の子供じゃない、俺の子供じゃない…』

父さんは何度もそう繰り返していた。

『おまえ達はもう俺の子供なんかじゃあない…』

そうなのか、父さん？

『俺の子はいなくなってしまった』

ああ、それならオレ達は、一体何になったんだろう…？

天気の良い、日曜の朝。

レイフがあくびを噛み殺しながら階段を降りていくと、大きな金色の犬が、待ちきれないかのようにリビングの方から駆け寄ってきた。

「ああ、おはよう、バディ」

尻尾を振りながらまつわりついてくるレトリバー犬の鼻先を軽くひと撫でしてやって、レイフはまっすぐキッチンに向かう。

「ちょっと待っていてくれよ。朝飯食い終わったら、すぐ散歩に連れて行ってやるからさ」

コーヒーのいい匂いの漂ってくるキッチンに入ると、テーブルについて新聞に目を通していた叔父のビョルンが顔を上げた。

「おはよう、レイフ」

「うん…おはよう、叔父さん」

レイフはまだ少しぎこちなさの残る笑顔を、赤味がかった金髪の、ヘレナによく似た知的で端正な容貌の叔父にちらっと向けた。

彼が、父親と繰り広げた、あの悪夢のような一幕の後、ボストンを離れてビョルンの家に預けられてから、そろそろふた月になろうとしている。

「こらこら、慌てんなよ、バディ」

床に置いてやった皿に顔を突っ込むようにしてドッグフードを食べているバディに優しく声をかけながら、レイフは冷蔵庫からミルクのビンを取り出してマグカップに注ぎ、それをぐいっと飲み干した。

「バディはすっかり君に懐いてしまったね。よく知らない人間には警戒して、なかなか慣れてくれない犬なんだが……」

夢中で餌を食べている犬の背中を指先で撫でているレイフに、ビョルンは眼鏡の下の優しい目を細めながら言った。

「ふうん、そうなんだ。でも、オレとは最初に会った日から仲良しだもんな、バディ」

レイフが気安く呼びかけると、彼の言葉が分かるとでも言うかのように、バディは顔を上げてバウと吼えた。

バディは、もとの飼い主から虐待を受けて、動物保護団体に一時預かりになっていたのをビョルンが引き取ったという経緯を持つ。

昔いた環境がよほどひどかったのか、後ろ足に軽い障害が残り、

この家に来た当初はがりがりに痩せて、人を決して信用せず、世話をするビョルンもなかなか手を焼いたという。

やっとビョルンを信じられる相手と認識して心を開いても、来客がある時には、怯えて家の奥に隠れてしまう。

それが、レイフがこの家にやって来た日、先に近づいてきたのはなぜかバデイの方だった。

傷ついた心を抱え、ビョルンともろくに言葉をかわさず、自分の殻の中に閉じこもって日がな一日塞ぎ込んでいるレイフの傍に、バデイはいつの間にかやってきて、温かい体を押し付けてきた。その、どこか哀しそうな優しい茶色の目でじっと見つめられると、レイフは気持ちちが和むのを覚え、やがて少しずつ笑顔を取り戻していった。

「彼は自分がたくさん傷ついたから、傷ついた人の心にも敏感なんだろうね。きっと、君のことを放っておけないって思ったんだよ」

ビョルンの言葉に軽く頷いて、レイフは彼と一緒に朝食を取るためにテーブルに着いた。

叔父の家は、このキッチンも含め、どこもととても清潔で、居心地よく整えられている。

手入れの行きとどいた庭に面した明るいキッチンで、こんなふうにな誰かと一緒にくつろいで食事をしていることが、何だか、つい数週間前の荒れた状態の自分を思えば、レイフは信じられなかった。

「叔父さんの煎れるコーヒーって、何だかクリ…母さんの味に似てる」

かつての自分の朝の生活を思い出して比べると、やはり切なくなってしまうのは、仕方がない。

「それはおいしいという誉め言葉だと思っているのかな？」

まだ他人と正面から目を合わせることはできないレイフだが、もともと親しい叔父相手なら差し向かいでものを食べられるようになっただけ、随分な回復具合と言えるだろう。

初めの半月ほどは、バディと一緒に自分の部屋に引き籠もって食事をしていたものだ。

「今日は天気がいいから、バディも連れて、ドライブでもしようか」

「そうだね…」

レイフはキッチンの窓の外の陽光溢れる庭に目をやりながら、ぼんやりと応える。前の持ち主もきつと庭好きだったのだろう。芝生の上に心地よい木陰を作り出す、枝を張り伸ばした木々。その向こうには小さな温室の屋根が光っている。そこにある、祖母から譲り受けた見事な蘭の鉢植えが、叔父の自慢だ。

「ピクニック・ランチを作るよ」

「叔父さんって、感心するくらい、まめだよね」

「一人暮らしじゃ、そんな機会もなかったけれど、何でもよく食べてくれる君がいるおかげで、今は料理のし甲斐もあるからね。私は結構腕のいいコックだろう？」

「うん…」

まだ完全には打ち解けることはできないで、硬さの残る、ぶっきらぼうな態度を取るレイフに、ビヨルンはいつも忍耐強く接してくれる。

どこまで事情を知っているのか知らないが、深く追求することはなく、レイフがそつとして欲しい時には放っておいてくれ、必要以上に関渉しない、ビヨルンだから、レイフも一緒に暮らせるのだ。

ビヨルンはまだ四十前の若さで大学教授を務めている。彼の父親もそうだったが、ヘレナの家系は皆インテリばかりだ。そのせいか、ラーズとはあまりそりが合わないのをレイフも知っている。

（何だか、クリスターがこのまま大学入って順調にエリート・コースを進んだら、こんな雰囲気の大人になるんじゃないかなあ）

もっとも、クリスターの持つ、うっかり触れば切られそうな鋭さや冷たさはビヨルンにはない。いつも温和な笑みを湛えた優しい人柄で、大学でも生徒達に人気だというのも頷ける。

ラーズは柔弱だと嫌っているようだが、決してそんなことはない。いつだったか、レイフがここに隠れていることをかぎつけて乗り込んできたやくざ紛いの記者を毅然とした態度で論駁し、すごすごと帰らせた姿に、やはり、あの母の兄だけあるなとレイフは見直したものだ。

他人に頼りにされやすいからか、もともと他人のために何かしたいという気持ちに溢れているからか、ボランティアとして貧しい地

区の学校を訪問し、高校生達相手に講演をしたり、その父兄からの相談にもよく乗ったりしている。

今はもっぱら、ダウンタウンの高校に出入りしている軍のリクルーターを追い出す運動に熱心で、甘い言葉と奨学金をちらつかされて、うっかりサインしてしまった生徒を親達と一緒にって保護し、契約破棄まで持っていたこともある。おかげで、一部のリクルーターからは睨まれて、嫌がらせの電話もちょうくちよくかってくるが、ビヨルンは怯まない。

ハンサムで女の人にもさぞかしもてるだろうに、一度短い結婚生活をしたり、後はういた話のひとつもないビヨルンを不思議がつて、レイフは一度、また結婚しようとか恋人を作ろうとは思わないのかと聞いてみたことがある。

すると、ビヨルンは少し困ったような目をして、レイフの顔をつくづく眺めて、こう言った。

『ずっと好きな人がいるんだよ……ただ、その人はとっくの昔に結婚して、今は子供までいて幸せな家庭を築いているから、私は今更その人に好きだなんて言って困らせるつもりはないんだ。一度うまくいきそうだと思う相手と結婚してはみたものの、私にとってやっぱり、愛しているのはその人だけだったんだろね、結局は妻とは離婚してしまった。だからもう、相手を傷つけるだけの結婚なんて、二度としないよ』

いつから片思いなのか知らないけれど、1人の相手をここまで想えるなんて、すごいロマンチストだと、恋愛経験はほとんど皆無のレイフは感心したものだ。

（一生忘れられない相手なら、オレにだっているけれどさ…クリスターのことなら、オレはきっと一生だって愛していられる…それをもう一度、あの時のように素直に口に出して言えるのか、分からないけれど…）

考えが、離れて暮らしている兄に向かうと、レイフの胸は恋しさと切なさ、傷つけてしまった父に対する罪悪感を伴う痛みに、引き裂かれそうになる。

クリスターが今、『恋人』であり庇護者でもある、サンドラ・オ布莱エンと一緒に暮らしていること、大学生活も何とか無事に始められそうだという話は、ビョルンを通じて、母から聞いている。

（クリスターの進路まで、オレのせいで駄目になってしまったらどうしようって心配したけれど、それは回避できたみたいで、ほっとしたよ…ああ、でも、そうすると、やっぱりオレとクリスターはこのまま全く別の道を歩いていくことになるのか。オレはまだ、自分のこれからのことなんて、全く考えることもできないけれど、逆立ちしたって、オレにや、クリスターと同じ大学に進むなんて無理そうだからな）

そんな現実を思えば、ますます気が滅入って、レイフは八方塞の心地で溜息ばかりついている。

（オレがこの先どこに行って何をするにせよ、それはきっと、クリスターと遠く離れた別の場所になるだろう…ああ、まさか、このまま二度と会えないなんてことはないよな。会いたい…クリスター、会いたいよ…そうだ、今ならもう変なマスコミに追いかけられることもないだろうし、こっそりポストンに戻って、あいつに会いに行っちゃって構いやしない…）

レイフの心は何度もクリスターに会いに行く計画に傾きかけるが、そんな時に決まって思い出すのが、最後に見たラーズの悲惨な姿、怒りと嘆きのこもった、その声なのだ。

（駄目だ、やっぱり行けない：オレ達は父さんを裏切って、あんなにひどく傷つけたのに、何食わぬ顔をして、あいつに会いに行くことなんてできない）

レイフの希望は何度も呆気なくくじけ、そして、その度に胸の奥から抑えようもなく突き上げてくる別の想いがある。

（ああ、それでも、オレはやっぱりあいつを愛してる：あいつとオレは恋人同士なんだってこと、否定なんかできない、あんなふうに愛し合って、確かに幸せを感じたことを忘れられやしない。だから、いつか：そうだ、今すぐは無理でも、きっといつかオレ達は再会して、一からやり直すことができるはずだ。父さんだって：理解することはできなくっても、時間が経てば少しは落ち着いて、ちゃんと向き合って話くらいできるようになるよ：）

実際問題、ラーズとの和解についての見通しは全く暗かったが、そんなふうにも考えなければ、レイフが今の状況に耐えることはできなかったのだろう。

（そうだ、虐待されて散々な目にあったバディが今はこんなに元気になってるように、時間が経てば、人が心に受けた傷は癒えてくるんだ。オレやクリスター、父さんだって、きつと：そうさ、時間さえあれば：）

8月に入ったばかりのこの日、レイフの気持ちは少しだけ前向き

な方に傾きつつあった。

それが一気にまた逆向きに覆されたのは、その同じ日のうちのことだ。

「誰だよ、こんなことしやがったのは…ひでえな」

バディを連れてドライブがてら遠出してビーチまで出かけ、一日のんびり過ごして家に戻ったレイフとビョルンが見つけたのは、何者かによって荒らされた家だった。ビョルンが手入れた庭は踏み荒らされ、庭木は折られ、窓も1枚、石を投げ込まれて割られていた。

「参ったな、温室の蘭の鉢がほとんど全滅だ」

レイフが、何か盗まれたものはないか、家の中をバディと一緒に調べていると、外の被害状況を調べていた叔父が気落ちした顔で入ってきた。

「家の中は大丈夫だよ、叔父さん。荒らされたのは外だけで、内部に侵入しようとした形跡はないところを見ると、泥棒じゃあ、ないんじゃないかな」

「ああ…私も、そう思うよ。たぶん、彼らの仕業だろう」

温和な性質の彼にしては珍しく、ビョルンは憎々しげに舌打ちした。

「ていうと…この間、親に秘密で強引にサインさせた高校生の件でもめたっていう、軍のリクルーター？ マジかよ…この間は脅迫め

いた電話をかけてきやがったし、一応軍人の端くれのくせに、やる
ことが陰湿だよな」

ダウンタウンの高校に送りこまれた、軍の勧誘担当官に反発する
父兄を支援する、ボランティア団体に所属しているビョルンは、最
近彼らとの間でトラブルが起きたらしく、嫌がらせを何度か受けて
いた。

「警察に連絡した方がいいんじゃないか？　これじゃあ、チンピラ
とやること変わらないぜ」

「彼らがやったという証拠はおそらく出ないだろうが…被害届けく
らい出した方がいいだろうな。これで満足しておさまってくれれば
いいが、うちの団体に支援活動をやめさせようと更に妨害がエスカ
レートされたら、相手が相手だけに少々厄介だ」

「大丈夫だよ、叔父さんのことなら、このオレが守ってやるからさ。
お世話になってるお礼だよ。相手が軍人だろうが、腕っ節なら、オ
レあ、負けないって。ボディ・ガードとしては最強だから、安心し
てよ」

レイフが頼もしげに胸を叩いてみせると、ビョルンは顔をしかめ
て、苦笑混じり、やんわりと彼の申し出を断った。

「気持ち嬉しいけれど、頼むから、この件には首を突っ込まない
でくれよ、レイフ。おまえに危険なまねをさせたりしたら、ヘレナ
に合わす顔がなくなるよ」

「でもさ、このままじゃ、叔父さんが困るじゃないか」

レイフが言い返すのを、ビョルンはそつと手で制し、穏やかなのに反論を許さない毅然とした口調で言った。

「多少の報復があるくらい、覚悟してやったことだよ。それに、暴力で問題解決をはかるのは私の主義に反するんだ。大丈夫だよ、レイフ、こんな馬鹿げた嫌がらせをするのは一部のリクルーターだけだ。新兵募集センターの責任者のマイルズ先任軍曹は、私も面識があるが、話の分かる人物だ。一度会って、今回の件について話し合おうと思っているよ」

一見柔和そうなのに、こうだと決めたことについては何でも動かない。ビョルンのこういう頑固さは、ちょっとクリスターに似ている。そう思った途端、レイフは、何だか胸がきゅんとなって、逆らう気を根こそぎなくしてしまった。

（どうしよう、ぐっときた…叔父さんってば、時々クリスターみたいななんでもん…）

だからと言って、いきなり抱きついてじゃれつく訳にもいかず、物欲しそうな目で、ときばきと割れた窓ガラスを片付けている叔父の動きを追ってしまう。

「さあ、壊れてしまったものを嘆いても仕方がない。庭の片付けは明日にして、食事の準備をしよう」

「う、うん…あ、オレも手伝うよ」

にこりと笑ってレイフの肩を叩き、ビョルンは家の奥に向かう。その後を、レイフがほとんど条件反射のようについていき、更に犬のバディが尻尾を振りながら追いかける。

もう遅い時間になっていたので、冷凍のピザを温めて、後は残り物のスーブとサラダで簡単な夕食をすませると、レイフはビョルンと一緒にリビングに移り、バディの相手をしながらテレビを見ていた。

いつもなら、そろそろ部屋に戻って寝る時間だったが、目が冴えて眠れそうになかったレイフは、リビングにしつこく粘っていた。叔父の家での平穏な暮らしを他人に乱されたせいで気が昂ぶっていたのかもしれないし、もしかしたら、虫の知らせのようなものを感じていたのかもしれない。

ふいに、廊下の電話が鳴った。

「誰だろ…」

先程の出来事のせいで、レイフはまた嫌がらせの電話じゃないかと警戒し、とっさにビョルンを見やったが、彼は大丈夫だというように頷き返し、応対に出て行った。

バディの金色の毛皮を撫でながら、レイフは気遣わしげに顔を上げて、壁を隔てて聞こえてくる叔父の声に耳を傾けていた。

「はい…ああ、なんだ、ヘレナか」

硬かったビョルンの声が、たちまち親愛の情のこもった、柔らかな優しい響きのものになる。

それを聞いたレイフも、ほっと肩の力を抜いた。

「今日はレイフと一緒にビーチに出かけていたんだよ。まだ起きているから、彼に代わろうか？」

レイフも、相手がヘレナだと知って安堵したものの、電話を代わってもらって、直接彼女と話すことにはまだためらいがあったので、膝の上に頭を乗せているバディにどうしようかと相談するような目を向けた。

「どうしたんだい、黙り込んで…えっ、何だって…？」

ヘレナと話す時はいつも楽しそうで、普段よりも饒舌になるビルンが、急に、声のトーンを落とした。

レイフは再び顔を上げて、扉の方を見やった

「ヘレナ…落ち着くんだ、何があったのか、もう一度言ってくれ…」

微かに漏れ聞こえる叔父の声の中にある何かが、レイフの胸を嫌な感じに騒がせた。

(母さん…?)

不安がらせないよう、そっとバディの体を押しのけて、レイフは床から起き上がった。

「今、病院からかけているのか…傍には誰がいるのか?…クリスタ―には連絡はついたんだな?」

何となく息詰まる気分で、レイフはそろそろと扉を開いた。

足音を殺して廊下に出ると、まるでレイフに聞かれるのを恐れるように受話器を耳に押しあて、背中を丸めて、ひそひそと話しこんでいるビョルンの後姿が見えた。

「そうか、分かった。私も、すぐにレイフを連れて、そっちに向かうよ」

ビョルンは更にいくつか励ますような言葉をヘレナにかけて、受話器を置いた。そのまま彼は、電話をじっと見下ろしながら、しばし何事か考え込んでいた。

「叔父さん」

いつの間にか喉がからからに渴いているのを意識しながら、レイフはかすれた声で、叔父の背中に呼びかけた。

するとビョルンは肩を小さく揺らせ、ゆっくりと振り返った。途方に暮れたように見えた顔が、レイフを認めるや、沈痛な表情をうかべた。

「今の電話、母さんからだよな…？　様子が変だったけれど、一体、うちで何があったんだ…？」

ビョルンはまっすぐレイフに近づいてきて、その肩に手を置いた。

「今日の夕方、ラースが倒れて、病院に運び込まれた。帰宅したヘレナが見つけた時には、既に意識がなかったそうだ…脳出血だったらしい。いいか、レイフ、落ち着いて聞くんだよ」

レイフは大きく目を見開いて、ビョルンの口が動くのを呆然と眺

めていたが、その言葉はすぐには頭の中に入ってこなかった。

「えっ…何…？ 何て言ったんだよ、叔父さん…？」

ビョルンは一瞬言葉に詰まったように黙り込んだ後、辛抱強く、小さな子供に言い聞かせるような口調で、もう一度、レイフにとって、これまでの人生で一番残酷な知らせを告げた。

「とても残念なことだが、搬送先の病院で先程ラースは…君のお父さんは、亡くなられたんだよ、レイフ…」

第8章 Paradise Lost (3)

「氣を落とすなよ、クリスター…そうは言っても、おまえもしばらくは辛いだろうが、ヘレナさんをしっかり支えてやるんだぞ」

「ありがとうございます、フランクス・コーチ…レイフと一緒に母を守っていくつもりです」

この日、葬儀社が用意した斎場には、ラーズの仕事関係の知り合いや親交のあった人々が、一日中ひっきりなしに弔問に訪れていた。

気丈なヘレナは、衆人環視の中で取り乱した姿こそ見せなかったが、さすがに全てを完璧に取り仕切ることには負担が重そうだったので、途中でクリスターが引き継ぎ、葬儀社のディレクターの助けを借りて、それら対面式を訪れる人々の相手をしていた。

「それにしても、さすがに、生前多くの人達に慕われていたラーズさんだけあるな…献花も弔問客の多さも、大したものだ」

「そうですね。お悔やみの言葉をかけられた時にも、結構親しみを込めて話し込んでいかれる方が多くて、ああ、父さんはこんなにくさんの人達に愛されていたんだと、今初めて分かったような気がします」

「うむ…だが、これだけの数の弔問客を1人でさばくのも、大変だろう？ 葬儀社のスタッフをうまく使えよ。レイフはどこに行ったんだ…？」

「レイフは、さっきトムが来ていたので、たぶん、一緒に控え室か

外に行って話し込んでいるんだろうと思います。まあ、身内の葬儀なんて初めてで戸惑うことばかりですし、大変は大変ですけど、むしろ、忙しい方が気持ちが紛れていいような気がしますよ。それに、父さんが死んだという実感もまだなくて……きつと、本当の悲しみを覚えるのは、明日の葬儀が終わった後なんでしょうね」

ほとんどのいつもと変らない冷静な態度でホスト役を務めていたクリスターが、ふと一抹の寂しさを漏らすのを、フランク・コースターは気の毒そうに見つめた。

「そうか、それもそうだな……クリスター、何かあれば、いつでも連絡をくれ。俺にできることがあれば、力になるぞ」

フットボール・チームのスタッフと一緒に訪れてくれたフランク・コースターを、最後に握手を交わして送り出した時には、もう夜半に差し掛かり、斎場には数人の親戚とコースの友人達がちらほら残っているだけになった。

ヘレナの姿を探すと、彼女は壁際に飾られた献花の前の椅子に坐って、傍らにいたビョルンと静かに話し込んでいる。

今でこそ随分落ち着いたように見えるヘレナだが、昨夜クリスターが病院に駆けつけた時には、コースの死亡が確認された直後ということもあって、ひどく打ちのめされ、彼の腕にすがりつくようにして泣いていた。凜然とした強い母の姿しか知らないクリスターは途方に暮れ、うまく言葉もかけられず、彼女を抱きしめることしかできなかった。

そうこうしているうちに、ビョルンに伴われたレイフが病院に到着し、またひとしきり涙の雨を降らせた後は、連絡を受けてやって

きた葬儀ディレクターから葬儀や埋葬に関する手続きを説明され、
何が何だか訳が分からないままに、流されるようにして、クリスタ
ーは今この場にいる。

（本当に、半分夢の中にいるかのようにふわふわして、実感がない
…）

それでも、この部屋の奥、祭壇に安置された大きな棺の中には、
ラーズの遺体が横たわっているのだ。

クリスターはその祭壇にはなるべく近づこうとも目をやろうとも
しなかったが、この時ふっと眺めやると、いつの間にか斎場に戻っ
てきたレイフが、棺の縁に手を置いて、中をじっと覗きこんでいた。

「レイフ、トムはもう帰ったのか？」

「うん…」

クリスターが近づいて声をかけても、レイフは目を上げようとせ
ず、棺の中のラーズの顔に、魅せられたかのように熱心に見入っ
ている。

「父さん、まるで眠っているようにしか見えないよな。声をかけた
ら、目を開いて起き上がりそうだ」

レイフは昨夜から泣き続けてすっかり泣き腫らした目をまた少し
潤ませ、鼻をすすりながら、言った。

「トムも他の皆も、すごく安らかな綺麗な顔だって言ってくれた。
ずっと体調を崩しているって聞いてたし、あんな別れ方をしたきり

だったから、どんなにやつれきった顔をしているんじゃないかって見るのが恐かったんだ：それが、今ここにいるのは以前と変わらない父さんだ。死んでいることは確かだけど：ちょっとだけほっとするよ」

クリスターは少々複雑な思いを噛み締めながら、レイフの慨嘆に耳を傾けていた。

ラーズがすっかり元通りの姿を取り戻してここにいられるのは、遺体の処置をしてくれた技術者の腕がよほどよかったからだろう。昨夜レイフも病院でラーズの最期の姿と対面したはずだが、動転していたせいで、細かい所はあまり覚えていないのだろうか。

（だとすれば、レイフは幸せだな：あんなに好きだった父さんの死に顔を、信じた何もかもに裏切られて死んだ、苦悶の表情として記憶することになったら：そんな重荷、きつとこいつには耐えられない）

クリスターはレイフほど、物言わぬラーズの遺体に親近感を覚えることはできなかった。欺瞞だとさえ思った。展示されるため、人の手を借りて見場よく整えられただけで、ラーズの最期はやはり、彼を支え立ち直らせようとしたヘレナが涙を堪えきれなくなるほどに、悲惨なものだったのだ。

（僕が最後に見た父さんの姿が、一番真実に近い：憎しみに血走った目で僕を睨みつけ、銃を向けた、あの父さんの顔を僕は一生忘れることはできないだろう。僕とレイフに裏切られて絶望し、自暴自棄に陥った末、こんなに早く、呆気なく死んでしまった）

クリスターは、涙もなく、乾いた虚ろな目を棺の中に横たわって

いる父親に向けた。もっと胸が痛んだり、悲しみがこみ上げたりしてくるかと思っただが、不思議なほど何も感じなかった。冷たい氷の塊が胸の中にあるかのようだ。

（僕と父さんの関係は、あの時に終わってしまったからだろうか。

父さんが死んでしまっても、それは他人の死と同じでしかない…だって、生きていたって、父さんが僕を息子として受け入れてくれることは二度となかったはずだから…それとも、生きていれば…もしかしたら、何か変わったろうか…生きてさえいれば、いつかは…？）

穏やかに目を閉じたラーズの顔を眺めているうちに、いつの間にか、クリスターはとりとめもない思考に沈み込んでいった。

（ねえ、父さん、あなたは、僕達を最後まで憎んだまま逝ってしまったんですか？ それとも、ほんの少しでも、僕達を愛していた時の気持ちを思い出してくれた…？）

エンバーミング処置のおかげで、どう黒かった顔には健康そうな赤味が差し、こけた頬や服の中には詰め物がされて、すっかり元通りの逞しさを取り戻したラーズを見ると、真実と錯覚の境がややふやにぼやけてしまいそうになる。

（おまえ達はもう俺の子供じゃない）

（おまえ達は父さんの一番の宝物だよ。…生まれてきてくれて、ありがとうな）

一体どちらが、父にとって、最後に残った真実であったのか。

クリスターは軽い混乱を覚えて、ラーズの姿からとっさに目を背

けた。

「クリスター…？」

レイフが怪訝そうに眉を潜め、呼びかけてきた。

「ああ」

自分が最後に見た父の姿をレイフに話すことは絶対にできないな
と思いつながら、クリスターは弟に顔を向けた。

「何だい、レイフ？」

レイフは、探るような奇妙な目をして、クリスターをじっと見て
いた。

「クリスターってさ、あまりいつもと変らないんだよな。涙も見せ
ないで、強いんだ…あの母さんだって、泣いていたのに…」

「僕まで泣いている訳にはいかないからね…せめて、葬儀をちゃんと
終わらせるまではと、できるだけ感情はセーブしているんだよ」

レイフは、少し哀しげな微笑をうかべた。

「クリスターは、こんな時まで自分を保っていられるんだな…オレ
は駄目だよ。だって、父さんが死にしまったのは、オレ達のせいな
のに—」

「レイフ」

レイフは、うっかり漏らした自らの言葉に絶句し、口元を震わせた。

「そうだ…オレ達のせいなんだ…」

突き上げてきた強い感情をコントロールできなくて、レイフはくしゃりと顔を歪ませる。

「レイフ、もう泣くなよ…おまえがいくら泣いたって、父さんは…」

レイフの嘆きようを見て気持ちを乱されたクリスターは、ぱたぱたと涙をこぼしている、その顔に手をやってぬぐおうとした。

クリスターが頬に触れた途端、レイフはびくつと身を震わせ、反射的にその手を振り払った。

「レイフ…」

クリスターが打たれた手を引っ込めて呆然と呼びかけると、レイフも自分がしたことにとちよつと呆然となりながら、彼を見返した。

「レイフ、おまえは、僕とのことを…後悔しているのか…？」

どんな答えが返ってくるのか半ば恐れながら、クリスターが問いかけると、レイフはさつと頬に血を上らせ、激しい目で見返してきた。

「違う…！」

意外なほど強く、はっきりとした口調。

しかし、またしてもレイフは、思い出したかのように棺の方にちらりと目をやり、そして、急に意気をなくして、小さな声でぽつりと呟いた。

「分からない…ごめん、オレ、何て応えたらいいのか、分からないよ」

クリスターは途方に暮れたように、レイフを見守った。

（レイフ…レイフ…）

レイフはクリスターの切ない眼差しには応えず、悄然と項垂れて父親に見入っている。

クリスターは無性に腹立たしくなってきた。

（よせよ、そんなに見つめたって、父さんはもう応えてくれないんだぞ…!）

クリスターがレイフの肩に手を伸ばしかけた、その時、背後から、控えめな男性の声が彼に呼びかけた。

「クリスター」

クリスターが振り返ると、そこには、先程までヘレナに付き添っていたビョルンが、母に似た端正な面差しに微かな哀感を漂わせて、ひっそりと立っていた。

「叔父さん…」

ビョルンは棺の中のラースに考え深げな眼差しをしばし当てたかと思うと、穏やかで人好きのする微笑をクリスターに向けた。

「今いいかな？　ヘレナが、明日の葬儀について、君と話したいことがあるらしいんだ」

「ああ、はい…」

クリスターは少し動揺しながら、弟から離れた。レイフと言いいいになりかけているのを、ビョルンに不審に思われただろうか。

「ヘレナとの話が済んだら、ここは私が見ているから、少し君も休みなさい。別室に軽食が用意されているよ。今朝から何も食べていないだろう？」

ビョルンはクリスターの肩にそっと手を置いて囁くと、改めて、まだ棺から離れようとしないうちにレイフの方に歩いていった。

「レイフ」

ビョルンが背中中で手を組んで傍らに立ち、優しく話しかけると、レイフは素直に顔を上げた。いつまでも泣いているのを見られて恥ずかしかったのだろう、荒っぽく目元をこしこしするのをそっとやめさせて、ビョルンはレイフがたどたどしく話す言葉に耳を傾けている。

そんな弟の様子を哀しい気分で眺めた後、クリスターは黙って踵を返した。

（ごめんよ、後悔しているのかなんて、残酷なことを聞いてしまった。僕はおまえを愛している、おまえも同じ思いだと信じている、でも…）

血を分けた兄弟を愛したことを、それを確かめたことを後悔などしていないと、まるで2人の犯した罪の犠牲になったかのように死んでしまった父親の棺の傍で言い切れるかというのは、また別の話だ。

逆に、レイフから同じ問いを投げかけられても、クリスターにはやはり、分からないと応えることしかできなかったろう。

「だから、おまえが僕に謝ることなんかないんだよ、レイフ」

まるで弟に直接語り掛けるかのように、優しい、理解に満ちた声で呟くクリスターの目から、幾滴かの涙が零れ落ちた。

今更のように、ひどい喪失感と寂寥感に見舞われて、クリスターは心配そうな周囲のお節介な視線を避けるよう、俯かずにはいられなかった。

失ったのは、父親の命だけだったろうか。ようやく手に入れた、もつとずっと大事なもので、一緒に失ったような気がしてならなかった。

（レイフ、僕はまた、おまえを見失うのか…？）

翌日、同じ斎場での追悼のミサが終わると、ラーズの棺は郊外の共同墓地へと移された。

棺を載せた葬儀社の黒いバンを後ろから車で追いかける道中、レイフは、前の座席に坐っているクリスターの頭をぼんやりと見ていた。

あれほど強く、ずっと会いたいと願い続けてきた相手なのに、ここに戻って以来、ほとんどろくに話もしていない。

（だってさ、まさか、こんな形でこいつと再会するなんて夢にも思ってたからさ：ああ、オレは、ずっとずっと心の中で祈ってた。クリスターに会いたい、神サマ、どんなことでもするから会わせてください：だからって、父さんの葬式でこいつと顔を合わせるのだけは、勘弁して欲しかったよなあ）

ラーズが急死したなどと、レイフは病院に着いてこの目で確かめるまで、信じていなかった。

（体の調子がよくないとは聞いてたけど、まさか死んでしまうなんて思わなかった。だって、まだ44才だぜ。早すぎるよ、あり得ない。そうだよ、だからオレ、いつか：時が経てば、父さんもオレ達のことを許してくれるかもしれないなんて、甘い期待をしていた。なのに、オレ達を憎んだまま、こんなに早く死んじゃうなんて、あんまりだよ、父さん：！）

病室で見たラーズはあまりにも面変わりしていて、レイフはとて

も正視などできなかった。昨日の通夜に集まった大勢の人達に、あの顔を見せるとしたら、絶対反対しただろう。

しかし、葬儀社のスタッフによって病室から運び出され、その日のうちに棺に入って家族のもとに戻ってきたラースには、もはや病苦の影も形もなく、プロの技術とはいえ、レイフは魔法にでもかけられたような気分だった。

（皆、とても安らかな顔だって言ってくれたね、父さん…その通りだとオレも思ったよ。何の苦しみもなく眠っているようだったから、見ていて、何だか少し胸の痛さが和らいだような気さえた。でも、本当は、父さんがそんなに安らかに死んだ訳じゃないことくらい、オレにも分かってんだ）

またしても涙がこみ上げてきて、レイフの視界はぼんやりとかすれた。もともと涙腺はゆるいのだが、我ながら、こんなに後から後から涙が出てきて、よくからからにひからびてしまわないものだと呆れてしまう。

（こういうところは、オレ、父さんに似たんだよ。父さんも、タフに見せたがるくせに、結構涙もろかったものな）

くすんと鼻をならすと、クリスターが頭を巡らせてこちらを振り返ったので、レイフは慌てて、窓の外を流れていく景色を眺める振りをしてごまかした。

（クリスター、今、何を考えてる…？ オレ達のせいで父さんは死んだんだ。まるで感情を遮断してしまったように淡々と動いているおまえだけれど、やっぱりすまなさや罪悪感を感じてるだろ？ あのことを後悔しているのかとおまえはオレに尋ねた。オレは分から

ないとしか答えられなかった。：おまえはどうなんだ、なあ：？）

こんなに近くにいるのにクリスターとは一言も言葉をかわさず、どこことなく気詰まりな時間はとても長く感じられたが、ついに葬列は、ラーズが埋葬される共同墓地に到着した。

街中を離れた場所にある、広い公園のような墓地には、美しく手入れされた芝生が青々と茂っていて、その上を、ラーズの棺が従兄弟や親しい友人達の手によって肅々と運ばれていく。更にその後ろに、黒い喪服に身を包んだ、レイフ達遺族や親族が続く。

（クリスター、オレ達は、一体これからどうすればいいんだろう？ ああ、この4日間、おまえと2人きりで話し合おうと思えばできたはずなのに、できなかった。だって、オレ達がこれから先どうするかなんて：死んだ父さんの傍で図々しく話せるか：？）

美しい緑の中を静々と進む列の中、レイフは隣に並んで歩いているクリスターをずっと意識していた。まともに顔を見たり話しかけたりはできなかったが、その手にもすれば目が行き、追っていた。

昨日、レイフがとっさに払いのけてしまった、クリスターの手―。

（違うよ、オレはおまえの手をもう二度と取らないって意味じゃないんだ、クリスター。分かっているだろ、オレはおまえを今でも―）

その手を取って引き寄せて、クリスターにそう訴える想像をしてみるレイフだったが、すぐに、これがどういう場であるかを思い出し、後ろめたい気分になった。

（そうだ、これは父さんの葬式だ。こんな場所で、まだクリスター

を愛している、父さんを死なせても、オレはやっぱりこいつと一緒に幸せになりたいんだなんて、どうして言える…？）

それどころか、この先ずっと今日の記憶は消えないのではないかと、ラーズの棺が予め用意されていた穴にゆっくりと下ろされていくのを眺めながら、レイフは思っていた。

（土の下はやっぱり寒いだろうか…ごめんよ、父さん、こんな目に合わせて、本当にごめん…）

周囲からはまた、耐えかねたような、静かな嗚咽とすすり泣きが漏れていた。

いつの間にか牧師がやってきて、死者のための最後の祈りの言葉を唱えている。

レイフはゆっくりと目を上げ、墓穴に下ろされたラーズの棺を挟んで向かい合って立っている、双子の兄を見つめた。哀しみに打ち沈み、傷つき疲れた顔をしていた。

ごめんと、その唇が小さく紡ぐ。

やがて、クリスターもレイフの視線に気付いて、顔を上げた。

（これから先、オレ達の間にはずっと、オレ達が殺した父さんが横たわっているだろう…忘れてしまうことは、できない）

2人がそうして無言のまま視線を絡ませあっているうちに、祈りは終わり、最後の別れをすませた人々は、ビヨルンに支えられたヘレナも含めて、墓地から静かに離れていった。

ラーズの傍に残るのがほとんど彼らだけになった時、クリスターの目が僅かに見開かれ、唇が動いた。

「レイ：フ：」

レイフははっと息を吸い込み、同じようにクリスターに呼びかけようとしたが、その時、ラーズの怒りに満ちた声が頭の中に鳴り響いた。

（おまえ達は、親を殺しておいて、まだ懲りないのか：！）

レイフは、足元に横たえられている棺を恐々見下ろすと、心を半分に引き裂かれるような気分で、もう一度クリスターを見た。

クリスターはそれ以上何も言わず、哀しげな、諦めたような目をして、レイフにそっと背中を向けた。

（クリスター：待ってくれよ、オレを置いていかないでくれ）

先に行く、他の遺族達の後を追って歩いていくクリスターの後ろ姿を見送りながら、レイフは呆然と立ち尽くしていた。

（兄さん：！）

ふいに、頬に何か冷たいものが当たるのを感じた。

「雨：：？」

レイフが顔を上げると、先程までよく晴れていた空はいつの間に

か暗い雲に覆われて、大きな雨の粒がぽつぽつと地上に落ちてくる。

「ああ、これは、本格的な雨になりそうだなあ」

己の唇から、淡々と感情のこもらない声がそう呟くのを、レイフは無力感に打ちひしがれながら、聞いていた。

第8章 Paradise Lost (4)

くすくすくす…。

そっくり同じ、ふたつの幼い声が、笑いあう。

ベッドの中の温かい暗がりで、子供達はぴったりと寄り添いあい、じゃれあったり、お互いの肌の匂いをかいだりしながら、甘い幸福感に浸っている。

ああ、これは夢、懐かしい幼年期の記憶だと、レイフはぼんやり思いながら、薄っすらと微笑む。

とうに大人になったはずのクリスターとレイフ。だが、ここには、小さな子供のままの2人がいる。

(気持ちいいね)

片割れが屈託なくそう囁くのに、レイフも素直に頷いて、彼の体に腕を回し、甘えた声で囁き返す。

(うん、ずっと、こうしていたいよね)

クリスターの柔らかい唇が頬っぺたや瞼の上にちゅっと押し付けられるのに、レイフも応えるよう、無邪気なキスを返す。

それは、ごく自然で、当たり前のことのようで、こうして一緒に抱き合って眠ることに、2人とも何の抵抗も疑問も抱きはしない。

（ああ、幸せだよ、クリスター：オレとおまえの2人きり：このままおまえと一緒にいられるなら、他には何もいらない…）

レイフは幸せのあまりに泣きそうになりながら、呟いた。

夢の中にも現実のレイフの意識は入っていて、だからこそ一層、このなくしてしまった楽園への郷愁にも似た愛慕が、胸を切なく締め付ける。

そんなレイフの唇に、再びクリスターが触れてきた。いつの間にか、それは子供の唇ではなく、レイフがはっきりと覚えている熱っぽさでレイフを求め、吐息を吸い、舌を絡めてきた。

（クリスター：クリスター、もう二度とおまえを離したくない：オレを離さないでくれ）

本当に涙がこみ上げてくるのを感じながら、レイフは己の上ののしかかる、しっかりとした重みのある体をかき抱き、夢中になって、その唇を食った。

ゆらゆらと生暖かい水の中を漂うような、奇妙な浮遊感。唯一確かに感じられるものは、ひしと抱き合っている、相手の体の感触だけだ。

しかし―。

（おまえ達は、一体何をしているんだっ?!）

完璧だと思われた、2人だけの閉ざされた楽園は、突然落ちた雷のような怒声によって、木っ端微塵に碎け散った。

(父さん、やめてっ)

動揺した少年の声が叫ぶ。

(ちゃんと自分達のベッドで寝ろと言っただろう。おまえ達はもう小さな子供じゃないんだぞ)

問答無用とばかりに、伸びてきた太い腕が頭から被っていた毛布を剥ぎ取り、怯えて縮こまるレイフの肩を掴んで、相棒の腕の中から引きずり出した。

「嫌だ!」

自分のあげた叫び声に驚いて、レイフははっと目を見開いた。

「う…あ…?」

傍に怒りに満ちた父親の大きな体が立っているのではないかと、恐れ戦きながら、きよろきよろと辺りを眺め回す。

しかし、ベッドの傍には誰もおらず、ここは現在自分が暮らしている叔父の家だということに気付いて、やっと安堵したかのように、レイフは深々と溜息をついた。

「まったく、シュールな夢を見ちまったぜ…何これ、欲求不満?」

のっそりとベッドから身を起こし、苦笑混じりに呟く。

(子供時代の懐かしい記憶に、もう一度クリスターとやりたいって

願望が入り混じったような、訳の分からないエロい夢：それを最後は父さんの雷で叩き起こされるなんてさ、ああ、気分悪いぜ）

レイフは抱え込んだ膝の上に顔を突っ伏して、軽い調子でぼやが、その瞳は暗く沈んでいる。

（父さんの葬式から、もうじき半月か：そう、あいつとまた離れ離れになって半月だ。考えてみりゃ、オレが、あいつなしでこんなに長い期間を過ごすのは初めてだよな。いや、11才の時にいっぺん似たような状況にはなったっけ：父さんと母さんが大喧嘩の末に別居して、オレ達も引き離された：あの頃は、あいつが恋しくて毎日泣いてたっけ：父さんがオレを慰めようとフットボールの試合や色んな所に遊びに連れて行ってくれたけど、全然楽しくなかったし、何を食べてもおいしくなかった。あの頃みたいに、あいつなしでは息もできないほどの苦しさは、大人になった今はさすがにないけど、でも、やっぱり落ち着かなくて：何だか、すごく変な気持ちだよ）

ふいに、レイフはひどく心もとない気分になって、不安そうに己の肩を抱いた。

「会いたい：クリス：」

しかし、唇にその名前を上らせかけただけで、胸がきしむように激しく痛んで、また黙り込んでしまう。

（呼んだって、あいつはここに来ない：どうせ会えない相手の名前を呼んでみても、余計に辛くなるだけじゃないか）

レイフはベッドに座り込んだまま、しばらくぼんやりした。

（あいつとオレは愛し合っている恋人同士だけれど：そんなオレ達を受け入れてくれる場所は、ここにはない）

父親を無残に死なせてしまったという罪悪感は、依然として、レイフの胸に深く根付いている。

（もう二度とあんな思いはしたくない：オレ達のために他の誰かを不幸にするなんて、絶対に嫌だ）

しかし、ならば、クリスターのことを忘れて1人で生きられるのかというと、その考えを頑なに拒否する別のレイフがいる。

（結局、オレはこの期に及んでも、あいつをあきらめられずにいる：全く、我ながら最低だよ……。ああ、他の誰も、父さんのように不幸にすることなく、2人が一緒に生きられる世界がもしどこにあるなら：オレはきつとあいつをそこに連れて行くのに：）

それは夢のように抽象的な話で、実際あてがある訳では全くなかったが、諦められず、レイフは取りとめもない考えをひたすら追いつづけていた。

（だってオレは、他人を傷つけるのは辛いけれど、それ以上にあいつが不幸な生き方をするのも嫌なんだ。父さんの埋葬場所で最後に見た、あいつの悲しそうな顔：あいつはオレを気遣って、何も言わずに去って行ったけれど、どこで何をしようが、あいつがオレなしで本当の幸せを感じることもなんかあるものか。すげえ自惚れみたいだけれど、オレがあいつ抜き的人生なんか考えられないのと同じように、あいつだって今頃、これから先どうすればいいのか分かんなく、途方に暮れているはずだよ：って、ああ、くそっ、何馬鹿なこと考えてんだ、オレ！）

レイフはいきなりはたとなって、苛立たしげに頭をばりばりとかきむしった。

（これから先の計画は今でも真っ白なままなのは、オレだけだよ。あいつは違う、一応は、将来の青写真はちゃんとできてんだものな。素適な恋人もいて、来月からは前途洋々たるハーバード大の学生だ。このまま逆らわずにレールに乗って進んでいけば、確実にエリートとしての輝かしい人生が開ける。それを、オレと一緒にいる方があいつは幸せになれるなんて、せっかく決まった大学を自分から蹴って、今この体たらくのオレが無責任に言えるか？ オレのためにあいつの人生を滅茶苦茶にしてしまうかもしれないのに…そうだよ、今は辛くても、結局あいつにふさわしい世界で能力を存分に発揮できる方が、うんと充実して幸せな人生なのかもしれない…）

そこまで考えて、すっかり自信を喪失したレイフは、これ以上落ち込む前に、逃げるようにベッドから這い出した。

（ああ、駄目だ、これから先のことを考えると煮詰まるばかりだし…緊急避難的に逃げ込んだ、この家だけれど、そろそろ三ヶ月近くになるのか…叔父さんは優しいし、何も言わずにオレを見守ってくれるから、つつい甘えて、ごろごろしちまったけれど、いつまでも、このまま何もせずにこの家にいるわけにはいかない。当たり前のことだよ…オレだって、もう19才の大人の男なんだから、自分のことくらい自分でちゃんと面倒見るべきなんだ。進学しないならしないで、そろそろ真剣に働くことを考えないと…）

テキサス大からのせっかくのオファーを蹴ったことについては、レイフは今でも後悔していない。あれほど愛していたフットボールなのに、そろそろシーズンが始まる季節になっても、何の興味も覚

えなくなっていた。

（ほんと、関心がなくなると綺麗さっぱりデリートって、こういうところは、オレ、呆れるくらいあっさりしてんだよね…だから、フットボールで身を立てるとか、そういう方向には行かないだろう。フットボール以外でオレができることって、何があるだろう…？まあ、体力には自信があるし、格闘技も得意だけど、それを活かす仕事って…うん…警察官とか消防士とか、そっち系…？ 獣医にならなくてもいいなんて思ったことはあるけど、それはいきなりハイドル高いよな…そのために死ぬ気で勉強しようと思わないし…ああ、駄目だ、どれもピンとこないや…）

レイフが実家を飛び出してニューヘイブンの叔父の家に逃げ込んだから、様々な変転があったが、それでも三ヶ月が経過しつつあった。

父の突然の死からしばらく何も手につかなかったレイフも、そろそろ真剣に今後のことを考え始めていた。しかし、具体的に、これという目標を定めることはできずにいる。

（ただひとつ、はつきりしているのは…オレは、母さんのいるあの家には戻らないし、叔父さんとこのまま一緒に暮らし続けることもないだろう…たとえ叔父さんが、このままいてもいいと言ってくれても、オレはこの街で仕事を見つけて、新しい生活を始めようとは思わない。そうだ、オレは…どこかずっと遠い場所に行きたいんだ。見たことも、想像したこともない、遠い別世界に…）

レイフがパジャマ姿のまま、裸足でぺたぺたと階段を降りていくと、ビヨルンがキッチンでバディに餌をやっていた。

「おはよう、レイフ」

レイフが入ってくるなり、バディは尻尾を振りながら駆け寄ってくる。その頭を両手でがしと撫で回してやりながら、レイフもビョルンにお馴染みの朝の挨拶をする。

「うん、おはよう、叔父さん：あれ、今日はどこかに出かけるのかい？」

綺麗にアイロンのかけられたシャツにジャケットを身につけたビョルンの姿に、今日は日曜日だし、もしかしてデートとかではないのだろうかとちょっと怪しみながら、レイフは素朴に問いかける。

「ああ、今日は、私のボランティア団体の会合があつてね。まあ、もっぱら議題は、例の軍のリクルーターとのいざこざに関してなんだが：私が受けた被害も含めて、会議の後、リクルーター側の代表者のマイルズ軍曹とも話し合うことになっているんだ」

「なあんだ、せっかくの休日なのに、色気のない話だよな。叔父さん、まだまだ全然いけるのにさ：でもさ、あんな嫌がらせをしてきた軍と話し合うって、危なくないのかよ？ オレも一緒に行こうか：？」

「ボディ・ガードの必要はないよ、レイフ。既に先方から謝罪の電話はあったし、そんな物騒な話し合いにはならないだろう：私のことより、君は、今日どうするんだい？」

「取り合えず、午前中は、犬の散歩のアルバイトかな：その後どうするかは決めてないけど…」

「近所の奥さん達の間では、君の評判は上々のようだね。他人慣れない、扱いにくい犬でも、君の言うことならなぜか聞くて…」

「へへ、犬は好きだし、得意なの…その代わり、猫とは相性悪いんだけどね。ああ、やっぱり、本気で動物相手の仕事をするとなると、そんな好き嫌いは言ってられないだろうなあ」

レイフが、じゃれつくバディの首をぎゅっと抱きしめながら漏らすのに、ビョルンは首を傾げた。

「え？」

「うーん、そろそろ真剣に働かなきゃって、オレ今、悩んでんの…」

レイフがこの頃折りにつけ考え込んでいる難しい命題を口にする
と、ビョルンはちよつと真剣な面持ちになった。

「そうだね…」

出かける前で時間はあまりないだろうに、ビョルンは、レイフが
コーヒーを飲んでいるテーブルの前の席に座って、まっすぐ彼の目
を見ながら、口を開いた。

「仕事を見つけるにせよ、勉強するにせよ、私はいつでも相談に乗
るし、協力を惜しまないつもりだよ、レイフ…君のことはヘレナに
頼まれているし、私自身、君を大切な家族だと思っている。子供の
いない私にとっては、本当に息子のようなものだ。だから、気兼ね
などせず、この家にずっといてくれてもいいんだよ。妻と別れて以
来、1人で暮らすには、ここは広すぎると思っていたんだ」

ビョルンの愛情のこもった温かい申し出に、嬉しいながらも少し困りながら、レイフは答えた。

「ありがとう、叔父さん…でも、オレ、いずれはこの家を出るつもりだよ。オレも叔父さんのことは大好きだけれど、いつまでも甘えているわけにはいかないし…何となく、この土地には長く暮らせない…暮らしたくないんだ…」

レイフの拒絶が意外であつたのか、ビョルンは優しい顔を少し曇らせた。

「この街には馴染めそうにないかい…？ やっぱり、住み慣れたボストンの近くの方がいいのかな…？ 独りになったヘレナのこと心配なら、しばらく実家に戻って、これからのことはまた改めて考えてもいいと思うけれど…」

「べ、別にこの街が嫌いなわけじゃないよ。実家からも、そんなに遠くないし…むしろ近すぎるって言うか…」

ビョルンに追求されて、レイフはしどろもどろになった。訝しげな叔父の視線を避けるよう、窓の向こうにある庭を眺めやりながら、溜息混じり、ぽつりと漏らす。

「どこか遠くに行きたいなあ…」

レイフはまたしても、誰も自分のことを知らず、構いもしない、遠い未知の世界に思いを馳せた。ずきんと、胸の奥の小さく痛んだ。

「…君には、誰にも打ち明けられない、深い悩みがあるようだね、レイフ」

レイフが内心ぎくりとして顔を上げると、ビョルンはレンズの曇りが気になったのか、眼鏡を外して、ポケットから取り出したハンカチで拭きながら、さり気ない口調で言った。

「無理に問い詰めようとは思わないが、私は、君のことがいつも気がかりだよ、レイフ：君の抱えている悩みが、どこか遠くへ行きたいとまで君に言わせているのだとしたら、尚更ね。実家で何があったにせよ、レイフ、そんなふうには君の将来を決めるべきではない。辛い現実からただ逃げるだけでは何の解決にもならず、君はいつまでも進むべき道を見つけられずに、迷い続けるだけだよ」

「叔父さん…」

レイフは、さすがにヘレナの兄だけある、ビョルンの鋭い指摘に目を瞬いた。

「この三ヶ月、ボストンを離れたこの場所で暮らすことで、君が立ち直る機会を得られたと願いながら、私は君を見守り続けた」

ビョルンは眼鏡をいじる手をとめ、レイフを正面から見据えた。普段は温和なくせに、いざ本気になると、いい加減な言いぬけは許さない鋭さを帯びる、その琥珀色の瞳は、全く誰かにそっくりで、レイフの胸を深く刺し貫いた。

「レイフ、君をそこまで傷つけた…今も苦しめている、その悩みは、君を愛し助けたいと真摯に思っている、ヘレナや私では助けにならないようなものなのかい…?」

その口調にこもった、真率な気遣いと愛情に一瞬すがりつきたい

気持ちに駆られたレイフだが、やはり、そんな甘えを自分に許すことはできなかった。

「う…ごめん…叔父さんの気持ちはとてもありがたいけれど、オレを心底大切に思ってくれている人達だから、余計に打ち明けられない…巻き込みたくないって思うんだ」

レイフはいかにも辛そうに顔を歪め、唇をぎゅっと引き結んだ。

（オレの大好きな人達を、父さんの二の舞にさせちゃうのは絶対嫌だ…だから、この秘密は、決して打ち明けられない…）

ビョルンは、それでもしばらくはレイフの気持ちが変るのを期待して待つ構えだったが、やがては彼がどうしても答える気持ちにはなれないことを悟ったようだ。残念そうに、椅子から立ち上がった。

「分かったよ、レイフ…この件については、君の気が変わって、私に打ち明けてくれる日を待つことにしよう。君の進路については、そうだな…今朝は私にも十分な時間がないから、また家でゆっくりできる時に改めて話し合おう。働くか進学するか、何も急いで結論を下すことはない。本当は、君の抱えた問題を片付けてからでもいいと私は思うけれどね」

ビョルンは表情を和らげてそう言いながら、愛用のシルバー・フレームの眼鏡をかけた。

「ああ、眼鏡なんかかけずに、素顔のままの方がいいのに…」

何の脈絡もなくぽつんと呟いた後、レイフは慌ててごまかすよう、不思議そうな面持ちになるビョルンに言った。

「あのね、叔父さん：確かにオレは、遠くに行きたいって言ったけど…それは別に、逃げ場所を探している訳じゃないんだよ…本当に、ただ逃げてるわけじゃないから、それだけは信じて…！」

「分かっているよ、レイフ」

熱心に訴えるレイフの頭を軽くひと撫でして、ビョルンは車のキーを手にキッチンを出ていった。その後姿をじっと見送ったレイフは、胸の中にもやもやとわだかまるものを覚えながら、ポツリと漏らした。

「いや、叔父さんは分かってないよ…たぶん、誰にも分からない…」

1人になったレイフは、まずは予定通り、犬の散歩のアルバイトをすませた後、午後は特にすることもないので、家に戻って、犬のバディと一緒にリビングでテレビを見ながら、簡単な冷凍ピザのランチを取っていた。

（逃げてるわけじゃない、か…うん、そうだよ、オレが探しているのは、辛い現実から逃げ隠れるための場所じゃないんだ）

アルバイト中も今も、レイフはずっと心ここにあらずの状態で、遊んでももらいたくて庭に出ようとしきりに誘っていたバディも今は諦めて、その足元にじっとうずくまっている。

（そこでなら、大切な人を裏切り傷つける恐れもなく、オレがあいつと一緒にいても許されるような…そんな夢みたいな場所のことなんだよ。オレ達が2人で過ごした子供部屋はもうないし、一緒に頂点を目指したフットボールの夢も終わったけれど、それに代わるよ

うな何かを、どこか別の場所に見つけられたらいいと思うんだ)

今朝、叔父と短い時間話し合った時にもらした自らの言葉を、レイフは何度も思い起こし、その意味について考え込んでいた。

(そんな場所が本当にあるのかどうか分からないし、どこに行けば見つかるのか、見当もつかないけどさ。ただ、このまま普通にここで仕事を見つけて、叔父さんや母さん、友達と今までどおりに付き合いながら築き上げていく、当たり前前の道を進んでも、その先にオレとあいつが再び一緒になる未来は開けてこない…それなら、少しでも可能性のある選択肢に賭けてみたいんだ)

テレビでは、開幕間近となったNFLの特集番組を流していたが、以前ならばのめりこむように熱心に見ていただろう、その番組に目は向けていても、内容は全くレイフの頭に入っていない。

(あいつがどう思うか、ほんととは意見を聞かなきゃいけないんだろうけど、そこまでの確信はやっぱり持てないかな…だって、そろそろ大学だって始まるだろう。どうやら年上の恋人ともうまくやってみたいだし…何事もきちんと計画的なあいつのことだから、どこか遠くに行ってやり直したいなんて漠然とした夢みたいな話をしたって、ただの感傷だろうって、あっさり却下されるかも…ああ、くそ、また煮詰まってきたぞっ)

レイフはくしゃくしゃと紅い髪をかき回し、溜息をつきながら、しばらく無視していたテレビ画面に目をやった。

すると、丁度番組の合間のCMが映っていた。初めは新作映画かドラマの宣伝かと思ったが、すぐに違っていると分かった。

（ああ、何だ、陸軍の新兵募集のコマーシャルかあ……ううん、さすがにお金かけてる感じで、うまく作ってあるけど、こんな子供だまに引っかかって、タフでクールな兵隊さんに憧れて入隊するガキどもがいるとしたら、そいつら、相当頭よくないぜ……最悪、アメリカ軍はおつむの空っぽなマツチョばかりってことになっちゃうよな）

ビョルンからの刷り込みのせいかな、あまり軍の勧誘活動にいい印象を持っていないレイフは、初めは批判的な気持ちで、いかにも血気盛んな若者の気を引こうとしていることが見え見えの、ハリウッド映画をモデルにでもしたようなはでな演出が続く画面を見ていた。

もしかしたら本当にハリウッドに制作を依頼したのかもしれないし、メインになっているハンサムな兵士は実はプロの役者なのかもしれない。

しかし、背景に映るのは、本物の米軍が展開している国々のようだった。砂漠や熱帯、アジアや欧州、見たこともない様々な世界がそこに描かれていた。軍に入れば、この国を飛び出し、他の広い世界を知るチャンスを手握めると若者相手にアピールしたいのだろう。

この種の宣伝を目にしたことは、レイフには何度もあったはずだから、これまでどおり、さらっと流して忘れてしまってもよかった。

しかし、そのメッセージを読み取った途端、レイフは一転、画面に釘付けとなった。これも若者の気を引くための餌には違いないと頭で分かってても、心をわしづかみにされて、どうしても目が離せない。

（今までテレビや映画でしか見たことのないような国々……この町どころか、アメリカからも離れて、未知の世界に向けて飛び立つんだ。

オレには想像もつかない、驚くような風景、異質な文化、聴いたことのない言語を使う人達がいる世界：いっそ、そこまで遠い場所に行っちまえば、もしかして、オレが探すものは見つかるんじゃないか：？）

そう思った瞬間、レイフの頭はかあっと熱くなった。心臓の鼓動が急速に早くなり、呼吸をするのも苦しいほどだ。

ほとんど衝動的に手近にあったメモとペンを引つつかみ、震える手でテレビ画面に流れる電話番号を書きとめる。

（ああ、オレって、一体どうしちゃったんだ：？ 軍隊なんて、今まで全く興味なかったし、愛国者って柄でもないのに：ガキの頃はランボーとかに憧れたけど、正義のヒーローは映画の中にしかないことが分かるくらいには、もう大人だよ。叔父さんの話を聞いていなくたって、好き好んで外国にまで行って戦争したいなんて、これっぽっちも思ったことはないけれど：）

どうにか冷静になろうとしても、突き上げてくる衝動を抑えきれない。これはもう百パーセント直感でしかなかったが、ともかくレイフは、書き留めたメモを手にも、すぐに電話の場所に飛んでいった。

「あの：すみません、実は、オレ：ええつと：軍に入りたいんですが、どこに行つて、何をどうしたらいいんですか：？」

レイフがたどたどしくも電話越しに質問すると、軍の担当者は親切な対応で、最寄りの新兵募集センターの場所と電話番号を教えてください。

高校をちゃんと卒業さえしていれば、入隊の資格はあるそうだ。

志望者は、体力測定や知能検査など簡単な審査の後、教育訓練基地での訓練を受けた上で、希望と適正にあった部隊に所属されるという。

頭が沸騰しているような興奮状態で、一通りの説明を聞き、礼を言って受話器を置いた時、レイフは、別にこんな回り道をしなくても、ビョルンに聞けば、軍のリクルーターの連絡先くらい簡単に分かったという事実に気付いた。

（ああ、でも：叔父さん、オレがいきなり軍隊に入るなんて言い出したら、シヨックだろうなあ。何しろ、軍の強引な勧誘活動に反対する親達のサポートしている人だから：その自分が保護している大事な甥っ子が、突然入隊なんて、ありえない。もしかしたら、オレに裏切られたって思うかも：あの優しい叔父さんを傷つけるのは、オレも嫌だよ）

近しい身内の期待を裏切ることには敏感になっているレイフは、ビョルンの気持ちを考えて、よほど悩んだ。しかし、ほとんど視界ゼロのような、どこに向かって歩き出せばいいのか分からず、立ち尽くすばかりの日々にやっと差し込んできた光を諦めてしまうことは、やはりできなかった。

結局、ビョルンに相談してからだと反対されるのは明白だったの
で、内緒で募集センターまで出向くことにした。

（ごめんよ、叔父さん：とりあえず、話を聞きに行くだけだから、黙って行くけど、許してよ。それに、もしも、このまま入隊ってことになっても、オレは、別に何の考えもなく、騙されるようにして、軍に入るわけじゃない：ちゃんと目的があつてのことだから：）

本当はすぐにも募集センターを訪ねたい勢いのレイフだったが、今日はビョルンがその責任者と会うと言っていたのを思い出し、万が一にも鉢合わせをしたら気まずいだろうからと一日待つことにした。

頭に血が上った今の状態で行ったら、本当に一時の感情だけでサインまでしてしまいそうだったので、それは正しい判断だったと思う。

しかし、たった一晩とはいえ、秘密を抱えながら、大好きな叔父に普通に接するのは、レイフにとって難しかった。

その夜、ビョルンはレイフと今後の進路について話をするつもりでいたのかもしれないが、レイフは、友達に電話をしたいとか何とか適当に言い訳をして、食事の後は早々に自分の部屋に引きこもった。

（叔父さんは勘がいいからさ。オレの様子がおかしいって、怪しまれる前に逃げとく方が無難でしょ…ごめんよ、明日募集センターで話を聞いた後、ちゃんと話すから…）

そうして、一夜明けた、月曜日、レイフは叔父の所有する予備の車を借りて、30分ほど走った所にある、米軍新兵募集センターを訪ねた。

大きなショッピング・センターに隣接されている、その建物の中には、陸軍だけでなく、空軍、海軍、海兵隊の募集事務所が入っていて、それぞれの部屋のドアには各軍のポスターが貼られていた。

（ふうん、軍の募集事務所って、こんな身近な所に普通にあるんだ

…気がつかなかったけど、うちの近所にもあったんだろうか…？」

たまたま部屋から出てきたリクルーター達が、レイフを見かけて、実に親しげに声をかけてくる。

「やあ、君は海軍に興味があって来たんだろう？」

「よかったら、海兵隊の事務所に寄っていけよ。話を聞くだけの価値はあるぞ」

どこも新兵を欲しがっているのか、レイフに向けられる目には、親しげな中にも真剣に値踏みをするような色があって、怖いほどだ。

レイフは一瞬迷ったが、結局、昨日テレビCMを見た陸軍のドアを叩いてみた。

部屋の中にはデスクが三つあり、真ん中のデスクに座っていた、がっしりした体格の担当官がレイフを見るなり立ち上がり、声をかけてきた。

「陸軍に興味があるかい？」

「はいっ」

思わず姿勢を正して答えるレイフに目を細め、つかつかと近づいてくる、その担当官の胸のネーム・プレートには『マイルズ』と書かれている。

（ああ、この人が、叔父さんの話してた、ここの責任者のマイルズ選任軍曹か…感じのいい人だな。他のリクルーターとは対立してい

る叔父さんが、この人だけは信頼できるって言い切るくらいだから、たぶん信じていいんだろう…)

マイルズに勧められて、デスクの傍のソファに腰を落ち着けるや、レイフはすうっと深く息を吸い込んで、切り出した。

「オレの名前は、レイフ・オルソン：今年高校を卒業したばかりの19才です。マイルズさん…ええっと、軍曹って呼んだ方がいいのかな…？ 実を言うと、あなたのことは叔父のビョルン・エルバークから聞いて、少しだけ知っています。でも、今日ここを訪ねたのは、叔父とは一切関係なく、オレの個人的な興味からなんです。どうかオレに、陸軍にどんな職種があるのか、海外を含めた色んな場所で活動するためにはどうすればいいのか、教えてもらえますか？」

ここに来るまで、レイフは、ちょっと話を聞くだけだと自分に言い訳をしていた。

しかし今、マイルズ選任軍曹を目の前にして質問を投げかけた時、彼の答えがどんなものであれ、自分の気持ちは既にほとんど決まっているのだということに、レイフは気がついた。

(進路のことであんなに煮詰まっていたのが嘘みたいのに、心がクリアーになっている。何だか、すごくビビッときたんだ…まるで運命って奴に出会ったような…)

これだと思った時の自分の直感ほとんど外れないと、レイフには常日頃自信がある。

(そうだ、間違いない、オレはこのまま軍に入るだろう。直感だけで人生を決めるのかと皆から反対されることになっても、後悔なん

かするものか。今やっとオレは迷いから解放されて、断言できる…
これこそ、オレの探していた何かにつながる道なんだ…！）

第8章 Paradise Lost (5)

新兵募集センターを訪問した、その夜、レイフはビョルンの書斎のドアを叩いた。

「叔父さん、まだ起きてるんだ？」

ビョルンは、間もなく始まる大学の講義のための準備だろうか、机の上に広げた分厚い本のページにあてていた目を上げ、扉の所に佇んでいるレイフににっこりと笑いかけた。

「君こそ、どうしたんだい、レイフ。いつもならとっくに寝ている時間だろ？」

「うん：何だか、ちょっと寝付けなくて…」

話があるとすぐには切り出せず、言葉を濁して、そっと部屋の中に入ったレイフは、窓の傍にある、背もたれのある椅子にどさりと座り込んだ。

「なあ、ここに少しいてもいい？ 邪魔しないから…」

レイフが上目遣いになって囁くと、ビョルンはふっと微笑んで、いいよと短く答えた。

（叔父さんって、やっぱりあいつに似てるなあ：涼しげな目元や賢そうな話し方、人当たりがよくって誰に対しても優しいけど、怒らせるときって厄介な所も：オレがこれから打ち明ける話は、この人をととても失望させるだろう。はつきり言って怖いけど、叔父さんが

これまでオレに注いでくれた愛情と気遣いを思ったら、やっぱ、黙ってここを出て行くわけにやいかないもんな)

熱心に調べものをしているビョルンの怜悧な顔にはからずも見惚れながら、レイフが考え込んでいると、そのビョルンがふいに小さな溜息をついて、顔を上げた。

「レイフ、そんなにじっと見つめられたら、顔に穴があきそうな気分になるよ。私に何か言いたいことがあるなら、早く言いなさい」

「ご、ごめん、邪魔しないって言ったばかりなのに…」

レイフは慌てて背もたれから身を起こし、詫びた。

「いや、この辺りでそろそろ切り上げようと思っていたところだったんだ。この頃、夜遅くに根を詰めて本を読むと、目が疲れてね…年かな…?」

ビョルンはおもむろに眼鏡を外し、疲れたように眉間を指先で押さえながら、言った。

「あはは、老眼にはまだ早いよ、叔父さん。たぶん、眼鏡があっけないんだよ。いっそコンタクトにしちゃえば? その方が、若く見えるよ」

「…それで?」

ビョルンは机の上に肘をつき、軽く片眉を跳ね上げるようにして、レイフをじっと見つめた。

「あ…う…あのさ、叔父さん…前に、言ってたよね、ずっと好きな人がいるって…その人はとくに結婚して幸せな家庭を築いているから、今更どうするつもりもないけど、やっぱり忘れられないって…」

ビョルンにいきなり水を向けられて焦ったレイフは、とっさに、今するつもりではなかった、別の話を切り出した。

「一体どのくらい、その人のことを愛してきたの…？ 何年たって、本当に、そういう気持ちは変らないものなのかい？」

これはこれで、一度叔父に聞いてみたかったことではあったのだ。

「いきなり何を尋ねるかと思ったら…君が、こういう話に興味を持つのはちよつと意外だよ、レイフ。うっかり話すんじゃないかな…？」

「別にいいじゃん。そこまで教えてくれたなら、出し惜しみせずに話してよ、ケチ」

ビョルンは一瞬迷うような顔をしたが、レイフがしつこく催促するので、しょうがなく口を開いた。

「その人とは、すごく昔からお互いによく知っていたんだ。私はずっと彼女が好きだったけど、いつから、その気持ちが恋愛感情に変わっていたかなんて、よく分からないよ。はつきり自覚したのは、私が20才くらいの頃か…彼女に恋人ができて、じきに結婚が決まった時かな」

「あちゃ…タイミングとしては、最悪だね。でもさ、結婚しちゃう

前にコクって、彼女を婚約者から奪おうとかは思わなかったのかよ？」

「いや：彼女が私をそんなふうに見ていないことだけは明らかだったからね。相手の男がまた私とは正反対のタイプだったんだ：正直、がっかりしたけれど、彼女と一緒にあって幸せになれるのはこういう男なんだろうなと、なまじ彼女の性格がよく分かるだけに、納得できる部分もあった。だから、私の出る幕なんて、初めからなかったんだよ」

「叔父さん、可哀想：あ、ごめん：でも、そうすると、もしかしてもう20年近く、ずっとその人を想っていたわけ？　ねえ、そんなことって、本当に可能なのかよ。一緒に暮らしているわけでもない、とうに他人のものになってしまった人を、一生愛していられるものなのかよ、どうして：？」

レイフの遠慮のない追求に、さすがにビョルンは困ったような顔をした。

「どうしてなのか、私の方こそ、聞きたいくらいだね。もしかしたら、一緒にいなかったからこそ、あの時のまま、私の彼女に対する感情は変らなかったのかもしれない：消えるわけでも燃え上がるわけでもない燠のように、ずっと：」

「でもさ、もし本当に今でも好きなら、その人がたとえ結婚していたって、やっぱり欲しいと思うことはあるんじゃないのかよ？」

我ながら一体何をむきになっているんだろうといぶかりながら、レイフは尚もビョルンを問い詰めた。

「叔父さんは、告白する前にもう振られたって思い込んでるみたいだけど：ねえ、もしも：その人が、実は叔父さんのことが好きだとしたら、叔父さんはどうする：？ 平穩な今の暮らしをぶち壊して、家庭も何もかも捨てさせてでも、自分の手でその人を幸せにしてみせるとは思わない：？ そうさ、どこか遠い世界と一緒に行って、一からやり直すんだよ。そこまでやるにや、相当な勇気と覚悟がいるけど、お互い好きあっているなら、2人の幸せのため、そのくらの犠牲を払うことはできるんじゃないのかよ？」

椅子から半ば身を乗り出し、燃えるような激しい目をして訴えかけるレイフに、ビョルンはちよつと驚いたように目を見張った。

「そんな、『もしも』の話はできないよ、レイフ：」

「で、でも：ちよつとは考えたことくらい、あるだろ：？ どうしたら、その人は自分のものになってくれたんだろうとか：？」

ビョルンの困惑した顔を見ながら、一体自分はこの人に何を聞きたいのだろうとレイフ自身不思議に思った。

「もしも、うんと若い頃に：今の君くらいの年に、私が自分の気持ちに気づいていたら、どうしたかなと思うことはあるよ：衝動のまま、後先の結果も考えずに、好きだと言って：ありえないことだけれど、彼女も私を好きだと言い：一緒に幸せになる：駄目だ、今の私には、想像もつかないね：」

ふつと苦笑して頭を振ると、ビョルンはしばし遠い目になって、何事か考え込んだ。その端正な顔が、どこかとても哀しそうだったので、レイフはたちまち後悔した。

「叔父さん…ごめんよ、変なこと聞いて、怒ったかい？」

「ああ、いや…別に怒ってなんかいないよ、レイフ。すまない、つい、ぼんやりしてしまった」

はっと我に返ったビョルンは、取り繕うように呟いて、改めて、レイフに向き直った。

「それにしてもね、レイフ…まだまだ子供だとばかり思っていたけれど…まさか君が、誰かに恋するあまり、そこまで深く思いつめているなんて、全く驚いたよ」

「こ、恋なんて…どうして、そんなこと、分かるんだよっ」

たちまちレイフは、茹で上がったように真っ赤になった。

「いや、今の話を聞いていれば、普通に分かるだろう…そうか、全てを捨てて一緒になろうとその人に言い出すには、君にもまだ自信が持てなくて、迷っている…いっそ、このまま何も言わずにいる方が、相手は幸せかもしれない…どんな人なんだい、私の可愛い甥っ子に、そこまで想われているのは…？」

優しく笑ってはいても、レイフの本心を読み解こうとする鋭利さを秘めた、ビョルンの琥珀色の瞳を向けられて、レイフはとっさに顔を俯けた。

（ああ、やべっ…駄目だ、このままじゃ、あいつのことが叔父さんにばれちゃう…）

クリスターと愛し合っている姿を見られた、あの時のラーズの驚

愕と嫌悪の入り混じった表情を思い出し、レイフは慄然となって、身を震わせた。

「レイフ、どうしたんだい、急に黙り込んで…？」

頑なに押し黙っているレイフに痺れを切らしたのか、ビョルンはおもむろに机から離れて、こちらに近づいてきた。

叔父のたてる柔らかな足音に耳を傾けながら、レイフは心の中で必死に懇願した。

（叔父さん、叔父さん、許して…これ以上は聞かないでっ）

ビョルンの優しい手が頭に乗せられた途端、レイフのぎゅっと瞑った瞼の間から、涙が零れ落ちた。

「叶わなかった苦い恋の話なんて、人にさせるものではないよ、レイフ…そうだろう…？」

ビョルンは、持ってきたティッシュの箱でレイフの頭をこつんと叩いた後、それを彼の膝の上に置いた。

「う、うん…そうだね」

もっと深く追求されるかと思ったが、意外にあっさりとビョルンが引き下がってくれたので、レイフは心底ほっとしながら、もらったティッシュで鼻を激しくかんだ。

（ああ、本当にやばかった…叔父さんだって、オレがどうして実家を飛び出してここに逃げ込まずにはいられなかったのか、未だに何

をぐずぐずと思い悩んでいるのか気になってるはずなのに、うかつなことを言って…あいつとのことは誰にも相談できることじゃないのに、つい、昔の恋を忘れられないでいる、この人に確認してみたくなったんだ。離れて暮らせば、オレはいつか、あいつを忘れることができるのか…それとも、ずっとこんなふうにあいつを想って、1人で何十年も生きることになるのか…ああ、駄目だ、叔父さんみたいに穏やかに昔の恋を振り返れるようになるまで待つなんて、やっぱりオレ、我慢できないよ)

結局、若いレイフが、ビョルンほど達観できるはずもなく、彼の話を聞いて余計に惨めになってしまった。

「…それで、レイフ、君がここに来た本当の用件は何なのかな…？恋の悩みを聞いてもらうつもりでなかったなら、私に対し、他に言いたいことがあるんだろう？」

レイフはぎよっとなって、ぐしゃぐしゃにしたティッシュの塊から、涙と鼻水で濡れた顔を上げた。

「叔父さん…やっぱり鋭いね…」

レイフがぽかんと眩くと、ビョルンは蜂蜜のように甘く優しい目を細めた。

「ふふ、鼻の頭が真っ赤だよ、レイフ…」

ビョルンの口調は、いちいち、ここにいない誰かを思い出させて、レイフの胸を切なく締め付ける。

(あいつが年を取ったら、きっとこんな感じの大人になるんだろう

な：オレとは全く違う人生を歩んでさ：その頃にはオレは、どの国の空の下にいて、どんなふうに暮らしているのだとしてもきつと、あいつと全く似てもつかなくなっているだろう）

レイフの脳裏に、まだ見ぬ遠い世界の獏としたイメージが過ぎる。

そして彼は、自分がここに來た本来の目的を思い出した。

「あのさ、オレ、実は叔父さんに報告しなきゃいけないことがあるんだ」

目の前に佇んで穏やかに微笑んでいるビョルンの陰に、愛しい人の姿を追いながら、レイフはだしぬけに言った。

「うん？」

「オレの進路のことだよ：昨日まで何も決められずに迷ってばかりいたオレだけれど、やっとこれだと思う仕事が見つかったんだ。驚かないで、聞いてよ、叔父さん：オレ、軍に入ろうと思うんだ」

どんなふうに切り出そうかずっと思い悩んでいたレイフだったが、結局は、回りくどい言い方はせず、ありのままを正直に伝えることにした。

「じ、実は、今日：新兵募集センターまで出かけて、その担当官と話をしてきたんだよ。叔父さんの知り合いのマイルズ軍曹：本当に立派な、一本筋の通った、いい人だったよ。点数稼ぎのために、何としても強引に入隊させようとか、そんなことはなかったし、オレの質問にも丁寧な答えてくれた。オレがビョルン・エルバークの甥だって知って、驚いて、本気なのかと何度も念押しされたよ：叔

父さんに嫌がらせをしたりリクルーターは転任させられたんだってね。二度とこんなことがないよう、厳しく監督するって言ってたよ…」

ビヨルンの沈黙が怖くて、レイフはひたすらしゃべり続けた。

「どんな職種があるのかも、詳しく教えてくれたよ…陸軍に200以上の職務があるなんて、知らなかったなあ。オレは、海外とか色々な場所に赴任できれば何でもいいけど、せつかく子供の頃から習って身につけた格闘技のスキルも活かしたいから、戦闘職種の中から選ぶつもりだよ。それでね…」

「レイフ」

感情を抑えた低い声が呼ぶのに、レイフはとっさに口をつぐんだ。

「軍隊に入りたいなんて、私はこれが聞き初めだよ。しかも、既にリクルーターと接触までしている。一体君はいつ、そんな途方もないことを決めたんだい？」

「き、昨日の昼間、テレビを見てたら、たまたま軍のCMが流れたんだよ。その時、直感的にこれだと思って…そのまま電話で問い合わせして、事務所の場所を教えてもらった。夕べにでも、先に叔父さんに相談すべきだったんだろうけれど、こんなことを打ち明けたら、120パーセント叔父さんは反対するだろうから、内緒で話を聞きに行ったんだよ」

レイフは緊張のあまり激しく汗をかきながら、しどろもどろになつて、答えた。

「なるほど、とっさの思いつきで、もう新兵募集センターまで出か

けたのか：呆れるくらいの即断即行ぶりだね。レイフ：レイフ、まさか、本気じゃないだろうな：？」

「確かに、思い付いたのは突発的だったけれど、オレの気持ちはもう固まっているよ、叔父さん。これほど今のオレにうってつけの仕事はないと思ってる」

「レイフ、若者受けする映画のように格好よく作られた、あの人を小馬鹿にしたCMのどこに、君はそこまで引き付けられたんだい？まさか、あれを鵜呑みにして、軍に入ろうと決めたわけじゃないだろう？」

「そこまで、オレは馬鹿じゃないよ：叔父さんの話を聞いて、軍のリクルーターの甘い誘いの裏にあるものについても知っている。よく奨学金目当てで入る子がいるらしいけれど、実際に、軍から学費をもらって大学に進学できるのは、その中の一握りだってこともね：でも、別にオレは、それが目的なわけじゃないからいいんだ」

レイフの決意が思いの他固いことに、ビョルンはいささか不愉快そうに端正な眉を寄せた。

「レイフ、そこまで分かっているなら尋ねるが、君は、軍隊が何をする所か、本当に理解しているのか？遊びで格闘技を楽しむのは訳が違うんだぞ。武器を持って他の国に乗り込んで、敵とはいえ、人を殺すことになるんだ。そんなこと、そもそも君にできるのか、やりたいと思うのか？」

「い、いきなり、そう問われると怯むけど：でもさ、それを言うなら、警官だって同じじゃないか。確かに、悪い奴だからって撃ち殺したら、寝覚めはよくないだろうけど、どのみち誰かがやらなきゃ

ならないことだろ。正義とか平和とか、人の暮らしの安全とか、大切な何かを守るために体を張って仕事をしてくれてるんだ：」

「私が聞いているのは、『誰か』のことじゃない。君が、それを仕事としてやりたがっているのかということだよ、レイフ」

返事に窮してぐっと黙り込むレイフに、ビョルンはとうとうと理を説き続けた。

「遠くに行きたいと君は言っていたけれど：ならば、何も軍隊じゃなくてもいいじゃないか？ 君は比較的裕福な家庭で、両親の愛情を注がれ、何の不自由もなく育てられた子だ。高い教育も受けているし、君の友達だって、そうだろう：現実として、高校を卒業してすぐに軍隊に入る若者の多くは、貧困から抜け出すため、他に仕事をしようにも必要な技術もないがために働く場所がなく、仕方なく入るんだ。他に選択肢がないのならともかく、どうしても君が、そんな過酷で野蛮な世界にわざわざ身を投じなければならぬんだい：？」

レイフは追い詰められたような気分ではしビョルンの厳しい顔を見つめた後、やがて諦めたように、ぼつりと言った。

「：叔父さんには、分からないよ」

ビョルンの怒りと苛立ちが重苦しい程の沈黙の中ビリビリと伝わってくるのを感じたが、レイフは怯まず、心の中にある想いを包み隠さず、ぶちまけた。

「今までの常識や価値観なんてぶっ飛ぶような、全然知らない世界だからこそ、無茶を承知で飛び込んでみたいんだ：そこでなら、オ

レが今までどこで何をしてきたのか、知る奴は誰もいない。例えオレが：過去に罪を犯したことがあったって、そんなこと、誰も構いやしないだろう：レイフ・オルソンって名前は同じでも、そこにいるのは別人みたいなものさ。もしかしたらオレは、全く言葉の通じない奴ばかりがいる、遠い国に行かされるかもしれない。でも、それもオレの望むところなんだ：だって、そうでもしなきゃ、たぶんオレの探し求める場所は見つからないだろうから：」

「レイフ：おまえの探している場所というのは、一体どんな所なんだい：？」

ビョルンの当惑しきった問いかけに、レイフは遠い眼差しを何も無い空に投げかけながら、ごく低い声でぼんやりと呟いた。

「オレが：自分の気持ちに正直に生きても、許される場所だよ。他人の視線を気にする必要もなく、誰かを傷つけるのではないかって不安に付きまとわれることもなく、オレ達2人：」

瞬間、レイフの脳裏に、ある情景が広がった。

凍てつくような冬の夜。

満天の星空の下、どこまでも続くかのような広い荒野の只中に、ぽつんと佇んでいる2人の子供がいる。

彼らは、茫漠たる大地に今にも飲み込まれてしまいそうなほど、ちっぽけで無力な存在ではあったけれど、なぜか、些かの不安も心細さも感じてはいない。

しっかりとつなぎあった手から伝わる互いの温もりが、彼らを支

え、どんな逆境にでも立ち向かうほどの力を与えてくれるからだ。

（ああ、そうだ…分かったよ、オレがどうして、こんな突拍子もない決断をしたのか。一体何を探し、どこに行こうとしていたのか…あの場所に戻りたかったんだ。世界から隔絶された場所に2人きり、オレとあいつが決して離れはしないと誓い合った…）

レイフの顔に何かを吹っ切ったような、仄かに明るい微笑が浮かんでくるのを、ビョルンはすっかり途方に暮れた様子で見守っている。いきなり自分の理解できない話を始めた甥を、彼は必死に理解しようと努力していたが、どうしてもできないようだった。

「レイフ、私には、君の気持ちを分かることはできない。誰にも打ち明けられない深い悩みがあつて、軍に入ることが唯一の解決策になるとでも思い込んでいるようだが…一体どうして、そんな発想になるのか…」

「いいんだよ、叔父さん、分かって欲しいなんて無茶は言わないよ。たぶん、オレの気持ちを分かることは誰にもできないから…ごめんよ、叔父さんは軍隊嫌いの反戦主義者なのに、その身内のオレが軍に入るなんて、どれ程腹立たしく悔しいことか…嫌われて、二度と顔を見たくないと思われても仕方ないと思ってる。それでも、オレは決めたんだ。大好きな叔父さんがどんなに反対したって、オレをとめることはできないよ」

どこか晴れ晴れとした口調で告げるレイフに、ビョルンはこのまま行かせることはやはりできないと必死になって、言い募った。

「レイフ、待つんだ。そんなに簡単に自分の進路を決めてしまうこととはしない。せめて、もう少し考えてから、結論を出してくれ…確か

に私自身、君の決定を受け入れることは難しい……だが、私の信条を別にしても、君の身が心配なんだ。君は私にとって子供も同然だと言ったろう……我が子を、危険な場所にわざわざ行かせたがる親がどの世界にいる？ ラースが生きていたら、きっと私以上に猛反対するはずだぞ」

「と、父さん……は……」

今や胸の奥深くに刻み込まれてじくじくと痛む傷となった父親に触れられて、レイフはつい動揺した。

「ラースだけでない、ヘレナもどんなに君を案じるか……大体君はまだ家族の誰にも話していないのだろう？ そうだ、明日にでも、私と一緒に実家に戻って、皆でよく相談しないか……？ たった一人、一時の感情で決めてしまうには、あまりに重大な決断だよ」

ビョルンの半ば懇願のような訴えに、レイフは一瞬瞳を揺らせたものの、頑として自分の意思を曲げなかった。

「駄目だよ、叔父さん……誰が何と言ったって、オレの気持ちは変わらないんだ」

ビョルンの哀しそうな顔を見ると迷ったが、心のどこかで、どんなに彼に似ていてもこの人にはやはり理解などできないのだという失望もあったためか、レイフは突き放すような残酷な気分になって、言い放った。

「それに、実を言うとオレ、もうサインまでしちまったんだ。マイルズ軍曹はちよっと考えてからにしたらどうだって言ってくれたけれどね……だから、叔父さんが今更何をしようと、もう手遅れなんだ

よ」

「レイフ…！」

「なるべく早く入隊したいってオレが頼み込んだから、手続きがなるべくスムーズにいくよう、マイルズ軍曹が手伝ってくれている。早ければ、来週にはもう新兵教育訓練基地に行ける手はずなんだ」

ビョルンは一瞬絶句した後、日頃温和な彼らしくもなく語気を荒げて、レイフやマイルズを非難した。

「レイフ、君は、私に隠れてそこまでやったのか…何て馬鹿な、早まった真似をするんだ…！　マイルズもマイルズだ、いくら本人が希望するからって、家族に何の相談もなく、高校を卒業したばかりの若者に安易にサインさせるなんて…こんな無茶苦茶な話、私は認めないぞ！」

「叔父さん、オレはもう、子供だということを言い訳にできる年じやないよ。それに、オレの無茶な頼みを聞いてくれたマイルズ軍曹を困らせるなら、オレの方こそ叔父さんを許さないからな」

ビョルンは口惜しげに唇を噛み締め、挑みかけるようなきつい目で自分を睨みつけているレイフを凝視した。

その肩が力なく落とされるのを、レイフは半ばすまなく思い、半ばほっと安堵しながら、見守った。

「そこまで言い張るなら、仕方がない…確かに君はもう大人だ。自分で決めたことの責任は自分で取るべき年になっている。とても残念でならないが、そうだな、所詮私には君をとめる権利はない…」

「ごめんよ、叔父さん…」

レイフがつい黙っていられなくなって囁くと、ビョルンも、どうしても言わずにはいられなくなったかのように、口を開いた。

「レイフ、くどいようだが、君は本当にそれでいいのか…せめて、君の大切な相棒のクリスターにくらい一言相談することはできたはずだ…それさえもせず、勝手に軍隊に入るなんて、いくらなんでもひどすぎないか」

ビョルンの言葉に、レイフは痛い所を突かれて、ちょっと辛そうに顔を歪めた。

「あいつに知らせるかどうか、オレも最後まで迷ったよ。でも、大學生活が始まる直前のこの時期に、オレは軍隊に入るから、後はおまえの好きにしろなんて…あいつの足を引っ張るようなことは結局言えなかった。そりゃ、後からこんなことを聞かされたら死ぬほどたまげるだろうし、またぐるぐると余計なことまで考えて煮詰まりそうな気もするけど…あいつならきつと分かるはずだ…」

レイフはビョルンの鋭い視線を避けるように顔を俯け、膝の上でぎゅっと手を握り締めて、半ば祈るような気分になりながら、心の中で呟いた。

（ああ、あいつは覚えているだろうか…？　もしも、オレ達が11才の時に体験した、あの奇跡みたいな一夜のことを今でも忘れていなかったら…オレが、こうする理由にもすぐに気がつくだろう。後はいいつがどう動くかだけれど、これはもう、オレにとって、人生かかった賭けみたいなものだな）

レイフは、今でも大切な思い出となって胸の奥にしまわれている、遠い昔の出来事に心を傾けながら、何とも複雑な、哀れむような表情を浮かべて目の前に佇んでいる叔父に向き直った。

「そうだとも、これが、オレの考え付く限り唯一の解決方法なんだと、あいつはきつと分かってくれるはずだ。こうすることで、オレが何を伝えようとしているのか、言葉じゃなくても、あいつにだけは理解できる…！」

レイフの片割れは、いまだ彼の手の届かない遠い場所にいる。

クリスターを恋しがりながらその名前を呼ぶことも辛くてできない、今のレイフにとって、これは、別たれてしまった半身の運命をもう一度自らに引き寄せ結びつけるための、打てる最後の手段だったのだ。

第8章 Paradise Lost (6)

『ねえ、レイフ、寒くないかい?』

『ううん、寒くなんかないし、何があっても、へっちゃらだよ。だって、おにちゃんが一緒にいてくれるもん』

甘酸っぱい幸福感に薄っすらと微笑みながら、クリスターがまどろんでいると、ふいに優しい手が肩にかかって、彼をそっと眠りから揺り起こした。

「クリスター、クリスター…そろそろ起きないと、講義に遅れるわよ…?」

ハスキーな声が耳たぶを柔らかくくすぐるのに、クリスターは逃げるように寝返りを打って、ぼんやりと言い返した。

「う…ん…駄目、もうちょっと寝かせて…母さん…あっ…」

言ってしまった後、クリスターはぱたりと目を開いて、慌てて、広いベッドから飛び起きた。

紗のカーテンの引かれた寝室の窓からは明るい朝の光が差し込み、

近くの公園を住処にしているのだろう、小鳥達のさえずりが聞こえてくる。

一瞬、夢の中とはあまりに違う光景に馴染めず、クリスターは心もとなげに、己の裸の胸に手を置いた。

「おはよう、クリスター…やっと目が覚めた…？」

声のした方に、クリスターはややぎこちない笑顔を向ける。

「サンドラ…お…おはよう」

案の定、ベッドの傍には、既にきちんと出勤の身支度を整えた、サンドラ・オブライエンが佇んでいて、美しい顔に苦笑とも取れる表情を浮かべて、動揺するクリスターを見下ろしていた。

「今は8時15分。今すぐ起きて支度をしたら、フリードマン教授のクラスには間に合うわよ？」

ベッドサイドの時計を指差して、サンドラはきびきびとした口調で告げる。

「ああ、そうだね…起こしてくれて、ありがとう」

「私は先に出るけど、テーブルにあなたの分の朝食を準備してあるから、適当に食べて行って」

こういう態度や口調が母親じみているから、うっかり間違えたのだ。自分は悪くないと、クリスターはちよつとふてくされながら、乱れた髪をくしゃくしゃとかき回した。

「髪、伸びたわね」

「ああ、何だか面倒で、しばらく切りに行っていないから…」

もうすぐ肩にかかりそうな長さにまで伸びた紅い髪の一筋を、サンドラは軽く引っ張る。

その手をとっさに捕まえて、クリスターは自分の方に引き寄せた。

サンドラは逆らわず、クリスターの腕に捕まえられると、軽く小首を傾げながら、問い返すよう、彼を見下ろした。

「何？」

仕事柄かもしれないが、きつい香水はつけないサンドラの体は、クリスターの好きな柑橘系の爽やかで清潔な香りがする。

「…キスして」

サンドラはクリスターの唇と額に蝶のような軽いキスをする、笑いを含んだ、甘やかな声で囁いた。

「無精髭が生えかけてる…」

滑らかな指先でクリスターの顎の辺りをくすぐって、サンドラはするりと彼の腕から抜け出し、立ち上がった。

「行ってくるわ。また、今夜ね」

「ああ」

サンドラがバッグを肩にかけ颯爽と出て行くのをひらひらと手を振って見送った後、クリスターは彼女の忠告を守って素直に起きるのかと思いきや、またしてもベッドに倒れ込み、枕もとの時計を遠くに押しやった。

「今ならまだ間に合う時間か……いいよ、別に間に合わなかったって……」

気の抜けた口調で独りごち、小さくあくびをして、目を瞑る。

（フリードマン教授のクラスを欠席するのは、これで二度目か……あまり続くと呼び出しを食らうかもしれないけれど、まだ大丈夫だろう。そうだな、次こそはちゃんと出席しよう……別に体調が悪いわけでもないのに、なぜかな、この頃何をするのも億劫で、動きたくない……）

大学が始まって、既に一月近く。

サンドラや高校時代からクリスターに目をかけてくれているフリードマン教授の助けもあった、せっかく支障なく始めることができた新生活なのに、本来なら、彼らの期待に応えるためにもきちんと勉強に打ち込むべきところを、ともすれば手を抜いたりさぼったりしがちだ。

（ああ、こんなだらだらとやる気のない生活、この僕が自分に許すなんて信じられない。もしかしたら、今までがんびりすぎた反動が来ているのかもしれないな。こんなことなら、適当に力を抜いておけばよかった……19才になったばかりの若さで燃え尽き症候群なん

て、がっかりだよ。こんなことじゃいけない、サンドラに愛想を着かされる前に、何とか浮上しなくちゃ：いっそ、カウンセラーにでもかかった方がいいだろう。いや、通り一遍の診察しかできない、下手なカウンセラー相手にするくらいなら、自分で解決する方がましかな：眠れますか、食欲はありますか、人間関係はうまくいきますか：それこそ、余計にイライラして、議論を吹っかけて言い負かしてしまいそうだ。ああ、僕みたいな頭でっかちが頭の病気になる余計に性質が悪い…)

そんな仕様のないことを考えているうちに、クリスターは再びうとうとし始めた。

(さっきまで、とてもいい夢を見ていたんだ：懐かしくて、幸せな気分だった。今から、あの続きを見ることはできないかな：?)

記憶を紐解かなくても、いつのことだったか、すぐに思い出せる。あれは、クリスターとレイフが生まれて初めて別々に暮らすことを強いられていた、11才の冬の話だ。

この年になると、口に出して、あの頃の思い出を語るのも恥ずかしくて、ずっと黙っていたけれど、クリスターは今でもよく覚えている。

(僕はまだたったの11才だったんだ：子供だったからこそ、そんなに真剣になって、絶対に2人の願いを叶えてみせると、何の力もあてもないのに信じられたのかな。もう二度と離れ離れになるのは嫌だから、一緒に生きられる場所を探そうと：僕とあいつと2人きり…)

あの頃を振り返れば、今の自分は何と変わってしまったのだろう

とクリスターはつくづく思う。

愛する弟を失って、ここまで長い期間自分が暮らせるのが不思議でならないが、昔に比べて、少しは成長したということか。それとも、諦めというものを少しは学んだということか。

まだ19才、決して生き過ぎたと言えるほど長く生きてはいないはずだが…。

「レイ…っ…」

ふっと、その名前を唇に上らせると、たちまち、鋭いナイフを胸に突きたてられたような痛みが走り、体が震える。

（いや、あいつの不在に耐えられるほどには、やっぱり、僕は強くはなれない…僕が呼んでも、あいつはここに来ないのに、どうしてあいつの名前なんか呼べる…？）

震える瞼の合間に薄っすらと溜まった涙を乱暴に手でぬぐい、クリスターは枕に顔を押し付けた。

（今頃、あいつはどうしているのかな…？ やっぱり、このままニユーヘイブンに住み着くんだろうか…今頃は近くの大学に入って、心機一転新しい生活を始めている頃かもしれないな。叔父さんが傍にいて助けてくれればきっと、何があっても大丈夫だろう。うん、その方がいい、今更変なマスコミ連中に追い回されることはなくても、ここに戻れば、あいつはまた父さんの死に様を思い出して、辛くなるだけだろうから…）

クリスターでさえ、まだ完全にラースの死の衝撃から立ち直れて

いないのだから、情の厚いレイフは尚更だろう。

（時間が経って、あいつが立ち直ることを、僕は遠くから祈るしかないのか…僕が会っても、あいつの傷をまた開くことしかない。だって、僕とあいつのせいで父さんが死んだのは紛れもない事実なのだから…）

クリスターの脳裏に、あの葬儀の日、埋葬場所に収められた父親の棺を挟んで向かい合って立っていた、レイフの姿が浮かび上がった。

傷つき途方に暮れて、その逞しい体も小さく萎んでしまったような、あんなレイフを、クリスターは初めて見た。

（ごめん…ごめんよ、僕はおまえにそんな悲しい顔をさせるために、生まれてきたわけじゃないのに…結局僕がいたために、おまえを傷つけ不幸にしてみました）

もしかしたら一緒に幸せになれるかもしれない。抱き合いながら垣間見た夢は、呆気なくも打ち砕かれて、今は胸に突き刺さったままのその欠片が、じくじくと心を痛ませる。

（おまえが僕と一緒にいられないというなら、僕は身を引いて、おまえの前には二度と姿を見せず、ひっそりと暮らすしかない。僕がおまえをどうしても取り戻そうとしなければ、おまえはいつか僕のことを忘れて幸せになってくれるだろうか。そして、この僕も、これが与えられた運命だと割り切って、淡々と日々を送っていけば…いつかは胸を疼かせる、この痛みも過ぎ去るだろうか）

クリスターは何とも心もとない気分で、己の胸にそっと手を置い

た。

しつとりと熱を帯びた肌の手触り。その下で、規則正しく動いている心臓の鼓動。

とくとく、とくとく…遠い所にいる、レイフの胸の鼓動もきつとクリスターと同じリズムを刻んでいるはずだ。

だが、それだけでは、クリスターにのしかかっている圧倒的な孤独感を払拭することはできない。

（少しは慣れたと思ったのに…おまえのいない生活は、想像以上に味気なくて、何もかもが空しい…名門大学に通って、裕福で優しい恋人もいる、誰もがうらやむ生活をしているのに、僕はまるで魂の抜け殻になったような気分なんだ。こんなことを考えたら、罰が当たりそうだけど、年上の女性によしと甘やかされ、ペットのように飼い馴らされている、すっかり毒気の抜けた僕なんて、男としてはもう終わっているんじゃないかと…いや、それもどうでもいいことか…）

そんな自己嫌悪と自己憐憫に浸りながら、うつらうつらしていたクリスターを再び目覚めさせたのは、部屋の隅に置かれた電話の音だった。

（うるさいな…でも、電話に出るなんて面倒くさい…そのうち諦めて鳴り止むだろうから、放っておこう）

クリスターは眉をしかめて、枕で頭を隠すようにし、しばらく無視する構えだったが、しつこく鳴り続ける電話に、ついに観念して、ベッドから起き出した。

（人が寝ているのに、全く迷惑な電話だな…ただの勧誘とかだったら、猛抗議してやるから、覚悟しろ）

これほど寝起きの悪いクリスターはめったにないだろう、裸のまま、あくびを噛み殺して、電話のところまで行き、不機嫌そのものの低い声で応対に出る。

「はい？」

しかし、受話器越しに耳に入ってきた声は、クリスターの眠気を吹き飛ばすものだった。

「おはよう、クリスター…まだ寝ていたの？　あなたにしては珍しく、今朝は随分ゆっくりなのね」

「か、母さん…?!」

反射的に背筋をびしっと伸ばして、うろたえながら、壁の時計を眺めやる。いつの間にか、時間は9時半を回っていて、出席するべきクラスにはどうあっても間に合わないと、瞬間的にクリスターは諦めた。

「おはよう、母さん。そう、今日は…午後からのクラスなんだ。久しぶりだね」

クリスターは動揺が声に滲まないようよほど気をつけながら、口から出まかせではあったが、やっこの思いで返事らしい返事をした。

「ええ、ラースの葬儀が終わって以来だから、本当に、あなたの声

を聞くのは久しぶりだわね」

クリスターは何と答えればいいのか分からなくて、押し黙った。

ラーズの葬儀が終わり、その他諸々の手続きが片付いた後すぐ、クリスターはサンドラのアパートメントに戻った。

最初は母の傍についていようかとも考えたクリスターだったが、父の死の原因を作ったのは自分だという罪悪感のため、実家に留まり続けることは、どうしても気詰まりで、できなかったのだ。

それどころか、今まで、自分からヘレナに会いに行ったり連絡を取ったりすることもなかった。

（薄情な息子だとは思うよ……でも、父さんを亡くして悲しみに暮れる母さんを、この僕が慰めるなんて……きっと母さんだって、僕達のせいだと分かっている。心の中では、僕の顔なんか見たくないと思っているかもしれない……そう考えたら、母さんとちゃんと向き合って話をするのが怖くて……）

クリスターは目を閉じ、すうっと息を吸い込むと、勇気を奮い起こして、言った。

「ごめん、母さん……時々電話くらいするべきだったね」

「そうね。でも、私も、もっと早くにあなたに連絡をするべきだったのに、ためらっていたのだから、お互い様だわ」

クリスターは母の口調に何かしら引っかかるものを覚えたが、問い返す前に、彼女は続けた。

「今、あなたのアパートメントの近くに来ているのよ、クリスター。今から、ちょっと出て来れないかしら？」

「今から？ う、うん…分かったよ。それじゃ、チャールズ・ストリート沿いに、ヴィクトリアって大きなカフェがあるから、そこで待ってて。すぐに行くから…」

言いかけて、クリスターは、今朝、サンドラに指摘されたことを思い出した。

（無精ひげが生えかけてる…）

嫌な予感を覚えながら、サンドラのドレッサーに素早く近づき、ひょいと鏡を覗き込んだ。

（うわ…駄目だ、見せられない）

クリスターは慌てて受話器を掴みなおし、いささか上ずった声で、母に向かって懇願した。

「ごめん、母さん、30分…いや、20分だけ待ってくれっ」

無気力な生活が外見にまで出掛かっていたことに危うい所で気付いたクリスターは、急いでシャワーを浴び、顔を綺麗にあたって、クローゼットの中から引っ張り出した新しいシャツとジーンズを身につけた。

（さすがに、この伸びかけの髪を切る時間はないな…ああ、よかった、丁度後ろでまとめられるくらいの長さだ）

サンドラのドレッサーを探して出てきた、シンプルなヘアゴムを無断拝借し、どうにか、さっぱりと清潔感のある姿を取り戻して、クリスターはアパートメントを飛び出した。

（サンドラ、僕を甘やかすのもいいけど、気付いているなら、もっと早く注意してくれよ。この若さで危うくクマ系になりかけていたなんて、ショックだ。それほど体毛は濃くない方だとは思うけれど、やっぱりヴァイキングの子孫だからなあ：全く、思い出しでもぞっとする。あんな姿を母さんに見られるくらいなら、舌を噛んで死んだ方がましだよ）

ヘレナの待つカフェに向かって全力疾走しながら、クリスターは、そんな仕様もないことを考えていた。久しぶりの母との再会を前に、緊張を紛らしたかったのかもしれない。

（母さんは、あれ以来、あの家で独り、どんなふうに、何を思っ暮らしていたんだろう：電話で話した感じでは、元通りの母さんのようだったけれど：片割れをなくした僕と同じように、あの人も父さんという心の支えを失って、一人ぼっちになってしまったんだ）

そう思うと、急にヘレナと会うのが怖くなってくる。

（もしも、あの美しく毅然とした母さんが、悲しみのあまりやつれ、一気に老け込んだ姿で現われたら：僕は一体どうしたらいいんだろう）

サンドラが気に入って、よくコーヒー豆を買ってくる、しゃれた感じのカフェに入る時、クリスターは、尻込みして立ち尽くしそうになる自分をよほど叱咤しなければならなかった。

(母さん…?)

挽き立てのコーヒーのいい匂いがふわりと漂う店内に入ると、すぐに、クリスターは、奥のテーブルに座って、コーヒー・カップを手にも思いにふけているヘレナを見つけた。

艶やかな紅い髪をタイトにまとめ、シンプルなスーツに身を包んだ彼女は、夫を亡くしたばかりの女性とは思えぬほど、凛として美しかった。

一時は会社を人に譲るという話も出ていたようだが、どうやら、仕事に復帰したらしい。

「母さん…待たせて、ごめん」

以前とほとんど変わらぬ母の姿に少しほっとしながら、クリスターが近づいて声をかけると、ヘレナは顔を上げて、まっすぐに彼を見た。

「クリスター…あら、何だか感じが変わったわね。髪、伸ばしているの?」

琥珀色の瞳を不思議そうに瞬かせ、真っ先に指摘するヘレナに、クリスターは軽く動揺しながら、言い訳をした。

「うん、気分転換になるかなって…へ、変かな?」

「いいえ、見慣れていないから少し驚いたけれど、なかなか似合っているわよ」

「そう…よかった…」

ヘアゴムで結わえただけの髪にぎこちなく触りながら、クリスタ
ーはちよつと照れた。

「どうしているのかなって気になっていたけど…仕事、再開したみ
たいだね、母さん」

「ええ、いつまでも人任せにしてられないし、半月ほど前からま
た会社に出るようになったの。私にとっては、家にいるよりも気が
紛れていいみたいよ。それに、ラースと一緒にここまで大きくした
会社ですもの…やっぱり愛着があるし、社員達に対する責任もある。
ラースがいなくなったからといって、簡単に投げ出すわけにはいか
ないわ」

クリスターが席に着くと、注文を取りに来た顔なじみのウェイト
レスが声をかけてきた。

度々一緒に店を訪れるクリスターとサンドラを姉弟としばらく誤
解していた彼女に、ヘレナを母だと紹介すると、今度こそ本当のお
姉さんかと思ったと、ヘレナの若々しさに目を丸くしていた。

（あの娘、絶対僕のことをマザコンだと思ったろうな…すぐく年の
離れた恋人がいて、おまけに、こんな若くて美人の母親と朝からカ
フェで待ち合わせか…まあ、別にもう否定しないから、いいけれど
さ）

結局家で朝食は食べなかったので、コーヒーと一緒に注文したベ
ーグル・サンドを頬張りながらむつつりと考え込んでいると、ヘレ

ナがさり気なく話しかけてきた。

「思ったより、あなたが元気そうでよかったわ、クリスター…サンドラともううまくいっているようだし…？」

「うん…彼女にはとてもよくしてもらっているよ。居心地がよすぎて、この僕が、ついだらけてしまいそうになるくらいにね」

「実を言うとね、サンドラとは、この間一度会って話をしたのよ」

「そうなのかい？」

そんな話、サンドラから聞いていないよと言いかけて、むきになるのも子供じみているかと思ひ直したクリスターは、平然を装って、口の中のベーグルをコーヒーで流し込んだ。

「私達は結構気があうの。去年あなたが大怪我をして入院している頃、何度か電話で話をしたり、一緒にお茶を飲んだりしたことがあったわ。あの頃は、まさかあなたと彼女が付き合うことになるなんて、夢にも思っではいなかったけれど…」

「でも、今は、僕のことを気がかりだという理由で、彼女と連絡を取っていたんだね？」

「ええ、その通りよ。気に触ったのなら、ごめんなさい…確かに、独立して恋人と暮らし始めた子供にいつまでも干渉するのはどうかと思うけれど、あなたの場合は事情が事情だったから…：ラーズの葬儀の後、また実家との連絡を絶ってしまったあなたが、今頃どうしているのか、私はずっと気にかかっていたわ。そうは言うものの、こんなふうに出て話すだけの気力を回復するには、私も時間が必

要だった」

「母さん…ごめん、母さんは自分のことだけで精一杯だったろうに、僕のこと、そんな余計な気を使わせて…」

クリスターが恐縮して言うのに、ヘレナは首を横に振った。

「いいえ、ラーズの葬儀の後の喪失感から立ち直るのに時間がかかったことは仕方ないにしろ、本当は、もう少し早く、私はここに来るべきだったの。それなのに、なぜか、迷ってしまつて…サンドラに先に連絡を取つて、あなたの様子を尋ねたりした。私らしくもない、優柔不断さだったわ」

「一体どうしたんだい、母さん…？ 僕に会いに来るのを躊躇つたつて…どういう意味…？」

母に対して色々と後ろめたさのあるクリスターは、ヘレナの含みのある言い方に、つい過敏になってしまう。

（どうしよう、母さんはまさか僕とあいつの間にあったことで…それが父さんを死に追い込んだことについて、今更僕達を責めたり恨んだりはしなくても、やっぱり色々思うことがあつて、それで、迷つた末にここまで来たんだらうか…？）

腫れ物に触れるように、というか、ほとんど深く追求されたことのなかった、2人がラーズに勘当を言い渡された経緯について、今ここでヘレナに言及されるのでないかとクリスターは凍りついたが、続いてヘレナの口から出たのは、彼の予想を裏切るものだった。

「クリスター、実は、あなたに話さなければならぬことがあるの

「レイフのことよ」

どくんと、クリスターの全身の血がざわついた。

「えっ…あいつが、一体どうかしたのかい…？　ビョルン叔父さんのもとに身を寄せているはずだったろう？」

久しぶりに聞く弟の名前に、自分がおかしいほどに反応していることを自覚しながら、クリスターは必死で平静を保とうと努力していた。

「ええ、ラーズの葬儀の後も、レイフはずっとニューヘイブンにいたのだけれど、先月の終わり頃、ビョルンから連絡が入ったのよ。あの子が急に軍隊に入るなんて言い出したって」

「え…ええっ?!」

母が何を言い出したのか、とっさに理解できなくて、クリスターは怪しむような目をヘレナの複雑そうな顔に当てたまま、固まってしまった。

「ビョルンの話では、レイフはラーズの死後ふさぎ込んでいたものの、少しずつ、気持ちを前向きにしようとしていたそうよ…進路についても、真剣に考えていたみたいね。ただ、心の中に何か深い悩みを抱えていて、そのために決断できずにいた…それが、ある日急に、まるで憑き物が落ちたような晴れ晴れとした顔をして、陸軍に入隊するとビョルンに告げたの」

「ちょ…ちょっと待って、母さん、何なんだよ、その話…本当のことじゃないよね？　軍隊に入るだって…まさか、あいつが…？　一

体、何でまた、突然そんなことを言い出したんだ？」

「それは、私にもビョルンにも分からないわ：どこか遠い場所に行きたいと時折こぼしていたことはあったみたいだけれど、何故軍隊なんて選んだのか：」

「冗談じゃない：いや、全く冗談じゃないよ、そんな馬鹿なことがあるものか：僕はてっきり、あいつは、落ち着いたら、向こうの大学に入るものかと：今更スポーツ推薦は無理でも、別にあいつだって、成績は悪くなかったんだし、その気になって努力すれば、いくらでもやり直しはきいたはずだ。なのに、軍隊だなんて、一体何を血迷って：ありえないよ！ ビョルン叔父さんや母さんは、そんな馬鹿を言い出すあいつをとめなかったのか？」

クリスターが思わず声を高くすると、驚いた他の客達が談笑をぱたりとやめて、こちらを振り返った。

「ごめん、つい、驚いて：」

クリスターは何とか感情を抑えようと、テーブルの上で震える手をぐっと握り締めた。

「ビョルンは当然あの子を説得して、とめようとしたわ：あの人の主義身上からして、それは当然でしょう？ でもね、レイフの決意はとても固くて、既に入隊のサインまでしていたのよ：ビョルンの話では、サインをしても、訓練基地に送り込まれるまでは契約の破棄は可能だということだったけれど、本人の意思が変わらなければ、阻止しようもないわ。私も、ビョルンからの知らせを受けて、すぐレイフに会いに行ったのだけれど、どうしてもあの子の気持ちを变えることはできなかった」

「レイフはそのまま、母さん達を振りきるようにして、訓練基地に行ってしまったということなのかい…?」

クリスターは呻くように呟いた。

「信じられない…軍隊だって…?　　そう言えば、昔、ランボーとかのポスターを部屋に貼っていたような記憶はあるけど、別に本物の兵士になりたいなんて言ったことはないはずだよ。あいつは何を考えて、そんな突拍子もないことを…」

こういう展開は、レイフの行動パターンならば大体把握しているつもり。クリスターにとっても、想定範囲外であったので、事実として飲み込むにも苦勞を要した。

「それって、一体いつの話なんだい…あいつが入隊したのは…?」

クリスターははたとなって、ヘレナに問い返した。

「ビョルンの家を飛び出すようにして、訓練基地に向かったのが、今月の頭だったから、もう3週間前の話よ」

クリスターは眉をひそめ、鋭く刺すような目でヘレナを見つめた。

「すると、あいつが入隊なんて馬鹿げたことを言い出して、更にそれを実行に移してしまっても、母さんは今に至るまで、この僕に何の連絡もくれなかったということかい?」

「そうよ、クリスター…レイフが入隊する前にあなたにも知らせるべきだったんでしょうけれど、実際、あの子の行動はとても早くて、

ビョルンからの電話を受け取った私が、慌てて、ニューヘイブンまで行って、ちゃんとした話ができただのも一晩だけのことだった。いつの間にか、荷物もまとめていたのね：これ以上私達に引き止められないよう、翌日には忽然と、ビョルンの家から姿を消してしまっただわ。それから、訓練基地に移動するまでどこでどうしていたのか：1週間後、私のもとに今から行ってくるって短い電話があったの」

「そ、それなら：あいつが飛び出した後すぐにでも、僕に知らせてくれたらよかったじゃないか！　どうして3週間も、僕を蚊帳の外に置いておいたんだよ。こんな大事なことを僕にだけ黙っておくなんて、ひどいじゃないかっ」

「もっと早くに知らせていたら、あなたはどうしたの、クリスター？」

「それは：もちろん、あいつを止めようとしたよ：母さんの話すような状況では、僕が後から駆けつけても間に合わなかったかもしれないけど：どうして、こんな馬鹿をしたのか、せめて直接会ってちゃんと話を聞いたら、納得できたかもしれない：」

言いながら、クリスターはレイフの取った行動の異常さに改めて気付いて、啞然となった。

（あいつは、僕と直接会って話すことを避けようとしたんだ：それだけ、軍に入るといふあいつの決意は固かったということか。あいつが、僕に何の相談もなく、自分の意思だけで、こんな重大な決定をしたことなんて、これまでなかったのに：一体どうしてだ、何のために軍隊なんて：）

レイフと別れて暮らし始めて、四ヶ月、その間彼の心情にどんな

変化があったのか、どうして軍隊に入るといふ決断に行きついたのか、クリスターは必死になって考えた。

（父さんを死に追い込んだことで、あいつは僕以上の罪悪感に駆られていたのだろうか：ボストンを離れても尚、忘れられなかったのか？ どこか遠い場所に行きたいと漏らしていたというし、罪の記憶から逃れるため、全く未知の世界でやり直したかったということなのか…？ 軍隊なんて過酷な道を選択したのは、贖罪のつもりかも…？）

クリスターはそこまで考えて、どうにも腑に落ちないものを覚えて、頭を振った。

（違う、そうじゃない：罪の償いという心情は少しくらいあったかもしれないけど、ただ現状から逃げ出すためだけに、母さん達を更に悩ませるような、こんな強引なやり方をあいつはしない：それに、僕に事前に全く何も知らせなかったのも、やっぱり変だ。逆に、僕にとめて欲しくてさり気なく知らせるというのなら、まだ分かるけど…いや、あいつは僕がとめようがとめまいが、とにかく軍隊には入るつもりだったんだ。後から知らされた僕が、あいつの行動をどう受け止めるか、考えた上でのことだったのだろうか…それとも…？）

その時、何の脈絡もなく、ふいに、クリスターの脳裏に今朝見た夢の残像がちらついた。

どこまでも続く荒野の只中に、レイフと2人きり、しっかりと手を取り合って立っていた、11才のあの夜…。

（まさか…まさか、あいつ―）

何かしらはつとなりながら、クリスターは顔を上げ、じっと押し黙って彼が物思いから覚めるのを待っていたヘレナに問い返した。

「母さん…このことを僕にすぐ伝えるべきかどうか迷ったというのは、まさか、あいつを追いかけて、この僕まで軍隊に入ってしまったんじゃないかと疑ったからかい…？」

ヘレナの美しい瞳が不安そうに揺れ動いたのに、クリスターは思わず息を飲んだ後、ほとんどむきになって、否定した。

「どうかしているよ…母さん、この僕が兵士になるだって？ そんなことはあり得ない。あいつと違って、僕は別に進路に迷っているわけじゃない…今はれっきとしたハーバード大の学生で、それなりに将来の計画も考えている。別に叔父さんみたいな平和主義者ではないけれど、戦争なんて無意味なことに自分の人生を費やしたいとは少しも思わないよ」

平静さを装ってはいても、自分を案じているだろう母の手前言葉ざるを得なかった、その台詞は、まるで他人が語っているように白々しく響いた。

（しっかりしろ、僕は一体何を考えているんだ…冗談じゃない、いくら何でも軍隊は、僕の将来の選択肢の中には入ってないぞ）

一瞬頭を過ぎった非現実的な考えをクリスターは笑い飛ばしてみたが、この所高揚することなど絶えてなかった胸の中で、彼の心臓の鼓動はいきなり激しくなっている。

（ああ、そうか、あいつめ…僕に相談することもなく自分だけ先に

行動して：後は僕に任せるから好きにしろと丸投げしたな：！　こんなあり得ない選択を、よくもこの僕に迫れたな、馬鹿野郎：！）

ようやくレイフの考えが読めたクリスターは、何だか畏にかげられたような気分で、頭の中で激しく弟をののしっていた。

その時、ヘレナのひっそりと落ち着いた声が聞こえた。

「ここはとてもいい店ね。サンドラとはよく来るの？」

「あ：それほど頻繁につて訳じゃないけど、彼女が気に入っているみたいだから：」

夢から覚めたような気分でクリスターが顔を上げると、ヘレナは窓の方に顔を向けて、通りを行きかう人々を眺めている。その視線を追うように、クリスターもしばし、窓の外の見慣れた街の風景を見つめた。

逃げるように実家を飛び出し、レースが突然死んで、これまで当たり前のように暮らしていた日々は二度と返らなくても、気がつけば、また別の暮らしが始まり、クリスターもその日々の繰り返しに次第に慣れてきていた。

（朝起きて、大学に通い、家に帰れば優しい恋人と過ごす：サンドラとこのままずっと一緒にいるかは分からないけど、この先生きていく何年、何十年、僕が見るだろう世界は、これとそう大差ないだろう：あいつは一体その頃、僕の知らない、どんな世界を見ているのか：）

ふいに、クリスターの胸に激しい焦燥感が沸き起こり、彼をいて

も立ってもいられぬ気分にした。

「ねえ、クリスター…」

「うん？」

「私は、19才であなた達を妊娠した時、MITに在籍中の学生で、研究者だった。ラースと付き合って1年くらい経っていたけれど、結婚なんて、まだとても考えられなかった。だからね、正直に言うと、今子供を産んで育てることなんて無理だから、可哀想だけど諦めようと思ったの…」

クリスターはヘレナがいきなりこんな話を始めたのに少し戸惑ったが、途中で口を挟むことはせず、大人しく耳を傾けることにした。

「私はほとんど決意して、ラースに打ち明けたわ。そうしたら、あの人、血相を変えて、頼むから子供を殺すのはやめてくれ、もし、どうしても私が育てられないのなら、自分が1人でも育てるから産んで欲しいと泣きながら訴えたのよ…私の都合なんかお構いなしに、本当に1人で育てられる見込みもないくせに、何て純粋で身勝手、何て優しく、馬鹿な男なんだろうと呆れたわ。好きで打ち込んでいた研究を途中で投げ出して、こんな子供のような人の妻になるなんて、私の人生設計にはありえない。よほど別れてやろうかと思っただくらいよ」

「そ、そうなんだ…」

「でもね、結局、私はそれまで積み上げてきたものを全て放棄して、あの人のために子供を産んで、育てることにしたわ。ラースは、私の知らない所で勝手にお腹の子供に名前をつけて、『小さなクリス』

なんて呼んでいたのよ…それを聞いた途端、ああ、もう仕方がない、こうなったら覚悟を決めて、この人の子供の母親になってやろうと思ったの」

「小さな…クリス…？」

「そう、あなたの名前ね…初めは、2人いるなんて分からなかったから…そのうち検査で双子の男の子だと分かってから、クリスターとレイフという、ちゃんとした名前を決めたのよ」

クリスターは初めて聞く、自分達の誕生にまつわる、この話にちよつとした衝撃を受けて、黙り込んだ。

ラーズは、生まれる前から、彼をクリスと呼んで、愛してくれていた。その誕生を誰よりも待ち望んでいた。

永遠に終わってしまった、父親との関係をふいに思い出して、クリスターは何とも切なく物悲しく、同時に胸の中が温くなるような複雑な気分になった。

「ラーズとあなた達のおかげで、私の人生は、予定とは全く異なったものになったわ。時々、ラーズと結婚しなかったら私はどうしていたのかと想像することはあっても、別な人生を送ったはずの自分を羨ましいとは思わないくらい、あなた達と過ごした日々は豊かで幸せだった…あの人がいなくなって独りになった今も、そのことにはとても感謝している。だから、あの時の選択を、私は今でも後悔などしていない」

力強く言い切ったヘレナは、一瞬過ぎ去ったものを懐かしむような遠い目になった後、改めて、目の前で息を詰めて彼女の言葉を聞

いているクリスターを見つめた。

「ラーズは、あなた達にとって完璧な父親ではなかったかもしれない。でも、あの人があんなにも熱望したから、あなた達は生まれてこられたのだし、そして、ラーズがあなた達を子供として心から愛していたことは確かよ。でも、あなた達は私やラーズの子供ではあっても、今では、それぞれ独立した大人：あなた達の選ぶ幸せが、私達が望んだそれとは違っていたとしても、仕方がないことなのでしょうね」

「母さん：母さん、僕は…」

クリスターはつい感極まって口を開いたが、胸が詰まって、うまく言葉にならなかった。

（僕は、あなたや父さんに対して、償いきれない罪を犯したのに：父さんがあんなことになって、あなたは1人ぼっちになってしまったのに、それでも：僕を許してくれるんですか…？）

感情を静めようと肩で息をついているクリスターを、ヘレナは愛しげに目を細めて見守り、それから、ふいに思い出したように腕時計を確かめた。

「クリスター、私はそろそろ行くわ…」

「あ：そうだね、母さんは仕事だったね」

クリスターは夢から覚めたように瞬きし、独り身になっても、自分の予想以上に現実的で逞しい母を羨ましげに見つめた。

「レイフのことは、あなたに伝えるのがこんなに遅くなってしまった、ごめんなさいね…」

「ん…それは、もう、いいよ…でも、もし、あいつから連絡が入ったら、今度はすぐに知らせて欲しい。ああ、あの馬鹿は今頃、新兵の訓練を受けている最中か…いつくらいに、それは終わりそうなんだい？」

「歩兵の基礎訓練期間は14週間だそうよ…今のところ、あの子から連絡はないけれど、そのうち電話くらいあるでしょう。正式入隊後の配属先については、本人の希望が優先されるらしいけれど、それもあの子に聞いてみなければ、分からないから…」

「待つしかない、か…」

クリスターは 頭の中でずっと計算しながら、一瞬考えこんだ後、溜息をついた。またしても、ちりちりと胸の奥を小さな火であぶられるような焦燥感を覚えた。

（あいつが訓練を終えて、どこの基地に配属が決まるのか、分かるのは早くても12週間後…一体陸軍の基地がどこにあるのかも、僕はよく知らないし、組織がどんなことになっているのかなんて、全く見当もつかない。そう言えば、大学にも、軍の将校を養成するコースならあったかもしれないけど…いや、それはそもそも将官を目指す場合で、あいつの選んだ道とは違う）

クリスターは苛立たしげに頭を振って、吐き捨てた。

「何が訓練だよ…名門高校を出て、大学にだって行こうと思えば行けるのに、わざわざ一兵卒になるために、汗と泥にまみれながら辛

い訓練を受けるなんて、あいつの気が知れないよ」

半ば自分に言い聞かせるよう、そう呟いて、クリスターはぎゅつと膝の上で手を握り締めた。

「本当に、気が知れない……」

ヘレナはそんなクリスターに一瞬何か言いたげな素振りをしたが、結局何も言わずに、テーブルから立ち上がった。

クリスターも慌てて、席を立つ。

「それじゃ、また何か分かったら、連絡するわ」

「うん……母さん、仕事に打ち込むのもいいけど、あまり無理はしないだね」

「ええ。あなたも……元気でね、クリスター、愛しているわ。どこにいて、何をしていても、あなたとレイフは私の大切な子供達よ」

最後にヘレナと軽く抱擁を交わす際にそう囁かれた時は、また少しクリスターは涙ぐみそうになったが、人前で大の男が母親と別れを惜しみながら泣くのはちょっと痛いと思ったので、ぐっと堪えていた。

まだ少し名残惜しい気もしたが、クリスターにはレイフの突然の入隊についてじっくり考えてみたい気持ちもあり、きつとまた近いうちにヘレナとは会って話す機会くらいあるだろうと思って、そのままあっさりと彼女を見送った。

（ありがとう、母さん：僕もあなたを愛しているよ。これから先、どこで、何をして生きていようとも：僕の見る世界が、あなたの見ている世界とどれほどかけ離れてしまったものになっていたとしても…）

その時、ふいに、自分の頭を占めていた考えがどんなものであるのか気付いたクリスターは、愕然となった。

（寒くなんかないし、何があっても平気だよ…もしも、おまえがオレの傍にいてくれるなら…）

見知らぬ空の下、茫漠と広がる見知らぬ世界―今朝見た夢ともどこか似通った遠い場所から、クリスターの半身は彼に向かって、そう呼びかけてくる。クリスターが何もかも振り捨てて、追いかけてくるのを、1人でじっと待っている。

（ああ、もしかしたら、僕はこのまま…二度と母さんには会えないのかもしれない…）

そんな予感を覚えたクリスターは、ヘレナを引きとめようとするかのごとく手を上げかけた。しかし、その時には既に、一度開いた店の扉は閉じられ、彼女はクリスターの前から立ち去っていた。

そうして、実際、この朝の束の間の再会が、クリスターが母ヘレナと会って言葉をかわした、最後となったのだ。

第8章 Paradise Lost (7)

ヘレナと会った数日後、クリスターが、実家から持ってきたはずの本を探して、クローゼットの奥に放置していた段ボール箱を引っ張り出し、開けてみた時のことだ。

探し物とは別に、クリスターはそこにあるものを見つけた。

「何だ、実家に置いてきたものとはかり思っていたけれど…本や資料に紛れて一緒に持ってきていたんだな」

そう呟いて、クリスターは未開封の大きな茶封筒を箱の中から引っ張り出し、目の前に持ってきて、しばし眺める。

「アイヴァースの遺した原稿か…」

それは、今は亡きデイビッド・アイヴァースが、少年時代のクリスターを研究対象として書いたという遺稿だった。

かつてジェームズ・ブラックは、クリスターを攻略するため、末期ガンを患っていたアイヴァースに近づいて、これを盗み出した。そして、今はクリスターの手元にある。

（僕との最後の闘いの直前、ジェームズは僕にわざわざこれを手渡した…これは、アイヴァースが死ぬ前に僕に伝えたがっていた最後のメッセージだと言って、奴は僕に読むことを勧めたが、僕は拒んだ。ジェームズの罠にかけられることを恐れた訳だけれど、その後も僕は、この原稿には触れず、そのくせ処分しようとしなかった）別に、忘れていたわけではない。この遺稿の存在は、ずっとクリスターの心の片隅に引っかかってはいたのだが、今になってこれを開封して読むことをクリスターはためらっていた。

この中に描かれているのは、クリスターにとって、長い間封印してきた過去の自分だ。パンドラの箱を開くような、奇妙な恐れを覚えていたのかもしれない。

クリスターはさてどうするかと迷いながら、封筒を手にしち上がり、大学の講義の資料が積まれた机の前の椅子に座り込んだ。

（13才の僕の告白が、アイヴァースにこれを書かせた。彼にとって、僕はそれだけ意味のある、特別な患者だったのだろうか。精神科医としてはとても優秀な人だった：あのアイヴァースが僕をどんなふうに分析したのか、何だか恐いような気もするけど、興味を惹かれることは確かだよ。いや、別にこんなものを読まなかったって、自分が言ったことくらい、大体覚えてるつもりだけれど：）

クリスターの脳裏に、ふいに、シルバー・フレームの眼鏡の越しにじっと自分を見据えていた、アイヴァースの鋭利な青灰色の瞳がうかびあがった。

（あの頃の僕は、弟に対する許されない想いに薄々気付きながら、まだ確信を持てずにいた。自分が今にも暴走しそうなことを感じ、僕の存在自体がいつかあいつを傷つけるのではないかと怖がっていた。アイヴァースは僕のそんな胸の内を的確に見抜いて、究極の問いを突きつけたんだ。もしもあいつが僕と一緒にいることを望まず、離れて行こうとした場合、僕はそれを許せるのか、認められるのか：？ アイヴァースの問いにひどく動揺した僕は、激しく彼を憎んだ：騙し討ちにして、学校から追い出してしまうほどに：：そうして、その後僕は、弟に自分の気持ちを直接ぶつけて確かめようとしたんだ。もしかしたら、あいつも同じように僕を欲しいと思ってくれるかもしれない、他の全てを捨てても僕と一緒にいたいと言ってくれるかもしれないと：）

クリスターは一瞬、慄いたよう机の上に封筒を投げ出し、さっと立ちあがって身を引いたが、やはり思い直して、再び封筒を手にとった。

（こんなものを読んだところで今更何かが変わるとは思えないけれど：あのアイヴァースが死の前に僕に何を伝えようとしたのか、やつぱり気になる：ああ、死者にさえに助言を求めてみたくなるくらい、僕は今よほど深い迷いに捕らわれているのかな）

クリスターは思い切って封筒を開封し、中から束になった原稿を取り出した。

すると、原稿に紛れていた一通の手紙が床に落ち、クリスターは訝しげに眉をしかめた。

「何だよ、これ……？」

クリスターは、取りあえず原稿を机の上に置いて、床からその小さな封筒を拾い上げると、怪しみながらも中を改めてみた。

瞬間、クリスターははっと息を飲んだ。

『クリスター、もしもこの原稿が運よく君の手に渡り、また君自身これを読む気持ちになって封を開けたとしても、その時、私はこの世にはいないだろう……』

それは、アイヴアースがクリスターに宛てて書いた手紙だった。

まさかこんなものまで入っているとは予想していなかったクリスターは、愕然とした。そうして、何とか動揺を抑えた後、アイヴアースの神経質なまでに綺麗な筆跡で書かれた、その手紙を食い入るようにして読んだ。

『私は、死ぬ前にどうしても君に伝えておきたい言葉と共に、この原稿を君に送るよ、クリスター……もっとも、強情な君が今更私の言うことに素直に耳を傾けてくれるとは思わないがね。それとも、これを君がこれを読む気になるのは、他人の助けを必要とせずにはられないほどに追いつめられた時だろうか……』

死者に心を見透かされたような気がして、クリスターはちよつとひやりとしたが、生前クリスターに会いたがっていたというアイヴアースの言葉は、不思議なほどずっと彼の胸に伝わり、深く染み透っていた。

生きているアイヴアースに面と向かって同じことを言われたとしたら、クリスターはきつと反発したことだろう。

「……」

読み終わった後も長いこと、クリスターは手紙から目を上げようとせず、呆然と立ち尽くしていた。

やがて、その唇が震えながら動き、こみ上げてくる圧倒的な感情に押しつぶされた、小さく掠れた声で、彼はかつての恋人の名前を

囁いた。

「デイビッド…」

（それで…一体君は、弟を道連れに、どこまで行くつもりなんだい…？）

（分かりません。でも、たぶん…行ける所まで行ってみようと…僕達と一緒にいても許される場所が見つかるまで…世界の果てまでも…）

「あっ…」

夕食後、クリスターがぼんやりと考え事をしながら洗い物をしていると、つい手が滑って、サンドラの氣に入っている皿を1枚割ってしまった。

（僕らしくない失態だな…考えることがありすぎるせいかな、つい注意力散漫になりがちでいけない）

クリスターはきれいに半分に割れた皿を両手に持って見比べながら、溜息をつく。

「どうしたの？」

物音に気付いて、サンドラがキッチンに入ってきた。

「うん…ごめん、この皿、ジノリだったかな。見事に真つ二つだ。結構高いんだろ？」

クリスターらしくない粗相に、サンドラはちょっと眉をひそめたものの、あまり物にこだわらない性分らしく、あっさり答えた。

「別に、気にしないでいいわよ。生活の中で使っていれば、いつか

割れたり欠けたりするものでしょう。だから、そんなにがっかりした顔をしないで、クリスター」

クリスターが何となく未練そうに割れた皿を眺めているのを、サンドラは軽やかに笑い飛ばした。

「捨ててしまいなさい、クリスター、どんなに高価な食器だって、完璧な形を保っているから価値があるのよ。壊れて二度ともとは戻らないものを惜しんだところで、仕方ないわ」

サンドラは別に深い意味があって言ったわけではなかったろうが、クリスターはなぜか、その言葉に無性に逆らいたくなった。

「いいから、向こうでコーヒーを飲みましようよ」

「うん…」

サンドラはうかない顔のクリスターの頬を指先で軽くくすぐって、コーヒーのカップを手に先にリビングに戻っていった。

その姿を黙然と見送った後、クリスターはぽつりと呟く。

「壊れたものは二度ともとは戻らない、か」

胸の奥にともった小さな火にじりじりと焼き焦がさせるような気分になり戸惑いながら、クリスターはひっそりと反駁した。

「いや、そうとは限らないよ…以前と全く同じ形を取り戻すことは無理でも、やりようによっては、またひとつになることは可能なんだ」

クリスターは、二つに割れた皿をつなぎあわせようとするかのごとく、ぴたりとあわせてみせた。

「人と人の関係だって、きつと同じようなものだろう…？」

クリスターの手の内で、壊れた皿は一瞬元通りの形を取り戻すが、もどが真つ二つに割れているので、当たり前のことだが力を抜けばすぐにずれてしまう。

（何をむきになっているんだ、僕は…）

自らの行為に苦笑しつつ頭を振ると、クリスターは、その皿を捨てたのではなく、綺麗にふきあげて、戸棚の奥に隠しておいた。

（僕達は抱き合って、サービスエリアの駐車場でわんわん泣いて再会を喜びました。あの時の感動はちよつと言葉にできないくらいで：割れてしまった皿の半分がぴたりと継ぎ目なくあわさった、そんな感じで：父さんや母さんが何をしようが、僕達はもう離れないって誓い合っただんです）

まるで我とも知らぬ衝動に突き動かされ、どうしてもとめることができないかのように迸る言葉、行間からあふれ出してくる感情――アイヴアースがクリスターのために遺した原稿には、知っているつもりで知らなかった、それとも、記憶の底に押し込んで忘れかけていた、危ういほどに純粹で激しい13才のクリスターの姿が鮮やかに描かれていた。

アイヴアースという卓越した観察者の記述を通して、クリスターは過去の自分と再会したのだ。

その原稿を読むという行為は、常に感情を抑制し、自分をだますことに慣れっことになっていたクリスターにとって、パンドラの箱を開くに等しい、胸の奥に埋もれていた何かを呼び覚ますほどの衝撃だった。

いや、アイヴアースの言葉に触れようが触れまいが、おそらく、クリスターの気持ちは既に固まっていたのではなかったか。ヘレナからレイフの入隊の知らせを受け取り、弟の行動の意味を理解した瞬間から、彼には、自分がこれからどうするか、分かっていたはずだ。

強力な磁石の両極のように、いくら離れようとしてみたところで、

クリスターは半身のもとに引き寄せられていく。

アイヴアースの言葉は、彼が頭の中で漠然と思い描いていた計画をいざ実行に移す、きっかけの1つに過ぎなかった。あるいは、それを読むことで、己の心を再確認したのか。

丁度、弟への恋情に薄々気づいていながら、認めることを恐れていた13才のクリスターが、アイヴアースとのカウンセリングを通じて、自らのものとして受け入れていったのと同じように…。

（許されないことだとは分かっている。あの時と同じように今も…嫌というほどに分かっている。父さんを犠牲にし、母さんを悲しませ…恋人も友人達も、知ればきっと顔を背けて僕から離れていくだろう。それでも、僕は自分を抑えることができないんだ）

クリスターは、その後のおよそ3ヶ月、表面上は何一つ変わったことなどないかのようには暮らし続けた。

それどころか、少し前までまるで魂が燃え尽きたかのような無気力に取り付かれていたのが嘘のように、毎日熱心に講義にも出ては、周囲の目を見張らせる才気を遺憾なく発揮するようになっていた。

憂鬱そうだった瞳には再び強い輝きが戻り、話す声にも張りとう力がこもって、自然な笑みも浮かべるようになったクリスターを見て、彼を心配し気遣ってきた人々はさぞかし安堵したことだろう。

クリスターの情緒不安定さがなくなった分、サンドラとの暮らしも穏やかで安らいだものとなり、実際、はたから見ても2人はうまくいっているようだった。

波風1つ立たない、安寧な日々の繰り返しの中で起こった奇妙な出来事をあえて挙げるならば、悪い夢を見たクリスターが夜中に飛び起きたことが何回あったり、大学の講義を受けている最中に急に体の不調を訴えて医務室に連れて行かれたり、それから、割れてしまったジノリの皿にやけに執着した挙句、知恵を振り絞って自力で修復してしまったことくらいだった。

「…友達の父親が歯科医でね。前に、気に入っていた高価な中国の陶器を壊してしまった時、治療用のパテで直したって聞いたんだ…

後は、町の骨董品屋とかにも尋ねて、自分で工夫してやってみたんだよ。もともと僕は、手先が器用だからね：ほら、薄っすらと傷が残るのは仕方ないけど、継ぎ目自体は綺麗に埋まって、ほとんど元通りだろう？」

得意げに言って、直した皿を自分専用に使いだすクリスターに、サンドラは、何をそんなにむきになっているのだろうと呆れたように目を丸くしていた。

実際誰も、すっかり今の生活に満足し順応しているようにしか見えないクリスターが、密かに、着実に、その日のための準備を進めていることには気付いていなかった。

ただ1人、おそらく母親のヘレナだけは、クリスターがどうするかを予想していたかもしれないが、ある意味覚悟を決めていたのか、離れて暮らす息子に干渉はせず、時折かかっている電話でも、互いの近況の報告やレイフについて話す程度にとどめていた。

レイフの基礎訓練期間が終わるのを、クリスターはそうやって、ひたすら待ち続けていた。

（そうとも、訓練期間が終わって、あいつの正式な所属先が分かれば、僕も、ずっと温めてきた計画を実行に移せる。3ヶ月も待つのかと思うと最初は途方に暮れたものだけれど、ここまで我慢できたのだから、後少しくらいどうということはないさ。具体的な目標ができた分、気持ちは随分楽になったし：もっとも、その目標自体、レイフならばいざ知らず、今の僕にとっては、なかなか超えることの難しいハードルなんだけれど：）

一端固めた心にふっと迷いが差すのは、今の自分が以前と同じではないということ、クリスターが思い出す時だった。

かつて、押しも押されもせぬエースとしてフットボール・チームを率い、優勝まで駆け上がった頃の覇気は、最近のクリスターにはほとんどない。鏡の中に見出すのは、青白く痩せた、内省的な眼をした若者だ。レイフとはどんどん似なくなり、むしろ伯父のビヨルンの憂いを帯びた面差しをそこに見出す。

1年前に傷めた肩は順調に回復し、日常生活を送る分には全く支障はない。しかし、フットボールやボクシングのようなハードなスポーツはずっと控えてきたのだから、この体がどこまでの負荷に耐えられるのか、ジムに通って鍛えなおしたり、病院の検査を受けてみたりもしたが、クリスターにも確信は持てなかった。

（僕はもう完璧ではない：心がどんなに望んでも、この体が裏切るかもしれない。いや、駄目だった時のことなど考えるな。以前の僕ならば、どんなに無理だと思ったことでも、欠点をカバーする方法を考え出し、自分の得意な部分を伸ばして補うことで、あいつと互角に張り合えるほどに自分を高めていったんだ。何もしないうちから弱気になどなるな、そう、僕ならできる：！）

そんなふうに揺れ動く気持ちと戦い、ともすれば萎れそうになる心を鼓舞しながらの忍耐の日々がようやく終わったのは、冬休みに入ろうという時期、クリスマスも間近のことだった。

（クリスター、レイフから連絡があったわ。無事、訓練を終了したそうよ）

ヘレナからの電話を受け取った時、クリスターは、はっと息を吸い込んで、一瞬黙り込んだ。

結局、レイフから直接クリスターに連絡が入ることはなかった。どうしてこんな馬鹿な真似をしたのだと、クリスターに問い詰められたり罵倒されたりすることを恐れてか、レイフは最後まで兄を避け通すつものようだ。

（あの意気地なしの卑怯者め：こんな大胆なまねを独断でやってのけたくせに、今更僕の反応が怖いなんて、意味が分からないよ）

一瞬軽い腹立ちを覚えたものの、クリスターは声に出しては冷静に、母に向かって尋ねた。

「それで：あいつはどこの部隊に配属されることに決まったんだい：？」

「：ノースカロライナ州、フォート・ブラッグ陸軍基地にある、第82空挺師団だそうよ」

受話器越しに聞こえてくるヘレナの声は、いつもと変わらず平静だったが、周囲の戸惑いや反対を押し切って軍隊に入ったレイフに対する、やはり複雑な感慨を秘めているようだった。

「第82空挺師団：」

クリスターは、この3ヶ月間頭の中に集積した陸軍に関する情報をリサーチしながら、しばし、考え込んだ。

「まさか：ねえ、母さんの聞き違いではなく、本当に82空挺なのかい？ 戦闘職種から選ぶつもりらしいとは知っていたけれど、また随分と高望みをして：そもそも、あいつがそんなに戦う気満々だったなんて、僕は知らなかったよ：？」

信じられないような気分で言い返した後、クリスターは軽いめまいを覚えて、黙り込んだ。

第82空挺師団といえば、米国にとって重要な戦争・紛争には必ず投入される、最精鋭部隊だ。

（本人の希望が優先されるというからには、あいつ自身が望んだことだろうけれど、そんな精鋭部隊にともかく入ることができたくらいに、あいつの能力が高かったということか：？ まあ、確かに身体能力はずばぬけているし、格闘技だって長年やってきた訳だけど：）

本当は、あの甘ったれで泣き虫のレイフが、規律だらけで厳しいことこの上ない軍隊に順応できるものか、密かに疑っていたクリスターだったが、どうやら、そのあては外れたようだ。

クリスターはほうっと溜息をつくど、気を取り直して、話を続けた。

「それで、あいつはすぐに、赴任先のフォート・ブラック基地に向けて出発するのかい：？ じきにクリスマスなんだし、軍隊だって休暇くらいもらえるだろう。移動の前に、一度実家に帰ってきたりは：？」

南部のノースカロライナは、こことは随分気候も違うだろうなと想像しながら、クリスターは何だかこの3ヶ月で弟に随分差を開け

られたような、取り残された感を噛みしめていた。

（もしかしたら、とっさの思いつきの行動のようであって、案外ヒョウタンからコマ、これがいいつの天職だったということなのかもしれないな…でも、この僕は、そうはいかない。軍隊っていうだけで僕としてはもうありえないのに、空挺部隊だって…？ ああ、人の気も知らず、よくもまたハードルを高くしてくれたな、あの馬鹿…）ただでさえ身体面で不安を抱えたクリスターは、レイフを本気で恨みたくなった。

（私も一度顔くらい見せなさいとは言ったんだけど、あの子、クリスマスにも帰れないそうよ…新しい生活に早く慣れたいし、色々忙しいらしいわ）

「言い訳が下手だね、相変わらず…」

クリスターが思わず苦笑すると、受話器の向こうのヘレナも、同じように苦笑して、ええ、本当にと答えた。

（年が明けたら、今度は、空挺学校で訓練を受けるんですって。平時の軍隊って、やることと言えば、来る日も来る日も訓練ばかりなのね）

「それは仕方ないよ…日頃厳しく鍛えて、いざ戦争ってことになったら、即座に対応できるようにしておくのが軍隊だからね。ましてや、即戦力の空挺部隊となると…」

ヘレナがじっと押し黙ったのに、クリスターは、やはり彼女も子供を戦地にやりたくなどない点では、普通の母親と変わらないのだと感じた。

（だとすれば、僕がこれからしようとしていることは、この人に一層心労をかけてしまうんだろうな）

そう思うと良心が痛んだが、いつまでも黙っておくわけにはいかない、母に対して不誠実な態度は取れないとの思いから、クリスターは重い口を開いた。

「母さん…あの…」

それでも、一瞬口ごもってしまう。気持はどうに決まっても、

いざ、大切に思っている人に、こんな残酷なことを伝えるのは勇気がいった。

（僕は、ここを出ていきます。大学をやめ、僕を愛してくれている恋人や友人達、母さんさえも捨てて…）

クリスターはそっと目を閉じた。レイフを失い、独りでこの先生きていくのだと一端諦めたものの、彼に代わる夢も情熱の対象も見つけられず、立ちつくし続けた日々の末たどりついた結論を胸の内
で反芻していた。

（僕は、やっぱりあいつなしじゃ駄目なんです。独りで生きてみようと努力もしたけれど、あいつのいない日々、僕はまるで死人のようでした。あいつが軍隊に入ったという知らせを受け取り、これが僕とあいつの運命をもう一度結び付ける最後のチャンスなのだと気付いた時から、僕はやっと息を吹き返したんです。結局、このまま魂の抜け殻として残りの人生を過ごそうと諦めとしまえるほどには、僕はまだ年老いてはいない。許されないことだとは分かっています。こんな僕達を受け入れられる場所が、この世界にはないことも痛いほどに分かっています。何より、父さんのように、僕達のせいで大切な人が傷つくのはもう嫌なんです…だから、僕は慣れ親しんだこの場所から飛び出し、他のものは全部振り捨てて、あいつを追っていくことにしたんです）

クリスターの脳裏に、同じ結論に先に行き着き、慣れ親しんだ日常から飛び出して全く未知の世界に向かった、レイフの面影が浮かんだ。

（何ぐずぐずしてるんだよっ。兄貴ってば、やること遅えな。オレあ、もう待ちくたびれちまうぜ）

クリスターの片割れは、ちょっと焦れたような笑顔を向けて、誘いかけるかのごとく、こちらに手を差し伸ばしている。

その手を取るために、クリスターは、安寧な生活も約束された将来も、全て投げ打つ決意をした。

（おまえは、僕がこうすることくらい見越してやったんだろ。だっ

たら、もう少しくらい待てよ…僕は、もう二度と逃げたり迷ったりしないから…)

クリスターの長い沈黙に、ヘレナは問い返しもせず、辛抱強く付き合っている。彼が何を言い出すつもりか、彼女には、想像が付いていたのだろうか。

クリスターは深く息を吸い込んだ。

「…突然だけど、僕は母さんに打ち明けなければならないことがあるんだ。驚かないで、聞いてくれ…」

再び語りだした時、クリスターの声は、強固な意志に支えられた揺るぎないものとなっていた。

かつて、弟と共にいられるためならばどんな努力も犠牲も払うと自らに過酷な要求を強い、それを見事に乗り越えて、高みに駆け上ったクリスター。

今の彼は、確にかつてと同じとは言えなかった。肉体には疵が残り、自らの心のもろさも自覚している。しかし―。

(おまえが行くところに僕は行く。そのためならば、僕はきつと、いくらで強くなれる。おまえが、僕にそう望むなら…)

レイフの長い不在によって、クリスターは、かつて彼をこの上もなく強烈に輝かせ、他から抜きん出た存在としていた、凄まじいまでの気迫を失っていた。

一度きりの人生を悔いなく生きるにはどうすればいいか、自分にとって最も大切なものは何かを思いだした今、クリスターは、ほとんど不可能だと思われたことでも意志の力で可能にしてきた、かつての自分をも取り戻したのだった。

(僕は、レイフさえいれば他には何もいらない、あの子と一緒にいられれば、それで幸せだと思う…もしレイフが…レイフも同じよう

に僕のことを想ってくれていたら：そう、レイフだって：同じように僕のことを欲しいと思ってくれるかもしれない：父さんや母さん、友達もみんないないから、僕だけが欲しいと：確かめることも恐くてできなかったけれど、もしかしたら―）

ほとんどの私物は処分し、必要なものは整理して梱包した、がらんとした部屋の中で、クリスターはアイヴァースの原稿をゆつくりとめくっていた。

（今の僕が、13才の頃のように、後先のことも考えず思いだけで行動できるほど純粹で無謀であるはずもなく、かつて、あいつと共に頂点を目差した時のように、多少の無理には耐えられる完璧な体を持っていて訳でもない。ああ、僕は自分を天才肌の弟とは違う、むしろ努力家なんだと思っていたけれど、何のかんと言って、生まれつき恵まれた資質に頼っていたんだな。だから、純粹な心も、頼める力も失った今の僕が、同じか、それ以上に過酷な世界に身を投じて、あいつに追いつけるか：むしろ足手まといになるのではないかと考え出すと、とても不安でならなかった）

それでも、クリスターは、もう一度挑戦する気になった。

レイフという片翼を取り戻して高く飛び立ち、一度きりの人生を悔いなく生き抜くために―。

（あなたの残した言葉が僕に、その勇気を持たせてくれた。そう、僕は別に、あなたの言うことを頭からはね付けるほど強情っぽりではないよ、先生：それどころか、ありがとうと直接言えなかったことが惜しまれるくらい、今は感謝している）

クリスターは最後に、アイヴァースの手紙の文面にさっと目を通した後、それも原稿と一緒に封筒の中に収め、段ボール箱の中に滑り込ませた。

じきに来ることになっている業者に荷物を引き渡したら、クリスタは当座必要な身の回りのものだけを詰めた大きなバッグを手に、この部屋を出る。

1週間前に破局したサンドラは、今仕事に出ていて、見送りには来ない。

突然クリスタから一方的に別れを告げられた彼女は、大人らしく平静を保とうと努力していたが、ひどく傷ついたことはクリスタにも分かった。冷静沈着な大人の女性だから、ペットのような年下の恋人が離れていったところで平気だろうなどと都合のいいことを考えていた、自分をよほど恥じたくらいだ。

いくらヘレナによく似たさばさばした気性だからといって、サンドラはクリスタの母親ではなく、恋人との別れ話に取り乱したところで不思議はないのだ。

（いっそ本当のことを言った方がよかったろうか。僕の本当の恋人は弟なんだと：いや、そんな話をしたって、余計に混乱させ、嫌な気分にするだけだ。単純に気持ちが変わった：大学にも、ここでの暮らしにも飽きてしまったから、新しい生きがいを求めて軍隊に入ってみることにしたと：真実よりは、まだこの作り話の方が誰にとっても受け入れやすいだろう）

冬休みに入る前に、クリスタは休学の手続きもきちんと済ませておいた。いきなり辞めるのは世話になった教授に必死にとめられたので、そういう体裁を取ったのだが、二度と戻ってくるつもりはなかった。

友人達も皆啞然とし理由を尋ねたが、クリスタの決意が固いのを見て取ると、それ以上追及しようとはしなかった。

将来を約束されたエリート達には、彼らの内の誰よりも優秀でありながら、あえて道から外れていくクリスタが理解できなかったのだろう。理解できないものは頭から締め出して忘れてしまった方が、心安らかでいられるものだ。

そう言えば、この数ヶ月間度々足を運んだ陸軍新兵募集事務所の

担当官でさえ、今まで何度も話はしていたにもかかわらず、いざクリスターがサインをした入隊手続きの書類を持ってくると、本当に本気だったのかといささか啞然としていた。

（筆記試験はともかく、身体検査がパスできてほっとした…もつとも、これでやっとスタート地点に立てたばかりで、まずは基礎訓練を終了し、更により難易度の高い様々な訓練をクリアーして初めて、僕は軍隊でもやっていけると確信を持てるんだろう…考え出すと、何とも果てしなく遠い道程だな…）

クリスターはまだちょっと心もとなげに右肩にそっと触れ、それからふっと思いついたように、壁に掛けられた鏡に己の姿を映してみた。

（本当に、できるのか…？ 迷いや不安は、もうないか？）

鏡の中からこちらを睨みつけてくる、異様に底光りする目をした、厳しい顔をした若者に向かって、クリスターは問いかけてみた。

（もう一度あいつと同じ場所に立つために、おまえはどんな努力も犠牲も払う覚悟はあるか、どんな厳しく過酷な試練を受けても耐え抜ける、研ぎ澄まされた心を保てるか…？）

また少し、鏡に映るクリスターの印象は変わっていた。心の持ちよう一つで、よくここまでころと顔つきが変わるものだ和我ながら感心してしまうほど、弱々しさや自信のなさは払拭され、精悍さを取り戻している。

ああ、僕なら、必ずできるともークリスターは己の心がもう揺らがないのを確認すると、挑みかけるかのような不敵な笑みを浮かべた「待つのもう終わりだ。さあ、行こう…あいつが僕を待っている、あの場所へ…」

クリスター…。

君と別れた後も、君がこれからどんなふうに生きていくのか、私はとても気がかりだった。

君は結局弟に自分の想いを伝えたのか、伝えられなかったのか。それは叶ったのか、叶わなかったのか。

いずれにせよ、君の苦悩は、成長し大人に近付くにつれ一層深くなり、それはやがて君と弟だけの問題にはとどまらず、周囲をも巻き込んでいくだろう。

私は、最後に君と言葉を交わした時、誰にも、君自身にも、弟を求める君の心を変えられないだろうと既に確信していたよ。

分かっているながら、私は君に、それは許されない行為なのだと論ずることしかできなかった。

なぜなら、その想いを貫いた所で、君が愛する相手と共に幸せになれる可能性は、残念ながら、この世界ではほとんどないからだ。

もしも君が弟への恋情をいつしか肉親への情愛に変容させることに成功していたのなら、それは君にとっても、君の愛する人達にとっても幸いなことだ。私も、そうなってくれていることを心から祈っている。

だが、もしも君が、苦しみ悩んだ末にやはり諦められないのだという結論に至り、そして、一方でレイフも君と同じほどに悩んだ末にそれでも君と一緒に歩む人生を望んだなら―それ以上は、もう無駄に思い患うことはやめなさい。

弟を道連れにどこまで行くつもりだと途方に暮れて聞いた私に対し、あの時、君は答えたね。

君達が一緒にいても許される場所が見つかるまで、行ける所まで、世界の果てまで行ってみると…そういう選択も、ありうるだろう。

君達が探し求める樂園がどこにあるか、私は知らない。だが、クリスター、どうか幸せに、愛する人と共に、一度きりの人生を悔いなく送って欲しい。

強く生きなさい、クリスター、どんな道を進むのであれ、君らしく、自信と誇りを持って…！

年が明けてすぐ、クリスターは歩兵基礎訓練を受けるべく、ジョージア州フォート・ベニング陸軍基地に向かった。レイフに遅れること3カ月、クリスターもまた弟と同じ世界を目指して、旅立ったのだ。

エピソード 世界の果てまでも

「レイフ！」

クリスターが血相を変えてバスの中から駆け降りると、駐車場に並んで止まっていた別の長距離バスのドアから、顔を真っ赤にしたレイフが飛び出してきた。

「おにいちゃんっ」

レイフは両目から涙を迸らせながら、クリスターの広げた腕の中にまっすぐ飛び込んでくる。

「クリスター、本当にクリスターだ……！ 会いたかったよおっ！ うわぁあんっ！！」

「おまえ、僕に会うために家を逃げ出してきたのかい？ 1人でバスに乗って？ それにしても、よく……こんな所で、僕を見つけられたね……」

わんわんと泣きだす弟の高ぶりが伝染したのか、クリスターもまた声を詰まらせ、やっとの思いでそう囁いた。

バスの窓からは、他の乗客達が何事かと怪しみながら、抱き合っていて泣いている双子の少年達を見下ろしている。

けれど、別にクリスターは、彼らの好奇の視線など平気だった。それどころか、もう何も怖くない、これまで感じていた無力感は嘘のように消え、まるで自分が倍に大きく強くでもなったかのような自信を覚えていた。

双子兄弟が11才の冬。

両親の大喧嘩の巻き添えにあって、離れ離れで暮らすことを余儀なくされた2人が、奇跡のような再会を果たした夜のことだ。

「これから、どうしようか……？」

「そうだね：家に戻ったら、また引き離されるかもしれないし：」
「それじゃあ、2人で一緒にどこかに逃げようよ。オレ、クリスタ
ーと二度と別れるのは嫌だ」

「それなら、朝までここで粘ろうか。明るくなってからの方が、ど
こを目指すにしろ、安全だからね」

二度とはぐれまいとするかのように手を握り合う、2人の気持ち
は固まっていた。しかし、11才の子供達に自由にさせてもらえる
ほど、世間の目は甘くはない。

レストエリアのカフェテリアで、今後についての相談をしばらく
していた2人だったが、結局、夜も遅い時間、子供達だけであるこ
とを店員に不審に思われ、声をかけられた途端、慌てて、その場か
ら逃げだした。

家出少年だとばれて親に連絡されたら元の木阿弥だ。大人達の手
の届かない所に逃げるしかなかった。

レイフと2人、追いかけてくる店員や警備員を振り切って、ドラ
イブインのカフェテリアを飛び出したクリスターは、人のいる場所
は避けて、駐車場を突っ切り、その向こうに広がる草地に飛び降り
た。

(どこへ行こう：)

明るいドライブインやハイウェイを外れると、そこはもう人の気
配もない漠々たる平原が広がっている。

どこまで続いているのか、その先に何があるのかもしれない荒野
を前に、クリスターが途方に暮れて立ちつくしていると、すぐ後ろ
に、駐車場の柵を軽々と飛び越えたレイフが着地した。

「何してんだよ、クリスター、行こうよ」

何が潜んでいるとも知れない夜闇を前に躊躇しているクリスター
の背中を、レイフがどんと押した。

「う、うん」

行くなってどこには、クリスターは問い返さなかった。代わりに
レイフの手を取り、まるで自分にはちゃんと行き先が分かっている

のだというかのように、しっかりとした足取りで歩きだした。

舗装もされていない、冬枯れた草が足元でまつわりつく地面を歩くのは、クリスターとレイフが年の割にしっかりした体をしているとは言っても、なかなか難儀なことだった。

幸い彼らは、とても夜目が利いて、ハイウェイからどんどん遠ざかって、よく晴れた冬の空に輝いている真っ白な月の光があれば、視界に困ることなかった。

一番困ったのは、寒さだ。

はあはあと、クリスターの口から漏れる息は白い。北東部の冬は寒く、夜ともなれば、その冷え込みは骨身にこたえるほど厳しい。ふと、去年だったか、とても気温が下がった夜、自宅のカギをなくしてしまった老婦人が家の前で凍死したというニュースを思い出した。

クリスターは思わず、冷たくかじかんだ指先を唇に持ってきて、はあっと息を吐きかけた。

「ねえ、レイフ、寒くないかい？」

傍らを歩く弟を、クリスターは心配顔で振り返る。すると、何の迷いもためらいもない、まっすぐな答えが返ってきた。

「ううん、寒くなんかないし、何があってもへっちゃらだよ。だって、おにいちやんが一緒にいてくれるもん」

クリスターは、胸の中が火のついたように熱くなり、そこから凍えた体全体に温かさが伝わっていくように感じた。

（おまえと一緒にだから、僕も大丈夫、きつと強くなってみせるよ）
そうは言うものの、レイフに風邪などひかせたくない。

クリスターは家を飛び出す際にリュックサックに詰めてきた、よくピクニックに出かける時に使うブランケットを引っ張り出した。

「クリスターは用意がいいねえ」

心底感心したように、レイフは目を丸くし、それから、クリスターと2人でブランケットの端と端を掴んで広げ、一緒に頭からかぶった。

「おにいちゃん、おなかすいた…」

レイフは、さっきのカフェテリアで買った軽食では食べ足りなかったらしい。

クリスターは再びリュックの中を探して、見つけた一枚のチョコレートをレイフに手渡した。

レイフは嬉々として包装を破り、そのままかじりつこうとしたが、ふと気がついたかのように、にこにこ笑って見守っているクリスターに問いかけた。

「おまえは？」

「僕は別にいいんだよ」

すると、レイフは顔をしかめて、チョコレートを半分に分り、その片方を無言でクリスターの手に押し付けてきた。

「オレ達は、何でも半分こだろっ」

「う、うん」

レイフと分け合ったチョコレートの効用か、先程よりも歩くのが楽になった気がした。レイフも疲れたと愚痴をこぼすことなく、クリスターにしっかりとついてくる。

（たぶん、こいつは今の状況が分かってないんだろうな…だから、こんなにあっけらかんとしていられるんだ。それとも、僕が何とかしてくれると信じてきっているのか。でも、レイフ、僕だって、お前と同じ年の子供なんだよ）

クリスターは頼もしい兄の顔を崩さず、弟の手を励ますように握り締めていた。しかし、その頭の中は、再び垂れこめてきた不安と迷いで一杯だった。

（これから、どこに行けばいいんだろう。どうすれば、この子を守ってあげられるだろう。大事なこの手を離さずに、ずっと一緒にいられるだろう…）

クリスターが傍にいただけで安心し、この冒険行をむしろ楽しんでいる感さえあるレイフのような無邪気な子供には、クリスターはなりきれない。

しかし、どれほど大人びていようとも、クリスターはまだ11才の子供でしかなく、家に戻れば大人達の意向に否応なく従わされてしまう無力さを自覚していた。

（行くあてなんか、僕達にはない…お金だって、そんなには持っていないし、子供達だけでどこかに逃げるなんて、現実的に考えて無理だよ。でも、この子と離れて暮らすなんて、絶対に嫌、嫌だ…!）

思わず歯を食いしばり、顔を俯けてこみ上げてくる涙を必死でこらえていると、レイフがいきなり、あっと歓声にも似た声をあげた。

「何？」

「流れ星だよ、クリスターは見なかったのかよっ」

興奮したレイフはクリスターの手からすりりと抜け出し、もっと見晴らしのいい場所を求めて、緩やかな丘の上を目指して、駆け出した。

クリスターも慌てて、その後を追った。こんな所でレイフを見失うなど、想像するだけでぞっとする。

「流れ星なんて、そうそう何度も見られないよ…流星群とかなら、話は別だけどさー」

さすがにちょっと歩き疲れていたところを走らされて、思わずクリスターは文句を言うが、レイフは流れ星の発見がよほど嬉しかったのか、クリスターを振り返り、嬉々として叫んだ。

「さっきさ、オレ、ずっとクリスターと一緒にいられますようにって念じたんだ。だから、オレ達、もう二度と離れ離れになんかなるものか、そうだろう？」

その明るい表情を見ると、クリスターは何だか、一瞬前まで胸を占めていた、もやもやとした悲観的な考えがすっと消えていくような気がした。

何を無駄に思い悩む必要があるのだろうか。レイフが今、ここにいる。2人の心は、つながっている。これ以上の幸福は、ないというのにー。

「クリスターもこっちに上ってこいよ。すごくいい気分になれるか

らっ」

クリスターは自然な笑みが口元に浮かぶのを覚えながら、丘を登り切り、レイフの隣に立った。レイフが目を輝かせながら眺めているものを、クリスターもまた見た。

（ああ……！）

クリスターとレイフの眼下に広がっていたのは、人も車も、動く小さな生き物とて一つも見当たらない、この先どこまでも無限に続くかのような、果てしなく広い世界だった。

黒々とした裸の木々がぼつんぽつんと影を落とす、凍てついた平原。星々の散らばる濃紺の夜空が遠く地平と接する境は、そこから仄かな白光がさしているかのように薄明るい。

それはとても神秘的でよそよそしく、彼らがいつも暮らしている街の日常風景とはあまりにも異なっていて、まるで2人だけでいきなり別世界に迷い込んだような気さえた。

実際には、クリスターとレイフは、今まで知らなかった世界の一端を垣間見たにすぎない。想像を超えた世界の広大さを前に、しかし、クリスターはもう呑まれることはなかった。

今この瞬間も、寄り添いあうようにして立っている、レイフとなぎ合った手―そこから伝わる温もりがクリスターを支え、たとえ未知の世界に飛び込んで行っただとしても恐れることはないという、勇気と自信を与えてくれる。

それどころか―。

（不思議だな、どうしてだろう……今、僕はとても幸せな気分だ。ここには誰もいない、父さんも母さんも、友達も遠くに置いてきてしまった……そう、本当に僕とレイフの2人きりなんだ）

レイフがぶるっと身震いしたが、それは寒いからではなく、気持ちの高揚がそうさせたのだとクリスターには分かった。

「どこまで行けるかなあ」

どこかうつとりとレイフが呟くのに、クリスターは、今は確信を込めて、答えた。

「どこまでもだよ、レイフ：僕達と一緒にいられる場所が見つかるまで、あの地平の向こうのそのまた先へ：」

「うん、そうだね」

微塵も疑わない声が、クリスターの心が木霊したかのように、すぐに返ってくる。

たとい世界がどんなに厳しくても、共にいられれば満たされる自分達が、それに負けることはない。そんな圧倒的な幸福感を、異様なまでに研ぎ澄まされた心で、2人は実感していた。

半分に分けあった体と魂が、この時、ひとつにつながっていた。慣れ親しんだ日常から遠く離れた、隔絶された世界の中心に立ち尽くしながら――。

エピローグ

世界の果てまでも

「降下1分前、スタンバイ！」

降下地点への最終アプローチに入ったC130輸送機内は、胸の中でどくどくと鳴り響いている心臓の鼓動など打ち消すような物凄い轟音に満たされている。

少し前までは、緊張を紛らわせるため、近くにいた訓練生同士、時折大声を張り上げて言葉を交わしあっていたが、降下の最終段階に入った今はもうその余裕もなく、皆、顔を引き締め立ちつくしている。

空挺学校での2週間に及ぶ過酷な地上訓練を耐え抜いて、ここま

で残った猛者達でも、初めての実地の降下を前にやはり不安や恐怖を覚えるものらしい。

だが、ここまで来て、今更後戻りはできない。空挺学校を落第したなどと、軍歴に一生消えない汚点を残すのは、誰しも絶対避けたいところだ。

それは、じっと押し黙って、心の中で自分に気合を入れ続けているレイフにとっても、同じだった。

（そうさ、高校出たてのガキが訳も分からず、最精鋭の82空挺なんか希望してさ…オレみたいな身の程知らずはすぐに脱落するだろうって教官軍曹に散々罵られ、しごきぬかれて、それでも血反吐吐くような思いでがんばって、ここまで来たんだ。ここで失敗したら、悔しくて、オレ、きっと死んじゃう。おお、飛んでやる…何かなんでも、飛んでやるからな…!）

上げられたドアから吹き込んでくる風の圧力を顔に感じながら、レイフが歯を食い縛って尻込みしそうになるのを堪え、ひたすらその瞬間を待っていると、視界の片隅で赤いライトが緑に変わったのが分かった。

瞬間、鬼と恐れられるジャンプ・マスターの雷のような声が轟く。

「グリーン・ライト、GO!」

頭の中で、何かのスイッチが入ったような気がした。

ジャンプ・マスターが、ドアの傍で待機していたレイフの尻を荒っぽく叩く。

すると、地上訓練の中で散々叩き込まれたように体は素早く反応し、気がつけば、レイフは高度400メートルで飛行する輸送機の機外に飛び出していた。

たちまち襲ってくる想像を超えた気流に揉みくちやにされながらも、レイフは体勢を整え、マニュアル通り、跳躍後の4秒を呟いた。「ワンサウザンド、トゥーサウザンド、スリーサウザンド、フォーサウザンド」

すると、背中のパラシュートが開き、がくんという衝撃と共にレ

イフの頭上で大きく開いた。

（ああ：！）

それまで耳を聳するほど強烈だった気流が嘘のようにやみ、白いパラシュートだけがパタパタと軽い音をたてている。

そうして周囲を確かめるレイフの目に映ったものは、雲ひとつなく晴れ渡った空の青、遙か彼方にまで広がる地平線、300メートルの上空から見るとそこにある何もかもがちっぽけに見える地面だった。

それは生まれて初めてレイフが見る光景。彼は、未知の世界をまたひとつ自分のものにしたのだ。

（本当に、オレ、こんな遠い場所まで来ちゃったんだなあ：オレにとってずっと当たり前だった日常は、なんてこれとは違うんだろう）
1分間の滑空を鳥になったような自由な気分で楽しんだ後、レイフは訓練でやった通りにうまく着地した。

柔道で投げられた時のような着地の衝撃すら心地よく、レイフはしばし地面に仰向きに横たわったまま、真っ青な空とそこに次々と花のように開いていく他の訓練生達の白いパラシュートに見とれていた。

その晴れ晴れとした顔に、ふっと微かな翳りが差した。

「オレは、こうやって着実に先に進んでいるよ：おまえは一体今どこにいるんだ？　ぐずぐずしないで、早く追いかけてこいよ」

辛い訓練を耐え、がむしゃらに突き進んで、1つずつ目標を達成してきた四ヶ月は、レイフにとって余計なことを考える暇もないほど、ある意味充実したものだったが、時折ふっと我に返る、こんな瞬間には、後に残してきた我が身の半分に思いを馳せずにはいられない。

（なあ、まさか、このままはおれをずっと独りにさせておく気じゃないよな？　本当に、オレ、待ちくたびれてきたよ）

恋しさが募って、レイフはつい、ずっと胸の奥に封じ込んでいた、その名前を呼ぼうとした。

「……」

唇は開いたが、喉の奥で引っかかったように、その名前はどうしても出てこない。

クリスター。

呼びかけても求める人は傍にいない現実には、レイフはいつまで経っても慣れないようだ。口に出してしまえば、かろうじて内に押さえつけている衝動が弾けてしまいそうで、恐かった。

（いつか、オレ、本当に爆発しちまうかもなあ）

レイフは苦笑して、地面から起き上がると、パラシュートを畳んでバッグに詰め、集結地点目指して歩きだした。

数日後、空挺学校を卒業したレイフは、晴れて82空挺部隊への正式な入隊を決めた。82空挺への配属は既に決まっていたものの、条件として、この空挺学校卒業が定められており、もしも落第したなら、自動的にその資格を失うことになっていたのだ。

こうして、レイフは意気揚々と赴任地であるフォート・ブラッグ陸軍基地へ向かった。

フォート・ブラッグは、米国陸軍にとって、最も重要な基地の1つだ。

陸軍の精鋭部隊や特殊部隊が、ここに駐屯している。

陸軍の主戦力である第18空挺軍団傘下、第82空挺師団の兵員は約15000。有事の際には真っ先に投入される緊急展開部隊として、常に待機状態にある。

直感と勢いだけで陸軍に飛び込んだレイフは、それらの細かい実情を後から徐々に学んでいった訳で、知らないってことは恐いことだなあと自分の無謀な決断を苦笑混じりに振り返ることも今ではある。

それでも、レイフは別に後悔はしていない。

歩兵の基礎訓練に入っただけの頃は、一般常識とはかけ離れた軍隊流のやり方にショックを受け、身も心もポロ雑巾になったようなどん底気分、夜は一人枕を悔し涙に濡らしていたものだが、他に行く場所はないという思いからか、高校時代の彼を知っている人間が見たら目を丸くするような努力と粘り強さを発揮して、難関の空挺学校も卒業し、本当に希望通り82空挺に入隊してしまった。

（基本的に、オレ、戦闘向きなのかもなあ。確かに訓練は、初めの内はもうダメ死ぬって思うくらいに辛いけど、そのうち慣れて平気になるし：それに、まだまだオレはやれるって思うと今度は自分の限界を試したいとか変な欲が出てきたり：さすがに楽しいとまでは言えないけど、そんなに嫌いじゃないよ、この生活：まあ、まだ実戦はしてないわけだから、何とも言えないけどさあ）

取りあえず3年は兵士としてやり抜こうと思っているが、その間にどこかの紛争地帯に派遣されることも一回くらいあるかもしれない。軍に入るまではあまり意識していなかったが、よくよく考えてみれば、この国が、どこか他所の国との間に、実力行使に発展するようなもめ事を抱えていない時期などほとんどないのだ。

（まあ、いつか：そうだな、違う国に行きたいっていうのはオレの希望でもあったし、それが戦争になるのは、こういう仕事なんだから、仕方ないさ）

実際、レイフがアメリカの外に出るのは想像していたよりも早く、フォート・ブラッグに来て四ヵ月後、それも戦争のためではなく、時々友好国の空挺部隊と行う合同訓練のためドイツに飛んだのが最初となった。

その頃には、レイフもすっかり軍隊生活に溶け込んでいた。

初めの頃暮らしていた兵舎を出、基地外の街に引っ越して1人暮らしを始めたのも、ドイツから帰った直後だ。薄給の新兵にとって、経済的には兵舎で暮らす方が助かるのだが、レイフは軍隊での人間関係をプライベートにまで持ち込むのは何となく避けたかった。

レイフの所属する中隊にも近い年の同僚はいるし、兵舎のルーム・

メイトとも、彼はうまくやっていた。それでも、高校時代の親友のトムのような、休みの日でも一緒に出かけて何でも相談しあえる程の深い友情を誰にも求めはしなかった。人恋しい性質のはずのレイフが、ここでは、独りでいることが多い。

（だってさ、他人との間に絆ができるってことは、しがらみもできちまうってことなんだ：今のオレは、そのことが怖いよ。オレ、心を許した相手には、うっかり言っちゃいけないことでも洗いざらいぶちまけてしまいたいそうだし：父さんを死に追い込んだような過ちはもう繰り返したくないから…）

そうは言うものの、やっぱりずっと独りは寂しいので、若いレイフを何かと気にかけてくれる年上の同僚と仕事帰りに食事をしに行ったり、基地の映画館へ一緒に出かけたりするくらいは、時々ある。

実は、基地に務める女性達にもハンサムなレイフは密かに注目されていた。一部の女性兵士の間では「ミスター・フォート・プラッグ」だの「可愛いお尻大賞」だのを知らぬ間に授与されていたくらいだが、こと異性に対しては、彼は致命的に鈍感であったため、特定の誰かとの個人的な付き合いに発展する余地はなかった。

そんな訳で、任務を離れるとたちまち独りぼちになってしまうレイフは、いつの頃からか、兵舎や詰め所の入っているビルの屋上に上がって、遠くまで広がる基地の占有地をぼんやりと眺めながら物思いにふけることが多くなっていた。

（ああ、あいつ、今頃何をしてんのかな…？）

今まで直接クリスターに連絡することは避けていたレイフだったが、さすがにこの頃では、孤独に耐えられず、何度か電話をかけてみようとしたことがある。

クリスターが恋人と暮らしているアパートメントの電話番号は、ヘレナから教えてもらっていた。しかし、もしもクリスターと話して、一緒にやり直そうという自分の誘いをすげなく拒まれたらと思うと恐くて、とても電話などかけられなかった。

（そもそも軍に入ったのは、あいつの都合なんかはなから無視した、

オレの独断だもんな：オレの意図を理解したら、あいつはきつと怒り狂ったはずだし、今の生活や約束された将来を全部投げ打って、オレの馬鹿げた思いつきに付き合うはずがない：まあ、普通は、そうなるよなあ：」

自分の人生を賭けた最後の賭けに、もしかしたら負けたのかもしれない。楽観的なレイフでも、そろそろ本気で疑念と不安を覚え始めていた。

そんな、矢先のことだった。

ある朝、仕事の前に軽く汗を流そうと、レイフが、この頃通い始めた基地内のジムに立ち寄ると、今まで言葉を交わしたことのないはずの女性スタッフに親しげに声をかけられた。

「ハイ、今朝は随分早いね。今週は夜勤続きだって聞いたような気がするけれど？」

別に今週のローテーションに夜勤はなく、大体知らない女性に話しかけられて面喰っていたレイフは、訳が分からず目をぱちくりさせた。

「ね、昨日の話、考えてくれた？」

「え：昨日って：：？」

レイフはかなり真剣に、昨日の出来事を振り返ってみたが、やはり何の話だか分からない。

「週末、一緒にどうかって、話したでしょう？ 私、地元の人間だし、よかったら街を案内してあげるわよ？」

向こうはそう言うものの、昨日レイフは寝坊をしてジムには行けなかったし、もちろん、この女性とどこかで会って話をした覚えもないのだ。

レイフが当惑した顔でいつまでも黙り込んでいると、彼女は彼の沈黙をNOの合図を受け取ったようだ。ちよつとむつとしたような、残念そうな顔になって、他の利用者がジムに入ってきたのを潮時とレイフから離れていった。

（何だったんだろ：あ、もしかして、あれって、オレをデートに誘

うための作戦とかだったのかな…？ オレは気がつかなくても、向こうはずっとオレを見てたのかも…？）」

その時は、そんなふうに勝手な解釈して納得し、別にそれ以上深く追求することはなく、忘れてしまった。

しかし、同じの日の夜、レイフはまたしてもおかしい話を耳にした。しかも、今回は聞き流すわけにはいかなかった。

「なあ、レイフ…おまえんとこのA中隊が、ドイツでの合同訓練から帰ってきたのは、確か先週の頭だったよな？」

帰宅する前レイフが大隊の食堂で夕食を取っていると、近くのテーブルにいた知り合いが話しかけてきた。

「ああ、正確には先々週の末だったけどな…それが、どうしたんだよ？」

「いや、A中隊が留守してるはずの頃、お前の姿を第三射撃場で目撃したんだよ…俺も訓練中だったし、傍まで行って声をかけることはできなかったんだけど、なんでこんな所におまえがいるんだろうって不思議に思ってたさ…」

「？…おまえの見間違えじゃあないのかよ？　いくらなんでもドイツとアメリカに同時に出現することなんか、オレにゃあ、できないぜ。この体が二つあるわけじゃなし…あつ…」

自分の漏らした言葉に、レイフは胸がざわつくのを覚え、とっさに黙り込んだ。

（オレとよく似た男が、この基地にいた…？）

その考えは、レイフの頭にかつと血を上らせた。

「な、なあ、おい、お前が見た、その男は、そんなにオレによく似てたのかよ？　見間違うほど？」

「さ、さあ…俺も輸送車で射撃場の前を通り過ぎた際に見ただけだから、そこまで確信はないよ。ただ、背格好や遠目で見た横顔の感じはそっくりだった」

「そいつは、どこの隊にいる奴だ？」

「あの時、第三射撃場にいたのは…B中隊の連中じゃなかったかな

…？ ううん、ちゃんとしたことが知りたけりゃ、自分で本部に行
って、確認してこいよ」

「そ、そうだな…すまねえ…」

つい興奮したレイフは、我を忘れて、席から半分腰を浮かせ同僚
に激しく詰め寄っていた。ちよつと迷惑そうな顔をされたので、レ
イフは慌てて、彼の肩を掴んでいた手を離れた。

（まさか…ああ、まさか…）

逸る気持ちを抑えかね、レイフは食堂を早々に後にすると、その
足でまっすぐに大隊本部に出かけた。

この時はまだ半信半疑だった。あまり期待しすぎると、裏切られ
た時の落ち込みが激しい。

先程の同僚が見かけた男の正体を探るため、取りあえず、問題の
日に第三射撃場を使用していた部隊を確認するつもりだったのだが、
そこで、また更なる衝撃がレイフを待ち受けていた。

本部に詰めていた夜勤の衛兵は、レイフの顔をちらっと見るなり、
何やら意外そうに眉を寄せて、こう問いかけてきたのだ。

「おや、どうした、またここに戻ってくるなんて…探し相手は見つ
からなかったのか？ それとも、兵舎の場所が分からなかったか？」

レイフははっと息を呑んだ。不思議そうな相手の顔をまじまじと
凝視し、言われたことの意味を考え込んだ。

「つまり、今日、オレは既に一度ここに来てたって言うのか…まさ
か…？」

当番兵は、レイフがふざけているとでも思ったのか、あいまいな
笑いを浮かべ、言った。

「何を言ってるんだ、ほんの3、40分前のことじゃないか…君の
ためにあれだけ丁寧に調べてやった俺の顔を忘れたとは言わさんぞ
？」

レイフは、落雷に打たれたように激しく身を戦慄かせ、その場に
立ち尽くした。

（ここに来たんだ…オレが来る、わずか30分前に…オレにそっく

りな男が…)

中に心臓があるのではないかと思うくらい、どくどくと脈打つように頭が痛んで、レイフは苦しげに息をついた。

「それで…兵舎で、君の弟レイフは見つかったのか、見つからなかったのか、結局どっちなんだ？」

たちまち膝から力が抜けそうになったレイフは、とっさに傍にあった壁に手をついて、体を支えた。

「お、おい、大丈夫か…？」

当番兵はデスクを回って、ロビーに出てくると、心配そうにレイフに近付いてきた。

「違う…」

レイフはゆっくりと顔を上げて、戸惑う当番兵を見やった。

「うん？」

目を向けてはいても、レイフは当番兵の顔など見ていない。呆然自失のまま、うわ言のように呟いた。

「オレが、その弟の方だ…レイフ・オルソン…ここに来たのはオレの兄貴なんだ。そう、あいつの名前は―」

レイフの目からぼたぼたと涙が溢れ出した。慌てて両手で目元をぬぐうと、レイフは涙をごまかすため、わざと怒ったような口調で、いささか唾然となっている相手を問い詰めた。

「あいつに、オレの居場所を教えたって…？」

「あ、ああ、そうだ…82空挺のレイフ・オルソンというだけで、詳しい所属も何も彼は知らなかったが、あんまり熱心に頼むので、どこの兵舎にいるかまで調べてやったんだぞ」

「ちょっと待ってくれよ、オレ、ついこないだ、その兵舎を出ちまって、基地外に引っ越したばかりなんだ」

「ああ、そこまでは把握できなかったな…それじゃあ、今頃、君が兵舎にはいないことを知って、彼はがっかりして帰っているかも…」皆まで聞かず、レイフは本部を飛び出していた。

一瞬、ここで先にクリスターの配属先や連絡が取れる電話番号を

聞いておいた方がいいかという思いも頭をかすめたが、すぐそこに彼がいるという事実に気が急いて、とにかく彼を捕まえてたくて、走り出さずにはいられなかったのだ。

レイフはまっすぐ、ついこの間まで暮らしていた兵舎に飛んで行った。

「あれ、レイフ…?」

かつてのルーム・メイトは、ただならぬ様子でいきなり部屋を訪ねてきたレイフに、一瞬怯んだようだ。

「すまねえ、ケント、驚かせて…実は、オレ、人を探してるんだ。もしかしたら、オレを探してここに来たんじゃないかって…」

レイフがたどたどしく説明しようとすると、ケントは分かっているというような意味ありげな顔をして、頷いた。

「ああ…それって、おまえの兄貴のことだろ」

またしても、がつんと頭を殴られたような衝撃だった。レイフは思わず言葉を失って、ケントをまじまじと凝視した。

「びっくりしたぜ…あんな兄貴がいるなんて、一緒に生活してた頃、おまえは俺に一言も話してくれなかったじゃないか。双子だって言われても、初めは俺、おまえがふざけてるんじゃないかって思ってた。いや、よく見れば、雰囲気とか全然違ってただけど…とにかく、俺、もう焦りまくって、かなりまぬけなことを兄貴に話しまつた気がするよ」

「あいつ…それじゃ、あいつはやっぱりにここに来たんだな…オレを探して…?」

「ああ、そうみたいだな…て、おまえ、兄弟なのに、ちゃんと連絡してなかったのかよ…? 気の毒に、相当捜しまわっていたみたいだぜ…この基地、広いからなあ…配属されたばかりの新兵の頃は、俺も、地理に慣れるまで、よく迷子になった…」

我慢できなくなったレイフは、ケントの話を半ば途中で遮るように、その肩を掴んで、詰め寄った。

「それで、あいつは今どこにいるんだっ?」

レイフの剣幕に、ケントはちよつと鼻白んだようだ。

「それが、おまえはもうここにはいないって話したら、がっかりした顔で帰っちゃったよ。せっかくだからコーヒーでも飲んで行かないかって、誘ったんだけどな」

「そんな…」

「フアイヤツテピル市のおまえの新しい住所と電話番号は教えてやったから、今夜中にでも連絡があるんじゃないかな。いや、随分急いでいた感じだから、あのまま基地外に出て、今頃おまえの自宅ってことも…」

レイフは掴んでいたケントの肩を離して、そのまま素早く踵を返した。

「おい、おまえの兄貴の所属先と今どこに住んでるかも一応聞いておいたけど、このメモ、いらんのか？」

レイフは回れ右をして引き返すと、ケントがひらひらさせていたメモをほとんどひったくるようにしてもらった。

「第505空挺歩兵連隊第一大隊…あれ…？」

「おんなじ大隊らしいな、おまえの兄貴…二週間前に空挺学校を卒業して、ここに赴任したんだと…俺達がドイツに合同訓練に行ってた頃だよな」

「そ、そうか…」

「最初から兄貴とそういう約束をしてたんじゃないのかよ、一緒に空挺隊員を目指そうとか？ それにしても、兄弟そろって難関を突破し82空挺に入れたなんて、大したものさ…おい、何涙ぐんだんだよ、レイフ…」

「ごめん…情けないとこ見せちゃって。でも、オレ…本当に、あいつがここに来てくれたなんて、信じられなくて…いや、信じちゃいたけど、でも…」

一瞬込み上げてくる圧倒的な感情を抑えきれなくなったレイフだが、ケントが不思議そうな目を自分に向けているのに、慌てて手で口を塞ぎ、顔を背けた。

「と、とにかく、教えてくれてありがとうよ、ケント」

「ああ、また今度兄貴を連れてこいよ。一緒に飯でも食いに行こうぜ」

レイフは、他の誰かに声をかけられたり捕まったりしないよう、涙の跡の残る顔を俯けて、一目散に引き返し、兵舎の外の暗い通りに飛び出した。

（どうする：あいつは、ケントから聞き出したオレの住所を頼りに、今頃まっすぐファイヤツテピルに向かっているかも――）

レイフは込み上げてくる焦燥感に突き動かされ、車を止めてある駐車場に向って一端歩きかけた。そうすると、しかし、また別の可能性が頭をかすめ、立ち止ってしまう。

（いや、それとも、今夜はオレを追いかけるのをあきらめて、明日改めて出直すつもりだろうか）

クリスターの痕跡がこんなに近くにあるのに、後少しというところまで迫っているのに、どうしても追いつけないもどかしさに、レイフは口惜しげに唇を噛みしめる。

（あいつはオレを捜し回ってる。オレは、そんなあいつを捕まえようと後から追いかけてる：ああ、オレ達はこのままずっと探し求める相手の背中を追いかけて、ぐるぐる、ぐるぐる：相手の姿が見えそうで見えない、本当にそこにいるかも分からないままさ迷い続け、永遠に出会うことができないんじゃないだろうか……？）

そんな想像をつい思い巡らせて、レイフはぶるつと身を震わせた。（考えてみりゃ、オレ達は今までずっと、こんなふうにお互いを求めて追いかけて、それなのに、肝心なところで相手の心に踏み込めずにすれ違ったり、誤解したまま諦めようとか身を引こうとか、無駄に回り道を重ねてきたよなあ。オレ達の気持ちは、本当はいつだって一つだったのにさ）

レイフは、後ろの兵舎から洩れてくる明かりによって地面に描かれた、黒く長い己の影を凝視した。

相棒にはぐれたままの、その影も、心なしか寂しげだ。

（どこにいる：どこにいるんだよ、いつまでオレを独りにさせる気だ。オレ、もう待ちくたびれて、心細くて、死にそうだよ：ああ、どうすれば、おまえを捕まえられる？）

その時だ。

レイフは、後ろから何やら体がくいつと引っ張られるような奇妙な感じを覚え、訝しげに振り返った。

そこには、レイフが今しがた出てきた兵舎がある。惜しくも、彼が着く少し前にクリスターは帰ってしまったのだと、ケントは言っていた。

レイフは訳もなく胸の鼓動が早まるのを意識しながら頭を巡らせ、先程何かに引っ張られたように感じた方向を眺めやった。

すると、兵舎のまた別の入口が視界に入ってきた。詰め所からの明かりが、ぼんやりと外に漏れている。

（あの奥に、屋上まで続く非常階段があるんだよな：兵舎暮らしの頃、1人になってぼんやりしたい時に、オレがよく上って行った）
レイフは地上3階建ての建物の上部を、目を眇めるようにして、見上げた。

（あっ：）

瞬間、目の奥であるイメージが弾け、軽いめまいを覚えたレイフは、思わず頭を押さえた。

（何だ、今の景色：見覚えがあるぞ。そうだ、この基地の風景だ：オレがよくあの兵舎の屋上から眺めていた：）

レイフは再び兵舎の屋上辺りを、しばし呆然となって眺めた。

（まさか：）

レイフは引き寄せられるようにふらふらと、兵舎の方に近づいて行った。その歩みは次第に速くなり、最後には、入口目指して、彼は全力で駆け出していた。

体ごとぶつかるよう、レイフが扉を開くと、詰め所で当直にあたっていた兵士がぎょっとしたようにデスクから立ち上がり、こちらに近づいてきた。

「おい、何事だ…うっ…?」

部屋の奥から出てきて、レイフの顔を明かりで確認した途端、その兵士の顔に軽い衝撃がうかんだ。

「えっ…おまえ、確か、ついさっき…」

どうしてレイフが外から入ってきたのか、訳が分からないと言いたげな、キツネにつままれたような顔つきで、ちらっと兵舎の奥に続く階段の方を眺めやったかと思うと、再び恐ろしげな目つきでこちらを振り返る―兵士の態度に、レイフは自分の直感が正しいことを確信した。

「おい、あんた、見たんだな…?」

凄みのある声で囁く、レイフの目はおそらく鬼のように吊り上っていたに違いない。

「えっ…?」

顔を強張らせて言い淀む当番兵の方にぐいつと身を乗り出し、己の顔を指で示しながら、レイフは苛立たしげに問いただした。

「これと同じ顔をした男を見たんだろっ?! そいつは、どこに行っただんだ?」

兵士はジーザスとでも口の中で呟いて、震える指で奥の階段を示し、上の方に差し上げた。

「やっぱ、屋上か!」

レイフは歓声にも似た声をあげ、手を打ち鳴らすと、猛然と階段目指して突進した。

(そこにいる…あいつが、すぐそこにいる…ああ、今度こそオレは、あいつを捕まえてやる)

もう長い間胸の奥に封じ込んでいた、その名前が、熱い感情のマグマと一緒に喉元にせり上がってくる。

レイフは、ちらちらと点滅する蛍光灯に照らされた薄暗い階段を一気に駆け上がり、やがて突き当たりに見えてきた鉄の扉を叩きつけるように開け放つと、募り募った思いの全てを爆発させて絶叫した。

「クリスター!!」

唇が、震えた。

「あ…っ…」

しっとりとした湿気を含んだ風が屋上を吹き抜け、熱く火照ったレイフの頬を優しくなぶっていく。

そして、レイフの視線の先―広大な基地とその周囲に広がる風景を眺める様子で佇んでいた、その美しい影が、ゆっくりとこちらを振り返った。

レイフはつまずいたように立ち止り、ぱちぱちと何度も瞬きをした。

(クリスター…?)

まるで、今のレイフをそっくり写し取ったかのような姿の若い兵士がそこにいる。お馴染みの森林迷彩戦闘服にブーツ、短く刈られた紅い髪、過酷な訓練によって鍛え上げられ、日に焼けて、その顔つきも以前よりずっと精悍だ。

レイフはしばしばかんと口を開いたまま、言葉を失ったかのように、立ちつくしていた。

もう一度会えたら言いたいこと聞きたいこと、あれこれたくさんあったはずなのに、全部忘れて、頭の中が空っぽになってしまった。呆然自失なのは、向こうも同じようだ。食い入るようにレイフを見つめたまま、微動だにしない。

(ケントや他の連中が、オレと見間違うのも無理ないや。何もかもがおかしいくらいにそっくりで、おまけに今じゃ、着ている軍服までお揃いときてやがる)

一時は、このまま離れて暮らし続けたら、顔も体もお互いどんな変わっていったって、そのうち誰も自分達のことを双子とは思わなくなるほど似ても似つかなくなってしまうのではないか。そんな想像を、何とも言えない寂しい気分でしていたことが馬鹿馬鹿しくなるくらい、同じ試練を乗り越え四か月遅れでレイフに追いついたクリスターは逞しく強靱で、まさに彼の隣に並び立つ相棒と呼ぶにふさ

わしい。

（あの冷たくて取っつきにくそうなインテリのエリート的面影は、どこかにいっちゃったなあ：怪我してたことなんて、全然分らないくらいじゃないか。やっぱり、おまえはすげえよ：その気になれば、どんな無理でも不可能でも、ちゃんと実現しちまう）

レイフは、クリスターと無言で向き合っているうちに、自然と肩から力が抜け落ち、唇がほころんでくるのを感じた。

「随分遅かったじゃないか、兄さん：」

ほとんど何も意識しないまま、レイフは、単純にそう口走っていた。

「ああ：すまない：」

クリスターの応えもまた、まるで約束していた待ち合わせに少しばかり遅れたことを謝るかのように単純で、短い。

しかし、交わしあう眼差しが、言葉で伝えられるより遥かに多くの想いを伝えあっていた。

2人は、どちらからともなく歩み寄り、正面から向き合った。確かめるように上げた手をそっと合わせ、指を絡めあう。

たちまち、まるで、これまで自分の中から抜け落ちていたものがぴたりとあるべき場所に収まったかのような、充足感と満足感が体中に漲っていった。

（ああ、この瞬間をずっと待ち焦がれていたよ。やっと取り戻せた、オレの半分：）

いきなり、レイフはクリスターを引き寄せ、かき抱いた。その肩に顔を押し付けて懐かしい匂いをかぎ、彼がここにいるという実感を求めて、服がぐしゃぐしゃになってしまいうのも構わずに、体中を荒っぽくまさぐった。

いつの間にかクリスターの腕もレイフの背中に回り、二度と離しはしないというかのごとく、強い力で抱きしめてくる。

（これからはずっと一緒さ：愛してる：）

求めあうがまま、2人は唇を重ねた。思う存分むさぼりあい、唇

の合間から洩れる熱い吐息を交わし合った。

夢にまで見たこの一瞬。互いの体に回した腕の中、レイフはクリスターのもので、クリスターはレイフのものであった。いや、これはもはや、目が覚めればはかなく消えてしまう夢ではない。これから先ずっと――そう、死が2人を分かťまで永遠に、この絆は続くだろう。

長いキスと抱擁の後やっとな身を離れた2人は、どちらも少し息を弾ませながら目を見合わせ、困ったように笑い合った。

「オレ達ってば、最低……これって、やっぱ軍規違反？　ばれたらきつと、双子のホモなんかいらんって、ここから蹴り出されるぜ」
クリスターはちよつと考え込んだ後、軽く肩をすくめた。

「それで除隊になったら仕方ないね。また別の場所を探すだけさ」
「ん……」

外見の印象は随分変わっても、これだけは以前と同じ、穏やかで自信に満ち溢れたクリスターの声に耳を傾けながら、レイフは、唯一無二の相棒が傍らにいるという圧倒的な幸福感と共に、捨ててきた過去に所属する、かつて愛した人達に対する惜別の想いを噛みしめていた。

（さよなら、懐かしい皆……オレ達は、この瞬間から2人一緒にまた新たな旅に出るよ。たぶん、もう二度と会えない人達もいるだろう。風の便りにオレ達の噂を聞いて、心配したり理解に苦しんだりするかもしれない。でも、どこにいて、どんな暮らしをしていても、きっとオレ達はオレ達なりの幸せを見つけているはずだから……）

レイフはクリスターと共に屋上の周囲に張られた金網の前まで行って、すっかり夜の帳の下りた基地とそれを取りまく黒々とした広大な占有地、その向こうに見える街の灯、更に遠くに広がる漠々とした地平を眺めた。

（本当に、オレ達、随分遠くまで来ちまつたなあ……）

都会のポストン育ちの目には、異国にも等しいほどに違って感じられる気候や風土。2人一緒に生きられる居場所を得るために、こ

んな場所まで来なくてはならなかった。

そんな感傷に浸っていたレイフの脳裏に、その時、あるイメージが浮かびあがり、目の前の現実の風景と重なった。

(あっ…)

凍てついた冬の夜。吐く息は白く、指先はかじかんで痛かった。頭上には死人のように青ざめた月。霜枯れた草を踏みしめながら、クリスターと2人、必死になって歩いていた。

(そうだ、あの一夜のことなら、今でもオレは鮮明に思い出せる。でも…)

行くあてなど全くなかったにもかかわらず、共にいられる場所求めて、ひたすら前進し続けた。そうして目の当たりにした、あまりに広い世界―慣れ親しんだ日常とはかけ離れた場所で、自分達の小ささや無力さを思い知らされながらも、2人ならばどんな試練にも立ち向かえるという確信を胸に、しっかりと手をつなぎ合って佇んでいた、幼い自分達がいた。

(おかしいな、オレ達が一晩さ迷ったあの北東部の凍てついた平野と、この南部の早春でも随分温かくて緑も多い土地は全く似ても似つかないのに…ただ、今もあの時と同じ、クリスターが隣にいる。そうして、やっぱりオレ達は、これから先どこに行って、何者になるかも知れない身で…確かに、ガキの頃に比べれば強くなったけれど、まだまだ世の中にはオレ達の知らないこと―きつと辛くて酷くて汚いことだって、たくさんある…)

奇妙な既視感に襲われながら、レイフは、しばし黙り込んだ。これから先、自分達を待ち受ける見知らぬ世界、新たな出会い、乗り越えなければならぬ試練に思いを馳せて、ぶるっと武者震いをした。

「どこまで、行けるかなあ…」

胸にためていた息と一緒に吐き出したレイフの感慨に、傍らに立つクリスターが迷いのない声で答える。

「どこまでもだよ、レイフ…僕達が共にいても許される場所が見つ

かるまで―」

レイフははっとなって、クリスターを振り返った。

その決然とした横顔は、レイフと共に生きるために他の全て投げ打ってここまで来た、クリスターの揺るがぬ心を感じさせた。いつの間にか、その手はしっかりとレイフの手を握り締めている。

レイフは大きく頷いて、クリスターが眺めているのと同じ光景へと再び視線を戻した。

2人の琥珀色をした瞳は、遙か遠くの別世界を見据えて、炎のように激しく輝いている。

「ああ、もちろんだとも：どこまでもオレ達2人、あの地平の向こうのそのまた先へ、そう：」

レイフは、長い間縛られていた心がクリスターのそれと共に解放されていく喜びに満ち、晴れ晴れと笑いながら、言い放った。

そう、世界の果てまでも―！

エピローグ 世界の果てまでも（後書き）

長い間、この双子におつきい下さってありがとうございました。
足かけ六年くらい書いてきた話だったので、こうしてエンディング
を迎えられ、とても感慨深いです。

読者の方の心に何か残るものがあれば、うれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4072a/>

ある双子兄弟の異常な日常 第三部

2010年10月10日01時27分発行